

鳥羽遺跡

I・J・K区

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第21集—

《本文編》

1988

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

鳥羽遺跡

I・J・K区

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第21集一

《本文編》

1988

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和60年10月に開通いたしました関越自動車道新潟線は、関東北部に位置する群馬県の交通・経済・社会に大きな影響を与えました。本県に新しい時代が開かれたともいえましよう。

関越自動車道新潟線は、首都東京と新潟を結ぶ道路として、本県を南から北へ縦断しております。道路地内には、私達先祖の生活のあかしが示す、数多くの遺跡が記録保存のために調査され、調査報告書として刊行されております。

前橋市から群馬町にまたがる本遺跡は、古代上野の中心である国府推定地の西方に位置し、国府に関連があるものとして期待されていきました。

調査によって、密集する多数の住居跡と神社と推定される遺構、鍛冶遺構などの注目される遺構が発見されました。その一部は、昭和61年度に第1冊目として報告いたしました。今回は、第2冊目としてI・J・K区の遺構・遺物を報告する運びとなりました。

本報告による鍛冶遺構は、国府に関連のある施設と考えられる全国的にも貴重な発見といえます。また密集する住居跡群から、上野国の中心となった古代地方都市の一端をうかがうことができます。赤城・榛名の山々に囲まれ、冬は北西風の中で、夏は雷鳴とどろくなかで生活を過ごした律令官人達や、一般庶民の生活の息吹を、発見された多くの遺構・遺物から知ることができます。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、日本道路公団東京第二建設局・群馬県教育委員会・群馬町教育委員会・地元関係者等から種々のご援助、ご協力いただきました。

また、発掘調査、報告書刊行のために資料整理を進めて頂いた多くの方々の努力に深謝するとともに、本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の古代社会解明のための、より具体性のある歴史資料として役立てられることを願い、序とします。

昭和63年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査域は前橋市鳥羽町から群馬群馬町大字塚田に至る地域の約1,200mの区間で、A～Oに区分してある。
3. 発掘調査は昭和53年4月から昭和59年3月にわたって実施した。但し、昭和53年4月から昭和55年3月までは群馬県教育委員会がこれにあたり、ひきつづき(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が事業を行った。
4. 本書は全4巻のうちの第2巻であり、この報告は昭和57・58年度の調査によるものである。対象はJ・K区の竪穴住居跡が主であり、第1巻で掲載できなかったI区の鍛冶工房跡を併せて報告した。なお、第1巻は昭和61年9月に刊行されている。よって調査経過・調査概要・遺跡の立地・環境の項は第1巻を参照されたい。
5. 事業主体者 日本道路公団
6. 調査主体者 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
7. 発掘調査体制は昭和61年9月刊行の第1巻を参照されたい。
8. 発掘調査及び本書作成にあたっては次の諸氏・諸機関ほか多くの方々の指導を受けた。

穴澤義功・新井房夫・石井栄一・石井則孝・伊藤正義・稲葉和也・井上喜久雄・岡田精司・小川貴司・大澤正巳・金子真土・川原純之・倉田芳郎・斎藤孝正・坂詰秀一・酒井清治・関 茂・玉口時雄・寺村光晴・利根川章彦・戸根与八郎・仲野泰裕・檜崎彰一・西宮秀紀・馬淵久夫・水野正好・水村孝行・宮本長二郎・渡辺 一 (五十音順・敬称略)

文化庁文化財保護部記念物課・東京国立文化財研究所・奈良国立文化財研究所
9. 発掘調査にあたって次の諸氏・諸機関ほか多くの方々の協力があつた。

石川喜平次・石川道緒・加藤和四郎・斎藤一正・篠田わし・砂長実治・砂長竹男・関谷林造・塚田正雄・藤井英男・藤井立一・堀江俊江・本多房松・真塩宇一・真塩義美 (五十音順・敬称略)

日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所・前橋市教育委員会・群馬町町役場・群馬町教育委員会・群馬町国府農業共同組合・群馬町稻荷台地区・前橋市元総社地区
10. 本書作成の整理作業は昭和61年4月より昭和62年3月まで行った。
11. 本書作成のための事務および整理作業スタッフは次の通りである。

事務関係： 白石保三郎・井上唯雄・大沢秋良・田口紀雄・上原啓巳・定方隆史・平野進一・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・野島のぶ江・今井もと子・松井美智子・大島敬子

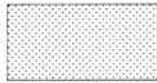
整理関係： 唐澤至朗・綿貫邦男・伊藤淳子・岩淵節子・笠井初子・金子恵子・岸 とし子・佐子昭子・笹尾ヨシ子・関口加津江・高橋初美・田中精子・田中富子・立見美代子・田村エミ子・筑井弘子・角田孝子・手塚ふみ江・中沢久子・南雲富子・長谷川春美・福島和恵・保坂雅美・星野春子・牧野裕美・八木淳子
12. 東京国立文化財研究所の馬淵久夫氏には銅製品を、また大澤正巳氏には鍛冶関係遺物についてそれぞれ化学分析をお願いした。なお、鍛冶関係遺物の分析試料の抽出には穴澤義功氏の指導を受けた。
13. 石器の石材鑑定は飯島静男氏をお願いした。
14. 本書に使用した遺物写真は佐藤元彦技師が担当したほか、一部は委託した。なお遺構の写真撮影は調査担当が行い、遺跡航空写真は委託した。

15. 金属製品の保存処理は、関 邦一技師と北爪健二嘱託員がこれにあたった。
16. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の『前橋』 1：50000である。
17. 発掘調査・整理作業に関する史・資料は総て群馬県埋蔵文化財調査センターにこれを保管してある。
18. 本書本文の執筆は断りがない限り、J区を唐澤が行い綿貫がこれを補した。K・I区は綿貫がおこなった。本書編集の責は綿貫にある。

凡 例

1. 本報告書は鳥羽遺跡のJ・K区の2区域を主な対象にしている。なお第1巻(第11集)で掲載できなかったI区検出の鍛冶工房跡も併せて本書で報告した。
2. 本書における遺構名称は各区にこれを独立させた。
例：J1号住居跡・K10号住居跡
最初の Alphabet は区名を表し、数字は調査時の調査順を示したものをそのまま用い、両者を併記して個々の固有名とした。よって数字そのものは本書の中ではいかなる順位も示すものではない。
3. 本書における遺構図版にはそれぞれに比例尺を付したが、基本的には次のようである。
竪穴住居跡：1/60 竪穴住居跡竈・炉：1/30 鍛冶工房跡：1/80 鍛冶工房跡炉：1/30 但し遺構によってはこの限りではない。
4. 本書における遺物図版にはそれぞれに比例尺を付したが基本的には次のようである
土器・石器・羽口・砥石・転用砥石：1/3 金属製品・その他小形遺物：1/2
但し遺物によってはこの限りではない。
5. 本書に使用した編目は次のことを表す。

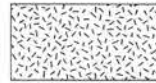
焼土・鉄敷石
被熱範囲



灰範囲



炉床範囲



6. 本書における遺構図版中の断面基準は標高でこれを表した。単位はmである。
7. 本書における遺構の主な項目は表組みでこれを示し、その他は本文中に記述した。
8. 本書における遺物観察は表組でこれを示した。計測単位はcm・gである。
9. 遺物図版中の番号は、遺構図版の遺物出土位置の番号及び遺物写真図版中の番号と同一である。
10. 土器の色調は「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所監修によった。
11. 土器の実測図は原則として四分画法をとった。残存量が二分の一以下の遺物の場合は180°展開して図上復元とし、中心線は点線で示した。
12. 遺物の拓影は一角法によって貼付した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 J・K区の調査概要	1
第2章 J区の遺構と遺物	3
第1節 J区の概要	3
第2節 J区の竪穴住居跡と遺物	5
J 1号住居跡 (Fig. 5・6・8)	5
J 2号住居跡 (Fig. 5・7)	5
J 3号住居跡 (Fig. 9～13)	7
J 6号住居跡 (Fig. 14～16)	11
J 7号住居跡 (Fig. 17～19)	14
J 8 A号住居跡 (Fig. 20・21)	16
J 8 B号住居跡 (Fig. 22・23)	17
J 9号住居跡 (Fig. 24)	17
J 10号住居跡 (Fig. 25～27)	18
J 11号住居跡 (Fig. 28・29)	20
J 12号住居跡 (Fig. 30～33)	20
J 13号住居跡 (Fig. 34～36)	23
J 14号住居跡 (Fig. 37・38)	24
J 15号住居跡 (Fig. 39～41)	25
J 16号住居跡 (Fig. 42～44)	27
J 17号住居跡 (Fig. 45・46)	28
J 18号住居跡 (Fig. 47～50)	29
J 19号住居跡 (Fig. 51～53)	33
J 30号住居跡 (Fig. 54・55)	34
J 31号住居跡 (Fig. 56～58)	35
J 32号住居跡 (Fig. 59～61)	36
J 33号住居跡 (Fig. 62～64)	38
J 34号住居跡 (Fig. 65～67)	39
J 38号住居跡 (Fig. 68～70)	41
J 39号住居跡 (Fig. 71～74)	43
J 40号住居跡 (Fig. 75・76)	46
J 42号住居跡 (Fig. 77・78)	47
J 43号住居跡 (Fig. 79・80)	49
J 44号住居跡 (Fig. 81・82)	50
J 45号住居跡 (Fig. 83・84)	50
J 47号住居跡 (Fig. 85・86)	52
J 49号住居跡 (Fig. 87～89)	53
J 50 A号住居跡 (Fig. 90・91)	55
J 50 B号住居跡 (Fig. 92・93)	55
J 51 A号住居跡 (Fig. 94～96)	56
J 51 B号住居跡 (Fig. 97・98)	58
J 52号住居跡 (Fig. 99・100)	58
J 53号住居跡 (Fig. 101・102)	60
J 54号住居跡 (Fig. 103・104)	61
J 55 A号住居跡 (Fig. 105・106)	63
J 58 B号住居跡 (Fig. 105)	63
J 55 B号住居跡 (Fig. 107)	64
J 56 A号住居跡 (Fig. 108～110)	65
J 56 B号住居跡 (Fig. 111～114)	66
J 57 A号住居跡 (Fig. 115～117)	70
J 57 B号住居跡 (Fig. 118・119)	72
J 58 A号住居跡 (Fig. 120・121)	73
J 59号住居跡 (Fig. 122～124)	75
J 60号住居跡 (Fig. 125～127)	77
J 61号住居跡 (Fig. 128～131)	78
J 62号住居跡 (Fig. 132～135)	82
J 63号住居跡 (Fig. 136～138)	86
J 64号住居跡 (Fig. 139～141)	88
J 65号住居跡 (Fig. 142～144)	89
J 66号住居跡 (Fig. 145～149)	90
J 67号住居跡 (Fig. 150～153)	95

J 68号住居跡 (Fig. 154)	97	J 86号住居跡 (Fig. 204・205・207)	125
J 69号住居跡 (Fig. 155・156)	98	J 87号住居跡 (Fig. 209~212)	127
J 70号住居跡 (Fig. 157~159)	100	J 88号住居跡 (Fig. 204・206・208)	125
J 71号住居跡 (Fig. 160~162)	101	J 89号住居跡 (Fig. 213~215)	129
J 72号住居跡 (Fig. 163~166)	102	J 90号住居跡 (Fig. 216~218)	131
J 73号住居跡 (Fig. 167~169)	104	J 91号住居跡 (Fig. 219~221)	133
J 74号住居跡 (Fig. 170~172)	106	J 92号住居跡 (Fig. 222~225)	134
J 76号住居跡 (Fig. 173~176)	107	J 93号住居跡 (Fig. 226~228)	136
J 77号住居跡 (Fig. 177~179)	109	J 94号住居跡 (Fig. 229~231)	139
J 78号住居跡 (Fig. 180~182)	111	J 95号住居跡 (Fig. 232・233)	140
J 79号住居跡 (Fig. 183~185)	113	J 96号住居跡 (Fig. 234~236)	142
J 80号住居跡 (Fig. 186・187)	115	J 97号住居跡 (Fig. 237~239)	144
J 81号住居跡 (Fig. 188~191)	116	J 98号住居跡 (Fig. 240・241)	145
J 82号住居跡 (Fig. 192・193)	118	J 99号住居跡 (Fig. 242~244)	147
J 83号住居跡 (Fig. 194~197)	121	J 100号住居跡 (Fig. 245~247)	148
J 84号住居跡 (Fig. 198~200)	122	J 1号土坑 (Fig. 248~251)	149
J 85号住居跡 (Fig. 201~203)	124		

第3章 K区の遺構と遺物153

第1節 K区の概要153

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物155

K 1号住居跡 (Fig. 253~255)	155	K26号住居跡 (Fig. 308~310)	193
K 2号住居跡 (Fig. 256~259)	157	K27号住居跡 (Fig. 311~314)	194
K 3号住居跡 (Fig. 256・260)	157	K28号住居跡 (Fig. 315~317)	196
K 4号住居跡 (Fig. 261~264)	163	K29号住居跡 (Fig. 318~320)	197
K 5号住居跡 (Fig. 265・266)	166	K30号住居跡 (Fig. 321~323)	198
K 6号住居跡 (Fig. 267~271)	168	K31号住居跡 (Fig. 324~327)	198
K 7号住居跡 (Fig. 272~275)	171	K32号住居跡 (Fig. 328~330)	201
K 9号住居跡 (Fig. 276・277)	174	K33号住居跡 (Fig. 331~333)	202
K10号住居跡 (Fig. 278~281)	175	K35号住居跡 (Fig. 334・335)	204
K16号住居跡 (Fig. 282・283)	178	K36号住居跡 (Fig. 336~339)	205
K17号住居跡 (Fig. 284~286)	179	K37号住居跡 (Fig. 340~342)	209
K18号住居跡 (Fig. 287・288)	181	K38号住居跡 (Fig. 343・344)	211
K19号住居跡 (Fig. 289~293)	182	K40号住居跡 (Fig. 345・346)	212
K20号住居跡 (Fig. 294~296)	186	K41号住居跡 (Fig. 347~349)	214
K21号住居跡 (Fig. 297~299)	188	K42号住居跡 (Fig. 350・351)	216
K23号住居跡 (Fig. 300~302)	189	K43号住居跡 (Fig. 352・353)	216
K24号住居跡 (Fig. 303~305)	191	K50号住居跡 (Fig. 354~356)	218
K25号住居跡 (Fig. 306・307)	192	K51号住居跡 (Fig. 357~359)	222

K52号住居跡 (Fig. 360~362)	225	K95号住居跡 (Fig. 475~477)	296
K53号住居跡 (Fig. 363~365)	226	K97号住居跡 (Fig. 478~481)	297
K54号住居跡 (Fig. 366~368)	228	K99号住居跡 (Fig. 482~485)	299
K56号住居跡 (Fig. 369・370)	229	K100号住居跡 (Fig. 486・487)	300
K57号住居跡 (Fig. 371・372)	230	K101号住居跡 (Fig. 488~491)	302
K58号住居跡 (Fig. 373~375)	231	K102号住居跡 (Fig. 492~494)	304
K59号住居跡 (Fig. 376・377)	232	K103号住居跡 (Fig. 495~497)	305
K60号住居跡 (Fig. 378~380)	233	K104号住居跡 (Fig. 498~501)	306
K62号住居跡 (Fig. 381~383)	235	K105号住居跡 (Fig. 502~504)	309
K63号住居跡 (Fig. 384~387)	237	K106号住居跡 (Fig. 505~508)	311
K64号住居跡 (Fig. 388・389)	241	K107号住居跡 (Fig. 509~512)	313
K65号住居跡 (Fig. 390~393)	242	K108号住居跡 (Fig. 513・514)	316
K66号住居跡 (Fig. 394・395)	245	K109号住居跡 (Fig. 515・516)	317
K70号住居跡 (Fig. 396~398)	246	K110号住居跡 (Fig. 517・518)	318
K71号住居跡 (Fig. 399~401)	247	K111号住居跡 (Fig. 519・520)	319
K72号住居跡 (Fig. 402~405)	249	K112号住居跡 (Fig. 521~523)	321
K73号住居跡 (Fig. 406~409)	250	K113号住居跡 (Fig. 524・525)	322
K74号住居跡 (Fig. 410・411)	253	K115号住居跡 (Fig. 526~528)	322
K75号住居跡 (Fig. 412~414)	255	K116号住居跡 (Fig. 529・530)	323
K76号住居跡 (Fig. 412~414)	255	K117号住居跡 (Fig. 531・532)	325
K77号住居跡 (Fig. 415~417)	258	K118号住居跡 (Fig. 533~535)	326
K78号住居跡 (Fig. 418~420)	259	K119号住居跡 (Fig. 536~539)	327
K79号住居跡 (Fig. 421~423)	261	K120号住居跡 (Fig. 540・541)	330
K80号住居跡 (Fig. 424~427)	262	K122号住居跡 (Fig. 542~545)	331
K81号住居跡 (Fig. 428~431)	265	K123号住居跡 (Fig. 546~548)	336
K82号住居跡 (Fig. 432~434)	267	K124号住居跡 (Fig. 549~551)	337
K83号住居跡 (Fig. 435・436)	269	K125号住居跡 (Fig. 552~554)	339
K84号住居跡 (Fig. 437・438)	269	K126号住居跡 (Fig. 555~557)	340
K85号住居跡 (Fig. 439~441)	272	K127号住居跡 (Fig. 558~561)	342
K86号住居跡 (Fig. 442・443)	273	K128号住居跡 (Fig. 562~563)	344
K87号住居跡 (Fig. 444~447)	275	K129号住居跡 (Fig. 564・565)	345
K88号住居跡 (Fig. 448~451)	277	K130号住居跡 (Fig. 566~569)	346
K89号住居跡 (Fig. 452~454)	279	K131号住居跡 (Fig. 570~572)	348
K90号住居跡 (Fig. 455~458)	281	K132号住居跡 (Fig. 573~575)	350
K91号住居跡 (Fig. 459~462)	284	K133号住居跡 (Fig. 576~578)	353
K92号住居跡 (Fig. 463~465)	286	K134号住居跡 (Fig. 579~582)	356
K93号住居跡 (Fig. 466~470)	288	K135号住居跡 (Fig. 583~585)	359
K94号住居跡 (Fig. 471~474)	293	K137号住居跡 (Fig. 586~589)	362

K138号住居跡 (Fig. 590~592)	364	K156号住居跡 (Fig. 632~635)	388
K140号住居跡 (Fig. 593~595)	366	K157号住居跡 (Fig. 636~638)	390
K141号住居跡 (Fig. 596~598)	367	K158号住居跡 (Fig. 639・640)	393
K142号住居跡 (Fig. 599~601)	369	K160A号住居跡 (Fig. 641・642)	394
K143号住居跡 (Fig. 602~605)	371	K160B号・K162号住居跡 (Fig. 643)	396
K144号住居跡 (Fig. 606~609)	373	K161号住居跡 (Fig. 644・645)	396
K145号住居跡 (Fig. 610・611)	375	K165号住居跡 (Fig. 646・647)	398
K146号住居跡 (Fig. 612~614)	375	K169号住居跡 (Fig. 648~650)	400
K147号住居跡 (Fig. 615~617)	376	K170号住居跡 (Fig. 651~654)	401
K148号住居跡 (Fig. 618・619)	378	K171号住居跡 (Fig. 655・656)	404
K149号住居跡 (Fig. 620~623)	381	K172号住居跡 (Fig. 657~660)	405
K150号住居跡 (Fig. 624~626)	383	K173号住居跡 (Fig. 661~664)	408
K151号住居跡 (Fig. 627~630)	385	K174号住居跡 (Fig. 665~667)	411
K155号住居跡 (Fig. 631)	387	K175号住居跡 (Fig. 665)	411
第4章 鍛冶工房跡	414		
第1節 鍛冶工房跡の概要	414		
第2節 K区鍛冶工房跡と遺物	415		
第3節 I区鍛冶工房跡と遺物	418		
1. 1号工房跡	418		
2. 2号工房跡	419		
3. 3号工房跡	419		
4. 4号工房跡	420		
5. 5号工房跡	420		
6. 鍛冶関連遺物	467		
第5章 成果と課題	552		
鳥羽遺跡出土の土器序列について(試案)	552		
第6章 化学分析	584		
1. 鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位対比	東京国立文化財研究所 馬淵久夫	584	
2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査	大澤正巳	588	

- 付図1. J区全体図
 2. K区全体図
 3. 鳥羽遺跡地形図

第1章 J・K区の調査概要

本書で扱う主な対象区はJ・K区であり、昭和57年度から58年度にかけて調査された区域である。J・K区の調査は関越道の本線部分に先立ち、G区北側本線部とH・L区とともに東側道共用部分から着手された。J・K区の側道部は全長約150m、幅6～8mで南北に偏長な範囲である。その後西側道部とともに両区の本線部分の調査に入った。調査工程は側道部の他構造物建設部分・本線部分と建設工事工程に沿った形で2～3期に渡り行われ、部分調査的な調査工程をたどった。調査区内には路線内にあった住居家屋の移転やそれに伴う廃棄物坑が多く残され、とくにJ区には著しい攪乱坑がみられた。

調査区内の小区画設定に関しては昭和56年度以降の国家座標軸に沿った方法をそのまま踏襲し2m方眼とその命名法は既に報告されているG～I区と同様である。

J・K区の地勢はほぼ平坦を為すがK区北端で標高約121m、J区南端で120mを示し比高差は1m程度である。両区間には地表上での変化は感じられなかったが、遺構検出面ではかなりの相異が認められた。K区北側のLoam面を基準にするとJ区に向かって暗褐色土の堆積が厚く、全体的には南西方向にゆるく傾斜しており、南西部は軟弱で湿気が多く基盤層は水性Loamとなっている。

J・K区の層序は基本的には次の5層からなっている。

- I 表土（耕作土）
- II 砂質暗褐色土（B軽石混） I・II層は重機により除去
- III 暗褐色土（C軽石混） 中世・平安期遺構確認面
- IV 暗褐色土 奈良・古墳期遺構確認面
- V Loam

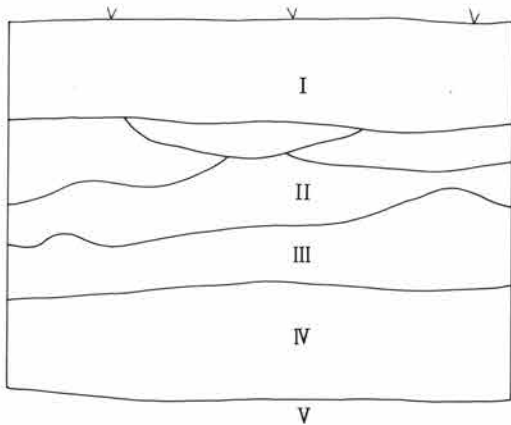


Fig. 1 鳥羽遺跡基本層序

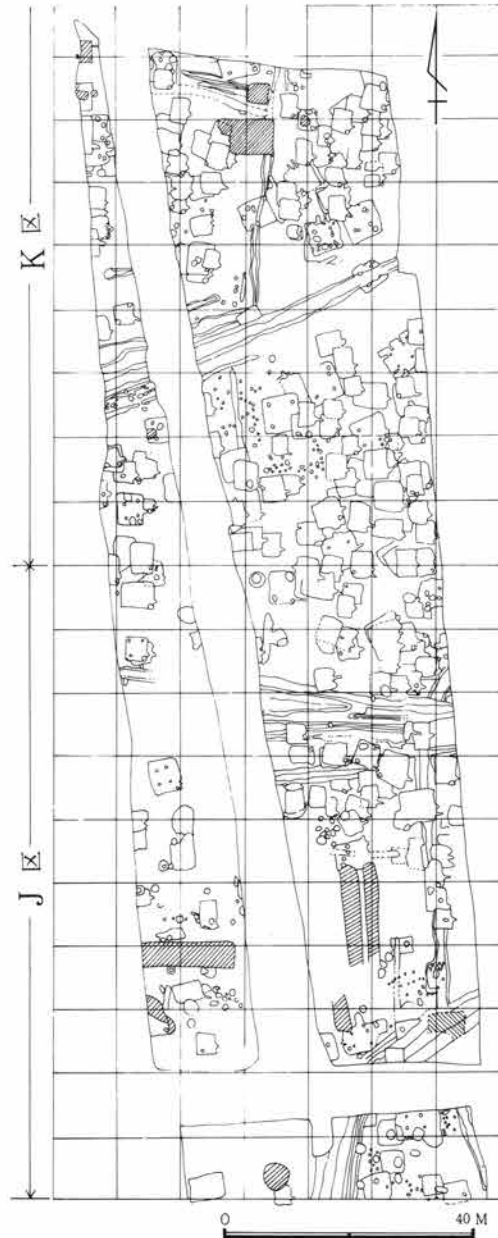


Fig. 2 J・K区調査区

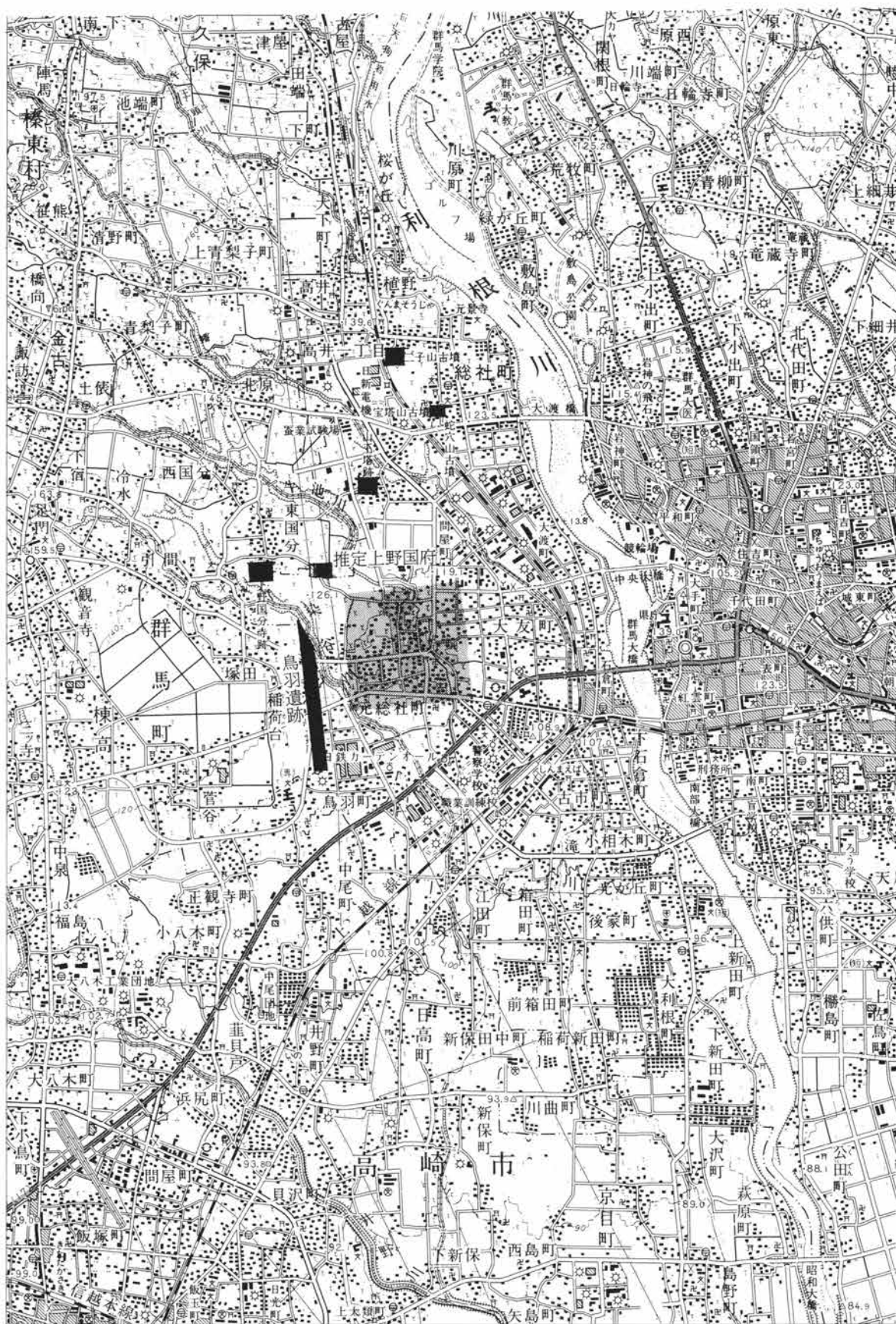


Fig. 3 鳥羽遺跡周辺の遺跡

第2章 J区の遺構と遺物

第1節 J区の概要

J区は鳥羽遺跡の中央部北寄りに位置し、行政区分は群馬郡群馬町稲荷台字村東に所属する。調査は、昭和57年度に東西両側道部分を、翌昭和58年度には本線部分をと2カ年にわたって実施した。調査対象は東西約55m・南北100m面積約5,500m²であった。

地形については既に第1巻の環境・G区の調査の章で述べたところであるが、当区も同様に古い埋没谷上に水性 Loam や粘性の強い黒褐色土が層をなしており、遺構はこれらの堆積土上に形成されている。

当区における検出遺構は、奈良時代後半から平安時代前半にかけてのもの、中世～近世のものに分けられる。近代～現代に属するものは調査に先行して行われた家屋移転工事により、破壊されて原形をとどめていない。遺構の種類は、奈良～平安時代の通常竪穴住居跡88軒、非常住と推定される竪穴住居跡3軒、鍛冶炉を付設する建物跡2軒、溝跡2本、特殊土坑1基などがある。中世以降の遺構としては、大型の溝跡・井戸跡・墓坑・土坑などが多数検出されている。

住居跡の分布状態を一瞥すると、ある偏在性があることが看取できる。すなわち、北部・北東部・中央部北寄り・東部北寄りに61軒が集中している。これは全体の70%にあたる。またこの集中域は、北に接するK区に連続する。これを地形と対比してみると、当該範囲が微高地であり、他が低地であることが観察でき、また土壌も周辺が湿気を帯びやすい粘性土であることがわかる。調査時点においても周辺部は湧水位置が高く、常時湿潤であった。常住環境としては必ずしも適しているとは言い難い。遺構の分布はこれをうらづけており、当時も同様な環境であったことを窺わせる。鳥羽遺跡の遺構分布が大局的には条里制の制約を受けていることが、調査当初から推定されてきたが、それと併せて微地形等の詳細な環境の観察も必要である。また、鍛冶炉を付設する2軒の遺構であるが、いずれも集中域から離れて設けられている。この遺構は南に接するI区の大規模鍛冶遺構とは性格も時代も異なる。いわゆる「ムラカジ」跡と思われる。集中域からの分離は、集落構造における鍛冶師の位置及び作業環境についての示唆を与えるものであろう。

特殊な遺構としては、1号土坑がある。これは後述するように1点の壺を中央に据え、南北軸線状に33点の杯を配した埋納遺構である。性格については、なお検討を要するが、平安後期における、中世的色彩をもつものであることはいいうるであろう。また今後確認されるであろう同種の遺構の中にあっても好例となるものと思われる。

なお、本区の調査においても、縄文時代の石器・古墳時代初頭の土器が、時代を隔てた遺構の埋土から出土している。遺構は確認されなかったが、隣接するK区・L区の類に照らして考察する必要がある。

第2章 J区の遺構と遺物



Fig. 4 J区全体図

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

J1号住居跡 (Fig. 5、6、8・PL. 3、4)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
方 形	3.45 × 3.90	N- 90° -E	東壁やや南寄り	円形 (73.0 × 70.0 × 18.0)

J区北西部に位置し、70・71J 43~45の範囲にある。2号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。壁は高さ35cmを測り、ほぼ直立する。床面は多少凹凸があり、竈手前のほか中央部がよく踏み固められている。貯蔵穴を含む床面南東部には薄い灰層が堆積しており、使用時の流出と考えられる。竈は袖部がなく、奥壁が浅く明確な煙道部をもたない。燃烧部には竈主軸と直交して長方体の凝灰岩加工材が出土しており、焚口部天井材の崩落と考えられる。出土遺物は少なく、各所に散在していた。いずれも廃絶後の投棄によるものと考えられる。

J2号住居跡 (Fig. 5、7・PL. 4)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.10 × 3.35	N- 84.5° -E	東壁やや南寄り	—— ————

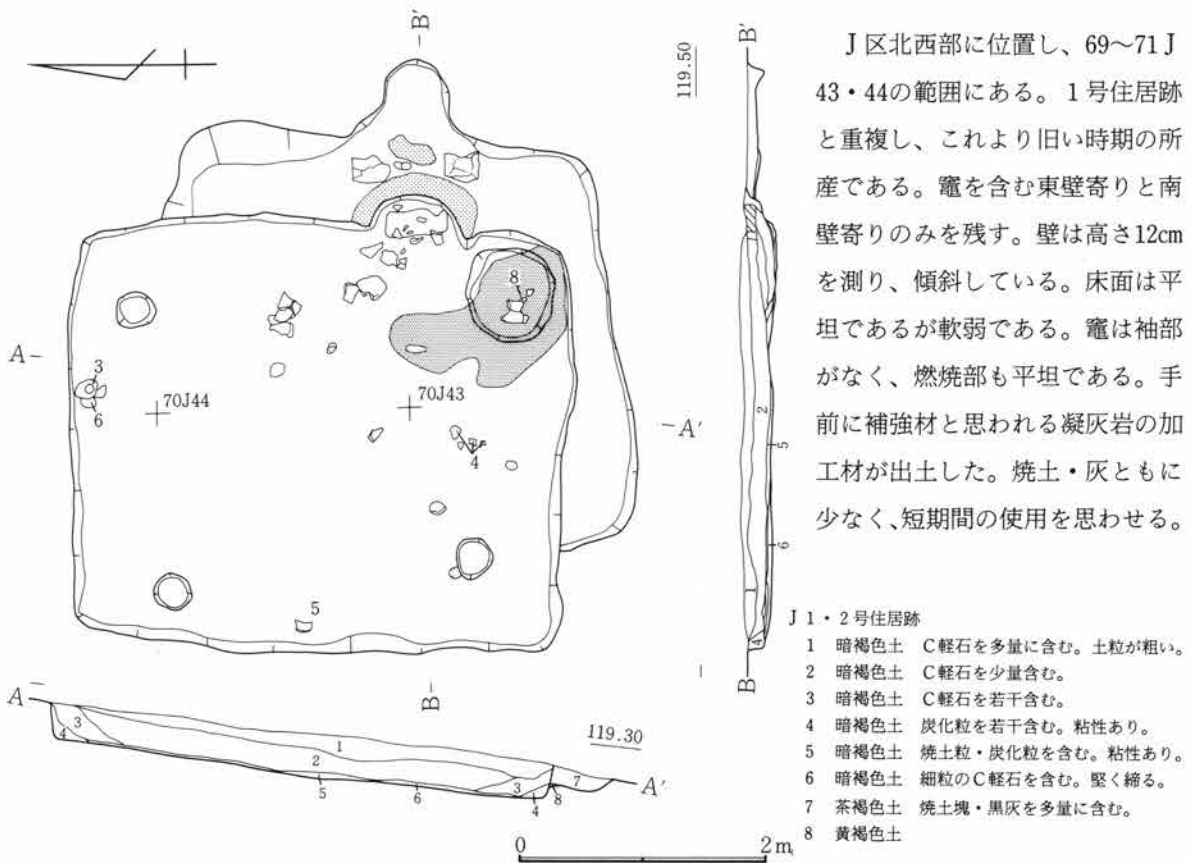
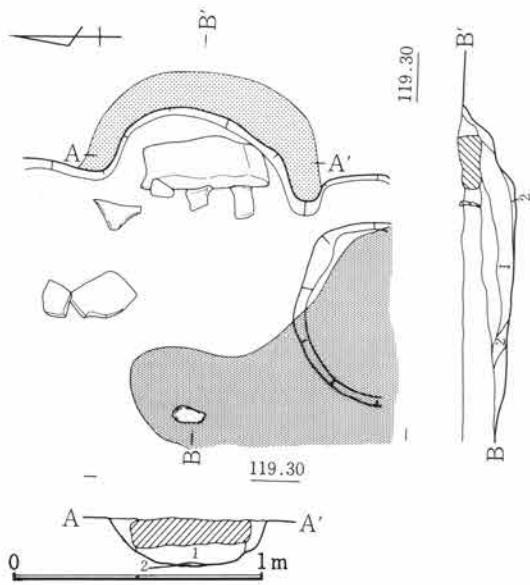


Fig.5 J1・2号住居跡

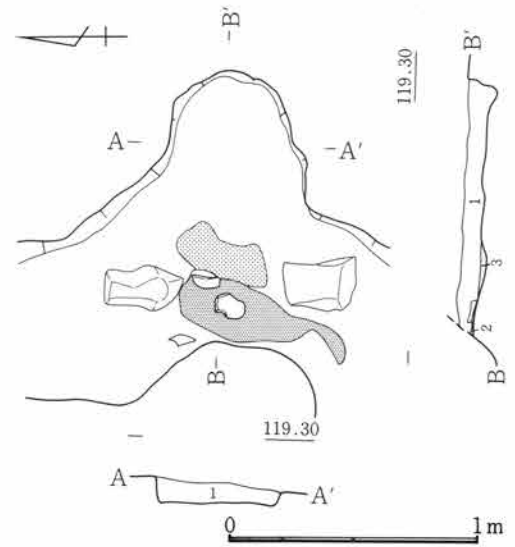
第2章 J区の遺構と遺物



J 1号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒を含む。(崩落焼土)
- 2 黒色土 灰層。

Fig.6 J1号住居跡竈



J 2号住居跡竈

- 1 黒灰色土 焼土塊を多量に、灰を含む。
- 2 黒色土 灰層。
- 3 赤色土 焼土。

Fig.7 J2号住居跡竈

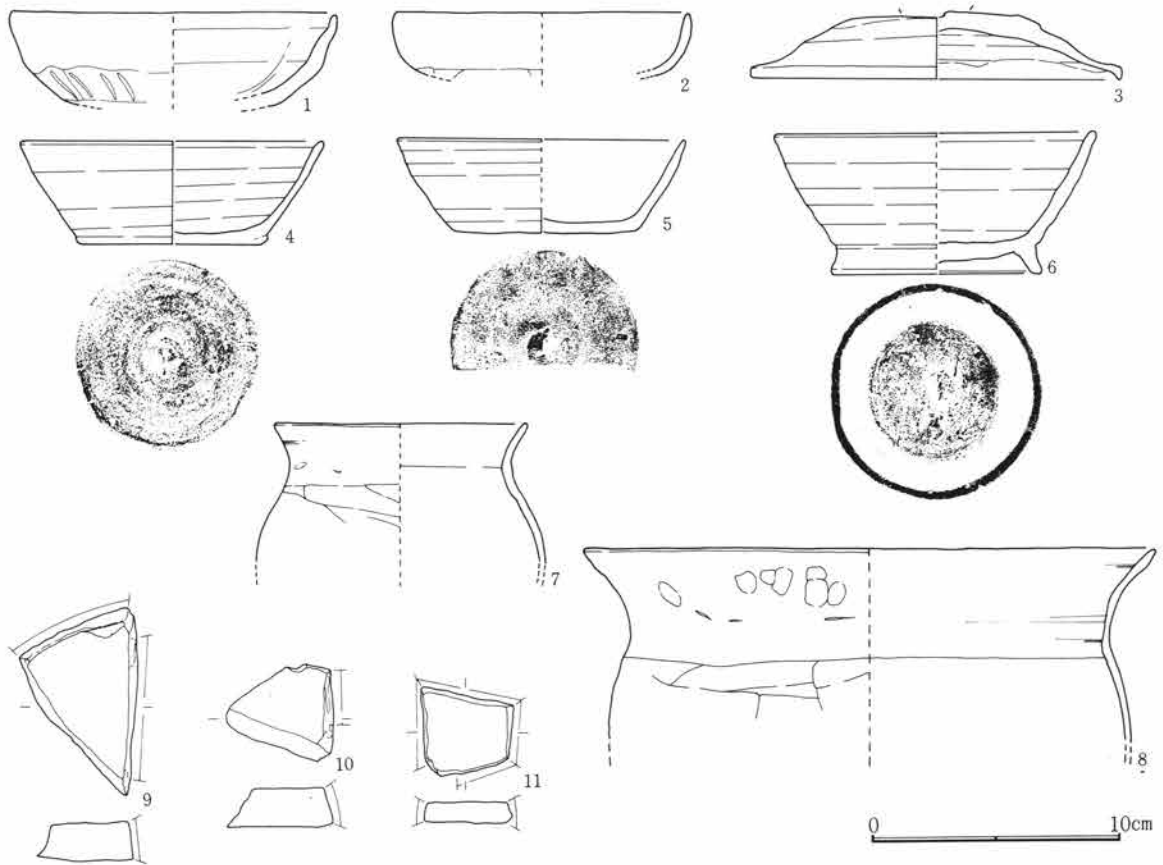


Fig.8 J1号住居跡出土遺物

J1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
8-1 3-1	土 師 器 杯	1/2 底 部欠損	13.0×-×(3.8)	床 下	体部外反し口縁部は内湾気味に立つ。腰部横篔削り、体部上半から口縁部は横撫で。	①良好 ②橙 ③密 茶色粒混る
8-2 3-2	土 師 器 杯	1/2 底 部欠損	11.7×-×(2.4)	埋 土	底部浅く腰部丸い。口縁内湾気味に立つ。底部篔削り。口縁部撫で。	①良好 ②鈍い橙③ やや粗、砂混る
8-3 3-3	須 惠 器 蓋	口縁1/2 摘欠損	14.9×-×(2.7)	竈内埋土	天井部平坦。体部緩く波うって開く。口縁部直に折れる。天井部回転篔切り後回転篔削り。	①良好 ②青灰 ③ やや粗、黒色粒混る
8-4 3-4	須 惠 器 杯	体部3/4 欠損	12.2×7.6×4.1	南央部床 面	径の大きい底部から体部は直線的に開く。轆轤成形。回転篔切り。弱い回転調整が施される。	①良好 ②灰 ③や や密
8-5 3-5	須 惠 器 杯	1/2	11.6×7.3×3.8	西央部床 面西壁寄	底径大きく体部直線的に開く。轆轤成形。回転篔切り。弱い回転調整が施される。	①良好 ②青灰 ③ やや密、黒色粒混る
8-6 3-6	須 惠 器 碗	体部3/4 欠損	13.0×8.4×5.6	北央部床 面北壁寄	底径大きく、体部は開きが少なく直線的に立つ。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。底部回転篔切り。	①良好 ②灰 ③密 黒・白色粒混る
8-7 3-7	土 師 器 甕	口縁部 1/2	10.2×-×(5.5)	埋 土	胴部丸く張る。肩部緩く内傾して口縁部外反する。口縁部横撫で、肩部横篔削り。	①良好 ②鈍い褐③ やや粗、白色粒混る
8-8 3-8	土 師 器 甕	口縁部 1/2	23×-×(7.5)	埋 土	胴部張り弱い、口縁部緩く外反し上半はやや内湾気味に開く。口縁部指頭後横撫で。肩部横篔削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密、白色粒混
8-9 3-9	須 惠 器 転用砥石		7.5×47×1.7 56.0g	竈内埋土	2側面使用。甕片。使用面に赤色顔料付着。	①良好 ②灰 ③密
8-10 3-10	須 惠 器 転用砥石		4.3×3.9×1.6 29.4g	床下埋土	1側面使用、甕片。	①良好 ②灰 ③密 白色粒混る
8-11 3-11	須 惠 器 転用砥石		3.5×3.1×0.8 15.8g	埋 土	4側面使用、甕片。	①良好 ②灰白 ③ 密

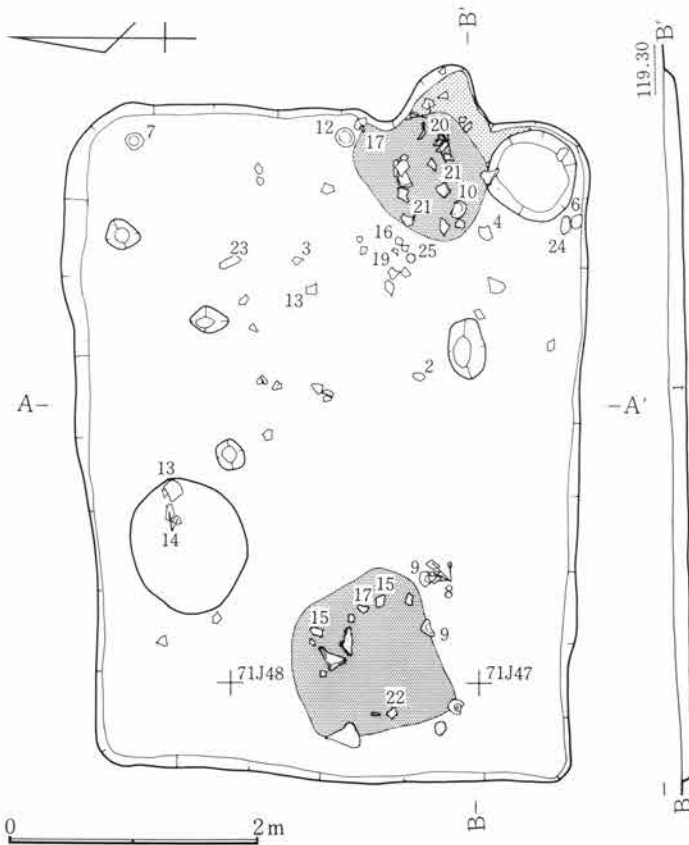
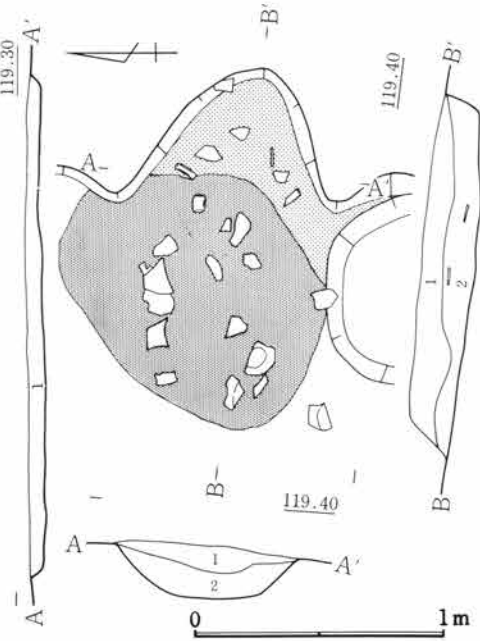


Fig.9 J3号住居跡



J3号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・黒灰・焼土粒を多量に含む。
- 2 茶褐色土 黒灰・崩落焼土塊を多量に含む。

Fig.10 J3号住居跡竈

J3号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・黒灰・焼土粒を多量に含む。

第2章 J区の遺構と遺物

J3号住居跡 (Fig. 9~13・PL. 4~6)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
長 方 形	5.15 × 4.00	N- 90° -E	東壁やや南寄り	円形 (75.0 × 80.0 × 22.5)

J区北西部に位置し、68~70 J 47~49の範囲にある。平面形は東西に長く、北西部で52号住居跡と重複している。これより新しい時期の所産である。壁は高さ15mを測り、傾斜している。床面は平坦であるが、全体に軟弱である。竈は袖部がなく、燃焼部は平坦である。燃焼部底面には焼土が、手前床面には灰が薄く堆積しており、いずれも使用時の堆積と考えられる。補強材は遺存せず、明確な煙道部も確認できなかった。床面には4個所に小穴が確認されているが、上屋構造に関わる施設痕とは考えられない。また、西壁寄り床面に竈手前とは別個に灰の堆積が認められたが、わずかに間層があり、廃絶後の流入と考えられる。遺物は、床面のほぼ全体に散布していたが、当遺構に伴うものは竈周辺出土のものに限られる。

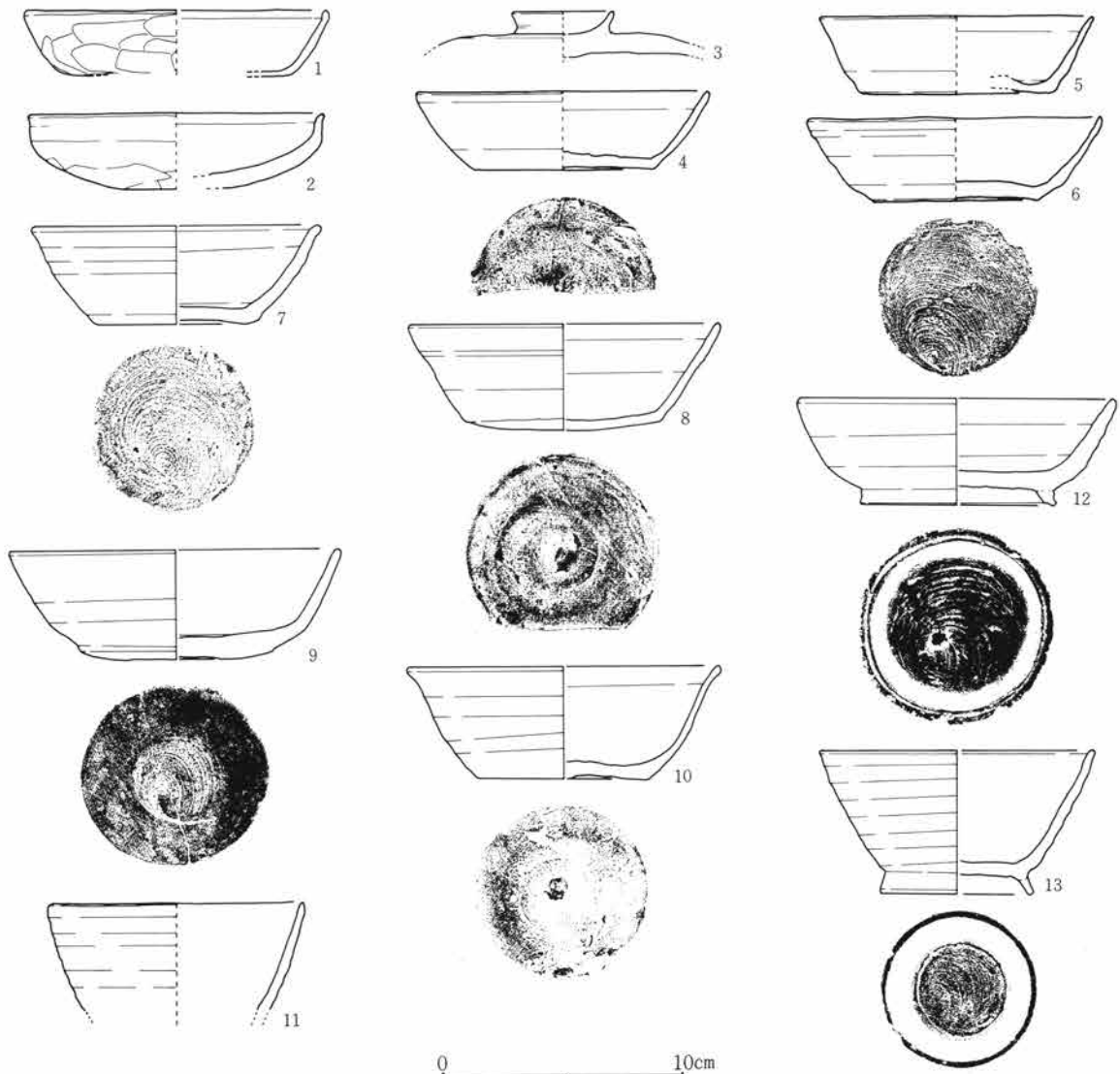


Fig.11 J3号住居跡出土遺物(1)

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

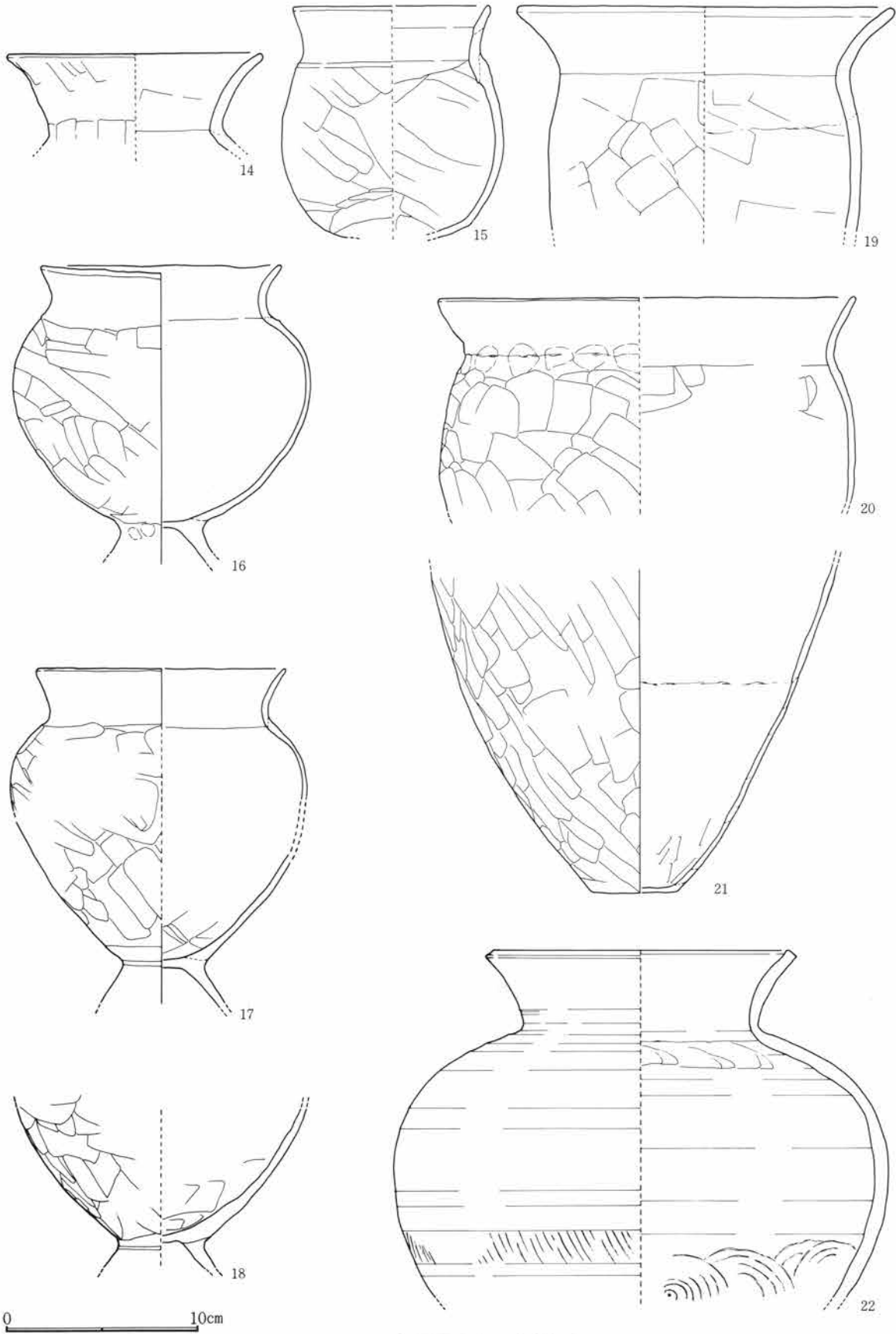


Fig.12 J3号住居跡出土遺物(2)

第2章 J区の遺構と遺物

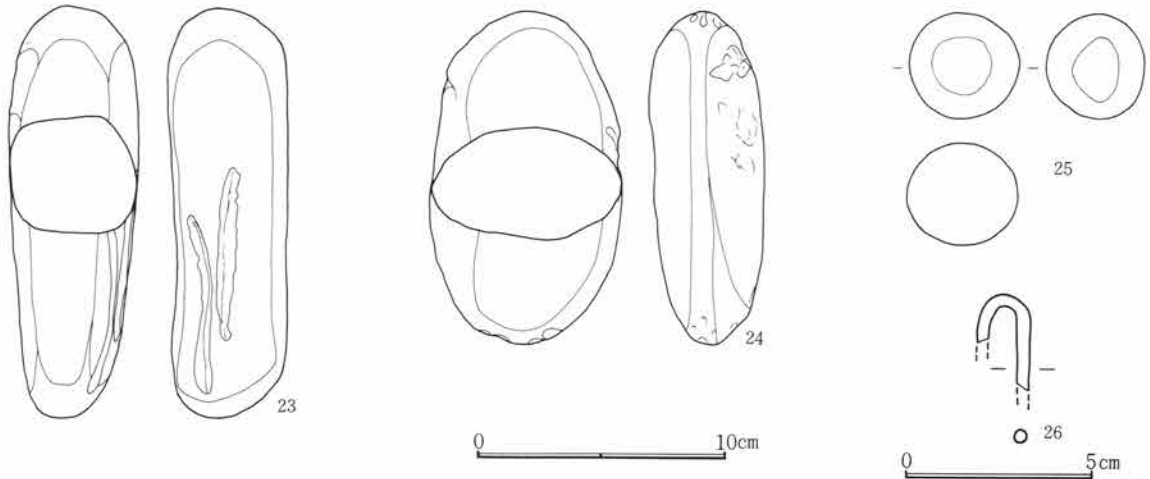


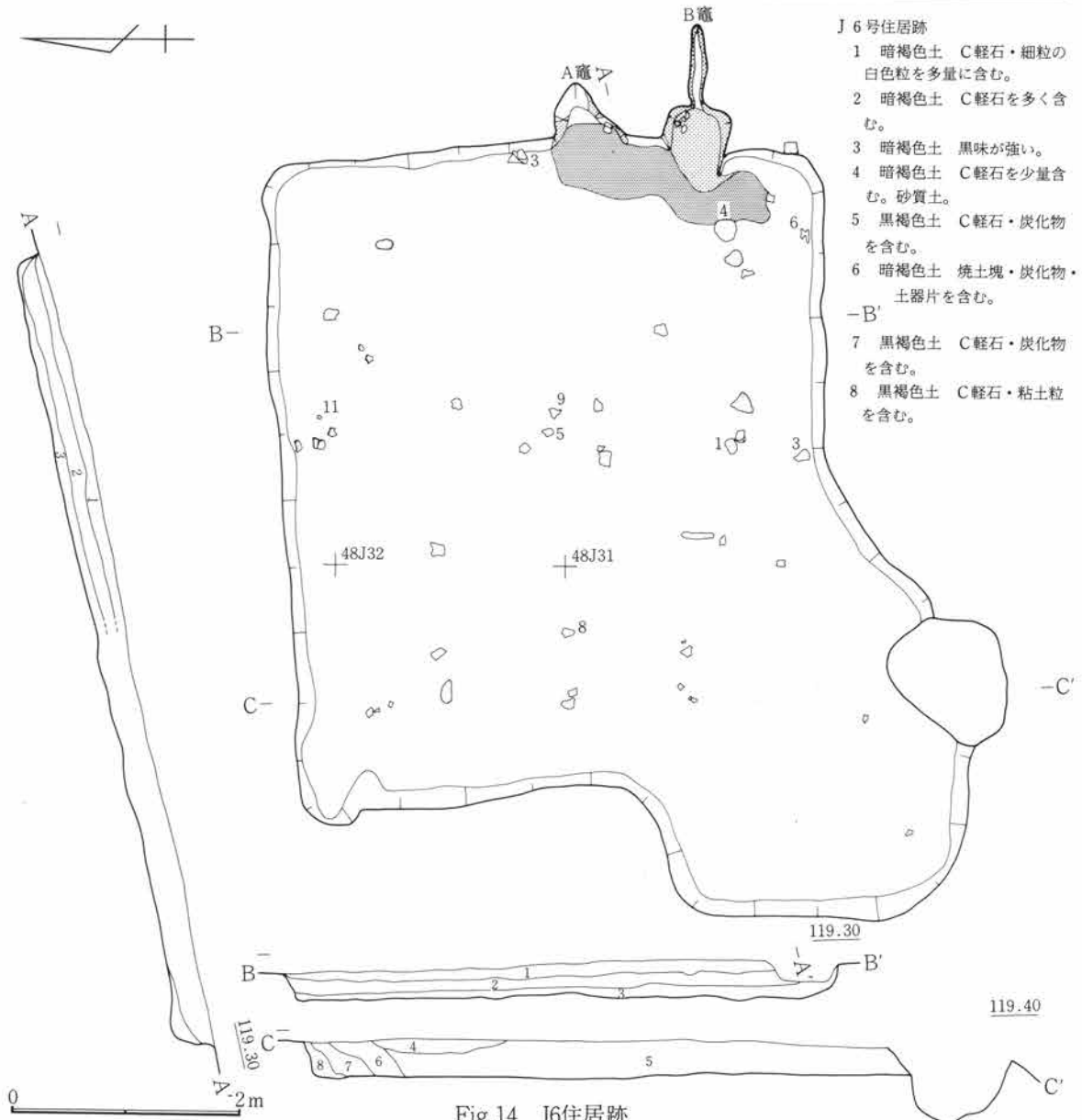
Fig.13 J3号住居跡出土遺物(3)

J 3号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③色調 その他
11-1 5-1	土師器 杯	1/2 底部欠損	12.6×9.4×2.7	竈内埋土	平底から体部直線的に外傾し、口唇部内屈して丸まる。薄手。口縁部横撫で。体部指頭及び篋削り。底部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
11-2 5-2	土師器 杯	1/2	12.2×-×3.1		底部厚く扁平。口縁部直立後口唇部は外傾して尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
11-3 5-3	須恵器 蓋	天井部小片	摘径4.2		環状摘、薄く端部丸まる。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒浮く
11-4 5-4	須恵器 杯	1/2	12.2×7.4×3.2	竈内	体部薄く、僅かに丸味をもつ。轆轤成形。回転篋削り、回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
11-5 5-5	須恵器 杯	小片	11.3×8×3.2	埋土	小型。体部直線的に開く。体部薄く、口唇部細る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②褐灰 ③密、大粒黒色粒浮く
11-6 5-6	須恵器 杯	体部1/2欠損	12.2×6.9×3.4	竈内	底部やや厚く、体部内湾気味に開く。体部器肉薄く、口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密 やや粗、小石混る
11-7 5-7	須恵器 杯	完	12×6.8×4.1		体部中位にやや丸味をもち、口唇部は外傾し丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
11-8 5-8	須恵器 杯	体部1/2欠損	12.8×8×4.4		底部僅かに脹らみ丸味をもつ。体部直線的に開く。轆轤成形。右回転篋削り。弱い再調整あり。	①還元、良好 ②暗青灰 ③細砂混土
11-9 5-9	須恵器 杯	完	13.7×8×4.5		底部肥厚し僅かに脹らむ。腰部にくびれをもち体部は外傾して開く。轆轤成形。底部回転糸切り。周辺篋調整か。	①良好 ②暗青灰 ③粗、白色細粒混る
11-10 5-10	須恵器 杯	体部1/2欠損	13×7×4.6	竈内	体部中位やや脹らみ上半は外反して開く。体部器肉薄く、口唇部丸まる。轆轤成形。右回転篋削り。周辺回転篋削り。	①酸化気味 ②橙 ③密
11-11 5-11	須恵器 杯?	1/2 底部欠損	10.6×-×4.5	埋土	小型、体部開き少なく直線的。口唇部は尖る。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
11-12 5-12	須恵器 碗	完	13.1×8.1×4.3	竈内	全体に肥厚する。腰部やや張り体部浅く直線的に外傾、付高台、断面矩形。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗 小石混る
11-13 5-13	須恵器 碗	体部1/2欠損	11.4×6.4×5.9		体部深く直線的で開き少ない。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
12-14 5-14	土師器 壺	口縁部	3.3×-×(5)		口縁部大きく外反する。口縁部内外横撫で、肩部縦篋削り。	①良好 ②鈍い黄褐 ③粗、砂混る
12-15 5-15	土師器 壺	1/2 底部欠損	10.2×-×(12) 胴部径11.5	埋土	最大径は胴部やや下位にあり下脹れを呈す。肩部に弱い段をなし口縁部は外反気味に外傾。口縁部横撫で。胴斜篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや密、黒色輝粒混
12-16 5-16	土師器 台付壺	1/2 台付壺欠損	12.5×-×15 胴部径15.4	埋土	胴部強く張り球形を呈し上半に最大径をもつ。口縁部直立気味で上半は強く外反。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②暗褐 ③やや粗、砂混る
12-17 5-17	土師器 台付壺	1/2 台付壺欠損	13×-×17.7 胴部径15.2	竈内	胴部強く球形を呈し上半に最大径をもつ。口縁部外反して開く。口縁部横撫で、肩部横、胴部斜篋削り。	①良好 ②暗褐 ③やや粗、砂混る
12-18 6-18	土師器 台付壺	胴下半	-×-×(8.7)	埋土	やや長目の胴部を呈するか。胴部縦篋削り。	①良好 ②暗褐 ③やや密

J 3号住居跡出土遺物観察表

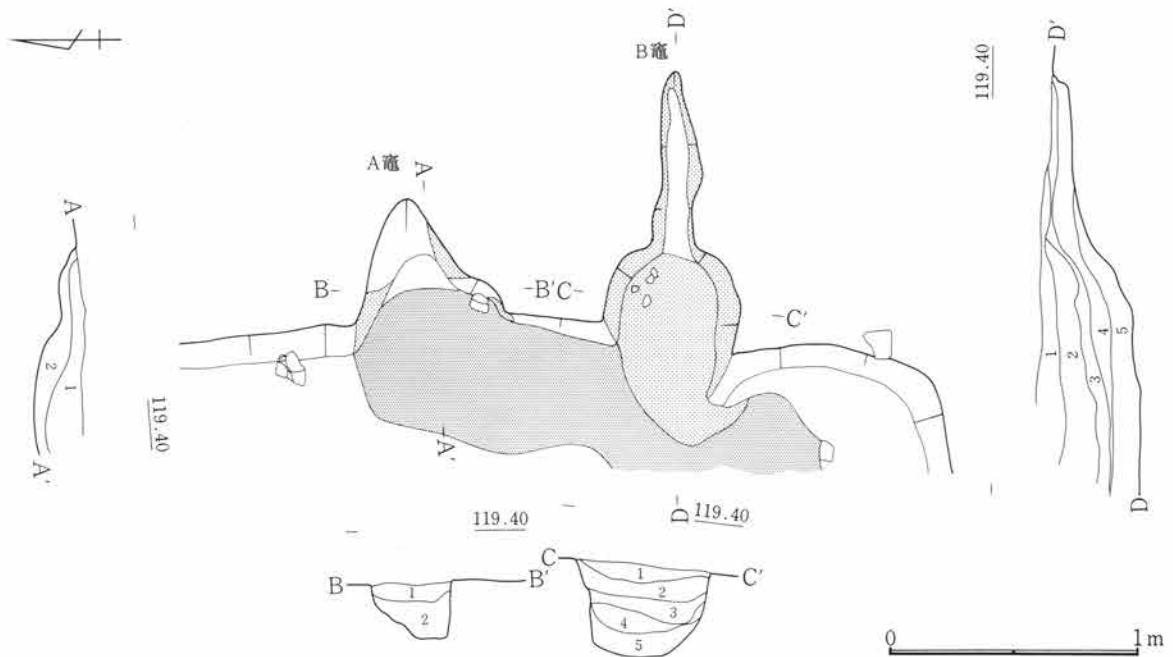
Fig. No Pl. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
12-19 6-19	土師器	上半部 1/4	19.6×-× (11.6)	埋土	胴部張り少なく、口縁部緩く外反。口縁部横撫で、胴部上半斜篋削り、内面横撫で。	①良好 ②鈍い橙 やや粗、砂混る
12-20 6-20	土師器	上半部	21.8×(4.4)× (28.6) 胴部径21.5	竈内	20、21は同一個体。胴部上に張りをもち、口縁部は緩く外反した後直線的に外傾する。底部小さく平底を呈する。	①良好 ②赤褐 ③ やや密、砂混る
12-21 6-21	土師器	下半部	(21.8)×4.4× (28.6)	竈内	口縁部横撫で、下半に指頭痕残る。胴部上半は斜篋削り、下半は縦篋削り。	
12-22 6-22	須恵器	下半部 欠損	15.4×-×(18) 胴部径25.6	中央部埋土	胴部丸く張り球形を呈す。口縁部外反し、口唇部矩形で上端面外斜。胴部叩き目後横撫で。内面下位同心円文あて目。	①やや軟 ②灰 ③ 密、茶色粒混る
13-23 6-23	石		16.3×5.3×4.6 520g	北東部床面	棒状長円礫。	輝石安山岩(細粒)
13-24 6-24	石		13.2×7.6×4.4 740g	竈内	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
13-25 6-25	石		4.4×4.2×4 95g	南東部床面	球状小円礫。	流紋岩
13-26 6-26	鉄製品		2.5×-×0.3	埋土	断面円形。U字状片。	



J 6号住居跡 (Fig. 14~16・PL. 7、8)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形か	— × 4.65	N— 88° —E	東壁やや南寄り	— — — — —

J区東部に位置し、45~47J 30~32の範囲にある。調査区の東側を南北走る4号溝跡埋没後に構築されている。平面形は東西に長軸をもつ方形を呈するが、南西部には張り出し部を有する。張り出し部は西壁より約1.2m、南壁より1.4m突出し、南壁からの壁線はだれている。床面はわずかながら高まりをなす。壁は高さ25cmを測り、ほぼ直立する。床面は平坦をなすが軟弱である。柱穴・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。竈は東壁の南寄りにA・B 2基が検出されている。A竈は略三角形の小さな掘り込みで、東壁より約40cm張り出し、B竈は幅約54cm・奥行き約60cmの楕円形に掘り込まれた燃焼部より20cmの段差をもってほぼ水平に延びる約75cmの細長い煙道部が続く。2基の竈から流出する灰層からは層位的な差異を看取できなかったが遺存状態や構築の程度からすると、AよりB竈に新しい様相が窺われた。遺物は少なく床面に散在していたが、土師器・須恵器類のほか須恵器転用砥石や角閃石安山岩の砥石などが出土している。



J 6号住居跡B竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に、焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒を少量含む。よく締った砂質土。
- 4 暗褐色土 焼土塊を少量含む。
- 5 赤色土 焼土塊層。

J 6号住居跡A竈

- 1 暗褐色土 大粒のC軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 小粒のC軽石を多量に、焼土粒を少量に含む。

Fig.15 J6号住居跡竈

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

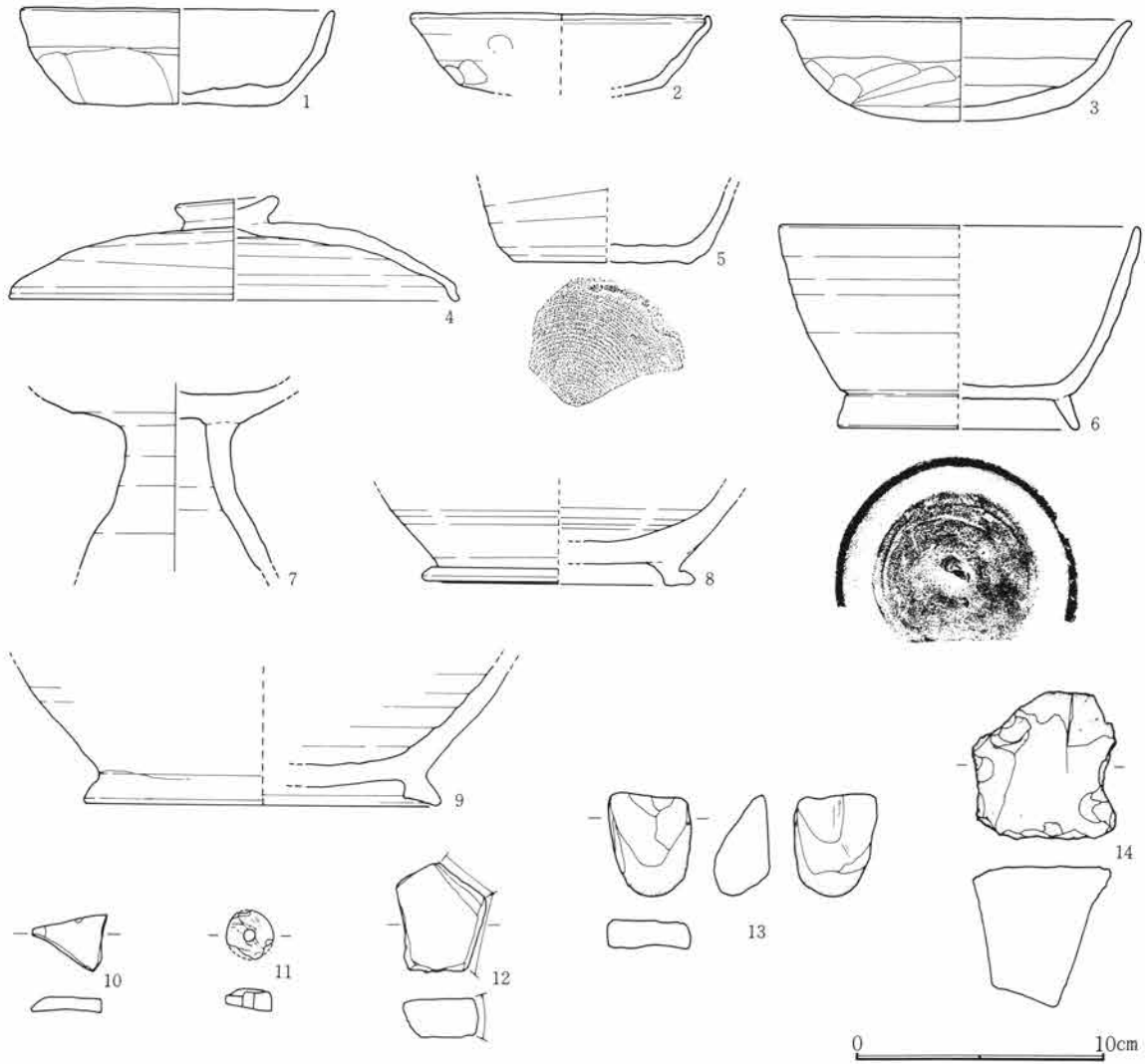


Fig.16 J6号住居跡出土遺物

J 6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
16-1 8-1	土師器 杯	ほぼ完	12.6×8.4×3.9	南西部床 面	平底、体部直線的に外傾。口縁部は僅かに内屈して開く。器肉厚目。口縁部・内面横撫で。体部横・底一方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
16-2 8-2	土師器 杯	1/2 底部欠損	12.2×8.2×3.2	竈 内	底やや張る。口縁部外反気味に開き、口唇部丸まり内屈。口縁部横撫で。体部指頭後篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗、砂混る
16-3 8-3	土師器 杯	1/2	14×-×4.1	竈 内	丸底を呈し、口縁部は緩く外反して開く。器肉厚い、口縁部横撫で。体部横・底部弧状篋削り。	①良好 ②橙 ③密
16-4 8-4	須恵器 蓋	完	18.1×-×4.1 摘径3.7	竈手前床 面	天井部丸味をもち緩く弧を描いて体部に至る。口縁部外反して屈し口唇部丸い。環状摘、断面丸い。天井回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
16-5 8-5	須恵器 杯	底部1/2	-×1×(3)	西中央部埋 土	体部開き少なく立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
16-6 8-6	須恵器 椀	底部1/2 体部少	14.5×9.7×8	竈 内	体部開き少なく内湾気味に立ち深い。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転篋削り。腰部回転篋削り。	①良好 ②青灰 ③やや密、白色粒混る
16-7 8-7	須恵器 台付盤?	脚部	-×-×(7.3) 脚基径4.5	北東部床 面	轆轤成形。脚部・盤部接合。盤底部回転篋削り。付高台、下端面に僅かに段あり。断面矩形。底部、胴部。	①良好 ②青灰 ③やや密
16-8 8-8	須恵器 瓶?	底部1/2	-×11×(3.9)	中央部床 面	付高台、端部外方へ穴出する。腰・底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色粒混る
16-9 8-9	須恵器 壺	底部1/2	-×14.2×(5.3)		回転篋削り。内外面に自然灰釉かかる。	①良好 ②灰黄褐 ③密、縞状

第2章 J区の遺構と遺物

J6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
16-10 8-10	緑釉陶器 椀	小片	—	埋 土	内外施釉。	
16-11 8-11	石製品 白玉		径1.3×厚0.6 ×孔径0.3	北西部埋 土	管玉分割か。側面縦方向研磨。内面磨き粗い。両面穿孔か。	滑石
16-12 8-12	須恵器 転用砥石		4.4×3.6×1.7 27.9g	埋 土	1側面使用。刃痕あり。壘片。	①良好 ②灰 ③や や密
16-13 8-13	石製品 砥石	全 完	4.1×3.3×2.2 14.9g	埋 土	多面使用	角閃石安山岩
16-14 8-14	石製品 砥石	全 片	5.9×5.6×(5.6)	埋 土	1面使用。	珪質頁岩?

J7号住居跡 (Fig. 17~19・PL. 9)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
方 形	3.40 × 4.30	N-91.5°-E	東壁やや南寄り	楕円形 (56.0 × 68.0 × 30.0)

J区東端部中央に位置し、44~46 J 32~34の範囲にある。平面形態は南北に長軸をもつ比較的整った方形を呈する。壁は高さ15cmと低く、傾斜している。床面は中央部及び竈手前がよく踏み固められている。竈は東壁の南寄りに付設され楕円形に掘り込まれる。袖無しで、煙道部は確認されていない。奥壁のみが使用時の旧態を止め、燃焼部内に凝灰岩加工材片が散在していた。廃絶時またはそれ以降の、用材確保のための破壊が推定される。燃焼部幅約60cm・奥行き約50cmを測る。燃焼部底面から手前床面に灰層が広がっている。遺物は少なく、いずれも破片で、竈燃焼部内及びその周辺に散在していた。羽釜片や輪花椀・長頸瓶などの灰釉陶器などが検出されている。

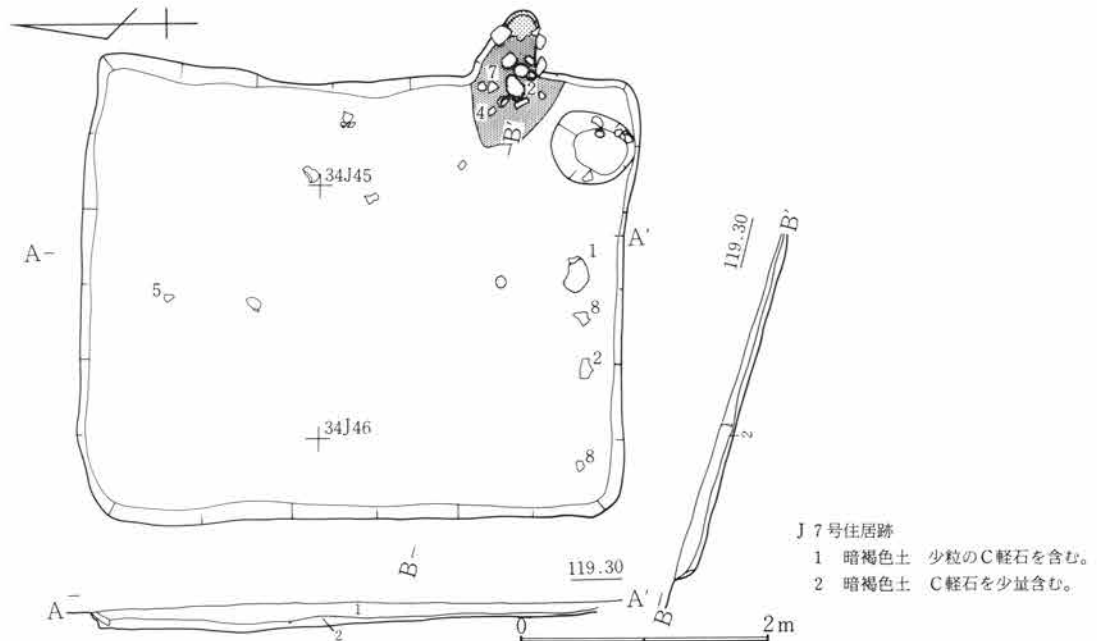


Fig.17 J7住居跡

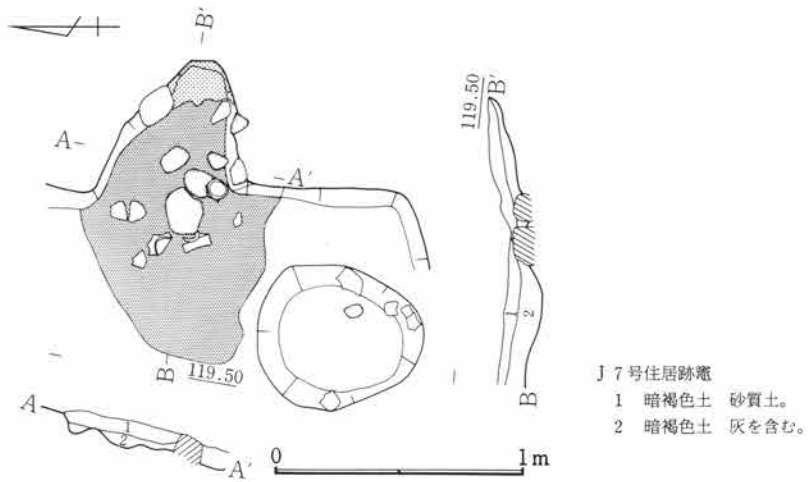


Fig.18 J7号住居跡竈

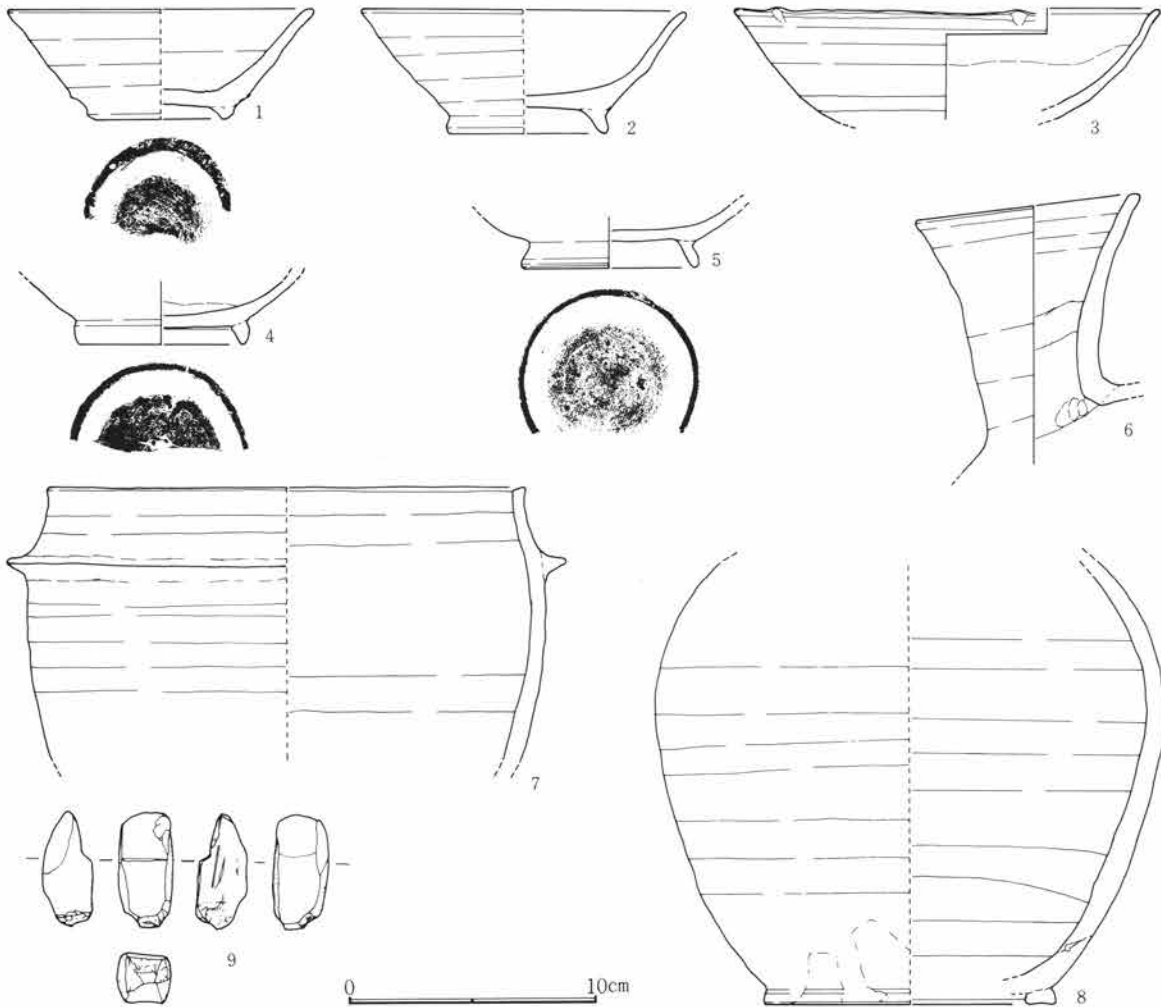


Fig.19 J7号住居跡出土遺物

J 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
19-1 9-1	須 恵 器 椀		1/4	12.3×5.9×4.4	北央部床 面	体部直線的に開き口縁部は僅かに外傾。付高台、低く断面 矩形。轆轤成形。回転糸切り。作り雑。一部吸炭。	①良好 ②灰白 ③ 粗、大粒砂混る

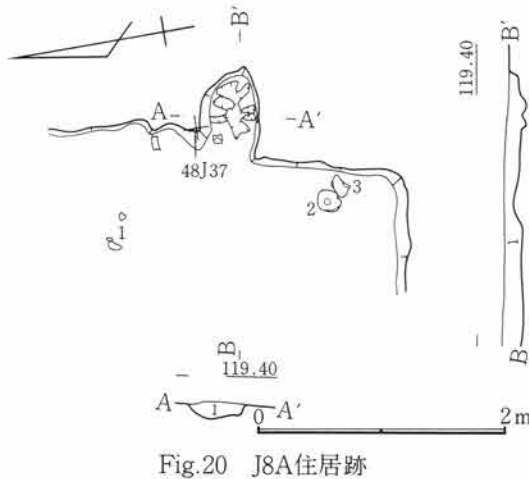
第2章 J区の遺構と遺物

J7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
19-2 9-2	須恵器 碗		13×6.3×4.9	竈内	体部中位で僅かに張り、口縁部は緩く外反気味。付高台、端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化、軟 ②明褐色 ③胎土 ④粗、砂多く混
19-3 9-3	灰釉陶器 輪花碗	高台欠損	(16.9)×—×4.3	東中部床面	体部丸味をもつが張り少ない。口唇部丸く僅かに外反。輪花5ヶ所。腰部回転篋削り、刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
19-4 9-4	灰釉陶器 碗	底部	—×6.6×(2.5)	竈手前床面	底部僅かに窪む。高台やや肥厚し、内湾気味。略三角。底部右回転糸切り残る。内面体部施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや密
19-5 9-5	灰釉陶器 碗	底部	—×7.1×(2.4)	南中部埋土	高台断面丸く、ハの字状に開く。底部回転篋削り。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや密、小石混る
19-6 9-6	須恵器 平瓶	口頸部	9×—×(10.3)	埋土	頸部は緩く外反し、上半はやや大きく開く。口唇部丸まる。頸部内面に巻き上げ痕残る。	①良好 ②褐色 ③ やや密
19-7 9-7	— 羽釜	小片	19.2×—× (10.8)	竈内	胴部やや張り、口縁部は僅かに内傾し外反気味に立つ。口唇上端面は平坦で内斜。鋳断面略三角。口縁部横撫で。	①酸化気味、やや軟 ②鈍い黄橙 ③粗
19-8 9-8	灰釉陶器 壺	胴部	—×11.6× (17.7)	南中部埋土	胴部丸く、上半は強く張る。高台幅広で低く台形を呈す。胴部上半まで回転篋削り。清け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
19-9 9-9	石製品 砥石		4.6×2.3×2 24.4g	埋土	多面使用	流紋岩(砥沢?)

J8A号住居跡 (Fig. 20、21・PL. 10)

J区東部中央に位置し、47・48J36・37の範囲にある。8B号・12住居跡と重複し、これらより新しい時期の所産である。調査区の北寄りを東西走る溝の埋没後に構築されているが、確認が遅れ西半のほとんどは検出できず東・南壁の一部が検出できたのみである。壁は高さ5cm程度しか遺存せず、床面は軟弱である。竈は東壁に付設され楕円形に掘り込まれる袖無し型である。燃焼部に攪乱が及び、遺存状態は不良である。手前床面にわずかながら灰が確認された。遺物は少なく、竈手前床面に散在していた。出土遺物の所属については8A号・12号住居跡との重複からかなりの混在がある。



J8A号住居跡

1 暗褐色土 C 軽石を多量に、炭化物粒・焼土粒を含む。

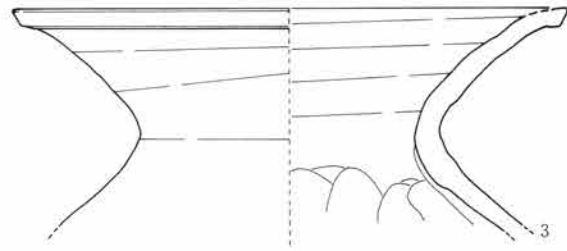
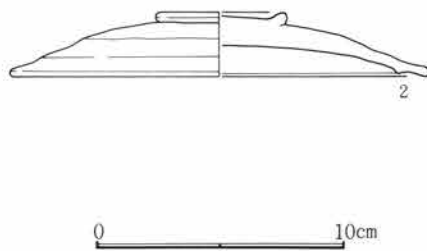


Fig. 21 J8A号住居跡出土遺物

J 8 A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
21-1 10-1	土 師 器 杯	体部% 欠損	9.9×5.5×2.3	東中央部床 面	体部浅く僅かに丸味をもつ。口唇部丸い。轆轤成形。底部 静止糸切り。	①良好 ②白灰 ③ 粗、砂多く混る
21-2 10-2	須 惠 器 蓋	完	16.6×-×2.6 摘径5.2	南東部床 面	天井部扁平。口縁部やや内湾気味に反る。口唇部丸く鈍い かえり。環状摘、扁平で端部丸い。天井部回転荒削り。	①良好 ②灰 ③粗 白色細礫混る
21-3 10-3	須 惠 器 甕	口縁部 1/4	22.2×-×(8.6)	竈内床 面	口縁部強くくの字状に外反。口唇部矩形を呈す。口縁部回 転撫で。肩部内面青海波あて目。	①酸化、良好 ②淡 黄 ③粗、砂混る

J 8 B号住居跡 (Fig. 22、23・PL. 10、11)

J区東部中央に位置し、47・48 J 36・37の範囲にある。西半部は重複と攪乱、北壁寄りには近世の溝によって失われている。壁は高さ50cmを測り、ほぼ直立する。床面は比較的硬い。竈は東壁に付設され、袖無し型で、燃烧部奥壁に長さ90cmの煙道部をもつ。燃烧部及び手前床面に、広く灰層が広がっている。遺物は少なく、破片が多い。

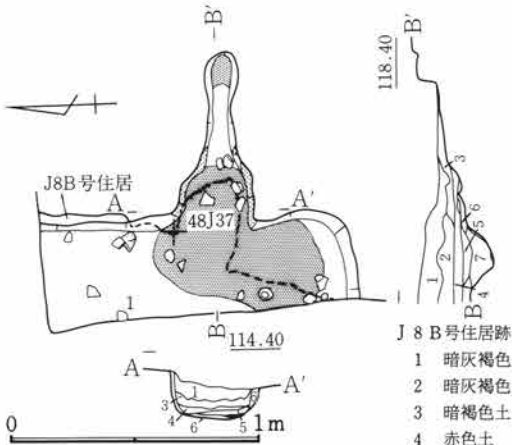


Fig.22 J8B住居跡

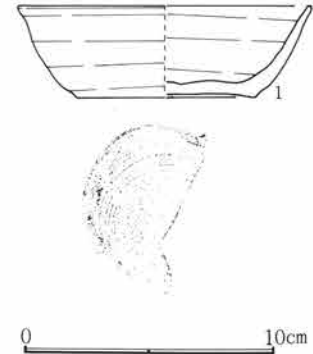


Fig.23 J8B号住居跡出土遺物

- J 8 B号住居跡
- 1 暗灰褐色土 焼土粒を微量に含む。
 - 2 暗灰褐色土 1層と類似するが褐色味が強い。
 - 3 暗褐色土 崩落焼土粒を含む。土粒荒く締りなし。
 - 4 赤色土 崩落焼土塊層。
 - 5 灰層
 - 6 焼土
 - 7 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。

J 8 B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
23-1 11-1	須 惠 器 杯	1/5	11.8×7.2×3.6	東中央部床 面	体部僅かに脹らみ丸味をもつ。口縁部緩くくびれて外傾。 轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や密

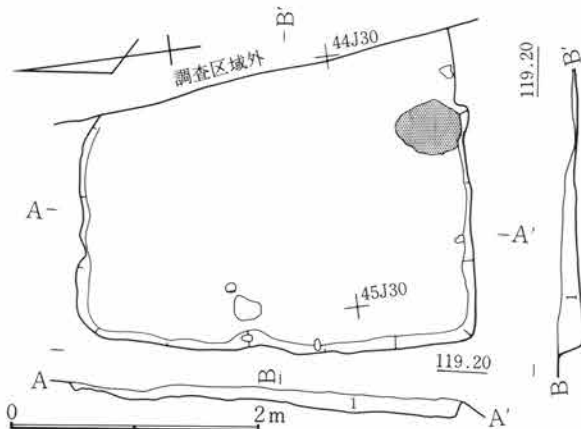


Fig.24 J9号住居跡

J 9号住居跡 (Fig. 24・PL. 11)

J区東端部中央に位置し、43~45 J 29~31の範囲にある。東半部は調査区域外に延びるため未検出である。平面形は方形と推定され、南北長2.5mを測る。壁は高さ45cmを測り、傾斜している。床面・壁ともに軟弱である。竈は検出されていない。南壁寄りに灰層が確認されたが、廃絶後の堆積である。当遺構に伴う遺物は、出土していない。

- J 9号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を含む。土粒が荒い。

第2章 J区の遺構と遺物

J10号住居跡 (Fig. 25~27・PL. 11, 12)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
張出付方形か	— × 4.40	N— 84° —E	東壁やや南寄り	隅丸直方形 (94.0 × 63.0 × 25.0)

J区東部に位置し、45~47J 24~27の範囲にある。4号溝跡埋没後に構築されているが、西壁寄りには検出できなかった。平面形は隅丸方形を基本とし、北壁東寄りに張り出し部がある。壁は高さ45cmを測り、ほぼ直立する。床面は軟弱である。竈は袖部が住居内に張り出し、燃烧部は狭い。燃烧部奥壁に続いて煙道部があるが、燃烧部底面と17cm余りの段差があり、長さ1mを測る。燃烧部から南東部床面に広く、灰の堆積が認められる。また補強材と思われる凝灰岩の加工材が散在していた。遺物は竈周辺を主として出土しており、器形を知りうるものは土師器に限られている。

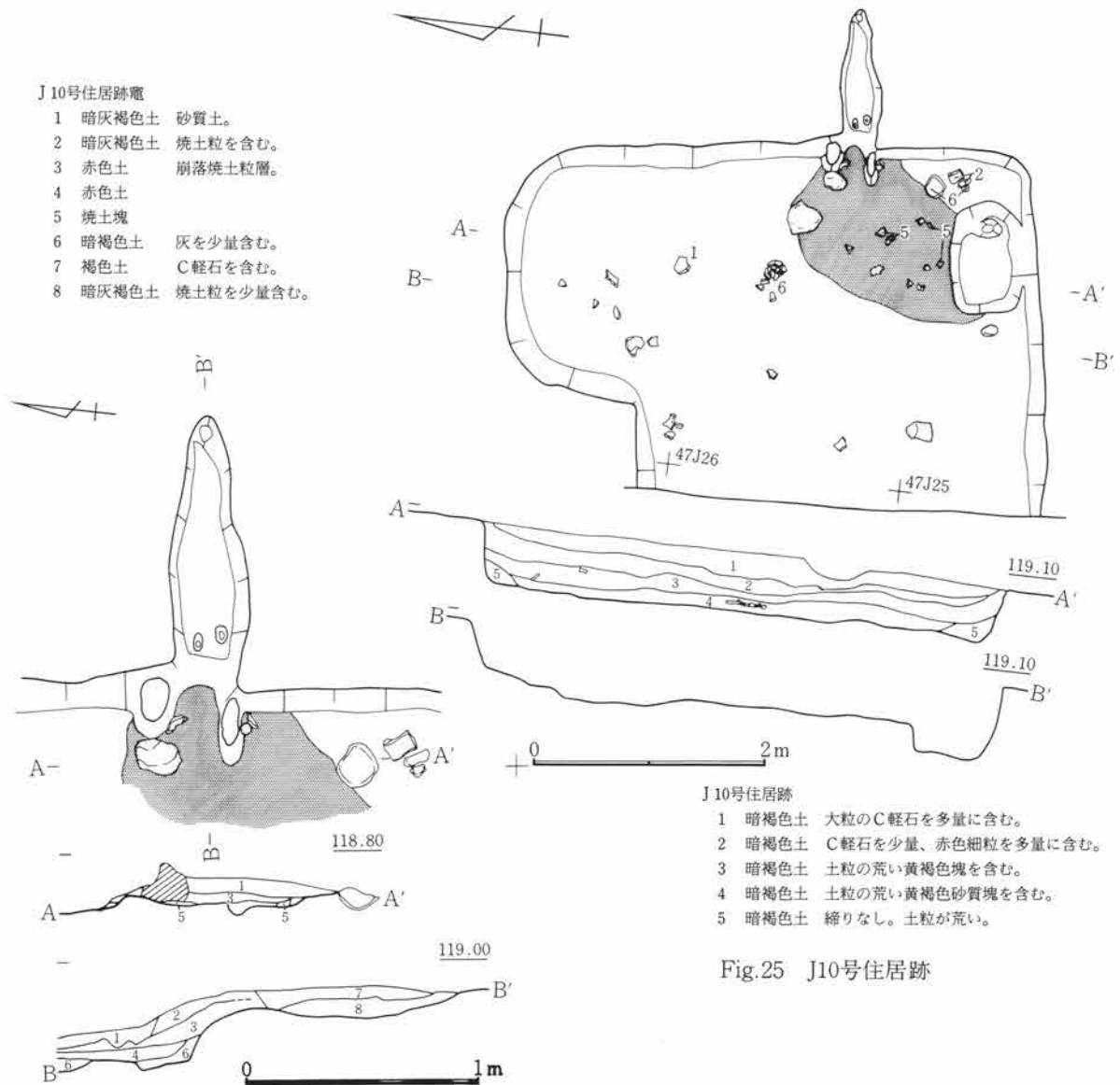


Fig.26 J10号住居跡竈

Fig.25 J10号住居跡



Fig.27 J10号住居跡出土遺物

J 10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
27-1 12-1	土 師 器 杯	¼	10.1×-×3	埋 土	丸く扁平な底部。口縁部は内湾する。口唇部丸い。口縁部横撫で。口縁部下横篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い褐③やや粗、砂混る
27-2 12-2	土 師 器 杯	ほぼ完	13.4×5.2×4.7	貯蔵穴内	体部深く丸味をもち、口縁部は内湾気味。底部平底気味。口唇部下まで横篋削り。底部不定方向篋削り。内面化粧土。	①良好 ②赤褐 ③やや密
27-3 12-3	土 師 器 杯	ほぼ完	12.6×-×4.2 口縁高2.1	床下埋土	扁平で丸味のある底部から鈍い段をなし、口縁部は大きく外反して開く。口縁部横撫で、底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③密
27-4 12-4	須 惠 器 平 瓶	口頸部 ⅓	9×-×9 口径6	貯蔵穴内	基部短かく内傾した後外反気味に立ち、上半部は緩く内湾して開く。	①良好 ②灰 ③やや密、黒色細粒混る
27-5 12-5	土 師 器 甕	胴部⅓ 欠損	12.4×-×14.2 胴部径17.5	貯蔵穴内 及び周辺	胴部は丸く強く張り最大径は下半にあり下腹れを呈す。口縁部は短く直立後外反する。口縁部横撫で。胴底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
27-6 12-6	土 師 器 甕	胴部欠 損あり	23.4×6×35.1 胴部径20	東部中央 床面	胴部張り少なく長胴形を呈す。口縁部長く大きく外反。底部やや膨らむ。口縁部横撫で。肩部斜・胴部縦篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂多く混る

第2章 J区の遺構と遺物

J11号住居跡 (Fig. 28、29・PL. 12)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
平 面 形	3.32 × 3.03	N— 87° —E	東壁やや南寄り	隅丸方形

J区東部に位置し、45～47J 21・22の範囲にある。南北走る4号溝跡の埋没後の構築である。北側で34号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。平面形はほぼ正方形を呈する、小規模な竪穴住居跡である。壁は高さ約30cmを測る。床面は踏み締まりが弱く、かなりの起伏がある。南壁下には幅20cm・深さ10cmの溝が巡る。床面東側には径70cm・深さ約25cmの円形土坑が穿たれるが、埋土は炭化物が多く混じった締まりのある暗褐色土で床下土坑の可能性もある。竈は東壁わずか南に寄って付設され、大きく楕円形に掘り込まれる。袖部・煙道部は認められなかった。燃烧部幅約90cm・奥行き約75cmを測る。出土遺物は少量で、須恵器転用砥石のほか円面硯の脚部と考えられる小破片が検出された。

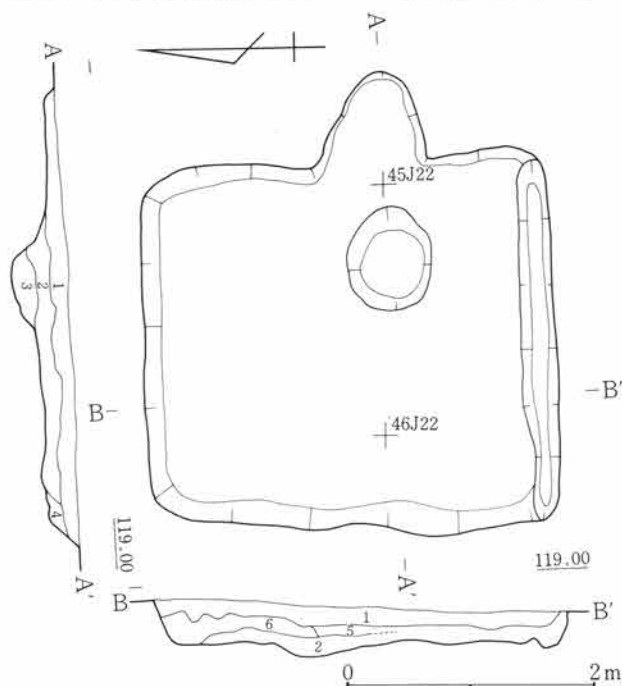
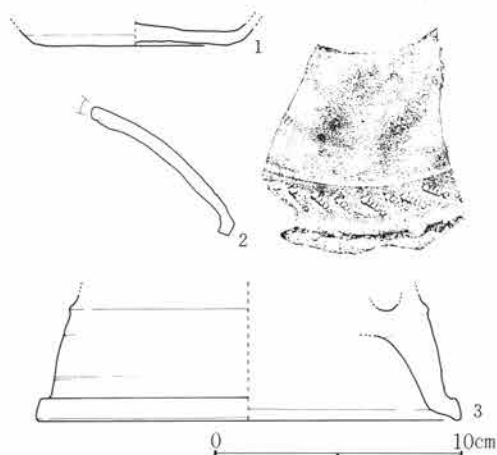


Fig.28 J11号住居跡



J11号住居跡

- 1 暗褐色土 土粒が粗い。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 炭化物を多く含む。堅く締まっている。
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 白色砂質塊を含む。
- 6 暗褐色土 C軽石を多く含む。締りあり。

Fig.29 J11号住居跡出土遺物

J11号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
29-1 12-1	須 惠 器 杯	底 部	—×7.5×(1)	埋 土	底部回転範切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
29-2 12-2	須 惠 器 瓶	肩部小 片		埋 土	肩部に2条の凹線巡り、区画内は5個1組の刺突文を施す。 割れ口は磨滅著しく砥石に転用か。	①良好 ②オリーブ 灰 ③やや密
29-3 12-3	須 惠 器 円 面 硯	脚部小 片	—×17.1×(5.2)	埋 土	脚端部強く外屈し、断面丸みのある矩形。硯面、縁部欠損。 海部U字状に窪む。	①良好 ②灰白 ③ やや密

J12号住居跡 (Fig. 30～33・PL. 13)

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

J区東部やや北よりに位置し、47・48J36～38の範囲にある。4号溝跡埋没後に構築され、西半部は後出する8B号住居跡と重複し、南北の両壁寄りには近世以降の溝によって失われている。平面形は方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。南北4.3m・東西2.7mまで確認できた。竈を基軸にした東西方向はおよそ

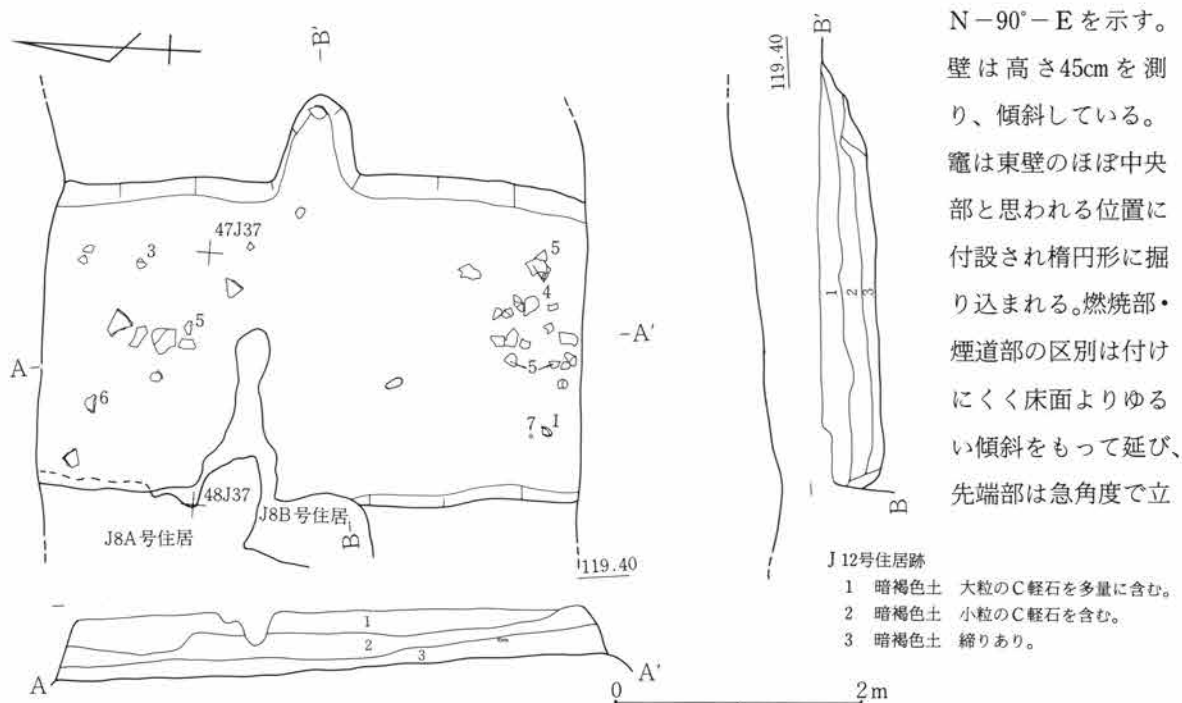


Fig.30 J12号住居跡

ち上がる。幅約70cm・奥行き約80cmを測る。焼土・灰ともに少なく、竈内壁の状況から、短期間の使用を窺わせる。遺物の出土状況はいずれも小片となっており、床面の南北に散在していた。長胴型の土師器甕や置竈の脚部片・滑石製白玉などが出土している。

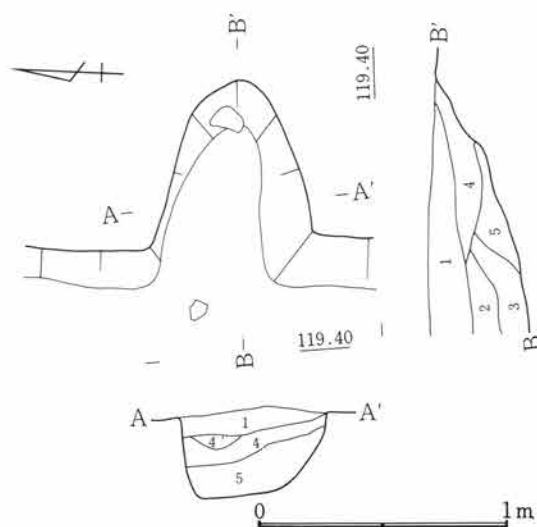


Fig.31 J12号住居跡竈

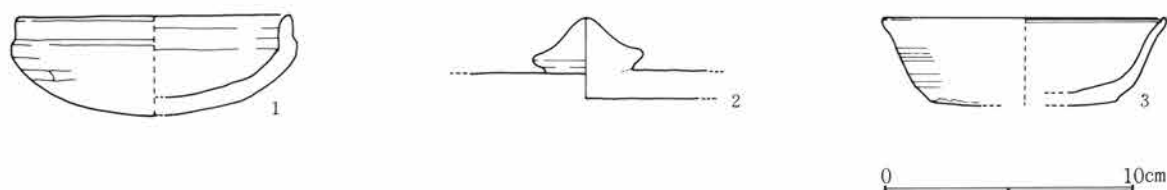


Fig.32 J12号住居跡出土遺物(1)

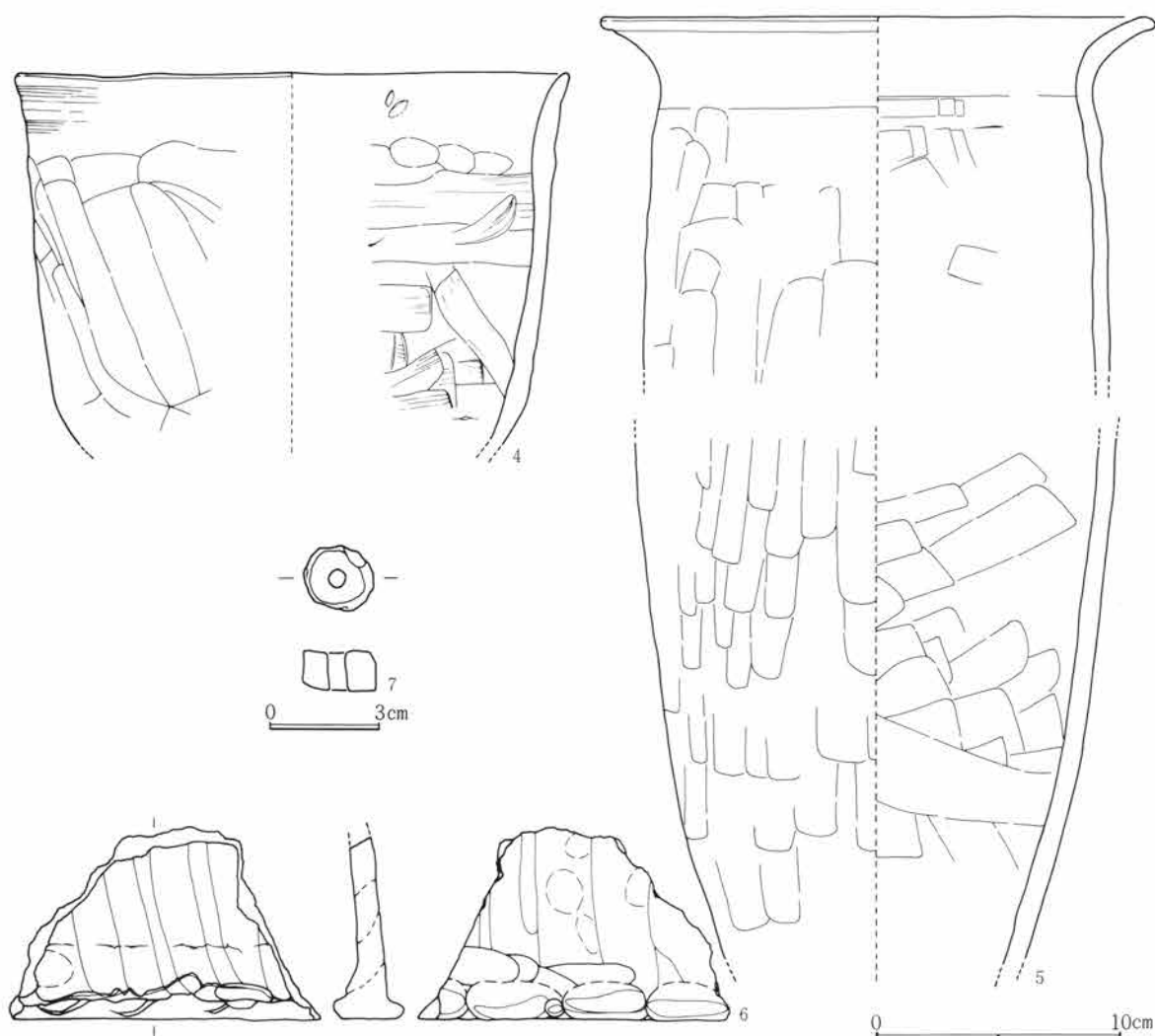


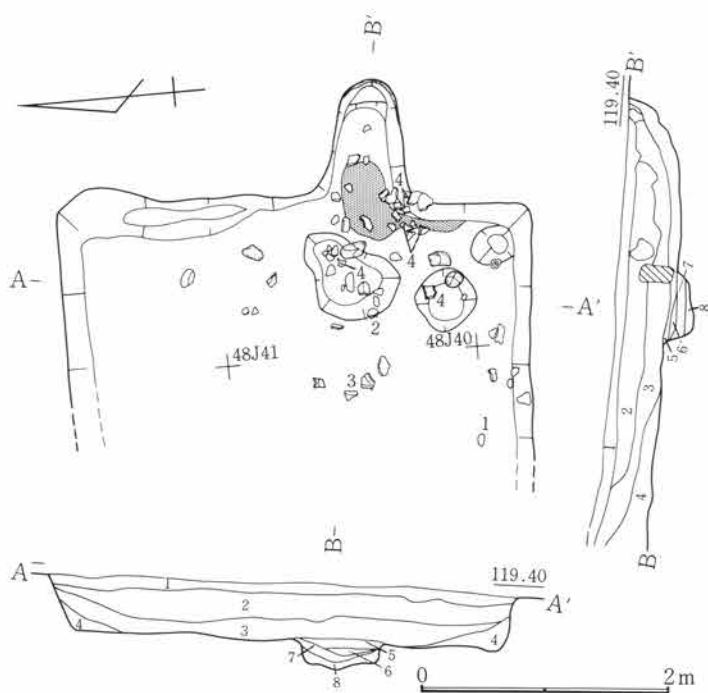
Fig.33 J12号住居跡出土遺物(2)

J12号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
32-1 13-1	土師器 杯	1/4	11×-×4		丸い底部。受け部に僅かに段をなし、口縁部は短かく直立する。全体に肥厚。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗、砂混る
32-2 13-2	須恵器 蓋	摘	摘径4.4	埋土	肉厚の宝珠型を呈す。大型	①良好 ②灰白 ③ やや密、黒色粒混る
32-3 13-3	須恵器 杯	1/4	11.3×7.4×3.5		腰部丸味をもつてくびれる。体外反気味に開き、口縁部は内湾する。轆轤成形。回転篋切り。	①良好 ②灰褐 ③ やや密
33-4 13-4	土師器 鉢?	1/4 底部欠損	22.1×-×14.5		寸胴を呈し下部は丸味をもつ、口縁部は僅かに外反して立つ。口縁部横撫で、胴部縦篋削り。内面横・斜篋撫で。	①良好 ②鈍い橙③ やや粗、細砂混る
33-5 13-5	土師器 甕	1/4 底部欠損	22.6×-× (36.3)	埋土	胴部張りなく長胴形を呈す。口縁部強く外反して開く。口縁部横撫で、胴部縦篋削り。内面胴部横・斜撫で。	①良好 ②鈍い褐③ 粗、粗粒砂混る
33-6 13-6	土師器 置き竈?	袖部小片	(7.7)	北中央部埋土	下端面はT字状に広がる。外面縦篋削り、内面紐状接合痕顯著、縦篋撫で。	①良好 ②外吸炭、 内明褐 ③密
33-7 13-7	石製品 臼		1.3×0.7 孔径0.3	南中央部床面	側面面取り状成形。上下面研磨痕。	滑石

J13号住居跡 (Fig. 34~36・PL. 14)

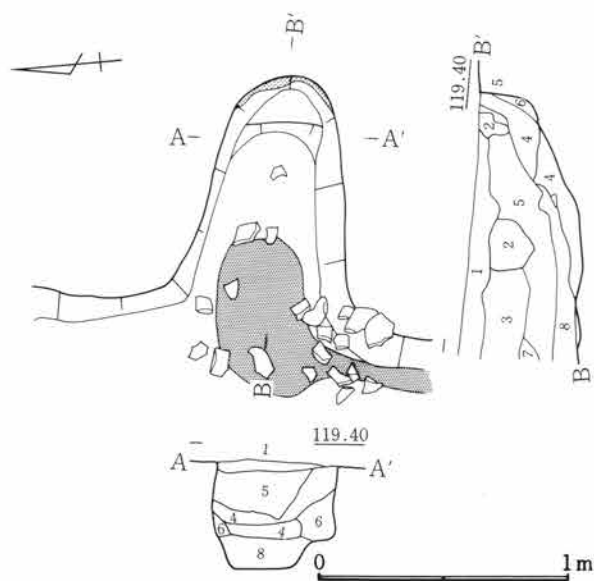
平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形か	— × 3.80	N— 98° —E	東壁やや南寄り	—



J13号住居跡

- 1 褐色土 大粒のC軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物を含む。締りあり。
- 4 暗褐色土 締りあり。
- 5 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。土粒が荒い。
- 6 灰層
- 7 褐色土 粘性あり。
- 8 暗褐色土 粘性あり。

Fig.34 J13号住居跡



J13号住居跡竈

- 1 暗褐色土 大粒のC軽石を含む。
- 2 褐色土 粘性土塊
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 4 赤色土 崩落焼土。
- 5 暗褐色土 粘性土。
- 6 暗褐色土 灰・焼土粒を若干含む。
- 7 暗褐色土 C軽石を若干含む。
- 8 灰層

Fig.35 J13号住居跡竈

J区東部北寄りに位置し、47・49 J 39~41の範囲にある。30号・32号・33号住居跡と重複しておりこれらより新しい時期の所産である。しかし30号住居との重複関係については確認が不確かで、出土遺物の面からは時期的に矛盾するものがある。同時に当跡の西半部分については検出できなかった。平面形は隅丸方形と思われる。壁は高さ30cmを測り、傾斜している。床面は重複のためか、かなり軟弱でゆるく波うつ。竈は東壁やや南寄りに付設され、長く楕円形に掘り込まれる。燃烧部と煙道部の区別はできず、また袖部の痕跡も確認されなかった。竈は床面よりわずかに低く窪み先端部は急角度で立ち上がる。竈掘り込みの前部分にかなり厚く灰層が堆積しておりこの範囲が燃烧部としての可能性が考えられる。竈の規模は、幅約75cm・奥行き約1.1mを測る。竈前方部床面には不整楕円形の落ち込みが検出されているが、灰層を含む埋土の最上層には床面と同一面に焼土粒を混じえる暗褐色土で整地されており、この落ち込みは床下土坑と考えられる。遺物は、竈内および手前に主として散在していたが、器形全体を知りうるものが少ない。灰釉陶器片・羽釜などが見られる。

第2章 J区の遺構と遺物

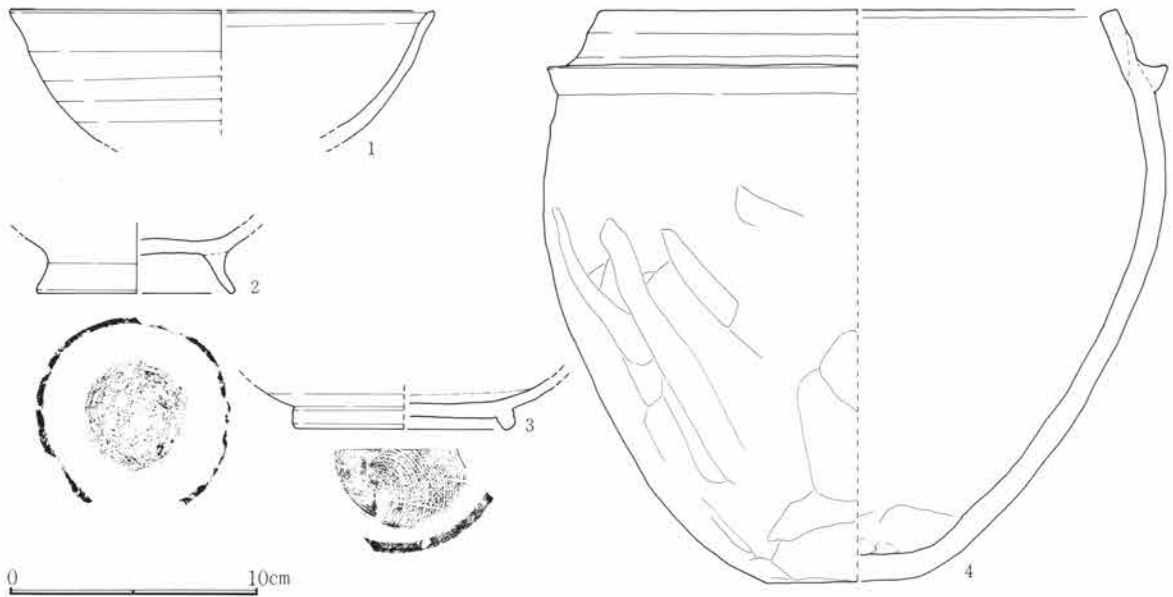


Fig.36 J13号住居跡出土遺物

J 13号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
36-1 14-1	須恵器? 椀	体部 $\frac{1}{2}$	17×—×(5.2)	南央部埋 土	体部丸味強く、口縁部緩く外傾。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②暗褐 ③やや密
36-2 14-2	須恵器? 椀	底部	—×8×(3)	南東部埋 土	付高台、やや高くハの字状に開く。器肉薄い、轆轤成形。	①酸化、やや軟 ② 橙 ③やや密
36-3 14-3	灰釉陶器 椀	底部 $\frac{1}{2}$	—×9×(2)	南央部埋 土	高台肥厚し丸味をもつ。底部右回転糸切り。内面体部施釉。	①良好 ②灰白 ③ 密
36-4 14-4	羽 釜	$\frac{1}{2}$ 欠損	20.8×6×22.6 口径24.6	南東部床 面	胴部丸く張り短胴を呈す。口縁部内傾して立つ。口唇部上 端面内斜。鈎断面三角。口縁・胴上半横撫。下半縦篋削り。	①酸化気味、軟 ② 灰褐 ③やや密

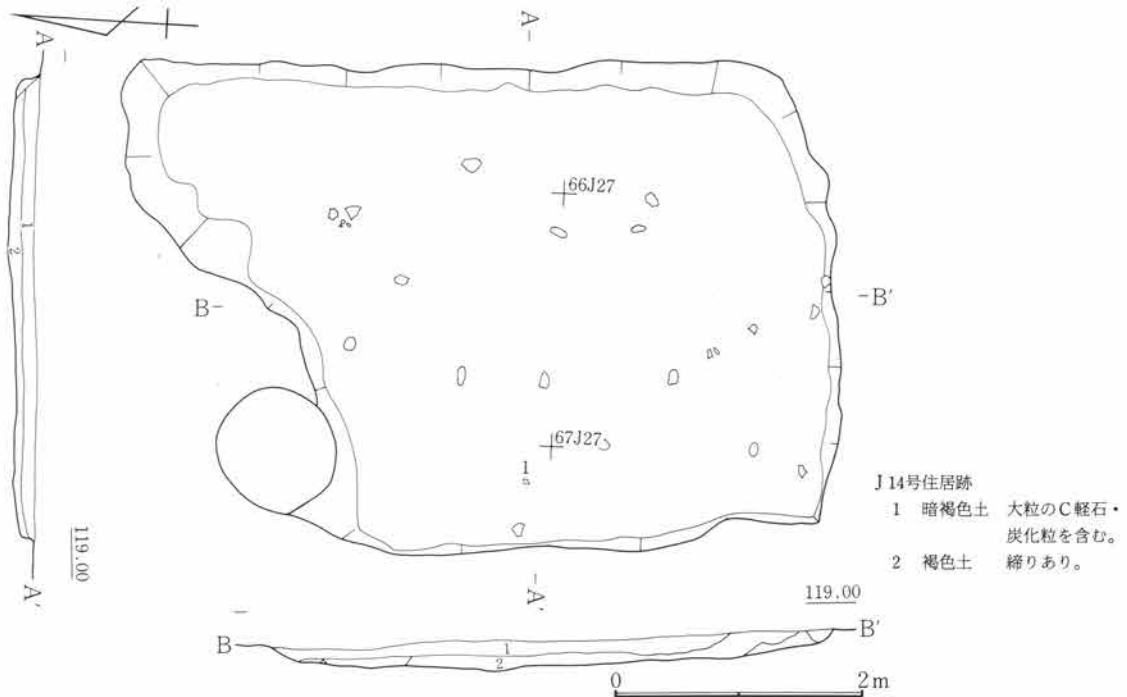


Fig.37 J14号住居跡

J14号住居跡 (Fig. 37、38・PL. 15)

J区西部中央に位置し、65～67 J 26～28の範囲にある。北壁は先行する17号住居跡と重複して不明瞭で、北西部は現代の井戸跡により失われている。壁は高さ20cmを測り、傾斜している。床面は、かなり軟弱である。平面形は隅丸長方形に近いが、規格性のあるものとは言い難い。竈も設けられていず、常住施設であるか否か疑わしい。遺物は少ないが鉄器類の出土がある。いずれも廃絶後の投棄と考えられる。

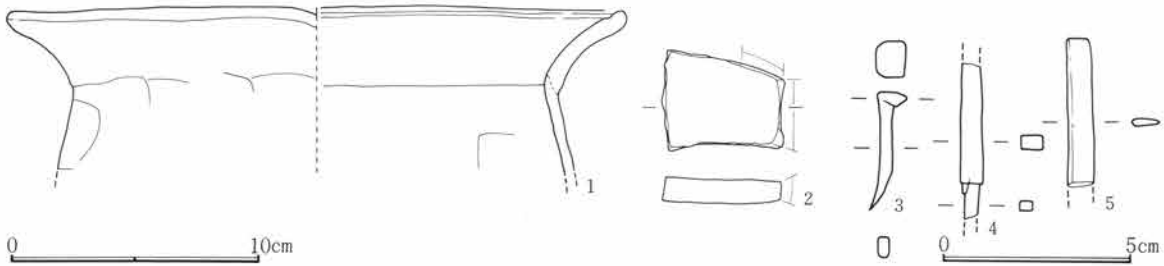


Fig.38 J14号住居跡出土遺物

J14号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
38-1 15-1	土 師 器 甕	口縁部 1/5	14.8×—×(6.5)	埋 土	肩部張り少なく、口縁部強く外反して開く。口唇部丸まり内屈し段をなす。口縁部横撫で、肩部横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、細砂混る
38-2 15-2	須 惠 器 転用砥石		4.9×4.1×1 27.0g	西央部床 面	2側面使用。甕片	①良好 ②青灰 ③やや粗、白色粒混る
38-3 15-3	鉄 製 品 角 釘	全 完	3.2×0.3×0.5	埋 土	頂頭は扁平。短身。全面錆化。X線透視復元。	
38-4 15-4	鉄 製 品 不 明	片	4.1×0.6×0.4	埋 土	用途不詳。全面錆化。X線透視復元。	
38-5 15-5	鉄 製 品 刀 子	中 茎	0.4×0.7×0.2	埋 土	中茎棟は斜傾面取り、または丸棟と推定する。全面錆化X線透視復元。	

J15号住居跡 (Fig. 39～41・PL. 16)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	2.70 × 4.30	N— 89° —E	東壁ほぼ南寄り	—— ————

J区西部に位置し、63・65 J 21～23の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ顕著な長方形を呈する。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面はやや凹凸があり、軟弱である。南壁寄りの一部には壁に沿って幅約30cmで床面より約10cmの高さで段をなす。また東・北・南壁には部分的ながら壁下の溝の痕跡が検出されている。竈は東壁の南端部、南壁との変換部に付設される。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、壁線上に両袖部として凝灰岩の加工材が埋設されている。燃焼部手前に焚口天井材と考えられる同質の加工材が転落した状態で検出された。煙道部は作り出されていない。袖材間内法約40cm、燃焼部奥行き約50cmを測る。遺物は少なく、竈手前に須惠器杯型土器1点のみの出土であった。

第2章 J区の遺構と遺物

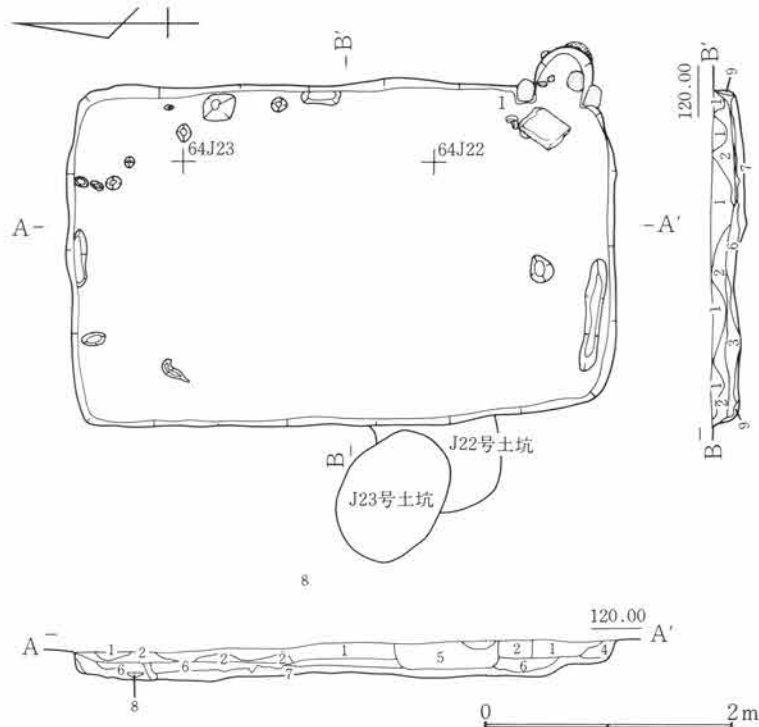


Fig.39 J15号住居跡

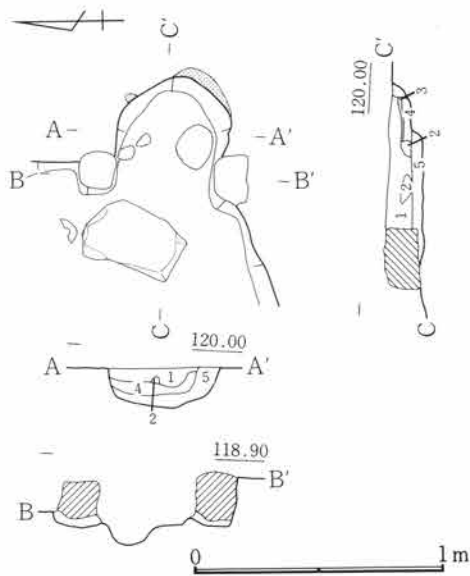


Fig.40 J15号住居跡竈

J15号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。褐色塊がわずかに混じる。
- 3 暗褐色土 C軽石をわずかに含む。粘性の褐色塊が多量に混じる。
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭粒を含む。わずかに褐色塊が混じる。
- 5 黒褐色土 多量に炭化物集中。赤褐色及び黒色炭化物塊が主体。
- 6 黒褐色土 C軽石・炭化物を含む。
- 7 暗褐色土 C軽石・粘土塊を含む。
- 8 黒褐色土 C軽石を多量に含む。
- 9 黒色土 粒子が細かい。

J15号住居跡竈

- 1 褐色土 細粒のC軽石を含む。強く締っている。
- 2 黄褐色土 砂岩。
- 3 赤黒色土 焼土塊。
- 4 黒褐色土 弱粘性土。
- 5 黒褐色土 焼土・炭化物粒・灰を含む。

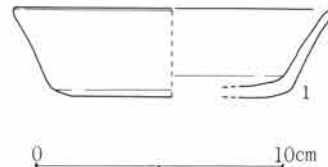


Fig.41 J15号住居跡出土遺物

J15号住居跡出土遺物観察表

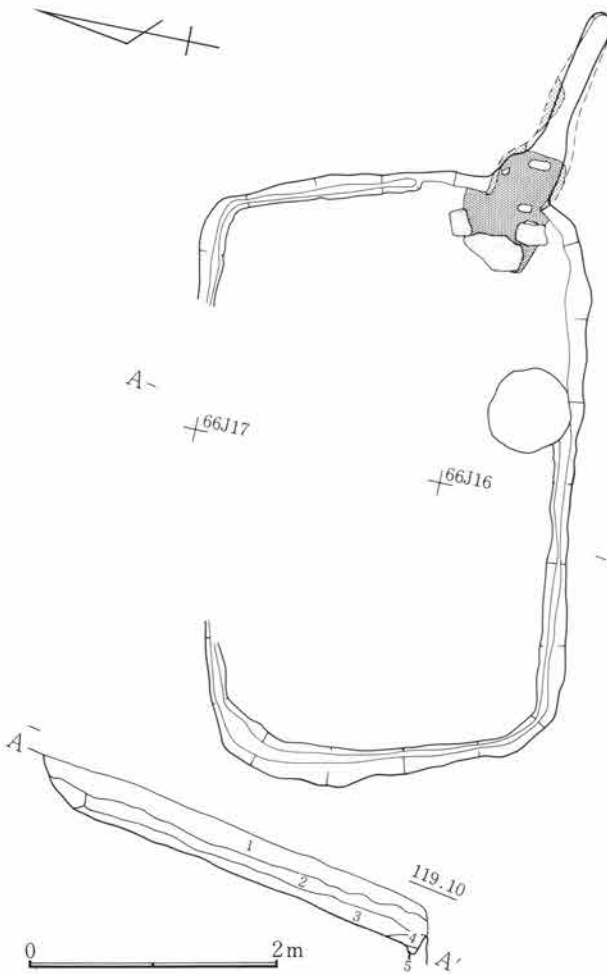
Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
41-1 16-1	須 惠 器 杯	1/2	12.7×9.4×3.6	竈 内	腰部丸味をもち、体部は外反気味に開く。轆轤成形。底部の技法は不明。	①良好 ②灰白 ③やや密

J 16号住居跡 (Fig. 42~44・PL. 16)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	4.80 × 2.80	N— 86° —E	東壁ほぼ南寄り	円形 (68.0 × 65.0 × 78.0)

J区南西部に位置し、64~67 J 15~17の範囲にある。北壁中央部は湧水によって崩落し、壁線の一部は検出できなかった。南壁の中央部は現代の井戸跡と接している。平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈する。壁は高さ40cmを測り、崩落によって傾斜している。床面は平坦をなすが軟弱である。南東部を除き各壁下に

は幅10cm前後・深さ約5cmの溝が巡る。竈は東壁の南端、南壁との変換部に付設される。燃烧部は方形気味に掘り込まれ、燃烧部とは明瞭な段差をもたず長い煙道部が延びる。明確な袖部は検出されていないが、燃烧部からやや住居内に入った箇所ですら左右に2個の凝灰岩の加工材が設置されており袖部の端部と考えられる。またこの袖材に挟まれる位置に炊口に架せられていたと思われる同質材が検出されている。検出位置での袖材間内法約35cm、燃烧部奥行き約70cm、煙道部長さ1.2mを測る。燃烧部底面には灰層が堆積している。遺物は少なく、埋土中に数片の土器を検出したのみである。



J 16号住居跡

- 1 褐色土 C軽石を多く含む。粘性土。
- 2 暗褐色土 C軽石を若干含む。粘性土。
- 3 暗褐色土 明褐色土塊を少量含む。粘性土。
- 4 褐色土 明褐色土塊を含む。粘性土。
- 5 明褐色土 粘性が強い。

Fig.42 J16号住居跡

J 16号住居跡竈

- 1 暗灰褐色土 粘性明褐色土との混合層。
- 1' 明褐色土塊 粘性土。
- 2 暗灰褐色土 縮りなし。
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土 焼土塊を含む。縮りなし。
- 5 黒灰色土 灰層。弱粘軟質土。
- 5' 暗褐色土 灰を含む。弱粘軟質土。

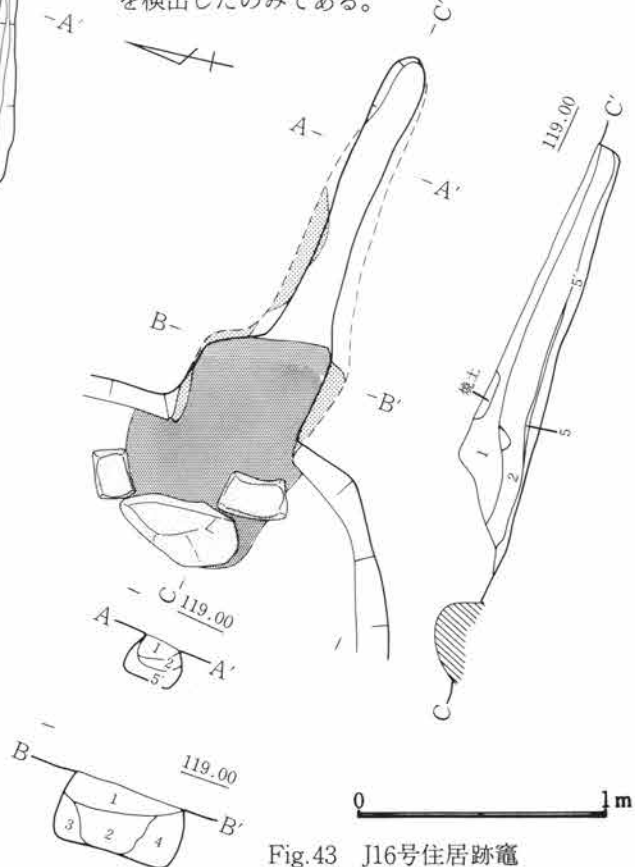


Fig.43 J16号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

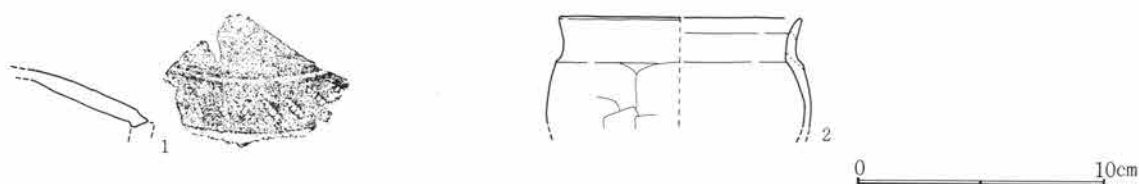


Fig.44 J16号住居跡出土遺物

J 16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
44-1 16-1	須恵器 長頸壺	肩部小片	—×—×2.3	埋 土	弱い2条の凹線間に7個1組の列点文が斜方向に施される。	①良好 ②灰 ③粗 白色粒多く混る
44-2 16-2	土師器 甕	上半部 小片	9.7×—×(4.5)	埋 土	胴部丸く、肩部に僅かな段をもつ。口縁部は直立気味に外反する。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密

J 17号住居跡 (Fig. 45、46・PL. 17)

J区西部に位置し、66~68 J 29~31の範囲にある。南壁は、後出する14号住居跡と重複し失われている。平面形は不定形で規格性に乏しい。東西長3.7m、南北現長5.9mである。壁は高さ15mを測り、傾斜している。床面はよく踏み固められている。竈やその他の内部施設は全くなく、焼土や灰の堆積も認められなかった。遺物の出土も希少で、小片のみであった。常住的施設とは考え難い。

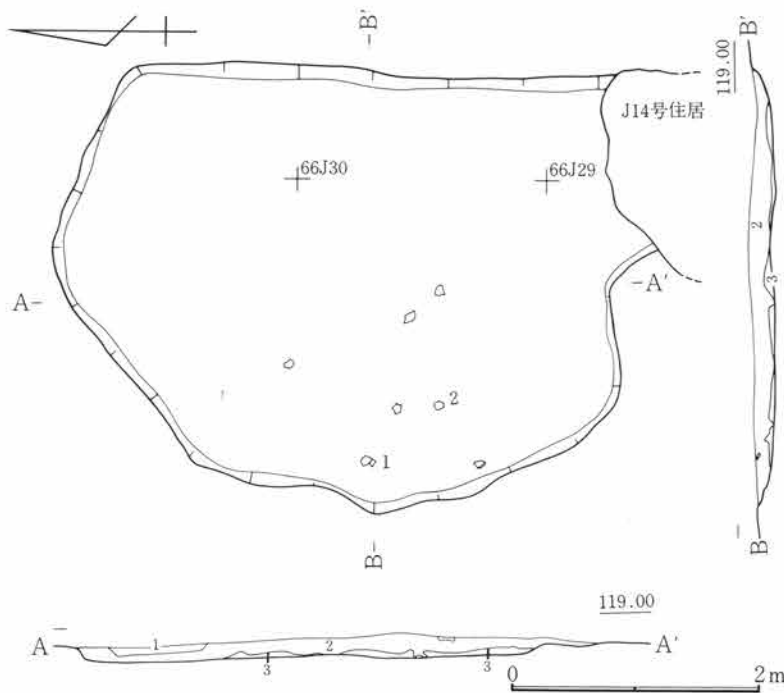


Fig.45 J17号住居跡

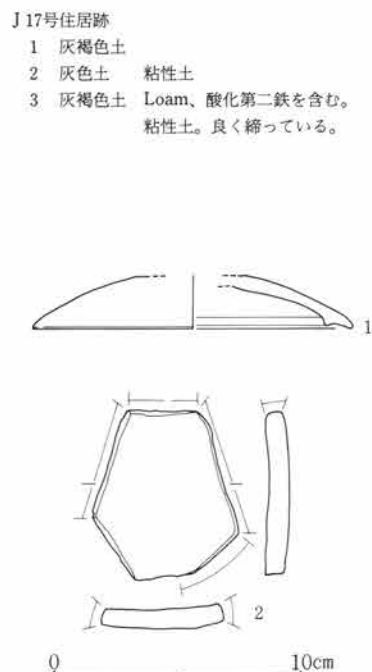


Fig.46 J17号住居跡出土遺物

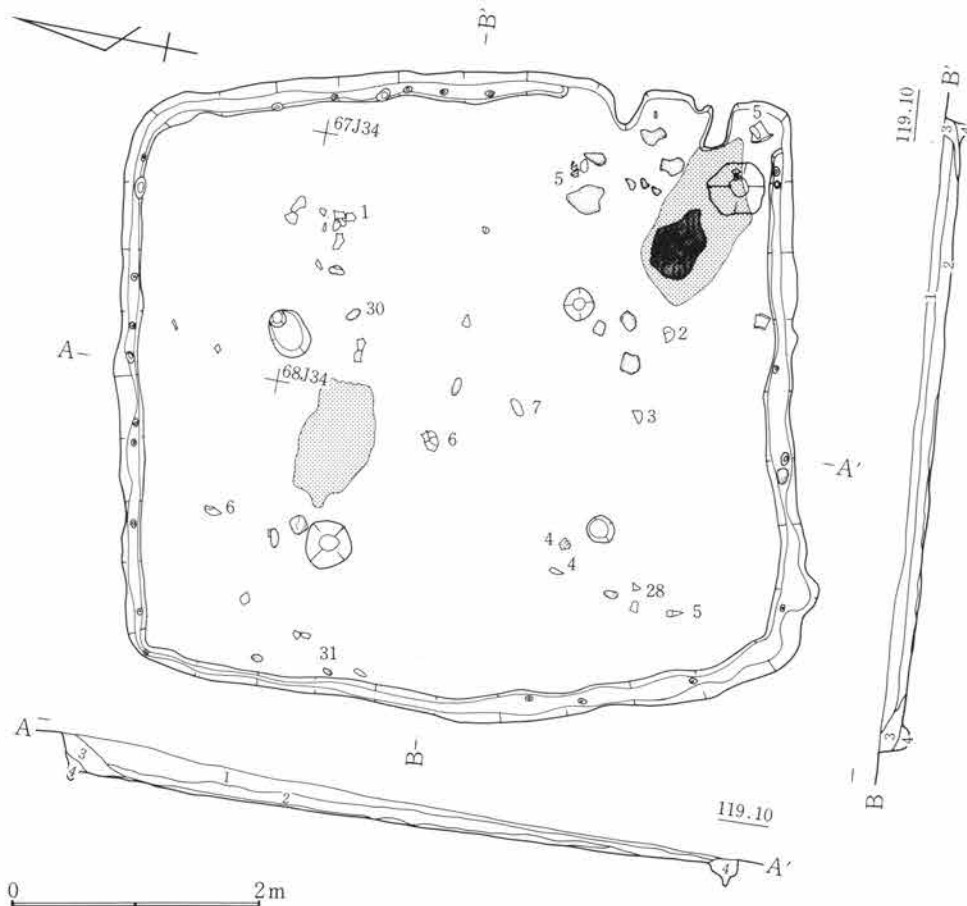
J 17号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残存量	計測量 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
46-1 17-1	須恵器 蓋	小片	12.8×—× (2.1)	西央部埋 土	天井部から体部へ緩く弧を描く。端部丸く細り、かえり断面丸まる。	①良好 ②灰 ③や や密、黒色粒混る
46-2 17-2	須恵器 転用砥石		6.8×5.8×0.8 43.9g	西央部埋 土	多側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒混る

J18号住居跡 (Fig. 47~50・PL. 17~19)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.05 × 5.45	N— 87° —E	東壁ほぼ南寄り	—————

J区西部に位置し、66~69 J 31~34の範囲にある。平面形は方形を呈するが南西部の壁線は丸く歪む。壁は高さ18cmを測り、ほぼ直立する。床面はほぼ平坦で、中央部及び竈手前が良く踏み固められている。各壁下には幅10~15cm・深さ約5cmの溝が巡り、溝中には径10cm前後の小穴が穿たれている。柱穴と考えられる穴が4箇所を検出されP₁は40×30cmの楕円形掘り形に径10cmの柱痕が残る。深さ21cmを測る。P₂は径37cm・深さ25cm、P₃は径23cm・深さ22cm、P₄は径25cm・深さ20cmを測る。また各柱間はP₁・P₂は1.83m、P₂・P₃は2.01m、P₃・P₄は1.76m、P₁・P₄は2.42mである。竈は東壁の南に偏って付設され、燃烧部は床面内に設けられる。袖は基盤土を掘り残した形で比較的短い。煙道部は検出されなかつた。袖部長さ約38cm・内法約50cm、燃烧部奥行き40cmを測る。竈右手前の床面に、焼土と灰の堆積が認められ、使用時の掻き出しと思



J18号住居跡

- 1 暗褐色土 黒色土粒・酸化鉄粒・Loam 粘土粒を若干含む。粘性土。
- 2 黒灰色土 白色粘土を含む。粘性が強い。
- 3 黒灰色土 粘性土。
- 4 黒灰色土 Loam 粘土塊を含む。粘性が強い。

Fig.47 J18号住居跡

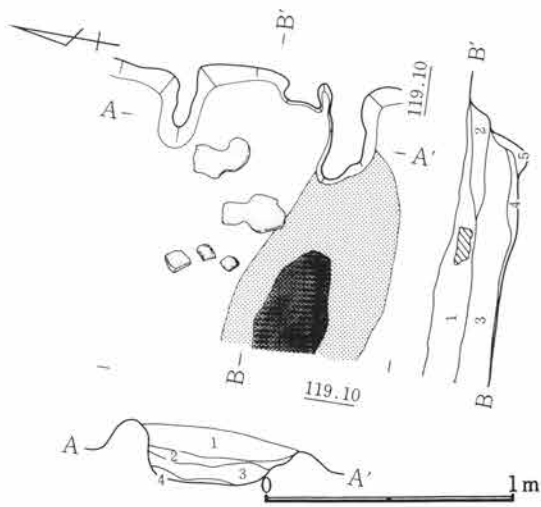


Fig.48 J18号住居跡竈

われる。また、床面北西寄りにみられる焼土の分布は、床面よりやや高い位置にあり、廃絶後の投棄によるものと考えられる。出土遺物は住居内に散在してしているが、鉄鏃・責金具などのほか角閃石安山岩の砥石が多量に見られる。

J18号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む。砂質土。
- 2 赤色土 崩落焼土。黄色粘土粒塊を含む。
- 3 赤灰色土 灰・焼土粒を含む。
- 4 灰層
- 5 灰層 焼土粒・黄色粘土粒を含む。

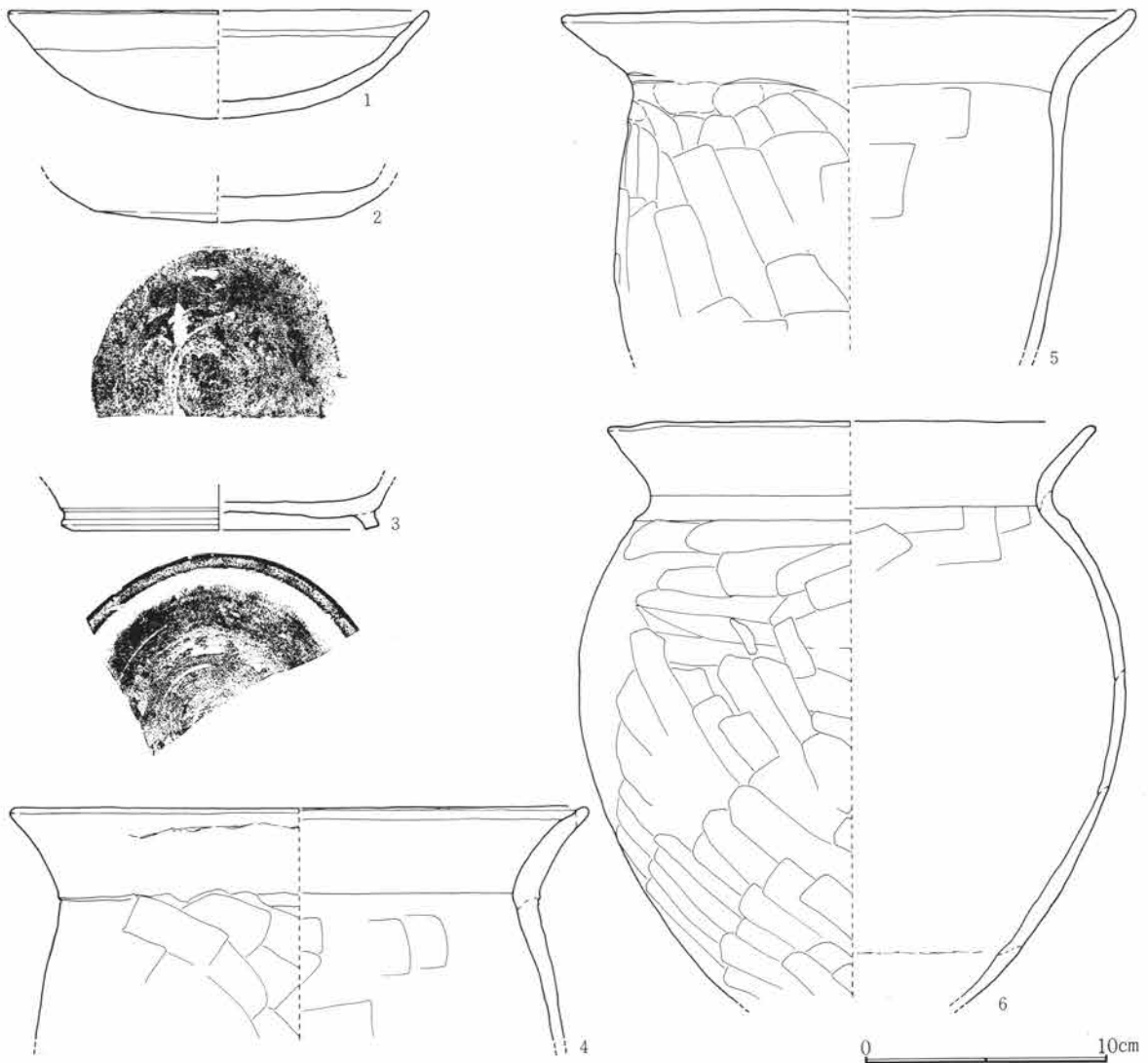


Fig.49 J18号住居跡出土遺物(1)



Fig.50 J18号住居跡出土遺物(2)

第2章 J区の遺構と遺物

J18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器	種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
49-1 18-1	土 師 杯	器	1/5	17.2×-×4.4	東中央部床 面	底部丸く変化なく口縁部に至る。口縁部中で僅かにくびれる。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
49-2 18-2	須 恵 盤	器	底部1/5	-×10.2×(1.9)	南中央部床 面	底部不安定。轆轤成形。回転篋切り後回転篋削り、内面撫で。	①良好 ②灰白 ③大粒砂多く混る
49-3 18-3	須 恵 椀	器	底部1/5	-×13.0×(1.8)	南中央部床 面	付高台、断面矩形を呈す。轆轤成形。回転篋切り後回転篋削り。内面撫で。	①良好 ②灰 ③密
49-4 18-4	土 師 甕	器	口縁部 1/4	23.8×-×(9.4)	西央・南 中央部床面	肩部張りなく、口縁部外反気味に開く。口縁部横撫で。肩部斜篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
49-5 18-5	土 師 甕	器	上半部 1/5	23.5×-× (13.8)	南東・南 西部散在	胴部張りなく長胴型を呈す。口縁部外反して大きく開き、上半部内湾する。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗砂混る
49-6 18-6	土 師 甕	器	1/5 底 部欠損	20×-×(23.5) 胴部径22.4	各所床面 散在	胴部丸く強く張り、口縁部はくの字状に外傾する。最大径は胴部中位やや上。口縁部横撫で。肩部横・下位斜篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗砂混る
50-7 18-7	石 製 品 砥 石			5.4×5×2.7 54.5g	掘形埋土	多面使用。各面に弱い刃痕あり。	角閃石安山岩
50-8 18-8	石 製 品 砥 石			6.9×4.8×4.5 86.3g	掘形埋土	1面使用。未使用面に刃痕あり。	角閃石安山岩
50-9 18-9	石 製 品 砥 石			6.2×4.4×3 59.6g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-10 18-10	石 製 品 砥 石			4×3.3×3.8 26.4g	掘形埋土	多面使用。一部に刃痕あり。	角閃石安山岩
50-11 18-11	石 製 品 砥 石			5.5×4.9×4.5 85.3g	掘形埋土	円蓋形の下端周囲を打ち欠きくびれをもたせ、下端面を砥石として使用。	角閃石安山岩
50-12 18-12	石 製 品 砥 石			5.8×4.5×2.7 50.5g	掘形埋土	2面使用。刃痕あり。	角閃石安山岩
50-13 18-13	石 製 品 砥 石			5.4×4.7×2.2 48.0g	掘形埋土	4面使用。刃痕顕しい。	角閃石安山岩
50-14 18-14	石 製 品 砥 石			5.6×3.1×3.2 25.5g	掘形埋土	1面使用。	角閃石安山岩
50-15 18-15	石 製 品 砥 石			5.5×3×2.6 21.0g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-16 18-16	石 製 品 砥 石			4×4×3.7 30.7g	掘形埋土	多面使用。刃痕あり。	角閃石安山岩
50-17 18-17	石 製 品 砥 石			4×4.3×2.5 27.4g	掘形埋土	使用痕は希薄。	角閃石安山岩
50-18 18-18	石 製 品 砥 石			4×3.5×3.4 32.0g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-19 18-19	石 製 品 砥 石			4.3×3.7×2.3 19.4g	掘形埋土	2面使用。	角閃石安山岩
50-20 18-20	石 製 品 砥 石			4.6×3.5×1.7 19.3g	掘形埋土	多面使用。刃痕あり。	角閃石安山岩
50-21 18-21	石 製 品 砥 石			3.7×2.9×3 24.7g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-22 18-22	石 製 品 砥 石			3.3×3×2.7 12.2g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-23 18-23	石 製 品 砥 石			2.8×3.7×3.2 12.8g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-24 18-24	石 製 品 砥 石			3.7×3.5×1.7 7.4g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-25 18-25	石 製 品 砥 石			4.4×6.2×3 48.7g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-26 18-26	石 製 品 砥 石			3.5×3.5×3 24.5g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-27 18-27	石 製 品 砥 石			3.4×3.2×2.8 17.1g	掘形埋土	多面使用。	角閃石安山岩
50-28 18-28	須 恵 転用砥石	器	全 完	6.8×6.3×0.9 54.5g	南西部埋 土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密、黒色粒混る
50-29 19-29	石		全 完	14.3×7.4×4.7 760g	壁 溝 内		石英閃緑岩

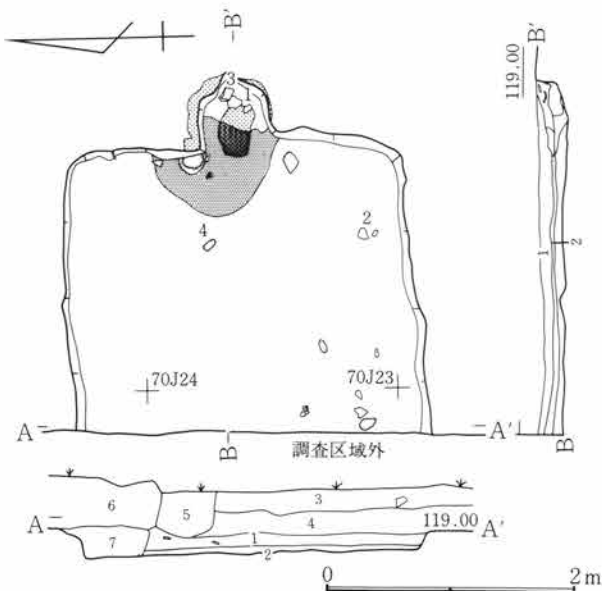
J 18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
50-30 19-30	石	全 完	12.6×6.8×4.4 415 g	中央部床 面		輝石安山岩(細粒)
50-31 19-31	石		8.3×3.8×2.3 110 g	西央部床 面		輝石安山岩(細粒)
50-32 19-32	鉄 製 品 鉄	全 片	105×0.6×0.4	埋 土	長頸式。中位を欠く。刃部はレンズ状。基部は四角形。全面錆化。X線透視復元。	
50-33 19-33	銅 製 品 力 装 具	全 片	4.6×2.1×0.6	埋 土	倒卵形。貴金具か。棟部2組4枚の爪形削装。	
50-34 19-34	鉄 製 品	全 (片)	6.7×0.65×0.25	北央部埋 土	用途不詳。扁平角棒状。全面錆化。X線透視復元。	

J 19号住居跡 (Fig. 51~53・PL. 19)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形か	— × 2.75	N— 91.5' — E	東壁ほぼ中央	— — — — —

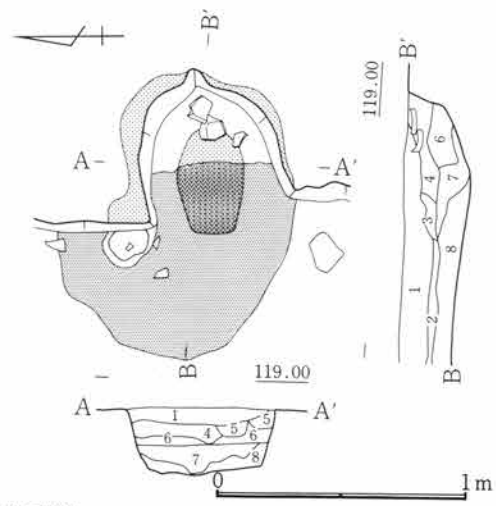
J 区の西端部に位置し、68~70 J 23~24の範囲にある。西壁は調査区域外に入り未検出である。平面形は方形を呈すると考えられる。壁は高さ20cmで直立し、床面は硬い。竈は東壁のわずかに北に寄って付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。左袖部には風化が著しいが凝灰岩の加工材が埋設されている。燃烧部幅55 cm・奥行き約60cmを測る。及び手前に焼土・灰が堆積している。出土遺物は少量である。



J 19号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物粒・黄褐色粘性塊を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒をわずかに含む。土器片を多く含む。
- 3 暗褐色土 耕作土。
- 4 暗褐色土 攪乱。
- 5 暗褐色土 攪乱。
- 6 暗褐色土 よくしまった砂層。
- 7 暗褐色土 B軽石を含む。締った砂層。

Fig.51 J19号住居跡



J 19号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物粒・黄褐色粘性塊を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒をわずかに含む。土器片を多く含む。
- 3 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物粒をわずかに含む。粘性土。
- 4 黒褐色土 焼土粒・黒色炭化塊・土器片を含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色粘性硬質土塊が主体。
- 6 黒褐色土 灰・炭化塊・焼土粒を含む。
- 7 暗褐色土 焼土粒を含む。締りなし。
- 8 暗褐色土 焼土粒を含む。締りあり。

Fig.52 J19号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

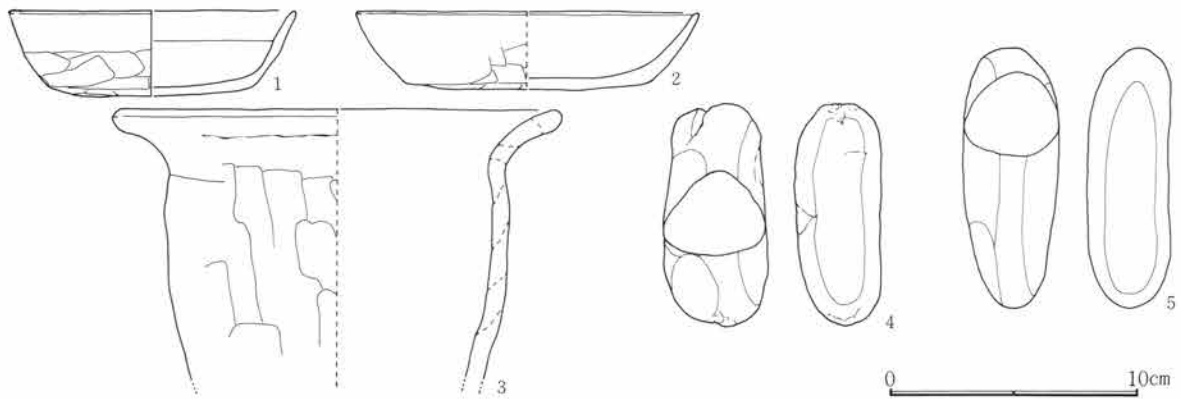


Fig.53 J19号住居跡出土遺物

J 19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
53-1 19-1	土 師 器 杯	1/2	11.3×8.1×3.4	竈 内	やや不安定な平底。体部中で僅かに脹らみ外反気味に外傾。口縁部横撫で。体部横・底部一定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
53-2 19-2	土 師 器 杯	1/4	13.8×9.8×3.1	南東部掘 形	平底気味の底部から体部は内湾気味に開く。体・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
53-3 19-3	土 師 器 壺 小片	口縁部	18.0×-×(9.8)	竈 内	胴部張りなく、口縁部は強く外反して開く。口縁部弱い横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗
53-4 19-4	石	全 完	長8.8×幅4.2× 厚3.3 200g	東央部掘 形		輝石安山岩(粗粒)
53-5 19-5	石	全 完	長10.3×幅3.9× 厚3.3 205g	南央部掘 形		砂岩

J 30号住居跡 (Fig. 54、55・PL. 20)

J区北東部に位置し、48J 39～40の範囲にある。13号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産であるが確認に手間取り西部のほとんどは検出できず全体の形状は不明である。壁の高さ45cmを測り、傾斜している。床面はよく踏み固められている。竈は東壁に付設され楕円形に掘り込まれ、両袖部には東壁線に入頭

大の川原石を埋設している。煙道部はなく、燃烧部及び手前床面に灰の堆積が認められる。袖石間内法50cm・燃烧部奥行き65cmを測る。遺物は少なく、形を知りうるものは小型品のみである。

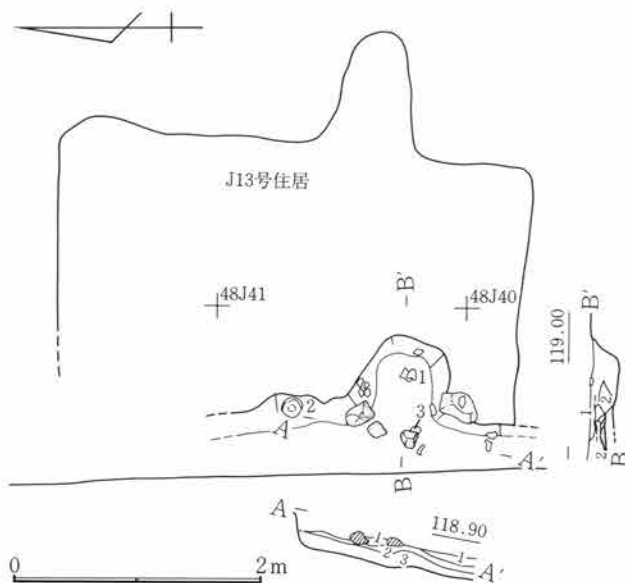


Fig.54 J30号住居跡

J 30号住居跡

- 1 褐色土 粘性土。
- 2 灰層
- 3 褐色土 焼土粒・灰を多く含む。

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

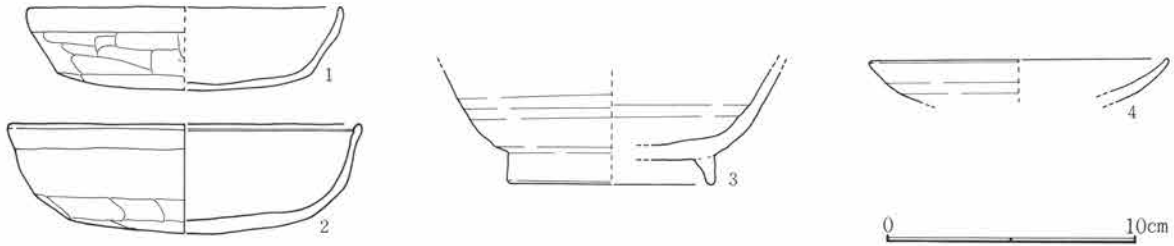


Fig.55 J30号住居跡出土遺物

J 30号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
55-1 20-1	土師器 杯	1/2	12.8×10.1×3.3	Pit 内	平底気味の底部。体部外反した後口縁部内湾する。口唇部緩く内屈。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
55-2 20-2	土師器 杯	完	14.0×9.6×4.4	Pit 内	不安定な底部。腰部張りなく、体部僅かに外反気味。口唇部丸まり内屈。口縁・体部横撫で。腰部横・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
55-3 20-3	須恵器 椀	底部1/4	—×8.3×(4.7)	Pit 内	腰部張る。付高台、端部丸くやや内湾気味に立つ。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密、白色細粒混る
55-4 20-4	灰釉陶器 皿	1/2 底部欠損	12.0×—×(1.7)	埋土	器肉やや厚い。体部は僅かに内湾気味。口唇部丸い。体部内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密

J 31号住居跡 (Fig. 56~58・PL. 20、21)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.35 × 3.60	N-84.5' - E	東壁ほぼ中央	— — — — —

J区東部に位置し、44~46 J 26・27の範囲にある。10号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。壁は高さ35cmを測り、傾斜している。竈及び南東隅を除く壁下には、幅12~25cm・深さ10cmの溝が巡り、西

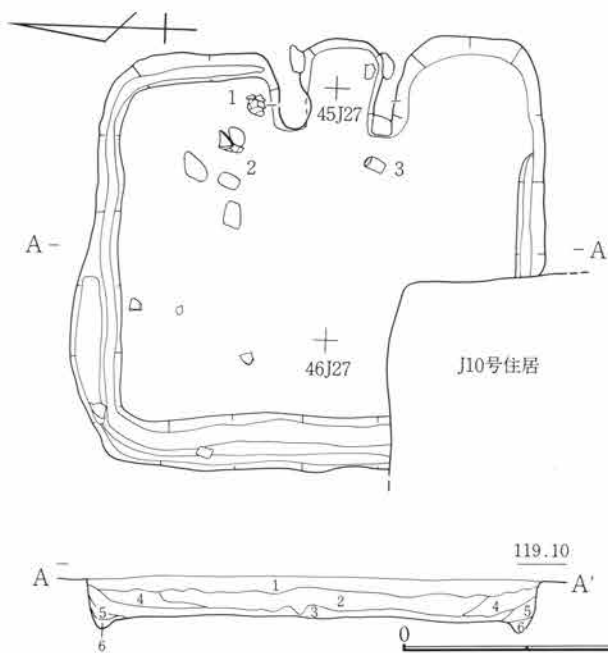


Fig.56 J31号住居跡

壁下の溝は幅広く壁の立ち上がりよりやや内側にある。床面は平坦で、よく踏み固められてる。竈は東壁のほぼ中央部に付設され、袖部が住居内に張り出す形式であるが煙道部はない。袖部は凝灰岩の加工材を5~7個並べ芯とし、粘土を被覆して構築される。竈内壁はよく熱を受けているが、焼土や灰の堆積は少ない。袖部長さ約66cm・内法57cm、燃烧部奥行き約74cmを測る。検出遺物は少ないが完形の鞆羽口がある。

J 31号住居跡

- 1 茶褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 2 暗褐色土 大粒C軽石を少量含む。締りなし。
- 3 暗褐色土 炭化粒を含む。砂質土。
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 5 暗褐色土 砂質土。
- 6 暗褐色土 砂質土。灰色味あり。

第2章 J区の遺構と遺物

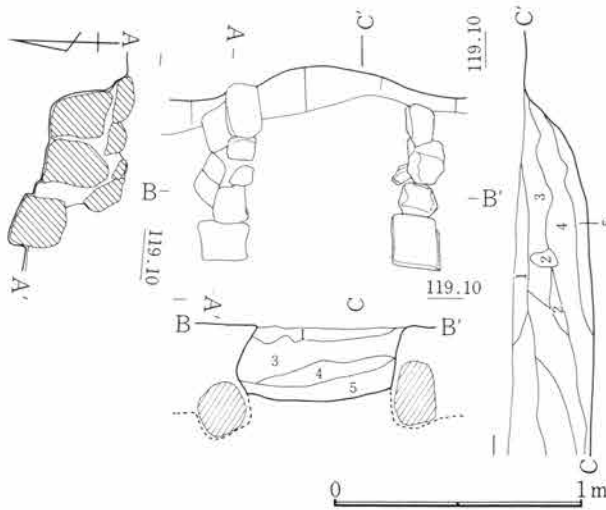


Fig.57 J31号住居跡竈

J31号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・黄褐色粘土粒を含む。
- 2 黄褐色土 粘土塊層
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒を含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色粘土塊・炭化粒・焼土粒を含む。縮りなし。
- 5 赤褐色土 灰・焼土粒含む。縮りなし。

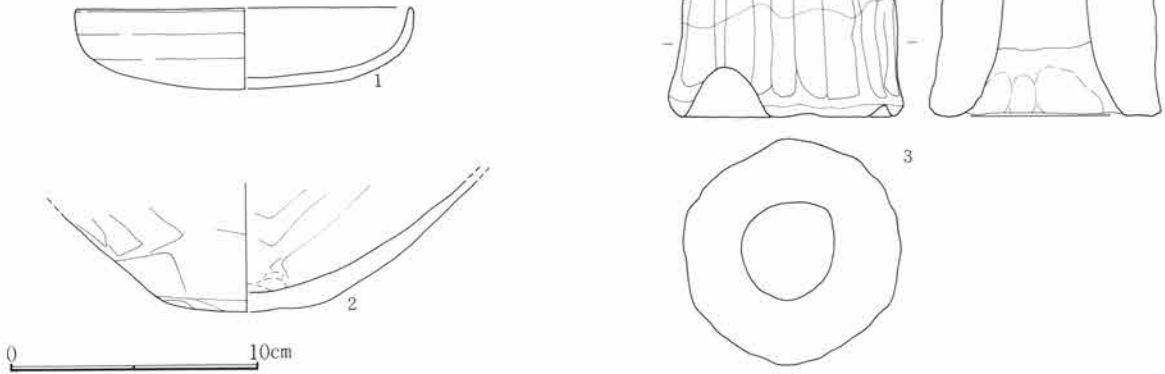


Fig.58 J31号住居跡出土遺物

J31号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
58-1 21-1	土 師 器 杯	完	13.6×—×3.2	竈 内	扁平な底部。腰部丸く体部は短かく直立する。口縁部・体部横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ③やや粗、砂混る	②鈍い赤橙
58-2 21-2	土 師 器 壺	底 部	—×6.8×(6.0)	北東部床 面	丸底気味。胴部・底部笕削りが施されるが不鮮明。	①良好 ③やや粗、細砂混る	②鈍い褐
58-3 21-3	土 製 品 縄 羽 口	先～基 完	13.8×6.2×9.3 孔径2.5×6.5	竈右袖床 面	先端部熔解物付着。基部縦方向の強い撫で成形。基部内面指頭痕。		

J32号住居跡 (Fig. 59～61・PL. 21)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	3.15 × 3.30	N— 90° —E	東壁やや南寄り	—————

J区北東部に位置し、46・47J41・42の範囲にある。13号・33号・39号・42号の各住居跡と重複している。新旧関係は13号より旧く、他より新しい時期の所産である。平面形は方形を呈するが南西隅は13号住居跡によって消失している。壁は高さ20cmで傾斜している。床面は軟弱である。竈は東壁のやや南に付設され、楕

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

円形に掘り込まれる。右袖部、東壁線上には風化した凝灰岩が埋設されている。煙道部は検出されていない。燃焼部幅約60cm・奥行き約60cmを測る。燃焼部より流失している灰層は南東隅床面まで及んでいる。遺物は少なく竈周辺に散在していた。

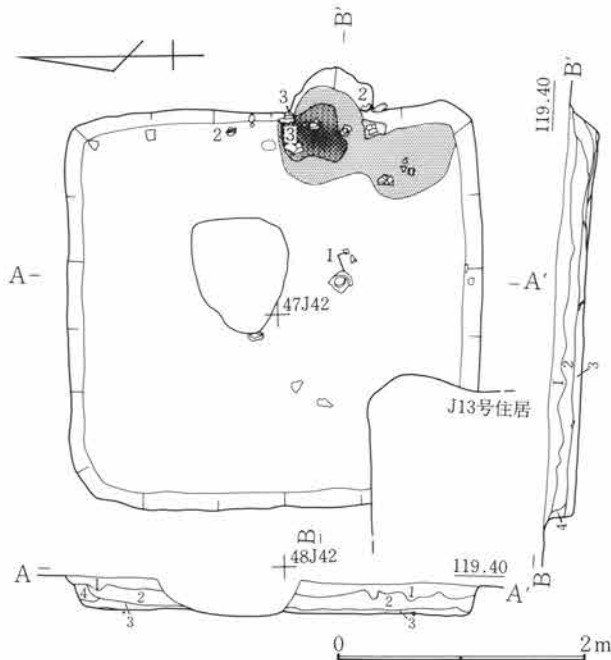
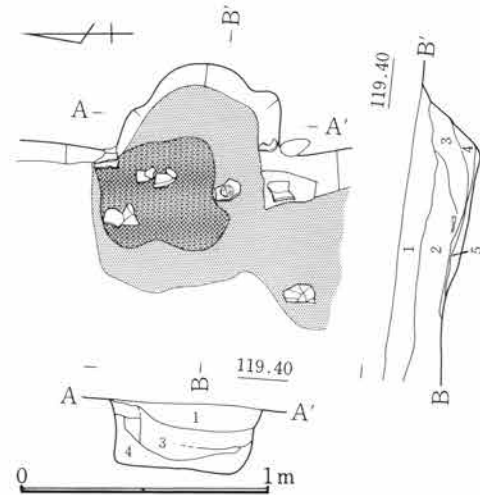


Fig.59 J32号住居跡



J32号住居跡

- 1 暗褐色土 大粒のC軽石を多く含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を多く含む。
- 3 暗褐色土 C軽石をあまり含まない。
- 4 暗褐色土 締りなし。

J32号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む。やや粘性あり。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。堅く締る。
- 3 崩落焼土
- 4 灰層
- 5 焼土

Fig.60 J32号住居跡竈

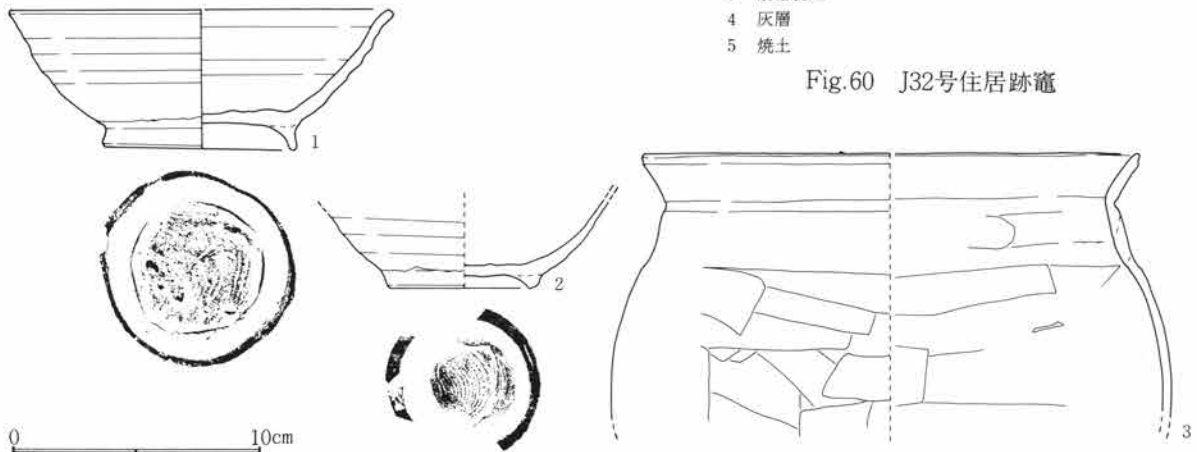


Fig.61 J32号住居跡出土遺物

J 32号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 胎土 ②色調 その他
61-1 21-1	須恵器 椀	体部 欠損	15×7.5×5.5	中央部床 面	体部僅かに脹らみ、口縁部は緩く外反す。付高台、端部丸く直立する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、やや軟 ②灰黄 ③やや密
61-2 21-2	須恵器 椀	底 部	—×6.1×(3.2)	竈平前右 袖床面	付高台、低く幅広。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、やや軟 ②鈍い褐 ③やや密
61-3 21-3	土師器 甕	口～肩 部	19.9×—×(1.4)	竈手前左 袖床面	胴部やや張り、肩部に僅かな段をなす。口縁部直線的に内傾後強く屈し外傾する。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密

J33号住居跡 (Fig. 62~64・PL. 22)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.65 × 3.60	N— 92° —E	東壁やや南寄り	—— ————

J区北東部に位置し、45~47J41・42の範囲にある。13号・33号・39号・42号住居跡と重複しているが、新旧関係は13号・33号・39号より旧く、42号住居跡より新しい時期の所産である。壁は高さ35cmを測り、ほぼ直立している。床面は中央部及び竈手前が踏み固められている。竈は東壁南よりに付設され、袖部・煙道部は確認されていない。燃烧部幅60cm・奥行き54cmを測る。竈内壁はよく熱を受けているが、燃烧部床面に焼土や灰の堆積は少ない。遺物は少なくいずれも小片である。なお、床面中央には後出する32号住居跡の、また東壁には先行する42号住居跡の竈の痕跡をそれぞれとどめている。

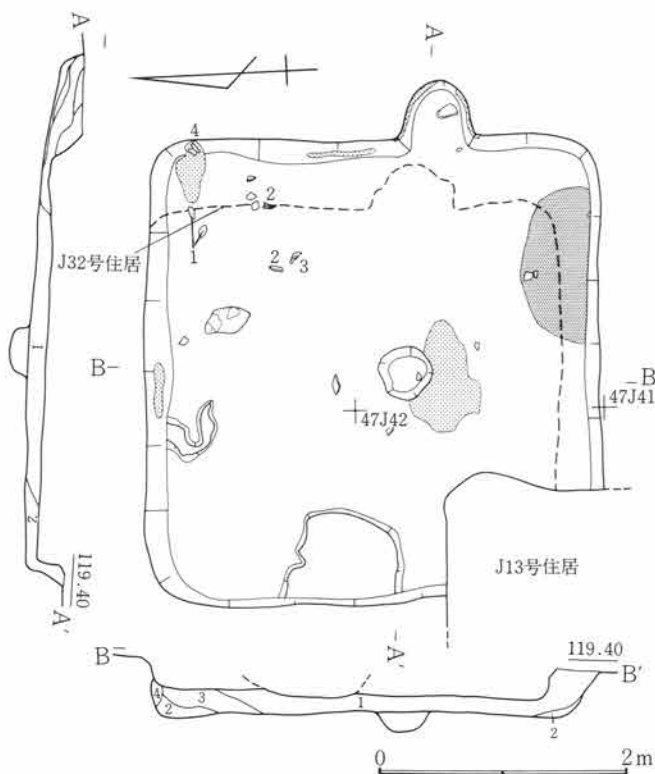
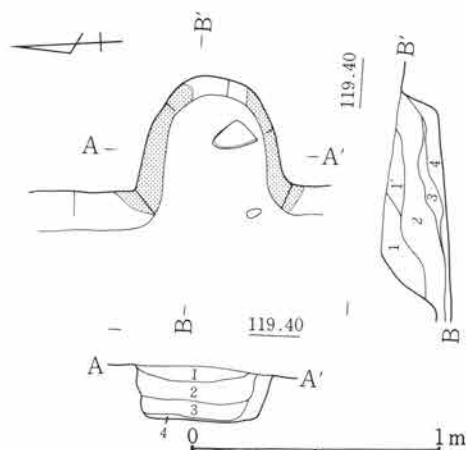


Fig.62 J33号住居跡



J33号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化物粒・焼土粒を含む。
 - 2 暗褐色土 ほとんどC軽石を含まない。弱粘性土。
 - 3 暗褐色土 弱粘性土。
 - 4 赤黒色土 赤色塊・黒色炭化物塊・焼土塊を含む。
- J33号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石を多量に、炭化物粒・焼土粒を少量含む。
 - 1' 暗褐色土 微小粒のC軽石を含む。砂質土。
 - 2 暗褐色土 弱粘性の砂質土。
 - 3 赤黒色土 崩落焼土・黒灰層。
 - 4 赤黒色土 赤色塊・大粒の炭化物を含む。

Fig.63 J33号住居跡竈

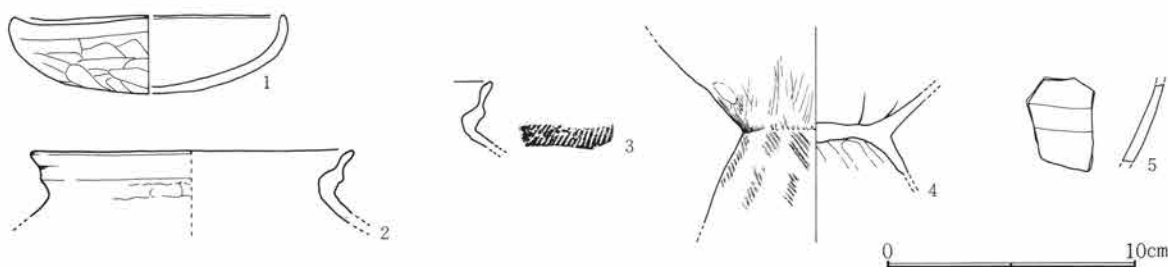


Fig.64 J33号住居跡出土遺物

J 33号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
64-1 22-1	土 師 器 杯	1/2	10.8×-×3.1	北東部床 面	丸い底部から口縁部は内湾して立つ。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
64-2 22-2	土 師 器 甕	口縁部 小片	12.5×-×2.9	埋 土	口縁部下位は肥厚し外反する。上半部は屈し外反して開くS字状口縁を呈す。肩部斜刷毛目。	①良好 ②灰褐 ③やや密
64-3 22-3	土 師 器 甕	口縁部 小片	-×-×2.6	埋 土	口縁部下位は肥厚し外屈、上半は外反気味に開くS字状口縁を呈す。肩部斜刷毛目。	①良好 ②灰褐 ③やや密
64-4 22-4	土 師 器 甕	脚部付 近	-×-×(7.1) 脚基径6	埋 土	胴部下半から脚部にかけての字状に屈する。斜刷毛目。	①良好 ②淡橙 ③やや粗、砂多く混る
64-5 22-5	青 磁 -	体 (片)	-	埋 土		①還元、良好 ②オリープ黄 ③精土

J 34号住居跡 (Fig. 65~67・PL. 23、24)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × 3.95	N— 0° —E	北壁ほぼ東寄り	— — — — —

J区東部に位置し、45・46J22~24の範囲にある。4号溝跡埋没後に設けられ、北壁寄りには後出する10号住居跡と重複している。南東部及び西壁寄りは、攪乱等により知りえない。壁は高さ35cmを測り、残存部ではほぼ直立する。床面は、溝重複部分が軟弱であるが、竈手前はよく踏み固められている。竈は袖部がなく明確な煙道部をもたない。竈内壁の状況や、堆積する焼土・灰の量から、使用が短期間であったことを思わせる。遺物は床面に広く散在し、とくに東半部中央に集中する個所がある。須恵器長頸瓶などのほか鉄鏝が検出されている。

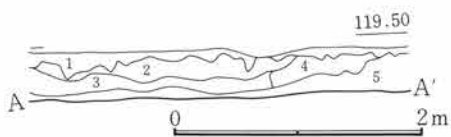
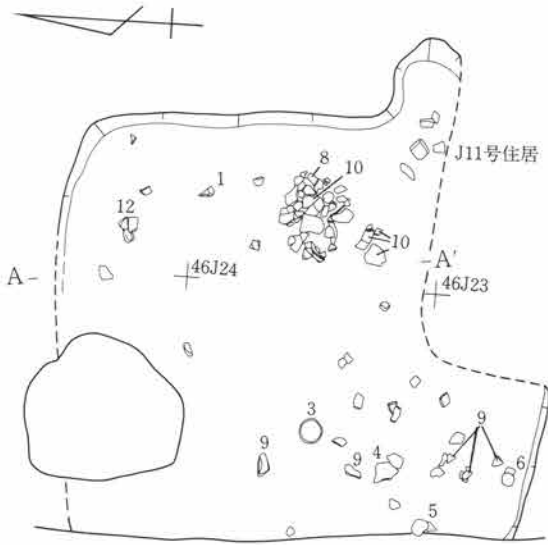
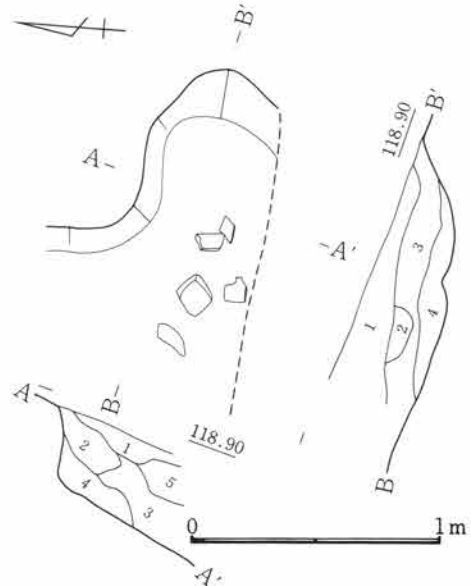


Fig.65 J34号住居跡

J 34号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む。締りなし。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土
- 4 褐色土 黄褐色土粒を多く含む。粘性土。
- 5 褐色土 締りあり。



J 34号住居跡竈

- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒を多く含む。
- 2 黄褐色土 黄褐色土粒層。粘性土。
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色土粒を多く含む。
- 5 暗褐色土 白色細粒を含む。締りあり。

Fig.66 J34号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

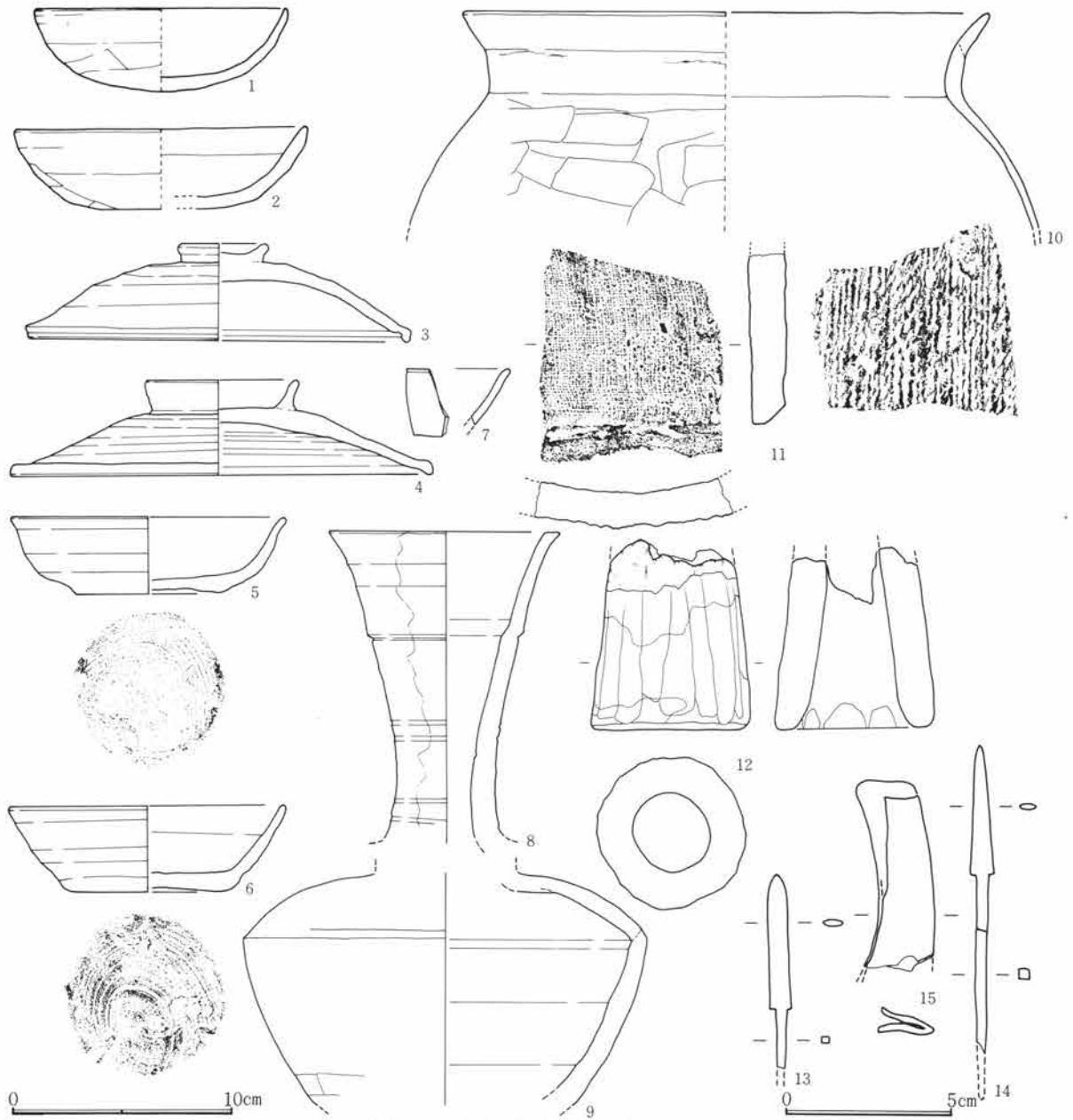


Fig.67 J34号住居跡出土遺物

J 34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
67-1 23-1	土師器 杯	1/2	11.5×-×3.7	埋土	底部丸く半円を呈す。口縁部横撫で。体・底部篋削り。内面に黒色付着物あり。	①良好 ③やや密	②鈍い橙
67-2 23-2	土師器 杯	1/2	12.2×5.6×3.6	埋土	底部やや不安定。器肉厚目。口縁部横撫で。体部横篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好 ③やや密	②鈍い橙
67-3 23-3	須恵器 蓋	完	17×-×4.3 摘径4.1	南央部埋土	天井部丸く張る。口縁部強く折れやや内傾する。環状摘、端部断面丸まる。天井部回転篋削り。	①良好 ③やや密	②灰
67-4 23-4	須恵器 蓋	1/2	19.1×-×4.2 摘径7.0	南東部埋土	天井部平坦をなし体部は直線的に開く。口縁部短かく丸まり僅かに折れる。高台状の大きな摘。回転糸切り後篋削り。	①良好 ③やや粗、砂混る	②灰白
67-5 23-5	須恵器 杯	口縁部 1/2欠損	12.4×6.5×3.4	南東部床面	腰部くびれて体部丸く張り、口縁部緩く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ③粗、小石多く混る	②白灰

J 34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
67-6 23-6	須恵器 杯	体部 欠損	12.5×6.8×4.9	南東部床 面	底部厚く、体部はやや内湾気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
67-7 23-7	緑釉陶器	口縁部 小片	—	埋 土	内外面施釉。釉調はくすんだ黄緑を呈し、僅かに銀化現象がみられる。	①良好 ②白に近く 明るい灰黄 ③密
67-8 24-8	須恵器 長頸壺	口頸部	10.5×—× (13.7) 口径	北央部埋 土	基部に不鮮明な3～4条の凹線。中位に2条の凹線が巡り、上半部は段をなし外反気味に開く。口唇上端面は水平。	①良好 ②暗オリーブ 褐 ③密
67-9 24-9	須恵器 長頸壺	胴部	—×—×(10.3)	埋 土	肩部で強く屈する。肩天井部はやや脹らみをもつ。胴部下半は回転篋削り。肩部に鉄系錆附着。	①良好 ②青灰 ③ やや粗、黒色細粒混
67-10 24-10	土師器 甕	口縁部 ～肩部	23.6×—×(9.7)	北央部埋 土	胴部丸く張る。口縁部直立後上半は外傾する。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗、細砂混る
67-11 24-11	瓦 平瓦	小片		埋 土	凹面布目。凸面縄目。側面篋調整。	①良好 ②オリーブ 灰 ③やや粗黒色粒
67-12 24-12	土製品 鞠羽口	先端部 欠損	8.5×7.2 孔径5.2×(2.5)	北西部床 面	先端部溶解。外面縦方向指頭痕状調整痕。先端部欠損部被熱。	
67-13 24-13	鉄製品 鎌	全 部	5.8×0.6×0.3	埋 土	長頸式。刀部レンズ状。基部四角形。全面錆化。X線透視復元。	
67-14 24-14	鉄製品 鎌	全 部	8.2×0.6×0.3	埋 土	長頸式。刀部レンズ状。基部四角形。基部大半欠損。全面錆化。X線透視復元。	
67-15 24-15	鉄製品	片	5.7×2.1×0.8	埋 土	板状品2折。用途不詳。全面錆化。X線透視復元。	

J 38号住居跡 (Fig. 68～70・PL. 24、25)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
方形か	— × 2.25	N—81.5°—E	東壁やや南寄り	楕円形 (130.0 × 163 × 17.5)

J区東部に位置し、47・48 J 43～45の範囲にある。39号・44号・86号・88号住居跡と重複しており、新旧関係は39号・44号より新しく、86号・88号住居跡より古い時期の所産である。西半部は86号・88号住居跡に

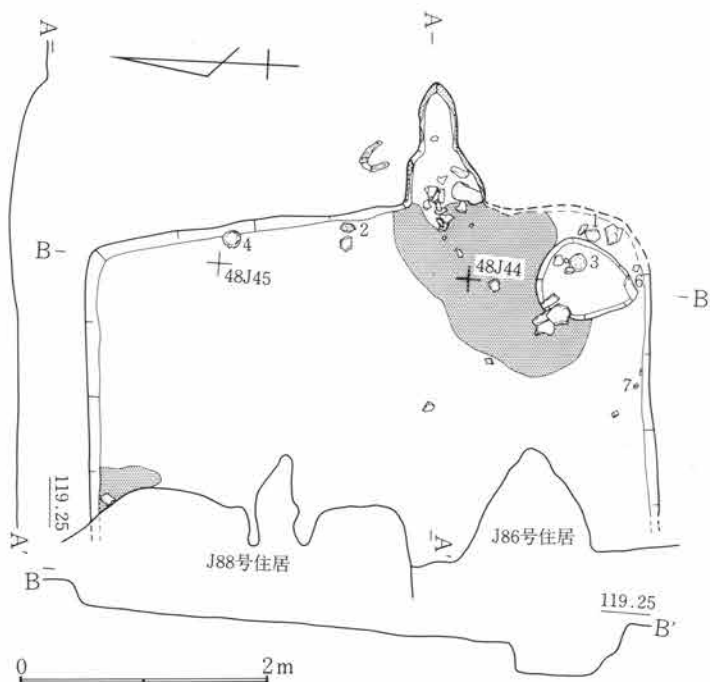


Fig.68 J38号住居跡

よつて消失している。壁は高さ30cmを測り、傾斜している。床面は平坦であるが、踏み締まりは軟弱である。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部の奥壁に連続して短い煙道部をもつ。燃烧部及び煙道部の内壁はよく熱を受けている。燃烧部幅70cm・奥行き50cm、煙道部長さ50cmを測る。燃烧部から流出する灰は竈手前から南東部床面にかけて広く見られた。貯蔵穴内への灰の流入はない。遺物は竈及び貯蔵穴周辺に集中するが、小片が多く形を知りうるものは少ない。なお、竈の北に隣接して踏み鋤と考えられる鉄製刃部が出土したが、遺存状況が不良で土中に形を止めるのみであった。

第2章 J区の遺構と遺物

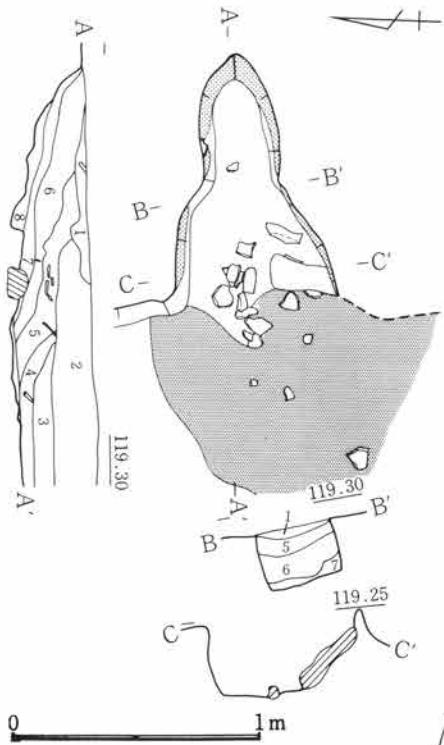


Fig.69 J38号住居跡竈

J38号住居跡竈

- 1 黄褐色土 焼土粒を若干含む。
- 2 暗褐色土 中粒のC軽石・炭化物・土器の細片を含む。
- 3 暗褐色土 小粒のC軽石・炭化物を含む。
- 4 暗褐色土 炭化物・焼土・土器を含む。細質粘性土。
- 5 赤灰黒色土 焼土・灰・土器を含む。粘性土。
- 6 赤褐色土 焼土塊を含む。崩落焼土。
- 7 黒褐色土 灰を含む。
- 8 暗褐色土 灰・焼土粒を含む。

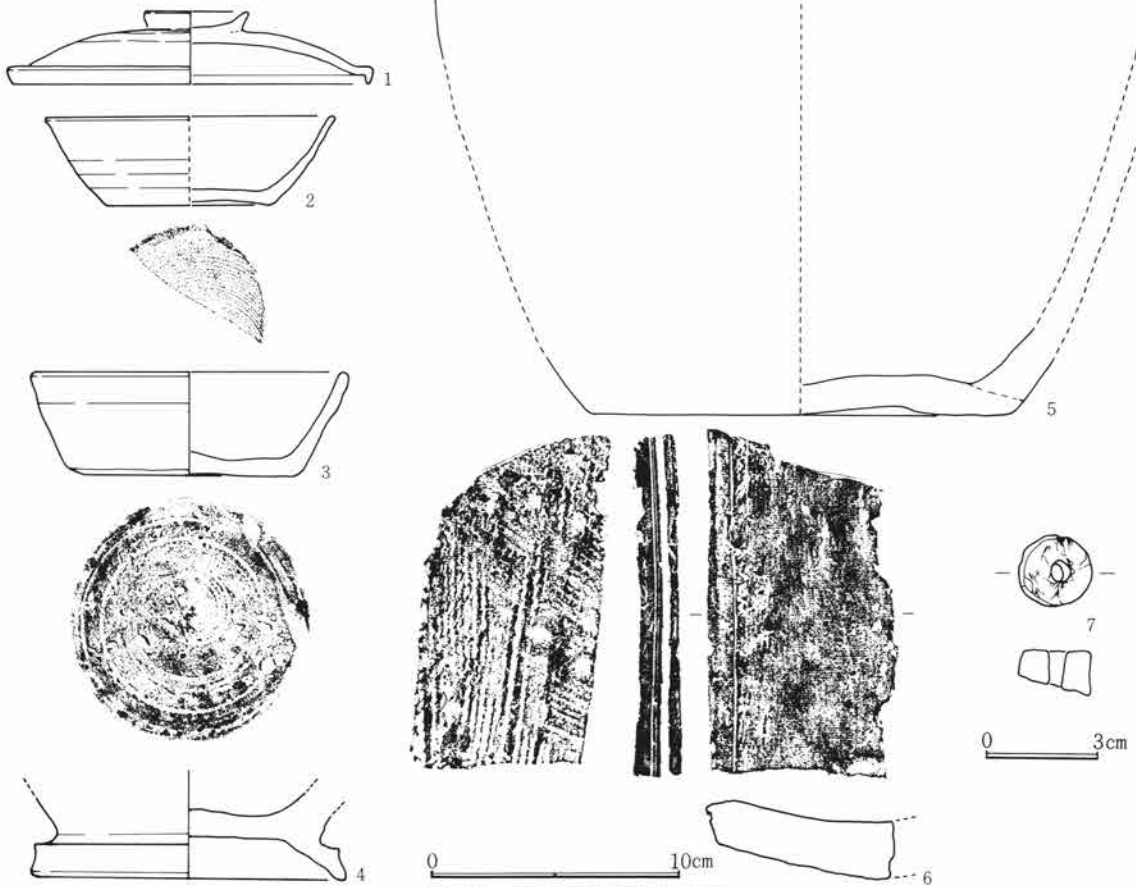


Fig.70 J38号住居跡出土遺物

J 38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
70-1 25-1	須恵器 蓋	1/2	14.2×—×2.9 摘径4.2	南東部床 面東壁寄	天井部やや脹らみ端部は水平になる。口縁部直下に折れる環状摘、断面略三角。天井部回転篋削り。内面磨耗痕あり。	①良好 ③密	②灰 ③やや粗、白色粒混る
70-2 25-2	須恵器 杯	口~底 2/3	11.6×6.6×3.5	東央部床 面東壁寄	体部直線的で大きく外傾。口唇部細く丸まり僅かに外反轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ③密	②青灰 ③密、黒色粒浮く
70-3 25-3	須恵器 杯	完	12.7×8.3×4.2	貯蔵穴内	全体に肥厚。底径大きく体部直線的。内面口縁部に煤状付着物。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ③やや密	②灰白 ③やや密
70-4 25-4	須恵器 壺	底 部	—×12.6×(3.5)	埋 土	高台鋭く段をなし、ハの字状に開く。底部弱い回転篋無で。	①良好 ③やや密	②灰 ③やや密、黒色粒浮く
70-5 25-5	須恵器 甕	頭~底 1/2	—×16.7×32.1	貯蔵穴内	底径大きく平向。寸胴を呈し肩部にやや丸味あり。頸部直線的に外傾する。胴上部外面に叩き、内面あて目。	①良好 ③細砂少量混土	②暗青灰
70-6 25-6	瓦 小片	瓦		貯蔵穴内	凹面布目を撫でにより消す。凸面縦方向の縄目痕。側面と凹面縁は篋調整。	①酸化気味、やや軟	②暗灰 ③密白色粒
70-7 25-7	石製模造品 臼	全 完	1.3×0.8孔径0.2	埋 土	両端面擦痕。		滑石

J 39号住居跡 (Fig. 71~74・PL. 25、26)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形か	— × 3.90	N— 85° —E	東壁やや南寄り	— — — — —

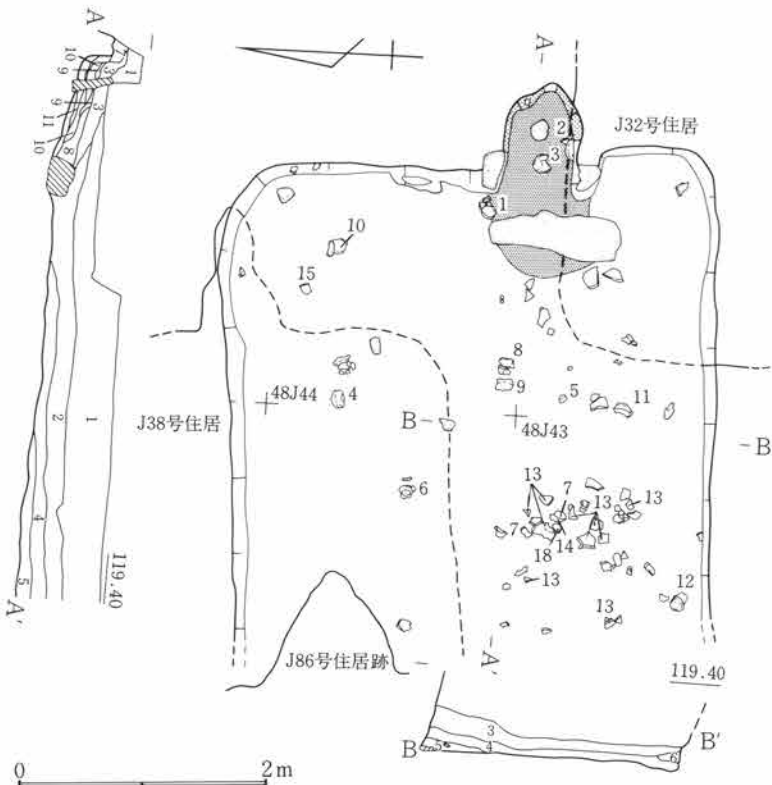


Fig.71 J39号住居跡

J区北東部に位置し、46~48J 42~44の範囲にある。32号・38号・42号・45号住居跡と重複し、新旧関係は32号・38号より旧く42号・45号住居跡より新しい時期の所産である。重複箇所はかろうじて確認できたが、西壁寄り是不明瞭である。平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。壁は良好な部分で、高さ50cmを測り傾斜している。床面は全体によく踏み固められている。竈は東壁のやや南に寄って付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖部には東壁線上に凝灰岩加工材が埋設され、焚口天井材に用いられたと考えられる長さ105cm、幅40cmの大型の同質材が検出されており、これが手前に転落した状態であった。明確な煙道部はない。燃焼部の奥

第2章 J区の遺構と遺物

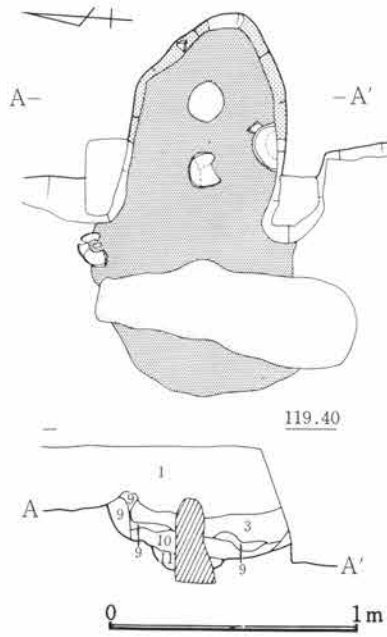


Fig.72 J39号住居跡竈

寄り中央に支脚が残っている。竈内壁はよく熱を受けており、焼部底面より焚口部にかけて灰が堆積している。袖材間内法66cm・燃焼部奥行き約90cmを測る。遺物は床面全体に散在しており、須恵器長頸壺・短頸壺などのほか、置竈と思われる小片・滑石製品・砥石が検出されている。

J39号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 細粒のC軽石・白色粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 5 褐色土 粘土土。
- 6 黒褐色土 C軽石を少量含む。
- 7 焼土塊
- 8 褐色土 締りあり。
- 9 焼土
- 10 灰層
- 11 崩落焼土

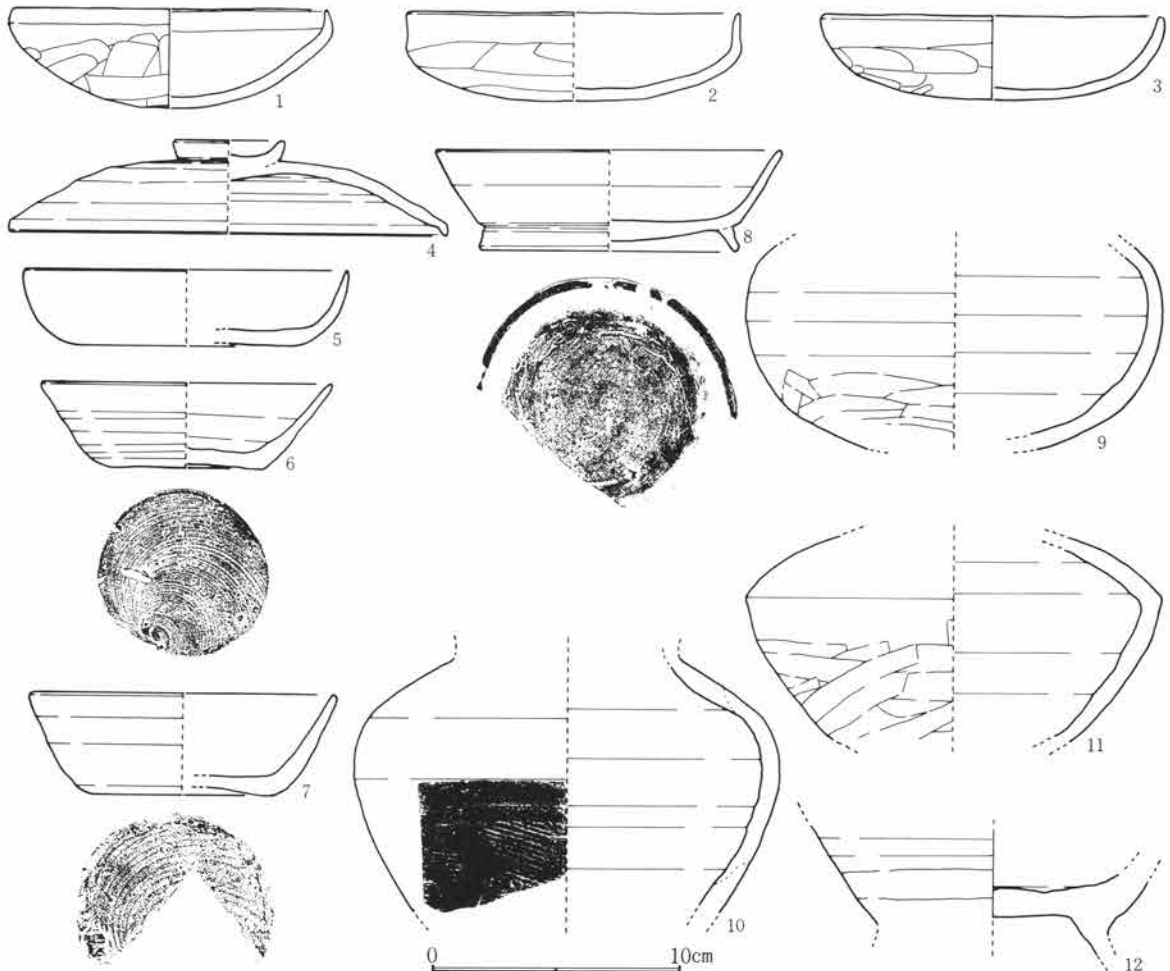


Fig.73 J39号住居跡出土遺物(1)

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

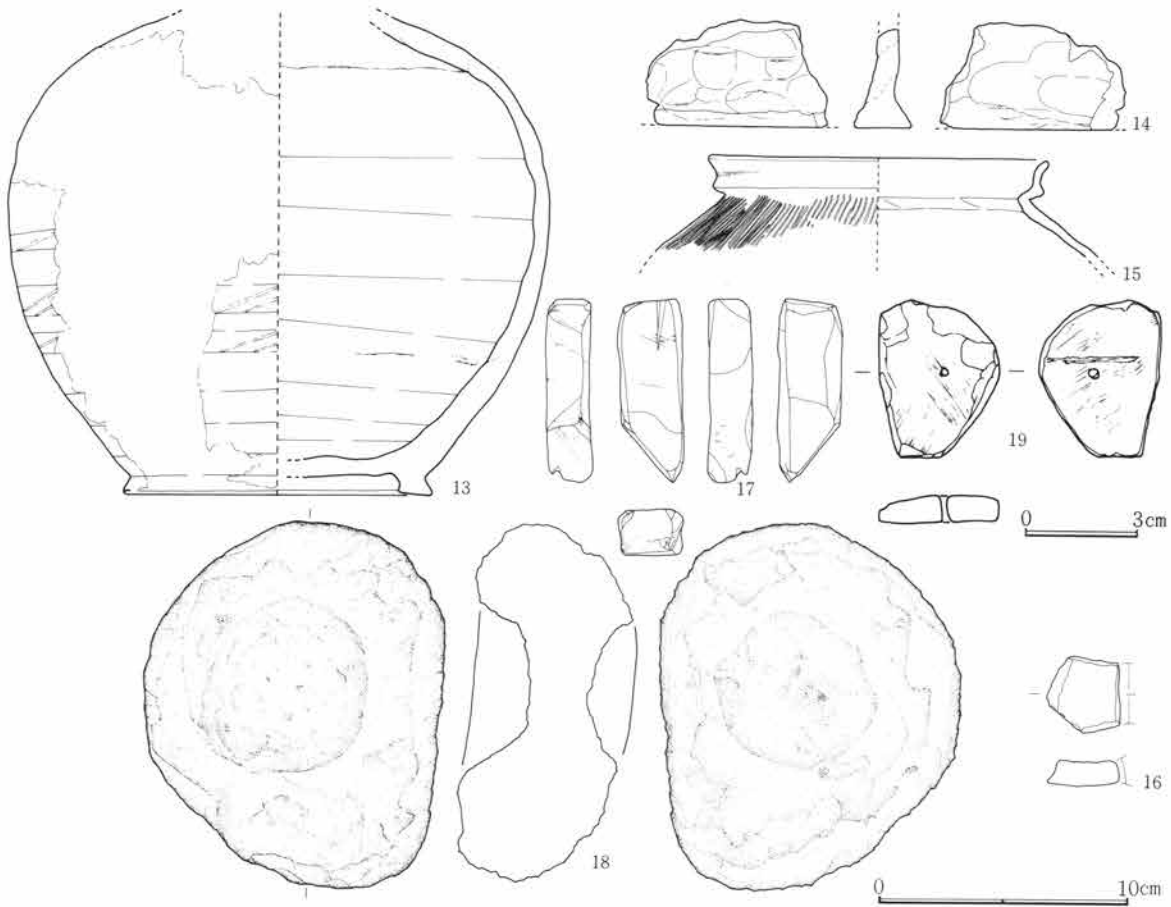


Fig.74 J39号住居跡出土遺物(2)

J 39号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
73-1 26-1	土師器 杯	完	12.9×—×3.9	竈内	底部丸く深い。口縁部幅狭く内屈気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗、砂多く混る
73-2 26-2	土師器 杯	1/4	13.4×—×3.5	竈右袖埋 土壁寄り	底部丸味をもつ。口縁部外反気味に直立。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
73-3 26-3	土師器 杯	3/4	13.6×—×3.3	竈内	底部丸味をもつ。体部内湾気味に開く。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②赤褐 ③やや粗、砂混る
73-4 26-4	須恵器 蓋	1/2	17.6×—×3.7 摘径4.4	北中央部床 面	天井部丸味をおび、口縁部短かく直に折れる。環状摘、轆轤成形。天井部回転篋削り。外面重ね焼痕。	①良好 ②灰白 ③やや粗
73-5 26-5	須恵器 杯	1/4	13×8.5×3	南中央部埋 土	扁平で浅い。腰部丸味をもち、低い体部が内湾気味に開く。轆轤成形。底部回転篋削り。腰部手持篋削り。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒浮く
73-6 26-6	須恵器 杯	体部1/4 欠損	11.7×6.3×3.4	中央部床 面	体部直線的で大きく開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
73-7 26-7	須恵器 杯	1/2	12.4×7.3×4	南西部埋 土	底径やや大きく、体部直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
73-8 26-8	須恵器 椀	1/2	13.9×10.4×4.0	中央部埋 土	腰部僅かに張り体部浅く直線的に開く。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、白色粒混る
73-9 26-9	須恵器 壺	胴部1/4	—×—×(8.0) 胴径16.8		丸く張り、扁平な胴部、腰から底部手持篋削り。	①良好 ②灰 ③粗 砂多く混る
73-10 26-10	須恵器 壺	胴部1/4	—×—×(10.1) 胴径17		肩部丸く強く張る。胴部平行叩き目残る。	①良好 ②灰 ③粗 白色小石混る
73-11 26-11	須恵器 長頸壺	胴部1/4	—×—×(8.1) 肩径17.4		やや外傾する胴部から肩部強くくの字状に屈する。胴部横・斜手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、白色粒混る

J 39号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
73-12 26-12	須恵器 壺	底部	—×—×(5.1)		付高台、端部欠損。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③粗 白色小石混る
74-13 26-13	須恵器 壺	1/2 口 頸欠損	—×12.4× (18.9) 胴径21.2	南西部埋 土	胴部丸く張り球形を呈す。付高台、低く断面台形。体部下 位・底部回転篋削り。器面に自然釉。	①良好 ②暗赤褐 ③密
74-14 26-14	土製品 移動式竈	脚端部 小片		南西部埋 土	端部下端面平ら、逆T字状に開く。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
74-15 26-15	土師器 甕	口縁部 1/2	13.6×—×(3.9)		胴部丸く張る様相。口縁部強く外屈し上半は外反して立つ 所謂S字口縁。口縁部横撫で。肩部斜刷毛目。最大単位10	①良好 ②灰褐 ③ やや粗、細砂混る
74-16 26-16	須恵器 転用砥石		2.9×3.0×1.0 11.3g	埋 土	1側面使用。壺類片。	①良好 ②灰 ③や や密
74-17 26-17	瓦 転用砥石		7.3×2.6×1.8 39.9g	埋 土	多面使用。刃痕あり。	①良好 ②灰 ③や や密、細砂混る
74-18 26-18	石製品 凹石状		14.8×12.0×6.6	埋 土	両面が円形に凹む。片面が著しい。凹部径約7cm、深さ約 3cm、径約6cm、深さ約1.5cm	角閃石安山岩
74-19 26-19	石製品 完		4.2×3.2×0.7	埋 土	略半円形を呈し側面は粗く成形。両面に擦痕あり。ほぼ中 央に円形の小孔を穿つ。径0.15cm。	滑石

J 40号住居跡 (Fig. 75、76・PL. 27)

J区北東部に位置し、45~47 J 46~48の範囲にある。比較的大型の遺構であるが、東壁寄りには調査区域外に延びているため、全容は知りえない。また、現状の南東部は攪乱を受けている。南北長6.2m、東西の現長4.0mを測る。平面形は隅丸方形を呈するものと推定される。壁は高さ30cmを測り、ゆるやかに傾斜する。床面は全体によく踏み固められている。10余りの落ち込みがあるが、当遺構に伴うことが確実であるのは、北東部1箇所、南西隅2箇所の計3箇所のみである。遺物は、床面全体に散在していたが、数は少ない。

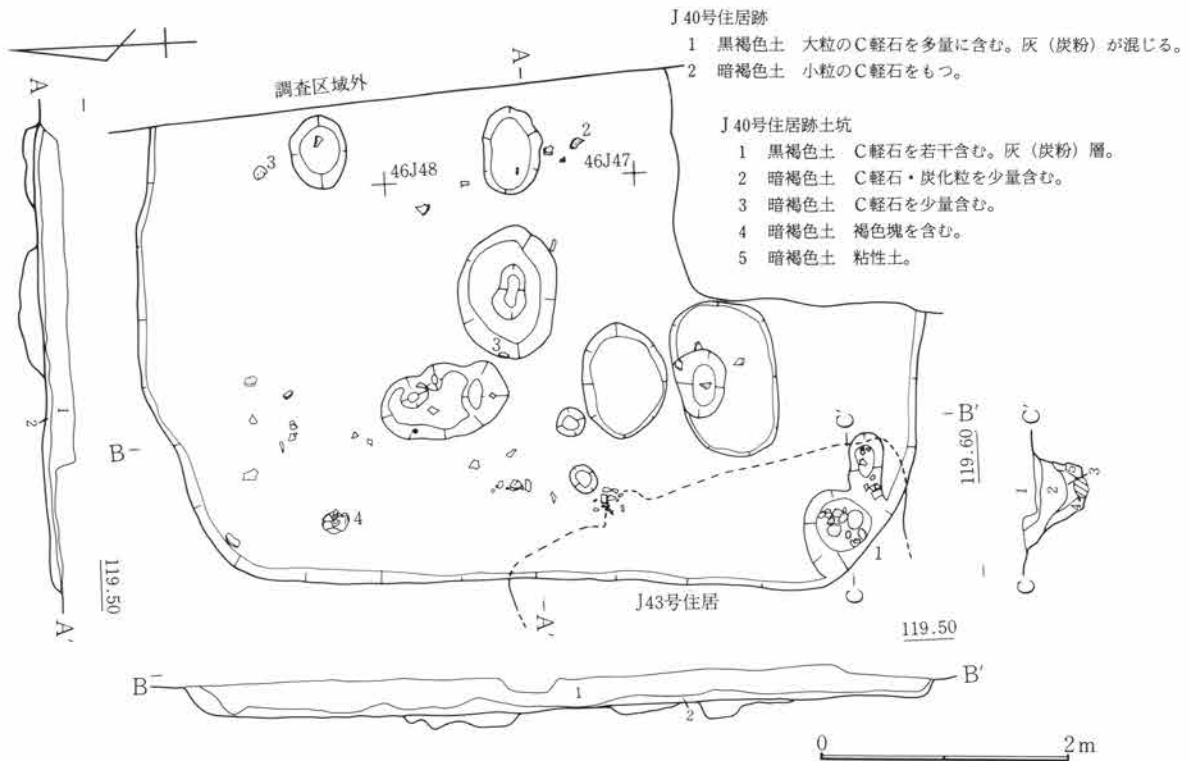


Fig.75 J40号住居跡

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

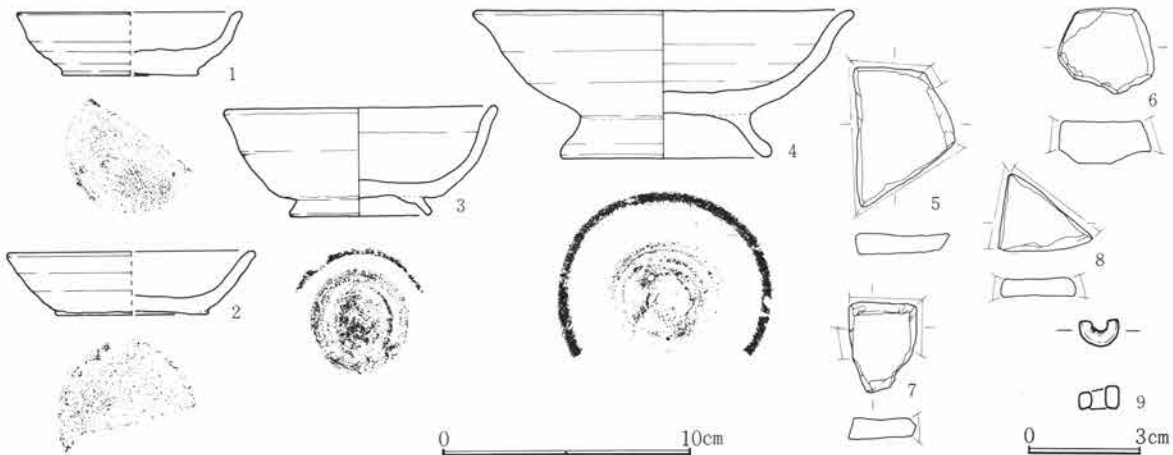


Fig.76 J40号住居跡出土遺物

J 40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
76-1 27-1	土師器 杯	1/2	8.9×5.2×2.5	ピット内	体部中位に脹らみをもち口唇部は小さく外傾する。内面口縁部に煤状附着物。轆轤成形。右回転糸切り。底部肥厚。	①良好 ②黄褐 ③粗、暗赤褐粒混る
76-2 27-2	土師器 杯	1/2	10×6.0×2.5	東中央部床面	腰部僅かに丸味。口縁部緩く外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③粗暗赤褐粒混る
76-3 27-3	土師器 碗	体部1/2欠損	11×5.7×4.3	北東・中央部床面	体部丸く張り、口縁部は外反して開く。付高台、薄くハの字状に開く。内外面吸炭気味。轆轤成形。	①良好 ②暗赤灰 ③やや粗、白色粒混
76-4 27-4	土師器 碗	高台部1/2欠損	15.3×8.5×5.9	北西部床面	体部に丸味をもち、口縁部は外反して開く。付高台、高く外反して大きく開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②明褐 ③やや粗、茶色粒混る
76-5 27-5	須恵器 転用砥石		5.5×3.9×0.7 21.8g	埋土	4側面使用。壺片	①良好 ②灰 ③やや密
76-6 27-6	須恵器 転用砥石		3.3×3.8×1.6 22.1g	埋土	全側面使用。刃痕あり。甕片。	①良好 ②灰 ③密
76-7 27-7	須恵器 転用砥石		3.6×2.7×0.8 10.4g	埋土	4側面使用。壺片。	①良好 ②灰 ③やや密
76-8 27-8	須恵器 転用砥石		3.8×3.1×0.7 9.29g	埋土	2側面使用。甕片。	①良好 ②暗灰 ③密
76-9 27-9	石製模造品 白玉	1/2	0.7×0.4 孔径0.25	埋土	側面縦方向研磨。両面粗い研磨。両面よりの穿孔。	滑石

J 42号住居跡 (Fig. 77、78・PL. 28)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形か	— × 2.50	N— 96° —E	東壁やや南寄り	—

J区北東部に位置し、46・47J 43・44の範囲にある。32号・33号・39号住居跡と重複するが、当遺構が最も古い時期の所産である。平面形で確認できるのは東半部のみで比較的小形の住居跡である。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面はやや軟弱で、凹凸が顕著である。竈は東壁の南寄りに付設される。現状の開口部の壁が熱を受けており、床面上に燃焼部が設けられたものと思われ、掘り込まれた細長い突出部は煙道部と見られ、長さ60cmを測る。推定燃焼部から南東部床面に広く灰混りの焼土層が流出しており、使用時の掻き出しと考えられる。遺物は床面南半に多く散在していたが、須恵器小形長胴壺・フラスコ型壺などが検出されている。

第2章 J区の遺構と遺物

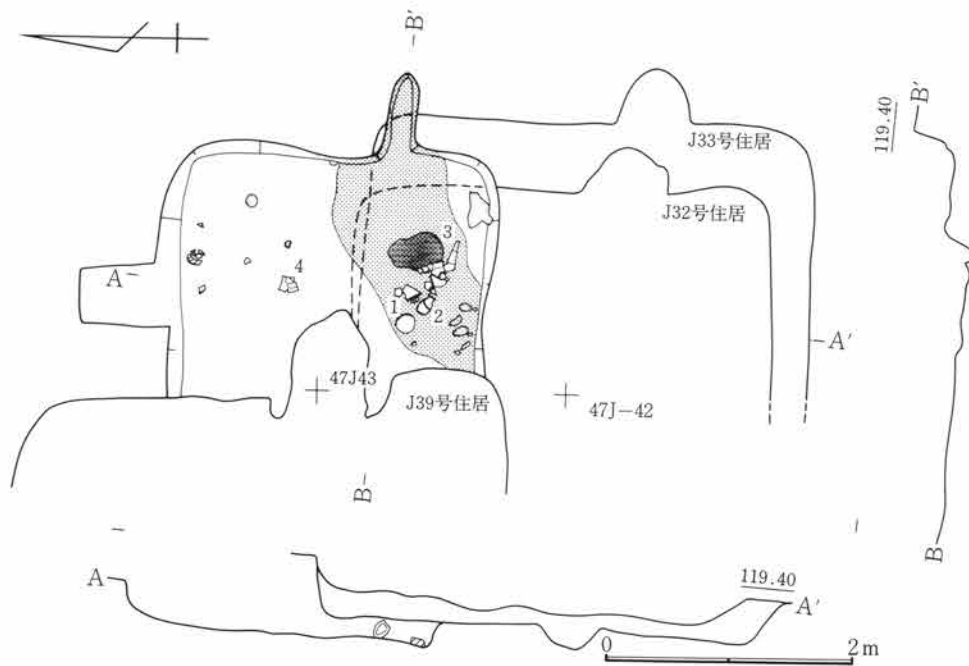


Fig. 77 J42号住居跡

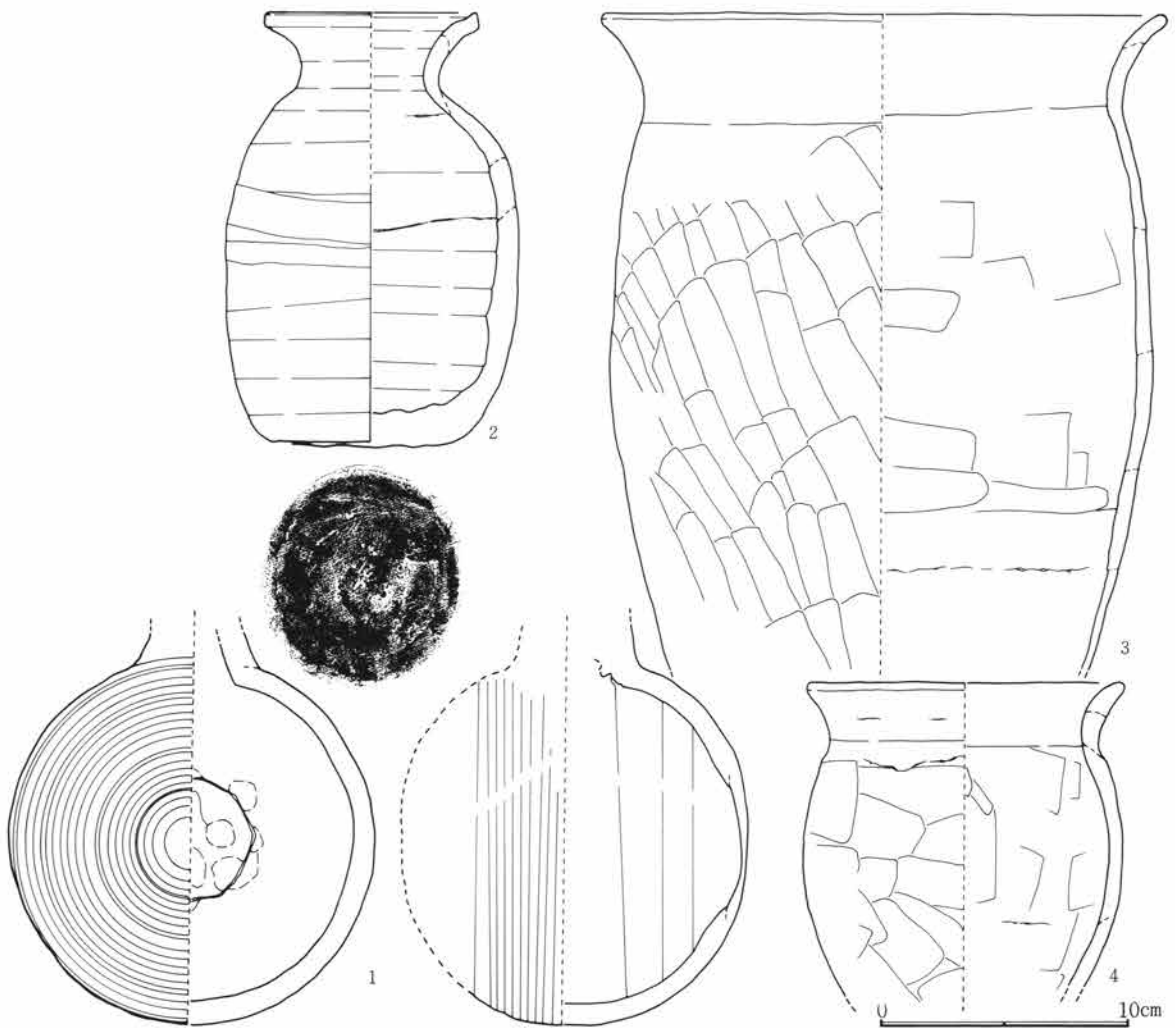


Fig. 78 J42号住居跡出土遺物

J 42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
78-1 28-1	須 惠 器 瓶	上半部 ½欠損	8.5×7.2×17.2 胴部径11.7	竈手前床 面	胴部変化なく寸胴を呈す。口頸部外反し、口唇部は直立する。底部回転篋切り。腰部手持篋削り。器肉厚い。	①良好 ②灰 ③やや密。黒色粒混る
78-2 28-2	須 惠 器 瓶	½ 口 頸欠損	—×—×(15.7) 胴径14.5×14	竈手前床 面	球形を呈するプラスチック型瓶。胴部1側面に粘土板径5cmを貼る。頸部基径4.8cm、胴部全体に掻き目。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色粒混る
78-3 28-3	土 師 器 甕	½ 底 部欠損	22.6×—×(2.6) 胴部径21.7	竈手前床 面	胴部中位にやや脹らみをもつが長胴を呈する。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
78-4 28-4	土 師 器 甕	½ 底 部欠損	12.7×—× (12.4)胴部径12.7	北東部床 面	胴部中位にやや脹らみをもつ。口縁部は厚く外反して開く口縁部横撫で。胴上半横・中～下位斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る

J 43号住居跡 (Fig. 79、80・PL. 29)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.20 × 2.50	N—82.5°—E	東壁やや南寄り	—————

J区北東部に位置し、48・49 J 46～48の範囲にある。単独遺構であるが、北壁西寄りに後世の円形攪乱坑がある。平面形は西壁の短い隅丸方形で、東壁長さ3.2m、南壁長さ2.5mを測る。壁は高さ5cm程度で、直立している。床面は全体に平坦で硬い。東壁北寄りと南壁西寄りに Pit が検出されているが、性格不明である。

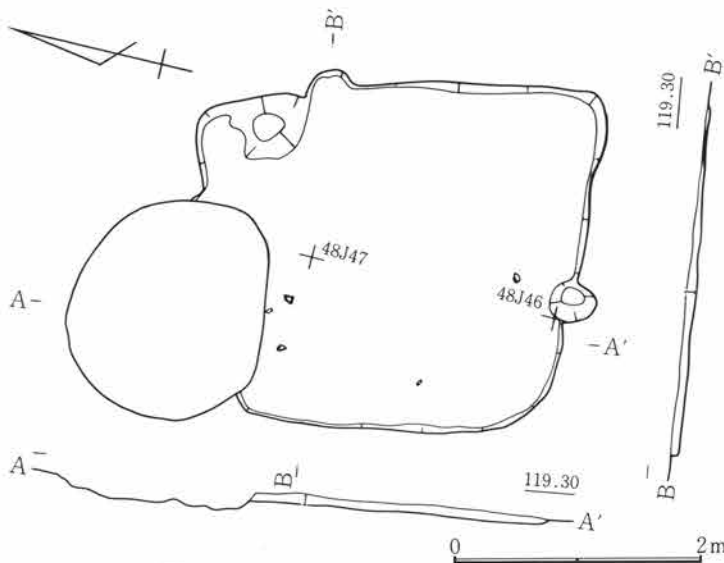


Fig.79 J43号住居跡

攪乱坑があるものの、床面に焼土や灰の散布が全く認められず、付設されていなかったものと見られる。常住施設か否か疑わしい。遺物は須惠器転用砥石・滑石製白玉など希少である。

J 43号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。焼土粒がわずかに混じる。締りあり。

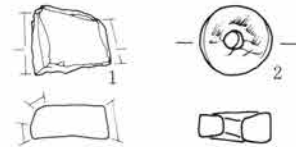


Fig.80 J43号住居跡出土遺物

J 43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
80-1 29-1	須 惠 器 転用砥石		3.2×2.8×1.4 14.0g	埋 土	2側面使用。磨片。	①良好 ②灰 ③やや粗
80-2 29-2	石製模造品 白 玉	完	径1.9×厚0.55 孔径0.3	埋 土	両面に調整擦痕。	滑石

第2章 J区の遺構と遺物

J44号住居跡 (Fig. 81、82・PL. 29)

J区北東部に位置し、47～49 J 44・45の範囲にある。44号・42号・39号・38号の順で重複しており、当遺構が最も先行する。遺存しているのは北壁・南壁北寄り・西壁北寄りのほぼ北半部である。平面形は隅丸方形と推定され、東西長さ3.4m、南北の現長2.0mである。壁は高さ30cmを測り、ほぼ直立する。床は中央部寄りほど硬く踏み固められている。北東部の北壁に接して、台状に灰の堆積が認められたが、廃絶後の流入によるものである。遺物は散在していたが、いずれも小片のみである。当遺構に直接伴うものとは思われない。



Fig.81 J44号住居跡

- J44号住居跡
- 1 暗褐色土 焼土粒・塊層。
 - 2 暗褐色土 C軽石を含む。焼土粒が少量混じる。
 - 3 暗褐色土 縮りあり。
 - 4 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
 - 5 白色土 粘土塊。
 - 6 暗褐色土 C軽石・焼土粒を少量含む。
 - 7 暗褐色土 C軽石を少量含む。縮りあり。
 - 8 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
 - 9 暗褐色土 C軽石を含む。
 - 10 暗褐色土 C軽石を少量含む。
 - 11 暗褐色土 粘性土。

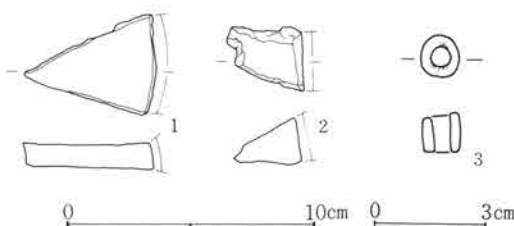


Fig.82 J44号住居跡出土遺物

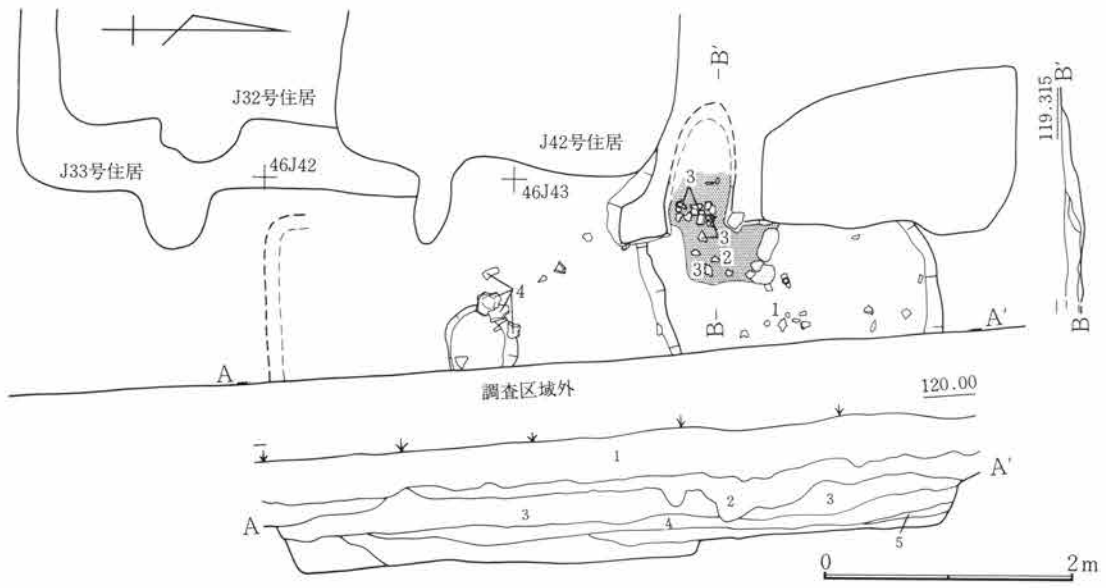
J44号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
82-1 29-1	須恵器 転用砥石		5.2×4.0×1.1 20.9g	北西部埋 土	1側面使用。薬片。	①良好 ②灰青 ③ 密、白色細粒混る
82-2 29-2	石製品 砥石		3.1×2.6×1.9 12.1g	埋 土	欠損品。	流紋岩(砥沢?)
82-3 29-3	石製品 白玉		0.75×0.7 孔径0.3	埋 土		滑石

J45号住居跡 (Fig. 83、84・PL. 30)

J区北東部に位置し、46・47 J 44・45の範囲にある。東半部は調査区域外に延び、南は攪乱、西側は32号・33号・42号住居跡と重複しており、北壁の一部及び床面の狭い範囲が確認できたにすぎず新旧関係は判然としない。平面・土層の両調査によっても南限を確認することができなかった。壁は高さ40cmを測り、傾斜している。床面は全体に軟弱である。竈は痕跡程度の検出であったが、南壁に設けられ住居内に袖部を張り出す形態をもつと考えられる。推定燃焼部幅45cm・奥行き約1mを測る。一部に灰の堆積が認められたが、床面間に薄い間層があり、廃絶後のものと考えられる。遺物は床面に散在していたが、形を知りうるものは少なく、また共伴関係についても確証がない。

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物



J45号住居跡

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 大粒C軽石・炭化物粒・焼土粒を含む。縮りなし。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。強く縮っている。
- 5 暗褐色土 白色細粒を含む。縮りあり。

Fig.83 J45号住居跡

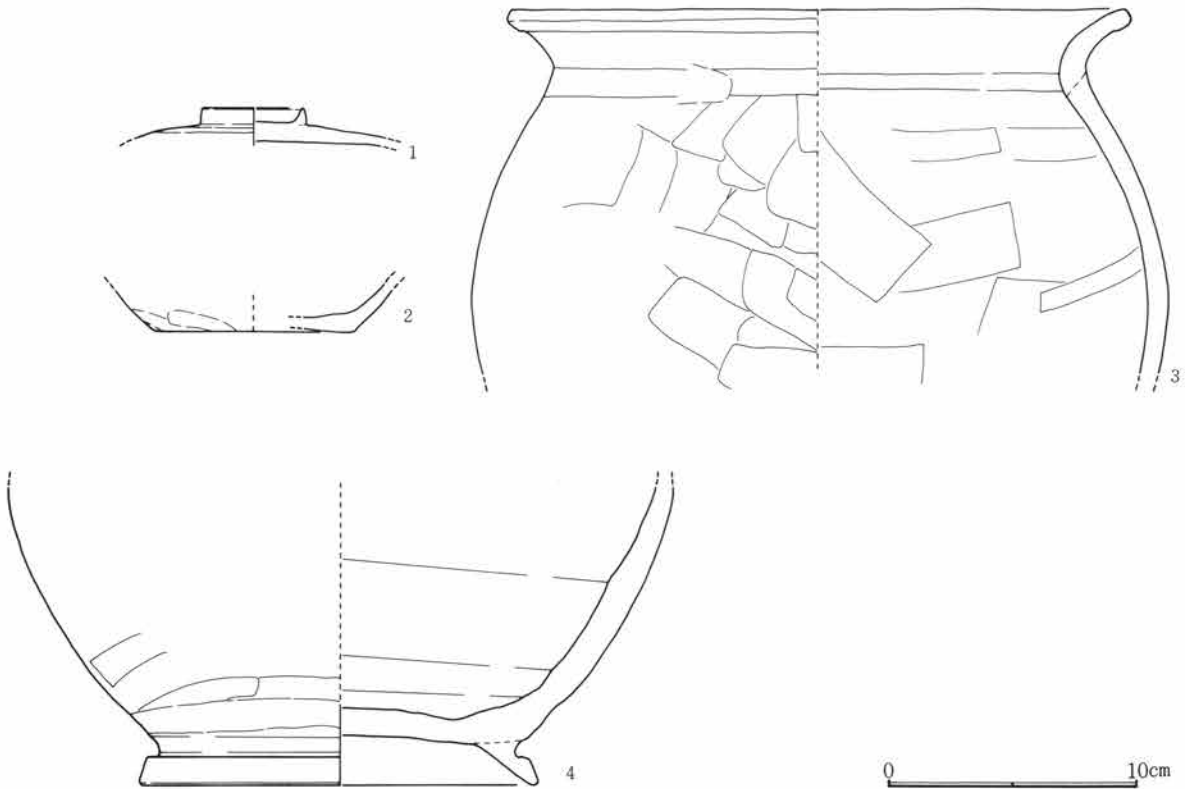


Fig.84 J45号住居跡出土遺物

第2章 J区の遺構と遺物

J45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
84-1 30-1	須恵器 蓋	天井部 小片	—×—×1.5 摘径4.1	中央部床 面	環状摘。端部細り中心部は平ら。直に立つ。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色細粒石混
84-2 30-2	須恵器 杯	底部	—×8.0×(1.9)	竈内	轆轤成形。回転糸切り後周辺回転篋削り。	①良好 ②緑灰 ③やや密、黒色粒混る
84-3 30-3	土師器 甕	1/3 下 半欠損	25.0×—× (15.3)	竈手前床 面	胴部丸く張り球形。口縁部強く外反し、口唇部丸まる。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③粗
84-4 30-4	須恵器 甕	胴下半 ~底部	—×16×(11.8)	中央部埋 土	胴部丸く張る。付高台、外面段をなしハの字状に開く。断面略三角。胴部不連続回転篋削り。底部内外面篋撫で。	①良好 ②オリーブ灰 ③やや粗黒色粒

J47号住居跡 (Fig. 85、86・PL. 30)

J区東部南寄りに位置し、49・50 J20・21の範囲にある。住居内東半部には近～現代の井戸跡が、西半部には南北に近～現代の溝跡が走り、攪乱穴もある。また、北壁付近は地形が部分的に北へ斜降しているため、確認出来なかった。平面形は東西に長軸をもつ方形と推定され、東西長3.7m、南北の現長2.6mである。壁は高さ20cmを測り傾斜している。床面は軟弱であり、焼土や灰の散布は認められない。遺物は少なく、床面中央に土師器長胴甕の上半部を出土したのみである。

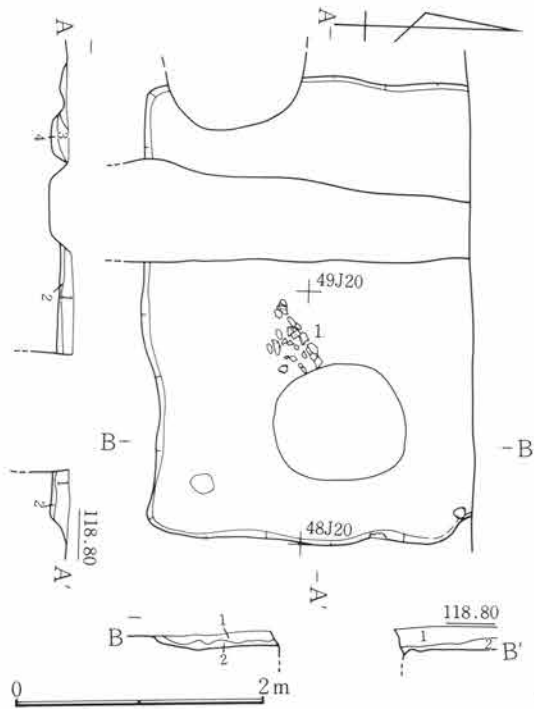


Fig.85 J47号住居跡

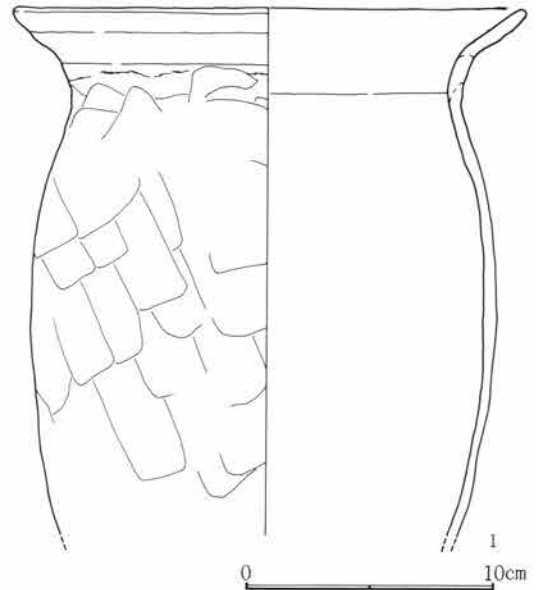


Fig.86 J47号住居跡出土遺物

J47号住居跡

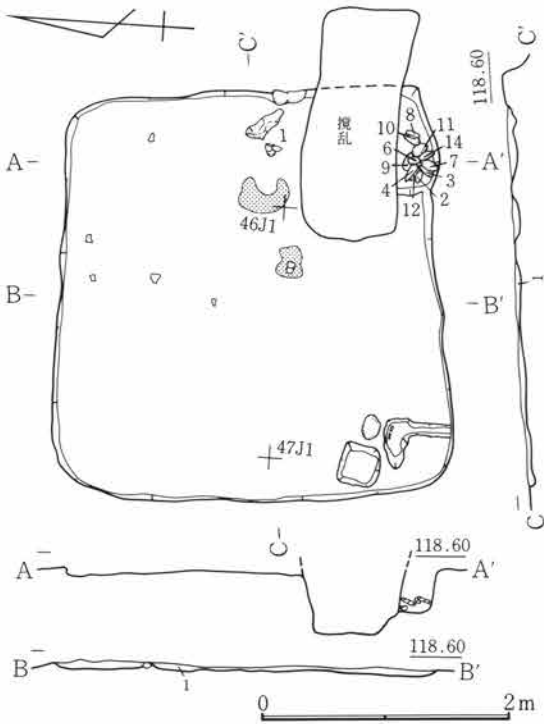
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒を含む。粘性土。
- 2 暗褐色土 粘性土。締りある。
- 3 灰褐色土 砂質土。締りなし。
- 4 灰褐色土

J47号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
86-1 30-1	土師器 甕	下半部 欠損	20.5×—× (20.7) 胴部径18.5	西中央部床 面散在	胴部中位が僅かに脹らむ長胴形。口縁部大きく外反し上半は内湾気味に開く。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや粗、砂混る

J49号住居跡 (Fig. 87~89・PL. 31)

J区南東部に位置し、46~48J 1・2の範囲にある。平面形は隅丸方形を呈し、東西長・南北長ともに3.2mを測る。単独遺構であるが、南東部に東西を主軸とする長方形の現代土坑があり、竈及び貯蔵穴が損なわれている。壁は高さ7cm余りを残すのみで、ほぼ直立している。床面は平坦で、中央部寄りがよく踏み固められている。竈は灰の分布や凝灰岩の加工材などの存在から東壁南寄りに設けられたことは確実であるが、全く破壊されて旧状を知りえない。南東部隅には貯蔵穴の南半が残存しており、隅丸方形を呈するものと思われる。東西長80cm・深さ30cmを測る。遺物は土器類は小片かつ少量であったが、貯蔵穴内から長円礫が一括して出土している。



J49号住居跡
1 暗褐色土 C軽石を少量含む。締りあり。

Fig.87 J49号住居跡

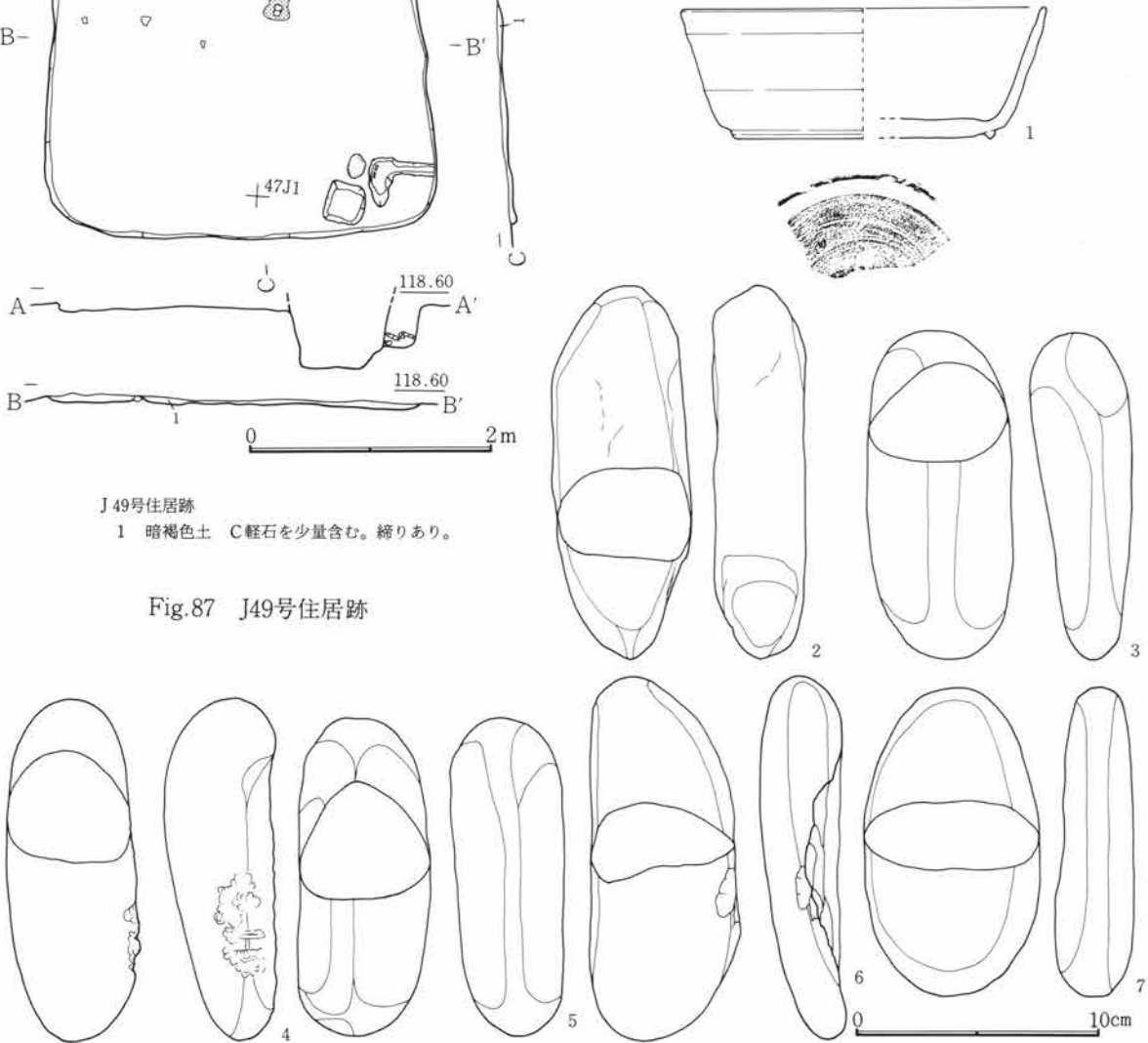


Fig.88 J49号住居跡出土遺物(1)

第2章 J区の遺構と遺物

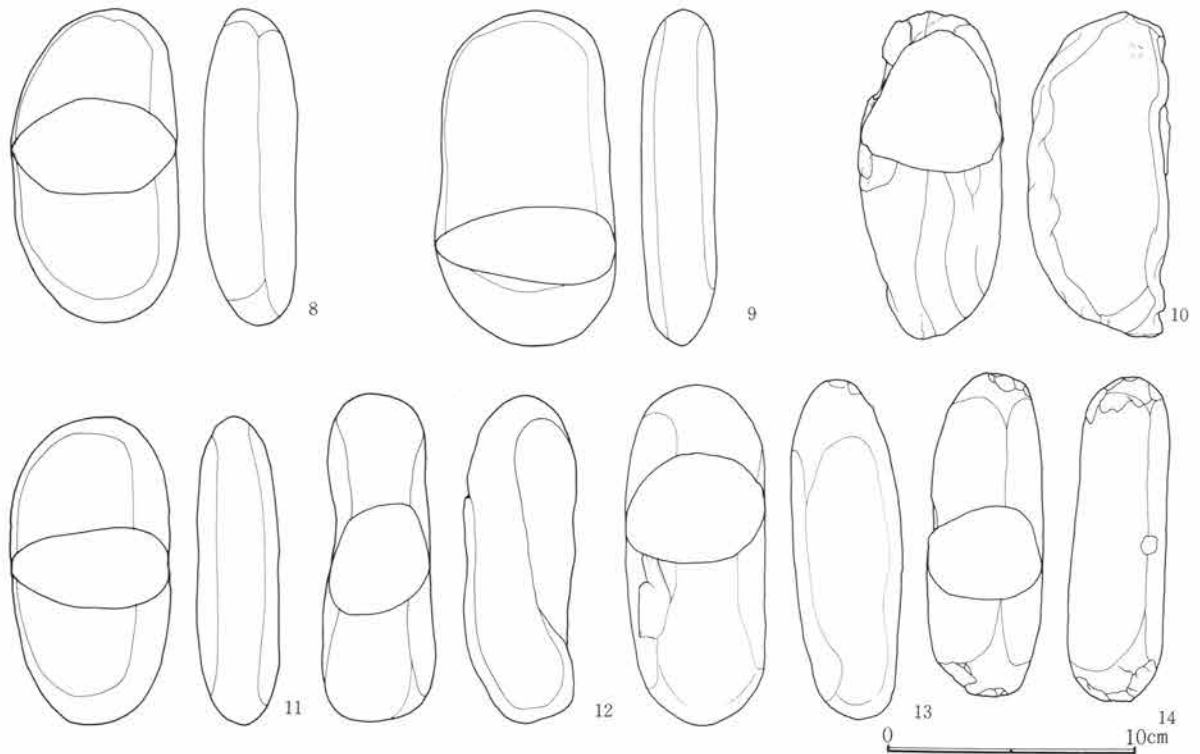


Fig.89 J49号住居跡出土遺物(2)

J 49号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
88-1 31-1	須 惠 碗	1/4	15.0×10.8×5.3	北東部埋 土	体部直線的で、外傾度少ない、やや深い。削り出し高台? 小さく断面丸味あり。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好
88-2 31-2	石		15.2×5.7×3.8 530 g	Pit 内		輝石安山岩(粗粒)
88-3 31-3	石		13.3×6.0×4.0 440 g	Pit 内		輝石安山岩(粗粒)
88-4 31-4	石		13.9×5.5×4.5 420 g	Pit 内	側面に敲打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
88-5 31-5	石		12.9×5.4×4.7 485 g	貯蔵穴埋 土		石英閃緑岩
88-6 31-6	石		14.8×6.2× (3.1) 410 g	Pit 内	側面に敲打痕。1面は剥離。	砂岩
88-7 31-7	石		12.6×7.2×2.8 435 g	Pit 内		輝石安山岩(粗粒)
89-8 31-8	石		12.5×6.6×3.7 485 g	Pit 内		輝石安山岩(粗粒)
89-9 31-9	石		13.3×7.2×3.1 465 g	Pit 内		輝石安山岩(粗粒)
89-10 31-10	石		13×5.8×5.6 615 g	Pit 内		頁岩
89-11 31-11	石		12.1×6.4×3.4 400 g	Pit 内		輝石安山岩(粗粒)
89-12 31-12	石		13×4.5×4.5 410 g	Pit 内		頁岩
89-13 31-13	石		13.5×5.6×4.3 545 g	埋 土		石英閃緑岩
89-14 31-14	石		12.8×4.6×3.8 370 g	Pit 内	両端部に敲打痕。	石英閃緑岩

J50A号住居跡 (Fig. 90、91・PL. 32)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
方 形	3.10 × 3.35	N-88.5°-E	東壁やや南寄り	—————

J区南西部に位置し、63~65J11・12の範囲にある。多湿土壤中に形成されているため全体に軟弱で、遺存状態はよくない。壁は高さ5cmを測るのみで、西壁及び南壁西寄りにはほとんど遺存していない。また、南東部隅に壁下溝状のものがあったが、全周するか否か確認されていない。竈は東壁の南寄りに付設され、燃

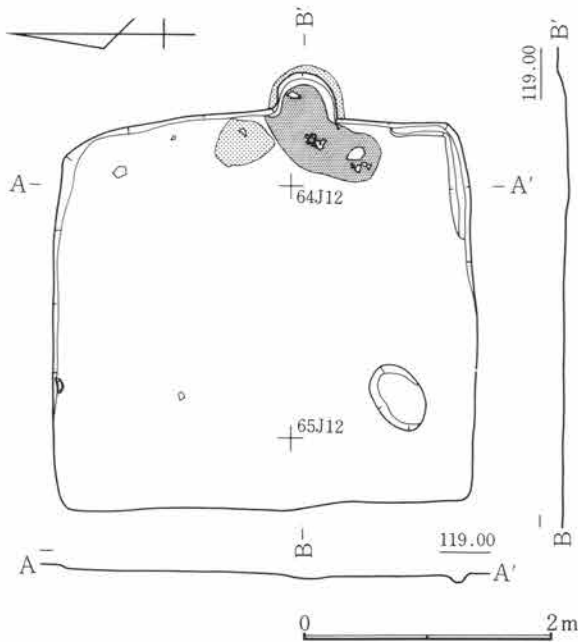


Fig.90 J50A号住居跡

焼部は半円形に掘り込まれる。煙道部の有無は不明である。竈内壁はよく熱をうけており、燃烧部底面から手前床面にかけて焼土や灰層の堆積が認められる。燃烧部幅約50cm・奥行き約40cmを測る。遺物は竈周辺の床面上から数点が出土したのみである。

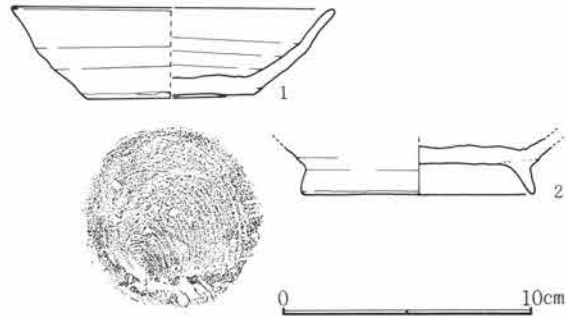


Fig.91 J50A号住居跡出土遺物

J50号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
91-1 32-1	須 惠 器 杯	1/2	12.9×6.7×3.5	竈手前床 面	腰部くびれ体部中位でやや張る。口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。内外面に黒色付着物。	①良好 ②灰白 ③やや密
91-2 32-2	須 惠 器 椀	底 部	—×9.2×(1.9)	竈手前床 面	付高台、やや内湾気味に開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗

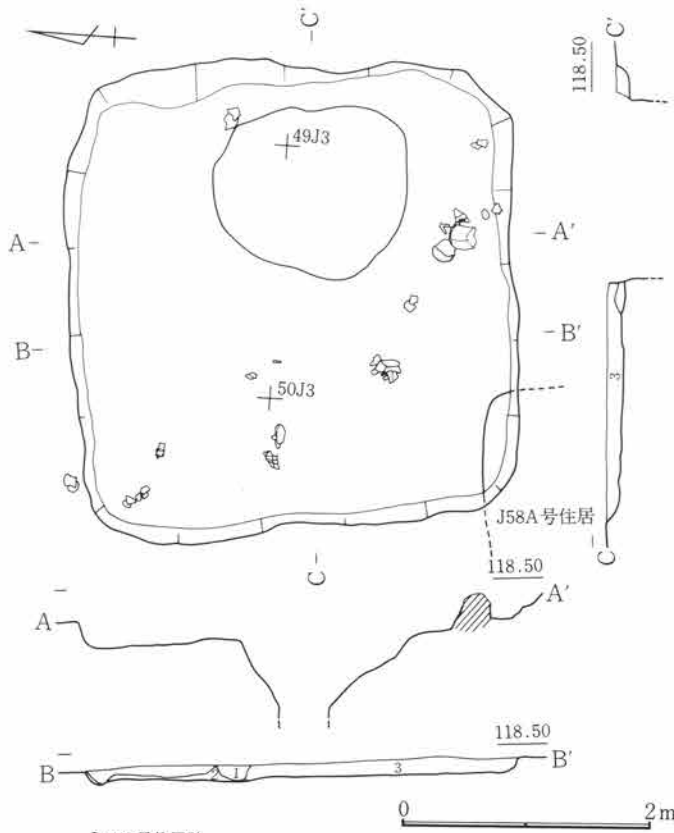
J50B号住居跡 (Fig. 92、93・PL. 32)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.60 × 3.60	N-86°-E	東壁やや南寄り	—————

J区南東部に位置し、48~50J2・3の範囲にある。南西部および南部で3号・52号住居跡と重複しているが、新旧関係は3号より旧く52号住居跡より新しい時期の所産である。平面形は隅丸方形を呈し、東西長・南北長ともに3.6mである。壁は高さ15cmを測り、緩やかに傾斜している。床面はほぼ平坦で、よく踏み固めら

第2章 J区の遺構と遺物

れている。東半部中央に現代の井戸跡がある。竈や貯蔵穴などの施設や、焼土・灰などの痕跡はなく、常住施設とは考え難く堅穴状遺構とすべきか。遺物は希少で、土師器の須恵器模倣杯・長胴の単孔甕などである。



J50B号住居跡

- 1 灰褐色土 砂質土。
- 2 暗褐色土 乳白色土粒を多く含む。
- 3 暗褐色土 乳白色塊を含む。

Fig.92 J50B号住居跡



Fig.93 J50B号住居跡出土遺物

J50B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
93-1 32-1	土師器 杯	1/3	12.3×—×(4.8) 口径高3	埋土	底部深く丸味強い。口縁部高く外傾し口唇部はさらに外屈する。受け部不明瞭。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①やや軟 ③橙	②鈍い黄 ③やや粗
93-2 32-2	土師器 甕	胴部欠損	24.6×9.1× (32.9)	埋土	胴部張り少ない。口縁部ゆるく外反する。底部単孔。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面横撫で。	①やや軟 ③やや密	②橙 ③

J51A号住居跡 (Fig. 94~96・PL. 33)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
方形か	— × —	N—82°—E	東壁	— — — — —

J区南西部に位置し、67~69J 12~14の範囲にある。多湿土壌である上に、現代の攪乱が顕著で、南半部は消失しており、西部は調査区域外に入り検出・遺存状態は不良である。竈及び東壁南寄りと南壁・床面の南半が確認できた。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面は全体に軟弱であるが中央部寄りがやや良好である。竈は袖無し型である。燃燒部の平面形がわずかに確認できる程度で、煙道部については不明である。

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

燃烧部底面中央焼土が、また南側端に凝灰岩の加工材1個が残っている。遺物は床面上に散在していたが、形を知りうるものは少ない。

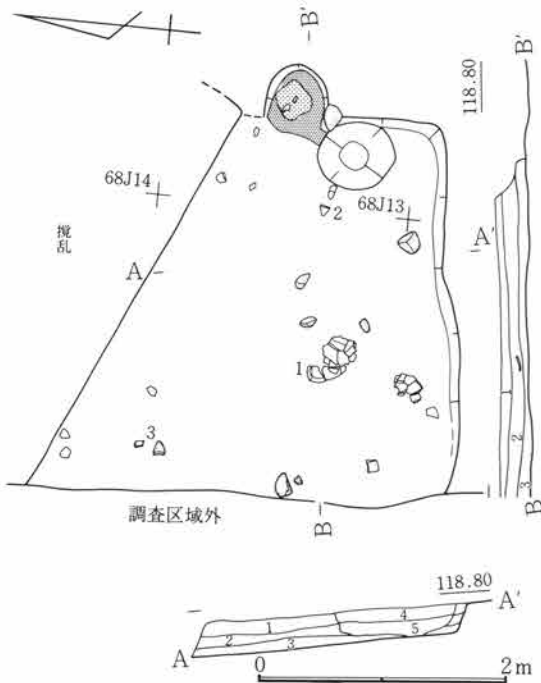
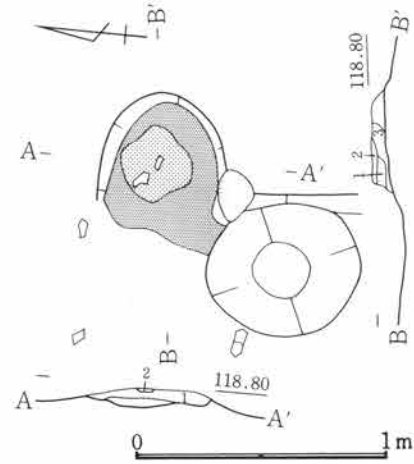


Fig.94 J51A号住居跡



J51A号住居跡竈

- 1 褐色土 焼土粒・白色粘土粒を多く含む。
- 2 赤色土 焼土。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。

J51A号住居跡

- 1 褐色土 C軽石を多量に含む。締りあり。
- 2 褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 褐色土 C軽石・焼土粒・炭化塊を含む。
- 4 暗灰色土 B軽石層。小粒C軽石を少量含む。
- 5 暗灰色土 B軽石層。

Fig.95 J51A号住居跡竈

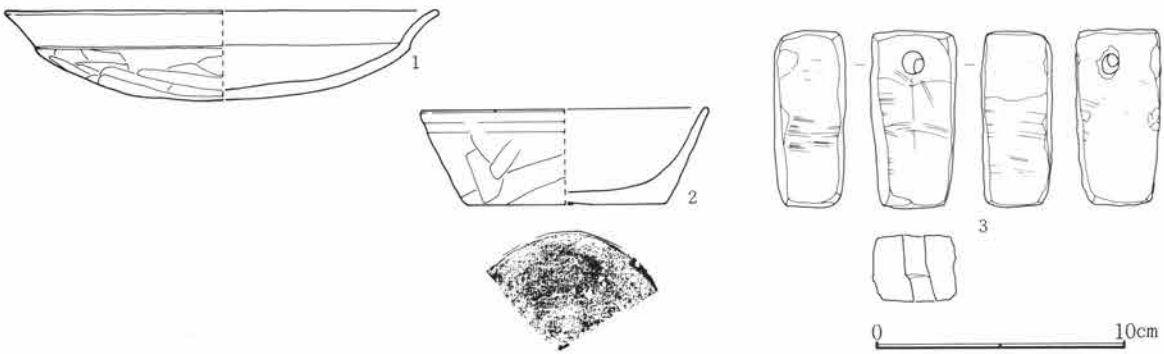


Fig.96 J51A号住居跡出土遺物

J51A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器器 種形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
96-1 33-1	土師器 杯	1/2	17.4×-×3.6	南西部床 面	底部浅く丸味をもって不安定。口縁部は大きく外反して開く。口縁部横無で。底部不定方向の篋削り。内面黒色付着。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密、砂混る
96-2 33-2	須恵器 杯	1/5	11.5×8.0×3.8	竈内床 面	体部直線的に立ち上がり外傾度少ない。轆轤成形。底部回転篋切り後手持篋削り。体部下手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、黒色粒混る
96-3 33-3	石製品 砥石	完	7×3.3×2.6 57.5g	北西部埋 土西壁寄	角柱状。一端に穿孔。径1cm、両面から穿孔。4面及び両端使用。	角閃石安山岩

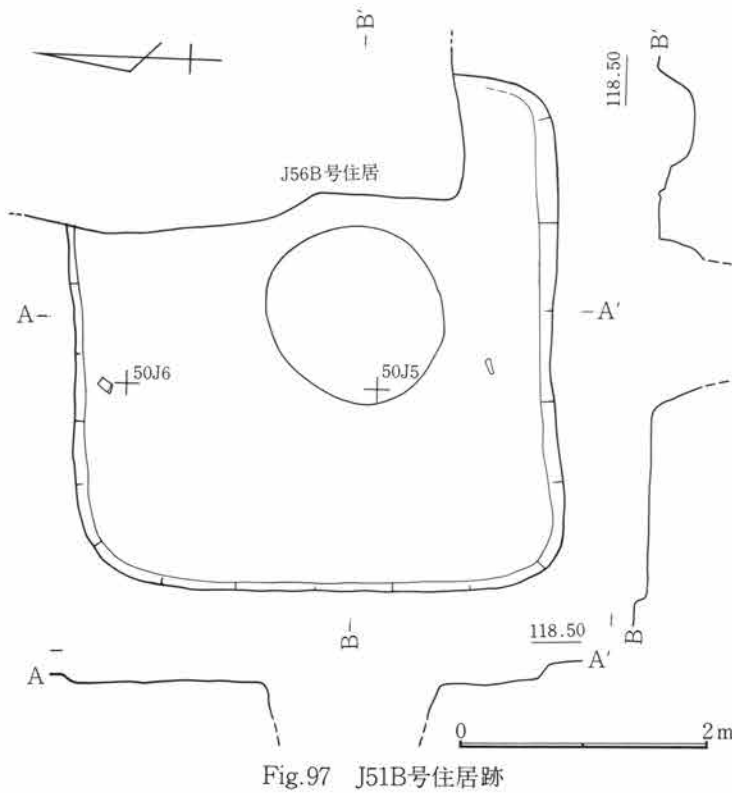


Fig. 97 J51B号住居跡

J 51 B号住居跡 (Fig. 97、98・PL. 33)

J区南東部に位置し、49～50 J 4～6の範囲にある。東部で56 B号住居跡と重複しているが、これよりも古い時期の所産である。平面形は隅丸方形を呈し、南北長3.95・東西現長4.1mである。東西軸方位はおよそN-85°-Eを示す。壁は高さ12cmを測り、傾斜している。床面は硬いが荒れている。床面中央には現代の井戸跡がある。竈の付設については損失部分があるので確認できないが、焼土・炭化物の散布は全く認められず疑ってよい。遺物は図示した楔型鉄器以外は、須恵器の小片が出土したのみである。

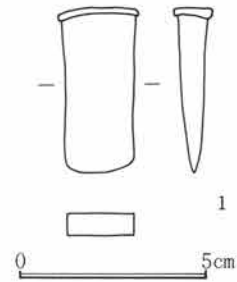


Fig. 98 J51B号住居跡出土遺物

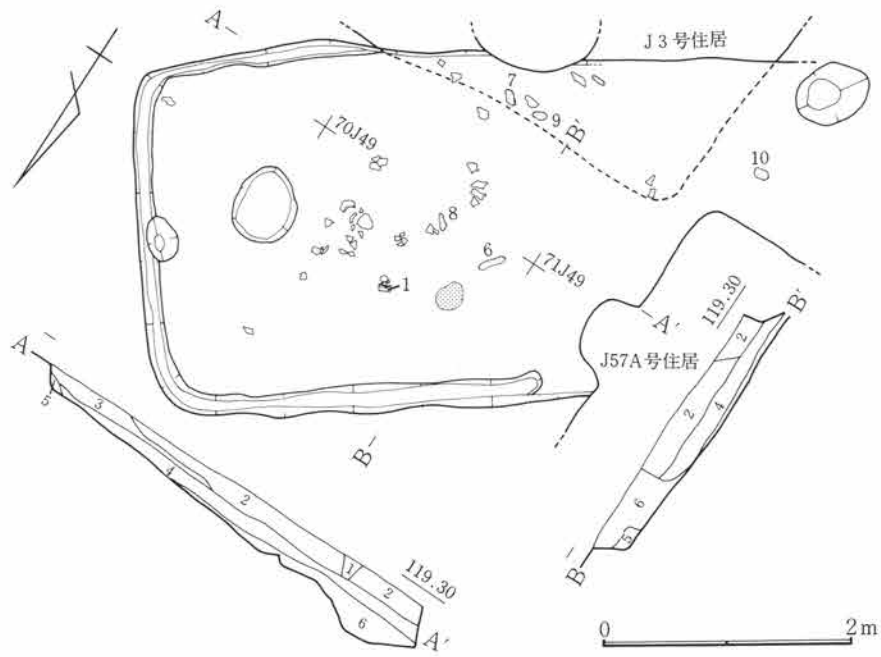
J 51 B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
98-1 33-1	鉄製品 鉄	全 完	長4.4×幅2.2 ×厚0.5	西中央埋 土	楔形。頭部打撃により潰れ。刃部始刃。全面錆化。X線透視復元。		

J 52号住居跡 (Fig. 99、100・PL. 34)

J区北西部に位置し、69～71 J 47～49の範囲にある。3号・55 B号・57 A号住居跡と重複し、最も古い時期の所産である。多湿土壤中に形成され、また重複や攪乱の関係で、遺存状態は不良である。平面形はほぼ東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、長軸長5.3m以上、短軸長3.0mを測る。また長軸方位はN-38°-Eを示す。壁は高さ24cmを測り、ほぼ直立する。壁下には幅15cm・深さ10cmの溝が廻っているが全周するか否かは不明である。床面は軟弱である。Pitが4箇所あるが、同時に疑問がある。床面中央に焼土塊が認められ炉跡の可能性が考えられたが遺存状態が悪く、確定は出来ない。遺物は床面中央に散在して見られたが、S字口縁の甕型土器・打製石斧などが検出された。

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物



J52号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む。焼土・炭化物粒を混じる。
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化物粒を含む。粘性土。
- 5 暗褐色土 強い粘性土。
- 6 暗褐色土 C軽石を含む。

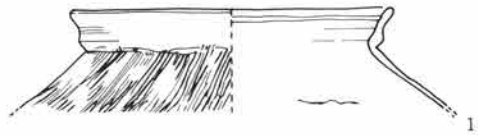


Fig.99 J52号住居跡

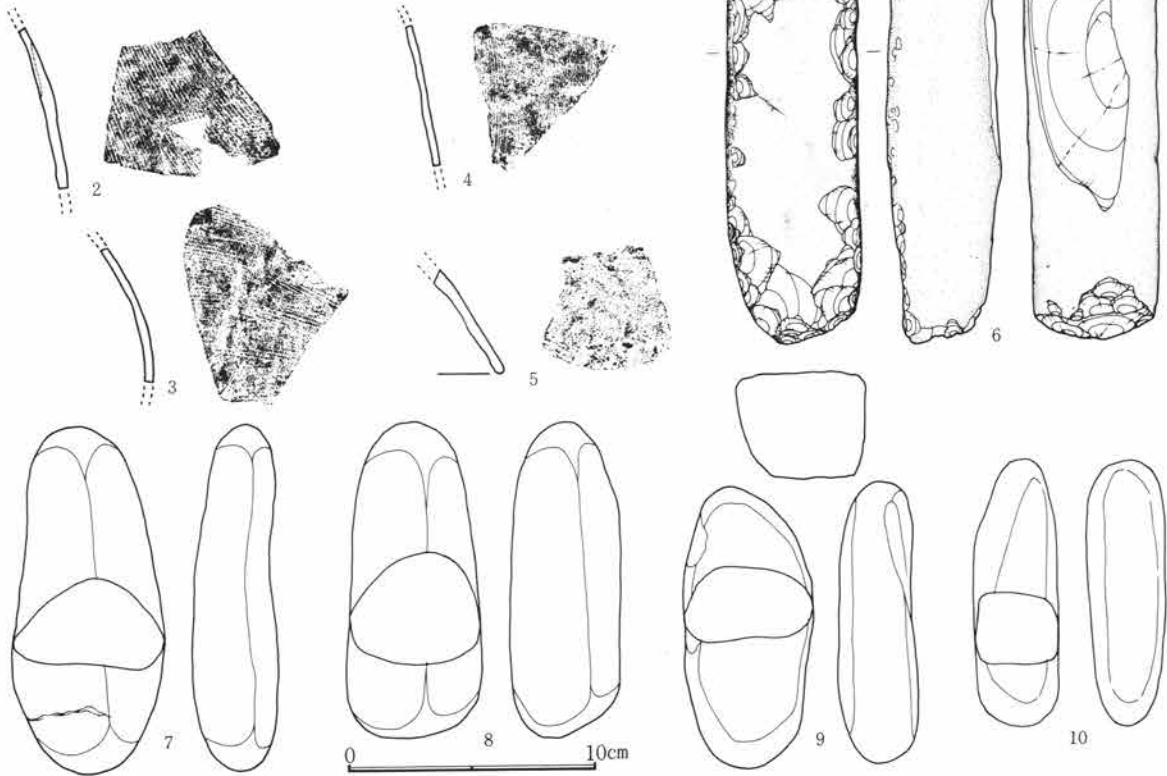


Fig.100 J52号住居跡出土遺物

第2章 J区の遺構と遺物

J52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
100-1 34-1	土師器 甕	口縁部 小片	12.9×-×(4)	埋土	最大径は胴部にある。肩部内傾し、口縁部下位は肥厚し短かく外傾し上半はくびれて外傾。S字口縁。胴部斜刷毛目。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗、砂混る
100-2 34-2	土師器 甕	胴部小 片		埋土	刷毛目。	①良好 ②淡黄 ③ やや粗、砂混る
100-3 34-3	土師器 甕	胴部小 片		埋土	刷毛目。	①良好 ②淡黄 ③ やや粗、砂混る
100-4 34-4	土師器 甕	胴部小 片		埋土	刷毛目。	①良好 ②黒褐 ③ やや粗、砂混る
100-5 34-5	土師器 甕	台部小 片		埋土	刷毛目。	①良好 ②鈍い黄橙
100-6 34-6	石	完	長19.5×幅5.3× 厚4.3 825g	中央部埋 土		黒色頁岩
100-7 34-7	石	完	長13.8×幅6.1× 厚3.6 410g	中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
100-8 34-8	石	完	長12.6×幅5.4× 厚4.5 465g	中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
100-9 34-9	石	完	長11.2×幅5.3× 厚3.0 305g	中央部埋 土	多面使用。使用部分は多く小節間である。	輝石安山岩(粗粒)
100-10 34-10	石		厚10.6×幅3.4× 厚2.9	中央部埋 土		角閃石安山岩

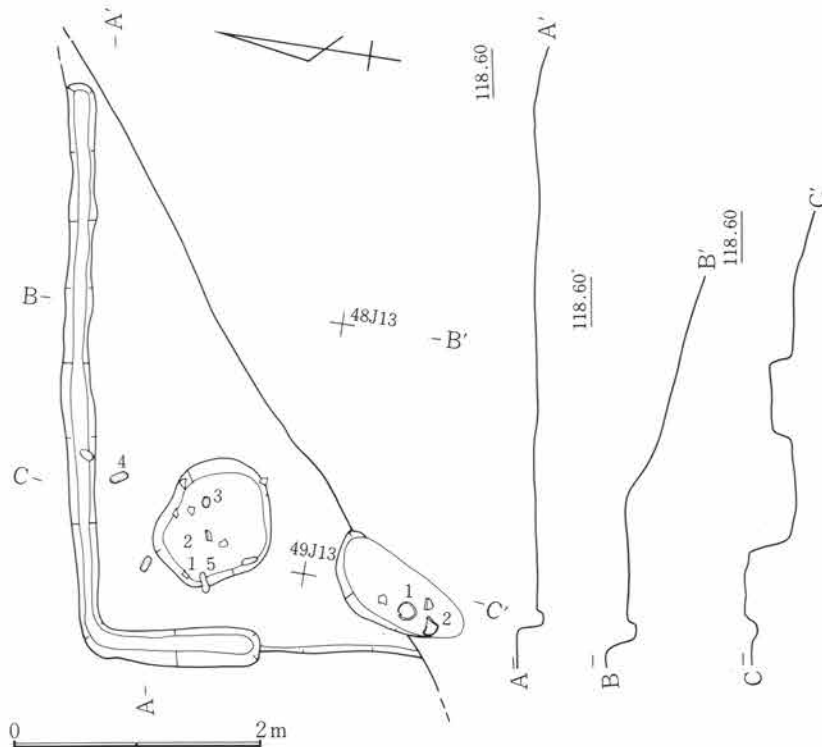


Fig.101 J53号住居跡

J53号住居跡 (Fig. 101、102・PL. 35)

J区南東部に位置し、47～49J12・13の範囲にある。1号溝の掘削によって南東半部が損われている。平面形は方形を呈すると推定され、東西現長4.8・南北現長2.7mである。壁は高さ15cmを測り、直立する。北壁と西壁北寄りに幅20cm前後・深さ約7cmの明瞭な壁溝を伴うが、いずれも消失部分に至る以前に跡切れている。床面は軟弱である。北西部と西部壁際に径90×110cm・深さ55cmと、径60×120cm・深さ20cmの楕円形土坑が検出されているが、性格は不明である。遺物は少なく、床面土坑内から土師器杯型土器が流入状態で出土している。

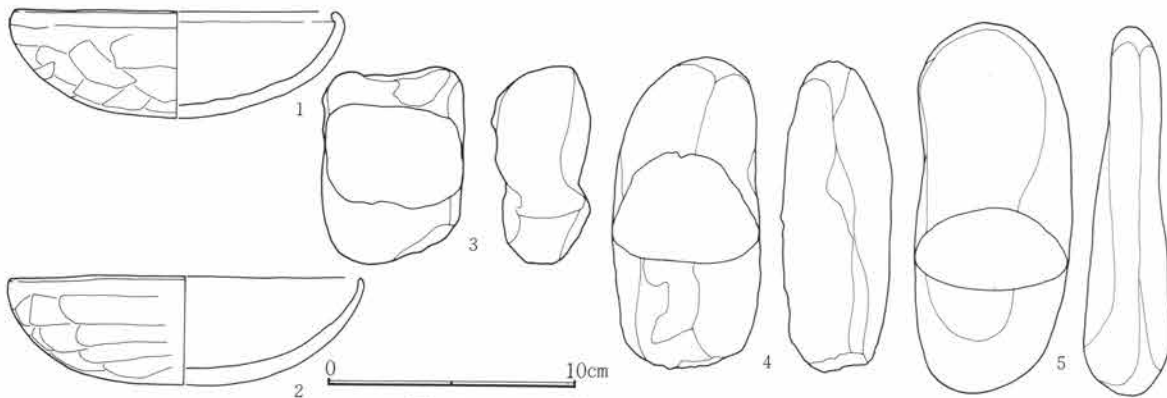


Fig.102 J53号住居跡出土遺物

J53号住居跡出土遺物観察表

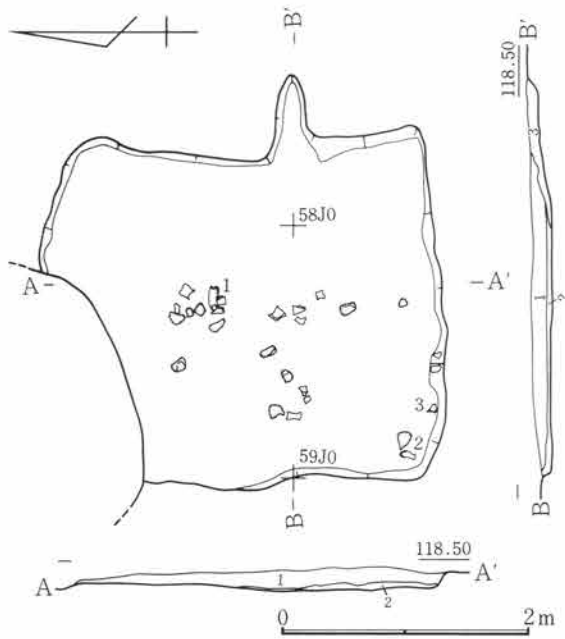
Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
102-1 35-1	土 師 器 杯	ほぼ完	13.4×—×4.2	南西部埋 土西壁寄	底部丸く不安定。口縁部短かく内屈し、口唇部丸まる。口 縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②鈍い赤橙 ③やや粗、砂混る
102-2 35-2	土 師 器 杯	1/2	14×—×4.3	南西部埋 土西壁寄	底部丸く不安定。口縁部短かく、内湾気味に直立する。口 縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
102-3 35-3	石		14.7×6.3×3.2 430g	北西部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
102-4 35-4	石		12.4×6.0×4.2	北西部埋 土	一端に敲打痕。	変質安山岩
102-5 35-5	石		7.5×5.6×4.0 270g	北西部埋 土		珪質変質岩

J54号住居跡 (Fig. 103、104・PL. 36)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	2.65 × 3.10	N— 90° —E	東壁やや南寄り	—————

J区南端部に位置し、南半はI区にまたがり、57・58I49・J0の範囲にある。平面形は隅丸方形であるが、東壁の両端が翼状に突出する。北西部は攪乱のため消失している。壁は高さ10cm程度で、傾斜している。床面は軟弱であるが、中央部寄りがやや低くなり硬い。竈は東壁の南寄りに付設されるが、現状では袖無し型であるが狭小である。燃烧部の主要部分が手前床面上に構築されていた可能性があり細長い突出部分は煙

第2章 J区の遺構と遺物



道部と考えられ、長さ40cmを測る。焼土が煙道部に崩落しているが、灰層の堆積は薄い。遺物は床面中央部に集中して出土したが、形状を知りうるものは少なく羽口小片・須恵器転用砥石などが見られる。

J 54号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。強く締った砂質土。
- 2 暗褐色土 堅くしめる粘性土。
- 3 褐色土 焼土粒を多量に含む。

Fig.103 J54号住居跡

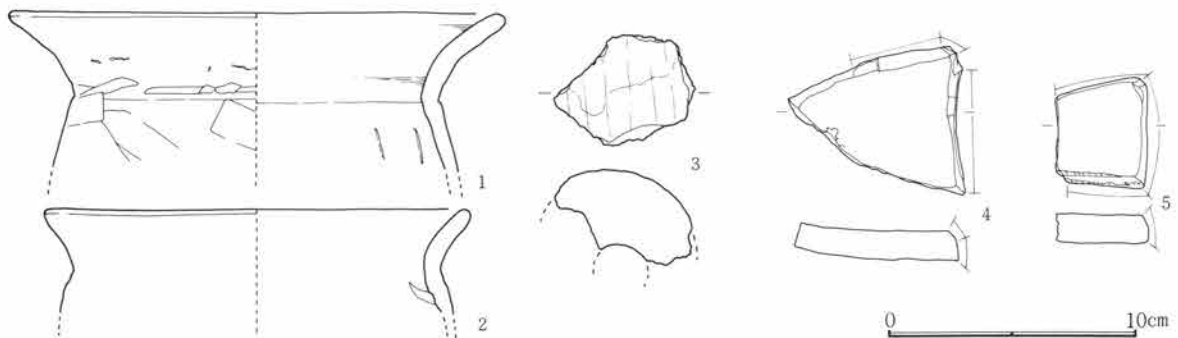


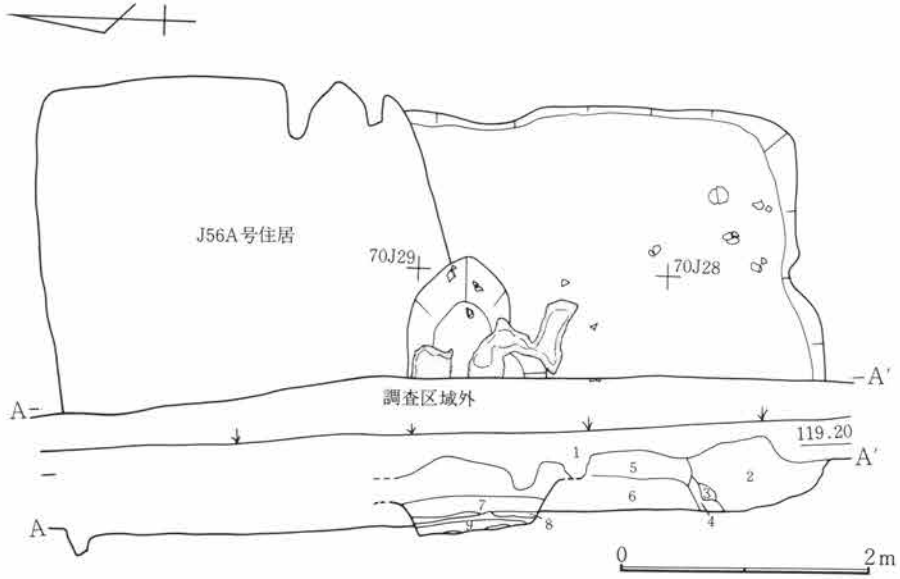
Fig.104 J54号住居跡出土遺物

J 54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
104-1 36-1	土師器 甕	口縁部 欠	20×-×(6.2)		肩部張りなく、口縁部は大きく外反して開く。口縁部横撫で。肩部斜鋭削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
104-2 36-2	土師器 甕	小片	17.2×-×(4.1)		口縁部緩く外傾して開く。内外面の器面荒く調整不明。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗
104-3 36-3	土製品 羽口	小片	長4孔径2.2			植物質混る
104-4 36-4	須恵器 転用砥石		7.1×5.9×1.2 54.5g	中央部埋土	2側面使用。壘片。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色粒混る
104-5 36-5	須恵器 転用砥石		3.7×4.4×1.1 30.8g	中央部埋土	3側面使用。壘片。	①良好 ②暗灰 ③やや密

J55A号住居跡 (Fig. 105、106・PL. 37)

J区の西端部、69・70 J 27～29の範囲にある。西半部は調査区域外に延び、未検出である。56A号・58号住居跡と重複しているが、これらより古い時期の所産であり北半部は消失している。平面形は隅丸方形と推定され、南北現長4.2m・東西の現長2.2mである。壁は高さ45cmを測り、直立する。床面は軟弱で凹凸がある。用地境に焼土が認められたが、用地外に本体が存在する58B号住居跡の竈部分と考えられる。本遺構に伴う遺物は少量であり、土師器類が検出されている。



J55A号住居跡

- 1 黒褐色土 耕作土。B軽石を含む。
- 2 黒褐色土 耕作土による擾乱穴。B軽石・炭化物・焼土粒を含む。
- 3 汚黄褐色土 粘性塊。
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 5 黒褐色土 炭化物粒・C軽石を少量含む。
- 6 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒・遺物を含む。

J58B号住居跡

- 7 黒褐色土 炭化物粒・C軽石を含む。
- 8 黒灰色土 灰・炭を含む。
- 9 灰黄色土 灰・黄色粘土・炭化物を含む。

Fig.105 J55A・58B号住居跡

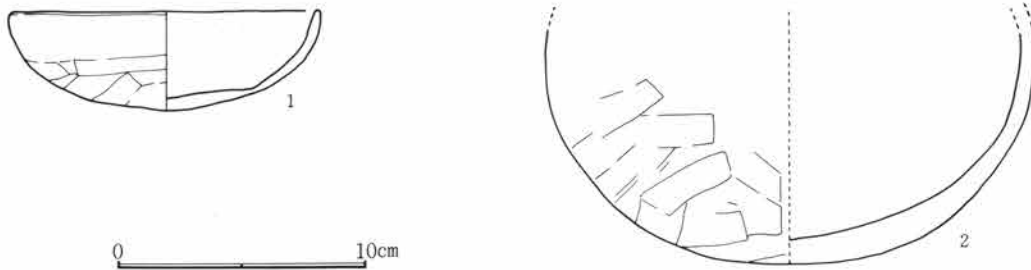


Fig.106 J55A号住居跡出土遺物

第2章 J区の遺構と遺物

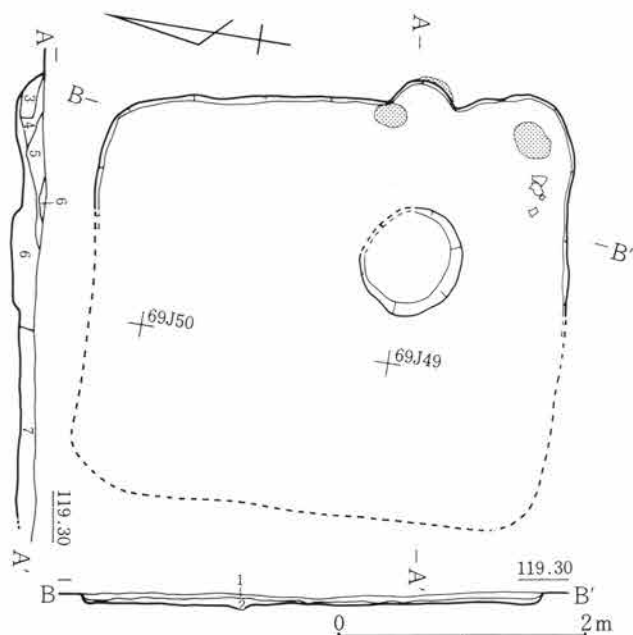
J55A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器	種 形	部 位	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
106-1 37-1	土 師	器 杯	残 存 量	12.5×—×4		丸い不安定な底部から内湾気味に口縁部へ至る。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②浅橙 ③やや密
106-2 37-2	土 師	器 甕	底 部	—×—×(9)		丸く球形を呈す。胴部から底部にかけて不定方向の篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③粗、白色粒多く混

J55B号住居跡 (Fig. 107)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.05 × 3.47	N— 90° —E	東壁東やや南寄り	—————

J区の南部に位置し、67~69J 48~50の範囲にある。南西部で58A号住居跡と重複しているが、これより古い時期の所産と考えられる。西半部は推定線で判然としないが、平面形態は隅丸の方形を呈すると考えられる。壁の高さは約10cmを測り浅い。床面はやや凹凸がみられるが比較的堅く踏み締まる。床面中央部には径80cm・深さ10cm前後の円形土坑が検出されている。竈は東壁の南に寄って付設されるが、削平が著しいためか、燃烧部は小さく半円形に掘り込まれ、袖部・煙道部は確認できなかった。火床面は床面よりやや深くなっているが焼土化も少なく、竈の左前方および床面南東隅にわずかな灰の散布が認められたにすぎない。燃烧部幅約50cm・東壁線からの奥行き約30cmを測る。出土遺物は少なく形態・時期などを推定するにたる資料は認められなかった。



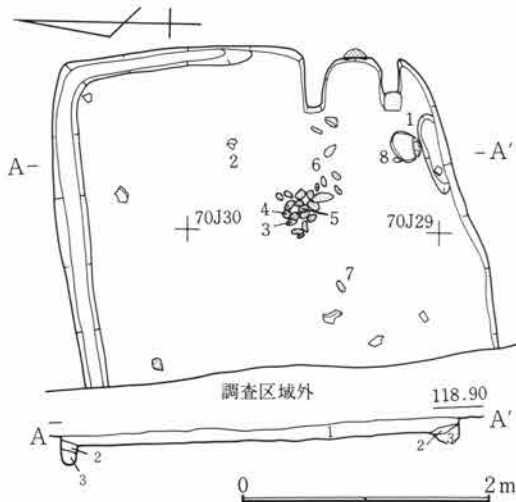
J55B号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。粘性あり。
- 2 暗褐色土 粘性あり。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む。粘性あり。
- 4 黒灰色土 黒灰・焼土塊を多量に含む。
- 5 暗褐色土 C軽石を多量に含む。焼土粒・炭化物粒が混じる。
- 6 暗褐色土 C軽石を多量に含む。微小粒の砂質土。
- 7 暗褐色土 C軽石を多量に含む堅く締った粘性土。

Fig.107 J55B号住居跡

J56A号住居跡 (Fig. 108~110・PL. 37, 38)

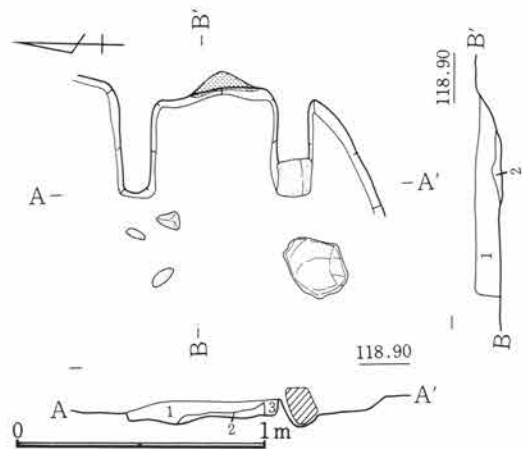
J区西端部に位置し、69・70J28~30の範囲にある。西壁寄りには調査区域外に延び、未検出である。55A号・58B号住居跡と重複しているが55A号より新しく、58B号住居跡より古い時期の所産である。平面形は隅丸方形であるが、南壁中央寄りが張出している。壁は高さ20cmを測り、直立する。東壁北半部から北壁にかけて、南壁東寄りの一部壁下に幅15cm・深さ18cmを測る溝が廻っている。床面はほぼ平坦で中央部及び竈手前が踏み固められている。竈は東壁の南隅に付設され、袖部が住居内に張り出す形態をもつ。袖は粘土を主体として構築され、右袖先端に凝灰岩の加工材を埋設している。燃烧部は壁外に突出せず床面上に設けられるが、煙道部は確認されていない。袖部長さ約40cm・内法約50cm、燃烧部奥行き48cmを測る。遺物は稀少であるが、床面中央に小形の円礫が集中して出土した。



J56A号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色粘性塊を含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色粘性粒を含む。

Fig.108 J56A号住居跡



J56A号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 2 黒色土 灰層
- 3 暗褐色土 焼土塊を含む。

Fig.109 J56A号住居跡竈

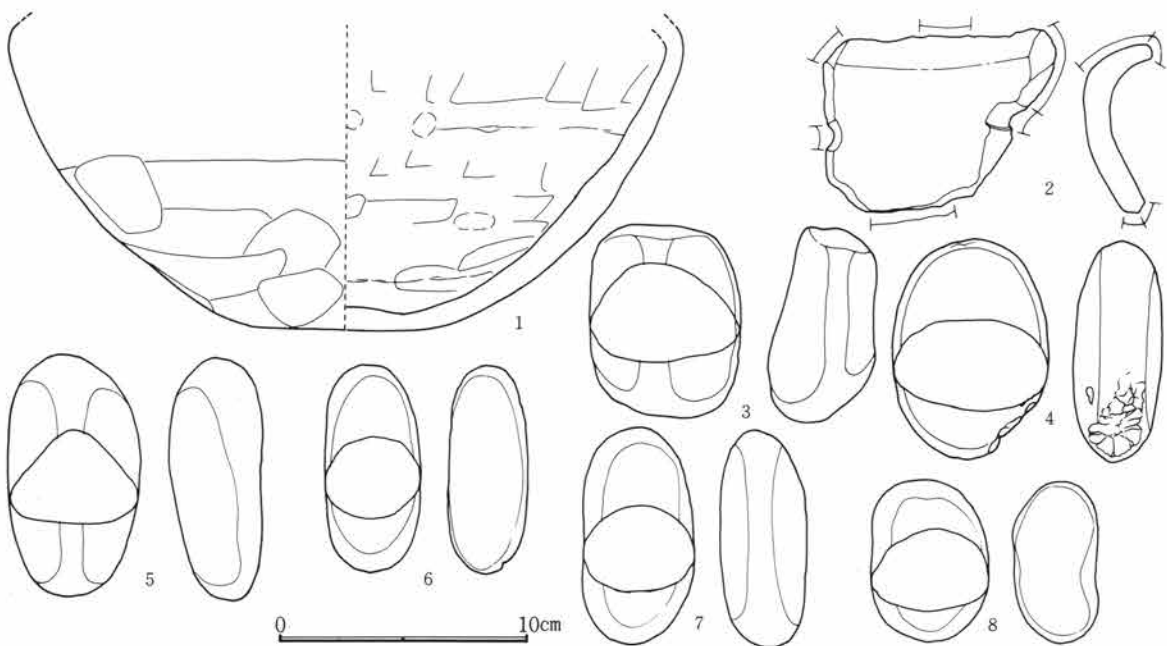


Fig.110 J56A号住居跡出土遺物

第2章 J区の遺構と遺物

J56A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
110-1 38-1	須恵器 甕	底 部	—×—×(12) 胴部径27	南東部床 面	胴部丸く張り肩部で強く内屈するか。外面叩き目後弱い篋 削り。内面あて目後撫で調整。	①良好 ②灰 ③や や粗、白色細粒混る
110-2 38-2	須恵器 転用砥石		9.2×7.4×1 95.4g	北東部床 下	全側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や や密
110-3 38-3	石		長7.7×幅6.2× 厚3.9 290g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
110-4 38-4	石		長8.7×幅6.2× 厚3.5 285g	中央部床 面	側面の一部に敲打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
110-5 38-5	石		長9.6×幅5.3× 厚3.7 255g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
110-6 38-6	石		長8.2×幅3.8× 厚3.2 140g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
110-7 38-7	石		長8.6×幅4.5× 厚3.4 210g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
110-8 38-8	石		長6.4×幅4.7× 厚3.3 155g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)

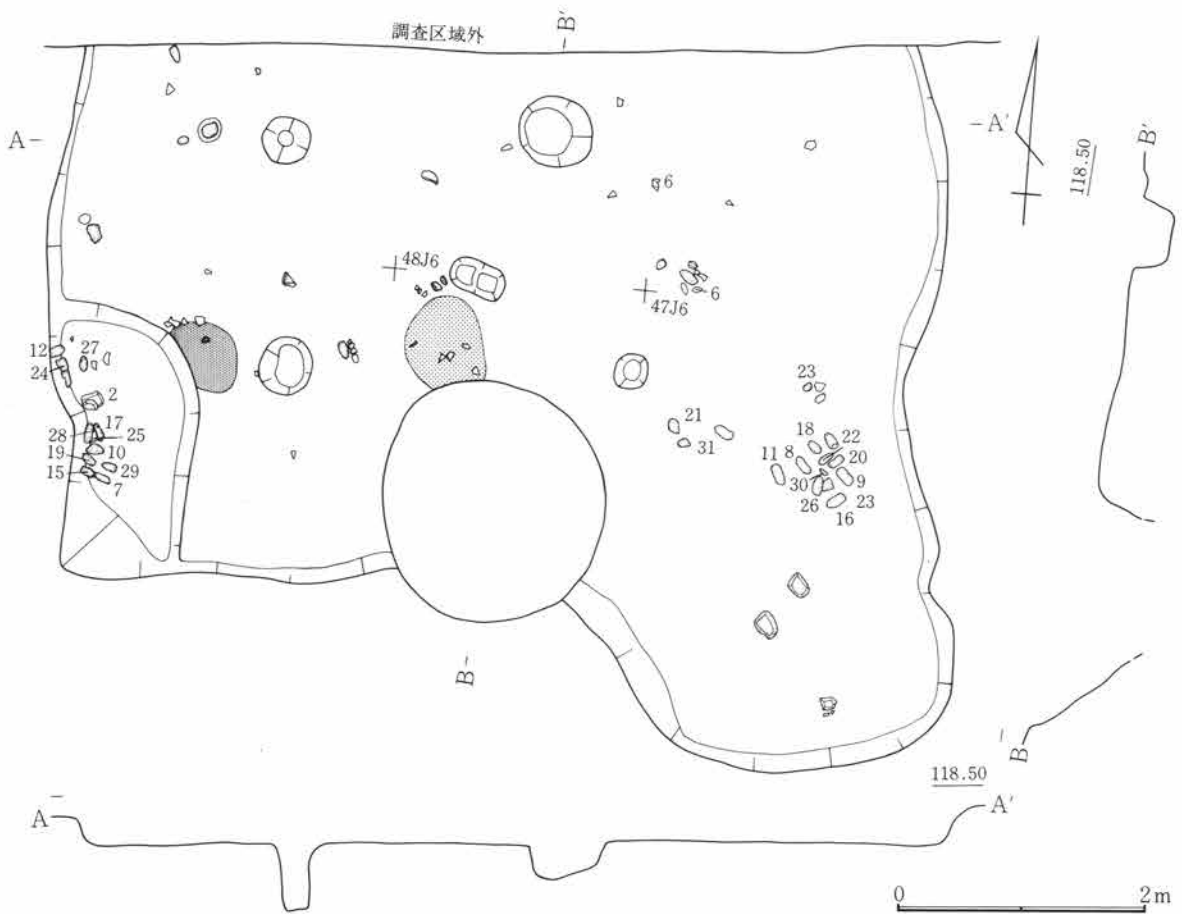


Fig.111 J56B号住居跡

J56B号住居跡 (Fig. 111~114・PL. 38~40)

J区南東部に位置し、45~49J 4~6の範囲にある。北壁寄りには調査区域外に延び未検出である。南西隅で51B号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。平面形は比較的大形の隅丸方形を呈するものと思われ、南西部に張り出し部を伴う。東西長7m、南北の現長5.7mで、張り出し部は丸みをもち西壁に対し斜め方向に約2mほど突出する。壁線は各所で歪みがあるが、高さ25cmを測り傾斜している。床面は平坦で、中央部及び張り出し部がよく踏み固められている。中央部付近に焼土と灰の堆積が別個に認められるが、いずれも当遺構の廃絶後に投棄されたものである。南壁中央寄りに後世の井戸跡が、床面の数箇所にPitがあるが、伴うものではない。竈等の付設は不明である。遺物は杯類を主とし、東部と南西部に円礫の集中が見られた。

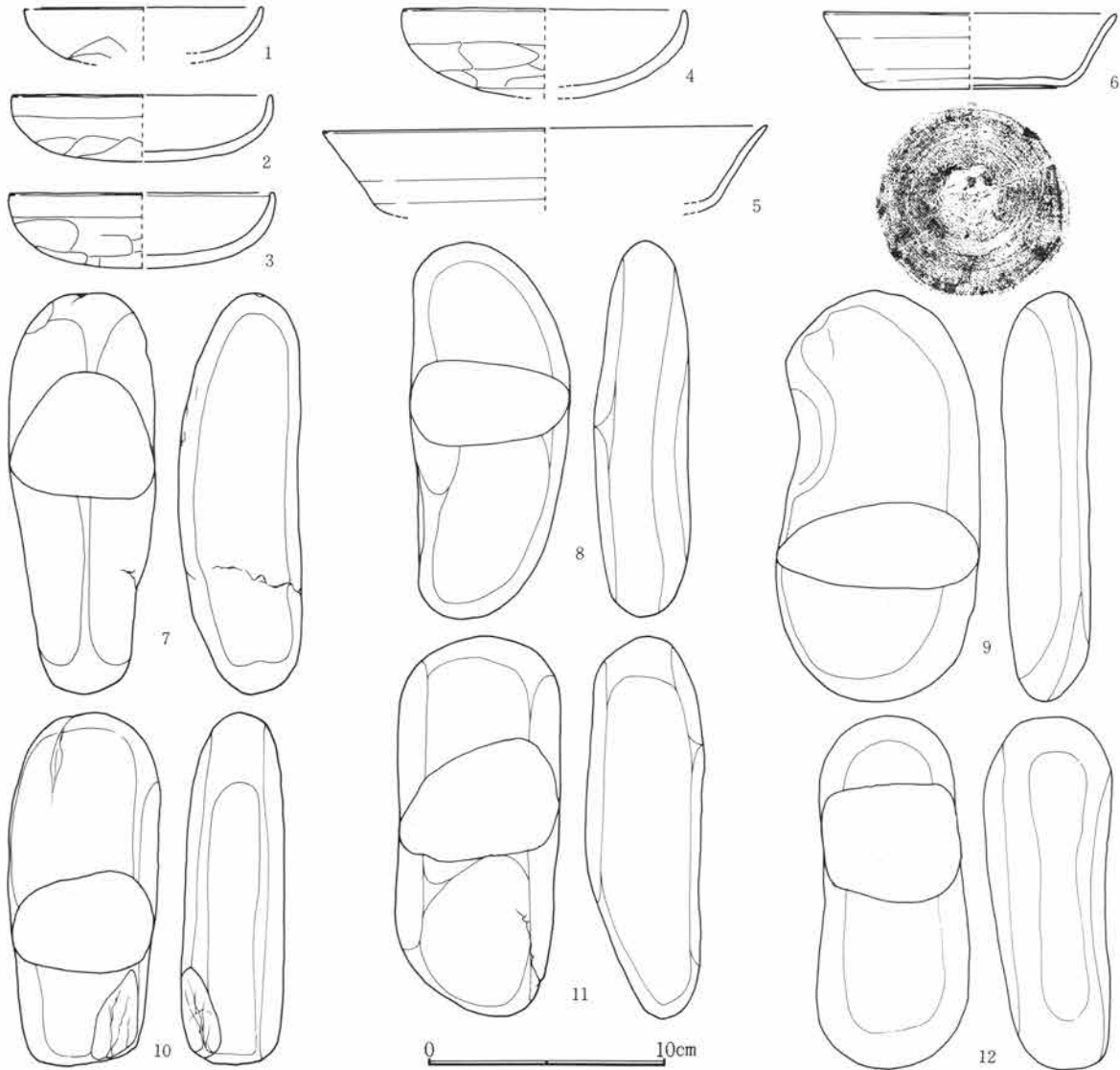


Fig.112 J56B号住居跡出土遺物(1)



Fig.113 J56B号住居跡出土遺物(2)

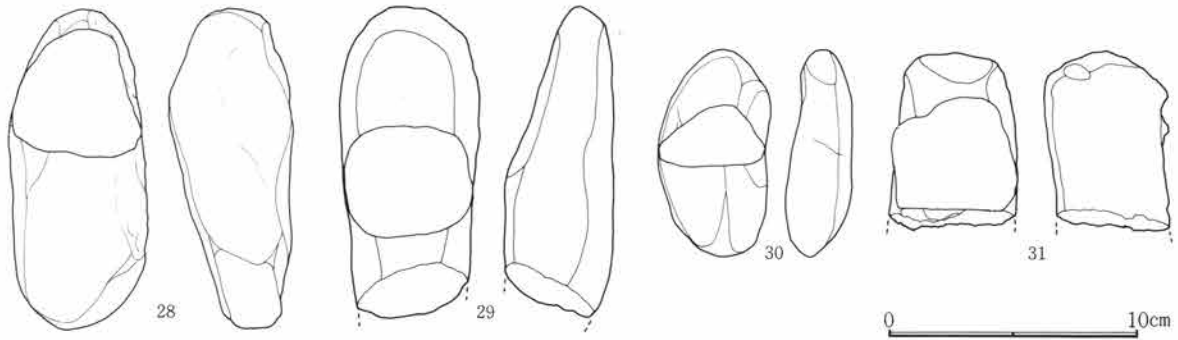


Fig.114 J56B号住居跡出土遺物(3)

J 56 B 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
112-1 39-1	土師器 杯	1/3	10×-×(2.2)	埋 土	底部浅く扁平。口縁部短かく、内湾気味に外傾する。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。内面に黒色付着物。	①良好 ②鈍い褐色 ③やや密
112-2 39-2	土師器 杯	1/3	10.8×-×2.8		底部浅く扁平で不安定。口縁部短かく、内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
112-3 39-3	土師器 杯	1/4	11×-×3.1	埋 土	底部丸く不安定。口縁部短かく、内湾気味に直立。口唇部小さく内屈。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、小石混る
112-4 39-4	土師器 杯	1/3	12×-×3.7	埋 土	底部丸く不安定。口縁部短かく、僅かに内湾。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
112-5 39-5	須恵器 杯	2/3	12.2×7.9×3.2	埋 土	器肉薄い。体部僅かに外反して外傾する。轆轤成形。回転笕切り後回転笕削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
112-6 39-6	須恵器 盤	体部1/2	18.6×-×(3.5)		器肉薄い。腰部にやや丸味をもち、体部は外反気味で大きく外傾。轆轤成形。	①良好 ②暗緑灰 ③やや密
112-7 39-7	石		16.6×6.1×5.3 720g	南西部床 面		ひん岩
112-8 39-8	石		15.6×6.7×3.8 660g	東央部埋 土		石英閃緑岩
112-9 39-9	石		17.1×8.4×3.6 870g	東央部埋 土		ひん岩
112-10 39-10	石		14.5×6.2×4.2 710g	南西部床 面西壁寄	両面に僅かな磨滅痕あり。	石英閃緑岩
112-11 39-11	石		15.7×7×5.1 820g	東央部埋 土		砂岩
112-12 39-12	石		14.6×6.3×4.9 795g	南西部床 面		石英閃緑岩
113-13 39-13	石		14.3×6.9×4.9 740g	埋 土		輝緑岩
113-14 39-14	石		13.7×8.2×4.3 655g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
113-15 39-15	石		12.9×6.1×4.5 550g	南西部床 面西壁		ひん岩
113-16 39-16	石		73.3×7.6×3.7 620g	東央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
113-17 39-17	石		14×7.7×4.1 645g	南西部床 面西壁寄	全面風化顕著。	石英閃緑岩
113-18 39-18	石	完	12.9×5.4×4.6 560g	東央部埋 土	一端に敲打痕。	輝石安山岩(粗粒)
113-19 40-19	石	完	13.2×6.3×4.1 620g	南西部床 面西壁寄		輝緑岩
113-20 40-20	石	完	13.1×6.6×4.6 540g	東央部床 面	一端に敲打痕。	輝石安山岩
113-21 40-21	石		12.5×6.8×4.7 620g	東央部床 面		閃緑岩
113-22 40-22	石		12.6×6.3×4.8 565g	東央部埋 土	両端に敲打痕。	石英閃緑岩

第2章 J区の遺構と遺物

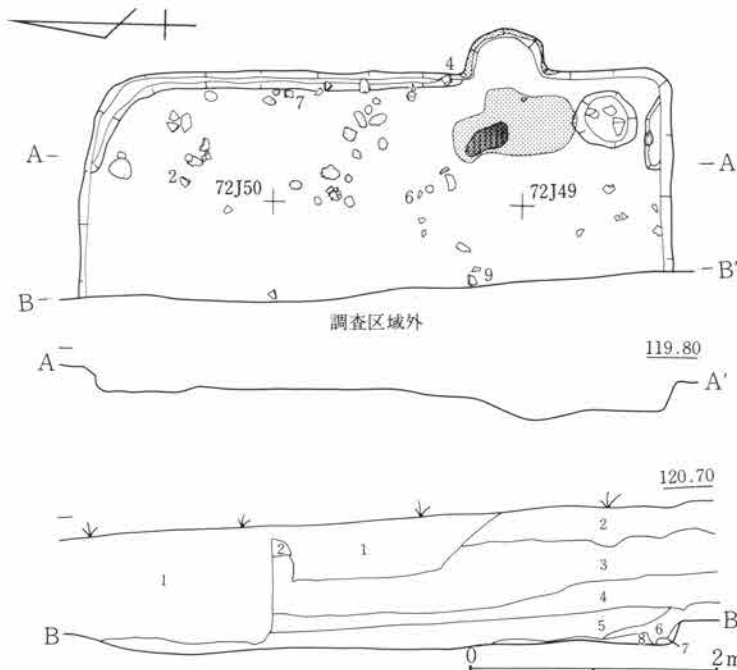
J 56 B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
113-23 40-23	石		13.2×7×3.5 535 g	東中央部床 面		石英閃緑岩
113-24 40-24	石		13.6×7.5×4 650 g	西中央部床 面西壁寄	一端に敲打痕。	輝石安山岩(粗粒)
113-25 40-25	石		13.6×7.6×3.1 515 g	東中央部床 面西壁寄		変質安山岩
113-26 40-26	石		13.1×6×4.8 600 g	東中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
113-27 40-27	石		12.5×7×4.5 510 g	東中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
114-28 40-28	石		12.7×5.3×5.1 455 g	南西部埋 土		デイサイト
114-29 40-29	石		12.3×5.6×4.4 440 g	南西部埋 土	一端が欠損。	溶結凝灰岩
114-30 40-30	石		8.2×4.5×2.7 120 g	東中央部埋 土		グラノファイヤー
114-31 40-31	石	半欠	(7.1)×5.2×4.5 250 g	東中央部床 面		溶結凝灰岩

J 57 A号住居跡 (Fig. 115~117・PL. 40、41)

J区北西部に位置し、北壁寄りにはK区にかかり、71・72 J 48~K 0の範囲にある。52号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。西半部は調査区域外に延びており未検出であるが、平面形態は方形を呈すると考えられる。南北長は4.8mを測り、東西は1.8mまで確認できた。竈を基軸にする東西の方位はN-90°-Eを示す。壁は高さ40cmを測り、ほぼ直立する。北東隅から東壁北半の壁下に幅約10cm・深さ57cmの溝が設けられている。床面は多少凹凸があり、軟弱である。竈は東壁の南寄りに付設され、半円形に掘り込まれる。袖部・煙道部は確認されていない。燃烧部内壁はよく熱を受けている。燃烧部幅70cm・奥行き30cmを

測るが、竈手前の床面には火床と考えられる焼土面と灰の堆積が認められることから、本来燃烧部は住居内にあり袖部が存在していた可能性もある。遺物は床面上に散在して検出されたが、羽口小片・角閃石安山岩製や須恵器転用の砥石類がみられる。



J 57 A号住居跡

- 1 小礫
- 2 耕作土
- 3 暗褐色土 B軽石を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 6 暗褐色土 C軽石を僅かに含む。
- 7 褐色土 弱粘性土。
- 8 褐色土 粘性土。

Fig.115 J57A号住居跡

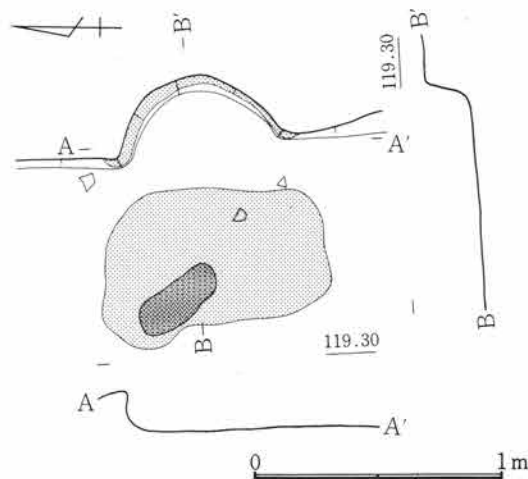


Fig.116 J57A号住居跡竈

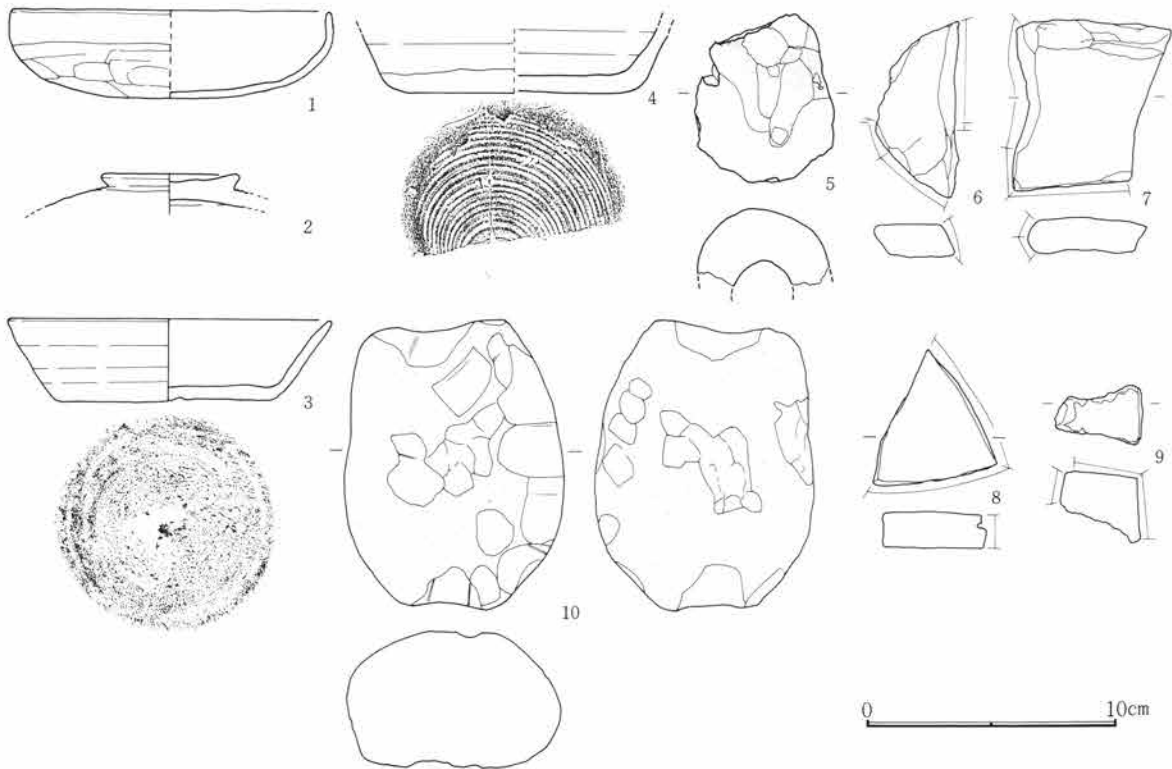


Fig.117 J57A号住居跡出土遺物

J 57 A 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
117-1 41-1	土 師 器 杯	1/2	12.7×—×3.5	貯蔵穴内	底部丸味をもち不安定。口縁部やや内傾気味に立つ。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
117-2 41-2	須 恵 器 蓋	摘 部	—×—×(1.5) 摘径5.6	北東部床 面	低い環状摘。端部断面丸い。天井部丸く、回転篋削り。体部中位で僅かにくびれるがほぼ直線的に外傾する。轆轤成形。回転篋切り後弱い撫で。	①良好 ②灰 ③やや密
117-3 41-3	須 恵 器 杯	ほぼ完	13×8.5×3.2	貯蔵穴内		①良好 ②灰 ③やや粗、白色粒混る

第2章 J区の遺構と遺物

J57A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
117-4 41-4	須恵器 杯	底部½	—×8.4×(2.3)	北東部掘 形	腰部に丸味をもつ。轆轤成形。回転糸切り、周辺部弱い撫 で。	①良好 ②灰白 ③ やや密
117-5 41-5	土製品 羽口	小片	長6.7孔径2.2	南部床面		
117-6 41-6	須恵器 転用砥石		6.9×3.1×1.3 34.6g	東部床面	2側面使用、蹠片、7と同一個体を使用か。	①良好 ②灰 ③密
117-7 41-7	須恵器 転用砥石		6.5×6×1.3 86.3g	東壁際床 面	2側面使用、蹠片、6と同一個体を使用か。	①良好 ②灰 ③密
117-8 41-8	須恵器 転用砥石		5×5.5×1.4 37.9g	貯蔵穴内	1側面使用、蹠片。	①良好 ②暗灰 ③ やや粗、黒色粒混る
117-9 41-9	石製品 砥石	残欠	3.4×2.2×1.4 17.3g	中央部床 面	多面使用。	流紋岩(砥沢?)
117-10 41-10	石製品 砥石		11.5×8.8×5.4 53.74g	貯蔵穴内	小範囲の多面使用。	角閃石安山岩

J57B号住居跡 (Fig. 118、119・PL. 41、42)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	4.20 × 3.50	N-76°-E	———	———

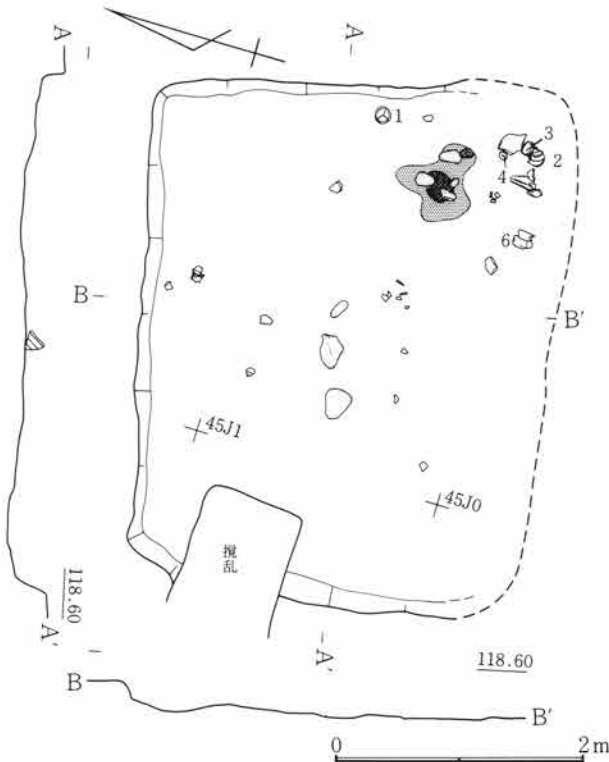


Fig.118 J57B号住居跡

J区南東部に位置し、南部の一部はI区にかかり44~46 I 49~J 1の範囲にある。西は49号住居跡に接し、これより古い時期の所産である。平面形は東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。東西長4.2m、南北長3.5mを測る。東西軸方位はN-76°-Eを示す。壁は高さ30cmを測り、傾斜している。南壁はほとんど失われている。床面は凹凸があるが、よく踏み固められている。竈は南東部隅に設けられていたと推定されるが、攪乱を受けて全く形を止めていない。南東部床面に掻き出されたとと思われる焼土と灰の堆積があるのみである。遺物は南東部床面を中心に散在していた。

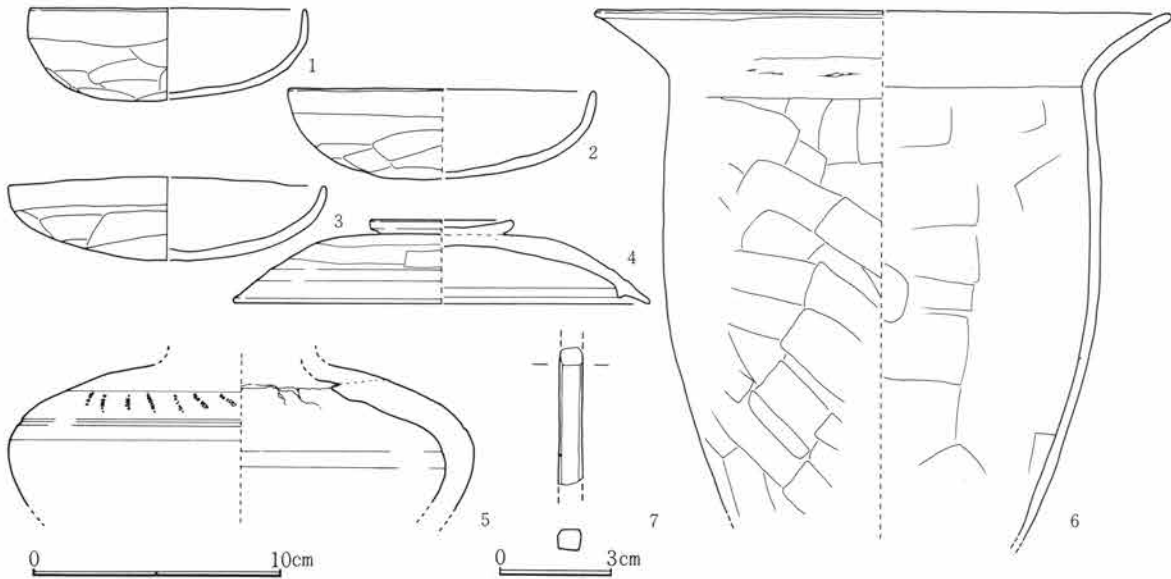


Fig.119 J57B号住居跡出土遺物

J 57 B 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
119-1 42-1	土 師 器 杯	1/5	11.2×-×3.7	南東部床 面	底部やや深く丸味をもち不安定。口縁部直立する。口縁部 横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗、砂混る
119-2 42-2	土 師 器 杯	1/5	12.4×-×3.6	南東部床 面南壁寄	底部やや深く丸味をもち不安定。口縁部直立する。口縁部 横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
119-3 42-3	土 師 器 杯	完	12.7×-×3.3	東央部床 面東壁寄	底部丸味をもち不安定。口縁部直立気味。口縁部横撫で。 底部不定方向の篋削り。内面に黒色付着物。	①良好 ②赤褐 ③ やや粗、砂混る
119-4 42-4	須 恵 器 蓋	1/4	16.8×-×3.3 摘径5.8	南東部床 面	天井部平坦をなし、体部は折れて口縁部へ直線的に開く。 内面にかえり付く。扁平で大振の環状摘、天井部回転篋削。	①良好 ②灰 ③や や粗
119-5 42-5	須 恵 器 長頸瓶	胴部天 井1/2	-×-×5.7 肩部径18.5	埋 土	天井部張らみをもつ。肩部に凹線巡り、天井部縁辺に6個 1組の列点文が施される。	①良好 ②灰 ③や や粗、白色粒混る
119-6 42-6	土 師 器 甕	上半部 1/4	23×-×(21) 胴部径17.5	南東部床 面南壁寄	胴部張りなく長胴形を呈す。口縁部大きく外傾して開く。 口縁部横撫。胴部斜篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
119-7 42-7	鉄 製 品 -	- (片)	長(3.6)× 幅0.6×厚0.6	南東部床 面	用途不詳。角棒、両端を欠く。全面錆化。X線透視復元。	

J 58 A 号住居跡 (Fig. 120、121・PL. 42、43)

J区南東部に位置し、一部はI区にまたがり49~51 I 49~J 1の範囲にある。北東部が50B号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。平面形は隅丸方形を呈するが、北壁が弧を描き北西部が歪み東壁に比べ西壁は約1m程短くなっている。東西長4.7m・南北長4.3mと東西がやや長く東西軸方位はN-87°-Eを示す。壁は高さ25cmを測り、傾斜している。床面には凹凸があるが、中央部がよく踏み固められている。床面中央および西壁に後世の攪乱穴がある。東壁南寄りに不明瞭な部分があるが、焼土や灰の散布は全く認められず竈の存在した可能性は少ない。遺物は床面各所に散在しており、土師器杯・甕と小円礫が多い。

J 58 B 号住居跡 (Fig. 105・PL. 37)

J区の西縁に位置する。55A号・56A号住居跡と重複しており、これらより新しい時期の所産である。しかしながら、調査区域内ではわずかに竈の先端部と思われる部分を確認したのみであり、平面形態など詳細は全く不明である。

第2章 J区の遺構と遺物

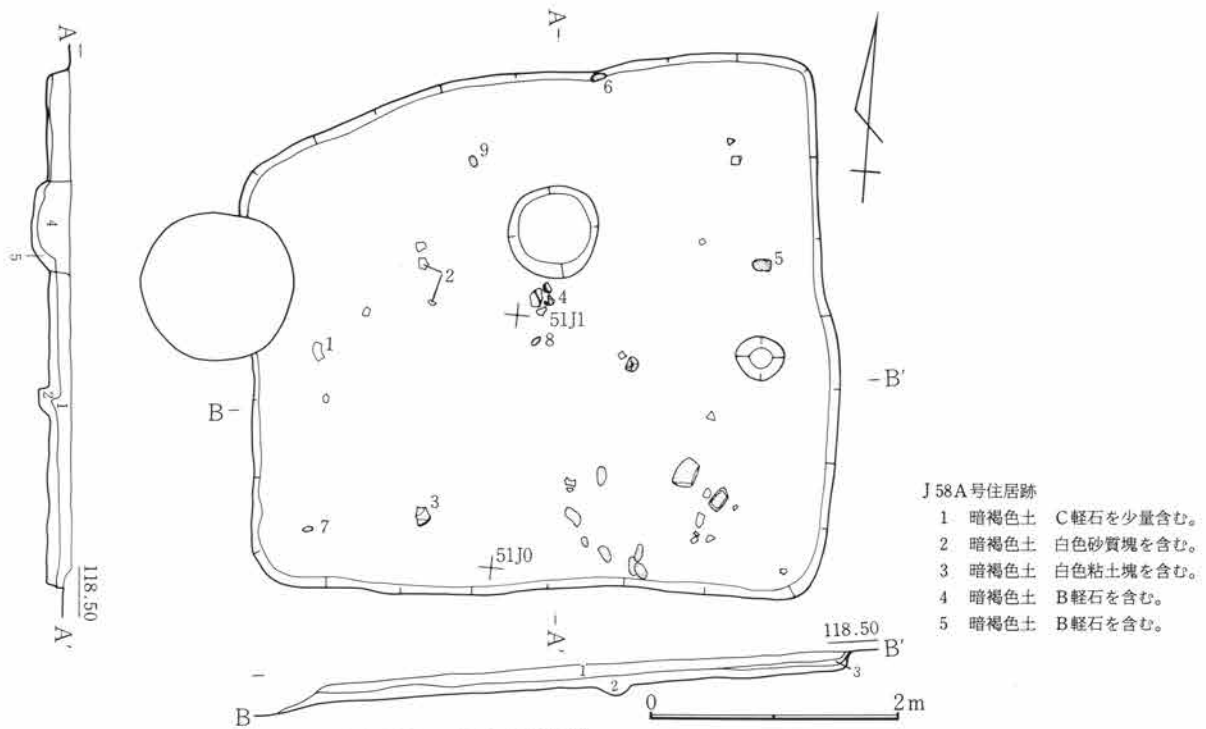


Fig.120 J58A号住居跡

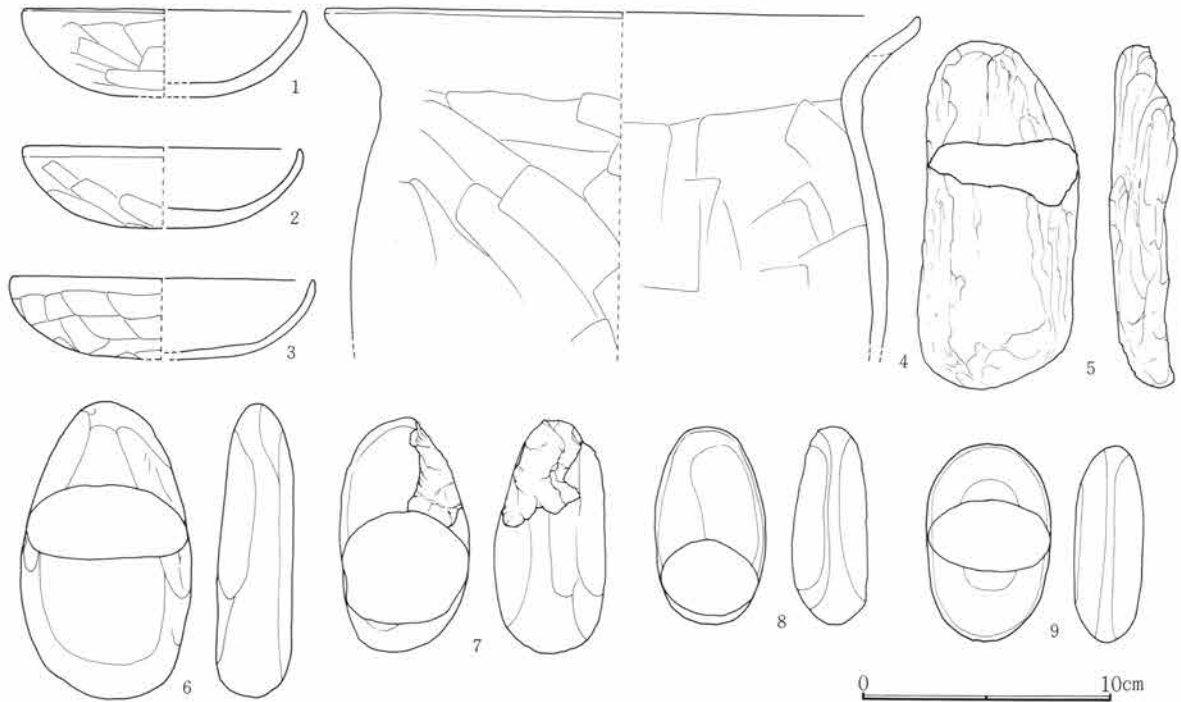


Fig.121 J58A号住居跡出土遺物

J58A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
121-1 43-1	土 師 器 杯	1/4	11.2×-×3.5	西央部床 面	器肉厚い。底部丸く内湾気味に開き口唇部は尖って直立する。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②明黄褐 ③やや密
121-2 43-2	土 師 器 杯	1/4	11.2×-×3.2	西央部床 面	底部肥厚し、丸く不安定。口縁部内湾気味に直立する。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗、砂混る

J 58 A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
121-3 43-3	土 師 器 杯	1/4	12.2×—×3.2	南西部床 面	底部丸味をもつ。口縁部短かく折れて直立する。口縁部横撫で。底部上半横・下半は不定方向寛削り。	①良好 ②明褐 ③やや粗、砂混る
121-4 43-4	土 師 器 甕	1/4	23.9×—× (13.4) 胴部径21.3	中央部床 面	胴部張らみ少なく長胴形を呈す。口縁部外反後上半は内湾して開く。口縁部横撫で。胴部斜寛削り。内面横寛撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
121-5 43-5	石	1/4	長13.9×幅6.1× 厚(2.7) 285g	東中央部床 面		流紋岩
121-6 43-6	石	完	長11.8×幅6.9× 厚2.9 360g	北中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
121-7 43-7	石	完	長9.3×幅5.2× 厚4.4 305g	南西部床 面		輝石安山岩(粗粒)
121-8 43-8	石	完	長7.8×幅4.4× 厚2.9 140g	中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
121-9 43-9	石	完	長7.8×幅5× 厚2.7 170g	北中央部床 面		石英閃緑岩

J 59号住居跡 (Fig. 122~124・PL. 43)

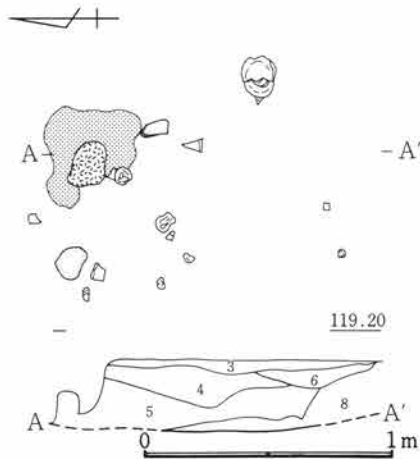
J区北西部に位置し、69~71J 41・42の範囲にある。西半部は調査区域外に延びており、未検出である。1号・2号住居跡・溝などと重複しているが、当遺構が最も古い。平面形は消失部分が多く不明であるが、おそらく方形を呈すると思われる。壁は東半で高さ30cm・西半で高さ15cmを測り、いずれもほぼ直立する。床面は東半部に凹凸が顕著で、西半は平且である。西半部には小形の鍛冶炉があり、炉の東側から約15cm程度低くなり段をなしている。この床面の高低差が鍛冶炉に対してどのような機能をもっていたかは不明である。出土遺物には椀形鉾滓や鞆羽口を伴い、当遺構が鍛冶関連の施設であったことを示しており、さらに

埴の存在は鑄造作業も同時に行われた可能性も考えられる。



Fig.122 J59号住居跡

第2章 J区の遺構と遺物



J 59号住居跡・鍛冶炉

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 黄褐色土 粘性塊を含む。
- 3 黒色土
- 4 黄褐色土 粘性塊を含む。
- 5 黒色土 粘性土。
- 6 赤色土 焼土。
- 7 黒色土 灰層。
- 8 黄褐色土 粘性塊を含む。

Fig.123 J59号住居跡鍛冶炉

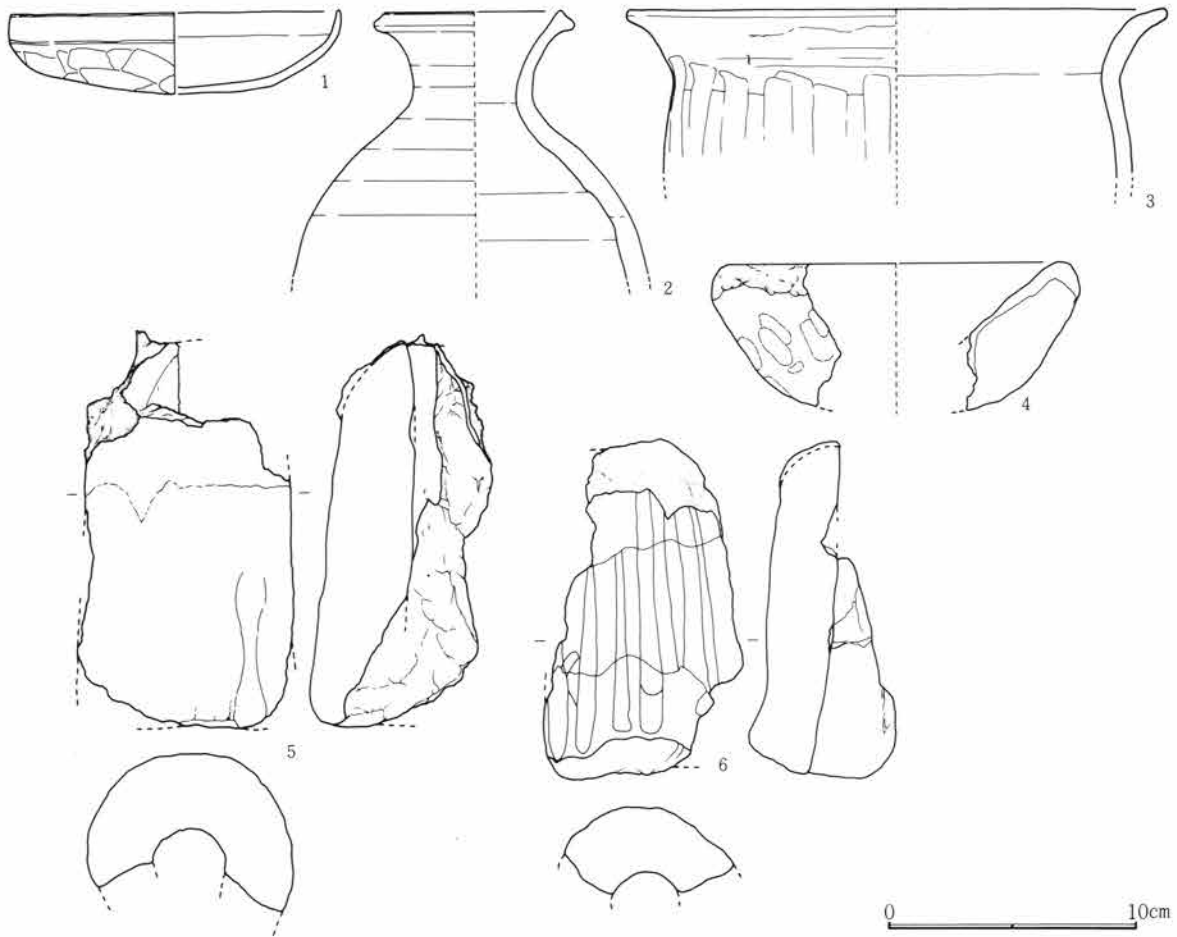


Fig.124 J59号住居跡出土遺物

J 59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
124-1 43-1	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.2×—×3.3	北央部床 面	底部やや扁平。口縁部は僅かな段をもって直立する。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③密、砂混る

J 59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
124-2 43-2	須 惠 器 瓶	口~中 ($\frac{1}{4}$)	8.1×-×(10.5) 胴部径14.2	北東部床 面	肩部張りなく丸味をもつ。頸部外反し上半は開く。口唇部 やや幅広く矩形をなす。胴部細い楕円調整。	①良好 ②灰白 ③ やや密
124-3 43-3	土 師 器 甕	口縁部 $\frac{1}{4}$	21.7×-×(6.7) 胴部径18.8	埋 土	胴部張り少ない。口縁部外反して、上半はさらに大きく外 反する。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗、砂混る
124-4 43-4	土 製 品 小 片 罌 埴	小 片	14×-×(9)	埋 土	口唇部及び内面に銅溶解物付着。	
124-5 43-5	土 製 品 罌 羽 口	$\frac{1}{2}$	長5.9孔径9孔径 3	北東部床 面	先端部溶解。	
124-6 43-6	土 製 品 罌 羽 口	$\frac{1}{2}$	長13.2孔径2.7	北東部床 面	先端部溶解。縦方向の撫痕顕著。	

J 60号住居跡 (Fig. 125~127・PL. 44)

J区南部に位置し、54・55 J 10~13の範囲にある。西半部は調査区域外に延びており、未検出である。平面形は隅丸方形に近似するものと思われるが、歪みが大きい。壁は高さ10~15cmを測り、ほぼ直立する。床面は平坦でよく踏み固められている。床面の中央寄りに、円形の鍛冶炉が設けられている。炉は径70cm、深さ20cmを測り、炉底は丸底である。粘土を貼付した中央部は堅く珪質化して灰色を呈し、周縁は赤化が著しい。炉底や周縁には溶解物や鉱滓が付着している。炉の南西近くに鉄床に用いたと思われる台石が埋設されている。長径45cm程度の楕円形で、上面は打撃痕が著しく被熱に因る赤化が顕著である。遺物には土師器の小形品と罌羽口がある。59号住居跡同様、当遺構も鍛冶施設である。

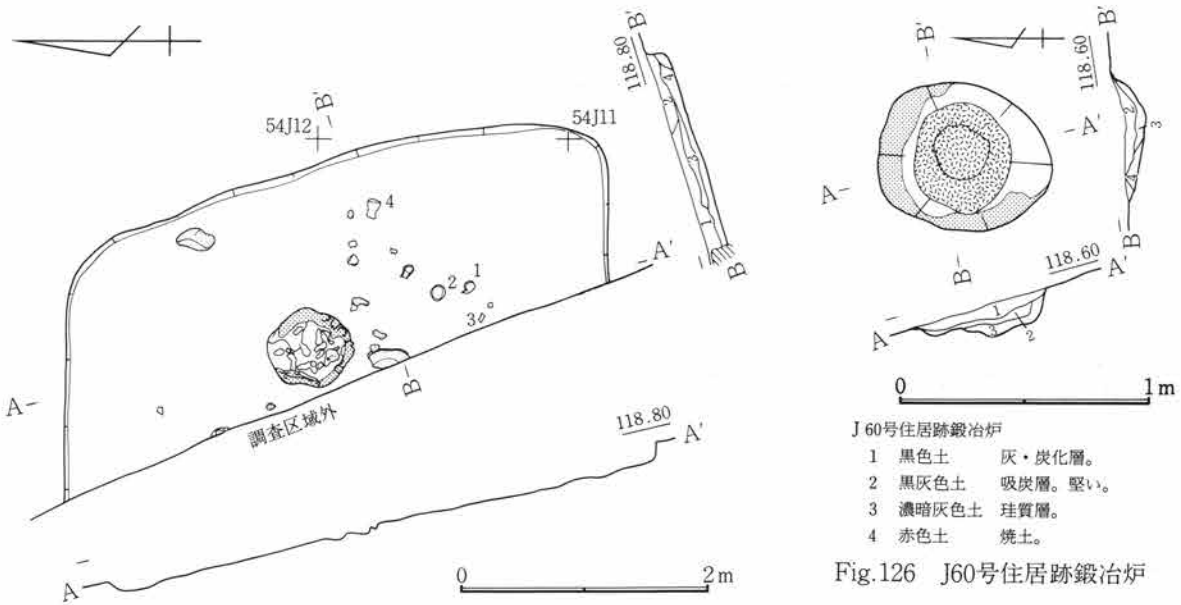


Fig.125 J60号住居跡

Fig.126 J60号住居跡鍛冶炉

第2章 J区の遺構と遺物

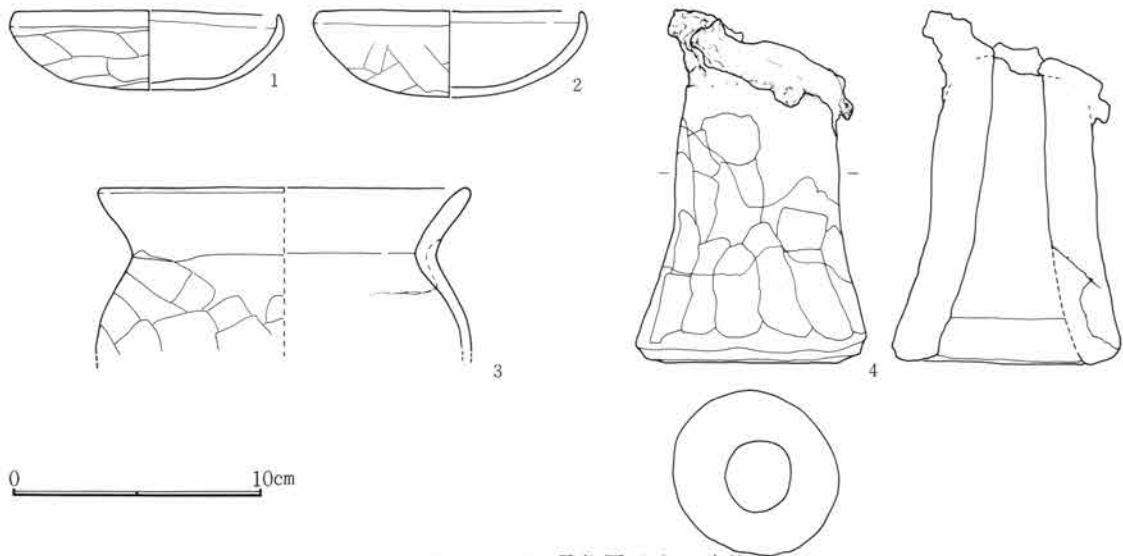


Fig.127 J60号住居跡出土遺物

J 60号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
127-1 44-1	土師器 杯	ほぼ完	11×-×3.2	中央部床 面	底部丸く不安定。口縁部短かく内屈。口縁部横撫で。体部横篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、輝性黒色粒混
127-2 44-2	土師器 杯	完	10.5×-×3.4	南中央部床 面	底部丸く不安定。口縁部短かく内屈。口縁部横撫で。体部弱い横篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密、砂混る
127-3 44-3	土師器 壺	口縁部 1/4	14.9×-×(6.8)	南中央部床 面	胴部やや丸く脹らみ、口縁部はくの字状に外傾。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、細砂混る
127-4 44-4	土製品 籬羽口	完	14×9×5.5 孔径5.8×2	東中央部床 面	先端部熔解付着物著しい。熔解角度約20°。基部に縦方向の面取状成形あり。	

J 61号住居跡 (Fig. 128~131・PL. 45、46)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
張出付 隅丸長方形	7.50 × 4.35	N- 108° -W	北壁やや西寄り	—————

J区南部に位置し、50~53 J 11~14の範囲にある。西竈を有する大形の遺構である。北西部に現代の攪乱穴があるが、ほぼ全形を知ることができる。平面の基本形は東西に長い隅丸長方形であるが、他の例に比べかなり大形の張り出し部を伴う。張り出し部は2箇所あり、1箇所は東壁北寄りに設けられ、東西・南北ともに2.3mを測る。もう1箇所は北壁中央部より突出し、東西1.1m・南北1.8mを測り、北壁が弧を描く。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。北壁東寄りと、竈部分を除く西壁及び南壁に沿って壁下溝が設けられている。床面は全体に平坦であるが、張り出し部に連続する部分はその奥壁に向かって緩やかに斜上している。全面よく踏み固められているが、本体中央部と竈手前が顕著である。本体には支柱穴にあたる Pit が4箇所検出されている。P₁は径25cm・深さ47cm、P₂は径25cm・深さ45cm、P₃は径30cm・深さ58cm、P₄は径30cm・深さ35cmを測る。各柱間はP₁・P₂は2.85m、P₂・P₃は2.2m、P₃・P₄は2.8m、P₁・P₄は2.05mである。竈は西壁のほぼ中央部に付設され、袖部が住居内に張り出す。両袖ともに粘土を主体として構築され、先端に凝灰岩の加工材を付設している。燃烧部は壁外に突出していない。焚口相当部中央に袖材と同様の加工材が埋設されているが、その位置から通常の支脚ではなく、焚口天井材の支材と考えられる。煙道部は短く、

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

長さ40cmを測る。燃烧部・煙道部ともによく熱を受け、燃烧部底面には焼土・灰が堆積していた。袖材間内法50cm、燃烧部奥行き60cmを測る。遺物は床面中央部や南壁沿いに出土し、器種も比較的多く土師器杯類のほか須恵器長頸瓶・平瓶などがある。

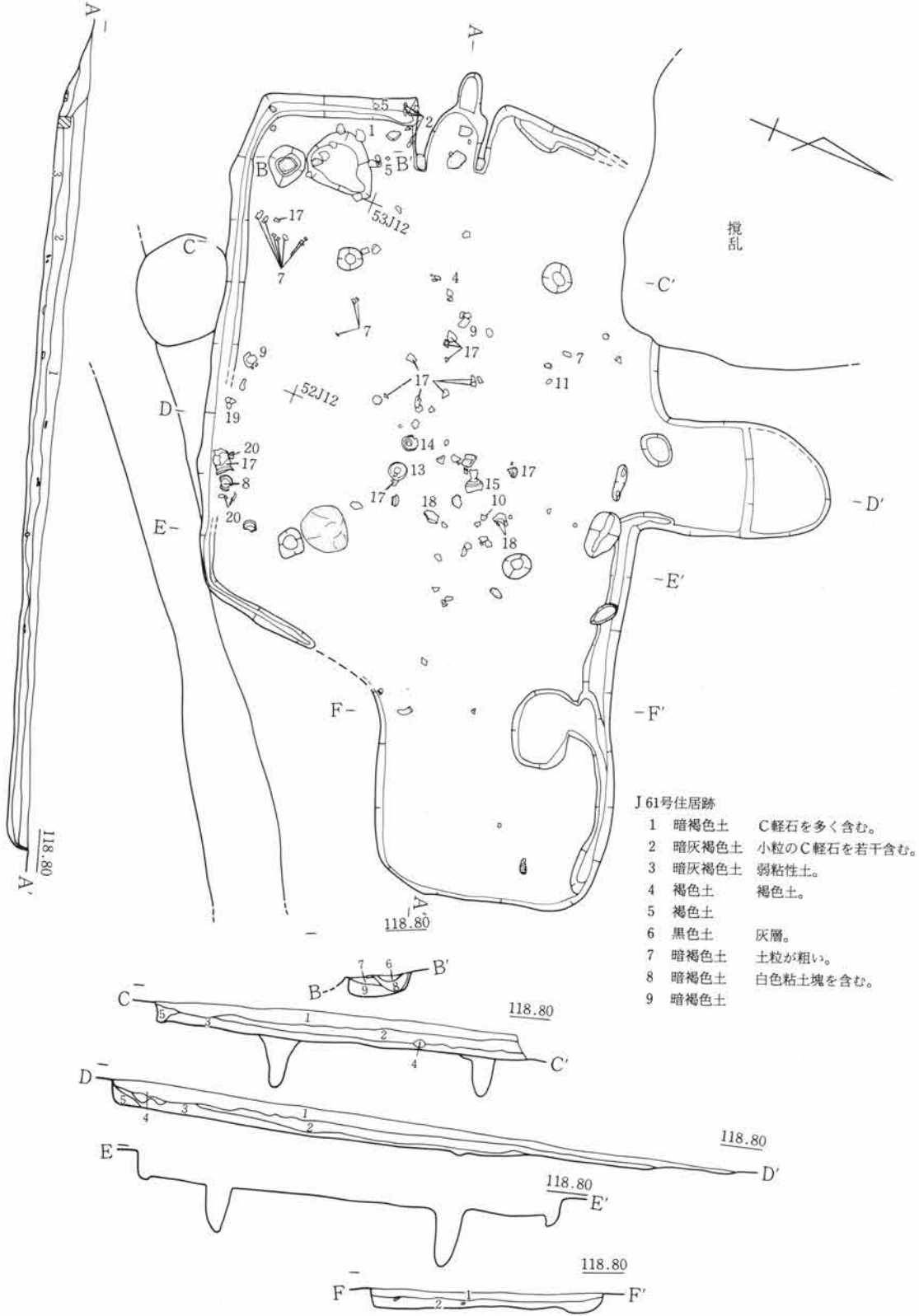
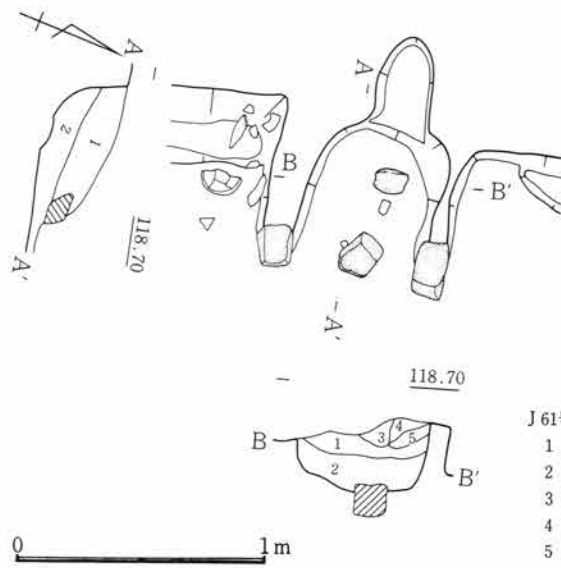


Fig.128 J61号住居跡

0 2m

第2章 J区の遺構と遺物



J61号住居跡竈

- | | |
|---------|-----------|
| 1 赤色土 | 焼土塊 |
| 2 赤灰色土 | 焼土粒・灰を含む。 |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 4 暗褐色土 | 白色粘土粒を含む。 |
| 5 暗灰褐色土 | 砂質土。 |

Fig.129 J61号住居跡竈

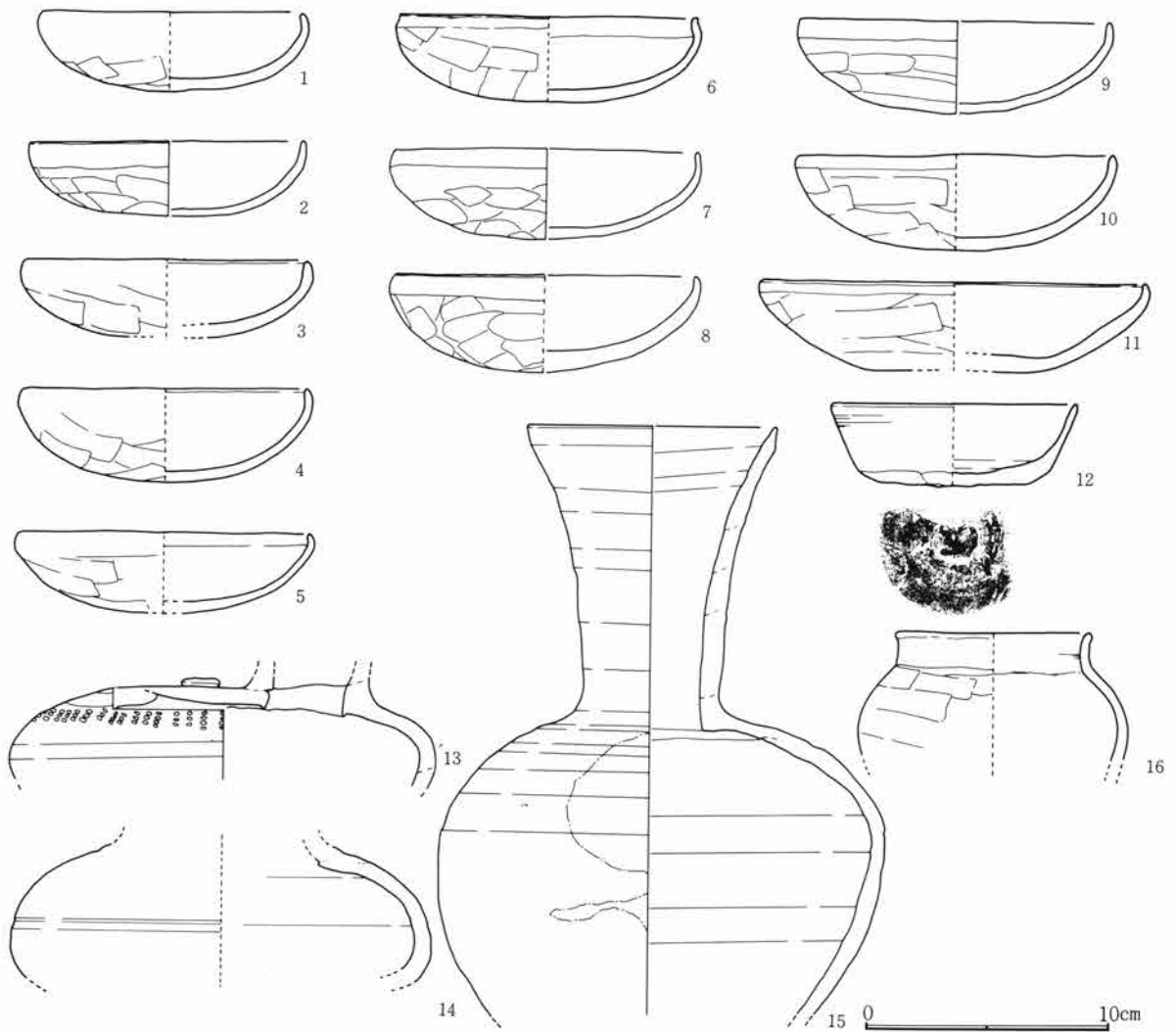


Fig.130 J61号住居跡出土遺物(1)

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

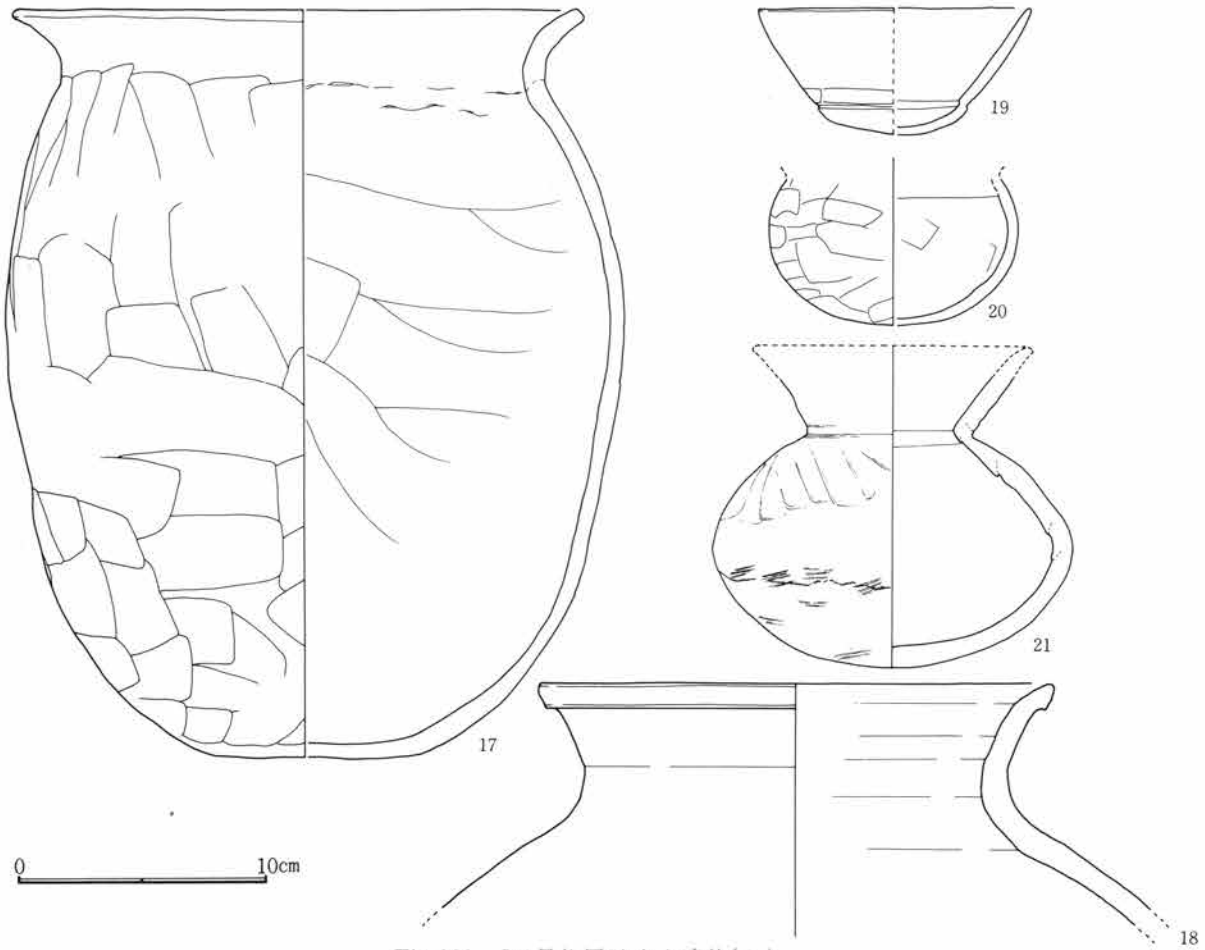


Fig.131 J61号住居跡出土遺物(2)

J 61号住居跡出土遺物観察表

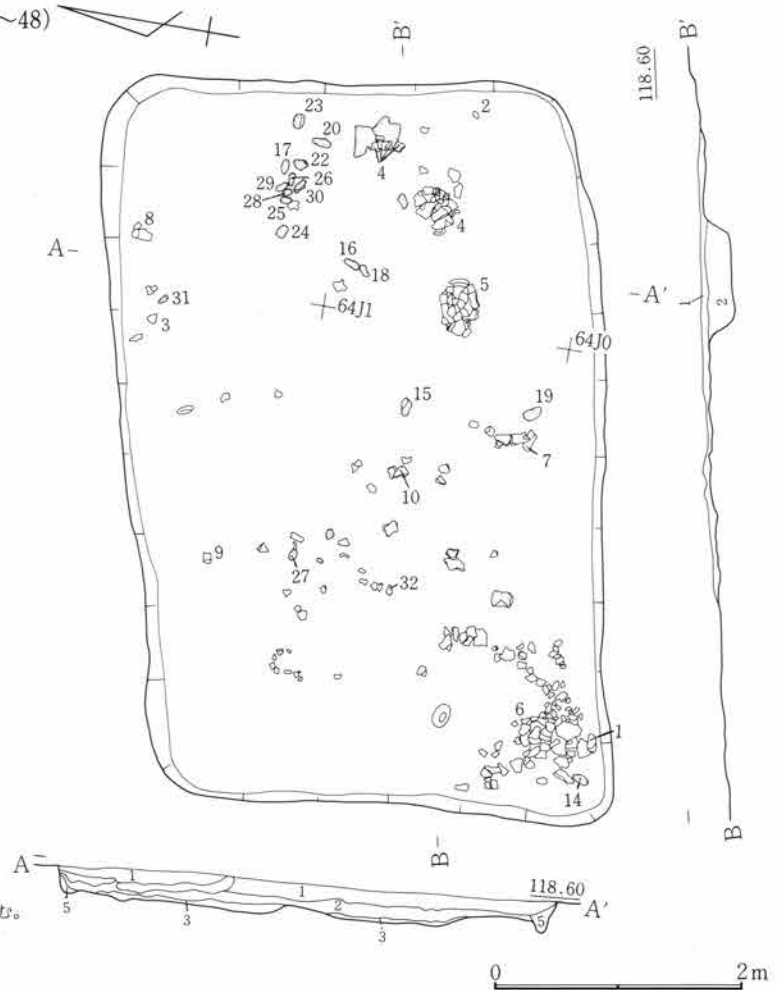
Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
130-1 45-1	土 師 器 杯	⅔	10.8×-×3.3		底部丸く不安定。口縁部短かく緩く内湾する。口縁部横撫で底部不定方向の笕削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
130-2 45-2	土 師 器 杯	¾	11.2×-×3.0	竈左袖埋土	底部丸く不安定。口縁部短かく直立気味。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
130-3 45-3	土 師 器 杯	⅔	11.8×-×3.1		底部丸く不安定。口縁部短かくやや内傾する。口縁部横撫で底部不定方向の笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、砂混る
130-4 45-4	土 師 器 杯	小片	11.8×-×3.8	掘方	底部やや深く、丸味強く不安定。口縁部短かく内湾する。口縁部横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
130-5 45-5	土 師 器 杯	¼	12×-×3.3		底部丸く不安定。口縁部短かく内屈する。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
130-6 45-6	土 師 器 杯	½	12.2×-×3.5		底部丸く不安定。口縁部短かく内傾し、口唇部は外へ折れる口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、砂混る
130-7 45-7	土 師 器 杯	ほぼ完	12.4×-×3.7	南西部埋土	底部丸く不安定。口縁部緩く内湾する。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密、砂混る
130-8 45-8	土 師 器 杯	口縁部 ⅓欠損	12.5×-×3.9	西中部埋土 西壁寄	底部丸く不安定。口縁部短かく緩く内湾する。器内厚い。口縁部横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、砂混る
130-9 46-9	土 師 器 杯	⅔	12.9×-×3.8	南中部床 面南壁寄	底部丸く不安定。口縁部短かく緩く内湾する。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②橙 ③密
130-10 46-10	土 師 器 杯	½	13×-×3.9		底部深く、丸く不安定。口縁部短かく直立気味。口縁部横撫で。底部不定方向の笕削り。	①良好 ②橙 ③粗砂混る
130-11 46-11	土 師 器 杯	⅔	15.8×-×3.5		やや扁平な底部なし、体部は直線的で大きく開く。口縁部短かく内傾する。口縁部横撫で。体・底部不定方向の笕削り。	①良好 ②淡橙 ③やや粗、砂混る

J 61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
130-12 46-12	須 惠 器 杯	1/4	10×6×3.3	埋 土	底部の器肉が厚く腰部に丸味をもつ。体部直線的に立つ。轆轤成形。回転篋切り。腰部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
130-13 46-13	須 惠 器 平 瓶	胴部天 井	—×—×(5.7) 肩部径17	中央部床 面	肩部は丸味もち、天井部は扁平で僅かに脹らむ。天井中央に径1.4cmの円盤を貼付。肩部縁辺に4点1組の刺突文。	①良好 ②オリブ 灰 ③やや粗
130-14 46-14	須 惠 器 長 頸 瓶	胴部天 井	—×—×(5.5) 肩部径17		天井部丸く張り、胴部は球形を呈すか。天井部中央を径6cmの円盤で塞ぎ、径5cmの頸部孔を穿つ。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色細粒混る
130-15 46-15	須 惠 器 長 頸 壺	底部欠 損	10.1×—× (24.1)胴部径18.2	中央部埋 土	胴部丸く脹る。口頸部長さ12cm、基径6cm。緩く外反気味。口唇部尖り直線的に外傾する。頸部接合部は径7cmの円盤で塞ぐ。胴下半部は叩き目、あて目の痕跡あり。	①良好 ②青灰 ③粗
130-16 46-16	土 師 器 甕	上半部	7.6×—×(5.1) 胴部径11		胴部丸く張り球形を呈すか。口縁部短かく直立する。口唇部丸まり僅かに外反。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
131-17 46-17	土 師 器 甕	1/4	22.8×8×29.5 胴部径24.6	南央部埋 土	胴部は脹らみのある寸胴。口縁部外反して開く。底部丸味をもち不安定。口縁部横撫で。胴部上半縦・下半横篋削り。	①良好 ②明褐 ③粗、小石赤褐粒混る
131-18 46-18	須 惠 器 甕	口縁部	20.6×—×9.5		肩部緩く丸味をもつ。口縁部は外反して開き、口唇部は外角し断面略三角を呈す。胴部格子状叩き目？同心円あて目。	①良好 ②灰 ③やや粗
131-19 46-19	土 師 器 埴	1/4	10.6×—×5 口縁高4	南央部埋 土	底部丸く扁平。底部と口縁部の変換部に明瞭な段をなし口縁部は高く内湾気味に大きく開く。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②淡橙 ③粗、砂混る
131-20 46-20	土 師 器 埴	1/2 口 縁欠損	—×—×(6) 胴部径9.9	南央部埋 土	胴・底部丸く球形を呈す。胴部横篋削り。	①良好 ②黄橙 ③緻密
131-21 46-21	土 師 器 埴	口唇部 欠損	(11)×—× (11.8)胴部径14.4	南西部埋 土	丸底を呈し、胴部強く張り扁平を呈す。口縁部くの字状に外傾。胴上半は斜篋調整。下位は不定方向の篋調整。	①良好 ②橙 ③密軟質

J 62号住居跡 (Fig. 132~135・PL. 47~48)

J区南西部に位置し、南壁寄りにはI区にまたがり63~65 I 49~J 1の範囲にある。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、東西軸方位はN-70°-Eを示す。長軸長5.7m・短軸長3.9mを測る。壁は高さ10cm程度で、ほぼ直立している。床面は凹凸が顕著で平坦ではないが、壁際を除いてよく踏み固められている。竈や炉や貯蔵穴などの内部施設はない。常住施設とは考えにくく、近接するI区の鍛冶工房遺構との関連性が想起される。遺物は床面全体に散在していたが、南西部により集中して出土している。器種として、比較的破片のそろった甕類・鞆羽口・鉾津・小形円礫などが特徴的である。



- J 62号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石・小石を含む。
 - 2 暗褐色土 粗粒砂質土。
 - 3 暗褐色土
 - 4 黄褐色土 小石含む。粗粒。
 - 5 暗褐色土 粗粒砂質土。

Fig.132 J62号住居跡

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

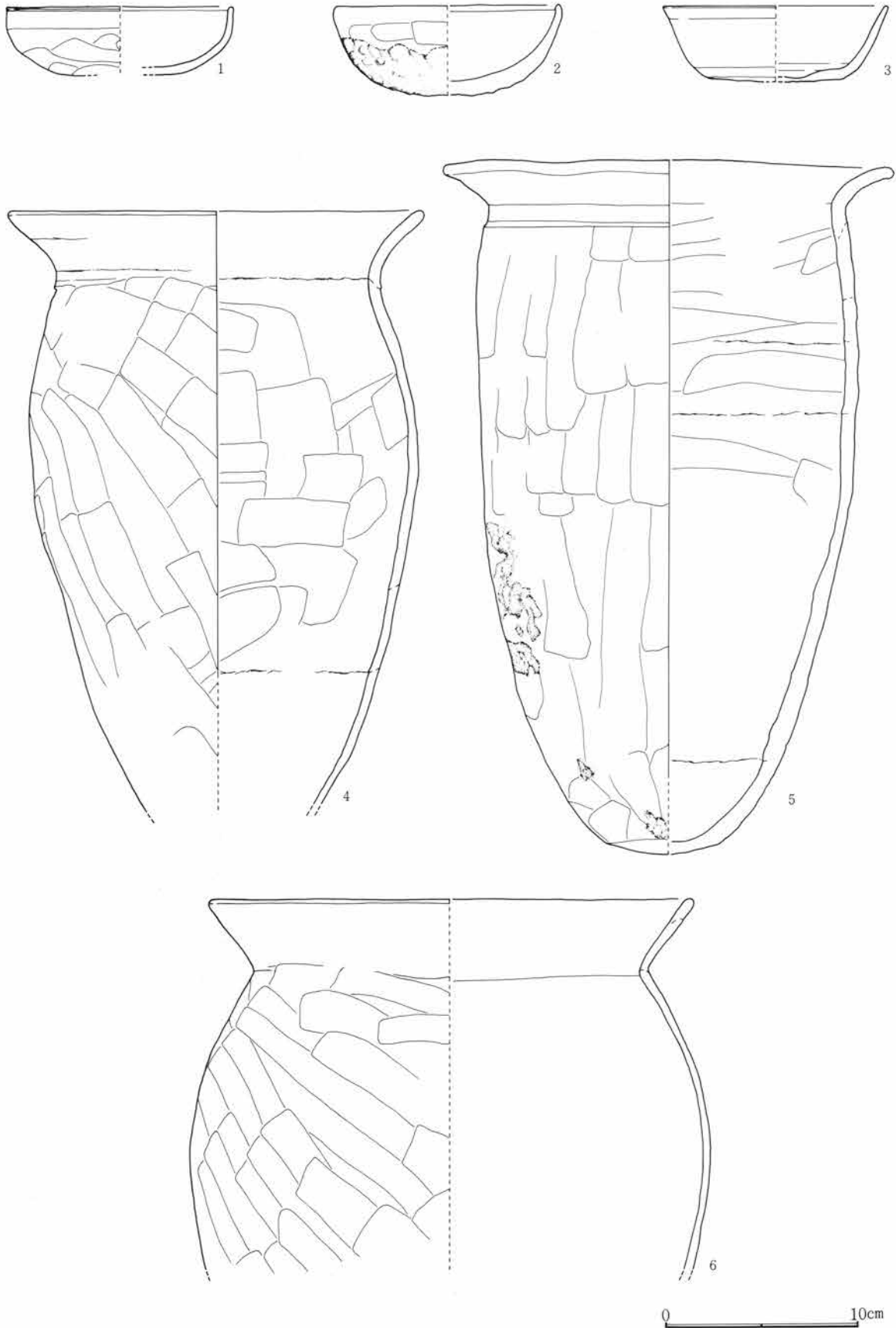


Fig.133 J62号住居跡出土遺物(1)

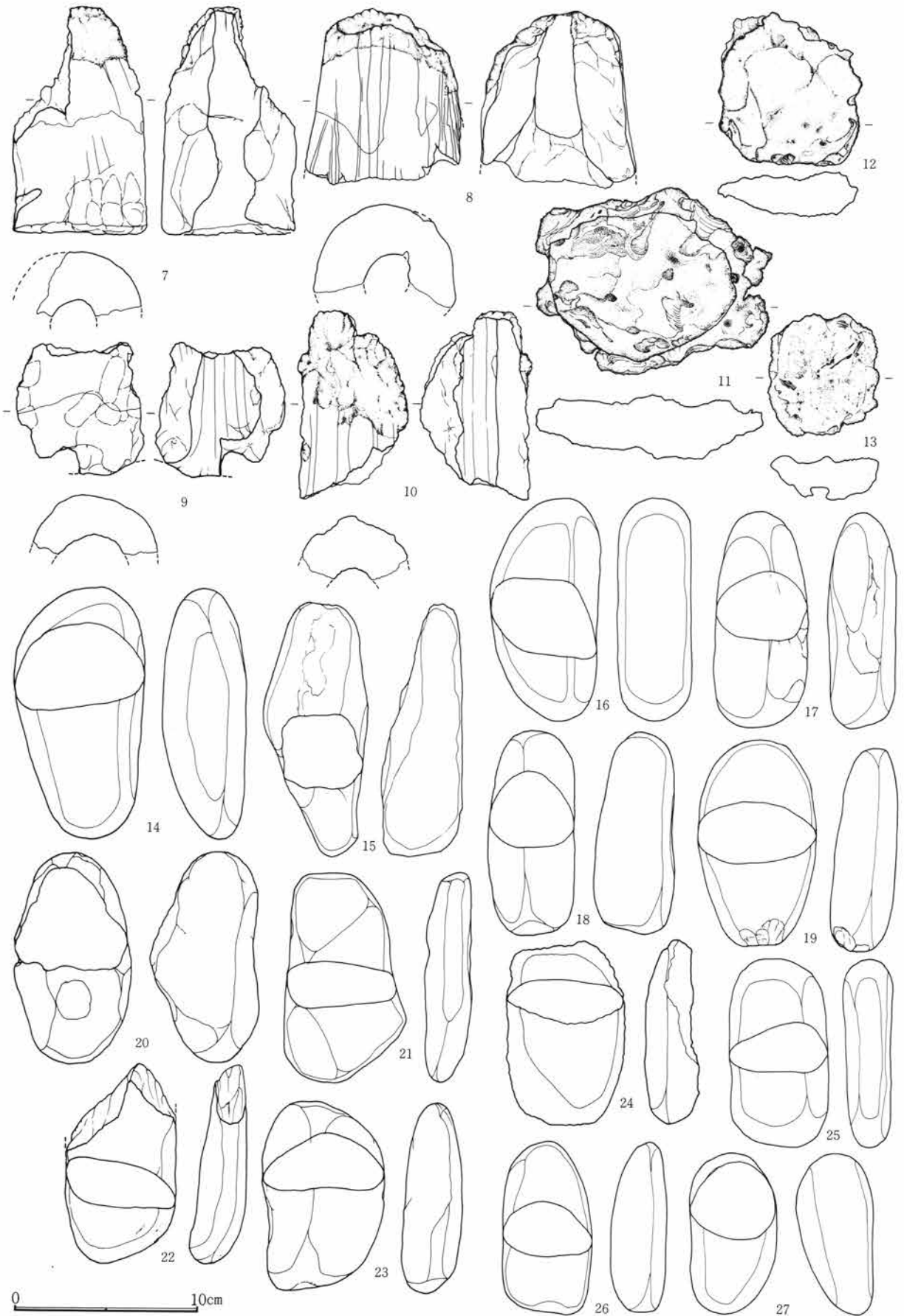


Fig.134 J62号住居跡出土遺物(2)

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

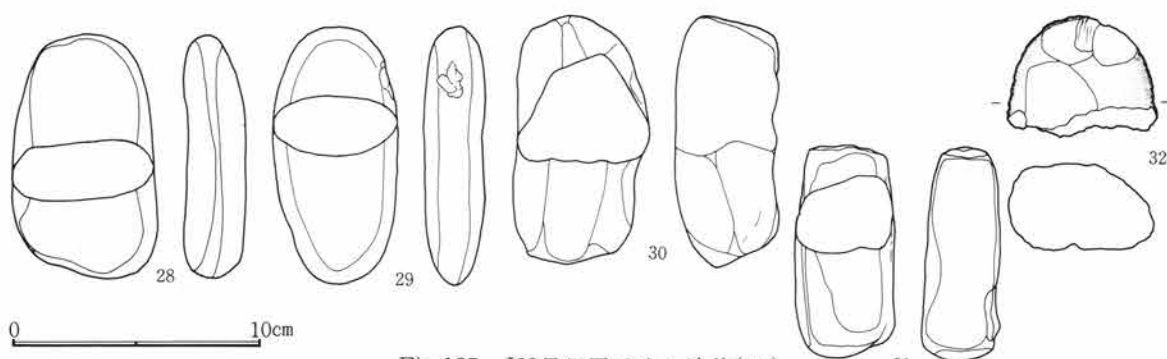


Fig.135 J62号住居跡出土遺物(3)

J 62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
133-1 47-1	土師器 杯	1/4	11.8×5.0×3.5		底部中心やや平坦。口縁部直立し、口唇部は小さく丸まり外屈気味。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
133-2 47-2	土師器 杯	3/4	11.9×—×4.6	南東部床 面西壁寄	底部深く丸味強い。口唇部内湾する。口縁部横撫で。底部篋削り。底部外面に溶解付着物。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
133-3 47-3	須恵器 杯	1/4	11.6×7.0×3.9	北中央埋 土	底部中心の器肉薄い。腰部ややくびれ、口縁部は緩く外反気味。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
133-4 47-4	土師器 甕	底部欠 損	21.5×—× (30.9) 胴部径20		胴部上位にやや脹らみをもつ長胴形。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
133-5 47-5	土師器 甕	ほぼ完	23.2×5.5×35.7 胴部径19.5		胴部脹らみのない長胴形。口縁部大きく外反して開く。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③粗、小石混る
133-6 47-6	土師器 甕	上半部 1/4	25.0×—×(19.2) 胴部径26.9		胴部強く張り丸味をもつ。口縁部直線的でくの字状に外傾口縁部横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
134-7 48-7	土製品 鞆羽口	1/2	長12.2 基径7.4 孔径2.5	南中央埋 土	先端部溶解付着物。基部指頭成形。	
134-8 48-8	土製品 鞆羽口	1/2 基 部欠損	長(9.5)先径6.5 孔径1.5	北東部埋 土	先端部溶解、外面に細い凹線状痕あり。	
134-9 48-9	土製品 鞆羽口片	基部小 片	長(7.2)基孔 径3.5	北西部埋 土		植物質繊維混入
134-10 48-10	土製品 鞆羽口片	先端部 片	長(10.1) 孔径2	中央部埋 土	先端部溶解。内面赤銅色。	
134-11 48-11	鉄 椀形鉢滓		長12.4×幅10.0 ×厚3.4 415g	埋 土	表面あめ状。	
134-12 48-12	鉄 椀形鉢滓		長8.2×幅7.6× 厚2.3 195g	埋 土	表面気泡少なくあめ状。裏面に炭化物をかむ。	
134-13 48-13	鉄 椀形鉢滓		長6.6×幅6.0× 厚2.4 115g	埋 土	表面気泡少なくあめ状。赤銅色を呈す。植物繊維をかむ。	
134-14 48-14	石	全 完	長13.5×幅7.1× 厚4.4 630g	南西部埋 土		石英閃緑岩
134-15 48-15	石	全 完	長13.7×幅5.7× 厚4.4	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
134-16 48-16	石	全 完	長12.0×幅6.0× 厚4.0 510g	東中央部埋 土		輝緑岩
134-17 48-17	石	全 完	長11.6×幅5.2× 厚3.7 290g	東中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-18 48-18	石	全 完	長10.9×幅4.7× 厚4.1 320g	東中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-19 48-19	石	全 完	長11.0×幅6.4× 厚3.3 340g	南中央部埋 土	片端に敲打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
134-20 48-20	石	全 完	長11.4×幅6.4× 厚5.5 305g	東中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-21 48-21	石	全 完	長11.2×幅6.6× 厚2.5 265g	東中央部埋 土		流紋岩
134-22 48-22	石	全 1/2	長(10.7)×幅6.1 ×厚2.6 230g	東中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)

第2章 J区の遺構と遺物

J62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 残存	位 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
134-23 48-23	石		全 完		長10.2×幅6.7× 厚3.1 295g	東中央埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-24 48-24	石		全 完		長9.8×幅6.4× 厚(2.4) 185g	東中央埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-25 48-25	石		全 完		長10.1×幅5.4× 厚2.7 255g	南中央埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-26 48-26	石		全 完		長9.7×幅4.9× 厚3.0 195g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
134-27 48-27	石		全 完		長8.6×幅4.8× 厚4.2 240g	北西部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
135-28 48-28	石		全 完		長9.7×幅5.9× 厚2.4 230g	東中央埋 土		ひん岩
135-29 48-29	石		全 完		長10.2×幅5.1× 厚2.4 195g	東中央埋 土		輝石安山岩(粗粒)
135-30 48-30	石		全 完		長9.9×幅5.5× 厚4.4 325g	南西部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
135-31 48-31	石				長8.5×幅4.0× 厚3.0 175g	北東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
135-32 48-32	石製品 砥石				4.2×6.5×3.4 57.9g	西中央埋 土	多面使用。	角閃石安山岩

J63号住居跡 (Fig. 136~138・PL. 49、50)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	1.90 × 2.90	N-93.5°-E	東壁ほぼ南寄り	円形 (33.0 × 33.0 × —)

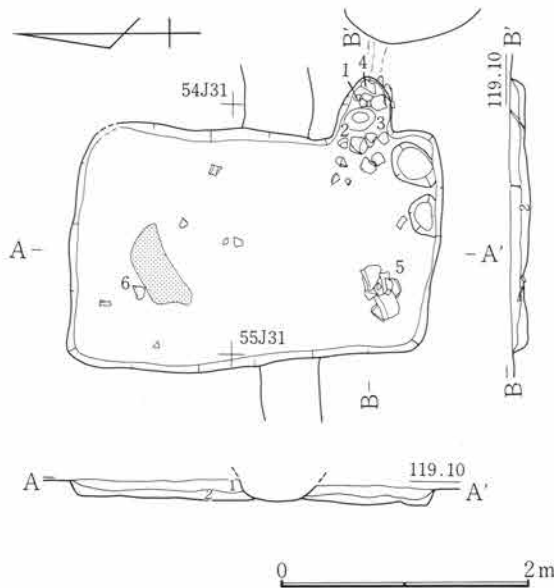
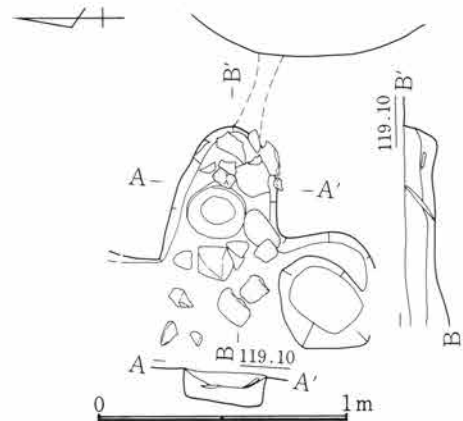


Fig.136 J63号住居跡



J63号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を微量含む。

Fig.137 J63号住居跡竈

J区中央部に位置し、54～55 J 30・31の範囲にある。南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し小形である。北西部で70号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。中央部を近代の溝跡が貫通しているが、壁を破壊したものの床面は全体に平坦で、よく踏み固められている。竈は東壁の南寄りに付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれて、奥壁に連続して細長い煙道部が延びる。天井が崩落せずに残っていたが煙出し部分は現代の井戸跡によって損なわれている。燃焼部幅50cm・奥行き60cm、煙道部の現長30cmを測る。北寄り床面には焼土の堆積が認められたが、廃絶直後の流入と考えられる。遺物は竈内と南西部床面に集中しており、土師質の小形杯類・羽釜などが出土している。

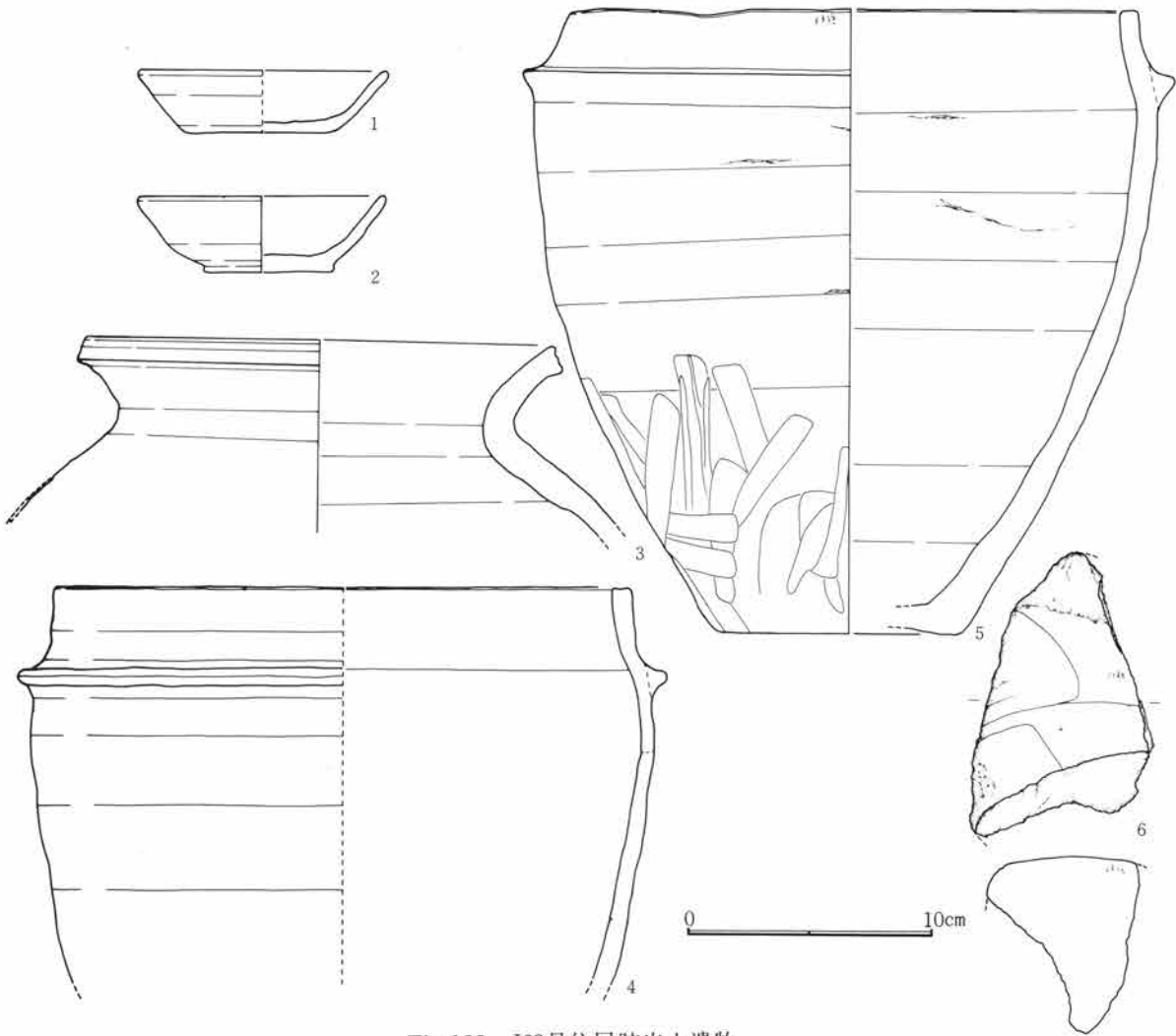


Fig.138 J63号住居跡出土遺物

J 63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
138-1 49-1	土師器 杯	1/2	10.2×5.9×2.5	竈内	体部やや外反気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。内面に煤状付着物あり。	①やや軟 ②橙 ③やや密
138-2 49-2	土師器 杯	3/4	10.1×5.2×3.1	竈内	腰部くびれて、体部内湾気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗

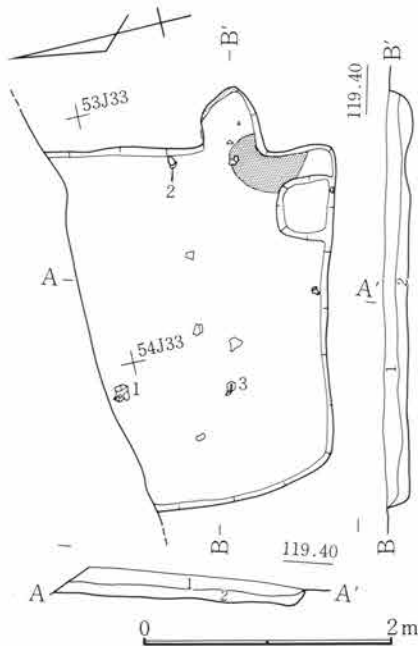
J 63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
138-3 49-3	須恵器 甕	口縁部	19.8×—×(7.2)	竈 内	肩部丸味をもつが少ない。口縁部くの字状に外傾し、口唇部は矩形を呈す。器面荒い。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗
138-4 50-4	羽 釜	上半部 1/2	23.5×—× (16.0) 銚径26.3	竈 内	胴部張り少ない。銚断面丸く水平に突出。口縁部直線的に内傾する。口唇部肥厚し水平。口縁～胴部回転撫で。	①酸化、良好 ②鈍い橙 ③やや粗
138-5 50-5	羽 釜	底部欠損	22.8×9.8×25.1 銚径26.3	南西部埋土	胴部上半やや張る。銚略三角を呈しやや低い。口縁部外反気味に内傾し口唇部水平。口縁～胴部回転撫で。下位篋削。	①酸化、良好 ②淡黄 ③やや粗
138-6 50-6	石製品 砥石		10.1×7.4×7.3	北西部埋土		輝石安山岩(粗粒)

J 64号住居跡 (Fig. 139~141・PL. 50)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形か	2.65 × —	N—101°—E	東壁ほぼ南寄り	円形 (50.0 × 40.0 × —)

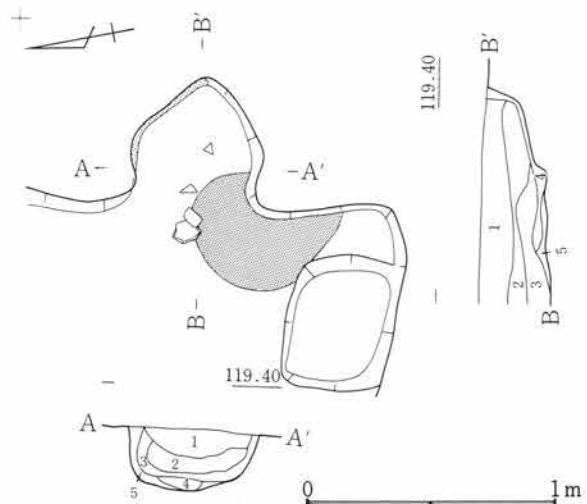
J 区の中央部に位置し、53・54 J 32・33の範囲にある。北半分は後世の溝によって失われている。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面は平坦であるが、掘形と同様に北に向かってやや斜降している。中央部及び竈手前がよく踏み固められている。竈は東壁を楕円形に掘り込み付設されるが、袖部・煙道部は確認されていない。燃焼部は奥壁北半のみがよく熱を受けているが南半は崩落している。燃焼部南寄りから南東部床面に灰の堆積が認められたが、貯蔵穴内には流入していない。燃焼部幅約50cm・奥行き50cmを測る。遺物は希少で、床面各所に散在していた。



J 64号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を微量含む。締りあり。

Fig.139 J64号住居跡



J 64号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 4 暗褐色土 灰を含む。砂質土。
- 5 赤褐色土 焼土。

Fig.140 J64号住居跡竈

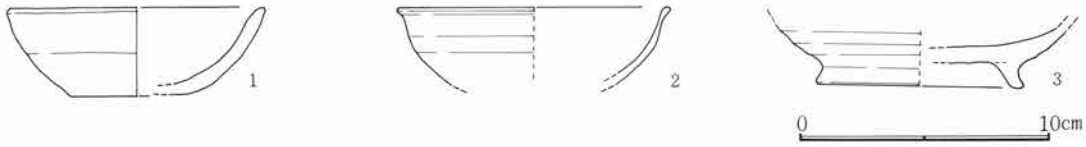


Fig.141 J64号住居跡出土遺物

J64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
141-1 50-1	土師器 杯		3/5	10.3×5.1×3.5	北西部	体部にやや丸味をもつ。轆轤成形。回転糸切りか。	①やや軟 ③やや密	②鈍い褐
141-2 50-2	土師器 椀?		1/5 底部欠損	11.0×-×(3.1)		体部丸味強く、口縁部強く外反する。轆轤成形。	①良好 ③やや密	②淡橙
141-3 50-3	須恵器? 椀		底部1/2	-×8.2×(2.3)	南西部埋土	付高台、ハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化、やや軟 ③やや粗	②橙

J65号住居跡 (Fig. 142、143・PL. 51)

J区東部に位置し、48・49J26~28の範囲にある。東半部及び南壁は、遺構確認面の傾斜に伴い、検出されなかった。平面形は、比較的大形の隅丸方形を呈するものと思われる。南北の現長4.8m、東西の現長2.6mを測る。東西軸方位はほぼN-90°-Eを示す。壁は最も高い部分で30cmを測り、直立する。北壁が二段となっているが、上位部分の崩落によるものと思われる。床面はほぼ平坦であるが、南方向にやや斜降している。北壁下には幅10cmの浅い溝が巡る。遺物は床面に散在しておりいずれも小片であるが、須恵器転用砥石類が目立つ。

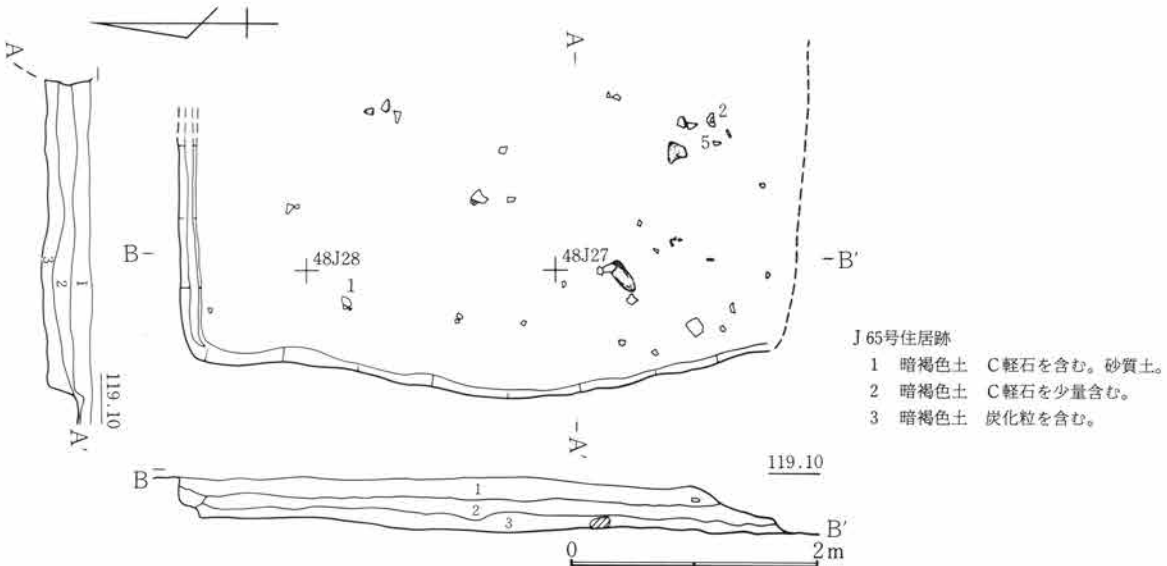


Fig.142 J65号住居跡

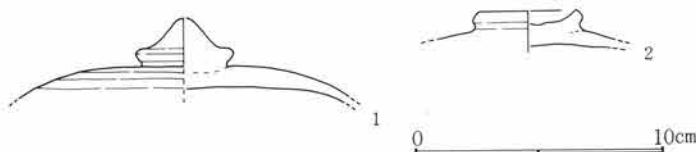


Fig.143 J65号住居跡出土遺物(1)

第2章 J区の遺構と遺物

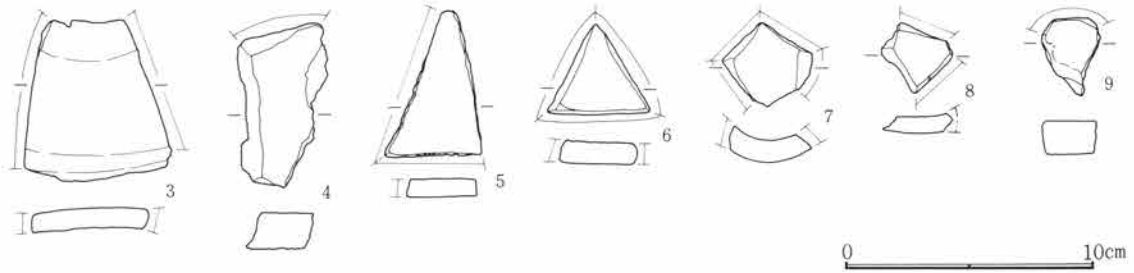


Fig.144 J65号住居跡出土遺物(2)

J 65号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
143-1 51-1	須 惠 器 蓋	天井部 部分	—×—×(3.4) 摘径3.9	南中央部床 面	宝珠形摘。天井部回転削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
143-2 51-2	須 惠 器 蓋	天井部 部分	—×—×(1.5) 摘径4.4	北東部埋 土	環状摘。断面矩形。天井部に自然釉。	①良好 ②灰 ③粗 白色砂混る
144-3 51-3	須 惠 器 転用砥石		6.3×5.8×0.8 42.3g	埋 土	2側面使用。長頸壺片。	①良好 ②灰オリ ーブ ③やや密
144-4 51-4	須 惠 器 転用砥石		6.5×3.6×1.4 38.9g	埋 土	1側面使用。壺片。	①良好 ②青灰 ③ やや密、白色粒混る
144-5 51-5	須 惠 器 転用砥石		5.7×3.9×0.7 18.7g		2側面使用。刃痕あり。杯底部片。回転削り。	①良好 ②灰 ③や や粗、黒・白色粒混
144-6 51-6	須 惠 器 転用砥石		3.5×4×0.9 12.2g	埋 土	3側面使用。壺片。	①良好 ②灰 ③や やや密、黒色粒混る
144-7 51-7	須 惠 器 転用砥石		3.3×3.6×0.9 13.5g	埋 土	4側面使用。長頸壺頸部？	①良好 ②灰 ③や やや密
144-8 51-8	須 惠 器 転用砥石		2.8×2.8×0.6 5.1g	埋 土	2側面使用。	①良好 ②灰 ③や やや密
144-9 51-9	須 惠 器 転用砥石		3×2.3×1.3 10.4g	埋 土	1側面使用。壺片。	①良好 ②青灰 ③ やや密

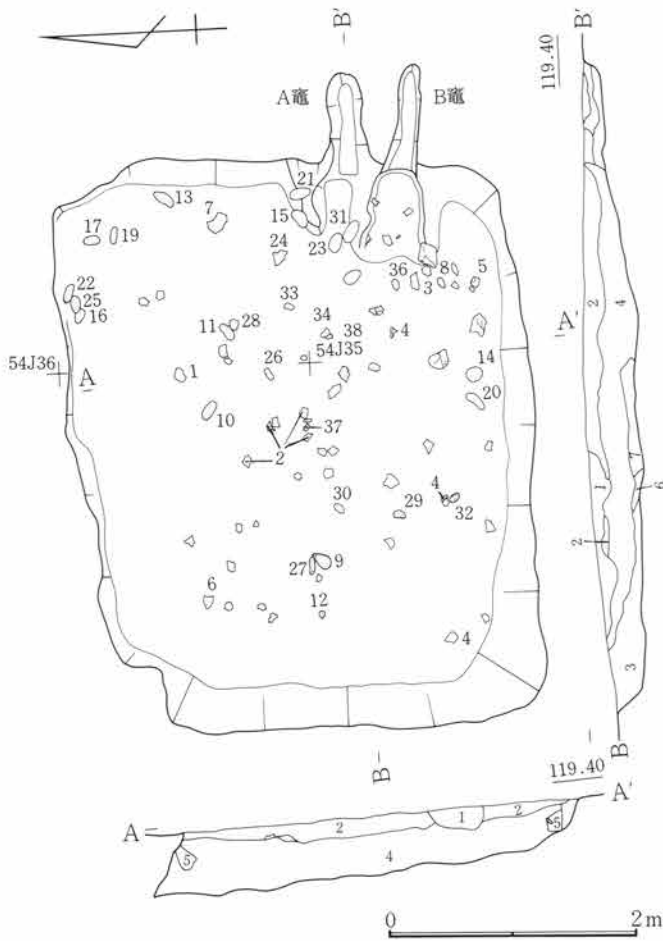
J 66号住居跡 (Fig. 145~149・PL. 52、53)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
北・隅丸方 形	4.50 × 3.00	N—89.5°—E	東壁中央寄り	—— ————
南・隅丸方 形	4.00 × 3.60	N—100.0°—E	東壁やや南寄り	—— ————

J区中央部に位置し、53~55 J 34・35の範囲にある。A・B 2基の竈の存在から2軒の住居跡が重複したものと考えられたが、竈は同一住居で相い前後して構築されたものであることが確認された。北側を東西走る溝によって北壁線に明瞭さを欠く。平面形は東西に長軸をもち方形を呈するが、掘形は深く壁の立ち上がり角度はゆるい。壁の高さは約40cmを測る。床面はかなり凹凸がみられ、踏み締まりは弱い。竈は東壁にやや角度を変えて2基並列して付設されているが、ともに住居内へ袖部を張り出す形で、燃焼部より急角度で立ち上がり煙道部が長く延びる。土層状態からは重複状況は明瞭でなく、灰層などにも明らかな断絶は認められなかった。竈の形式からも、かなり近接した時期に構築が行われたものと見ることができる。しかしながら土層断面の詳細な観察によれば、B竈の左袖部がA竈の燃焼部を犯すような位置に構築されており、A竈を破壊することなく引き続きB竈を構築したものと考えられる。B竈の袖部長さ76cm・内法40cm、燃焼部奥行き75cm、煙道部長さ85cmを測る。A竈は袖部長さ60cm・内法30cm前後、燃焼部奥行き50cm、煙道部長

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

さ80cmである。遺物は床面上に散在していたが、須恵器の高台付きの盤類・砥石・滑石製品などが検出されており、そのほか小円礫の多量さが目を引く。



J66号住居跡

- 1 暗褐色土 B軽石・C軽石を含む。攪乱砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 4 黒褐色土 C軽石・炭化物・土器を含む。
- 5 黒褐色土 C軽石を含む。粘性土。
- 6 暗灰色土 灰・焼土粒層。
- 7 黒褐色土 白色粘土粒を含む。

J66号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石・炭化物・土器を含む。
- 2 赤褐色土 焼土粒・塊層。
- 3 赤灰色土 焼土粒・灰を含む。
- 4 暗褐色土 粘性土。締りあり。
- 5 褐色土 焼土粒を含む。締りあり。
- 6 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 7 暗褐色土
- 8 赤色土 焼土
- 9 褐色土 焼土粒含む。締りあり。粘性土。
- 10 褐色土 締りあり。
- 11 暗褐色土 灰・焼土粒を含む。
- 12 灰褐色土 灰層。
- 13 暗褐色土 C軽石を含む。
- 14 白色土 白色粘質土。

Fig.145 J66号住居跡

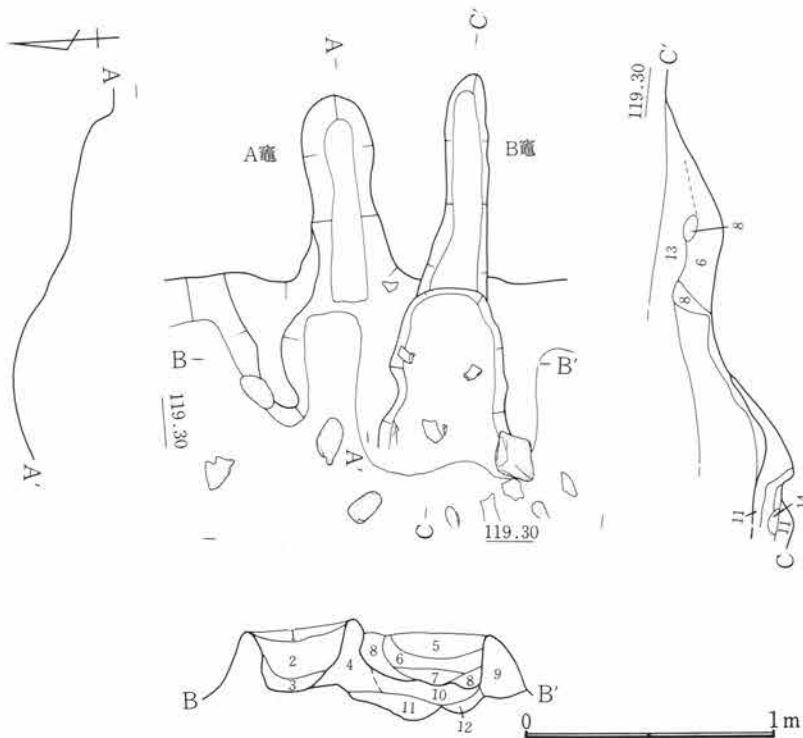


Fig.146 J66号住居跡竈



Fig.147 J66号住居跡出土遺物(1)

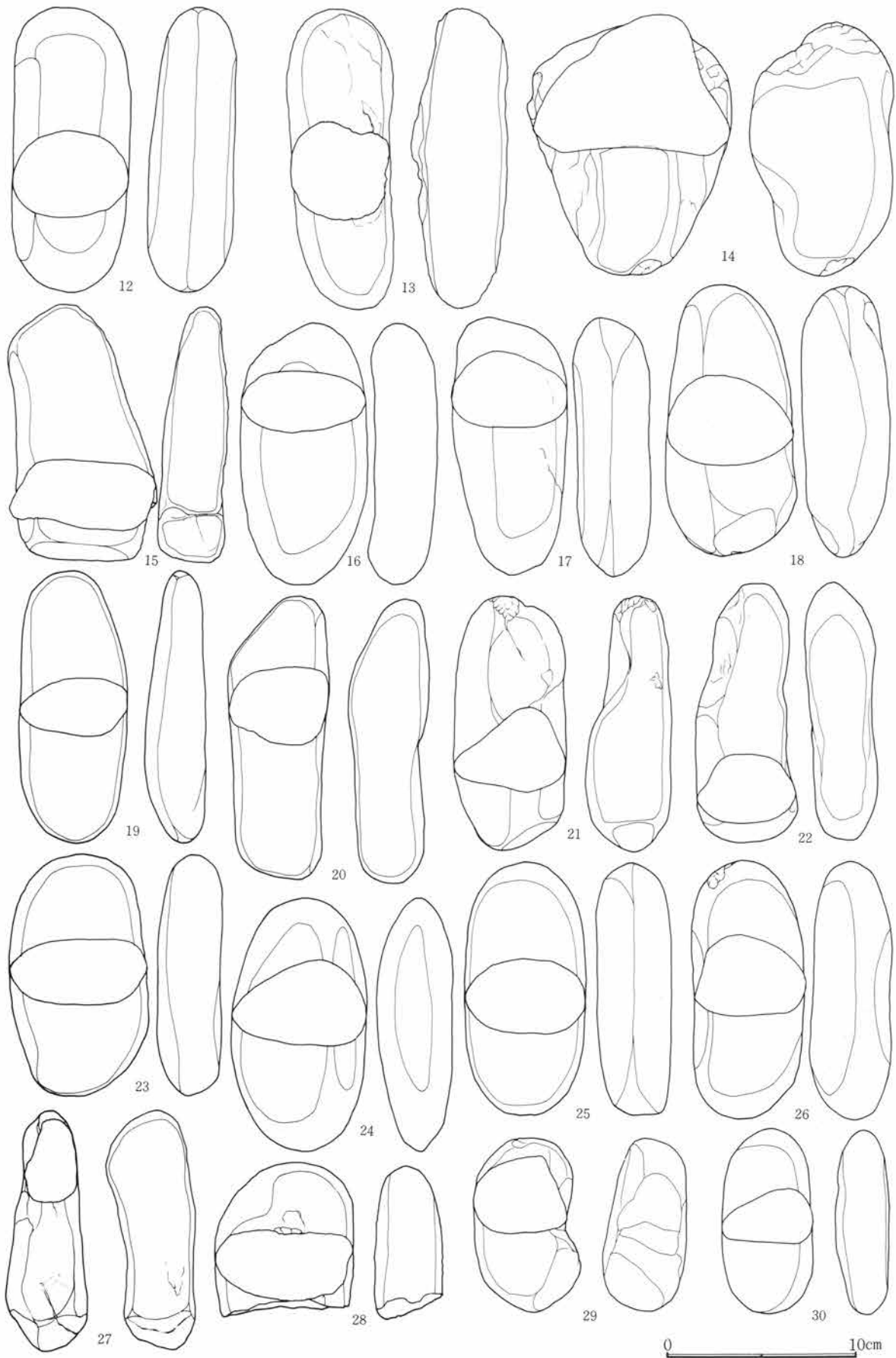


Fig.148 J66号住居跡出土遺物(2)

第2章 J区の遺構と遺物

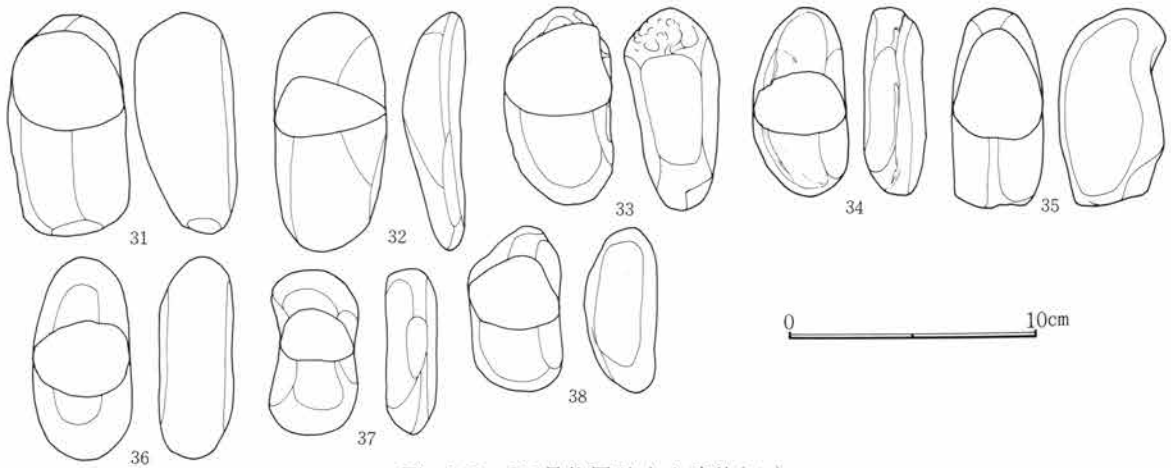


Fig.149 J66号住居跡出土遺物(3)

J66号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
147-1 52-1	須恵器	盤	小片	(19.6)×(3)×(3.5)		腰部にやや丸味をもち、体部浅く大きく外傾する。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
147-2 52-2	須恵器	盤	体部 $\frac{1}{4}$ 欠損	17.9×12.2×3.8		底部僅かに張り気味。体部浅く直線的に外傾する。付高台、低く断面矩形を呈す。轆轤成形。体・底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密、砂混る
147-3 52-3	須恵器	瓶	肩部 $\frac{1}{2}$	—×—×4.7 肩部径17		肩部丸味をもち強く張る。弱い凹線が巡る。肩部回転篋状調整痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密、黒色粒浮く
147-4 52-4	須恵器	瓶	胴部 $\frac{1}{2}$	—×—×(13.6) 胴部径16		胴部丸く張り球形を呈す。胴部下半回転篋削り。内面強い回転調整。	①良好 ②灰 ③やや密
147-5 52-5	土師器	甕	$\frac{1}{2}$	14.4×—×17.0 胴部径16.3		丸底。胴部丸く張り球形を呈す。口縁部外反気味に開く。口縁部横撫で。胴部上位横・中位縦・下位斜篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
147-6 52-6	須恵器	甕	口縁部 $\frac{1}{4}$	17.0×—×(5.9)		口縁部外反して開く。口唇部直立し、断面略三角を呈す。口唇部下に8本1条の波状文を施す。	①良好 ②灰 ③やや密
147-7 52-7	石製品	砥		長15.2×幅10.0×厚6.4 1.125g	北西部床面	4面使用。両端部は欠損部及び自然面をなす。	輝石安山岩(粗粒)
147-8 52-8	石製品	刀子		長(4.9)×幅3.2×厚0.9	埋土	柄部欠損。各部面取り及び研磨痕あり。	滑石
147-9 53-9	石			長18.5×幅8.9×厚7.0 1,410g	西中央部床面		溶結凝灰岩
147-10 53-10	石			長15.2×幅7.2×厚3.5 550g	北中央部床面		溶結凝灰岩
147-11 53-11	石			長14.9×幅6.6×厚4.0 625g	中央部床面		変質安山岩
148-12 53-12	石			長14.8×幅6.3×厚4.5 700g	西中央部掘形床面		輝石安山岩(粗粒)
148-13 53-13	石			長15.1×幅5.6×厚5.2 680g	北東部床面		輝石安山岩(粗粒)
148-14 53-14	石			長13.3×幅10.8×厚7.3 1,220g	南中央部床面南壁寄		輝石安山岩(粗粒)
148-15 53-15	石			長13.3×幅7.9×厚3.6 590g	東中央部床面		輝石安山岩(粗粒)
148-16 53-16	石	全完		長13.6×幅6.7×厚3.6 485g	北東部床面北壁寄		輝石安山岩(粗粒)
148-17 53-17	石	全完		長13.4×幅6.1×厚4.0 490g	北東部床面		輝石安山岩(粗粒)
148-18 53-18	石	全完		長14.1×幅7.0×厚4.7 695g	南東部床面		輝石安山岩(粗粒)
148-19 53-19	石	全完		長14.2×幅5.7×厚3.1 370g	北東部床面		ひん岩
148-20 53-20	石	全完		長14.7×幅5.4×厚4.3 495g	南中央部床面南壁寄		溶結凝灰岩

J 66号住居跡出土遺物観察表

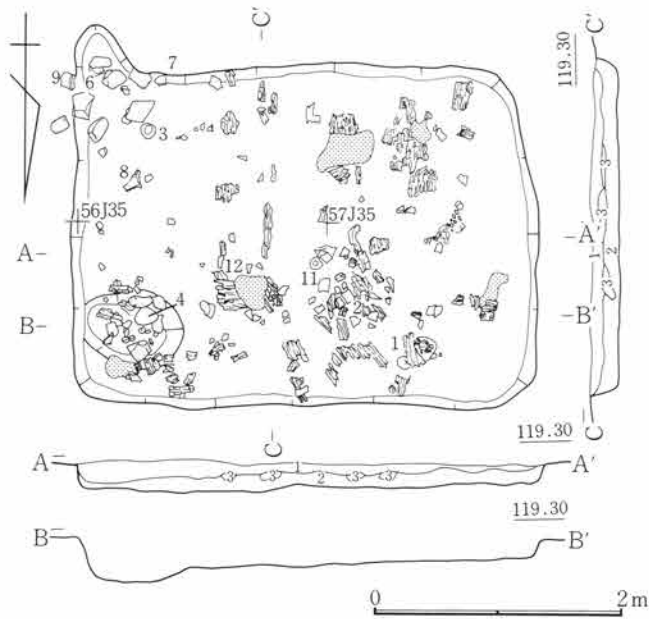
Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
148-21 53-21	石	全 完	長13.2×幅5.9× 厚4.5 475g	南東部掘 形床面		輝石安山岩(粗粒)
148-22 53-22	石	全 完	長13.4×幅5.2× 厚3.7 415g	北東部床 面北壁寄		輝石安山岩(粗粒)
148-23 53-23	石	全 完	長12.6×幅7.4× 厚3.4 515g	東央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
148-24 53-24	石	全 完	長13.2×幅7.1× 厚4.0 585g	東央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
148-25 53-25	石	全 完	長13.2×幅6.4× 厚3.9 565g	北東部床 面北壁寄		輝石安山岩(粗粒)
148-26 53-26	石	全 完	長13.5×幅5.9× 厚4.3 540g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
148-27 53-27	石	全 完	長12.5×幅4.3× 厚4.9 325g	西央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
148-28 53-28	石	全 完	長(8.0)×幅7.3× 厚3.6(320g)	東央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
148-29 53-29	石	全 完	長9.1×幅5.7× 厚4.0 300g	南西部床 面		溶結凝灰岩
148-30 53-30	石	全 完	長9.6×幅4.8× 厚2.8 170g	南央部掘 形床面		輝石安山岩(粗粒)
149-31 53-31	石	全 完	長8.8×幅48× 厚4.0 255g	南央部掘 形床面	数ヶ所に弱い磨耗痕あり。	閃緑岩
149-32 53-32	石	全 完	長9.5×幅45× 厚2.4 145g	南西部床 面		閃緑岩
149-33 53-33	石	全 完	長7.8×幅43× 厚3.8 185g	東央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
149-34 53-34	石	全 完	長7.5×幅3.8× 厚2.5 115g	中央部床 面		変質安山岩
149-35 53-35	石	全 完	長7.8×幅3.6× 厚4.3 180g	南東部掘 形床面		輝石安山岩(粗粒)
149-36 53-36	石 —	全 完	長8.0×幅4.0× 厚3.0 145g	南東部床 面		石英閃緑岩
149-37 53-37	石	全 完	長6.5×幅3.5× 厚2.1 85g	竈右袖床 面		輝石安山岩(粗粒)
149-38 53-38	石	全 完	長6.6×幅3.7× 厚2.9 100g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)

J 67号住居跡 (Fig. 150~153・PL. 54、55)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	3.70 × 2.65	N— 86° —E	南壁ほぼ東寄り	—————

J区中央部に位置し、56・57 J 34・35の範囲にある。平面形は東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面は全体に平坦で、よく踏み固められている。床面より10cm以内の高さで一面に炭化材と焼土塊が検出されており焼失家屋と考えられるが、床面との間層の存在から住居廃棄後ある程度の時間の経過があったのちの焼失と思われる。竈は南東隅に付設され、その軸線は南方向を示す。燃燒部は楕円形に掘り込まれ、煙道部は検出されていない。袖部は東・南壁線上に人頭大の川原石を埋設する。袖石間内法34cm、燃燒部奥行き60cmを測る。貯蔵穴は、竈に対面して北東隅に設けられる。出土遺物は土器類のほか刀子2点・須恵器甕片を成・調整した転用硯2点が検出されている。なお当跡出土の転用硯の一つは、南部間近に位置する71号住居跡出土のものと同じ固体であり、接合した。

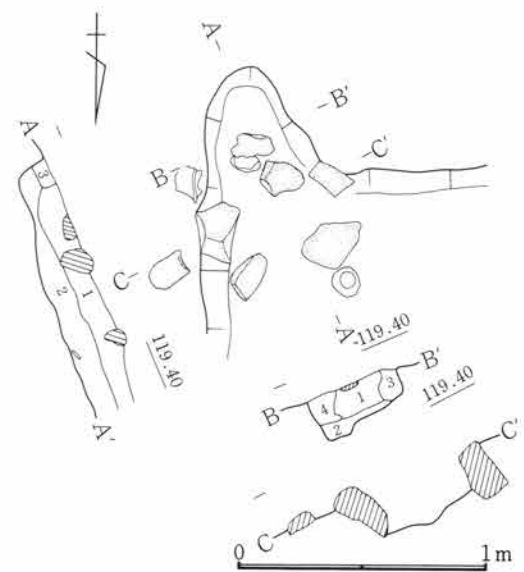
第2章 J区の遺構と遺物



J 67号住居跡

- 1 暗褐色土 炭化粒を多量に含む。締りなし。
- 2 暗褐色土 締りあり。
- 3 炭

Fig.150 J67号住居跡



J 67号住居跡竈

- 1 暗褐色土 灰を含む。締りなし。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。締りなし。
- 3 赤色土 焼土粒層。
- 4 暗褐色土 焼土粒を含む。

Fig.151 J67号住居跡竈

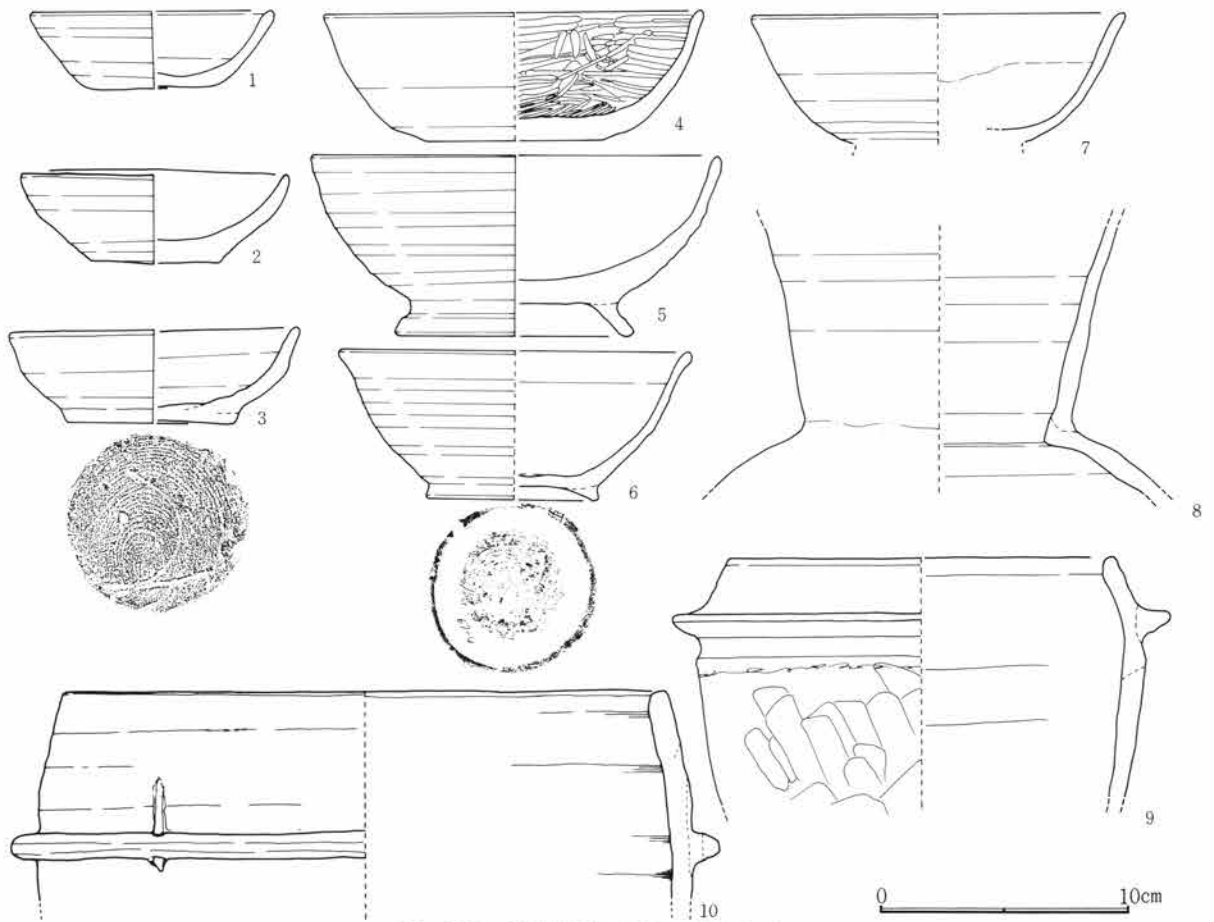


Fig.152 J67号住居跡出土遺物(1)

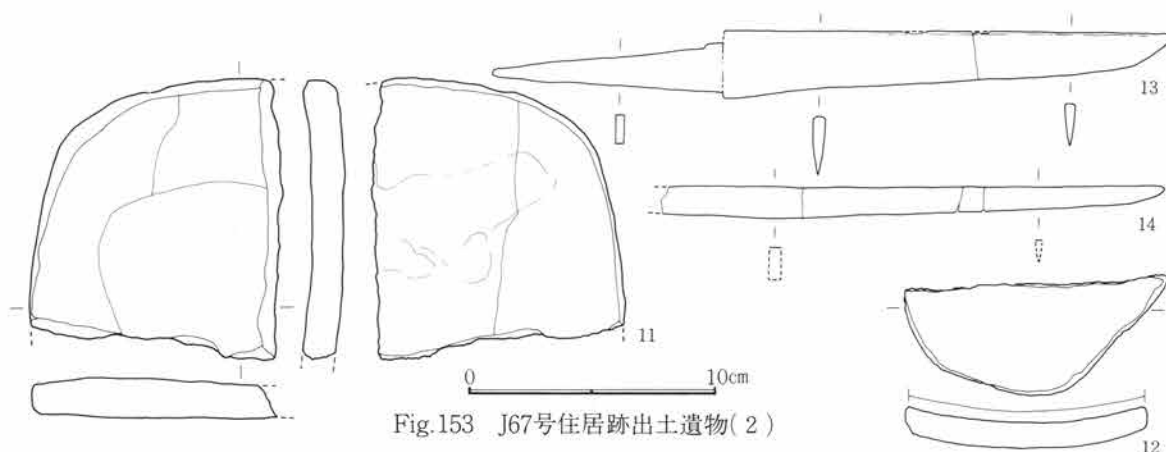


Fig.153 J67号住居跡出土遺物(2)

J 67号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
152-1 55-1	須恵器? 杯	1/5	9.7×5.2×3.1	北西部埋 土	腰部に丸味をもち、体部はやや内湾気味に外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②灰 ③やや密
152-2 55-2	土師器 杯	完	10.7×5.1×3.7	北中央埋 土	底部肥厚。腰部にくびれをもち体部上半は内湾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②褐灰 ③やや粗、砂混る
152-3 55-3	土師器 杯	完	11.6×6.8×3.8	南東部埋 土	底部肥厚。体部中位が張る。口縁部くびれて外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好	②浅黄橙 ③やや密
152-4 55-4	土師器 杯	1/5	15.1×7.0×5.1	北東部埋 土	体部丸味をもち、口唇部は僅かに外傾する。内面寛磨き1部吸炭。轆轤成形?	①良好	②灰黄褐 ③やや密
152-5 55-5	土師器 碗	1/5	16.4×9.5×7.1	中央部床 面	体部丸味をもち内湾して開く。付高台、やや高くハの字状に開く。内面黒色処理、寛磨きの痕跡あり、轆轤成形。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
152-6 55-6	須恵器 碗	体部1/5 欠損	14.2×6.9×5.9	竈内	体部中位僅かに張り、口縁部外反して開く。口唇部丸まる。付高台、低く断面矩形。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、	やや軟 ②鈍い褐 ③やや密
152-7 55-7	灰釉陶器 碗	1/5 底部 欠損	15.0×-×(5.1)	竈右袖埋 土	腰部に丸味をもち、やや張る。口縁部緩く外反。口唇部丸まり。腰部回転寛削り。体部内外面付け掛け施釉。	①良好	②灰 ③密
152-8 55-8	灰釉陶器 広口瓶	頸・肩 部1/5	-×-×(10.3) 頸基径10.7	中央部埋 土	肩部やや丸味をもち、頸部は直線的に外傾する。	①良好	②灰 ③やや密
152-9 55-9	羽 釜	口・胴 上半1/5	15.4×-×(10.5) 鏝部径20	南東部埋 土壁寄	胴部張り少なく、鏝は水平に出る。口縁部内湾気味に内傾する。口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部鏝下より斜削り。	①酸化、良好	②鈍い橙 ③やや粗
152-10 55-10	甗 ? 小片	口縁部 小片	(24.1)×-×(8) 鏝部径28.3		鏝幅広。上から下への貫通孔あり。口縁部高く僅かに内湾する。口縁高5.5cm。口縁部横撫で。	①酸化、	やや軟 ②橙 ③やや粗
153-11 55-11	須恵器 転用硯	部 分	(10.5)×(4.5)× 1	中央部埋 土	甗片転用。側面を研磨成形。内面の磨減著しい。	①良好	②灰 ③やや粗 黒色粒混る
153-12 55-12	須恵器 転用硯	部 分	(11.1)×(9.9)× 1.6		甗片転用。側面を研磨成形。内面及び外面の磨減著しく両面とも使用に供したか。外面に墨痕。	①良好	②灰 ③やや粗
153-13 55-13	鉄製品 刃	完	長27.2×刀渡18.0 幅2.7×棟幅0.5	埋 土	全面錆化。X線透視復元。平棟面取り。目貫穴位置不詳。		
153-14 55-14	鉄製品 刃	柄部一 部欠損	長20.2×幅12 片	埋 土	全面錆化。X線透視復元。No13と癒着。平棟。細身。		

J 68号住居跡 (Fig. 154)

J区東部に位置し、48・49 J 26・27の範囲にある。東半部は65号住居跡によって失われ、残る西半部のほとんどが攪乱を受けている。平面形は東西に長い隅丸方形を呈し、東西の現長2.7m、南北の現長2.4mを測る。東西軸方位はN-88°-Eを示す。壁は高さ10cmを残すのみで、ほぼ直立する。床面は平坦であるが、硬度はあまりなく、南に向かってゆるやかに斜降している。竈などの諸施設は認められなかった。出土遺物は少なく器形・時期を窺い知る資料はない。

第2章 J区の遺構と遺物

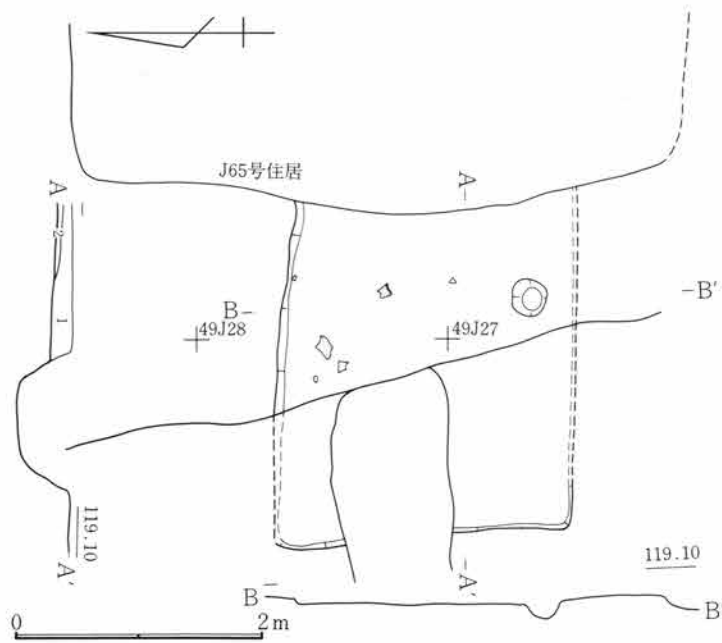


Fig.154 J68号住居跡

J68号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。

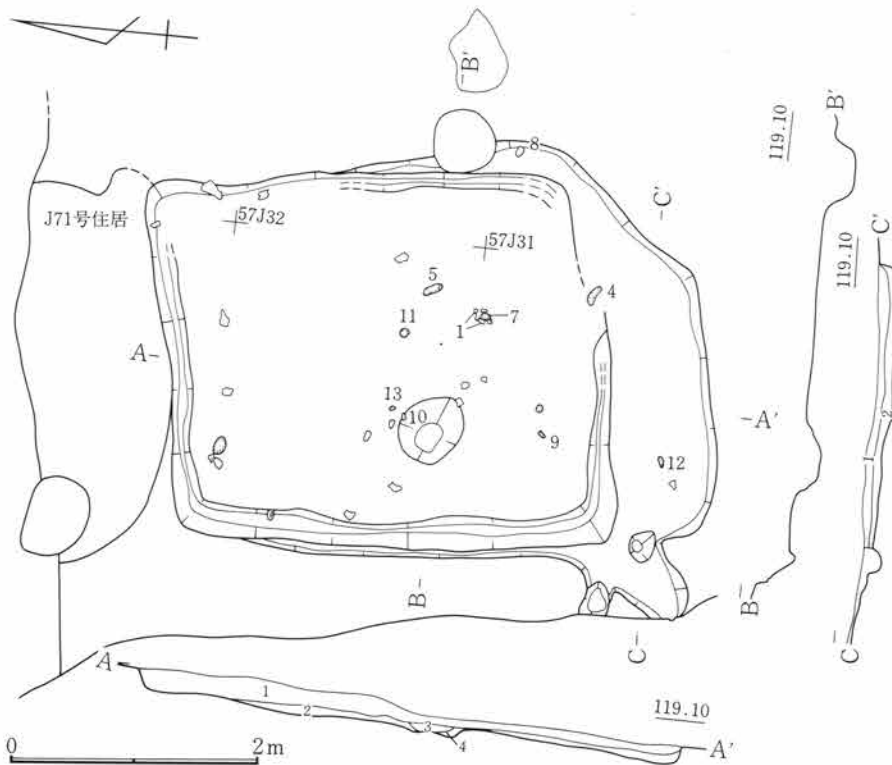


Fig.155 J69号住居跡

J69号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。土粒が粗い。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。締りあり。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。締りなし。
- 4 暗褐色土 締りなし。

J 69号住居跡 (Fig.155、156・PL. 56)

J 区の中央部に位置し、56～58 J 30～32の範囲にある。北壁線は71号住居跡と接し、これより古い時期の所産であるが新旧を逆転してしまった。外形の平面は北半が整った方形を呈するが、南壁線が大きく歪む。床面精査の段階で南壁を除く各壁下に幅18cm前後・深さ8cmの溝が検出された。この溝は南側では南壁に沿わず、70cmほど内側を巡っている。またこの溝の内側に比べ、壁線の歪む南部は若干床面が高くなっている。これらのことから、当跡は単一の遺構ではなく新旧の重複の可能性が考えられるが、ここでは同一住居として記載する。溝の巡る範囲は東西3m・南北3.6mの方形を呈する。全体では南北4.5mを測り、竈は南西の隅に付設される。竈軸はN-130°-Wを、また東西の壁線方位はN-81°-Eを示す。竈は楕円形に掘り込まれるが、先端部は調査区域外にかかり煙道部は不明である。袖部と考えられる箇所には袖財の埋設痕がみられるが、右袖はやや外側へ突出した位置にある。燃焼部幅50cm・奥行き60cmを測る。遺物は散在して検出されたが須恵器瓶などのほか礫が多くみられた。

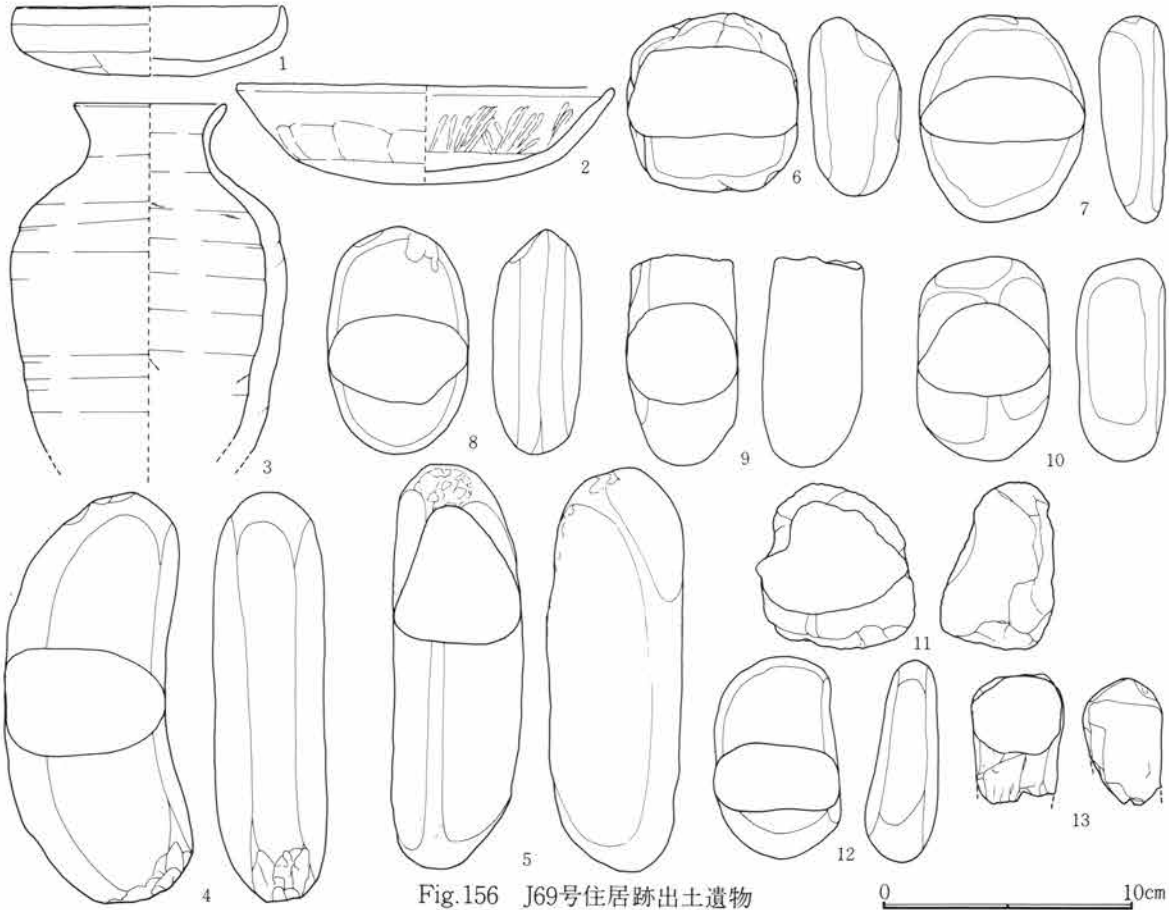


Fig.156 J69号住居跡出土遺物

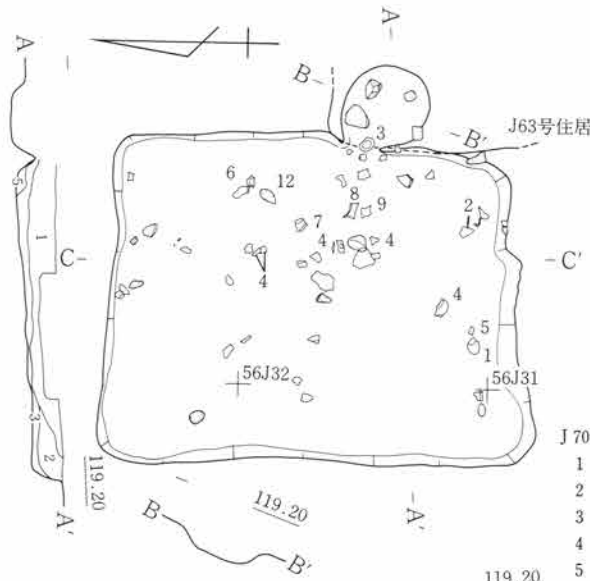
J 69号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
156-1 56-1	土 師 器 杯	1/2	11.1×-×2.7	中央部埋 土	底部やや浅く扁平。口縁部直立し、口唇部細る。口縁部横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
156-2 56-2	土 師 器 杯	1/2	15.5×-×3.9		底部丸く不安定。体部直線的に外傾し口縁部僅かに内傾する。内面放射状暗文。口縁部横撫で。体部横・底部笕削り。	①良好 ②浅橙 ③ やや密
156-3 56-3	須 恵 器 瓶	1/2 底 部欠損	6.2×-×(13.9) 胴部径11		肩部丸味をもって張り、頸部直立した後口縁は緩く外傾。胴部上下から下位にかけて回転笕削り。	①良好 ②灰 ③や や密
156-4 56-4	石	全 完	長16.2×幅6.5× 厚4.4 855 g	南央部埋 土	両端に敲打痕あり。	石英閃緑岩

第2章 J区の遺構と遺物

Fig. No PL. No	器 器形	種 種	部 残存	位 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
156-5 56-5	石	全 完	長16.0×幅5.3× 厚5.5	735g	北中央部床 面	片端に敲打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)	
156-6 56-6	石	全 完	長7.1×幅6.9× 厚3.7	195g	南東部床 面		輝石安山岩(粗粒)	
156-7 56-7	石		8.2×6.6×2.7	215g			輝石安山岩(粗粒)	
156-8 56-8	石	全 完	長8.9×幅5.7× 厚3.5	280g	南東部埋 土		頁岩	
156-9 56-9	石	全 完	長(8.3)×幅4.5× 厚3.9	(240g)	南東部床 面		輝石安山岩(粗粒)	
156-10 56-10	石	全 完	長8.1×幅5.3× 厚3.6	245g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)	
156-11 56-11	石	全 完	長6.6×幅6.2× 厚4.5	165g	中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)	
156-12 56-12	石	全 完	長8.0×幅5.2× 厚2.9	185g	南西部埋 土		グラノファイヤー	
156-13 56-13	石	全 完	長(5.0)×幅3.7× 厚3.2	(85g)	中央部床 面		珪質変質岩	

J70号住居跡 (Fig. 157~159・PL. 57、58)



J区中央部に位置し、55~56 J 30~32の範囲にある。63号住居跡と重複しこれより古い時期の所産である。この重複によって東壁に付設された竈は消失している。平面形は、南北にやや長い隅丸方形であるが、南壁がやや歪む。東西長2.6m・南北長3.3mで、東西軸方位はN-92°-Eを示す。壁は高さ30cmを測り、ほぼ直立する。床面は平坦で、中央部寄り及び竈手前が

J70号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・岩滓を含む。砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・粘土粒を含む。
- 3 黒褐色土 C軽石を少量・炭化物粒・焼土粒・粘土塊を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石・炭化物粒を少量含む。砂質土。
- 5 暗褐色土 粘性土。

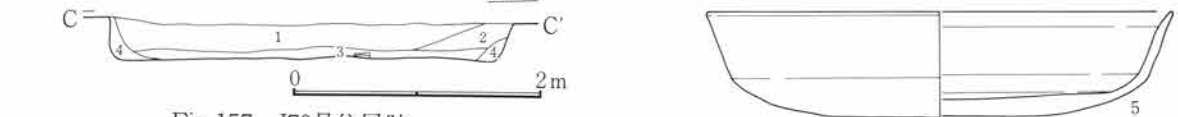


Fig.157 J70号住居跡

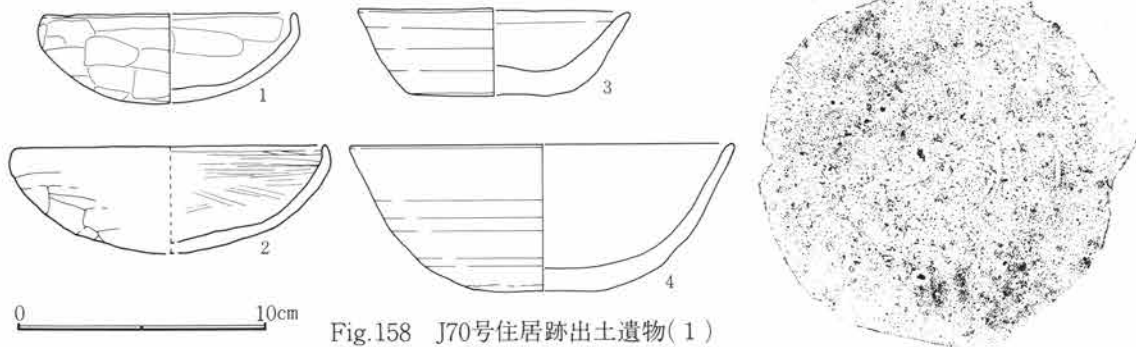


Fig.158 J70号住居跡出土遺物(1)

よく踏み固められている。竈は前述したように形状は不明であるが構築材が破片となって散乱している。遺物は床面各所に散在しており、図示した資料には63号住居跡からの混入品もあると思われる。

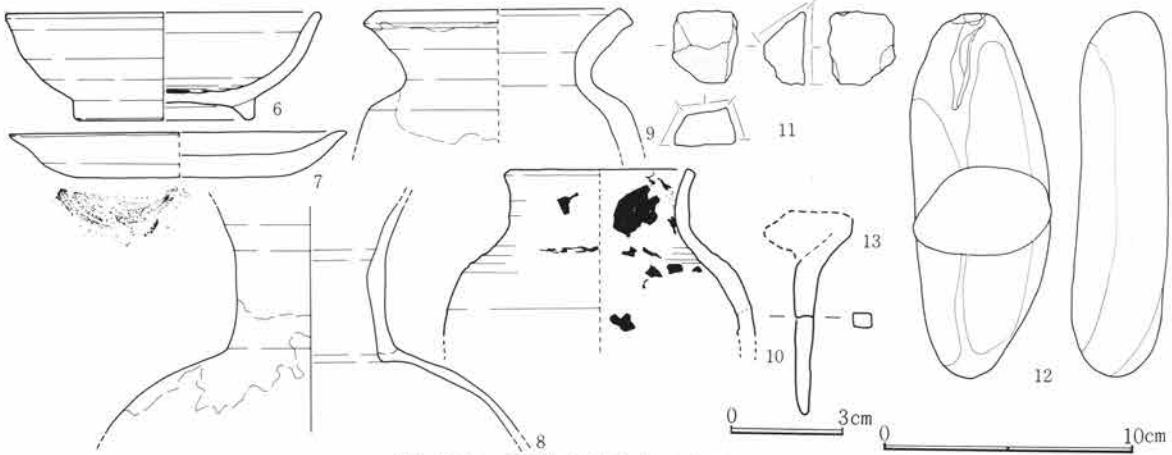


Fig.159 J70号住居跡出土遺物(2)

J 70号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
158-1 57-1	土師器 杯	器	完	10.5×-×3.6	南部床下	底部丸く不安定。口縁部短かく内傾する。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
158-2 57-2	土師器 杯	器	1/4	12.4×-×4.3	南部床下	丸底を呈し不安定。体部深い。口縁部内湾。口縁部横撫で。体部横・底部不安定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
158-3 57-3	土師器 杯	器	完	10.9×6.8×3.6	東壁下床 面	全体に肥厚する。腰部丸味をもち。体部外反気味に開く。口唇部に煤状附着物。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
158-4 57-4	須恵器 鉢	器	1/2	15.4×5.0×5.8	南～中央 部埋土	底径小さく腰～体部丸味をもち。口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、やや軟 ②浅黄橙 ③やや粗
158-5 58-5	須恵器 盤	器	体部小 残	18.7×13.5×4.2	中央部床 面	底部外縁わずかに丸味をもち。体部器肉薄く、外反気味に開く。轆轤成形。右回転篋削り。	①良好 ②灰 ③粗白・黒色粒混る
159-6 58-6	須恵器? 碗	器	1/2	12.7×7.3×4.3	北東部埋 土	体部丸味をもち、口縁部外傾する。付高台、断面矩形を呈しやや幅広。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰黄 ③やや密
159-7 58-7	須恵器? 皿	器	1/4	13.5×8.0×1.8	東中央部 床面	極めて浅い。底部肥厚し、体部外反気味に大きく開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰 ③やや粗、小石混る
159-8 58-8	灰釉陶器 壺	器	頸～肩 部1/2	-×-×(9.1) 頸基径6.5	南東部埋 土	肩部丸く胸部張らみをもつか。口頸部直立後外傾して開く頸部から肩部施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
159-9 58-9	須恵器 瓶	器	口～体 部1/2	10.8×-×(5.2) 肩部径10.8	東中央部 床面	胸部は寸胴で肩は強く張る。口頸部は外反気味に開く。口唇部断面矩形を呈し上端面は外斜する。焼成時に附着物。	①良好 ②オリーブ灰 ③やや密
159-10 58-10	須恵器 瓶	器	口頸部 小片	7.0×-×(6.6) 肩部径11	埋土	胸部は寸胴で肩は丸く張る。口頸部直立後僅かに外反。内面及び破損部分に黒色附着物。	①良好 ②灰 ③密
159-11 58-11	石製品 砥	品		2.9×2.7×1.7 10.6g	埋土	多面使用。	輝石安山岩
159-12 58-12	石		完	14.5×5.5×3.6 450g	東中央部 埋土		輝石安山岩(粗粒)
159-13 58-13	鉄製品 釘	品		5.3×0.5×0.4	埋土	角釘。頭部錆化顕著。X線透視復元。	

J 71号住居跡 (Fig. 160～162・PL. 58)

J区中央部に位置し、56～58 J 32の範囲にある。北半は後世の溝によって全く失われ、南壁東寄りには古い時期の69号住居跡と逆転して調査したため壁線は消失してしまった。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。東西長は3.0m、南北の現長は1.25mである。壁は高さ15cmを測り、ほぼ直立する。床面は平坦であるが、竈に向かって斜降しており、よく踏み固められている。竈は東壁に付設されるが遺存状態は不良である。左袖部・燃焼部には川原石をそれぞれ埋設し、袖石・支脚として用いている。貯蔵穴と思われる施設は竈の

第2章 J区の遺構と遺物

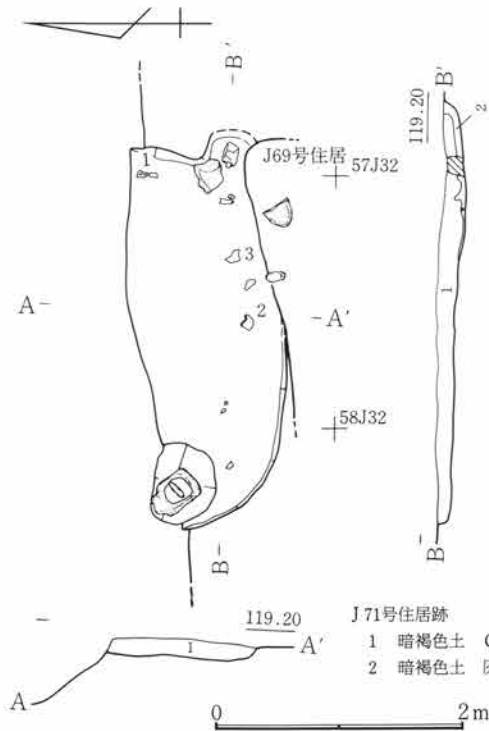


Fig.160 J71号住居跡

対面になる南西隅に穿たれ、径65cmの楕円形を呈する。遺物は少量であるが須恵器甕片を転用した硯は67号住居跡出土のものと同一体である。

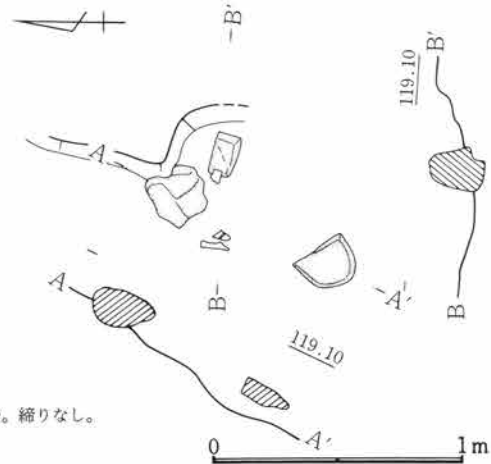


Fig.161 J71号住居跡竈

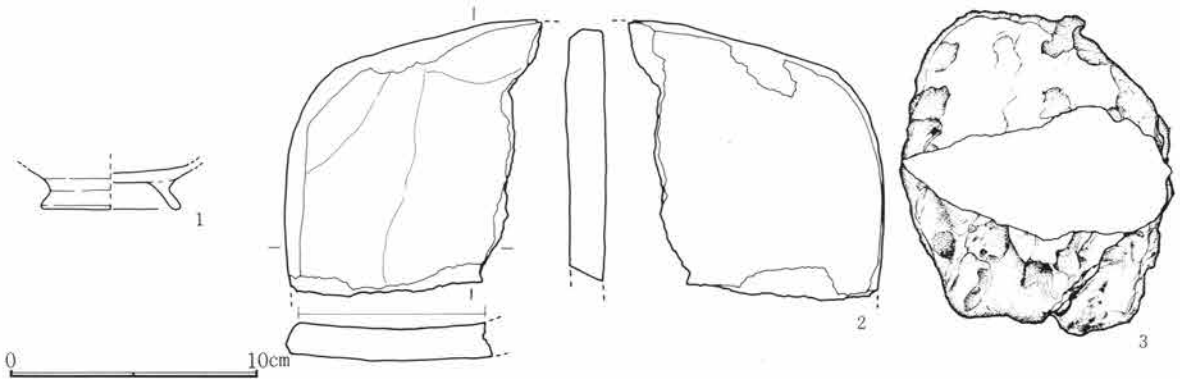


Fig.162 J71号住居跡出土遺物

J 71号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
162-1 58-1	土 師 器 椀	底部%	—×5.6×—	竈内埋土	付高台、ハの字状に開き、端部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、砂混る
162-2 58-2	須 恵 器 転用 硯	部 分	11×10.4×1.7	東央部床 面	甕片転用、隅丸方形を呈するか。中央部が緩く凹む。側縁を丁寧に研磨成形。内面著しく磨滅。外面僅かに磨滅。	①良好 ②灰 ③やや密
162-3 58-3	鉢 椀 形		12.7×11×5.2 890 g	南東部床 面	表面錆の度合強く、裏面は気泡が著しい。	

J 72号住居跡 (Fig. 163~166・PL. 59)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	2.20 × 3.20	N— 101° —E	東壁ほぼ南寄り	— — — — —

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

J区中央部に位置し、51・52J30・31の範囲にある。南西部で81号住居跡及び井戸跡と、また北東部で74号住居跡と重複し、74号より旧く、81号より新しい時期の所産である。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。北壁中央に歪みがある。床面は平坦でよく踏み固められている。竈は東壁の南に寄って付設され袖部がわずかに住居内に張り出し、基盤層の暗褐色土を掘り残して構築される。明確な煙道部はない。袖部長さ20cm・内法45cm、燃烧部奥行き1mを測る。遺物は西半部床面に集中して検出されたが土器類は少なく、刃部に木質が付着し、縁金具が装着された刀子などが出土している。

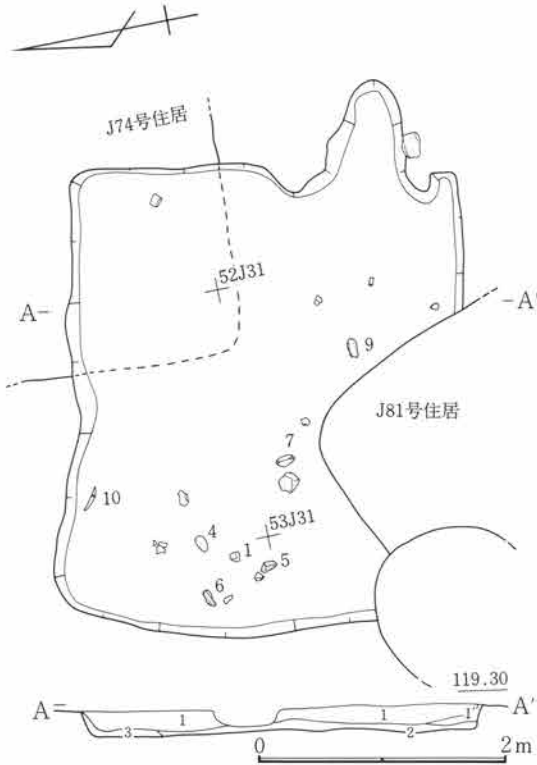


Fig.163 J72号住居跡

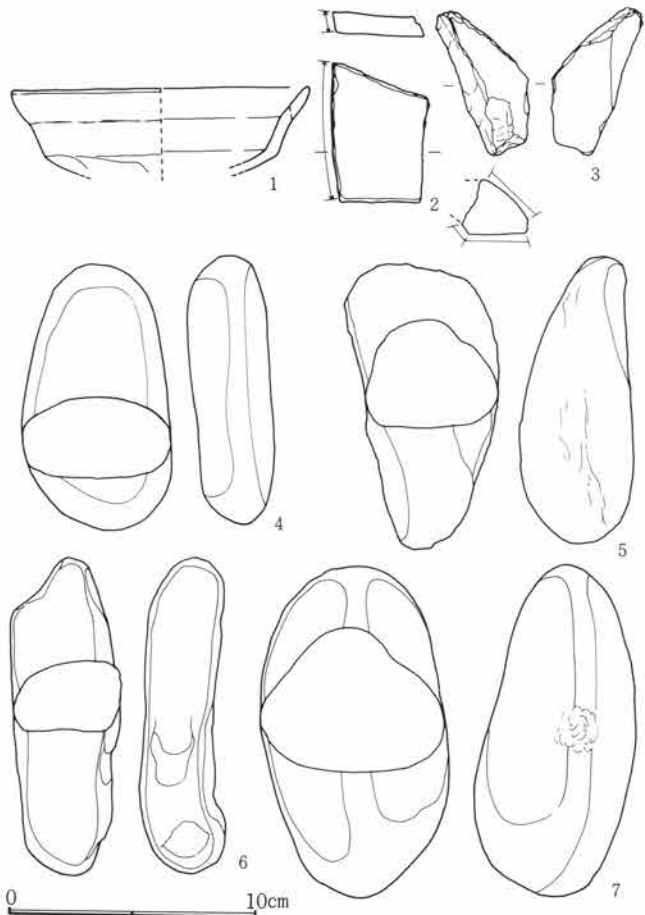


Fig.165 J72号住居跡出土遺物

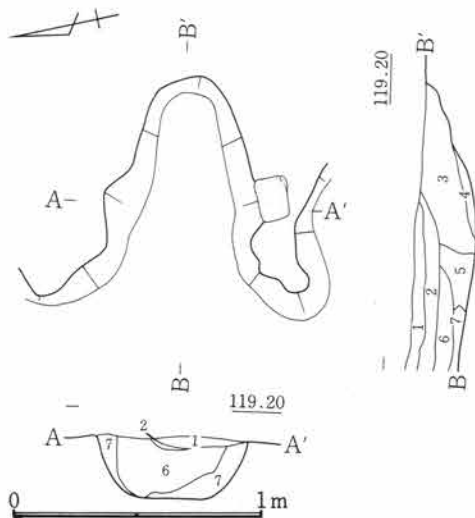


Fig.164 J72号住居跡竈

J72号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 1' 暗褐色土
- 2 淡褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 淡褐色土 C軽石を少量含む。粘性土。

J72号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石・粘土塊を含む。
- 3 黒褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 粘土塊・炭化粒を含む。砂質土。
- 5 暗褐色土 粘土塊・炭化粒・C軽石を含む。粘性土。
- 6 暗褐色土 焼土・粘土塊を含む。
- 7 黒褐色土 粘土塊を含む。

第2章 J区の遺構と遺物

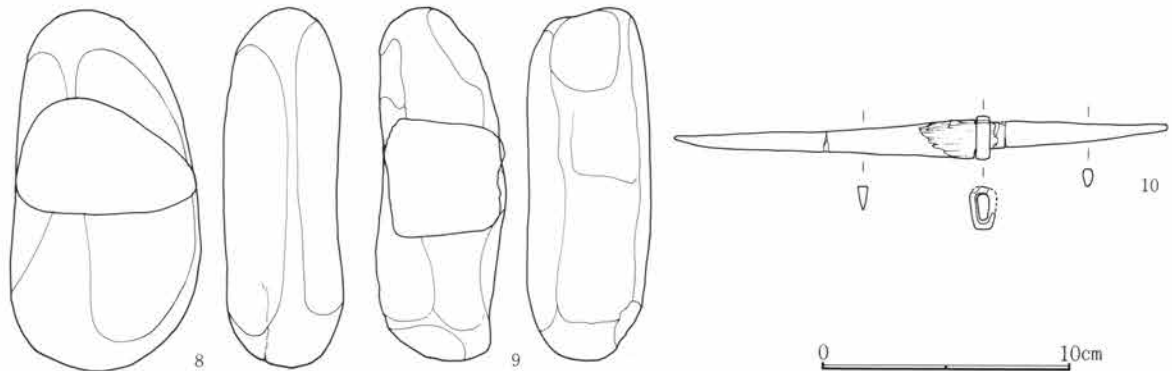


Fig.166 J72号住居跡出土遺物(2)

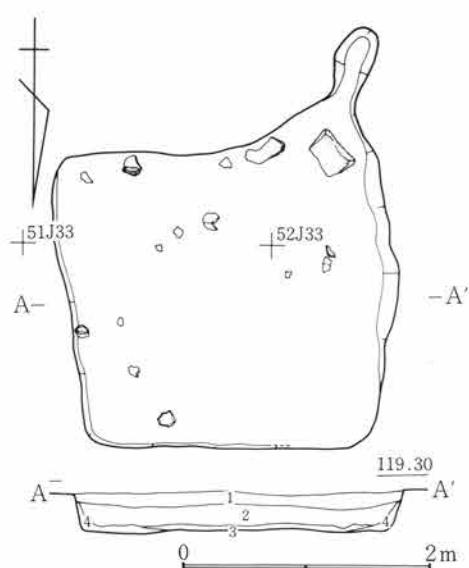
J72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
165-1 59-1	土師器 杯	小片	12×—×(3.4)	中央部床 面	底部扁平を呈す。口縁部は折れて外傾し中位でくびれて内湾気味に外傾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
165-2 59-2	須恵器 転用砥石		5.5×3.9×0.9 27.4g	埋土	1側面使用。壘片。	①良好 ②灰 ③やや密
165-3 59-3	石製品 砥石	部分	(5.8)×(3.6)× (2.2) 41.3g	埋土	多面使用。	砂岩
165-4 59-4	石	完	長10.6×幅5.9× 厚3.3 350g	西中部掘 形		輝石安山岩(粗粒)
165-5 59-5	石	完	長11.4×幅6.1× 厚4.2 305g	西中部掘 形		角閃石安山岩
165-6 59-6	石	完	長12.6×幅4.3× 厚2.9 260g	北西部掘 形		輝石安山岩(粗粒)
165-7 59-7	石	完	長13.2×幅7.4× 厚5.8 845g	南中部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
166-8 59-8	石	完	長14.3×幅7.6× 厚4.7 785g	埋土		ひん岩
166-9 59-9	石	完	長14×幅5.2× 厚4.9 595g	南中部床 面		輝石安山岩(粗粒)
166-10 59-10	鉄製品 刀子	全 完	長19.7×刃渡12 厚0.45	北西部掘 形	刀部平棟。中茎倒卵形。鞘口責金具周辺に木質付着。全面X線透視復元。	

J73号住居跡 (Fig. 167~169・PL. 60)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.30 × 2.60	N- 111° -E	東壁ほぼ南寄り	—————

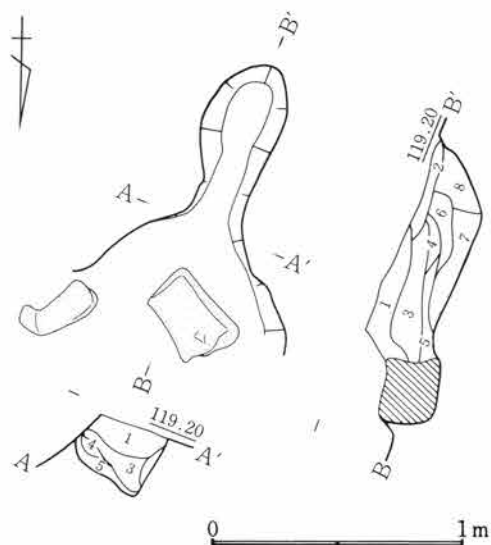
J区中央部に位置し、51・52 J 32・33の範囲にある。南縁で74号住居跡と重複しているがこれより古い時期の所産と考えられる。平面形は小型の隅丸方形で、西壁が短かくやや不正形を呈する。壁は高さ30cmを測り、直立する。床面は平坦で、竈手前がよく踏み固められている。竈は南西隅に付設され、大きくハの字状に掘り込まれた燃焼部からわずかに立ち上がってほぼ水平に延びる煙道部へ続く。燃焼部手前には凝灰岩の加工材が放置されており、据え袖として使用されていたと思われるが元位置を保っていない。燃焼部幅約70cm・奥行き60cm、煙道部長さ70cmを測る。遺物は小さな砥石が出土している。



J73号住居跡

- 1 暗褐色土 細粒のC軽石を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石・炭化物粒を含む。
- 3 黒褐色土 細粒のC軽石を含む。弱粘性土。
- 4 茶褐色土 C軽石を少量含む。

Fig.167 J73号住居跡



J73号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石含む。
- 2 暗褐色土 粗粒のC軽石を含む。砂質土。茶褐色土。粘土粒・C軽石を含む。
- 3 黒褐色土 炭化物を少量含む。
- 4 黒褐色土 炭化物層。
- 5 黒褐色土 炭化物層。
- 6 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 7 暗褐色土 一部焼土。
- 8 茶褐色土 炭化物粒・焼土粒を少量含む。

Fig.168 J73号住居跡竈

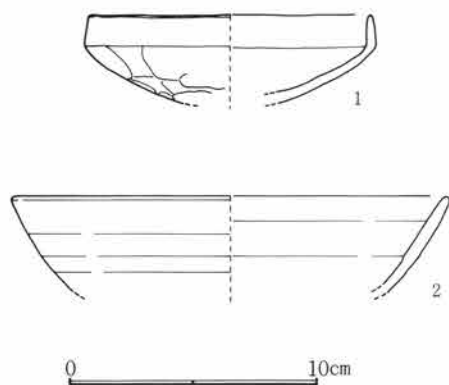
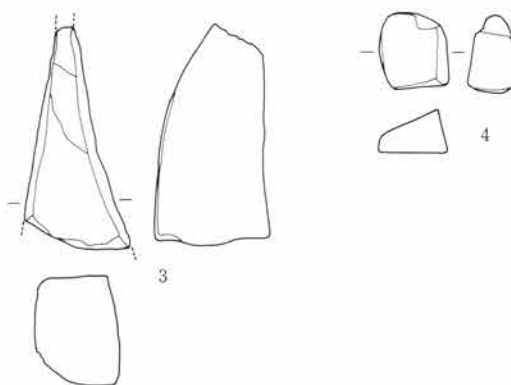


Fig.169 J73号住居跡出土遺物



J73号住居跡出土遺物観察表

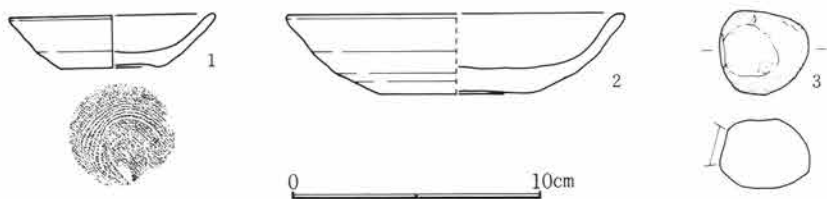
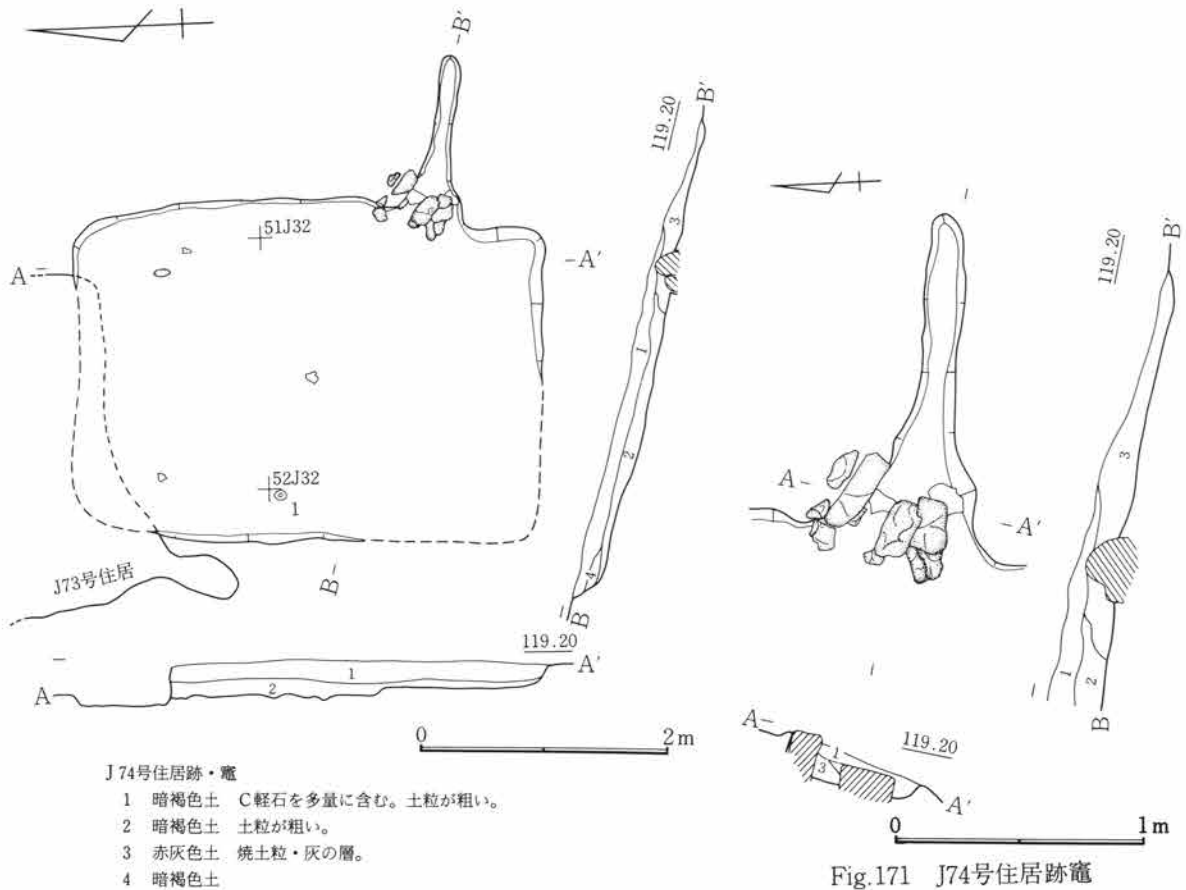
Fig. No PL. No	器種	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
169-1 60-1	土師器 杯	1/2	11.7×-×(3.5)	埋土	底部丸味強く不安定。口縁部折れて直線的に内傾する。口唇部細る。口縁部横撫で。底部不定方向笕削り。	①良好 ②橙 ③やや密
169-2 60-2	須恵器 杯	体部1/5	17.5×-×(3.8)	埋土	腰部丸味をもつか。体部直線的に外傾。轆轤成形。	①良好 ②褐灰 ③やや粗、白色粒混る
169-3 60-3	石製品 砥石	片端欠損	(8.9)×4.2×4.3 11.3g	埋土	多面使用。	流紋岩(砥沢?)
169-4 60-4	石製品 砥石		2.7×3×1.7 152.2g	埋土	多面使用。楔形。	

第2章 J区の遺構と遺物

J74号住居跡 (Fig. 170~172・PL. 60)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	2.60 × 3.75	N-105°-E	東壁ほぼ南寄り	—————

J区中央部に位置し、50~52J 30~32の範囲にある。南西部が72号、北壁の一部が73号、北東部が76号住居跡とそれぞれ重複する。新旧関係は、いずれよりも新しい時期の所産である。壁は高さ15cmを測り、傾斜している。床面は凹凸があり、中央部及び竈手前がよく踏み固められている。竈は東壁の南に寄って付設され、燃烧部とほとんど落差のない水平に延びる細長い煙道部をもつ。燃烧部には竈の構築材と考えられる凝灰岩の加工材が散乱しているが、埋設状態にあるのは左袖のものだけである。燃烧部幅約55cm・奥行き50cm、煙道部長さ1mを測る。遺物は希少である。



J74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
172-1 60-1	土 師 器 杯	完	8.3×4.2×2.1	西中央埋 土	体部僅かに内湾して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③密
172-2 60-2	土 師 器 杯	1/2	13.6×6.6×3.2	竈 内	器肉厚い。体部中位にやや脹らみをもち、口縁部は外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗、白色粒混
172-3 60-3	石 製 品 砥 石		3.6×3.4×2.7	埋 土	2面使用。	角閃石安山岩

J76号住居跡 (Fig. 173~176・PL. 61)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
方 形 か	2.20 × 3.60	N— 99° —E	東壁ほぼ南寄り	—————

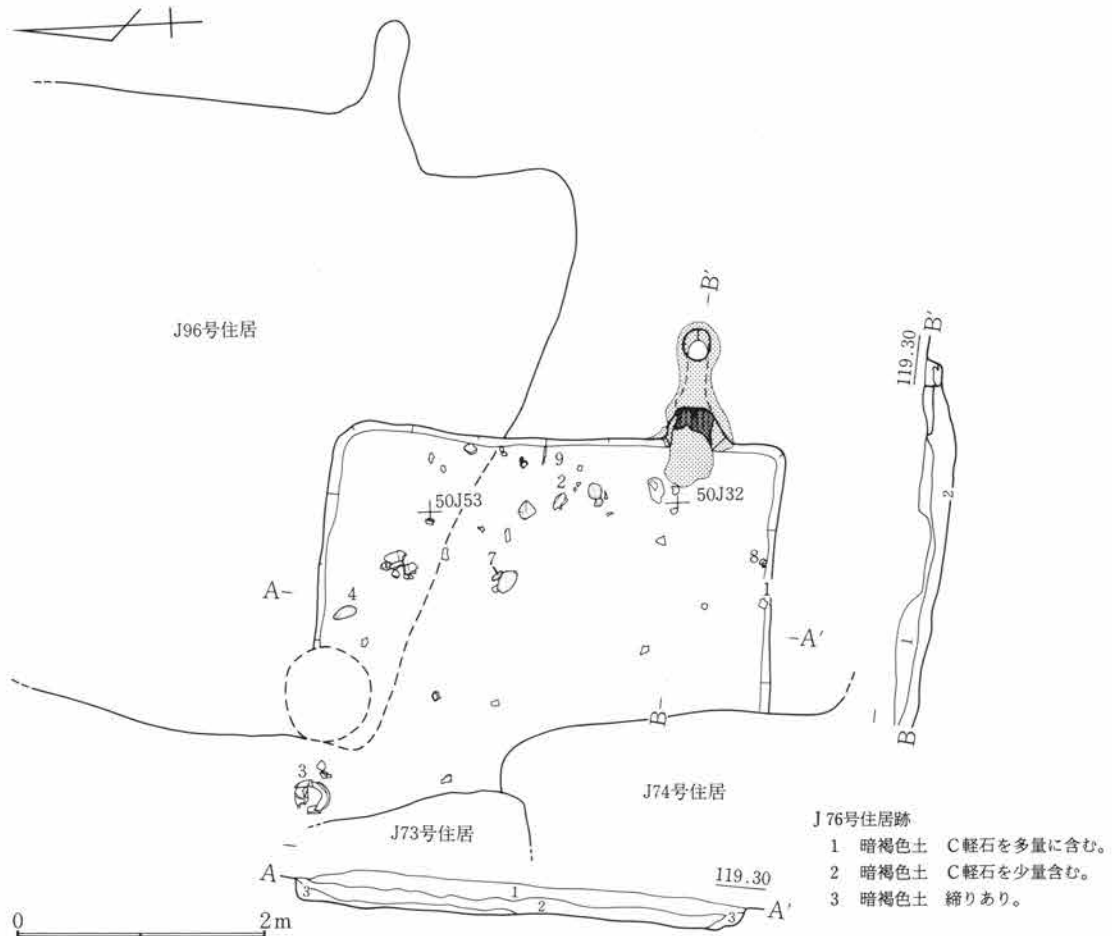
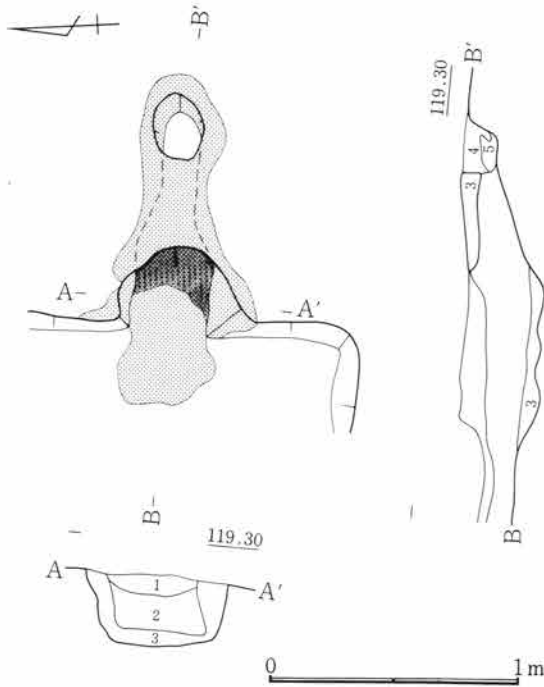


Fig.173 J76号住居跡

第2章 J区の遺構と遺物

J区東部に位置し、49・50 J 31～33の範囲にある。西部および南西部は73号・74号と、また北東部では96号住居跡と重複している。新旧関係はいずれよりも古い時期の所産である。西半部は掘形の深い73号・74号住居跡のため消失している。壁は高さ30cmを測り、ほぼ直立する。床面は全体に平坦で、中央部寄り及び竈手前がよく踏み固められている。竈は東壁の南寄りに付設され、わずかに掘り込まれた燃焼部から傾斜をもって煙道部が延びる。煙道部は天井部が良好に遺存しており、煙出し孔周辺に至るまでよく熱を受け赤化している。袖部の痕跡が認められず、燃焼部の範囲は判然としないが火床面や灰の堆積範囲から奥行き約60cm程度と考えられる。煙道部長さ60cm、煙り出し孔径25cmを測る。燃焼部はよく熱を受け、底面には灰混じり焼土が堆積していた。遺物は東半部床面に多く散在していたが、形態の知れるものは少なく、須恵器盤のほか柄部に木質が残る刀子など出土している。



J76号住居跡竈

- 1 暗褐色土 土粒が粗い。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 赤色土 焼土。
- 4 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 締りなし。

Fig.174 J76号住居跡竈

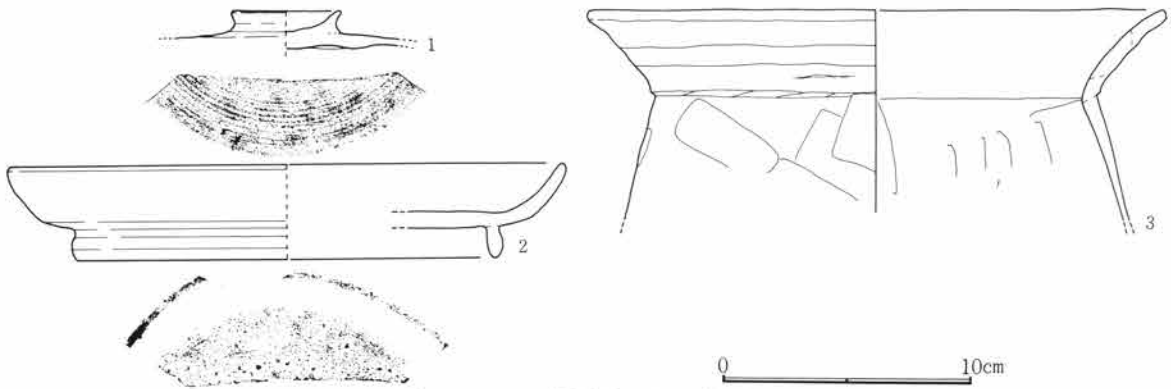


Fig.175 J76号住居跡出土遺物(1)

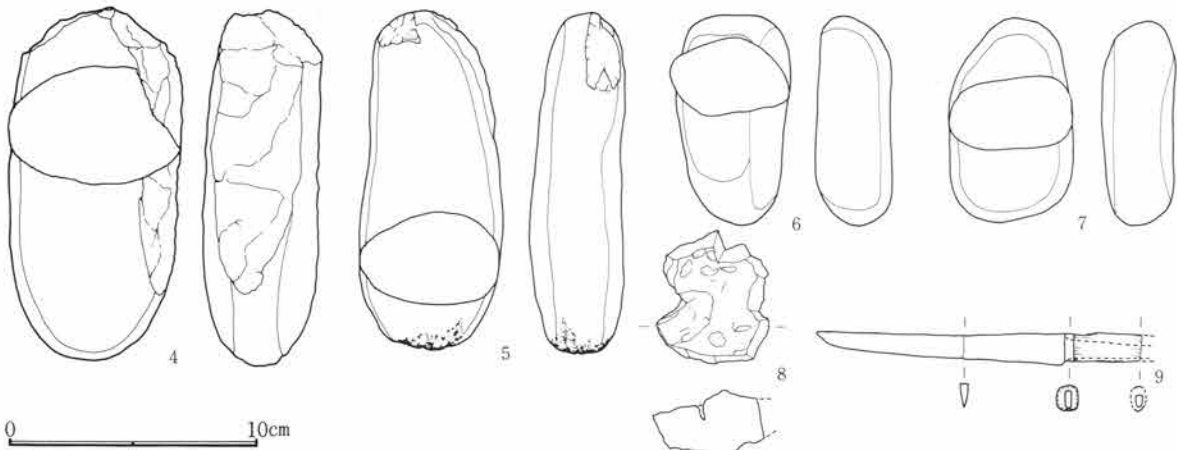


Fig.176 J76号住居跡出土遺物(2)

J76号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
175-1 61-1	須恵器 蓋	天井部 小片	—×—×(1.1) 摘径4.4	南壁際埋 土	天井部平坦。環状摘、端部細り短かく外反する。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
175-2 61-2	須恵器 盤	口～底 1/4	22.4×17.3×3.7	東中央部床 面	腰部丸く張る。体部浅く、内湾気味に開く。付高台、高目で端部丸くやや開く。轆轤成形。底～腰部回転篋削り。	①良好 ②青灰 ③やや密、黒色斑浮く
175-3 61-3	土師器 甕	口縁部	23.2×—×(8.0)	北西部埋 土	肩の張りなく長胴を呈すか。口縁部外反気味に大きく開く。口縁部内外強い横撫で。胴上半斜篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
176-4 61-4	石	1/2	13.7×6.7×4.7 (645)g	北中央部埋 土北壁寄	片端、側面剥離。	輝石安山岩(粗粒)
176-5 61-5	石	完	13.5×5.8×3.7 425g	北西部床 面	両端に敲打痕あり。	石英閃緑岩
176-6 61-6	石	完	8.1×4.9×2.9 182g	北西部床 面北壁寄		輝石安山岩(粗粒)
176-7 61-7	石	完	8.5×4.7×3.0 177g	中央部埋 土		ひん岩
176-8 61-8	鉄 粗鋼	全 1/2	長(5.3)× 幅(4.5)×厚2.5	南東部埋 土南壁寄	碗形粗鋼。周縁を欠く。	
176-9 61-9	鉄製品 刀子	全 1/2	長(13)× 刃渡9.8×幅1.2	東中央部床 面東壁寄	刃部平棟。中茎。黄金具及び木質遺存。全面錆化。X線透視復元。	

J77号住居跡 (Fig. 177～179・PL. 62)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
方形	3.30 × 3.65	N—82.5°—E	東壁やや南寄り	—————

J区北部に位置し、53～55J40・41の範囲にある。単独遺構であり、遺存状態も比較的良好で平面形態は小形で整った方形を呈する。壁は高さ50cmを測り、ほぼ直立する。北壁・西壁・南壁西半に連続して幅13cm前後・深さ8cm程度の壁下溝が巡っている。床面はやや凹凸があるが、全体によく踏み締められている。貯蔵穴・柱穴などは検出されていない。竈は東壁のほぼ中央部に付設され、袖部が住居内に張り出す形態であり長い煙道部をもつ。袖部は基盤層である暗褐色土およびLoam層を掘り残し、表面を黄白色の粘土を用いて構築され、左右の均整がとれている。燃烧部から煙出しに至る間はよく熱を受け煙道部の一部には天井部が遺存している。燃烧部底面のやや左に偏った位置には角柱の川原石が支脚として埋設されている。袖部長さ60cm・内法40cm、燃烧部奥行き74cmを測る。煙道部は燃烧部より10cm前後の段差をなして水平に延び、長さ1.2mを測る。煙出し孔の大きさは、土層観察によれば径約20cmである。遺物は主として中央部床面に散在しており、形を知りうるものは少ないが土師器杯・小形壺型土器などが検出されている。

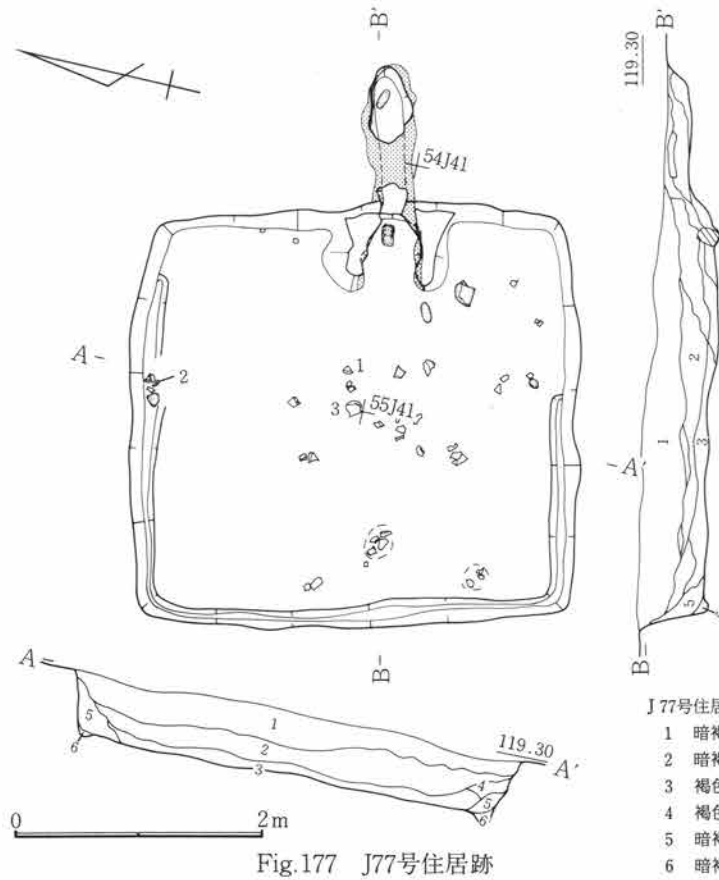


Fig.177 J77号住居跡

J77号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。よごれている。
- 2 暗褐色土 よごれている。
- 3 褐色土 明褐色塊を含む。よごれている。
- 4 褐色土 黄褐色塊を含む。
- 5 暗褐色土 締りあり。
- 6 暗褐色土 周溝。

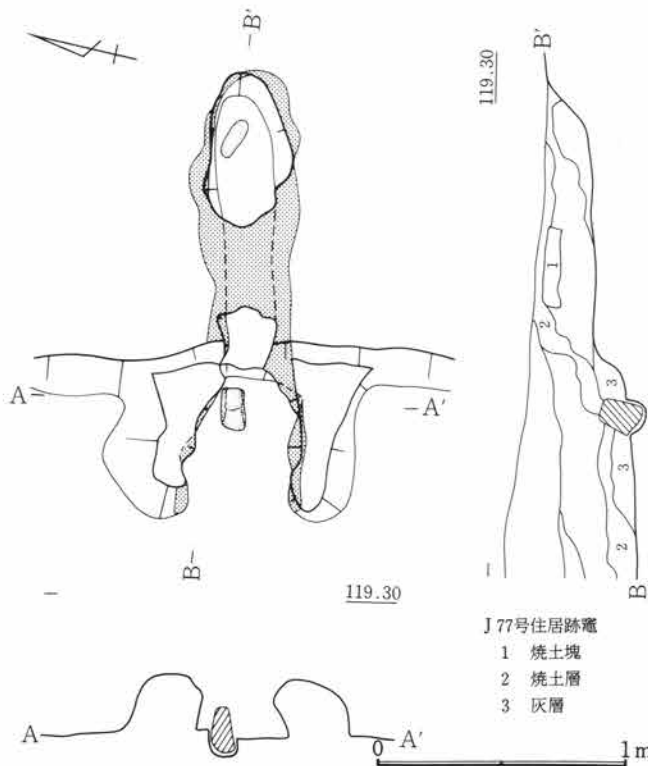


Fig.178 J77号住居跡竈

J77号住居跡竈

- 1 焼土塊
- 2 焼土層
- 3 灰層

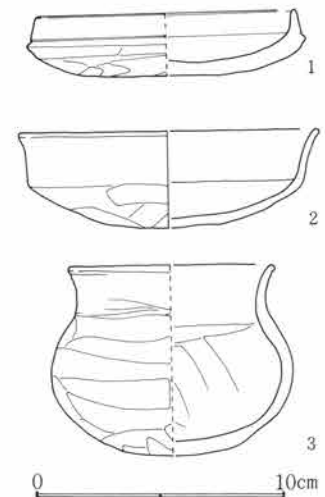


Fig.179 J77号住居跡出土遺物

J77号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
179-1 62-1	土師器	杯	3/4	12.1×-×3.9 口縁高2	北中央部埋 土北壁寄	底部丸底をなし不安定。口縁部くびれて外反して開く。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、褐色大粒混る
179-2 62-2	須恵器	杯	1/4	10.5×-×2.5 受け部径11.2	中央部埋 土	底部浅く扁平。受け部丸味をもつ略三角。口縁部低く、直線的にやや内傾して立つ。底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰 ③粗砂多く混る
179-3 62-3	土師器	罎	1/2	8.3×-×7.6	中央部埋 土	丸底を呈し、胴部丸く球形を呈す。口縁部外反し直立気味に開く。口縁部横撫で。胴・底部手持ち篋削り。	①良好 ②橙 ③緻密

J78号住居跡 (Fig. 180~182・PL. 62, 63)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
方形か	3.60 × 3.70	N- 119° - E	東壁ほぼ南寄り	—————

J区中央部に位置し、50~52J 34~36の範囲にある。北東部は100号と重複し、また東部で96号住居跡と竈を接しているがこれらより新しい時期の所産である。南壁寄りには後世の溝により、失われている。平面形は方形を呈すると考えられるが、西壁に若干の歪みがある。壁は高さ20cmを測り、傾斜している。床面は平坦であるが、軟弱である。竈は東壁の南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれる。南東部隅に幅0.6m・奥行き1mの袋状張出し部があり、貯蔵穴に代わる施設か竈の袖を意識した施設と考えられる。内壁はよく熱を受け、底面には焼土と灰が堆積している。西半に2個所、落込みがあるが、当遺構に伴うものか否か、不明である。北東部壁際に焼土が認められたが、先行する100号住居跡の竈である。遺物は西半部を主として床面に散在しており、小型品と円礫がほとんどである。

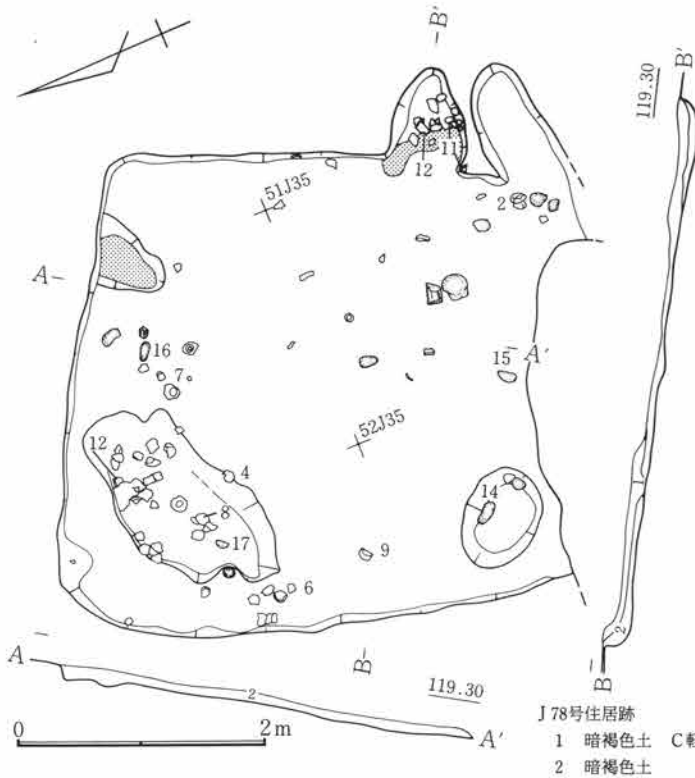


Fig.180 J78号住居跡

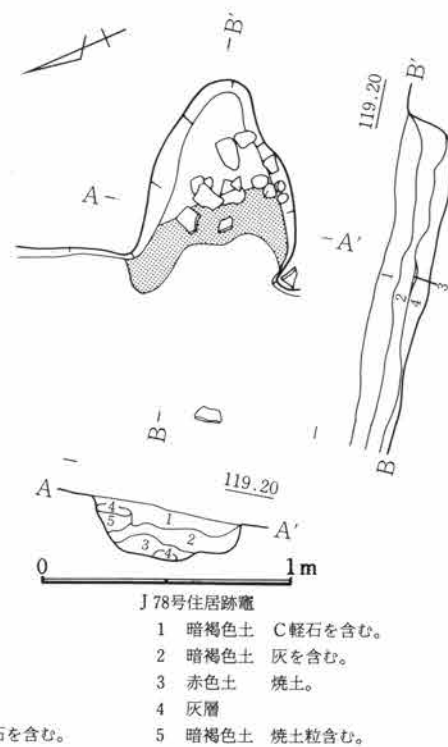


Fig.181 J78号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

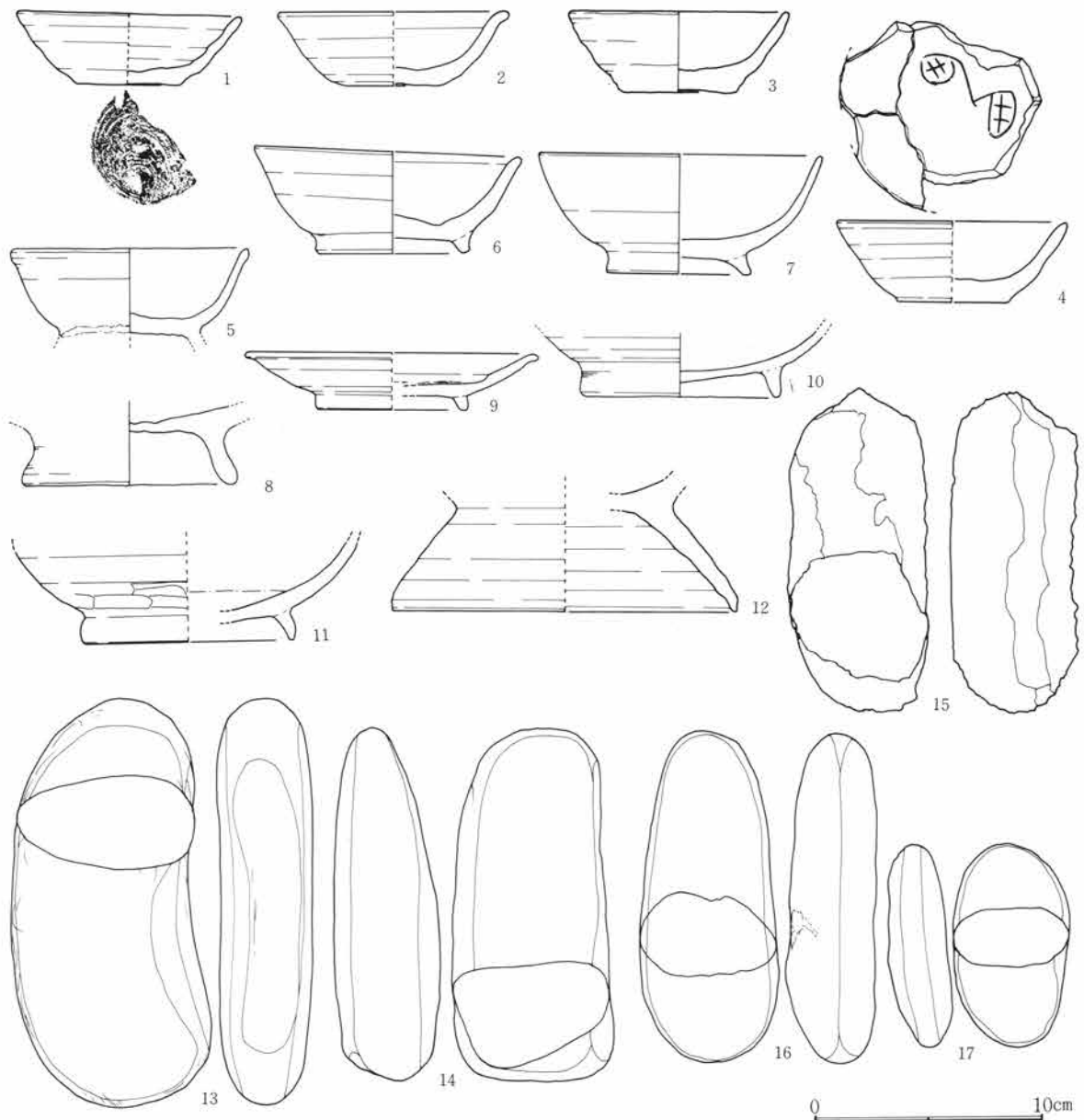


Fig.182 J78号住居跡出土遺物

J78号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
182-1 63-1	土師器? 杯	1/2	9.6×4.6×3.1	南西部埋 土	腰部にやや丸味をもち、体部は直線的に開く。轆轤成形。 右回転糸切り。見込部回転調整。	①還元気味 ②灰黄 ③やや粗
182-2 63-2	土師器 杯	完	9.6×5.2×3.5	南西部埋 土	底部肥厚し、体部やや内湾気味に開く。轆轤成形。右回転 糸切り。	①良好 ②橙 ③や や粗、砂混る
182-3 63-3	土師器 杯	2/3	10.1×4.5×3.2	南東部床 面	腰から体部に丸味をもち、口唇部は丸く外屈する。轆轤成 形。回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
182-4 63-4	土師器? 杯	1/2	10.1×5.0×4.5	北西部床 面	底部肥厚。体部内湾気味に開く。轆轤成形。回転糸切り。 見込部に篋描き文あり。	①良好 ②浅黄 ③ 粗、砂多く混る
182-5 63-5	土師器? 椀	高台欠 損	10.4×—×(4)	南西部埋 土	体部に丸味をもち、口唇部僅かに外傾。付高台。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③ 粗、砂多く混る
182-6 63-6	須恵器 椀	高台一 部欠損	11.6×6.8×4.5	西中央埋 土	体部にやや丸味をもち、口縁部は緩く外反。付高台。断面 丸い。轆轤成形。回転糸切り。作り雑。	①酸化 ②灰黄 ③ 粗、小石混る

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
182-7 63-7	土 師 器 椀	3/5	12.4×6.4×5.2	北中央埋 土	体部に丸味をもち、口縁部外反気味。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
182-8 63-8	土 師 器 椀	高台部	—×9.3×3.4 高台高2.3		付高台、高くハの字状に開く。断面丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②橙 ③やや粗、砂混る
182-9 63-9	灰 釉 陶 器 段 血	3/5	12.8×6.6×2.5	西中央部	体部内面に段をなし、口縁部は大きく外反する。付高台、端部断面はやや丸味。付け掛け施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
182-10 63-10	灰 釉 陶 器 椀	底 部	—×8.8×(2.8)	南西部埋 土	腰部に丸味をもつ。付高台、やや高く直線的に立つ。端部断面丸い。底・腰部回転篋削り。	①良好 ②淡黄 ③やや密
182-11 63-11	灰 釉 陶 器 椀	底部3/5	—×9.2×(4.2)	竈 内	腰部丸い。付高台、端部細り、内湾して立つ。腰部回転篋削り。見込部無釉。	①良好 ②灰 ③やや密
182-12 63-12	土 師 器 鉢	高台3/5	—×15.1×(5.5) 高台高4.5	北西部埋 土	高台高く、ハの字状に開く。端部はやや内傾する。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
182-13 63-13	石	完	長17.6×幅8.8× 厚4.1 985g	北中央埋 土		輝石安山岩
182-14 63-14	石	完	長15.3×幅7.1× 厚4.4 810g	南西部床 面		輝石安山岩
182-15 63-15	石	完	長(14)×幅(16)× 厚(5.7) 735g	南東部床 面	表面は多剥落、調整痕か。	石英閃緑岩
182-16 63-16	石	完	長14.3×幅6.1× 厚3.6 523g	北中央部床 面		変質安山岩
182-17 63-17	石	完	長8.7×幅5.1× 厚2.6 175g	北西部床 面		溶結凝灰岩

J 79号住居跡 (Fig. 183~185・PL. 63, 64)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
方 形	3.70 × 3.95	N— 120° —E	東壁やや南寄り	—— ————

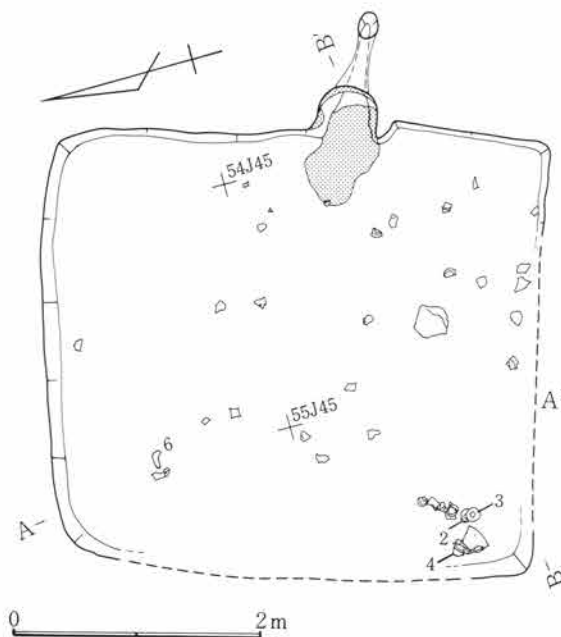
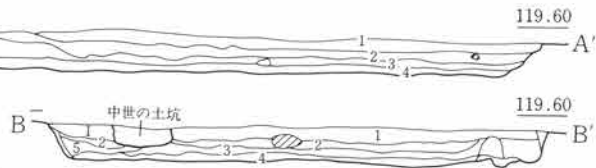


Fig. 183 J79号住居跡

J区北部に位置し、53~55 J 44・45の範囲にある。83号・84号・98号の各住居跡と重複している。新旧関係は、いずれよりも新しい時期の所産である。西壁中央と南壁中央は、重複土壌の中にあり、確認を逸している。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面は、



J 79号住居跡・竈

- 1 黒褐色土 細粒のC軽石を多く含む。
- 2 黒褐色土 大粒のC軽石を含む。
- 3 黒褐色土 大粒のC軽石を多量に含む。締りなし。
- 4 暗褐色土 C軽石含む。締りよし。

第2章 J区の遺構と遺物

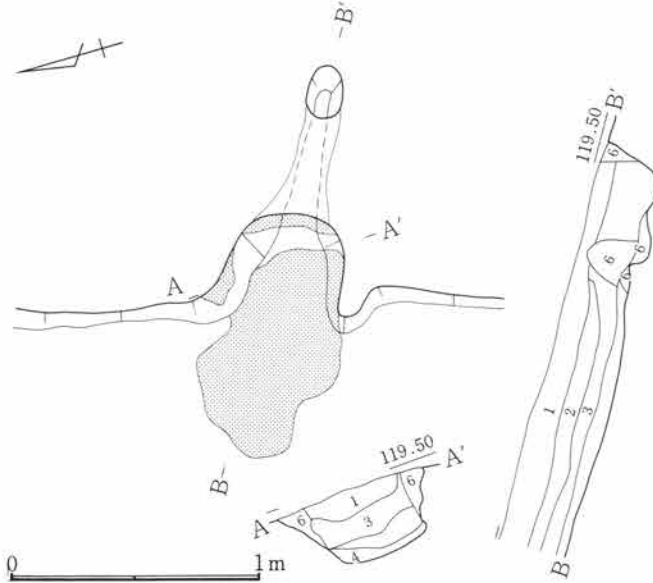


Fig.184 J79号住居跡竈

掘形にかなり傾斜と凹凸があるものの、それを補って平坦に踏み固められている。竈は東壁のほぼ中央に付設され、楕円形に掘り込まれる。明瞭な袖部は認められなかったが、右袖にあたる部分が小さく突出して袖様をなしている。燃烧部底面はよく熱を受けており、焼土と灰の堆積が認められる。燃烧部奥壁に連続して段差なく長い煙道部が続き、天井は煙出しに至るまで崩落せずによく残っている。燃烧部幅50cm・奥行き40cm、煙道部長さは1.3m、煙出し孔径20cmを測る。遺物は床面各所に散在していたが、土師質の杯類・足高高台の椀などが検出されている。

J79号住居跡・竈

- 5 暗褐色土 C軽石を含む。
- 6 赤色土 焼土。

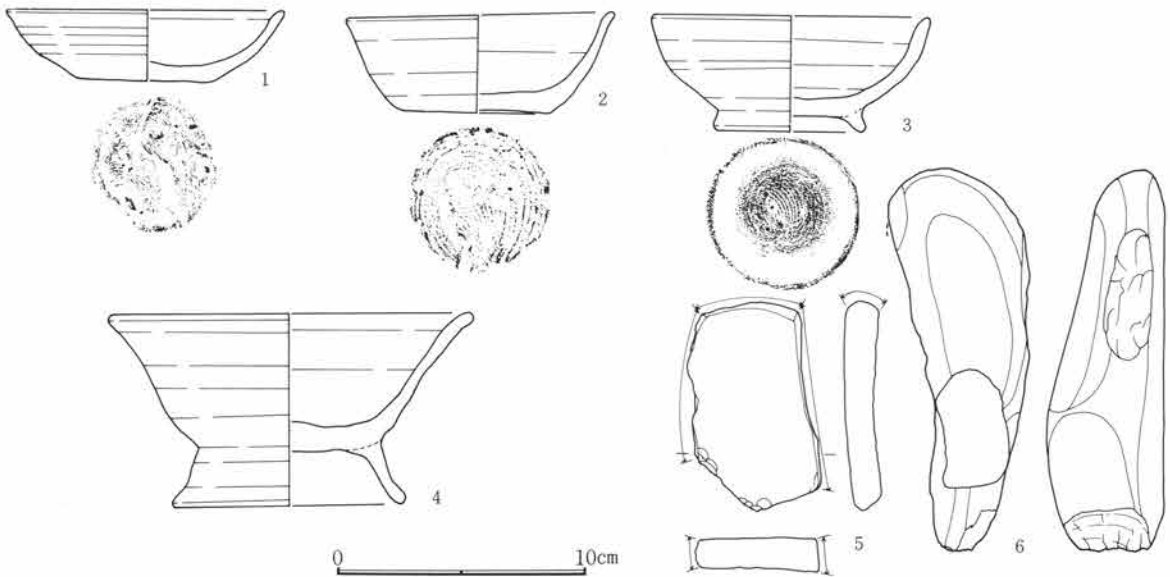


Fig.185 J79号住居跡出土遺物

J79号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
185-1 64-1	土 師 器 杯	完	11.1×5.2×2.8	埋 土	底径小さく、体部中位で僅かに脹らむ。口唇部は緩く外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密
185-2 64-2	土 師 器 杯	体部欠損	10.9×5.9×4.1	南西部埋土	体部深くやや脹らみをもつ。口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密
185-3 64-3	土 師 器 椀	完	11.2×6.1×4.6	南西部埋土	体部丸味をもつ。口縁部内面に僅かな段をもつ。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好、燻し ②暗灰 ③やや密
185-4 64-4	土 師 器 椀	ほぼ完	14.6×9.4×7.7 高台高2.2	南西部埋土	体部深く外反気味に開く。付高台、高くハの字状に開き、先端部はさらに開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂多く混る
185-5 64-5	須 恵 器 転用砥石		8.3×5.2×1.4 82.6g	埋 土	3側面使用。礫片、内面青海波状あて目。外面平行叩き目。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色太粒混る
185-6 64-6	石	完	7.2×3.4×2.9 120g	南央部埋土	一端に片側打撃あり。	輝石安山岩(粗粒)

J80号住居跡 (Fig. 186、187・PL. 64)

J区北部に位置し、52・53J47・48の範囲にある。南西部が97号住居跡と重複し、西部で94号住居跡の竈の煙道が接している。新旧関係はこれらより古い時期の所産である。平面形は隅丸の方形を呈し、東西・南北長は約3.2mを測る。竈を基軸にする東西方位はおおよそN-90-Wを示す。壁は高さ20cmを測り傾斜している。床面は平坦であるが、重複部分がやや軟弱であり、低くなっている。竈は西壁のほぼ中央部に付設され、長い煙道部を伴っている。燃焼部の先端は小さく略三角に掘り込まれ、大部分は住居内に存在したと思われるが、火床面の形成は弱い。煙道部はゆるい傾斜をもって立ち上がり、長さ約60cmを測る。出土遺物は散在しており少量である。

J80号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石を僅かに含む。締りあり。
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。
- 5 赤褐色土 焼土粒・灰を含む。



Fig.186 J80号住居跡

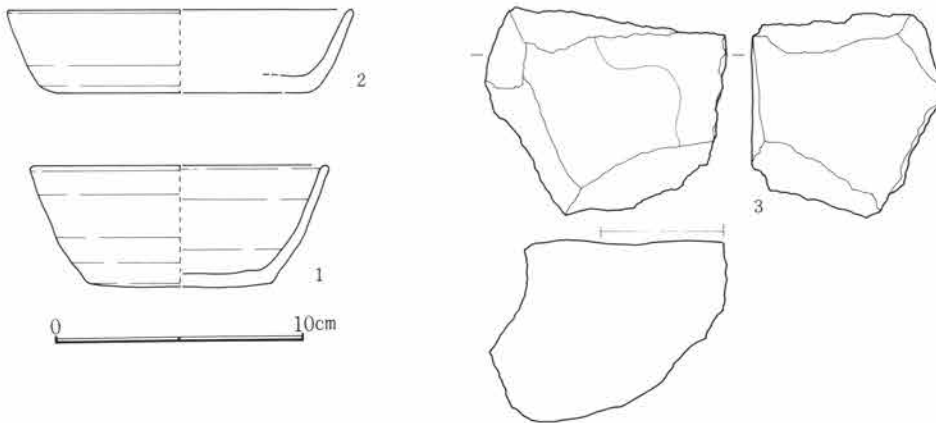


Fig.187 J80号住居跡出土遺物

J80号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
187-1 64-1	須 惠 器 杯	□~底 1/5	12×7.4×(4.2)	中央部床 面	体部やや深く、中位で僅かに届して上半は直線的に開く。轆轤成形。回転篋切り後、回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色粒混る
182-2 64-2	須 惠 器 盤	小片	13.8×10×3.3	南西部床 面西壁寄	腰部にやや丸味をもち、体部浅く直線的に外傾。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
187-3 64-3	石	小片	9.7×8.3×7.2 690g	北西部埋 土	上下面磨滅痕あり。石皿状遺物か。両面に炭化物付着。	輝石安山岩(粗粒)

J81号住居跡 (Fig. 188~191・PL. 65)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.10 × 3.50	N-68.5°-E	東壁やや南寄り	—————

J区中央部に位置し、51~53J 28~30の範囲にある。北東部が72号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。また、井戸跡は近世のものである。平面形は方形を呈するが、南・西壁線は内側へ湾曲して歪む。壁は高さ25cmを測り、傾斜している。床面は掘形がかなり凹凸であるにもかかわらず、平坦に造られよく踏み固められている。竈は東壁の南寄りに付設され、床面より約10cmの段差で立ち上がりほぼ水平に煙道部が長く突出する。煙道部長さ1.3mを測る。遺物は主に北東部床面に散在していた。土師器の須恵器模倣杯が目立つ。

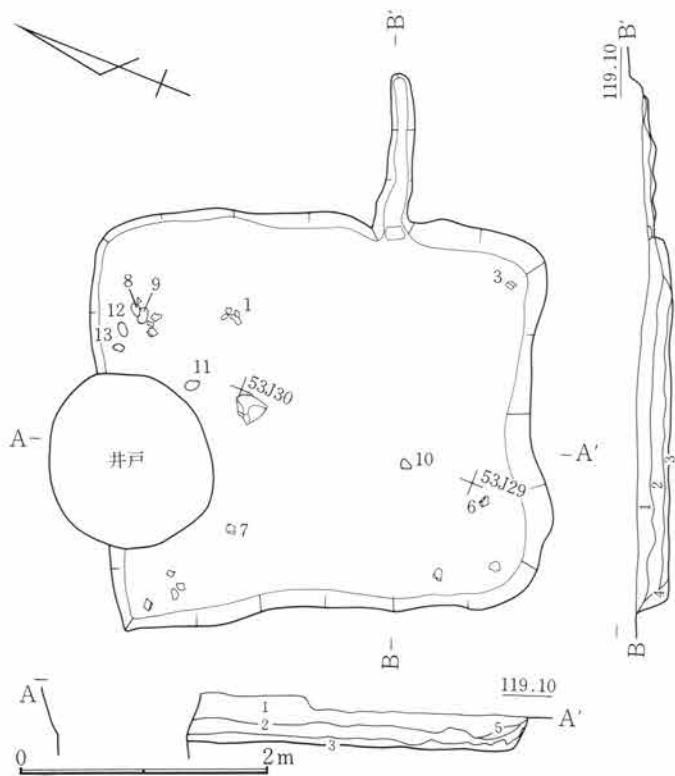
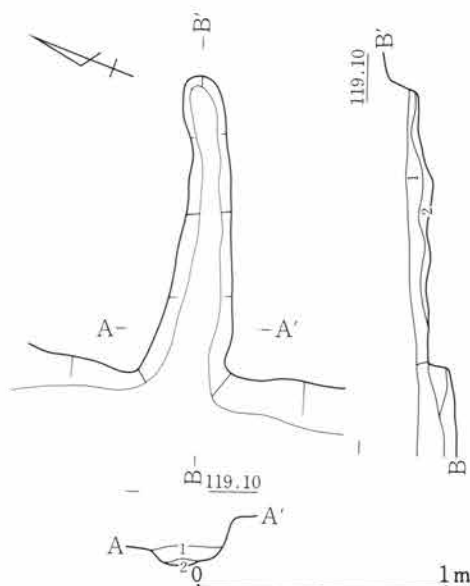


Fig.188 J81号住居跡



J81号住居跡竈

- 1 暗褐色土 粘性土。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。

Fig.189 J81号住居跡竈

J81号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。締りなし。土粒が粗い。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。締りよし。
- 3 暗褐色土 締りよし。粘性土。
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 締りよし。

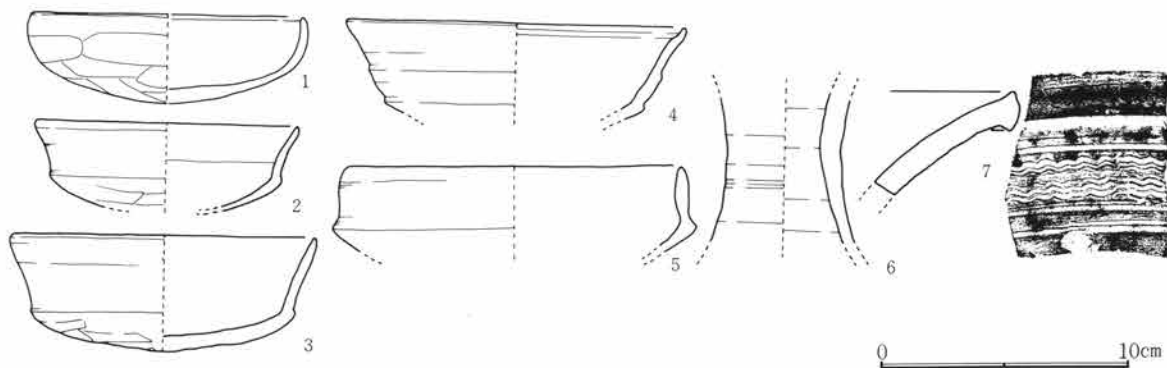


Fig.190 J81号住居跡出土遺物(1)

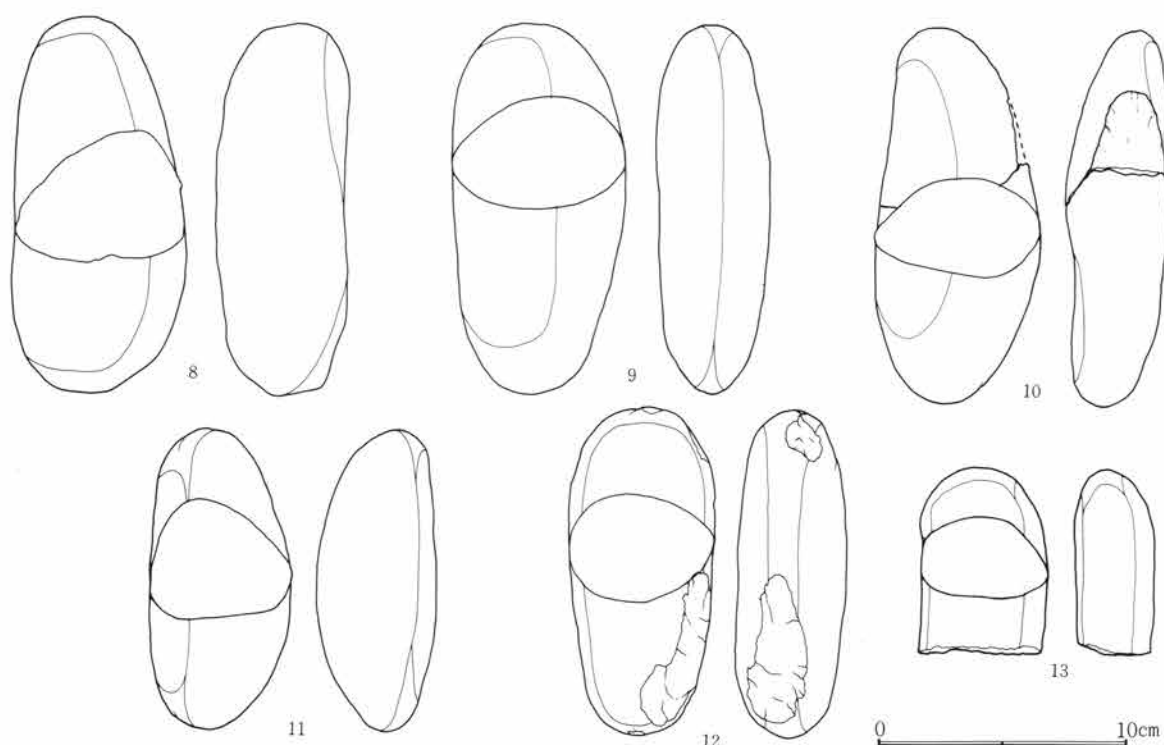


Fig.191 J81号住居跡出土遺物(2)

J 81号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
190-1 65-1	土師器 杯	1/2	11.3×-×3.6	北東部埋 土	底部丸く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面・口縁部横撫で。体部弱い横篔削り。底部不定方向篔削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る
190-2 65-2	土師器 杯	小片	10.6×-×(3.2) 口縁高2		底部丸く、受け部丸味のある段をなす。口縁部は外反後先端は内湾する。口縁部横撫で。底部篔削り。	①良好 ②橙 ③密
190-3 65-3	土師器 杯	1/2	12.4×-×4.6 口縁高3		底部浅く扁平。受け部は丸味のある段をなす。口縁部外反後内湾気味に開く。口縁部横撫で。底部篔削り。	①良好 ②橙 ③密
190-4 65-4	土師器 杯	小片	13.6×-×(3.5) 口縁高3.2		底部浅く扁平。受け部に僅かな段をなす。口縁部外傾し中位に段をもつ。口唇部内屈。口縁部横撫で。底部篔削り。	①良好 ②明橙 ③やや密、細砂混る
190-5 65-5	土師器 杯	小片	13.6×-×3.3 口縁高2.5	電内	底部扁平。受け部断面略三角の段をなす。口縁部脹らみ内傾気味に立つ。内面に凹線あり。口縁部横撫で。底部篔削り。	①良好 ②橙 ③密
190-6 65-6	須恵器 高杯	脚部小 杯片	-×-×(5.8) 最小径4.5		1条の弱い凹線が巡る。巻き上げ、轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色細粒混る
190-7 65-7	須恵器 甕	口縁部 小片			口唇部下端はくの字状に折れ、丸く脹らみをもって立つ。上端部は略三角、7本1条の波状文下に2条の凹線区画。	①良好 ②灰 ③密
191-8 65-8	石		14.7×7×5.2 785g	北東部		ひん岩
191-9 65-9	石		14.6×7×4.6 680g	北東部		輝石安山岩(粗粒)
191-10 65-10	石		14.9×6.5×3.9 550g	南央部	一部欠損。	輝緑岩
191-11 65-11	石		11.9×5.7×4.8 475g	北央部		石英閃緑岩
191-12 65-12	石		13×5.9×4.3 485g	北東部	被熱により一部剥落。	輝石安山岩(粗粒)
191-13 65-13	石		(7.4)×5.3×3.2 (215g)	東央部		変質安山岩

J82号住居跡 (Fig. 192、193・PL. 66、67)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
—	5.85 × 4.62	東西軸(74.5°)	—	—

J区中央部に位置し、51～54 J 26～28の範囲にある。住居を東西に分断する形で溝跡が、また南壁寄りには現代の攪乱を受け床面にも攪乱穴が多い。現状の平面形は隅丸長方形を呈し東壁線が歪む。東西長約5.5 m・南北長約4.6mを測る。北東隅は楕円形に北壁より約60cmの突出部が設けられ、先端部には径40cmの Pit が穿たれているがその機能は不明である。壁は高さ35cmを測り、ほぼ直立する。掘形は凹凸が顕著であるが床面は平坦である。多くの土坑状落ち込みや Pit が検出されているが貯蔵穴や柱穴として認定できるものはなかった。竈は現状では確認されず東部に少量の焼土の堆積が認められたが、竈の存在を肯定できるまでには至らない。遺物は床面全体に散在していたが、形を知りうる土器は少ない。用途不明の鉄器・須恵器転用砥石などのほか、小型の円礫が多量に出土している。

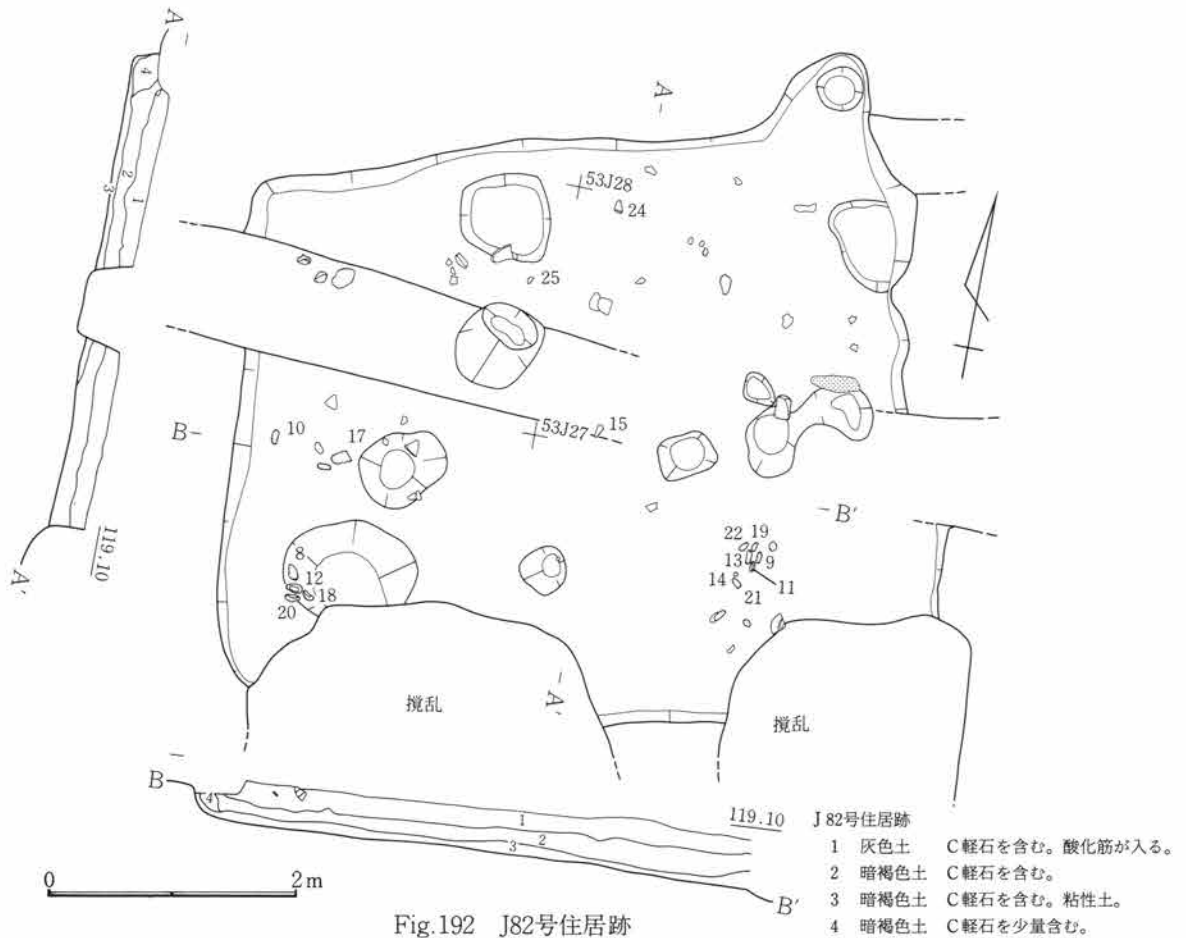


Fig.192 J82号住居跡

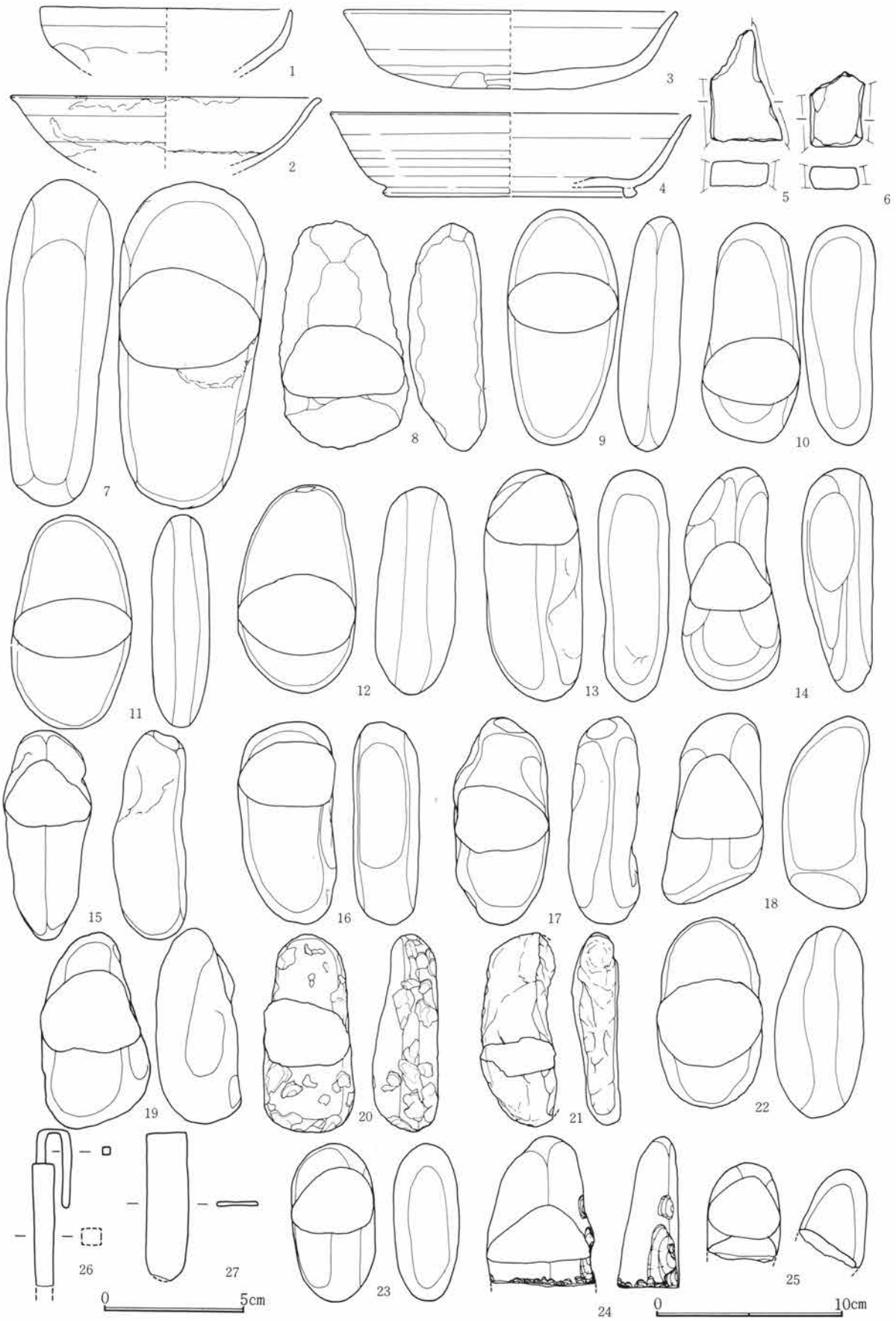


Fig.193 J82号住居跡出土遺物

第2章 J区の遺構と遺物

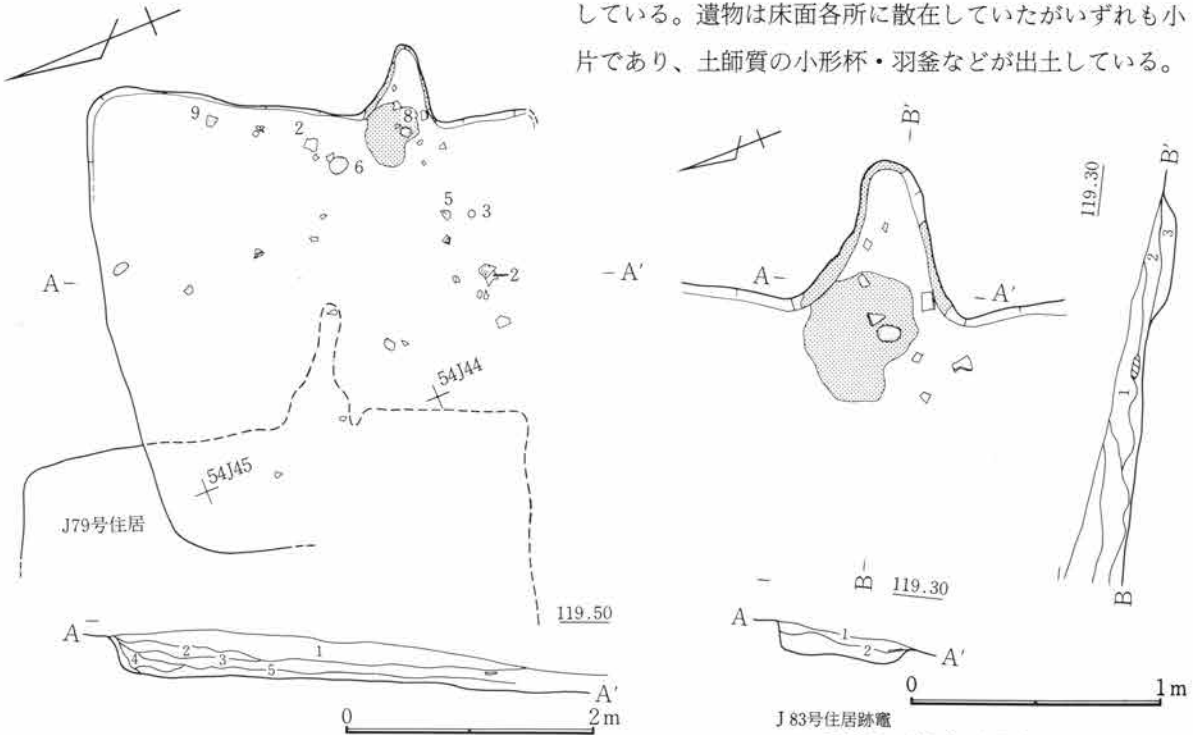
J 82号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
193-1 66-1	土 師 器 杯	1/2	13.5×—×(3.3)	埋 土	底部丸味をもつか。口縁部ややくびれて外傾気味。口縁部横撫で。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗砂混る
193-2 66-2	土 師 器 盤	1/2	17.1×—×(3.3)	埋 土	底部丸味をもち扁平。口縁部外反して大きく開く。口唇部丸い。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
193-3 66-3	須 恵 器 盤	口～底 1/2	18×14.3×3.7	北中央部埋 土	底部肥厚し、やや張り出し不安定。腰部に丸味をもち体部は外反して開く。轆轤成形。底部手持・周辺部回転篋削り。	①良好 ②灰黄褐 ③やや粗、小石混る
193-4 66-4	須 恵 器 椀	1/2	19.4×13.7×4.5	南東部床 面	腰部張る。体部浅く外反気味に開く。口唇部尖がる。付高台、下端面外方へ躍ねる。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②明青灰 ③やや密
193-5 66-5	須 恵 器 転用砥石		3.8×5.9×1.3 30.2g	埋 土	2側面使用。壔片。	①良好 ②灰 ③やや粗
193-6 66-6	須 恵 器 転用砥石		2.7×4×1.1 16.0g	埋 土	3側面使用。壔片。	①良好 ②灰 ③やや密
193-7 66-7	石	完	長17.3×幅7.8× 厚5.3	南東部床 面西壁寄		輝石安山岩(粗粒)
193-8 66-8	石	完	長12.1×幅6.9× 厚3.9 480g	南西部埋 土		石英閃緑岩
193-9 66-9	石	完	長12.5×幅5.9× 厚3.2	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-10 66-10	石	完	長11.3×幅6.5× 厚3.1 330g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-11 66-11	石	完	長11×幅6.4×厚 4.3 420g	南西部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-12 67-12	石	完	長12.3×幅5.3× 厚3.9 375g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-13 67-13	石	完	長11.9×幅5.2× 厚3.6 310g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-14 67-14	石	完	長11.7×幅5.2× 厚3.6 330g	西中央部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-15 67-15	石	完	長11.1×幅4.7× 厚3.5 230g	中央部床 面		溶結凝灰岩
193-16 67-16	石	完	長10.8×幅5.4× 厚3.6 350g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-17 67-17	石	完	長11×幅5.2×厚 3.7 320g	西中央部埋 土		珪質頁岩
193-18 67-18	石	完	長10.2×幅5.3× 厚4.5 320g	南西部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-19 67-19	石	完	長10.4×幅5.8× 厚4.4 370g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-20 67-20	石	完	長10.5×幅4.9× 厚3.6 285g	南西部埋 土		石英閃緑岩
193-21 67-21	石	完	長10.3×幅(4)× 厚2 (150)g	南東部埋 土	1側面に欠損あり。敲打によるか。	輝緑岩
193-22 67-22	石	完	長10.1×幅5.7× 厚4.7 370g	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
193-23 67-23	石	完	長8.4×幅4.4× 厚3.6 200g	南西部床 面		石英閃緑岩
193-24 67-24	石	全 1/2	長(8)×幅5.9× 厚3 (180)g	北中央部埋 土	側面及び欠損部に細かい打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
193-25 67-25	石	全 1/2	長(5.2)×幅3.9× 厚3.3 (90)g	北中央部埋 土		砂岩
193-26 67-26	鉄 製 品 — (片)	— (片)	長5.5×幅0.7× 厚0.6	南東部埋 土	角棒に小角柄を付す。柄部屈曲。用途不詳。全面錆化。X線透視復元。	
193-27 67-27	鉄 製 品 —	全 完	長5.3×幅1.5× 厚0.1	埋 土	小ざね状薄板。全面錆。X線透視復元。	

J 83号住居跡 (Fig. 194~197・PL. 67, 68)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形か	3.50 × —	N- 117° -E	東壁やや南寄り	—————

J区北部に位置し、52~54 J 43~45の範囲にある。79号・84号・98号の各住居跡と重複しており、新旧関係は84号・98号より新しく79号より古い。重複部分は色調が近似し軟弱であったので、不明瞭であった。平面形は隅丸方形であるが北西部に歪みがある。壁は高さ30cmを測り、傾斜している。床面は平坦で、中央寄り及び竈手前がよく踏み固められている。竈は袖無し型で、明確な煙道部はない。燃焼部底面には焼土が堆積している。遺物は床面各所に散在していたがいずれも小片であり、土師質の小形杯・羽釜などが出土している。



J 83号住居跡

- 1 黒褐色土 細粒のC軽石を多量に含む。
- 2 褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 黒褐色土 大粒のC軽石を多量に含む。
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土 C軽石を若干含む。

Fig.194 J83号住居跡

J 83号住居跡竈

- 1 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
- 2 赤色土 焼土粒層。
- 3 暗褐色土 焼土粒を若干含む。

Fig.195 J83号住居跡竈

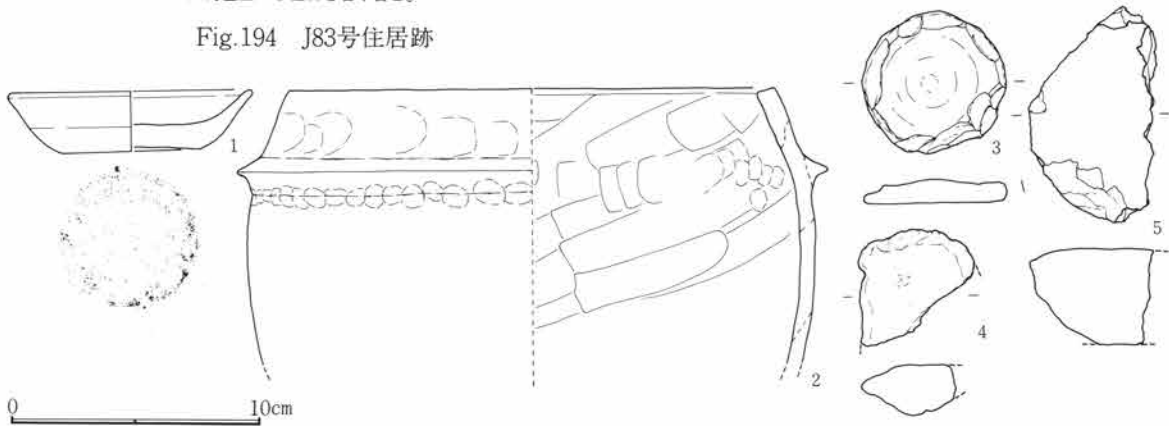


Fig.196 J83号住居跡出土遺物(1)

第2章 J区の遺構と遺物

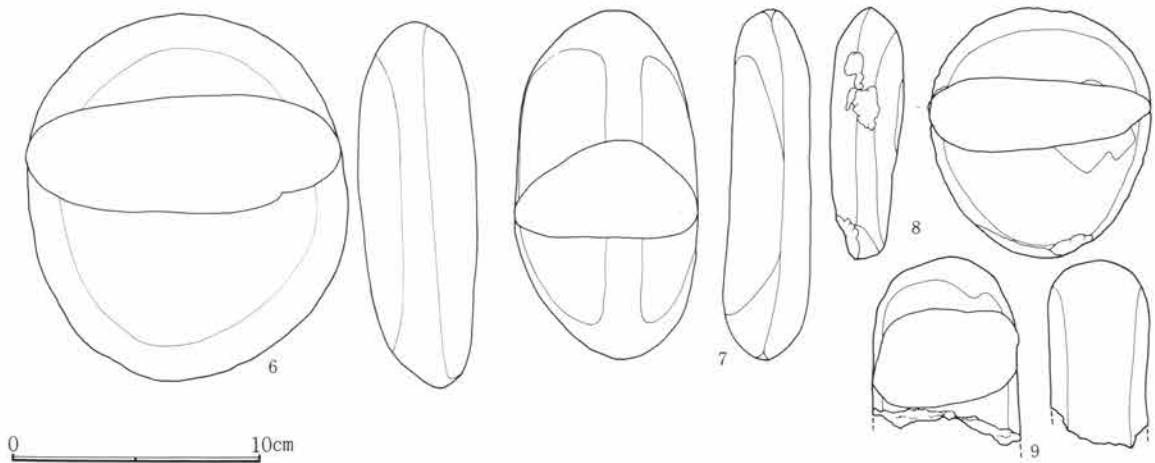


Fig.197 J83号住居跡出土遺物(2)

J 83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
196-1 68-1	土 師 器 杯	体部 $\frac{3}{4}$ 欠損	9.9×5.4×2.3	埋 土	底部肥厚。体部浅く緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、軟 ② 灰白 ③やや密
196-2 68-2	— 羽 釜	口縁部 $\frac{1}{4}$	19.4×—×(10.9) 口径23.5	南央・東 央部埋土	胴部やや脹らむ。鋳低く幅狭い。先端部丸く細り下方へ向く。口縁部内湾気味に内傾。口縁部上下指頭痕後横撫で。	①酸化、良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
196-3 68-3	須 恵 器 杯	底 部	径5.7×5.6×厚1	南東部埋 土	底部縁刃磨耗するが成形の為か。右回転糸切り。円板状に成形?	①酸化気味 ②明褐 灰 ③粗、砂混る
196-4 68-4	鉄 碗形鋳滓	小 片	長(3.9)×幅(3.7) ×厚2	埋 土	気泡孔多いが比較的重量あり。	
196-5 68-5	石	全 $\frac{1}{2}$	長(8.6)×幅(5) ×厚3.8	南東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)
197-6 68-6	石	完	長14.5×幅12.9 ×厚4.8 1,305g	東央部床 面		石英閃緑岩
197-7 68-7	石	完	長13.9×幅7.3× 厚3.9 510g	北央部埋 土		石英閃緑岩
197-8 68-8	石	完	長9.9×幅8.9× 厚2.9 305g	竈手前埋 土	側面に数ヶ所敲打痕あり。片面に磨滅痕。	輝石安山岩(粗粒)
197-9 68-9	石	全 $\frac{1}{2}$	長(7.4)×幅6× 厚3.8 265g	北東部埋 土		輝石安山岩(粗粒)

J 84号住居跡 (Fig. 198~200・PL. 68、69)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
方 形	3.35 × 3.55	N— 82° —E	東壁やや南寄り	—————

J区中央部に位置し、52~54 J 42~44の範囲にある。北半部が83号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。壁は高さ15cmを測り、ほぼ直立する。北壁とそれに続く東壁北寄りに壁下溝が設けられている。幅10cm、深さ4cmを測る。床面は凹凸が顕著であるが、中央部及び竈手前がよく踏み固められている。竈は東壁の南に寄って付設され、大きく半円形に掘り込まれた燃烧部に小さく突出する煙道部が付く。袖部の検出はなく切石などの構築材も出土していない。内壁・底面ともによく熱を受けている。燃烧部幅約1m・奥行き40cm、煙道部長さ45cmを測る。竈燃烧部から床面南半に広く灰の堆積が認められる。火災のあった痕跡は

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

なく、使用時の雨水等の流入によることが考えられる。西部床面に東西65cm・南北80cm、深さ20cmの楕円形のPitがあり貯蔵穴の可能性もあるが性格は不明である。遺物は竈内および東半部の床面を中心に散布しているが、礫を除いて土師器甕類の小片のみであり形を知りうるものは須恵器杯型土器1点にすぎない。

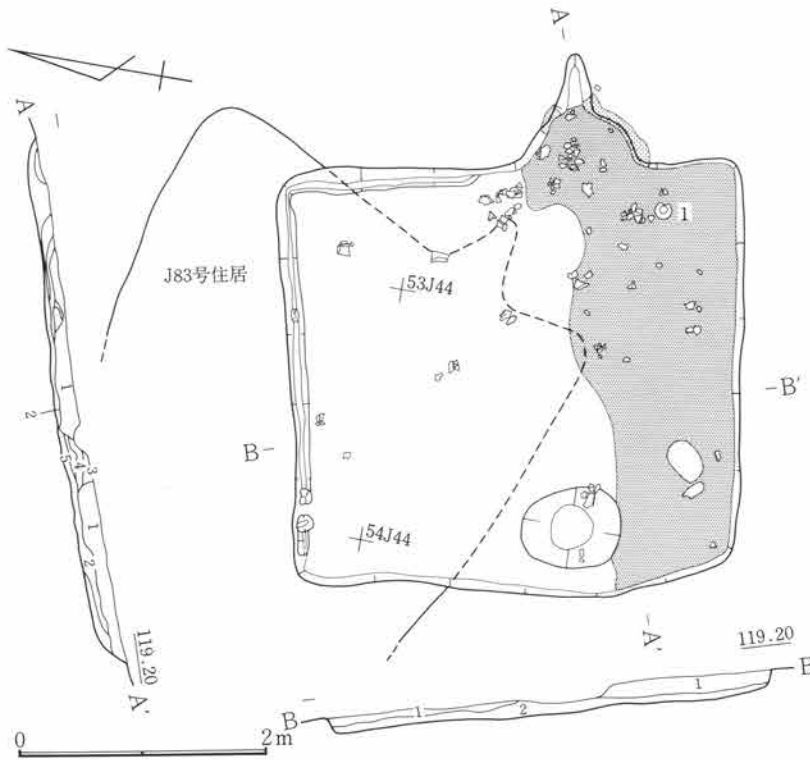


Fig.198 J84号住居跡

J84号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 黒褐色土 粘性土。締りあり。
- 3 灰層
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石・灰を含む。

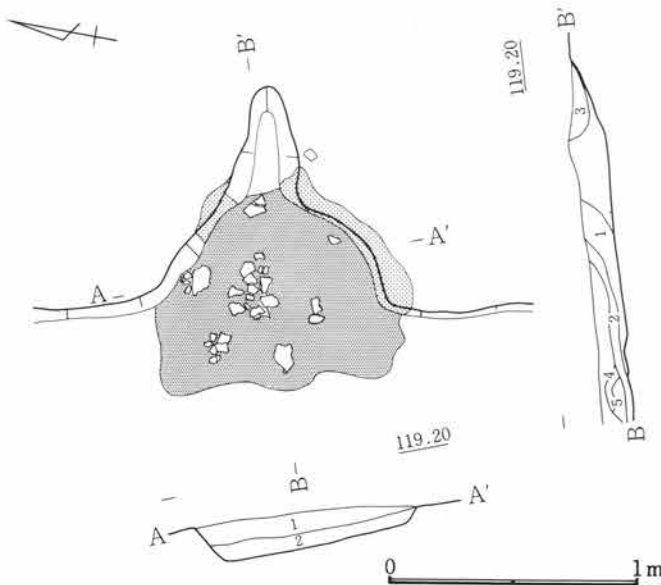


Fig.199 J84号住居跡竈

J84号住居跡竈

- 1 灰層
- 2 赤色土 焼土粒層。
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 4 黄褐色土 砂質土。
- 5 黄褐色土 粘土塊層。

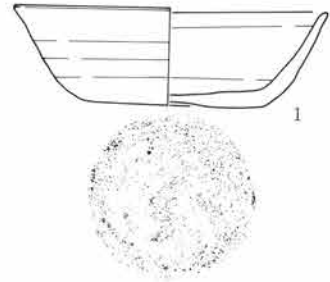


Fig.200 J84号住居跡出土遺物

J84号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	種 種	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
200-1 69-1	須 恵 器 杯	器 形	完	12.5×6.6×4.0	南東部床 面	腰部にやや丸味あり。口縁部僅かにくびれて外傾。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②明オリ ブ灰 ③粗、砂混る

第2章 J区の遺構と遺物

J85号住居跡 (Fig. 201~203・PL. 69)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
方 形	3.42 × 3.30	N— 87° —E	東壁やや南寄り	—————

J区北部に位置し、49~51 J 39~41の範囲にある。北東部が89号・95号住居跡と、また東部では30号住居跡と重複し、89号より旧く30号・95号住居跡より新しい時期の所産である。北西部の隅は、遺構確認面の傾斜の関係で、確認できていない。また、南東部に円形の攪乱穴があり竈燃焼部を含む床面の $\frac{1}{4}$ が失われている。平面形は方形を呈するが、南壁線は内側へ折れて歪む。壁は高さ12cmを測り、ほぼ直立する。床面はやや凹凸があるがよく踏み固められている。竈は煙道部のみが残っており、天井は崩落しておらず、長さは75cm、煙出し孔径約20cmを測る。遺物は少ない。

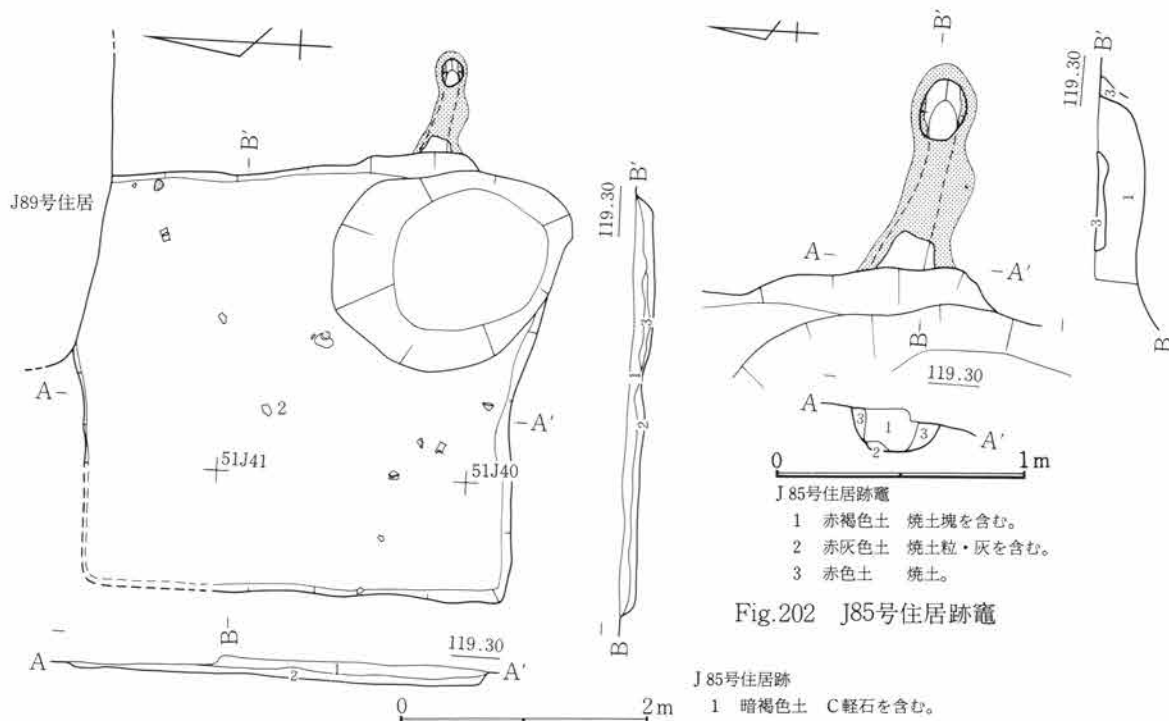


Fig.201 J85号住居跡

Fig.202 J85号住居跡竈

J85号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。締りよし。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。

Fig.203 J85号住居跡出土遺物

J85号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
203-1 69-1	須 恵 器 椀	体部 $\frac{1}{4}$ 欠損	12×7.0×4.9	南東部埋 土	器肉全体に厚い。体部直線的に開き、口縁部は僅かに外傾する。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化、良好 ②鈍い褐 ③やや粗
203-2 69-2	灰 釉 陶 器 椀	体部小 片	18.2×—×3.8	埋 土	体部にやや丸味をもち、口唇部は外反して開く。内面に弱い凹線巡る。口唇部に施釉。	①良好 ②灰 ③やや密

J86号住居跡 (Fig. 204・205・207・PL. 70)

J区北東部に位置し、49・50 J 44～46の範囲にある。38号・39号・88号・89号の各住居跡と重複関係にあり、不明瞭な部分が多く全体の形状は不明で竈周辺が確認できたのみである。新旧関係は38号・39号より新しく、88号・89号より古い時期の所産である。竈は東壁に燃烧部を楕円形に掘り込み、急角度で立ち上がり略三角の煙道部に至る。両袖に小型の凝灰岩の加工材を埋設している。燃烧部内壁はよく熱を受けており、

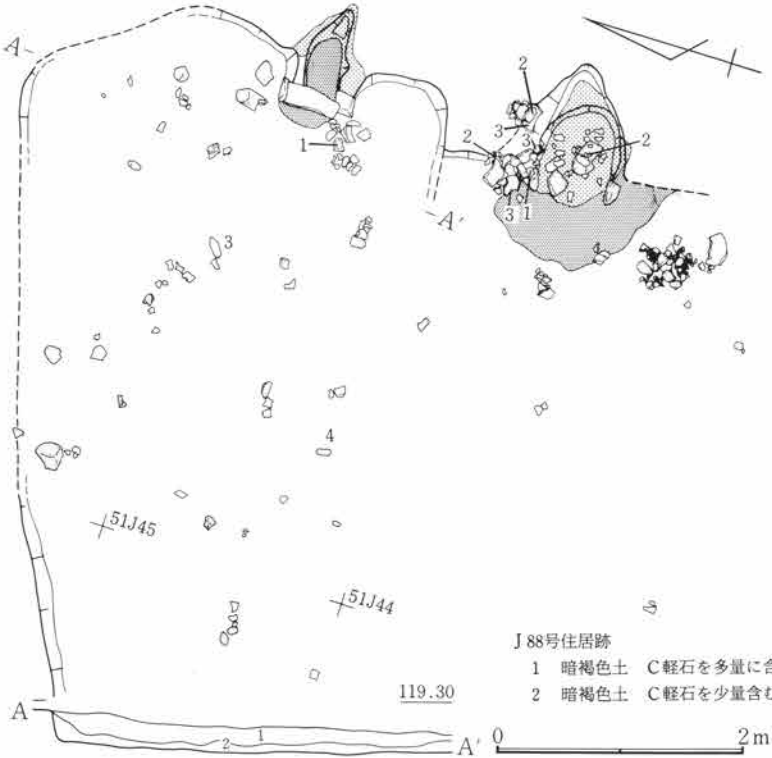


Fig.204 J86・88号住居跡

底面に焼土と灰が堆積している。遺物には大型品が多く、羽釜に良好な資料がある。

J88号住居跡 (Fig. 204, 206, 208・PL. 72)

J区北東部に位置し、48～51 J 44・45の範囲にある。86号・93号住居跡などと重複するが、いずれよりも新しい時期の所産である。他の遺構の埋土内に設けられているため壁・床ともに不明瞭で、竈周辺のみ確認にとどまった。壁は高さ25cmを測り、ほぼ直立する。

床面は軟弱で範囲は不明瞭である。竈は袖部が住居内に張り出し、粘土を用いて構築されている。先端には凝灰岩の加工材を埋設し、その上部に同質の長い加工材を乗せて焚口の天井部としている。天井材は中間に転落しかけた状態で検出された。奥壁は急に狭まり、短い煙道部を付する。袖部長さ44cm・内法30cm、燃烧部奥行き60cm、煙道部25cmを測る。燃烧部・煙道部ともによく熱を受けており、底面には灰混りの焼土が堆積している。遺物は広く散在していた。

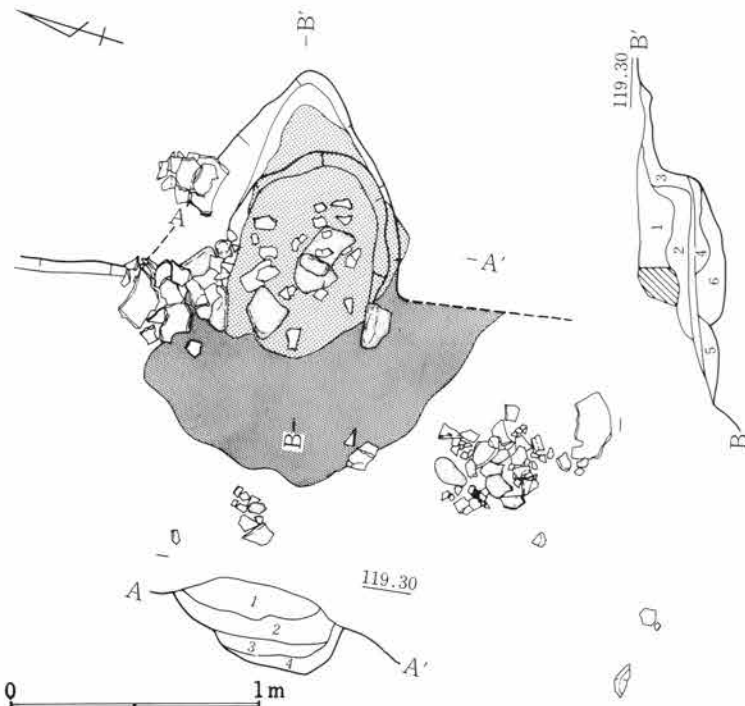


Fig.205 J86号住居跡竈

J86号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 3 赤色土 焼土粒層。
- 4 灰層
- 5 暗褐色土 灰を含む。
- 6 赤灰色土 焼土・灰を含む。

第2章 J区の遺構と遺物

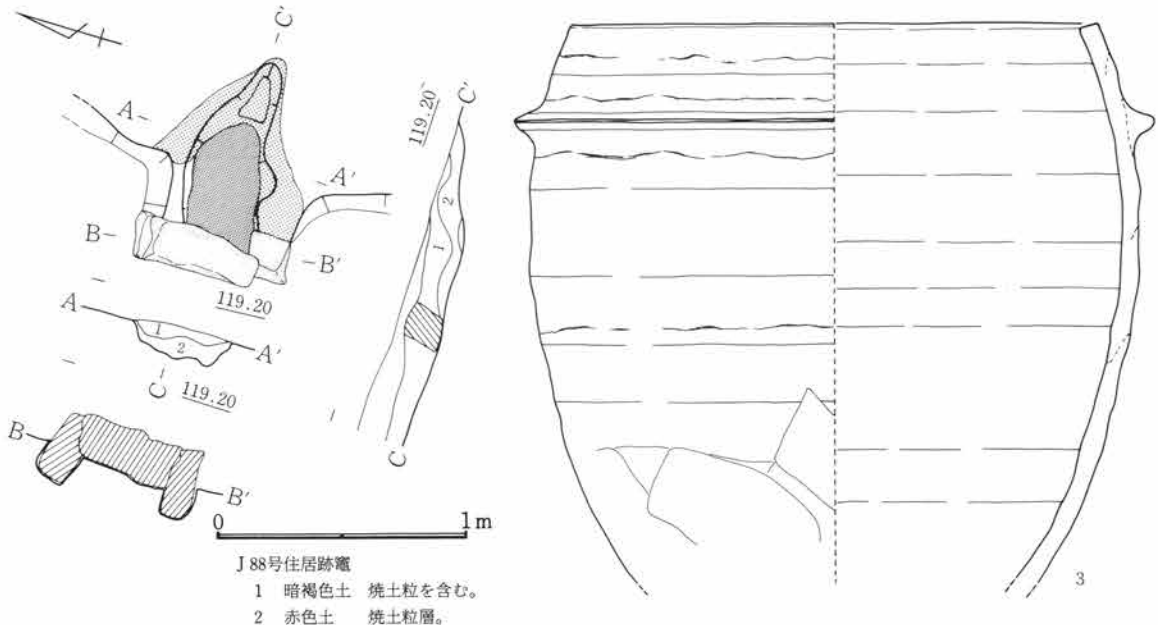


Fig.206 J88号住居跡竈

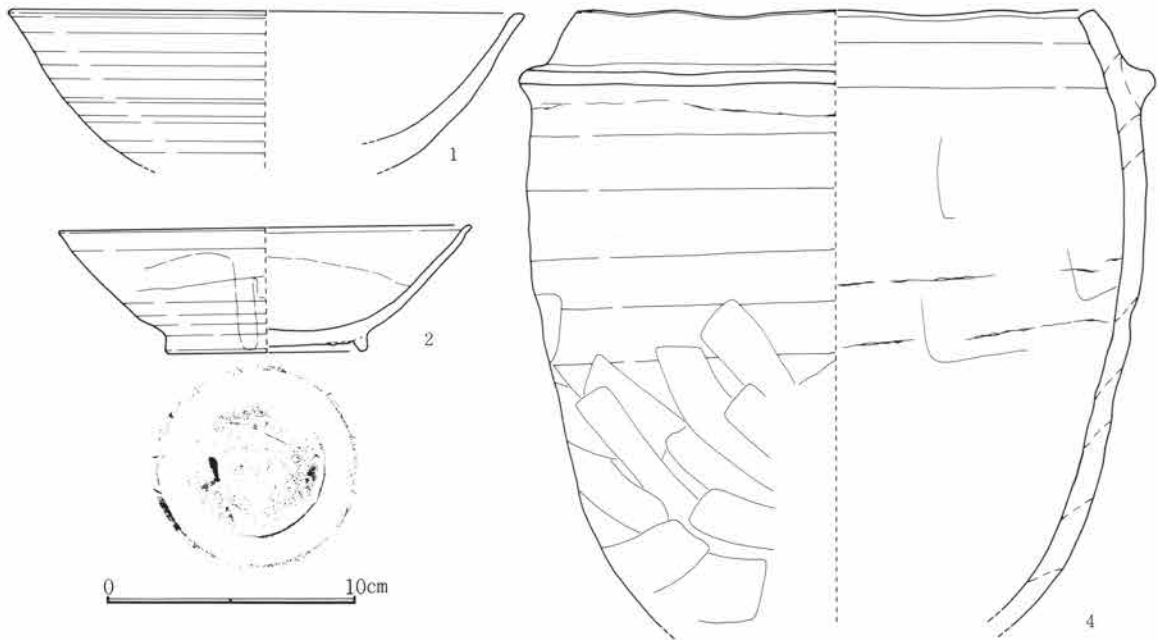


Fig.207 J86号住居跡出土遺物

J 86号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
207-1 70-1	須恵器? 鉢	1/2 底部欠損	20.7×-×(6.2)	竈手前東 中央部床面	腰部丸味をもち、口縁部緩く外反する。轆轤成形。	①酸化、良好 ②橙 ③やや粗、小石混る
207-2 70-2	灰釉陶器 碗	体部1/2 欠損	16.6×8.1×5	竈北テラス 上	腰部僅かに丸味。体部直線的に外傾。口唇部僅かに外屈。付高台、低く端部丸い。右回転糸切り。体部刷毛施釉。	①良好 ②白灰 ③ 密
207-3 70-3	- 羽釜	1/2 底部欠損	21.2×-×(22) 口径25.5	竈北袖・ 南東部	胴部やや丸く張る。銚端部丸く断面略三角。口縁部内傾し口唇上端面内斜。口縁・胴上半回転撫で。下位斜篋削り。	①酸化、良好 ②鈍 い橙 ③やや粗
207-4 70-4	- 羽釜	1/2 底部欠損	20.8×-×(24.4) 口径25.5	竈北袖部	胴部張り少ない。銚丸く幅広。口縁部内湾気味に内傾。口唇上端面内斜。口縁・胴上半回転撫で。中位から斜篋削り。	①酸化、良好 ②鈍 い黄橙 ③粗

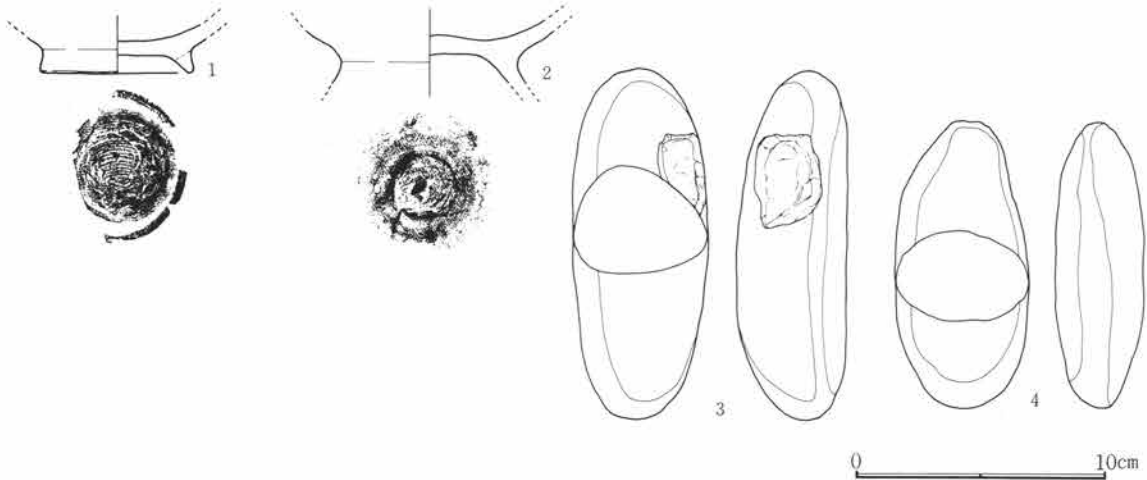


Fig.208 J88号住居跡出土遺物

J 88号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	種 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
208-1 72-1	土 師 器 碗	底 部 残	—×6.2×2			付高台、ハの字状に開き端部細り丸い。轆轤成形。回転糸切り。内外面黒色処理。	①良好 ②黒 ③やや密
208-2 72-2	須 惠 器 碗	底 部	—×—×(2.5)		埋 土	付高台。高台高く大きく開く足高の碗か。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰黄褐 ③やや密
208-3 72-3	石		13.9×5.4×4.3 510g	中央部埋 土		側面の一部欠損。	砂岩
208-4 72-4	石		11.4×5.3×3.6 310g	南部床面			輝石安山岩(粗粒)

J 87号住居跡 (Fig. 209~212・PL. 71)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	3.50 × 4.35	N— 90° —E	東壁ほぼ南寄り	—————

J区北部に位置し、51・52 J 49~K 1の範囲にあり一部はK区にまたがっている。平面形は南北にやや長い隅丸の方形を呈するが、南壁線は曲線を描きゆるく張り出す。壁の高さは約20cmを測り、直線的に立ち上がる。床面は平坦をなし、竈の前面から西部にかけての南半は堅く踏み締まる。貯蔵穴は竈に相対する南西隅に穿たれる。竈は南東の隅に付設されているが、燃烧部・袖部などは明瞭な体をなしていない。煙道部は床面より約15cmの段差をもって長く先細りして延びる。煙道部のほぼ中央に攪乱穴があり詳細不明であるが、ゆるい傾斜をなし長さ約1mを測る。遺物は床面上に散在しており、土師質の杯類のほか鉄器の小片などがある。

第2章 J区の遺構と遺物

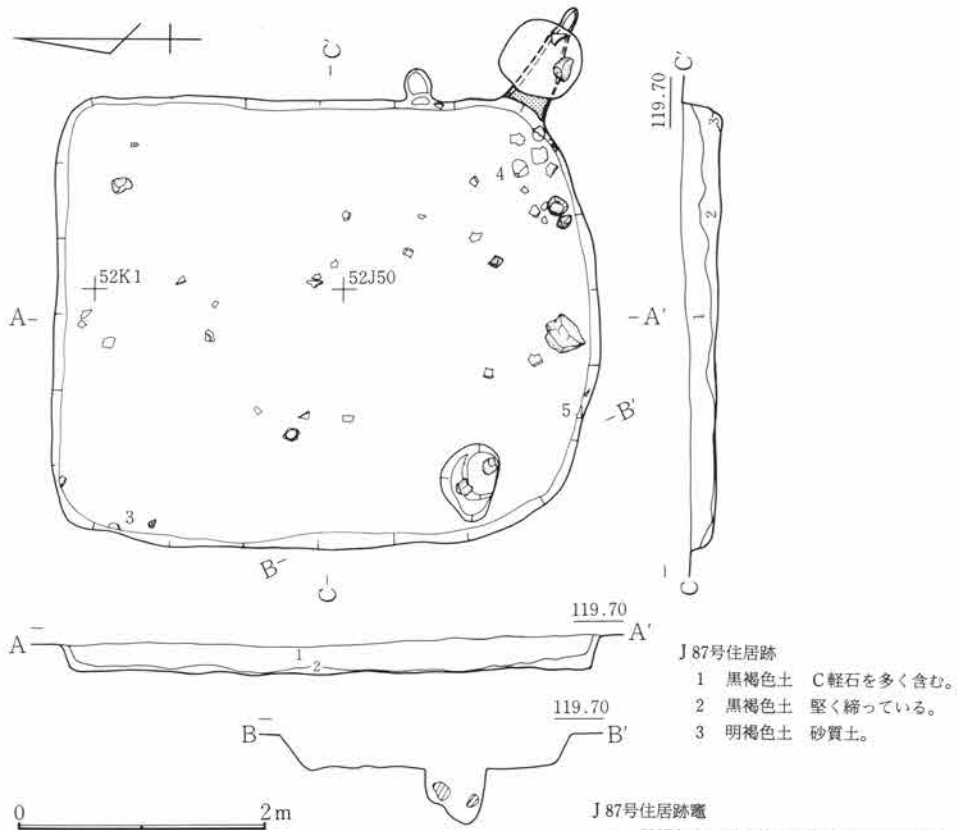


Fig.209 J87号住居跡

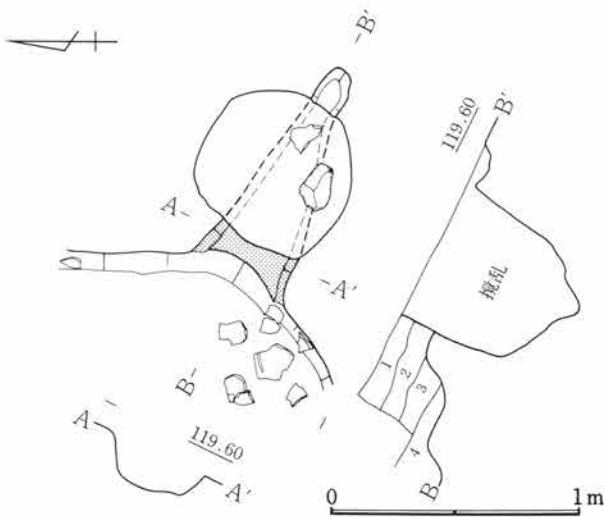


Fig.210 J87号住居跡竈



Fig.211 J87号住居跡出土遺物(1)

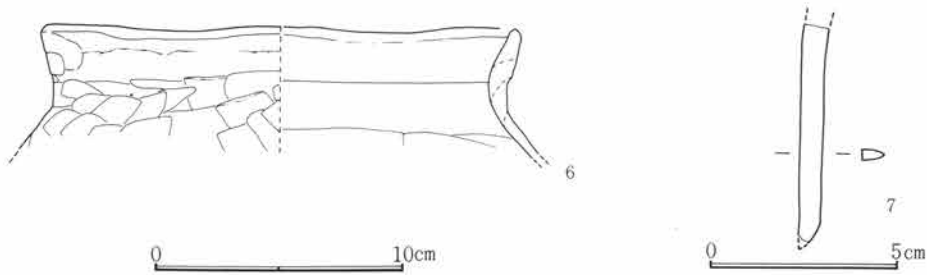


Fig.212 J87号住居跡出土遺物(2)

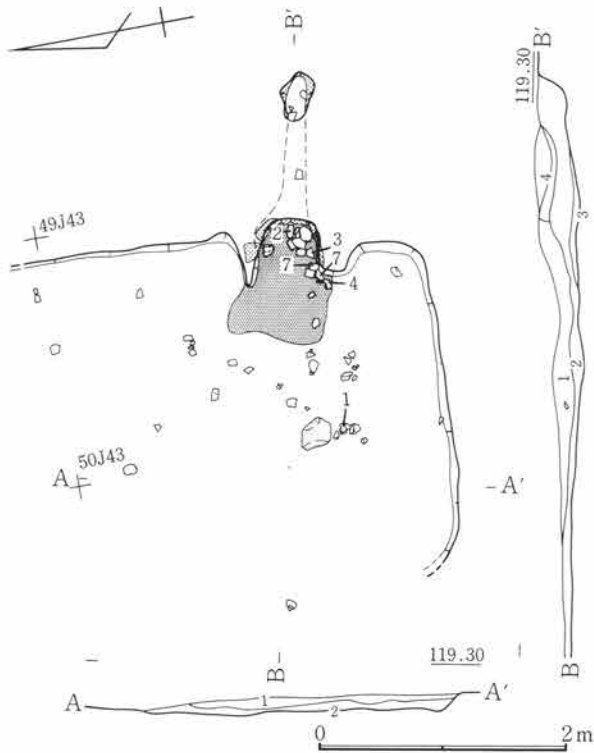
J 87号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
211-1 71-1	土 師 器 杯	完	9.3×5.0×2.4	南西部掘 形床面	体部僅かに外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り、内外面に黒色附着物。	①良好 ②暗赤橙 ③やや粗
211-2 71-2	須 惠 器 杯	完	12.3×7.1×3.9		体部内湾気味に外傾。口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密、黒色粒浮く
211-3 71-3	須 惠 器 杯	1/2	14.4×8.4×4.0	北西部埋 土	底部中心部僅かに突出。体部外反気味でやや大きく開く。轆轤成形。回転筥切り。	①良好 ②青灰 ③ やや粗、白色細粒混
211-4 71-4	須 惠 器 ? 杯	体部1/2 欠損	16.4×7.2×3.9	南東部床 面	底部厚く、腰部にやや丸味。体部中位で僅かにくびれ外反して大きく開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、軟 ②鈍い 橙 ③粗、砂混る
211-5 71-5	土 師 器 椀	体部欠 損	—×6.9×(2.1)		付高台、やや幅広くハの字状に開く。内面黒色化し横方向の細かい筥磨き。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③ 密
212-6 71-6	土 師 器 甕	口縁部 1/2	19.3×—×(5)	南西部埋 土南壁	口縁部僅かに内湾し、直立気味。接合痕残り調整粗雑。肩部筥削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
212-7 71-7	鉄 製 品 刃 (片)		長(5.7)×幅0.6× 厚0.3	埋 土	利器刃部。平棟。全面錆化。X線透視復元。	

J 89号住居跡 (Fig. 213~215・PL. 73)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形 か	— × —	N— 102° — E	東壁ほぼ南寄り	— — — — —

J区北東部に位置し、48~50 J 41~43の範囲にある。39号・85号・86号・95号住居跡などと重複しており、新旧関係はいずれよりも新しい時期の所産であるが、重複が著しく部分的に検出できなかった箇所も多い。平面形でも北壁・西壁は確認できていない。壁は高さ8cmを測り、直立する。床面は多少凹凸があり軟弱である。竈は東壁の南に寄って付設される。袖は粘土を用いて構築され、右袖が幅広く上面が平坦に造られている。燃烧部奥壁より段差なくほぼ水平に細長い煙道部が続いている。煙道部の天井は煙出しに至るまで崩落せずに残っているが、断面観察によれば幅・深さとも約30cm程度の溝状の掘形をなした後、内部に煙道孔を設けて埋め土をしたものと考えられる。袖部長さ40cm・内法56cm、燃烧部奥行き50cm、煙道部長さ1.2m、煙り出し孔径22cmを測る。燃烧部・煙道部ともによく熱を受けており、底面には灰混じり焼土が堆積している。遺物は竈燃烧部及び手前床面に散在していた。



J89号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。縮りなし。
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 灰を含む。縮りなし。
- 4 赤色土 焼土。

Fig.213 J89号住居跡

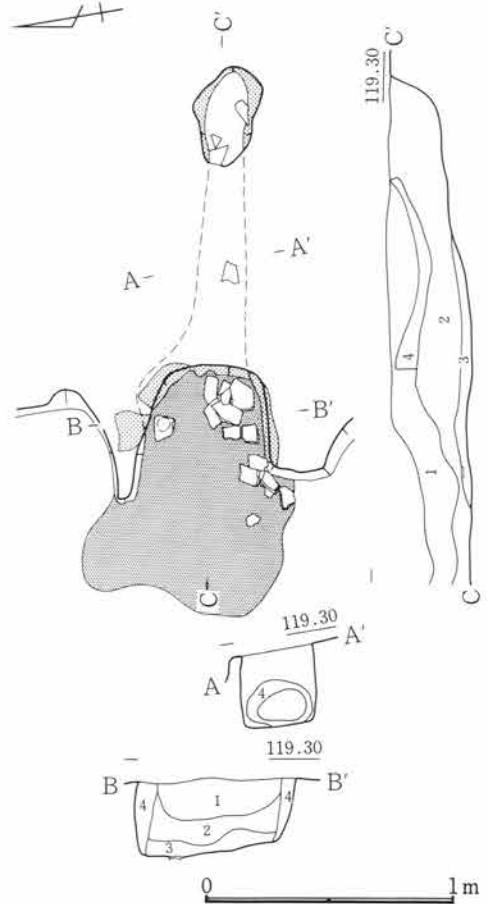


Fig.214 J89号住居跡竈

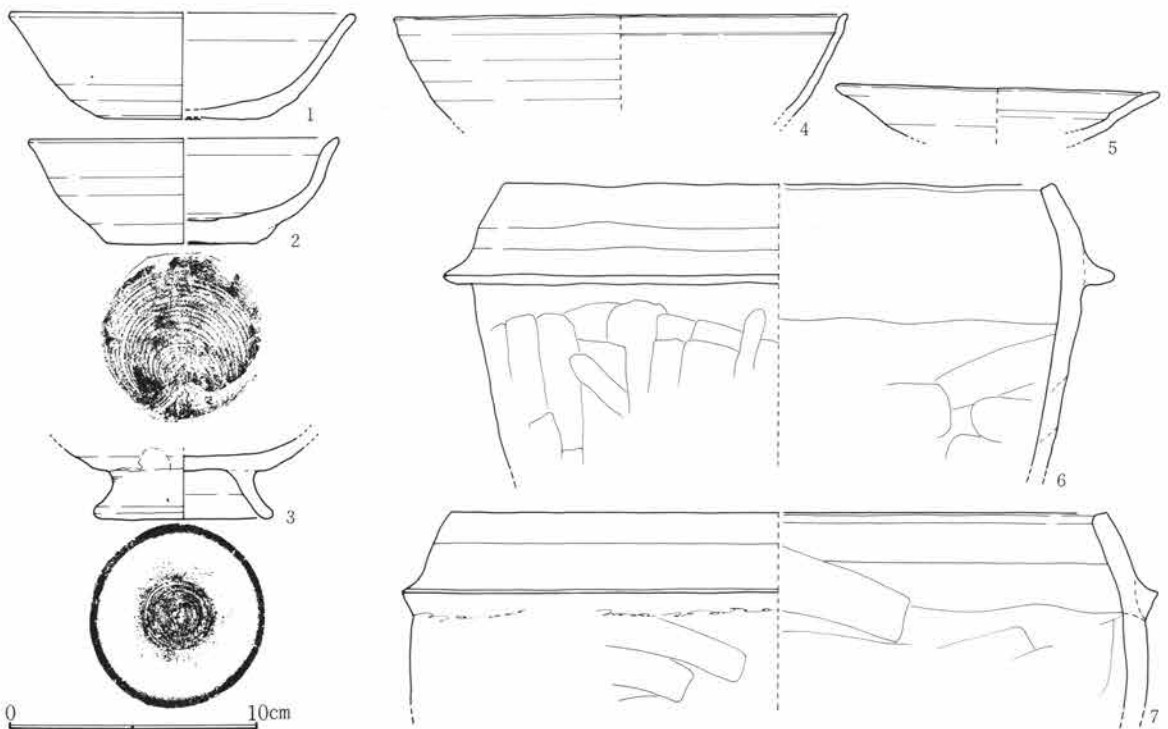


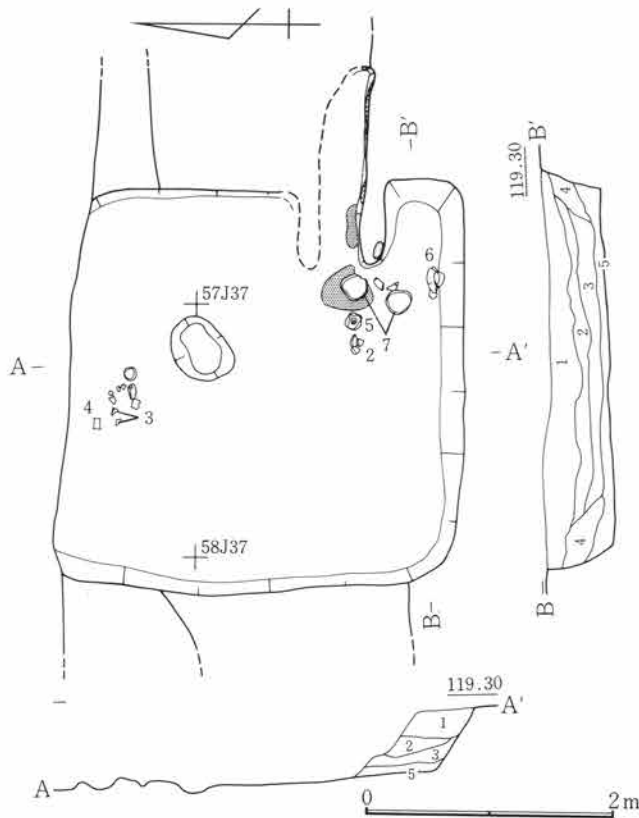
Fig.215 J89号住居跡出土遺物

J 89号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
215-1 73-1	須恵器 杯	1/4	13.9×5.9×4.2	西央部床 面	腰部に丸味をもち、体部は僅かに外反して開く。轆轤成形。 回転糸切り。	①酸化、良好 ②明 褐灰 ③粗、砂混る
215-2 73-2	須恵器? 杯	体部1/4 欠損	12.3×6×4.1	竈 内	底部肥厚。腰部くびれて体部丸く張る。口縁部外反して開く。 轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、良好 ②鈍 い橙 ③やや粗
215-3 73-3	須恵器? 椀	底 部	—×7.2×2.9 高台高2		付高台、高く外反して大きく開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化、良好 ②灰 白 ③やや粗
215-4 73-4	灰釉陶器 椀	口縁部 小片	(19)×—×(4.1)		口縁部僅かに外反する。口縁部内面に1条の凹線巡る。内 外面施釉。	①良好 ②灰 ③密
215-5 73-5	灰釉陶器 皿	口縁部 小片	(13)×—×(2)	埋 土	腰部に張りなく、体部は外反して大きく開く。体部内面に 段あり。体部内外面施釉。	①良好 ②灰 ③密
215-6 73-6	— 羽 釜	口縁部 1/4	22×—×11.3 鐙径26.8	竈右袖床 下	胴部張りなし。鐙強く張り出し断面略三角。口縁部折れ気 味に内傾。口唇上端面内斜。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①酸化気味、良好 ②浅黄橙 ③粗
215-7 73-7	— 羽 釜	口縁部 1/4	26.2×—×(7.7) 鐙径30	竈内床下	鐙部低く、断面三角。口縁部内湾気味に内傾。口唇端部に 丸味。口縁部横撫で。胴部弱い篋撫で。	①酸化、良好 ②鈍 い橙 ③やや粗

J 90号住居跡 (Fig. 216~218・PL. 74)

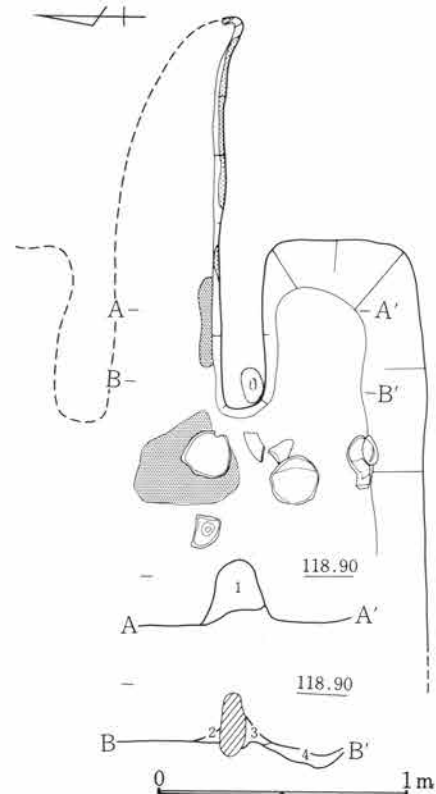
平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.10 × 3.15	N— 87° — E	東壁ほぼ南寄り	— — — — —



J 90号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒・黄白色土粒を含む。粘性土。
- 2 暗褐色土 黄白色土粒を含む。粘性土。
- 3 暗褐色土 白色粘土塊を含む。粘性土。
- 4 暗褐色土 細粒の白色粘土粒を含む。
- 5 暗灰褐色土 白色粘土塊を含む。粘性が強い。

Fig.216 J90号住居跡



J 90号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒を含む。粘性土。
- 2 赤色土 焼土層。
- 3 暗褐色土 粘性白色土含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。

Fig.217 J90号住居跡竈

J90号住居跡

J区中央部に位置し、56~58 J 36・37の範囲にある。北壁は東西走る後世の溝によって失われている。また中央部も東西に小溝が走り、竈の北半及び床面がわずかに失われている。壁は高さ50cmを測り傾斜している。床面は粘土粒混入土を突き固めて造られ、粗いが硬質である。竈は東壁の南寄りに付設される。遺存する右袖は先端部に川原石を埋設し、白色の粘土を混える暗褐色粘質土を用いて構築され住居内に張り出す。壁外には細く長い煙道部が延びるが燃焼部との区別は不明瞭である。袖部長さ70cm、壁外に延びる煙道部長さは90cmを測る。遺物は竈手前と北寄り中央に散在しており、竈手前のものに伴関係が認められる。須恵器甕・長頸瓶などが出土している。

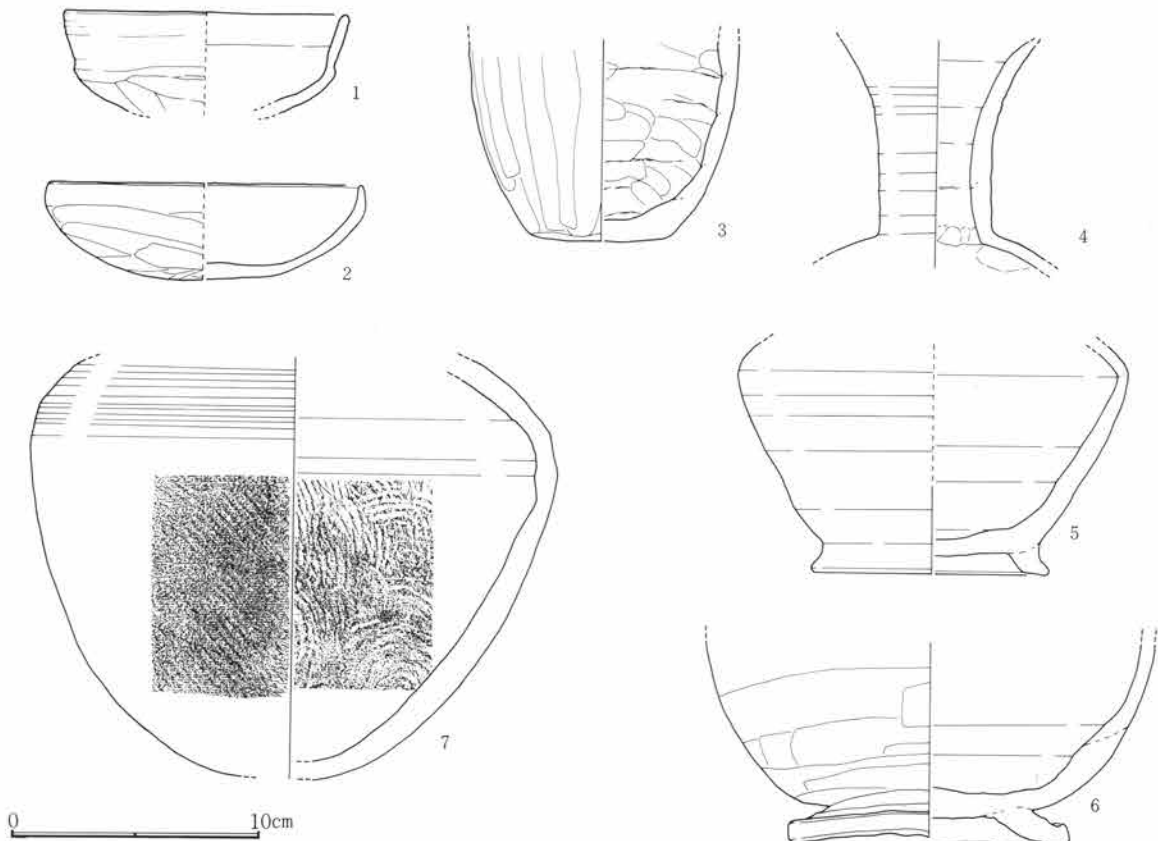


Fig.218 J90号住居跡出土遺物

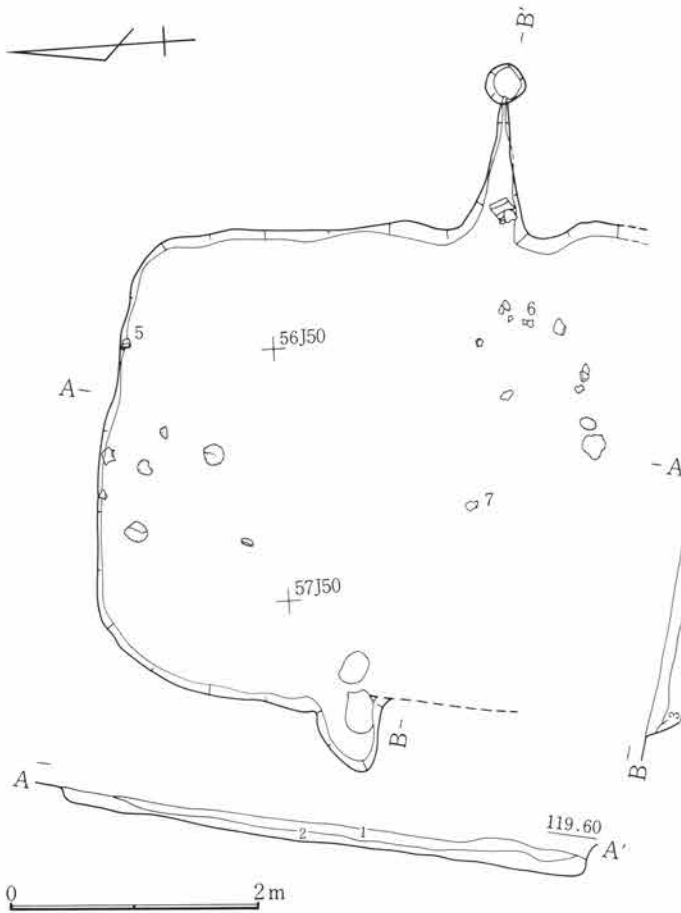
J90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
218-1 74-1	土師器 杯	小片	11.4×-×(4) 口径高2.3	埋土	底部丸く、受け部に弱い段をもつ。口縁部は僅かに外傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
218-2 74-2	土師器 杯	1/2	12.8×-×3.8	南央部埋土	底部丸く、口縁部は内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部外縁は横、中心部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
218-3 74-3	須恵器 瓶	胴部下 半	-×5.5×(8) 胴径10.7	南東部埋土	底部やや不安定。胴部僅かに脹らみをもつ。胴部縦篋削り。底部不定方向篋削り。巻き上げ成形、内面に黒色付着。	①良好 ②白灰 ③密
218-4 74-4	須恵器 長頸瓶	口頸部	-×-×(9) 頸基径4.7	北央部埋土北壁	肩部丸味をもつ。頸部直立し上半は外反して開く。内面に巻き上げ痕残る。	①良好 ②灰 ③やや密
218-5 74-5	須恵器 長頸壺	胴部下 半	-×9.5×(9.1) 肩径15.5	南央部埋土	やや脹らみをもつ胴部から強く屈して肩部強く張る。付高台、幅広。肩部に自然釉。巻き上げ轆轤成形。	①還元、良好 ②灰白 ③精土
218-6 74-6	須恵器 壺	胴部下 半	-×11.2×(8) 胴径18	南壁床面	胴部丸く張り、球形を呈す。付高台、ハの字状に大きく開く。断面矩形。胴部粗い回転篋削り。	①良好 ②暗青灰 ③やや粗、白色粒混
218-7 74-7	須恵器 甕	口縁部 欠損	-×-×(16.7) 胴径21	南東部埋土	底部丸く窄まり不安定。胴部丸味をもち肩強く張る。外面肩部掻き目。胴部平行叩き目、内面青海波状あて目後撫で。	①良好 ②灰白 ③やや粗、小石混る

J91号住居跡 (Fig. 219~221・PL. 75)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
東・隅丸長 方 形	— × 2.90	N-94.0°-E	東壁やや南寄り	—
西・隅丸方 形	3.10 × —	N-96.0°-W	西壁やや南寄り	—

J区北部に位置し、55~57J 48~K 1の範囲にあり一部はK区にかかる。92号・94号・K区173号住居跡と重複しており、新旧関係はこれらより新しい時期の所産である。南壁は94号住居跡の埋土中にあったものと推定されるが検出することができなかつた。壁は高さ25cmを測り傾斜している。床面は平坦をなすが軟弱である。西壁に幅50cm・奥行き60cmの楕円形突出部が見られたが、性格は不明である。竈は燃烧部は住居内に設けられたと考えられるが袖部の痕跡は認められなかつた。燃烧部と思われる範囲は床面よりわずかに低く、先すぼまりの煙道部がゆるく立ち上がり壁外に長く延びる。先端部でわずかに天井が残り、煙り出し孔を形成する。煙道部長さ1.4m、煙出し孔径30cmを測る。遺物は散在して検出されたが、土師質の小杯・灰釉陶器・須恵器甕片転用の硯などのほか青色のガラス製小玉が出土している。



J91号住居跡
1 黒褐色土 C軽石を含む。砂質土。
2 黒褐色土 やや粘性あり。
3 黒褐色土 褐色土塊を含む。砂質土。

Fig.219 J91号住居跡

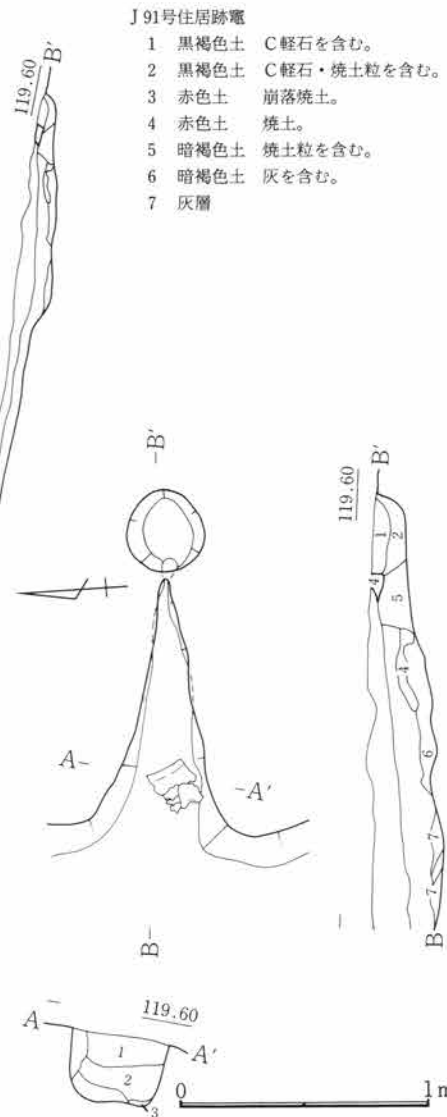


Fig.220 J91号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

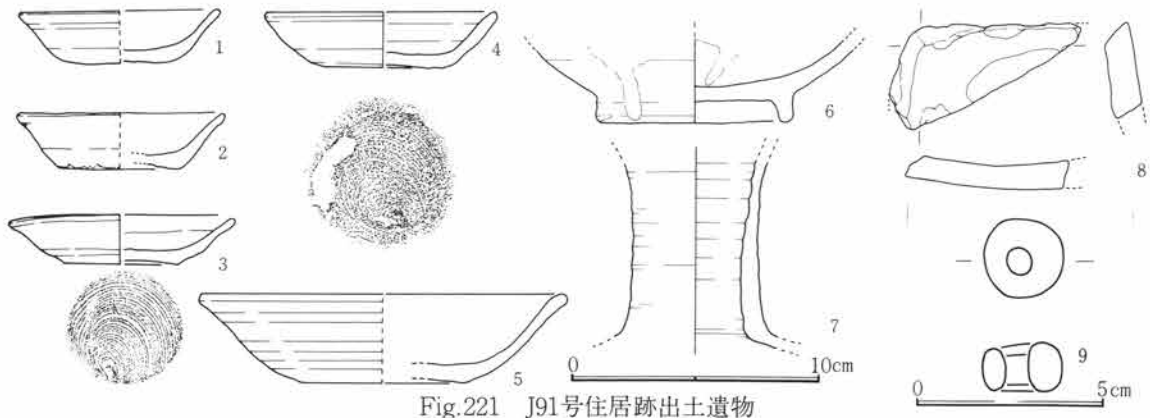


Fig.221 J91号住居跡出土遺物

J91号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③色調 その他
221-1 75-1	土 師 器 杯	1/4	8.4×4.8×2.2	埋 土	体部下位にやや脹らみをもち外反して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
221-2 75-2	土 師 器 杯	1/2	8.1×4.1×2.1	南西部床 面	腰部に丸味をもち、体部は外反気味に開く。体部の器肉薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③ やや粗、砂混る
221-3 75-3	土 師 器 杯	完	9×4.6×1.9	南西部床 面	腰部くびれ体部に脹らみをもつ。くびれて外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
221-4 75-4	土 師 器 杯	完	9.3×5.8×2.2	南壁寄埋 土	体部直線的に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
221-5 75-5	土 師 器 杯	1/4	14.8×6.6×3.5	北壁際埋 土	腰部にやや脹らみをもち、口縁部は外反して開く。口唇部丸くやや肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
221-6 75-6	灰 釉 陶 器 碗	底部小 片	—×8.0×(3)	竈前方床 面	器肉厚い。高台直に立ち、端部丸い。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
221-7 75-7	灰 釉 陶 器 瓶	頸部小 片	—×—×(7.3) 頸基径5.5	南西部埋 土	頸基部は直線的に立ち上半はやや外反気味。	①良好 ②灰 ③や やや粗
221-8 75-8	須 恵 器 転 用 硯	部 分	7.7×4.2×0.9	埋 土	甕片。側面は打割り後荒い研磨。内面磨滅。	①良好 ②灰白 ③ やや密
221-9 75-9	ガ ラ ス ビ ー ス 玉		径0.18 厚0.11 孔径0.05	埋 土		

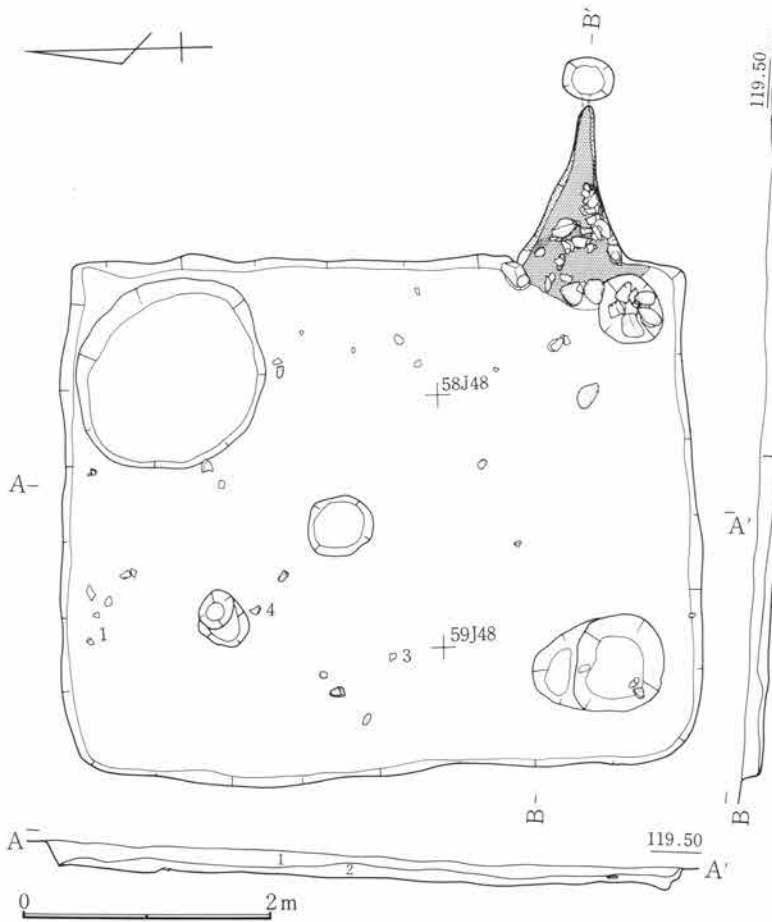
J92号住居跡 (Fig. 222~225・PL. 76)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
方 形	4.05 × 5.05	N— 95° —E	東壁ほぼ南寄り	円形 (14.8 × 15.0 × —)

J区北部に位置し、57~59 J 47~49の範囲にある。東壁部分で91号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。南北軸がやや長い方形を呈し、南西・北西隅にわずかな丸みをなすが整った形状である。壁は高さ15cmを測り、傾斜している。壁下は部分的に低くなるが明確な壁溝はない。床面は掘形の凹凸を補って平坦かつ硬質である。北東部に径1.45mの円形土坑があるが、非常に浅く当跡に伴うかは確定できない。他に3箇所 Pit や土坑も柱穴などに比定されるものはなく性格は不明である。竈は東壁の南に偏って付設され、燃焼部と煙道部が連続したような略三角形を呈する。煙道部はゆるい傾斜をもって立ち上がり、先端でわずかに天井が残り煙出し孔を形成する。内壁は煙出し孔に至るまでよく熱を受けており、底面に焼土と灰

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

が堆積している。袖部は東壁線上左右に川原石を埋設する。また燃焼部内と南東隅の貯蔵穴内に竈構築材が散乱している。袖石間内法66cm、燃焼部奥行き65cm、煙道部長さ90cm、煙出し孔径40cmを測る。遺物は竈内に多く集中していたが形を知りうるものは少ない。須恵器杯・碗・須恵器転用砥石などがある。



J92号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を含む。土粒の粗い砂質土。
- 2 黒褐色土 砂質土。

Fig.222 J92号住居跡

J92号住居跡竈

- 1 赤色土 焼土層、天井部。
- 2 暗褐色土 焼土塊を含む。締りなし。

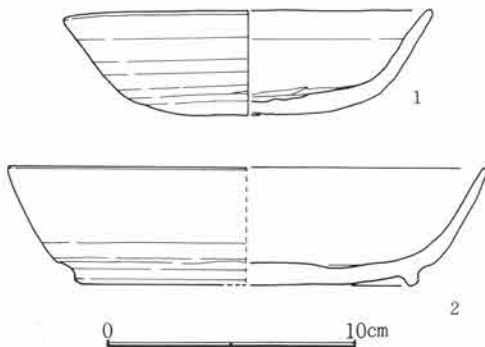


Fig.224 J92号住居跡出土遺物(1)

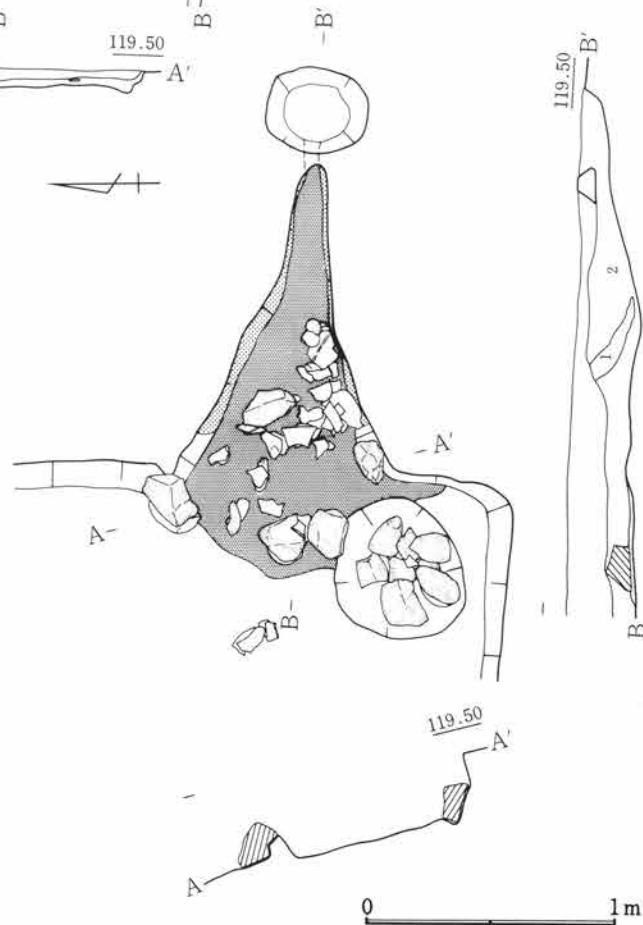


Fig.223 J92号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

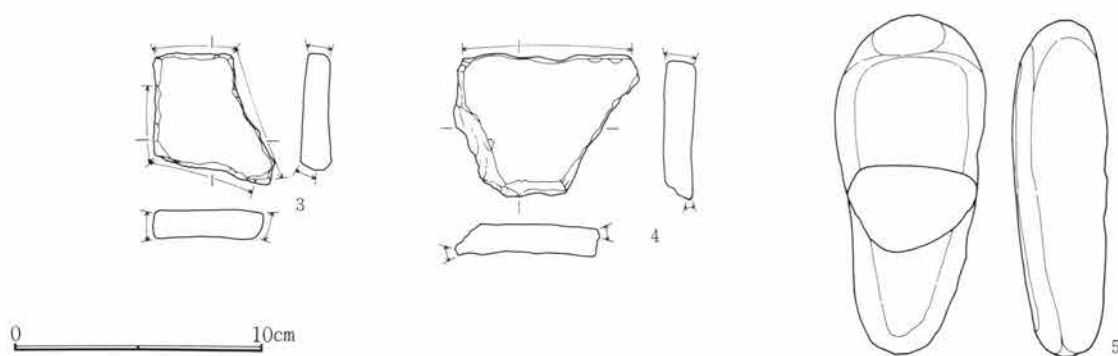


Fig.225 J92号住居跡出土遺物(2)

J 92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
224-1 76-1	須恵器 杯	体部一 部欠損	14.8×10.1×4.2	北央部掘 形	底部丸味をもち不安定。体部僅かに外反気味。巻き上げ轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②青灰 ③やや密
224-2 76-2	須恵器 盤	1/4	19.2×13.8×4.7	西央部掘 形	底部中央部やや張る、体部内湾気味に開く。低く断面矩形。底部から腰部回転篋削り。底破損部磨滅。	①良好 ②灰 ③やや密
225-3 76-3	須恵器 転用砥石		5.2×4.9×1.7 35.6g	西央部埋 土	4側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや粗、砂混る
225-4 76-4	須恵器 転用砥石		7.5×5.7×1.1 64.4g	西央部埋 土	4側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密、黒色粒浮く
225-5 76-5	石	完	13.4×6×3.5 425g	竈内	一端及び一面に弱い磨滅痕。	輝石安山岩(粗粒)

J 93号住居跡 (Fig. 226~228・PL. 77、78)

J区北東部に位置し、48~51 J 43~47の範囲にある。38号・86号・88号の各住居跡と重複し、いずれよりも古い時期の所産である。重複関係が著しく東壁から南壁にかけては検出されなかったが、平面形は大型の隅丸方形を呈すると考えられる。竈軸方位はN-59°-Eを示す。壁は高さ50cmを測り、やや傾斜している。床面は平坦であるが、南方向に緩やかに斜降している。床面の各壁間1/2ほどの外寄りに支柱穴が4箇所設けられている。P₁・P₂・P₃の柱穴線からみた東西軸方位はN-72°-Eを示す。P₁は上径50cm・下径35cm・深さ40cm、P₂は上径50cm・下径15cm・深さ50cm、P₃は径80cmの大きな掘形に2つの柱痕があり下径はそれぞれ15cm・10cm・深さ35cm、P₄は上径45cm・下径10cm・深さ50cmで、各柱間はP₁・P₂は2.85m、P₂・P₃は2.85~3.45m、P₃・P₄は3~3.1m、P₁・P₄は2.95mを測る。竈は東壁に設けられ略三角に掘り込まれるが遺存状態が不良で詳細は不明である。焚口部はやや広く、奥行き約90cmを測る。明確な煙道部はない。内壁はよく熱を受けており底面には焼土が、手前床面には灰層が堆積している。遺物は竈手前に集中して出土しており、土師器杯のほか須恵器平瓶・滑石製白玉などが検出されている。

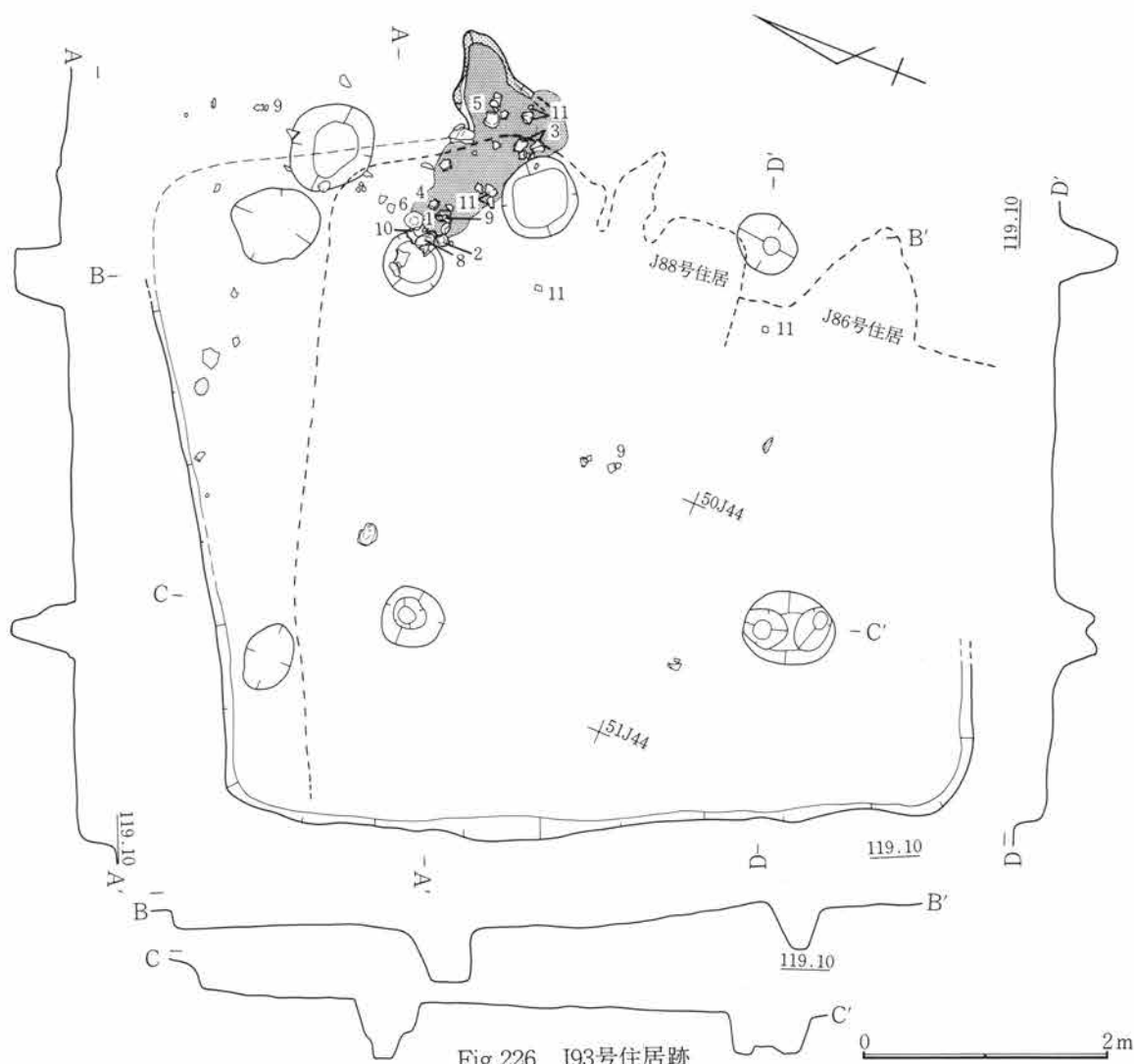


Fig.226 J93号住居跡



J93号住居跡竈
 1 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
 2 赤色土 焼土層。

Fig.227 J93号住居跡竈

第2章 J区の遺構と遺物

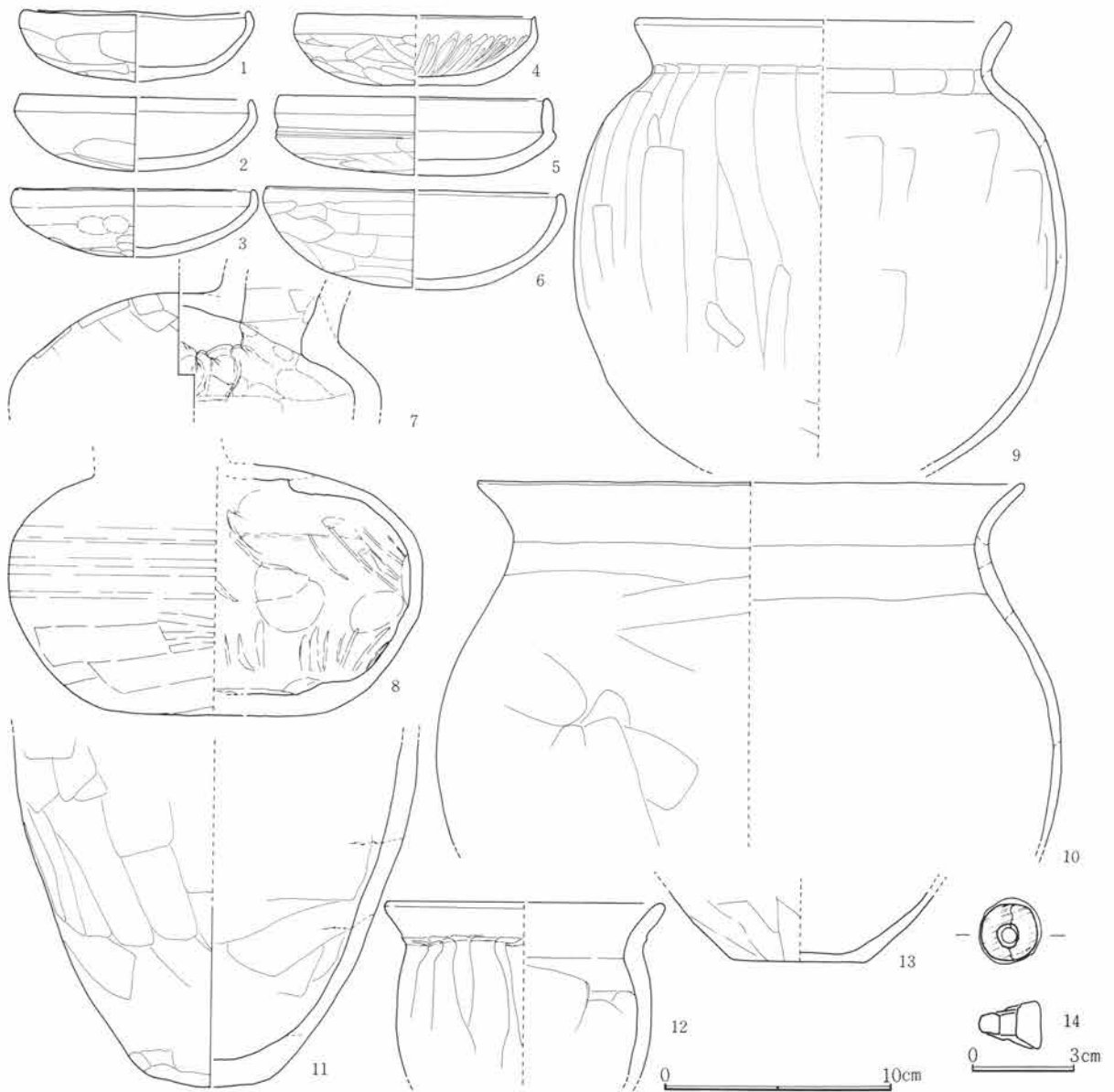


Fig.228 J93号住居跡出土遺物

J 93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
228-1 77-1	土師器 杯	完	10.1×-×3.1	竈手前床 面	底部丸味をもち不安定。口縁部短かく内屈気味に丸まる。口縁部横撫で。体部横・底部一定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
228-2 77-2	土師器 杯	完	10.6×-×3.2	竈手前埋 土	丸底を呈し不安定。口縁部短かく内傾する。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
228-3 77-3	土師器 杯	完	10.4×-×3	南東部床 面	丸底を呈し不安定。口縁部短かく内屈気味に丸まる。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
228-4 77-4	土師器 杯	⅔	10.6×-×3.1	竈手前床 面	平底気味、口縁部短かく内傾して立つ、口唇部細る。口縁部横撫で。体部横・底部不定方向篋削り。内面放射状磨。	①良好 ②暗赤褐 ③やや密
228-5 77-5	土師器 杯	⅔	12.2×-×3.4 口縁高1.5	竈内床面	浅く扁平な底部。受け部に丸味のある段をなす。口縁部は内湾気味に直立、口縁部横撫で、底部不定方向篋削り。	①やや軟 ②鈍い褐 ③密、砂混る
228-6 77-6	土師器 杯	完	13.3×-×4.3	竈手前床 面	体部深く丸味強い、口縁部短かく内湾気味に立つ。口縁部横撫で、体部横・底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密

第2節 J区の竪穴住居跡と遺物

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
228-7 77-7	須惠 平 瓶	上半部	—×—×(5.9) 肩部径16.2		頸部は胴部に対16°の角度をもつ。胴部上面は丸く張る。内面は指頭痕著しく径約7cmの盤で塞ぐ。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色粒浮く
228-8 78-8	須惠 平 瓶	1/2 口 頸欠損			胴部丸く張り扁平。底部平底気味。内面強いあて目、外面叩き目後回転撫で。胴下半・底部弱い鏡撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色粒混る
228-9 78-9	土師器 甕	1/2 底 部欠損	16.6×—×19.5 胴部径21.5	各所床面 散在	胴部丸く張り球胴形を呈す。口縁部短く外傾する。最大径は胴部中位。口縁部横撫で。胴部縦鏡削り。内面横鏡撫で。	①良好 ②明褐 ③やや粗、茶色粒混る
228-10 78-10	土師器 甕	下半部 欠損	24×—×(15.8) 胴部径27.3	竈内床面	胴部丸く張り球胴形を呈すか。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。胴部上位横・上半は斜鏡削り。最大径胴上半。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
228-11 78-11	土師器 甕	下半部	—×5.8×(15.1)	各所床面 散在	胴部張りなく長胴形を呈すか。底部丸味をもち不安定。胴部縦鏡削り。腰部横・底部不定方向鏡削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗、砂混る
228-12 78-12	土師器 甕	1/4 下 半欠損	12.3×—×(7.6) 胴部径11	中央部埋 土	胴部わずかに脹らみをもつ、口縁部緩く外反して開く、器肉厚い、口縁部横撫で。胴部縦鏡削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗、砂混る
228-13 78-13	土師器 甕	底 部	—×5.8×(3.2)		平底を呈す。腰部斜・底部不定方向鏡削り。	①良好 ②暗赤褐 ③やや粗、砂混る
228-14 78-14	石製模造品 白玉		径1.8×厚0.9× 孔径0.3	北東部床 面	側面、及び一端面調整痕残る。両面穿孔	滑石

J94号住居跡 (Fig. 229~231・PL. 78、79)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	5.20 × 4.00	N— 95° —E	東壁やや南寄り	— — — — —

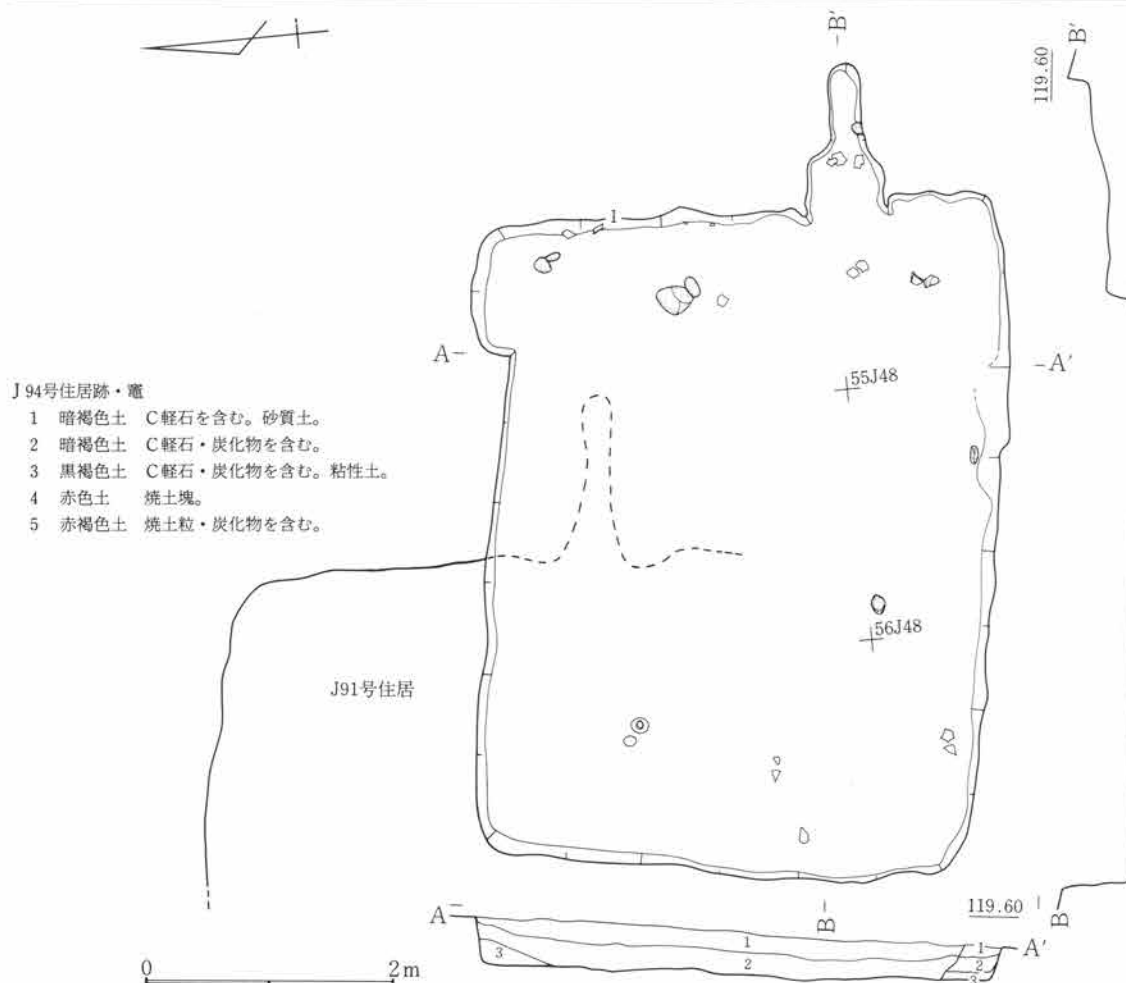


Fig.229 J94号住居跡

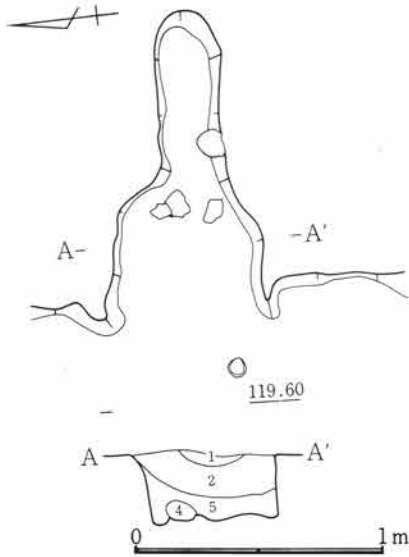


Fig.230 J94号住居跡竈

J94号住居跡

J区北部に位置し、54～56 J 47～49の範囲にある。91号・92号・K173号住居跡と重複し、92号・K173号より新しく、91号より古い時期の所産である。平面形は東西に長軸をもつ方形を呈するが、北東部に小さく張り出し部が設けられる。張り出し部は幅約1mで北壁より45cm程突出する。壁は高さ40cmを測り、直立する。床面は凹凸があるが、よく踏み固められている。竈は東壁のやや南に寄って付設され、方形気味に掘り込まれた燃烧部からゆるい傾斜をもって煙道部が延びる。袖部は小さく、痕跡程度に住居内に張り出す。内壁は燃烧部・煙道部ともによく熱を受けており、底面には灰及び焼土堆積が認められる。燃烧部幅64cm・奥行き60cm、煙道部長さ70cmを測る。遺物は床面に散在しており少量である。

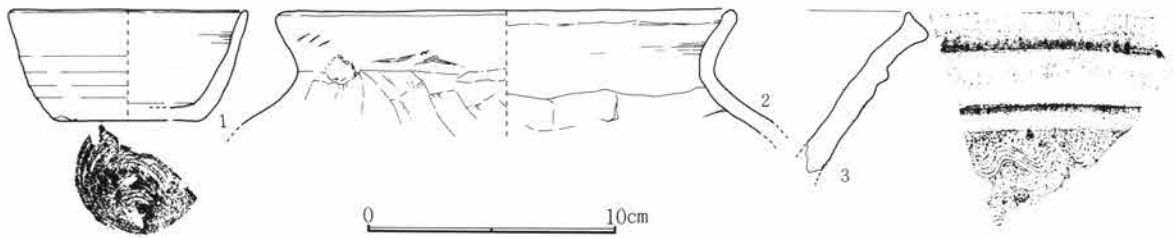


Fig.231 J94号住居跡出土遺物

J94号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
231-1 79-1	須恵器 杯	小片	9.4×6×4.3		体部深く、外傾度小さい。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
231-2 79-2	土師器 甕	口縁部 片	17.4××(4.7)	北東部埋土	口縁部短かく外傾した後口唇部僅かに内屈。口縁部横撫で。肩部斜寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
231-3 79-3	須恵器 甕	口縁部 小片		北東部床面	6本1条の櫛描波状文が施され、その下位にも痕跡がみられる。上位に凸帯が巡る。口唇部幅広く内側端部尖る。	①良好 ②暗灰 ③やや粗、白色粒混る

J95号住居跡 (Fig. 232、233、PL. 79、80)

J区北東部に位置し、48～50 J 41～43の範囲にある。13号・30号・32号・33号・39号・89号の各住居跡と重複関係にあり、新旧関係は明確にはしがたいが、33号・39号より新しく他の遺構より古い時期の所産と考えられる。東部は消失しており竈などの諸施設は不明である。各壁に歪みがあるが隅丸方形を呈するものと思われ、南北長4.9mを測り、東西現長3.6mまで確認できた。壁は高さ30cmを測り、やや傾斜している。床面は凹凸があるが踏み固められている。遺物は床面南半に散在していたが形を成すものは少量である。緑釉陶器皿・須恵器杯転用の硯などが検出されている。

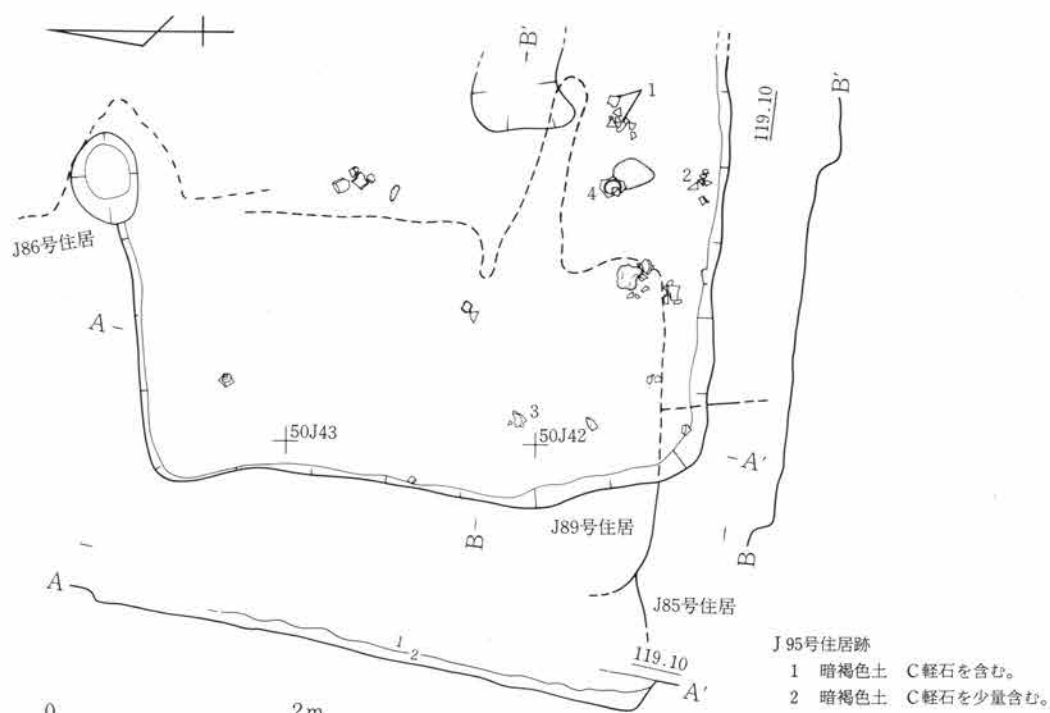


Fig.232 J95号住居跡

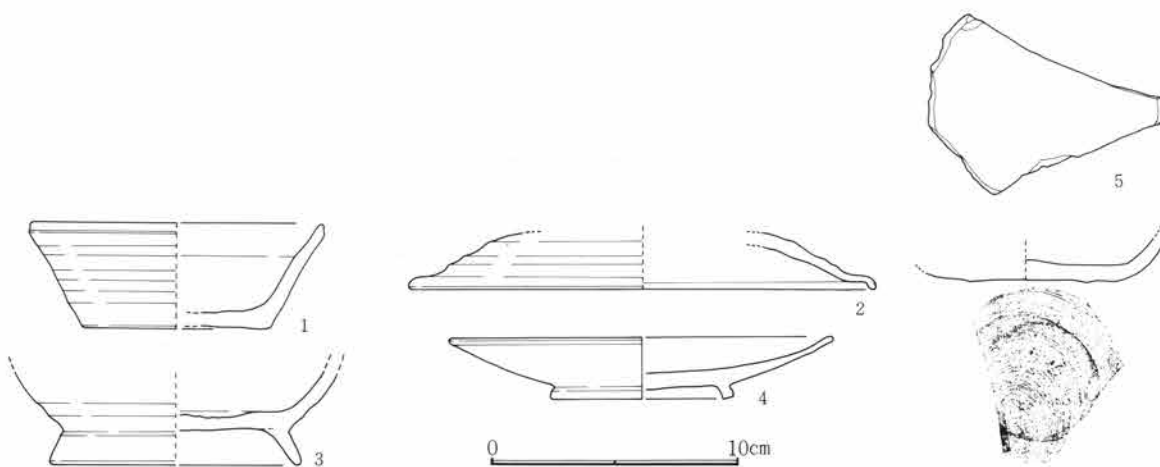


Fig.233 J95号住居跡出土遺物

J95号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
233-1 80-1	土師器? 杯	1/4	11.8×7.5×4.2	南央部床 面	体部深く直線的、体部中位で僅かに屈して外傾するが、外傾度少ない。轆轤成形。底部回転糸切り後手持ち篋削り。	①良好	②橙 ③やや密
233-2 80-2	須恵器 蓋	小片	18.6×-×2.2		天井部丸く張る。端部は短かく水平になり口縁部はやや開き気味に折れる、端部丸い、天井部回転篋削り。	①良好	②青灰 ③やや密
233-3 80-3	須恵器 椀	底部1/4	-×10×(3.6)	南西部床 面	腰部やや張る。付高台、やや高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②白灰 ③やや密
233-4 80-4	緑釉陶器 皿	体部ほぼ欠損	15.4×7.4×2.5	南央部床 面	体部内湾気味に大きく開く。口唇端部丸まる。付高台、断面矩形。内外面篋磨き。釉調光沢ありくすんだ黄緑。	①良好	②白灰 ③やや密
233-5 80-5	須恵器 転用硯	部分	-×7.1×1.5 厚0.8		杯を転用し、内面の磨滅著しい、底部右回転糸切り後周辺回転篋削り。	①良好	②暗灰 ③やや密、白色粒混る

J96号住居跡 (Fig. 234~236・PL. 80)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.00 × 5.30	N-107°-E	東壁やや南寄り	—————

J区東部に位置し、48~50J32~35の範囲にある。76号・78号住居跡と重複し、前者より新しく後者より古い時期の所産である。各壁に長短と歪みがあり不整な方形を呈するが、比較的大型の遺構である。壁は高さ50cmを測り、ほぼ直立する。床面は多少凹凸があるが、全体によく踏み固められている。南西隅には貯蔵穴と考えられる円形の土坑が穿たれている。径70cm・深さ約40cmを測る。竈は東壁のやや南寄りに付設され、明確な袖部とは言い難いが、小規模な左袖が設けられている。両袖に該当する部分は基盤となる暗褐色土の掘り残しによるもので三角形の台状を呈する。燃烧部内壁はよく熱を受けており、底面から南東部手前にかけて広く灰の流出がみられる。煙道部はゆるい傾斜をもって立ち上がり、先端で天井の一部が崩落せずに残り煙出し孔を形成する。燃烧部幅約60cm・奥行き45cm、煙道部長さ70cm、煙出し孔径30cmを測る。遺物は竈手前や床面各所に散在していたが、竈手前のものに供伴関係が認められ小型品を中心に良好な資料を提供している。土師質の杯・椀類・灰釉陶器・羽釜などが検出されている。

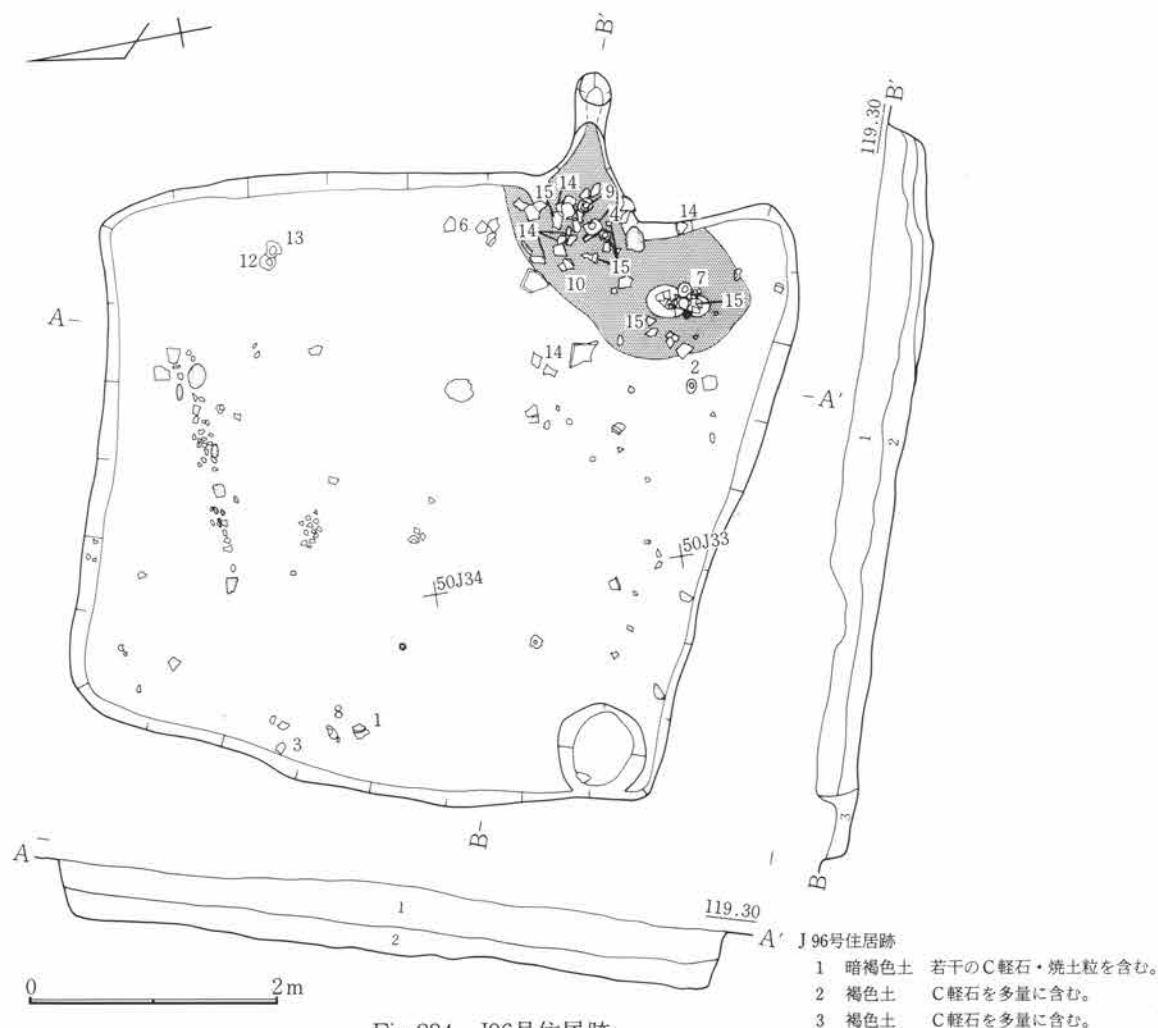
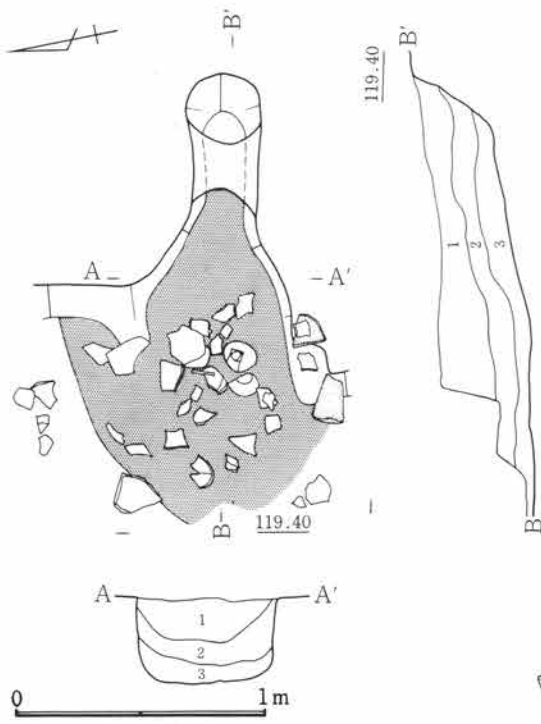


Fig.234 J96号住居跡



J96号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 3 赤色土 焼土塊が主体。

Fig.235 J96号住居跡竈

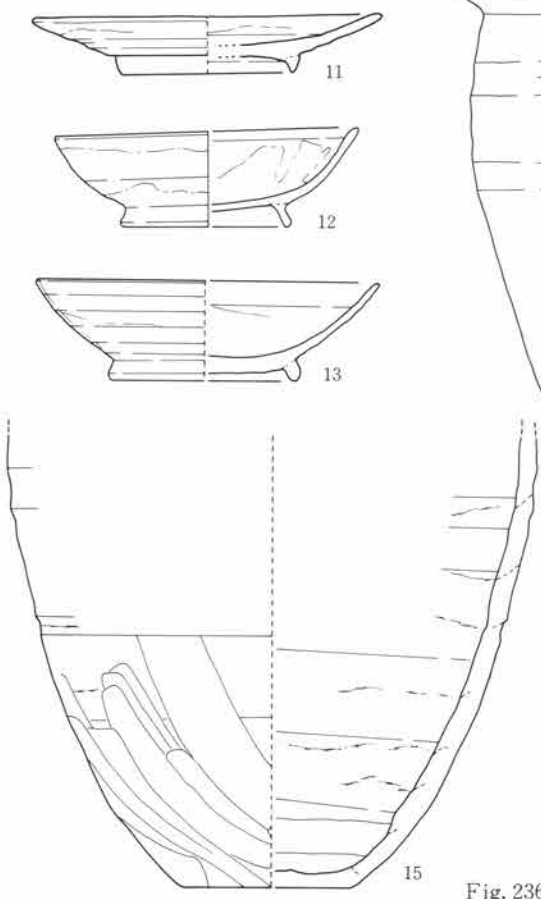
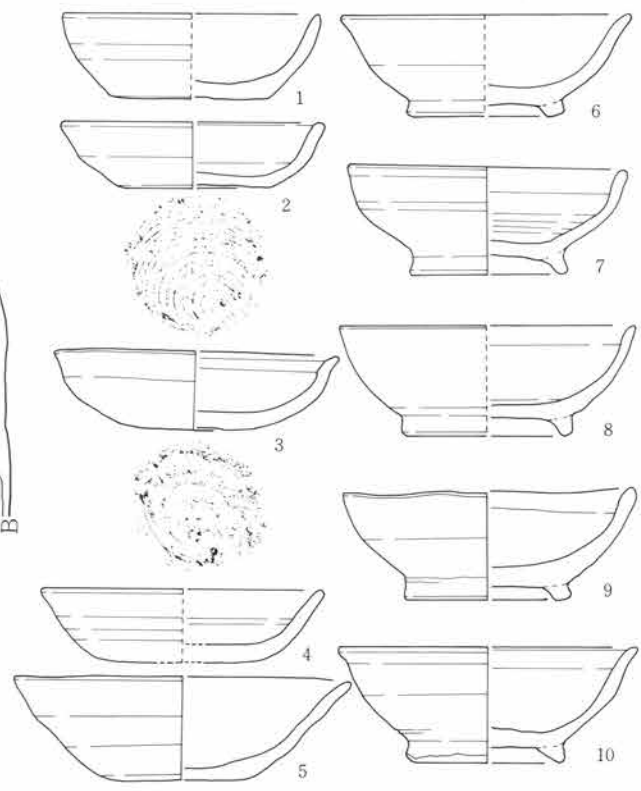


Fig. 236 J96号住居跡出土遺物

J 96号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
236-1 80-1	土師器 杯	2/3	10.4×6.3×3.4	西中央埋土	体部内湾気味に開き、やや丸味をもつ。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②浅黄橙 ③やや密
236-2 80-2	須恵器? 杯	完	10.6×5.7×2.6	南東部埋土	体部浅く、中位に丸味をもつ。口唇部緩く外反し、端部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。内外面黒色処理。	①良好 ②黒 ③やや粗
236-3 80-3	須恵器? 杯	1/2	11.4×6×2.9	西中央埋土	腰部丸く、口縁部緩く外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化、良好 ②鈍い橙 ③やや粗
236-4 80-4	須恵器? 杯	2/3	11.4×5×3.1	竈内埋土	腰部丸味強い。口縁部外屈。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、やや軟 ②灰黄褐 ③やや密
236-5 80-5	須恵器? 杯?	ほぼ完	13.6×5.1×4.1	北東部埋土	腰部に丸味をもち、体部は緩く外反気味に開く、高台の剥落の可能性あり。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②褐灰 ③粗、砂混る
236-6 80-6	須恵器? 椀	1/2	11.6×6.3×4.1	東中央埋土	体部に丸味をもち、口縁部緩く外反する。付高台、断面矩形を呈す。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、良好 ②灰白 ③やや粗
236-7 80-7	須恵器 椀	完	11.2×6.3×4.3	南東部埋土	体部丸味をもち、内湾して開く。付高台、外反気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、小石混る
236-8 80-8	須恵器 椀	1/2	11.8×6.8×4.4	西中央埋土	体部丸味をもち、内湾して開く。付高台。端部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、良好 ②灰黄 ③やや粗
236-9 80-9	須恵器 椀	完	11.7×6.7×4.4	竈内埋土	体部に丸味をもつ。口唇部僅かに外傾。端部丸い。付高台、断面矩形。轆轤成形。	①酸化、良好 ②橙 ③やや密
236-10 80-10	須恵器 椀	1/2	12×6.4×4.6	南東部埋土	体部中位やや張り、口縁部緩く外反して開く。付高台、断面略三角。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、良好 ②鈍い褐 ③やや密
236-11 80-11	灰釉陶器 段皿	1/2	3.6×2.3×6.8		体部直線的で大きく開く。内面に弱い段をなす。高台やや内湾して直立する。断面略三角。内外口縁部施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
236-12 80-12	灰釉陶器 椀	2/3	12.2×6.9×3.8	北東部埋土	腰部僅かに丸味をもつ。体部外傾する。高台端部丸くハの字状に開く。底部回転糸切り。付け掛け施釉。	①良好 ②オリーブ灰 ③緻密
236-13 80-13	灰釉陶器 椀	体部1/2欠損	13.8×7.7×4	北東部埋土	体部丸味少なく外傾する。高台端部丸まり内湾して立つ。底部回転糸切り痕残る。付け掛け施釉。	①やや軟 ②白灰 ③やや密
236-14 80-14	— 羽釜	1/2 底部欠損	23.8×—×(25.5) 鏝径28	南東部埋土	胴部丸く張る。鏝径三角を呈しやや上方へ出る。口縁部外反気味に内傾する。口縁・胴上半横撫で。下半縦篋削り。	①酸化気味、良好 ②鈍い褐 ③やや粗
236-15 80-15	— 羽釜	1/2 胴下半	—×6.8×(18)	南東部埋土	胴部張り少なく、底部平ら。胴上半横撫で。下半縦・斜篋削り。	①酸化気味、良好 ②鈍い褐 ③やや粗

J 97号住居跡 (Fig. 237~239・PL. 81)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸長方形	2.55 × 3.30	N— 93° —E	東壁ほぼ中央	楕円形 (35.0 × 53.0 × —)

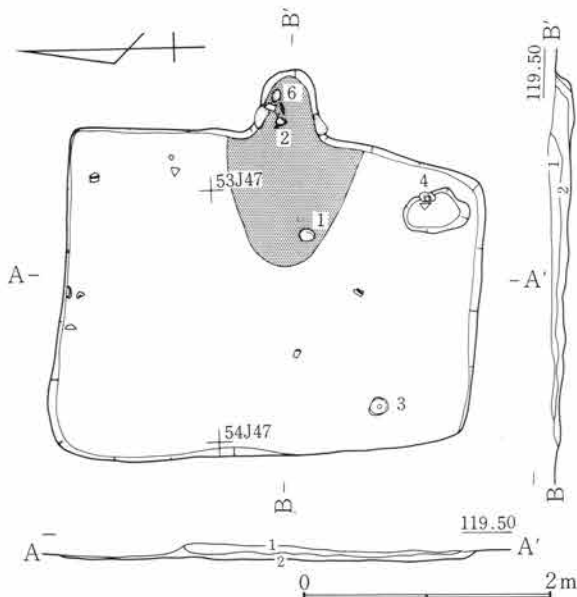
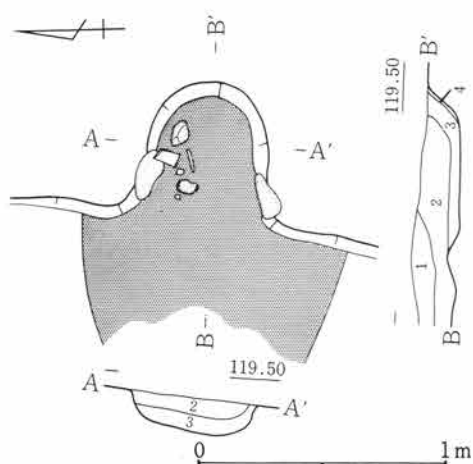


Fig.237 J97号住居跡

J区北部に位置し、52~54 J 46・47の範囲にある。小型の遺構である。80号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。壁は高さ10cmを測り、ほぼ直立する。床面は凹凸があるが竈手前を中心に踏み固められている。竈は東壁のほぼ中央に付設され、半円形に掘り込まれる。燃烧部の焚口寄りに対をなして円礫が埋設され袖部を作る。燃烧部底面から手前床面に灰が堆積している。煙道部は現状では確認されなかった。袖石間内法40cm・燃烧部奥行き55cmを測る。出土遺物は灰釉陶器のほか石製紡錘車・鉄器などがある。



J97号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物粒を含む。やや硬質の砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。土器片含む。
- 3 赤灰色土 炭化物・焼土塊を多量に含む。
- 4 赤灰色土 炭化物が主体。焼土塊を含む。

Fig.238 J97号住居跡竈

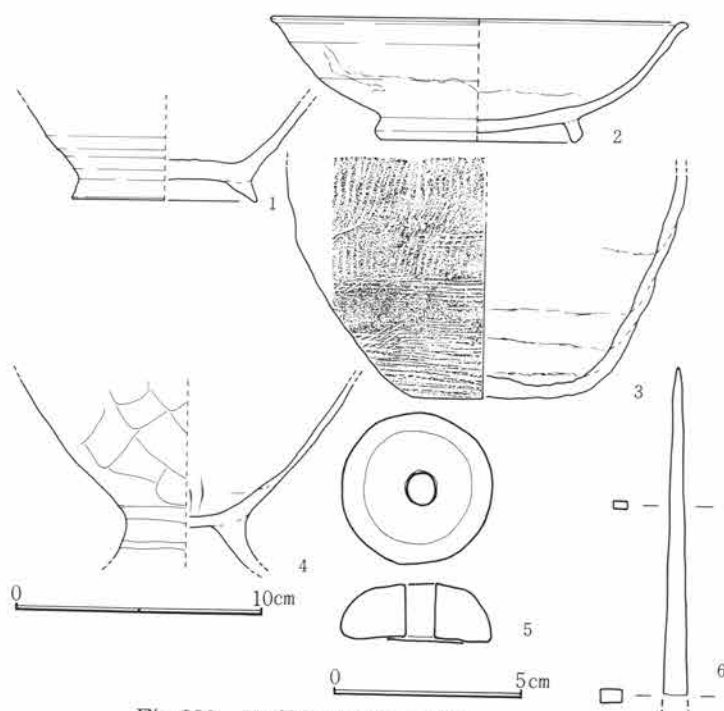


Fig.239 J97号住居跡出土遺物

J97号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
239-1 81-1	須恵器 椀	底部 $\frac{1}{2}$	—×7.5×(3.7)	中央部埋土	付高台、略三角を呈し大きくハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ③胎土	②灰 ③やや密
239-2 81-2	灰釉陶器 椀	$\frac{1}{3}$	16.7×4.9×3.9	竈内	体部やや丸味をもち、口唇部は外屈する。見込部僅かに凹む。高台矩形を呈しハの字状に開く。刷毛塗り施釉。	①良好 ③やや密	②褐灰
239-3 81-3	土師器 甕	胴部下半	—×6.5×(19.0)	南西部床面	胴部やや脹らみをもつ。胴部下半は横描き目。中位は縦描き目。内面紐作り痕顕著、幅1~2cm。	①良好 ③やや粗	②鈍い黄褐
239-4 81-4	土師器 台付甕	胴下半部	—×—×(7.4)	南東部埋土	胴下半部斜篋削り。	①良好 ③やや粗	②鈍い褐
239-5 81-5	石製品 紡錘車	輪完	上径4×下径2.9 ×孔径0.8	南西部埋土			蛇紋岩
239-6 81-6	鉄製品 釘	身(片)	長(8.7)×幅0.6 厚0.4	竈内埋土	頂部欠損。角釘。全面錆化。X線透視復元。		

J98号住居跡 (Fig. 240、241・PL. 82)

J区北部に位置し、54・55 J42・43の範囲にある。79号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。この重複によって遺存するのは南半のみである。平面形は不定形で南東部は隅丸方形であるが、南西部は大きな弧状を呈する。床面は固く踏み固められているが、東方向へゆるやかに斜降している。焼土などの散布もあるので、居住施設の残欠と考えられる。壁は高さ25cmを測り、傾斜している。また東壁下の一部には壁溝の痕跡が見られる。遺物は床面上に散在して少量であるが、須恵器広口瓶・角閃石安山岩製の砥石などがある。

第2章 J区の遺構と遺物

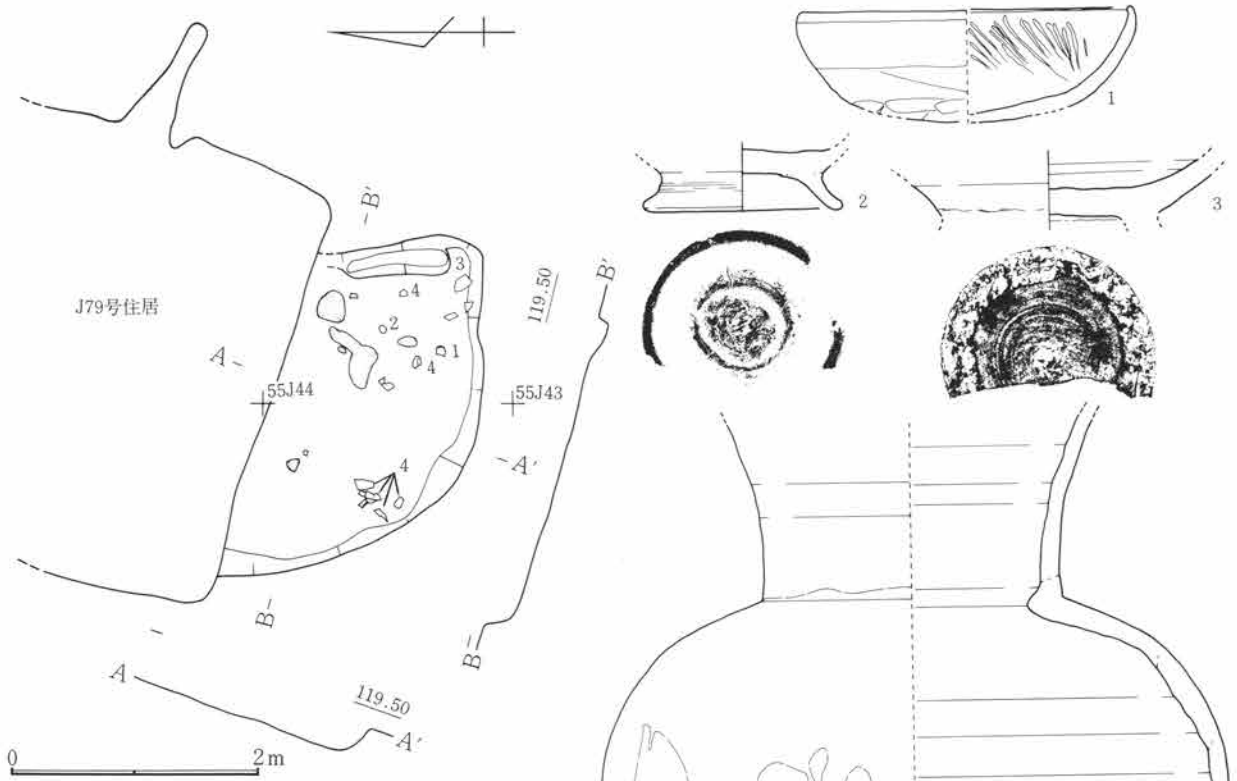


Fig.240 J98号住居跡

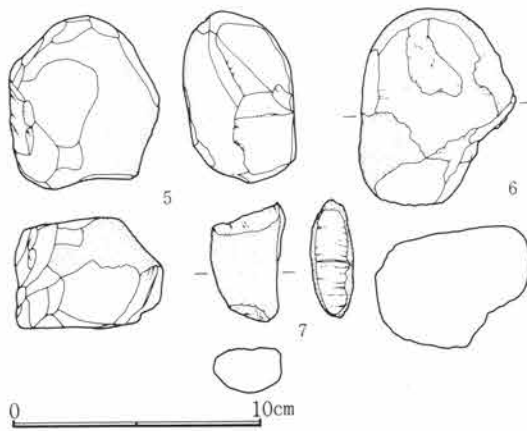


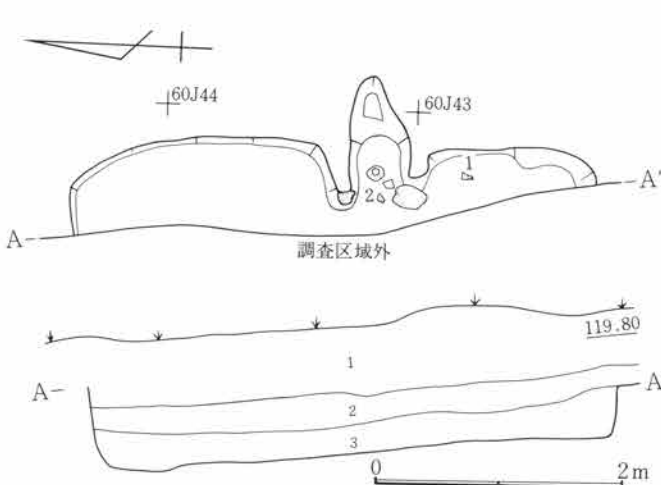
Fig.241 J98号住居跡出土遺物

J98号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
241-1 82-1	土 師 器 杯	1/4	13.6×-×4.5	南西部床 面	底部丸く不安定。口縁部内湾し、口唇部丸く内屈。口縁部 横撫で。底部不定方向篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや 密
241-2 82-2	土 師 器 碗	底部1/2	-×4×(2.6) 高台高1.5		付高台、外反して大きく開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや 密
241-3 82-3	土 師 器 鉢	底部・ 高台欠	-×-×(2.3)		器肉厚い。	①良好 ②橙 ③やや 粗、小石混る
241-4 82-4	灰 釉 陶 器 広 口 瓶	口縁部 欠損	-×16×(33) 胴部径25		胴部下半直線的、肩部丸く張る。頸部外反気味に立つ。付 高台、幅広く低い。胴上位から下位は回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや 密
241-5 82-5	石 製 品 砥 石		6.8×5.9×4.4 152.0g	埋 土	多面使用	角閃石安山岩
241-6 82-6	石 製 品 砥 石		7.8×6.4×4.6 149.4g	埋 土	多面使用	角閃石安山岩
241-7 82-7	石 製 品 砥 石		4.7×3×1.7 13.2g	埋 土	多面使用。刃痕あり。	角閃石安山岩

J 99号住居跡 (Fig. 242~244・PL. 83)

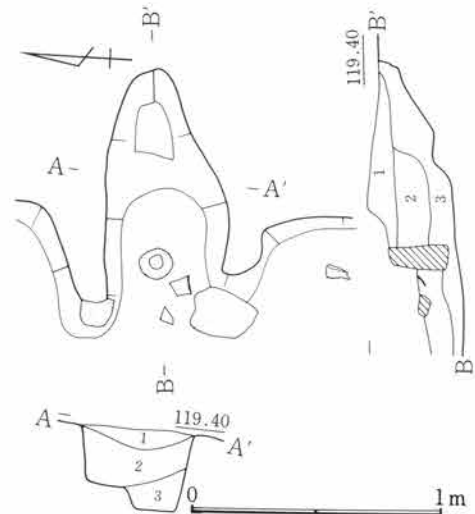
J区北部に位置し、60J 42~44の範囲にある。東壁寄り以外は調査区域外に延びており、未検出である。壁は高さ20cmを測り、ほぼ直立する。床面は、凹凸の顕著な掘形に粘土混入土で貼床してあり、平坦で硬質である。竈の袖部は造り出で、先端に凝灰岩質の加工材を埋設している。燃烧部内壁はよく熱を受けており、底面には灰が堆積している。底面中央には支脚が埋設されている。燃烧部奥壁を段状に造り、短い煙道部を形成している。長さ33cmを測る。遺物は支脚以外は、砥石と土器の小片のみである。



J 99号住居跡

- 1 現耕作土 B軽石含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。砂質土。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化物・土器片を含む。

Fig.242 J99号住居跡



J 99号住居跡竈

- 1 赤色土 焼土塊集中土。
- 2 赤灰色土 焼土・炭化物・土器片含む。
- 3 灰褐色土 炭化物集中土。土器片含む。

Fig.243 J99号住居跡竈

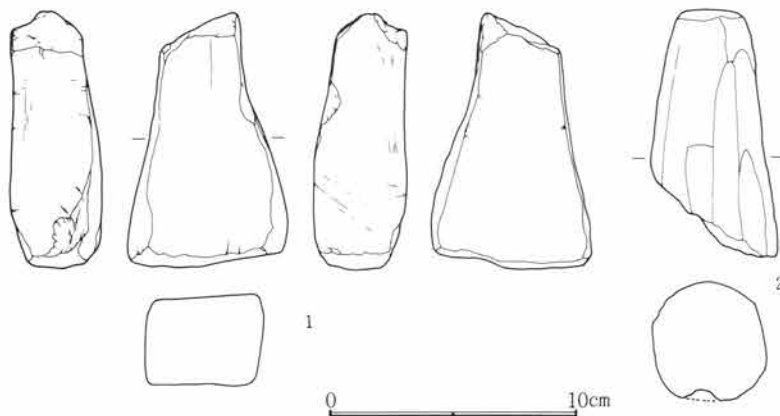


Fig.244 J99号住居跡出土遺物

J 99号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
244-1 83-1	石 製 品 砥 石	片端欠 損	(10.1)×6.4×3.6 28.27g	南東部埋 土	4面使用。中央部細る。片端自然面。刃痕あり。	流紋岩(砥沢?)
244-2 83-2	土 製 品 竈 支 脚	先端部	(10)×5.2(3)	竈内床面	円柱状。表面は面取り状に成形。細端部は磨滅。	①良好 ②灰黄 ③ やや密

J100号住居跡 (Fig. 245~247・PL. 83)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.50 × 2.60	N-93°-E	東壁やや南寄り	—————

J区中央部に位置し、50・51 J 34・35の範囲にある。小型の遺構である。78号住居跡と重複し、これより古い時期の所産である。壁は高さ10cm程度が残っており、直立している。床面は凹凸があるが、よく踏み固められる。竈は東壁の南によって付設され、楕円形に掘り込まれる。袖部・煙道部は確認されていない。燃烧部幅45cm・奥行き65cmを測る。燃烧部底面から手前床面に灰が堆積している。遺物は少量である。

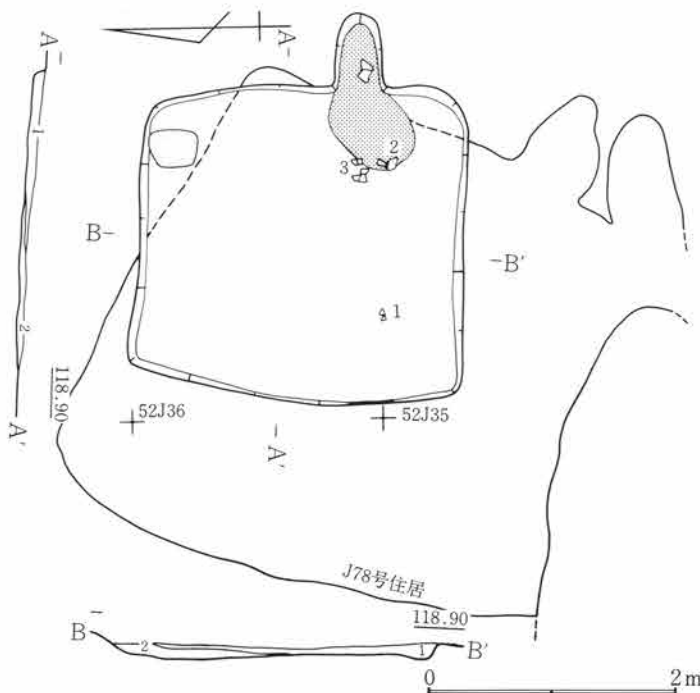
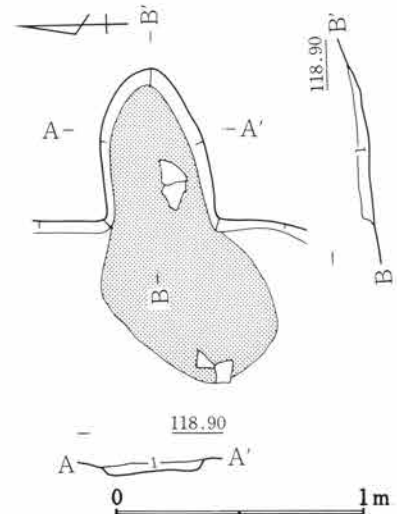


Fig.245 J100号住居跡



J100号住居跡竈

1 赤褐色土 焼土・炭化物塊を多量に含む。粘性土。

Fig.246 J100号住居跡竈

J100号住居跡

1 暗褐色土 C軽石・土器片を含む。砂質土。

2 黄褐色土 粘土塊を含む。

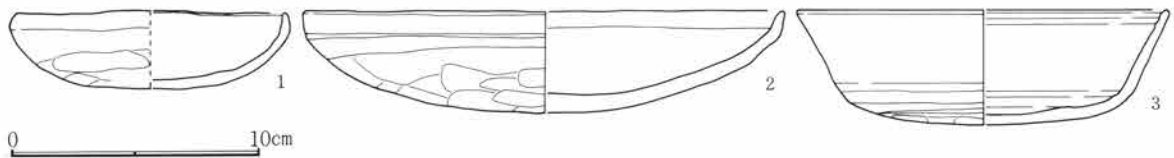


Fig.247 J100号住居跡出土遺物

J100号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
247-1 83-1	土 師 器 杯	1/2	11×-×3.1	南西部床 面	底部丸く張り不安定。口縁部短く、内傾する。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
247-2 83-2	土 師 器 盤	ほぼ完	19.2×-×4.1	南東部埋 土	底部丸く不安定、やや扁平。口縁部短く折れて外傾。口縁部横撫で。底部不定方向の篋削り。内面篋痕あり。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
247-3 83-3	須 恵 器 杯	体部1/2 欠損	14.9×10.6×4.6	南東部床 面	底部張り出し不安定。体部直線的に外傾する。口唇部丸く内面に幅広の弱い凹線巡る。轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密

J-1号土坑 (Fig. 248~251・PL. 84, 85)

J区北東部に位置し、52J39の範囲にある。平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、確認面での長径約75cm・短径約45cm・深さ約15cmを測る。先行する溝跡上に設けられたため、重複する南半部が不明瞭である。

出土遺物は須恵器の壺1・杯33の計34点である。壺は土坑のほぼ中央に据えられ、それを境として南北軸のほぼ一線上に完形の杯が集中して出土している。北半部に11.5点・南半部に20.5点であり、1点のみが半分ずつ南北に振り分けられている。他の1点は確認当初の自然災害(冠水)のため位置不詳となり、写真撮影に壺上に乗せられていた。杯個々の出土状態は、同一軸線上に乗るという点のみが共通し、蓋・身・入れ

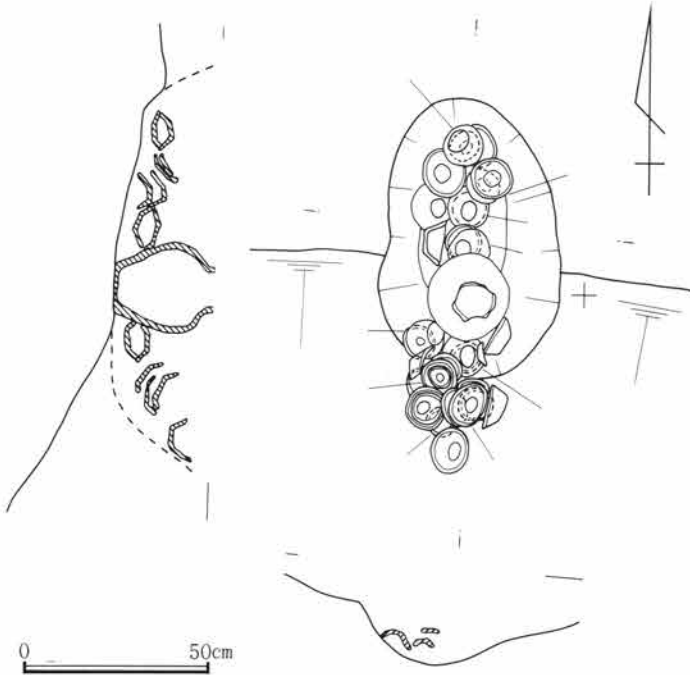


Fig.248 J1号土坑

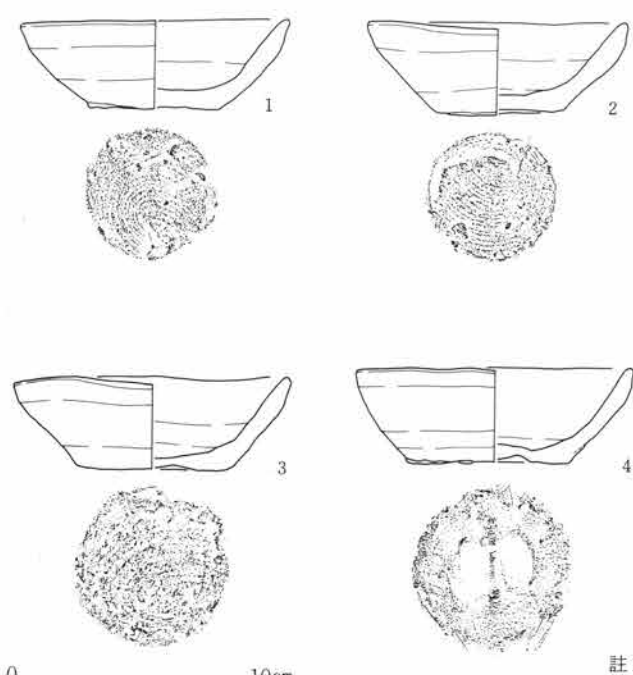


Fig.249 J1号土坑出土遺物(1)

子・上重ね・伏重ねなど、据え方での規則性は認め難い。なお、南半の土坑底部出土の1点には、煤の付着が顕著であり灯明皿としての使用を想わせる。

遺物観察表を補足するならば、壺は軟質ながら重量感があり、頸部はほぼ直立し、口縁に向かって外反する。口縁部は遺構確認時に欠損したもので、本来は完形であったと推定される。杯は、口径9.8cm~11.8cm・器高2.7cm~4.2cm内に包括され、口径11.0cm・器高3.5cm前後に集中する。成形及び調製は粗略であり、細部の差異は工人の癖差を想わせる程度である。また、総じて同質胎土・同質色調を呈することから、一括して製作・焼成になるものと考えてよい。

所属年代は、本遺跡内では他の遺構出土の資料間に類似点が認められるものもあった。また本県利根郡月夜野町所在藪田遺跡(註1)・同藪田東遺跡(註2)・渋川市西浦遺跡(註3)の出土資料で9世紀中葉~11世紀前半に比定されるものがあり、これに近似する形態を示している。当遺跡での序列によればその後半段階にあたり11世紀前半代を中心とした年代が考えられる。

遺構の性格は、遺物の規格性と出土状況より、特殊な行為に伴うものとの推定が可能であるが、灰・炭化物・骨片等は検出されておらず、今後の課題とするにとどめたい。

(保坂雅美)

註1 『藪田遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
 註2 『藪田東遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
 註3 『西浦遺跡』 渋川市教育委員会 1986

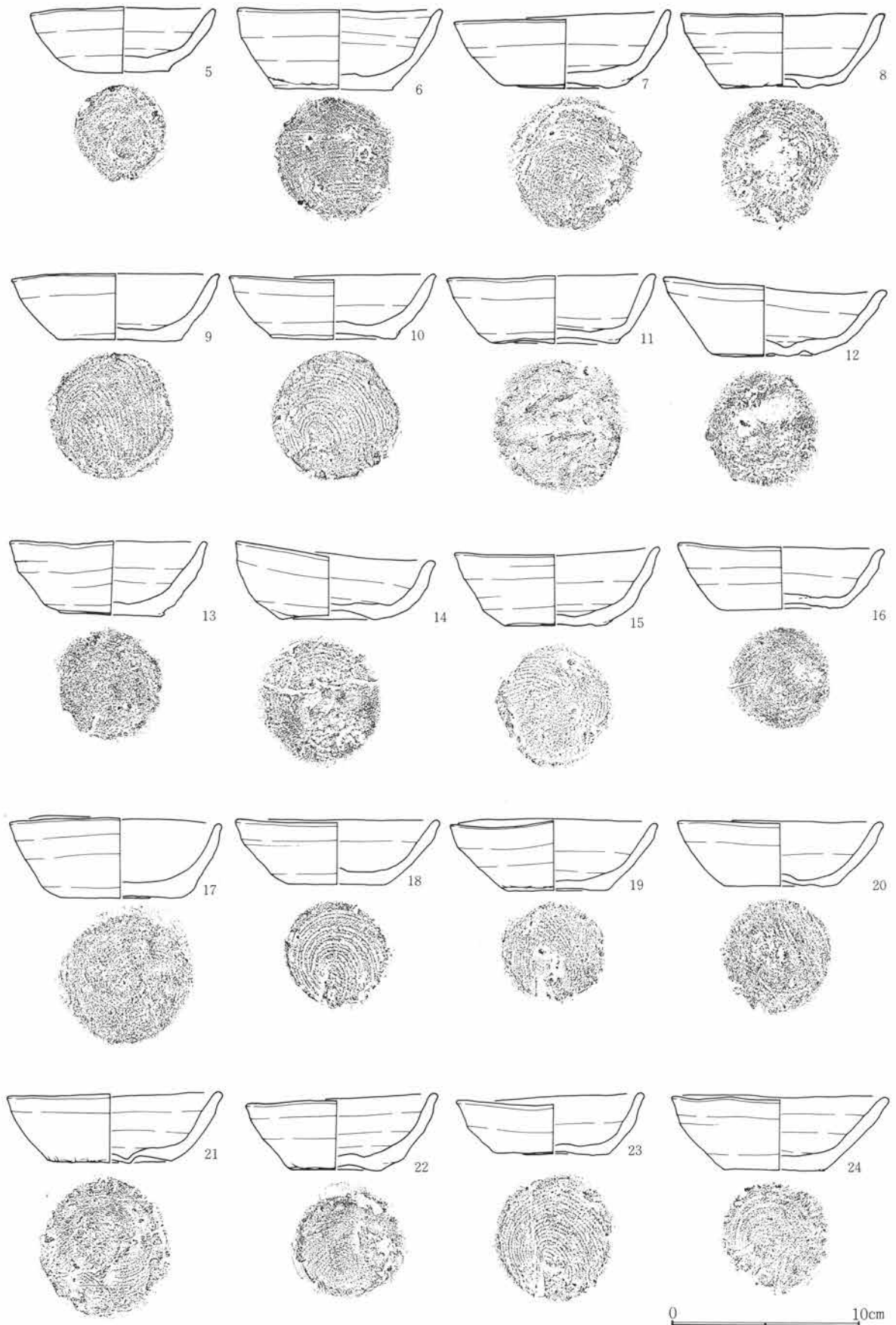


Fig.250 J1号土坑出土遺物(2)

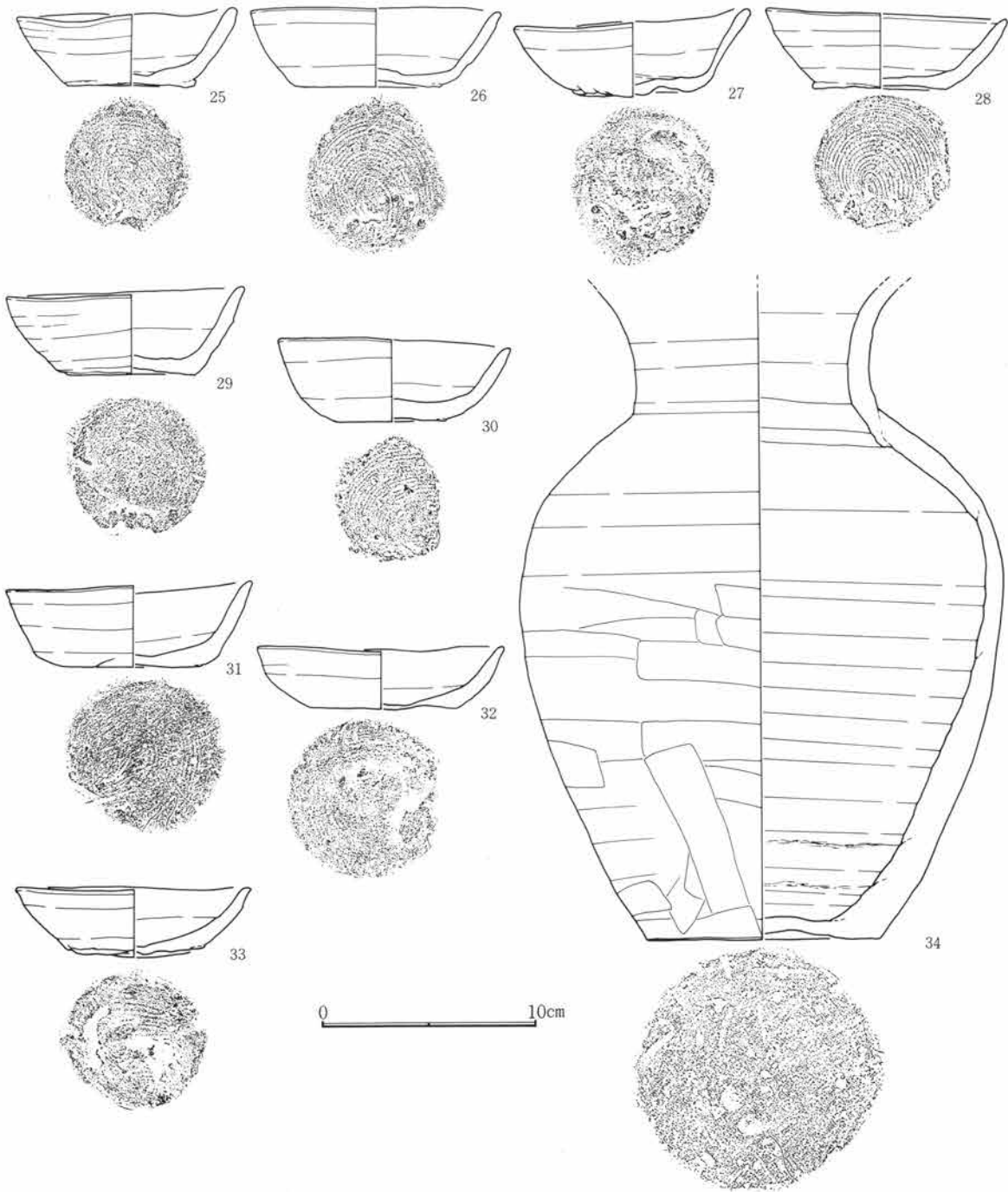


Fig.251 J1号土坑出土遺物(3)

J 1 号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 種 形	残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×高さ	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
249-1 84-1	須恵器 杯	完	10.8×5.3×3.5	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁弱く内湾。見込外周強い横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
249-2 84-2	須恵器 杯	完	10.4×5×3.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁弱く内湾。見込外周強い撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
249-3 84-3	須恵器 杯	完	11.1×5.9×3.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁弱く内湾。見込外周強い横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
249-4 84-4	須恵器 杯	完	11.1×6.5×3.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り後、内外底面に指撫でと指押えの粗い調整。口縁弱く内湾。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

第2章 J区の遺構と遺物

J1号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	残存 量	計測値(cm・g) 口径×底径×高さ	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
250-5 84-5	須 惠 器 杯	完	9.8×5×3.4	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁弱く内湾。見込外周強い横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-6 84-6	須 惠 器 杯	完	10.9×6.3×4.2	北半	轆轤成形。右回転糸切り後、不定方向の撫で。口縁弱く内湾。見込外周強い撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-7 84-7	須 惠 器 杯	完	11.5×6.5×3.8	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁弱く内湾。見込外周強い横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-8 84-8	須 惠 器 杯	完	10.8×6.4×3.8	南半	轆轤成形。右回転糸切り後、内外底面に指撫でと指押え。口縁摘み弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-9 84-9	須 惠 器 杯	1/4	11×6.5×3.4	不明	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁摘み弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-10 84-10	須 惠 器 杯	完	10.9×6.5×3.4	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁摘み弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-11 84-11	須 惠 器 杯	完	11×6.7×3.5	南半	轆轤成形。内外底面指撫でと指押えの粗調整。見込部外周強い横撫で。口縁摘み弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-12 84-12	須 惠 器 杯	完	11.8×5.4×3.7	北半	轆轤成形。右回転糸切り後、内外底面指撫でと指押えの粗調整。口縁摘み弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-13 84-13	須 惠 器 杯	完	10.4×5.6×3.8	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。強い2段の横撫で。口縁摘み外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-14 84-14	須 惠 器 杯	完	10.6×5×3.4	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。強い2段の横撫で。口縁摘み外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-15 84-15	須 惠 器 杯	完	10.9×5.3×3.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り後、不定方向撫で。強い2段の横撫で。口縁部摘み外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-16 84-16	須 惠 器 杯	完	10.9×6.4×3.2	南半	轆轤成形。右回転糸切り。見込み部に粘土継ぎ足す。強い2段の横撫で。口縁摘み外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-17 84-17	須 惠 器 杯	完	11.2×6.4×4.2	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁部摘み弱く外反。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-18 84-18	須 惠 器 杯	完	10.8×5.1×3.4	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁部摘み弱く外反。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-19 85-19	須 惠 器 杯	完	11×5.4×3.8	北半	轆轤成形。右回転糸切り後、不定方向撫で。口縁摘み弱く外反。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-20 85-20	須 惠 器 杯	完	10.9×5.8×3.4	北半	轆轤成形。右回転糸切り。口縁摘み弱く外反。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-21 85-21	須 惠 器 杯	完	11.4×6.4×3.6	北・南	轆轤成形。右回転糸切り。内外底面指撫でと指押え。口縁部摘み弱く外反。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-22 85-22	須 惠 器 杯	完	10.2×4.7×3.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り。外底面指撫でと指押え。口縁部摘み弱く外反。端部丸い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-23 85-23	須 惠 器 杯	完	9.9×5.9×3	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。口縁摘み弱く外反。端部丸い。口縁煤付着。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-24 85-24	須 惠 器 杯	完	11.5×5.3×3.8	南半	轆轤成形。右回転糸切り、一部粘土継ぎ足し。直線的に立ちあがり、口縁部弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-25 85-25	須 惠 器 杯	完	10.2×5.8×3.4	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。直線的に立ちあがり、口縁部弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-26 85-26	須 惠 器 杯	完	11.5×6.7×3.6	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。直線的に立ちあがり、口縁部弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-27 85-27	須 惠 器 杯	完	11×5.5×3.4	南半	轆轤成形。右回転糸切り。内外底面指撫で・押え。直線的に立ちあがり、口縁部弱く外反。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-28 85-28	須 惠 器 杯	完	11.2×6.1×3.4	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。直線的に立ちあがり、口縁部比較的薄い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-29 85-29	須 惠 器 杯	完	11×5.9×3.8	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。直線的に立ちあがり、口縁部比較的薄い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-30 85-30	須 惠 器 杯	完	10.7×5×3.7	北半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。直線的に立ちあがり、口縁部比較的薄い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-31 85-31	須 惠 器 杯	完	11.4×6.2×3.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り。無調整。直線的に立ちあがり、口縁部比較的薄い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-32 85-32	須 惠 器 杯	完	11.4×6.8×2.7	南半	轆轤成形。右回転糸切り後、内外底面指撫で・押え。緩い立ちあがり。口縁比較的薄い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-33 85-33	須 惠 器 杯	完	10.9×6.3×3.2	南半	轆轤成形。右回転糸切り後、不定方向撫で。内底面指調整口縁部比較的薄い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
250-34 85-34	須 惠 器 壺	口縁部 欠損	一×10.7×(30)	中央	紐造り巻き上げ。轆轤右回転。胴下半篋削り。底部無調整内面黒色。	①還元(低温) ② 灰白③角礫混る

第3章 K区の遺構と遺物

第1節 K区の概要

K区は南北方向に長く延びる鳥羽遺跡の中央やや北側に位置し、行政区分は群馬郡群馬町稲荷台に所属している。K区の北側には県道前橋－足門線が東西方向に走り、このため当区の北端の一部はこれに架かり全区域を調査するには至らなかった。調査面積は約3,260㎡である。

発掘調査は昭和57年から58年にかけて、G・H・I・J・L区などと合い前後して実施された。調査に当たっては本線部・側道部・構造物建設部分など調査区の細切れや数期に渡る不連続な調査、あるいは調査区内にある生活道などの確保の必要も手伝って検出された遺構や遺構群の整合性に著しく支障をきたした場面もあった。

地形的には遺跡の東辺をほぼ北から南に流れる染谷川の台地上にある。現地表は北側がやや高くなっているが平坦に近く、南北の高低差は50cmに満たず、標高はおおよそ121mを測る。しかし遺構検出面では、北側が地表より約50cmでLoam層に達し遺構の構築面となっているが、南方とくに南西部に向かい黒褐色土ないしは暗褐色土の堆積が厚く、Loam層面が深く地表より1.5m程度の深さで到達する。南西部での遺構検出面はこれに伴って深くなっており、従来は北東から南西に向かい緩い傾斜地となっていたと思われる。また、Loam層は水性Loamで湿潤化が著しい。湧水も見られた。

検出された遺構は、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴住居跡が中心で総数139軒を数える。その他の遺構としては、I区で検出されている鍛冶工房跡と同様と考えられる。奈良から平安期にかけての鍛冶工房跡や平安から中・近世にかけての溝・墓跡・井戸跡などがある。

竪穴住居跡の所属する時代の内訳はおおよそ、古墳時代と考えられるものは20軒で、そのうち古墳時代前期のものは3軒である。奈良時代から平安時代にかけての住居跡は110余軒を数える。当区で検出された住居跡のなかで古墳時代のものは全体の15%程度であるが、現在のところK区が最も多数の遺構を擁しており、南方区での存在はさらに薄くなっている。当該期の中心的集落構成は、遺跡内でもK区を含めた北側区に展開していると考えられる。また奈良から平安期にかけての遺構数の多さは当区以外でも同様な傾向にある。これには鳥羽遺跡の立地からしても竪穴住居群の構成や変遷は、上野国府の成立・動向に深く関わっていると思われる。

ところで竪穴住居群の分布はかなりの密集状態を示しており切り合い・重複が著しく、単独遺構の存在が希な程である。しかしこの密集状態の中でも、かなり厳密な居住空間が意識されているようである。住居跡の分布は大きくは北と南に別れており、区内中央部には東西方向に10mから15mの広場的空白地帯が出現している。この空白地帯は、古墳時代から平安時代までの隔たった時代の長い経過の中でもおおよそ一致していると思われ伝統的ともいえるような状態である。遺跡内での住居群は、他の区域でもこれに似通った状態で幾つかの偏在的な分布が認められ、鳥羽遺跡の集落構成やその生成・変遷に深く関わっているようで示唆的な現象とも考えられる。



Fig.252 K区全体図

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

K1号住居跡 (Fig. 253~255・PL. 87・88)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.23 × 4.62	N- 92° -E	東壁ほぼ中央	隅丸方形 (75.0 × 64.0 × 23.0)

K区南西部に位置し、69~71K 3~5の範囲にある。東側で60号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。平面形はほぼ方形を呈するが、南壁がやや短く南西部が歪む。壁高は約20cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。壁下の溝は全体を巡り幅約10cm・深さ約8cmを測る。溝内には小穴などの痕跡はなかった。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱く、床面上には5~6cmの厚さで焼土粒・炭化粒・灰混じりの層が堆積している。また、床面の中央部と北部には直上に灰層が分布している。住居床面には大小の穴が穿たれるが、支柱穴と考えられるものはP₁~P₄の4本である。P₁は60×40cmの楕円形を呈し深さ約18cm、P₂は径46×32cm・深さ約17cm、P₃は40×40cmの不整形円で深さ約27cm、P₄は径約40cm・深さ約34cmの円形を呈する。柱筋は整合せず平行四辺形になる。柱間はP₁・P₄とP₂・P₃間は等しく2.4mを測り、P₁・P₂、P₃・P₄間はそれぞれ2.2mと2mを測る。床下土坑と考えられる穴は北・南壁際にそれぞれ検出されているが、北側のものは1.3×1.2mの隅丸の方形を呈し深さ約17cmを測る。この土坑の上面にあたる床には上述したように灰層の分布が認められている。南壁際のもの1×1.1mの不整形楕円形を呈し深さ約25cmを測る。その他住居内には数個の小穴が検出されているが、西壁に沿う様相の一群は住居内において何等かの施設を示す可能性がある。径約20cm・深さ約10cmを測る。竈は東壁のほぼ中央部に付設され、燃焼部を含めた本体は大きく

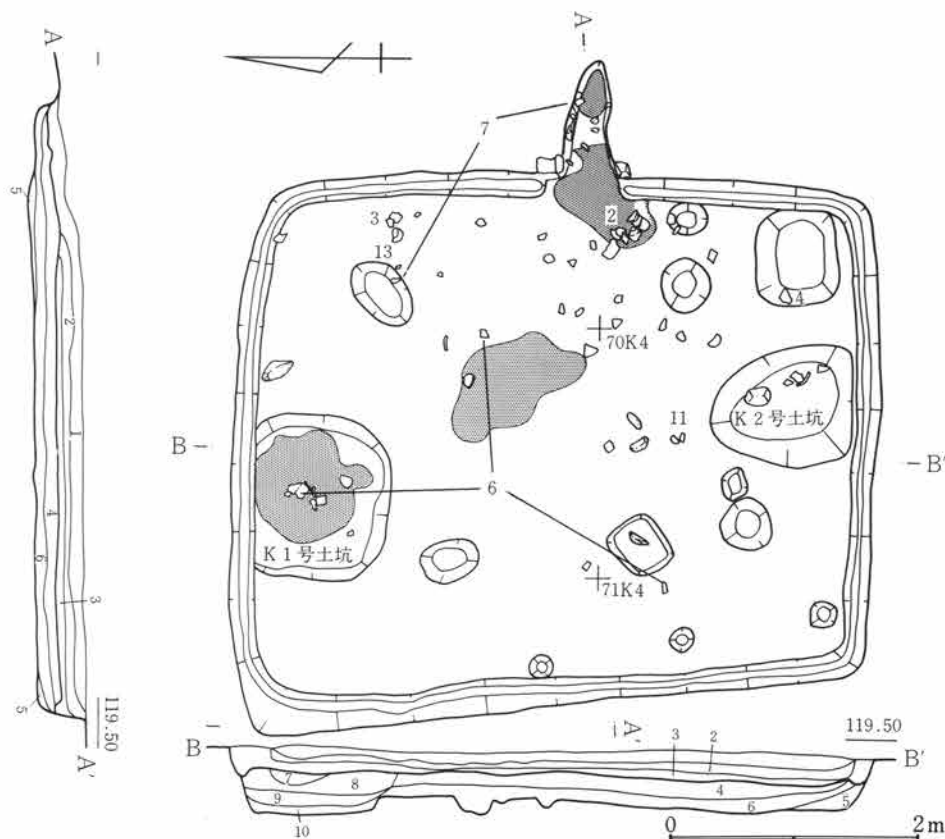
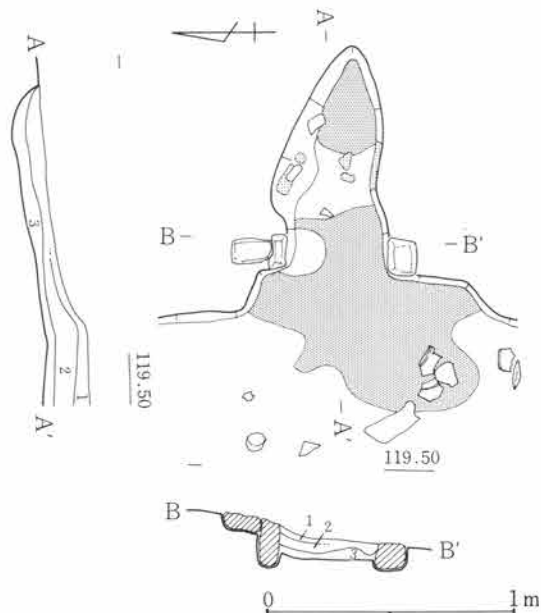


Fig.253 K1号住居跡

第3章 K区の遺構と遺物

壁外に張り出し、煙道部と燃焼部の区別は出来ない。袖部にあたる凝灰岩質の石材が住居外に埋設されている。袖部は幅約40cmを測り、袖部からの全長は約50cmを測る。出土遺物は竈周辺及びその前面に比較的多く検出されている。



K1号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含み、炭化物粒（黒灰）・焼土粒が混じる。
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。1層に比べ粘性あり。
- 3 暗褐色土 軽石・焼土粒を多く含む、粘性は弱い。
- 4 暗褐色土 混入物はあまり含まない、粘性はやや強い。
- 5 茶褐色土 混入物はほとんど含まない粘質土。
- 6 暗褐色土 混入物はあまり含まず、粘性は非常に強い。

土坑

- 7 灰層
- 8 暗褐色土 軽石・焼土粒を若干含み、粘性は弱い。
- 9 暗褐色土 混入物はほとんど含まず、粘性はやや強い。
- 10 暗褐色土 焼土粒・Loam塊をわずかに含む。粘性はやや強い。

K1号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含み炭化物粒（黒灰）・焼土粒を含んだ砂質土。
- 2 暗褐色土 1に比べC軽石を含まず焼土粒・炭化物粒を含んだ砂質土。
- 3 茶褐色土 崩落焼土粒・炭を多く含んだ砂質土。

Fig.254 K1号住居跡竈

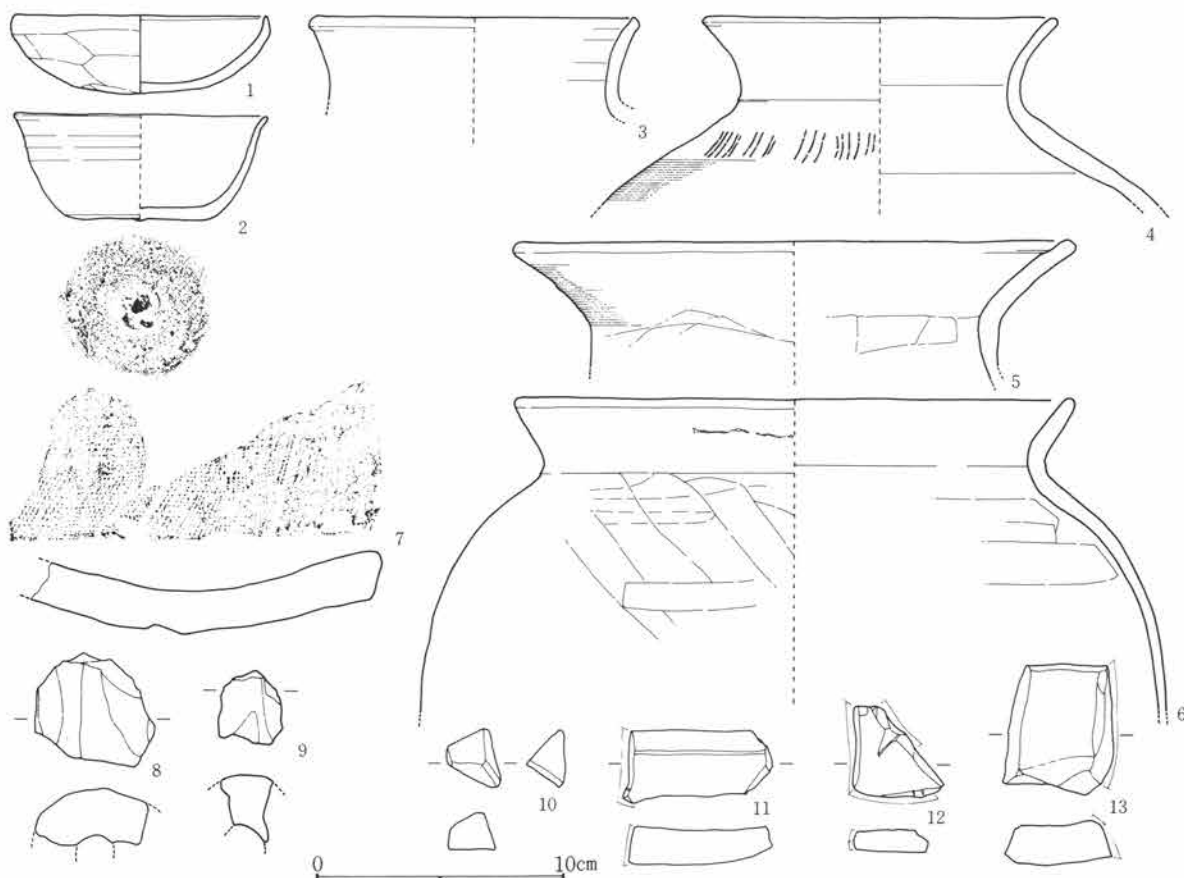


Fig.255 K1号住居跡出土遺物

K 1号住居跡出土遺物観察表

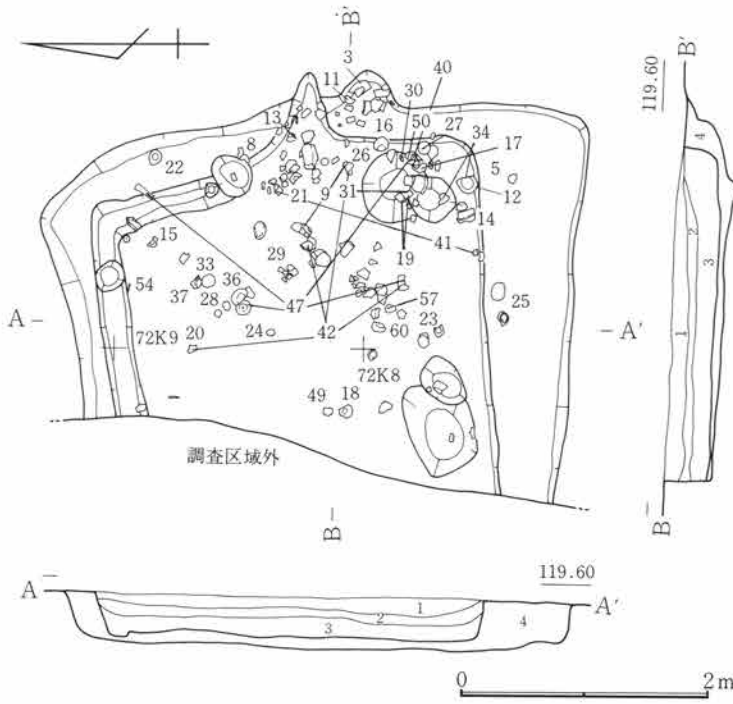
Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
255-1 88-1	土 師 器 杯	1/4	10×-×3.1	北東部床 下	丸底。口唇端部は尖り、僅かに内傾する。体部から底部にかけて手持筥削り。口縁部・内面は横撫で。	①良好 ②橙 ③ 砂・黒雲母多く混る
255-2 88-2	須 惠 器 杯	1/2	10.2×6.2×4.2	竈前方床 面	腰部丸味をもち、深い体部。口縁細く外反する。底部右回転筥削り。	①良好 ②灰褐 ③ 細長石多く混る
255-3 88-3	須 惠 器 壺	口 縁 1/4	13.0×-×-	北東部床 面	頸部は外反ぎみに立ち上がり、口唇端部は内傾。	①やや軟 ②灰白 ③細砂混る
255-4 88-4	須 惠 器 甕	口 肩 1/2	14.2×-×(7.4)	貯蔵穴内	丸い肩部から強目に外反する頸部。口唇端部丸い。肩部叩き目後、小口状工具による回転撫で調整。	①軟 ②灰白 ③密
255-5 88-5	土 師 器 甕	口 縁 1/4	22.5×-×(5.6)	中央部床 面	口縁部下位は直立し、後大きく外反。胴部上位横筥削り。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③細砂混る
255-6 88-6	土 師 器 甕	口~胴 1/4	22.5×-×(12.6) 最大径胴部29.9	北西部土 坑内	強く張る球胴から口縁はくの字状に外反。最大径は胴部。胴上位斜、中位は横筥削り。内面横撫で。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③粗 赤褐色粒多く混る
255-7 88-7	瓦 平 瓦			竈内・北 東部床面	凹面布目。凸面筥調整。側面筥調整。	①良好 ②灰 ③白 色細粒混る
255-8 88-8	土 製 品 鞆 羽 口 片	中位小	長(4.5)	埋 土		
255-9 88-9	土 製 品 鞆 羽 口 片	先端小	長(2.9)	埋 土		
255-10 88-10	石 製 品 砥 石		2.3×2.2×1.5 5.5g	掘形埋土	多面使用。	流紋岩
255-11 88-11	須 惠 器 転用砥石		6×2.9×1.5 24.9g	南部床面	1側面使用。甕片転用。	①良好 ②灰 ③密
255-12 88-12	須 惠 器 転用砥石		3.5×3.6×0.9 12.4g	埋 土	3側面使用。甕片転用。	①良好 ②灰 ③密
255-13 88-13	須 惠 器 転用砥石		5×4.4×1.5 49.4g	北東部床 面	1側面使用。甕片転用。	①良好 ②灰白 ③ 密

K 2号住居跡 (Fig. 256~259・PL. 89~92)

K区の南西部に位置し、71・72K 7~9の範囲にある。西側は調査区域外に延び全体の検出は出来なかった。3号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産と考えられる。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約3.1mを測り、東西は3.4mまで確認できた。これによれば全体の形態は長方形になろう。壁高は3号住居跡との切り合いのため不明瞭ではあるが、約40cmを測る。東壁から西壁にかけて壁下の溝が巡り、幅約18cm・深さ約10cmを測る。床面は湿気が多く総じて軟弱であり凹凸が目立った。貯蔵穴は南東部にあり、径約56cmの円形を呈し深さ約16cmを測る。竈は東壁のやや南寄りに付設される。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、短い煙道部が作り出される。袖部などの施設は検出されていない。燃焼部は幅約40cm・奥行き約40cm、煙道部は長さ約20cmを測る。出土遺物は住居内全体に分布し埋土中及び床面上にも多く検出されているが、竈内及び貯蔵穴上面にとくに集中している。酸化焙焼成の小杯の類が多く、その他北東部床面上より皇朝十二銭の一つ「延喜通宝」と思われる古銭の出土がある。

K 3号住居跡 (Fig. 256・260・PL. 89・92)

K区の南西部に位置し、71・72K 7~9の範囲にある。2号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。中心部は2号住居跡と重なり詳細は不明である。また西側は調査区域外にかかり検出されていない。平面形は方形を呈すると考えられるが北東隅は丸みを帯び、北壁は歪む。南北長約4.4mを測り、東西は3.5mまで確認できた。壁高は約23cmを測る。貯蔵穴や壁下の溝などの諸施設は検出されていない。竈は東



壁のやや南寄りに楕円形に掘り込まれて付設され、一部は2号住居跡の竈によって破壊されている。燃烧部は幅約50cm・奥行き約30cmを測る。袖部や煙道部は確認出来なかった。出土遺物は少ないが竈内で主に検出されている。

K2号住居跡

- 1 暗褐色土 B軽石を多く含み、C軽石を少量混える砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化物粒・焼土粒を多く混えるやや粘性土。
- 3 暗褐色土 C軽石をあまり含まず焼土粒・黒灰を多く混える粘性土。
- 4 暗褐色土 黒色粘性土にわずかな軽石黄褐色塊を含む。

Fig.256 K2・3号住居跡

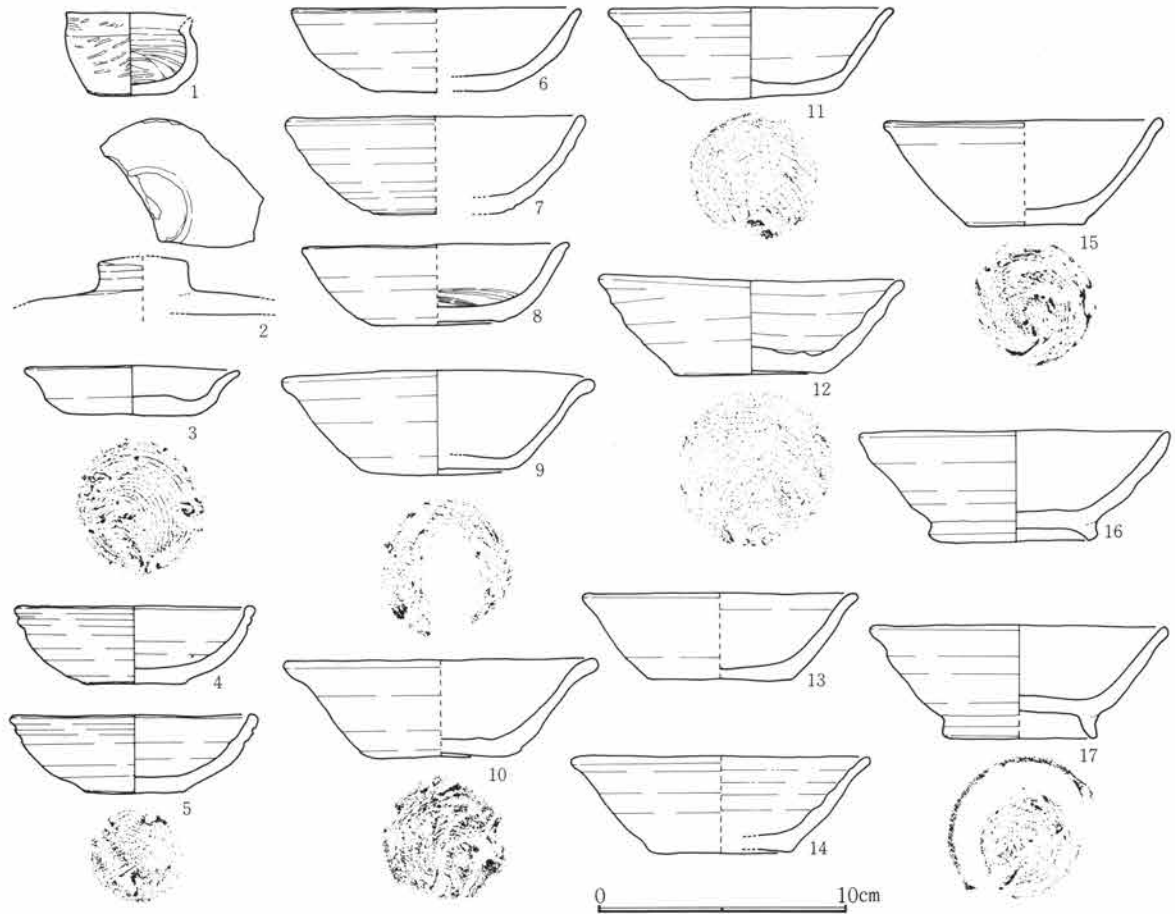


Fig.257 K2号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

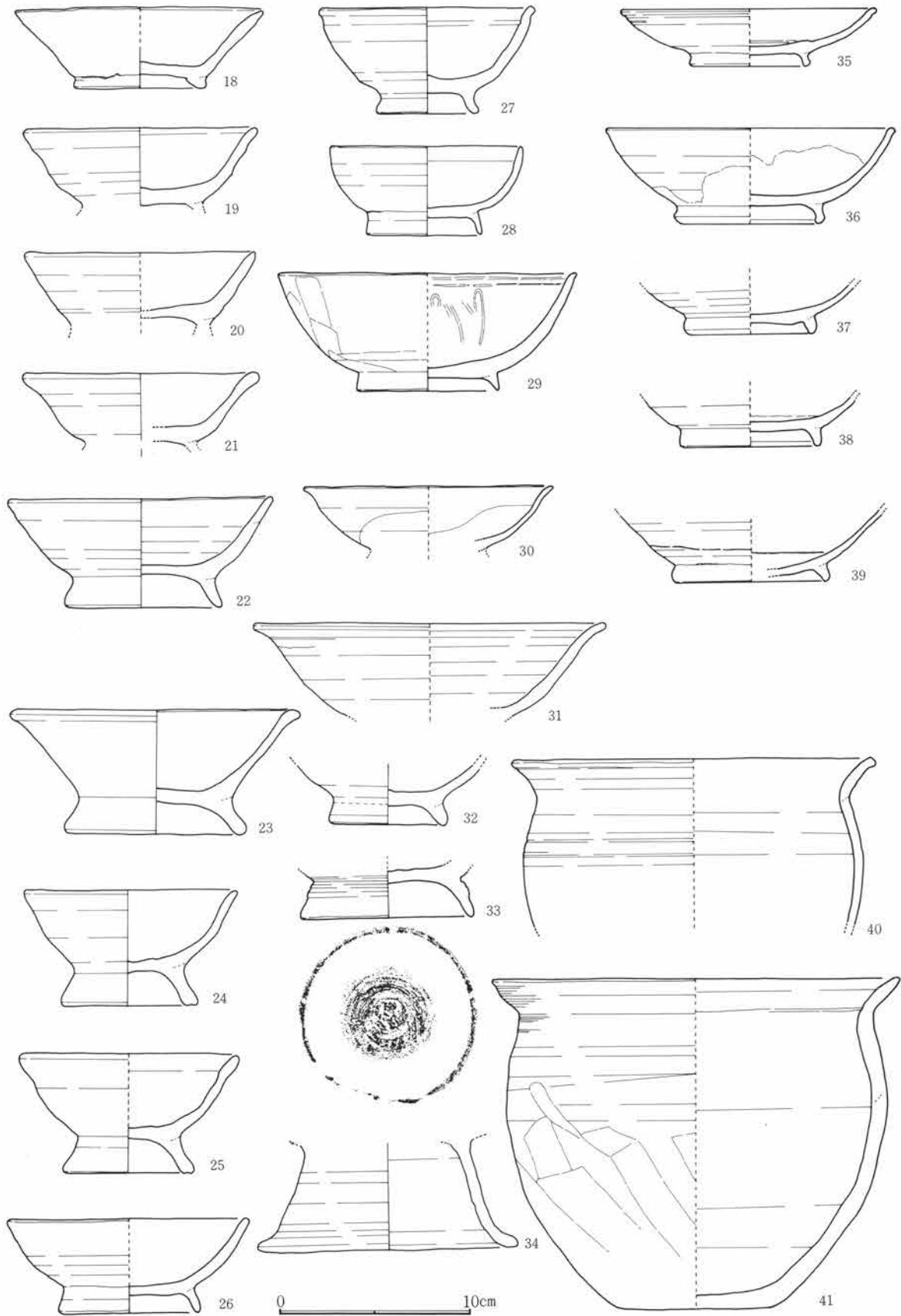


Fig.258 K2号住居跡出土遺物(2)

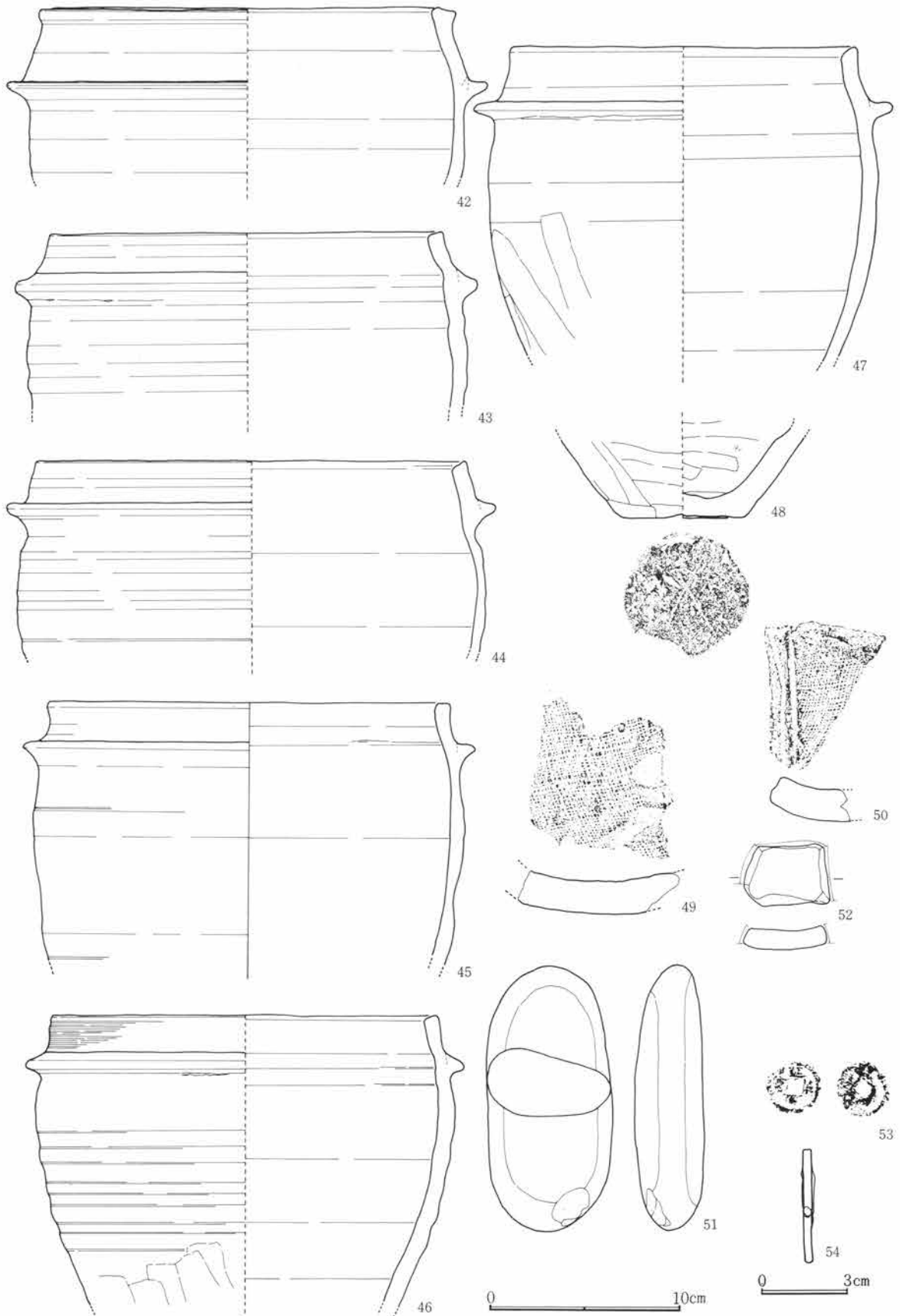


Fig.259 K2号住居跡出土遺物(3)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

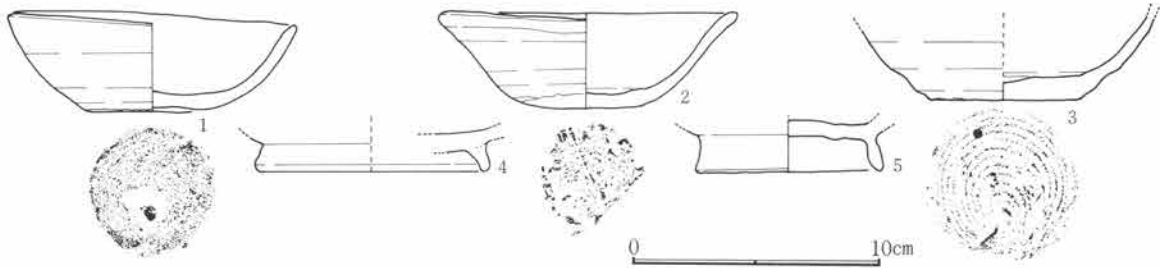


Fig.260 K3号住居跡出土遺物

K 2号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形 類	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④その他
257-1 89-1	土師器 手捏	完	4.8×3.5×3.1	北東床面	平底。腰部張り口縁部外傾、端部は尖る。外面寛調整痕内面は黒色処理に寛磨き。	①良好 ②鈍い橙
257-2 89-2	土師器 蓋	摘み	径 3.5	埋 土	摘み頂部やや脹らむ。内面黒色処理	①良好 ②鈍い橙 ③密、金雲母混る
257-3 89-3	土師質 小杯	完	8.6×5.5×2	竈 内	腰部外傾し、腰部上位は外反する。口唇部丸い。轆轤成形 右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
257-4 89-4	土師質 小杯	1/2	9.6×4×3.1	埋 土	腰部丸く脹る。口唇部は丸い。口縁部外面に1条の凸線が 巡る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 細砂混る
257-5 89-5	土師質 小杯	完	10×4×3.1	南東床面	腰部丸く脹る。口唇部は丸い。口縁部外面に1条の凸線が 巡る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 細砂混る
257-6 89-6	土師質 杯	1/2	11×6×3.3	埋 土	腰部丸く脹らむ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 赤褐色粒混る
257-7 89-7	土師質 杯	1/2	12×5.4×3.9	竈 内	腰部丸く脹らむ。口唇部は丸い。底部欠損。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③ 砂多く混る
257-8 89-8	土師質 杯	1/2	10.8×5.2×3.2	東壁小穴 内	腰部丸く脹らむ。口唇部は緩く外反。見込部に撫で底。轆 轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③細砂混る
257-9 89-9	須惠器 杯	完	12.6×5.7×4.2	竈前床面	腰部直線的に外傾し、口唇部は丸く肥厚する。轆轤成形。 右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄 ③ 粗、小石混る
257-10 89-10	須惠器 杯	1/2	12.6×5.2×3.9	埋 土	腰部直線的に外傾し、口縁部は肥厚して外反する。轆轤成 形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③粗、小石混る
257-11 89-11	須惠器 杯	完	11.5×5.4×3.6	竈 内	腰部僅かに外反し、器内全体に薄い。轆轤成形。右回転糸 切り。	①酸化気味 ②灰白 ③やや密
257-12 89-12	須惠器 杯	完	12.2×6×4	南東床面	轆轤目強く、腰部直線的に外傾。口唇部丸い。全体に肥厚 する。右回転糸切り。	①酸化 ②明褐 ③ 粗、小石多く混る
257-13 90-13	須惠器 杯	1/2	11×5.6×3.4	竈 内	腰部やや丸味をもち口縁部は外傾する。口唇部丸い。轆轤 成形。右回転糸切り。	①酸化 ②浅黄橙 ③やや粗、細砂混る
257-14 90-14	須惠器 杯	1/2	12×5.8×3.8	埋 土	轆轤目強い。腰部中位やや丸く、口縁部僅かに外屈する。 右回転糸切り。	①一部酸化 ②灰白 ③粗、小石混る
257-15 90-15	須惠器 杯	1/2	11.3×4.7×4.2	北東床面	腰部直線的。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①半還元 ②鈍い黄 橙 ③密
257-16 90-16	須惠器 碗	完	12.6×6.8×4.4	竈右床面	全体に肥厚気味。腰部内湾気味に立つ。付高台。轆轤成形。 作り雑。	①酸化気味 ②灰白 ③粗、小石多く混る
257-17 90-17	須惠器 碗	1/2	12×6.2×4.5	貯蔵穴内	腰部直線的。口唇部丸い。付高台、端部丸く外反する。轆 轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②灰白 ③ やや密
258-18 90-18	須惠器 碗	1/2	13×6.8×4.2	西中央床 面	腰部やや外反して立ち上がる。口唇部細い。付高台、低く 着装は雑。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗、砂多く混る
258-19 90-19	須惠器 碗	高台欠 損	12.2×—×(4)	貯蔵穴内	腰部やや張り、口縁部は僅かに外反、口唇部丸い。付高台。 轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②灰黄 ③ 粗、小石多く混る
258-20 90-20	須惠器 碗	1/2 高 台欠損	12×—×(3.8)	北中央床 面	腰部直線的。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②灰白 ③ 粗、砂多く混る
258-21 90-21	須惠器 碗	高台1/2 欠損	12.4×—×(3.6)	竈前床面	腰部やや張り、口唇部は肥厚して外反する。付高台。轆轤 成形。	①酸化気味、軟 ② 灰白 ③粗、砂混る
258-22 90-22	須惠器 碗	完	13.9×8.2×5.6 高台高1.6	北東床面	腰部やや丸く、口唇部は丸い。付高台、高くハの字状に開 く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、砂混る
258-23 90-23	須惠器 碗	1/2	15.2×9.5×6.4 高台高1.5	竈前床面	腰部に張りなく直線的。口唇部は肥厚し外屈。付高台、丸 く肥厚して大きくハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、軟 ② 灰白 ③密
258-24 90-24	須惠器 碗	完	11×7.1×6 高台高1.7	中央北床 面	腰部やや丸味を帯び、中位より緩く外反。付高台、高く肥 厚してハの字状に開く。轆轤成形。作り雑。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石多く混る

第3章 K区の遺構と遺物

K2号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
258-25 90-25	須恵器 椀	1/2	11.4×6.8×6.2 高台高1.8	南床面	体部丸味を帯び、体部上位で僅かに外屈。付高台、高く肥厚し、ハの字状に開く。轆轤成形。	①軟 ②灰 ③粗、 小石多く混る
258-26 90-26	須恵器 椀	1/2	12.6×7.4×4.9	竈前床面	体部丸味を帯びる。付高台、内湾気味に開く。轆轤成形。作り丁寧。	①酸化、良好 ②浅 黄橙 ③粗砂混る
258-27 90-27	須恵器 椀	完	11.2×5.4×5.5	南東壁下	体部丸く張る、口唇部丸く外傾する。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。作り丁寧。	①酸化、良好 ②浅 黄橙 ③密
258-28 90-28	須恵器 椀	ほぼ完	10.5×8×4.6	中央北床面	体部丸く内湾ぎみに立ち上がる。付高台、薄く端部尖る。内面黒灰を呈し燻し処理。轆轤成形。	①酸化、良好 ②灰 白 ③砂多く混る
258-29 90-29	土師器 内黒椀	1/2	15.6×7.4×6.1	中央北床面	体部丸く脹り、口唇部尖がる。体部外面調整。内面口唇下直線、内面連弁状暗文。高台断面三角内湾する。	①良好 ②浅黄橙 ③密
258-30 90-30	土師器 内黒椀	1/2 高台欠損	13×—×(3.2)	貯蔵穴内	体部丸味をもつ、口唇部水平に外屈。轆轤成形。作り薄く丁寧。	①還元気味、良好 ②灰白 ③密
258-31 91-31	須恵器 椀	1/2 高台欠損	18.5×—×(4.5)	貯蔵穴内 竈前	体部丸味をもち、口唇部は外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白
258-32 91-32	須恵器 椀	体部欠損	—×6.1×(3.1)	埋土	腰部丸味をもつ。付高台、肥厚。轆轤成形。回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石混る
258-33 91-33	土師器 内黒椀	体部欠損	—×9.1×(2.6) 高台高1.8	北東床面	付高台、高く2段の凹凸あり。やや内湾気味に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰褐 ③ 密
258-34 91-34	須恵器 椀	体部欠損	—×13.5×— 高台高5.5	貯蔵穴内	付高台、極めて高く、端部は丸く強く外反。轆轤成形。	①酸化、良好 ②鈍 い黄橙 ③粗砂混る
258-35 91-35	灰釉陶器 皿	1/2	13.2×6.2×3	中央床面	口唇部丸く、わずかに外屈。体部内面のみ施釉。底部回転調整。	①良好 ②灰白 ③ 密
258-36 91-36	灰釉陶器 椀	1/2	15×7.8×5	中央北床面	体部丸味をもち、口唇部丸い。高台端部は丸く内屈する。体部付け掛け施釉。腰部回転調整。底部糸切り後削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
258-37 91-37	灰釉陶器 椀	体部欠損	—×6.8×(2.5)	中央北床面	低く肥厚する高台。内面施釉。底部回転糸切り無調整。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
258-38 91-38	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×7.3×(2.2)	埋土	高台やや肥厚し、稜不明瞭。底部撫で調整。	①良好 ②灰白 ③ 密
258-39 91-39	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×8.1×(3.7)	埋土	見込部凹み無釉。重ね焼痕。高台肥厚し稜不明瞭。体部内外面施釉。底部回転調整。	①良好 ②灰白 ③ 密
258-40 91-40	土師質 甕	1/2 底部欠損	18.8×—×(8.7)	貯蔵穴内	わずかに張る胴部。口縁部は外傾し、口唇部は丸く外屈。胴上位は強い回転調整。轆轤使用の可能性あり。	①良好 ②橙 ③や や粗、小石混る
258-41 91-41	土師質 甕	1/2	21.2×8×17	竈前・南 壁下	張りの少ない胴部から口縁部はくの字状に開く。口縁から胴上位回転撫で、下半は斜位調整。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
259-42 91-42	羽釜	上位1/2	21.8×—×(9) 口径25.2・口縁高 4.8	竈前・床 面散在	口縁部内傾。口唇部は肥厚し、上端平たく外斜する。回転撫で調整。	①酸化、軟 ②橙 ③粗、小石混る
259-43 91-43	羽釜	上位1/2	20.6×—×(9) 口径24.2・口縁高 2.3	竈内	口縁部は外反気味に内傾。口唇部上端は平たく内斜する。回転撫で調整。	①酸化、良好 ②灰 白 ③密、小石混る
259-44 92-44	羽釜	上位1/2	22.5×—×(10) 口径25.6・口縁高 2	竈内	胴部やや脹らみ薄手。口縁部内湾気味に内傾。口唇部上端は段をもち内斜。回転撫で調整。	①酸化気味、良好 ②灰黄 ③粗砂混る
259-45 92-45	羽釜	上位1/2	21×—×(13.5) 口径23.6・口縁高 2	東壁下・ 中央床面	口縁直立。口唇部上端は水平。回転撫で調整。	①酸化、良好 ②鈍 い黄橙 ③粗砂混る
259-46 92-46	羽釜	1/2 底部欠損	20.2×—×(15) 口径23・口縁高 2	竈内	胴上位わずかに張る。口縁部は内傾し、口唇部上端は内斜。胴上半回転撫で、下半は斜位調整。	①酸化、軟 ②鈍い 黄橙 ③粗、砂混る
259-47 92-47	羽釜	1/2 底部欠損	14×—×(16.3) 口径22・口縁高 3	貯蔵穴・ 散在	胴わずかに張る。口唇部厚し丸い。口縁部外反気味に内傾。口唇部上端は内斜。胴上半回転撫で、下半斜位調整。	①酸化、軟 ②鈍い 橙 ③密
259-48 92-48	羽釜	底部	—×6.3×(4.5)	南床面	外面横、斜位調整。内面横撫で。底部「X」印調整。	①酸化、軟 ②灰白 ③密、小石混る
259-49 92-49	瓦 平瓦	小片	厚1.6	中央西床面	凹面布目。	①酸化 ②灰黄 ③ 密
259-50 92-50	瓦 平瓦	小片	厚1.7	貯蔵穴内	凹面布目 縁面取り。	①良好 ②灰 ③粗
259-51 92-51	石	完	13.8×6.5×3.5	埋土	両端打撃痕。	砂岩
259-52	転用砥石		4.5×3.2×1 3.8g	埋土	薬片・3側面使用。	①良好 ②灰白 ③ 密
259-53 92-53	銅錢 皇朝十二錢			北東床面	延喜通宝(907年初鑄)。	
259-54 92-54	鉄器		長38×径0.3	北壁際	棒状製品。 断面円径。	

K 3号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
260-1 92-1	須恵器 杯	完	10.6×4.8×3.9	竈内	体部丸味強い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、良好②灰白 ③粗砂、多く混る
260-2 92-2	須恵器 杯	1/2	12.1×4.3×3.8	竈内	体部丸味をもち口縁部は緩く外反。轆轤成形。見込部轆轤目強い。右回転糸切り。	①酸化気味、軟 ③粗砂、多く混る
260-3 92-3	土師質 杯	体部欠損	—×6×(3.8)	竈内	腰部にくびれ、轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③ 密、白色砂混る
260-4 92-4	灰釉陶器 碗	底部 1/4	—×9.2×(1.7)	埋土	底部回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③ 密
260-5 92-5	土師質 碗	体部欠損	—×7.6×(2.1)	竈内	付高台、やや高目。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③粗、砂多く混る

K 4号住居跡 (Fig. 261~264・PL. 93・94)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.59 × 3.57	N-88.5°-E	東壁やや南寄り	楕円形 (76.0 × 58.0 × 42.0)

K区の南西部に位置し、69~71K 6・7の範囲にある。北西部で2号・3号住居跡と、また東側では7号住居跡と重複している。前2者より旧く、後者より新しい時期の所産である。当跡より2号・3号住居跡が深く構築されているため北西部は消失している。西壁の距離がやや短く、南西部にわずかな歪みが生じている。壁高は約24cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、竈の周辺は比較的固く踏み締まる。床下と考えられる面より大小の穴が検出されているが、それらの間には規則的な関連は見られない。いずれも楕円形を呈しており、大きさは30~70cm前後、深さ10~33cmと様々である。竈は東壁のやや南に寄って付設されており、約50cm程度で楕円形に掘り込まれる。袖部の痕跡は認められず、煙道部は丸く僅かに突出している。燃烧部は幅約84cm・奥行き約50cm、煙道部は長さ約10cmを測る。出土遺物は竈内や竈前面に多く検出されている。灰釉陶器のほか羽釜の出土が目立つ。

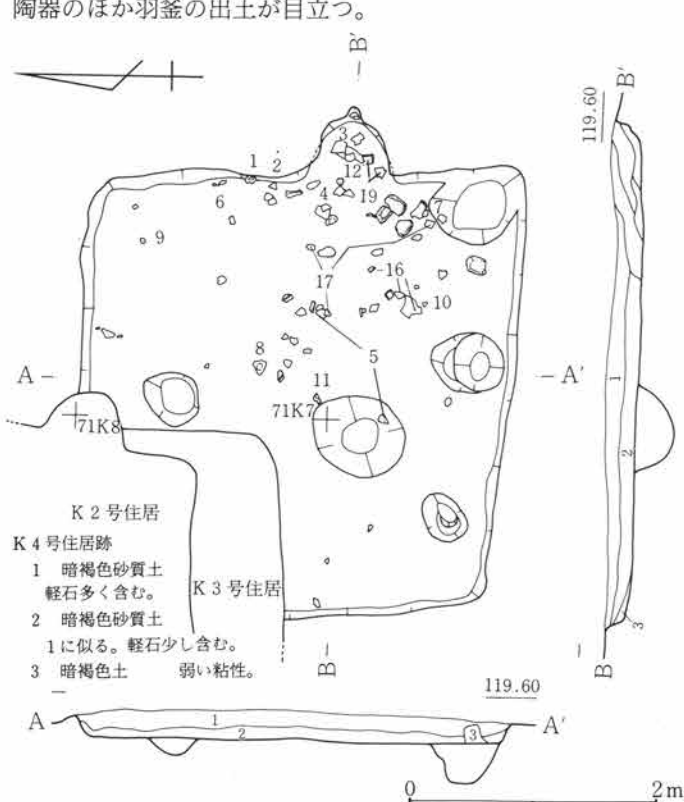


Fig.261 K4号住居跡

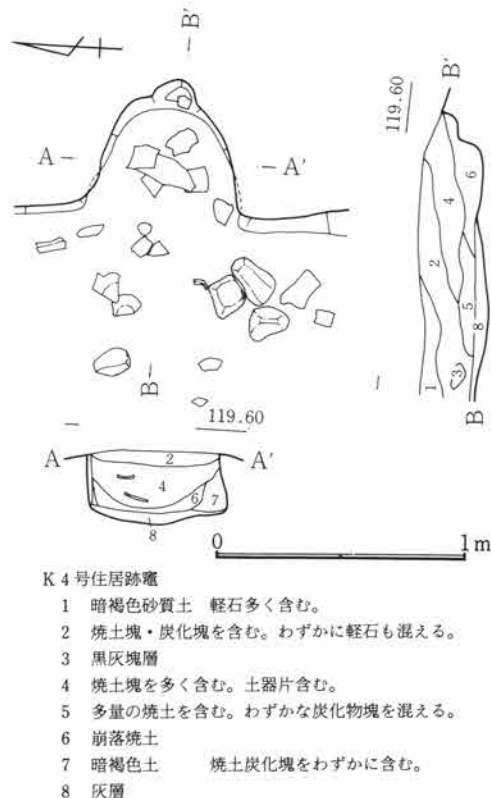


Fig.262 K4号住居跡竈

第3章 K区の遺構と遺物

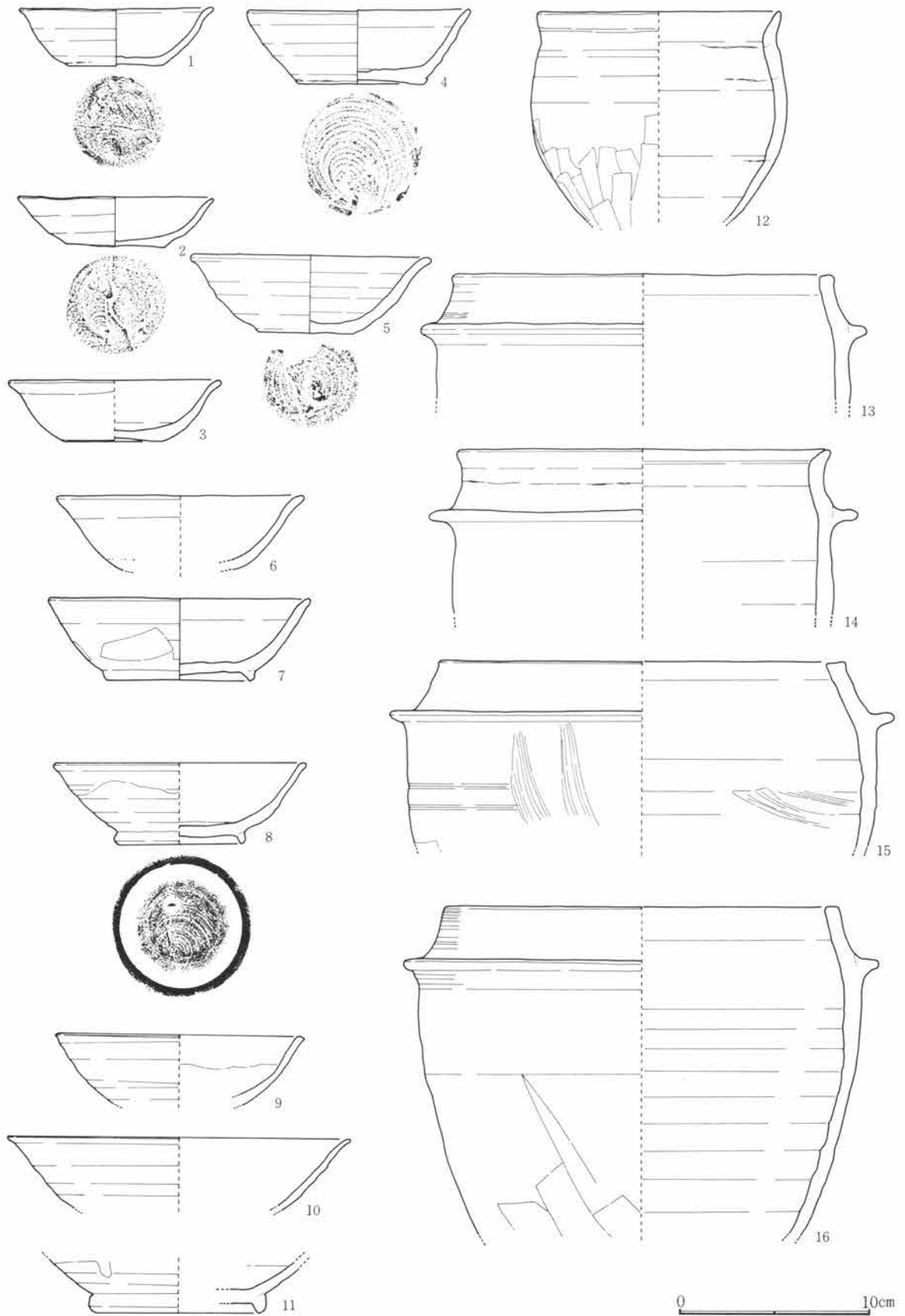


Fig.263 K4号住居跡出土遺物(1)

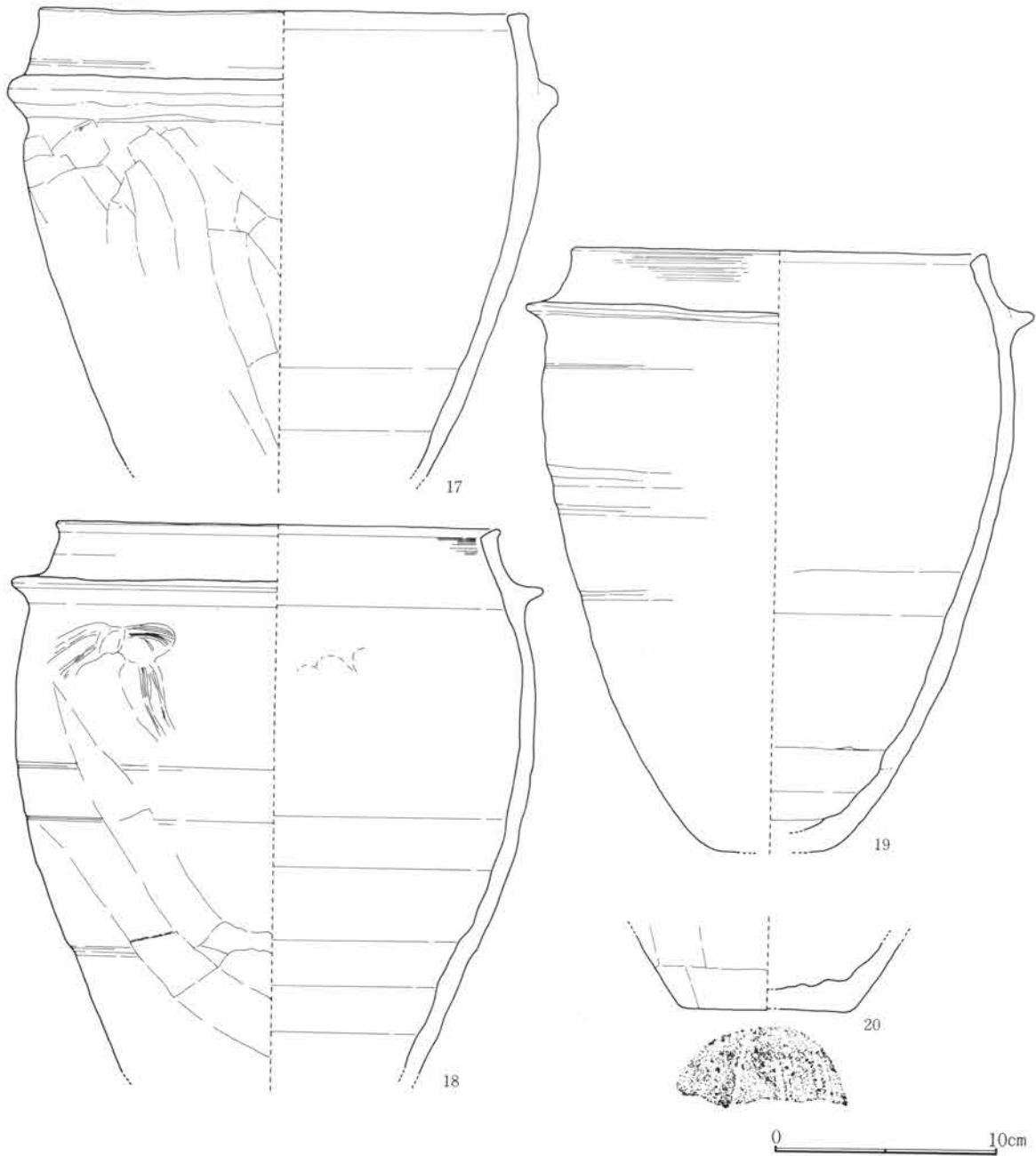


Fig.264 K4号住居跡出土遺物(2)

K 4 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
263-1 93-1	須 惠 器 杯	3/5	10.2×5×3	東壁北下	体部やや脹らみ、口縁部は外反。見込部巻き上げ痕。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③密
263-2 93-2	須 惠 器 杯	完	10.2×5.1×2.6	竈 内	薄手。腰部にくびれをなし、口縁部外傾する。口唇部細く尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③密
263-3 93-3	須 惠 器 杯	1/5	11×5.2×3.2	竈 内	体部丸味をもち、口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味、良好 ②灰白 ③粗砂混る
263-4 93-4	須 惠 器 杯	3/5	11.7×6.8×3.6	竈 内	体部直線的に立ち上がり、口縁部僅かに外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①還元気味、軟 ② 灰黄褐 ③密
263-5 93-5	須 惠 器 杯	1/2	12.6×5.6×4	中央床面	体部やや丸味をもち、口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、軟 ②橙 ③粗、小石多く混る

K 4 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
263-6 93-6	須恵器? 碗	1/4・底 部欠損	13×-×(4)	東壁北下	腰部丸く、口縁部緩く外反。轆轤成形。	①酸化気味、軟 ② 灰白③やや粗砂混る
263-7 93-7	土師質 碗	1/4	13.6×7.8×4.3	貯蔵穴内	底部やや広く、口縁部僅かに外傾。付高台、低く断面台形。体部外面調整残る。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②暗灰黄 ③密、小石混る
263-8 93-8	灰釉陶器 碗	1/4・口 縁微量	13.2×6.8×4.2	中央床面	体部外面轆轤目強い。口唇部丸く僅かに外傾。底部回転糸切り後撫で調整の付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
263-9 94-9	灰釉陶器 碗	1/4・底 部欠損	13.0×-×(3.5)	北東床面	腰部丸く、口唇部上端平たく外屈。刷毛施釉?。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
263-10 94-10	灰釉陶器 碗	1/4・底 部欠損	18×-×(3.8)	中央床面	器内薄く、口唇部は細く外反。全面施釉。	①良好 ②灰白 ③ 緻密(ガラス質)
263-11 94-11	灰釉陶器 瓶	底部1/4	-×9.3×(3)	中央床面	高台肥厚。底部から腰部にかけ回転調整。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
263-12 94-12	土師質 甕	1/4・底 部欠損	12.8×-×(10.8) 最大径13.3	竈左床面	胴部やや張る、口縁部僅かに外傾。口縁部から胴部上半は回転撫で。胴下半は縦調整。	①良好、硬 ②橙 ③やや粗
263-13 94-13	羽 釜	口縁部 1/4	20×-×(6.5) 鍔径23.2・口縁高 2.5	中央床面	口縁部外反して内傾。口唇上端はわずかに内斜。回転撫で調整。	①酸化、軟 ②鈍い 黄橙 ③やや粗
263-14 94-14	羽 釜	上半1/4	19.4×-×(8.5) 鍔径22.4・口縁高3	埋 土	口縁部直立。口唇部は外屈する。	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③密小石混る
263-15 94-15	羽 釜	上半1/4	21.3×-×(9.5) 鍔径26.4・口縁高 2.5	竈 内	胴部丸く張る。口縁部は直線的に内傾。口唇部上端は水平。	①酸化 ②鈍い黄褐 ③密、小石混る
263-16 94-16	羽 釜	1/4・底 部欠損	20.6×-×(16.7) 鍔径24.8・口縁高 2.8	中央南東	胴部張り弱い。口縁部は内傾。口唇上端は水平。口縁から胴上半回転撫で。胴中から縦調整。	①酸化 ②鈍い黄橙 ③粗
264-17 94-17	羽 釜	1/4・底 部欠損	22×-×(20.8) 鍔径24.8・口縁高 2.5	竈周辺床 面	鍔部厚し低い。口縁部僅かに内傾。口唇部上端平たん。鍔下より斜・縦位の調整。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石混る
264-18 94-18	羽 釜	1/4・底 部欠損	20×-×(23.7) 鍔径23.8・口縁高 2.5	竈 内	胴部上半わずかに張る。口縁部は外反気味に内傾。口唇部は外屈し、上端は内斜。回転撫で。弱い縦位の調整。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
264-19 94-19	羽 釜	1/4	18.8×5.4×27 鍔径22.8・口縁高 2.5	竈 内	胴部張り弱い。口縁部は外反気味に内傾。口唇部上端は内斜。胴上半は回転撫で、下半は不明瞭な縦調整。	①還元気味、軟 ② 褐灰 ③やや密
264-20 94-20	羽 釜	底部1/4	-×3.8×(3.3)	竈前床面	底部調整。腰部縦調整・横調整。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石混る

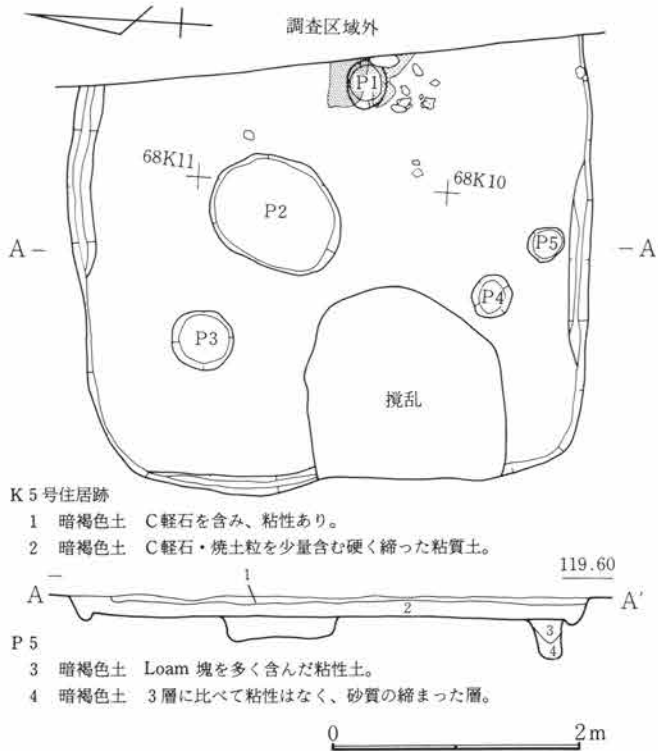


Fig.265 K5号住居跡

K 5 号住居跡 (Fig. 265・266・PL. 95)

K区の南西部に位置し、67~69K 9~11の範囲にある。東側は調査区域外にかかり全体は検出されていない。また西側の一部は土坑状の攪乱によって破壊されている。東側中央部には焼土と灰の分布が見られ、竈は東壁に付設されていたことが推測される。平面形態は隅丸の方形を呈すると考えられる。南北長約4.5m、東西は約3.4mまで確認できた。壁高は約20cmで北・西・南の各壁下には部分的に溝が巡っている。幅約8cm・深さ約7~10cmを測る。柱穴を想定できる穴は認められない。床面は平坦をな

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

すが、総じて軟弱である。床下には土坑及び小穴が検出されている。土坑はほぼ中央にあり、径110×84cm・深さ10cmを測る。このほか小穴が数個検出されているが、いずれも円形を呈し径30~50cm・深さ10~22cmを測る。東側に穿たれた小穴は竈に付随するものと考えられる。出土遺物は比較的少量で竈の周辺に見られる。灰釉陶器・羽口小片のほか当跡に伴うものとは考えられないが、S字状口縁部を有する甕型土器が出土している。

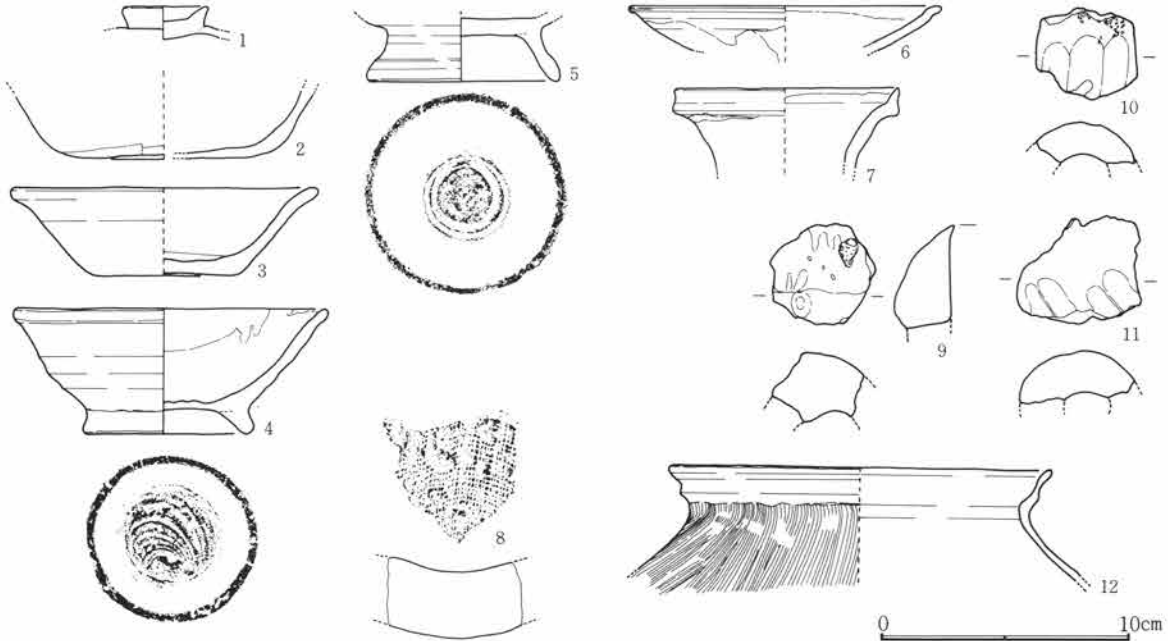


Fig.266 K5号住居跡出土遺物

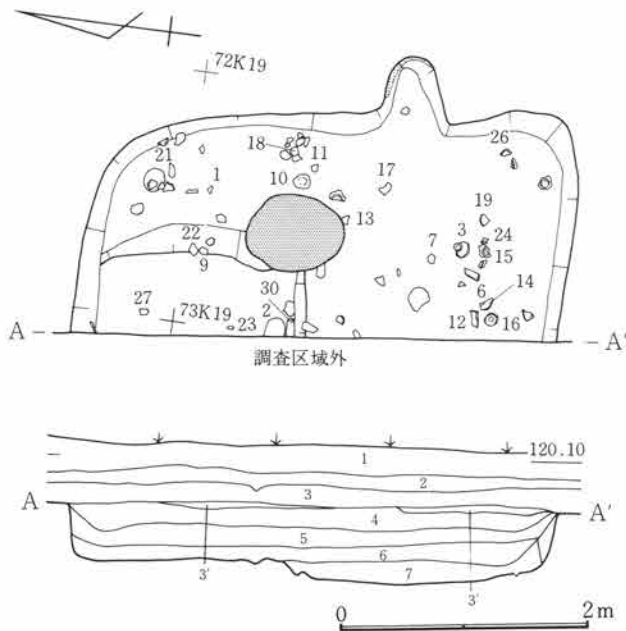
K 5号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
266-1 95-1	須恵器 蓋	摘	摘径3.5・高1.4	埋 土	環状摘。	①良好 ②灰白 ③ 黒色細粒混る
266-2 95-2	須恵器 杯	1/2・口 縁欠損	一×8×(7)	埋 土	腰部丸く、底部薄い。底部回転糸切り後手持ち篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ 密
266-3 95-3	須恵器 杯	1/2	12.4×5.8×3.5	埋 土	体部直線的に立ち上がる。口唇部は丸く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③小 石多く混る
266-4 95-4	須恵器 碗	完	12.7×6.6×4.5	埋 土	体部直線的に立ち上がり、口唇部は丸い。付高台、肥厚しハの字状に開く。内面口縁に煤付着。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
266-5 95-5	土師質 碗	高台部	一×7.7×(3) 高台高 1.8	床 下	付高台。高く端部は肥厚し、ハの字状に開く。接合は篋調整。轆轤成形。	①良好 ②浅黄 ③ 密、僅かに砂混る
266-6 95-6	灰釉陶器 皿	1/2・底 部欠損	12.6×一×(1.9)	埋 土	口唇部丸く外反。体部上半まで回転篋削り。刷毛施釉？。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
266-7 95-7	灰釉陶器 瓶	口縁1/2	9×一×(2.8)	埋 土	頸部外反して立ち上がり、口縁部は直立。口唇部尖る。	①良好 ②灰黄 ③ 緻密
266-8 95-8	瓦 平瓦	小片	厚2.6	埋 土	凹面布目。	①良好 ②緑灰 ③ 粗
266-9 95-9	土製器 籬羽口小片	先端部 小片	長(4)	埋 土	先端部溶解。	
266-10 95-10	土製品 籬羽口小片	先端部 小片	長(3.7)	埋 土	先端部溶解。	
266-11 95-11	土製品 籬羽口小片	先端部 小片	長(4.5)	埋 土	指頭成形痕。	
266-12 95-12	土師器 甕	口縁部 1/2	15.4×一×(4.2)	埋 土	S字状口縁ややだれる。胴部縦位の刷毛目調整。器肉薄い。	①良好 ②褐灰 ③ 粗、黒色粒混る

第3章 K区の遺構と遺物

K 6号住居跡 (Fig. 267~271・PL. 96~98)

K区の西側中央部に位置し、71・72K17~19の範囲にある。西半部は調査区域外にかかり、全体を検出することが出来なかった。南東及び北東部は丸まり平面形は隅丸の方形を呈すると考えられる。南北長は約4mを測り、東西は約1.8mまで確認できた。壁高は約40cmを測りほぼ直立する。床面は平坦をなすが湿気が多く軟弱である。貯蔵穴や壁下の溝・柱穴等の諸施設は検出されていない。住居跡中央部より60×80cmの楕円形の範囲に炭化粒が分布しており、これに混じって人骨と思われる骨片が検出されている。北壁に沿う形で一段の高まりが見られる。床面より約20cm高く、幅約1.6mである。竈は東壁のやや南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれる。袖部や煙道部の作り出しは確認されていない。燃焼部は幅・奥行き約60cmを測る。出土遺物は比較的多く、住居内に散在して見られた。内面に暗文を施す土師器の杯類が多い。前述した炭化粒の分布範囲は当跡に伴うものではなく、これより新しい時期の火葬墓の可能性が考えられる。



K 6号住居跡

- 1 暗褐色土 B軽石を多量に含んだ層、砂質土。
- 2 暗褐色土 B軽石を多量に含んだ層、砂質土。
- 3 暗褐色土 よごれたB軽石層、砂質土。
- 3' 暗褐色土 B軽石層
- 4 暗褐色土 C軽石を多く含み炭化物粒・焼土粒を混える砂質土。
- 5 暗褐色土 4層よりC軽石少なく、炭化物粒・焼土粒を含む砂質土。
- 6 暗褐色土 C軽石を少量含み、やや粘性がある。
- 7 暗褐色土 C軽石をほとんど含まず、汚れた Loam 塊含んだ粘性のある湿潤層。

Fig.267 K6号住居跡

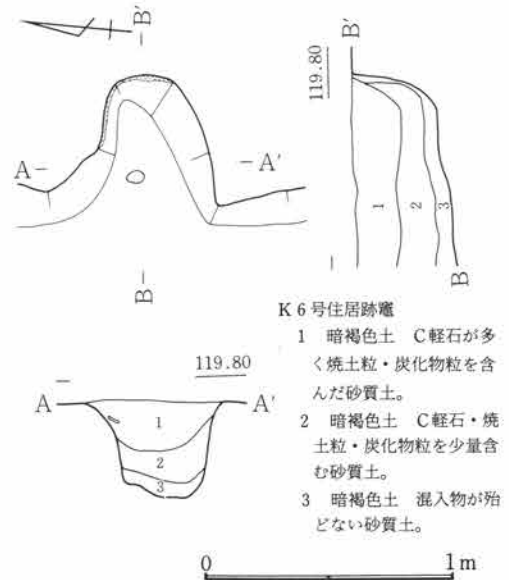


Fig.268 K6号住居跡竈

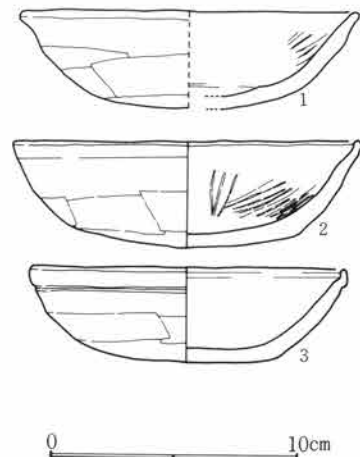


Fig.269 K6号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

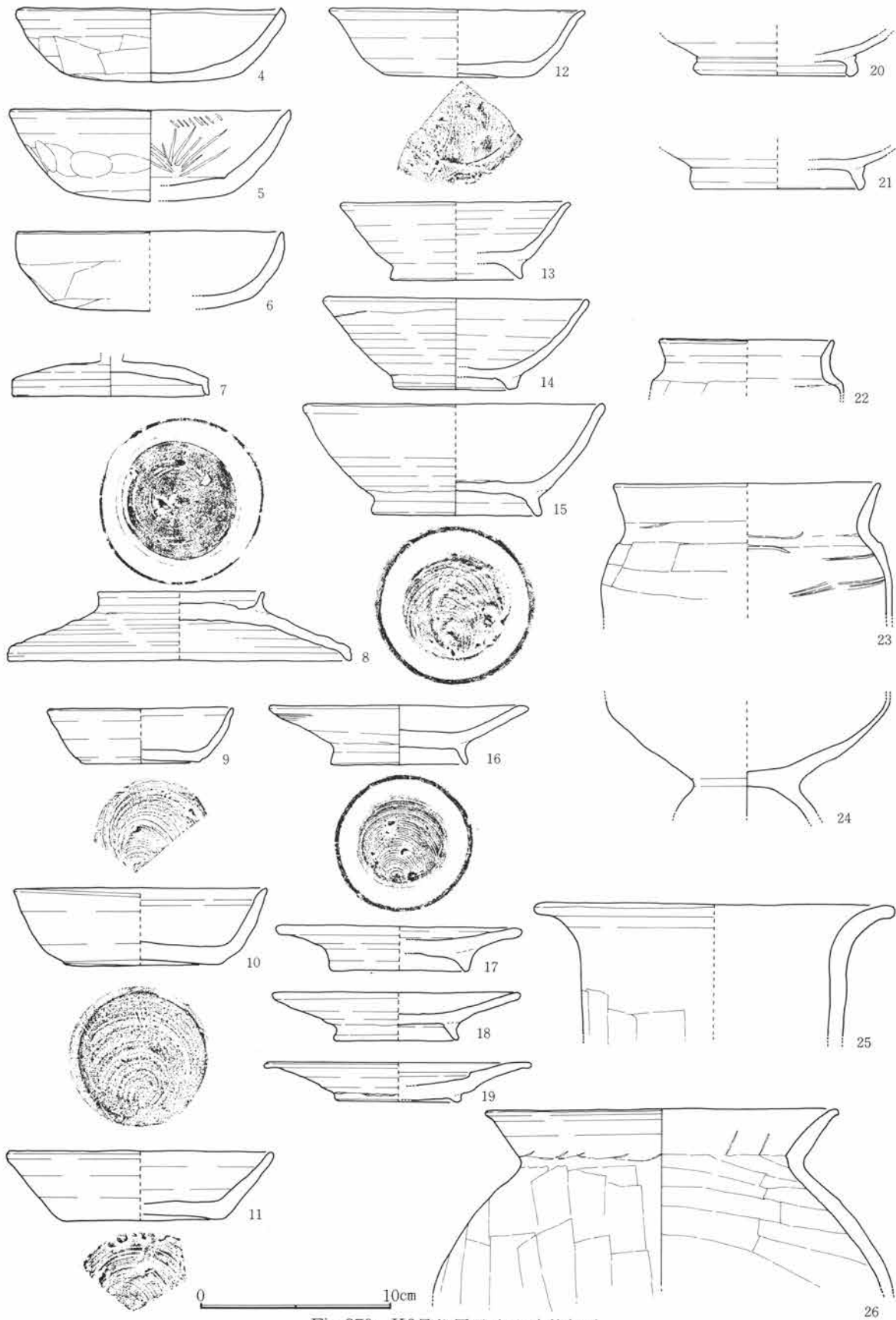


Fig.270 K6号住居跡出土遺物(2)

第3章 K区の遺構と遺物

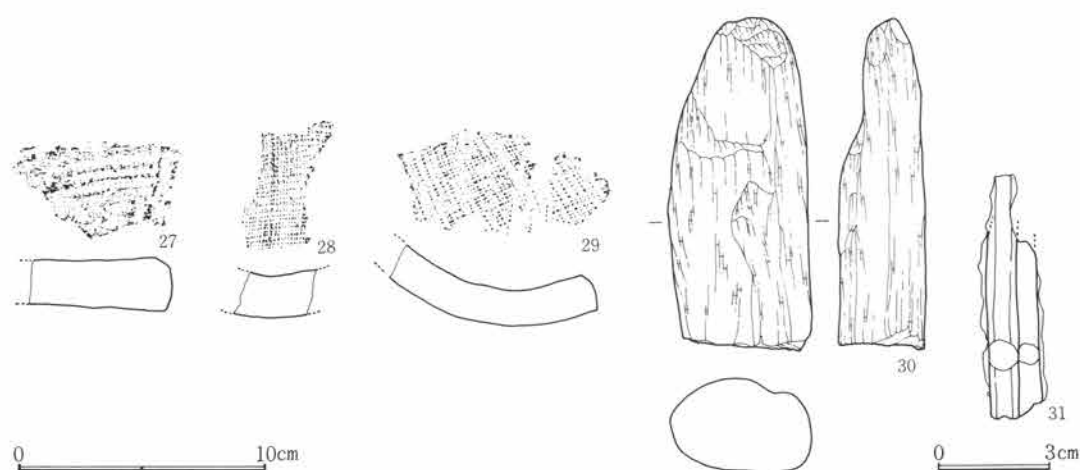


Fig.271 K6号住居跡出土遺物(3)

K 6 号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
269-1 96-1	土 師 器 杯	1/2	13.6×-×3.9	北東部埋 土	口縁僅かに外反し、底部・体部は丸味をおびる。内面放射 状暗文。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
269-2 96-2	土 師 器 杯	1/2	14×-×4.3	中央部床 面	口唇部丸く内屈する。底部やや張り丸底気味。内面放射状 暗文。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
269-3 96-3	土 師 器 杯	完	12.8×-×3.8	南部床面	丸味のある体部、口唇は段をなして短かく直立する。外面 体部横位篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密、少量の砂混る
270-4 96-4	土 師 器 杯	1/2	14×-×3.8	埋 土	口唇端部は尖る。底部丸味。口縁部横撫で、体部横位篋削 り。底部不定方向篋削り。	①良好 ②橙 ③ 密、小石少量混る
270-5 96-5	土 師 器 杯	1/2	14.8×-×4.8	埋 土	口唇端部は尖り直立。底部やや張る。内面見込部段をなし 円板状、体部指押え後篋削り。底部篋削り。内面暗文。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
270-6 96-6	土 師 器 杯	1/4	14×-×4.1	南部床面	体部内湾して口唇部尖り直立。底部やや張る。口縁部横撫 で。体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密、赤褐色粒混る
270-7 96-7	須 恵 器 蓋	1/2・摘 欠損	10.3×-×(1.8)	中央部床 面	天井部平坦。口縁部直に下る。天井部回転篋削り。轆轤成 形。見込部重ね焼痕。	①良好 ②灰 ③密 白色粒混る
270-8 96-8	須 恵 器 盤 ?	1/2	18×8.7×3.6	埋 土	体部外反気味に開き、口縁部は短かく直立する。付高台、 極めて薄く貧弱。蓋か?轆轤成形。体部・底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 粗黒色粒多く混る
270-9 97-9	須 恵 器 杯	1/2	9.7×6.2×2.8	中央部埋 土	口縁部下僅かにくびれをなす。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 密、黒色細粒混る
270-10 97-10	須 恵 器 杯	1/2	13.3×8.2×4	中央部埋 土	体部やや丸味をおび、口唇部は外傾。器肉厚い。轆轤成形。 右回転糸切り後底部周縁回転篋削り。	①良好 ②灰 ③ 粗、長石、黒褐色粒 混る
270-11 97-11	須 恵 器 杯	1/4	14×8.5×3.6	東部埋土	体部直線的に立ち上がる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗
270-12 97-12	須 恵 器 杯	1/4	13.5×8×3.5	南部床面	腰部やや丸味をもち、口縁部外反。轆轤成形。右回転糸切 り。	①良好 ②灰 ③ 密、乳白色胎土混る
270-13 97-13	須 恵 器 碗	1/2	12×7×4	中央部床 面	体部直線的に立ち上がり、口縁部僅かに外反。付高台断面 三角。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ 密、乳白色粒混る
270-14 97-14	須 恵 器 碗	1/2	14×6.6×4.7	南部床面	体部内湾して立ち上がる。付高台、断面台形。轆轤成形。 右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、小石混る
270-15 97-15	須 恵 器 碗	1/2	16×8×5.7	南部床面	体部内湾気味に立ち上がり、口唇部丸い。付高台、端部丸 くハの字状に開く。見込部「一」篋描き。轆轤成形。右回転 糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
270-16 97-16	須 恵 器 皿	1/2	13.6×7.2×3	南部床面	体部直線的に開き、口唇部は外へ延びる。付高台、ハの字 状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗、黒色鉱物混る
270-17 97-17	須 恵 器 皿	1/2	12.8×7.2×2.3	東部埋土	体部外反して水平に近く開く。口唇部は水平。付高台、断 面三角。全体に肥厚す。	①良好 ②灰 ③ 密、白色粒混る
270-18 97-18	須 恵 器 皿	1/4	15×6.6×2.5	埋 土	体部直線的に開き、口唇部丸い。付高台、ハの字状に開く。 見込部に重ね焼痕。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、黒色粒混る
270-19 97-19	灰 釉 陶 器 段 皿	1/4	14×7.6×2	南部床面	体部外反して開き、口唇部丸く水平。付高台低い。内面全 体施釉。腰部・底部回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③ やや粗

K 6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
270-20 97-20	灰釉陶器 椀	底部 $\frac{1}{4}$	—×8.5×(2.2)	埋 土	付高台、外面に段をもち、内湾する。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
270-21 97-21	灰釉陶器 椀	底部 $\frac{1}{4}$	—×9×(2)	北東壁際	付高台、垂直に下り先端部は内湾する。内面体部施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
270-22 97-22	土 師 器 甕	口縁部 $\frac{1}{4}$	9.2×—×(2.7)	床 下	肩部短かく張る。胴部器肉薄い。口縁部直立し上半は外傾する。口縁部横撫で。胴部横篔削り。	①良好 ②橙 ③密、細砂混る
270-23 97-23	土 師 器 甕	上半部 $\frac{1}{4}$	13.9×—×(7)	埋 土	肩部僅かに張り、小さな段をなして、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部横撫で。胴部上半横篔削り。	①良好 ②橙 ③やや粗細砂混る
270-24 97-24	土 師 器 付 甕	上半部 部欠損	—×—×(6) 台部基径5.5	南部床面	胴部強く張る。台部内湾する。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗、砂混る
270-25 97-25	土 師 器 甕	上半部 $\frac{1}{4}$	18.8×—×(6.7)	埋 土	胴部直線的で張りなし。口縁部は肥厚、強く外反し端部は水平になる。口縁部横撫で、胴部縦篔削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗、小石多く混る
271-26 97-26	土 師 器 甕	上半部 $\frac{1}{4}$	18.3×—×(9) 最大径胴部24	埋 土	丸く強く張った胴部。口縁部肥厚し外傾。口唇部は細く外屈。胴部縦篔削り。内面横篔撫で。口縁部横撫で。	①良好 ②明赤褐 ③粗、小石多く混る
271-27 98-27	瓦 平 瓦	小 片	厚2	北部床面	凹面布目。側面取り。	①良好 ②灰 ③やや粗
271-28 98-28	瓦 平 瓦	小 片	厚1.6	埋 土	凹面布目。	①良好 ②灰白 ③やや粗
271-29 98-29	瓦 平 瓦		厚1.4	埋 土	凹面布目。	①良好 ②灰 ③やや粗
271-30 98-30	石	片端欠損	長(13)幅5.5厚3.6 369.9g	埋 土	片端打撃痕。	雲母石英片岩
271-31 98-31	鉄 製 品 不 明		長(6.5)(4.1) 径0.7×0.5	埋 土	棒状2本が密着。	

K 7号住居跡 (Fig. 272~275・PL. 98・99)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形 張り出し2ヶ所	5.24 × 4.36	N— 96° —E	東壁やや南寄り	

K区の南西部に位置し、68~70K 6~8の範囲にある。西側は4号住居跡と重複しており、これよりも古い時期の所産である。平面形はいわゆる張り出しをもつ形態であり、張り出し部は北壁の西寄りと南西の隅の2箇所が突出するもので、特異な形である。壁高は約44cmを測る。東・北・西の各壁下には部分的に溝が検出されている。約18cm・深さ約6cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、竈前面は比較的固く踏み締まるが中央部分をはじめ全体に軟弱である。柱穴は検出されていない。住居跡の中央部に灰・焼土粒が混じりあった層が堆積する平面楕円形の落ち込みが検出されている。径80×50cm・深さ約22cmを測る。底面及び側壁は焼土化の痕跡がなく、また性格を窺い知れるような施設や出土遺物も見られなかった。張り出し部に関しては、北西のものは北壁より約90cm突出し幅約2.1mを測る。また南西のものは南壁と西壁の双方を突出させてあり南壁より約80cm、西壁より約70cm張り出す。東西約2.15m・南北約1.8mを測る。両者とも住居本体の床面との高低差もなく、変化は認められなかった。竈は東壁のやや南寄りに付設され、長楕円形に掘り込まれる。袖部や煙道部などの施設は検出されなかった。燃烧部は幅約50cm・奥行き約60cmを測る。出土遺物は散在しているが、鉄器・羽口・小形砥石などが見られる。

第3章 K区の遺構と遺物

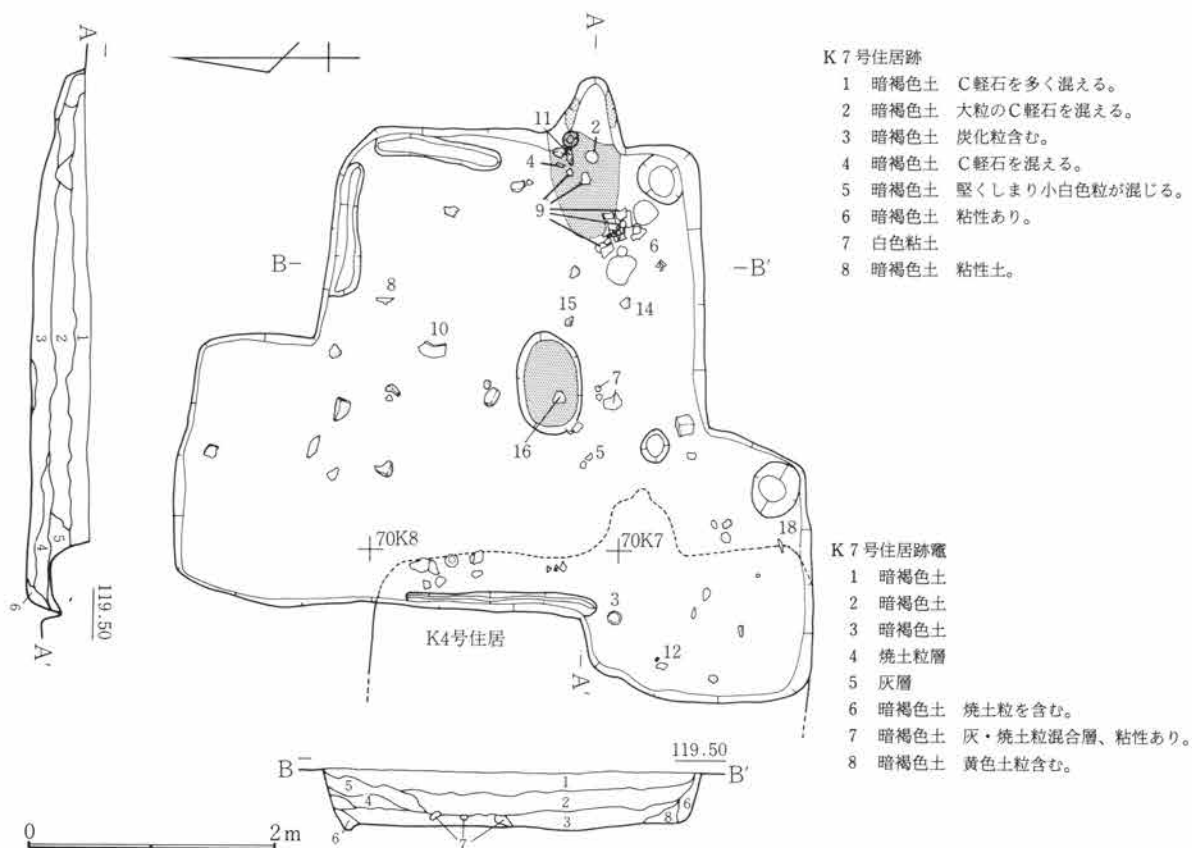


Fig.272 K7号住居跡

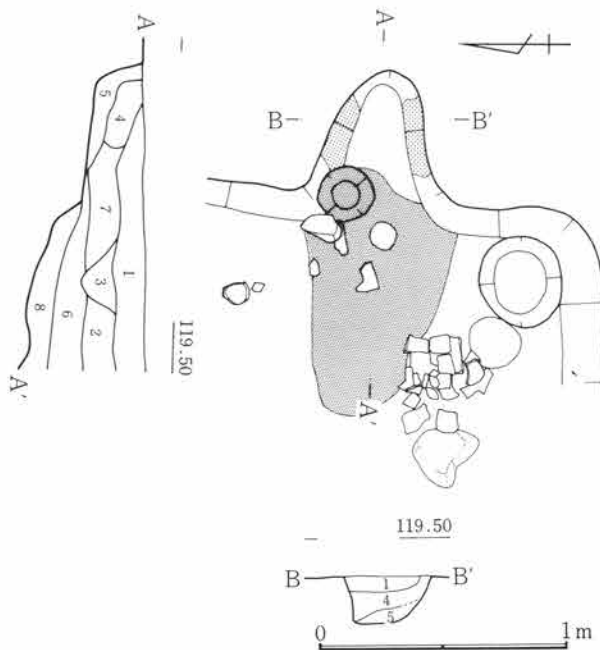


Fig.273 K7号住居跡竈

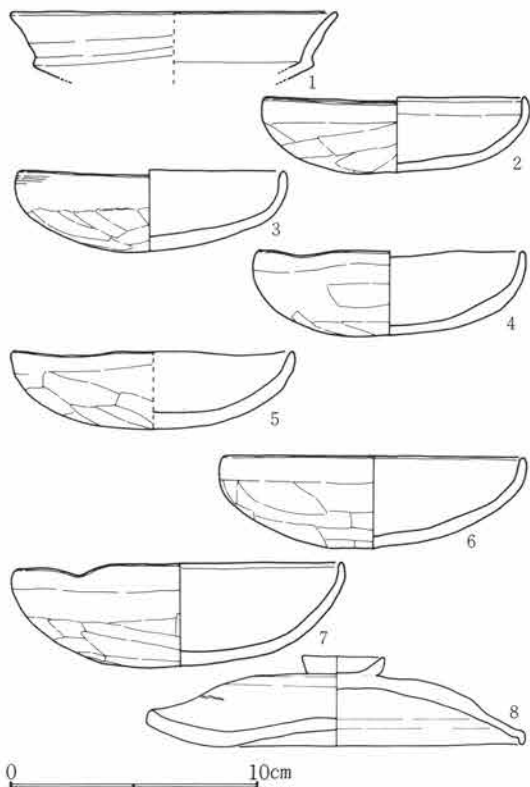


Fig.274 K7号住居跡出土遺物

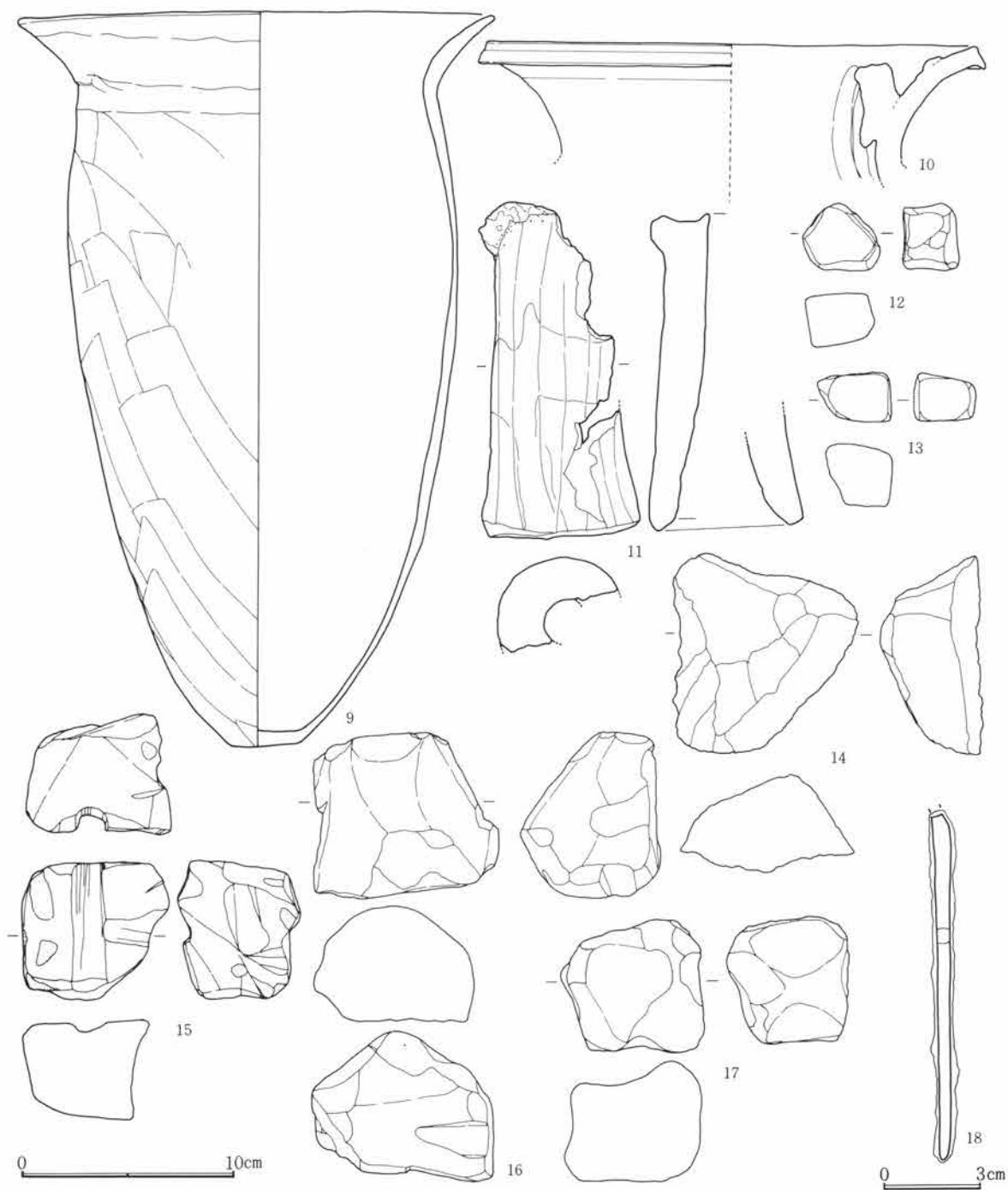


Fig. 275 K7号住居跡出土遺物(2)

K 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
274-1 98-1	土 師 器 杯	1/4・底 部欠損	13.1×-×(2.8) 口径高1.5	埋 土	受け部稜をなし、口縁部中やや脹らみをもち、外反して立ち上がる。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
274-2 98-2	土 師 器 杯	完	10.6×-×3	竈 内	内湾気味の体部から口縁部は僅かに内傾して立つ。口縁部横撫で、体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
274-3 99-3	土 師 器 杯	完	10.6×-×3.1	埋 土	口縁部直立し、底部やや張り出す。口縁部横撫で、体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂多く混る。
274-4 99-4	土 師 器 杯	1/2	10.5×-×3.4	竈内埋土	体部・底部丸く。口縁部内湾気味。口縁部横撫で、体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密砂混る

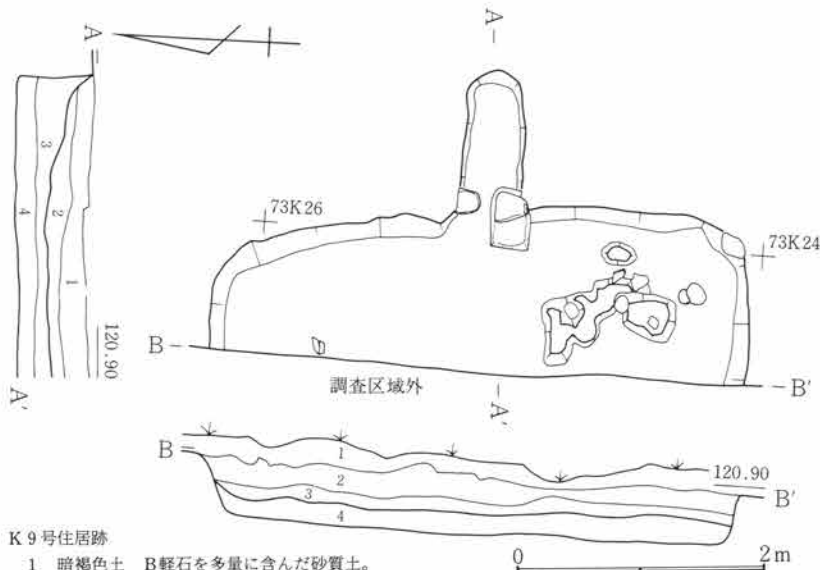
第3章 K区の遺構と遺物

K 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
274-5 99-5	土師器 杯	1/4	11.4×-×3.1	中央部床 面	全体に肥厚。内湾して開き気味に立ち上がる。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗、砂混る
274-6 99-6	土師器 杯	完	12.3×-×3.7	南東部床 面	口縁部やや内湾気味に直立。底部僅かに張り出す。内面凹凸顕著。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗、砂多く混る
274-7 99-7	土師器 杯	1/4	13.3×-×4.1	中央部床 面	体部・底部丸く、口唇部は細く直立する。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗砂混る
274-8 99-8	須恵器 蓋	1/4	口径15・高3.5 摘径3.3・摘高0.7	北部埋土	天井部やや丸味をおび、口縁は直線的に開き端部は短かく直に折れる。環状摘。天井部回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや密
275-9 99-9	土師器 甕	完	22.3×3.1×34.1	竈内	胴部張り弱く長胴を呈す。口縁部は外反気味に開き口唇部は細る。口縁部横撫で。胴部斜・縦方向の篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗
275-10 99-10	須恵器 甕	口縁部 1/4	22.9×-×5.2	中央部埋 土	口縁部外反して開き、口唇部は鋭く外屈して、上端は外斜。内面に焼成時の窯壁が付着。	①良好 ②オリーブ 黒 ③密、黒色粒混
275-11 99-11	土製品 籬羽口	1/2	長15.5・先端孔2.2 基孔径6	竈内	先端部溶解縦篋削り。	
275-12 99-12	石製品 砥石		3.4×2.6×2.8 37.8g	西部床 面	多面使用。	流紋岩
275-13 99-13	石製品 砥石		2.3×3.4×2.9 29.2g	埋土	多面使用。	流紋岩
275-14 99-14	石製品 砥石		11.2×4.8×4.5 240g	南部床 面	多面使用。	輝石安山岩(粗粒)
275-15 99-15	石製品 砥石		6.4×6.8×4.6 210g	中央部床 面	多面使用・溝状研磨痕。	輝石安山岩(粗粒)
275-16 99-16	石製品 砥石		7.7×8.7×6.7 380g	中央部床 面	多面使用・溝状研磨痕。	輝石安山岩(粗粒)
275-17 99-17	石製品 砥石		6.2×6.2×5.6	埋土	多面使用。	輝石安山岩(粗粒)
275-18 99-18	鉄製品 角釘		10.7×0.4×	南部床 面	頂部欠損。	

K 9号住居跡 (Fig. 276・277・PL. 100)

K区の西縁中央部に位置し、72・73K24～26の範囲にある。西側の殆どは調査区域外に入り検出できた範囲は東側の僅かな範囲である。また北側は10号・52号住居跡と重複しているが、これらより新しい時期の所産である。全体の形態は窺えないが、やや隅丸の方形を呈すると考えられる。南北長は約4.65m・東西は1.3



K 9号住居跡

- 1 暗褐色土 B軽石を多量に含んだ砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化物粒・焼土粒を多く含む砂質土。
- 3 暗褐色土 C軽石少量、砂質土・砂岩質塊を多量に含む。
- 4 暗褐色土 C軽石少量、砂質で締まりあり。

Fig.276 K9号住居跡

mまで検出できた。壁高は約42cmを測る。床面は平坦をなすが湿気が多く総じて軟弱である。南東隅に不定形の落ち込みが検出されているが貯蔵穴として通常の体をなしていない。竈は東壁の中央部に付設されているが、煙道部と考えられる部分が長く張り出し燃焼部にあたる部分は不明瞭である。住居の壁に接して左右に凝灰岩質の用材が埋設されているが、これは本来燃焼部と煙道部との境に置かれるもので、このことからすれば

燃焼部は住居内にあったと考えられる。煙道部は長さ約1.2m・幅約50cmを測る。出土遺物は少ないが金銅製の丸軛が検出されている。

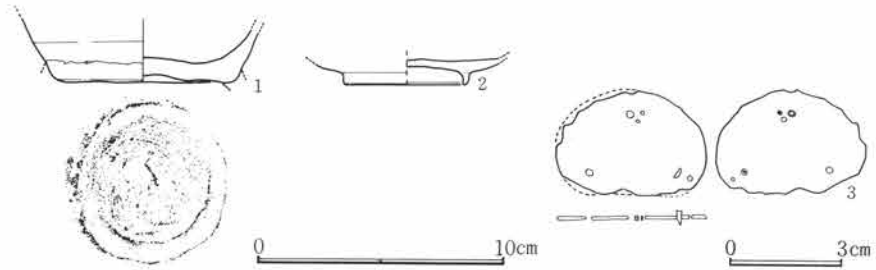


Fig.277 K9号住居跡出土遺物

K 9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
277-1 100-1	須恵器 椀	体部高 台欠損	—×—×(2.5)	埋 土	底部肥厚し、体部直線的。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②鈍い橙 ③密、金雲母?混る
277-2 100-2	灰釉陶器 皿	体部欠 損	—×5×(1.1)	埋 土	器肉薄い。高台細く内湾する。底部中心に回転糸切り痕。作り雑。	①良好 ②灰白 ③やや粗
277-3 100-3	金銅製品 丸軛		長4幅2.7厚0.1	埋 土	片面塗金。鋸及び鋸孔あり。	

K10号住居跡 (Fig. 278~281・PL. 100・101)

K区の西縁中央部やや北寄りに位置し、71~73K25~27の範囲にある。9号・52号・53号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は、9号住居跡より旧く他より新しい時期の所産である。住居跡の西側は調査区域外にかかり全体を検出できなかった。また9号住居跡との切り合いで南西部は消失している。平面形は方形を呈すと考えられ、南北長3.6m・東西は2.8mまで検出した。壁高は約44cmを測る。床面は緩い凹凸が見られ、竈の前面を除いては踏み締まりが弱い。貯蔵穴や壁下の溝などの諸施設は検出されなかった。竈は東壁やや南寄りに付設され、長い楕円形に掘り込まれている。袖部は明瞭な形では検出されていないが、東壁

から約30cm離れて長さ約35cmの川原石が2個並列するように埋設されており、袖部の先端に置かれたものと考えられる。これより若干竈内に入り込んで、袖材より小さ目な川原石が並列して埋設されており、この石に囲まれた部分の下面が著しく焼土化していた。この部分が火床であり、並立する石は支脚材として機能していたと考えられ

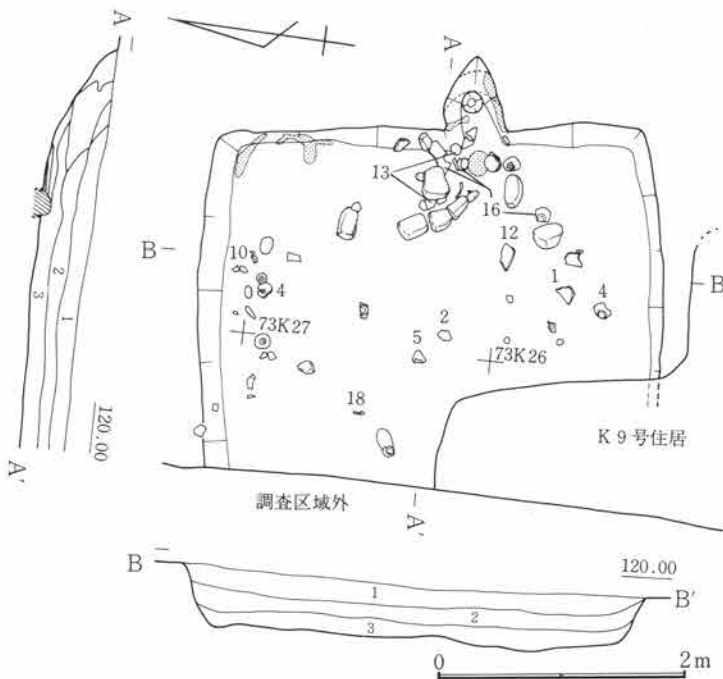


Fig.278 K10号住居跡

K10号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・土器片を多く混える粘性土。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を少量含む粘性土。
- 3 黄褐色土 C軽石を僅かに含む粘性土。

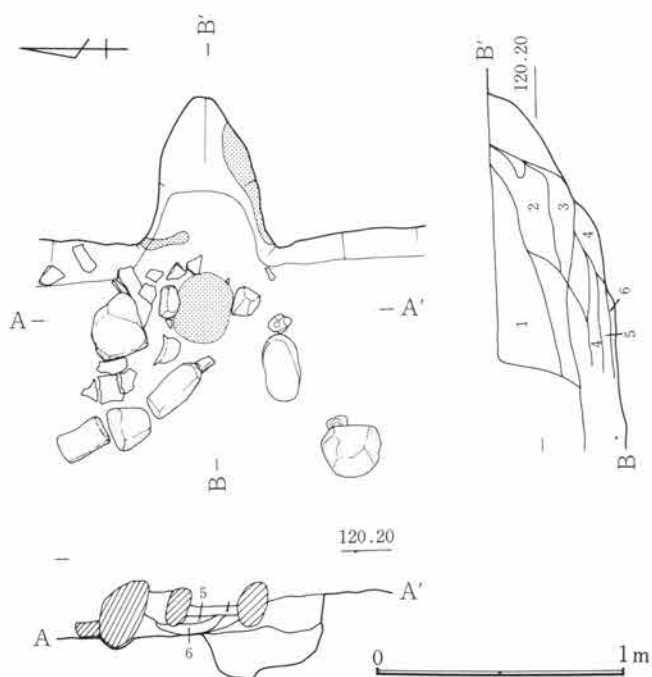


Fig.279 K10号住居跡竈

る。以上のことから、竈は住居内に袖部を張り出す形態をもっていたと考えられる。袖石間の内法約1mを測り、奥行き約1.2mである。また燃焼部に埋置された支脚間は30cmを測る。遺物出土状況は散在的であるが、緑釉陶器・鉄鏃などが検出されている。

K10号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・0.2~0.5mm粘土混り崩落焼土を多く含む、砂質土。
- 2 暗褐色土 崩落焼土塊を多量に含む。
- 3 暗褐色土 崩落焼土塊・黒灰を多量に含む粘性土。
- 4 暗褐色土 C軽石・崩落焼土粒・塊を多量に含む。
- 5 黒灰 黒灰を多く含む締めまりがない。
- 6 竈火床面

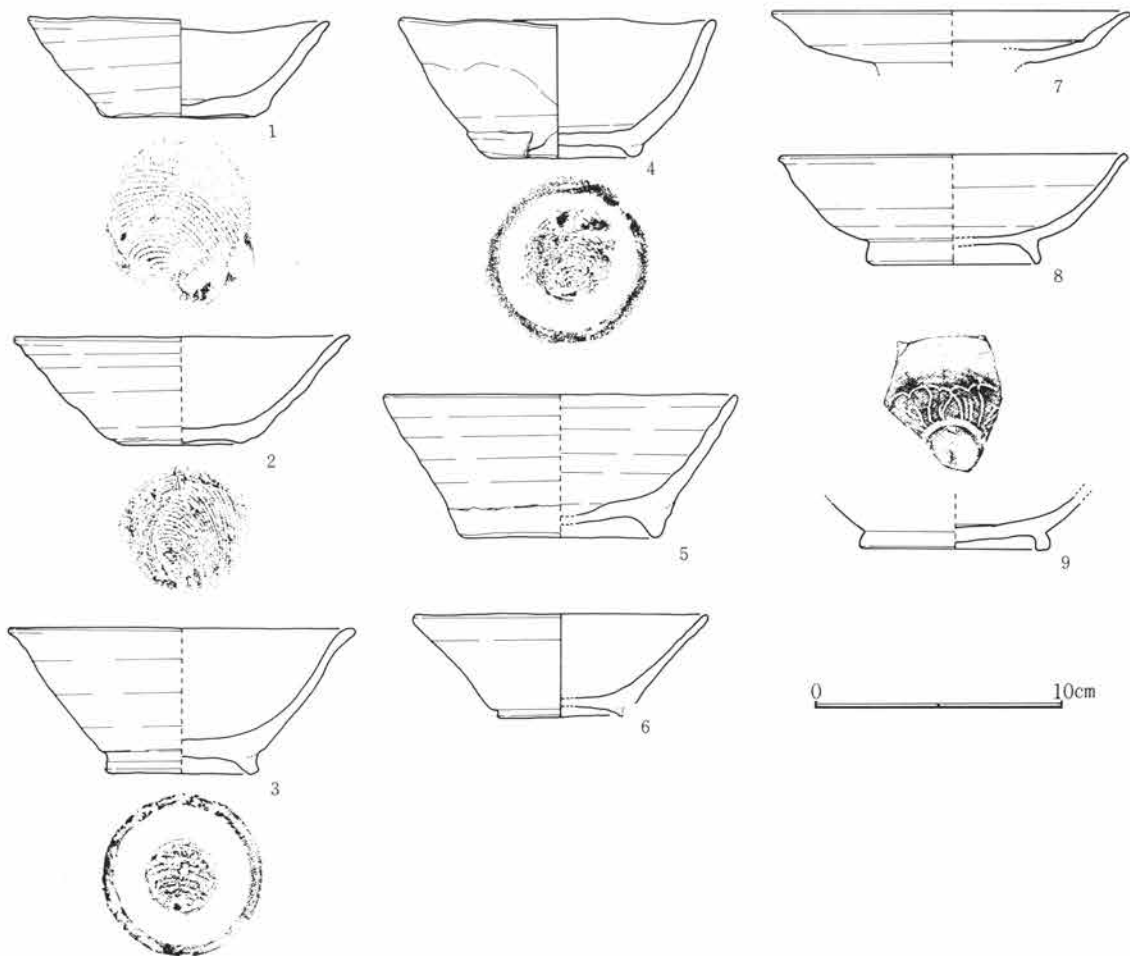


Fig.280 K10号住居跡出土遺物(1)

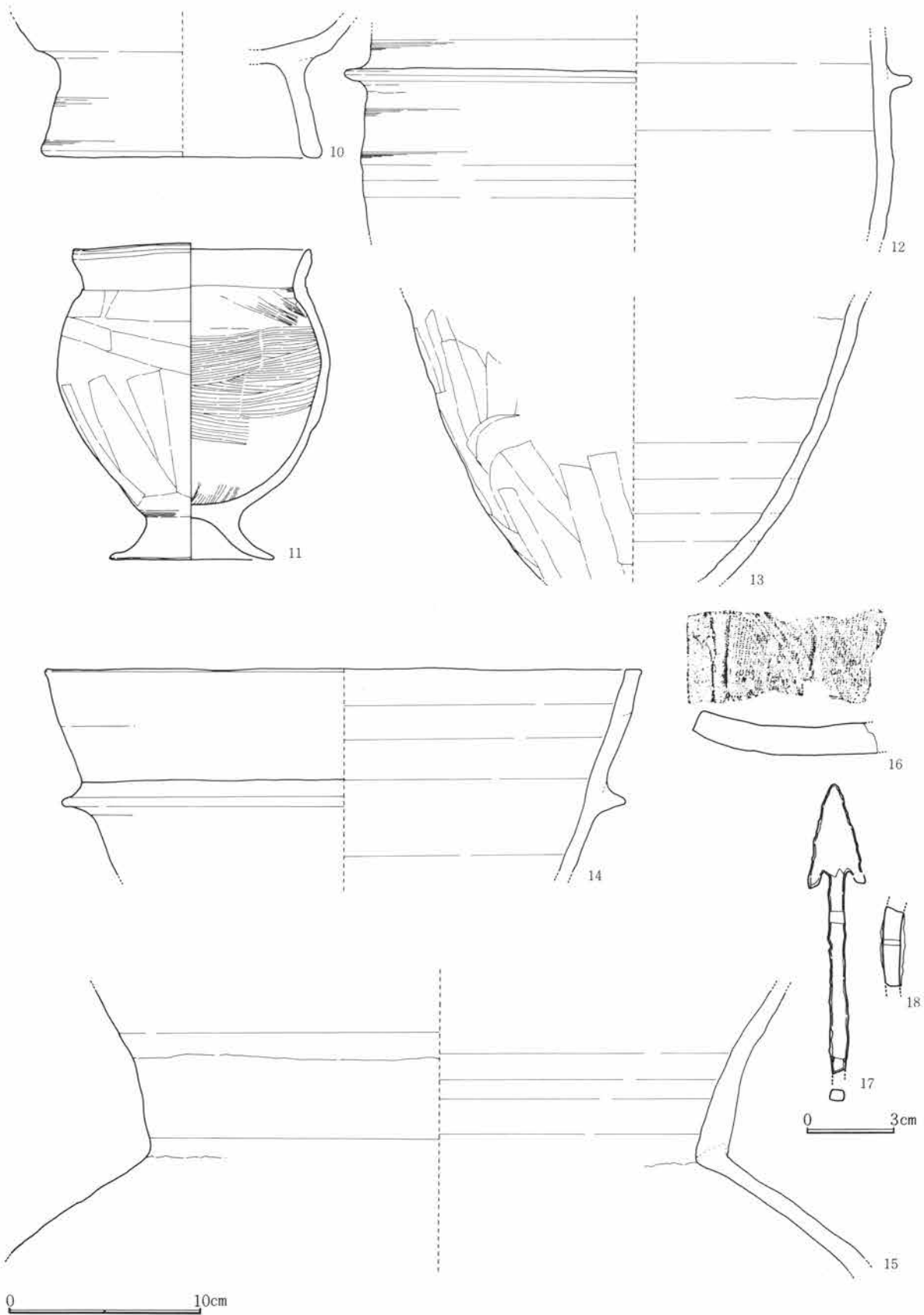


Fig.281 K10号住居跡出土遺物(2)

K10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
280-1 101-1	須 恵 器 杯	完	12.2×6×4	床下埋土	体部直線的に立ち上がり、口唇部細く、僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 褐 ③粗、小石混る
280-2 101-2	須 恵 器 杯	1/5	13.5×4.8×4.3	床下埋土	体部大きく外傾し、口唇部細く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②橙 ③や や粗
280-3 101-3	須 恵 器 碗	口縁部 1/4	14×6×5.8	埋 土	体部やや内湾。口唇部丸く肥厚し、外反。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③やや密
280-4 101-4	須 恵 器 碗	ほぼ完	12.8×6×5.6	南部床面	体部内湾し上半はわずかに外傾。口唇部丸い。付高台、低く端部丸い。紐状縫ぎ目。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①酸化気味 ②鈍い 褐 ③粗
280-5 101-5	須 恵 器 碗	1/5	14.2×7.8×5.7	埋 土	体部直線的に立ち上がる。付高台、端部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰黄 ③ 粗、砂混る
280-6 101-6	須 恵 器 碗	1/2	12×5×4.1	埋 土	体部わずかに外反して立ち上がる。器肉薄い。付高台、低く貧弱。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石混る
280-7 101-7	緑 釉 陶 器 段 皿	小片	14.5×-×(2.1)	埋 土	体部下半は内湾して平らに開き、上半は外反する。内面凹線状の弱い段。見込部横磨き、釉は薄く素地すける。	①良好 ②灰 ③密
280-8 101-8	灰 釉 陶 器 碗	1/4	14×7×4.4	竈 内	腰部やや丸味をもち、口唇部外反する。付高台、ハの字状に開く。刷毛施釉？	①良好 ②灰白 ③ 密
280-9 101-9	緑 釉 陶 器 碗	底部1/4	-×7.7×(2)	埋 土	高台内湾して立つ。見込部陰刻花纹。内外面磨き。	①良好 ②灰 ③密
281-10 101-10	須 恵 器 台付鉢	台部1/4	-×14×(6.9) 台高4.8	北部埋土	腰部強く張る。台部高く直線的でやや開く。端部丸味あり。轆轤成形？	①酸化気味 ②鈍い 黄橙 ③やや密
281-11 101-11	土 師 器 台付甕	1/5	12.3×8.4×16.3 最大径14・台高2.1	竈 内	最大径は胴上位丸く張る。口縁部外傾し、端部は短かく直立。脚部外反し開く。胴上半横下半縦篋削り、内面横磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③粗、石混る
281-12 101-12	甕	胴部1/5	-×-×(10) 鏝径28.2	床下埋土	胴部張りなく、口縁部直立気味。鏝は水平に密出。回転撫で調整。	①良好 ②明褐色 ③やや粗、小石混る
281-13 101-13	羽 釜	胴部下 半1/5	-×-×(14.5) 現最大径24	竈 内	胴部内湾気味。縦篋削り。内面回転撫で。紐接合痕残る。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗、砂混る
281-14 101-14	甕	口縁部 1/4	31×-×(10) 鏝径29・口縁高6	北部埋土	胴部から口縁部は直線的に外傾。口唇上端部水平。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、砂多い
218-15 101-15	須 恵 器 甕	頸部～ 肩部		掘り方	内面頸部寄に接合根を消す為の篋撫であり。内面肩部に当目、表面肩部にたたき目後篋撫で。	①良好 ②灰 ③や や粗
281-16 101-16	瓦 平瓦			埋 土	凹面布目。	①良好 ②灰 ③ やや粗
281-17 101-17	鉄 製 品 鉢	茎部先 端欠損	長(10) 身幅2 茎 幅0.5×0.4 茎0.5	埋 土	平根式。	
281-18 101-18	鉄 製 品 不 明		長(2.5) 幅0.6 厚 0.2	埋 土	ゆるく湾曲。	

K16号住居跡 (Fig. 282・283・PL. 102)

K区の東縁中央部に位置し、47K15・16の範囲にある。東側は調査区域外に延び、検出は出来なかった。また、西側で19号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。前述したように、東半部

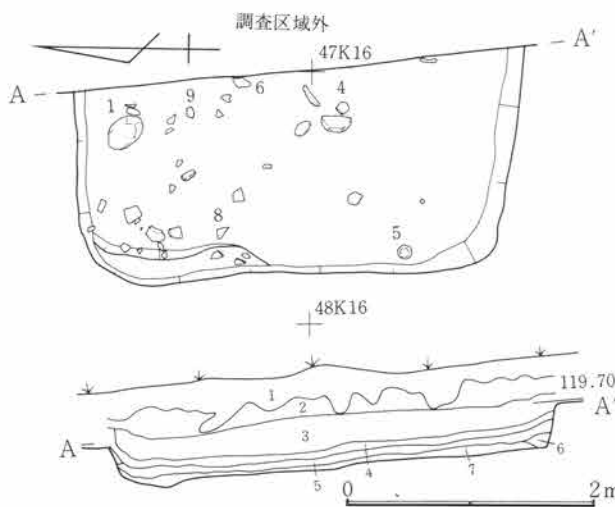


Fig.282 K16号住居跡

は未検出のため全体の形状は不明であるが隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は、南北長約3.5mを測り、東西は約1.6mまで確認できた。壁高は約30cmを測り、直線的に立ち上がる。床面は緩い凹凸をなすが総じて踏み締まりは良好である。壁下の溝などの諸施設は検出されていない。出土遺物は少量であるが羽口・砥石類が検出されている。

K16号住居跡

- 1 耕作土 砂質。
- 2 褐色土 締まり無く大粒C軽石を多く混える砂質土。
- 3 褐色土 大粒C軽石を多く混える。
- 4 暗褐色土 小粒C軽石を多く混える。
- 5 暗褐色土 C軽石を少量混える。
- 6 灰褐色土 砂質
- 7 明灰褐色土 砂質

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

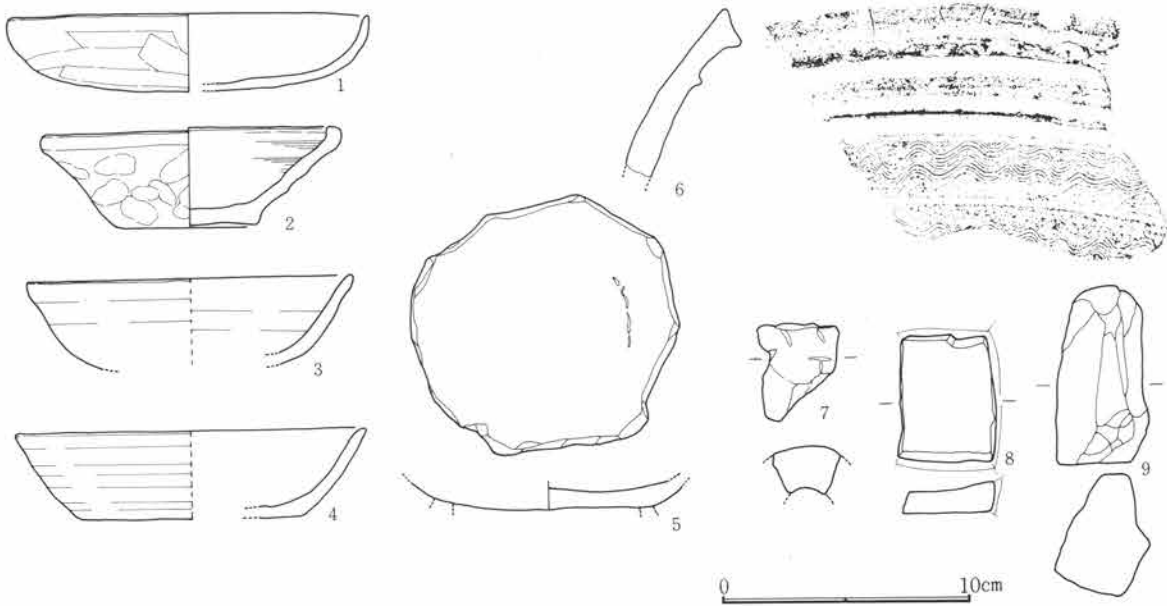


Fig.283 K16号住居跡出土遺物

K16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
283-1 102-1	土 師 器 杯	1/2	14.5×-×3.1	北部床面	扁平な体部。口唇部僅かに外傾。体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗
283-2 102-2	土 師 器 杯	完	12×5.7×3.8	埋 土	平底。体部直線的に外傾。口唇部肥厚し折れて直立する。体部指頭痕。底部手持篋削り。内面横撫で。	①良好 ②明褐 ③密
283-3 102-3	須 恵 器 碗	1/2・底 部欠損	13×-×(3.5)	埋 土	腰部丸く、口唇部僅かに外反。轆轤成形。	①良好 ②鈍い褐 ③密
283-4 102-4	須 恵 器 杯	1/2	14×8.8×3.5	東部埋土	体部やや内湾し、口唇部は僅かに外反気味。轆轤成形。底部回転篋切り。	①良好 ②オリーブ 灰 ③密、白色粒混
283-5 102-5	須 恵 器 杯	体部高 台欠損	-×-×(1)	南西部埋 土	体部は故意に欠く。底部右回転篋削り。	①良好 ②青灰 ③粗、黒色粒多く混る
283-6 102-6	須 恵 器 壺	口縁部 小片		中央部床 面	口縁部中位、口唇部下に凸線巡る。口縁部に波状文、11条1組2帯。	①良好 ②灰白 ③粗、白色粒多く混
283-7 102-7	土 製 品 鞆 羽 口	小 片	長(3.8)	埋 土		
283-8 102-8	須 恵 器 転用砥石		51×3.9×1.1 32.5g	西部埋土	3側面使用摺片転用。	①良好 ②灰 ③密
283-9 102-9	石 製 品 砥 石		7×3.7×4.8 127.4g	中央部床 面	2面使用。	流紋岩

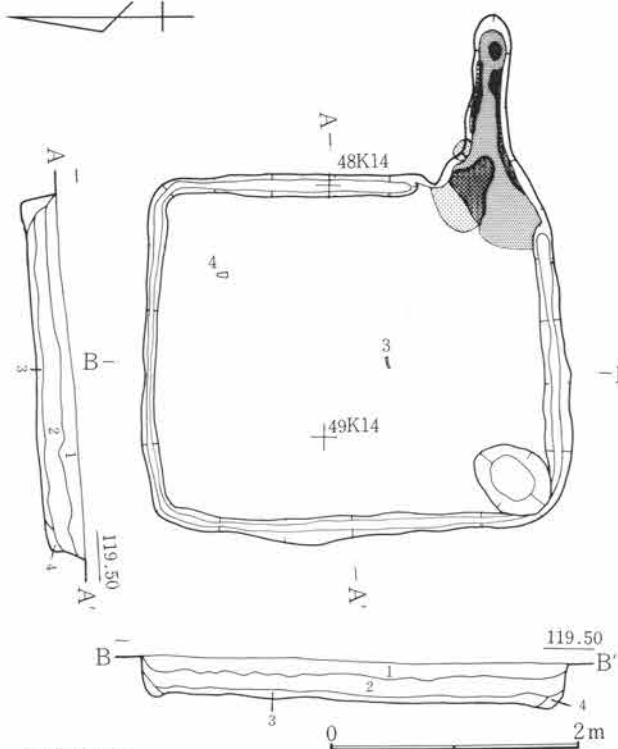
K17号住居跡 (Fig. 284~286・PL. 103)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	3.44 × 2.93	N- 89° -E	東壁東南隅	楕円形 (66.0 × 50.0 × 33.0)

K区の東側中央部に位置し、47~49K13・14の範囲にある。19号・25号・35号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係はこれらのいずれよりも新しい時期の所産である。平面形態は比較的整った正方形に近い形態である。壁高は約32cmを測り、直線的に立ち上がる。各壁下には幅6~14cm・深さ4~7cmの溝が切れ目なく巡る。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴と考えられる穴は南西の隅に設けられ、

第3章 K区の遺構と遺物

竈に相對する面に有る。形状は楕円形を呈し、径66×50cm・深さ約33cmを測る。竈は東壁の南端、南壁に接して付設される。このため南東の壁部が燃焼部の右肩にあたる。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、中央部には支脚材を埋設したと考えられる径15cm・深さ10cm程度の小穴が認められた。袖部に関しては用材や構築痕など検出されていない。煙道部は大きく突出し、住居外に長く延びる。土層観察によると煙道部中央の天井が崩落していたが、前後の部分は遺存していた。燃焼部は幅約65cm・奥行き約30cm、煙道部は長さ約1m・幅約30cmを測る。出土遺物は少ないが鉄製品が2点検出されている。



K17号住居跡

- 1 褐色土 大粒C軽石を多量に混える。 3 灰褐色土 細砂質。
- 2 暗褐色土 しまりなし。 4 灰褐色土 粘性あり。

Fig.284 K17号住居跡

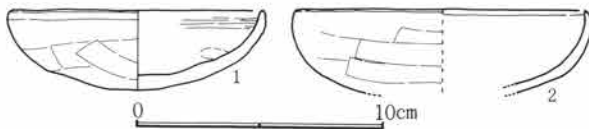
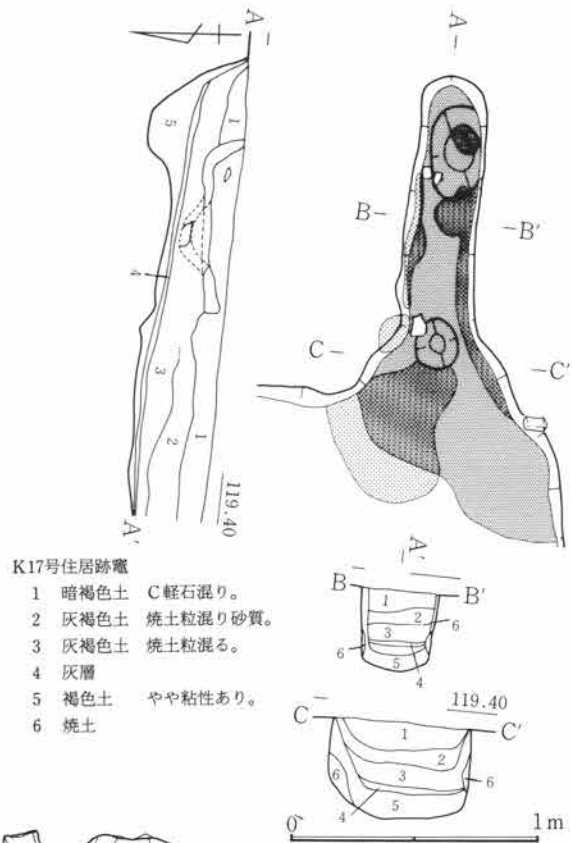


Fig.286 K17号住居跡出土遺物

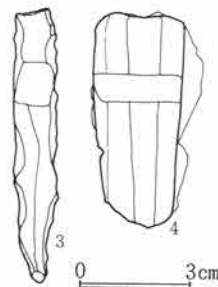
K17号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
286-1 103-1	土 師 器 杯	完	10.4×-×3.2	埋 土	体部丸く内湾し、口唇端部は細る。口縁部内外面横撫で。体部・底部篋削り。全体に肥厚。	①良好 ②明褐 ③やや密、細砂混る
286-2 103-2	土 師 器 杯	1/3	12×-×3.3	竈 内 土	体部丸く内湾し、口唇部は尖り内湾する。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
286-3 103-3	鉄 製 品 釘 状		長(7)幅1×1.2	中央部埋 土	断面方形。	
286-4 103-4	鉄 製 品 不 明		長(5.6) 幅2.3 厚0.9~0.5	北東部埋 土	板状。	



K17号住居跡竈

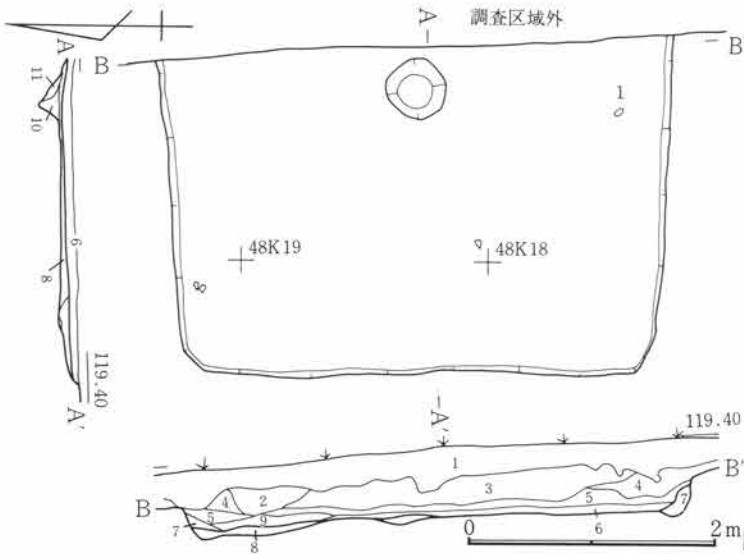
Fig.285 K17号住居跡竈



第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

K18号住居跡 (Fig. 287・288・PL. 104)

K区の東縁中央部に位置し、47・48K17～19の範囲にある。東側は調査区域外に延び、全体を検出するに至っていない。また南西部で19号住居跡と僅かに重複しているが、これよりも新しい時期の所産である、平面形は方形を呈すると考えられる。南北長約4mを測り、東西は約2.6mまで確認できた。壁高は浅く約20cmを測る。床面は平坦をなすが全体に軟弱な踏み締まりである。壁下の溝など諸施設は何等検出されていない。また出土遺物量は極めて貧弱である。



- K18号住居跡
- 1 耕作土 砂質。
 - 2 耕作土 粒子の粗い砂質。
 - 3 褐色土 大粒のC軽石を混える。
 - 4 褐色土 3層と類似する。
 - 5 暗褐色土 しまりあり。
 - 6 明褐色土
 - 7 暗褐色土 砂質。
 - 8 暗褐色土 C軽石を若干混える。
 - 9 褐色土 C軽石を混える。
 - 10 黒褐色土 粘性土。
 - 11 黒褐色土 10よりやや明るい粘性土。

Fig.287 K18号住居跡

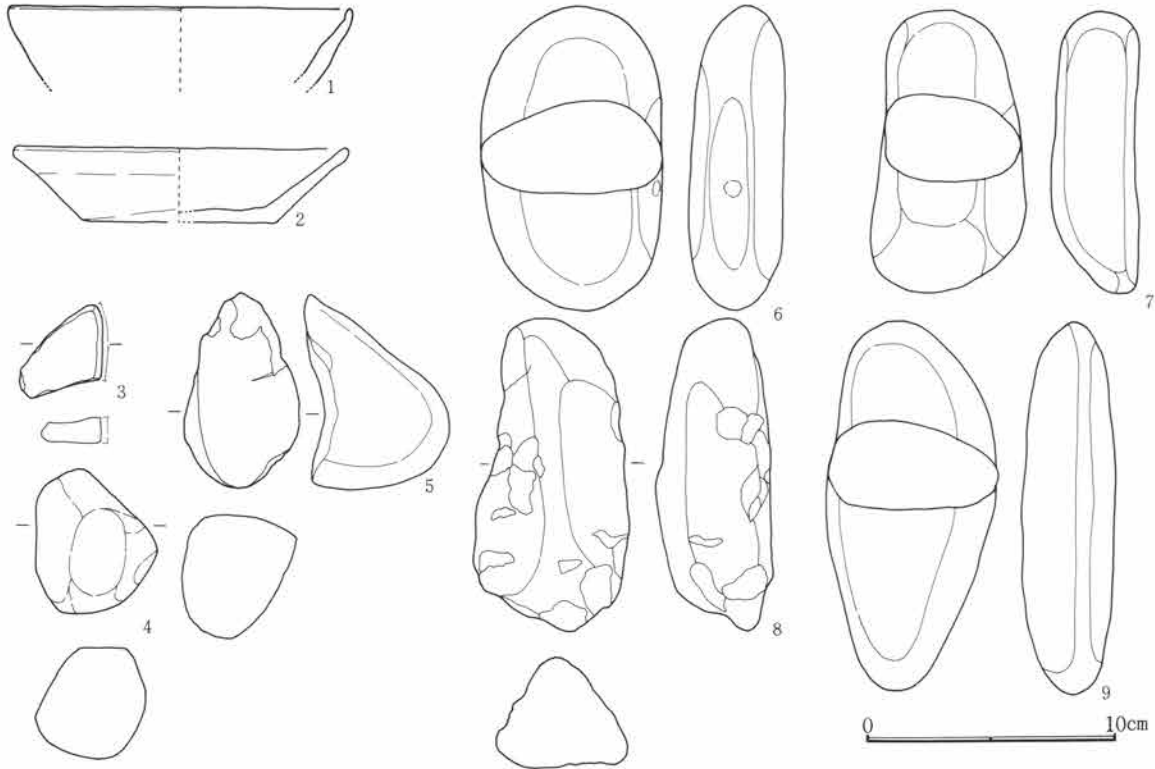


Fig.288 K18号住居跡出土遺物

K18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
288-1 104-1	土 師 器 杯	1/2・底 部欠損	13.9×—×3	南部埋土	体部下半は内湾気味に立ち上がり、上半で再び内湾気味に立つ。口唇部は内屈する。体部不明瞭な寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
288-2 104-2	土 師 質 杯	1/4	13.4×7.7×2.9	埋 土	体部浅く、平底。口唇部丸く内湾気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰黄褐 ③密茶褐色粒多く混

第3章 K区の遺構と遺物

K 18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
288-3 104-3	須恵器 転用砥石		3×3.3×1 13.8g	埋土	1側面使用壺片転用	①良好 ②灰白 ③粗
288-4 104-4	石製品 砥石		5.7×4.8×4.4 120g	床下埋土	多面使用	角閃石安山岩
288-5 104-5	石製品 砥石		7.8×4.6×4.9 160g	床下埋土	1面使用	角閃石安山岩
288-6 104-6	石		12.1×7.3×3.7 550g	床下埋土		石英閃緑岩
288-7 104-7	石		11.2×6.1×3.4 400g	床下埋土		輝石安山岩(粗粒)
288-8 104-8	石		12.4×6.1×4.4 440g	床下埋土		礫岩
288-9 104-9	石		14.7×6.8×3.5 530g	床下埋土		輝石安山岩(粗粒)

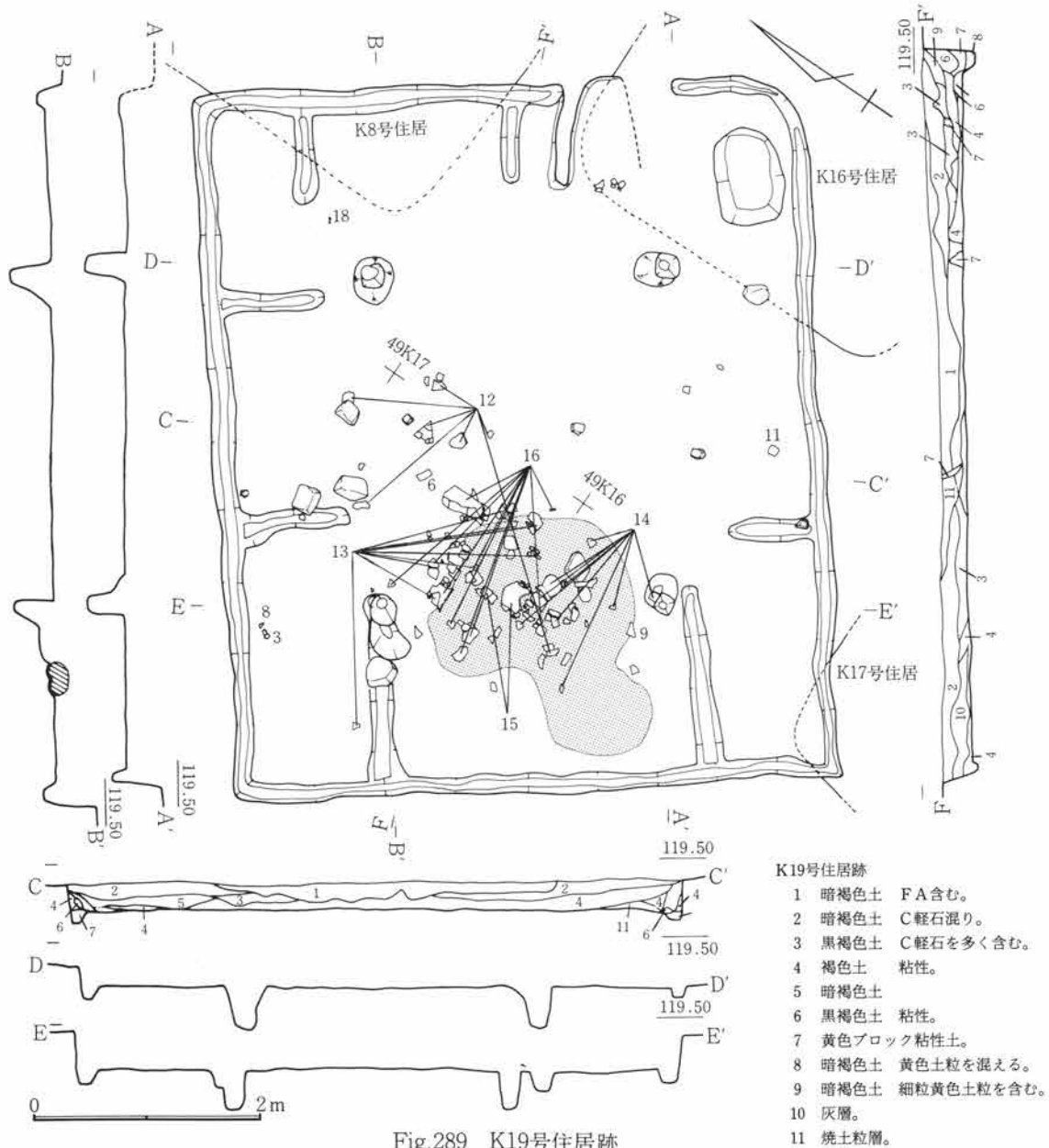


Fig.289 K19号住居跡

K19号住居跡 (Fig. 289~293・PL. 105・106)

K区の東縁中央部に位置し、47~50K14~18の範囲にある。当跡の調査は2期に渡っている。当区では大形の住居跡に属する。住居の東側で16号・18号住居跡と、また南西部で17号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係はこれらのいずれよりも古い時期の所産である。平面形態は整った方形を呈し、東西軸が僅かに長い。壁高は最も遺存の良好な西壁で約36cmを測るが、東壁は削平が深くおよんでいる。床面は平坦をなし、比較的良好に踏み締まっている。貯蔵穴は南東部に設けられ、楕円形を呈する。各壁下には明瞭な形状をなす幅約12cm・深さ約13cmの溝が巡る。溝の中には小穴は検出されていない。この各壁下の溝に直結して直角に、いわゆる間仕切りの溝が配されている。仕切りは、南壁を除きそれぞれ2条の溝で構成されている。溝の幅・深さは壁下の溝と同規模のものである。西壁より延びる間仕切り溝は他のものより長く約1.4~1.6mを測る。溝間の距離は約2.6m、溝と南・北の壁の距離はほぼ同じで約1mを測る。北壁から延びる溝は長さ約1mで西壁のものより短い。溝間の距離は約1.7m、東壁から1.7m、西壁からは2.3mをそれぞれ測る。東壁からの溝は、竈が南に偏っているため西側に寄って設けられる。溝間は約1.6m、西壁からはそれぞれ80cm・2.6mを測る。また、竈左袖より約25cm隔たる。南壁から延びる溝は、西側の1条のみ検出されている。長さ約80cm・西壁からの距離は約2mを測る。西壁の北側の間仕切り溝は柱穴P₂と接続する。柱穴は4個検出されており、いずれも楕円形を呈する。P₁は径40×30cm・深さ約38cm、P₂は径28×24cm・深さ約34cm、P₃は径32×24cm・深さ約34cm、P₄は径30cm・深さ約36cmを測る。柱穴の配列は、わずかに歪みが見られ東西方向にやや長い軸をとるがこれは住居跡が東西に長軸を持つのと対応している。各柱間は、P₁とP₂は2.86m・P₂とP₃は2.48m・P₃とP₄は2.88m・P₁とP₄は2.54mを測る。竈は東壁に付設されるが、南側の半分は16号住居跡によって消失している。このため、全体の様相は明らかではないが袖部が大きく住居内に張り出す形態をもつと考えられる。煙道部は削平が著しく、検出することは出来なかった。左袖部は灰白色の粘性土主体に構築されている。長さ約90cmを測る。燃烧部と考えられる箇所には支脚として円錐形の川原石が埋設されている。また右袖部の先端部にあたる部分には、わずかながら灰白色の粘性土が見られ、右袖部の残欠と考えられる。これによると焚口幅は約40cmを測る。出土遺物は住居跡西側に集中しており、土師器の杯・甕類のほか滑石製で大小の白玉が検出されている。遺物の集中する範囲と同じ範囲に焼土の分布がみられたが、床面の焼土化はそれほど進んではいない。

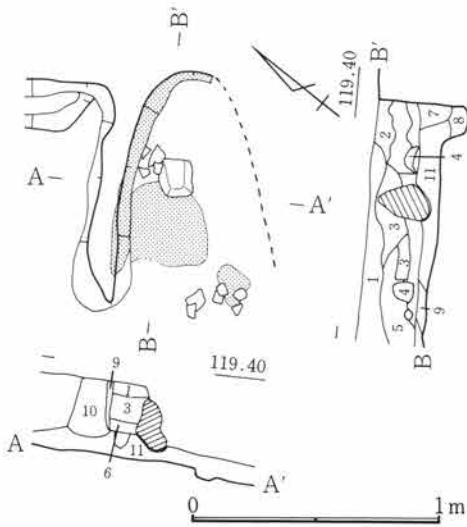


Fig.290 K19号住居跡竈

K19号住居跡竈

- 1 暗褐色土 細砂粒・白色粒を混える。
- 2 暗褐色土 砂粒・焼土粒を混える。
- 3 焼土 焼土塊混り。
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒を混える。
- 5 褐色土 焼土粒を多く混える。
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 C軽石を混える。
- 9 火床面
- 10 灰白色土 砂質で堅く締まる。(袖部)
- 11 暗褐色土 C軽石・灰・焼土粒少量含む。

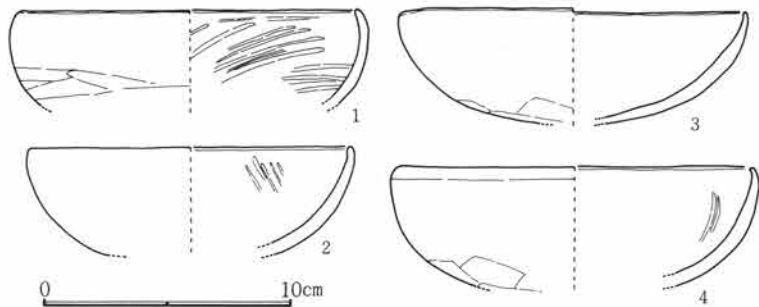


Fig.291 K19号住居跡出土遺物(1)

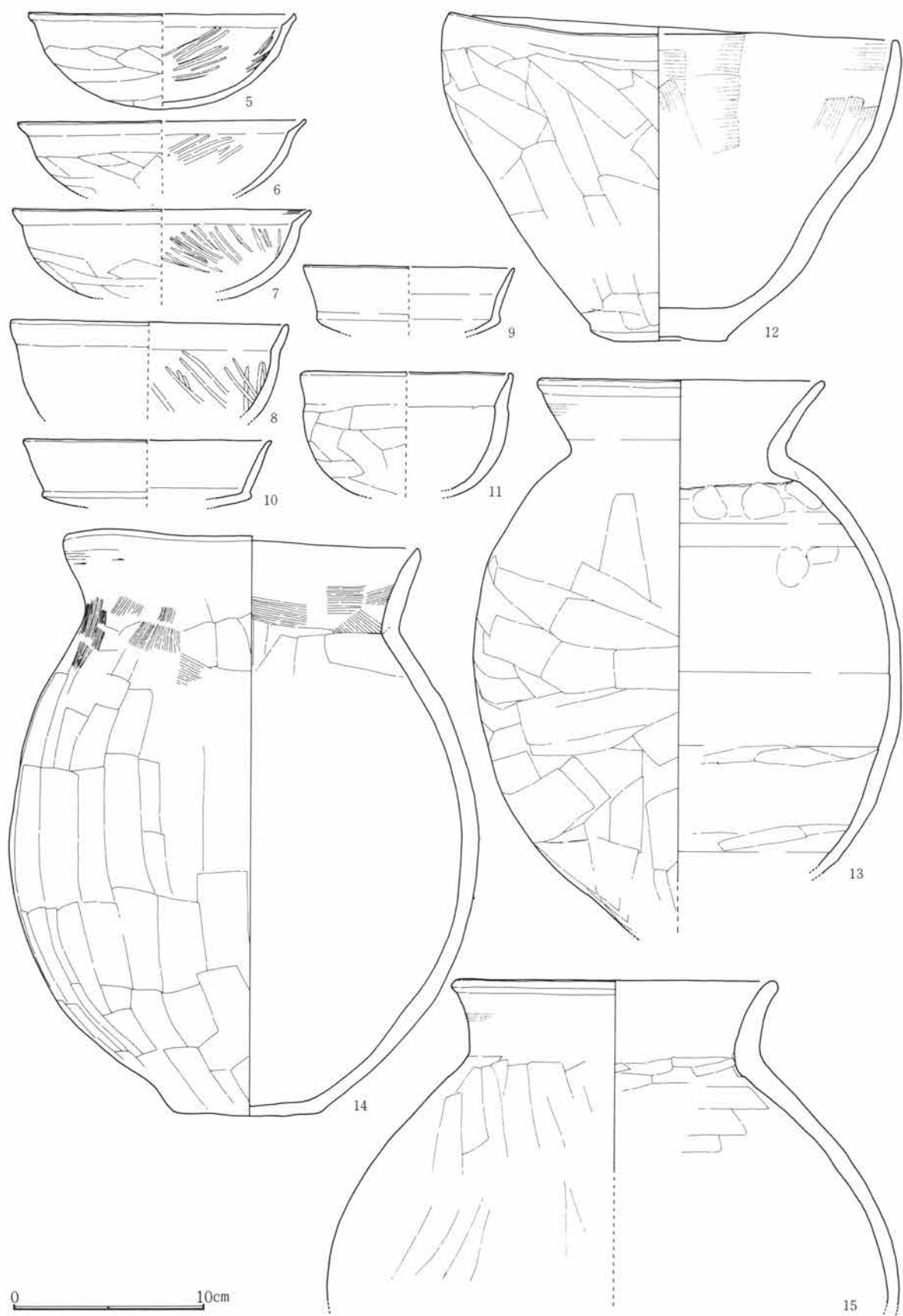


Fig.292 K19号住居跡出土遺物(2)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

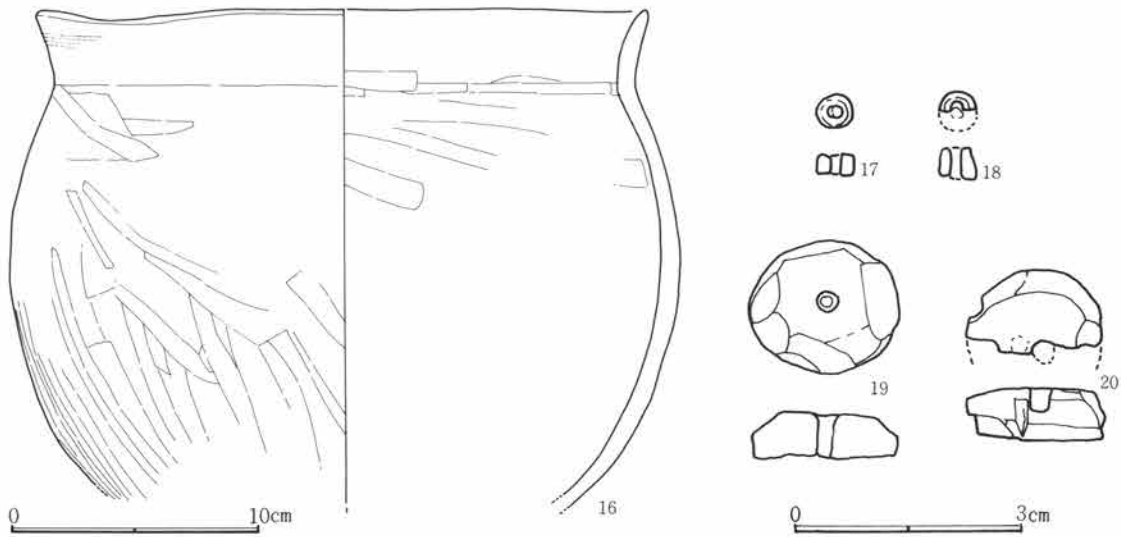


Fig.293 K19号住居跡出土遺物(3)

K 19号住居跡出土遺物観察表

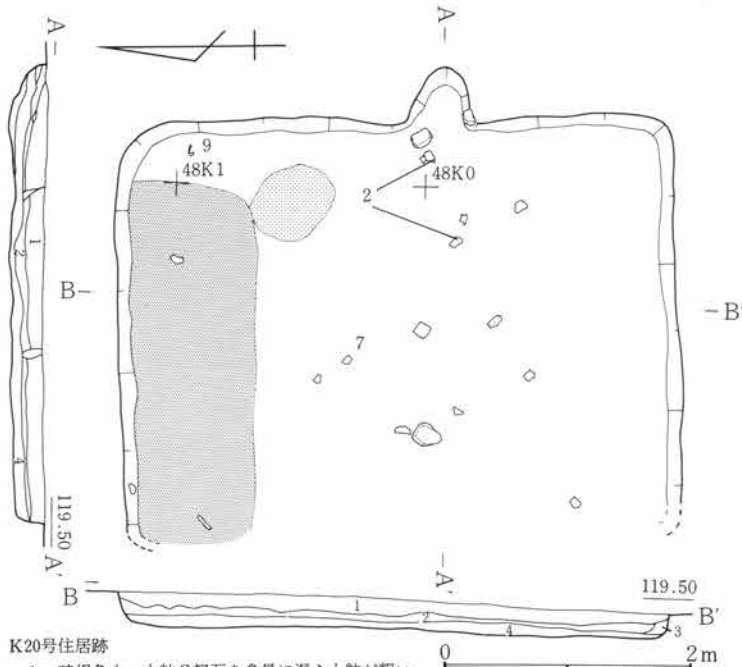
Fig. No PL. No	器 種	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他					
291-1 105-1	土 師 器 杯	1/4・底 部欠損	13.6×-×(3.8)	埋 土	体部から口唇部にかけて強く内湾する。口縁部横撫で。体部篋削り。内面斜行、口唇部下篋磨き。	①良好 ②橙 ③密 黒色粒混る					
291-2 105-2	土 師 器 杯	1/4・底 部欠損	13.1×-×(4.3)	埋 土	体部深く丸く張る。口唇部は僅かに内屈。体部不明瞭な篋削り。内面斜行状篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③密茶褐色粒混る					
291-3 105-3	土 師 器 杯	1/4	14×-×(4.6)	北西部埋 土	体部深く丸く張る。口唇部は細く尖り、内湾気味に立つ。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密 茶褐色土粒混る					
291-4 105-4	土 師 器 杯	1/4	14.2×-×(5)	埋 土	体部深く丸く張る。口唇部細く内屈する。体部篋削り。内面篋磨き痕。深い。	①良好 ②橙 ③や や密細砂混る					
292-5 105-5	土 師 器 杯	1/4	14.0×-×(5)	埋 土	半球状の丸い体部。口縁部は強く外屈し、口唇端部は尖り、やや内傾して立つ。体部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや密					
292-6 105-6	土 師 器 杯	1/4	15.5×-×(3.8)	中央部埋 土	体部丸く張り、口縁部内湾気味に強く外屈。体部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③や や粗、白色粒子混る					
292-7 105-7	土 師 器 杯	1/4	15.6×-×(4.6)	貯蔵穴内	体部丸く張り、口縁部直線的に強く外屈。口唇部は細る。体部篋削り。内面斜行篋磨き。	①良好 ②橙 ③粗 茶褐色土粒混る					
292-8 105-8	土 師 器 杯	小片	14.5×-×(4.8)	埋 土	丸く深い体部から、口縁部は内湾気味に外屈。口唇端部は丸い。体部篋削り不明瞭。内面斜行・斜格子状篋磨き。	①良好 ②橙 ③や や粗					
292-9 106-9	土 師 器 杯	小片 口縁高2.5	11×-×(3.5)	埋 土	体部浅く、弱い受け部をなす。口縁は高く外反気味に外傾、口唇部は細く尖る。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密					
292-10 106-10	土 師 器 杯	小片 口縁高(2.5)	13×-×(3.5)	埋 土	体部浅く、受け部をなして、高く直線的に外傾する口縁。口唇部は細く尖り僅かに外反。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密					
292-11 106-11	土 師 器 杯	1/4	11.1×-×(6.6)	埋 土	半球状の深い体部。口縁部境に弱い段をなす。口縁部は外傾し、口唇部は細く丸まり内屈。体部横篋削り。	①良好 ②橙 ③粗 砂混る					
292-12 106-12	土 師 器 鉢	完	23.7×7.2×17	中央部床 面	胴中位にくびれをなし、上半はやや内湾ぎみに直立する。胴部斜位篋削り。内面横・斜位篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗					
292-13 106-13	土 師 器 甕	底部欠 損	15×-×(28.7) 最大径胴部中位 22.2	中央部床 面	やや長胴を呈するが最大径は中位にあり丸く張る。頸部は強くしまり口縁部は短かく直立した後外反気味に強く外傾する。胴部横・斜位篋削り。腰部縦篋削り。内面横篋撫で。	①やや軟 ②橙 ③ やや粗					
292-14 106-14	土 師 器 甕	完	18.6×7.6×30 最大径胴部中位 24.5	中央部床 面	長胴を呈するが最大径は中位にあり丸く張る。肩部は緩く口縁部は直線的に外傾。口唇部は尖る。肩部刷毛目。胴部縦篋削り。口縁内面横位刷毛目、篋撫で。	①やや軟 ②鈍い橙 ③やや粗					
292-15 106-15	土 師 器 甕	胴下半 欠損	17.1×-×(17.8) 最大径胴部中位 29.8	中央部床 面	胴部強く張り球胴を呈す。口縁部肥厚し直線的に外傾し上位で外反する。口唇部丸い。最大径は胴中位にある。胴部縦篋削り。内面口縁下横篋撫で。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③やや粗					
293-16 106-16	土 師 器 甕	胴下半 欠損	24.5×-×(19.8) 最大径胴部中位 26.9	中央部床 面	胴部中位が強く張る球胴。肩部張りなく、口縁部は外反気味に弱く外傾。体部斜・縦位のやや幅広篋削り。内面横位の篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③密					
293-17 106-17	石 製 品 白 玉	完	径0.5厚0.3 孔径0.1		滑石	293-18 106-18	石 製 品 白 玉	1/2	径0.5厚0.4 孔径0.15		滑石
293-19 106-19	石 製 品 白 玉	完	径2×1.7厚 0.6孔径0.2	面取り	滑石	293-20 106-20	石 製 品 白 玉	1/2	径1.7厚0.6 孔径0.3×0.2	面取り表裏 より未穿孔	滑石

第3章 K区の遺構と遺物

K 20号住居跡 (Fig. 294~296・PL. 107)

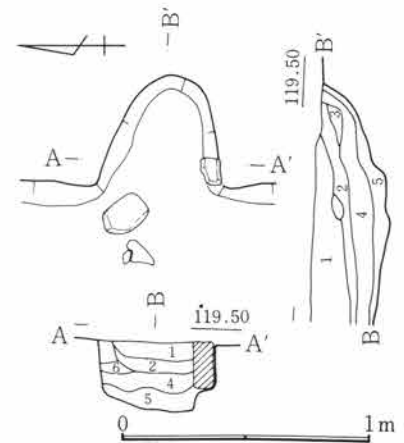
平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.50 × —	N—89.5°—E	東壁ほぼ中央	—————

K区の南東端に位置し、47~49 J 49~K 0・1の範囲にある。東は37号と西側で174号住居跡と重複しているが両者よりも新しい時期の所産である。また、調査が2期に渡ったため、僅か西壁の確認が不明瞭になってしまった。平面形態はほぼ方形を呈すると考えられ、規模は南北長約4.5m・東西は約3.3mまで確認できた。壁高は浅く約20cmを測る。床面は平坦をなすが、踏み締まりは弱く軟弱である。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されていない。北壁近くに幅約1mの炭化物の広がり、その南東部に径50cm程度の範囲で焼土粒の分布が認められたがその性格等は不明である。竈は東壁のほぼ中央に付設されているが、楕円形に小さく突出させてあるだけで袖部や燃烧部・煙道部の区別は不明瞭である。幅・奥行きとも約50cmを測る。出土遺物は散在的で少量であるが、灰釉陶器・転用砥石をはじめ金銅製の刀装具(鞘尻金具)などが検出されている。



- K20号住居跡
- 1 暗褐色土 大粒C軽石を多量に混え土粒が粗い。
 - 2 炭化粒、C軽石を混え明褐色ブロックを混える暗褐色。
 - 3 暗褐色土。
 - 4 暗褐色土 黄色砂岩塊混える。

Fig.294 K20号住居跡



- K20号住居跡竈
- 1 褐色土 C軽石多く、焼土粒を混える。
 - 2 灰層 焼土粒を少量混える。
 - 3 暗褐色土。
 - 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒少量を混える。
 - 5 焼土

Fig.295 K20号住居跡竈

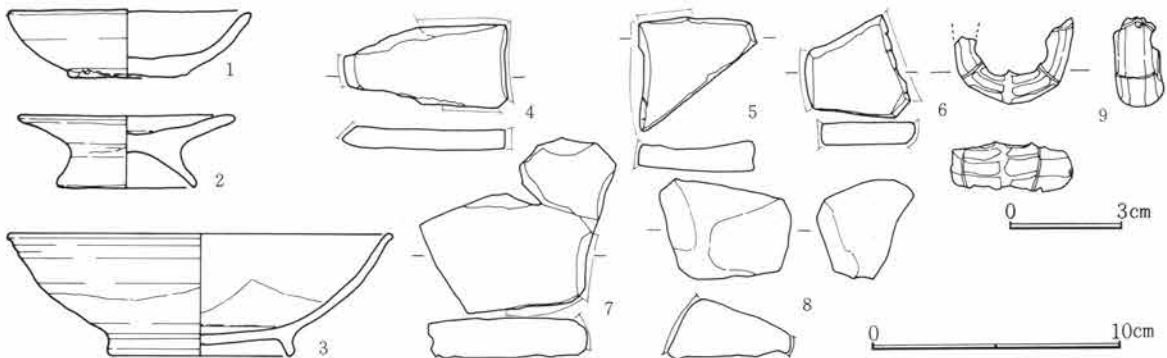


Fig.296 K20号住居跡出土遺物

K 20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 種 形 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
296-1 107-1	土師質 杯	完	9.8×4.8×2.7	埋土	体部丸味をもち口縁部は緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、良好 ②鈍い橙 ③やや粗
296-2 107-2	土師質 皿	1/2	8.7×5.6×3 高台高1.4	埋土	体部平坦に開き浅い。口唇端部丸い。付高台、高くやや内湾気味に開く。轆轤成形。	①酸化、良好 ②橙 ③やや密
296-3 107-3	灰釉陶器 椀	2/3	15.4×7.4×4.9	竈内	体部丸味弱く、口唇端部丸く弱い外屈。高台内面直線的に開く。腰・底部回転篋削り。体部内外面付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや粗
296-4 107-4	須恵器 転用砥石		6.6×3.5×0.8 28.8g	埋土	4側面使用齧片転用	①硬 ②灰 ③密
296-5 107-5	須恵器 転用砥石		4.5×4.3×1.2 22.3g	埋土	2側面使用齧片転用	①良 ②灰 ③密
296-6 107-6	須恵器 転用砥石		4.1×4×0.9 18.9g	埋土	2側面使用刃痕、齧片	①良 ②灰 ③やや粗
296-7 107-7	須恵器 転用砥石		7.8×7×1.6 76.9g	中央部埋土	2側面使用齧片	①軟 ②黄橙 ③密
296-8 107-8	石製品 砥石		6.3×4×2.3 39.7g	埋土	2面使用	砂岩
296-9 107-9	金銅製品 刀装具?		全幅6.2 幅1.1	北東部床面	面取状打ち出し。表面塗金。	

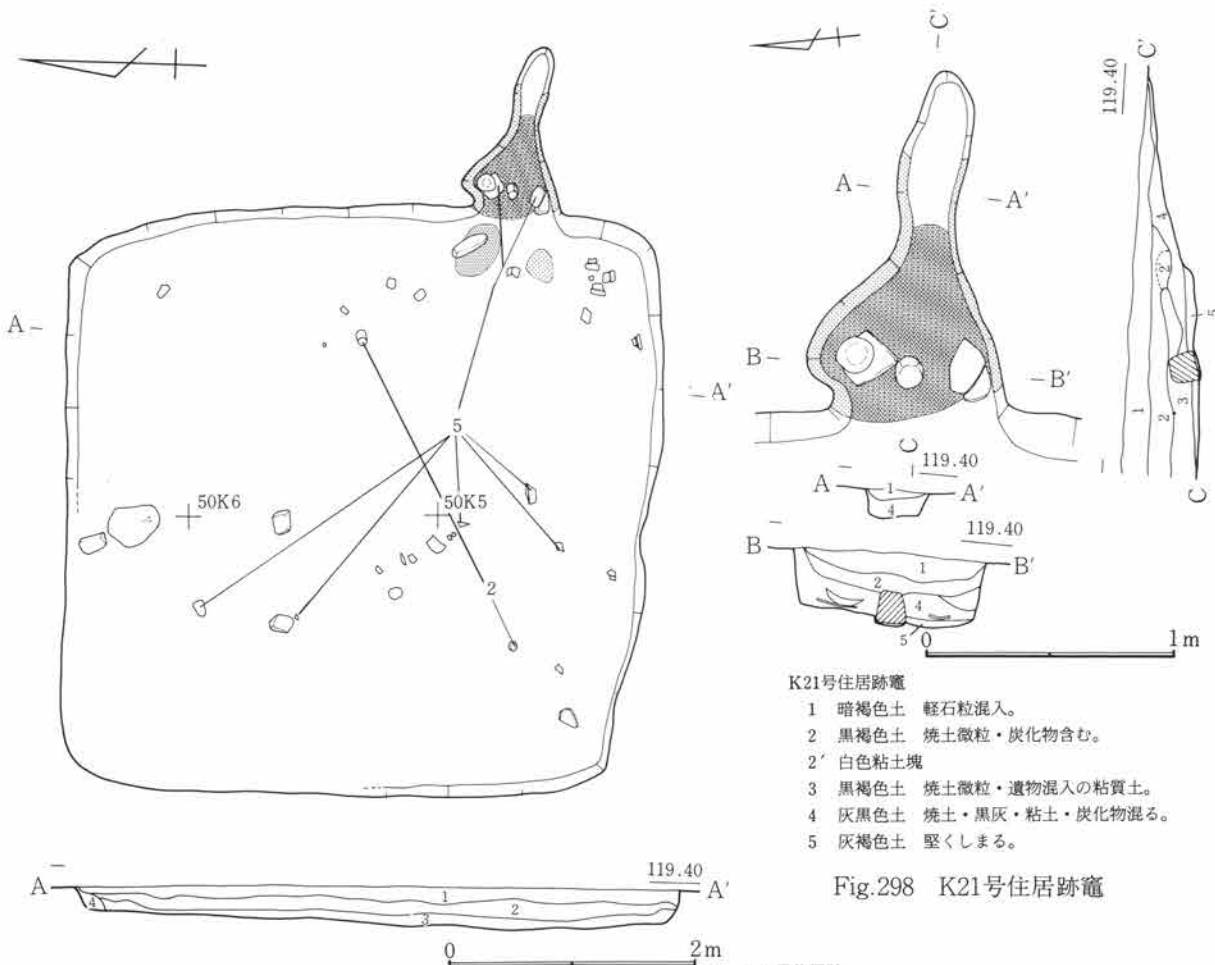


Fig.297 K21号住居跡

Fig.298 K21号住居跡竈

K21号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石混える。
- 2 黒褐色土炭化粒を混える。
- 3 灰褐色土 粘性強く、炭化物混じる。
- 4 黒褐色土

K 21号住居跡 (Fig. 297~299・PL. 108)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.86 × 4.82	N— 95° —E	東壁南寄り	—————

K区の南東寄りに位置し、48~51K 4~6の範囲にある。東側で竈の先端が33号住居跡と、また、北西部で165号住居跡と重複しているが、両者より新しい時期の所産である。ほぼ方形を呈するが、南の壁線がやや歪む。壁高は約35cmを測るが、北西部は明瞭には検出できなかった。床面は南側がややくぼむが総じて平坦をなす。踏み締まりは弱い。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されなかった。竈は東壁の南に偏って付設されやや長めの煙道部が付く。燃烧部は直線的に掘り込まれるが、左壁部は不正に突出する。袖部は検出されないが燃烧部中央には円筒形の川原石が支脚として埋設されている。竈前面に灰及び焼土の分布が見られるが火床面を示す状況ではない。燃烧部幅約70cm・奥行き約78cm、煙道部長さ約76cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・砥石・鉄器などが検出されている。

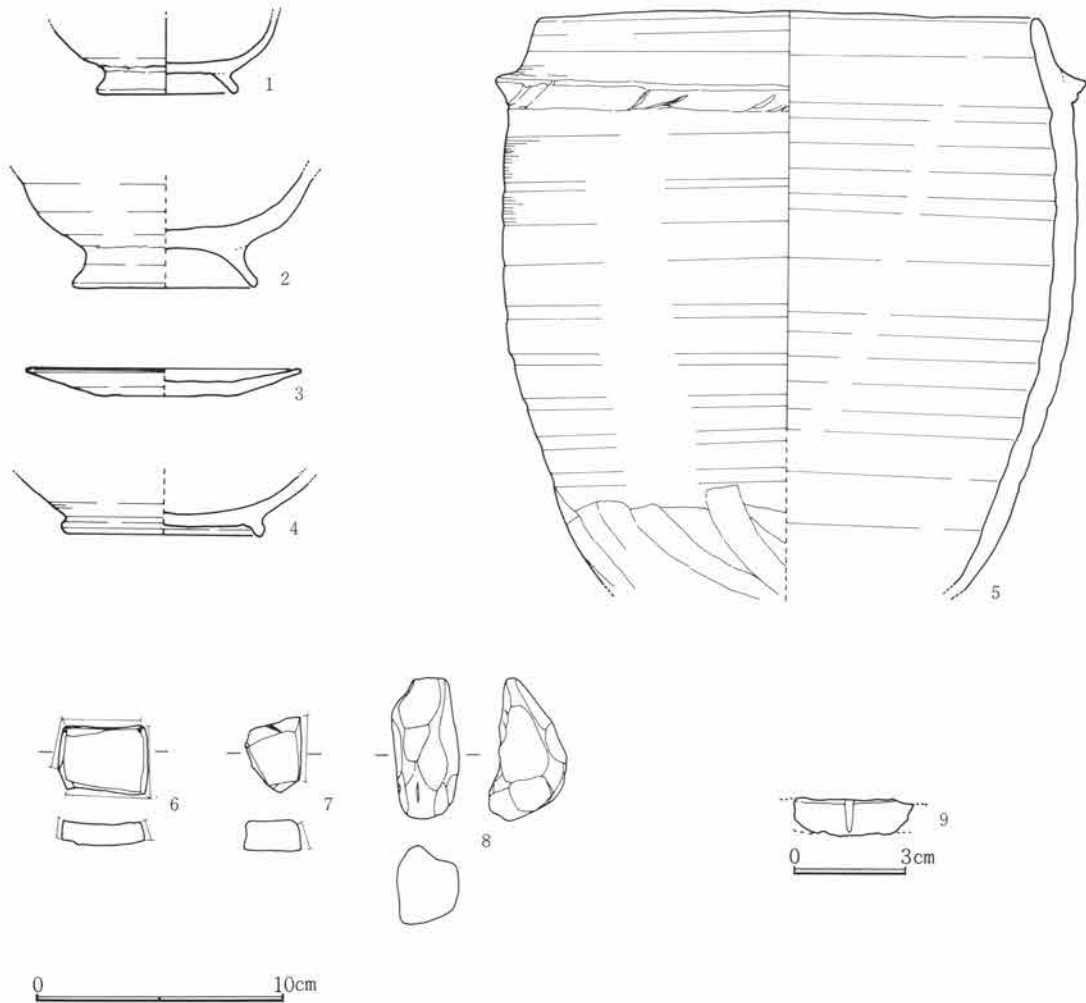


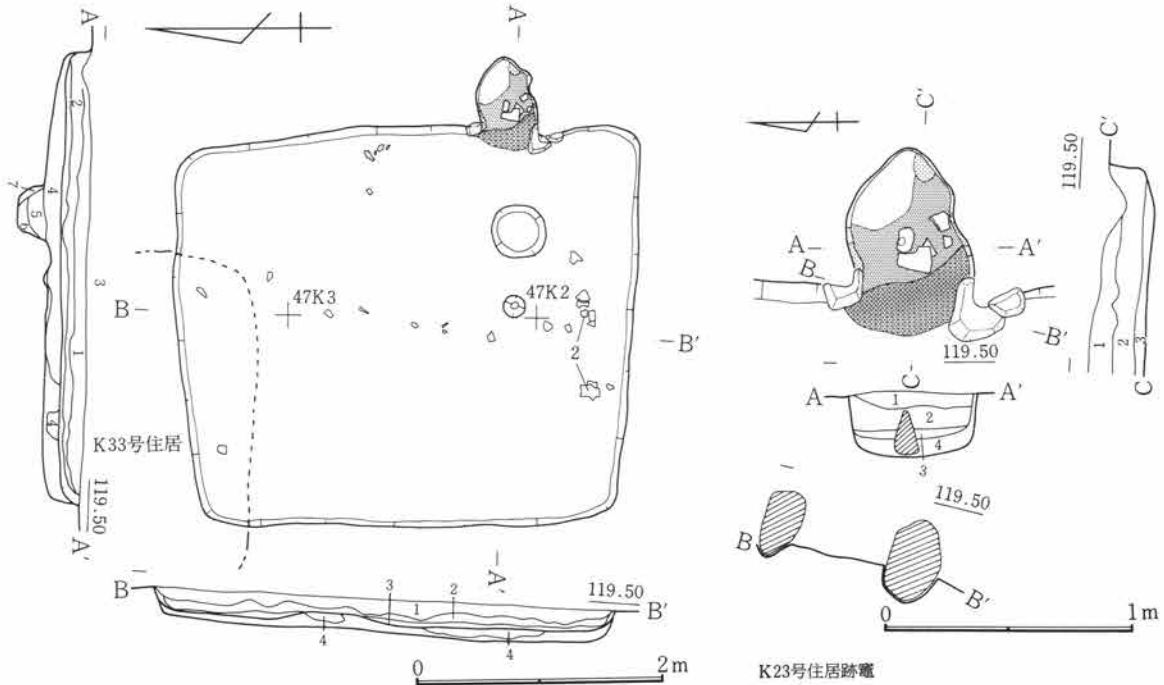
Fig.299 K21号住居跡出土遺物

K 21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
299-1 108-1	土師質 椀	体部欠損	—×5.7×(3)	埋 土	丸く張る腰部。付高台、やや高く直線的に開く。轆轤成形。	①良(燻) ②褐 ③密、白色粒子混る
299-2 108-2	須恵器 椀	1/3・体部欠損	—×7.4×(4.5)	南西部床面	腰部強く張る。付高台、高く直線的に開く。轆轤成形。作り丁寧。	①酸化 ②鈍い橙 ③粗、砂多く混る
299-3 108-3	灰釉陶器 皿	小片	11.2×5×1.1	埋 土	体部浅く直線的に開く。口唇部細る。内面施釉。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
299-4 108-4	灰釉陶器 椀	小片	—×8.3×(2.4)	埋 土	見込部僅かに凹む。高台低い。施釉は体部。	①良好 ②灰白 ③緻密
299-5 108-5	羽釜	1/2・底部欠損	20.5×—×(23) 銜径 23.7・口径高 25	竈・南東部床面	胴部張り少なく、口縁部内傾。口唇部丸い。銜低く断面三角で紐状継目顕著。胴部回転撫で、下半縦寛削り。	①酸化 ②明赤褐 ③粗、赤褐色土粒混
299-6 108-6	須恵器 転用砥石		3.6×2.7×1 10.5g	埋 土	4側面使用一部刃痕。	①硬 ②密
299-7 108-7	須恵器 転用砥石		3.1×2.3×1.2 8.7g	埋 土	1側面使用。	①硬 ②密
299-8 108-8	石製品 砥石		5.5×3×3.1 48.7g	埋 土	多面使用。	流紋岩
299-9 108-9	鉄製品 不明	刃部?	長(3.1) 幅1	埋 土	刃物刃部。	

K 23号住居跡 (Fig. 300~302・PL. 109)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.74 × 3.18	N— 90° —E	東壁南寄り	—



- K23号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を多量に混える。
 - 2 黒褐色土 炭化粒・C軽石を少量含む。
 - 3 暗褐色土 粘性・しまりあり。
 - 4 暗褐色土 C軽石を多く混え、しまりあり。
 - 5 黒褐色土 しまりなし。
 - 6 黒褐色土 しまりなし。
 - 7 黒褐色土 褐色土粒を混え、しまりなし。

- K23号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石を混える。
 - 2 暗褐色土 焼土粒・灰・C軽石を混える。
 - 3 灰層
 - 4 暗褐色土 C軽石を多量に含み、締まりあり。

Fig.300 K23号住居跡

Fig.301 K23号住居跡竈

K 23号住居跡

K区南東部に位置し、46・47K 1～3の範囲にある。北西部で33号住居跡と重複しているが、これより新しい時期の所産である。平面形は各壁線ともその隅でやや歪みをもつがほぼ方形を呈する。壁高は約20cmを測る。床面は中央部にわずかな高まりをなし、周辺部は緩く窪んでいる。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されていない。竈前方部に径42cm・深さ20cmの円形土坑が穿たれるが床下土坑に属すると考えられる。竈は東壁のやや南に寄って付設され略三角に掘り込まれるが明瞭な煙道部は形作られない。袖部は東壁線上に石材が埋設されている。また、燃燒部中央には先細りの円柱状支脚が埋設される。袖部内法約40cm、燃燒

部奥行き約70cmを測る。出土遺物は比較的少量であるが、転用砥石・鉄製刀子片・角釘などが検出されている。

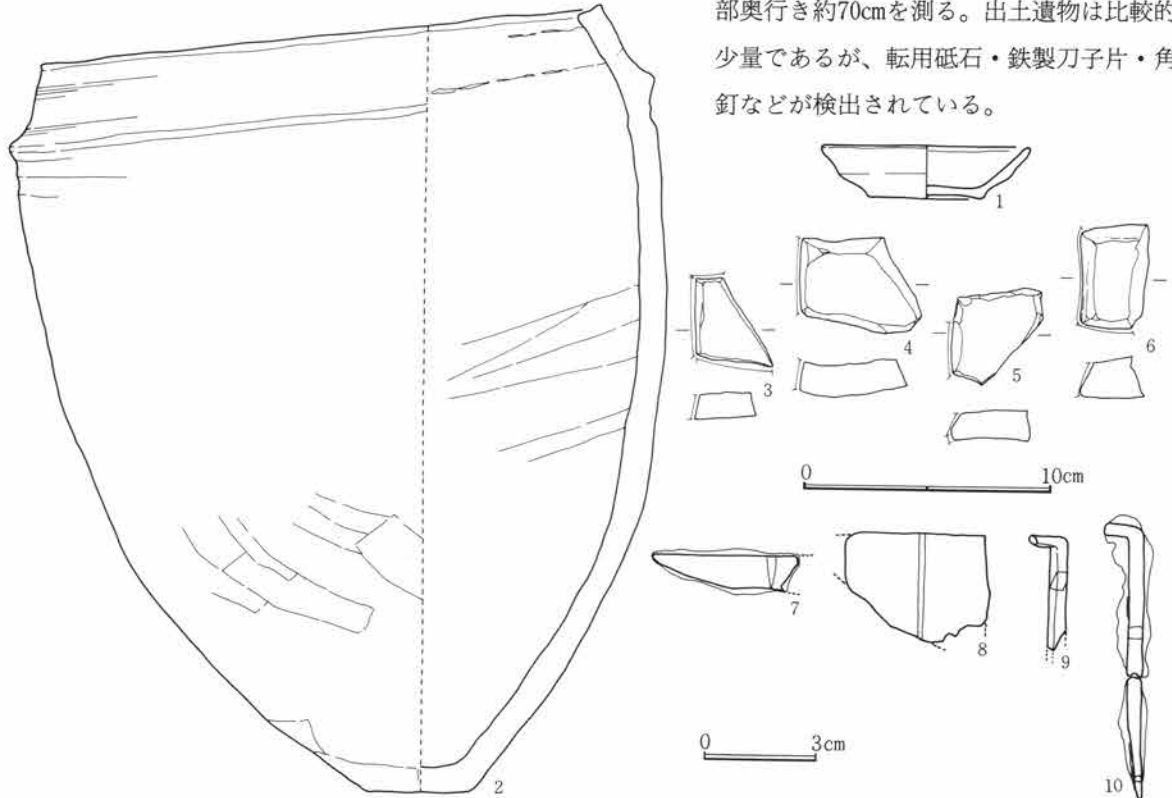


Fig.302 K23号住居跡出土遺物

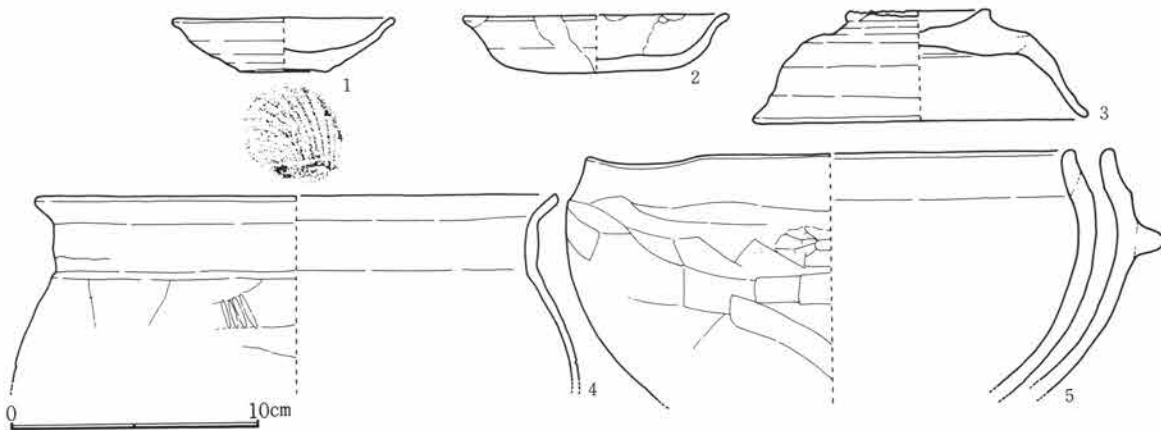
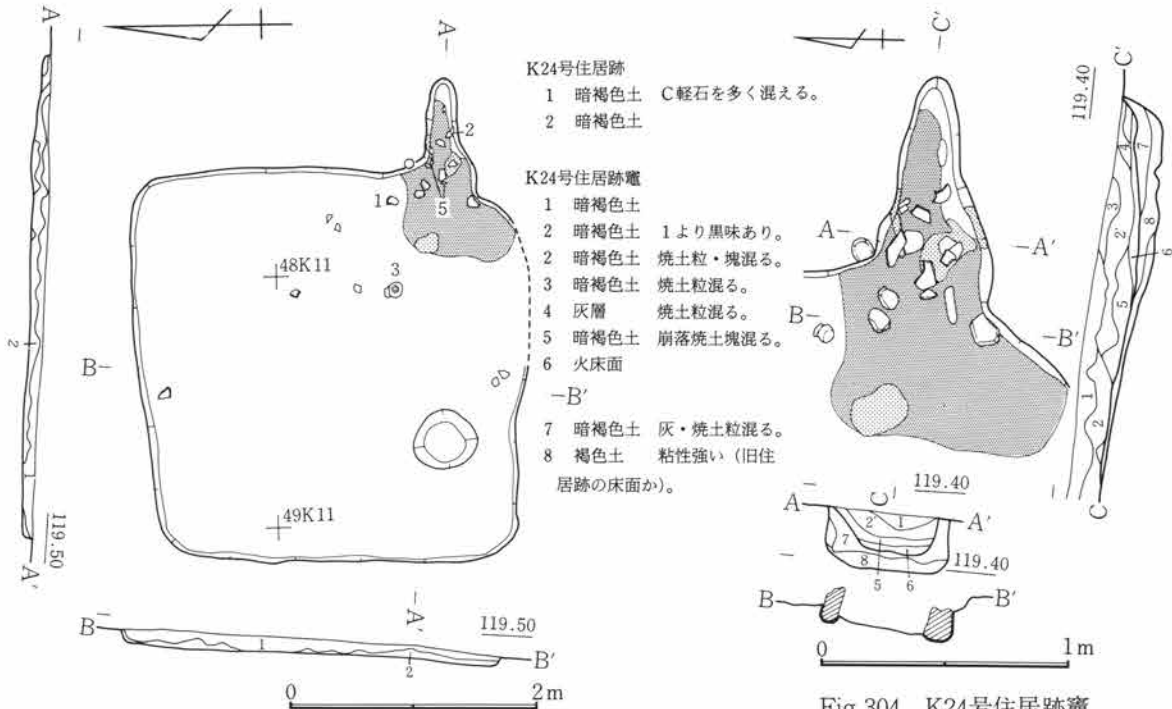
K 23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
302-1 109-1	土 師 質 杯	1/2	8.4×4.4×2.1	埋 土	腰部くびれ体部外面脹らみ内湾気味。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②鈍い黄橙 ③やや密
302-2 109-2	羽 釜	1/2	22.4×4.2×30.3 口径2.6・口縁高25	竈・南部 床面	胴部張り弱く、鏝極めて低い。全体に肥厚する。胴部下半斜位・腰部横篋削り。内面篋撫で。	①酸化 ②鈍い褐 ③粗、小石混る
302-3 109-3	須 惠 器 転用砥石		3.5×3.1×1 12.2g	掘形埋土	3側面使用残片	①良 ②灰 ③やや密
302-4 109-4	須 惠 器 転用砥石		4.8×3.8×1.3 34.5g	東壁際床 面	1側面使用残片	①良 ②灰 ③密
302-5 109-5	須 惠 器 転用砥石		3.9×3.6×1.1 17.4g	埋 土	1側面使用残片	①良 ②灰白 ③密
302-6 109-6	須 惠 器 転用砥石		4.2×2.8×1.5 24.9g	床下埋土	2側面使用残片	①良 ②灰 ③やや密
302-7 109-7	鉄 製 品 刀 先	刃 先	長(3.9) 幅0.8	埋 土		
302-8 109-8	鉄 製 品 不 明		長(3.7) 幅3.8 厚0.1	埋 土	三角形板状	
302-9 109-9	鉄 製 品 角 釘	先端部 欠損	長(3.1) 径0.5×0.3	埋 土	頂部L状に折れる。	
302-10 109-10	鉄 製 品 角 釘	完	長7.2径0.4×0.3	埋 土	頂部L状に折れる。	

K24号住居跡 (Fig. 303~305・PL. 110)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.20 × 3.12	N— 92° —E	東壁南寄り	—————

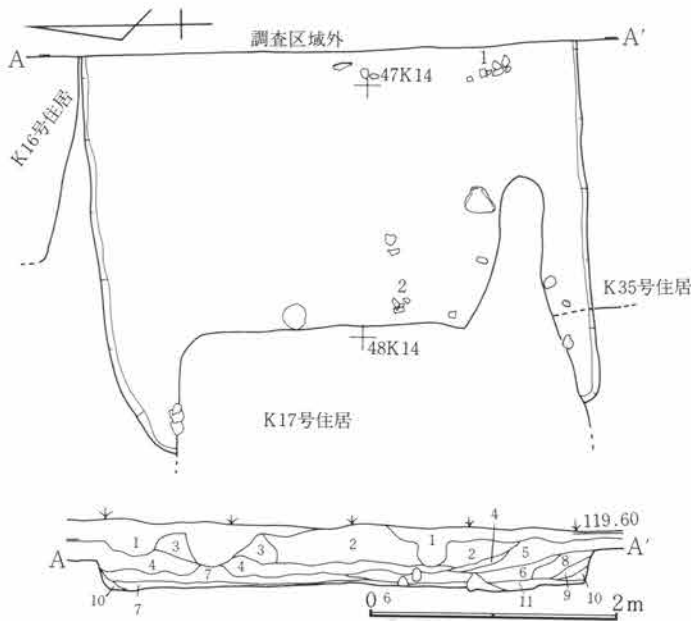
K区東部やや南寄りに位置し、47~49K10・11の範囲にある。東半部で27号・32号住居跡と重複しているがこれらより新しい時期の所産である。平面形は北西部でやや歪みをもつがほぼ方形を呈する。壁高は浅く約8cmを測る。床面は踏み締まりが弱いが平坦をなす。貯蔵穴や壁下の溝は検出されていないが、南西部に径48×42cm・深さ42cmの円形土坑が穿たれる。埋土は締めのある暗褐色土を主体にしており床下土坑の可能性もある。竈は東壁の南隅に付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ、長い煙道部をもつ。燃烧部からは灰が前面の床に広く流出している。燃烧部幅約50cm、奥行き約30cm、煙道部長さ約45cmを測る。出土遺物は少量であるが、取っ手付きの大形土器などが検出されている。



第3章 K区の遺構と遺物

K 24号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
305-1 110-1	土 師 質 杯	1/2	9×3.6×2.1	竈 内	体部直線的、口縁部外反する。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰黄 ③やや密
305-2 110-2	土 師 質 杯	1/2	10.8×6×2.3	竈 内	腰部丸く張り、口縁部外反。口唇部丸い。内外面に煤附着灯明皿か？轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③密、小石混る
305-3 110-3	土 師 質 蓋？	1/2	13.5×(摘)75.8 ×4.4	竈前方床 面	大きく高台状。体部直線的に外傾し口縁部は外反して開く。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②橙 ③粗 小石混る
305-4 110-4	土 師 器 甕	口縁部 1/4	21×-×(7.5) 胴部径 22.6	東中央部床 面	胴部丸く張り、口縁部直立した後外傾するコの字口縁。胴部上半は横篋削り。	①やや軟 ②鈍い橙 ③密、茶褐色土粒混
305-5 110-5	土 師 器 把手付鉢	小 片	19.6×-×(9.5) 最大径胴部 21	竈 内	胴部丸く張り、口縁部は外反気味に内傾。把手点貼。胴部横・斜位篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③粗、砂混る



K25号住居跡

- 1 耕作土 砂質、しまりなし。
- 2 褐色土 C軽石を多く混え土粒が粗い。
- 3 褐色土 2と同類するが黒味が強い。
- 4 褐色土 明褐色土粒を混え良くしまる。
- 5 褐色土 C軽石を多く混え2と同似。
- 6 暗褐色土 C軽石少量含む。
- 7 暗褐色土 6と類似するが土粒が粗い。
- 8 暗褐色土 明褐色土粒（土塊）を多く混える。
- 9 暗褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 暗褐色土

Fig.306 K25号住居跡

K 25号住居跡 (Fig. 306・307・PL. 111)

K区東部に位置し、46~48K13~15の範囲にある。東半部は調査区域外にかかり未検出である。また西半部では17号住居跡と重複し、これよりも古い時期の所産である。南・北壁線の一部が確認されたのみで詳細は不明である。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長は約3.9mを測る。壁高は約26cmを測り急角度で直線的に立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりも良好である。出土遺物は少量で転用砥石などが検出されている。

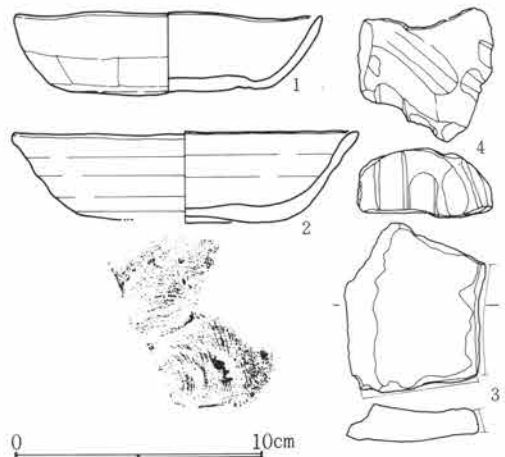


Fig.307 K25号住居跡出土遺物

K 25号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
307-1 111-1	土 師 器 杯	完	12.4×8×3.3	南部床面	体部僅かに内湾。口唇部細る。平底気味。体部・底部篋削り。内面指頭痕顕著。	①良好 ②橙 ③粗 砂混る
307-2 111-2	須 惠 器 杯	1/2	14×8.3×3.6	西中央部床 面	腰部丸味をもち口縁部はやや肥厚し、外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 褐 ③やや粗
307-3 111-3	須 惠 器 転用砥石		6.7×5.6×1 67.7g	埋 土	2側面使用痕片。	①良好 ②灰 ③密
307-4 111-4	石 製 品 砥 石		5.5×2.8×0.8 55.6g	埋 土	多面使用溝状磨痕。	輝石安山岩(粗粒)

K 26号住居跡 (Fig. 308~310・PL. 111)

K区東部やや南寄りに位置し、49・50K7~9の範囲にある。西半部で150号と、また北部で29号・4住居跡と重複しており150号より旧く、29号より新しい時期の所産である。この重複のため西半部はほとんど消失している。平面形は南・北壁線ともやや脹らみをもっており不正方形を呈すると考えられる。南北長は約3.06mを測り、竈を基軸にする東西軸方位はN-82°-Eを示す。壁高は約10cm程度で浅く、壁の構築土は黄白色の粘土塊を混じえ不安定である。また、床の構築も黄白色の粘性土を基盤にしているが踏み締まりは弱い。竈は東壁の南隅に付設され、燃烧部はやや矩形に掘り込まれる。両袖部は東壁線上に径20×25cm・深さ7cm程度の構築材埋設痕が、また燃烧部中央には支脚痕が検出されている。燃烧部前面には灰層が厚く堆積していたが、灰層直下は楕円形に落ち込み灰混じりの焼土層で埋まっていた。袖痕内法約30cm、燃烧部奥行き約65cmを測る。出土遺物は竈内より大形の土釜が検出されている。

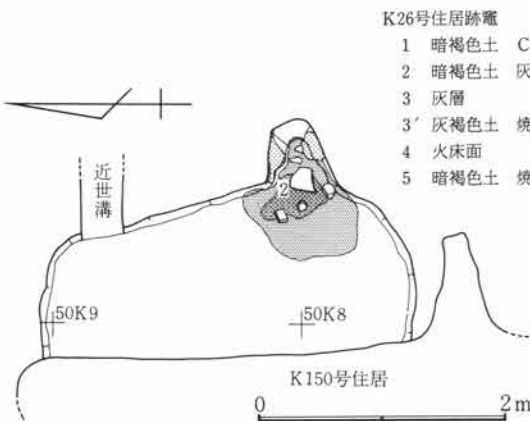


Fig.308 K26号住居跡

- K26号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石を少量混える。
 - 2 暗褐色土 灰・焼土粒混り、しまりなし。
 - 3 灰層
 - 3' 灰褐色土 焼土塊・灰混る。
 - 4 火床面
 - 5 暗褐色土 焼土粒・灰混り、しまりなし。

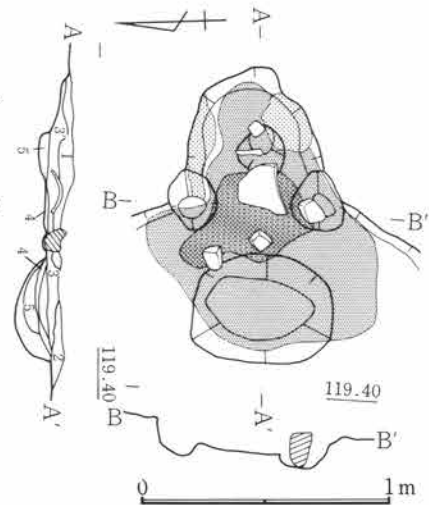


Fig.309 K26号住居跡竈

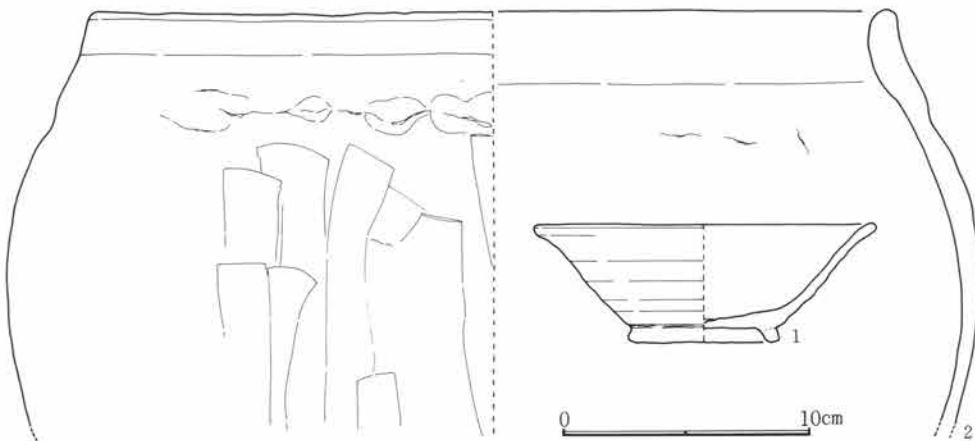


Fig.310 K26号住居跡出土遺物

K 26号住居跡出土遺物観察表

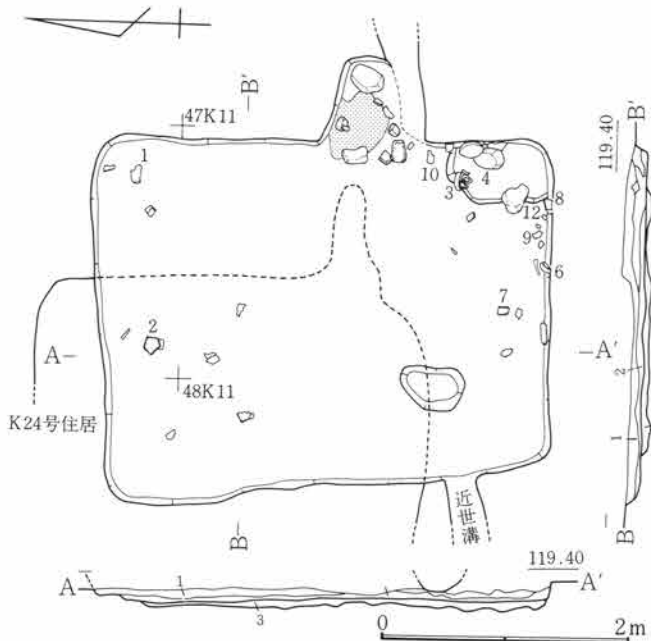
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
310-1 111-1	須恵器 椀	小片	13.8×3×4.7	埋土	体部外反気味に立ち上がる。口唇部やや肥厚する。轆轤成形、右回転糸切り。作り雑	①酸化 ②橙 ③粗、小石多く混る
310-2 111-2	土師器 土釜		32.7×-×(16.8) 最大径胴部上位39	竈内	口縁部肥厚し内傾。胴部丸く張る。胴縦篋削り。	①良好 ②橙 ③粗

第3章 K区の遺構と遺物

K27号住居跡 (Fig. 311~314・PL. 112)

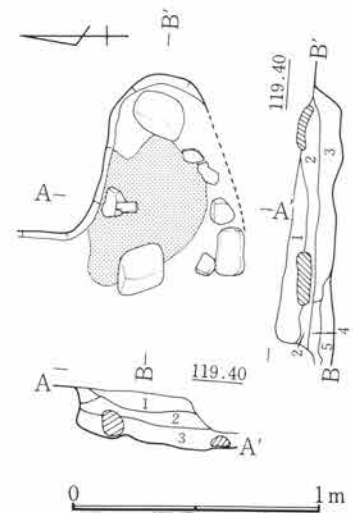
平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.71 × 2.91	N— 90° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (43.0 × 24.0 × 19.0)

K区東縁やや南寄りに位置し、46~49K9~11の範囲にある。北西及び北部で24号・32号住居跡と重複している。前者より旧く、後者より新しい時期の所産である。24号住居跡の床面は当跡の堆積土中にある。壁高は約20cmを測る。床面は比較的固く踏み締まり凹凸が顕著である。南東隅には楕円形を呈する貯蔵穴が穿たれ、中には人頭大の川原石が数個検出されている。竈は東壁わずか南に寄って付設されている。燃烧部は楕円形に掘り込まれるが南辺は近世の溝によって消失している。右袖部には凝灰岩質の構築材残欠が見られる。燃烧部幅約55cm、奥行き約70cmを測る。出土遺物は鉄器・滑石製白玉などがある。



- K27号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を多く混える。
 - 2 暗褐色土 C軽石をわずかに混える。
 - 3 暗褐色土 粘性明褐色土をまばらに混える。

Fig.311 K27号住居跡



- K27号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石混り黒味の強い。
 - 2 暗灰褐色土 焼土粒・灰混りでしまりなし。
 - 3 褐色土 C軽石を混え、堅くしまる。
 - 4 焼土粒層
 - 5 黒色土 焼土粒を含み、粘性があり堅くしまる。

Fig.312 K27号住居跡竈

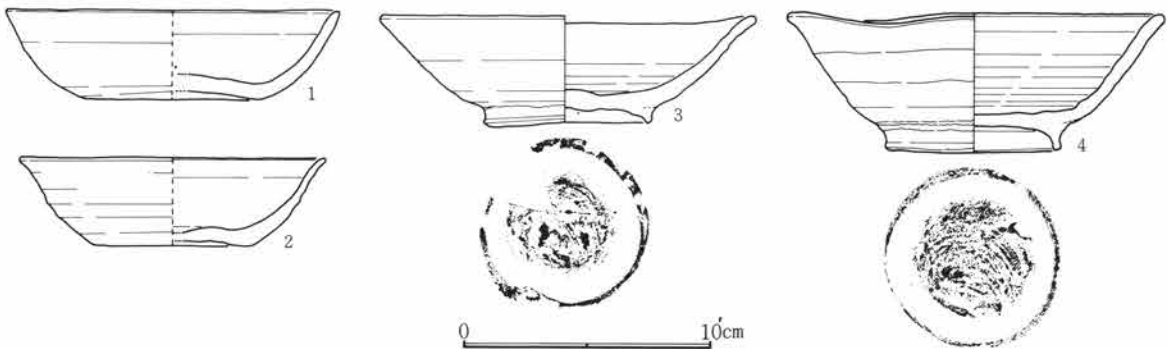


Fig.313 K27号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

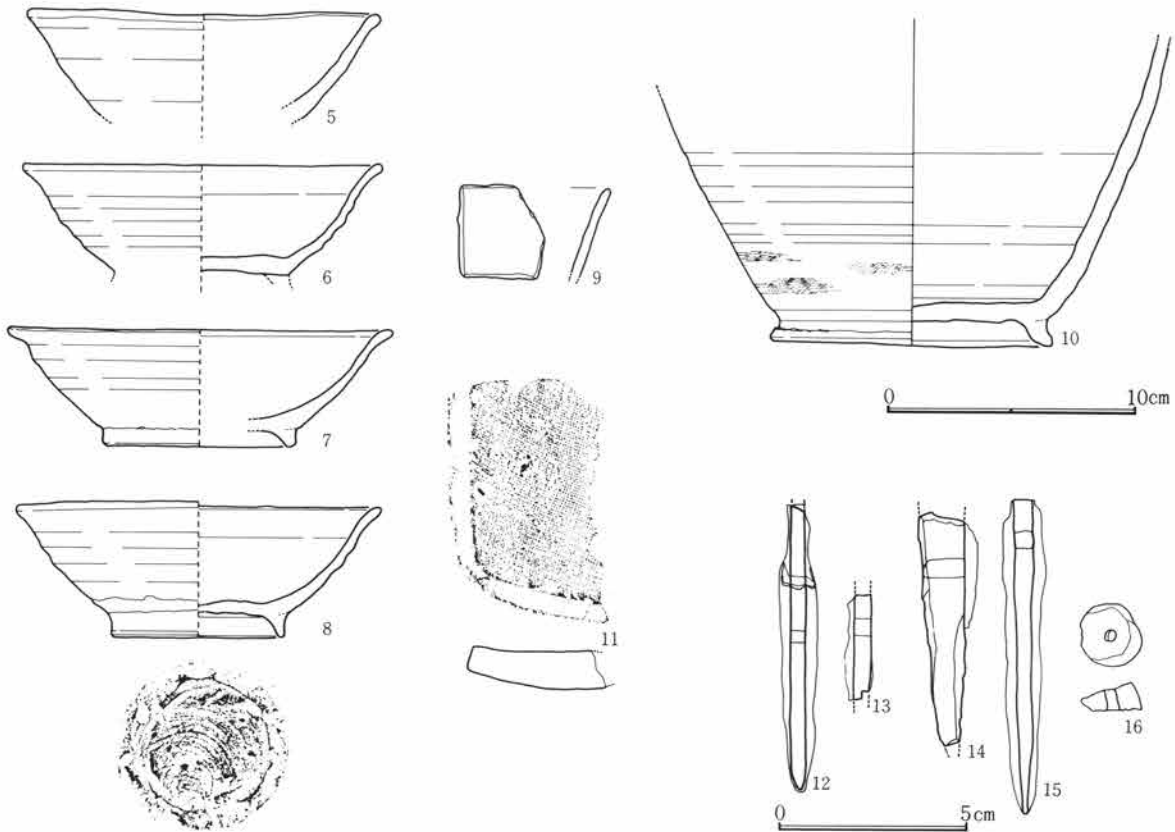


Fig.314 K27号住居跡出土遺物(2)

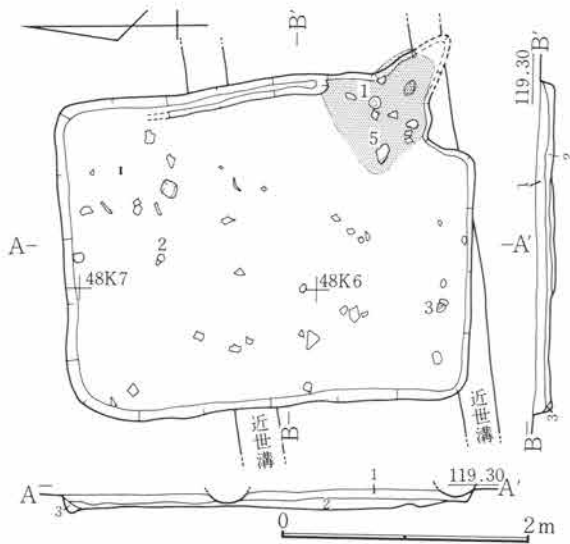
K 27号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他	
313-1 112-1	須恵器 杯	1/5	13.4×6.7×3.5	北央部床 面	腰部丸味をおび内湾して立ち上がる。轆轤成形。回転糸切り後底部周縁から腰部にかけて回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密、白色細粒混る	
313-2 112-2	須恵器 杯	1/5	12.3×6.2×3.5	北東部床 面	腰部内湾して立ち上がり、口縁部薄く外反する。轆轤成形、右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗白色小石多く混る	
313-3 112-3	須恵器 碗	3/4	15.2×6.8×4.4	貯蔵穴際	体部大きく開いて立ち上がる。口縁部外反。付高台、低く薄い。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰 ③粗灰雑物多く混る	
313-4 112-4	須恵器 碗	完	15.1×7.1×5.5	貯蔵穴際	腰部僅かに張り、口縁部外反気味。口唇端部は丸い。付高台。薄く直に下る。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、軟 ②鈍い黄褐 ③粗	
314-5 112-5	須恵器 碗	1/5・底 部欠損	14.2×—×4.2	埋 土	腰部丸味をもち、口唇部丸く僅かに外屈。轆轤成形。	①酸化、軟 ②橙 ③やや粗、砂混る	
314-6 112-6	須恵器 碗	1/5・高 台欠損	14.5×—×(4.2)	南壁際埋 土	腰部短かく外反気味に立ち、口縁部は外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗	
314-7 112-7	須恵器 碗	1/4	15.5×7.7×4.6	南央部埋 土	体部丸味をおび、口唇部やや肥厚し外反する。付高台、直に下る。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗小石、黒色粒混	
314-8 112-8	須恵器 碗	1/5	14.7×6.9×5.4	南東壁際 埋土	腰部に僅かな丸味をもち口縁部は外反する。付高台、やや高く開きは少ない。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗、白色小石混る	
314-9 112-9	緑釉陶器 不明	小片		南壁際埋 土	明緑色の光沢ある釉調。	①良好 ②オリーブ灰 ③密	
314-10 112-10	須恵器 瓶	上半欠 損	—×11.3×(12)	北央部床 面	胴部直線的に立ち上がる。付高台、端部段をなして強く外反して開く。下位回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密	
314-11 112-11	瓦 平瓦	小片	厚	埋土	凹面布目凸面撫で	314-12 鉄製品 112-12 鉄製品 角釘?	頂部欠損 長(8.5) 北壁際 床面 径0.5
314-13 112-13	鉄製品 角釘?	小片	長(2.8) 径0.4	埋土	断面四角	314-14 鉄製品 112-14 不明	長(6.2)幅 南部床 面 1.1厚0.5
314-15 112-15	鉄製品 角釘?	頂部欠 損	長(7.5) 径0.4	南壁際 床面	頂部欠損	314-16 石製品 112-16 白玉	径1.6厚0.6 南壁際 床面 横断面 三角 滑石 孔径0.3

K28号住居跡 (Fig. 315~317・PL. 113)

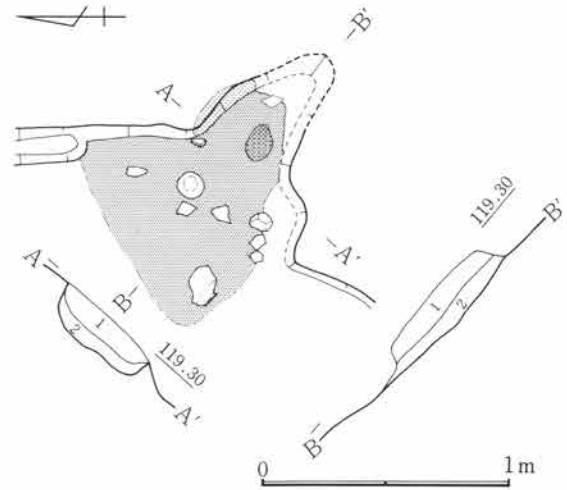
平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.45 × 2.66	N- 130° -E	東壁南東隅	—————

K区南東部に位置し、47~48K 5~7の範囲にある。36号・38号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。壁高は約14cmを測る。床面は南東部が高まりとなり固く踏み締まるが、北西部は一段低くなり軟弱である。壁下の溝や貯蔵穴は検出されていない。竈は南東隅に付設され、東壁線に対して約45°南へ振れている。燃烧部と煙道部の区別はなく楕円形に掘り込まれるが先端部は東西に走る近世の溝のため遺存状況は不良である。袖部の構築材などは検出されていないが右袖にあたる部分がわずかに住居内に張り出す。燃烧部幅約40cm、奥行き約60cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・転用砥石などがある。



K28号住居跡
 1 暗褐色土 C軽石を多く混える。
 2 暗褐色土 C軽石を混え土粒粗い。
 3 暗褐色土。

Fig.315 K28号住居跡



K28号住居跡竈
 1 暗褐色土 C軽石を多く混える。
 2 焼土と灰混合層。

Fig.316 K28号住居跡竈

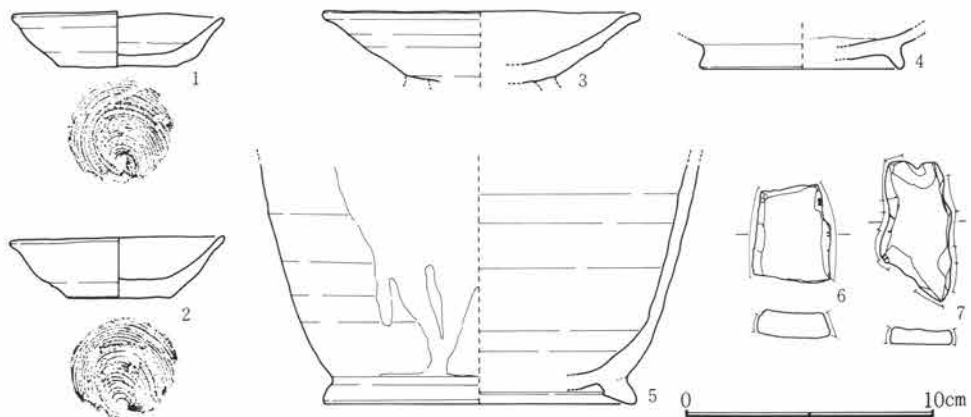


Fig.317 K28号住居跡出土遺物

K 28号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
317-1 113-1	土 師 質 杯	完	8.5×4.5×2.2	竈 埋 土	腰部肥厚して上半は直線的。口唇部細る。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
317-2 113-2	土 師 質 杯	1/2	8.7×4.2×2.4	北央部埋 土	西部肥厚。口縁部で器肉く薄くなる。轆轤成形。右回転糸 切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
317-3 113-3	須 恵 器 皿	1/3・高 台欠損	12.9×-×(3.8)	南西部埋 土	体外反気味に開き、口唇部丸く外反する。轆轤成形。	①良好 ②暗青灰 ③粗細砂多く混る
317-4 113-4	灰 釉 陶 器 碗	底部1/2	-×8.2×(1.5)	埋 土	内面体部施釉。見込部僅かに凹み施釉なし。底部回転糸切 り。	①良好 ②灰白 ③ 密
317-5 113-5	灰 釉 陶 器 瓶	1/4・上 半欠損	-×12.6×(9.5)	竈前方埋 土	腰部僅かに内湾。胴部直線的で外傾弱い。付高台、下端面 は内斜する。胴部下位回転篋削り。胴外面施釉。	①良好 ②明オリ ーブ灰 ③やや粗
317-6 113-6	須 恵 器 転用砥石		3.9×3.1×1 17.2g	埋 土	2側面使用刃痕、甕片。	①良 ②灰 ③密
317-7 113-7	須 恵 器 転用砥石		5.5×2.9×0.6 13.2g	埋 土	多側面使用刃痕、甕片。	①軟 ②灰 ③密

K 29号住居跡 (Fig. 318~320・PL. 114)

K区東部やや南寄りに位置し、48・49K8~10の範囲にある。26号・30号・147号住居跡と重複しており、26号より旧く、30号・147号より新しい時期の所産である。重複が著しく全体を検出できなかったが平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約3.9m、壁高約20cmを測る。床面は総じて軟弱である。竈は東壁の南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれる。燃烧部幅約60cm・奥行き約70cmを測る。出土遺物は少なく竈内に土師器の甕片が検出されている。

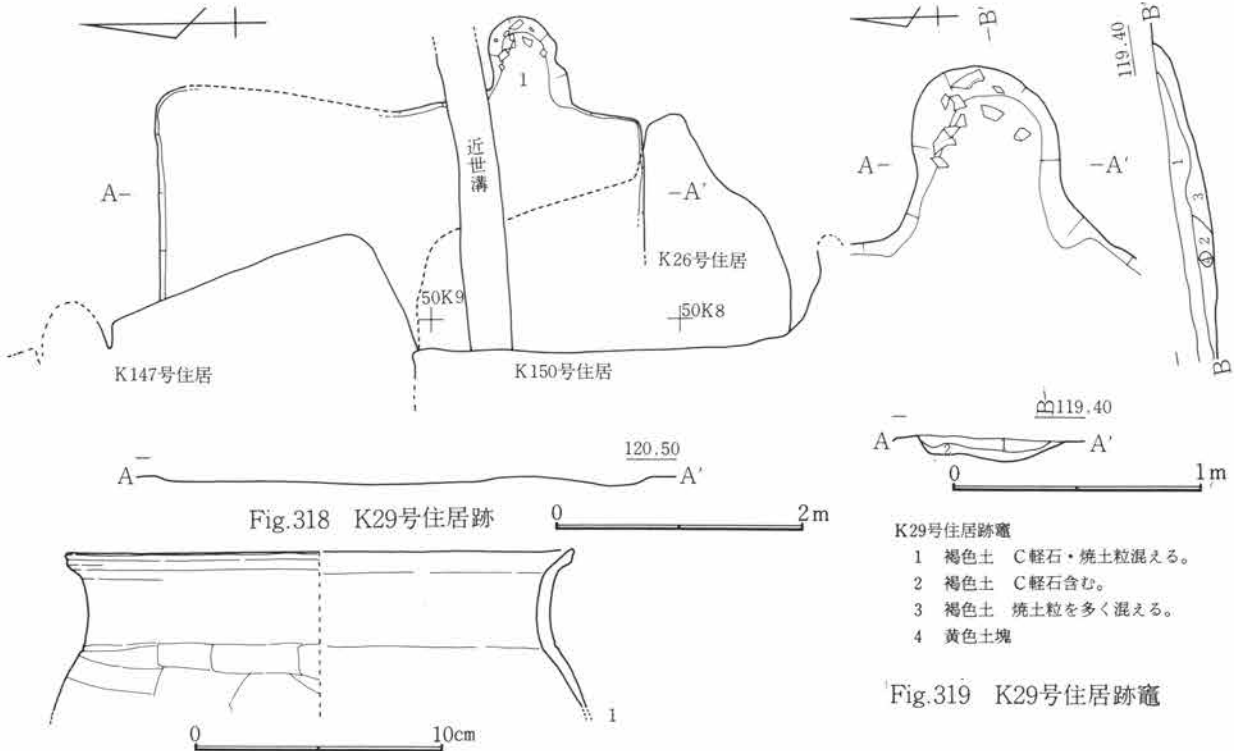


Fig.318 K29号住居跡

- K29号住居跡竈
- 1 褐色土 C 軽石・焼土粒混える。
 - 2 褐色土 C 軽石含む。
 - 3 褐色土 焼土粒を多く混える。
 - 4 黄色土塊

Fig.319 K29号住居跡竈

Fig.320 K29号住居跡出土遺物

K 29号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
320-1 114-1	土 師 器 甕	口縁部 1/2	20.4×-×(5.3)	竈 内	肩部張り弱い。コの字口縁。胴上部横篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗、砂混る

第3章 K区の遺構と遺物

K30号住居跡 (Fig. 321~323・PL. 114)

K区東部やや南寄りに位置し、49・50K9・10の範囲にある。24号・26号・29号・147号住居跡と重複しており、新旧関係は24号・26号より旧く29号・147号より新しい時期の所産である。重複が著しく全体を検出できなかつた。平面形は、東壁線がやや不整をなすが方形を呈すると考えられる。南北長は約2.7mを測り、竈を基軸にした方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約22cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは軟弱である。竈は東壁のほぼ中央に付設され、燃烧部は不整楕円形に掘り込まれる。燃烧部幅約90cm・奥行き約60cmを測る。出土遺物は少量である。



Fig.321 K30号住居跡

きなかつた。平面形は、東壁線がやや不整をなすが方形を呈すると考えられる。南北長は約2.7mを測り、竈を基軸にした方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約22cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは軟弱である。竈は東壁のほぼ中央に付設され、燃烧部は不整楕円形に掘り込まれる。燃烧部幅約90cm・奥行き約60cmを測る。出土遺物は少量である。

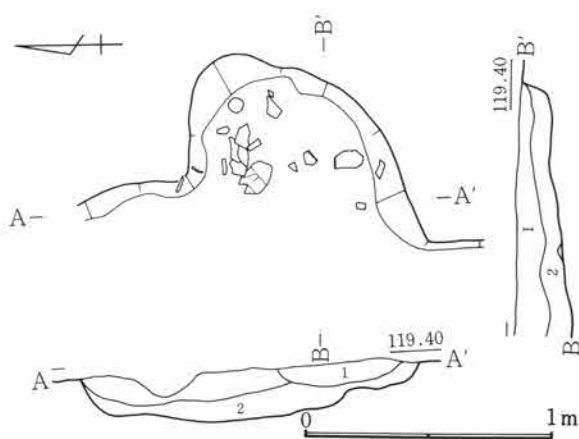
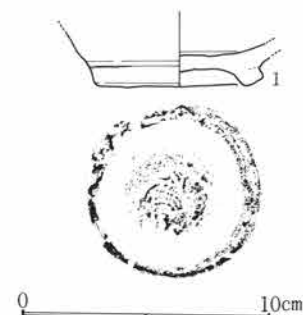


Fig.322 K30号住居跡竈



K30号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多く混え、焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を多く混える。

Fig.323 K30号住居跡出土遺物

K30号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
323-1 114-1	須恵器 椀	体部欠損	—×6.8×(2.2)	竈内	付高台、肥厚下端面は外斜する。底部篋状工具による調整痕。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密、白色粒混る

K31号住居跡 (Fig. 324~327・PL. 115・116)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
方形	5.60 × 4.20	N- 89° -E	東壁やや南寄り	

K区東部中央に位置し、49~52K12~14の範囲にある。東側で35号、北西側で125号住居跡と重複している。新旧関係はこれより古い時期の所産である。南北方向に長軸をもち、平面形は南西隅が歪む方形を呈する比較的大規模の住居跡である。壁高は約20cmを測り直線的に立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良

好である。壁下の溝・貯蔵穴・柱穴などの施設は検出されていない。竈は東壁やや南寄りに付設され、燃焼部は方形に掘り込まれる。両袖には半裁の川原石・長方形に加工した凝灰岩を埋設し、天井には凝灰岩の加工材を架す。また燃焼部奥壁には角礫が据えられる。袖石間内法約50cm、燃焼部奥行き約60cmを測る。竈右脇には竈構築材と思われる川原石及び凝灰岩が散乱する。出土遺物は多く、砥石・鉄器・石製丸靱などが検出されている。

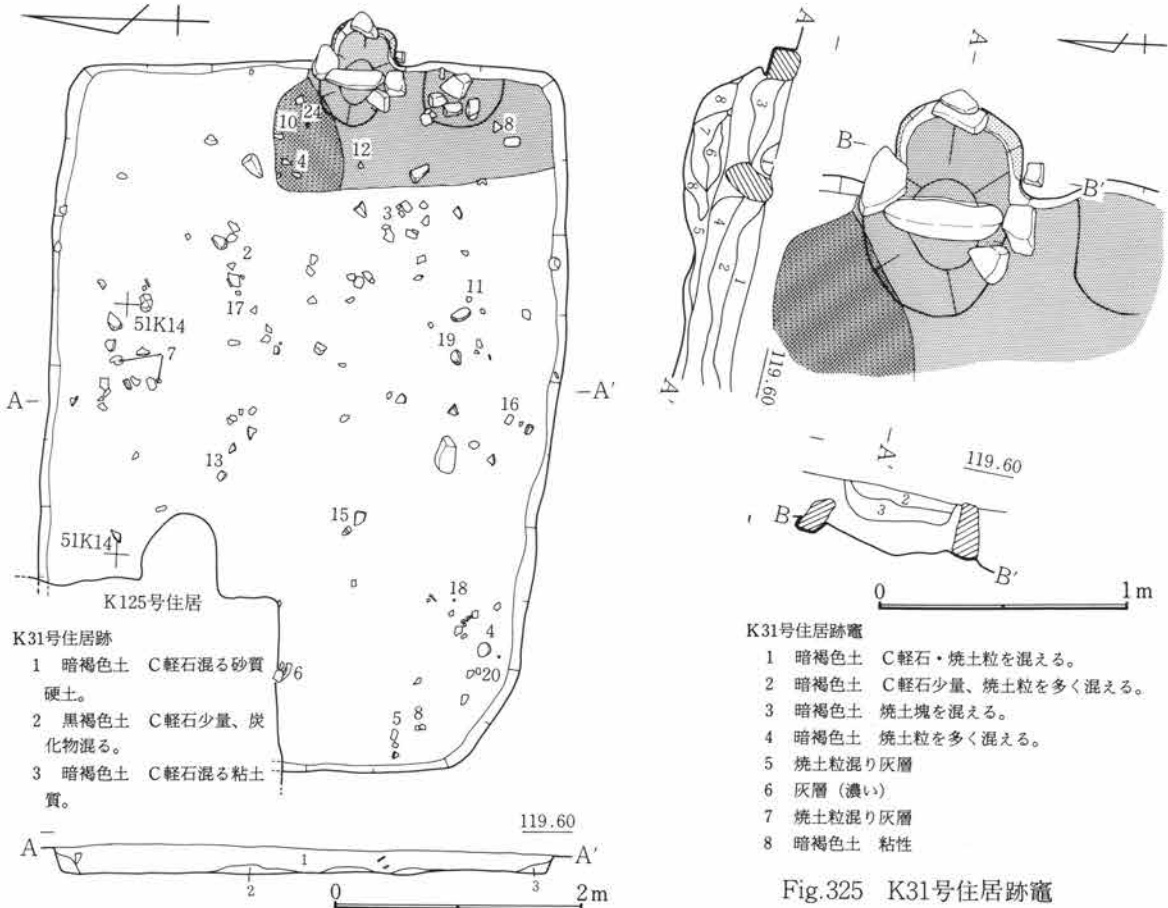


Fig.324 K31号住居跡

Fig.325 K31号住居跡竈

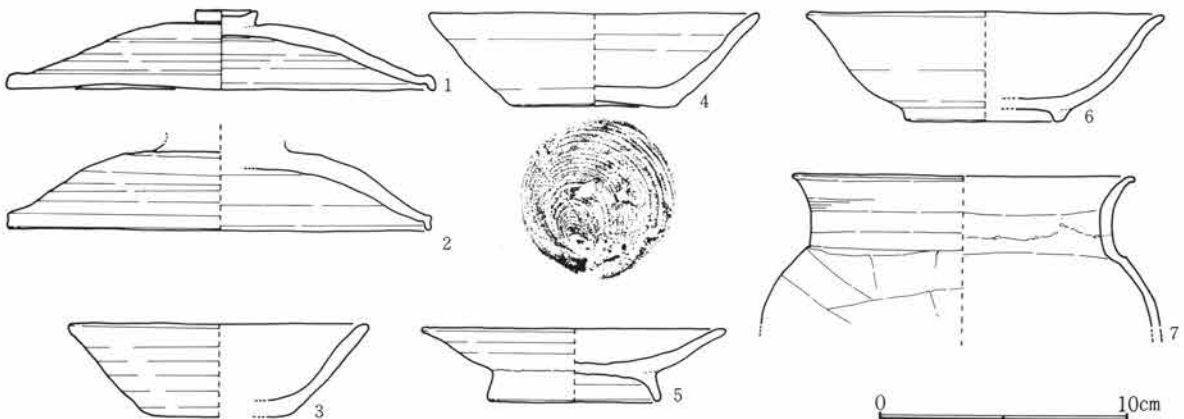


Fig.326 K31号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

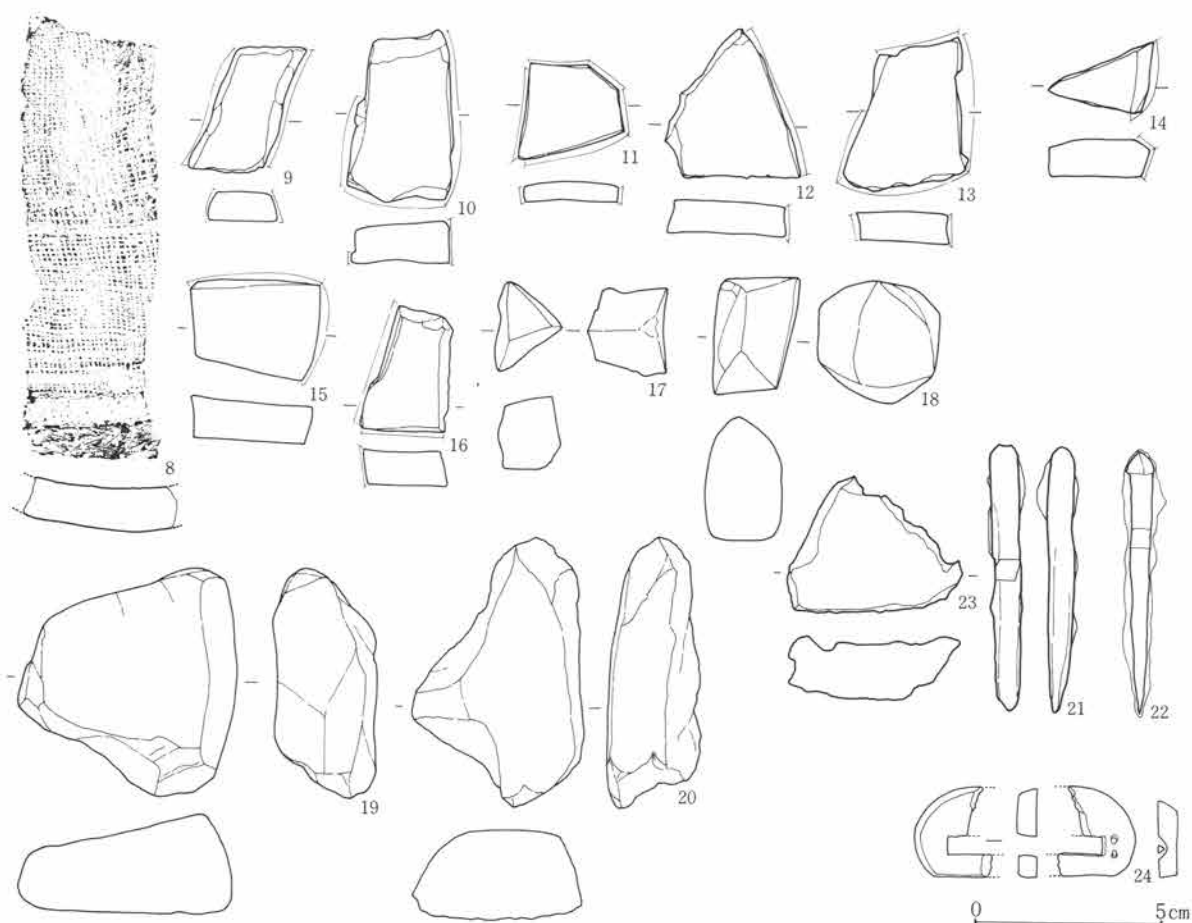


Fig.327 K31号住居跡出土遺物(2)

K 31号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
326-1 116-1	須惠器 蓋	⅓	17.2×-×3.1 摘径 2.5	南東部埋 土	天井部やや脹らみ、体部はやや外反気味。口縁は短かく水平になり端部は丸く屈して直に下る。環状摘。轆轤成形。天井部中心は回転糸切り、周辺は回転篋削り。	①やや軟 ②灰白 ③粗、小石混る
326-2 116-2	須惠器 蓋	⅓・摘 欠損	17×-×(3.1)	中央部埋 土	天井部やや脹らみ、体部外反気味。口縁部内湾して直に下る。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗黒色粒子浮く
326-3 116-3	須惠器 杯	⅓	12×6×3.7	東部埋土	体部上半は外反気味。口唇端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
326-4 116-4	須惠器 杯	⅓	13.4×6.8×3.6	埋 土	体部直線的に立ち上がり、口縁部は外反気味。見込部に「主」の墨書。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
326-5 116-5	須惠器 皿	小片	12.3×7×2.9	南東部床 面	腰部僅かに脹らみ体部は外反して開く。付高台。やや高く直線的に八の字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
326-6 116-6	須惠器 碗	⅓	14.3×6.4×4.3	南東部床 面	腰部丸く張り、口縁部は外反する。付高台、低く、断面台形、轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
326-7 116-7	土師器 台付甕	口縁～ 肩⅓	13.7×-×(6)	北中央埋 土	肩部やや張り、口縁部は直立した後外反する。口唇部は強く外屈、口縁部横撫で、内面横撫で篋撫で。胴部斜篋削。	①良好 ②灰赤 ③ やや粗、砂混る
327-8 116-8	瓦 平瓦	小片		南東部床 面	凹面粗い布目。	①軟燻 ②灰 ③密
327-9 116-9	須惠器 転用砥石		5×2.3×1.2 29.7g	東部埋土	2側面使用磨片。	①良 ②灰 ③やや 密
327-10 116-10	須惠器 転用砥石		5×3.5×1.3 31.1g	東部床面	2側面使用磨片。	①良 ②灰白 ③密
327-11 116-11	須惠器 転用砥石		3.8×4.3×0.8 17.7g	南部床面	5側面使用磨片。	①良 ②灰 ③密
327-12 116-12	須惠器 転用砥石		5.9×5.5×1.3 53.0g	竈前床面	1側面使用磨片。	①良 ②黒褐 ③密

K 31号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
327-13 116-13	須恵器 転用砥石		6.2×5×1.2 45.5g	西部埋土	4側面使用薬片	①良 ②灰白 ③密
327-14 116-14	須恵器 転用砥石		4.4×2.9×1.5 15.1g	埋土	1側面使用薬片	①良 ②灰白 ③粗
327-15 116-15	須恵器 転用砥石		5.3×4×1.5 48.7g	西部床面	2側面使用薬片	①良 ②灰白 ③粗
327-16 116-16	瓦 転用砥石		6.9×4.2×1.6 60.0g	南部埋土	3側面使用	①良好 ③粗
327-17 116-17	石製品 砥石		3×3.5×2.5 23.9g	中央部埋土	多面使用	流紋岩
327-18 116-18	石製品 砥石		4.8×3.1×5 93.4g	南西部埋土	多面使用	輝石安山岩(粗)
327-19 116-19	石製品 砥石		9×8.2×4 303.9g	埋土	1側面使用	輝石安山岩(粗)
327-20 116-20	石製品 砥石		10.6×6.9×3.5 237.4g	南西部埋土	2面使用	輝石安山岩(粗)
327-21	鉄製品	頂部欠損	7×0.5×—	先端部偏平		
327-22 116-22	鉄製品 角釘?		7×0.5×—	頂部肥大		
327-23	埴 埴小片			南中央部埋土	内面に鋼誘付着	
327-24 116-24	石 帯 丸 鞆	幅2.4 厚0.5		竈前方埋土	表面は粗い調整	蛇紋岩

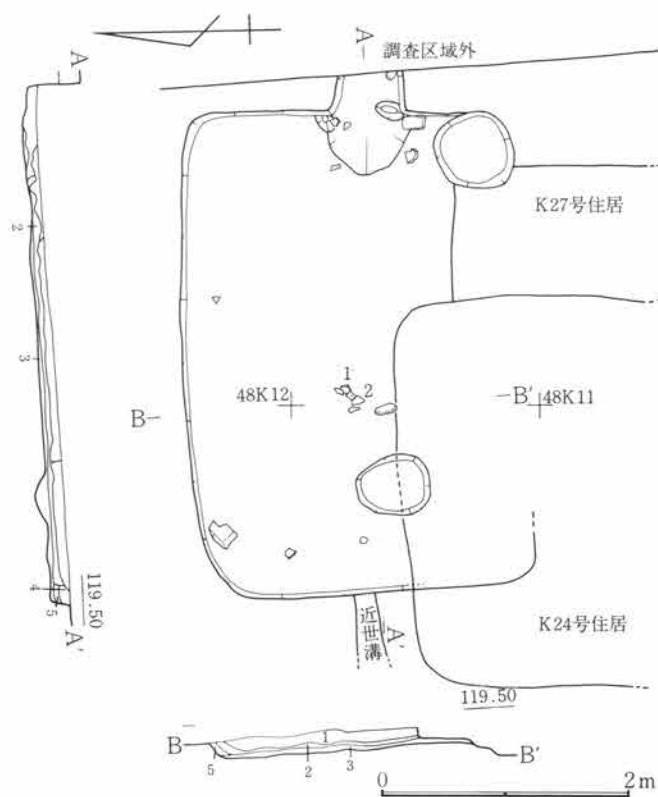
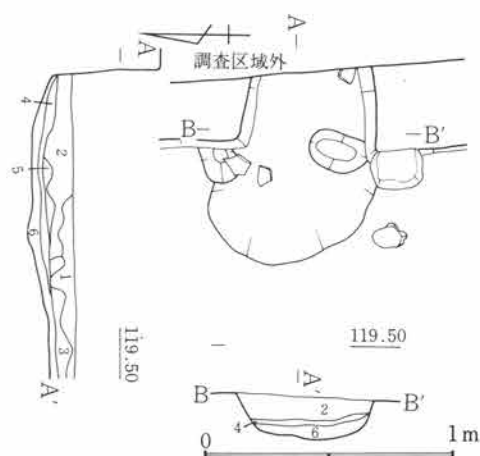


Fig.328 K32号住居跡



K32号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含み堅くしまる。
- 2 暗褐色土 焼土塊・灰混り。
- 3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 4 灰・焼土粒層
- 5 灰褐色土 粘性あり。
- 6 暗褐色土 焼土粒・灰混り粘性土。

Fig.329 K32号住居跡竈

K32号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多く混える。
- 2 暗褐色土 上層よりやや粘性のあり。
- 3 暗褐色土 部分的に焼土粒、炭化粒を混える
- 4 暗褐色土 細粒C軽石を混える。
- 5 暗褐色土 粘性強い。

第3章 K区の遺構と遺物

K32号住居跡 (Fig. 328~330・PL. 117)

K区東部やや南寄りに位置し、46~48K11・12の範囲にある。南西側及び南側と北西で24号・27号・35号住居跡と重複しており、24号より旧く、35号より新しいと考えられるが、27号との関係は確定できない。壁高は約12cmで浅い立ち上がりである。床面は平坦をなすがやや軟弱である。南東隅には貯蔵穴と考えられる径60cm・深さ23cmの土坑が穿たれる。また西壁寄りに径50×60cm・深さ約10cmの土坑が検出されている。竈は東壁中央部に付設されるが先端部は調査区域外に入る。右袖部には凝灰岩が埋設され、左袖部には埋設痕が検出されている。袖部内法約55cm・燃烧部奥行きは45cmまで確認される。出土遺物は少量である。

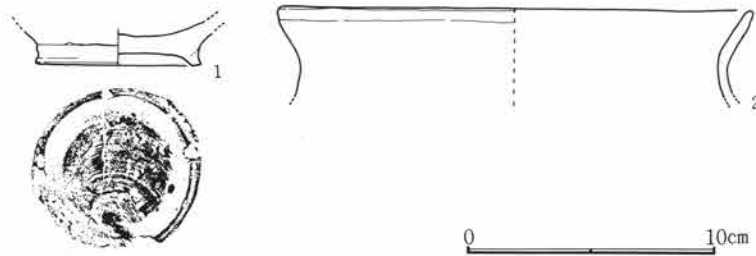


Fig.330 K32号住居跡出土遺物

K 32号住居跡出土遺物観察表

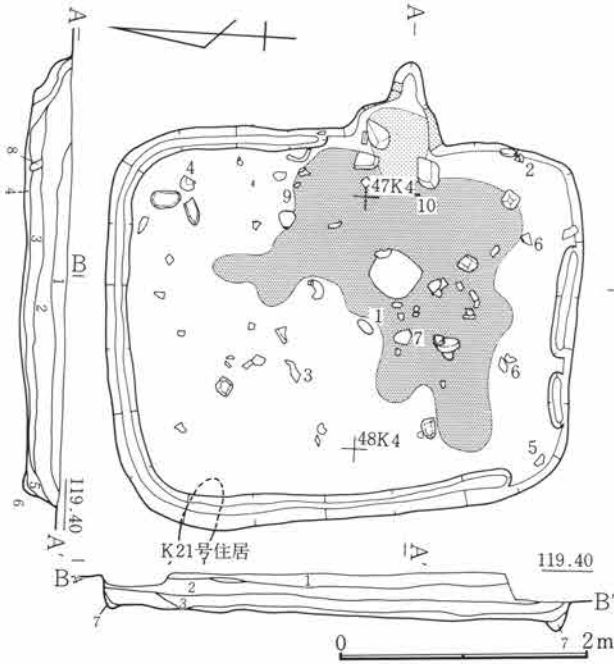
Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
330-1 117-1	須 恵 器	碗	底部	—×6.6×(1.8)	中央部床 面	付高台、短かく外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
330-2 117-2	土 師 器	壺	口縁部 ¼	19×—×(3.5)	中央部床 面	口縁部外反して立ち上がり、上半はやや内湾する。横撫で。	①良好 ②橙 ③粗

K 33号住居跡 (Fig. 331~333・PL. 118・119)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.79 × 3.18	N— 91° —E	東壁やや南寄り	

K区南東部に位置し、46~48K 3・4の範囲にある。南側で23号と、西側で24号住居跡の竈部分と重複するが、両者より古い時期の所産である。各壁の隅は丸味をもち隅丸方形を呈する。壁高は約30cmを測り、比較的良好に遺存する。床面は固く踏み締まり平坦をなす。床面と掘形では20cm程度の差があり貼り床状を呈する。掘形には炭化粒・淡黄色粘土塊を混じえる暗褐色土を埋土にして平坦面を作り、さらに4~5cmの厚さをもつ床土で全体を覆っている。壁下の溝は東壁南半と部分的に跡切れる南壁下を除き、東壁北半・北壁・西壁とも明瞭な形状で巡る。幅12~14cm・深さ約5cmを測る。竈は東壁やや南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれた燃烧部から段をもって短い煙道部が付く、袖部は東壁線よりやや内側に凝灰岩の加工材が埋設される。竈内から流出した灰層が西側床上に広く分布する。袖部内法約45cm、燃烧部奥行き約70cm、煙道部長さ27cmを測る。出土遺物は須恵器小形壺・鉄器などが検出している。

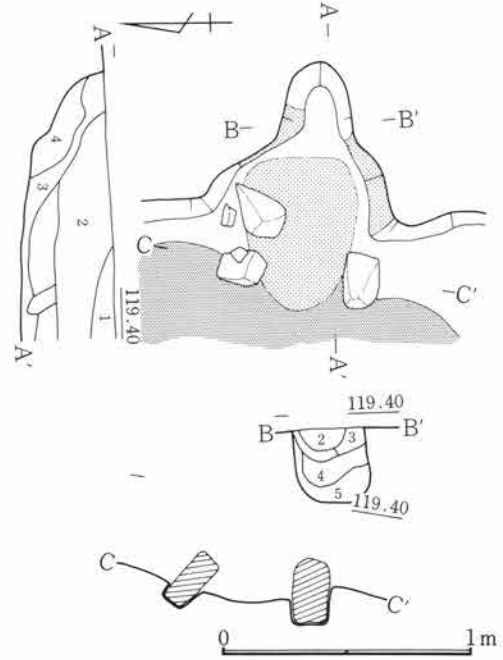
第2節 K区の竪穴住居跡と遺物



K21号住居

- K33号住居跡
- 1 暗褐色土 大粒C軽石を含む。
 - 2 暗褐色土 C軽石を多量、竈近く焼土粒を含む。
 - 3 暗褐色土 焼土粒を含む。
 - 4 暗褐色土 灰を含む。
 - 5 暗褐色土 粘性あり。
 - 6 暗褐色土 黄色粘土を含む粘性。
 - 7 暗褐色土 粘性でしまりあり。
 - 8 灰層。

Fig.331 K33号住居跡



K33号住居跡竈

- 1 暗褐色土 大粒C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 3 焼土
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

Fig.332 K33号住居跡竈

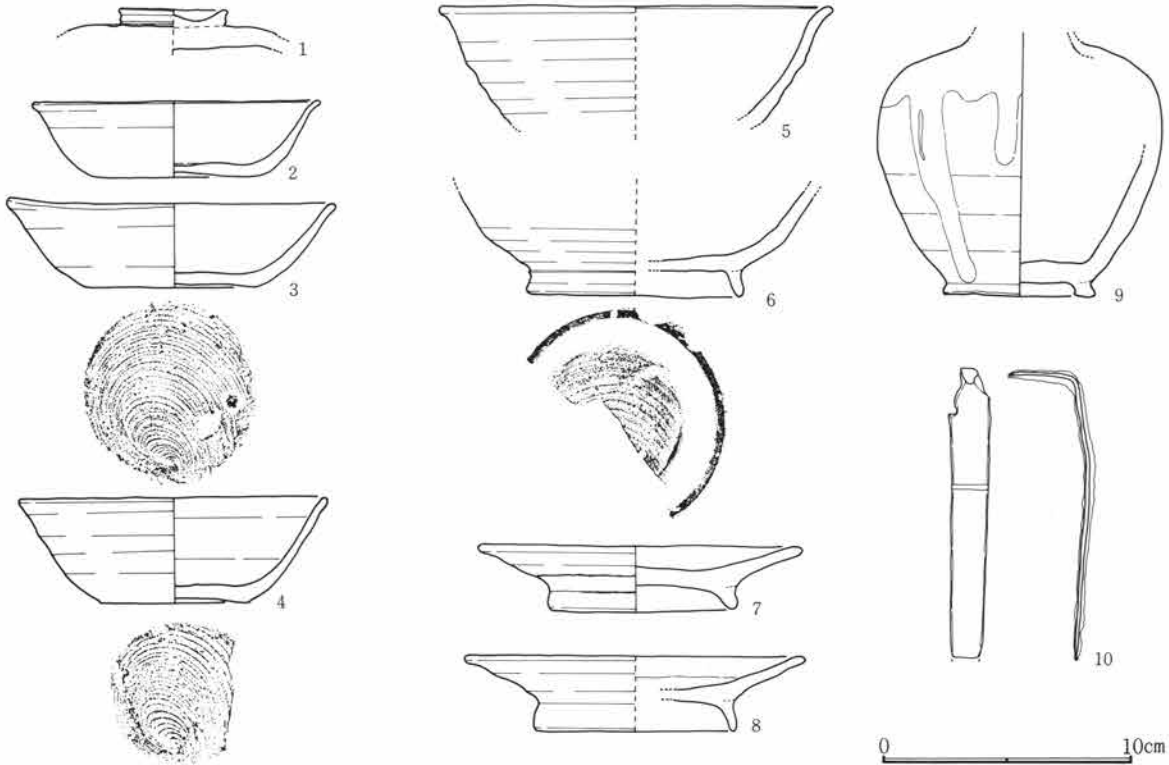


Fig.333 K33号住居跡出土遺物

第3章 K区の遺構と遺物

K 33号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	種 種	部 位	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
333-1 118-1	須恵器 蓋	摘	残存量	径4.4×-×(2.6)	中央部掘形	環状摘。口唇部外反。轆轤成形。天井部回転寛削り。体部と摘部の胎土が異なる。	①軟 ②灰 ③摘密 体部白色粒子混る
333-2 118-2	須恵器 杯	⅔	⅔	11.9×6.1×3	南東部壁際	腰部丸く張り、口縁部は薄く、口唇部外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②暗青灰 ③粗、小石多く混る
333-3 118-3	須恵器 杯	完	完	13.2×7×3.3	中央部埋土	腰部僅かに丸く、口縁部は緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②青灰 ③密
333-4 118-4	須恵器 杯	⅔	⅔	12.5×6×4.2	北東部床面	体部やや脹らみ気味で内湾して立ち上がる。口唇部内湾して外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗、小石混る
333-5 118-5	須恵器 碗	⅔・底部欠損	⅔・底部欠損	15.9×-×(4.7)	南西部床面	体部丸く張り、口縁部は外反する。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
333-6 118-6	須恵器 碗	底部⅔	底部⅔	-×8.8×(4)	南部床下	腰部張る。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
333-7 118-7	須恵器 皿	⅔	⅔	13×7.6×2.8	床下	全体に肥厚。体部直線的に開く。付高台。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②褐灰 ③密
333-8 119-8	須恵器 皿	⅔	⅔	13.8×8.2×3	床下	体部直線的、口縁部僅かに外反。付高台、やや高く、内湾して僅かに開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、軟 ②褐灰 ③密
333-9 119-9	須恵器 瓶	口頸部欠損	口頸部欠損	-×6×(10.4) 胴径11.3	東部埋土	最大径は胴部上半にあり、肩部丸く張る。付高台、底部に「X」の窠描き。胴下半は回転糸切り。肩部自然釉。	①良好 ②赤褐 ③密
333-10 119-10	鉄製品 小片	小片	小片	長11.5 幅1.5 厚0.2	電手前床面	先端部細くなり、L字状に折れる。	

K 35号住居跡 (Fig. 334・335・PL. 119)

K区東部中央に位置し、47~49K11~14の範囲にある。17号・32号住居跡と重複し、両者より古い時期の所産である。南・北・東壁の殆どが消失しており全体の様相は知りえない。また竈・炉跡などの施設も検出されず住居跡と確定する根拠はない。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。規模は南北長約3.5m東西長約3.2mを測り、南北軸は西へ約15°程度振れている。壁高は浅く約10cmを測り、床面は総じて軟弱である。東部に径1m・深さ10cmの楕円形土坑が検出されているが当跡に伴うかは不明である。出土遺物は少量である。



Fig.334 K35号住居跡

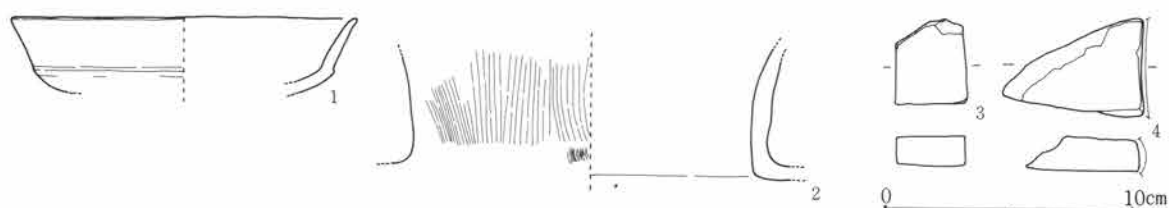


Fig.335 K35号住居跡出土遺物

K 35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
335-1 119-1	土 師 器 杯	小 片	14×—×(3) 口径高 2	埋 土	口縁部直線的に外傾した後、口唇部僅かに外屈する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
335-2 119-2	土 師 器 甕	頸部片	頸基径14.5 現高 5	北西隅床 面	肩部ほぼ水平に張る。頸部は短かく直立した後、外反する。縦刷毛調整。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③密、小石混る
335-3 119-3	石 製 品 砥 石		(3.4)×3×1.2 35.0g	西部埋土	多面使用。	流紋岩(砥沢?)
335-4 119-4	須 恵 器 転用砥石		5.6×4×1.3 21.5g	埋 土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や や粗

K 36号住居跡 (Fig. 336~339・PL. 120・121)

K区南東部に位置し、47~49K 5~8の範囲にある。21号・28号・38号住居跡と重複しており、21号・28号より旧く、38号より新しい時期の所産である。竈・炉跡などの生活施設が検出されず住居跡として確定はできない。南北方向に長軸をもち、南壁がやや短く多少膨らんだ方形を呈する。南北長約4.8m、東西長は北壁で3.46m、南壁で3.1mを測る。南北軸は西へおよそ6°振れている。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦で固く踏み締まる。床下の掘形面は円形の土坑状の落ち込み多数が検出され、焼土粒・炭化粒・浅間C軽石粒を含む粘質暗褐色土で埋められ、平坦面を形成する。床面は厚さはないものの固い暗褐色土の面を成す。

出土遺物は比較的多く、瓦片・砥石類が目立つほか刀子・鉄鏃など鉄製品が多く、図示出来なかったものを加えると14点に及ぶ。当跡は完成品鉄器の量や小型砥石の存在から鉄品仕上行程か再調整のための工房跡的な性格も考えられる。

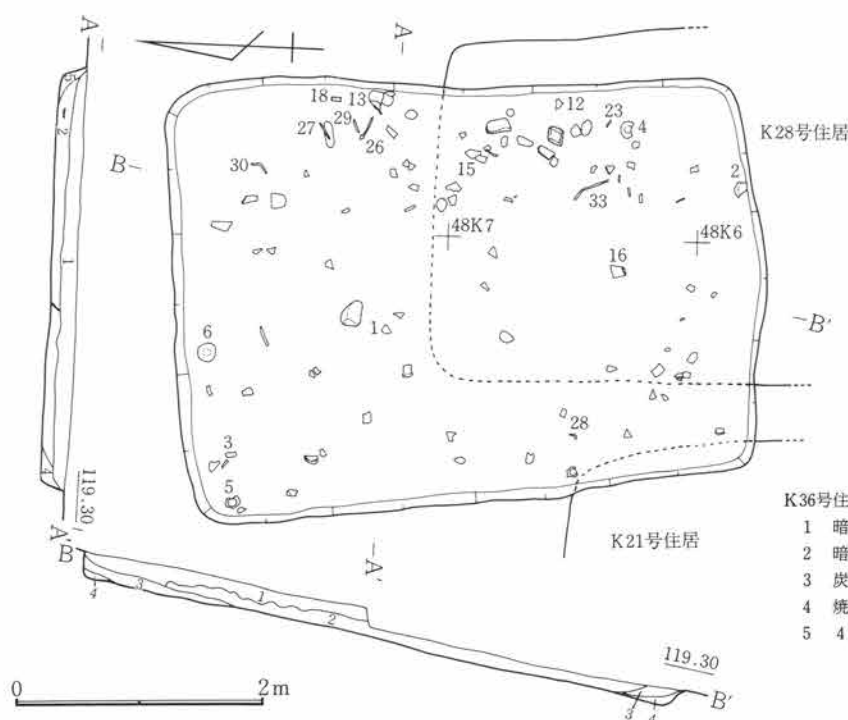


Fig.336 K36号住居跡

- K36号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化物含む砂質土。
 - 2 暗褐色土 1層より軽石細かく土器片含む。
 - 3 炭化塊含む弱粘性土。
 - 4 焼土塊 暗褐色土塊混入。
 - 5 4層に似て弱粘性土。

第3章 K区の遺構と遺物

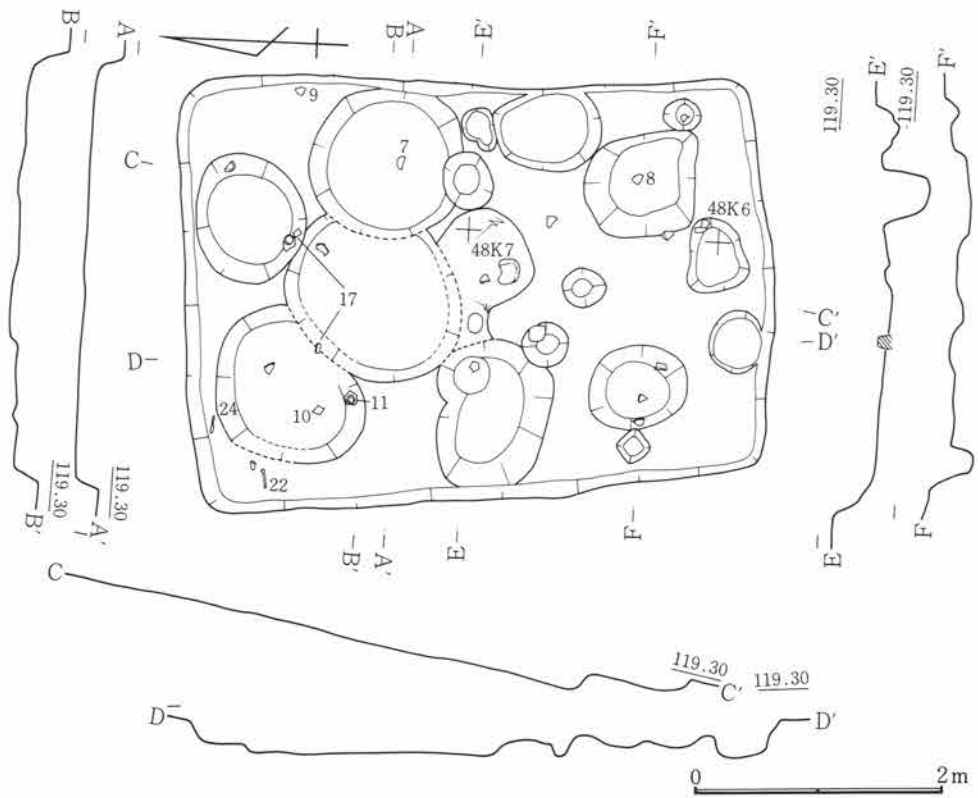


Fig.337 K36号住居跡掘形

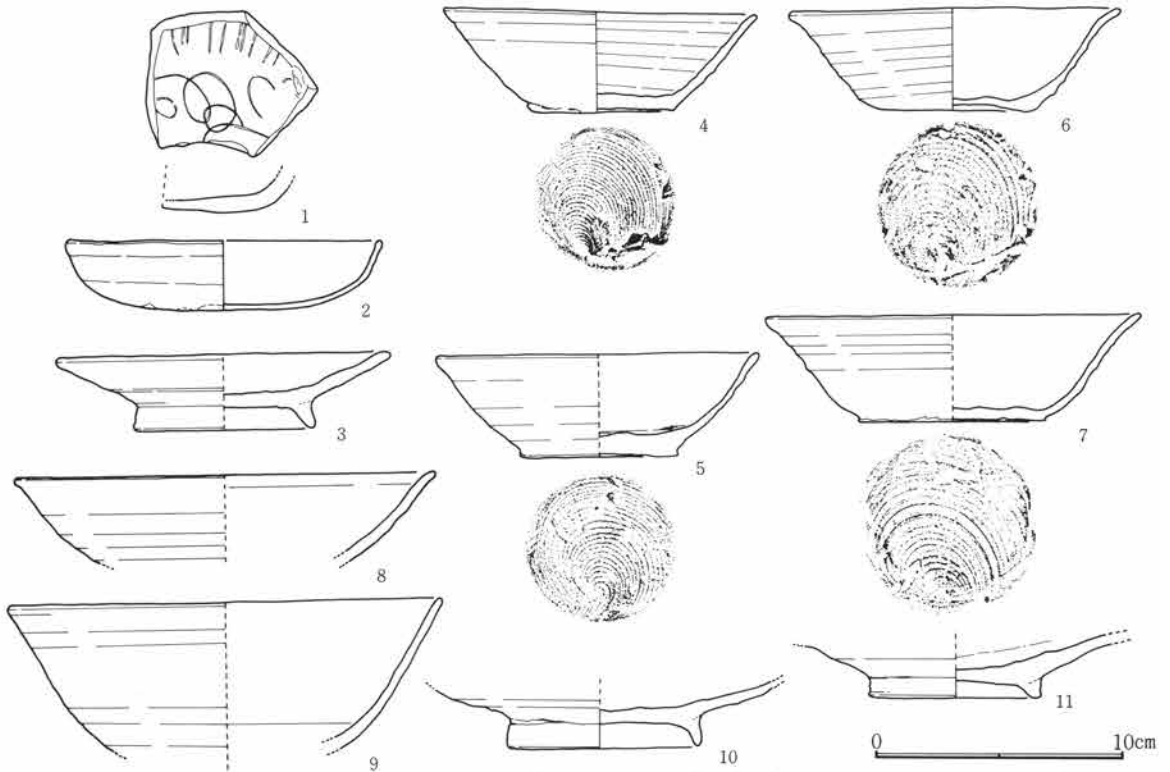


Fig.338 K36号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の堅穴住居跡と遺物

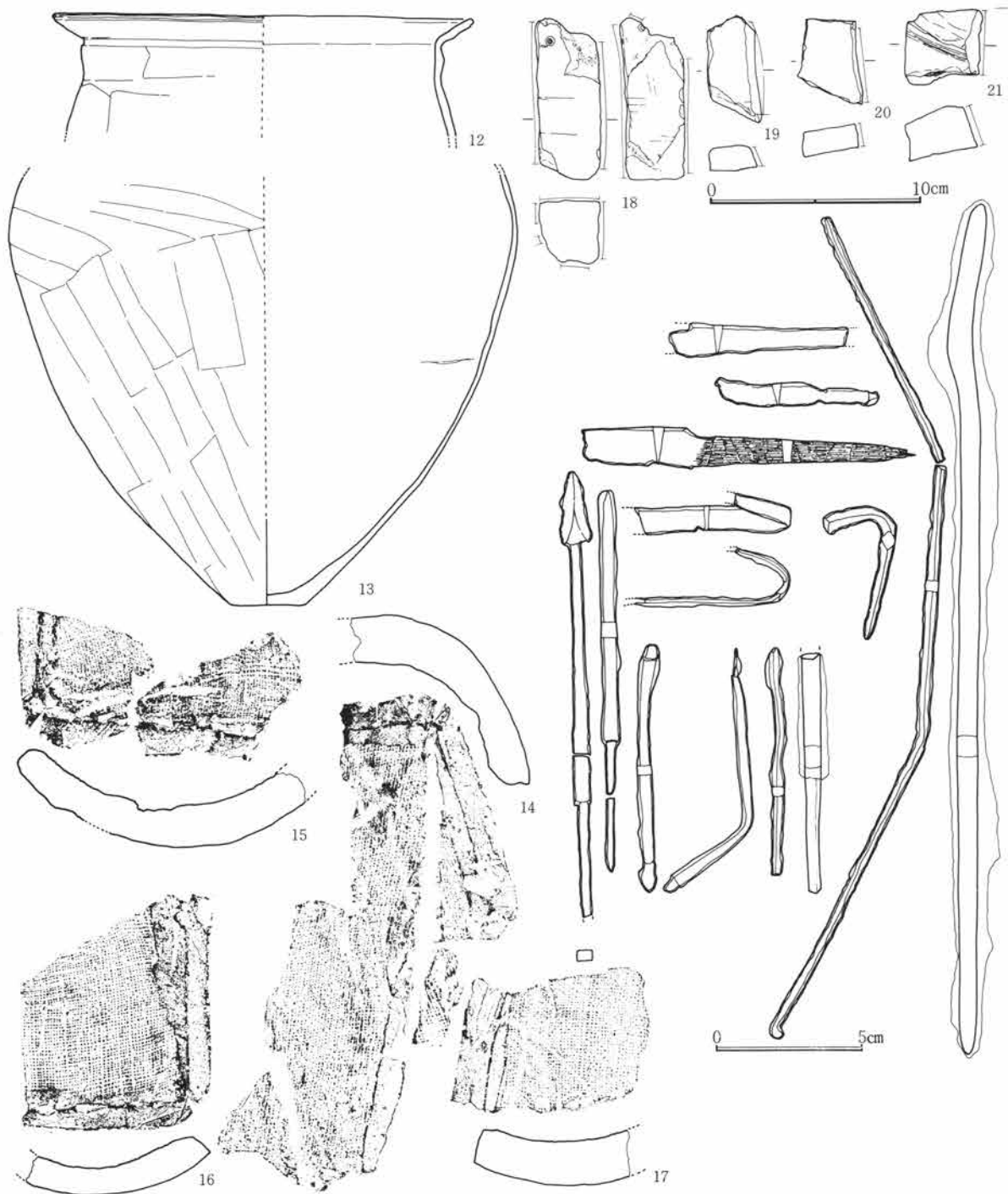


Fig.339 K36号住居跡出土遺物(2)

K 36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
338-1 120-1	土 師 器 杯	底部 $\frac{1}{4}$	—×—×—	中央部床 面	内面体部放射状、見込部螺旋状暗文。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密 茶、褐色混入物
338-2 120-2	土 師 器 杯	$\frac{1}{2}$	12.8×—×2.8	南壁際上 面	全体に薄手。腰部丸味、体部やや外傾して立つ。口唇部丸 まる。体部撫で、底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、小石混る
338-3 120-3	須 恵 器 皿	完	13.4×7.2×3	北西部埋 土	体部直線的。付高台ハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや密
338-4 120-4	須 恵 器 杯	$\frac{1}{2}$	12.6×5.9×4	南東部床 面	体部直線的。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密

第3章 K区の遺構と遺物

K 36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
338-5 120-5	須惠器 杯	1/2	13.0×6.4×4.1	北西部埋 土	底部肥厚。体部やや内湾し、口縁部僅かに肥厚して外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
338-6 120-6	須惠器 杯	完	13.4×6.2×4.1	北壁際中 央床面	体部僅かに内湾。口縁部大きく外反。全体に薄手。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗、砂混る
338-7 120-7	須惠器 杯	1/2	15.2×7.6×4.2	東部床下	腰部僅かに丸味。体部外反する。轆轤成形。右回転糸切り。全体に薄手。	①良好 ②灰白 ③やや密、砂混る
338-8 120-8	土師器 内黒腕	1/4・底 部欠損	17.0×—×(3.5)	南東部床 下	体部内湾気味に大きく開き、口縁部僅かに外反。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、細粒混る
338-9 120-9	須惠器 腕	1/4・底 部欠損	17.4×—×(5.8)	東壁際床 下	腰部丸く、体部直線的。轆轤成形。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密、小石混る
338-10 120-10	須惠器 腕	体部欠 損	—×7.8×(2.5)	北西部床 下	腰部強く張る。付高台、内湾して僅かに開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
338-11 120-11	須惠器 皿?	底部1/2	—×7×(2.5)	北西部床 下	腰部から外反気味に開く。付高台、直に下った後、端部僅かに外屈。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗、爽雑物多く混る
339-12 120-12	土師器 甕	口縁部 1/2	12×—×(5.5)	東壁際埋 土	胴部張りなく、上端は直立して頸部の様相を呈す。口縁部は強く外屈し大きく開く。口唇下部に凹線。胴部横篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、爽雑物混
339-13 121-13	土師器 甕	1/2・口 縁欠損	—×3.×(20) 最大径胴上位22	東壁際床 面	胴部やや脹らみ気味、胴部最大径は上位にあり強く張る。上位斜、中～下位縦篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、黒色細粒混る
339-14 121-14	瓦 丸瓦		厚2	南東部床 面	凹面布目。側縁篋調整。	①酸化気味、良好 ②黄褐 ③やや粗
339-15 121-15	瓦 平瓦		厚2	東中部床 面	凹面布目。側縁篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗
339-16 121-16	瓦 平瓦		厚2	南中部床 面	凹面布目。側縁篋調整。	①酸化 ②明赤褐 ③やや粗
339-17 121-17	瓦 平瓦		厚2.1	北部床下	凹面布目。側縁篋調整。	①良好 ②暗灰黄 ③やや粗
339-18 121-18	石製品 砥石		7.5×3×3 96.6g	東壁際床 面	表裏に未通の穿孔痕あり。	流紋岩(砥沢?)
339-19 121-19	須惠器 転用砥石		5×2.5×1.2 17.6g	埋 土	1側面使用。甕片。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
339-20 121-20	須惠器 転用砥石		4×3×1.1 19.9g	埋 土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
339-21 121-21	須惠器 転用砥石		3.5×3.5×2 27.1g	埋 土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
339-22 121-22	鉄製品 刀子		長(6.1) 幅1	北西部床 下	刃部と柄部の境不明瞭。	
339-23 121-23	鉄製品 刀子?		長(5.5) 刃幅0.7 柄幅0.5	南東部床 面	刃幅狭い。	
339-24 121-24	鉄製品 刀子		長(11.4) 刃幅1.1 柄長7.5 幅0.8	北壁西床 下	柄部に木質残る。	
339-25 121-25	鉄製品 不明		長(5.3) 幅0.8	北西部床 下	板状。片端U字に曲がる。	
339-26 121-26	鉄製品 鉄鏃	柄部端 欠損	長(15.2) 頸長8.7 頂長2.5	北東部床 面	長頸三角鏃。	
339-27 121-27	鉄製品 鉄鏃	頂部欠 損	長(12.8) 頸長(8.5) 柄長4.4	北東部床 面	長頸鏃。	
339-28 121-28	鉄製品 鉄鏃	柄部欠 損	長(8.3) 頸長7	南西部床 面	尖根式。	
339-29 121-29	鉄製品 不明		長(7.7) 径0.3×0.4	北東部床 面	断面方形。頸部折れ曲がる。	
339-30 121-30	鉄製品 角釘		長4.5 径0.4	北東部床 面	頂部付近で折れ曲がる。	
339-31 121-31	鉄製品 不明		長8.1 径0.5×0.7	北中部床 面	棒状品、断面方形。	
339-32 121-32	鉄製品 不明		長28.6 径0.7	埋 土		
339-33 121-33	鉄製品 不明		長27.7 径0.4	南東部床 面	コの字状に折れ曲がる。1端部短かく折れ曲がる。	

K37号住居跡 (Fig. 340~342・PL. 122・123)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.38 × 3.41	N-83.5°-E	東壁やや南寄り	円形 (60.8 × 60.3 × -)

K区東南端に位置し、46・47K 0～1の範囲にある。西側で20号住居跡と、重複しているがこれより古い時期の所産である。掘形は深く壁高約44cmを測り立ち上がりは良好である。床面は平坦をなし固く踏み締まる。南東隅には円形の貯蔵穴が穿たれる。壁下の溝は貯蔵穴のある南東部と東壁の一部を除き各壁下に明瞭

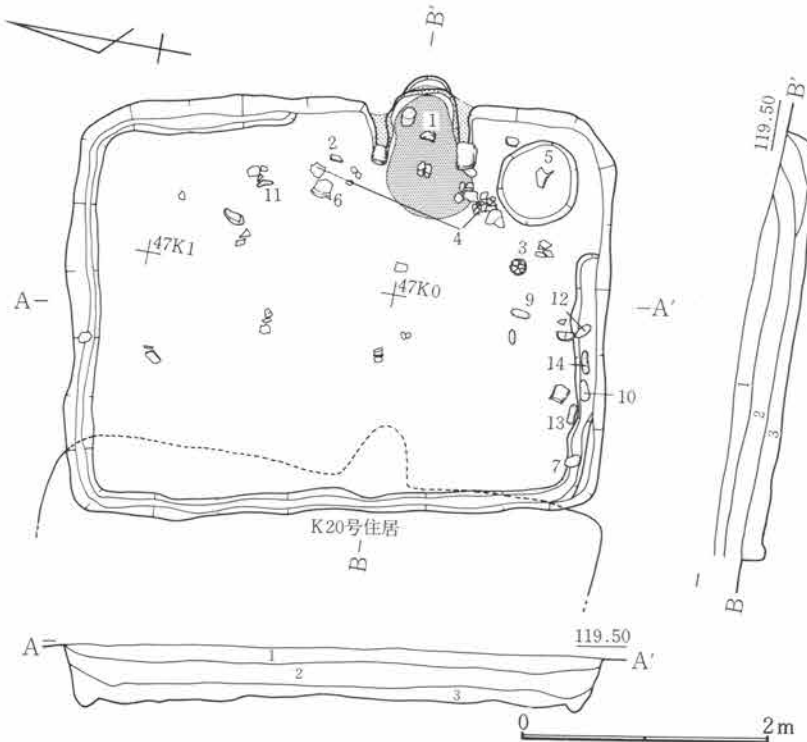


Fig.340 K37号住居跡

な形で巡る。幅10～18cm・深さ4～10cmを測る。竈は東壁のやや南寄りに付設され、袖部が住居内に張り出す形態をもつ。袖部は淡黄色粘土粒を混じえる粘性の強い暗褐色土をもって構築され、先端部には凝灰岩の加工材を埋設している。燃焼部は楕円形を呈し、住居内にある。煙道部は調査区域外にかかるため検出されていないが、燃焼部奥壁にその痕跡がみられ東壁外に延びると考えられる。袖先端部内法約55cm、燃焼部奥行き約70cmを測る。出土遺物は蓋受けのある須恵器杯などのほか、南壁際に楕円形の川原石が集中して検出されている。

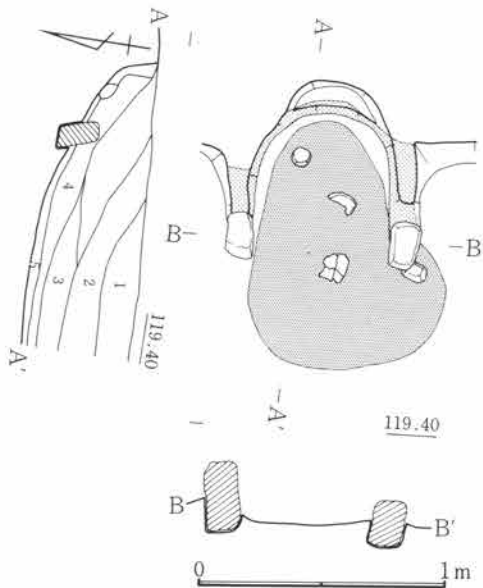


Fig.341 K37号住居跡竈

K37号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含む砂質。
- 2 暗褐色土 C軽石を多く含む。
- 3 暗褐色土、上位にC軽石を少量含む。

K37号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含む砂質。
- 2 暗褐色土 C軽石を多く含む。
- 3 暗褐色土 上位にC軽石を少量含む。
- 4 褐色土 粘性あり。
- 5 暗褐色土

第3章 K区の遺構と遺物

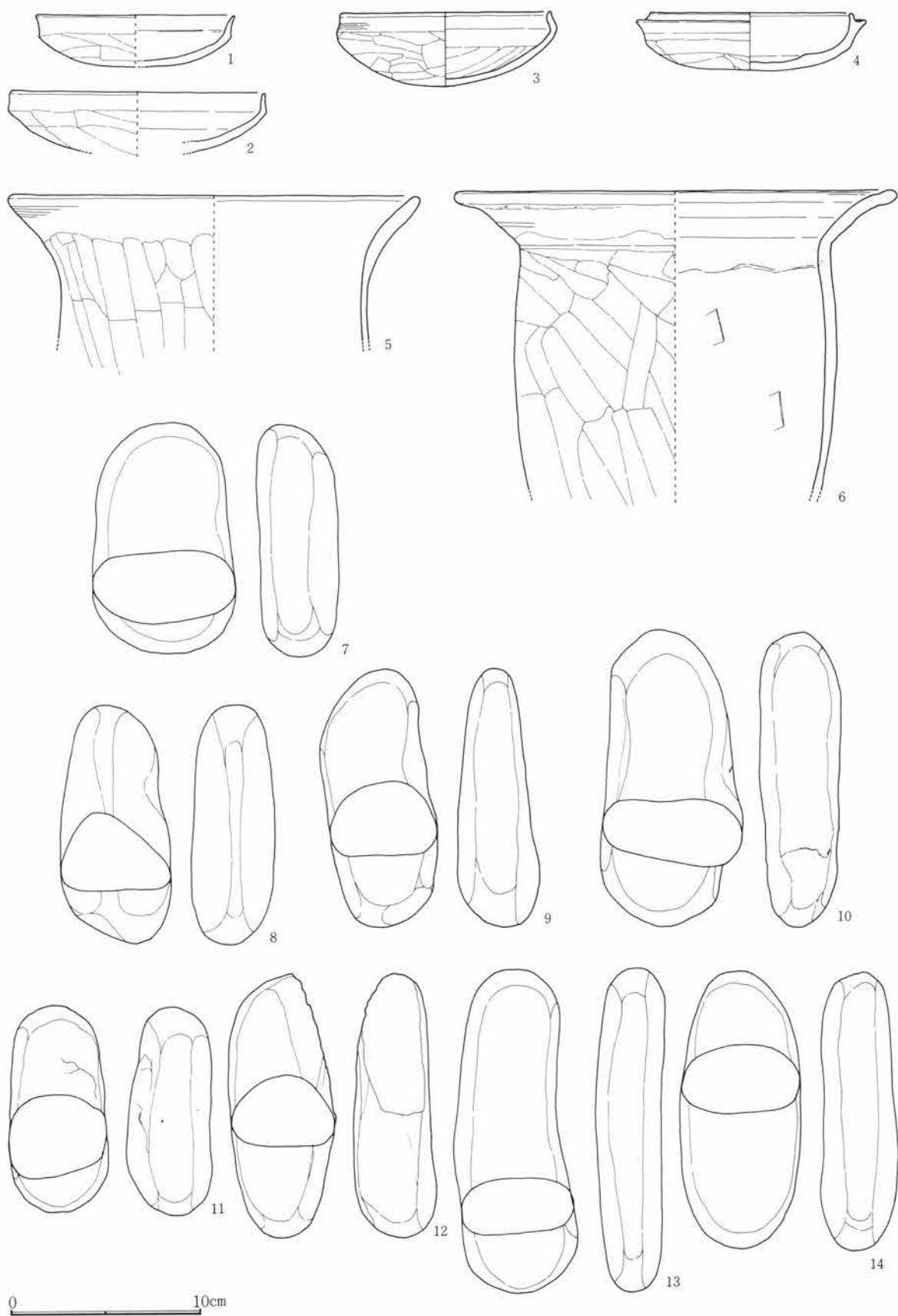


Fig.342 K37号住居跡出土遺物

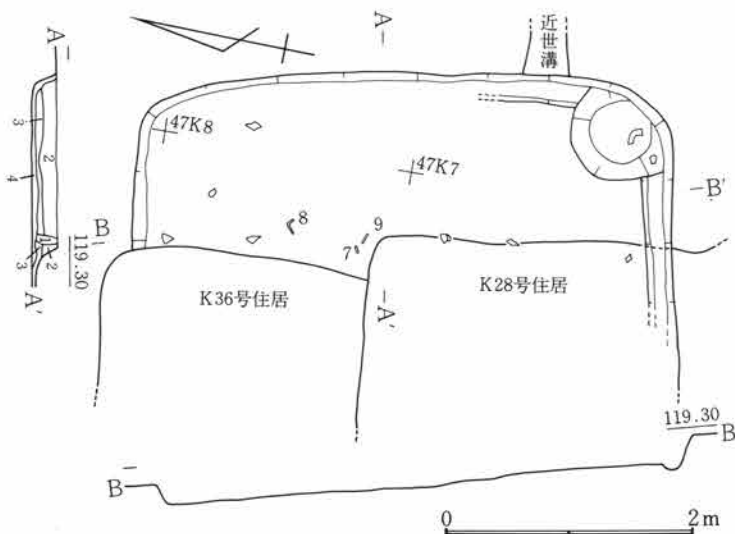
K 37号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
342-1 122-1	土師器 杯	1/2	10.4×-×(2.7) 口径高 1	竈内	わずかに突出する受け部から外反する口縁。口唇部は尖る。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
342-2 122-2	土師器 杯	1/4	13.4×-×(3) 口径高 1	東央部床 面	口縁部は僅かに外反して直立する。口唇部は細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
342-3 122-3	土師器 杯	完	10×-×3.8 口径高 1	南部床面	体部深い。口縁部内傾し、口唇部は小さく外反。口縁部横撫で、底部篋削り。内面篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③密
342-4 122-4	須恵器 杯	完	10.7×-×3 受け部径 12	南壁際床 面	口縁は内湾気味に丸まり直立。受け部は短かく外傾する。端部は丸い。底部手持篋削り。平底気味。	①良好 ②灰白 ③やや粗、小石混る
342-5 122-5	土師器 甕	口縁～ 胴1/2	21.6×-×(7.5)	貯蔵穴埋 土	胴部張りなく長胴を呈す。口縁部は肥厚し外反して立ち上がり上半はやや内湾する。端部丸い。口縁横撫で胴篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③粗
342-6 122-6	土師器 甕	口縁～ 胴1/4	23.2×-×(15.5)	東央部床 面	胴部張り少なく長胴を呈す。口縁部に外反して大きく開く口唇部は肥厚し丸い。口縁横撫で。胴部斜、縦篋削り。	①良好 ②橙 ③粗
342-7 123-7	石		12×4.1×3.6 540g	南西部壁 際床面		輝石安山岩(粗粒)
342-8 123-8	石		12.3×5.7×4.3 360g	南央部床 面		溶結凝灰岩
342-9 123-9	石		13.3×5.6×4.3 400g	南央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
342-10 123-10	石		15.3×7.3×4.2 650g	南壁際床 面		ひん岩
342-11 123-11	石		10.7×5.2×4.4 350g	東央部床 面		石英閃緑岩
342-12 123-12	石		13.6×5.5×4.2 380g	南壁際床 面		石英閃緑岩
342-13 123-13	石		16.7×3.4×2.9 520g	南壁際床 面		輝石安山岩(粗粒)
342-14 123-14	石		14.4×6.1×3.6 460g	南壁際床 面		溶結凝灰岩

K 38号住居跡 (Fig. 343・344・PL. 123・124)

K区東部南寄りに位置し、46・47K 6～8の範囲にある。28号・36号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。西半部は36号住居跡によって消失しており全体の様相は不明である。また竈・炉跡などは検出されず、住居跡としての確定はできない。平面形は隅丸の方形を呈すると考えられる。南北長約4.3mを測り、南北軸は西へおよそ9°の振れをもつ。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは比較

的良好である。南壁から東壁下にかけて幅約14cm・深さ約5cmの溝が巡る。また南東隅には径70cm・深さ約10cmの楕円形の土坑が穿たれる。出土遺物は転用砥石・鉄製攻め具・角釘などが検出されている。



K38号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 1層より軽石が少ない。
- 3 暗褐色土 黄褐色土塊をわずかに混入。
- 4 暗褐色土 黄褐色土塊を多く含み粘性ある。

Fig.343 K38号住居跡

第3章 K区の遺構と遺物

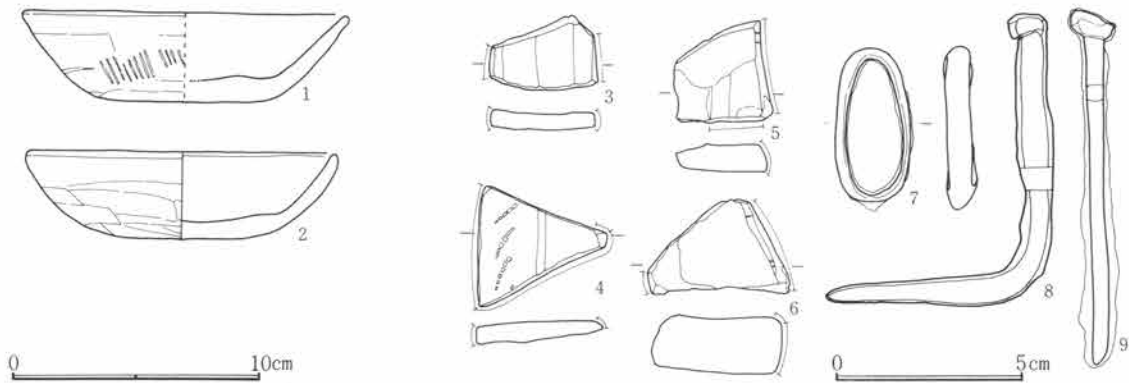


Fig.344 K38号住居跡出土遺物

K 38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
344-1 124-1	土師器 杯	1/2	13.1×7.8×3.5	埋 土	やや肥厚。体部直線的に立ち上がり、口唇部は丸まる。見込部円板状。体部・底部篋削り。	①良好 ③密	②鈍い赤褐
344-2 124-2	土師器 杯	完	12.6×4.5×3.5	南東部埋 土	腰部から体部にかけて丸味をおび、口唇部は僅かに内湾。見込部円板状。体部・底部篋削り。	①良好 ③密	②鈍い橙
344-3 124-3	須恵器 転用砥石		4.4×3×0.6 115g	埋 土	2側面使用。瓶片。	①良好 ③密	②灰 ③やや粗
344-4 124-4	須恵器 転用砥石		4.8×5.2×0.8 17.2g	埋 土	4側面使用。瓶片。	①良好 ③密	②灰白 ③やや密
344-5 124-5	須恵器 転用砥石		4×4×1 19.3g	埋 土	2側面使用。壺片。	①良好 ③密	②灰 ③やや密
344-6 124-6	須恵器 転用砥石		5.7×3.5×2.3 51.5g	埋 土	2側面使用。壺片。	①良好 ③密	②灰 ③やや粗
344-7 124-7	鉄製品		4×2×0.7	中央部床 面	環状。		
344-8 124-8	鉄製品 角 釘		長12.1 径0.7×0.6	中央部床 面	頂部脹らみL字に折れ曲がる。		
344-9 124-9	鉄製品 角 釘		長9.5 径0.4	中央部床 面			

K 40号住居跡 (Fig. 345・346・PL. 124・125)

K区東部南寄りに位置し、46・47K 2～5の範囲にある。23号・33号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。西半は33号住居跡によって消失しておりさらに東半は調査区域外にかかり全体の様相は不明である。比較的大

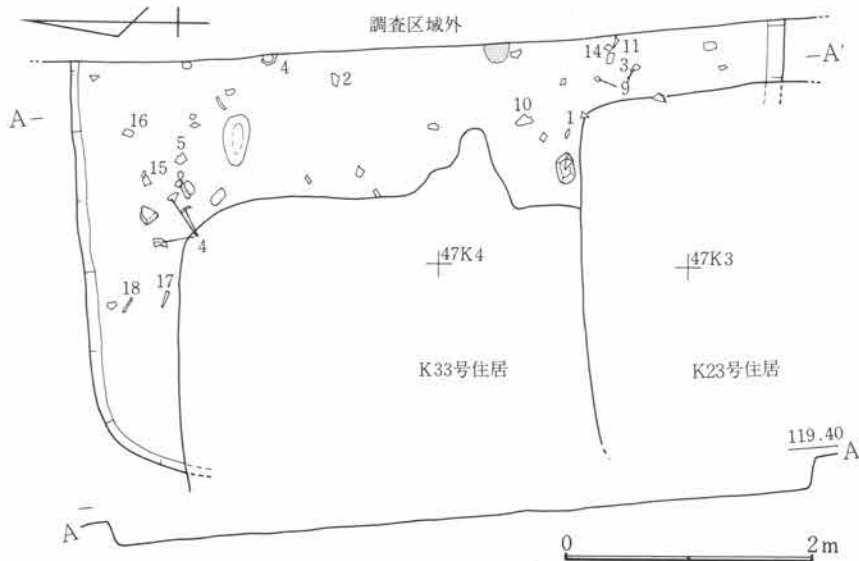


Fig.345 K40号住居跡

形の方形を呈すると考えられ、南北長約5.6mを測り、北壁を基軸にする南北軸は西へ6°の振れをもつ。壁高は約24cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。床下からは径14～30cm・深さ10cm前後の多数の穴が検出されているが規則的な様相は窺われない。出土遺物は鉄器・転用砥石などが検出されている。

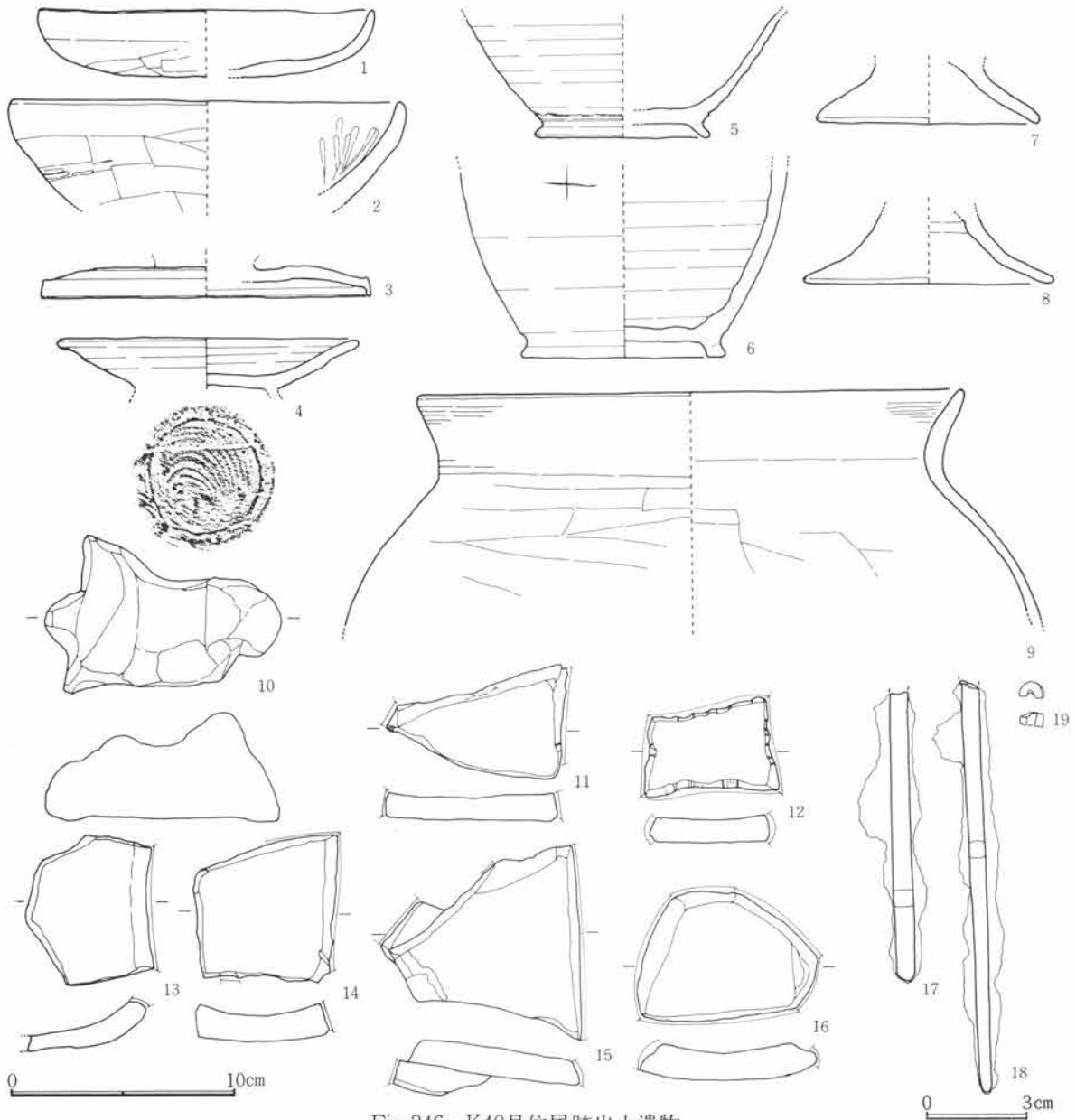


Fig.346 K40号住居跡出土遺物

K 40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
346-1 124-1	土 師 器 杯	小 片	14.8×-×3	南央部埋 土	体部浅く、内湾気味に外傾する。口縁部横撫で、底部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
346-2 124-2	土 師 器 杯	小 片	17.5×-×4.5	中央部埋 土	肥厚し、体部内湾するが脹り少なく立ち上がる。口縁部やや直立気味。口縁部横撫で、体部寛削り、内面放射状寛磨。	①良好 ②橙 ③密
346-3 124-3	須 恵 器 蓋	1/2・摘 欠損	14.6×-×(1.3)	南央部埋 土	天井部平らで全体に偏平。口縁部直下に折れ、端部鋭い。天井部回転寛削り。	①良好 ②灰 ③密
346-4 125-4	須 恵 器 皿	高台欠 損	13.5×-×(2.3)	北央部埋 土	体部直線的で口縁部外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密
346-5 125-5	須 恵 器 椀	1/2・口 縁欠損	-×7.8×(5.2)	北央部埋 土	体部やや脹らみ気味で口縁部は外反する様相。付高台、強く外反して開く。	①良好 ②灰白 ③ やや密
346-6 125-6	須 恵 器 瓶	上半欠 損	-×9.2×(8.3)	北央部埋 土	胴部やや脹りをもつ。内面に黒色付着物。付高台、やや短かく、上端面水平。轆轤成形。静止糸切りか。	①やや軟 ②灰白 ③やや密

第3章 K区の遺構と遺物

K 40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
346-7 125-7	土師器 高付甕	台部 $\frac{1}{2}$	—×10×(2.5)	埋 土	やや内湾気味に開く。	①良好 ②淡赤橙 ③密、黒色粒混る
346-8 125-8	土師器 台付甕	台部 $\frac{1}{2}$	—×11.1×(3)	埋 土	脚部強く外反して開く。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
346-9 125-9	土師器 甕	口縁～ 胴 $\frac{1}{4}$	12.4×—×(10)	中央部埋 土	丸く張る胴部からやや肥厚気味に外反して立ち上がる口縁部。口唇部はやや内湾、胴部横篔削り。内面篔撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③粗
346-10 125-10	石製品 砥石		10.5×7×5.6 196.6g	中央部埋 土	多面使用。木定形、不定形。	角閃石安山岩
346-11 125-11	須恵器 転用砥石		8×5×1.1 63.3g	南部床下	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや粗
346-12 125-12	須恵器 転用砥石		6×4.1×1 40.1g	南部埋土	4側面使用。刃痕あり。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
346-13 125-13	須恵器 転用砥石		6.6×5.7×1 53.8g	床下埋土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや粗
346-14 125-14	須恵器 転用砥石		6.3×6.5×1.1 89.4g	南部床面	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや粗
346-15 125-15	須恵器 転用砥石		8.9×18.5×1.2 121.7g	北中央部埋 土	2側面使用。甕片。	①良好 ②赤灰 ③やや密
346-16 125-16	須恵器 転用砥石		8×5.7×1.4 95.0g	北中央部埋 土	全側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
346-17 125-17	鉄製品 不明		長(8.5) 径0.6×0.5	北西部床 面	棒状、断面方形。	
346-18 125-18	鉄製品 角釘	頂部欠 損	長(12) 径0.5	北西部床 面		
346-19 125-19	石製品 白玉	$\frac{1}{2}$ 欠損	径0.7高0.4孔径	埋 土		滑石

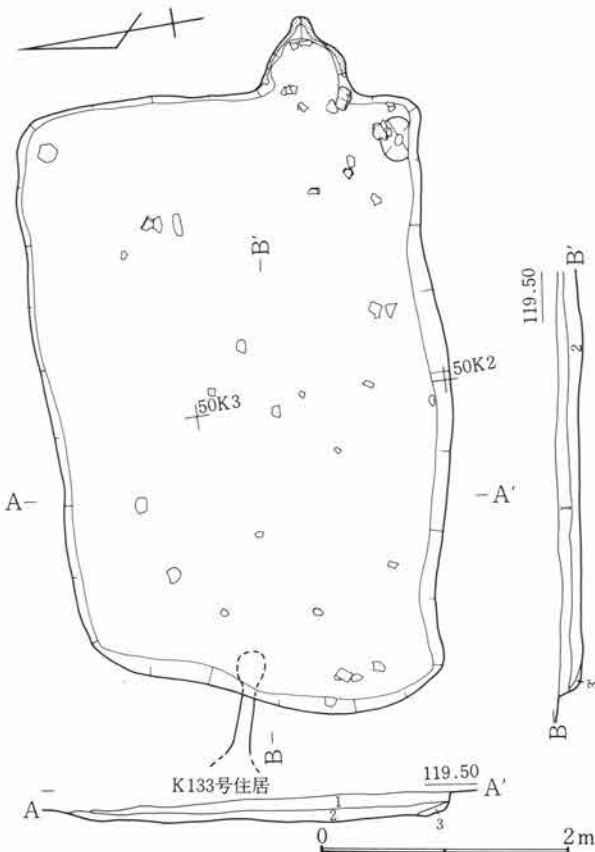
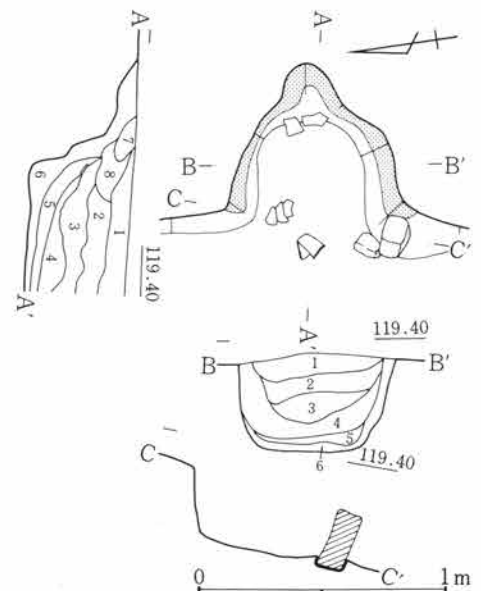


Fig.347 K41号住居跡



K41号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 C軽石・白黄色土多く混える。
- 2 暗褐色土 大粒C軽石を多く混える。
- 3 暗褐色土 C軽石を多く含む。
- 4 褐色土 焼土を含む。
- 5 焼土層
- 6 灰層 焼土粒混り。
- 7 焼土塊層
- 8 暗褐色土 焼土粒・C軽石含む。

Fig.348 K41号住居跡竈

K41号住居跡 (Fig. 347~349・PL. 125・126)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
	320.5 × —	N— 98° —E	東壁南寄り	

K区南東部に位置し、49~51K 2・3の範囲にある。調査が2期にわたり、壁線が1部符号しない。43号・133号住居跡と重複し、43号より新しく、133号より古い時期の所産である。平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈し、南・西壁がやや歪む。壁高は20cmを測る。床面は平坦で柱穴などは検出されない。竈は東壁南寄りに付設され右袖部に凝灰岩加工材が埋設される。楕円形の燃焼部に小さな煙道部が付く。燃焼部幅70cm、奥行60cm、煙道部長さ約20cmを測る。出土遺物には土器類の他須恵器転用砥石がある。

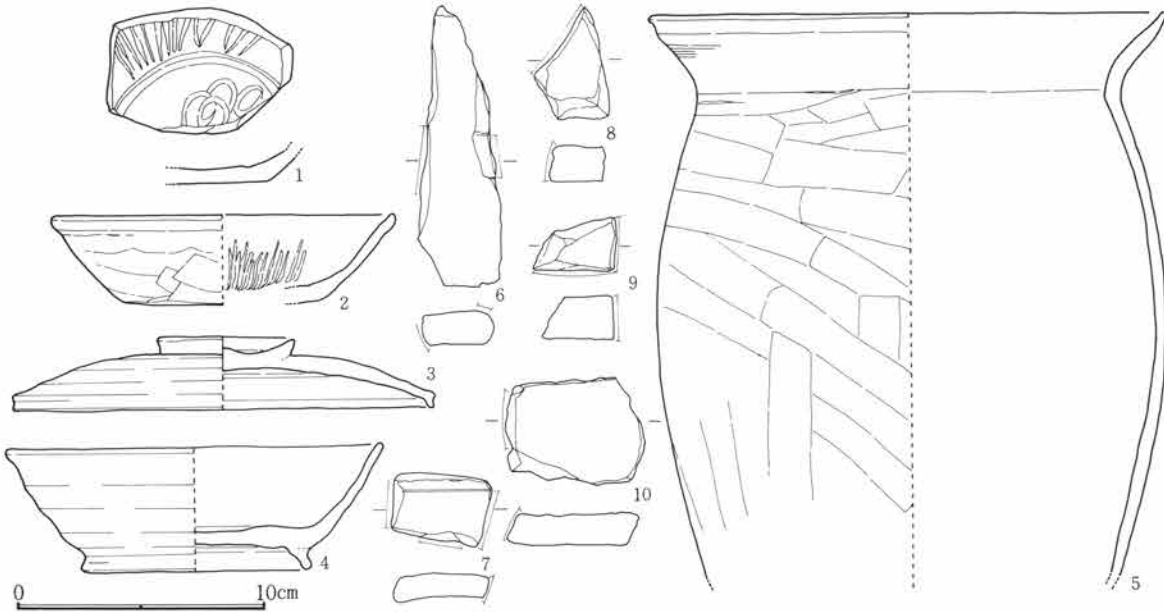


Fig.349 K41号住居跡出土遺物

K41号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
349-1 126-1	土 師 器 杯	底部 1/4		埋 土	底部円板状。内面見込部螺旋状・体部放射状暗文。外面体部横・底部不定方向笕削り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
349-2 126-2	土 師 器 杯	1/4	13.8×7.6×3.5	埋 土	体部上半は僅かに外反し、口唇部は外屈して直立する。体部・底部笕削り。内面体部放射状暗文。	①良好	②橙 ③やや密
349-3 126-3	須 恵 器 蓋	1/2	17×—×2.9 摘径 5.5 高 0.7	埋 土	環状摘。天井部脹らみ少ない。口縁部は内湾して僅かに開く。端部は尖る。天井部右回転笕削り。轆轤成形。	①良好	②灰 ③やや粗
349-4 126-4	須 恵 器 椀	1/2	15.6×9×5	埋 土	体部直線的に立ち上がり口縁部は僅かに外反気味。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好	②灰白 ③密、黒色細粒混る
349-5 126-5	土 師 器 甕	1/2下半部欠損	20.8×—×(22.5)	埋 土	胴部中位やや脹らむ。口縁部は外反して立ち上がり上半で僅かに内湾する。口縁部横撫で、胴部上半横・斜位笕削り。下半は縦笕削り。	①良好	②明赤褐 ③やや粗
349-6 126-6	須 恵 器 転用砥石		11.1×3.4×1.3 50.8g	埋 土	2側面使用。甕片	①良	②灰 ③粗
349-7 126-7	須 恵 器 転用砥石		4×2.9×0.9 15.2g	埋 土	3側面使用。瓶片	①良	②灰 ③やや粗
349-8 126-8	須 恵 器 転用砥石		4.5×2.9×1.4 17.5g	埋 土	1側面使用。甕片	①良	②灰 ③やや密
349-9 126-9	須 恵 器 転用砥石		3.3×2.1×1.7 14.7g	埋 土	2側面使用。甕片	①良	②灰 ③やや密
349-10 126-10	須 恵 器 転用砥石		5.5×4.2×1.2 43.6g	埋 土	1側面使用。甕片	①硬	②灰 ③やや密

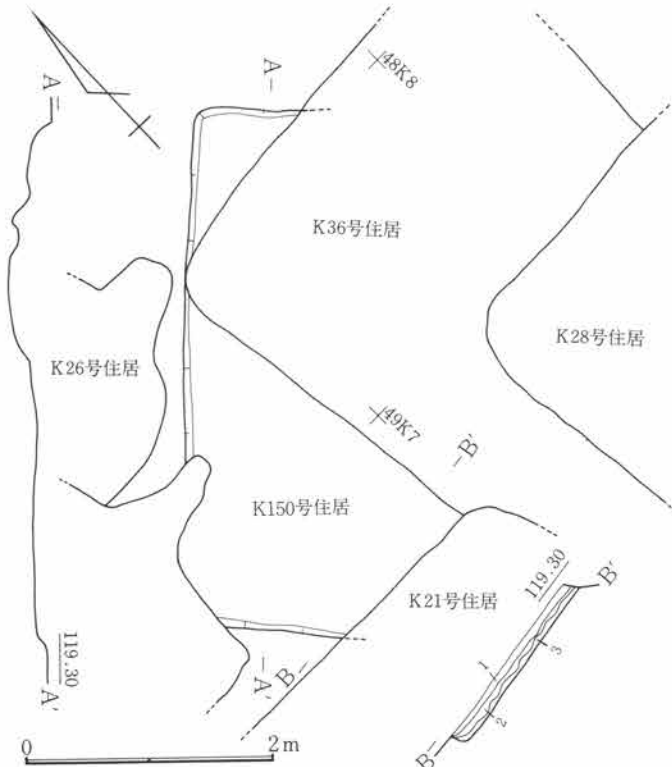
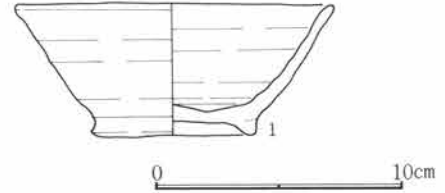


Fig.350 K42号住居跡

K42号住居跡 (Fig. 350・351・PL. 127)

K区東部やや南寄りに位置し、48・49K 7・8の範囲にある。21号・36号・150号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。当跡の掘形は浅く、重複によって大部分は消失している。平面形・規模も想定し難いが、残存する東・北壁の一部から方形を呈すると考えられる。北壁を基軸にする東西軸方位はN-46°-Eを示す。壁高は浅く約14cmを測る。出土遺物は極めて少ない。



K42号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含みよく締まった粘質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・Loam塊を含む粘質土。
- 3 暗褐色土 Loam塊・有機黒褐色土を含む粘質土。

Fig.351 K42号住居跡出土遺物

K42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
351-1 127-1	須恵器 碗	完	12.8×6.6×5.3	埋土	体部直線的に立ち上がる。口縁部僅かに外反。口唇部丸い。付高台、低く丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、砂混る

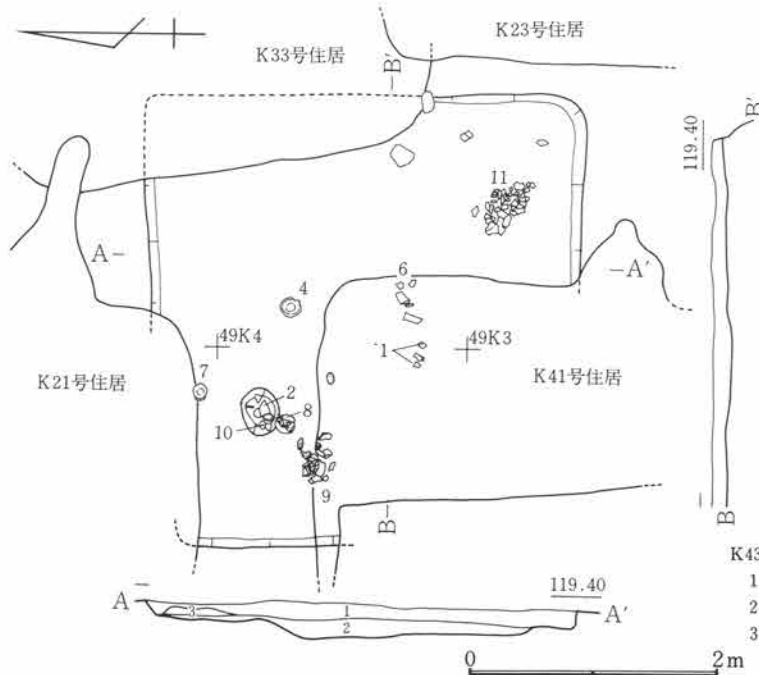


Fig.352 K43号住居跡

K43号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・土器片を含む。
- 2 暗褐色土 1層に似る。
- 3 茶褐色土 粘性のある硬質土。

K43号住居跡 (Fig. 352・353・PL. 127・128)

K区南東部に位置し、48・49K 2～4の範囲にある。21号・33号・41号住居跡と重複関係にあり、これらいずれよりも古い時期の所産である。平面形は残存する各壁線から、一辺長23.4mの規模をもつほぼ正方形に近い形態が考えられる。東西軸方位はおおよそN-90°-Eを示す。壁高は約14cmを測り浅い。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈・炉跡などは検出されていないが、住居跡東側に凝灰岩の加工材が見られ、東壁に竈のごとき施設が想定される。壁下の溝や貯蔵穴などの施設は検出されていないが、北西寄りに径34cm・深さ20cm程度の穴が検出され底面より土師器杯が出土している。出土遺物は比較的多く、床面より土師器甕類のほか、埋土中より砥石類も検出されている。

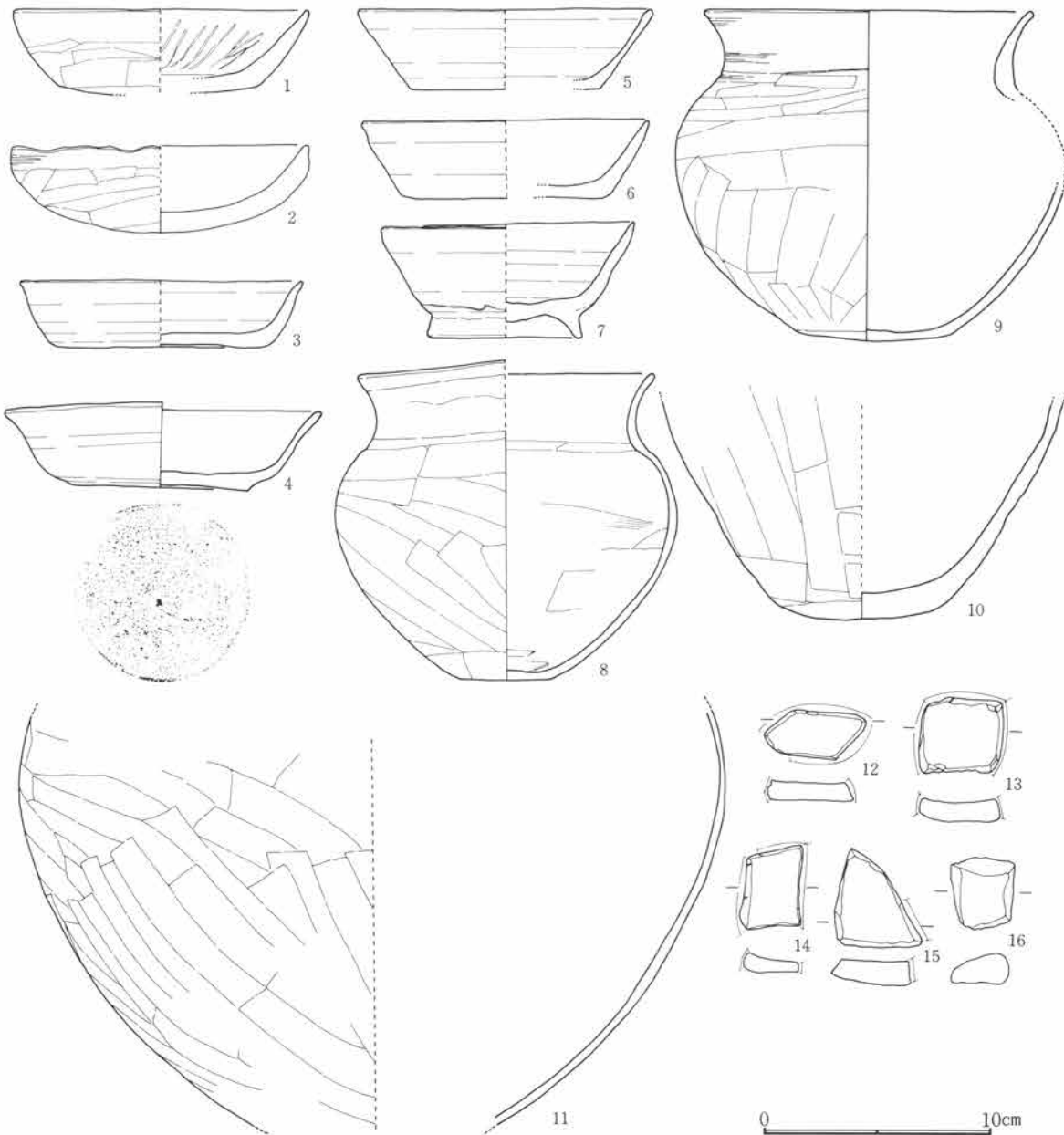


Fig.353 K43号住居跡出土遺物

第3章 K区の遺構と遺物

K43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
353-1 128-1	土師器 杯	1/4	13×8.7×3.6	中央部床 面	体部肥厚し直線的。口唇部は細る。底部やや張るが平底。 口縁部横撫で。体部篋削り、内面体部放射状暗文。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
353-2 128-2	土師器 杯	体部1/4	13×-×3.7	北西穴内	器内肥厚し、丸底から短かく直立する口縁に至る。口縁部 横撫で。体部篋削り。	①良好 ②浅黄 ③ 粗
353-3 128-3	須恵器 杯	1/4	12.5×9×2.9	床 下	体部浅く、腰部丸味をおびる。口縁部短かく外反する。口 唇部尖り直立気味。轆轤成形。底部回転篋削り後篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗
353-4 128-4	須恵器 杯	完	14×7.8×3.7	中央部床 面	腰部丸く張り、口縁部は外反。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗、小石混る
353-5 128-5	須恵器 杯	1/4	13×8.5×3.5	床 下	体部直線的。口唇部丸い。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②暗青灰 ③やや密
353-6 128-6	須恵器 杯	1/4	12.7×9×3.4	中央部床 面	体部直線的で、口唇部尖る。轆轤成形。底部回転篋削り後 篋削り。	①良好 ②灰 ③粗、白色小石混る
353-7 128-7	須恵器 椀	完	11.3×6.9×4.8	北壁際床 面	腰部内湾し体部上半は直線的。口唇部は尖がる。付高台、 直線的でハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、白色粒混る
353-8 128-8	土師器 壺	1/2	13.2×4×13.9 最大径胴部15.1	北西部床 面	球胴を呈す。口縁部大きく外反。小さな平底。口縁部横撫 で。胴上・下位横篋削り。中位斜篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
353-9 128-9	土師器 壺	一部欠 損	14.5×7×14.5 最大径胴部17	北西部床 面	胴部強く張り、球形を呈す。口縁部直立後外反。口唇部は 細く丸い。口縁部横撫で。胴上半横・下半は縦篋削り。	①良好 ②明褐 ③ やや粗
353-10 128-10	土師器 甕	底部	-×-×(6.6)	中央部床 面	底部やや丸味をもつ。胴部縦篋削り、腰部横篋削り。	①良好 ②灰黄褐 ③極粗、小石混る
353-11 128-11	土師器 甕	胴部1/4	-×-×(18) 胴部径3	南中央部床 面	胴部強く張り球胴を呈す。斜位篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗
353-12 128-12	須恵器 転用砥石		4.5×2×0.8 11.2g	埋 土	4側面使用。甕片。	①良好 ②明灰黄 ③やや密
353-13 128-13	須恵器 転用砥石		3.2×3.2×10.8 16.9g	埋 土	3側面使用。甕片。	①良好 ②暗緑灰 ③やや粗
353-14 128-14	須恵器 転用砥石		3.6×2.7×0.6 8.8g	埋 土	3側面使用。刃痕。甕片。	①良好 ②暗緑灰 ③やや密
353-15 128-15	須恵器 転用砥石		4.3×4×1 20.8g	埋 土	1側面使用。	①良好 ②灰 ③や や粗
353-16 128-16	石製品 砥石		3.1×2.7×1.3 12.7g	埋 土	多面使用。	角閃石安山岩

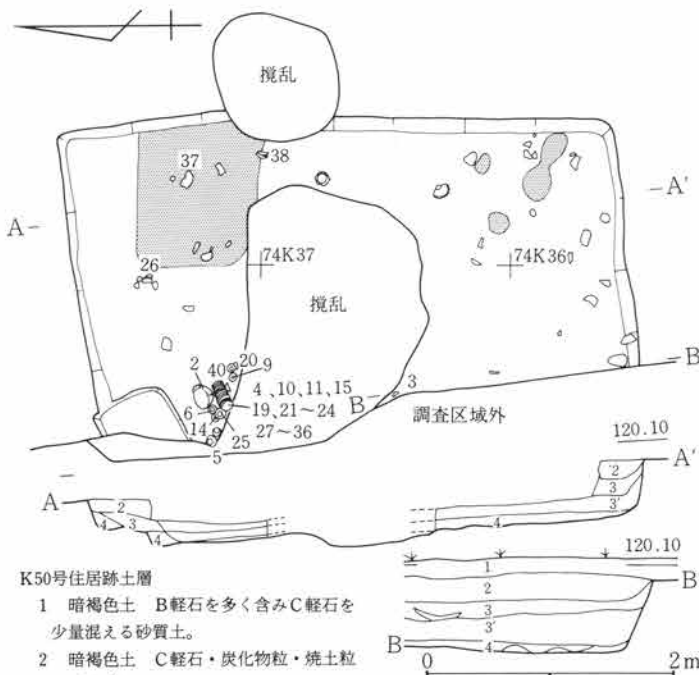


Fig.354 K50号住居跡

K50号住居跡 (Fig. 354~356・PL. 129・130)

K区北西部に位置し、73・74K35・36の範囲にある。西半部は調査区域外に延び、また中央部は攪乱がおよび、全体の様相は明らかでない。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約4.4mを測り、南北軸はおよそ10°西へ振れている。壁高は約26cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。南東及び北東寄り床面に灰層の分布が検出されているが、竈などの施設はない。北西床面に土師器

- 3 暗褐色土 C軽石少量含み炭化・物黒灰を多く含む。
- 3' 暗褐色土 C軽石 (0.2~0.5cm)・焼土粒・黒灰を多く含む粘性土。
- 4 黒褐色土 混入物が少ない粘性土。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

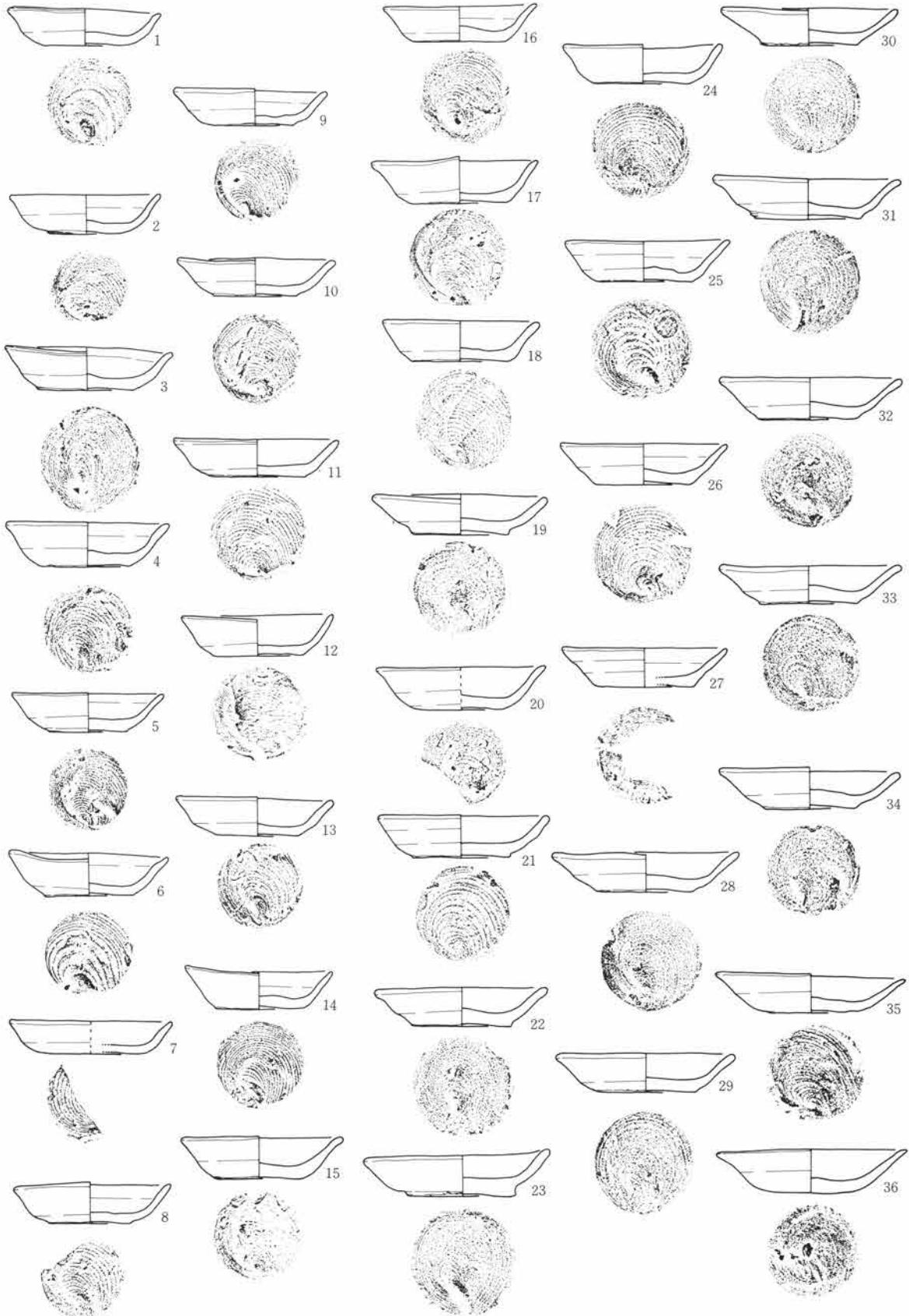


Fig.355 K50号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

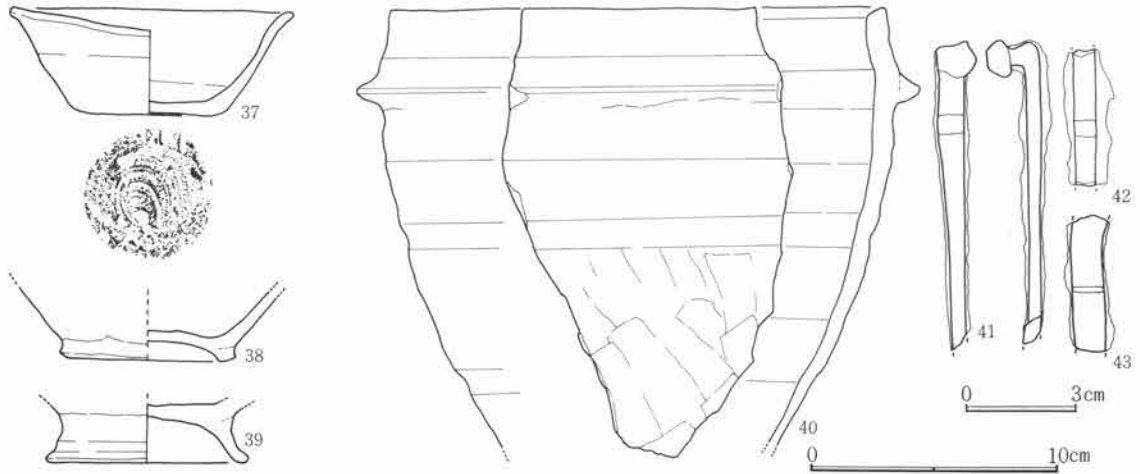


Fig.356 K50号住居跡出土遺物(2)

K 50号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
355-1 129-1	土師質 杯	1/2	7.8×4.4×2	北西部床 面	腰部に丸味をもち、口唇端部は内傾する。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②黄橙 ③ やや密
355-2 129-2	土師質 杯	完	7.8×3.7×2	北西部床 面	腰部に丸味をもち、口縁部は外反する。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-3 129-3	土師質 杯	完	8.6×5×2.3	西央部床 面	口縁部外反。口唇部凹線巡る。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②淡橙 ③ やや密、砂混る
355-4 129-4	土師質 杯	完	8.5×4.5×2.3	北西部床 面	口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②淡橙 ③ やや密
355-5 129-5	土師質 杯	3/4	7.9×4.1×2	北西部床 面	口縁部緩く外反。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-6 129-6	土師質 杯	完	8.2×4.7×2.4	北西部床 面	口縁部内湾気味に外傾する。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-7 129-7	土師質 杯	1/2	8.4×5×1.7	北西部床 面	体部やや浅く、口縁部外反。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-8 129-8	土師質 杯	1/2	8.1×4.2×2.1	北西部床 面	腰部やや丸味。体部直線的。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-9 129-9	土師質 杯	3/4	8×4×2	北西部床 面	口縁部やや外反気味。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い黄橙 ③やや密
355-10 129-10	土師質 杯	完	8.2×4.4×2.2	北西部床 面	腰部やや丸味。口縁部外反。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②淡黄 ③ やや密
355-11 129-11	土師質 杯	完	8.6×5×1.9	北西部床 面	体部直線的。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②淡黄 ③ やや密
355-12 129-12	土師質 杯	1/2	7.9×4.6×2.1	北西部床 面	体部僅かに内湾して立ち上がる。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-13 129-13	土師質 杯	1/2	8.1×4.2×2	北西部床 面	腰部で僅かに屈し、体部小さく外反。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密
355-14 129-14	土師質 杯	完	7.7×4.6×2.2	北西部床 面	体部中位で屈し、上半は僅かに外傾。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②鈍い黄橙 ③やや密
355-15 129-15	土師質 杯	完	8.4×4.5×2.2	北西部床 面	腰部に丸味。口縁部は外反する。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②浅黄橙 ③やや密
355-16 129-16	土師器 杯	完	7.9×5.7×1.8	北西部床 面	体部外反して立ち上がる。見込部凸状に肥厚する。轆轤成 形。右回転糸切り。	①良好	②鈍い黄橙 ③やや密
355-17 130-17	土師器 杯	完	8.6×5×2.4	北西部床 面	口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②浅黄橙 ③やや密
355-18 130-18	土師器 杯	完	8.1×5×2.1	北西部床 面	体部中位で外屈。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好	②灰白 ③ やや密

K 50号住居跡出土遺物観察表

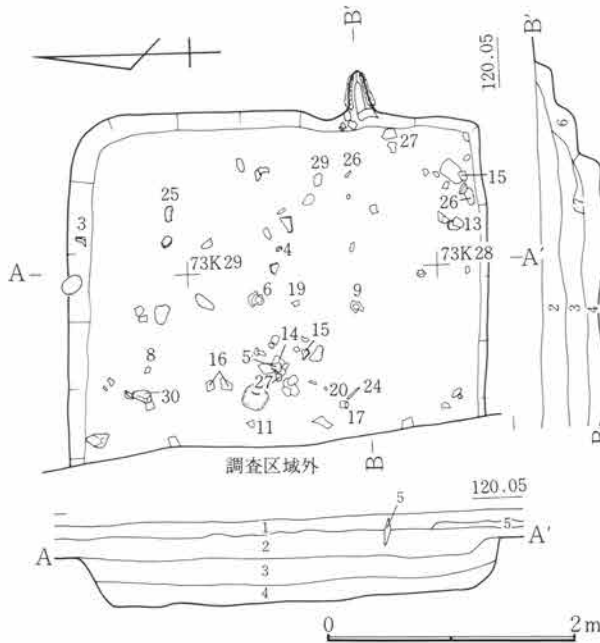
Fig. No PL. No	器 器 形	種 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
355-19 130-19	土 師 器	完	9.2×5×2	北西部床 面	底部短かく直立した後、腰部にやや丸味をもち、体部直線的。口唇部丸い。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-20 130-20	土 師 器	1/2	9.6×4.4×2.2	北西部床 面	腰部に丸味。口縁部外反。口唇部やや尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-21 130-21	土 師 器	完	8.9×5.1×2.2	北西部床 面	体部内湾して立ち上がり、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや密	
355-22 130-22	土 師 器	完	9×5.2×2	北西部床 面	口縁部僅かに外反。口唇部丸い。底部肥厚し、中心部凸状に出る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-23 130-23	土 師 器	完	9.5×5.6×2.4	北西部床 面	底部肥厚し、口縁部僅かに外反し、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-24 130-24	土 師 器	完	8.3×5×2	北西部床 面	腰部丸味あり、口縁部外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや密	
355-25 130-25	土 師 器	完	8.5×5×2.1	北西部床 面	体部直線的。見込部轆轤目強く残る。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密	
355-26 130-26	土 師 器	完	8.6×5×2.1	北西部床 面	体部直線的。口唇部やや細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや密	
355-27 130-27	土 師 器	1/2	8.5×5×2	埋 土	体部やや直線的。口唇部細り、僅かに内湾。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②橙 ③ やや密	
355-28 130-28	土 師 器	完	9.6×5×2	北西部床 面	体部僅かに外反気味。底部肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③や や密	
355-29 130-29	土 師 器	完	9.3×5.2×2	北西部床 面	体部外反気味。口唇部丸い。底部やや肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密	
355-30 130-30	土 師 器	完	9.1×5×2	北西部床 面	体部直線的で、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-31 130-31	土 師 器	完	9.6×5.4×2.2	北西部床 面	体部下半で屈し、上半は外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③や や密、砂混る	
355-32 130-32	土 師 器	完	9.4×5×2.2	北西部床 面	腰部やや脹らみ、口縁部僅かに外反。口唇部丸い。底部肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-33 130-33	土 師 器	1/2	9.3×5×2	北西部床 面	体部直線的、口縁部僅かに外反。口唇部丸い。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密	
355-34 130-34	土 師 器	完	9.4×4.6×2.2	北西部床 面	腰部ややくびれる。口唇部丸味。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密	
355-35 130-35	土 師 器	完	9.8×5×1.2	北西部床 面	底部より丸く体部に至り、口縁部は尖がり外反気味。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③や や密	
355-36 130-36	土 師 器	完	9.9×5×2.5	北西部床 面	底部から丸く体部に至り直線的。口唇部は尖がり外傾。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密、砂混る	
356-37 130-37	須 恵 器	完	11.4×6×4.2	北西部床 面	体部下半は直線的。口縁部やや外反し、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰白 ③ 粗	
356-38 130-38	須 恵 器	底部1/2	一×7×(2.8)	北西部床 面	体部直線的。付高台、幅広い。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①やや軟 ②灰白 ③粗、砂混る	
356-39 130-39	須 恵 器	底部	一×8.2×(2.6) 高台高 1.8	北西部床 面	付高台、高くハの字状に開き、端部は丸く、水平に近く外屈。	①良好 ②橙 ③や や密、白色砂混る	
356-40 130-40	羽 釜	1/2・下 半欠損	20×一×(17.8) 口径 22.8・口径 高 2.5	北西部床 面	口縁部僅かに内傾。口唇上端部は平たく内斜する。胴部回転無で、下半部は縦篋削り。	①酸化、良好 ②鈍 い黄橙 ③粗	
356-41 130-41	鉄 製 品	先端部 欠損	長(8.1) 径0.7×0.5	埋 土	頂部L字に折れ脹らむ。		
356-42 130-42	鉄 製 品	小片 角釘?	長(3.5) 径0.6×0.4	埋 土			
356-43 130-43	鉄 製 品	小片 不明	長(3.5) 幅0.9 厚0.15	埋 土	板状。		

K 51号住居跡 (Fig. 357~359・PL. 131・132)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
	一 × 3.38	N— 92° — E	東壁やや南寄り	

K51号住居跡

K区西部のやや北寄りに位置し、72・73K27～29の範囲にある。西半部は調査区域外に延び全体は検出していない。また南側で52号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。平面形は北東隅にやや丸味をもつが方形を呈すと考えられる。南北長約3.38mを測り、東西は2.8mまで検出されている。東西軸方位はN-92°-Eを示す。壁高は約34cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。壁下の溝・貯蔵穴などの施設は検出されない。竈は東壁に付設される。焼部を含めて本体は掘り過ぎのため消失し、遺存しているのは壁外に突出した煙道部と考えられ、長さ約30cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・鉄器・砥石類その他判読不能な墨書土器が検出されている。



西軸方位はN-92°-Eを示す。壁高は約34cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。壁下の溝・貯蔵穴などの施設は検出されない。竈は東壁に付設される。焼部を含めて本体は掘り過ぎのため消失し、遺存しているのは壁外に突出した煙道部と考えられ、長さ約30cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・鉄器・砥石類その他判読不能な墨書土器が検出されている。

K51号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、炭化物粒・焼土粒を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 炭化物、焼土粒を多く含む砂質土。
- 3 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒を含む粘性土。
- 4 暗褐色土 硬く締まっており酸化鉄沈澱住居床直下層。
- 5 暗褐色土 Loam 塊をまばらに含む粘性土。
- 6 崩落焼土
- 7 黒灰

Fig.357 K51号住居跡

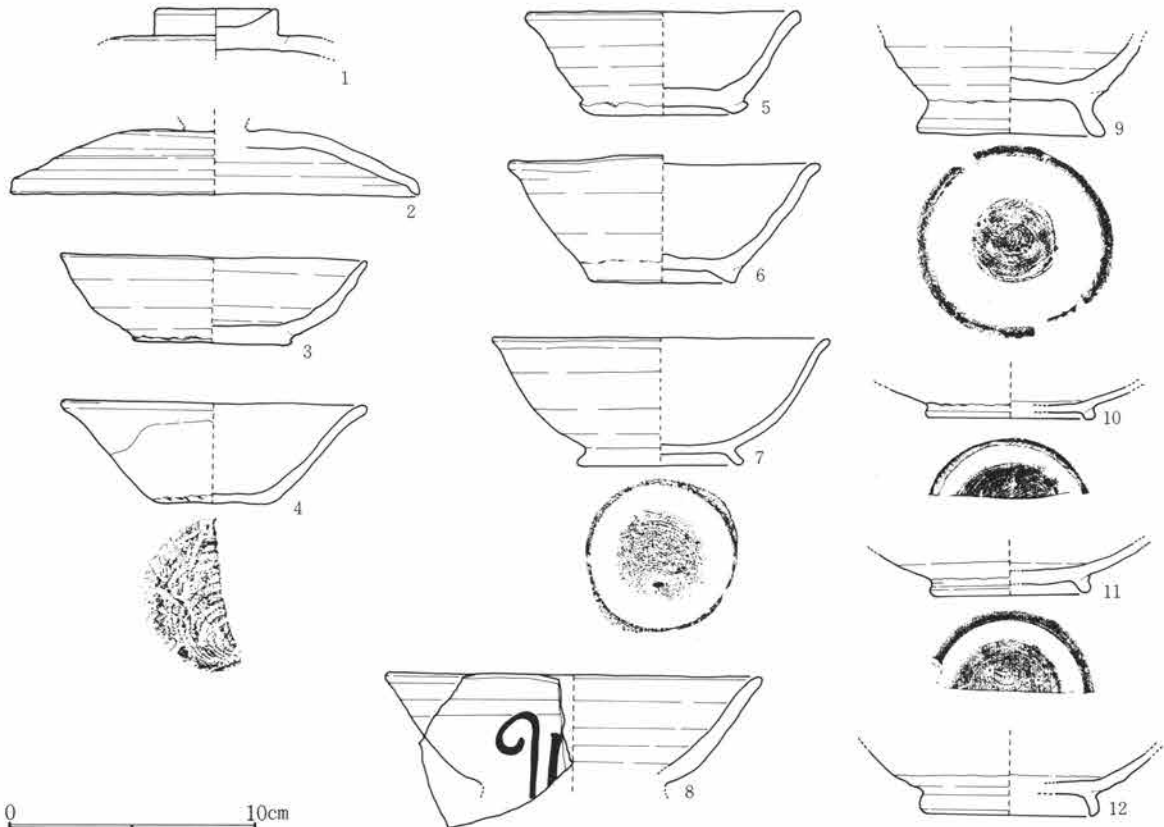


Fig.358 K51号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

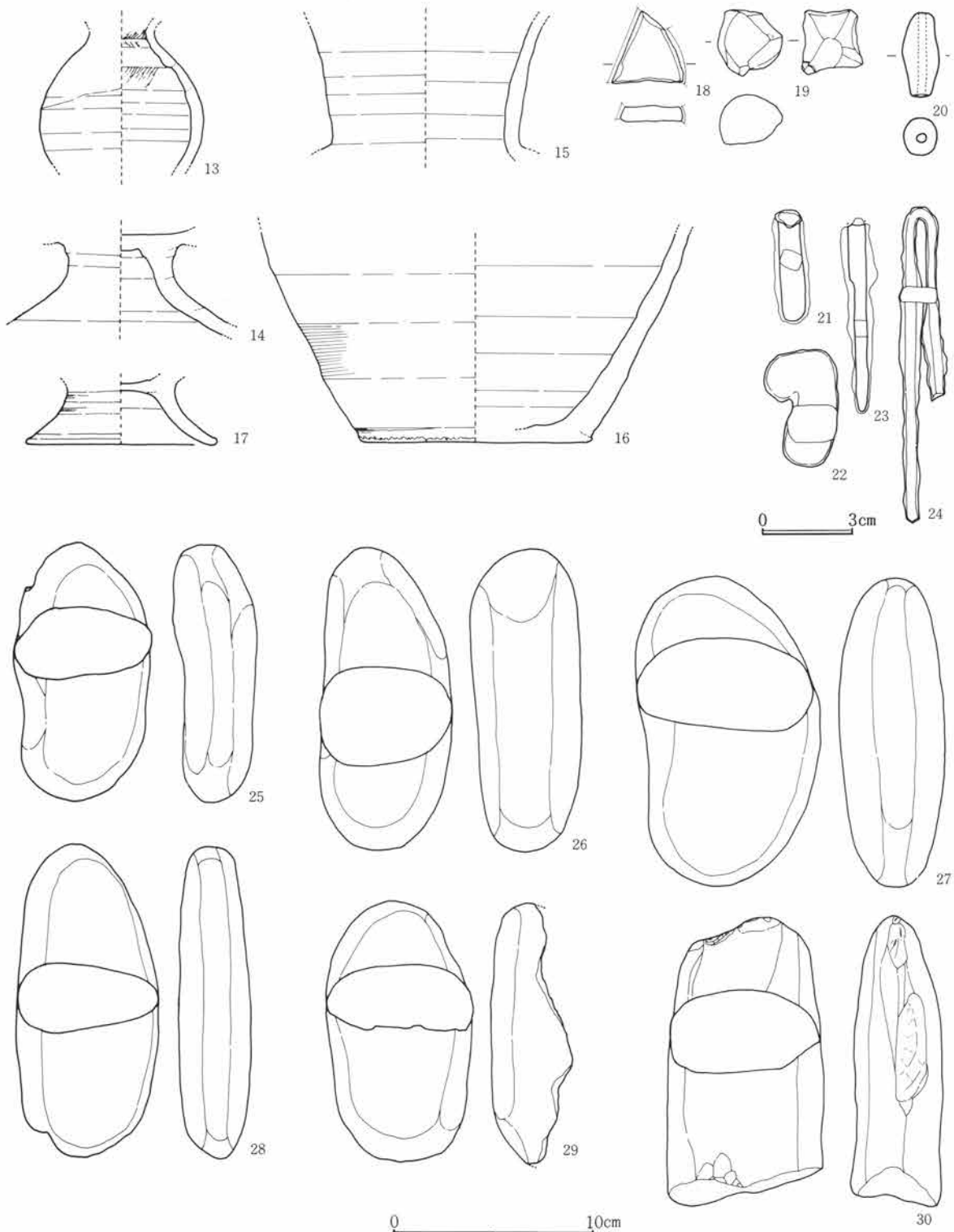


Fig.359 K51号住居跡出土遺物(2)

第3章 K区の遺構と遺物

K 51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③色調 その他
358-1 131-1	須恵器 蓋	摘部	—×—×(2)	埋土	環状摘。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
358-2 131-2	須恵器 蓋	1/4・摘 欠損	16.4×—×(2.5)	住居外	天井部平坦。体部直線的。口縁部は外傾して下る。端部は尖る。天井部回転糸切り後回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
358-3 131-3	須恵器 杯	1/4	12.4×6.4×3.4	北壁際埋土	体部脹らみ気味に立ち上がる。口唇部は細る。底部やや肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、砂混る
358-4 131-4	須恵器 杯	1/2	12.4×4.8×4	中央部床面	体部直線的に立ち上がり。口縁部は外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰白 ③粗、砂多い。
358-5 131-5	須恵器 椀	1/2	11.1×5.6×4.1	西中央部床面	体部下半直線的、上半は外反する。口唇部は肥厚し丸い。付高台、短かく外方に撥ねる。轆轤成形。作り雑。	①やや酸化 ②灰白 ③粗、砂混る
358-6 131-6	須恵器 椀	1/2	12.5×6×5	中央部床面	体部直線的。口唇部丸く、外屈気味。付高台、低く断面三角形。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗
358-7 131-7	土師器 椀	1/2	13.6×6.6×5.1	埋土	体部丸味をもち、口縁部緩やかに外反。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。底部篋調整。器肉薄く、作り丁寧。	①良好 ②橙 ③やや密
358-8 131-8	須恵器 椀	小片	12.5×—×(4)	北中央部床面	器肉厚い。口縁部僅かに外反。体部外面に墨書痕あり。解読不明。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
358-9 131-9	須恵器 椀	底部	—×7.6×(3.5)	中央部床面	体部丸い。付高台、高く外反する端部丸い。底部回転篋調整。轆轤成形。	①酸化 ②淡黄 ③やや密
358-10 132-10	灰釉陶器 皿	底部1/4	—×6.8×(1.7)	埋土	器肉薄い。高台低く丸い。底部回転糸切り後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
358-11 132-11	灰釉陶器 皿	底部1/4	—×6.5×(2)	西中央部床面	丸く低い高台。体部内外面施釉。底部中心回転糸切り痕残る。	①良好 ②灰白 ③やや密
358-12 132-12	灰釉陶器 椀	底部1/4	—×7.2×(2.6)	南東部床面	体部やや丸味。高台内湾気味に立ち三ヶ月状高台。腰部回転篋削り。内面体部施釉。	①良好 ②灰白 ③密
359-13 132-13	灰釉陶器 瓶	1/4口縁 底部欠	—×—×(6.8) 胴径 8	南東部床面	胴部やや下脹れ気味に丸く張る。胴中位まで施釉。中位から下は回転篋削り。内面頸部しほり目。	①良好 ②灰白 ③密
359-14 132-14	須恵器 脚付盤	脚部分	—×—×(5) 基部径 5.5	西中央部床面	基部やや内傾して下り下位は大きく外反。内面巻き上げ痕残る。	①良好 ②灰 ③粗、白色砂多く混る
359-15 132-15	須恵器 瓶	頸部	—×—×(6.5) 基部径 9.3	西中央部床面	基部から直線的で僅かに外傾して立ち上位で外反気味。巻き上げ後轆轤成形。	①良好 ②暗緑灰 ③粗、黒色粒多く混
359-16 132-16	須恵器 甕	下半部 1/2	—×11.6×10	西中央部床面	平底。胴部やや直線的に立ち上がる。胴下半回転篋削り。	①良好 ②暗緑灰 ③粗
359-17 132-17	土師器 台付甕	脚部1/4	—×9.4×(3)	西中央部床面	大きくハの字状に開き、端部丸い。横撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗
359-18 132-18	須恵器 転用砥石		3.5×3.5×0.7 9.3g	埋土	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
359-19 132-19	石製品 砥石		3.2×3.2×2.4 12.3g	中央部床面	多面使用。	角閃石安山岩
359-20 132-20	土製品 土錘		完長4.1 径2.1 孔径0.4	西中央部床面	中央脹らむ。	①良好 ②橙 ③やや密
359-21 132-21	鉄製品 不明		長(3.6) 径0.7×0.6	埋土	断面四角。	
359-22 132-22	鉄製品		長(3.8) 径1.5×1.2	埋土	片端部L字状に折れる。	
359-23 132-23	鉄製品 角釘	頂部欠 損	長(6) 径0.5	埋土		
359-24 132-24	鉄製品 不明		長(10.3) 径0.5	西中央部床面	U字状に湾曲する。	
359-25 132-25	石		12.6×6.8×4.1 420g	北中央部床面		輝石安山岩(粗粒)
359-26 132-26	石		14.7×6.5×5.4 760g	南東隅床面		輝石安山岩(粗粒)
359-27 132-27	石		15.2×8.9×5.2 860g	南東部床面		輝石安山岩(粗粒)
359-28 132-28	石		15.3×7×3.6 500g	埋土		輝石安山岩(粗粒)
359-29 132-29	石		12.7×7.2×4 350g	東中央部床面		輝石安山岩(粗粒)
359-30 132-30	石		14.15×7.2×4.5 690g	北西部床面	両端部・側面に打撃痕	変質安山岩

K52号住居跡 (Fig. 360~362・PL. 133)

K区西側のやや北寄りに位置し、72・73K27・28の範囲にある。西半部は調査区域外に延び不明である。南側で10号・53号住居跡と、北側で51号住居跡とそれぞれ重複しているが、10号・51号住居跡より旧く、53号住居跡より新しい時期の所産である。平面形は方形を呈すと考えられ、南北長約3.8mを測り竈を基軸とする東西軸方位はN-83°-Eを示す。壁高は深く約42cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈は東壁の南寄りに付設され略三角形に掘り込まれる。燃烧部の範囲は明確に検出できなかったが、東壁より約40cm突出する。出土遺物は竈周辺部分に多く出土している。

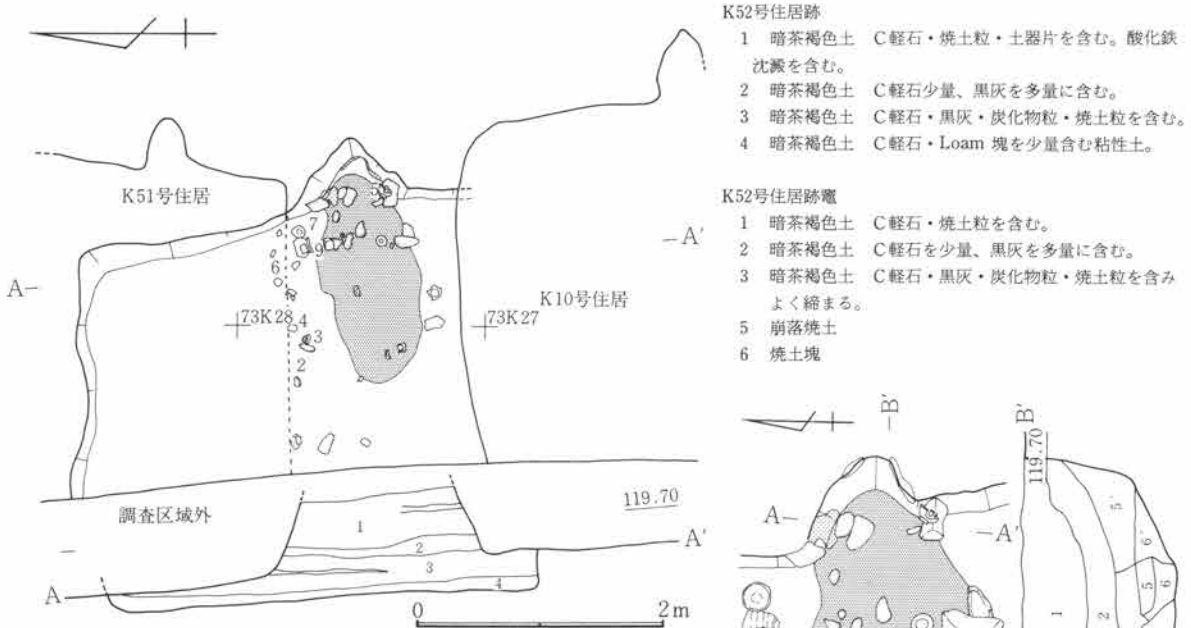


Fig.360 K52号住居跡

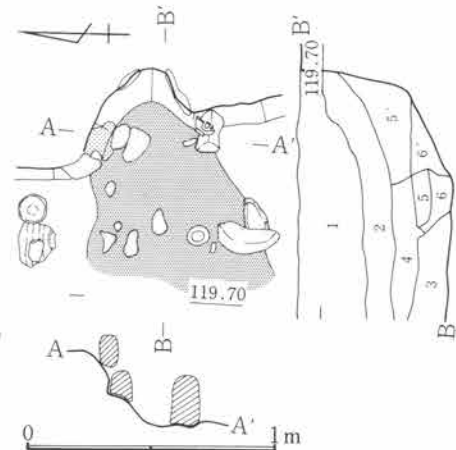


Fig.361 K52号住居跡竈

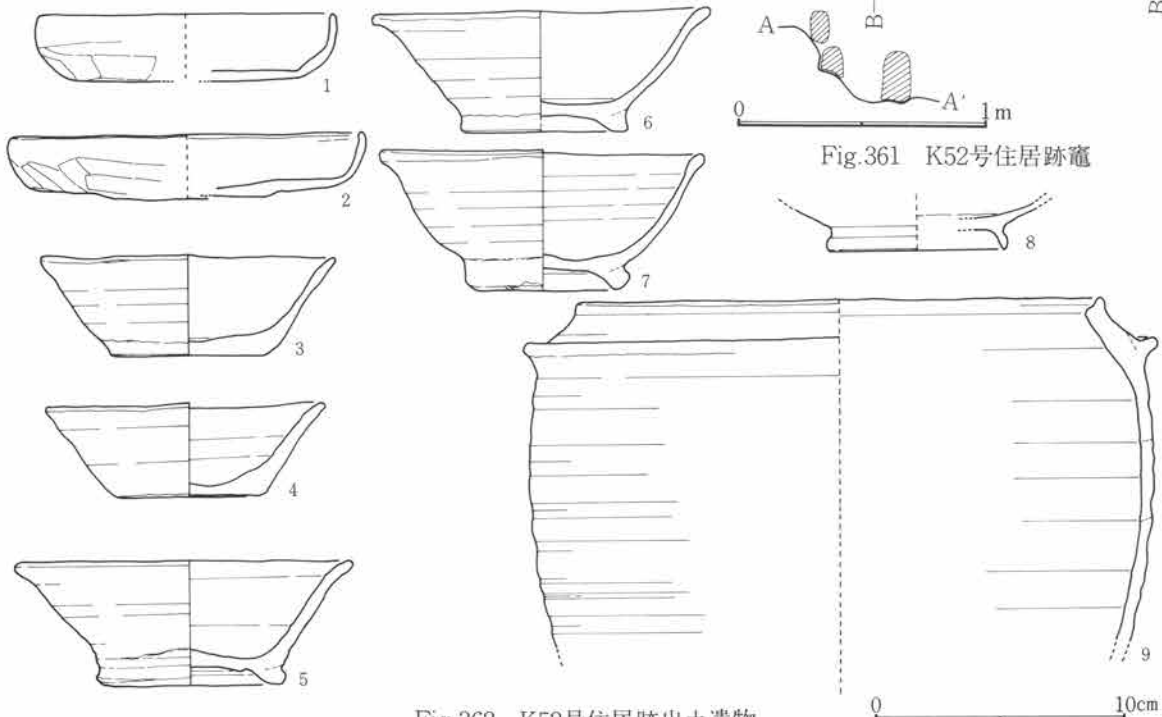


Fig.362 K52号住居跡出土遺物

K 52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
362-1 133-1	土師器 杯	1/4	12×—×2.7	床下埋土	浅い体部。口縁部は直立。底部大きく平底気味。体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
362-2 133-2	土師器 杯	1/4	14.3×—×2.6	床下埋土	浅い体部。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は内屈する。器面凹凸多く、体部・底部荒い篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
362-3 133-3	須恵器 杯	ほぼ完	11.9×6.1×4	床下埋土	体部直線的だが僅かに外反気味。底部肥厚し、体部中位は薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②灰白 ③ 密、細雲母混る
362-4 133-4	須恵器 杯	完	11.3×5.6×3.7	埋土	体部直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①やや軟 ②灰白 ③粗夾雑物混る
362-5 133-5	須恵器 碗	完	13.6×7.2×5	竈内	体部直線的に開き、口縁部外反する。付高台肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗、細粒雲母混。
362-6 133-6	須恵器 碗	1/2	16.8×6.8×4.9	床下埋土	体部やや脹らみ、口唇部は丸く肥厚し外反する。付高台肥厚し断面三角形。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石混る
362-7 133-7	須恵器 碗	1/2	13.1×6.6×5.6	東部埋土	体部丸く張り、口唇部丸く肥厚し外反気味。付高台、肥厚し下端面外方へ上がる。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①酸化、軟 ②浅黄 橙 ③やや密
362-8 133-8	灰釉陶器 碗	底部1/4	—×7.3×(1.9)	埋土	高台やや内湾し立つ。先端部尖がる。内面体部施釉。見込部重ね焼痕。	①やや軟 ②灰白 ③密
362-9 133-9	羽釜	小片	21.2×—×(13.5) 口径25.4 口縁高1.5	東部埋土	胴部にやや脹りあり、鏝は上方へ向く。口縁部内傾強い。口唇部は直立し、上端面は段をもって内斜。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③やや粗

K 53号住居跡 (Fig. 363~365・PL. 134)

K区の西縁北寄りに位置し、72・73K25~27の範囲にある。住居の西半は調査区域外に延び未検出である。また9号・10号・52号住居跡などの重複が著しく、遺存状態は良好とはいえない。これら住居跡との新旧関係については、いずれよりも古い時期の所産である。平面形は方形を呈すると考えられるが北壁線は不明瞭である。壁高は現状で約35cmを測る。床面は不安定でかなり凹凸があり、いくつかの土坑状の落ち込みが検出されている。竈は東壁の北側に偏って付設され東壁をわずかに掘り込んで燃焼部を作るが袖部は確認でき

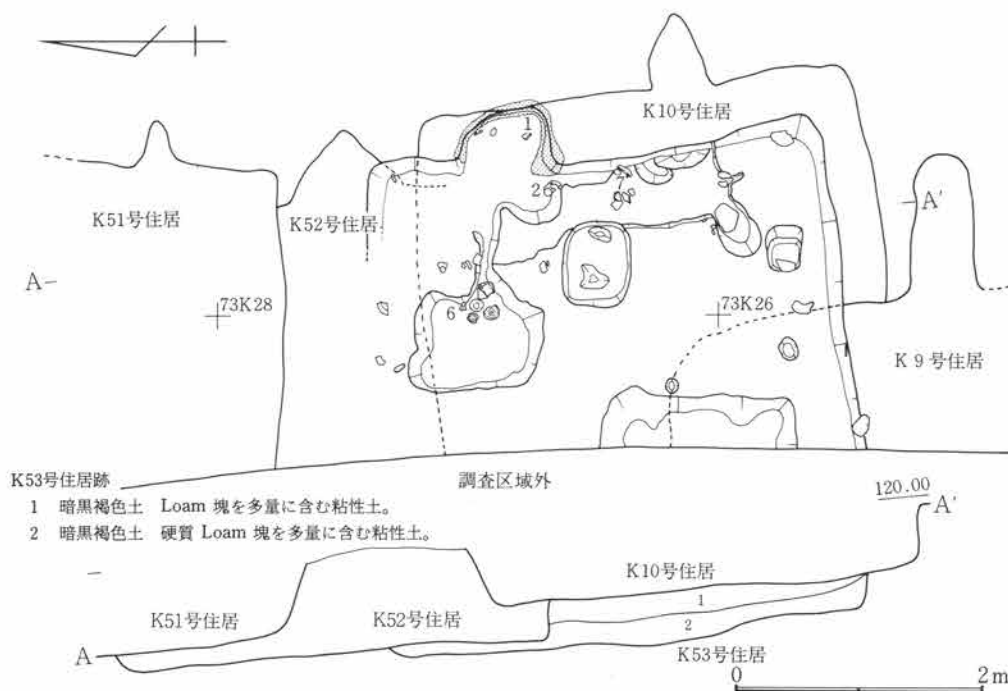
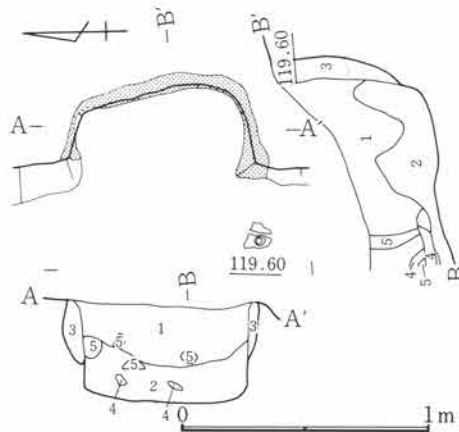


Fig.363 K53号住居跡

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

ていない。竈は東壁に付設される例が多いものの、一般的には南に偏ることが通例であり、これからするとやや異例ともいえる。燃烧部は不正な楕円形を呈し、幅約70cm、壁外へ40cm突き出している。燃烧部周壁の焼土化は顕著である。奥壁の立ち上がりは直立に近く、煙道部は設けられていない。出土遺物は土師器杯、須恵器椀などがあり、須恵器椀は竈の前面の方形状落ち込み内に検出されている。



K53号住居跡竈
 1 崩落焼土 C軽石・Loam 塊混合。
 2 崩落焼土 灰・Loam 塊混り。
 3 焼土壁
 4 灰層
 5 焼土塊

Fig.364 K53号住居跡竈

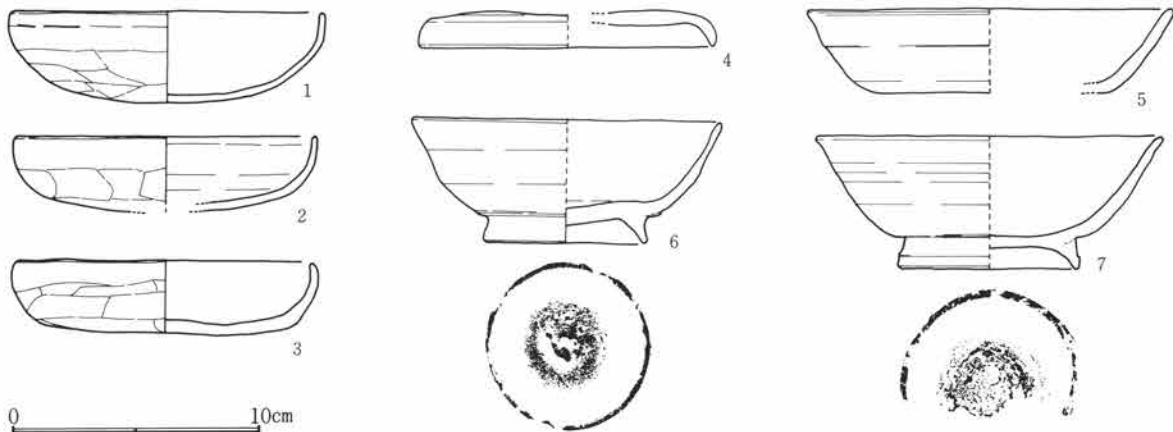


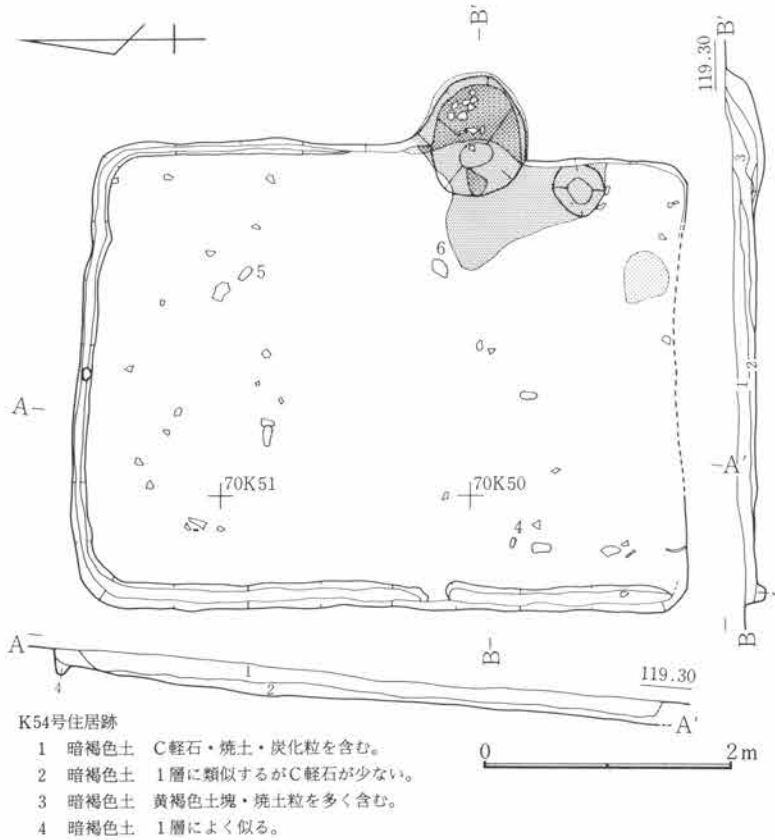
Fig.365 K53号住居跡出土遺物

K 53号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
365-1 134-1	土 師 器 杯	1/2	12.6×-×3.6	竈 内	体部深く口縁部は直立する。器肉全体に薄い。体部・底部 篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
365-2 134-2	土 師 器 杯	1/2	12.2×-×3	東部埋土	口縁部直立気味。器肉全体に薄い。体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
365-3 134-3	土 師 器 杯	完	12×-×2.9	埋 土	口縁部強く内湾する。底部平底気味。体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
365-4 134-4	須 恵 器 蓋?	1/3	12×-×1.5	竈 内	扁平な体部。口縁部は丸く外傾気味に下る。2次焼成を受 ける。轆轤成形。	①やや軟、2次焼成 ②灰白 ③やや粗
365-5 134-5	須 恵 器 杯	1/4	14.8×9.4×3.3	床下埋土	体部僅かに内湾気味。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、白色小石混
365-6 134-6	須 恵 器 椀	1/3	12.6×6.6×4.9	中央部埋 土	腰部やや張り体部上半は直線的。口唇部僅かに肥厚気味。 付高台、直線的でハの字状に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
365-7 134-7	須 恵 器 椀	1/3	13.8×7.2×5.3	床下埋土	腰部丸く張り気味。口唇部僅かに外屈。付高台僅かに外傾 して下り段をなした後直に下る。轆轤成形。回転篋切。	①酸化、やや軟 ② 鈍い橙 ③やや粗

K54号住居跡 (Fig. 366~368・PL. 135)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.99 × 3.79	N-93.5°-E	東壁やや南寄り	

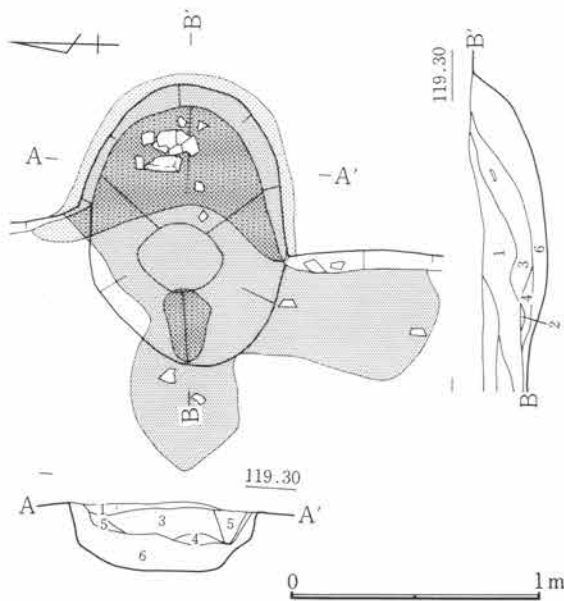


K54号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するがC軽石が少ない。
- 3 暗褐色土 黄褐色土塊・焼土粒を多く含む。
- 4 暗褐色土 1層によく似る。

Fig.366 K54号住居跡

K区南西部に位置し、68~70 J 49~K 1の範囲にあり一部はJ区に及ぶ。57号・J 3号・J 52号住居跡と重複するが、これらより新しい時期の所産である。南壁はJ 3号住居跡との新旧の認定を誤り消失してしまった。壁高は約20cmで浅い。床面はほぼ平坦をなすが、竈前方部を除いて軟弱である。壁下の溝は、南壁と考えられる範囲と東壁の南側には検出されなかったが、東壁北側から北壁・西壁下にかけて巡っている。幅10~16cm、深さは良好な部分で約5cmを測る。東壁南寄りに径40cm・深さ10cm前後の楕円形の土坑が穿たれるが、貯蔵穴としての断定はできない。土坑の埋土上面は竈から流出した灰層によって被われていた。竈は東壁やや南寄りに付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれるが、煙道部は作り出されていない。また袖部の構築材や埋設痕なども検出されていない。燃焼部幅約80cm・奥行き65cm、火床面は約10cmの深さで窪む。出土遺物は少なく小破片の遺物が散在しており、羽口小片などが検出されている。



K54号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒・黄褐色土塊を含む。
- 2 黒色灰層
- 3 暗黄褐色土 黄灰色粘性土塊を含む。
- 4 暗赤色土 焼土塊の集中。
- 5 暗褐色土 硬質砂土僅かなC軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 6 焼土塊・黒灰混土層

Fig.367 K54号住居跡竈

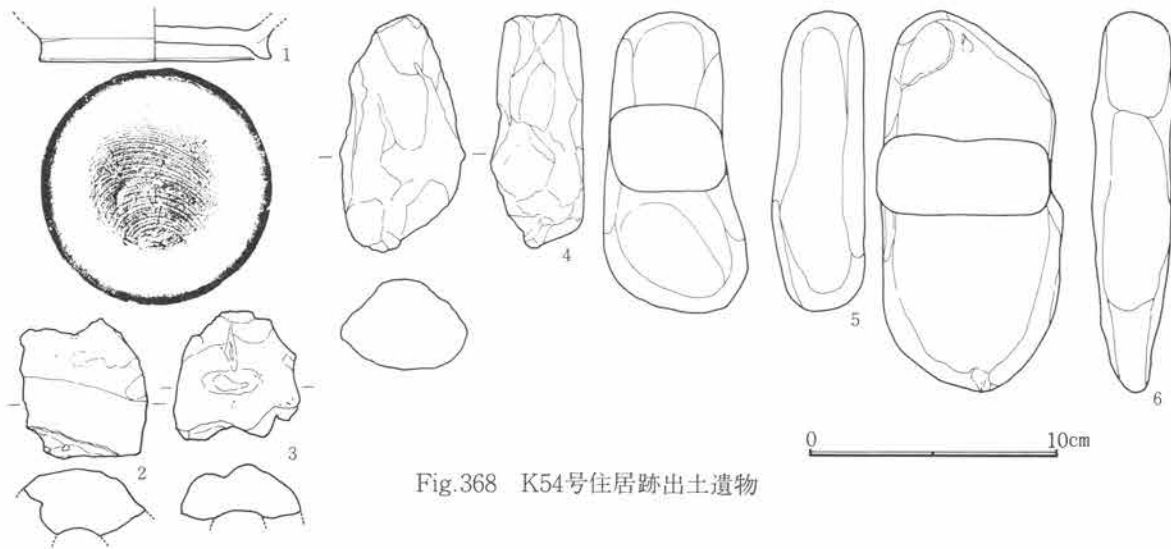


Fig.368 K54号住居跡出土遺物

K54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
368-1 135-1	須 惠 器 椀	底部	—×9.3×(1.7)	北壁際埋 土	見込部に強いうず巻状成形痕。付高台、外反し断面三角形。 轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ③やや粗、白色小石混	②灰白
368-2 135-2	土 製 品 鞆 羽 口	先端部	長(5.5)	埋 土	先端部溶解		
368-3 135-3	土 製 品 鞆 羽 口	先端部	長(5)	埋 土	先端部溶解		
368-4 135-4	石		9.3×5×3.7 231.3g	南西部床 面	全体に打撃痕	砂岩	
368-5 135-5	石		12×5.8×3.7 424.4g	北部床面		石英閃緑岩	
368-6 135-6	石		15×7×3.2 570.0g	東中央部床 面		溶結凝灰岩	

K56号住居跡 (Fig. 369・370・PL. 136)

K区南西部に位置し、66・67K 4～6の範囲にある。東半部は調査区域外に延び未検出である。また北西部は遺存がわるく、明確にできなかった。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長4.5mを測り南・北壁線

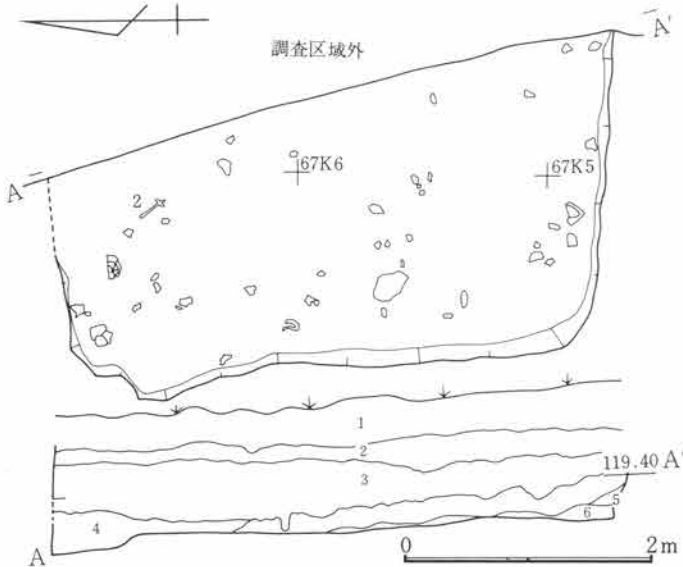


Fig.369 K56号住居跡

はほぼ東西に走る。東西範囲は西壁より最大2.6mの範囲まで検出されている。壁高は土層の観察によれば46cmを測る。床面は平坦をなすが湿気が多く軟弱である。出土遺物は鉄製紡錘車などが検出されている。

K56号住居跡

- 1 耕作土 砂質土。
- 2 耕作土 B 軽石を含む砂質土。
- 3 暗褐色土 C 軽石を多量、炭を含む。
- 4 暗褐色土 締まっている。
- 5 黒色灰層 C 軽石を混える。
- 6 黒色灰層 褐色土塊混じる。

第3章 K区の遺構と遺物

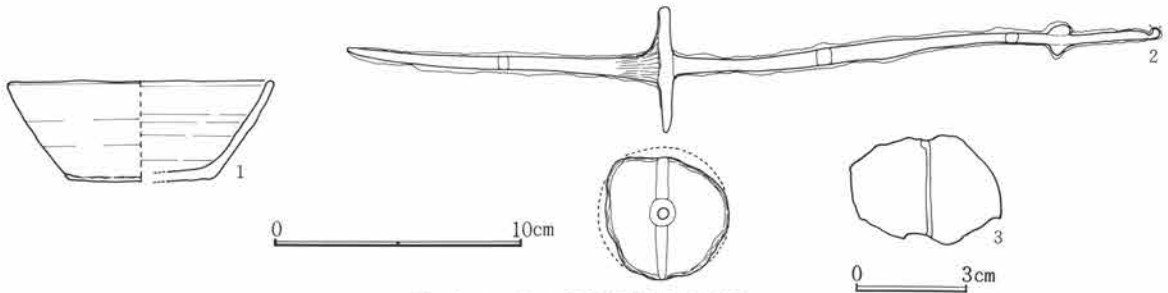


Fig.370 K56号住居跡出土遺物

K 56号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
370-1 136-1	須惠器 杯	1/5	10.8×5.8×4	床下埋土	体部直線的。口唇部やや内湾。轆轤成形。右回転篋切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
370-2 136-2	鉄製品 紡錘車	完	長32 輪径5	北西部床 面	片先端部小さく折れ曲がり釣状になる、紡輪部からの軸長は12.5×19.5cm	
370-3 136-3	鉄製品 不明		4×2.9×0.15	西中央部床 面	片側縁折れ曲る。	

K 57号住居跡 (Fig. 371・372・PL. 136)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.80 × 3.60	N-125.5°-E	東壁やや南寄り	

K区南西端に位置し、70・71K 0～2の範囲にある。東半は54号住居跡と重複しているが、これより古い時期の所産である。平面形は方形を呈すが、各隅に丸味をもつ。竈を含んで東壁の一部は54号住居跡によ

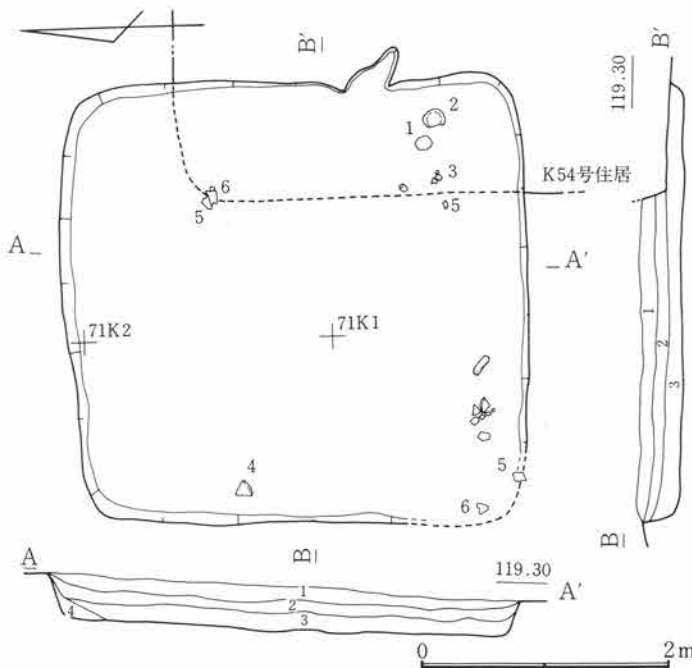


Fig.371 K57号住居跡

て削平され遺存度は不良であるが他の壁は良好で壁高約32cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良く、とくに竈前面が固い。壁下の溝・貯蔵穴などは検出されない。竈は東壁に付設され、燃烧部及び煙道部は変則的な形で壁外に延びる。焼土壁、火床面とも明瞭さを欠き、長時間の使用は窮えなかった。燃烧部幅約30cm・奥行き約20cm、煙道部はわずかに突出し長さ20cmを測る。出土遺物は須惠器宝珠摘かえり付蓋などのほか描き目調整の土器器甕などが検出されている。

K57号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 1層よりC軽石少ない。
- 3 暗褐色土 土器片及び黄褐色土塊含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色粘性土塊を含む。

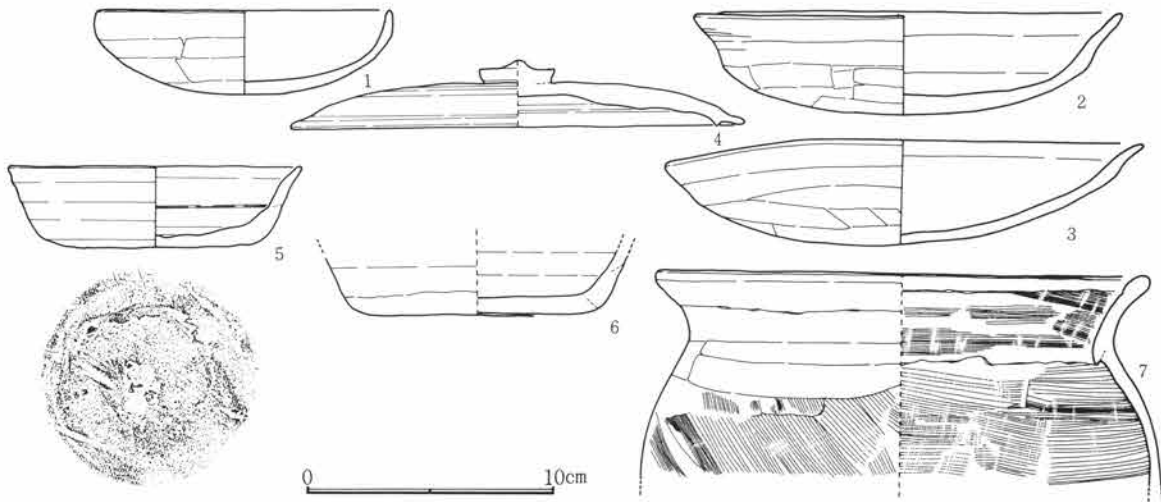


Fig.372 K57号住居跡出土遺物

K57号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
372-1 136-1	土師器	杯	完	11.8×-×3.3	南東部床 面	丸底。口縁部やや肥厚し直立する。体部・底部篋削り。	①良好 ②明褐 ③ やや粗
372-2 136-2	土師器	杯	1/2	17.3×-×4	南東部床 面	丸底。口縁部下はやや内湾し、口縁部は直線的に外傾して開く。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗
372-3 136-3	土師器	杯	完	19.1×-×4.1	南東部床 面	底部から緩く内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗
372-4 136-4	須恵器	蓋	1/2	18.5×-×2.7 摘径3 高1	西央部床 面	宝珠形摘。体部やや肥厚し偏平。口縁部薄く水平気味に開く。かえり直に下り断面三角形。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や密
372-5 136-5	須恵器	杯	1/2	11.8×8.3×3.2	南西部埋 土	腰部肥厚しやや丸味あり、口縁部は外傾する。轆轤成形。底部手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
372-6	須恵器	杯	口縁部 欠損	-×8.4×(2.3)	南西部床 面	体部直線的に立ち上がる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや密
372-7 136-7	土師器	甕	1/2下半 部欠損	20×-×(8.5)	東部埋土	胴部丸く張る。口縁部外反し、口唇部丸く肥厚する。内面口唇部下端に凹線。外面肩部横篋削り。胴部斜刷毛目。内面横刷毛目。外面頸部接合痕。	①良好 ②明褐色 ③やや粗、白色粒子 多い

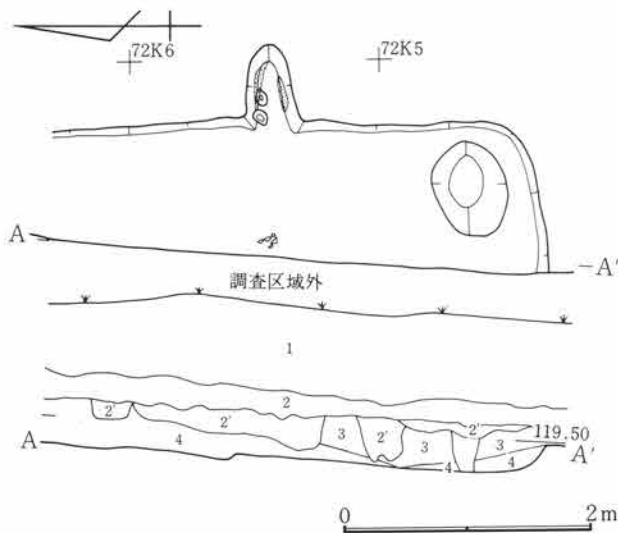


Fig.373 K58号住居跡

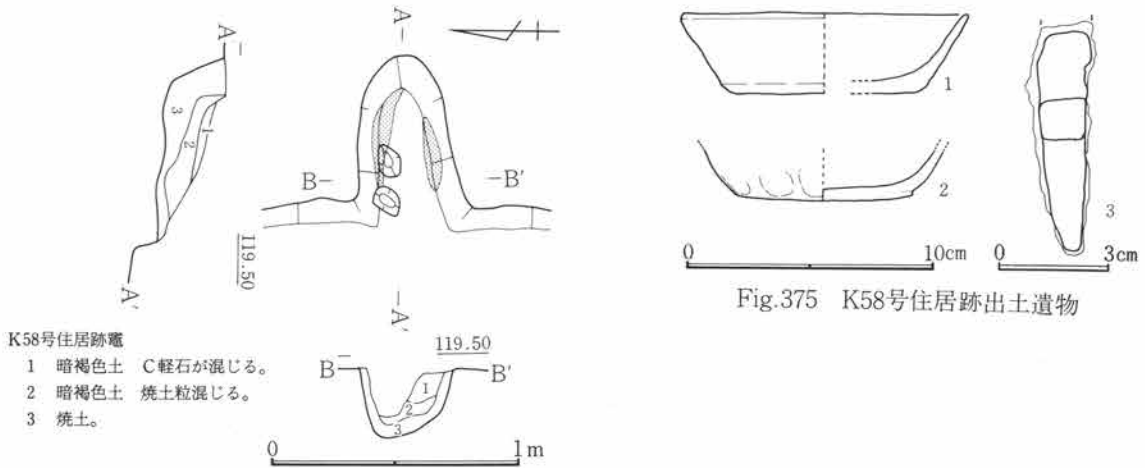
K58号住居跡 (Fig. 373~375・PL. 137)

K区西端南寄りに位置し、72K4~6の範囲にある。西側のほとんどは調査区域外に延び、また北側は攪乱のためその限界を検出することはできなかった。平面形は方形を呈すると考えられ、東西1.2m・南3.9mまで検出した。竈を基軸にする東西軸方位はN-90°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなすが湿気が多く軟弱である。竈は東壁に付設され煙道部が壁外に突出し、燃烧部の様相は不明である。煙道部長さ約60cmを測る。出土遺物は少量である。

K58号住居跡

- 1 盛土
- 2 褐色土 B軽石を多量に含んだ砂質土。
- 2' 褐色土 B・C軽石が混じり、土器片焼土粒を含む。
- 3 焼土 C軽石を多量に含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。

第3章 K区の遺構と遺物



- K58号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石が混じる。
 - 2 暗褐色土 焼土粒混じる。
 - 3 焼土。

Fig.374 K58号住居跡竈

Fig.375 K58号住居跡出土遺物

K 58号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
375-1 137-1	須恵器 杯	片	11.6×7.4×4.2	埋 土	体部直線的に立ち上がる。底部やや肥厚。轆轤成形。底部から腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密
375-2 137-2	土師器 甕?	底 部	—×7×(2)	竈 内	腰部丸味。腰部に指頭痕。底部に一定方向の篋削り。底部と体部に接合痕。	①良好 ②橙 ③やや粗砂混る
375-3	鉄 製 品		長(6) 径1	埋 土	断面方形。先細り。	

K59号住居跡 (Fig. 376・377・PL. 137・138)

K区北西端に位置し、72~74K38~40の範囲にある。東半部は調査区域外に延びて未検出、また北西部は攪乱によって消失している。平面形はかなり整った方形を呈すると考えられる。東西約3.4m・南北4.7mまで確認できた。南北軸は確認された壁線をみる限りほぼ南北方向を示す。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。東側土層面南寄りに円形の焼土痕が確認されているが竈煙道部か否かは不明である。その他中央やや北寄りに焼土面が検出されたが、施設を形成するような状況ではない。出土遺物は須恵器模倣の土師器杯のほか、須恵器蓋などが検出されている。

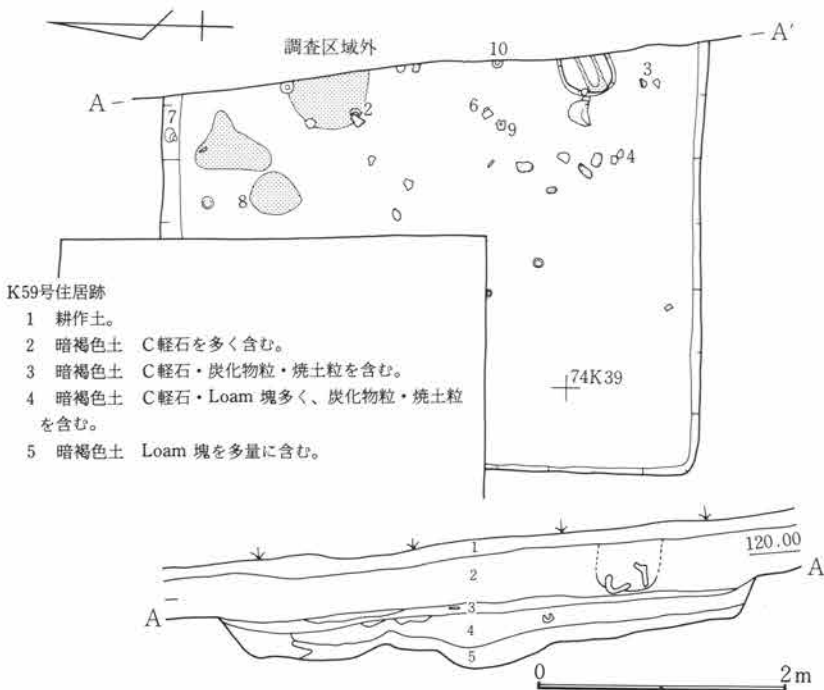


Fig.376 K59号住居跡

平坦をなすが踏み締まりは弱い。東側土層面南寄りに円形の焼土痕が確認されているが竈煙道部か否かは不明である。その他中央やや北寄りに焼土面が検出されたが、施設を形成するような状況ではない。出土遺物は須恵器模倣の土師器杯のほか、須恵器蓋などが検出されている。

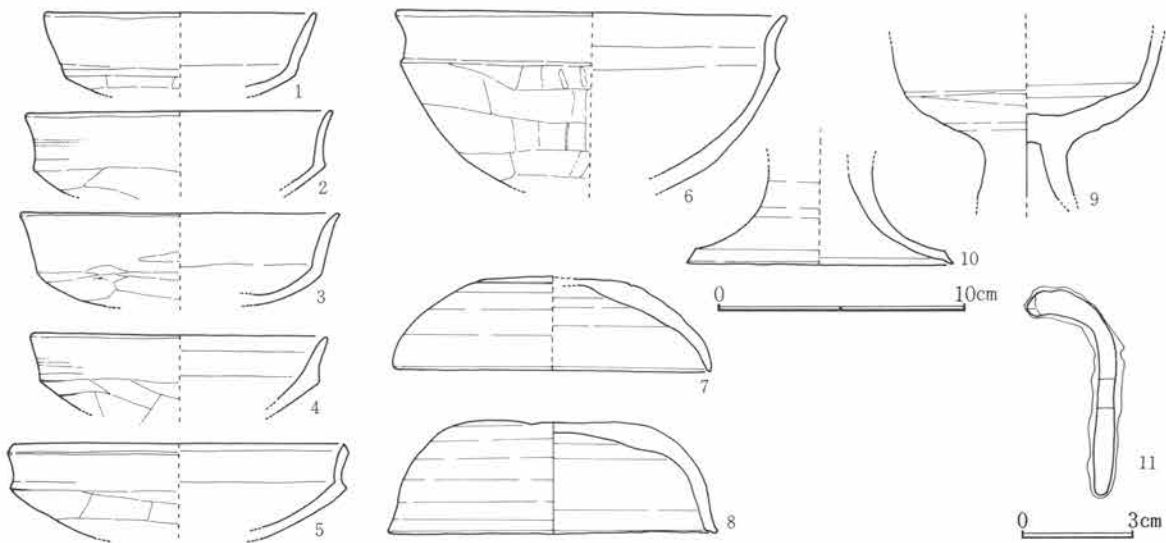


Fig.377 K59号住居跡出土遺物

K 59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
377-1 138-1	土師器 杯	小片	11×-×(3.3) 口径高2	埋土	受け部低く不明瞭。口縁部高くわずかに外反して立ち上がり口唇部やや内湾気味。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
377-2 138-2	土師器 杯	小片	12.4×-×(3.2) 口径高2.2	北東部床面	受け部低いが明瞭に内屈。口縁部高く外反して立ち上がる口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
377-3 138-3	土師器 杯	小片	13×-×(3.7) 口径高2.2	南東部床面	受け部不明瞭。口縁部僅かに外反して立ち上がる。口唇部尖りやや強く外反。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
377-4 138-4	土師器 杯	小片	12×-×(13)	南中央部床面	底部から直線的に肥厚する受け部に至る。受け部稜不明瞭口縁部は外傾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
377-5 138-5	土師器 杯	小片	13.8×-×(3.8) 口径高1.5	埋土	深目の底部。受け部明瞭に内屈し、口縁部は強く外反し直立。口唇部は尖り内傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
377-6 138-6	土師器 鉢	小片底部欠損	15.8×-×(7) 口径高2	中央部床面	深く丸体部。変換部は鋭い。口縁部内傾気味に立ち上半から強く外反する。口縁部横撫で、体部横篋削り。	①良好 ②橙 ③密
377-7 138-7	須恵器 蓋	1/2	12.4×6×3.7	北壁際床面	天井部平坦で凹線巡る。体部丸く口縁部は外傾する。口唇部は尖り上端は小さく内斜。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
377-8 138-8	須恵器 蓋	1/2	13.2×-×4.5	北中央部床面	深い体部。天井部平坦をなし、体部は脹る。口縁部緩く外反。口唇部は丸く、下端に段をなす。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密、黒色粒子混る
377-9 138-9	須恵器 高杯	体部・脚部	-×-×(6) 脚基部径3.5	東中央部床面	腰部張り、体部僅かに外傾する。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色細粒混る
377-10 138-10	須恵器 高杯?	脚部1/4	-×10.7×(4)	東中央部床面	大きく外反して開き端部は鋭く折れて外屈し尖がる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
377-11 138-11	鉄製品 角釘?		長5.5×径0.4	埋土	片端L字状に折曲がる。	

K 60号住居跡 (Fig. 378~380・PL. 138・139)

K区南西部に位置し、68~70K 3~5の範囲にある。西側で1号住居跡と重複しているがこれよりも古い時期の所産である。平面形は東西に長軸をもつ長方形に南壁の西半部が大きく突出する張り出し部が付属し、L字を呈す。壁高は遺存の良好な北壁部分で約42cmを測る。張り出し部は南壁から約1.8m・幅約2.2mの規模で突出する。床面は本体・張り出し部とも変化なく平坦をなす。貯蔵穴と考えられる穴は南東部に設けられ南壁線からわずかにみ出している。竈は東壁やや南寄りに付設される。袖部は住居内に突出し粘性暗褐色土をもって構築され、先端部には凝灰岩の加工材が埋設される。燃焼部は住居内に在り、煙り出し孔がわずかに住居外に出る。袖部内法約55cmを測る。出土遺物は羽口・砥石・鉄製品などが検出されている。

第3章 K区の遺構と遺物

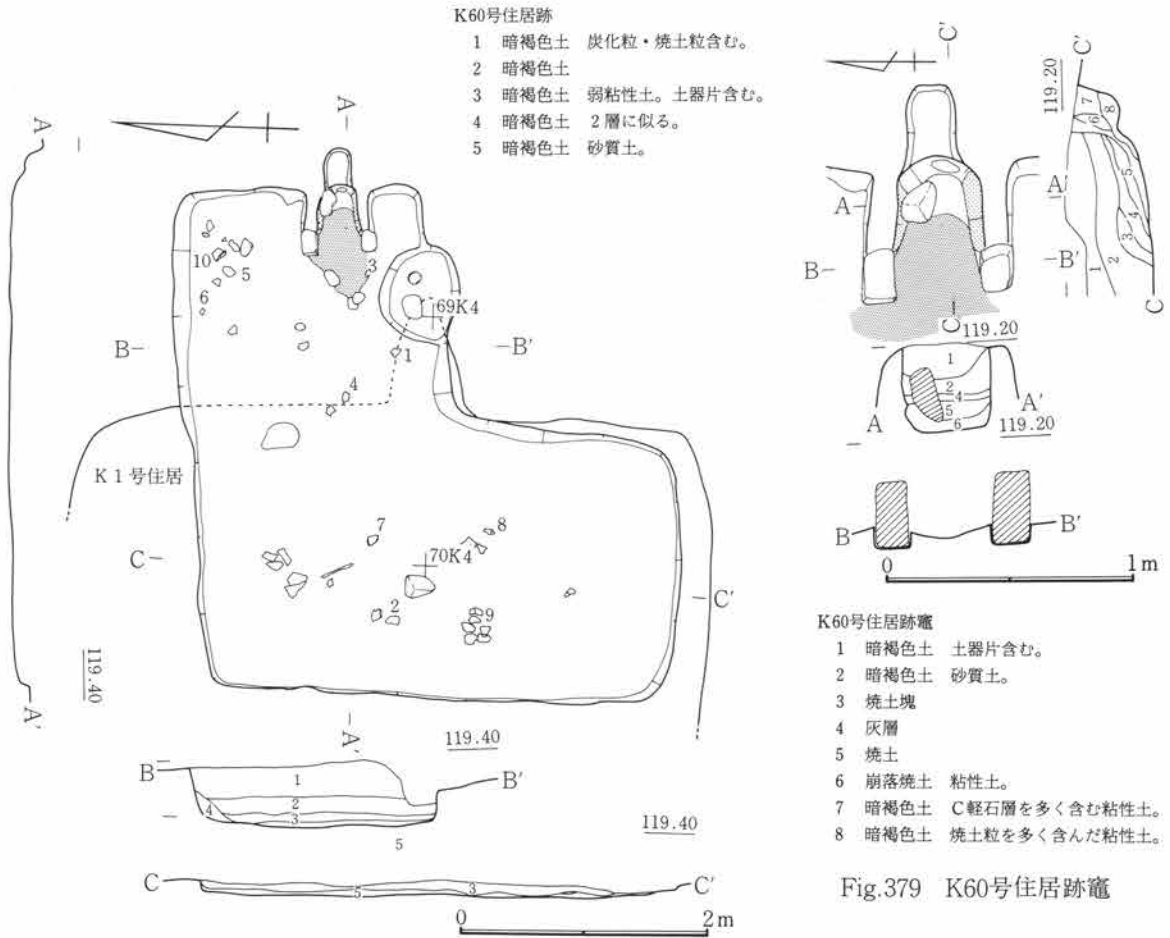
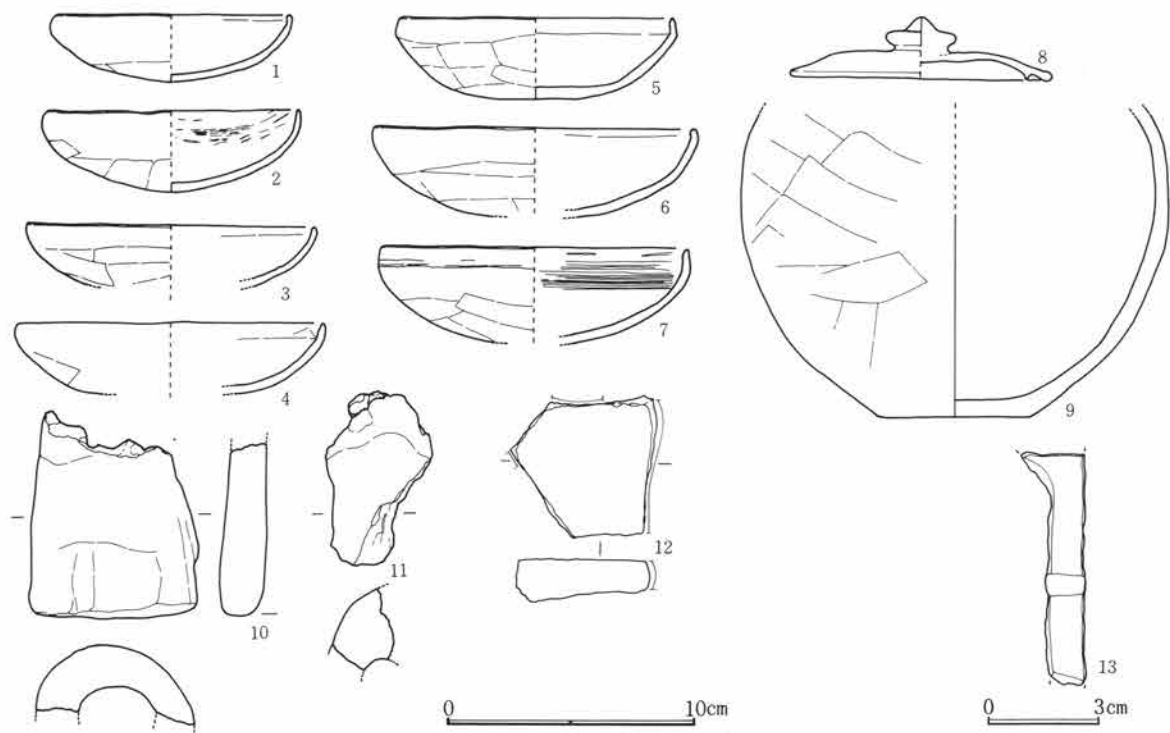


Fig.378 K60号住居跡



K 60号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
380-1 139-1	土 師 器 杯	1/4	9.7×-×2.7	南中央部床 面	丸底。口唇部は丸まり僅かに内傾する。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密
380-2 139-2	土 師 器 杯	1/4	10.4×-×3.2	西中央部床 面	底部丸味強い。口唇部は直立する。底部篋削り。内面篋状 工具による調整痕。	①良好 ②橙 ③や や粗、細砂混る
380-3 139-3	土 師 器 杯	小片	11.7×-×(2.5)	貯蔵穴際 床面	扁平でやや浅目の体部、口縁部短かく直立。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密、細砂混る
380-4 139-4	土 師 器 杯	1/4	12.6×-×(2.8)	中央部床 面	口縁部短かく直立。底部篋削り、器面荒く不明瞭。	①良好 ②橙 ③や や粗
380-5 139-5	土 師 器 杯	1/4	11.4×-×3.2	北東部床 面	平底気味の底部、口縁部の立ち上がり短かく内屈して内傾。 口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密、砂混る
380-6 139-6	土 師 器 杯	1/4	13×-×(3.5)	北東部床 面	底・体部やや丸く張り口縁部は短かく屈して内傾する。体・ 底部篋削り。	①やや軟 ②橙 ③ やや密
380-7 139-7	土 師 器 杯	1/4	12.6×-×(3.8)	中央部床 面	体部やや深く丸味をもつ。口縁部直立する。口縁部内面荒 い横撫で、体部篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③密、黒色雲母混
380-8 139-8	須 惠 器 蓋	口縁小 片	10.5×-×2.4 摘径2.3 高1.3	張り出し 部床面	宝珠形摘、体部扁平、口縁部緩く外反し、口唇部丸く肥厚 する。かえり鋭く断面三角形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗
380-9 139-9	土 師 器 甕	胴部	-×6×(12)	西中央部床 面	胴部は丸く強く張り球胴を呈す。平底。胴部斜位篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗、砂多く混る
380-10 139-10	土 製 品 竈 羽 口	基部1/4	長(8.2)	北東部床 面	外面面取り状調整痕	
380-11 139-11	土 製 品 竈 羽 口 小片	先端部	長(6.7)	埋 土	先端部熔解	
380-12 139-12	須 惠 器 転用砥石		5.5×5.8×1.7 54.6g	埋 土	3側面使用。甕	①良好 ②灰 ③や や粗
380-13 139-13	鉄 製 品 不 明		長(6)径1×0.5	埋 土	片端部幅広くなる。	

K 62号住居跡 (Fig. 381~383・PL. 139・140)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × 3.10	N-117° - E	東壁南寄り	

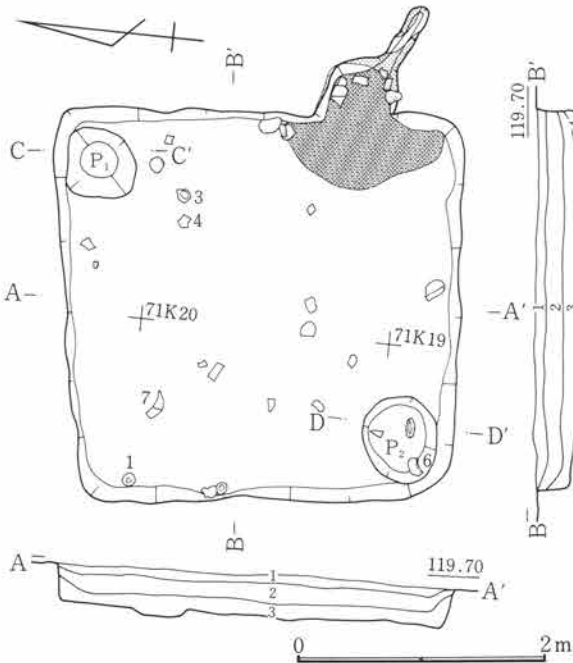


Fig.381 K62号住居跡

K区西部中央に位置し、69~71K18~20の範囲にある。平面形は比較的整った正方形を呈す。壁高は約30cmを測る。床面は全体に平坦をなし、踏み締まりは良好でとくに竈前面が固い。北東と南西隅に各々楕円形を呈する土坑状の穴が穿たれるが、貯蔵穴に概当するか否かは不明である。前者は径54cm・

K62号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多く、焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土 1層よりC軽石少ない。
- 3 暗褐色土 焼土塊をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を多く含む粘性土。

P₁

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 粘性土。
- 3 暗褐色土 弱粘性土。
- 4 褐色土 粘性土。

P₂

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 弱粘性土。
- 3 褐色土 黄褐色粘性土含む。

第3章 K区の遺構と遺物

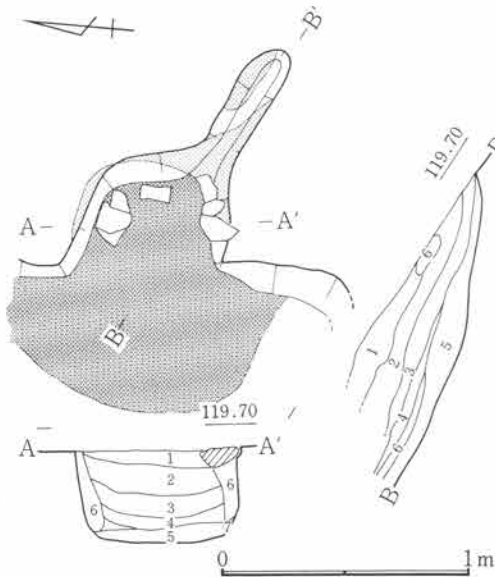


Fig.382 K62号住居跡竈

深さ26cm、後者は径66×60cm、深さ19cmを測る。竈は東壁の南寄りに付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖材やその埋設痕は検出されていない。煙道部は長く燃焼部の右側に偏って右斜め方向へ延び、東壁線に対しおよそ30°の角度で南へ傾く。燃焼部幅約60cm・奥行き約50cm、煙道部長さ65cmを測る。出土遺物には灰釉陶器瓶片、黒色処理篋磨きの施された短頸壺などが検出されている。

K62号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石多く、焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土 1層よりC軽石が少ない。
- 3 暗褐色土 焼土塊わずかに含む。
- 4 黒色灰 焼土塊含む。
- 5 黄褐色粘性土塊
- 6 火床面
- 7 暗褐色土 C軽石少量含む。

Fig.383 K62号住居跡出土遺物

K62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
383-1 140-1	土師質 杯	完	9.6×6.5×2.1	北西部床 面	器肉肥厚する。体部上半は緩く外反。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや粗
383-2 140-2	須恵器 杯	1/2	10.7×7.1×3.5	竈内	薄手。体部やや深く、直線的、口縁部外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②灰白 ③粗、砂多く混る
383-3 140-3	須恵器 碗	底部	—×8.3×(3.1)	北東部床 面	付高台。高く肥厚し、外反気味に大きく開く。轆轤成形。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③やや密
383-4 140-4	須恵器 碗	底部1/4	—×8.2×(2.9)	北東部床 面	付高台。直線的に開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
383-5 140-5	灰釉陶器 瓶	底部1/4	—×3.4×(3.6)	埋土	胴部直線的。付高台、低く幅広い。腰部回転篋削り。外面施釉。	①良好 ②灰白 ③ 密
383-6 140-6	土師質 壺	口縁部 1/8	13.1×—×(6.2) 胴径(22.4)	南西土坑 内	胴部丸く張り、肩部を形成する。口縁部は内傾して立ち上がった後僅かに外傾する。内外面黒色処理。外面横位に密な篋磨き、内面は口縁部のみ篋磨き。	①良好 ②黒 ③や や密、白色細粒混る
383-7 140-7	須恵器 甕	口縁部 1/4	21.8×—×(5.5)	北西部床 面	口縁部は直立して立ち上がった後、上半は強く外反する。口唇部は僅かに内傾して立つ。	①酸化 ②灰白 ③ やや粗、白色細粒混

K63号住居跡 (Fig. 384~387・PL. 140~142)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
	— × 6.00	N—92.5°—E	東壁南寄り	

K区の西縁北寄りに位置し、73・74K32~35の範囲にある。住居の西側は調査区域外に延び全体は検出できていない。64号・65号住居跡と重複している。新旧関係は64号より旧く65号より新しい時期の所産である。平面形は方形を呈するようであるが、かなり大形な規模を有すると考えられる。東西は約1.7mの範囲まで確認

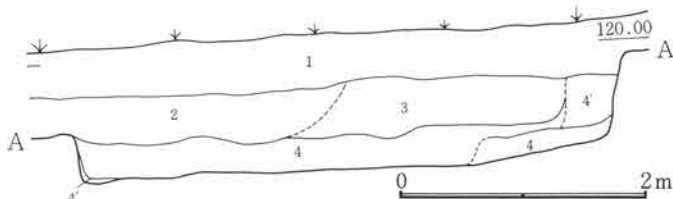
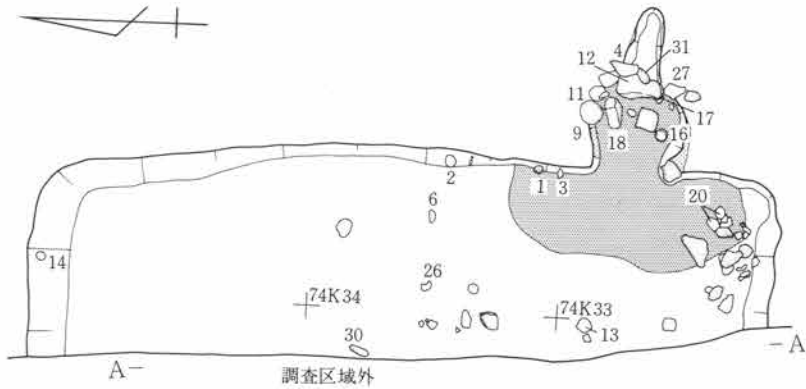


Fig.384 K63号住居跡

K63号住居跡

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 炭化塊を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C軽石含む。
- 4 暗褐色土 C軽石が密に混入。
- 4' 暗褐色土 4層よりC軽石が少ない。

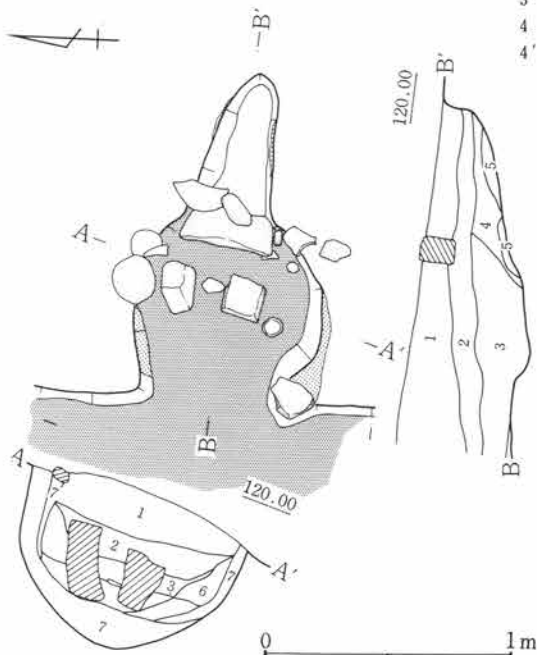


Fig.385 K63号住居跡竈

K63号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含み締めりあり。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量混え灰を含む。
- 3 暗褐色土 灰を多く含む。
- 4 焼土
- 5 黒色灰層
- 6 焼土塊
- 7 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を多く含み粘性あり。

できた。壁高は土層観察によれば約70cmで掘り方は深い。床面は平坦で良好に踏み締まっている。竈は東壁の南に偏って付設され、楕円形に掘り込まれた燃焼部に長目の煙道部が付く。燃焼部中央には2個の支脚材と考えられる凝灰岩質の角柱が併立して埋設されており角柱間は約20cmの間隔がある。また燃焼部と煙道部の変換部には長方形の加工材が架せられ天井部を形成している。燃焼部幅60cm~70cm、奥行き80cm、煙道部長さ60cmを測る。出土遺物は多く、須恵器坏、椀類のほか中央部が穿孔された須恵器耳皿、灰釉陶器、転用硯、転用砥石類など豊富である。

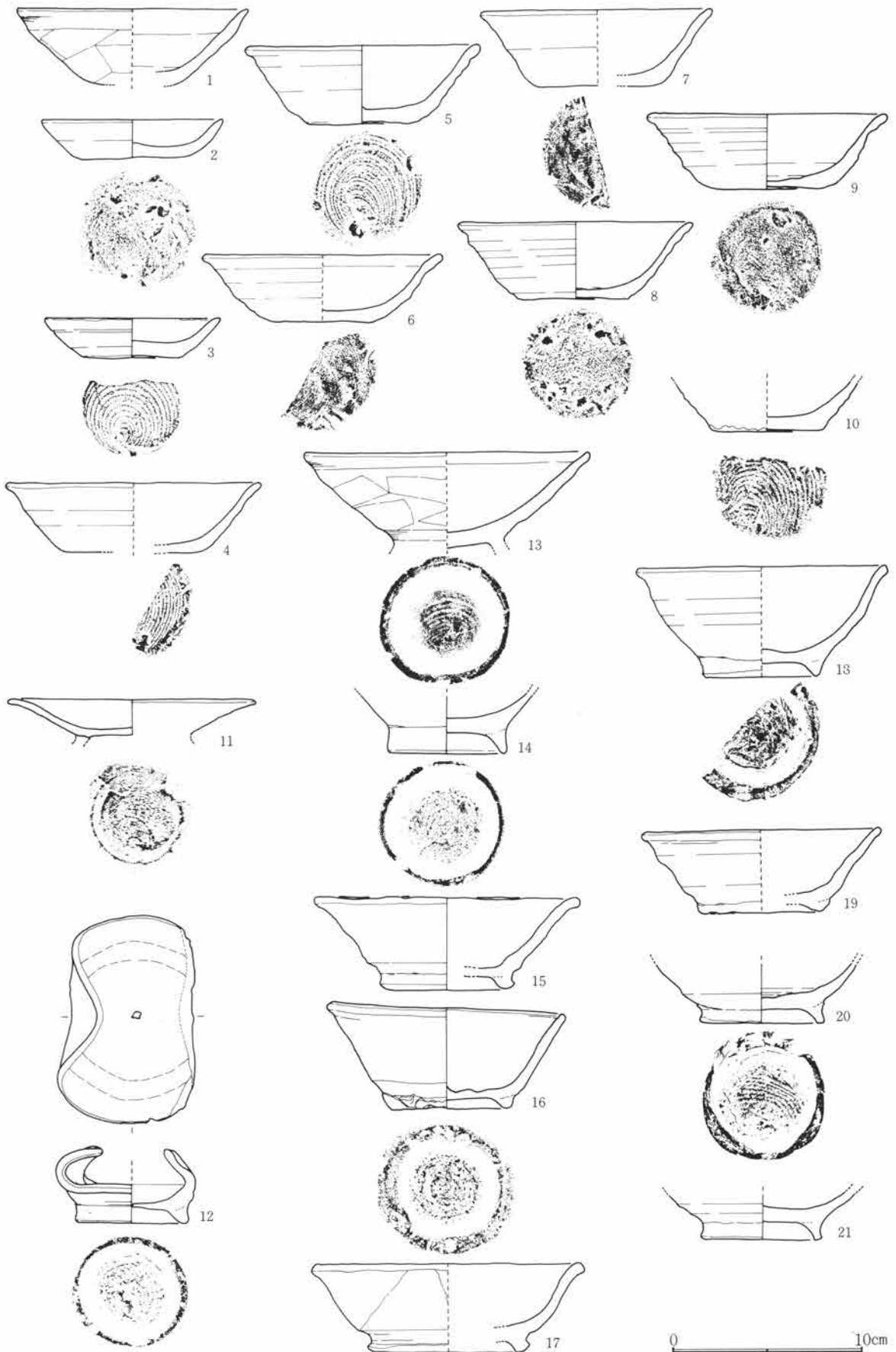


Fig.386 K63号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

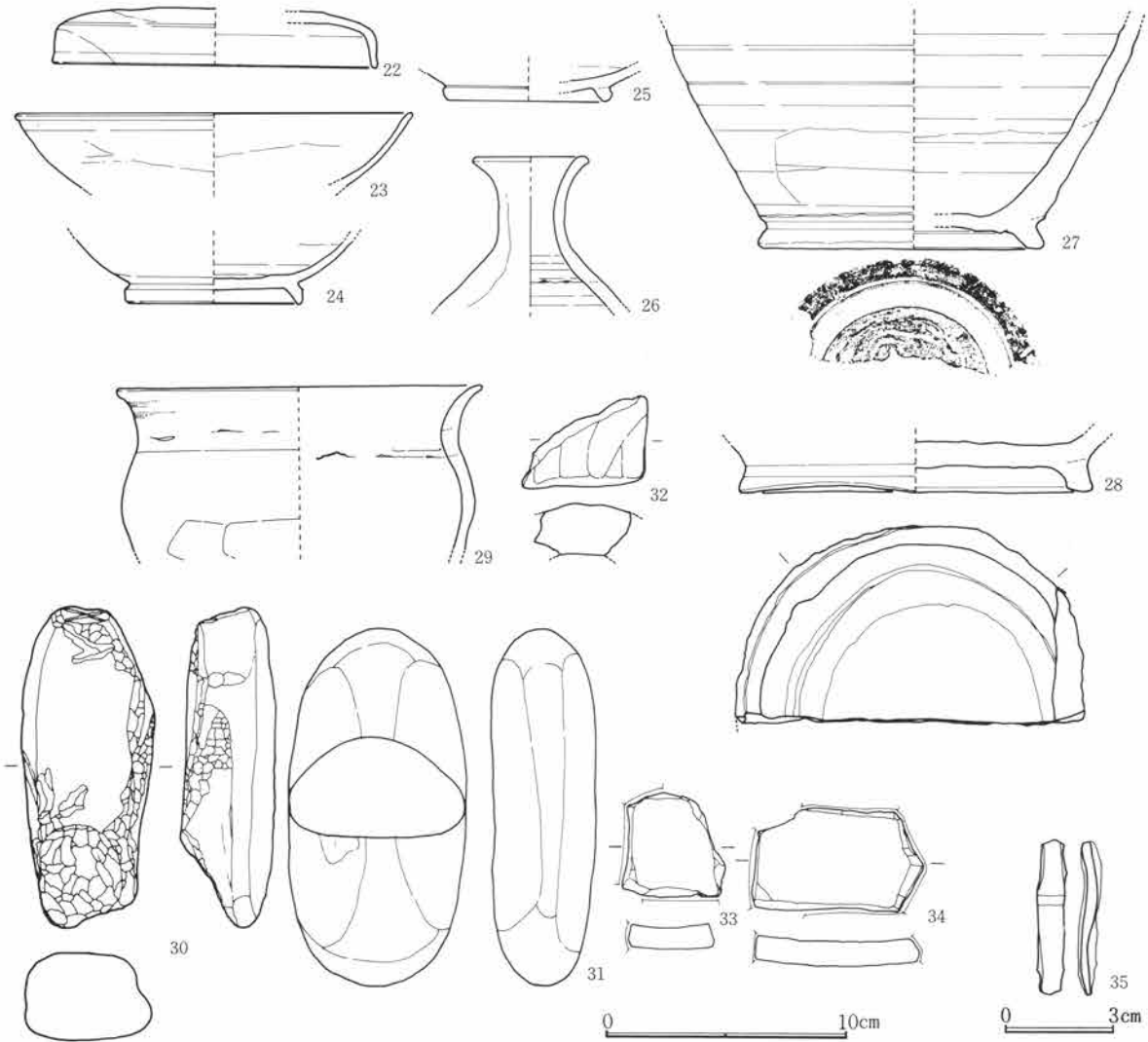


Fig.387 K63号住居跡出土遺物(2)

K 63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
386-1 141-1	土 師 器 杯	1/2	12.2×-×4	東壁際埋 土	体部は直線的に開き、底部は丸味をもつ。口縁部はやや外反気味に端部に至る。口唇部は細る。口縁部横撫で、体部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
386-2 141-2	土 師 質 杯	1/2	9.6×6×2.1	東壁際床 面	見込中心部凸状に肥厚し、体部は緩く外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③粗、小石混る
386-3 141-3	土 師 質 杯	1/2	9.3×5×2	東壁際埋 土	体部直線気味に立ち上がる。外面口縁部下凹線巡る。内外面口唇部煤状付着物。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
386-4 141-4	須 惠 器 杯	1/2	13.2×7×3.6	竈 内	体部直線的に外傾し、腰部に丸味。口縁部外反。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗
386-5 141-5	須 惠 器 杯	1/2	12.6×5×3.5	床下埋土	体部やや丸く張り、口縁部は大きく外反する。口唇部丸い内外面燻し。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗砂混る
386-6 141-6	須 惠 器 杯	完	12.2×5.4×4	東中央部床 面	腰部丸く、直線的な体部。口唇部丸く脹らみ外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、良好 ②鈍い橙 ③粗、小石混
386-7 141-7	須 惠 器 杯	1/2	12.2×6×4	床 下	腰部やや脹り、体部は僅かに外反して立ち上がる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②粗、小石混る

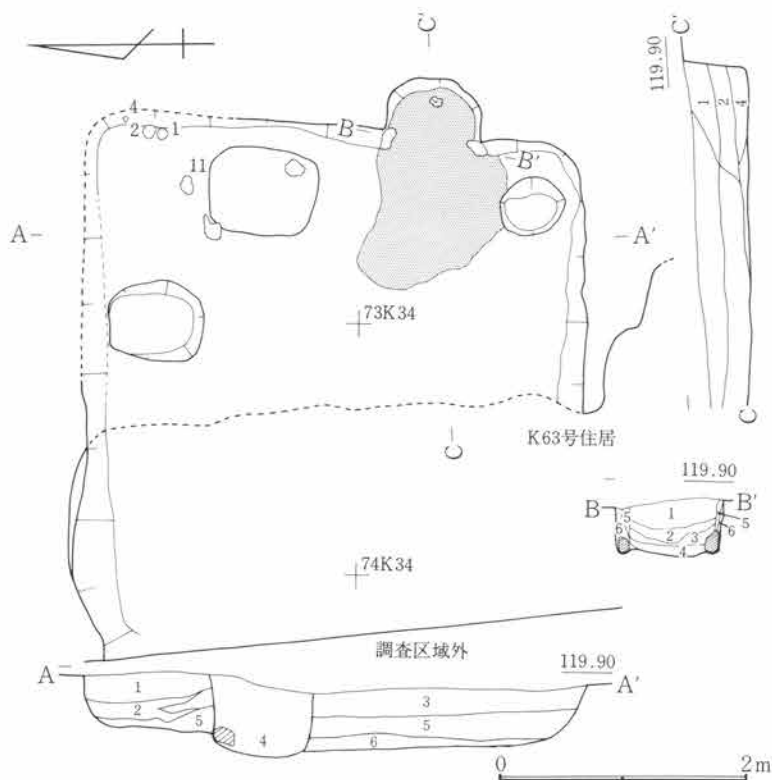
第3章 K区の遺構と遺物

K 63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
386-8 141-8	須 杯 器	ほぼ完	12.3×5.8×4	埋 土	丸味のある腰部から、口縁部は緩く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い 橙 ③粗、小石混
386-9 141-9	須 杯 器	1/2	12.7×6×4	竈 内	体部丸く張り、外面口縁部下でくびれ外反する。くびれ部分器肉薄い。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、良好 ②灰白 ③粗、砂混
386-10 141-10	須 杯 器	体部欠 損	1×5.8×(2.6)	床 下	体部直線的。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②明褐灰 ③粗、砂混る
386-11 141-11	須 皿 器	高台欠 損	13×1×(1.9)	竈際上面	器肉薄く、体部外反気味。口唇部はさらに強く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや密
386-12 141-12	須 耳 皿 器	片耳部 欠損	10.8(4.4)×6×4	竈 内	両側縁大きく内湾して耳部となる。見込部中央に焼成後穿孔。付高台、肥厚する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石混る
386-13 141-13	土 師 碗 器	1/2・高 台欠損	15×1×(5)	南西部床 面	内湾気味に大きく開き、口縁部は僅かに外屈気味。口縁部、腰部横撫で、体部疎に篋削り。	①良好 ②にぶい橙 ③やや密
386-14 141-14	須 碗 器	体部欠 損	1×6.3×(3)	北壁際埋 土	付高台、やや高く、開き少ない。轆轤成形。内面撫で顕著。	①良好 ②浅黄橙 ③密細砂混る
386-15 141-15	須 碗 器	1/2	14×7×4.8	床 下	体部直線的。口唇部丸く強く外反、付高台、肥厚し、外端部外へ撥る。轆轤成形。作り雑。	①酸化、良好 ②鈍 い橙 ③粗、小石混
386-16 141-16	須 碗 器	体部1 部欠損	12.6×6.8×5.2	竈 内	体部直線的。口唇部内面に僅かな段あり、見込部凹凸著しく紐作り痕か。付高台、低く紐状の接合痕。轆轤成形。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗
386-17 141-17	須 碗 器	1/2	14.4×8.2×4.5	竈 内	腰部強く張り体部丸味あり。口縁部は強く外反。付高台、幅広く、外部は外へ撥る。	①良好 ②灰褐 ③ 粗
386-18 142-18	須 碗 器	1/2	13.4×5.8×5.7	竈 内	高台部より外反気味に立ち上がり、体部中位やや張る、口縁部僅かに外反、付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化、良好 ②淡 黄橙 ③やや粗、砂 混
386-19 142-19	須 碗 器	1/2	12.5×6.4×4.3	床下埋土	体部直線的で中位で僅かに屈する。口唇部丸まる。付高台、低く幅広。作り雑。	①良好 ②灰白 ③ 粗
386-20 142-20	須 碗 器	体部欠 損	1×6.6×3.1	南東部床 面	腰部丸い。見込部螺旋状成形痕。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
386-21 142-21	須 碗 器	体部欠 損	1×6.3×2.5	埋 土	腰部に丸味。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
387-22 142-22	灰 釉 陶 器 蓋	1/2	13.4×1×2.4	埋 土	天井部平坦。口縁部垂直気味に下り、口唇部は僅かに外屈。天井部回転篋削り。	①良好 ②明オリ ブ灰 ③密
387-23 142-23	灰 釉 陶 器 碗	体部小 片	16.4×1×(3)	埋 土	口唇部丸い。付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
387-24 142-24	灰 釉 陶 器 碗	底部1/2	1×7.3×(2.5)	埋 土	腰部丸く脹らみ、高台は短かく外傾した後鋭く屈して直に下る。底部中心に回転糸切り痕。周縁、腰部回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ 密
387-25 142-25	灰 釉 陶 器 皿?	底部1/2	1×6.7×(1.5)	埋 土	高台丸く低い。内面体部施釉。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 密
387-26 142-26	灰 釉 陶 器 瓶	下半部 欠損	4.8×1×(6) 頸部径 2.7	東央部埋 土	肩部張り少なく、口頸部外反して立ち上がる。	①良好 ②明紫灰 ③密
387-27 142-27	須 瓶 器	下半部 1/2	1×11.7×(9.2)	竈際上面	胴部直線気味に立ち上がる。高台部外傾して強く張る。胴下半は回転篋削り。	①やや軟 ②灰黄 ③粗
387-28 142-28	須 転 用 硯	底部1/2	1×14.5×(2.2)	埋 土	瓶底部外面を転用する。高台を提として利用。磨り面著しく光沢を放つ。	①良好 ②灰 ③密
387-29 142-29	土 師 甕 器	上半部 1/2	15.1×1×(6.5)	埋 土	胴上位で強く張り、口縁部は僅かに外傾した後強く外反して立ち上がる。口縁部横撫で、胴部横削り。	①良好 ②灰褐 ③ やや密
387-30 142-30	石		13×3.9×3.5 430g	西央部床 面	端部、側面に打撃痕	砂岩
387-31 142-31	石		14.5×4.2×4 740g	竈 内		輝石安山岩(粗)
387-32 142-32	土 製 品 籬 羽 口 片	基部小	長3.5	埋 土	面取り状調整痕。	①良好 ②橙
387-33 142-33	須 転 用 砥 石		4.3×4.3×0.9 24.6g	埋 土	3側面使用。藁片。	①良 ②灰 ③やや 密
387-34 142-34	須 転 用 砥 石		7×4.2×1 45.7g	床下埋土	5側面使用。藁片。	①やや軟 ②橙 ③ 密
387-35 142-35	鉄 製 品		長(4.3) 径0.7×0.2	埋 土	偏平。両端薄くなる。	

K64号住居跡 (Fig. 388・389・PL. 143・144)

K区西部の北寄りに位置し、72~74K33~35の範囲にある。南西部で63号・65号住居跡と重複しており、前者より旧く後より新しい時期の所産である。この重複のため床面は消失している。また西壁は調査区域外にかかる。平面形は方形を呈し南北長4mを測り、東西約4.2mの範囲まで検出された。竈を基軸にする方位はN-95°-Eを示す。壁高は約40cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東部隅に設けられる。その他北東部には墓跡の可能性のある二つの土坑状の落ち込みが検出されている。竈は東壁やや南側に付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれ、煙道部はその痕跡が確認されたにとどまった。袖材は東壁線上に凝灰岩の残欠が埋設状態で検出されている。燃焼部幅・奥行き約60cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・砥石などが検出されている。



壁やや南側に付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれ、煙道部はその痕跡が確認されたにとどまった。袖材は東壁線上に凝灰岩の残欠が埋設状態で検出されている。燃焼部幅・奥行き約60cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・砥石などが検出されている。

K64号住居跡

- 1 暗褐色土 砂質。
- 2 黒灰色灰層 下位に焼土塊、中位に褐色砂質塊含む。
- 3 暗褐色土 1層によく似る砂層。
- 4 黄色粘性土塊 わずかな炭化物含む。
- 5 暗褐色土 粘性褐色土塊含む。
- 6 暗褐色土 多量の黄色粘土塊含む。

K64号住居跡竈

- 1 暗褐色土 砂層で焼土粒少量含む。
- 2 暗褐色土 1層より炭化粒が増す。
- 3 焼土塊 わずかに炭化塊を含む。
- 4 黒色灰層
- 5・6 焼土

Fig.388 K64号住居跡

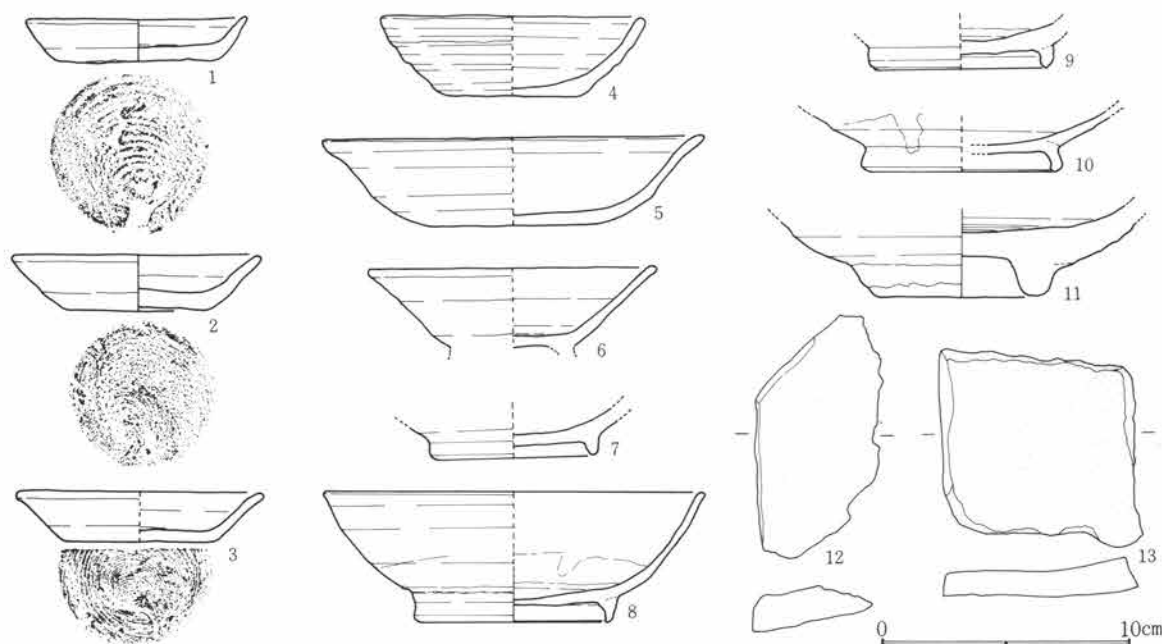
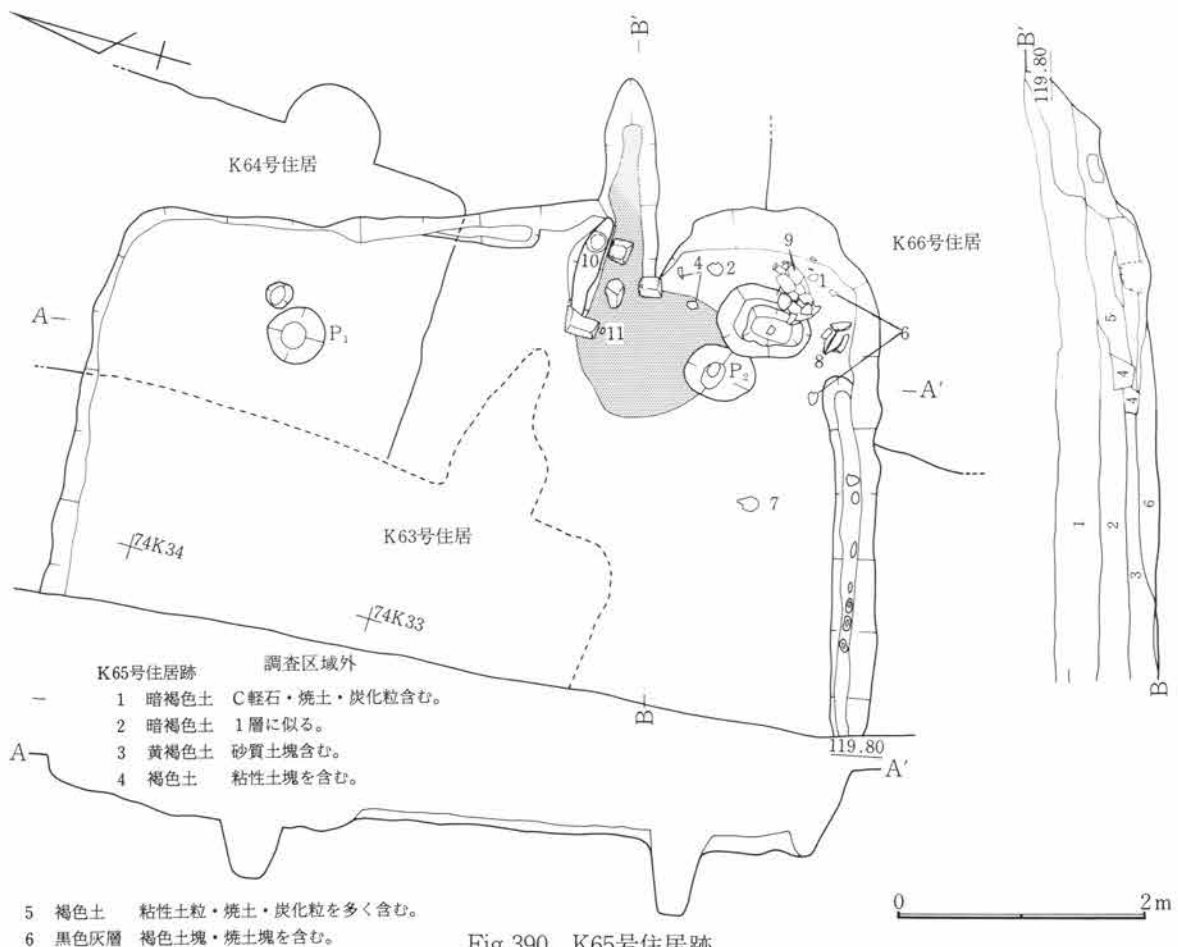


Fig.389 K64号住居跡出土遺物

第3章 K区の遺構と遺物

K64号住居跡出土遺物観察表

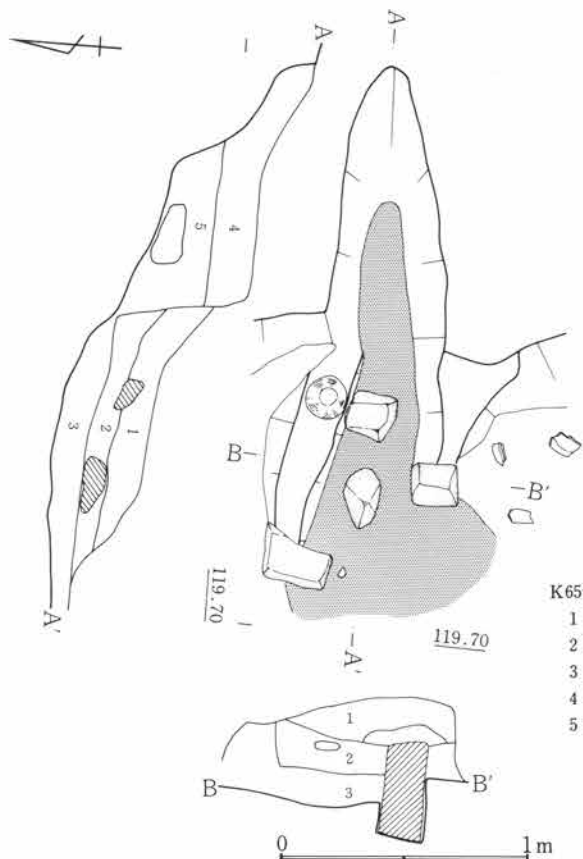
Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他			
389-1 143-1	土師質 杯	完	8.2×6.4×1.6	北東部壁 際床面	体部浅く、腰部丸い。内面赤色化粧土塗布。見込部巻き上げ痕顕著。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③やや粗			
389-2 143-2	土師質 杯	完	10×5.6×2.1	北東部壁 際埋土	腰部やや内湾し体部中位で僅かに屈し直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①やや軟 ②にぶい 黄橙 ③粗			
389-3 143-3	土師質 杯	1/2	10×6.2×2	埋土	体部直線的に外傾し、口縁部は屈してさらに外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好、硬 ②橙 ③やや密、白色粒混			
389-4 143-4	土師質 杯	1/2	10.6×5.5×3.2	北東部壁 際床面	体部内湾して立ち上がる。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。体部外面轆轤目強い。	①良好 ②灰白 ③ やや密			
389-5 143-5	土師質 杯	1/2	15.4×7×3.5	埋土	腰部に丸味をもち、体部直線的に立ち上った後、口縁部は外反する。轆轤成形。右回転糸切り。腰部回転篋削り？	①良好 ②鈍い褐 ③粗、白色小石混る			
389-6 143-6	土師質 椀	1/2・高 台欠損	11.6×—×3.2	埋土	体部直線的に開き、口唇部は丸まり、僅かに外屈。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密、雲母混る			
389-7 143-7	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×6.8×(2)	埋土	高台丸味をもち、直に下る。底部回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 密			
389-8 143-8	灰釉陶器 椀	体部小 片	15.5×8×5.2	竈内	体部丸味をもち、口唇端部尖り外屈。高台やや高く内湾気味に立ち端部は内屈。見込部中央は窪む。付け掛け施釉。	①良好 ②灰黄 ③ 密			
389-9 144-9	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×7.4×(1.8)	埋土	器肉肥厚。高台やや内湾して立つ。端部は尖る。底部回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗			
389-10 144-10	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×8×(2.5)	埋土	体部外傾強く皿の可能性。高台外傾して後端部鋭く内屈する。腰・底部回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ 密			
389-11 144-11	土師質 鉢？	底部	—×7.6×(3.5)	北東部埋 土	器肉肥厚。高台径小さく、内傾して立つ。端部は丸い。見込部回転篋調整。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗			
389-12 144-12	石製品 砥石		9.7×5×1.3 104.8g	埋土 2側面 使用	389-13 144-13	石製品 砥石	7.9×8×1 146.1g	埋土 1側面 使用	緑泥片 岩



K65号住居跡 (Fig. 390~393・PL. 144・145)

K区西部の北寄りに位置し、71~73K31~34の範囲にある。63号・64号・66号住居跡と重複しており新旧関係はこれらのいずれよりも古い時期の所産である。また西半は調査区域外に延び未検出である。平面形は南東及び北東部隅がやや丸味をもつが方形を呈すと考えられる。また規模は南北長約6.5mを測り、東西は東壁より4.1mの範囲まで検出されている。壁高は約60cmを測りかなり深い。床面は平坦をなし踏み締まりも良好である。壁下の溝は南壁及び東壁の一部にみられ幅約20cmを測り明瞭である。貯蔵穴は南東部に設けられる。柱穴はP₁とP₂の2ヶ所に検出され、P₁は上径44cm・深さ60cm。P₂は上径54×42cm・深さ68cmを測る。

また柱痕径はP₁・P₂とも約20cmで、柱間は2.4mを測る。竈は東壁の南寄りに付設され袖部は住居内に張り出し、淡黄色粘土粒を混える粘性暗褐色土で構成されるが先端部には凝灰岩の加工材が置かれる。右袖は短く凝灰岩が埋設されるが袖の芯として置かれたものと考えられる。右袖長さ約90cm、左袖は約50cmまで検出された。燃烧部は住居内に位置し、煙道部が壁外に長く延びる。袖部内法約30cm、燃烧部奥行き90cm、煙道部長さ70cmを測る。出土遺物は土師器杯・甕類のほか石製紡錘車が検出されている。



K65号住居跡竈

- 1 褐色土 粘性土粒・焼土・炭化粒を多く含む。
- 2 褐色土 粘性土粒を全体に含む。
- 3 黒色灰層 褐色土塊・焼土塊を含む。
- 4 暗褐色土 強粘性土。
- 5 暗褐色土 4層に黄褐色粘性土ブロックを含む。

Fig.391 K65号住居跡竈

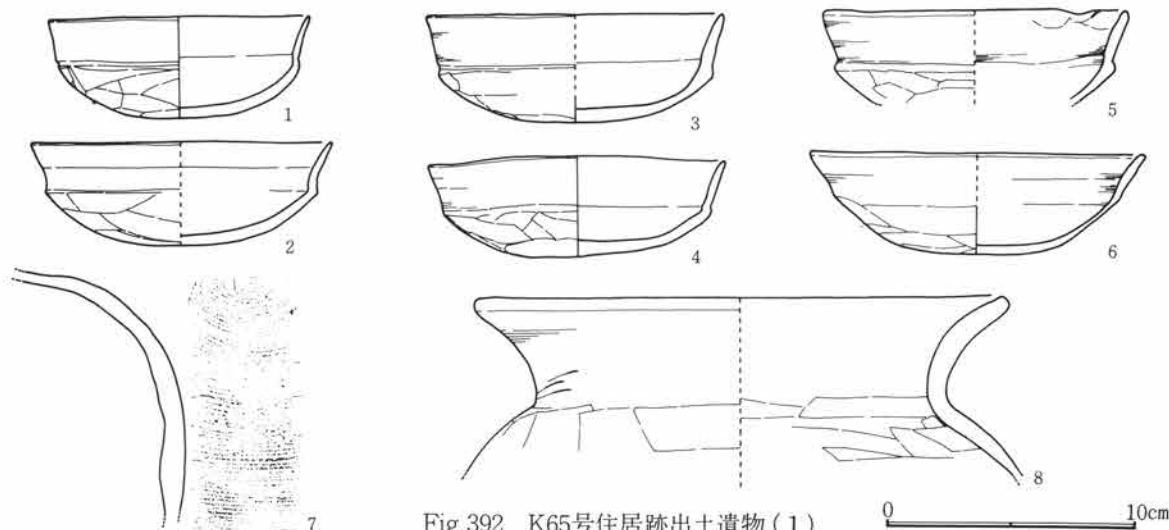


Fig.392 K65号住居跡出土遺物(1)

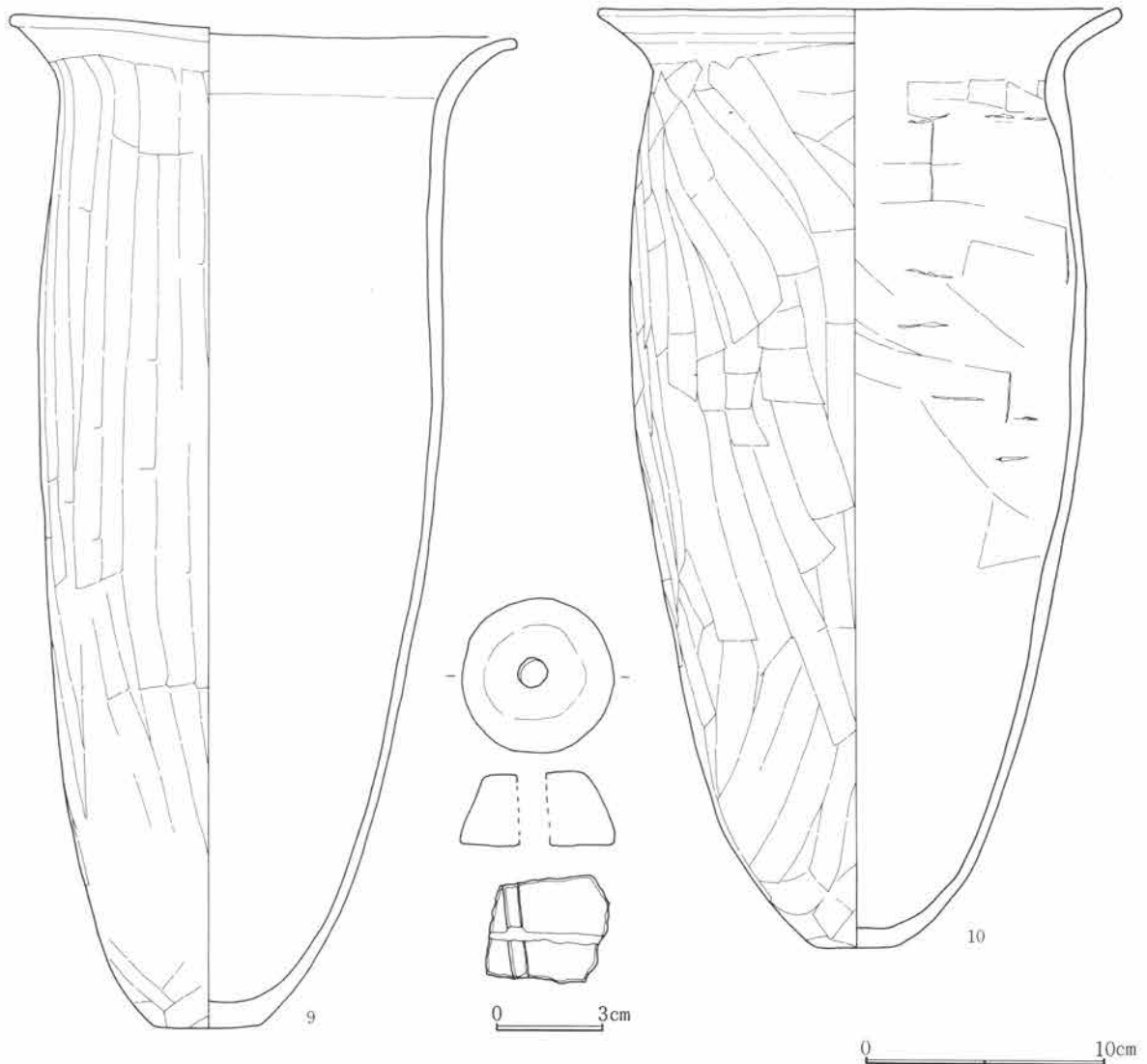


Fig.393 K65号住居跡出土遺物(2)

K 65号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
392-1 144-1	土 師 器 杯	完	10.5×-×4 口径高1.7	貯蔵穴際 床面	底部丸く張り凹線をなして薄く外反して立ち上がる口径部に至る。口径部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗砂混る
392-2 144-2	土 師 器 杯	片	12.1×-×4.1 口径高2	貯蔵穴際 床面	底部丸く、口径部は強く屈して短かく直立後大きく外傾する。口径部横撫で。底部篋削り。薄手。	①良好 ②鈍い橙 ③密、茶褐色粒混る
392-3 144-3	土 師 器 杯	口径部 小片	12×-×4.3 口径高2	埋 土	底部丸味をもち、受け部は不明瞭。口径部直線的に外傾。口径部肥厚し直線的に外傾。口径部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
392-4 145-4	土 師 器 杯	片	12×-×4 口径高2	貯蔵穴際 床面	底部平坦気味。受け部段をなし、口径部は直線的に外傾する。口径部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
392-5 145-5	土 師 器 杯	小 片	12.2×-×3.6 口径高2	埋 土	受け部は丸味のある段をなす。口径部は直線的に外傾し、口径部は僅かに屈して内傾する。	①良好 ②橙 ③密
392-6 145-6	土 師 器 杯	口径部 小片	13.4×-×4 口径高1.7	南東部床 面	やや丸味のある底部から体部直線的に開き、僅かに屈して口径部は外反気味に立ち上がる。口径部横撫で、体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
392-7 145-7	須 惠 器 瓶	側部小 片		南央部床 面	外面同心円状描き目	①良好 ②灰 ③やや粗、白色小石混る
392-8 145-8	土 師 器 甕	口径部 片	24×-×(6.8)	貯蔵穴際 床面	球胴を呈するか。口径部肥厚し強く外反。口径部は丸く僅かに内屈。口径部横撫で、肩部横・縦篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③粗、白色小石多く混で。

K 65号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. Na	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
393-9 145-9	土 師 器 甕	部分的 欠損	21.1×4.4×41.5 胴最大径16.8	貯蔵穴際 床面	胴部張りなく、長胴形を呈す。口縁部大きく外反。口縁部横撫で、胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗
393-10 145-10	土 師 器 甕	ほぼ完 形	21.8×3.4×38.6 胴最大径18.8	竈左袖部	胴部張り少なく、長胴形を呈す。口縁部はやや肥厚し、強く外反して開く。口縁部横撫で、胴部縦篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③粗
393-11 145-11	石 製 品 紡 錘 車	完	径3×4.4 高2 孔径0.8	竈手前床 面		蛇紋岩
393-12 145-12	鉄 製 品 小 片		(3)×(3.5) 厚0.2	埋 土	板状製品。片面に幅0.5cmの断面台形の凸帯。	

K66号住居跡 (Fig. 394・395・PL. 146)

K区西部の北寄りに位置し、71・72K30・31の範囲にある。65号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。東部は調査区域外に延び未検出である。調査時の平面確認がはたし、65号住居跡と重なる北西部は消失してしまった。壁線はやや丸味をもつがほぼ方形を呈すると考えられる。南北長さ約3.2m



Fig.394 K66号住居跡

を測り、東西は西壁より2.3mの範囲まで検出した。南北軸の方向はほぼ北を示す。壁高は約10cmで浅い。床面は平坦をなすが軟弱である。竈は未検出であるが、東側やや南に寄った部分に焼土及び灰の分布がみられ、竈は東壁に付設されたと考えられる。出土遺物は羽釜・灰釉陶器などが検出されている。

K66号住居跡

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 2層に似る。土器片を含む。
- 4 暗褐色土 弱粘性土塊を含む。
- 5 火床面

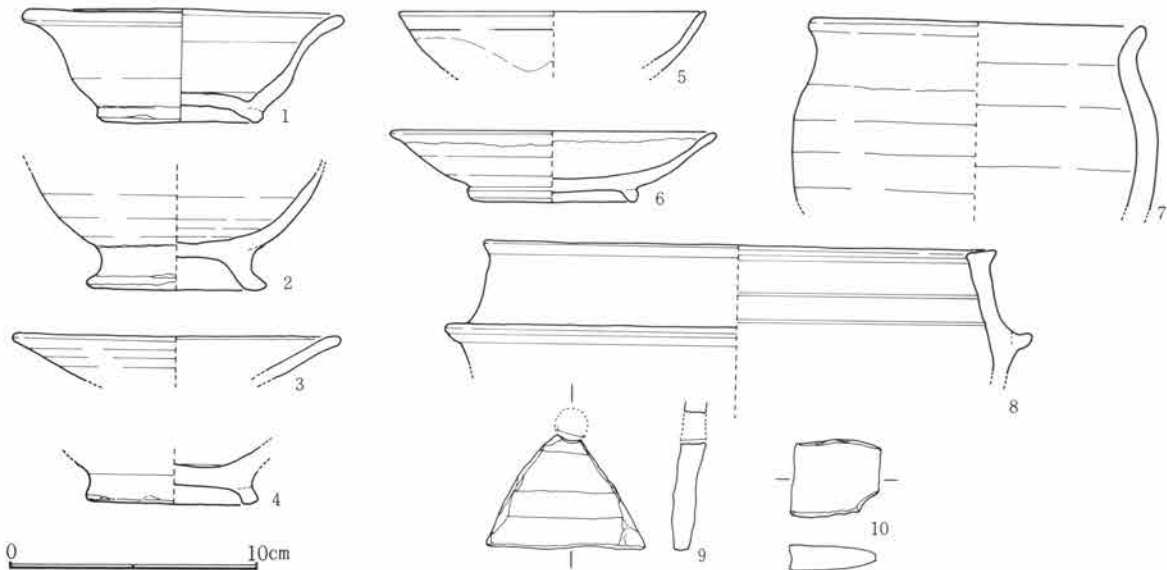


Fig.395 K66号住居跡出土遺物

第3章 K区の遺構と遺物

K 66号住居跡出土遺物観察表

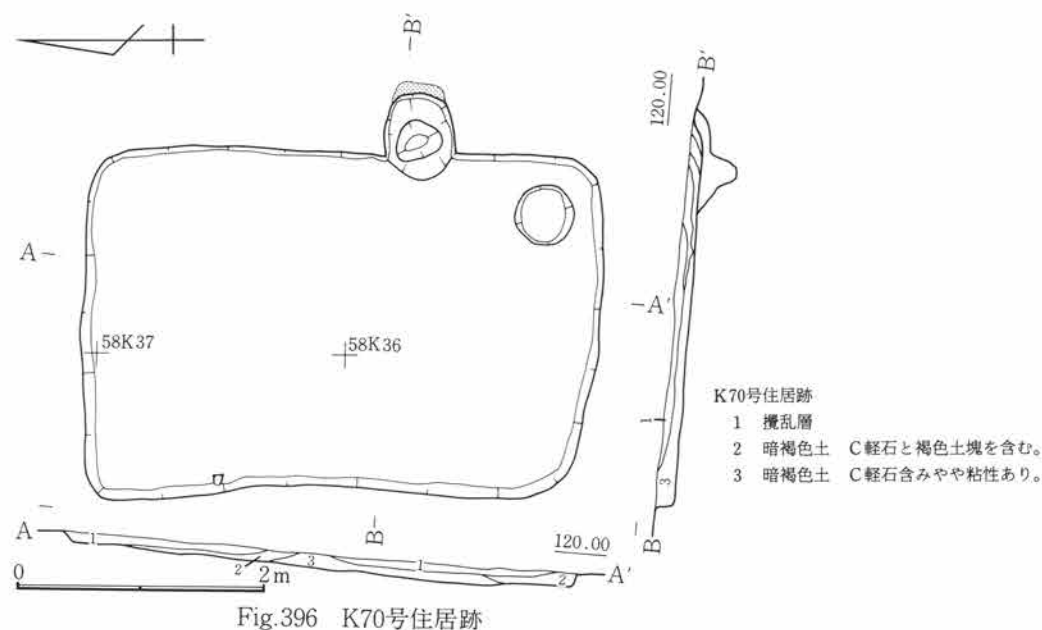
Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
395-1 146-1	須恵器 碗	完	13×6.6×4.5	南東部埋 土	体部下半が脹れ上半から口縁部にかけて外反する。口唇部は肥厚する。付高台、低く雑な作り。轆轤成形。	①良好、燻し ②黒 灰 ③やや密
395-2 146-2	須恵器 碗	1/4・上 半欠損	—×7.3×(4.7) 高台高1.3	東中央部床 面	体部丸い。付高台、肥厚し直に下った後外屈する。轆轤成形。右回転糸切り。作り雑。	①酸化、やや軟 ② 鈍い黄橙 ③粗
395-3 146-3	須恵器 皿	口縁部 1/2	13.2×—×(1.7)	中央部床 下	体部直線的に開き、口唇部は丸く僅かに外反。轆轤成形。	①酸化、やや軟 ② 鈍い橙 ③やや密
395-4 146-4	須恵器 碗	底部1/4	—×6.9×(2.4)	東中央部床 下	付高台、轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗
395-5 146-5	灰釉陶器 碗	1/4・底 部欠損	12.4×—×(2.4)	埋 土	体部張り少なく、全体に肥厚する。外面口縁部下位に細い凹線巡る。体部施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
395-6 146-6	灰釉陶器 皿	1/4	13×6.8×2.8	埋 土	体部張り少なく、口唇部丸く、僅かに外傾。内外面口唇部施釉。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 密
395-7 146-7	土師質 甕	1/4・下 半欠損	13.6×—×(7.4)	南中央部床 面	器内は均一で肥厚する。胴部丸く張り、短かい口縁は外傾する。口唇部は丸い。胴部回転撫調整。	①良好 ②鈍い黄 ③やや密、小石混る
395-8 146-8	羽 釜 小片	口縁部 小片	20.6×—×(5) 口径11.8 口縁高3.2	南東部床 下	口縁部直線的に内傾し、口唇部の上端広がり、平坦で内斜す。	①良好 ②灰 ③ 粗、白色小石混る
395-9 146-9	須恵器 台部?	小片		埋 土	円形の透し。台部?	①良好 ②灰 ③や や粗
395-10 146-10	石製品 砥石		3.5×3×1 18.3g	埋 土	側・平面使用。	

K 70号住居跡 (Fig. 396~398・PL. 147)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.19 × 2.80	N— 91° —E	東壁やや南寄り	円形 (40.9 × 40.5 × 19.0)

K 70号住居跡

K区北東部に位置し、57・58K35・36の範囲にある。平面形は長軸を南北にもつ方形を呈するが、南西隅にわずかな凸みが見られ西壁線が歪む。壁高は約10cmを測り浅い立ち上がりである。床面はほぼ平坦をなし、竈前方部を除き踏み締まりは弱い。幅約55cm・奥行き50cmを測る。出土遺物は少量である。



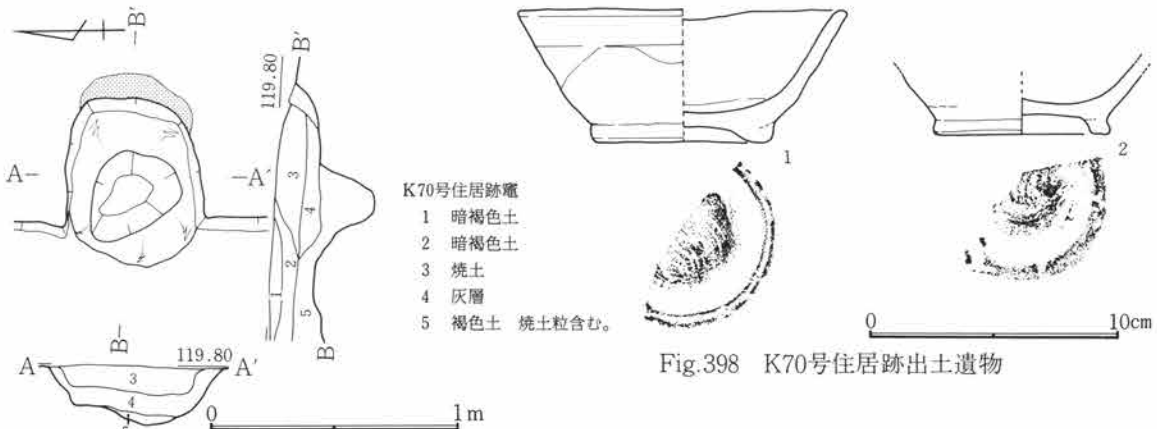


Fig.397 K70号住居跡竈

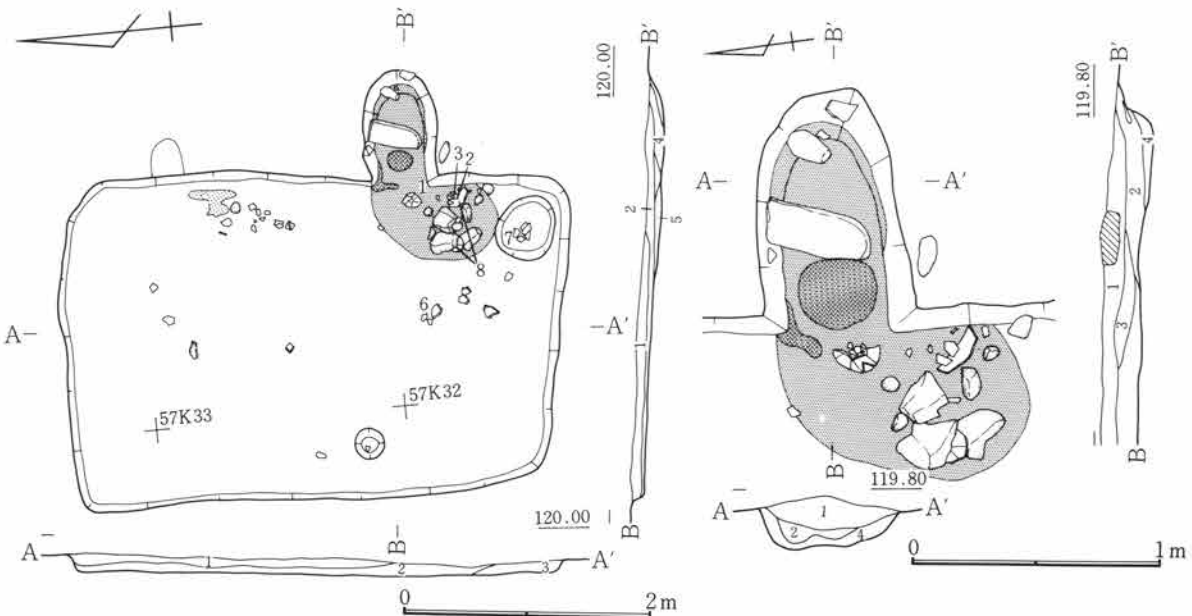
Fig.398 K70号住居跡出土遺物

K70号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
398-1 147-1	須 恵 器 碗	1/2	13.3×7×5.3	埋 土	全体に肥厚し、体部直線的に立ち上がる。付高台、低く幅広く丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③粗
398-2 147-2	須 恵 器 碗	1/4	—×7.1×(3)	埋 土	付高台、下端面平坦。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗

K71号住居跡 (Fig. 399~401・PL. 148)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.11 × 2.70	N-95.5°-E	東壁やや南寄り	楕円形 (50.3 × 40.5 × —)



K71号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 炭化・焼土粒含む。
- 3 暗褐色土 粘性硬質土、C軽石含む。
- 4 暗褐色土 炭化粒・焼土塊を多く含む。
- 5 黒色灰層

Fig.399 K71号住居跡

K71号住居跡竈

- 1 黒色土 褐色土塊含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を全体に含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 4 黒色土 C軽石・焼土・炭化粒少量含む。

Fig.400 K71号住居跡竈

K71号住居跡

K区北東部に位置し、55～57K31～33の範囲にある。84号・107号住居跡と重複しているが、両者より新しい時期の所産である。平面形は長軸を南北にもつ方形を呈するが、南西部にわずかな否みがみられる。壁高は約10cmを測り浅い。床面はほぼ平坦をなしわずかに竈手前に向かい傾斜する。竈は東壁の南寄りに付設され大きく楕円形に掘り込まれる。袖部および煙道部は検出されていない。竈内には天井と考えられる凝灰岩の長方形加工材が落ち込む。また、竈右前方には同質の加工材が散乱し構築材の一部と考えられる。燃烧部幅約60cm・奥行き約45cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・羽釜などが検出されている。

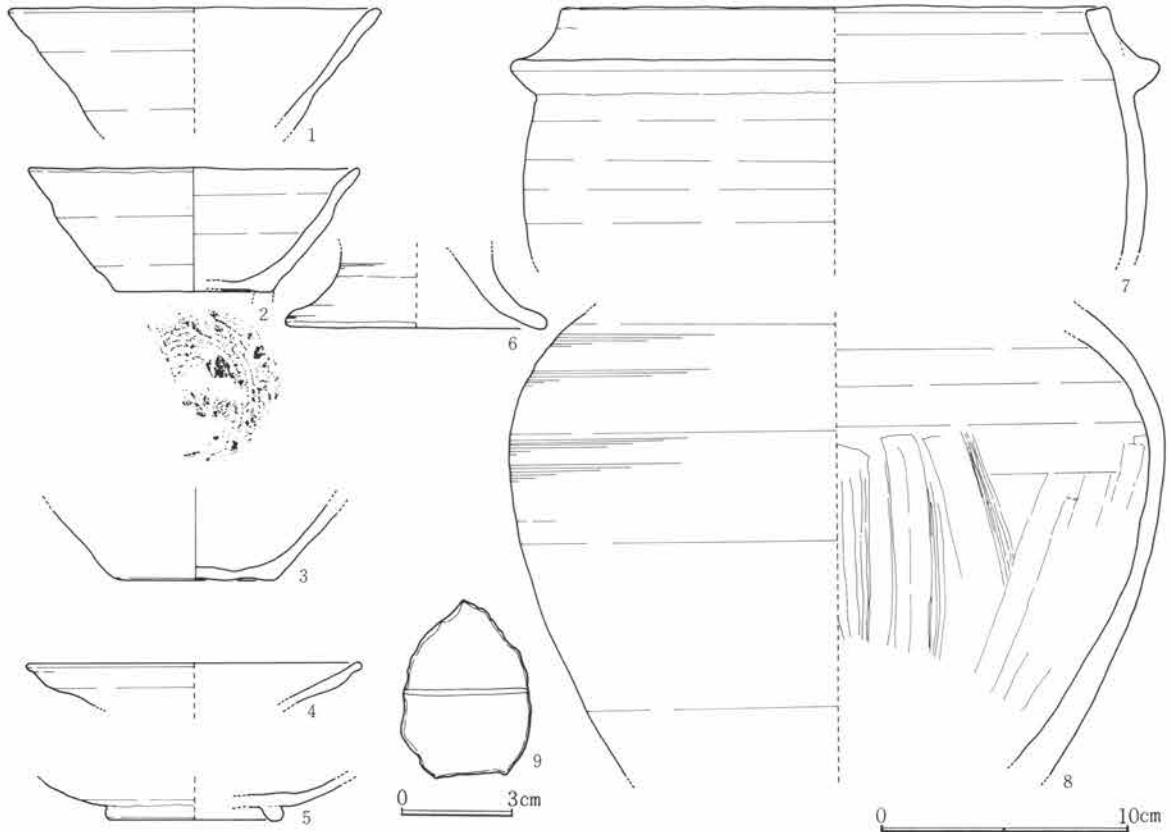


Fig.401 K71号住居跡出土遺物

K71号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
401-1 148-1	須 惠 器 碗	1/4・底 部欠損	15×-×(5)	竈前埋土	体部下半で括れ、直線的に立ち上がる。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②黒 ③やや粗
401-2 148-2	灰 釉 陶 器 碗	1/4・底 部欠損	13.3×-×(5)	南東部床 面	体部直線的に立ち上がり、口縁部下で括れ外傾する。付高台痕。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②黄灰 ③粗
401-3 148-3	須 惠 器 杯	上半部 欠損	-×6.5×(3)	南東部床 面	体部直線的に立ち上がる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
401-4 148-4	灰 釉 陶 器 皿	1/4・底 部欠損	13.7×-×(1.6)	埋 土	体部外反気味。口縁部下で肥厚し、括れる。口唇部丸い。	①良好 ②灰白 ③やや密
401-5 148-5	灰 釉 陶 器 皿	底部1/4	-×6.8×(1.7)	埋 土	高台丸く肥厚する。	①良好 ②灰白 ③やや密
401-6 148-6	土 師 質 碗	高台1/4	-×10.5×(3.4)	南東部埋 土	肉やや肥厚し端部は強く開く。横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
401-7 148-7	羽 釜	上半部 1/4	22×-×(9.8) 鏝径26 口縁高2	貯蔵穴埋 土	胴部やや丸く張る。口縁部は外反気味に内傾。口唇部上端は僅かに内斜。鏝丸く肥厚する。	①良好 ②灰 ③やや粗
401-8 148-8	須 惠 器 甕	胴部1/4	-×-×(18) 胴径26.4	南東部床 面	胴部上半丸く張る。下位に従い肥厚する。胴部外面強い回転撫で調整。内面縦撻撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗
401-9 148-9	鉄 製 品 不 明		4.6×3.5×0.2	埋 土	板状鉄器	

K72号住居跡 (Fig. 402~405・PL. 149・150)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.82 × 2.65	N— 90° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (74.0 × 56.0 × 45.0)

K区北東部に位置し、50~52K32~34の範囲にある。106号・112号住居跡と重複しているが、前者より旧く後者より新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。壁高は浅く約12cmを測る。床面は平坦をなし竈前面から中央部にかけて踏み締まりは良好である。貯蔵穴は南東部隅に設けられる。壁の溝は東・北・西壁沿いに巡り、西壁の南寄りから南壁下にかけての部分は検出されていない。溝幅約10cm、深さ約4cmを測る。竈は東壁のやや南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれる。袖部及び煙道部は検出されなかった。燃烧部幅約70cm・奥行き約70cmを測る。出土遺物は内黒暗文土器・皿類・鉄製鎌片などが検出されている。

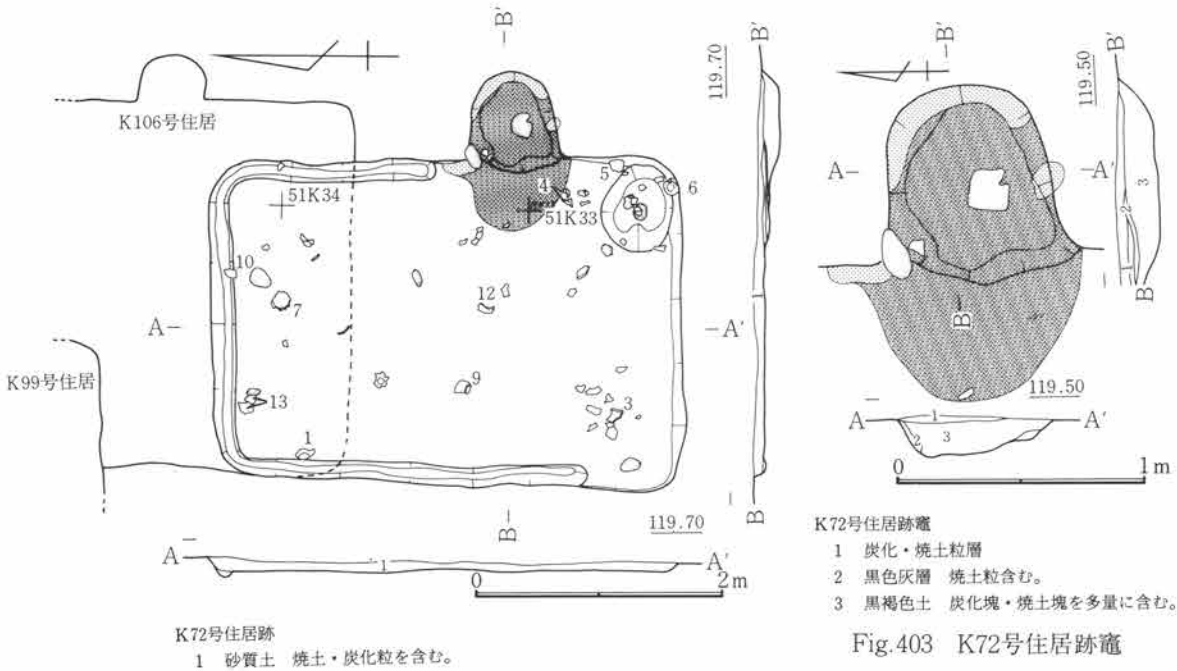


Fig.402 K72号住居跡

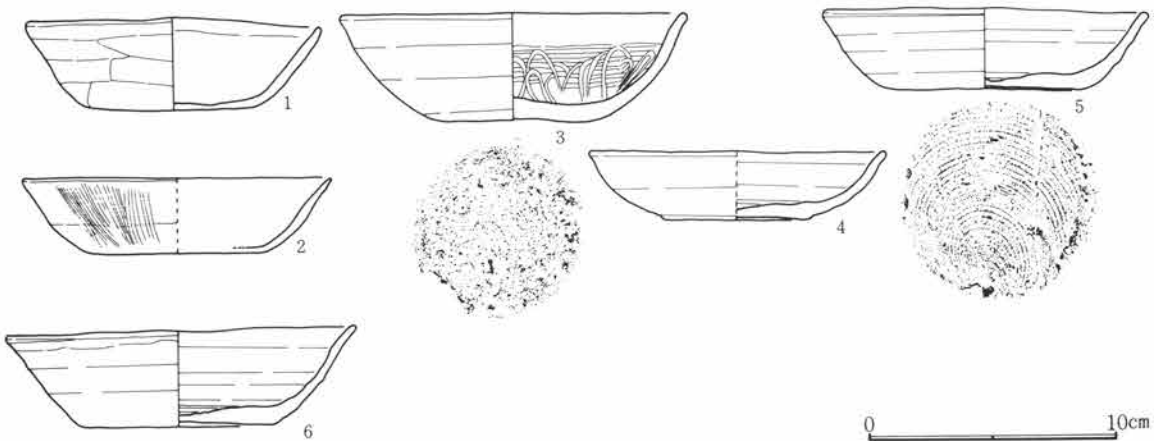


Fig.404 K72号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

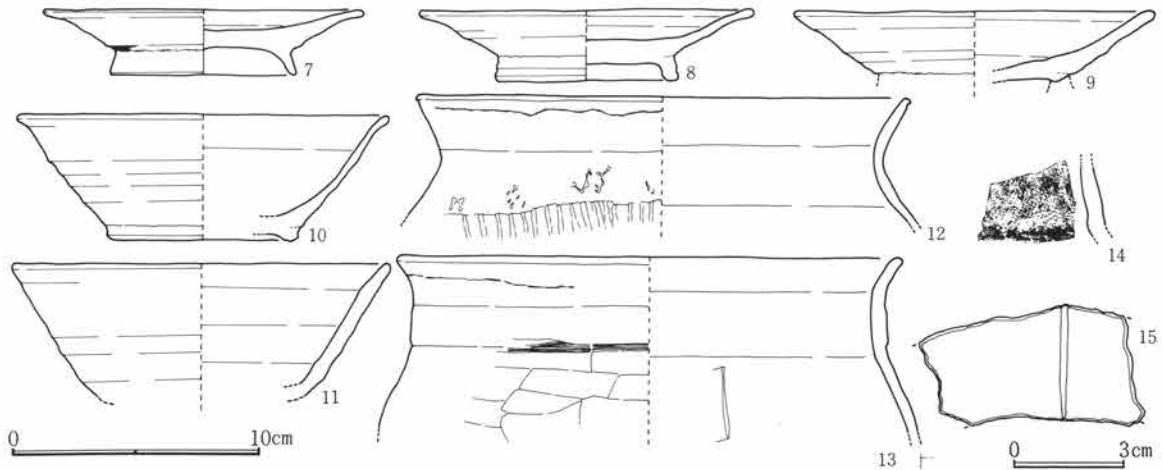


Fig.405 K72号住居跡出土遺物(2)

K72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器器 種形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
404-1 150-1	土師器 杯	完	11.9×7×3.8	北西部床 面	体部直線的に立ち上がり、口唇部はやや内湾する。底部薄く平底気味。体部・底部篔篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
404-2 150-2	土師器 杯	1/4	12.4×7×3	床下埋土	体部僅かに肥厚し、上半は外反する。口唇部尖る。底部薄く平底気味。体部・底部篔篋削り不明瞭。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
404-3 150-3	土師器 杯	完	14×6.8×4.2	南西部床 下	腰部丸く、体部上半は短かく直線的に立ち上がった後口縁部外傾する。口唇部丸い。内黒体部横篔篋磨き後螺旋状篔篋磨き。轆轤成形。右回転糸切り。体部回転篔篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
404-4 150-4	須恵器 杯	1/4	12×6×2.7	南東部床 面	体部やや脹らみ丸味をもつ。口縁部外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②褐灰 ③密、明黄褐色粒子混
404-5 150-5	須恵器 杯	3/5	13.1×7.6×3.2	南東壁際 床面	腰部丸く体部直線的に立ち上がる。口唇部僅かに外傾気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
404-6 150-6	須恵器 杯	完	14.2×7.8×3.8	貯蔵穴際	体部直線的に立ち上がり、口縁部外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
405-7 150-7	須恵器 皿	1/4	13×7.5×2.6	北中央部床 面	体部大きく外傾して開き、口縁部は水平に近く屈する。付高台、直線的でハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
405-8 150-8	須恵器 皿	1/5	13.5×7.4×2.8	埋土	体部外反気味に開き、口縁部は水平に近く屈する。底部肥厚する。付高台、幅広。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③粗小石多く混る
405-9 150-9	須恵器 皿	1/4・高 台欠損	14.6×-×2.8	西中央部床 面	体部直線的に開き、口唇部丸い。全体に肥厚する。付高台、轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③粗、小石混る
405-10 150-10	須恵器 碗	1/4	15×7.7×5	北壁際床 面	体部器肉薄く、直線的、口縁部は外屈。口唇部丸い。付高台、低く幅広。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや密、砂混る
405-11 150-11	須恵器 碗	1/2・底 部欠損	15.2×-×(5.2)	貯蔵穴内	体部直線的に立ち上がり、口縁部は内面で屈して直線的に外傾する。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
405-12 150-12	土師器 甕	口縁部 小片	20×-×(5.5)	中央部床 面	肩部張りなく、口縁部くの字状に外反。口唇部外側は強く外屈する。口縁部横撫で、肩部横篔篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
405-13 150-13	土師器 甕	口縁部 1/4	20.4×-×(7.5)	北西部床 下	肩部張りなく、口縁部下位はやや肥厚し、直線的に内傾後上半は外屈するコの字口縁。口縁部横撫で、胴部横篔篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
405-14 150-14	須恵器 不明	小片		床下埋土	外面に布状圧痕あり。	①良好 ②灰白 ③やや密
405-15 150-15	鉄製品 鎌	小片	長(6) 幅3 厚0.15	床下埋土		

K73号住居跡 (Fig. 406~409・PL. 151・152)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.72 × 3.42	N-109°-E	東壁やや南寄り	楕円形 (62.0 × 55.0 × 21.0)

K73号住居跡

K区中央部やや北西寄りに位置し、62~64K29・30の範囲にある。117号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。平面形は南東部及び南西部が凸む不整形を呈す。壁高は約24cmを測る。床面は竈前面を中心に南東部の踏み締まりが良く、周辺は軟弱で西半はやや低く窪んだ。南壁に接し方形の土坑と南西隅に円形の穴が穿たれる。方形土坑は76×64cm・深さ23cmを測り炭化塊・焼土粒を混じえる土で埋まっている。また円形の穴は径26cm・深さ23cmを測る。竈は東壁の南寄りに付設され、燃燒部は楕円形に掘り込まれるが、右側がやや張り出す。煙道部はわずかに天井部を遺し長く延びる。袖部は検出されていない。燃燒部幅60cm・奥行き45cm、煙道部長さ約50cmを測る。出土遺物は比較的多く、貯蔵穴内に多数検出されている。灰釉陶器・転用砥石・鉄鏝などがみられる。

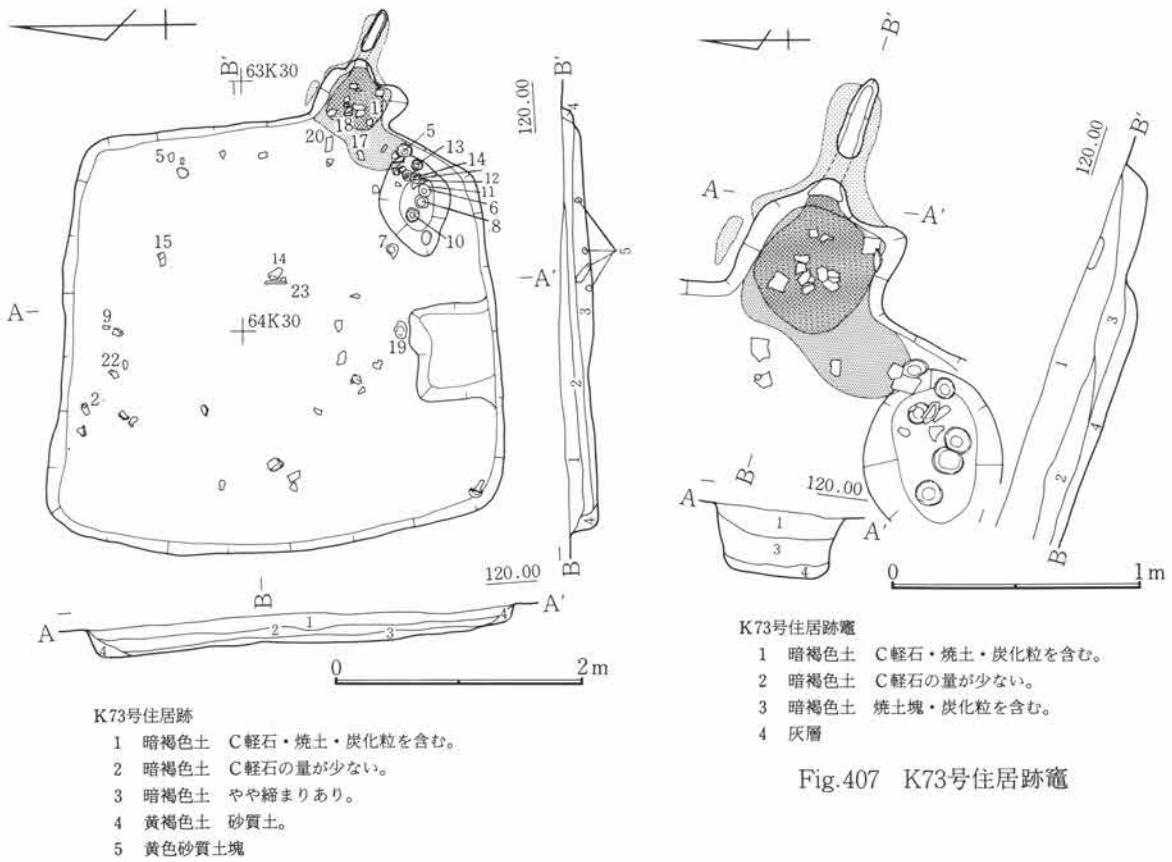


Fig.406 K73号住居跡

Fig.407 K73号住居跡竈

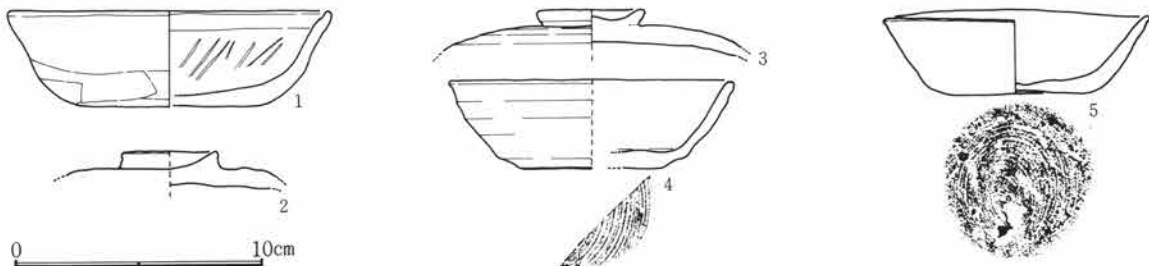


Fig.408 K73号住居跡出土遺物(1)

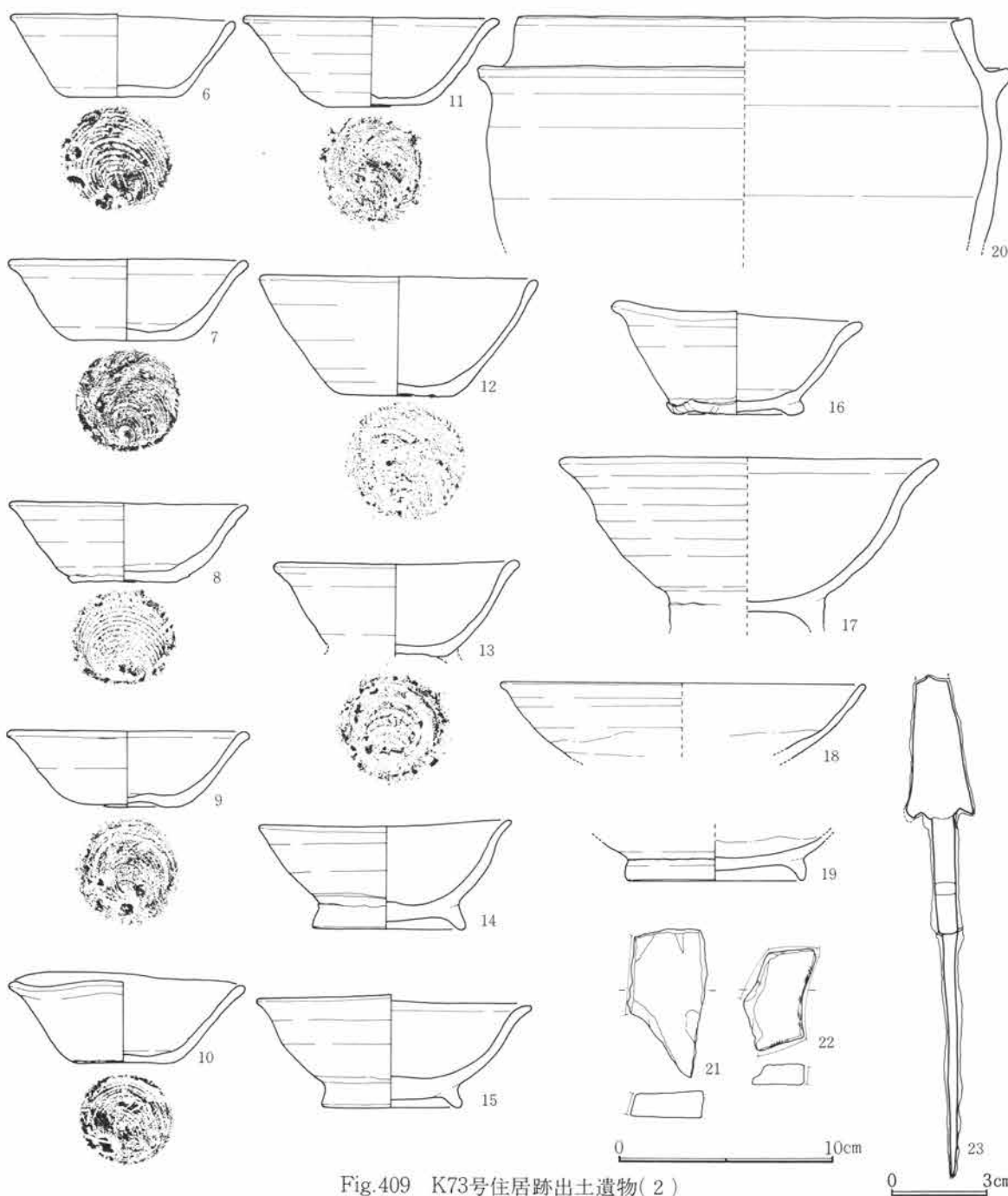


Fig.409 K73号住居跡出土遺物(2)

K73号住居跡出土遺物観察表

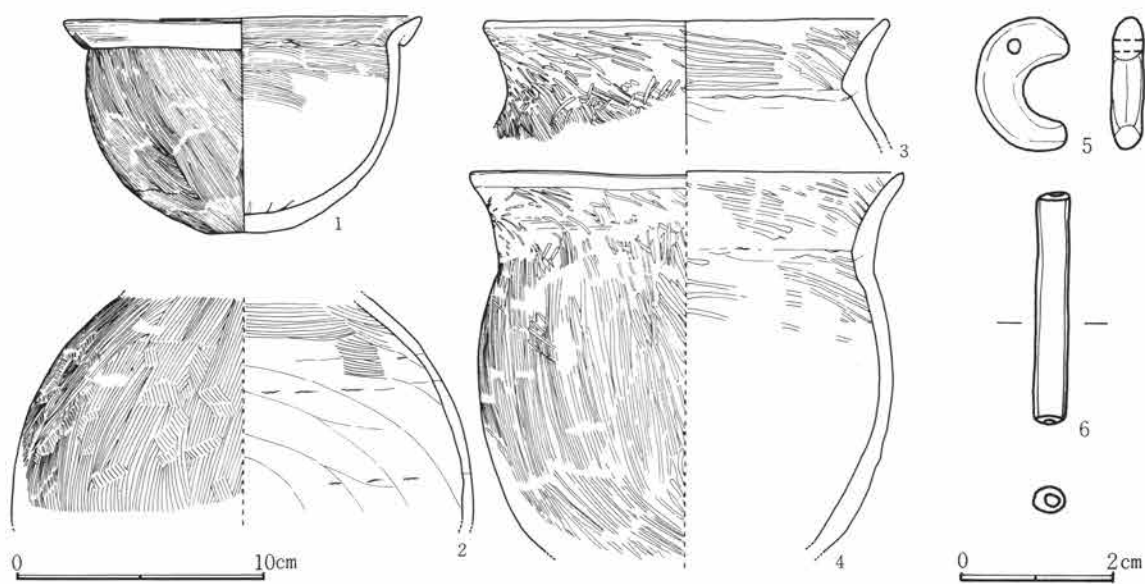
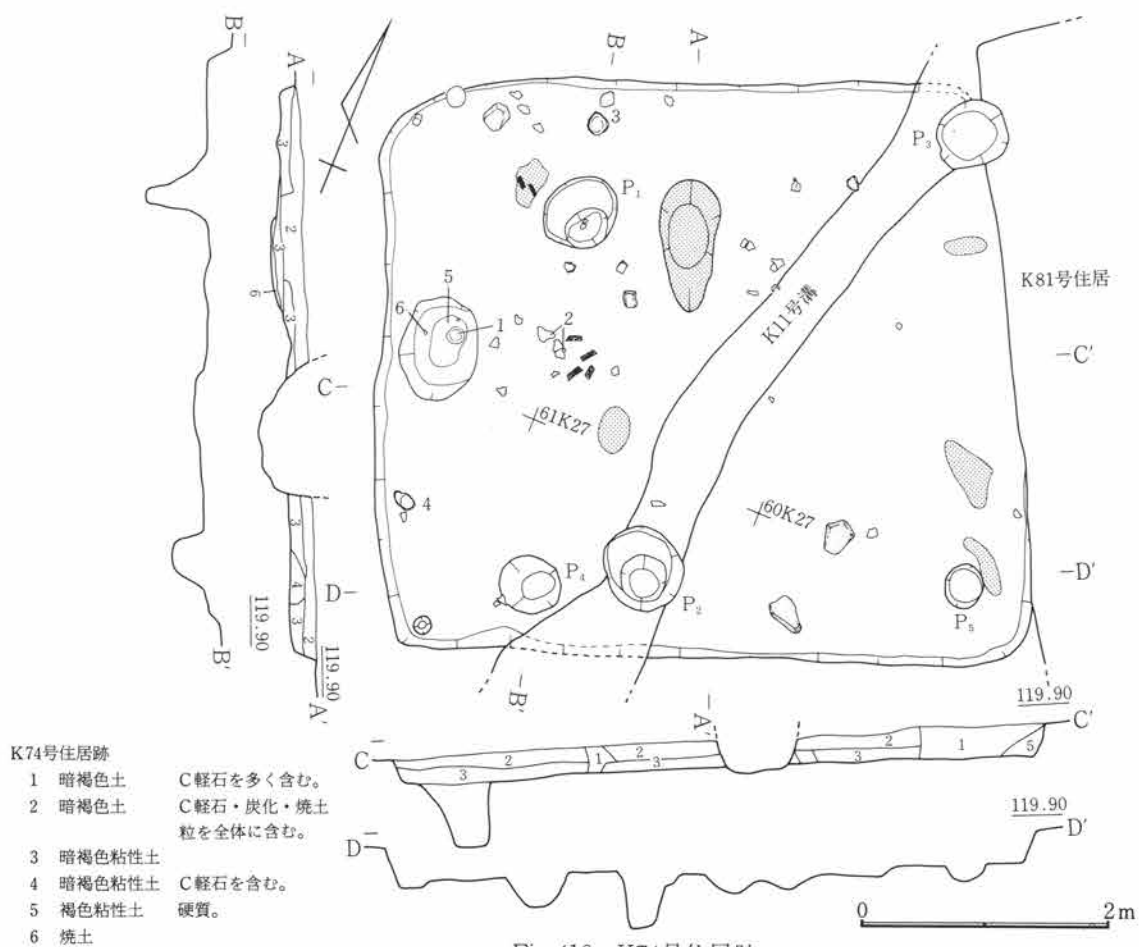
Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
408-1 151-1	土師質 杯	1/2	13×7.2×3.8	竈内	腰部やや肥厚し丸味をもつ。体部上半は外反し口唇部は丸く内屈する。内面体部放射状暗文。外面体部・底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
408-2 151-2	須恵器 蓋	摘・天 井部	—×—×(1.5) 摘径3.9 高0.7	北西部床 面	天井部回転篋削り。環状摘。摘端部細る。轆轤成形。	①良好 ②浅黄 ③ やや密、黒色粒混る
408-3 151-3	須恵器 蓋	摘・天 井部	—×—×(1.8) 摘径4.3 高0.6	埋土	天井部やや丸味あり。環状摘端部丸い。中心部凸状に出る。天井部回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や密
408-4 151-4	須恵器 杯	1/2	11.5×5.8×3.5	埋土	腰部および口縁下位僅かにくびれる。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②暗オリ ブ灰 ③やや粗

K73号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
408-5 151-5	須 杯	完	10.7×5.6×3.3	北東部床 面	腰部僅かに肥厚し丸味をもつ。体部は緩く外反気味。口唇部は細く外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、砂多く混る
409-6 151-6	須 杯	完	10.5×5.3×3.8	貯蔵穴内	体部直線的に立ち上がり、口唇部は丸く肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、軟 ②褐灰 ③粗、小石混
409-7 151-7	須 杯	1/2	11.1×5×3.7	貯蔵穴際 床面	腰部に丸味。口縁部は外反し、口唇部は丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、軟 ②鈍い黄褐 ③やや粗
409-8 151-8	須 杯	完	11.1×4.7×3.6	貯蔵穴内	腰部張りなく体部上半は外反して立ち上がる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
409-9 151-9	須 杯	1/2	11.3×4.7×3.4	北東部床 面	腰部に丸味をもち、体部は外反気味に立ち上がる。口唇部は丸く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗、小石混る
409-10 151-10	須 杯	完	11×4.2×4.2	貯蔵穴内	体部直線的に立ち上がり、口唇部は丸く、僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。見込部強いうず巻痕。	①酸化気味 ②鈍い黄褐 ③粗
409-11 151-11	須 杯	完	11.8×4.7×4	貯蔵穴内	腰部丸味あり。口縁部は外反する。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。見込部強いうず巻痕。	①酸化、良好 ②鈍い褐 ③粗、小石混る
409-12 151-12	須 杯	1/2	12.9×5.4×5.4	貯蔵穴内	体部深く、内湾気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②明緑灰 ③粗、小石混る
409-13 152-13	須 碗	1/2・高 台欠損	11.4×—×(4.2)	貯蔵穴内	体部内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚しながら外反する。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 ②鈍い黄 ③粗
409-14 152-14	須 碗	完	11.8×6.7×4.7	中央部床 面	体部丸く張り口縁部は外反する。付高台、やや肥厚し直線的に開く。轆轤成形。作り丁寧。	①良好 ②鈍い黄褐 ③やや密、小石混る
409-15 152-15	須 碗	1/2	12.8×5.9×5.2	貯蔵穴内	体部丸味強く、口縁部は強く外反する。付高台、端部丸く外反して開く。底部肥厚する。轆轤成形。作り丁寧。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
409-16 152-16	須 碗	1/2	11.6×6.4×4.7	貯蔵穴内	体部直線的に立ち上がり、口縁部肥厚し強く外反する。口唇部丸い。付高台、低く幅広く雑。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③粗
409-17 152-17	須 碗	1/2・高 台欠損	17.6×—×(7.7)	貯蔵穴内	体部丸く張り、口縁部は強く外屈する。口唇部丸い。付高台、轆轤成形。作り丁寧。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密
409-18 152-18	灰 釉陶器	1/4・底 部欠損	17×—×(3.5)	竈内	体部やや浅目。口唇部丸い。体部内外面付け掛け施釉。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
409-19 152-19	灰 釉陶器	体部欠 損	—×8.2×(2)	南東部床 面	高台端部丸く、内湾して立つ。内面体部施釉。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③緻密
409-20 152-20	羽 釜	上半1/2	21×—×(10.2) 口径24.7 口縁高2.2	竈前面床 面	胴部僅かに脹らむ。口縁部外反して内傾する。口唇部は肥厚し、上端面は内斜する。胴部上位篋削り痕。	①良好 ②灰白 ③やや粗
409-21 152-21	須 転用砥石		6.8×3.5×1.2 34.1g	竈内	1側面使用。壘片	①良好 ②黄橙 ③やや粗
409-22 152-22	須 転用砥石		4.4×2.7×0.9 15.7g	北東部床 面	4側面使用。刃痕あり。壘片。	①良好 ②灰白 ③やや密
409-23 152-23	鉄 製品 鉄	先端欠 損	長15.2 身幅2 基径0.6×0.4 柄径0.4	中央部床 面	平根式	

K74号住居跡 (Fig. 410・411・PL. 152・153)

K区やや北寄りに位置し、58～61K26～28の範囲にある。81号住居跡・11号溝と重複しているが、両者よりも古い時期の所産である。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。東西長5.4m・南北長4.5mを測り、東西の長軸方位はN-81°-Eを示す。壁高は約26cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締めりは総じて弱い。P₁～P₅の5ヶ所に穴が検出されているが、その位置と規模からして支柱穴と考えられるものは、P₁及びP₂の2つと考えられる。P₁は上径64×56cm・下径16×30cm・深さ46cm、P₂は上径68×60cm・下径21×22cm・深さ44cm。P₁・P₂の柱間は2.9mを測り2つとも上半は漏斗状に開く。炉跡は北側わずかに西寄りの位置に設置され、浅く不整楕円形を呈す。径は1×0.5mを測る。床面東側及び西側に小範囲の焼土分布と炭化材が検出されているが被災したほどの量ではない。西壁際中央部に貯蔵穴と考えられる楕円形の土坑が穿たれる。径82×62cm・深さ52cmを測る。出土遺物は土師器甕類のほか蛇紋岩製勾玉・管玉が検出されている。



K74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
411-1 153-1	土 師 器 鉢	完	14.4×3×8.5	貯蔵穴内	折り返し口縁、強く外屈する。胴部球形を呈す。底部小さく平石。胴部外面斜刷毛目。内面口縁～胴上位横刷毛目。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
411-2 153-2	土 師 器 壺	胴上半 1/2	—×—×(8.5) 胴径18.4	中央部床 面	丸く強く張り球胴を呈す。胴外面斜刷毛目、内面上半横刷毛目。中～下斜寛撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密
411-3 153-3	土 師 器 甕	口縁部	16.1×—×(4.8)	北壁際床 面	口縁部外面は緩やかに外反し、内面下位で強く外屈する外面口縁部～肩部斜、内面口縁部横・斜寛磨き状調整。	①やや軟 ②褐灰 ③密
411-4 153-4	土 師 器 甕	1/2・底 部欠損	17.5×—×(15) 胴径16.6	西壁際床 面	胴部やや丸く張る。口縁部は直線的に外傾した後外反して立ち上がる。外面口縁部～胴部斜、縦刷毛目、内面口縁部・胴上半は斜刷毛目調整。	①やや軟 ②鈍い黄 橙 ③密
411-5 153-5	石 製 品 勾 玉	完	長1.8幅1.2厚0.4 孔径0.15	貯蔵穴内		蛇紋岩
411-6 153-6	石 製 品 管 玉	完	長3 径0.4 孔径0.2	貯蔵穴内		蛇紋岩

K75号住居跡 (Fig. 412～414・PL. 153・154)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	5.56 × 4.92	N- 17 -W	北壁やや東寄り	

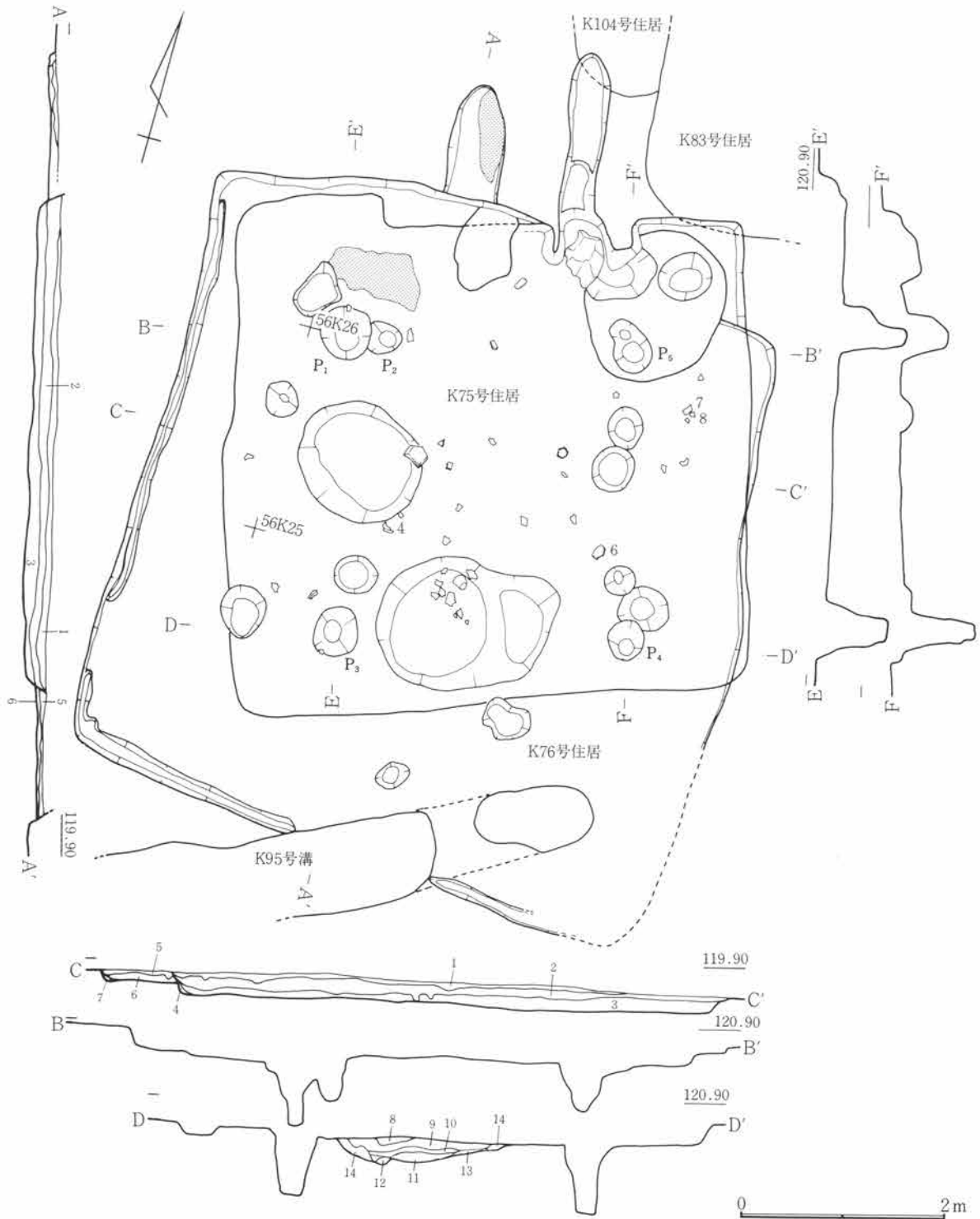
K区中央部やや東側に位置し、53～56K24～27の範囲にある。76号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産と考えられる。平面形態は東西軸がやや長いものの比較的整った方形を呈する。けんしゆつ場合は76号住居跡との重複の見極めが遅れ、良好な状態とはいえない。住居址のほとんどは76号住居跡の範囲に入り、土層断面の観察によってその規模を明らかにできた。それによると壁高は焼く20cmを測り、床面はほぼ平坦をなし、全体に踏み締めりは弱い。柱穴と考えられる Pit はP1～P5が検出されているがP2に関しては主柱穴か否かは不明である。P1は上径50cm・下径20cm・深さ70cm、P2は上径30cm・下径15cm・深さ45cm、P3は上径50cm・下径20cm・深さ60cm、P4は上径35cm・下径15cm・深さ70cm、P5は上径40cm・下径20cm・深さ50cmを測る。また各柱間はP1・P3、P3・P4は3m、P4・P5は約2.9m、P1・P5は2.8mを測る。竈は北壁やや東に寄って付設されているが遺存状態は悪く、旧態を止めていない。構築基盤を掘り残す形で小さな袖状の突出部が見られる。竈付近の白色年度塊の残存から、住居址内に大きく張り出す袖部を有していたと思われる。煙道部は長く約1.7mほど壁外に延びている。出土遺物は模倣坏型土師器など少量で破片での検出が殆どである。

K76号住居跡 (Fig. 412～414・PL. 153・154)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	6.63 × 6.18	N- 3 -W	北壁やや西寄り	

K75号住居跡と重複関係にあり、これより古い時期の所産と考えられる。75号住居跡よりかなり大型である。掘形は浅く、西壁から南壁にかけての壁線が比較的明確に確認できた。壁高は約10cmを測る。床面の状態は残存部分が少なく明らかにしがたいが、西壁から南壁にかけて幅約20cm・深さ5～10cmの溝が巡る。柱穴と考えられる Pit などは検出されていない。竈は北壁のやや西によって付設されているが、袖・燃焼部などは75号住居跡によつてほとんど破壊されており、壁外になかさ約1mの煙道部の痕跡を見るのみである。なお住居の規模からすれば、柱穴の存在が予想されるが、あるいは75号住居跡の柱小穴と同位置に穿たれたことも考えられ、両者の時間差はわずかなものかもしれない。

第3章 K区の遺構と遺物



K75号住居跡

- 1 黒褐色土 混入物はあまりなくもろい。
- 2 茶褐色土 焼土粒・C軽石・FAを含み粘性強い。
- 3 暗褐色土 C軽石が密。
- 4 暗褐色土 混入物なし。粘性強。

K76号住居跡

- 5 茶褐色土 C軽石が密で焼土粒少量含む。
- 6 茶褐色土 FAを若干含む。粘性はやや強い。
- 7 茶褐色土 C軽石を微量含む。粘性なくもろい。

土坑

- 8 暗褐色土 締まりがあり、C軽石・焼土粒を少量含む。
- 9 暗褐色土 粘性が強く、黄白色粘土若干含む他は混入物なし。
- 10 暗褐色土 粘性が強く混入物は含まない。
- 11 暗褐色土 粘性がなくもろい。灰を多量に、焼土粒を若干含む。
- 12 黄白色粘土 C軽石・焼土粒を微量に含む。
- 13 茶褐色土 粘性強い。
- 14 暗褐色土 粘性強く、焼土粒含む。

Fig.412 K75・76号住居跡

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

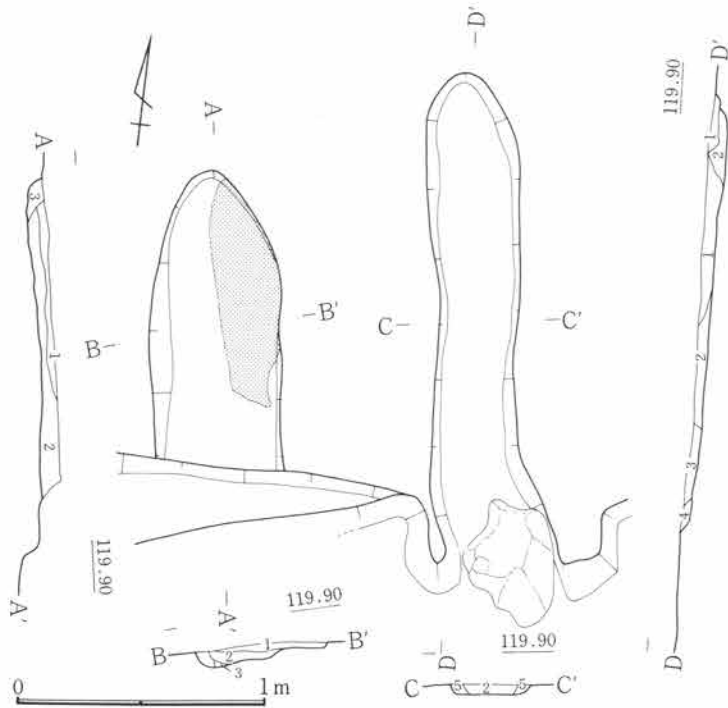


Fig.413 K75・76号住居跡

K75号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 粘性が強く混入物はほとんどない。
- 3 崩落焼土
- 4 黄白色粘土
- 5 暗褐色土 焼土粒を含み粘性強い。

K76号住居跡

- 1 暗褐色土 微量の焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 粘性あり。

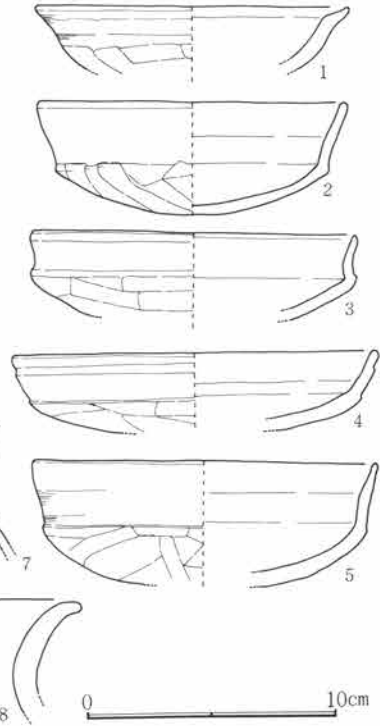


Fig.414 K75・76号住居跡出土遺物

K75・76号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
414-1 154-1	土師器 杯	小片	12.6×-×(2.5)	埋土	浅い体部。口縁部は内湾気味に強く外屈する。口縁部横撫で。体～底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
414-2 154-2	土師器 杯	1/3	12.4×-×4.5 口縁高2.4	埋土	丸底から強く屈して、口縁部は外反気味に立ち上半は僅かに内湾する。口唇部丸い。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
414-3 154-3	土師器 杯	1/4	16×-×(3.5) 口縁高1.5	埋土	やや浅い底部。受け部は丸く段をなす。口縁部は外反して立ち口唇部は直立。口縁部横撫で底部篋削り。	①良好 ②褐灰 ③やや密
414-4 154-4	土師器 杯	1/4	14.6×-×(3.2) 口縁高1.7	中央部埋土	底部浅く、受け部僅かな段をなす。口縁内湾気味に外傾。口縁上位で段をなす。口唇丸い。口縁部横撫で、底部篋削り。	①やや軟 ②明赤褐 ③密
414-5 154-5	土師器 杯	小片	13.8×-×(5) 口縁高2.5	埋土	やや深く丸味のある底部、受け部は僅かな段をなし、口縁部は直線的に直立した後上半は外傾する。口唇部は細く丸く、直立、口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
414-6 154-6	土師器 鉢	1/4・底部欠損	12×-×(8.6) 口縁高4.5	中央部埋土	丸く張る体部。口縁部は高く直線的に内傾した後、口唇部は丸く、僅かに直立気味。口縁部は3段に緩く波うつ口縁部横～斜撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
414-7 154-7	土師器 壺	口縁部1/4	14×-×(4.9)	南部埋土	肩部張り少なく、口縁部は外反して立ち上がる。肩部篋削り(不鮮明)。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
414-8 154-8	土師器 壺	口縁部1/4	20×-×(4.5)	南部埋土	口縁部大きく外反し、口唇部はさらに強く反り水平になる。口縁部横撫で、内面篋削り。	①良好 ②橙 ③粗、小石、砂混る

第3章 K区の遺構と遺物

K77号住居跡 (Fig. 415~417・PL. 154・155)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.53 × 3.5	N- 97° -E	東壁やや南寄り	楕円形 (85.0 × 60.0 × 15.5)

K区北東部に位置し、55~57K34・35の範囲にある。北西隅で70号住居跡と重複しているがこれよりも古い時期の所産である。住居跡中央部は1.5×1.6mの範囲で攪乱坑があり床面が消失している。全体に削平が著しく壁高約10cmで浅い。床面はほぼ平坦をなすが竈前面を除き踏み締まりは弱い。竈は東壁のやや南寄りに付設されるが遺存状態は悪く痕跡程度の検出である。袖部などは不明であるが構築材に供したと思われる石材が貯蔵穴内に多くみられた。焼焼部と考えられる部分には支脚痕と思われる黒色灰で埋まった小穴がみられる。焼焼部幅約40cm・奥行き45cmを測る。

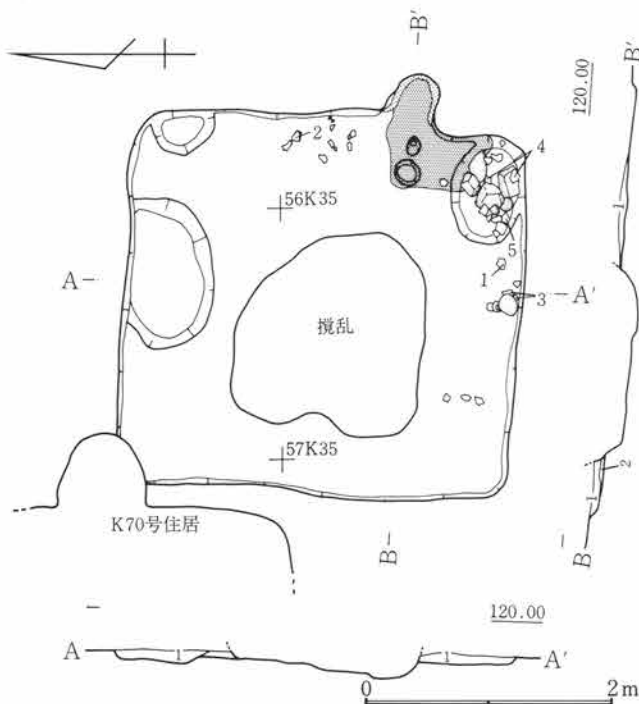
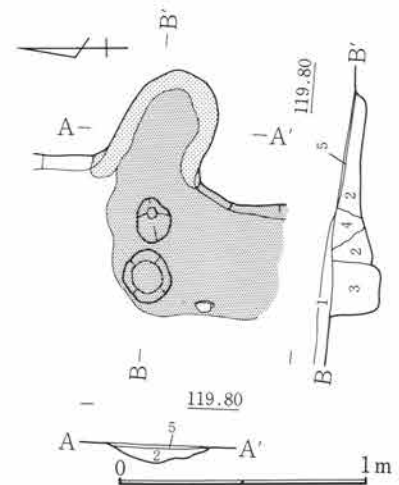


Fig.415 K77号住居跡



K77号住居跡竈

- 1 暗褐色土 軽石・焼土・炭化粒含む。
 - 2 黄褐色土 弱粘性褐色土塊含む。
- K77号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
 - 2 暗褐色土 褐色土塊を含む。
 - 3 黒色灰層 焼土粒を少量含む。
 - 4 褐色土 粘性があり、焼土粒・黒色灰を含む。
 - 5 火床面

Fig.416 K77号住居跡竈

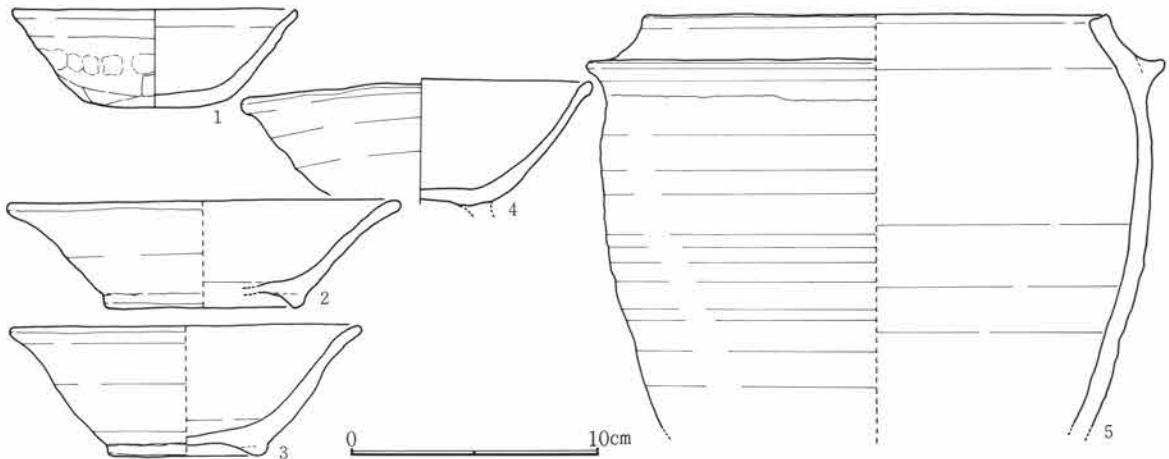


Fig.417 K77号住居跡出土遺物

K 77号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
417-1 155-1	土 師 器 杯	1/2	11.5×6×3.9	南中央部床 面	腰部張りなく丸底気味の底部から体部は直線的に開く。口縁部は外反し、口唇部は直立する。口縁部横撫で、体部指頭痕、腰～底部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密、白色細粒混る
417-2 155-2	須 惠 器 椀	1/3・底 部欠損	15.8×8×4.3	東中央部床 面	高台部より体部は直接に直線的で大きく開く。口唇部はやや肥厚し外反。口唇部丸い。付高台、低く雑。轆轤成形。	①良好 ②暗灰黄 ③粗
417-3 155-3	須 惠 器 椀	1/3	14.1×6.5×5.2	南中央部床 面	体部肥厚気味、上半でくびれ口縁部は外反する。付高台、低く丸い。作り雑。轆轤成形。	①軟 ②鈍い褐 ③ 密、茶色夾雑物混
417-4 155-4	須 惠 器 椀	1/2・高 台欠損	14.1×-×(5)	貯蔵穴内	腰部丸味をもつ。口唇部は丸く肥厚する。轆轤成形。	①やや軟 ②暗灰黄 ③やや粗
417-5 155-5	羽 釜	1/3・下 半欠損	18.7×-×(16.5) 口径23.2 口縁高2	貯蔵穴内	胴部僅かに張る。口縁部は外反気味に内傾。口唇部側端丸く、上端面窪み内斜。胴下半篋削りの痕跡。	①良好 ②灰白 ③ 粗、小石多く混る

K 78号住居跡 (Fig. 418~420・PL. 155・156)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	35.8 × 35.6	N-98.5°-E	東壁やや南寄り	円形 (50.0 × 50.0 × 44.0)

K区中央部やや北寄りに位置しK56~58K27・28の範囲にある。79号・81号・138号住居跡と重複しており79号より旧く81号・138号住居跡よりも新しい時期の所産である。平面形は方形を呈するが東壁の北側がやや歪む。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなすと考えられる。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は方形に掘り込まれる。明瞭な袖部の構築はみられないが東壁線上の左右に凝灰岩及び川原石が検出されており、燃烧部奥左右にも小さな川原石が配される。燃烧部幅約45cm・奥行き約55cmを測る。出土遺物は足高の台付甕の底部や単孔罏付甕などが検出されている。

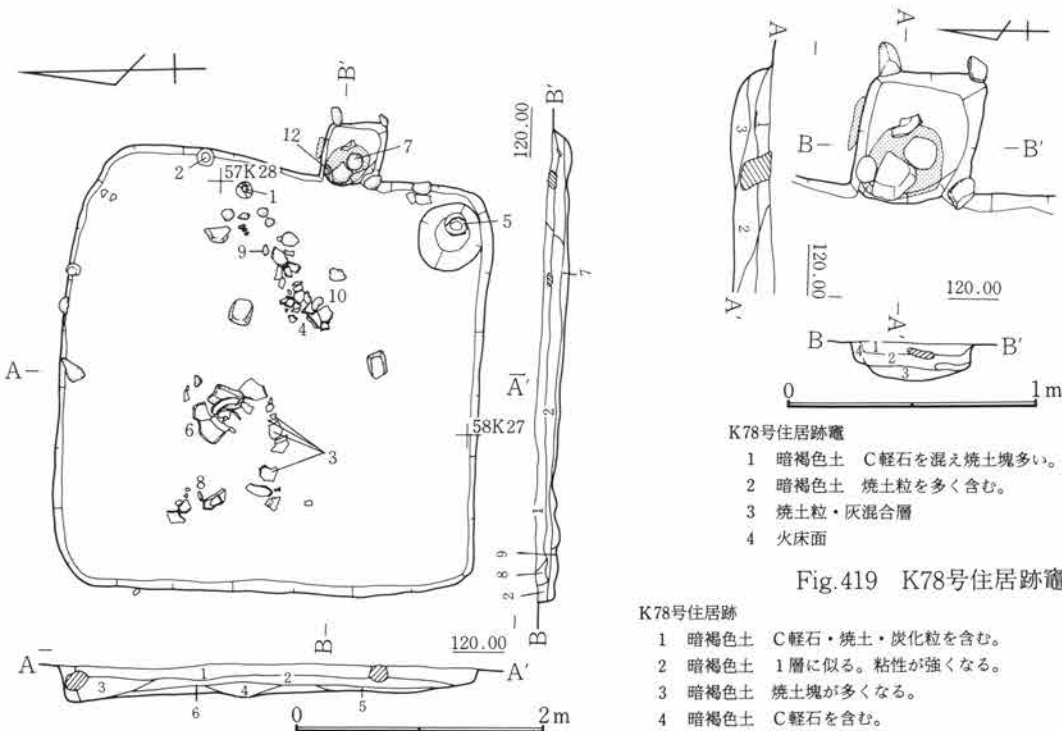


Fig.418 K78号住居跡

K78号住居跡竈
 1 暗褐色土 C軽石を混え焼土塊多い。
 2 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
 3 焼土粒・灰混合層
 4 火床面

Fig.419 K78号住居跡竈

K78号住居跡
 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
 2 暗褐色土 1層に似る。粘性が強くなる。
 3 暗褐色土 焼土塊が多くなる。
 4 暗褐色土 C軽石を含む。
 5 暗褐色土 C軽石を含む。
 6 褐色土 混入物なし。
 8 褐色土 粘性強く、土器片を含む。
 9 褐色土 弱粘性。

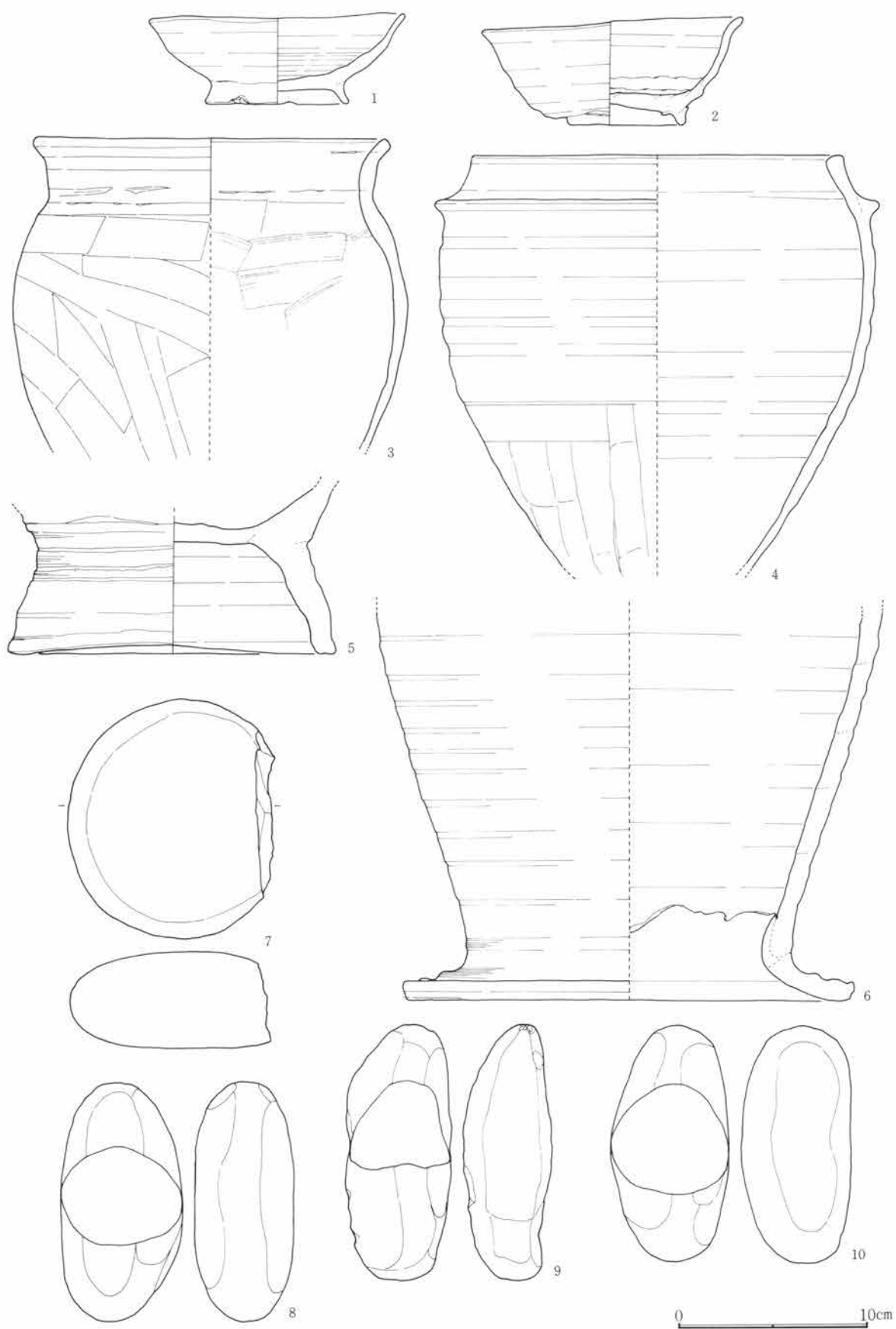


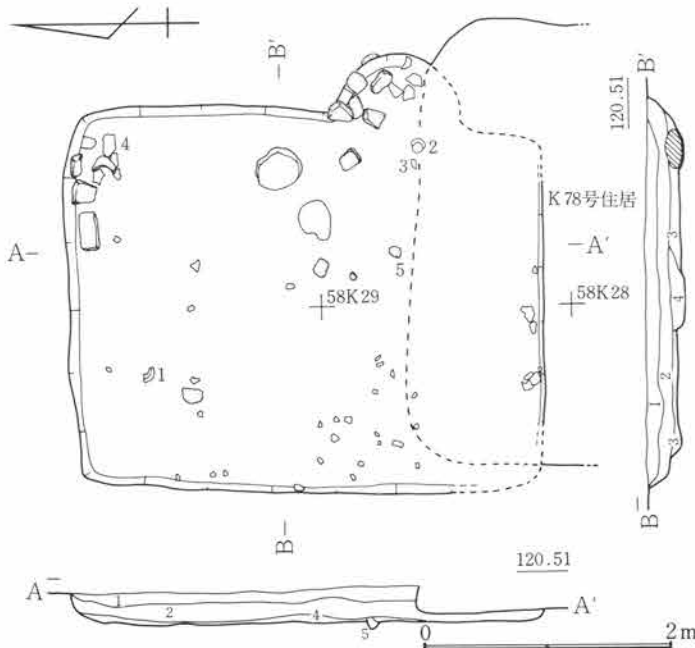
Fig.420 K78号住居跡出土遺物

K 78号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
420-1 156-1	須 惠 器 碗	完	13.4×7.6×4.5	東壁際床 面	腰部やや張り気味。口縁部薄く外反する。付高台、外反してハの字状に開く。轆轤成形。内面轆轤目強い。	①良好 ②灰白 ③粗、小石多く混る
420-2 156-2	須 惠 器 碗	完	13.8×6.2×5.5	東壁際床 面	体部張り、口縁部は強く外反する。底部肥厚する。付高台直に下る。内面巻き上げ痕顕著。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗、細砂混る
420-3 156-3	土 師 器 甕	½・下 半欠損	18.8×-×(16) 最大径胸部27	中央部床 面	最大径は胸部上半にあり丸く張る。口縁部は僅かに外傾した後上半はやや強く外屈する。全体に肥厚。口縁部横撫で。肩部横・胸部斜篋削り。内面横篋撫で。	①やや軟 ②淡赤橙 ③やや粗
420-4 156-4	羽 釜	¼・底 部欠損	19.6×-×(21.5) 口径23.4 口縁高2.3	中央部床 面	胸部張り強い。口縁部は外反気味に内傾し、口唇部は肥厚する。口唇上端面は丸味をもって内斜する。胴上半は回転撫で。下半は縦篋削り。	①酸化気味、やや軟 ②鈍い褐 ③やや粗
420-5 156-5	須 惠 器 台付 甕	脚部	-×17.3×(8.6) 脚高5.8	貯蔵穴内	全体に肥厚する。脚部僅かに開き、先端は内湾気味に立つ。腰～脚部は弱回転による強い篋撫で、見込部凹凸顕著。	①やや軟 ②灰 ③やや粗
420-6 156-6	須 惠 器 甕	下半部	-×24×(20) 口径14	中央部床 面	体部は直線的に外傾し、底部は大きく水平に近く外反して開く。胸部回転による強い撫で、内面に底部の接合痕あり。	①やや軟 ②灰 ③やや密
420-7 156-7	石 摩 石	縁一部 欠損	径12.5×10.8 厚5 1072 g	竈内	両面摩滅	輝石安山岩(粗)
420-8 156-8	石		長12.5 幅6.4 厚5.1 610 g	北西部床 面		輝石安山岩(粗)
420-9 156-9	石		長13.3 幅4.6 厚4.6 439 g	中央部床 面	一端部に打撃痕。	変質安山岩
420-10 156-10	石		長12.3 幅6.3 厚5.8 571 g	中央部床 面		輝石安山岩(粗)

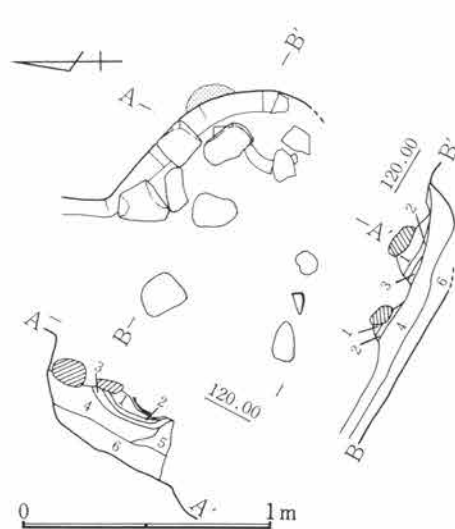
K 79号住居跡 (Fig. 421~423・PL. 157)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.12 × 3.15	N-97.5'-E	東壁南寄り	



K79号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化塊を含む。
- 2 暗褐色土 1層に似る。砂岩、土器片を多く含む。
- 3 暗褐色土 粘性あり。土器片を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石含む。
- 5 暗褐色土 弱粘性土、褐色土塊・土器片を含む。



K79号住居跡竈

- 1 砂層 焼土・炭化粒を含む。
- 2 黒色灰層
- 3 火床面
- 4 褐色土 粘性あり、C軽石少量含む。
- 5 褐色土 4層に似る。土器片を含む。
- 6 明褐色土 粘性強い。地山。

Fig.421 K79号住居跡

Fig.422 K79号住居跡竈

第3章 K区の遺構と遺物

K 79号住居跡

K区中央部やや北寄りに位置し、57・58K28・29の範囲にある。78号・81号・84号・138号住居跡と重複している。新旧関係はいずれよりも新しい時期の所産である。竈の一部から南壁にかけて部分的に78号住居跡との切り合いのため消失してしまった。壁高は約28cmを測る。床面は多少の凹凸がみられ踏み締まりも弱い。壁下の溝、貯蔵穴などは検出されていない。竈は東壁の南寄りに付設され、掘り込みは半円状を呈すると考えられる。竈周辺には凝灰岩・川原石が散乱しており竈構築材と思われるが、袖などの施設は不明確である。燃烧部幅約1m・奥行約60cmを測る。出土遺物は羽釜・凹石状石器などが検出されている。

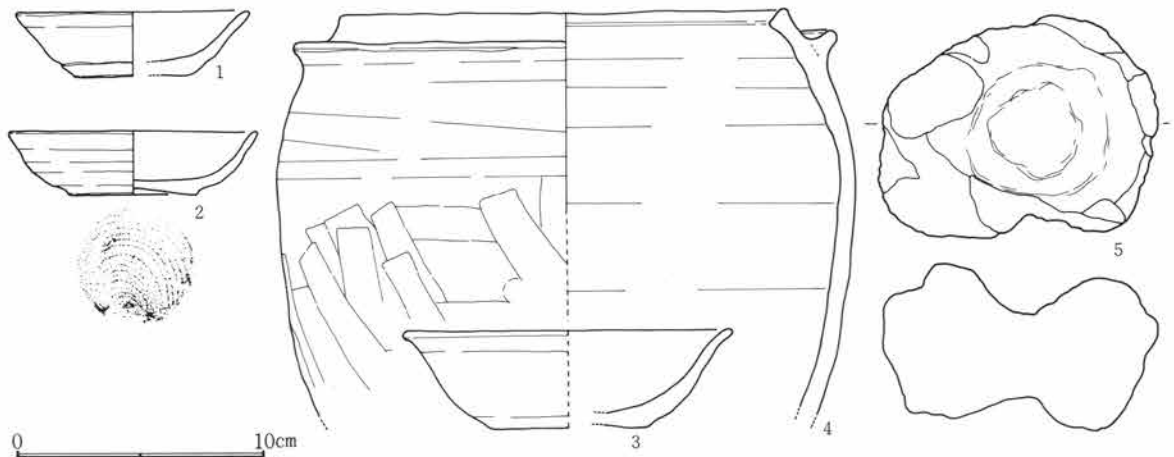


Fig. 423 K79号住居跡出土遺物

K 79号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
423-1 157-1	土師質 杯	1/2	9.4×4.6×2.6	北西部床 面	腰部僅かにくびれ、体部は直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①軟 ②明赤褐 ③緻密
423-2 157-2	土師質 杯	3/4	10×5.1×2.5	竈前床 面	腰部丸く張り、口縁部は直線的に外傾。器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、細砂混る
423-3 157-3	須恵器 杯	1/4	13.2×6.4×3.9	竈前床 面	腰部丸く張る。体部は短かく直線的に外傾した後、口縁部は外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化、良好 ②灰黄褐 ③やや粗
423-4 157-4	羽釜	下半部欠損	13×—×(16) 口径21.6口縁高1 最大径胴部23.3	北東部床 面	口縁部短かく内傾する。口唇部は幅広く上端部内斜。鑄は斜上方へ立つ。胴部張り強く丸味をもち、上半は回転撫で下半は斜笥削り。	①良好 ②灰白 ③粗
423-5 157-5	石 凹石		径11×9 厚6 540.6g	中央部床 面	両面凹む。	角閃石安山岩

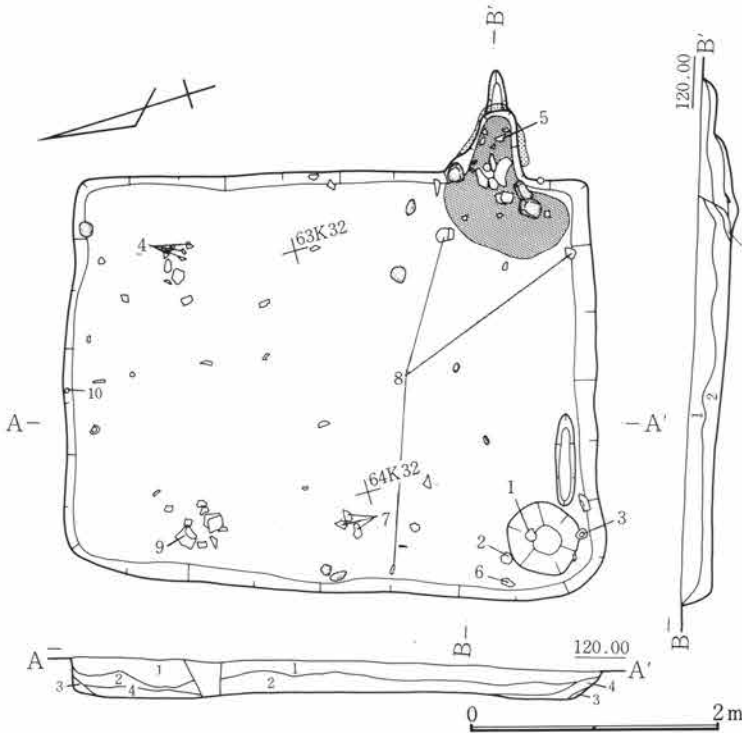
K 80号住居跡 (Fig. 424~427・PL. 158・159)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.32 × 3.39	N—105°—E	東壁南寄り	円形 (60.0 × 60.0 × 18.0)

K区北寄りに位置し、62~64K30~33の範囲にある。95号・101号・110号住居跡と重複しており、これらより新しい時期の所産である。平面形は長軸を南北方向にもち整った方形を呈する。壁高は約30cmを測る。床面は平坦をなし、踏み締まりは良好である。貯蔵穴と考えられる施設は南西隅に設けられ円形に穿たれる。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

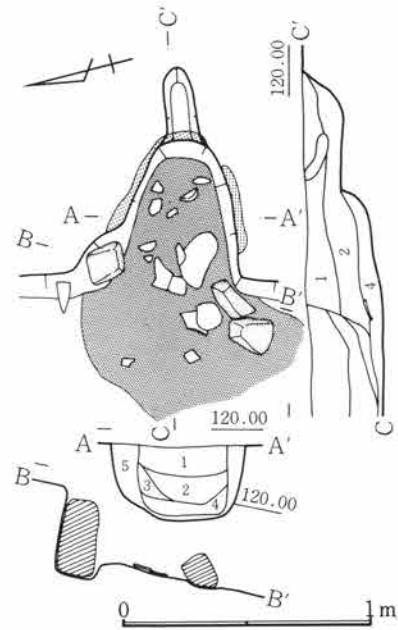
径約60cm、深さは浅く約18cmを測る。竈は東壁の南に偏って付設される。燃烧部は楕円形に掘り込まれ段をなして短い煙道部が付く。袖部は東壁線上に凝灰岩の加工材が埋設されるが右袖材は原位置を保っていない。燃烧部幅約65cm・奥行き60cm、煙道部長さ約35cmを測る。出土遺物は巻き上げ痕の明瞭な土師器杯・炭釉陶器などが検出されている。



K80号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒密に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含むが壁際は少量で焼土粒を混える。
- 3 暗褐色土 粘性が強く混入物なし。
- 4 暗褐色土 粘性が強く、焼土粒・黄白色粘土粒を少量含む。

Fig.424 K80号住居跡



K80号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土塊・土器片を多く含む。
- 3 焼土塊
- 4 灰層 黒色炭化物集中。
- 5 火床面・焼土壁

Fig.425 K80号住居跡竈

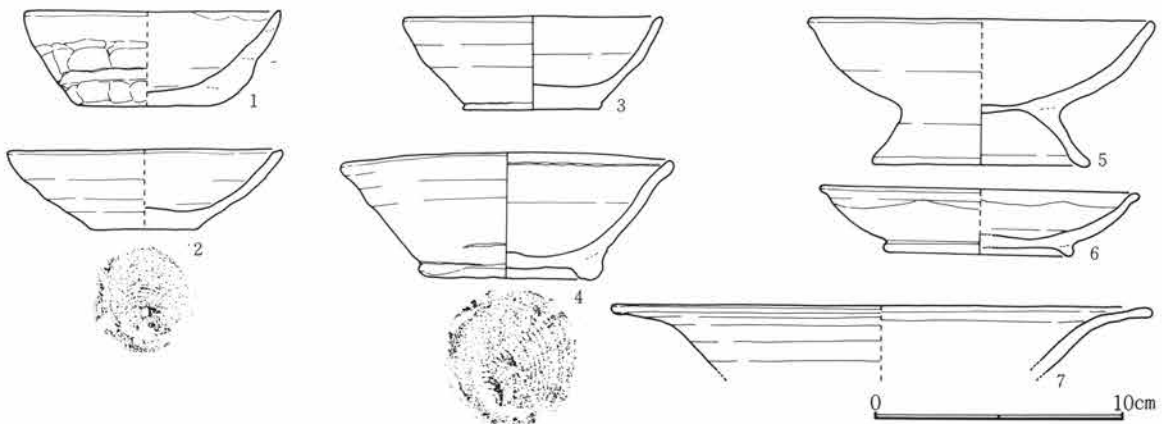


Fig.426 K80号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

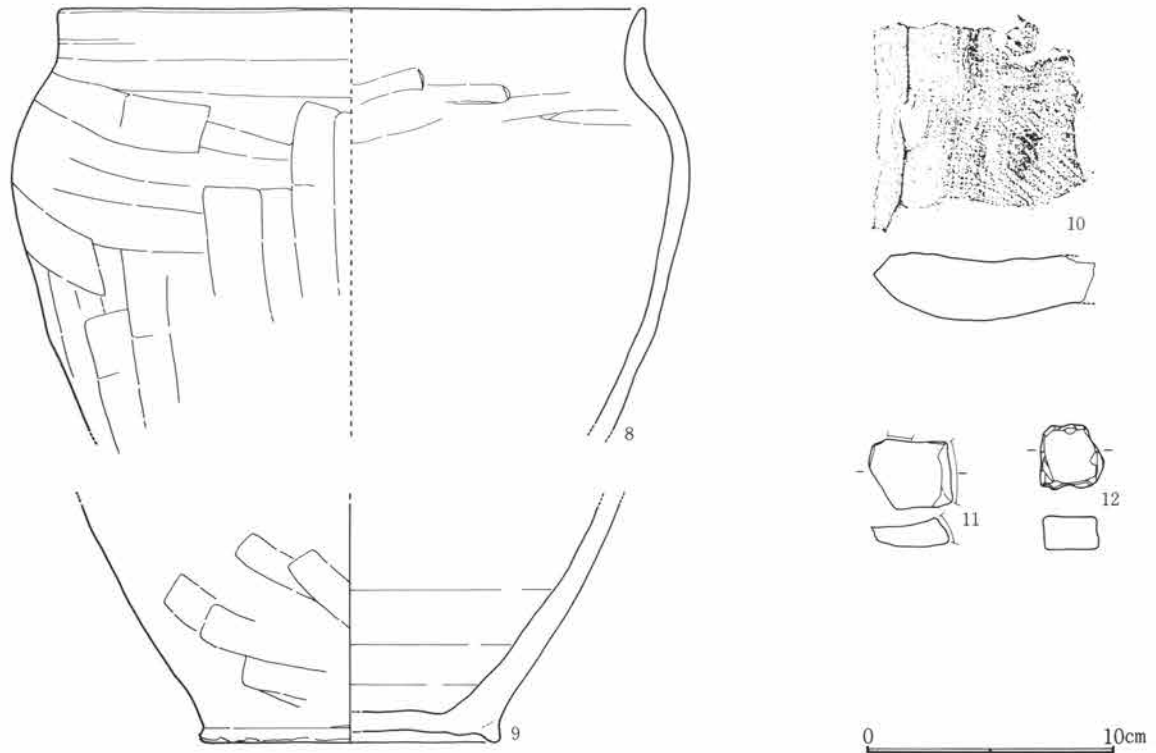


Fig.427 K80号住居跡出土遺物(2)

K 80号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
426-1 158-1	土師器	杯	1/2	10.3×5×3.7	貯蔵穴内	腰部著しく肥厚し丸味をもつ。体部中央でくびれ内湾気味に口縁へ至る。口縁部は細る。外面体部2段に指頭調整痕顯著、3段巻き上げ成形。底部篋削り。内面口唇部付着物。	①良好 ②鈍い赤褐 ③密
426-2 158-2	土師質	杯	1/2	11.1×4.3×3.2	貯蔵穴内	底部小さく、体部は内湾気味に開く。口唇端部平ら。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗、細砂混る
426-3 158-3	土師質	杯	1/2	10.4×5.4×3.7	南西部床下	体部やや深く、再切り離しの為底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
426-4 158-4	須恵器	完	碗	13.3×7.3×5	北東部床下	体部直線的。口縁部やや外屈して開く。口唇部丸い。付高台、低く、丸く肥厚して雑な作り、轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗、小石混る
426-5 158-5	須恵器?	体部欠損	碗	14×8.7×5.8 高台高2	竈内	体部は浅目で丸味をもつ。付高台、高くハの字状に大きく開く、足高台。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗、砂多く混る
426-6 158-6	灰釉陶器	皿	1/2	12.7×7.6×2.6	南西部床面	体部やや内湾気味に開き丸味をもつ。口唇部は丸く強く外屈する。高台低く端部丸い。口縁部付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
426-7 158-7	土師器	不明	口縁部	21.8×—×(2.5)	西部床面	大きく外傾して立ち上がり、上半は水平に近く外屈する。口唇部丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②明赤褐 ③やや密、細砂混る
427-8 159-8	土師器	1/2・下半欠損	甕	23.7×—×(16.7) 最大径胴上27.4	竈前・西壁際床面	短か目の口縁部は直立する。胴上半が強く張り下に向いすばまる。口縁部横撫で。胴上半は横・中～下位は縦篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
427-9 159-9	須恵器	底部	1/2	—×12×(9.5)	北西部床下	底部から変化なくそのまま直線的に胴部へ至る。付高台、矮小。	①良好、燻しか ②青灰 ③粗、小石混
427-10 159-10	瓦	小片	厚2.3		北壁際埋土	凹面布目	①良好 ②灰白 ③やや密
427-11 159-11	須恵器	転用砥石		3.4×2.7×1 11.2g	埋土	2側面使用。甕片	①良好 ②灰白 ③やや密
427-12 159-12	須恵器	めんこ状		2.5×2.6×1.3 13.6g	埋土	周辺打ち撞く。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密

K81号住居跡 (Fig. 428~431・PL. 159・160)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.13 × 4.76	N- 32° -W	北壁中央	

K区中央部やや北寄りに位置し、56~59K26~30の範囲にある。74号・78号・79号・138住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。また北西隅は11号溝によって消失している。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなすと考えられるが、踏み締まりも弱く不安定である。住居内にはP₁~P₄の4ヶ所に小穴が検出されたが、いずれも柱穴に比定しうるものはない。

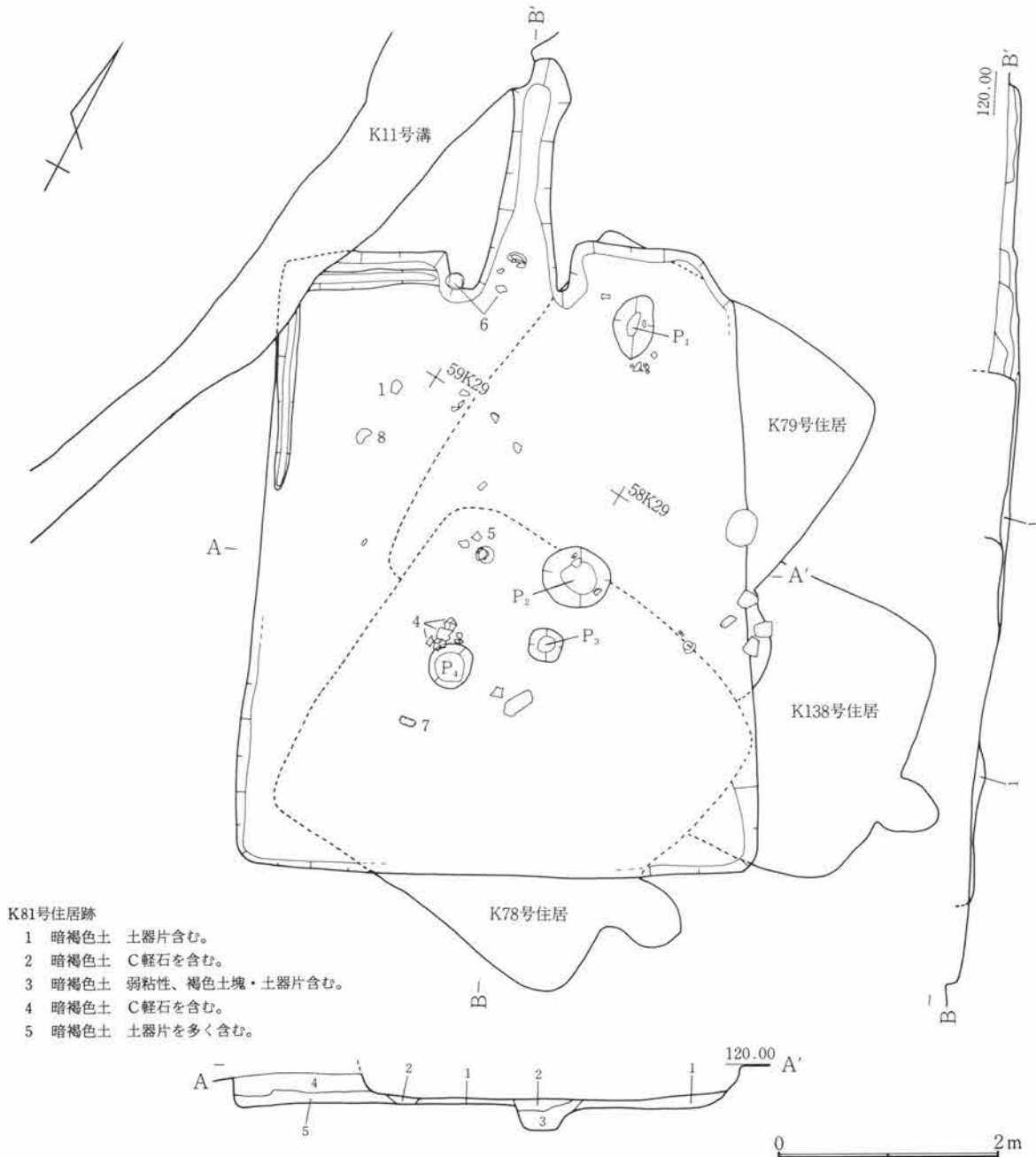


Fig.428 K81号住居跡

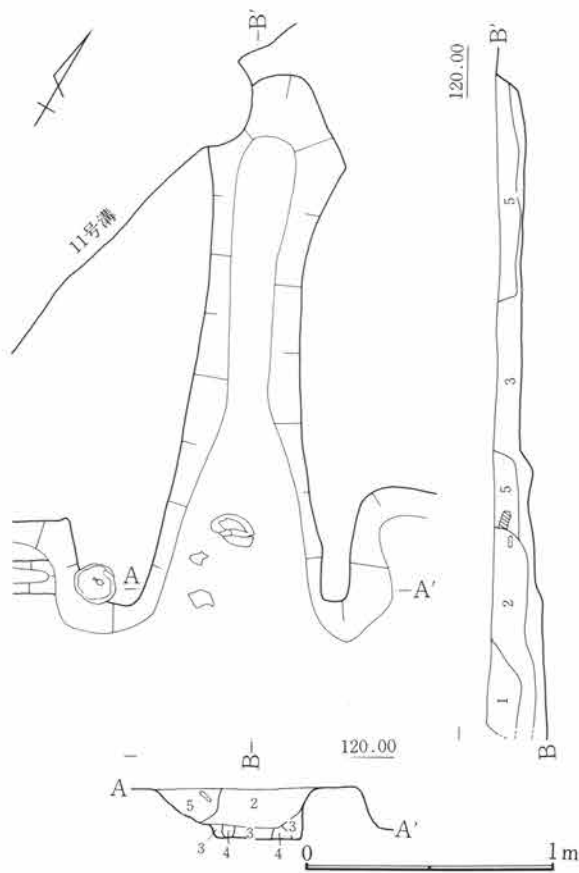


Fig.429 K81号住居跡竈

P₁は貯蔵穴の可能性もある。P₁は径58×38cm・深さ24cm、P₂は径60×54cm・深さ32cm、P₃は径30cm・深さ17cm、P₄は、径40cm・深さ18cmを測る。壁下の溝は北壁から西壁の一部にかけて検出され、幅約16cm・深さ5cmを測る。竈は北壁中央部に付設され、袖部が住居内に張り出す形態を持つ。燃烧部はやや幅狭く掘り込まれ、わずかな段をなして長大な煙道部が住居外に延びる。袖部は粘性のある暗褐色土で構築され、左袖部には土師器甕が芯として埋設されている。袖部長さ40～50cm・袖間最大内法60cm、燃烧部奥行き約80cm、煙道部奥行き約80cm・長さ1.3mを測る。出土遺物は土師器杯・甕などが検出されている。

K81号住居跡竈

- | | |
|---------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | C 軽石・焼土・炭化粒を全体に含む。 |
| 2 暗褐色土 | 1層に似る。焼土塊が多い。 |
| 3 暗褐色土 | 弱粘質土。 |
| 4 暗灰褐色土 | 粘性土。 |
| 5 暗褐色土 | 3層に似る。大粒の焼土粒を多く含む。 |

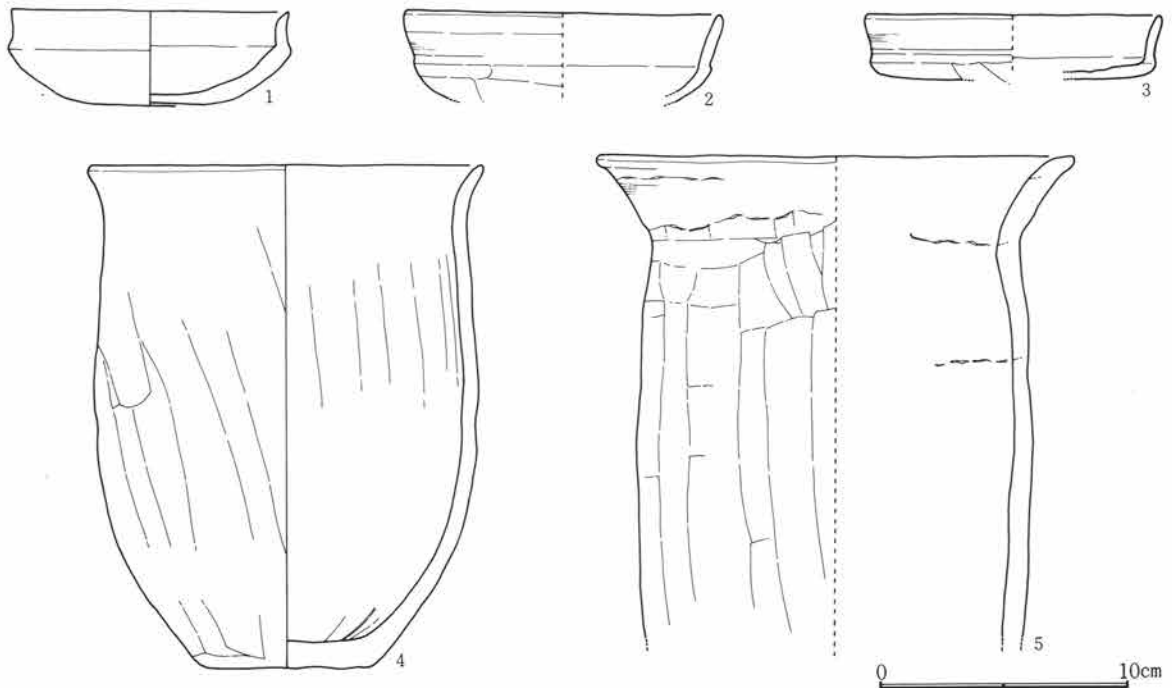


Fig.430 K81号住居跡出土遺物(1)

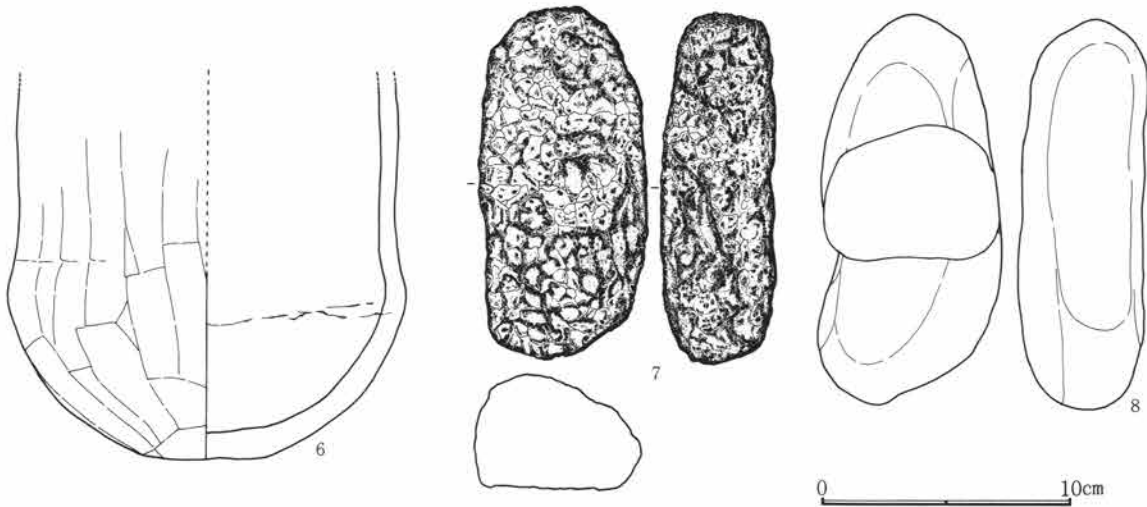


Fig.431 K81号住居跡出土遺物(2)

K 81号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 器	種 形	部 位	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
430-1 160-1	土 器	師 器	杯	1/2 11.2×-×3.8 口径高1.5	北西部床 面	やや平底気味。受け部付近が特に肥厚する。受け部は丸く僅かな段をなす。口縁部は外反気味に直立し、端部は尖り内面は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削り不明瞭。	①良好 ②浅黄 ③やや粗
430-2 160-2	土 器	師 器	杯	1/4 12.8×-×(3.5) 口径高2.2	中央部床 面	底部浅く、受け部段をなす。口縁部は内湾気味に外傾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②鈍い赤褐 ③やや密、細砂混る
430-3 160-3	土 器	師 器	小片	12×-×2.6 口径高1.7	埋 土	扁平でほとんど体をなさない底部より、直に折れてやや外反ぎみに立ち上がる口縁に至る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②明赤褐 ③密
430-4 160-4	土 器	師 器	甕	1/2 15.9×6.5×2.0	中央部床 面	口縁部はゆるく外反して開く。胴部張りなく寸胴を呈する腰部やや丸味。外面胴部縦篋削り。内面縦篋削り。	①良好 ②橙 ③粗、砂多く混る
430-5 160-5	土 器	師 器	1/2・下 半欠損	19.2×-×19	中央部床 面	口縁部肥厚し外反気味に外傾する。口唇部さらに外屈。胴部張りなく長胴を呈する。口縁部横撫で、胴部縦篋削り。	①良好 ②橙 ③粗、小石混る
431-6 160-6	土 器	師 器	上半欠 損	-×4.7×(15) 胴径15.2	竈内・袖 部	腰部は強く丸く脹らみ、くびれて直線的な長胴となる。底部は小さく平底気味。胴部縦・腰部斜篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗、砂混る
431-7 160-7	石			長13.9 幅6.8 厚4.4 684 g	中央部床 面	全面に成形打撃痕。	石英閃緑岩
431-8 160-8	石			長15.6 幅7.2 厚5.1 1035 g	北西部床 面		石英閃緑岩

K 82号住居跡 (Fig. 432~434・PL. 161)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.20 × 2.23	N- 92° - E	東壁南寄り	楕円形 (56.0 × 46.0 × 15.0)

K区北寄りに位置し、54・55K32~34の範囲にある。77号住居跡竈先端部及び107号住居跡と重複しており、77号より旧く、107号住居跡より新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもち整った方形を呈する。遺存は悪く、壁高はわずかに5cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが南壁沿いは107号住居跡との切り合いのためやや軟弱である。竈は東壁南寄りに付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれる。東壁線上に凝灰岩加工材が埋設され袖部を作る。袖材間内法約50cm、燃焼部奥行き約55cmを測る。出土遺物は貯蔵穴周辺に多く、土器類の他、竈構築材と考えられる石材が貯蔵穴内に検出されている。

第3章 K区の遺構と遺物

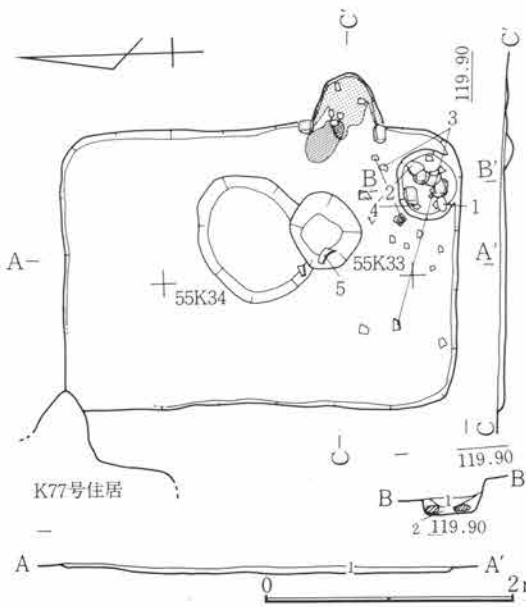


Fig.432 K82号住居跡

- K82号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を混える。
- 貯蔵穴
- 1 灰層
 - 2 暗褐色土 粘性・締まりなし。
- K82号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石含む。
 - 2 暗褐色土 少量の焼土粒・灰を含む。
 - 3 茶褐色土 C軽石を含む。

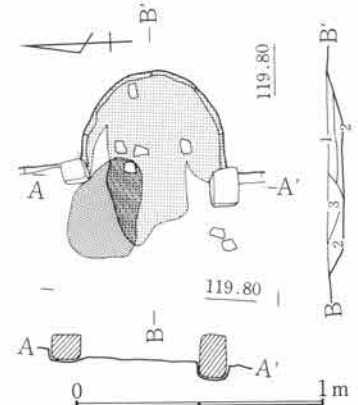


Fig.433 K82号住居跡竈

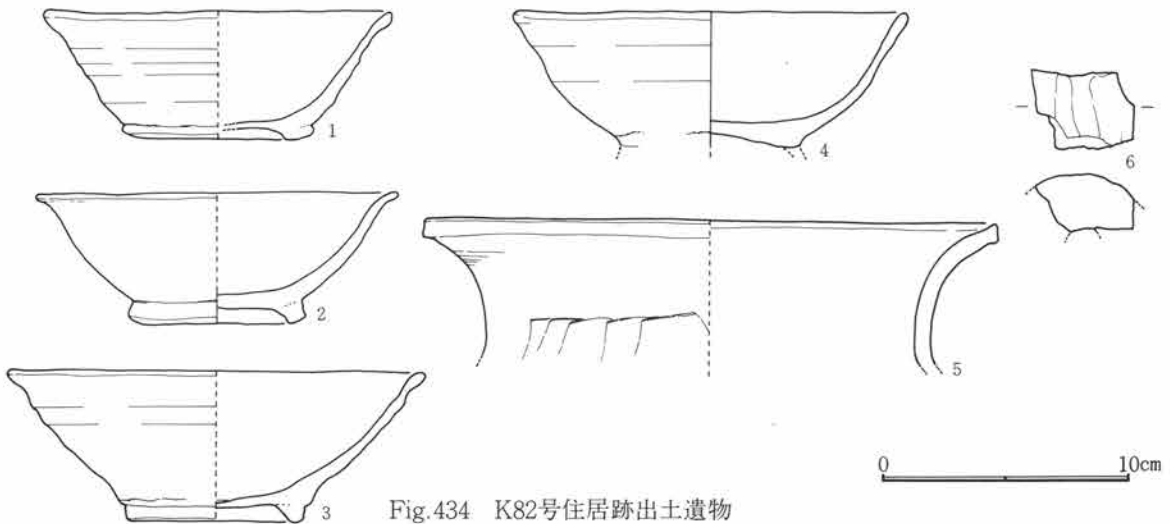


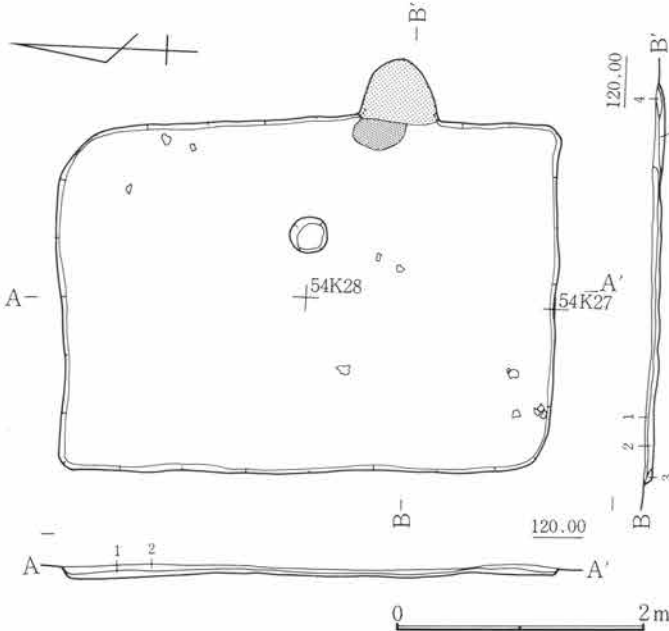
Fig.434 K82号住居跡出土遺物

K 82号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
434-1 161-1	須惠器 碗	1/3	14×7.2×5.1	貯蔵穴内	体部直線的に立ち上がる。口縁部は外反し、口唇部はやや肥厚し直立する。付高台、低く幅広。轆轤成形。右回転糸切り。底部薄く、体部外面轆轤目強い。	①良好 ②灰白 ③やや密
434-2 161-2	須惠器 碗	体部1/3 欠損	14.6×7.2×5.2	貯蔵穴際 床面	体部丸く張る。口唇部は細い水平に近く外屈する。付高台幅広く下端面は外斜する。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
434-3 161-3	須惠器 碗	1/4	16.8×7.2×6.0	竈前面床 面	体部内湾気味に大きく開き、口縁部はくびれて外反。口唇部丸い。付高台、直に立つ。底部中心部薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③緻密
434-4 161-4	須惠器 碗	1/3・高 台欠損	15.8×-×(4.4)	貯蔵穴内	体部やや張り上半部は直線的に立ち上がる。口唇部丸い。付高台、轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
434-5 161-5	土師器 甕	口縁部 1/3	23×-×(5.5)	中央部床 下	口縁部大きく外反し、口唇部は直立する。端部尖る。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③粗、小石多く混る
434-6 161-6	土製品 羽口	小片	長(3)	埋 土	中間部分	

K 83号住居跡 (Fig. 435・436・PL. 162)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.07 × 2.76	N- 88° -E	東壁南寄り	



K83号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土を多く含む。
- 2 暗褐色土 粘性が強い。微量のC軽石含む。
- 3 暗褐色土 粘性が強く締まりがある。
- 4 焼土
- 5 暗褐色土 微量の焼土粒・C軽石を含む。

Fig.435 K83号住居跡

K区中央部やや北東寄りに位置し、53・54K27・28の範囲にある。88号・104号住居跡と重複しているが、これらより新しい時期の所産である。遺存状態は悪く、痕跡程度の検出である。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。壁高約10cmを測り浅い。床面は平坦をなし、踏み締まりは弱い。壁下の溝、貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。竈は東壁南寄りに付設されるが、かろうじて火床面が観察された。燃烧部は楕円形を呈し幅約55cm・奥行き50cmまで確認できた。袖部・煙道部などは検出されていない。出土遺物は少なく少量の土器片のほか角釘と考えられる鉄製品が検出されている。

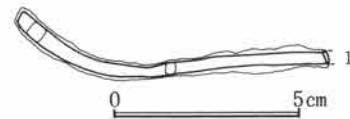


Fig.436 K83号住居跡出土遺物

K 83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
436-1 162-1	鉄 製 品		長8.5径1.4・0.3	埋 土	断面角状。角釘か。	

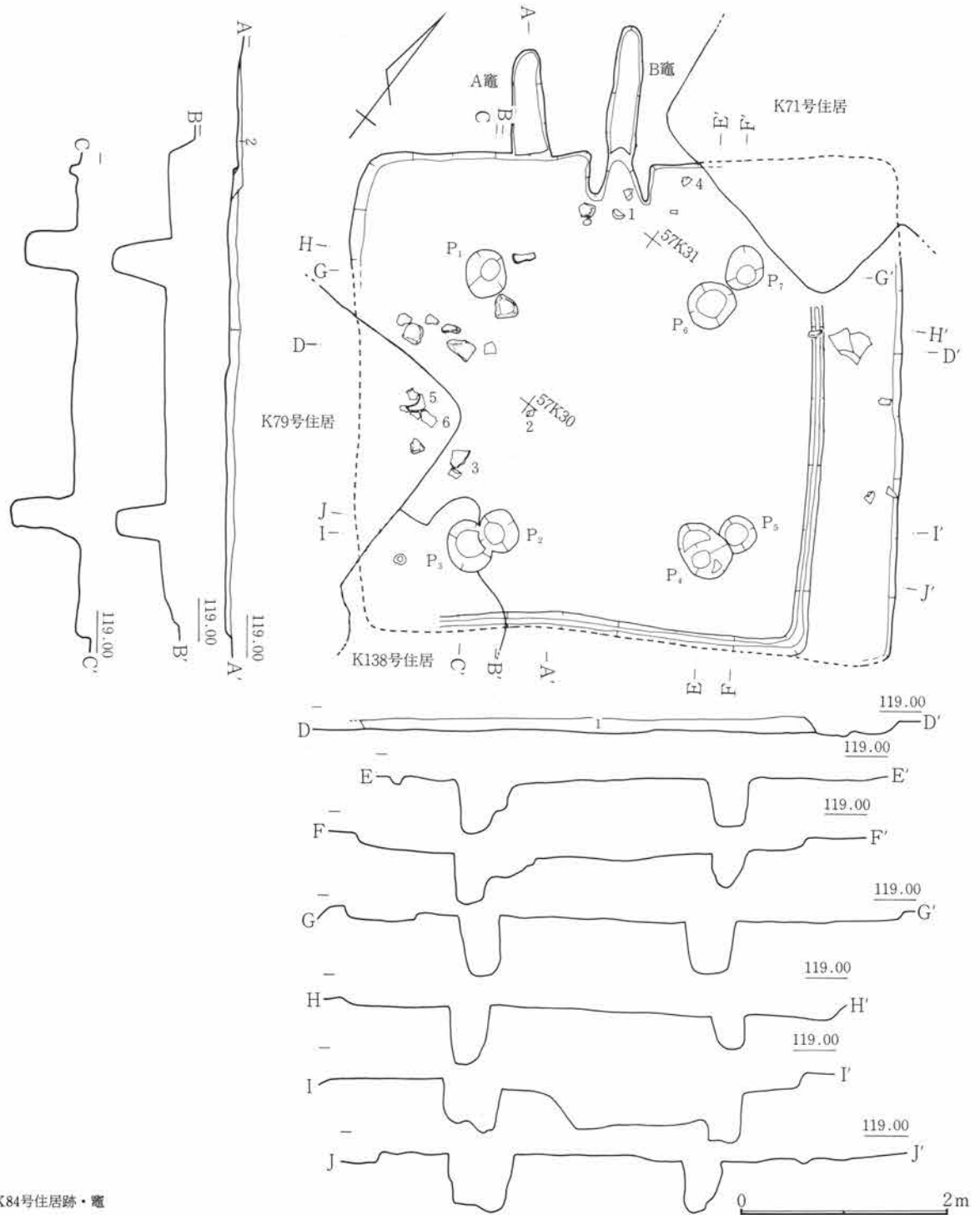
K 84号住居跡 (Fig. 437・438・PL. 162・163)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
	5.36 × 4.84	(A)N- 37° -W (B)N- 37.5° -W	東壁やや南寄り	

K区やや北側に位置し、55～58K29～31の範囲にある。71号・79号・138号住居跡と重複している。新旧関係は71号・79号・138号住居跡より古い時期の所産である。南壁下の溝と連続して東側を画する溝が検出され、この溝より約80cmの間隔をおいて東壁が検出されている。また北壁にはA・B 2基の竈が検出され、B竈は燃烧部及び袖部が残存するのに対し、A竈は煙道部が残存するだけで、新旧関係を示している。しかしながら東壁を除いて他の壁線は一致しており、切り合い関係にあるとは考えられない。拡張か、縮小かについてはP₃・P₄の東壁との距離間が大きすぎるきらいはあるが、土層観察によれば東側の溝と東壁の間には変化が

第3章 K区の遺構と遺物

認められず当住居跡は、東側部分だけ拡張したものと判断する。拡張前の平面形は1辺4.5mの正方形を呈し、拡張後は東西方向に長軸をもつ方形となる。壁高は約18cmで浅い。床面は平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。柱穴はP₁からP₇が検出され、P₁・P₂・P₄・P₆とP₁・P₃・P₅・P₇は各々拡張前と後のものと考えられる。P₁は上径54×44cm・下径20cm・深さ56cm、P₂は上径46×40cm・下径24cm・深さ48cm、P₃は上径44×40cm・下径20cm・深さ43cm、P₄は上径36cm・下径16cm・深さ40cm、P₅は上径34×32cm・下径22cm・深



K84号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 弱粘質、C軽石・焼土・炭化粒含む。
- 2 焼土塊層

Fig.437 K84号住居跡

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

さ48cm、P₆は上径40×38cm・下径24cm・深さ30cm、P₇は上径40×34cm・下径18cm・深さ32cmである。柱穴間は、P₁・P₂は2.4m、P₂・P₄は2.06m、P₄・P₆は2.44m、P₁・P₃は2.6m、P₃・P₅は2.64m、P₅・P₇は2.4m、P₁・P₇は2.5mを測る。A竈は、煙道部長さ1m、B竈は袖部が住居内に約46cm張り出し、黄褐色粘土を混える粘性暗褐色土で築かれる。袖内法は約40cm、燃烧部奥行き50cm、煙道部長さ1.2mを測る。出土遺物は土師器杯・甕類が検出されている。

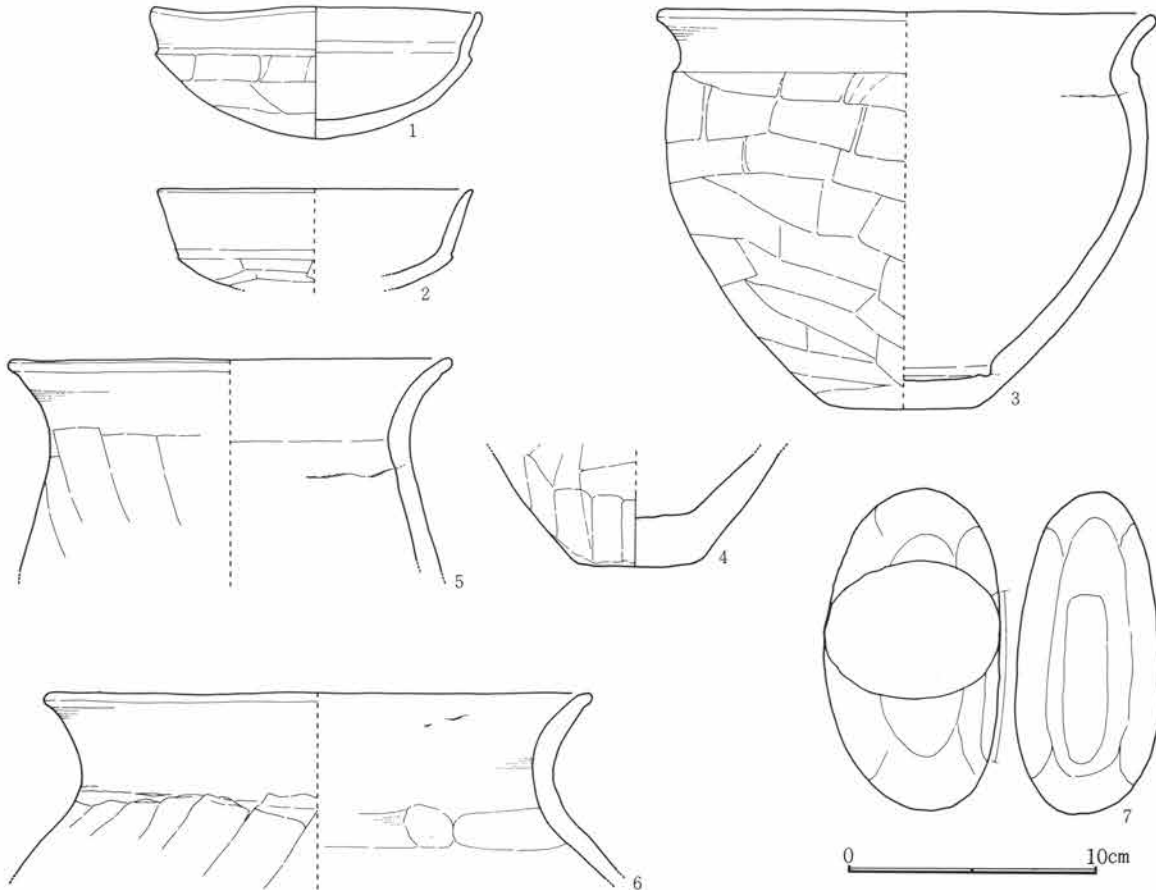


Fig.438 K84号住居跡出土遺物

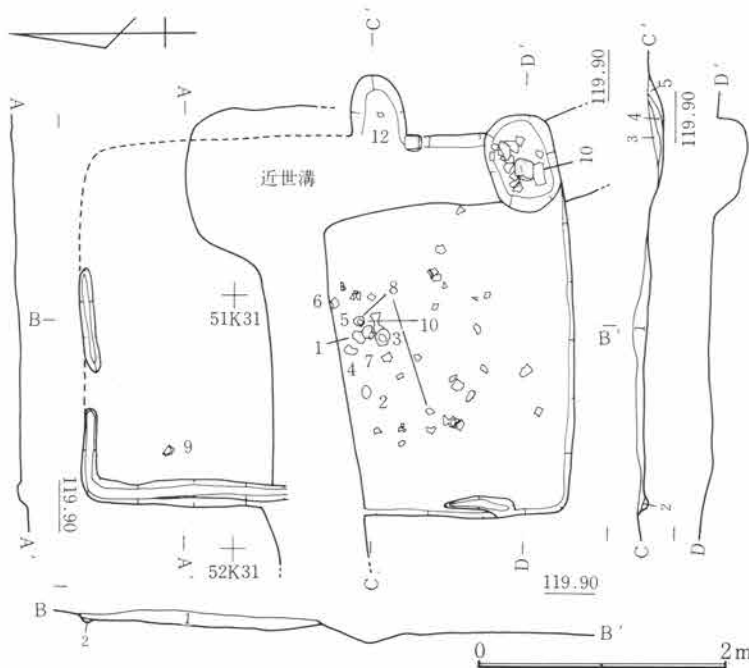
K 84号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
438-1 163-1	土 師 器 杯	1/2	13.3×—×5.2 口縁高1.7 受け径12.2	竈前床面	口縁部外傾気味に立ち口唇部は内屈する。受け部僅かに段をなし、底部は丸く深い。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②鈍い橙 ③密
438-2 163-2	土 師 器 杯	小 片	12.8×—×(4) 口縁高2.7	中央部床面	口縁部直線的に外傾し高い。口唇部尖る。受け部僅かに段をなし浅い底部に至る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②橙 ③ 密、茶色粒混る
438-3 163-3	土 師 器 甕	1/4	20.2×5.8×15.7 胴部19.2	西中央部床面	口縁部強く外反し、口唇部丸い。胴部上半で丸く脹らむ。口縁部横撫で。胴部横・斜篋削り。	①良好 ②暗灰黄 ③粗
438-4 163-4	土 師 器 甕	底部	—×5×(4.5)	竈東際床面	底部小さく丸味をもち、肥厚する。外面強い縦篋削り。内面強い撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③粗、小石混る
438-5 163-5	土 師 器 甕	口縁部 1/2	17.8×—×(8.5)	西部床面	口縁部大きく外反して開く。胴部に張りなく、下脹れの様相を呈する。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 粗、石英粒混る
438-6 163-6	土 師 器 甕	口縁部 1/4	22×—×17.5	西部床面	最大径は胴部。口縁部は緩く外反する。口唇部は丸まる。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面・口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③や や密、細砂混る
438-7 163-7	石		12.8×7×5.6 667g	埋 土	1側面に磨り痕あり。	

K85号住居跡 (Fig. 439~441・PL. 163・164)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
	3.97 × 3.03	N- 89° -E	東壁やや南寄り	楕円形 (76.0 × 54.0 × 29.0)

K区東部の北寄りに位置し、50・51K29~31の範囲にある。91号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。削平が深く、東壁から北壁にかけては痕跡程度の検出状態であった。また住居跡中央部を東西に走り、南へL字に折れる近世溝によって壁・床面の一部は消失している。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈する。壁高は約10cmを測る。床面は平坦をなして西半部の踏み締まりは良好である。北壁と西壁の一部に幅12cm・深さ2~3cmの浅い溝が検出されている。竈は東壁やや南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。右袖部には東壁線上に凝灰岩の加工材が埋設される。燃烧部幅約45cm・奥行き50cmを測る。出土遺物は須恵器碗類が多く、貯蔵穴内及び中央部に集中して検出されている。



円形に掘り込まれる。右袖部には東壁線上に凝灰岩の加工材が埋設される。燃烧部幅約45cm・奥行き50cmを測る。出土遺物は須恵器碗類が多く、貯蔵穴内及び中央部に集中して検出されている。

K85号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土 やや粘性あり。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物を含む。
- 4 火床面
- 5 暗褐色土 焼土粒を多量含む。

Fig.439 K85号住居跡

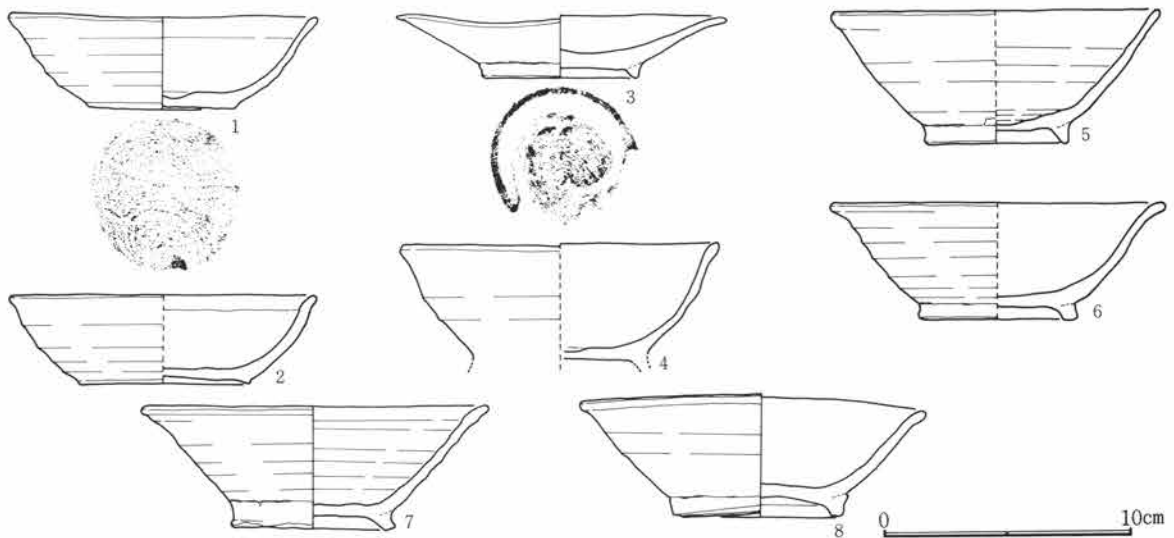


Fig.440 K85号住居跡出土遺物(1)

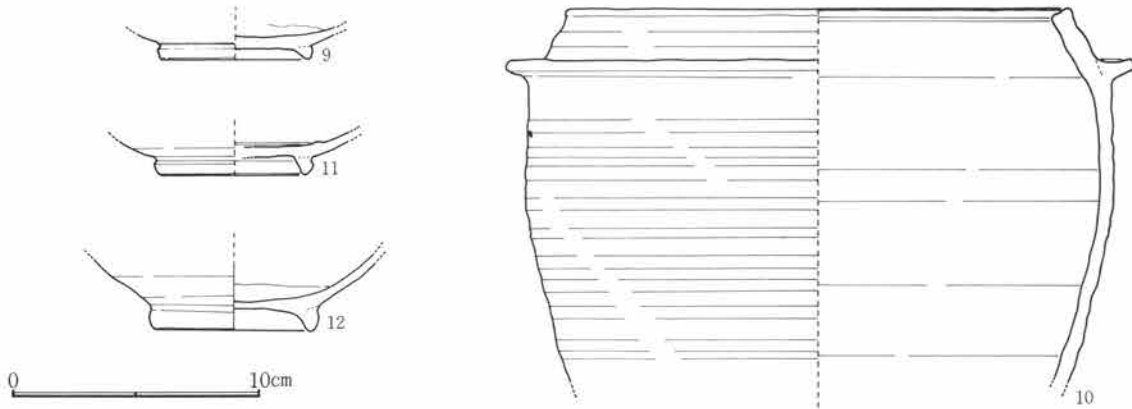


Fig.441 K85号住居跡出土遺物(2)

K85号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
440-1 163-1	須惠器 杯	1/2	12.4×5.8×3.7	中央部床 面	体部やや丸味をもち口唇部丸く僅かに外反気味。轆轤成形。 右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③ やや粗、砂混る
440-2 163-2	須惠器 杯	1/2	12.4×6.8×3.6	中央部床 面	体部丸味をもち、口縁部外屈する。轆轤成形。右回転糸切 り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
440-3 163-3	須惠器 皿	1/2	13.3×6.2×2.5	中央部床 面	体部直線的で大きく開き、口唇部薄く水平、付高台、低く 断面三角形。轆轤成形。	①酸化、軟 ②灰白 ③やや密
440-4 164-4	須惠器 1/4・高 台欠損 椀	1/4	12.8×—×(4.5)	中央部床 面	体部張り気味。口唇部肥厚し、外反する。轆轤成形。回 転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
440-5 164-5	須惠器 椀	1/4	13.2×5.8×5.3	中央部床 面	体部やや直線的。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
440-6 164-6	須惠器 椀	1/2	13.6×6.4×4.6	中央部床 面	体部丸味をもち口唇部は丸く外反する。付高台、断面四角。 轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄 ③ やや粗
440-7 164-7	須惠器 椀	3/4	14×6.5×5.1	中央部床 面	体部直線的に開き、口唇部やや肥厚する。付高台、断面四 角で端部外反気味に接ねる。作り雑。轆轤成形。右回転糸 切り。底部円形に爪状痕巡る。	①良好 ②灰 ③や や粗
440-8 164-8	須惠器 椀	3/4	13.9×6.9×4.9	中央部床 面	体部やや丸味をもち口唇部は僅かに外屈。付高台。下端 面に凹線巡る。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、軟 ② にぶい黄橙 ③密
441-9 164-9	灰釉陶器 椀	底部1/2	—×6×(1)	北西部床 面	内面体部施釉。高台低く、底部回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 密
441-10 164-10	羽 釜	上半1/2	20.1×—×(15) 鑄径25	貯蔵穴内	胴部やや張り気味。鑄部鋭く明瞭。胴部回転無で調整。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗
441-11 164-11	灰釉陶器 椀 転用硯	底部1/2	—×6×(1.6)	中央部床 面	高台やや肥厚し、断面三角形。底部、腰部回転篋削り。見 込部重ね焼痕。内面転用硯として使用。	①良好 ②灰白 ③ 密
441-12 164-12	灰釉陶器 椀	底部	—×6.5×(3)	竈 内	高台肥厚し内湾して立つ。内面体部施釉。底部無で。	①良好 ②灰白 ③ やや密

K86号住居跡 (Fig. 442・443・PL. 164・165)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
	— × 2.23	N—89.5°—E	東壁南寄り	楕円形 (60.0 × 48.0 × 17.0)

K区東部の北寄りに位置し、52・53K31・32の範囲にある。削平が深く北壁は消失しているが、平面形は南北に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。壁高は比較的良好に遺存する南壁で約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが南側中央部に径100×40cmの楕円形状の落ち込みが検出されている。竈は東壁の南寄りに付設されるが遺存状態は悪く、燃焼部は小さく楕円形に掘り込まれる。袖部・煙道部などは検出されていない。

第3章 K区の遺構と遺物

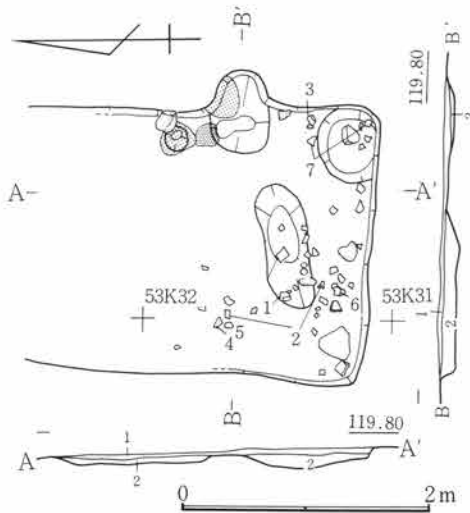


Fig.442 K86号住居跡

燃焼部幅約45cm、奥行きは燃焼部の範囲を示すと考えられる浅い窪みを考慮すれば約55cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・羽釜などがあり、南西部の床面上あるいは埋土中に集中して検出された。

K86号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・焼土粒含む。
- 2 黒褐色土 粘性土、土器片含む。

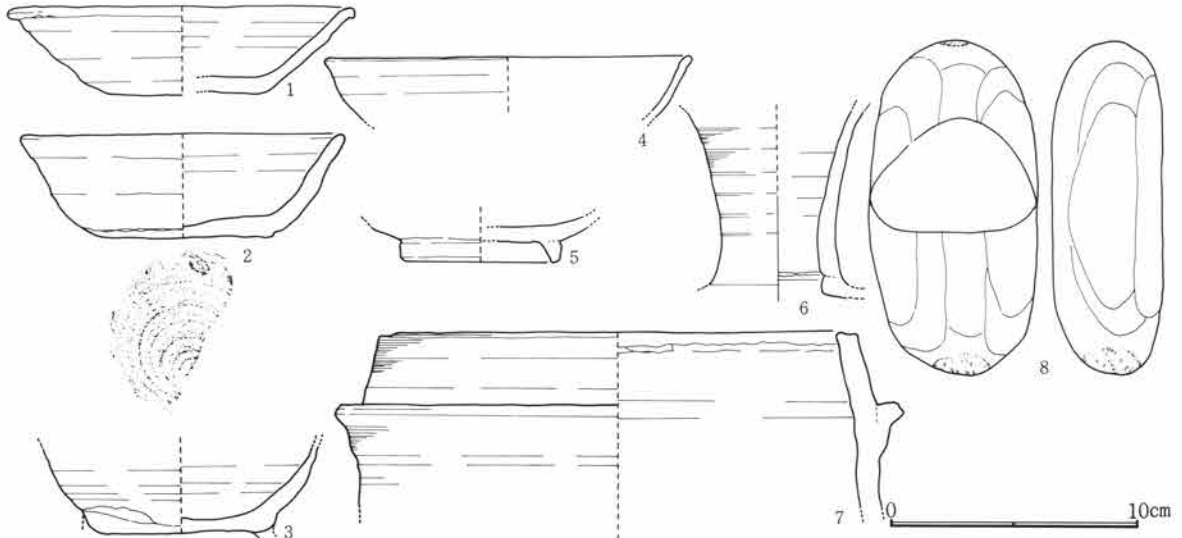


Fig.443 K86号住居跡出土遺物

K 86号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
443-1 165-1	須恵器 杯	1/4	14×6×3.5	南西部埋土	体部直線的で大きく開く。口唇部強く外屈する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②褐灰 ③やや粗
443-2 165-2	須恵器 杯	1/3	13×7×4.1	西央部床面	体部にやや張らみをもつ。口縁部僅かに外傾し、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
443-3 165-3	須恵器 碗	底部1/4	—×—×(3.5)	南東部床面	高台欠損。腰部張らむ。轆轤成形。	①酸化気味、軟灰黄 ②やや密
443-4 165-4	灰釉陶器 碗	口縁部小片	14.8×—×(2.5)	西央部床下	口唇部丸まり弱く外傾する。	①良好 ②灰白 ③緻密
443-5 165-5	灰釉陶器 碗	底部1/4	—×6.5×(2)	西央部床下	高台肥厚。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや粗
443-6 165-6	須恵器 長頸瓶	頸部	—×—×(7.5) 頸基径5.3	南西部埋土	内面に胴部との接合痕あり。上半部は外反して開く。	①良好 ②灰白 ③やや密、黒色粒浮く
443-7 165-7	羽釜	口縁部1/3	19.4×—×(7) 鏝径28	貯蔵穴内	鏝下方は肥厚し、鏝断面矩形を呈し水平気味に張る。口縁部は直線的に内傾する。口唇上端は水平。口縁部回転撫で。	①良好 ②灰白 ③やや粗、白色粒混る
443-8 165-8	石		13.3×4.5×4.5 620.6g	南西部床面	両端部に弱い敲打痕あり。	

K87号住居跡 (Fig. 444~447・PL. 165・166)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.70 × 3.00	N-97.5°-E	東壁南寄り	楕円形 (65.0×50.0×-)

K区北東部に位置し、52~54K33~35の範囲にある。99号・108号住居跡と重複しているが、99号より旧く、108号より新しい時期の所産である。平面形は方形を呈するが南西隅が歪む。壁高は約12cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。床下は多くの土坑状落ち込みが検出され粘性のある暗褐色土に炭・焼土粒を多量に混じえた層で埋められており、土器片も多く検出されている。竈は東壁の南寄りに付設され、

燃焼部はやや方形気味に掘り込まれる。袖部の構築材は見られず左袖部に凝灰岩の残欠が認められたにすぎない。煙道部は検出されないが、燃焼部奥壁に小さな2個の凝灰岩加工材が埋設されている。燃焼部幅約50cm・奥行き50cmを測る。出土遺物は散在しており、鉄器・須恵器皿類などが検出されている。

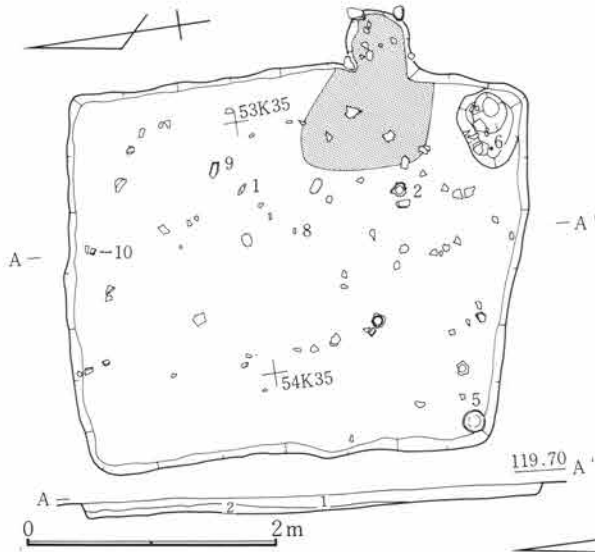
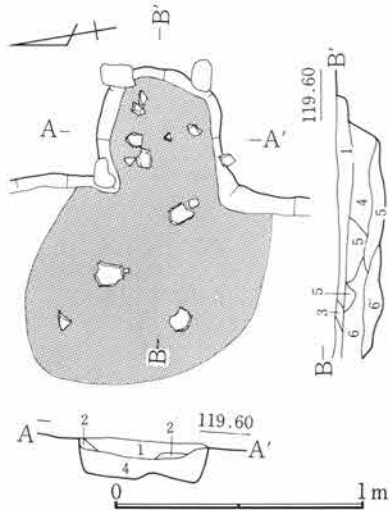


Fig.444 K87号住居跡



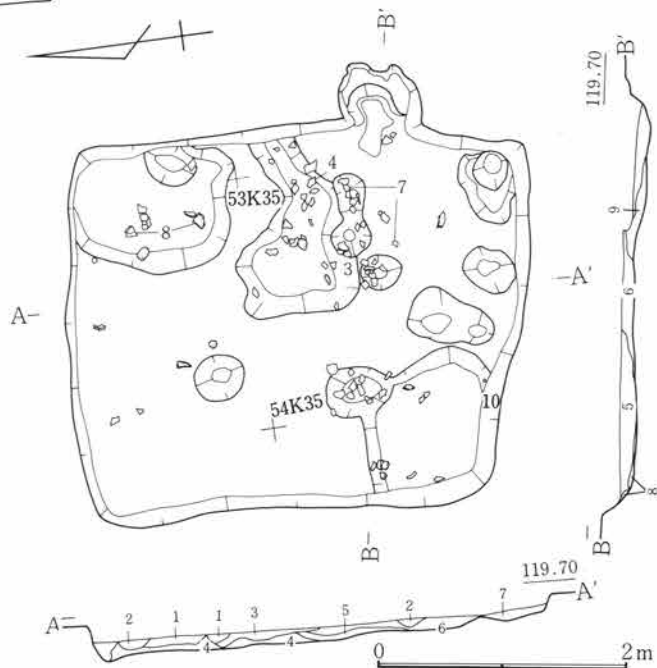
K87号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含む。
- 2 暗褐色土 C軽石少量、壁際には明褐色土塊混る。

K87号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石少量、焼土粒・灰混る。
- 2 灰層
- 3 暗褐色土 焼土粒混る。
- 4 暗褐色土 粘土粒・炭化粒混入。
- 5 暗褐色土 粘土粒・炭化粒混入。
- 6 灰暗褐色土
- 6' 灰暗褐色土

Fig.445 K87号住居跡竈



K87号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む。
- 4 黒色土 炭化粒含む。
- 5 赤黒色土 焼土混入。
- 6 暗褐色土 粘土塊・炭化粒少量含む。
- 7 黒色土 焼土一部混。
- 8 Loam
- 9 暗褐色土 粘土粒・焼土粒少量混る。

Fig.446 K87号住居跡掘形

第3章 K区の遺構と遺物

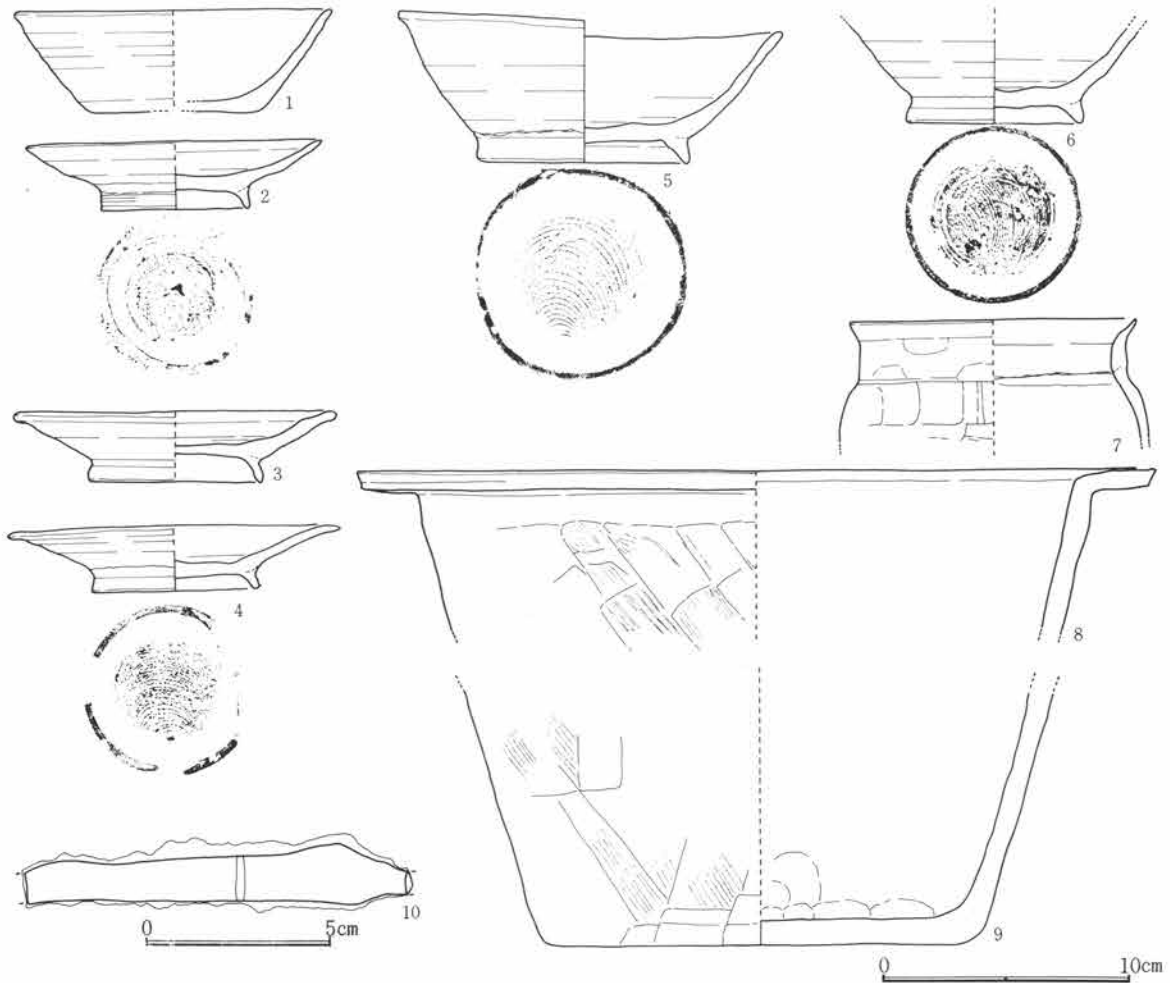


Fig.447 K87号住居跡出土遺物

K 87号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
447-1 166-1	須恵器 杯	¼	12.8×6.7×4	中央部埋 土	体部直線的に開き口唇部細る。腰部やや肥厚する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰黄褐 ③やや粗
447-2 166-2	須恵器 皿	¾	12×6×2.7	南東部埋 土	体部中位で僅かに屈するが、ほぼ直線的で大きく開く。口唇部尖る。付高台、直立気味。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
447-3 166-3	須恵器 皿	½	13×7×2.7	中央部床 下	やや肥厚する腰部から直線的に開き、中位で水平に近く外屈する。口唇部は丸い。付高台、細くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密、黒色粒少量 混る
447-4 166-4	須恵器 皿	½	13.4×6.8×2.6	東・南西 部床下	体部直線的に開き、口縁部水平に折れる。口唇部尖がる。付高台、直線的でハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や密
447-5 166-5	須恵器 椀	完	15.5×8.5×5.6	南西壁際 埋土	体部丸味少なく口縁部は外反気味。付高台、断面三角形でハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄 ③ やや密
447-6 166-6	須恵器 椀	上半部 欠損	—×7.1×(4)	貯蔵穴内	腰部で屈するが体部は直線的様相。付高台、やや肥厚しハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密、夾雑物混る
447-7 166-7	土師器 甕(台付)	口縁部 ¼	11.6×—×(5) 胴部径12.4	竈前床下	口縁部肥厚し直立した後内湾気味に外屈するコの字口縁。口唇部細く尖る。肩部張り気味。口縁部横撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密、細石混る
447-8 166-8	土師器 甕	口縁部 ¼	32.2×—×(6.5)	北東部床 下	胴部直線的。口縁部強く屈し水平に開く。口唇部角ばる。口縁直下横撫。胴部斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
447-9 166-9	須恵器? 甕	底部¼	—×16×(10)	北東部埋 土	胴部直線的、平行叩き目。平底篋削り。内面指頭痕残る。	①良好 ②灰 ③粗 小石、白色細粒混る
447-10 166-10	鉄製品		長(10.3) 幅1.1 厚0.2	南西部床 下	片端部柄状に細る。	

K88号住居跡 (Fig. 448~451・PL. 167)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.85 × 5.70	(A)N-20°-W (B)N-20°-W	北壁西寄り 北壁中央	方形 (60.8 × 60.4 × 23.0)

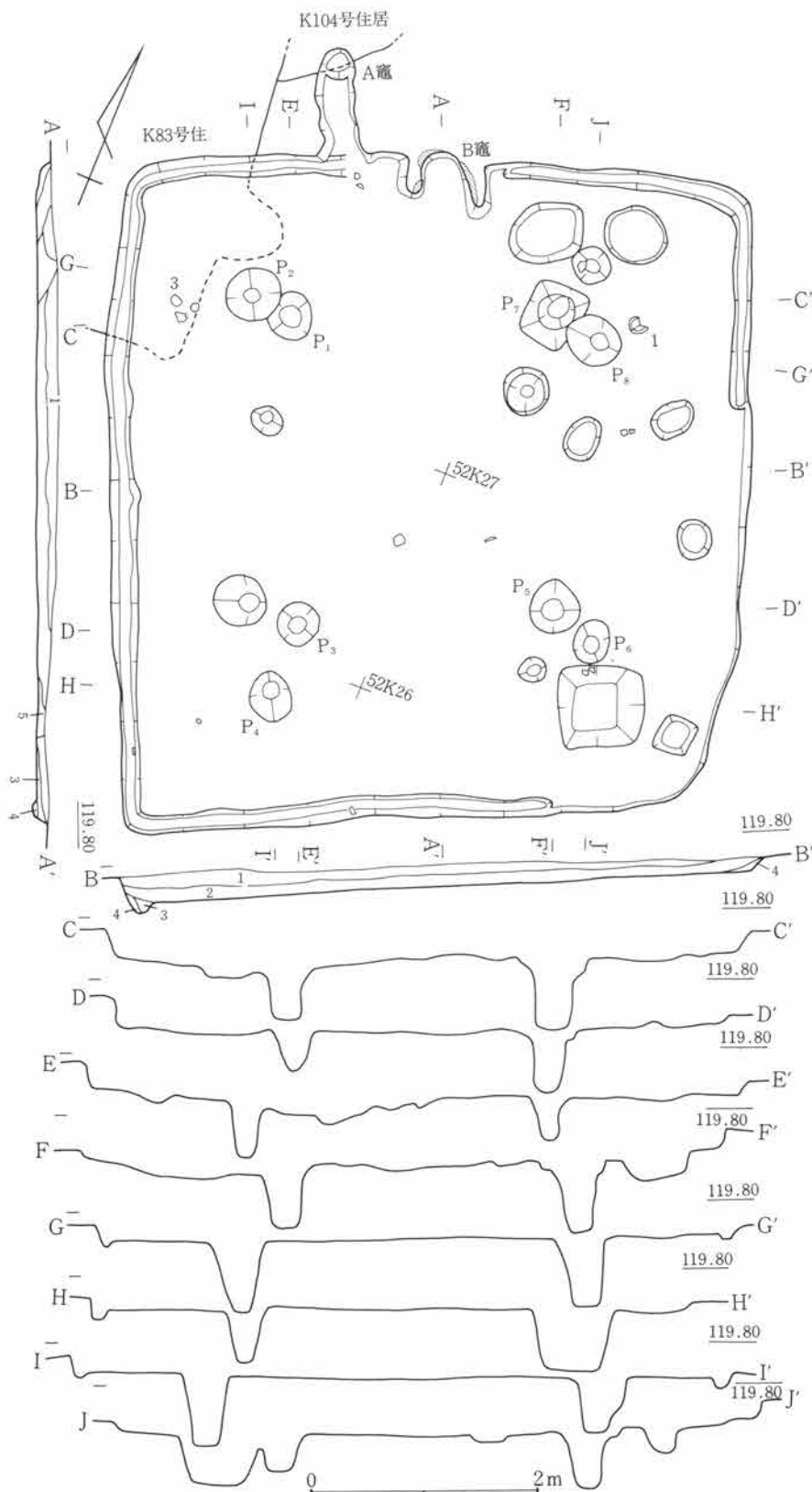


Fig.448 K88号住居跡

K区中央部東寄りに位置し、50~53K25~28の範囲にある。83号住居跡と重複しているが、これよりも古い時期の所産である。壁線は単一で巡るが、竈および柱穴が2軒分検出されていることから当跡は同じ位置での建て替えが行なわれていたと考えられる。拡張かあるいは縮小かについては明らかではないが、ここでは一応拡張と考える。拡張前は柱穴ではP₁・P₃・P₅・P₇で竈はA、拡張後はP₂・P₄・P₆・P₈で、竈はBがそれぞれに帰属しようか。平面形はほぼ正方形を呈するが南・西壁線は歪みもち南西隅は丸味をおびる。壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりの度

K88号住居跡

1. 暗褐色土 C軽石含む。
2. 黒褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒含む。
3. 黒色土 弱粘性土。
4. 黄褐色土 壁崩落土。
5. 黒色土 焼土粒をわずかに含む。

第3章 K区の遺構と遺物

合いは弱い。柱穴はP₁上径40cm・下径16cm・深さ54cm、P₂上径40×36cm・下径12cm・深さ52cm、P₃上径38×30cm・下径22cm・深さ40cm、P₄上径40×30cm・下径14cm・深さ40cm、P₅上径46×42cm・下径20cm・深さ80cm、P₆上径38×30cm・下径22cm・深さ36cm、P₇上径34×46cmで方形を呈し、下径18cm・深さ64cm、P₈上径40cm・下径18cm・深さ80cmを各々測る。柱間はP₁・P₃は2.7m、P₂・P₄は3.46m、P₃・P₅は2.2m、P₄・P₆は2.8m、P₅・P₇は2.26m、P₁・P₇は2.3m、P₂・P₈は3mを測る。壁下の溝は東壁から南壁の一部を除き各壁下に巡る。幅約10cm・深さ約8cmを測る。貯蔵穴は南東隅に設けられ、平面形は方形を呈す。竈はA・Bの2基が検出されているが、A竈は北壁西寄りに、またB竈は煙道部のみで燃烧部などは消失しており、拡張前のものと考えられる。B竈は袖部が住居内に張り出す形態をもち、煙道部は検出されなかった。袖部長さ30~45cm・袖内法35cm、燃烧部奥行き約60cmを測る。出土遺物は少量である。

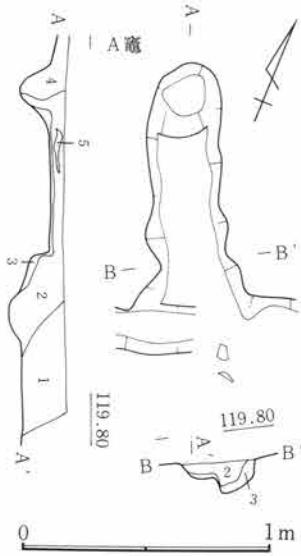


Fig.449 K88号住居跡A竈

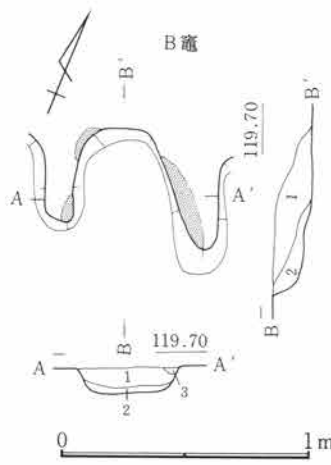


Fig.450 K88号住居跡B竈

K88号住居跡竈

- 1 黒褐色土 白灰色砂質粒を含む。粘性土
- 2 黒褐色土 粘性土。
- 3 黒褐色土 粘性土。
- 4 黒褐色土2層に類似。
- 5 焼土塊

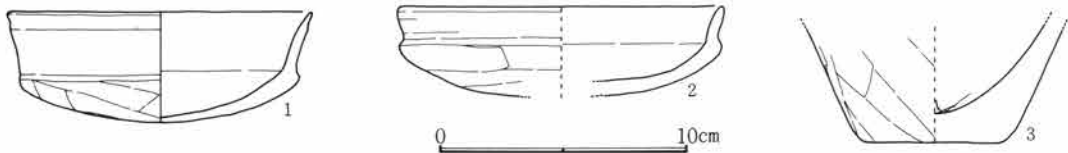


Fig.451 K88号住居跡出土遺物

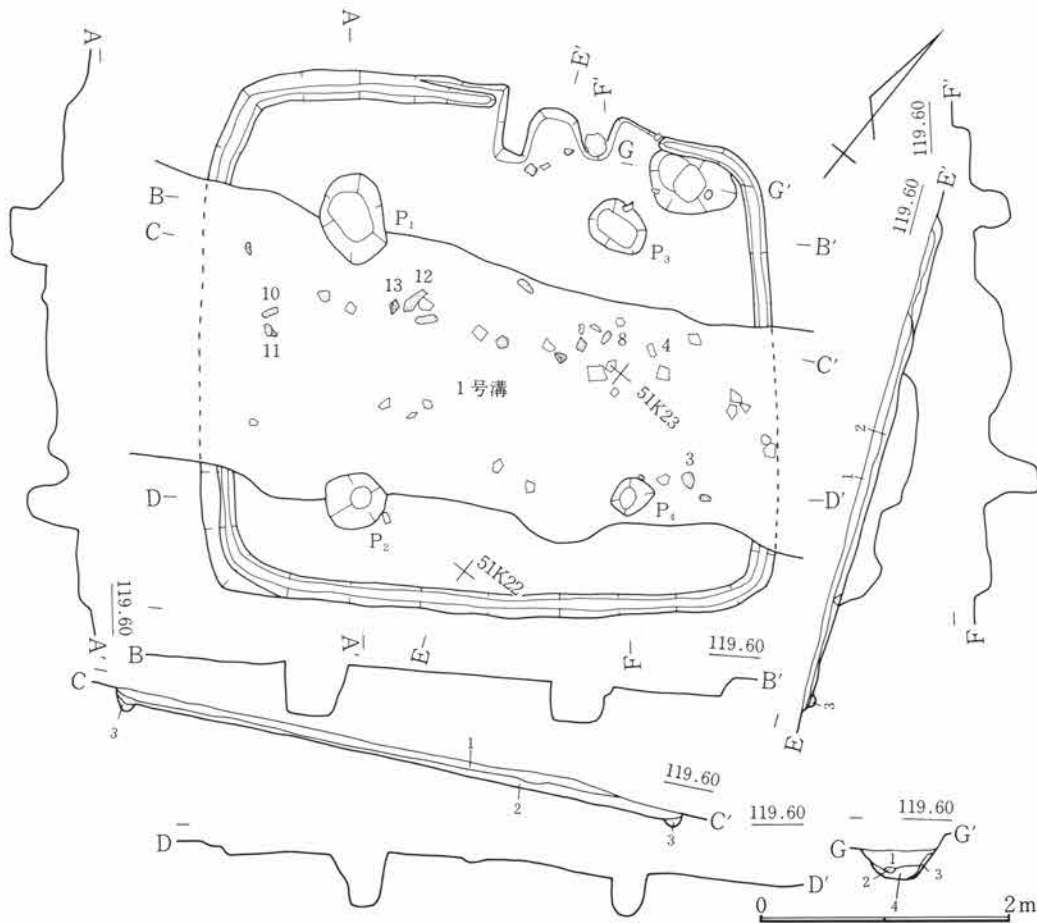
K 88号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
451-1 167-1	土 師 器 杯	1/2	12.2×-×4.5 口径高2.5	北東部床 面	口縁部やや高く、外反気味に外傾する。口唇部くびれて細る。受け部僅かに段をなし肥厚する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密、縞状胎土
451-2 167-2	土 師 器 杯	1/5	13×-×3.5 口径高1.5	床下埋土	全体に肥厚気味。口縁部短かく外傾する。口唇部丸い。受け部段をなし肥厚する。内面黒色処理。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや密
451-3 167-3	土 師 器 甕	底部1/2	-×5.5×(4.7)	北西部床 面	外面縦篋削り。内面篋撫で。底部木葉痕。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗

K89号住居跡 (Fig. 452~454・PL. 168)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.87 × 4.19	N— 59° —E	比壁やや東寄り	楕円形 (75.0 × 46.0 × —)

K区東部中央に位置し、50~52K21~23の範囲にある。東西走る1号溝に中央部を分断され西・東壁の中央および床面は消失している。平面形は東西方向がわずかに長い方形を呈するが、各隅は丸味をもつ。壁高は約14cmを測る。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。北東隅は楕円形の貯蔵穴が穿たれる。また各壁下には明瞭に溝が巡り、幅10cm・深さ6~10cmを測る。柱穴はP₁~P₄の4個が検出されている。P₁は上径70×50cm・下径40×26cm・深さ44cm、P₂は上径48×44cm・下径16cm・深さ44cm、P₃は上径30cm・下径14cm・深さ52cm、P₄は上径48×38cm・下径34×20cm・深さ32cmを測る。また柱間はP₁・P₂間2.26m、P₂・P₃間、P₃・P₄間、P₁・P₄間はともに2.16mを測る。竈は北壁のやや南に寄って付設され、袖部が住居内に張り出す形態をもち、煙道部は検出されていない。左袖長さ約30cmを測る。黄白色粘土塊を混える暗褐色土を主体に構成されるが右袖には凝灰岩の埋設も見られる。出土遺物は土器類が少量である。



K89号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に似る。粘性土少ない。
- 3 暗褐色土

貯蔵穴

- 1 黄褐色土 粘性あり。
- 2 黄褐色粘性土
- 3 黄褐色土塊
- 4 黄褐色土

Fig.452 K89号住居跡

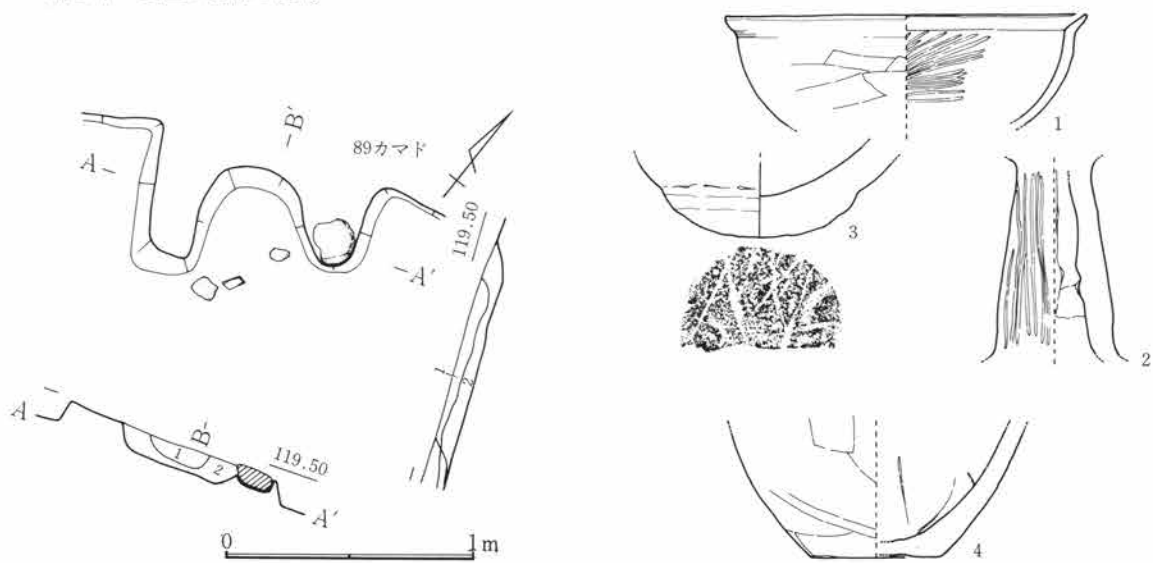


Fig.453 K89号住居跡竈



Fig.454 K89号住居跡出土遺物

K 89号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他					
454-1 168-1	土師器 杯	1/3	14.5×-×(4.5)	埋 土	体部丸く張り、口縁部は強く外屈する。口唇部細る。口縁部横撫で。体部篋削り。内面斜篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密					
454-2 168-2	土師器 高杯	脚胴部 1/2	-×-×(7.8) 脚基部径3	埋 土	脚部下にやや脹らみをもつ。外面縦方向の篋磨き。内面しほり痕あり。	①良好 ②橙 ③密					
454-3 168-3	土師器 甕	底部	-×-×(3.7)	埋 土	底部丸く張り、著しく肥厚する胴部でくびれて胴に至る。腰部横篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③粗、小石混る					
454-4 168-4	土師器 甕	底部1/3	-×5×(5)	埋 土	平底。胴部縦、腰部斜〜横篋削り。内面見込部から上方へ篋撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗					
454-5 168-5	須恵器 甕	口縁部 小片		埋 土	口唇下方に断面三角の鋭い凸帯を有し、凸帯下方は6条の波状文あり。	①良好 ②灰白 ③やや粗					
454-6 168-6	須恵器 甕	口頸部 1/3	21.8×-×(7.5)	埋 土	口縁部外反して立ち上がり、口唇部下位は下方に突出する。口唇部中位で屈して直立する。端部丸い。	①良好 ②灰白 ③やや粗					
454-7 168-7	石	完	長8.8幅4 厚3.1152g	埋 土	ひん岩	454-8 168-8	石	完	長10.5幅5 厚3.6277g	埋 土	輝石安山岩(粗)
454-9 168-9	石	完	長12.4幅4.5 厚3.1240g	埋 土	輝石安山岩(粗)	454-10 168-10	石	完	長11.6幅6.1 厚4.3385g	埋 土	輝石安山岩(粗)
454-11 168-11	石	片端刃 損	長13幅8.8 厚5.6748g	埋 土	閃緑岩	454-12 168-12	石	完	長13.3幅7 厚5.808g	埋 土	輝石安山岩(粗)
454-13 168-13	石	完	長13幅6.8 厚4.602g	埋 土	輝石安山岩(粗)						

K 90号住居跡 (Fig. 455~458・PL. 169・170)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.24 × 4.37	N-92.5°-E	東壁やや南寄り	円形 (70.0 × 70.0 × 20.0)

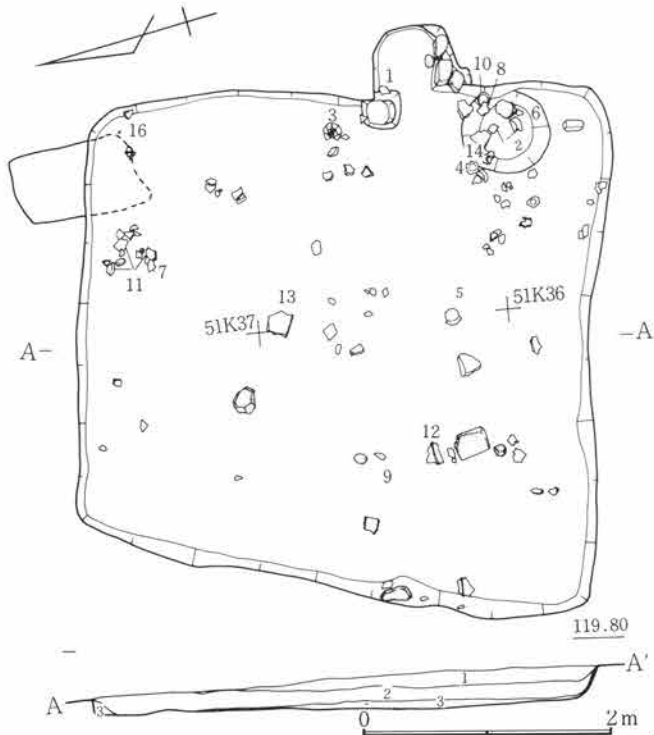
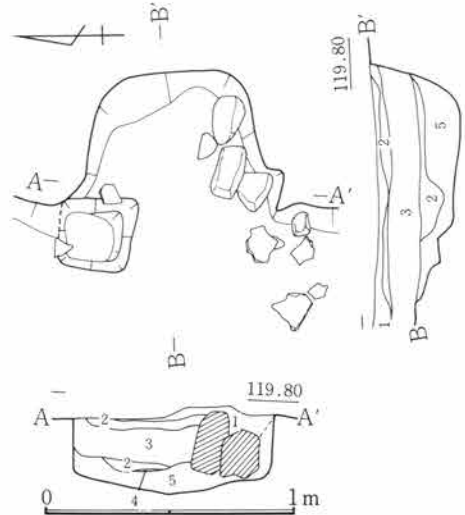


Fig.455 K90号住居跡



K90号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土塊・炭化物含む。
- 2 黒色灰層
- 3 黒色灰層
- 4 火床面
- 5 褐色土 焼土・炭化粒・黄色土塊を含む。

Fig.456 K90号住居跡竈

K90号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土 C軽石が少なくなる
- 3 黄褐色土 粘質土。

K 90号住居跡

K区北東部に位置し、49～52K35～37の範囲にある。99号・100号・106号住居跡、2号墓跡と重複しており、3軒の住居より新しく、墓跡より古い時期の所産である。平面形は北壁が他の壁より短く、西壁が大きく歪み不整な方形を呈する。壁高は約28cmを測る。床面は平坦をなし比較的固く踏み締まる。床下からは大小の土坑状落ち込みが検出され黄白色粘土塊を混じえる暗褐色土で覆い、床面を形成している。貯蔵穴は南東寄りに穿たれ円形を呈する。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。燃烧部右壁沿いに数個の凝灰岩加工材が埋設されている。袖部の構築は認められなかったが左袖部の東壁線上には袖材の埋設痕が検出されている。燃烧部幅約50cm・奥行き60cmを測る。出土遺物は灰釉・緑釉陶器・鉄器・銅製丸靱などが検出されている。

K 90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
457-1 169-1	土 師 器 杯	1/4	12.4×-×3.5	竈 内	腰部丸く、体部直線的。器肉薄くとくに底部は薄い。体部斜位筥撫で。底部しぼり状の痕跡。	①良好 ②褐 ③密
457-2 169-2	須 恵 器 杯	1/2	13.4×5.5×4.2	貯蔵穴内	腰部にやや丸味をもち、口唇部丸く外屈気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 砂混る

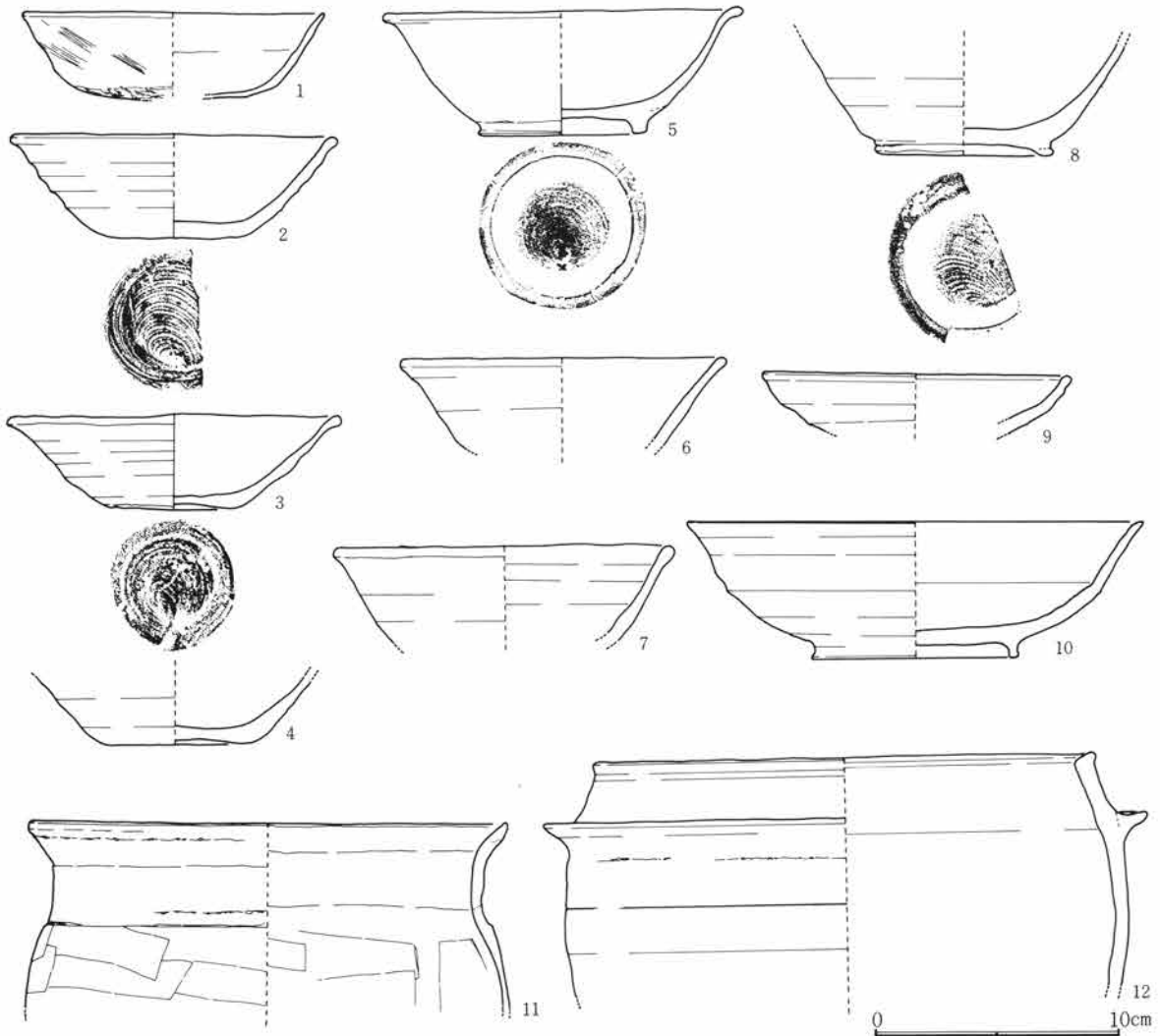


Fig.457 K90号住居跡出土遺物(1)

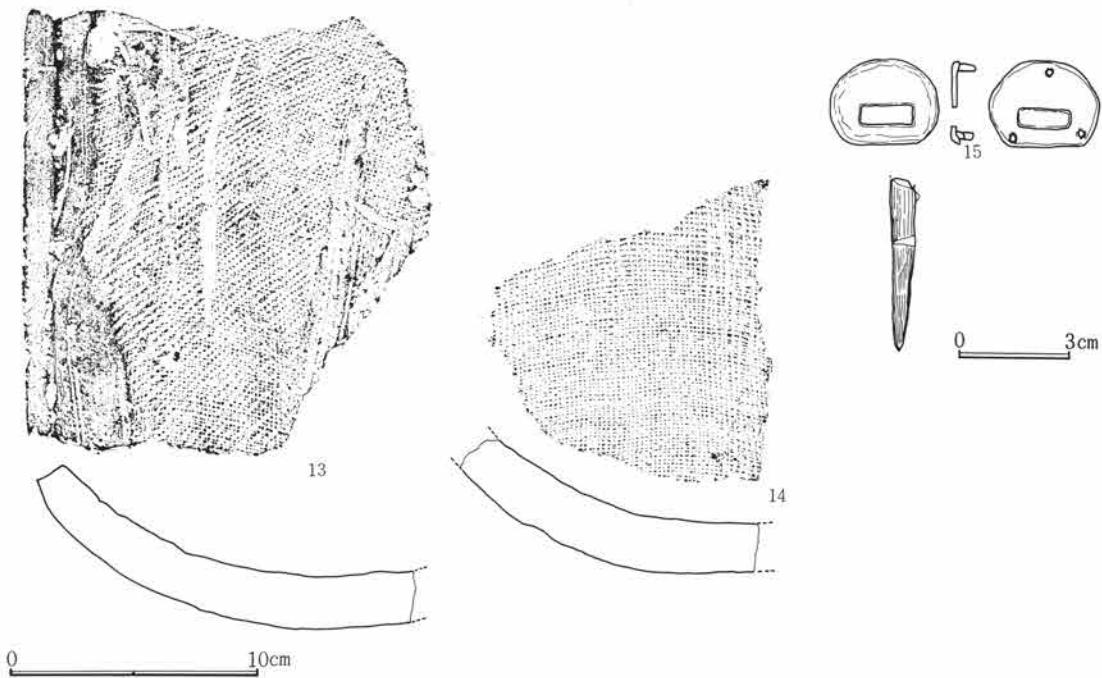


Fig.458 K90号住居跡出土遺物(2)

K 90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
457-3 169-3	須 惠 器 杯	ほぼ完	13.6×5×4	東中央部床 面	底部小さく、大きく開く体部。口唇部丸く肥厚し、外屈。 轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密
457-4 169-4	須 惠 器 杯	底部 $\frac{1}{2}$	—×6×(2.7)	貯蔵穴際 床面	腰部やや肥厚し丸味をもつ。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③ 粗 砂混る
457-5 169-5	須 惠 器 碗	$\frac{1}{2}$	14.7×6.9×5	南中央部床 面	体部に丸味をもち口縁部は大きく弧をもって外屈する。付 高台、断面四角直に立つ。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密
457-6 169-6	須 惠 器 碗(?)	$\frac{1}{2}$ 底 部欠損	13.4×—×(4.7)	貯蔵穴内	体部直線的で口唇部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
457-7 169-7	須 惠 器 碗(?)	$\frac{1}{2}$ 底 部欠損	14×—×(3.8)	北中央部床 面	体部にやや丸味があり、口唇部肥厚して丸まる。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
457-8 169-8	須 惠 器 碗	底部 $\frac{1}{2}$	—×7.3×(4.7)	貯蔵穴内	腰部肥厚し、丸味をもつ。付高台、低く断面L字状。轆轤 成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密
457-9 170-9	灰釉陶器 皿	$\frac{1}{2}$ 底 部欠損	12.5×—×(2.5)	西中央部埋 土	体部中位で緩く屈する。口唇部丸まる。全体に肥厚、腰部 回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
457-10 170-10	緑釉陶器 碗	$\frac{1}{4}$	18.5×8.5×5.5	貯蔵穴際 床面	内湾気味の腰部から中位で明瞭に屈し直線的に外傾する。 口唇部尖る。付高台、全面施釉、見込部にトチン痕。	①良好 ②浅黄 ③ 密
457-11 170-11	土 師 器 壺	口縁部 $\frac{1}{2}$	19.6×—×(7.5)	北中央部床 面	口縁部直立した後内湾気味に外傾するコの字口縁。口縁部、 体部外面横篋削り、内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③や や密
457-12 170-12	羽 釜	上半部 $\frac{1}{2}$	20.4×—×(9.5) 鐙径24.6 口縁高2.5	南西部埋 土	胴部やや張り、鐙は僅かに上向き。口縁内傾して立ち口唇 部は外へ突出する。上端面内斜。胴部回転撫で調整。	①酸化 良好 ②橙 ③やや粗
458-13 170-13	瓦 平 瓦		厚2.2	中央部埋 土	凹面布目。摸骨痕。布引き痕あり。凸面圧痕。篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密縞状
458-14 170-14	瓦 平 瓦		厚2.4	貯蔵穴内	凹面布目、凸面撫で。	①良好 ②灰白 ③ 粗
458-15 170-15	銅 製 品 丸 柄		2.8×2.2×0.15	床 下	長方形透し。 鋸3ヶ所	
458-16 170-16	鉄 製 品 不 明		4.5×0.6×	北東部床 面	利器か? 木質残る。	

K91号住居跡 (Fig. 459~462・PL. 170・171)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.50 × 2.96	N— 94° —E	東壁南寄り	楕円形 (60.0 × 48.0 × 18.0)

K区東部北寄りに位置し、49・50 K30~32の範囲にある。85号住居跡と重複しており、これよりも古い時期の所産である。平面形は南北軸がやや長い方形を呈するが南西部が歪む。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。貯蔵穴は南東隅に穿たれ、平面形は楕円形を呈す。竈は東壁の南寄りに付設され、前面には灰・焼土の混る層が広く流出する。燃烧部は先細りで方形気味に掘り込まれ、先端部は短く凹状になり煙出し孔と考

えられる。袖部は凝灰岩の加工材が東壁線やや内側に埋設される。袖部内法・燃烧部奥行き約50cm、煙出し孔は燃烧部より約20cmほど突出する。出土遺物は竈周辺に多く検出されている。

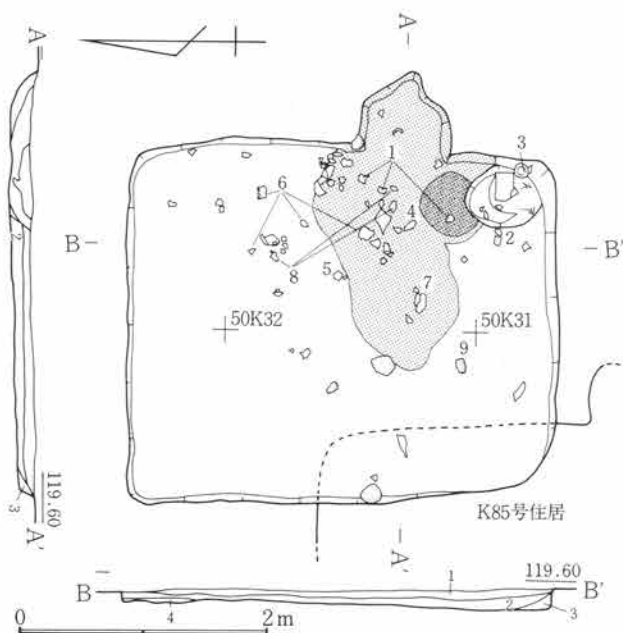


Fig.459 K91号住居跡

K91号住居跡

- 1 褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 2 褐色土 1層に似る。土器片含む。
- 3 褐色土 土黄褐色粘性土塊を多く含む。
- 4 褐色土 貼床。

K91号住居跡竈

- 1 暗茶褐色土 焼土含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化物・焼土粒混入。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒を含む粘性土。
- 4 褐色土 粘性土。
- 5 灰黒色土 炭層。
- 6 焼土 天井側部の崩落。
- 7 暗褐色土
- 8 焼土塊

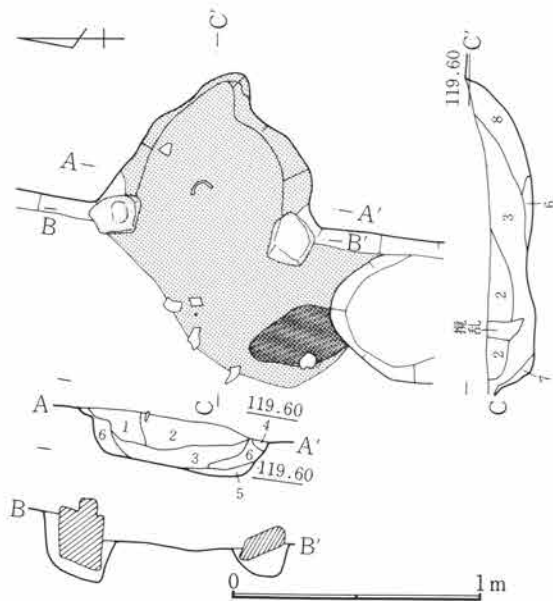


Fig.460 K91号住居跡竈

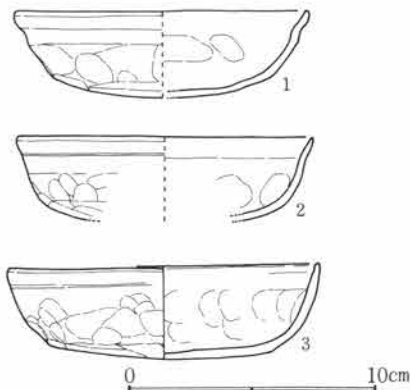


Fig.461 K91号住居跡出土遺物(1)

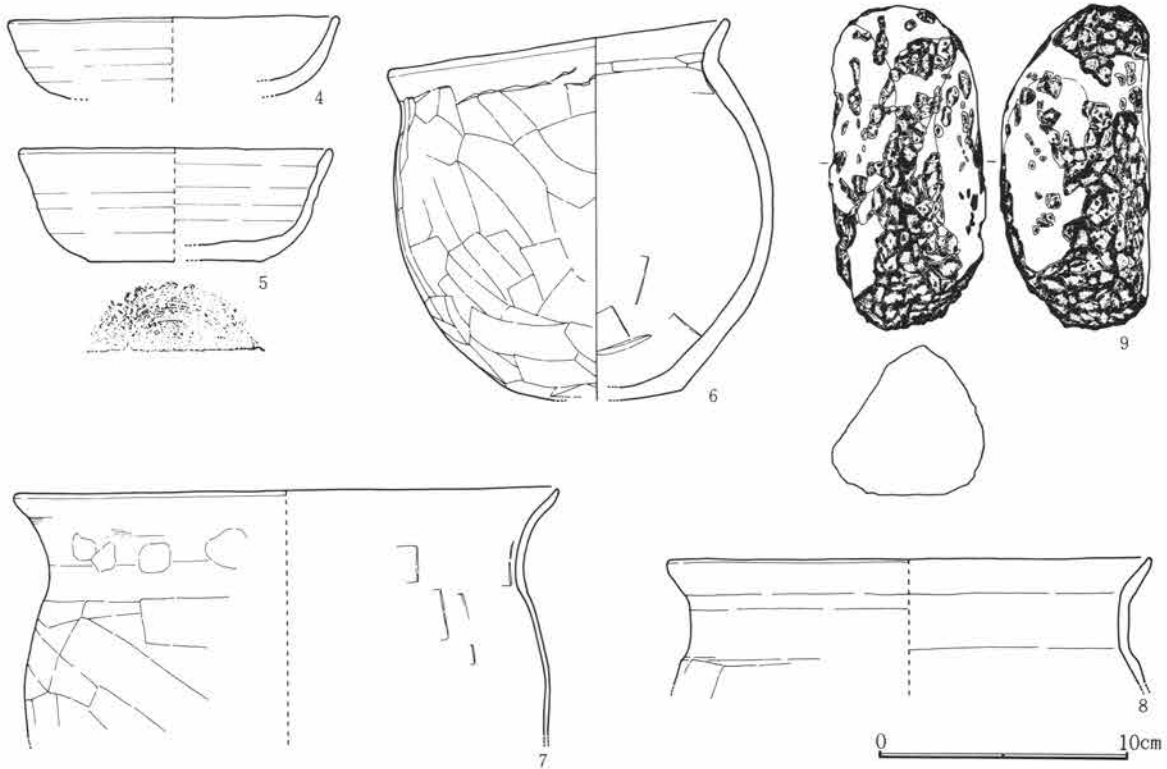


Fig.462 K91号住居跡出土遺物(2)

K 91号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 器	種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
461-1 171-1	土 師 器 杯	杯	1/4	11.8×-×3.5	竈前床面	体部上半で屈して外反。口縁部内湾する。底部やや丸味。口縁部、体部指頭・篋削り。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密 輝性黒色針状混る
461-2 171-2	土 師 器 杯	小片		12.0×-×(3.5)	貯蔵穴際 埋土	腰部丸く張り、口縁部は内湾気味に外傾する。口唇部尖る。口縁部横撫で。体部指頭。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密 黒色粒混る
461-3 171-3	土 師 器 杯	完		12.6×9×3.7	南東壁際 埋土	体部張り気味。口唇部僅かに内屈。底部平底気味。口縁部横撫で。体部指頭顕著。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密
462-4 171-4	須 恵 器 杯	杯	1/4	13.3×-×(3.2)	竈前床面	腰部丸い。口唇部丸まる。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や密 白色粒多い
462-5 171-5	須 恵 器 杯	杯	1/4	12.7×7×4.5	中央部埋 土	腰部張り深い体部で直線的に立ち上がる。口唇部やや肥厚する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗 黒色粒混る
462-6 171-6	土 師 器 甕	底部欠 損		14.0×7×15.0 胴部径15.2	中央・東 部床面	胴部強く張り球形を呈す。口縁部短くくの字状に外屈。胴部斜篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗 輝性白色粒混 る
462-7 171-7	土 師 器 甕	1/4 下 位欠損		22.0×-×(9.8) 胴部径21	中央部床 面	胴部張り少ない。口縁部僅かに外傾して立ち上がり上半は内湾気味に外反、器肉薄い。だれたコの字口縁。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗 砂混る
462-8 171-8	土 師 器 甕	1/4 口縁部		19.4×-×(5.0)	竈前・東 部床面	肩部に僅かな段をなし、口縁部直立した後上半で外屈するコの字口縁。口縁部横撫で、肩部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密 細砂混る
462-9 171-9	石			12.9×6.2×6.0 687g	南西部埋 土	全面に荒い打撃調整痕。	石英閃緑岩

K92号住居跡 (Fig. 463~465 • PL. 171 • 172)

K区北端に位置し、60~63K38・39の範囲にある。北半部は調査区域外に延び未検出である。また南西部隅は13号溝によって消失している。このため平面形は明らかではないが方形を呈すると考えられる。東西軸は6.1mを測り、南北は3.1mの範囲まで検出している。南壁を基軸にした東西軸方位は西へ17°程度振れている。壁高は約16cmを測る。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりも良好である。貯蔵穴は南東隅に設けられ、平面形は方形を呈し南北70cm・東西66cm・深さ46cmを測る。柱穴はP₁とP₂の2個が検出され、P₁は上径50×40cm・下径14cm・深さ46cm、P₂は上径54×40cm・下径20×12cm・深さ38cmを測る。P₁とP₂の柱間は3.6mである。出土遺物は南東部の貯蔵穴内やその周辺に多く、土師器杯・高杯などが検出されている。



Fig.463 K92号住居跡

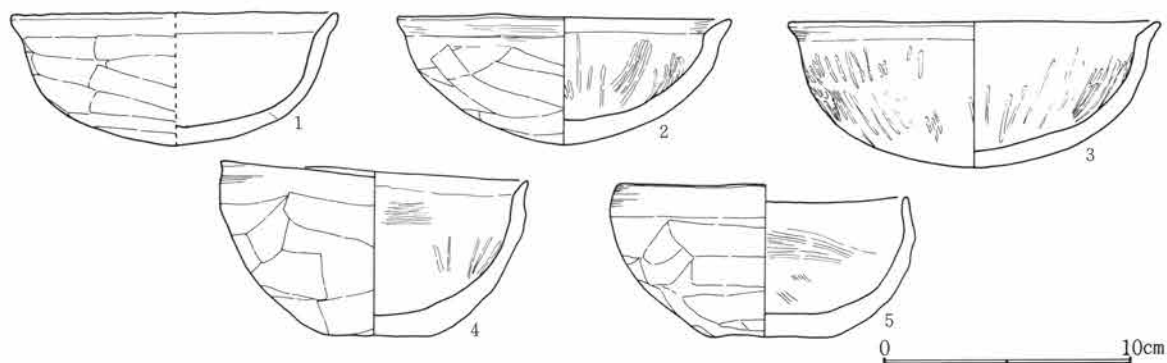


Fig.464 K92号住居跡出土遺物(1)

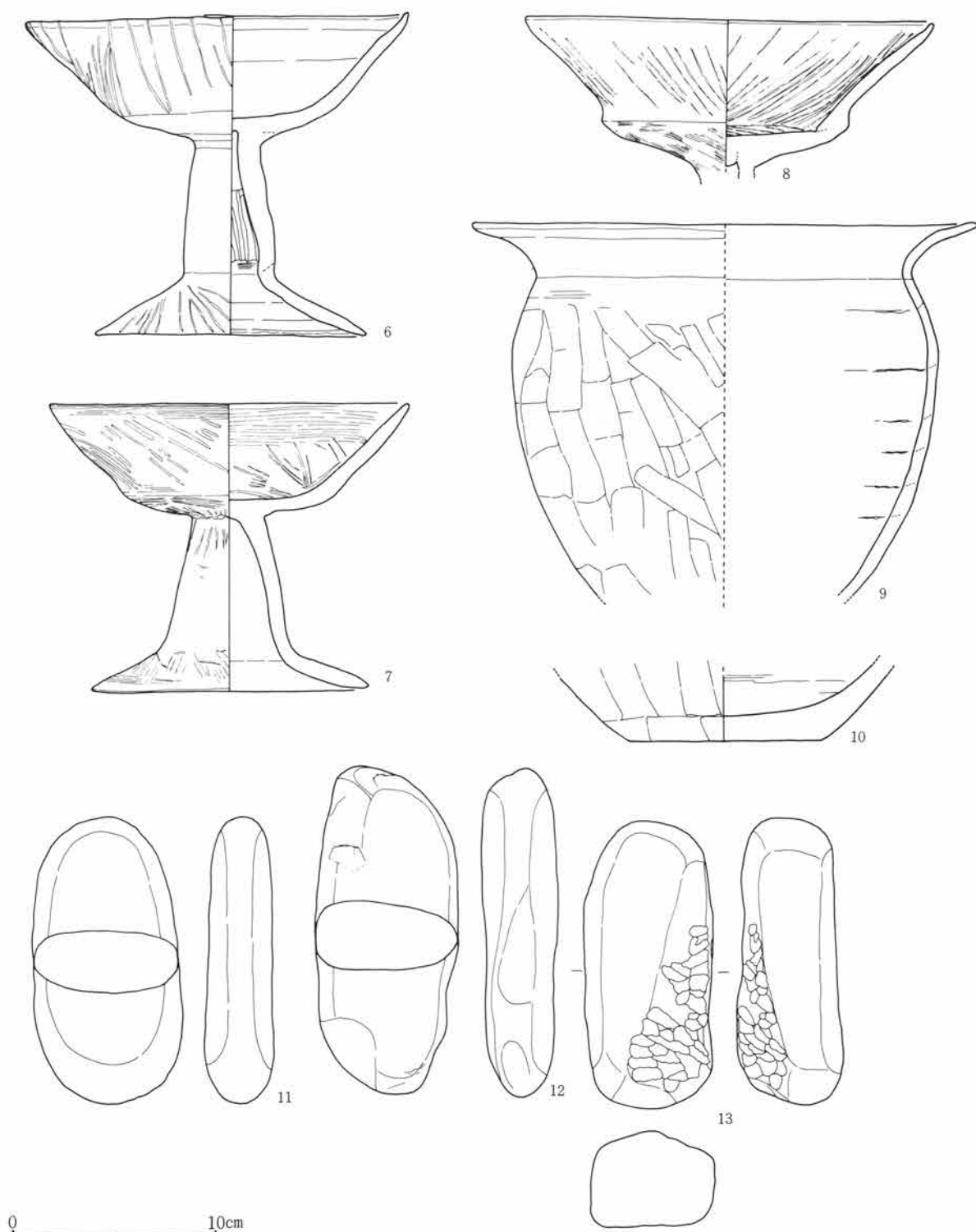


Fig.465 K92号住居跡出土遺物(2)

K 92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
464-1 172-1	土師器 杯	1/3	13.2×-×5.2	西部床面	体部丸く張り、口縁部外屈する。丸底、体部・底部篋削り。内面見込部に布目圧痕。	①良好 ②明赤褐 ③やや密

第3章 K区の遺構と遺物

K 92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
464-2 172-2	土師器 杯	完	13.4×—×5.0	貯蔵穴内	丸底。口縁部強く外屈するが内面明瞭に段をなす。全体に肥厚。口縁部横撫で。底部篋削り。内面放射状篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
464-3 172-3	土師器 杯	3/4	15.0×—×5.8	貯蔵穴内	丸底。口縁部強く外屈し、口唇部細る。全体に肥厚する。外面篋削り後放射状篋磨き。内面放射状篋磨き。	①良好 ②明赤褐 ③密
464-4 172-4	鉢	完	12.3×4.3×6.5	貯蔵穴内	小径の平底。体部丸く、口縁部小さく外屈する。口唇部細る。全体に肥厚。口縁部横撫で。体・底部篋削り。内面放射状の篋磨き痕。	①良好 ②橙 ③やや密 砂混る
464-5 172-5	土師器 鉢	完	11.6×4.5×6.0	南部床面	小径の平底。体部丸く張り、口縁部は直線的に内傾する。口縁部横撫で。体・底部篋削り。内面篋磨で。	①良好 ②橙 ③やや粗 細砂混る
465-6 172-6	土師器 高杯	完	18.8×13.3×15.3 脚高 9.5	貯蔵穴際 床面	杯部腰張り、大きく開いた後口縁部は内湾気味に開く。脚部下位やや脹らみ、袖はハの字状に大きく開く。杯部・袖部篋磨き。脚内面縦方向の篋による掻き取り痕。	①良好 ②橙 ③やや密
465-7 172-7	土師器 高杯	完	17.5×13.5×13.8 脚高 8.8	貯蔵穴際 床面	杯部底部平ら、腰部丸味をもって張る。体部直線的に開く。脚部下方やや脹らみ袖部ハの字状に開く。内外面篋状工具による掻き目。	①良好 ②明赤褐 ③やや密 細砂混る
465-8 172-8	土師器 高杯	杯部3/4 脚欠損	20×—×(7.2)	貯蔵穴内	腰部に明瞭な段をなし、僅かに外反して開く体部から口縁部は短く内湾気味。内外面放射状篋磨き。腰部篋磨で。	①良好 ②明赤褐 ③密
465-9	土師器 甕	3/4 底部欠損	24.6×—×(18) 胴部径20.8	貯蔵穴内	胴部張り、口縁部強く外反して開く。最大径は口縁部にある。胴部縦方向篋削り。内面紐造痕顕著。紐幅1.5~2.5cm。	①良好 ②暗赤褐 ③粗 小石混る
465-10 172-10	土師器 甕	底部	—×9.4×(3.8)	南西部床面	平底、全体に肥厚。胴部縦・腰部横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
465-11 172-11	石	完	13.9×7.4×3.4 503g	南東部床面		輝石安山岩(粗粒)
465-12 172-12	石	完	15.8×7.0×3.8 637g	P ₂ 際床面		砂岩
465-13 172-13	石	完	13.9×6.4×5.2 713g	北央部床面	1側面打撃調整痕 調整痕	溶結凝灰岩

K 93号住居跡 (Fig. 466~470・PL. 173~175)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
	4.30 × 3.18	N-123°-E	東壁やや南寄り	楕円形 (60.0 × 50.0 × 44.0)



K 93号住居跡

K区北西部に位置し、66~68K 32~34の範囲にある。103号・105号・111号住居跡と重複しているが、これらよりも新しい時期の所産である。住居跡の西側は調査区域外に延び、全体の検出には至っていない。平面形は方形を呈すると考えられるが南・北の壁線が斜めに傾き、平行四辺形をなす。南北長さは約3.6mを測

K93号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土1層に似る。弱粘性。
- 3 暗褐色土 C軽石含む。
- 4 黄色粘性土 黒色土混る。

Fig.466 K93号住居跡

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

り、東西は東壁より約3.7mまで確認された。竈を基軸とした東西方向はN-123°-Eを示す。壁高は約24cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、南壁沿いは踏み締まりが弱く、一部で床下まで達してしまった箇所もある。貯蔵穴は南東隅に設けられ、平面形は円形を呈し径60×50cm・深さ44cmを測る。貯蔵穴を含んで南東部は南壁に沿う形で不整形に落ち込む。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。袖部は東壁線上に凝灰岩の加工材が、また燃烧部中央には同質の円柱状支脚が埋設される。袖部内法約50cm、燃烧部奥行き約75cmを測る。出土遺物は多く、とくに竈及び貯蔵穴周辺に集中してみられ、巻き上げ痕を明瞭に残した土師器杯・足高の高台付椀などの検出が目立つ。

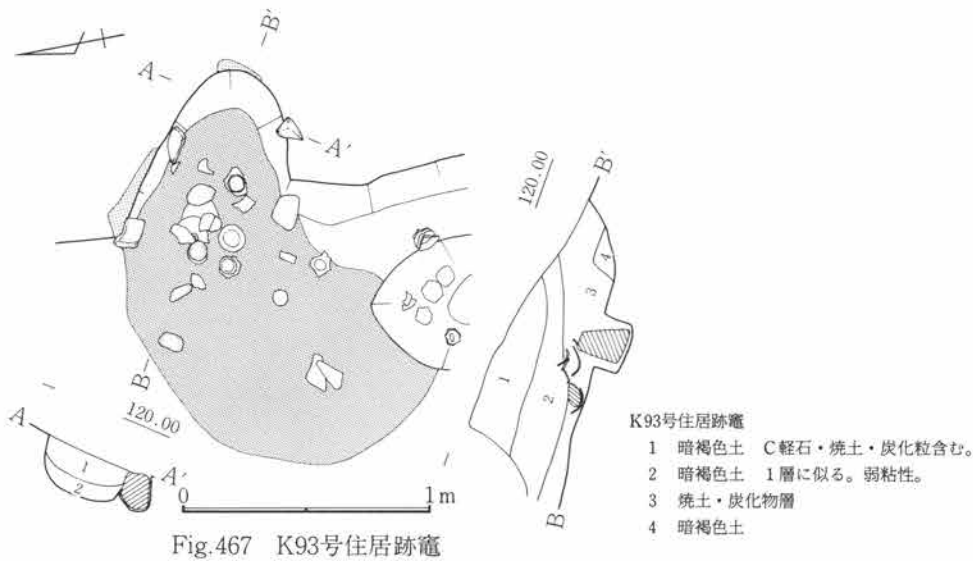


Fig.467 K93号住居跡竈

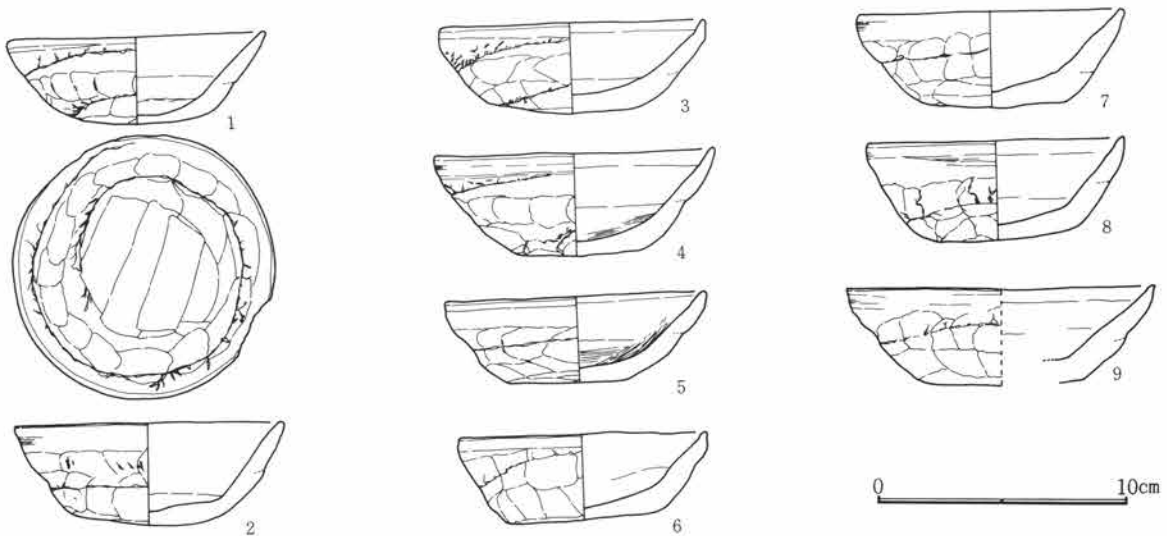


Fig.468 K93号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

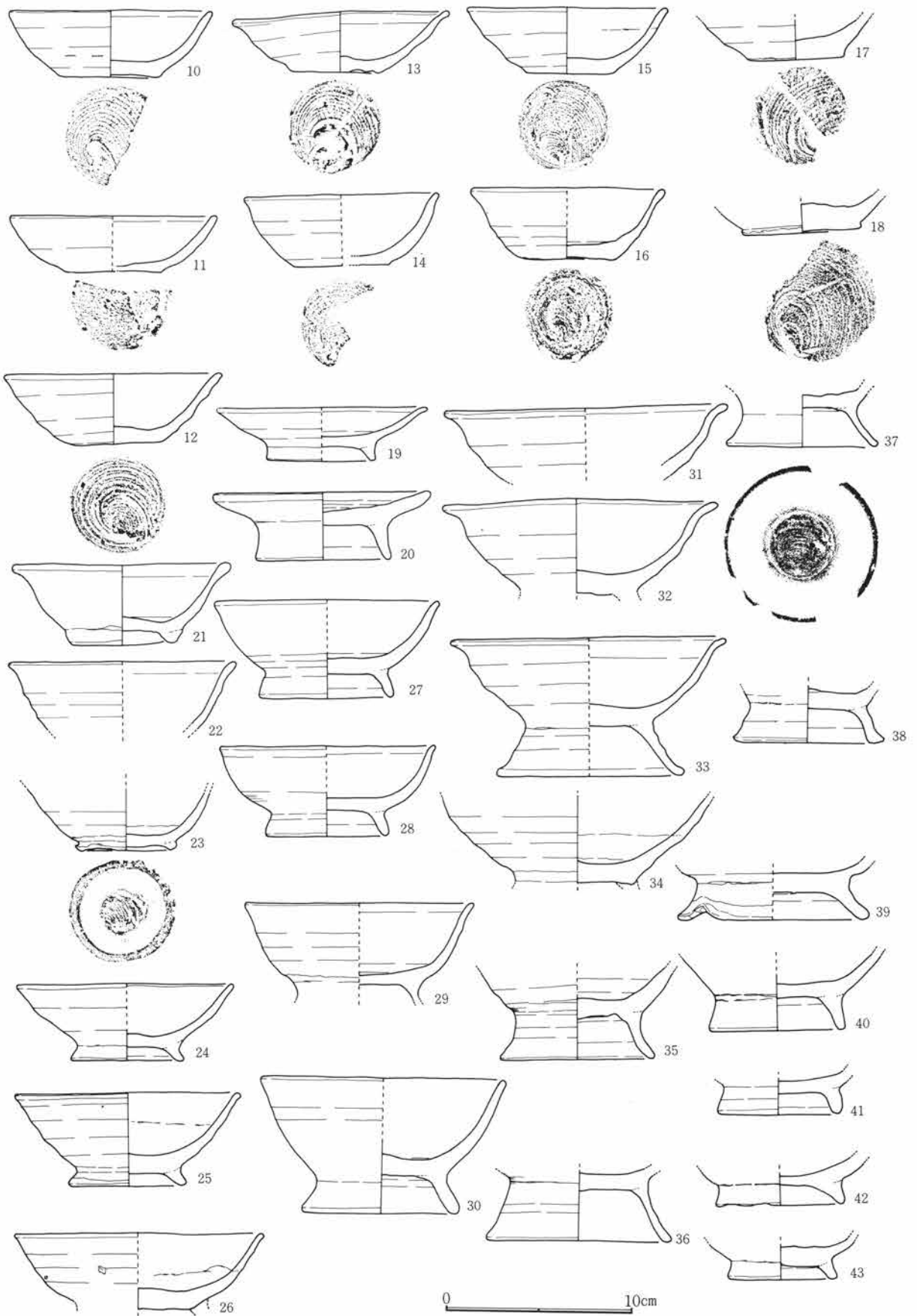


Fig.469 K93号住居跡出土遺物(2)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

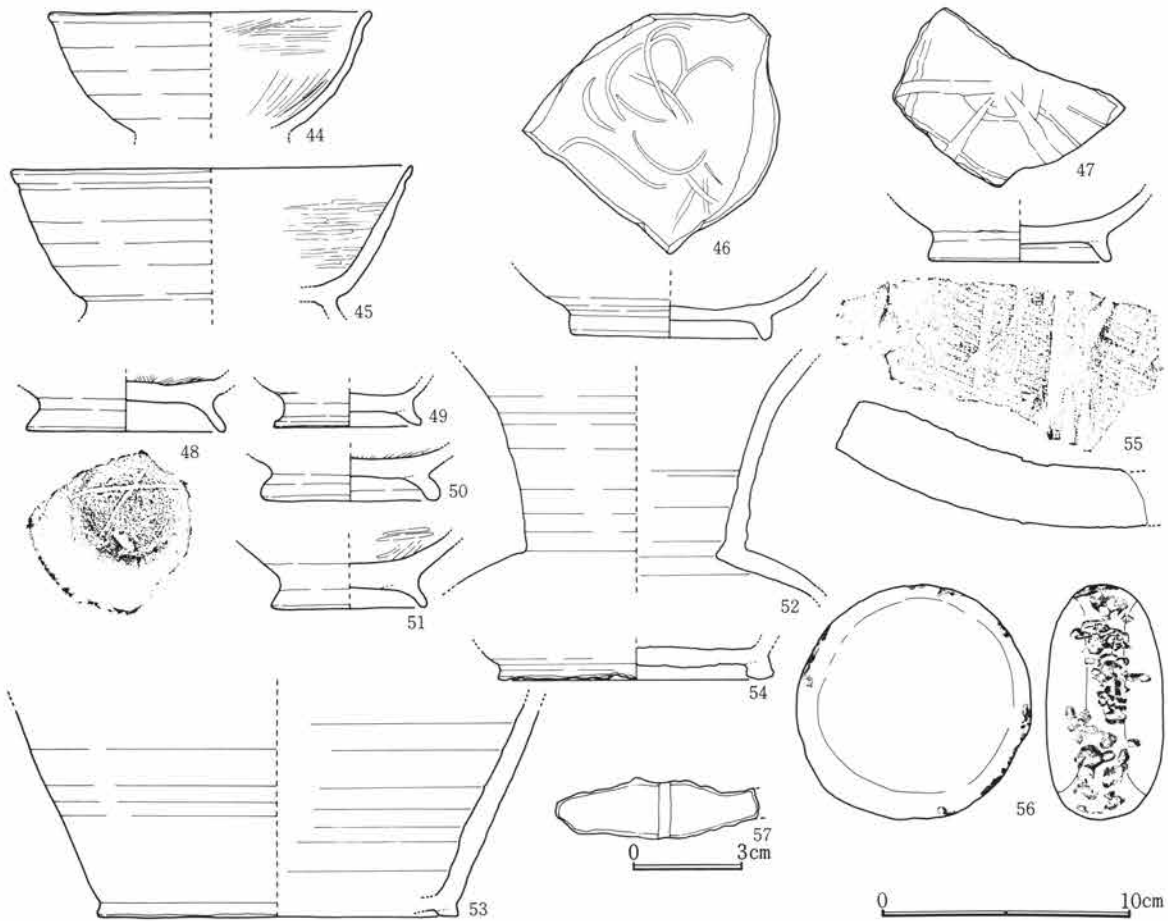


Fig.470 K93号住居跡出土遺物(3)

K 93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
468-1 173-1	土師器 杯	完	10.4×-×3.5	竈内	腰部丸く体部直線的。丸底気味。体部2巻3段の巻き上げ成形。体部強い指頭痕。底部一方向の篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 砂混る
468-2 173-2	土師器 杯	⅔	10.7×-×4	竈内	腰部に丸味。体部直線的。底部やや丸い。体部2巻3段の巻き上げ成形。内面・口縁部横撫で。体部強い指頭痕。底部一方向の篋削り。	①やや軟 ②鈍い橙 ③密
468-3 173-3	土師器 杯	完	10.7×-×3.7	貯蔵穴際 床面	腰部に丸味。口縁部短く屈して直立気味に立つ。体部2巻3段の巻き上げ成形。内面・口縁部横撫で。体部指頭痕。底部一方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
468-4 173-4	土師器 杯	完	10.4×5×4	北東部床 面	腰部に丸味。体部中位でくびれ、上半は内湾気味。体部2巻3段巻き上げ。内面・口縁部横撫で。体部上半指頭痕。下半～底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
468-5 173-5	土師器 杯	完	10.6×4.5×3.5	埋土	体部中位くびれ、上半部は内湾気味。体部2巻3段巻き上げ。口縁部横撫で・内面撫で、体部指頭痕。腰～底部篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密 見込部に油煙状付着物
468-6 173-6	土師器 杯	⅓	10.1×5.5×3.3	掘形埋土	体部中位くびれをもち、口縁部短く直立する。平底気味。体部2巻3段巻き上げ成形。内面・口縁部横撫で、体部指頭痕。腰～底部篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③密
468-7 174-7	土師器 杯	⅓	10.7×5.0×3.8	貯蔵穴際 床面	口縁部はわずかにくびれて細り丸まる。体部2巻3段の巻き上げ成形。内面・口縁部横撫で。体部指頭痕。腰部篋削り。底部平底気味で一方向の篋削り。	①やや軟 ②橙 ③やや密
468-8 174-8	土師器 杯	⅓	10.4×5.5×4	貯蔵穴際 床面	腰部やや角をなし、体部中位でわずかにくびれる。口縁部は短く直立気味。体部2巻3段巻き上げ成形。底部に巻き上げ痕あり。内面・口縁部横撫で。体部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密

第3章 K区の遺構と遺物

K 93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
468-9 174-9	土師器 杯	底 部欠損	12.4×6.5×(3.8)	北西部床 面	体部中位にくびれ、口唇部は尖り外屈。体部2巻3段巻き上げ成形。内面・口縁部横撫で。体部中位指頭痕、下半笠削り。	①良好 ②鈍い褐色 ③やや密
469-10 174-10	土師器 杯	質	11.0×5.5×3.5	竈内	腰部くびれ、体部中位に丸味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③密 夾雑物混る
469-11 174-11	土師器 杯	質	11.0×5.0×3.0	中央部埋 土	腰部僅かにくびれ、体部に丸味。底部薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③粗 夾雑物混る
469-12 174-12	土師器 杯	質 完	11.7×5×3.7	竈内	体部轆轤痕顕著。口唇部が僅かに外屈、口唇部に油煙状付着物。見込部うず巻痕。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗 小石混る
469-13 174-13	土師器 杯	質	11.6×4.7×3.2	貯蔵穴内	体部やや開き大きく、口縁部外反気味。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗 白色粒混る
469-14 174-14	土師器 杯	質	10.4×5×3.7	竈内	体部に丸味をもち、口縁部はくびれて外反気味。器肉肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 小石混る
469-15 174-15	土師器 杯	質 完	10.8×4.5×3.5	竈内	体部にやや丸味。口縁部外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密 白色粒混る
469-16 174-16	土師器 杯	質 体部欠損	10.5×4.5×3.8	南西部埋 土	体部やや深く、口縁部僅かに外傾。口唇部丸い。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
469-17 174-17	土師器 杯	質 底部	—×5×(2)	北中央部埋 土	底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密 白色粒混る
469-18 174-18	土師器 杯	質 体部欠損	—×6.5×(1.8)	中央部埋 土	底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
469-19 174-19	土師器 皿	質	11.2×5.8×2.8	埋土	腰部僅かに丸味。口縁部緩く外反する。付高台、直立し、端部少し開く。轆轤成形。	①やや軟 ②鈍い橙 ③密
469-20 174-20	土師器 皿	質	11.6×7.2×3.5	南中央部埋 土	皿部残く肥厚する。付高台、高く、僅かにハの字状に開く。	①良好 ②橙 ③やや密 茶色粒混る
469-21 174-21	須恵器 椀	質 完	11.8×5.5×4.3		口縁部僅かに外反。口唇部肥厚し丸まる。付高台、端部丸く作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
469-22 174-22	須恵器 椀	質 底 部欠損	12.2×—×(3.6)	貯蔵穴内	体部に丸味。口縁部緩く外反。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③粗 砂多い
469-23 174-23	須恵器 椀	質 底 部	—×5.5×(5.5)	竈前床面	腰部丸味、付高台、高台低く、作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 良好 ②鈍い橙 ③やや密
469-24 174-24	土師器 椀	質 体部欠損	11.6×6.0×4.1	南西部堀 土	体部やや大きく開く。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや粗 白色細粒混る
469-25 174-25	土師器 椀	質	12.1×6.3×5.0	竈内	腰部丸く、体部直線的。口唇部丸く僅かに外反。底部肥厚、付高台、肥厚しハの字状に開く。轆轤成形。内面接合痕あり。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
469-26 174-26	土師器 椀	質 高 台欠損	13.4×—×(4.0)	貯蔵穴際 床面	体部中位で僅かに張る。口唇部丸い。底部肥厚する。付高台欠損。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密 白色細粒混る
469-27 174-27	土師器 椀	質 体部欠損	12×7.2×5.2 高台高 1.3	貯蔵穴内	体部丸味をもち、口縁部は緩く外反する。付高台、肥厚し高く、内湾気味に開く。轆轤成形。	①良好 ②にぶい橙 ③やや粗
469-28 174-28	土師器 椀	質	16×6.6×4.8 高台高 1.4	南中央部床 面	腰部張り気味で、体部丸い。口縁部緩く外反。付高台、高く、内湾気味に開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや密
469-29 174-29	土師器 椀	質 高 台欠損	12.2×—×(5)	貯蔵穴	腰部丸く、体部直線的に立ち上がり、口縁部は緩く外反。内外面撫し処理。付高台。端部欠損。轆轤成形。	①良好 ②黒灰 ③やや粗
469-30 174-30	土師器 椀	質 体部欠損	13.2×8.4×7.2 高台高 2	貯蔵穴際 床面	腰部張り少なく、体部丸味をもってそのまま立ち上がる。付高台、高く肥厚しハの字状に開く。轆轤成形。端部丸い。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 夾雑物混る
469-31 175-31	土師器 椀	質 体部欠損	15.2×—×3.5	竈内	口縁部大きく外反。口唇部丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②橙 ③やや密 白色細粒混る
469-32 175-32	土師器 椀	質 高 台欠損	14.7×—×(5)	竈内	体部丸味をもち、口縁部大きく外反。付高台、高台部欠損。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや粗 小石混る
469-33 175-33	土師器 椀	質	14.6×10×7.3 高台高 2.6	貯蔵穴内	体部丸く、口縁部大きく開く。口唇部内面段あり、付高台、高くハの字状。端部水平に近く開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや密
469-34 175-34	土師器 椀	質 体 部	—×—×(4.5)	北東部床 面	口縁部は故意に欠くか？ 体部外面轆轤目強い。付高台、欠損。回転糸切り。	①良好 ②鈍い褐色 ③やや密
469-35 175-35	土師器 椀	質 体部欠損	—×8.2×(4.7) 高台高 2.2	埋土	腰部張りない。付高台、高く垂直の後大きく開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗 白色粒混る
469-36 175-36	土師器 椀	質 体部欠損	—×10×(3.8) 高台高 2.6	竈内	付高台、高く、ハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②橙 ③密
469-37 175-37	須恵器 椀	質 体部欠損	—×8×(3.1) 高台高 2.1	貯蔵穴際 床面	付高台、高く、ハの字状に大きく開く。端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 砂混る

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

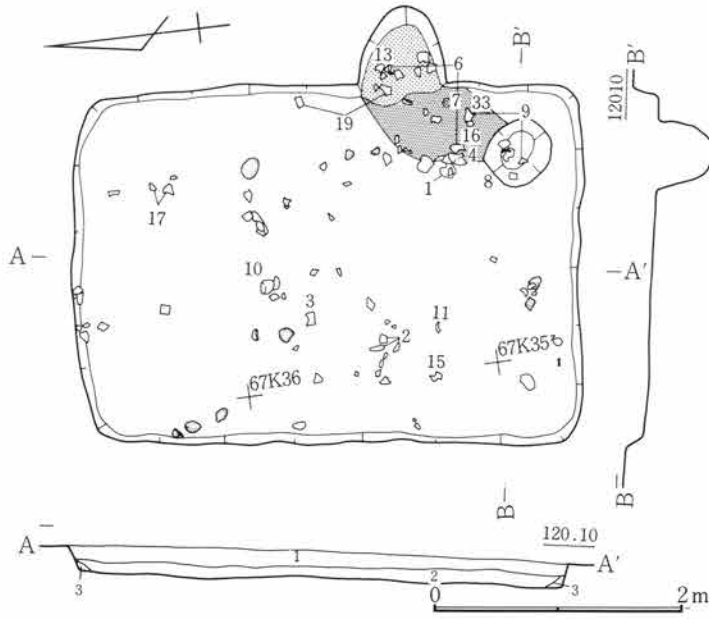
K 93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
469-38 175-38	土 師 質 碗	体部欠 損	—×7.4×(3) 高台高 1.8	南央部埋 土	付高台、高く、内湾気味に開く。端部下面は幅広。畳付に凹線巡る。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗 砂混る
469-39 175-39	土 師 質 碗	体部欠 損	—×10.3×(3)	南央部埋 土	付高台。やや高く、肥厚して大きく開く。端部丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②橙 ③ やや密
469-40 175-40	土 師 質 碗	体部欠 損	—×7.3×(4) 高台高 1.7	竈 内	腰部張り少ない。付高台、高く、肥厚し直線的に開く。断面四角。轆轤成形。	①やや軟 ②明赤褐 ③密 白色粒混る
469-41 175-41	土 師 質 碗	体部欠 損	—×6.7×(2.3) 高台高 1.1	南西部堀 土	付高台、肥厚し、内湾気味に立つ。作り丁寧。轆轤成形。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗 砂混る
469-42 175-42	土 師 質 碗	体部欠 損	—×7.0×(2.5)	北東部床 面	付高台、直線的でハの字状に開く。作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
469-43 175-43	土 師 質 碗	体部欠 損	—×5.8×(2.3)	西央部埋 土	付高台。轆轤成形。	①やや軟 ②橙 ③ やや密 砂混る
470-44 175-44	土 師 質 碗	底 部 欠損	13×—×(4.7)	北西部埋 土	体部丸味をもち、口縁部わずかに外反。内黒処理。轆轤成形。内面上半横・下半放射状磨き。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や密 白色細粒混る
470-45 175-45	土 師 質 碗	底 部 欠損	16.2×—×(5.5)	埋 土	底部大きく、体部は直線的に開く。口縁部は細り、下位でくびれる。内面黒色処理、横磨き。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や粗
470-46 175-46	土 師 器 碗	底 部	—×8×(2.5)	南央部床 面	内面黒色処理、見込部螺旋状暗文。付高台。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
470-47 175-47	土 師 器 碗	底 部	—×7.4×(3)	貯蔵穴内 面	内面黒色処理。円・放射状暗文。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗 白色小石混る
470-48 175-48	土 師 器 碗	底 部	—×8×(2.3)	西央部埋 土	内面黒色処理、放射状暗文。付高台、やや高くハの字状に開く。底部に「メ」筥描き。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や密 白色細粒混る
470-49 175-49	土 師 器 碗	底 部	—×6×(1.5)	中央部埋 土	内面黒色処理。内面暗文状磨痕あり。付高台、端部強く開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や密
470-50 175-50	土 師 器 碗	底 部	—×7.2×(2.1)	南西部埋 土	内面黒色処理。放射状暗文。付高台。端部丸く肥厚する。轆轤成形。回転糸切り？	①良好 硬質 ②鈍 い赤褐 ③やや密
470-51 175-51	土 師 器 碗	底 部	—×6.3×(2.3)	南西部埋 土	内面黒色処理。見込部放射状。体部横磨き、付高台、内湾気味に開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や密 白色細粒混る
470-52 175-52	灰 釉 陶 器 瓶	頸 部	—×—×(9.5) 頸部基径 9	西央部埋 土	頸部直線的に外傾した後、外反する。	①良好 ②灰白 ③ 密
470-53 175-53	灰 釉 陶 器 瓶	底 部	—×14.5×(8.5)	中央部埋 土	体部直線的に外傾する。付高台、低い。	①良好 ②灰白 ③ 密
470-54 175-54	灰 釉 陶 器 瓶	底 部	—×11.1×(1.4)	南央部床 面	付高台、低く幅広。底部回転磨削り。円形に爪形の圧痕あり。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
470-55 175-55	瓦 平 瓦	瓦 片	厚2.5	南東部床 面	凹面布目、凸面縄目叩き。	①酸化気味 ②橙 ③やや密
470-56 175-56	石		径9.3 厚4.6 627.3 g	竈 内	側面敲打痕。	輝石安山岩(粗粒)
470-57 175-57	鉄 器		長(5.5) 幅1.5 厚0.3	中央部埋 土		

K 94号住居跡 (Fig. 471~474・PL. 176・177)

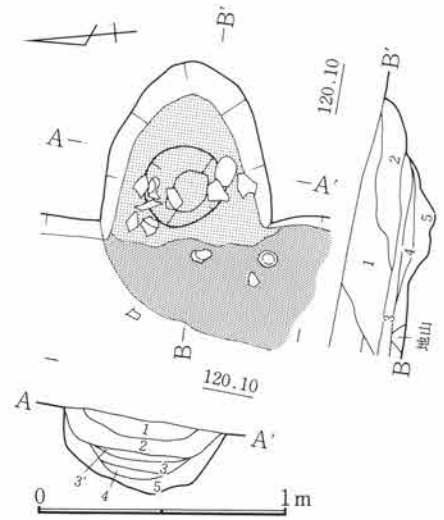
平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	4.11 × 2.90	N—97.5°—E	東壁やや南寄り	円形 (55.0 × 54.0 × 47.0)

K区北西部に位置し、63~65K34~36の範囲にある。111号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。壁高は約22cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、北半はやや低くなり踏み締まりも弱い。竈は東壁のやや南寄りに付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖部・煙道部は検出されていない。燃焼部幅・奥行き約70cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・内面黒色処理土師器・角釘と思われる鉄器などが検出されている。



K94号住居跡
 1 暗褐色土 C軽石含む。
 2 暗褐色土 1層に似る。炭化物含む。
 3 暗褐色土 黄色粘性土塊含む。

Fig.471 K94号住居跡



K94号住居跡竈
 1 暗褐色土 炭化物含む。
 2 暗褐色土 焼土塊含む。
 3 黑色灰層
 3' 黑色灰層
 4 火床面
 5 黑色土 焼土・炭化粒含む。

Fig.472 K94号住居跡竈

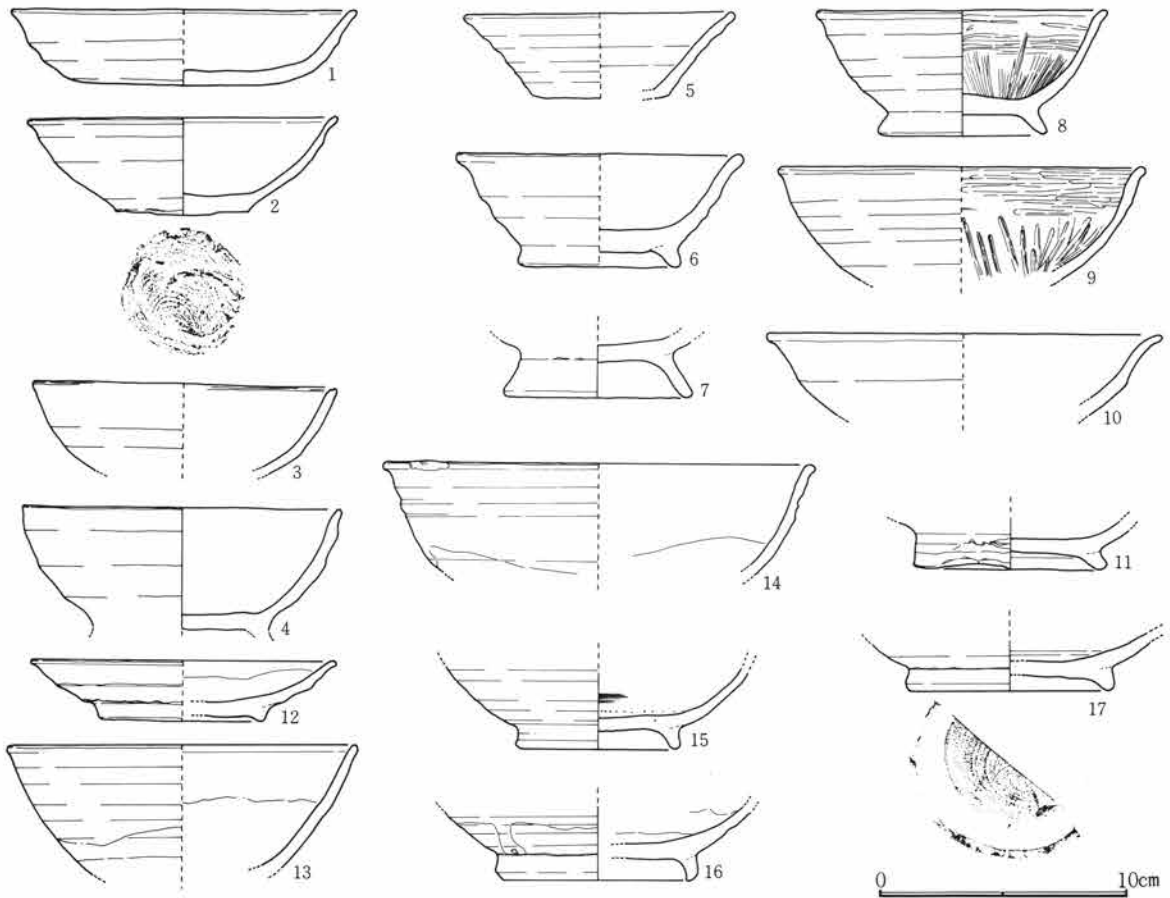


Fig.473 K94号住居跡出土遺物(1)

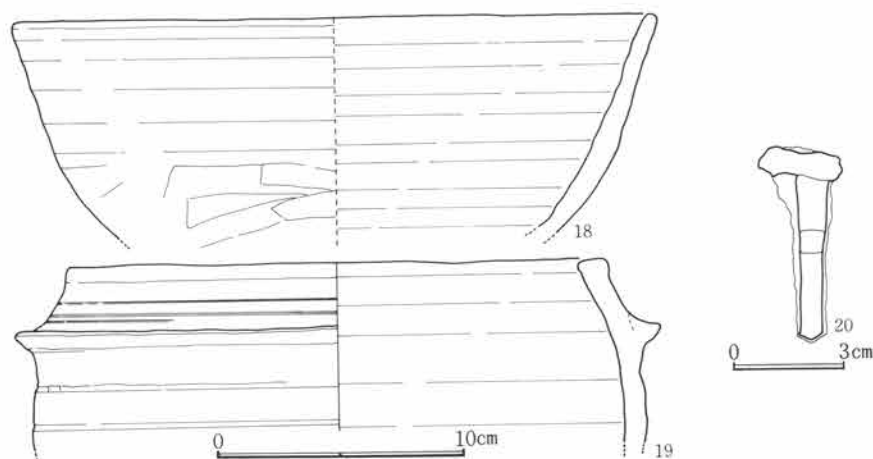


Fig.474 K94号住居跡出土遺物(2)

K 94号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
473-1 176-1	土 師 質 杯	1/4	14×-×3	竈前床面	腰部に丸味。口唇部丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗 細砂混る
473-2 176-2	土 師 質 杯	完	12.4×5.3×3.9	西中央床面	腰部丸く張り、口縁部くびれて外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密 大粒石混る
473-3 176-3	土 師 質 椀	1/4 底部欠損	12.2×-×(3.5)	西中央床面	体部丸く張る。口唇部内面は2条の凹線巡る。轆轤成形。	①良好 ②淡橙 ③密
473-4 176-4	土 師 質 椀	1/2 高台欠損	12.8×-×(4.8)	竈前埋土	体部丸く張り、口縁部外反気味。作り丁寧。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③密
473-5 176-5	須 惠 器 杯	1/4 底部欠損	11×5.5×3.4	埋 土	体部直線的に外傾。口唇部丸い。轆轤成形。	①酸化 軟 ②橙 ③やや粗 砂混る
473-6 176-6	須 惠 器 椀	1/4	11.7×6.5×4.5	竈前埋土	体部直線的。口縁部緩く外反する。付高台、端部丸く、ハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 良好 ②明赤褐 ③粗 砂混る
473-7 176-7	須 惠 器 椀	底部	-×7.6×2.5	竈前埋土	付高台。高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
473-8 176-8	土 師 器 椀	1/2	11.8×6.8×5	貯蔵穴内	体部丸味をもち、口縁部外屈する。内面黒色処理。内面横・放射状磨き。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや密
473-9 177-9	土 師 器 椀	1/4 底部欠損	14.7×-×(4.5)	竈前・貯蔵穴内	体部丸く張り、口縁部外屈する。口唇部丸い。内面黒色処理。上半横・下半放射状磨き。轆轤成形。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密
473-10 177-10	土 師 質 椀	1/4 底部欠損	16×-×(3.3)	中央部埋土	体部中位で屈し上半は外反する。口唇部は丸まり強く外反。内面燻し。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③密
473-11 177-11	須 惠 器 椀	底部	-×7.8×(2)	南西部床下	内外面燻し。付高台、低くハの字状に開く。	①良好 ②黒灰 ③やや密 小石混る
473-12 177-12	灰 釉 陶 器 皿	1/2	12.4×6.6×2.4	床下埋土	口唇部丸く外屈する。高台低く断面三角、付け掛け施釉。底部回転糸切痕残る。	①良好 ②灰白 ③やや密
473-13 177-13	灰 釉 陶 器 椀	1/4 底部欠損	14×-×(5)	竈 内	体部やや張り、口唇部丸まる。付け掛け施釉。腰部磨削り。	①良好 ②明オリブ灰 ③密
473-14 177-14	灰 釉 陶 器 椀	小片	17.3×-×(4.5)	埋 土	体部丸く張り、口唇部外側へ尖る。付け掛け施釉。腰部磨削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
473-15 177-15	灰 釉 陶 器 椀	底部	-×6.6×(3.4)	南西部埋土	腰部丸味あり。付高台、端部丸くハの字状に開く。底部磨削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
473-16 177-16	灰 釉 陶 器 椀	底部1/2	-×7.4×(3)	埋 土	付高台、内湾して立つ。刷毛塗り施釉。腰部磨削り。	①良好 ②灰黄 ③やや粗
473-17 177-17	灰 釉 陶 器 椀	底部1/4	-×8×(2.3)	北東部埋土	付高台、厚く丸味あり。見込部無釉。重ね焼痕。回転糸切り残る。	①良好 ②灰白 ③やや密
474-18 177-18	須 惠 器 鉢	1/4 底部欠損	26×-×(8.5)	埋 土	腰部にやや丸味をもち体部は直線的。口唇部丸まる。腰部横・斜の磨削り。	①酸化 軟 ②鈍い褐 ③粗 小石混る
474-19 177-19	羽 釜	1/4 口縁部	21.3×-×(7) 鑿径26	竈 内	口縁部内傾し、口唇部やや幅広く肥厚し、上端は平らで僅かに内斜。胴部上半磨削り痕。	①酸化 良好 ②鈍い黄褐 ③粗
474-20 177-20	鉄 製 品 角 釘	先端部欠損	長(5) 厚 0.6	埋 土	頂部L字状。	

第3章 K区の遺構と遺物

K95号住居跡 (Fig. 475~477・PL. 178)

K区北部に位置し、62~64K32~34の範囲にある。南半部は当跡より新しい80号住居跡によって、また北半は攪乱土坑で各々消失している。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すと考えられ、南北長約3.7m・東西長約3mを測る。竈を基軸にした方位はN-106°-Eを示す。壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりも良好である。竈は東壁の南寄りに付設され、80号住居跡によって右袖部は消失する。楕円形に掘り込まれた燃烧部の先端には煙出し孔がわずかに突出する。右袖部には方形の川原石が、また燃烧部に円錐形の川原石が支脚として埋設される。燃烧部幅・奥行き約50cmを測る。出土遺物は少ない。

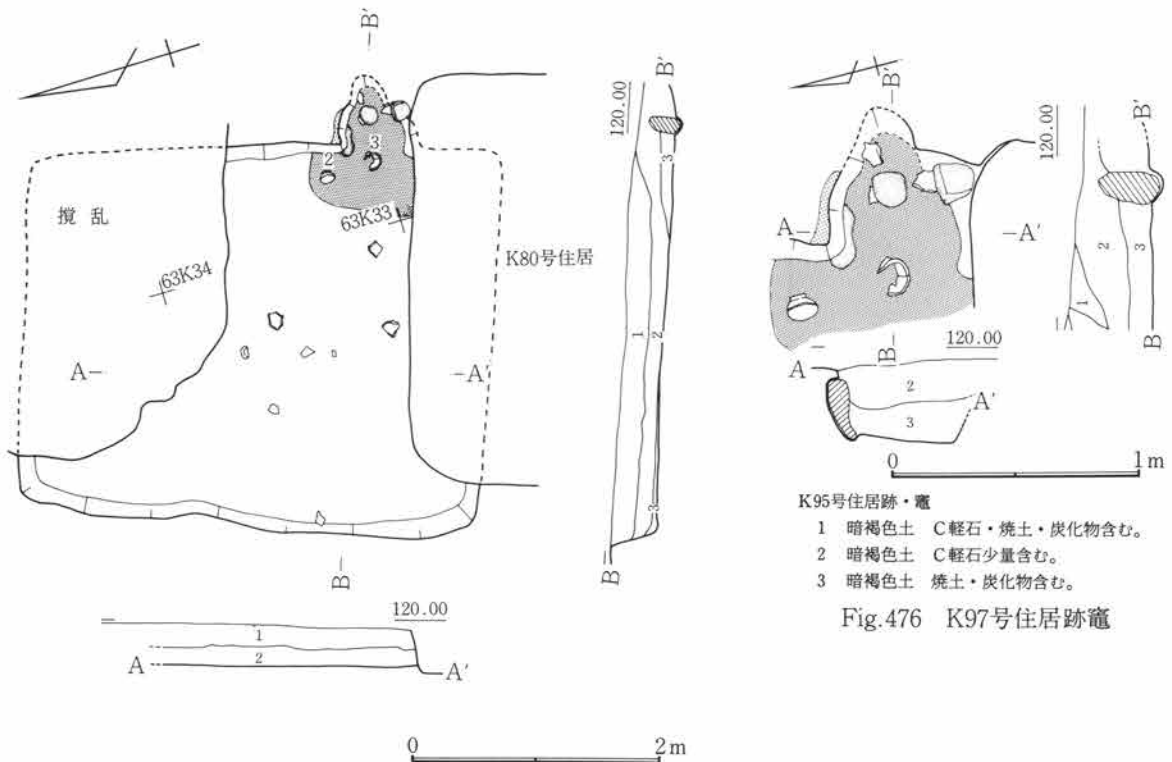


Fig.475 K95号住居跡

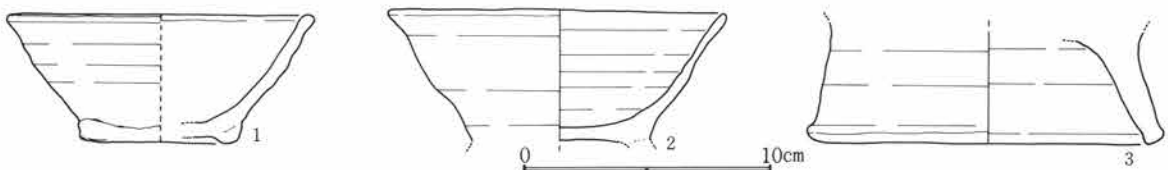


Fig.477 K95号住居跡出土遺物

K95号住居跡出土遺物観察表

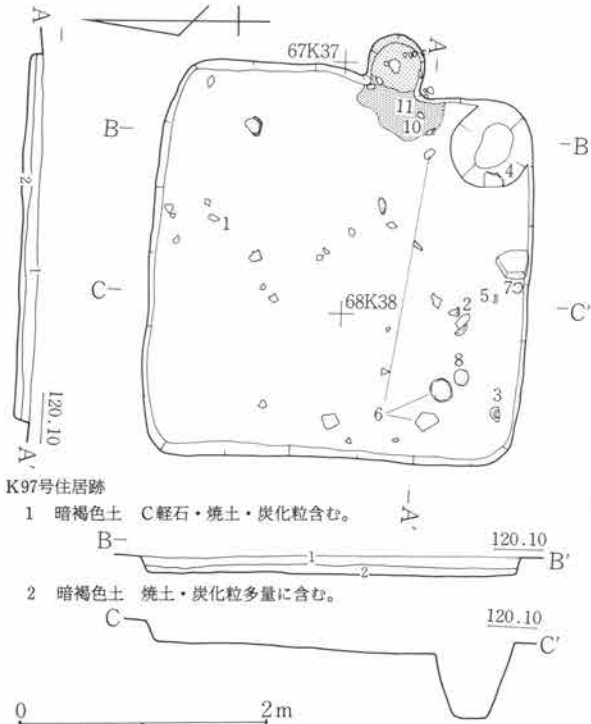
Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
477-1 178-1	須 惠 器 碗	1/3	12.6×6.6×5.1	埋 土	器肉肥厚し、腰部より体部は直線的に立ち上がる。口唇部丸まる。付高台、低く幅広。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③粗砂混る
477-2 178-2	須 惠 器 碗	高台欠損	13.6×-×5.2	竈 前	体部中位で僅かにくびれ、上位は直線的。器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 ②にぶい褐色 ③粗石混る
577-3 178-3	須 惠 器 鉢?	台部1/3	-×14.4×(4.7)	竈 内	台部直線的に開く。端部角ばる。回転撫で調整。	①酸化 良好 ②鈍い橙 ③やや粗小石混

K97号住居跡 (Fig. 478~481・PL. 179・180)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.16 × 3.12	N-97.5°-E	東壁やや南寄り	円形 (68.0 × 64.0 × 50.0)

K区北西部に位置し、62~64K32~34の範囲にある。109号住居跡・15号溝と重複しているが、109号より旧く15号溝より新しい時期の所産である。109号内におさまるため上部はこれによって削平を受けていると考えられる。平面形は方形を呈するが南壁がやや短く、南西部が歪む。壁高は約16cmを測る。床面はほぼ平坦

をなし踏み締まりも良好である。竈は東壁の南よりに付設され、燃烧部は半円形に掘り込まれる。煙道部・袖部は検出されていない。燃烧部幅約45cm・奥行き約50cmを測る。出土遺物は須恵器耳皿・灰釉陶器などが検出されている。



K97号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒多量に含む。

Fig.478 K97号住居跡



K97号住居跡竈

- 1 黒色土 炭化物わずかに含む。
- 2 赤色土 焼土塊集中。炭化物少量含む。
- 3 灰層

Fig.479 K97号住居跡竈

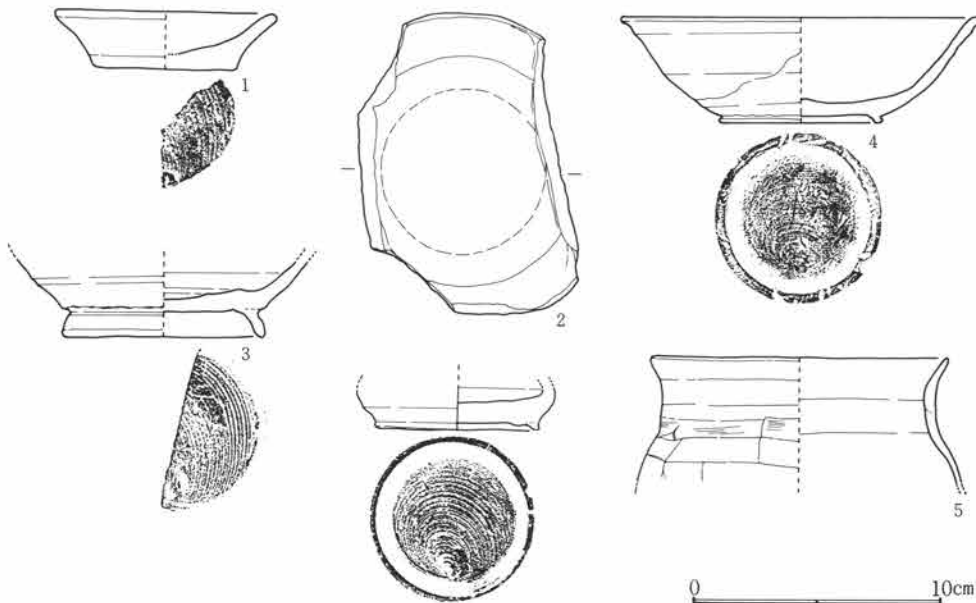


Fig.480 K98号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

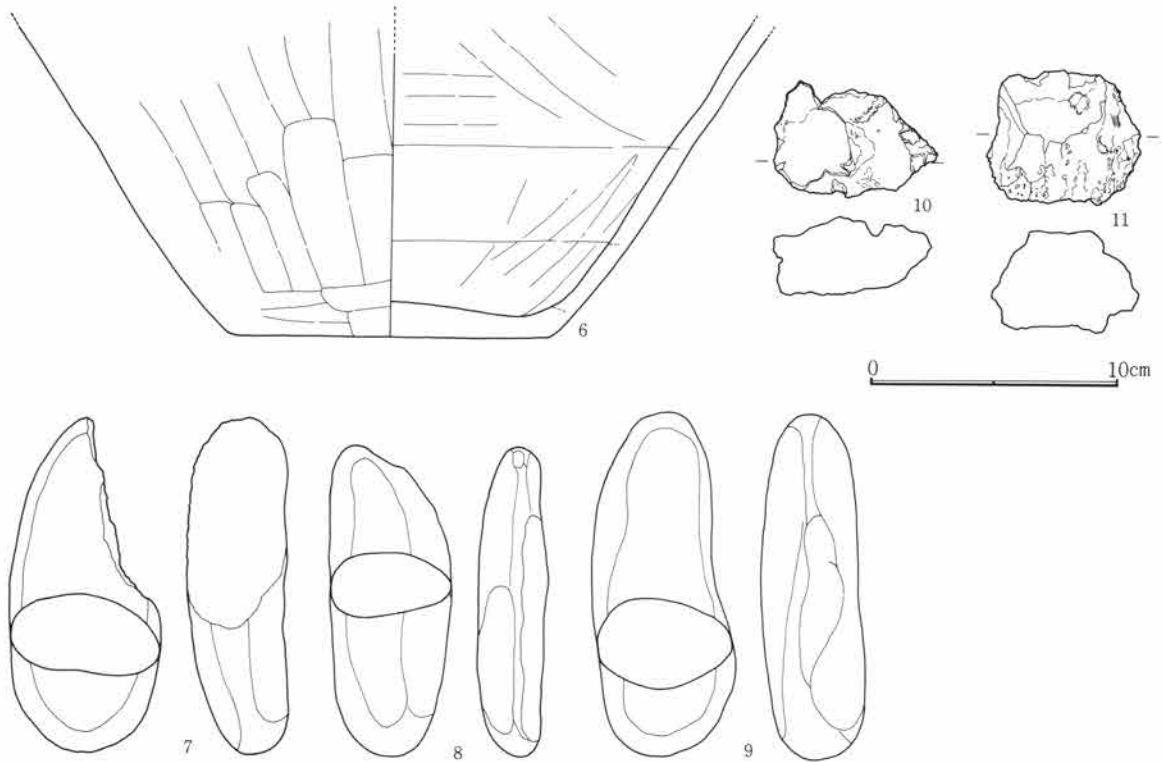


Fig.481 K97号住居跡出土遺物(2)

K 97号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
480-1 179-1	土 師 質 杯	1/5	9×6×2.3	北中央埋 土	底部厚く、体部は腰部より外反気味に開く。口唇部丸まる。 轆轤成形。回転糸切り。109号住居跡の混入か？	①良好 ②褐灰 ③ 密
480-2 179-2	須 恵 器 耳 皿	耳部欠 損	11.9×6.6×(1. 5)	南中央部床 面	底部肥厚する。付高台、低く先端部尖る。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
480-3 179-3	須 恵 器 碗	1/5 体 部欠損	—×8.2×(3)	南西部埋 土	付高台、やや高く内湾気味に開く。轆轤成形。右回転糸切 り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 野色粒混る
480-4 179-4	灰 釉 陶 器 碗	1/5	14.5×6.6×4.2	貯 蔵 穴	体部やや丸味をもち、口唇部丸まり外屈する。内面全面施 釉。外面体部薄く施釉。高台低く小さい。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
470-5 179-5	土 師 器 甕	口縁部 1/5	12×—×(5)	南中央部床 面	肩部僅かに張る。口縁部直立後外傾するコの字口縁。口縁 部横撫で。肩部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 黒色粒混 る
481-6 179-6	土 師 器 甕	底 部	—×12.8×(12. 5)	南西部床 面	底部大きく平底。胴部直線的に開く。胴部縦・腰部横・底 部不定方向篋削り。内面横・斜撫。見込部一方向の強い撫 で。	①良好 ②明赤褐 ③粗 小石混る
481-7 180-7	石	片側欠 損	3.3×6×3.8 352g	南中央部床 下		輝緑岩
481-8 180-8	石	完	12.3×4.8×2.7 222g	南中央部床 下		砂岩
481-9 180-9	石	完	13.6×4×3.6 396g	中央部床 下		輝石安山岩(粗粒)
481-10	鉄 滓		4.5×6.5×3.2	竈前床面		
481-11	鉄 滓		5.2×6.2×4.1	竈前床面		

K99号住居跡 (Fig. 482~485・PL. 180・181)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	4.60 × 3.50	N— 90° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (66.0 × 52.0 × —)

K区北東部に位置し、51~53K34~36の範囲にある。87号・90号・106号・108号住居跡と重複している。87号・90号住居跡より旧く、106号・108号住居跡より新しい時期の所産である。南西部及び北東部は87号・90号住居跡との切り合いのため消失しているが、平面形は方形を呈すと考えられる。壁高は約16cmを測る。床面は東半部がやや低く踏み締まりは良好である。竈は東壁のやや南に寄って付設され、燃烧部は方形気味に掘り込まれる。袖部は左が東壁線からやや内側に、また右は線上に埋設される。袖部内法約30cm、燃烧部奥行き約60cmを測る。出土遺物は灰釉陶器や鎌・角釘と考えられる鉄製品などが多く検出されている。



Fig.482 K99号住居跡

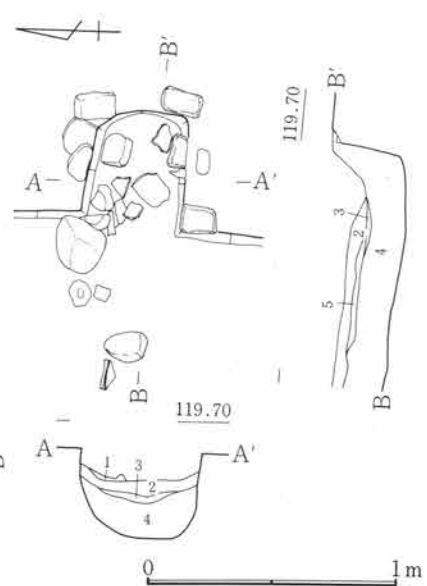


Fig.483 K99号住居跡竈

- K99号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
 - 2 暗褐色土 1層に似る。土器片含む。
 - 3 黄褐色土

- K99号住居跡竈
- 1 焼土塊
 - 2 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
 - 3 火床面
 - 4 黒色土 炭化物・C軽石・少量の焼土粒含む。
 - 5 黒色灰層

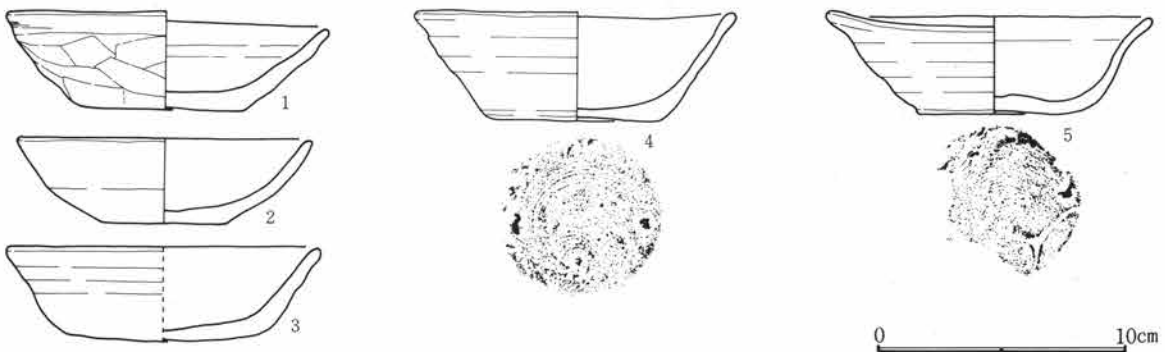


Fig.484 K99号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

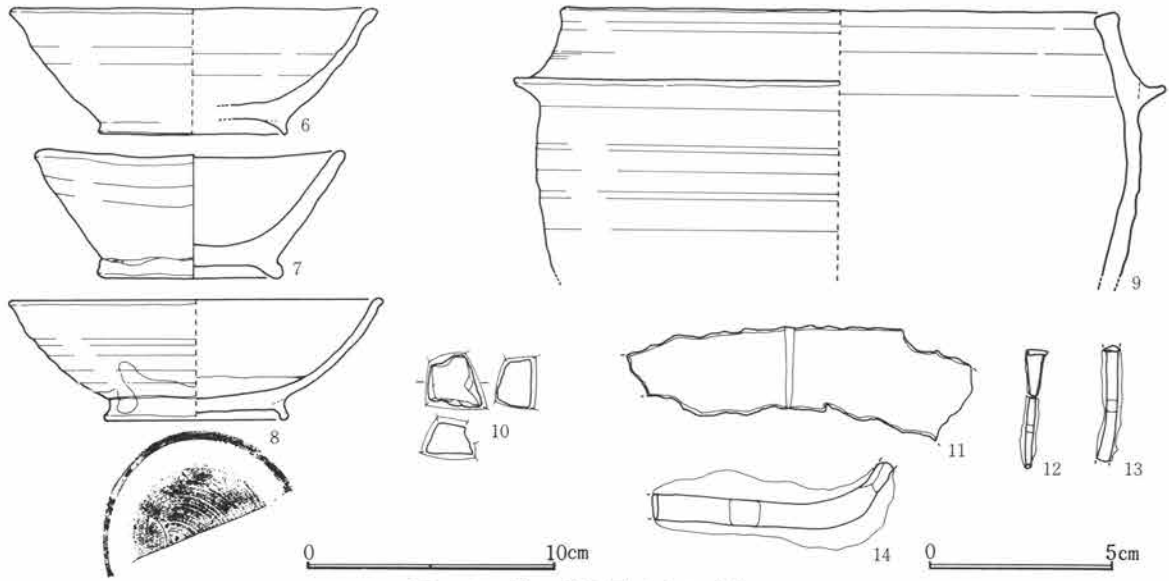


Fig.485 K99号住居跡出土遺物

K 99号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
484-1 180-1	土師器 杯	1/2	13×6.3×4.2	貯蔵穴内	体部直線的、口縁部ややくびれて外反気味。平底。口縁部横撫で、体・底部篋削り。	①還元気味 良好 ②浅黄 ③やや粗
484-2 180-2	土師質 杯	1/2	11.8×5×3.4	北中央部埋 土	体部に丸味あり。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③や や粗 砂混る
484-3 180-3	土師質 杯	1/2	12.7×7.5×3.8	竈内	腰部丸く、体部やや外反気味。口唇部丸まる。器内肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密
484-4 181-4	須恵器 杯	完	13×6.5×4.2	北中央部埋 土	体部深く、直線的。口唇部やや肥厚して丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗 砂多い
484-5 181-5	須恵器 杯	2/3	13×6×3.9	竈電	腰部丸く張り、体部中位でくびれ、上半は外反する。口唇部丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 砂混る
485-6 181-6	須恵器 碗	1/4	14.8×7.7×5	北中央部床 下	体部直線的、口唇部やや肥厚し丸まり外反する。付高台、低く断面三角形。内面黒色。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②灰褐 ③やや密
485-7 181-7	須恵器 碗	完	12.5×7.5×4.9	竈前床面	全体に肥厚する。体部直線的で、口唇部丸まる。付高台、丸く雑。接合痕顕著。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や密
485-8 181-8	灰釉陶器 碗	1/2	14×7.4×4.8	西中央部床 下	体部丸味をもつ。口唇部丸まり短く外屈。見込部僅かに凹む。高台先端部丸まり内屈する。付け掛け施釉。回転糸切り痕残る。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
485-9 181-9	羽釜	1/2 下 半欠損	22.6×—×(10.5) 鏝径26.1 口径高3	西中央部埋 土	胴部脹らむ。鏝尖がり上向き。口縁部内傾。口唇部は幅広く上端面は内斜する。口縁部・胴部横撫で。	①酸化 良好 ②鈍 い褐 ③やや粗
485-10 181-10	石製品 砥石		2×1.9×1.2 3.6g	埋土	多面使用。	流文岩
485-11 181-11	鉄製品 鎌	両端欠 損	9.2×2.2×0.2	床下		
485-12 181-12	鉄製品 釘	先端部 欠損	(3)×0.2×	床下	角釘、基部はL字状に曲がる。	
485-13 181-13	鉄製品 釘?	両端部 欠損	(3)×0.3×	床下	角釘。	
485-14 181-14	鉄製品	両端部 欠損	(6.5)×0.8×0.7	床下	片端曲がる。角釘?	

K 100号住居跡 (Fig. 486・487・PL. 181・182)

K区北東部に位置し、50～52K37・38の範囲にある。90号住居跡と重複しており、これよりも古い時期の所産である。また南東部には、中世以降と考えられる2号墓跡が検出されている。北部及び東部は調査区域

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

外に延び、また南部は90号住居跡との切り合いのため壁線が確認できたのは西壁のわずかな部分である。西壁は直線をなすところから平面形は方形を呈すると考えられ、壁線走行方向はN-20°-Wを示す。壁高は約14cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈などの諸施設は検出されていない。出土遺物は少量で、鉄製品などが見られる。

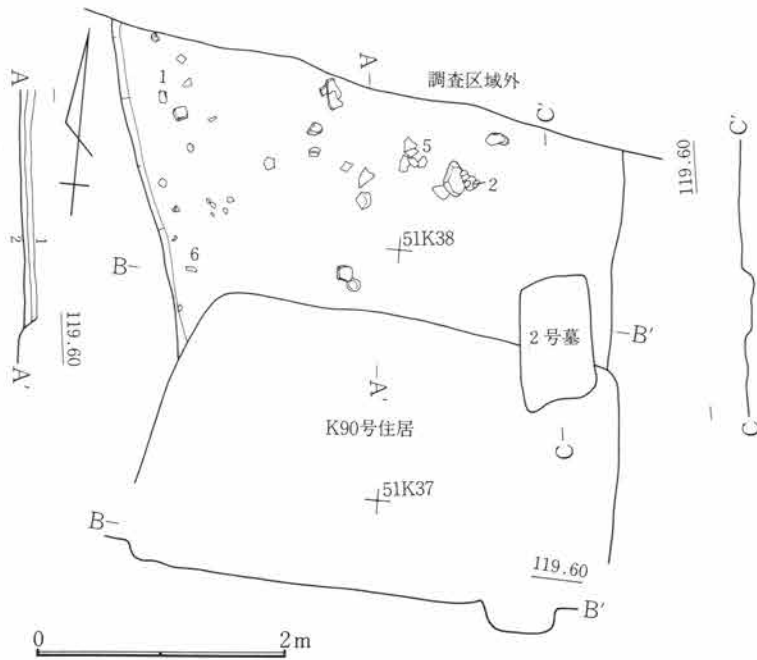


Fig.486 K100号住居跡

K100号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 1層によく似る。土器片含む。

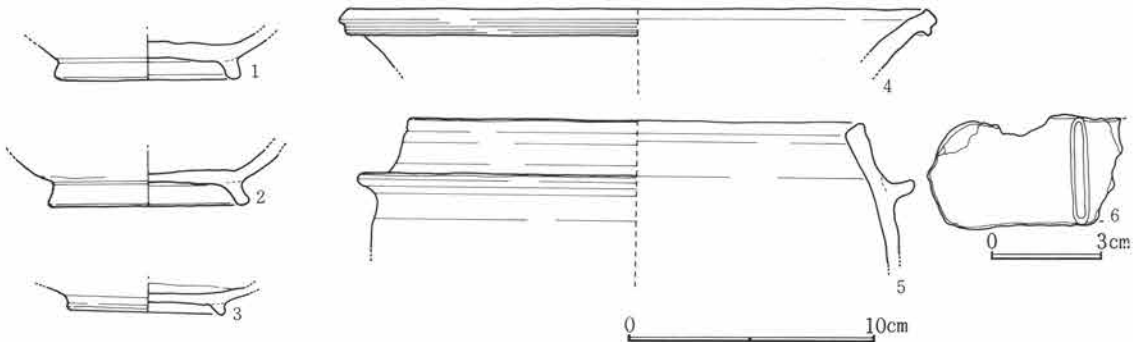


Fig.487 K100号住居跡出土遺物

K 100号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	種 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
487-1 182-1	須惠器 碗	底部	—×7×(1.8)	北西部埋 土	付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密	
487-2 182-2	須惠器 碗	底部	—×8×(2.3)	中央部床 面	付高台、端部やや角ばりハの字状に開く。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 夾雑物あり	
487-3 182-3	灰釉陶器 皿	底部	—×6.1×(1.4)	埋 土	高台低い。見込部無釉。回転糸切り残る。	①良好 ②灰白 ③ やや密	
487-4 182-4	須惠器 甕	口縁部 1/3	24×—×(2.3)	埋 土	口唇部下位は下方に尖る。上端は断面三角。	①良好 ②灰 ③や や密	
487-5 182-5	羽 釜	口縁部 1/3	18.4×—×(5.5) 口径22.4 口縁高2.2	中央部床 面	鈿端部丸まり、内湾気味に上方へ開く。口縁部内傾し、口 唇部やや幅広。口唇上端面は強く内斜。横撫で。	①酸化気味 良好 ②灰白 ③やや密 小石混る	
487-6 182-6	鉄 製 品		(5)×2.8×0.5	南西部床 面	不明鉄器。中空		

K101号住居跡 (Fig. 488~491・PL. 182・183)

K区北側やや西寄りに位置し、62K31の範囲にある。80号・95号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。この重複と北側の攪乱による消失範囲は広く、検出された範囲は竈とその周辺部分である。平面形は方形を呈すると考えられ、竈を基軸とする方位はN-108°-Eを示す。竈は東壁の南に寄って付設され楕円形を掘り込まれる。袖部は凝灰岩の加工材が埋設され、奥には同質の加工材が天井部として架されるが煙道部は確認されなかった。袖部内法約50cm、燃烧部奥行き約50cmを測る。貯蔵穴は南東隅に設けられ楕円形に穿たれる。径約45cm・深さ約16cmを測る。出土遺物は竈内に集中して検出された。

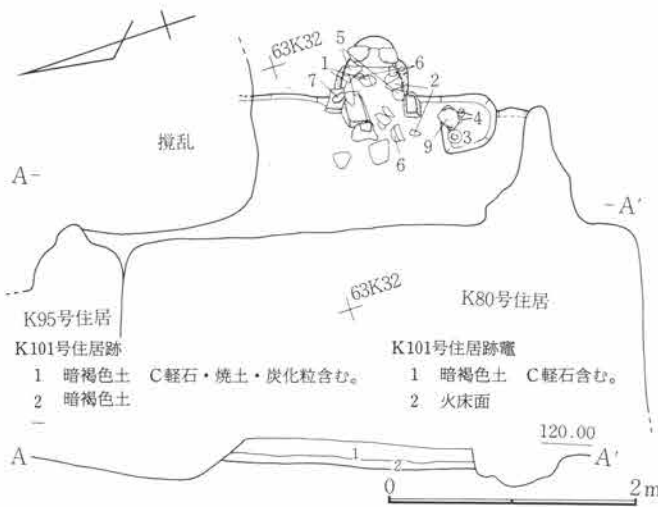


Fig.488 K101号住居跡竈

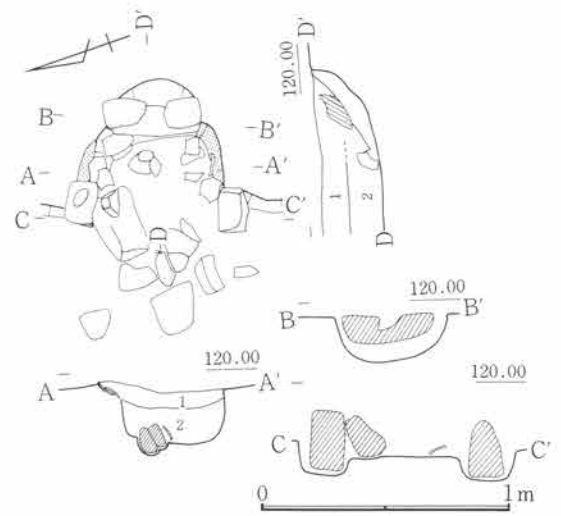


Fig.489 K101号住居跡竈

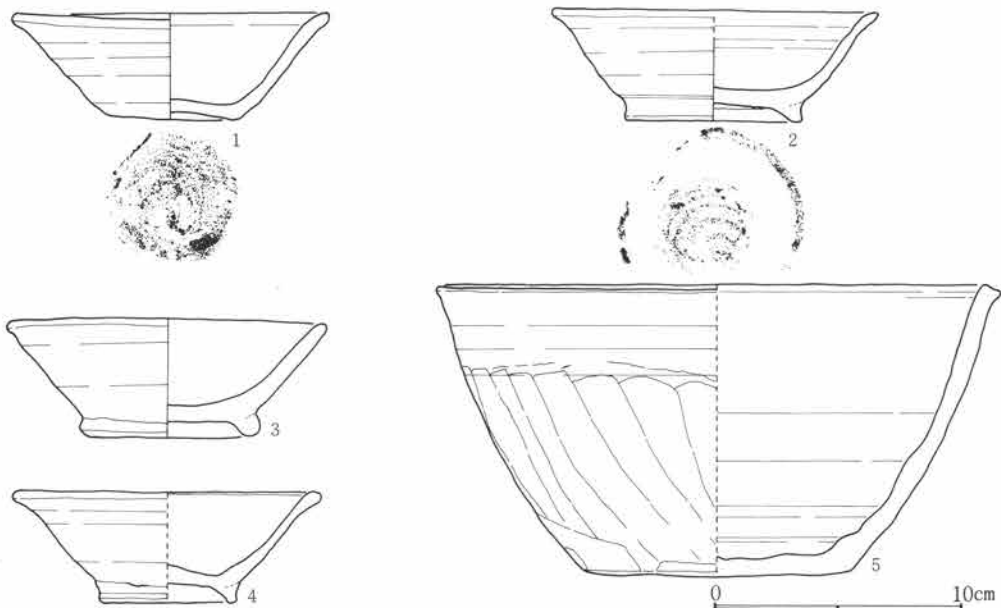


Fig.490 K101号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

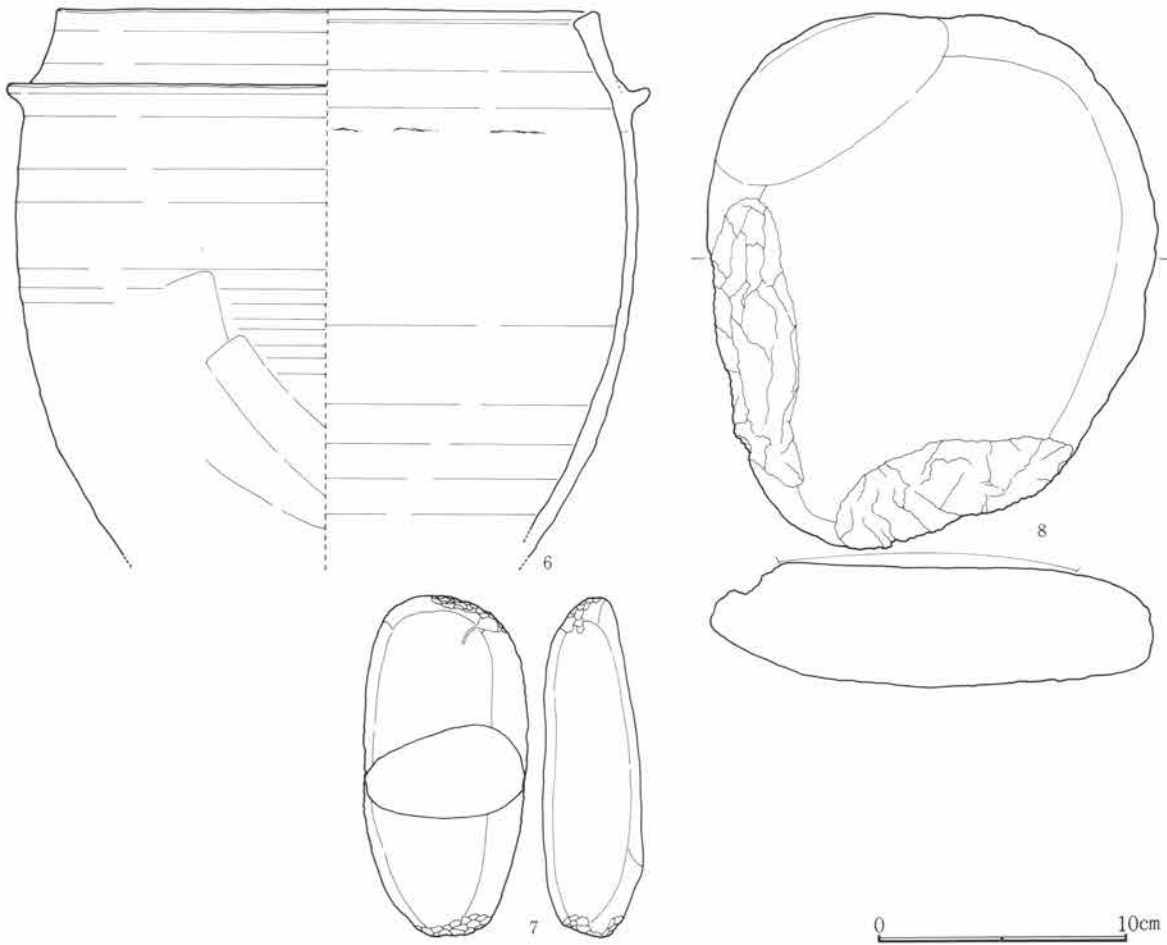


Fig.491 K101号住居跡出土遺物(2)

K 101号住居跡出土遺物観察表

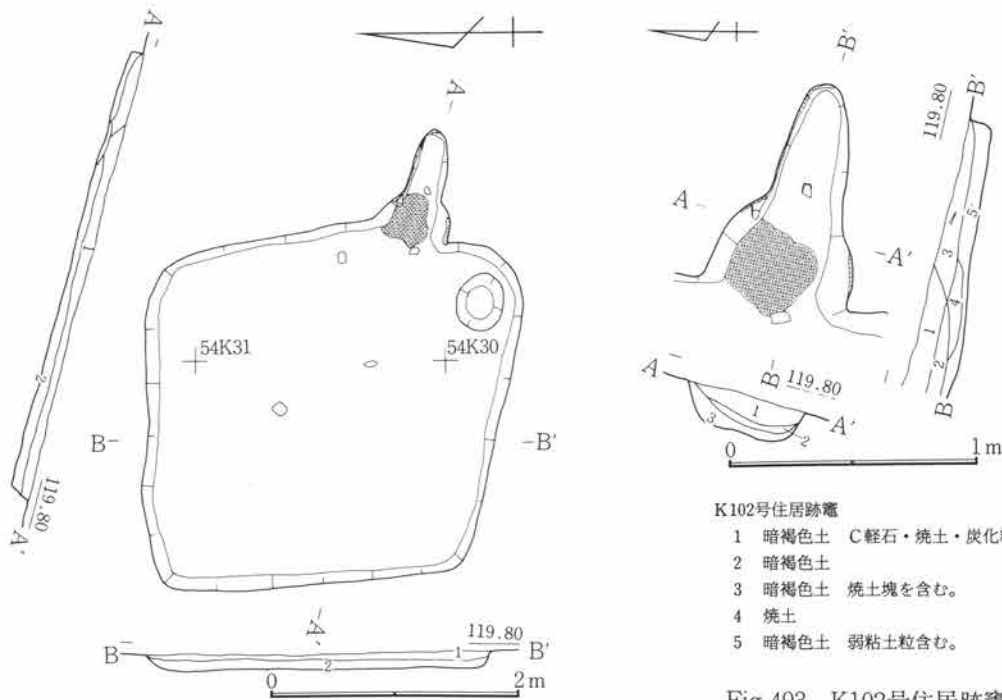
Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
490-1 182-1	須 惠 器 杯	1/2	12.8×5.2×4.2	竈 内	体部直線的で大きく開き、口縁部外反する。口唇部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②鈍い褐 ③粗 白色粒混る
490-2 182-2	須 惠 器 椀	1/2	13.2×7×4.4	竈 内	体部張り気味。口縁部やや外傾する。付高台、低く外反気味に開く。轆轤成形。	①燻気味 ②黒褐 ③やや粗 砂混る
490-3 182-3	須 惠 器 椀	完	12.8×7.2×4.8	貯蔵穴内	器肉厚い。体部直線的に開く。口唇部丸い。付高台、低く端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや密 細砂混る
490-4 182-4	須 惠 器 椀	1/2	12.3×5.5×4.4	貯蔵穴内	腰部張り気味。体部大きく開き、口縁部外反気味。口唇部肥厚し丸まる。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 軟 ② 浅黄橙 ③密
490-5 182-5	須 惠 器? 鉢	1/2	22.6×10.8×11.6	竈 内	体部やや張り気味、上位は緩く外反する。口唇部上端は段をなし、外屈気味。体部上位横撫で、中～下位は縦・腰部横篋削り。底部不定方向篋削り。	①酸化気味 良好 ②灰白 ③粗 砂多 く混る
491-6 183-6	羽 釜	1/2 底 部欠損	21.9×—×(21.3) 口径25.8 口径高 3	竈 内	胴部強く張る。口縁部内傾し、口唇部幅広く上端面は平らで内傾する。口縁部、胴上位は横撫で、中～下位斜篋削り。	①酸化気味 良好 ②灰白 ③粗
491-7 183-7	石	完	13.5×6.6×4.1 487g	竈 内	両端粗い打撃痕あり	輝石安山岩(粗粒)
491-8 183-8	石	2側面 欠損	21.3×18.7×4.8 2955g	貯蔵穴内	平坦面は摩滅する。	輝石安山岩(粗粒)

第3章 K区の遺構と遺物

K102号住居跡 (Fig. 492~494・PL. 183)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.9 × 2.64	N-88.5°-E	東壁南寄り	楕円形 (45.0 × 37.0 × 18.0)

K区やや北東部に位置し、53・54K29~31の範囲にある。104号・113号住居跡と重複しており、これらよりも新しい時期の所産である。平面形は方形を呈するが、西壁がやや短く南壁線が歪む。壁高は約14cmを測り浅い立ち上がりである。床面はほぼ平坦をなし、竈前面は固く踏み締まるが他所は弱い。竈は東壁の南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれた燃烧部にやや長い煙道部が付く。袖部などの構築材は見られず、それらの埋設痕も検出されていない。燃烧部幅約57cm・奥行き45cmを測る。煙道部は長さ約50cmを測り、燃烧部からわずかに立ち上がり水平に延びる。出土遺物は少量である。



K102号住居跡
1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
2 暗褐色土

Fig.492 K102号住居跡

K102号住居跡竈
1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
2 暗褐色土
3 暗褐色土 焼土塊を含む。
4 焼土
5 暗褐色土 弱粘土粒含む。

Fig.493 K102号住居跡竈



Fig.494 K102号住居跡出土遺物

K102号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
494-1 183-1	灰釉陶器 椀	底部小片	—×8×(1.5)	埋 土	見込部無釉。高台やや低く、断面台形を呈し角張る。	①良好 ②灰白 ③密
494-2 183-2	灰釉陶器 瓶	底部%	—×8×(3.5)	埋 土	高台幅広く、外側端部尖る。見込部凹凸あり中心部は薄い。腰部回転篋削り。底部回転糸切り後回転篋調整。	①良好 ②灰白 ③やや粗

K103号住居跡 (Fig. 495~497・PL. 184)

K区やや北西部に位置し、67K30~32の範囲にある。西側のほとんどは調査区域外に入り検出は竈を含めわずかな部分である。93号・105号住居跡と重複しているが93号住居跡より旧く105号住居跡より新しい時期の所産である。平面形は方形が推定され東壁線は長さ2.8mまで確認された。竈を基軸にする方位はN-103°-Eを示す。壁高は約30cmを測る。床面は竈前面が固く踏みしまり、南東隅には楕円形の穴が穿たれ貯蔵穴と考えられる。径約50cm・深さ30cmを測る。竈は東壁の南寄りに付設され半円形に掘り込まれた燃烧部から急角度で約50cm上がり煙道部に至る。袖部などの用材は検出されていないが竈内には凝灰岩加工材が散乱している。燃烧部幅約70cm・奥行き約50cm、煙道部長さ30cmを測る。出土遺物は少量であり、一部は93号住居跡からの混入かと考えられる。

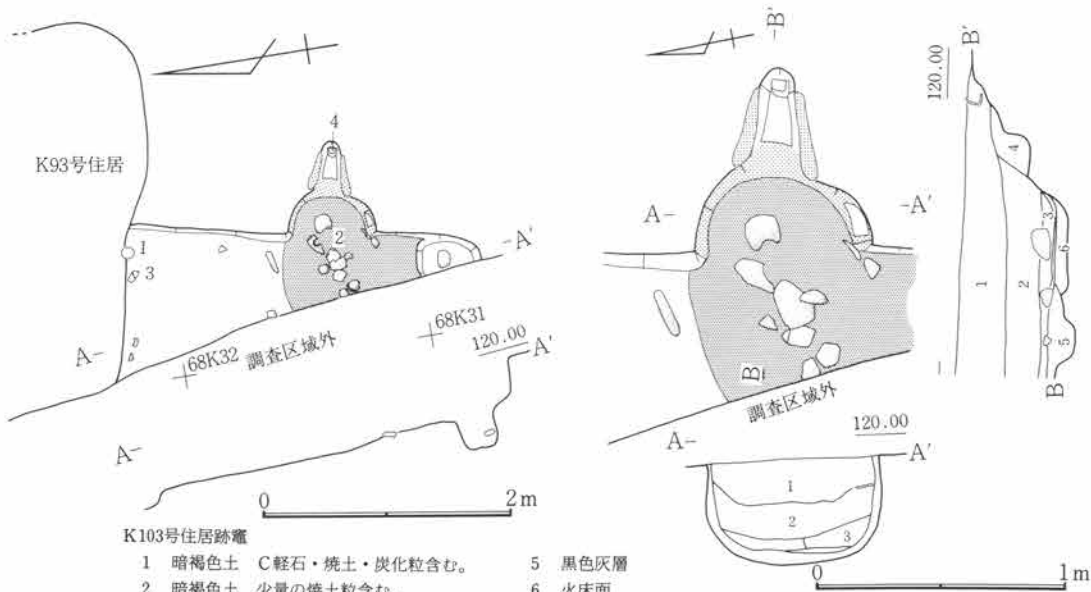


Fig.496 K103号住居跡竈

Fig.495 K103号住居跡竈

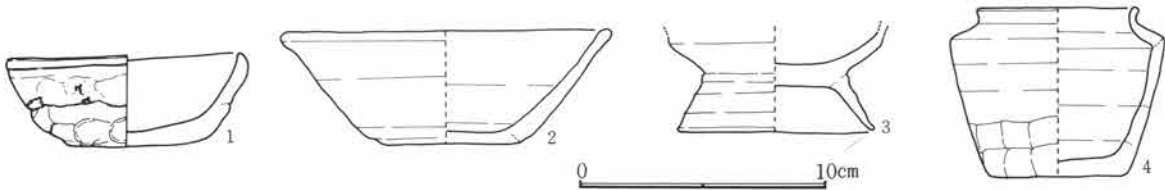


Fig.497 K103号住居跡出土遺物

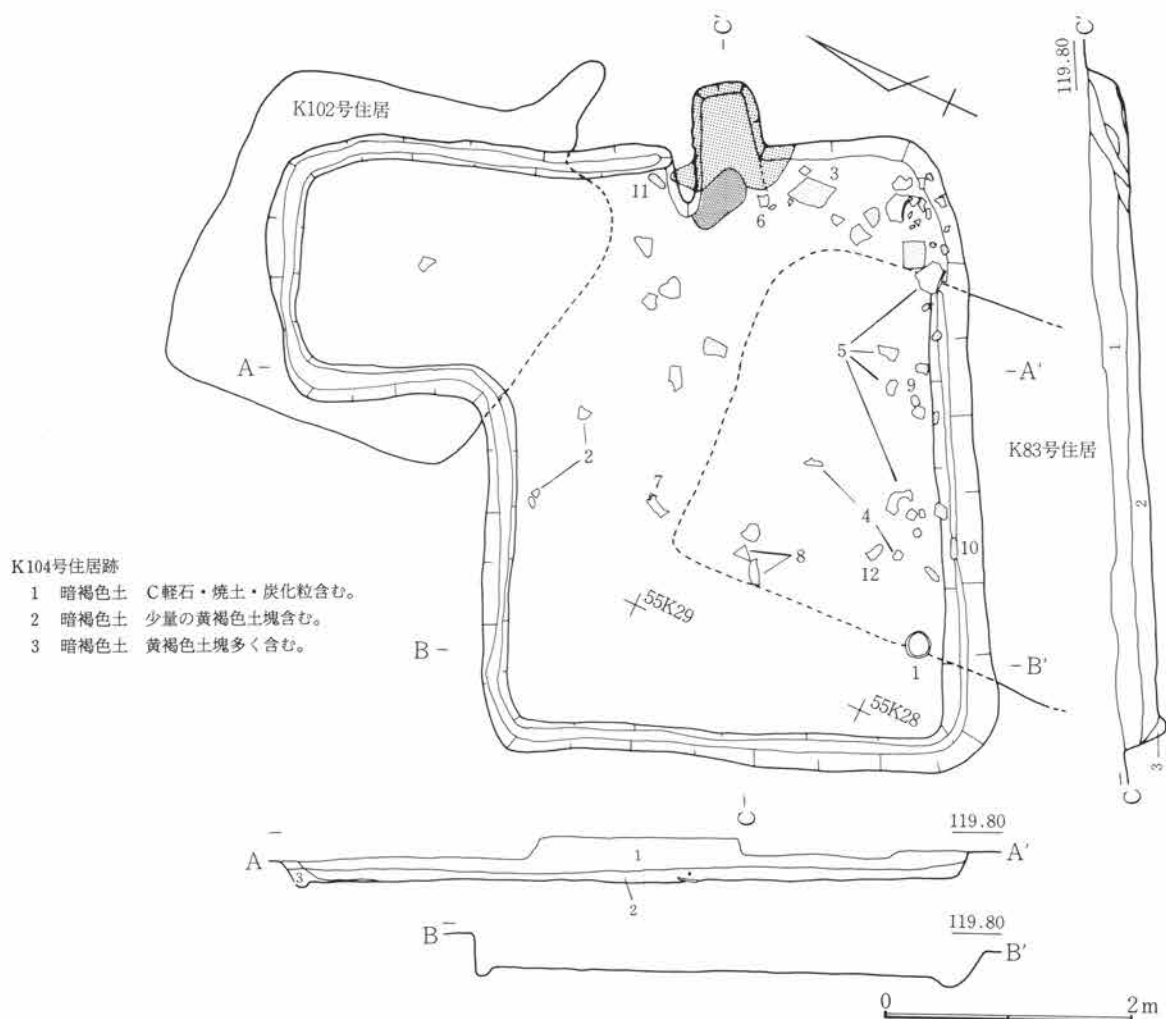
K103号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
497-1 184-1	土師器 杯	完	9.7×5.6×3.6	北東部埋土	腰部に丸味。口縁部内湾気味に直立。2巻3段の巻き上げ。体部強い指頭痕。底部一方向の寛削り。93号所屬か。	①良好 ③やや密	②鈍い橙
497-2 184-2	須恵器 杯	1/2	13.3×5×4.5	竈前床面	小さ目の底部から体部直線的に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ③やや粗	②灰黄 小石混る
497-3 184-3	土師質 椀	1/2 体部欠損	—×8×(4) 高台高 1.9	北東部埋土	体部下位でくの字状に内屈気味。内外面黒色処理、付高台高くハの字状に開く。端部細る。轆轤成形。93号所屬か。	①良好 ③やや密	②黒
497-4 184-4	須恵器 小壺	1/2	6.5×5.6×6.7 肩部径 8.6	竈煙道部	口縁部短く直立し、端部は外反する。肩部くの字状に強く張り体部直線的。平底。口縁部から体部回転撫で。腰部横手持り寛削り。底部不定方向寛削り。	①良好 ③やや密	②灰白

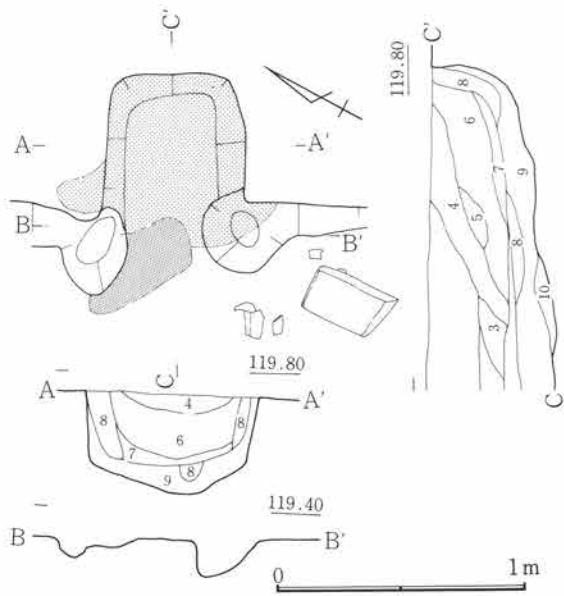
K104号住居跡 (Fig. 498～501・PL. 184・185)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形 張り出し	5.59 × 5.4	N-65.5°-E	東壁南寄り	

K区中央部やや北東寄りに位置し、52～55K27～30の範囲にある。83号・102号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。平面形は東西に長軸をもち、北壁の東隅が方形に突出する張り出し部を有する形態である。壁高は約34cmを測り遺存は良好である。張り出し部は北壁線より約1.6m、東線より約2.1mの規模で突出する。床面は平坦をなし張り出し部との間にも変化はない。踏み締まりは全体に良好である。壁下の溝は南東部の隅を除き各壁下に明瞭に巡る。幅14～16cm・深さ10cmを測る。南東隅は不規則にわずかな窪みを有するが貯蔵穴と確定はできなかった。竈は張り出し部を除けば東壁のほぼ中央に付設され、燃烧部は方形気味に掘り込まれる。袖部は東壁線上よりわずかに内側の位置に袖材の埋設痕が検出され、竈周辺部には凝灰岩の整った加工材が数点見られた。燃烧部幅55cm・奥行き70cmを測る。出土遺物は凝宝珠摘付き蓋・須恵器瓶などが検出されている。



第2節 K区の竪穴住居跡と遺物



K104号住居跡竈

- 4 暗褐色土 焼土粒多く含む。
- 5 灰褐色土 粘性土。
- 6 焼土
- 7 灰層
- 8 焼土
- 9 黒褐色土 粘土粒含む。
- 10 黄褐色土 粘土粒含む。

Fig.499 K104号住居跡竈

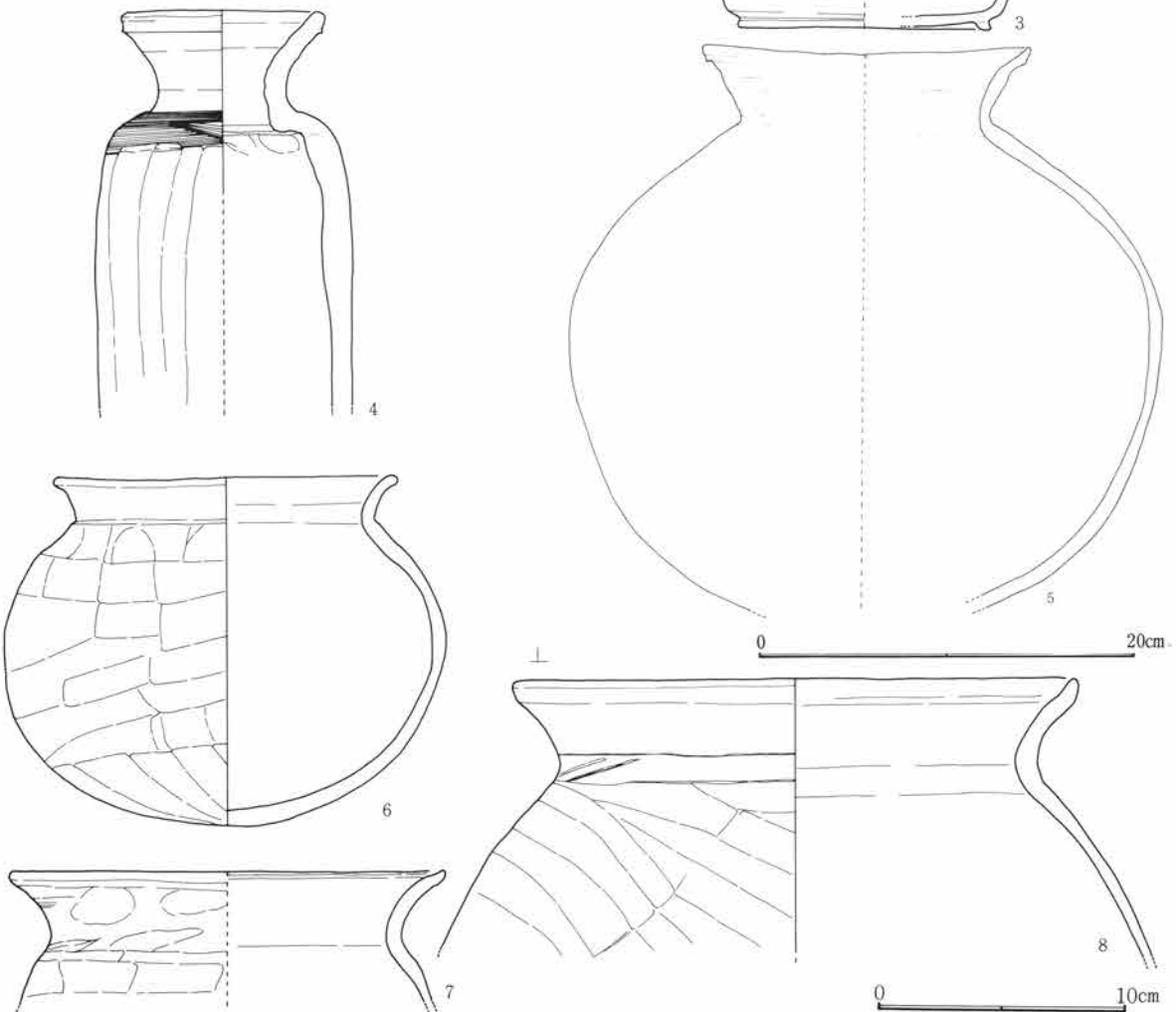


Fig.500 K104号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

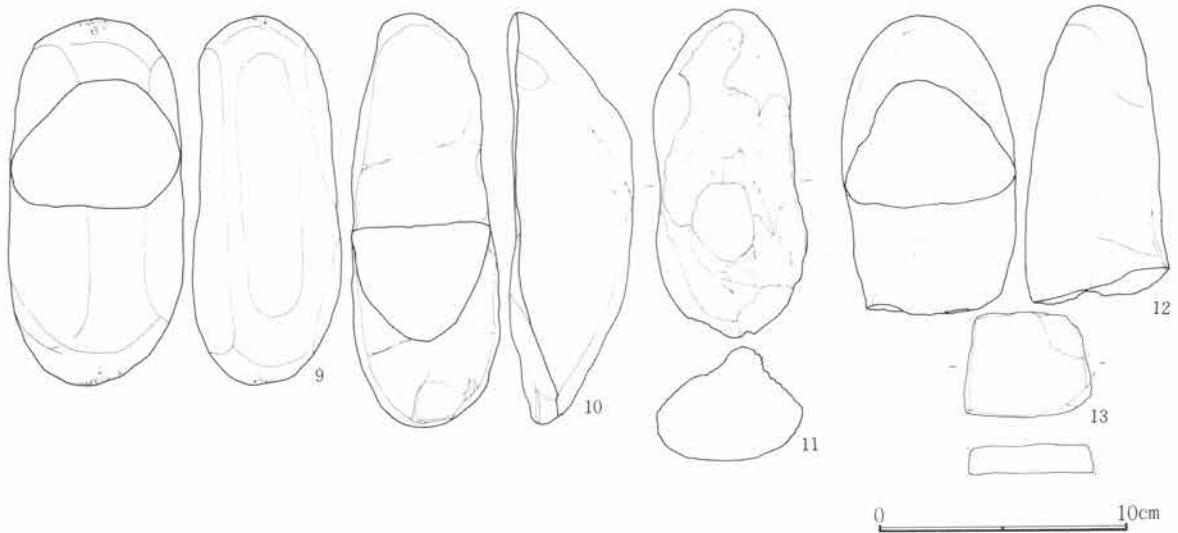


Fig.501 K104号住居跡出土遺物(2)

K 104号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	種 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
500-1 185-1	土 師 器 杯		完	13×-×4	南西部床 面	体部丸く深い。口縁部内湾し、口唇部丸まる。底部丸底。 体部横・底部不定方向篋削り。内面指頭痕。内面口縁部に 黒色付着物あり。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
500-2 185-2	須 惠 器 蓋		完	11.4×-×2 摘径 1.6	北中央部床 面	丸く扁平な摘み。天井部平坦をなし直線的に口縁部に至る。 かえりは内傾し、口縁部より5mm程度突出する。天井部手 持篋削り。	①酸化 良好 ②鈍 い橙 ③やや密
500-3 185-3	須 惠 器 碗		1/2	13.8×10.2×3.9	竈際床面	体部直線的に立ち上がるが、中位で僅かに外屈する。底部 凸気味。付高台、短く外反気味に立つ。轆轤成形。底部回 転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や密
500-4 185-4	須 惠 器 瓶		下半部 欠損	8.3×-×(1) 胴部径10.4	南中央部床 面	頸部外反して立ち上がり、口縁部下位に鋭い凸部をなす。 口唇部丸まる。肩部強く張り胴部は筒形をなす。肩部横櫛 目、胴部縦篋削り、内面肩部接合、指頭痕顕著。	①軟 ②明オリーブ 灰 ③やや粗 細砂 混る
500-5 185-5	須 惠 器 甕		1/2 底 部欠損	17.6×-×(30) 胴部最大径31.5	南中央部埋 土	胴部丸く張り球形を呈す。口縁部直線的に外傾し、中位で くびれ、さらに強く外傾する。口唇部屈して上方へ立つ。 口縁部横撫で、胴部格子状叩き、内面青海波状あて目。	①良好 ②灰 ③や や密
500-6 185-6	土 師 器 壺		完	13.8×-×13.9 胴部径17.7	南東部埋 土	口縁部短く強く外反。胴部丸く張り球形を呈す。丸底。口 縁部横撫で。胴部横篋削り、下半縦篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密
500-7 185-7	土 師 器 甕		口縁部 1/4	17.6×-×(5.5)	中央部埋 土	口縁部外反し、口唇部は内湾して立つ。肩部張り少なく、 緩く屈して胴部に至る。口縁部指頭後横撫で、肩部横篋削 り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 砂混る
500-8 185-8	土 師 器 甕		口縁部 ~ 胴部	22.8×-×(10. 5)	中央部床 面	口縁部外反し、口唇部は屈して上方へ立つ。内面口唇部下 に緩く段をなす。胴部丸味をもつ。口縁部横撫で、胴部斜 篋削り。最大径は胴部にあり。	①良好 ②橙 ③や や粗 砂混る
501-9 185-9	石		完	14.5×6.9×5 686g	南中央壁際 床面	両端部打敲痕あり。	ひん岩
501-10 185-10	石		完	16.2×6.1×4.6 582g	南中央壁際 床面		輝石安山岩(粗粒)
501-11 185-11	石		完	13×6×4.5 444g	竈際床面	片面剝離顕著(自然?)	輝石安山岩(粗粒)
501-12 185-12	石		片端欠 損	(11.8)×7×5 568g	南中央部床 面		輝石安山岩(粗粒)
501-13 185-13	須 惠 器 転用砥石			4.1×5.1×1.2 38.6g	埋 土	2側面使用。甕片転用。	①良好 ②灰白 ③ やや密

K105号住居跡 (Fig. 502~504・PL. 186)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.94 × 3.14	N- 96° -E	東壁やや南寄り	楕円形 (39.0 × 29.0 × 16.0)

K区やや北西部に位置し、65~67K30~32の範囲にある。93号・103号・119号住居跡と重複しており、93号・103号より旧く119号より新しい時期の所産である。平面形はやや南北に長いが比較的整った方形を呈す。

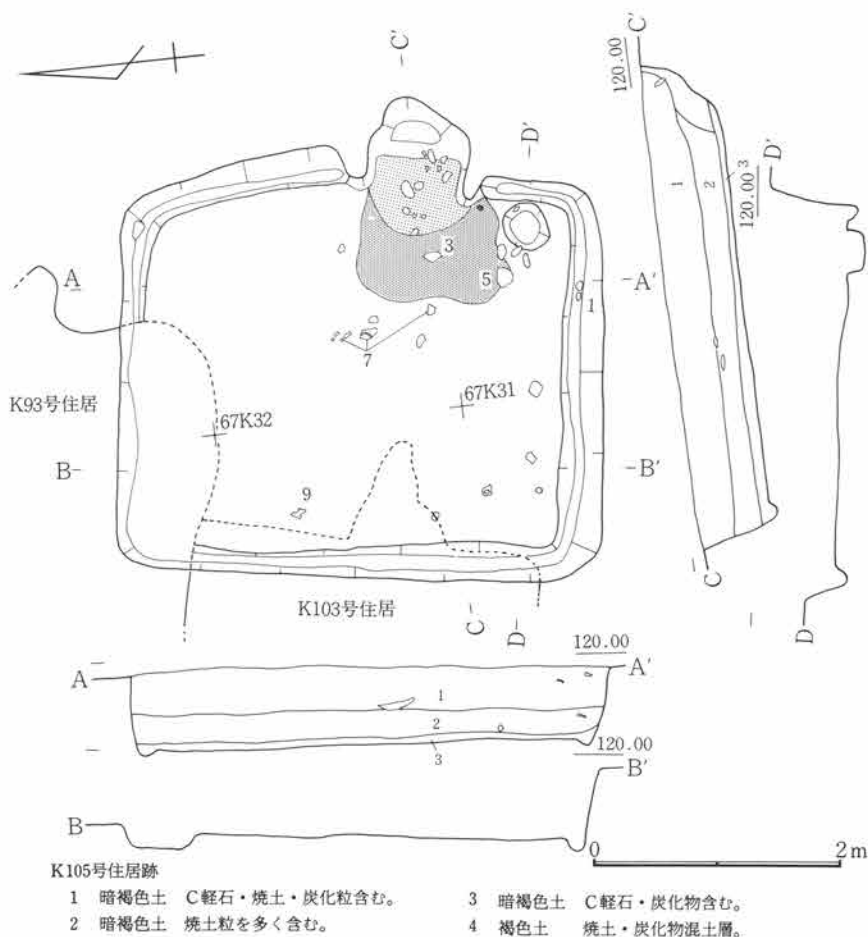


Fig.502 K105号住居跡

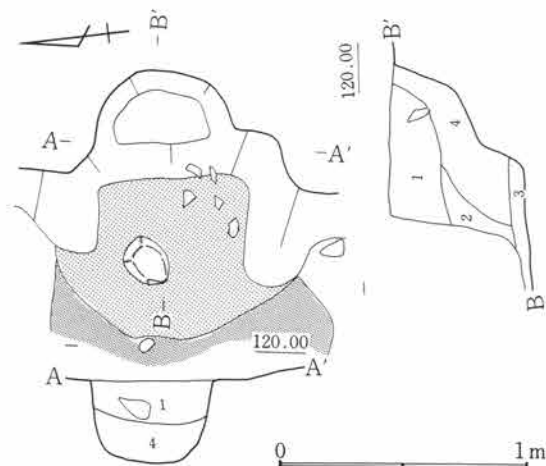


Fig.503 K105号住居跡竈

壁高は約60cmを測り良好に遺存する。床面は平坦をなし踏み締まりは良く、93号住居跡との重複部分を除いて各壁下には明瞭な溝が巡る。溝幅12~20cm、深さ6~8cmを測る。竈は東壁のやや南に寄って付設され、方形気味に掘り込まれた燃烧部から急斜面に段をもって煙出し孔と考えられる不正楕円状の突部に至る。袖部は東壁線よりわずかに内側へ張り出しているが構築材は検出されなかった。燃烧部幅約60cm・奥行き約60cm、煙出し孔は約30cm突出する。出土遺物は須恵器蓋・大形椀などが検出されている。

K105号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 3 焼土塊層 少量のC軽石・炭化物含む。
- 4 焼土・炭化物混土層

第3章 K区の遺構と遺物

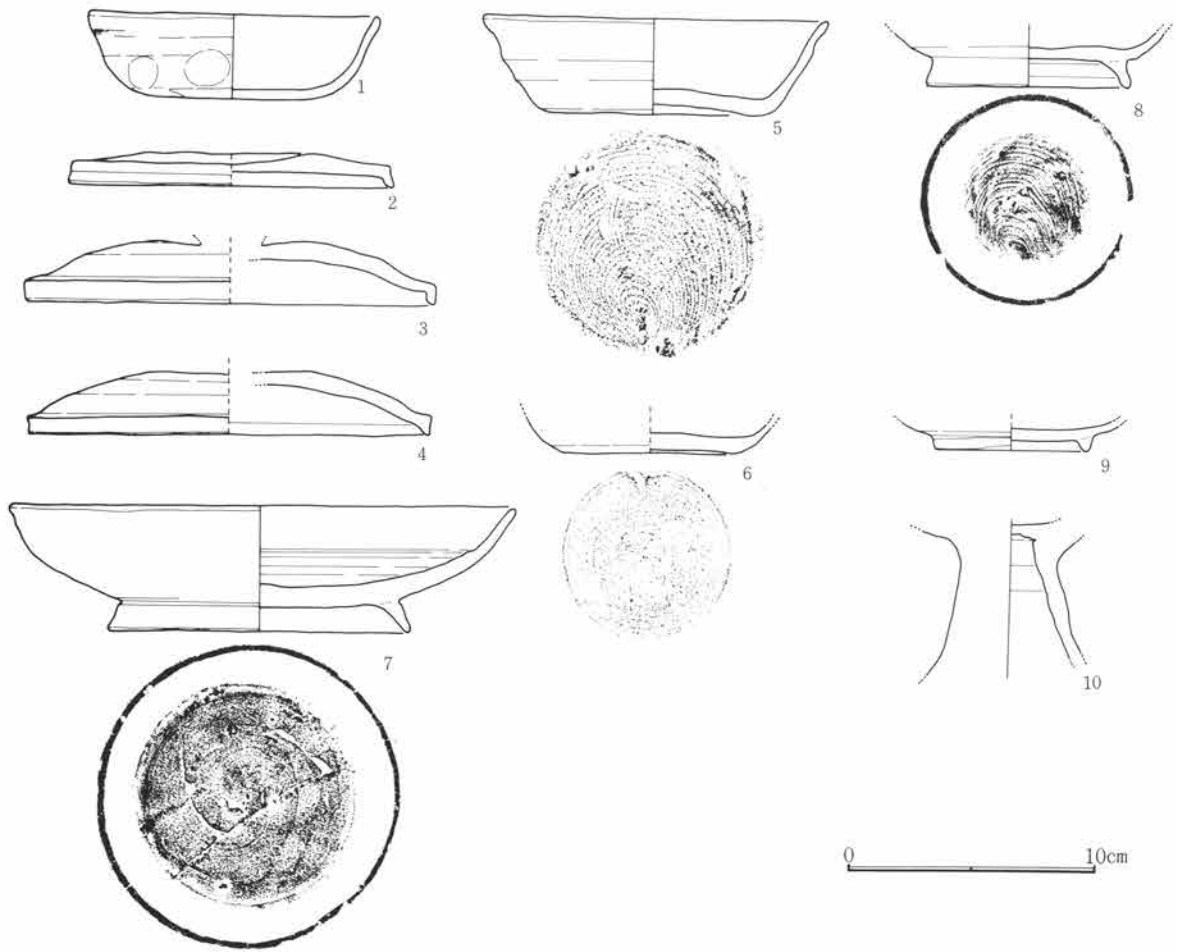


Fig.504 K105号住居跡出土遺物

K 105号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
504-1 186-1	土 師 器 杯	1/4	11.6×6×3.4	南央部壁 際埋土	腰部に丸味をもち、体部は弱く外傾する。口縁部僅かに内湾。口縁部横撫で、体部指頭痕。腰・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密
504-2 186-2	須 惠 器 蓋	1/4	13×-×(1.3)	埋 土	天井部平坦。摘付かない。口縁部は外反気味で鋭く折れる。天井部回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
504-3 186-3	須 惠 器 蓋	1/4 摘 欠損	16.5×-×(2.5)	竈前埋土	天井部僅かに窪み、体部はやや丸味をもつ。口縁部直下に折れる。天井部回転篋削り。	①良好 ②明青灰 ③やや粗 小石混る
504-4 186-4	須 惠 器 蓋	1/4 摘 欠損	16.2×-×(2.6)	埋 土	天井部平坦をなし、体部はやや丸味をもつ。口縁部直下に折れ、口唇部は尖る。天井部回転糸切り後回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 白色粒混る
504-5 186-5	須 惠 器 杯	1/4	14×4.4×3.8	貯蔵穴際 床面	底部窪み、体部直線的に外傾する。口縁部くびれて外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗 砂多く混る。
504-6 186-6	須 惠 器 杯	底 部	-×6.9×(1.5)	埋 土	轆轤成形。回転糸切り後底部周辺・腰部回転篋削り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 小石混る
504-7 186-7	須 惠 器 碗	口縁1/2 欠損	20.5×12.2×5	中央部埋 土	体部丸味をもち内湾して大きく開く。内面体部に弱い段をなす。付高台、やや高くハの字状に開く。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
504-8 186-8	須 惠 器 碗	体部欠 損	-×8.2×(2)	埋 土	付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 密 黒色細粒混る
504-9 186-9	灰 釉 陶 器 碗?	底部1/4	-×6×(0.9)	埋 土	高台低く丸味のある略三角。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密
504-10 186-10	須 惠 器 脚 付 盤	脚 部	-×-×(6) 脚基底径 3.8	西央部床 面	脚中位はやや脹らむ。	①良好 ②青灰 ③ やや密 細白粒混る

K106号住居跡 (Fig. 505~508・PL. 187)

K区北東部に位置し、50・51K33~35の範囲にある。72号・90号・99号・112号住居跡と重複しているが、72号・112号より新しく、90号・99号より古い時期の所産である。90号・99号住居跡によって北部から西部にかけての一部は消失しているが平面形は南北に長軸をもつ方形を呈す。南北長は4.1m以上、東西長約2.8mを測る。竈を基軸にする方位はN-90°-Eを示す。壁高は浅く約10cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み跡まりは弱い。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されていない。竈は東壁の南よりに付設され燃焼部は半円形に掘り込まれる。袖部は東壁線上の左袖に凝灰岩加工材が埋設されている。燃焼部幅約50cm・奥行き45cmを測る。出土遺物は竈周辺に集中して見られ、鎌・刀子類の鉄製品も検出されている。

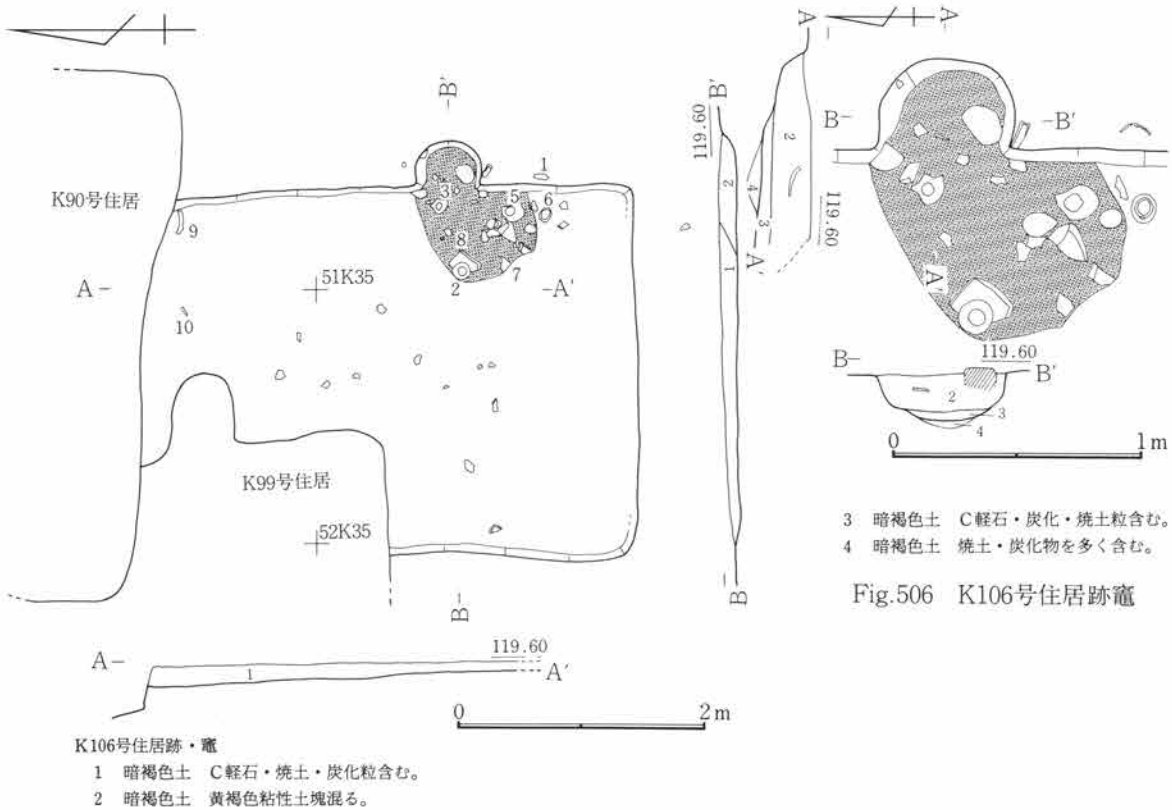


Fig.505 K106号住居跡

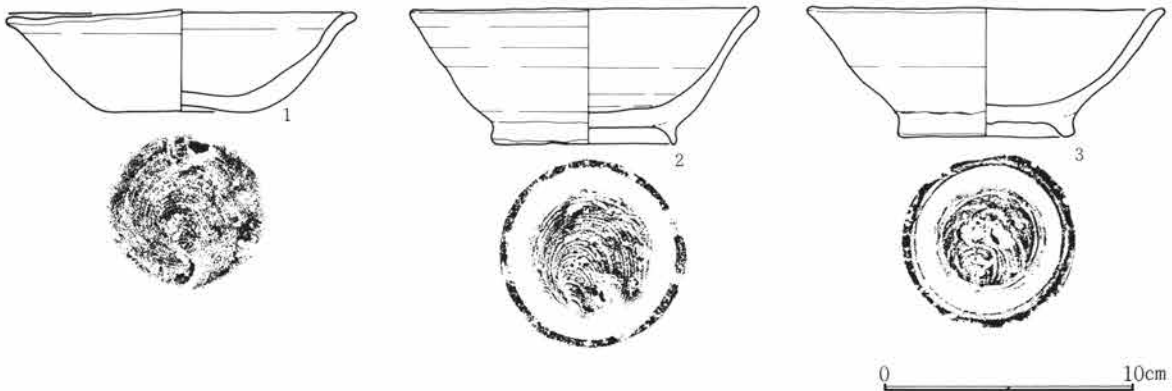


Fig.507 K106号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

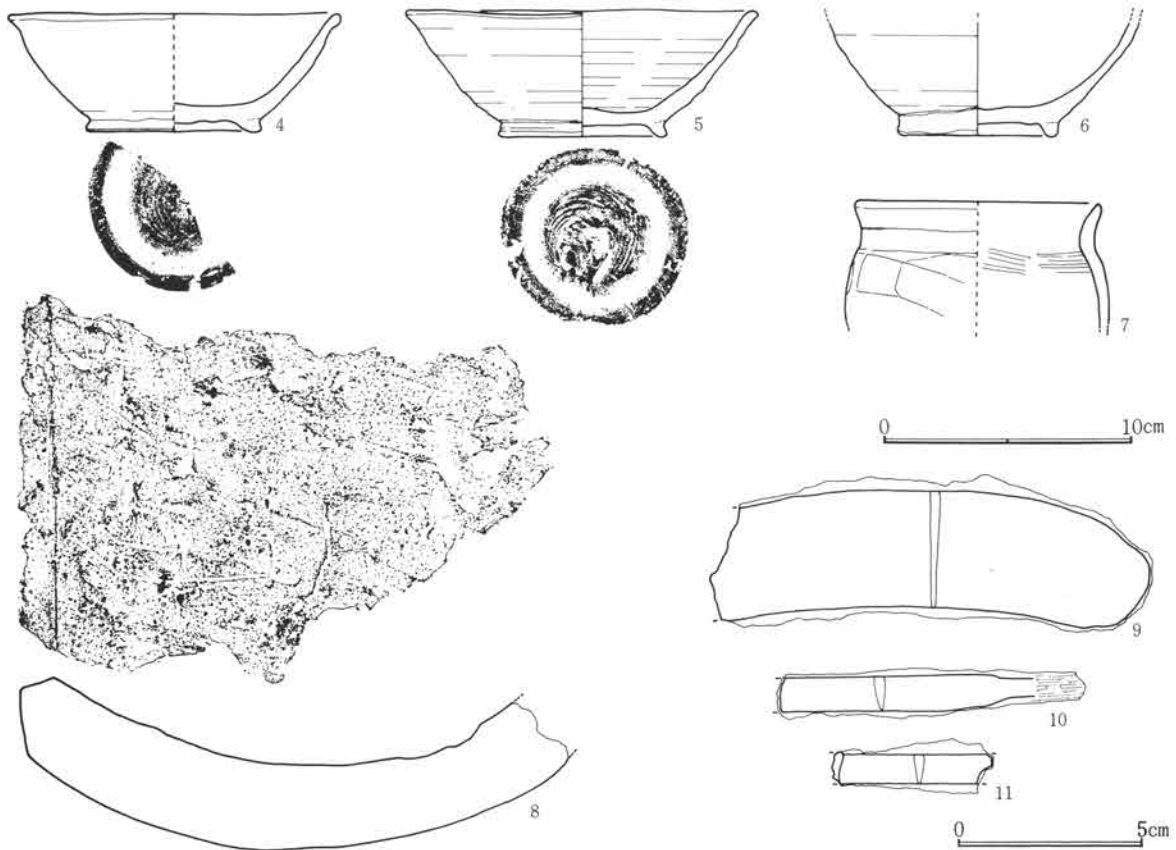


Fig.508 K106号住居跡出土遺物(2)

K 106号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
507-1 187-1	須 惠 器 杯	1/4	14×6.4×4.1	東壁南側 壁外	腰部やや肥厚し、丸味をもつ。口縁部外反して開き、口唇部丸まり強く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 やや軟 ② 灰褐 ③やや密
507-2 187-2	須 惠 器 碗	完	14×7.5×5.4	竈前埋土	腰部やや肥厚し、丸味をもつ。口縁部小さく外傾する。付高台、細く内湾気味に小さく開く。	①良好 ②灰 ③や やや粗 砂混る
507-3 187-3	須 惠 器 碗	1/4	14.3×7.1×5	竈内埋土	体部僅かに丸味をもち、口唇部肥厚気味で外反する。付高台、低く外反して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 やや軟 ②灰白 ③やや密
508-4 187-4	須 惠 器 碗	1/4	13.3×7×4.7	埋 土	体部僅かに丸味をもつ。口縁部くびれて外反する。口唇部丸まる。付高台、低い。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③ やや密 細砂混る
508-5 187-5	須 惠 器 碗	1/4	14.1×6.8×5	竈際床面	体部張り少なく、大きく開く。口唇部外反。付高台、低くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 やや軟 ②灰褐 ③やや粗
508-6 187-6	須 惠 器 碗	上半部 欠損	—×6.4×4.5	竈際床面	体部張り丸味強い。付高台、低く雑な作り。内外面燻し処理で黒色。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②黒灰 ③やや密
508-7 187-7	土 師 器 小型 甕	1/4 半欠損	10×—×(4.7) 胴部13.6	竈前床面	胴部張り少ない。口縁部直立後上端は内湾気味に開く。口縁部横撫で、胴部横～斜篋削り。内面横篋撫で。最大径胴。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
508-8 187-8	平 瓦		厚4	竈前埋土	凹面横・凸面縦篋削り。	①良好 ②灰 ③綺 状
508-9 187-9	鉄 製 品 鎌	端部欠 損	長(11.7) 幅3	北東部床 面	弧状に湾曲する。	
508-10 187-10	鉄 製 品 刃 子 ?	刃部?	長(4.2) 幅0.8	床 下		
508-11 187-11	鉄 製 品 刃 子	両端欠 損	長8.2 幅0.9	床 下	柄部に木質付着する。	

K107号住居跡 (Fig. 509~512・PL. 188・189)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.47 × 3.20	N— 76° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (55.0 × 45.0 × 32.0)

K区北東部に位置し、54~56K31・32の範囲にある。71号・82号・84号・113号住居跡と重複しており、71号・82号・84号より古い時期の所産である。113号住居跡との新旧関係は113号の遺存が悪く不明である。平面形は南北方向がわずかに長いものの、ほぼ正方形に近い形態をもつ。遺存状況は良好で、壁高は約70cmを測り深い掘形をもつ。床面は平坦をなし踏み締まりも良好である。壁下の溝は南東隅の貯蔵穴付近で跡切れるが、各壁下に良好な状態を巡る。幅12~20cm・深さ約10cmを測る。柱穴はP₁~P₄の4ヶ所に検出され、P₁は上径30×26cm・下径は20×16cm・深さ24cm、P₂は上径20cm・下径10cm・深さ20cm、P₃は上径30×22cm・下径12cm・深さ28cm、P₄は上径18cm・下径10cm・深さ22cmを測る。また各柱間はP₁・P₂間1.4m、P₂・P₃間1.44m、P₃・P₄間1.44m、P₁・P₄間は1.34mである。竈は東壁のやや南寄りに付設され袖部が住居内に張り出し燃烧部を形成する。袖部先端には凝灰岩の加工材が埋設され、これに架する状態で同質の長方形加工材が検出されている。煙道部は燃烧部より直立し水平に延びる。袖部長さ45cm・内法40cm、燃烧部奥行き50cm、煙道部長さ75cmを測る。出土遺物は須恵器短頸壺・高杯・滑石製勾玉などが検出されている。

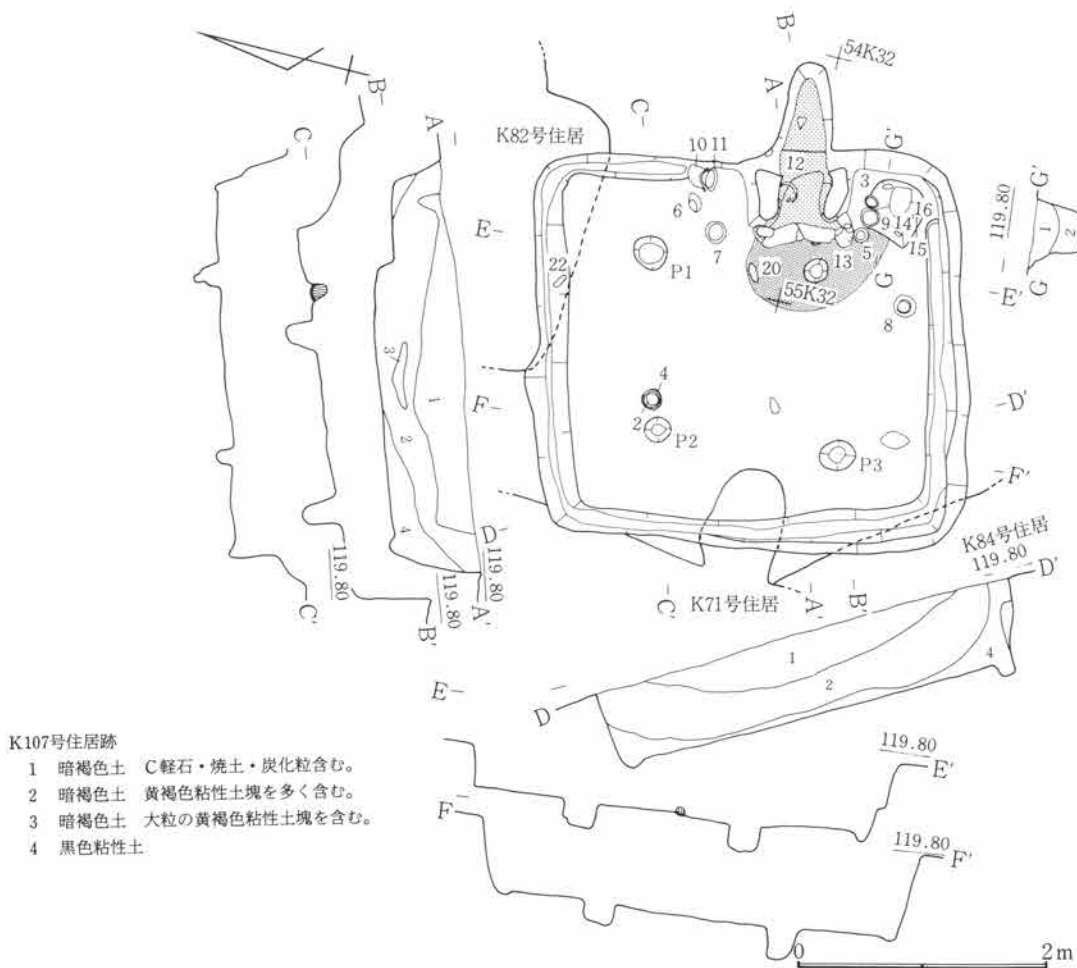
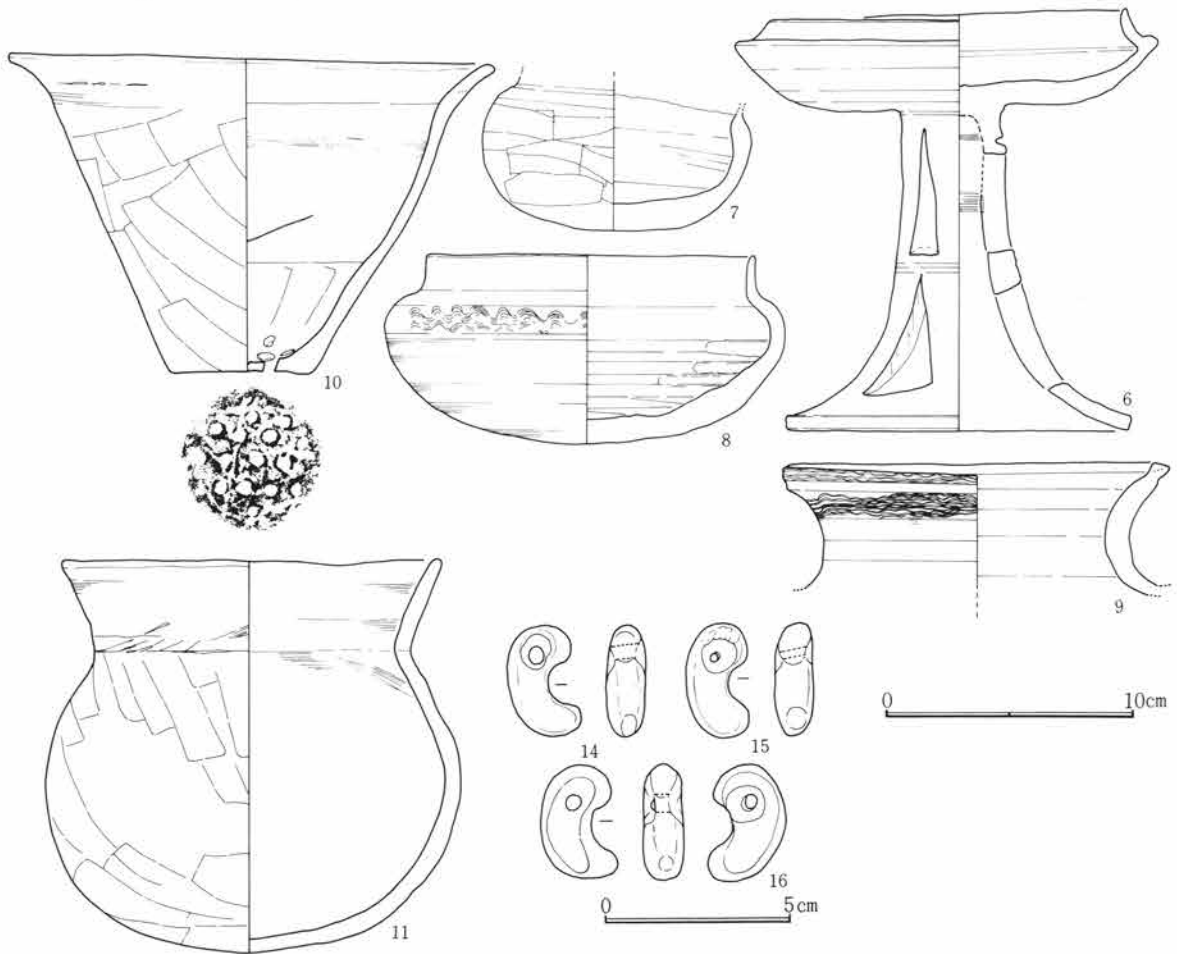
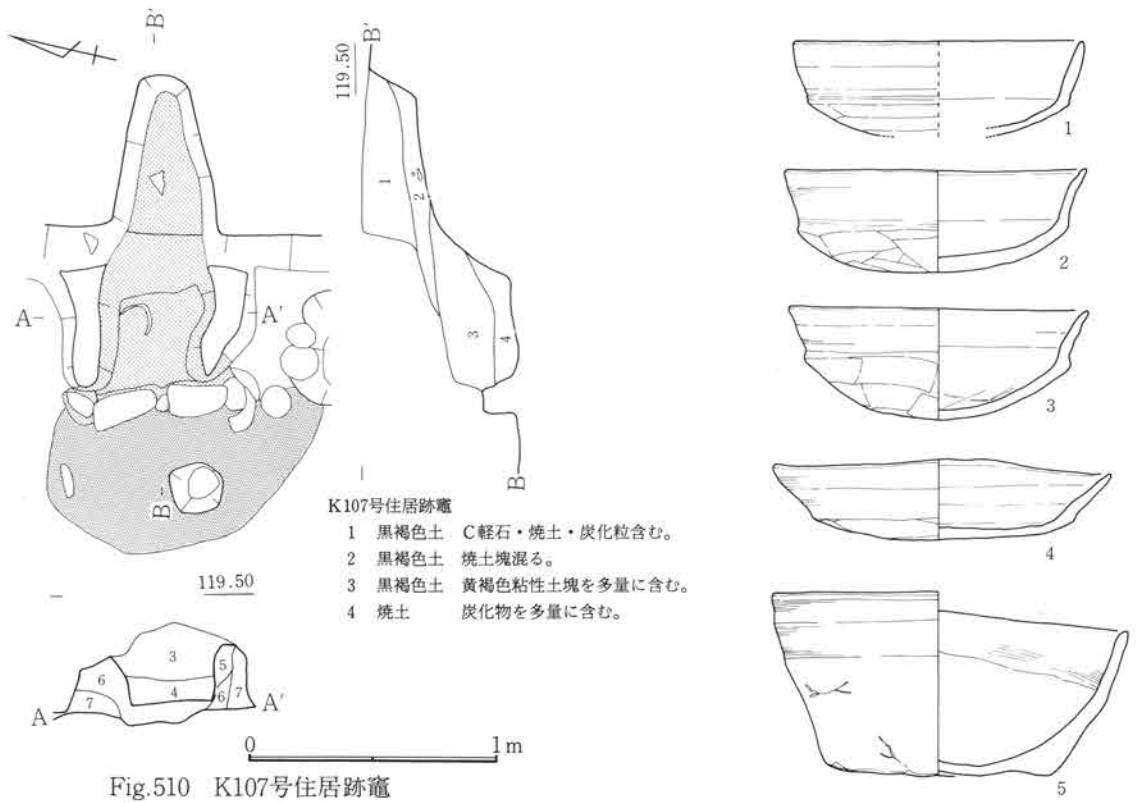


Fig.509 K107号住居跡

第3章 K区の遺構と遺物



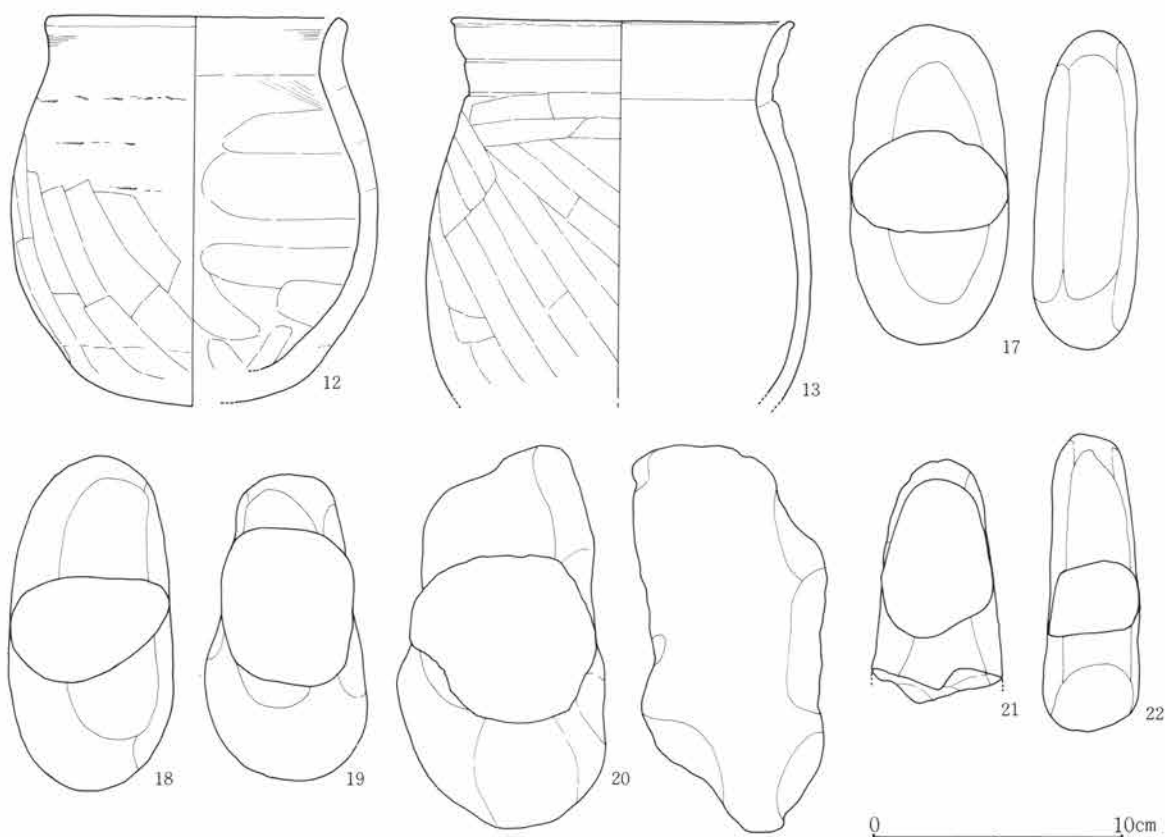


Fig.512 K107号住居跡出土遺物(2)

K 107号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
511-1 188-1	土 師 器 杯	1/2	11.6×—×3.8 口径高 2.3	埋 土	口縁部やや肥厚し、直線的で僅かに外傾する。受け部2条の凹線巡る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①やや軟 ②橙 ③密
511-2 188-2	土 師 器 杯	完	12.1×—×4.1 口径高 2	北西部床 面	やや深い丸底の底部から、口縁部は屈して外反気味に開く。口唇部尖り、内湾気味。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
511-3 188-3	土 師 器 杯	完	12×—×4.4 口径高 1.6	貯蔵穴際 床面	深い丸底から強く屈して外反する口縁部に至る。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
511-4 188-4	土 師 器 杯	完	13.4×—×3.2 口径高 2.3	北西部床 面	浅く平扁な底部から屈して口縁部は大きく外傾して開く。口唇部は尖り、僅かに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
511-5 188-5	土 師 器 鉢	体部3 欠損	14.4×9×7.3	貯蔵穴際 床面	腰部肥厚し、体部下半は外反気味。中位で屈し上半はやや内湾する。平底。体部上半内外面横撫で、下半から底部指頭による成形痕残る。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗 小石混る
511-6 189-6	須 恵 器 高 杯	完	14.3×14×16.5 杯部受け径17 口径高 1 脚部基底径 4	竈前床面	杯部口縁は外反気味に内傾する。受け部大きく張り端部は丸まる。底部浅く平ら。脚部長く三角形2段3方の透し。上下透し間に不鮮明な2条の凹線巡る。脚端部角張る。杯部底は回転篋削り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 砂混る
511-7 189-7	須 恵 器 短 頸 壺	口縁部 欠損	—×—×(5.7) 胴部径10.7	貯蔵穴際 床面	胴部丸く張りやや扁平。底部丸い。全体に肥厚する。内面横撫で。胴部～底部手持ち篋削り。	①良好 ②青灰 ③粗 白色小石混る
511-8 189-8	須 恵 器 短 頸 壺	完	13.1×—×7.5 胴部径16	南央部床 面	口縁部短く直立する。肩部強く張り、胴部は丸く扁平。底部肥厚し丸い。肩部5本1条の波状文。胴部～底部櫛目状回転篋調整。内面指撫で。最大径胴部。	①良好 ②灰 ③やや粗 小石混る

K 107号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
511-9 189-9	須 惠 器 甕	口頸部	15.6×—×(5.2)	貯蔵穴際 床面	頸部強く外反する。口縁部くびれて断面角張る口唇に至る。口唇部上端面は外斜する。口縁部5本1条、頸部上位13本1条の波状文。	①良好 ②灰白 ③密
511-10 189-10	土 師 器 甕	完	19.4×5.6×12.8	東壁際床 面	胴部直線気味に立ち上がり、口縁部は外反して開く。底部平たく14孔を穿つ。内面上半横撫で、下半横撫で、外面口縁部横撫で、胴部斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 砂混る
511-11 189-11	土 師 器 甕	完	15.2×—×15.5 最大径胴部16.6	東壁際床 面	胴部球形を呈し、口縁部はくの字状に折れて直線的に開く。底部丸底。口縁部内外面横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②橙 ③粗 小石多く混る
512-12 189-12	土 師 器 甕	1/2	12.1×—×15.2 最大径胴部14.6	竈 内	胴部下脹れを呈し、口縁部は短く僅かに外反気味。底部丸底。器肉厚い。口縁部横撫で、胴部縦篋削り。内面胴部指頭による横撫で。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗 砂混る
512-13 189-13	土 師 器 甕	1/2 下 位欠損	13.8×—×(15) 最大径胴部15.3	竈前床 面	下脹れのやや長目の胴部。口縁部中位でくびれ、僅かに外反して開く。口唇端部は小さく丸まる。口縁部横撫で、胴部横～斜篋削り。	①良好 ②淡橙 ③ やや粗 小石混る
511-14 189-14	石 製 品 勾 玉	完	長2.9幅1.8厚1.1 7.5 g	貯蔵穴内	両面穿孔	滑石
511-15 189-15	石 製 品 勾 玉	完	長3幅1.7厚1.1 7.3 g	貯蔵穴内	両面穿孔。	滑石
511-16 189-16	石 製 品 勾 玉	完	長3.1幅2.1厚1.1 9.1 g	貯蔵穴内	両面穿孔。	滑石
512-17 189-17	石	完	12.6×6.4×4.2 513 g	埋 土		ひん岩
512-18 189-18	石	完	13.2×6.5×4.3 583 g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
512-19 189-19	石	完	12.1×6.5×6 742 g	埋 土		石英閃緑岩
512-20 189-20	石	完	15.3×8.3×7.8 688.8 g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
512-21 189-21	石	片端欠 損	19.6×5.3×6 (421 g)	竈前埋土		輝石安山岩(粗粒)
512-22 189-22	石	完	11.7×3.9×3 264 g	北壁際埋 土		輝石安山岩(粗粒)

K 108号住居跡 (Fig. 513・514・PL. 190)

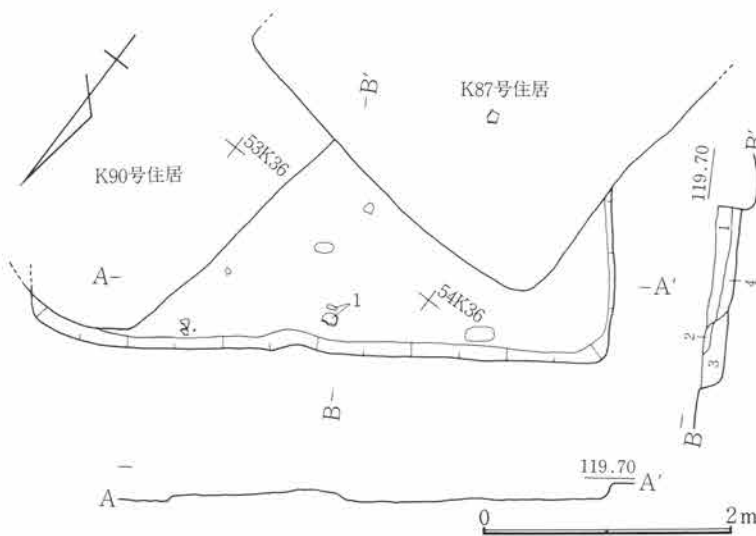


Fig.513 K108号住居跡

K区北東部に位置し、53・54K 35・36の範囲にある。87号・99号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。検出部分は西壁沿いの約4mの範囲である。平面形は方形を呈すと考えられ、西壁線方向はN-55°-Eを示す。壁高は約10cmで浅い。竈など諸施設は検出されていない。出土遺物は少ない。

K108号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒・焼土粒多量含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色粘性土塊含む。
- 4 黒褐色土 3層によく似る。

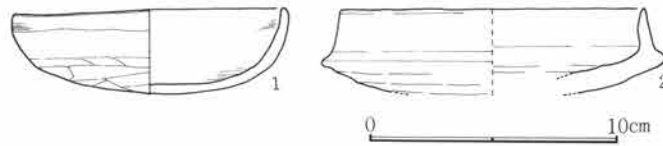


Fig. 514 K108号住居跡出土遺物

K 108号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
514-1 190-1	土師器 杯	完	11×-×3.3	西壁際床 面	口唇端部丸まり内傾気味。丸底。口縁部内外面横撫で。底部不定方向寛削り。	①良好 ②赤褐 ③ やや密
514-2 190-2	須恵器 杯	1/2	12.2×-×(3.3) 受け径13.8	埋土	受け部丸まり鈍化。口縁部直線的で内傾する。口唇部は尖る。底部浅く扁平。轆轤成形。底部回転寛削り。	①良好 ②灰白 ③ 密 白色細粒混る

K109号住居跡 (Fig. 515・516・PL. 190)

K区北西部に位置し、66~68K37~40の範囲にある。97号住居跡・15号溝と重複しているが、これらよりも新しい時期の所産である。また南壁はこの重複のため消失しているが、平面形はほぼ南北に長軸をもち隅丸方形あるいは楕円形を呈すると考えられる。竈などの諸施設は検出されず住居跡である確定はできない。南北長は5.2mまで確認され東西長約4.4mを測る。壁高は約14cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱く、床下には多数の土坑が検出されておりほぼ円形を呈し径50cmから1m・深さ30~40cmを測る。出土遺物は

土師器小形杯・内黒処理土器などが検出されている。

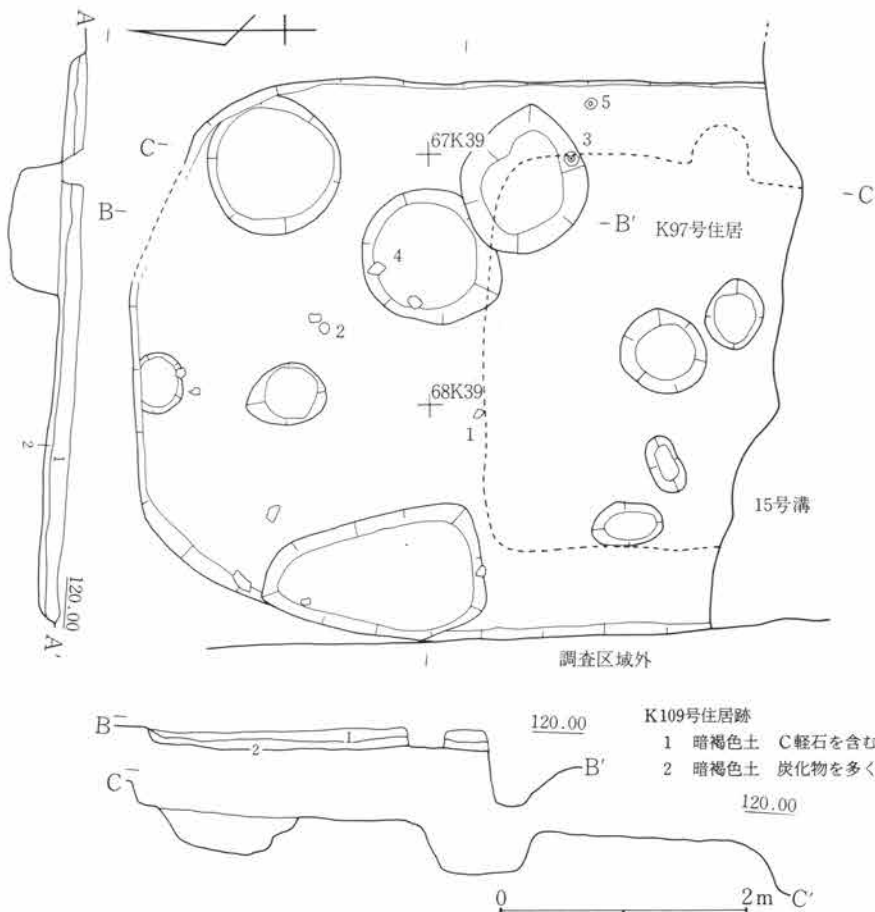


Fig. 515 K109号住居跡

第3章 K区の遺構と遺物

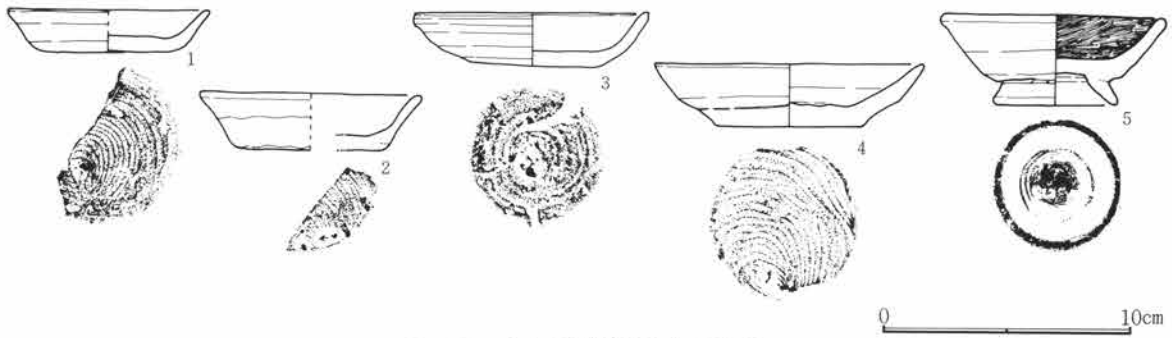


Fig.516 K109号住居跡出土遺物

K 109号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
516-1 190-1	土 師 杯	質 1/2	8.1×5×1.7	中央部床 面	浅く、短い体部が直線的に開く。見込部円板状にもり上がる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗
516-2 190-2	土 師 杯	質 1/4	9×6×2.2	中央部床 面	体部外反気味に開き、口唇部丸まる。見込部円板状にもり上がる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
516-3 190-3	土 師 杯	質 完	9.4×5×2.2	東部埋土	腰部に丸味をもつ。口唇部細り、外面に浅い凹線巡る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③や や粗 細砂混る
516-4 190-4	土 師 杯	質 3/5	10.8×5.8×2.5	埋 土	腰部外反し、中位でくびれ上半は直線的に開く。口唇部細る。器肉厚い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
516-5 190-5	土 師 碗	器 完	9.2×5×3.6	東壁際床 面	体部直線的に開き、口唇部丸まる。付高台、やや高くハの字状に開く。内面細かい篋磨き、黒色処理。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密

K 110号住居跡 (Fig. 517・518・PL. 190)

K区北西部に位置し、64・65K31～33の範囲にある。80号・95号住居跡と重複しておりこれらより古い時期の所産である。重複によって東半は消失しており、竈などの諸施設は検出されていない。平面形は方形を



Fig.517 K110号住居跡

呈すると考えられるが南北約4m・東西は2.6mの範囲まで検出されている。西壁線はN-10°-Eの方位を示し、壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締めりは弱い。出土遺物は灰釉陶器のほか少量の検出である。

K110号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C 軽石が上層より多い。

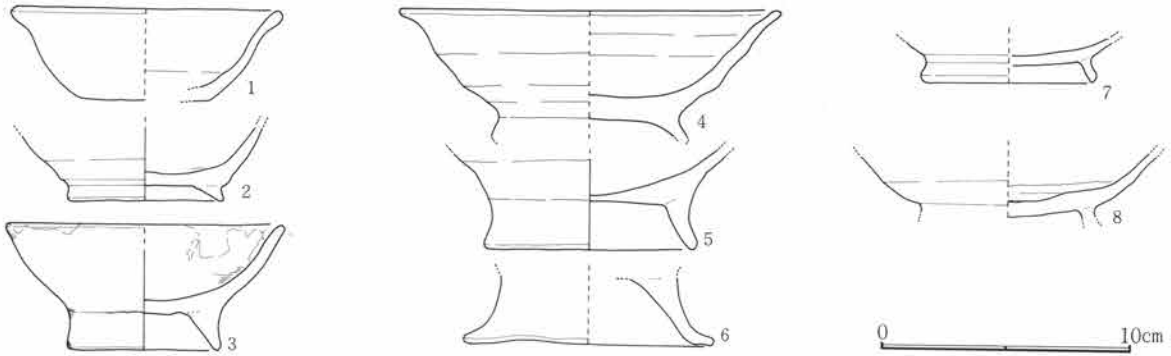


Fig.518 K110号住居跡出土遺物

K110号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
518-1 191-1	須恵器 杯	1/2 底部 欠損	10.9×5.2×3.6	埋土	体部丸く張り、口縁部はくびれて外反する。口唇部やや肥厚し丸まる。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 良好 ②鈍い橙 ③粗 小石混
518-2 191-2	須恵器 椀	底部	—×6.3×(2.9)	北西部埋土	内外面燻し、付高台、轆轤成形。回転糸切り。	①燻し やや軟 ②黒灰 ③やや粗
518-3 191-3	土師質 椀	口縁1/2 欠損	11.2×6.2×5.0	北央部床面	体部丸味をもち、口縁部僅かに外反。付高台、高く直線的に開く。口唇部内外面に油煙付着。轆轤成形。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密
518-4 191-4	土師質 椀	1/2 高台 欠損	15.4×—×(5)	埋土	体部緩い段をなし大きく外傾する。口縁部外反気味。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや密 茶色粒混る
518-5 191-5	土師質 椀	底部	—×8.6×(3.8) 高台高 2	埋土	底部中央薄い。付高台、高く外反して開く。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや密 砂混る
518-6 191-6	須恵器 椀	高台部 1/2	—×10×(2.7) 高台高 2.5	西央部埋土	内外面燻し。付高台、高くハの字状に開き、端部は折れて水平に開く、下端面に凹線巡る。	①良好 ②灰 ③やや密 砂混る
518-7 191-7	灰釉陶器 皿?	底部1/2	—×7×(1.8)	埋土	見込部僅かに凹む。高台直線的に開き、端部やや内湾気味で尖る。	①良好 ②灰白 ③緻密
518-8 191-8	灰釉陶器 椀	底部	—×—×(2.2)	埋土	見込部凹む。重ね焼痕あり。底部回転糸切り痕残る。	①良好 ②灰白 ③緻密

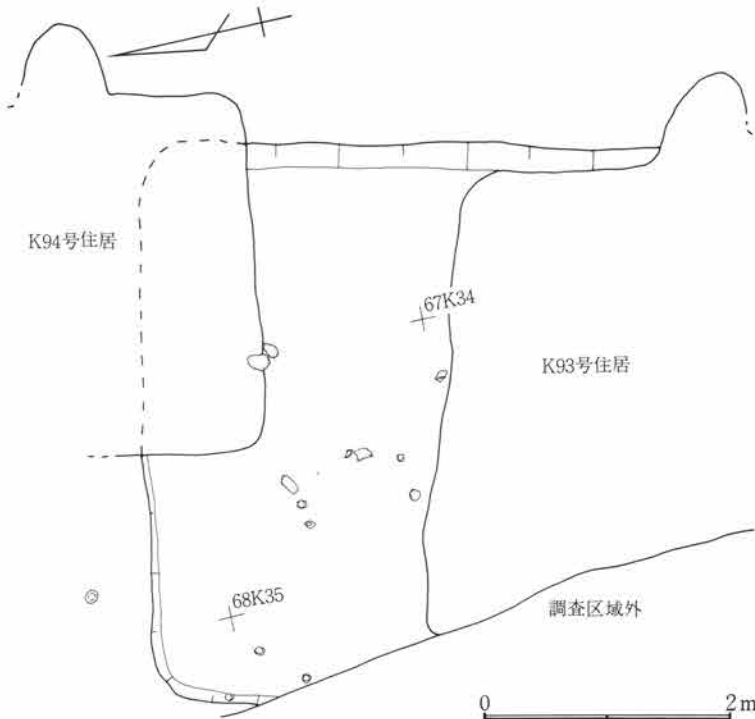


Fig.519 K111号住居跡

K111号住居跡 (Fig. 519・520・PL. 192・193)

K区北西部に位置し、66～68K 33～35の範囲にある。93号・94号住居跡と重複しているがこれらより古い時期の所産である。また西側は調査区域外に延び未検出であり消失部分が大きく、竈などの諸施設は検出されていない。平面形は方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。南北軸長約4.4mを測る。残存する東壁線はN-10°-Eの方位を示す。壁高は約34cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。出土遺物は灰釉陶器・小鉄片などが検出されている。

第3章 K区の遺構と遺物

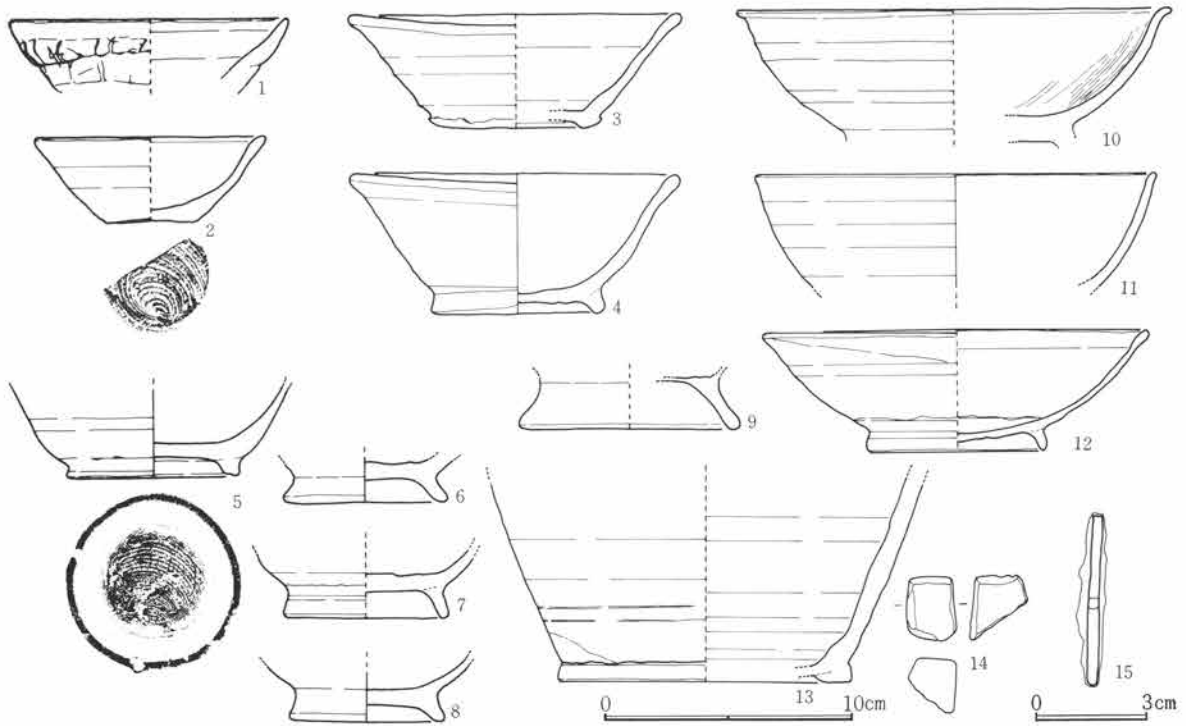


Fig.520 K111号住居跡出土遺物

K111号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
520-1 192-1	土師器 杯	1/5 底部欠損	11.2×—×(2.5)	埋 土	器肉厚く、体部上半はやや内湾して開く。外面巻き上げ成形痕顕著。指頭後端削り。内面撫で。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
520-2 192-2	須恵器 杯	1/5	9.4×3.7×3.4	埋 土	底径小さく、体部中位に丸味をもつ。口唇部は丸く肥厚し外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②褐灰 ③やや粗 白色粒混る
520-3 192-3	須恵器 椀	1/5 底部欠損	13.4×7×4.5	埋 土	体部直線的に外傾し、口唇部丸い。付高台、低く雑。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
520-4 192-4	須恵器 椀	1/5	13.3×7×5.5	埋 土	腰部にやや丸味をもち、上半は外反気味。口唇部丸まる。見込部凹む。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 小石混る
520-5 192-5	土師質 椀	体～底	—×7×(4)	埋 土	轆轤成形。腰部強く張る。胴直線的か、畳付け、段あり。高台でいいい。付高台、底回転糸切り。	①やや軟 ③やや密 白色細粒混る
520-6 192-6	土師質 椀	底部	—×6.6×(2)	埋 土	付高台、やや高く丁寧な作り、ハの字状に開き端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 白色粒混る
520-7 192-7	須恵器 椀	底部1/5	—×6.6×(2.3)	埋 土	見込部うず巻き状の成形痕顕著。付高台、やや高く、直線的でハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや密 白色細粒混る
520-8 192-8	土師質 椀	底部	—×6.2×(2.2)	埋 土	腰部薄く丸味をもつ。底部、付高台肥厚する。高台ハの字状に開く。高台の作り丁寧。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や密
520-9 192-9	土師質 椀	高台部	—×8.8×(2.5) 高台高 1.9	埋 土	底部極めて薄い。付高台、ハの字状に大きく開き、端部丸まる。	①良好 ②褐灰 ③ やや密 黒色粒混る
520-10 192-10	土師器 椀	1/5 高台欠損	17.4×—×(5.3)	埋 土	体部薄く脹らみ、丸味が強い。口唇部外屈し水平になる。内面黒色処理、放射状磨き。付高台。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 白色粒混る
520-11 192-11	灰釉陶器 椀	1/5 底部欠損	16×—×(4.5)	埋 土	腰部丸味をもち、口唇部内側は僅かに内斜。付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
520-12 192-12	灰釉陶器 椀	1/4	15.4×7×4.8	床 下	体部緩く張り、丸味をもつ。口唇部やや肥厚し外傾する。見込部無釉で凹む。高台稜不鮮明で内湾して立つ。腰部及び底部は回転糸削り。付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③ やや密
520-13 193-13	灰釉陶器 瓶	下半1/5	—×11.8×(8)	埋 土	胴部直線的に外傾。付高台、低く幅広。胴部回転糸削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
520-14 193-14	石製品 砥石		2.5×2×2.1 13.2g	埋 土	多面使用 二次使用	流紋岩(砥沢?)
520-15 193-15	鉄製品		4.5×0.3×		角釘?	

K112号住居跡 (Fig. 521~523・PL. 193)

K区北東部に位置し、49・50K33・34の範囲にある。72号・106号住居跡と重複しておりこれらより古い時期の所産であり、西半部はこの重複のため消失している。平面形は方形を呈すると考えられ、南北約3.1mを測り、東西は東壁1.8mまで検出されている。竈を基軸にする方位はほぼN-90°-Eを示す。壁高は約14cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴は南東隅にあり径55×45cmの楕円形に穿たれる。竈は東壁南寄りに付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれるが、袖部・煙道部などの痕跡は確認されていない。燃焼部幅約50cm・奥行き約60cmを測る。出土遺物は少ない。

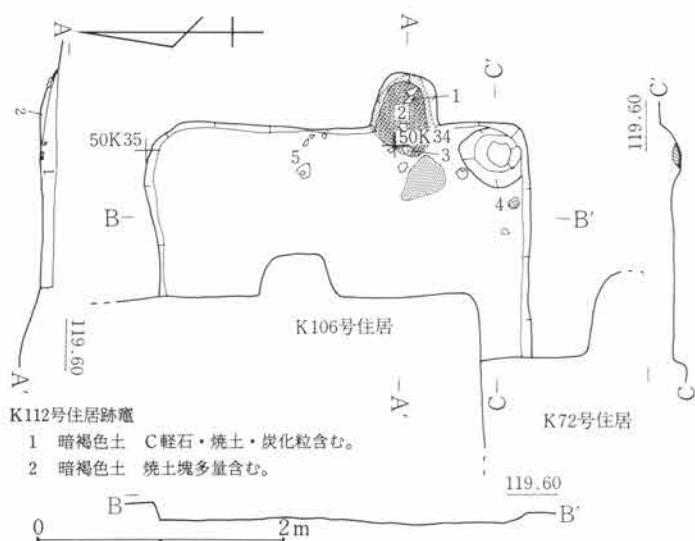


Fig.521 K112号住居跡

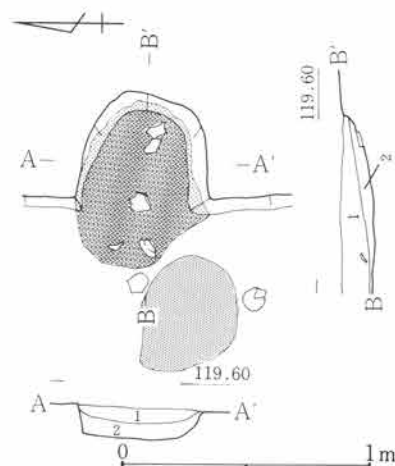


Fig.522 K112号住居跡竈

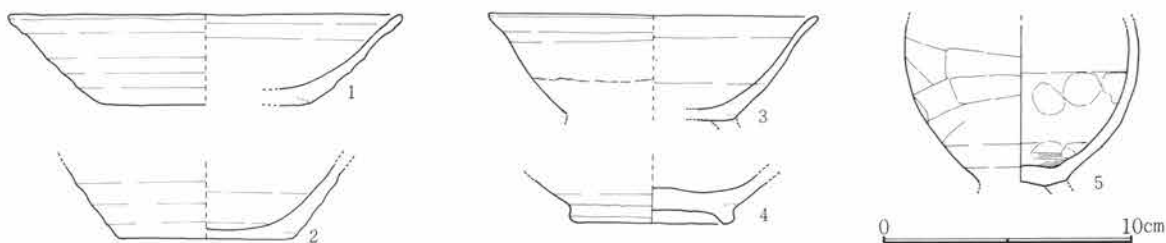


Fig.523 K112号住居跡出土遺物

K112号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
523-1 193-1	須恵器 杯	1/4 底部 欠損	15.8×8×3.6	竈内	体部直線的で、大きく外傾する。口縁部外反気味。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
523-2 193-2	須恵器 杯	底部1/4	—×7×(3)	竈内	底径大きく、体部直線的。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
523-3 193-3	土師器 椀	1/4 高 台欠損	13.2×—×(4.2)	竈内	体部やや丸味をもち、口縁部外反気味に開く。付高台。体部中位に接合痕あり。轆轤成形。	①やや軟 ②橙 ③ やや密 小石混る
523-4 193-4	須恵器 椀	底部	—×6.6×(2)	南東部床 下	付高台、断面四角、幅広。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 白色粒混る
523-5 193-5	土師器 付台	上半部 欠損	—×—×(9.3) 胴径9.3	東中央部床 面	胴部脹らみ、丸味強い。胴部斜・横、腰部横篋削り。内面指頭・篋撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密 砂混る



K113号住居跡

- 1 白灰粘性土 貼り床。
- 2 黒色粘性土 焼土・炭化粒多く含む。

Fig.524 K113号住居跡

K113号住居跡 (Fig. 524~525・PL. 194)

K区北東部に位置し、53・54K31・32の範囲にある。102号・104号・107号住居跡と重複しておりこれらより古い時期の所産である。重複が著しいため消失部分が大きく全体の形態はとらえられず、検出できたのは東壁の一部である。西壁はわずかに認められたにとどまり判然としないが、やや不正な方形を呈すると考えられ、東西軸方位はN-62°-Eを示す。東壁は長さ2.2mを測り、南・北壁とも開きぎみな壁線となる。壁高約8cmで低い立ち上がりである。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈・炉などの諸施設は検出されなかった。出土遺物は少量で、南東隅に土師器甕が検出されたのみである。

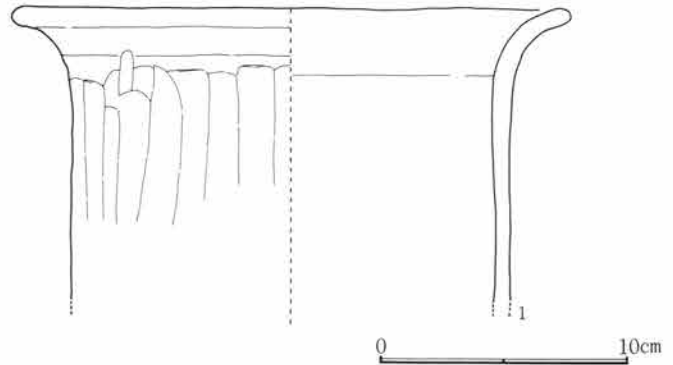


Fig.525 K113号住居跡出土遺物

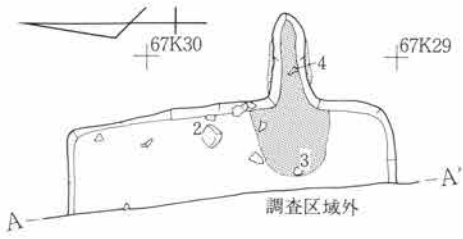
K113号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
525-1 194-1	土師器 甕	胴部上 半	22.4×-×11.5 胴部径17.5	南東際床 面	胴部張りなく長胴を呈す。口縁部水平に近く強く外反する。口唇部丸い。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③粗

K115号住居跡 (Fig. 526~528・PL. 194・195)

K区北西部に位置し、67K29・30の範囲にある。119号・120号住居跡と重複しており、これらより新しい時期の所産である。また西側は調査区域外に延び大半は未検出であるが平面形は方形を呈すると考えられ、竈を基軸とする東西軸方位はN-85°-Eを示す。南北長約2.6mを測り、東西は東壁から約70cmの範囲で確認できた。壁高は約30cmを測る。床面は平坦をなし検出部分にかぎって踏み締まりは良好である。竈は東壁の南寄りに付設されるが壁外に突出する部分は煙道部と考えられ燃焼部に関してその範囲は明らかでない。燃焼部にあたる範囲には焼土粒・灰混じりの層が広がり、これを燃焼部とすれば、幅約65cm・奥行き約60cmである。煙道部は床面より急傾斜で立ち上がり緩傾斜で延び、長さ約70cmを測る。出土遺物は少なく、灰釉陶器などが検出されている。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物



- K115号住居跡竈
- 1 焼土塊層 土器片・炭化物含む。
 - 2 焼土粒層 土器片含む。
 - 3 焼土壁

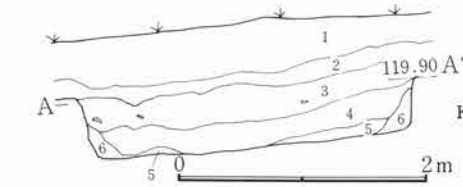


Fig.526 K115号住居跡

- K115号住居跡
- 1 暗褐色土 B軽石主体の耕作土。
 - 2 茶褐色土 B・C軽石混入、下部耕作土。
 - 3 黒褐色土 C軽石・炭化物含む。
 - 4 暗褐色土 C軽石・スコリア含む。
 - 5 茶褐色土 炭化物・C軽石少量混る。
 - 6 茶褐色土

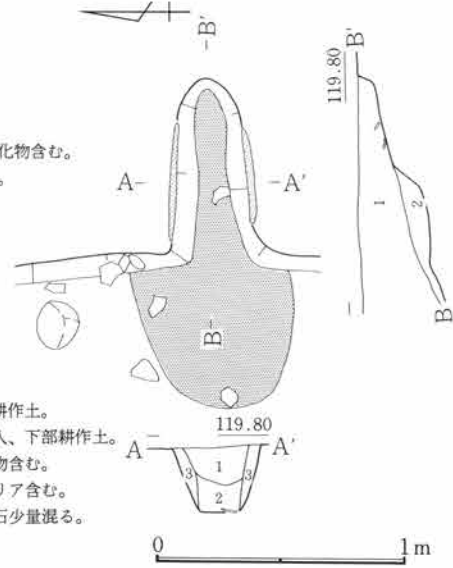


Fig.527 K115号住居跡竈

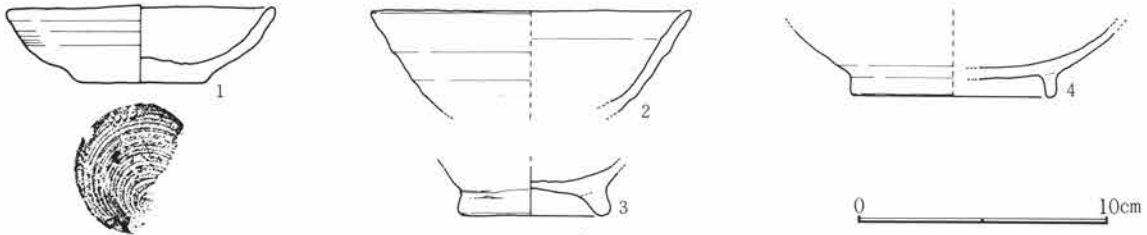
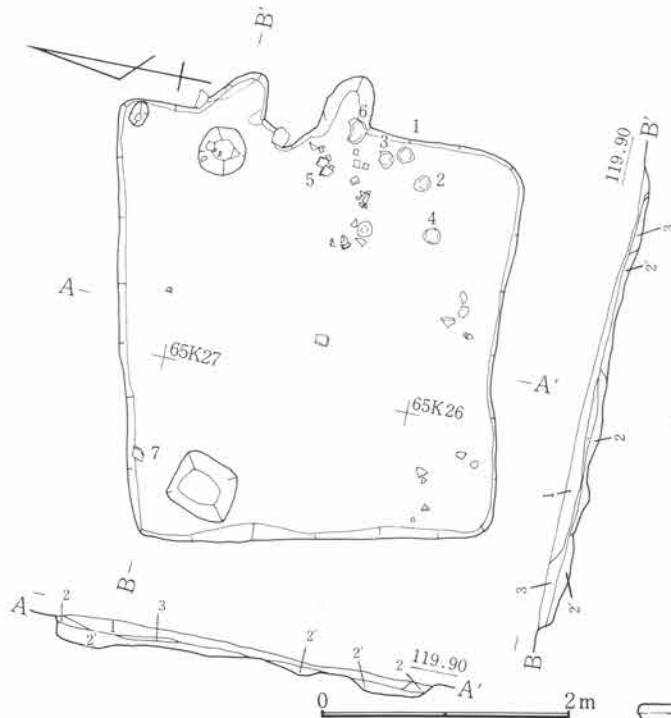


Fig.528 K115号住居跡出土遺物

K 115号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
528-1 195-1	須恵器	杯	完	10.8×5.1×3.1	埋土	腰部くびれ、体部丸く脹らむ。器肉やや厚い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密 ④細砂混る
528-2 195-2	須恵器	碗	1/4 底部欠損	18×-×(4)	東中部埋土	腰部に丸味をもち、口縁部直線的に外傾。轆轤成形。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
528-3 195-3	土師質	碗	底部	-×6.1×(2)	竈前床面	付高台、肥厚し丸まる。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 ④砂混る
528-4 195-4	灰釉陶器	碗	底部1/2	-×8.2×(2.8)	竈内	腰部丸味をもつ。高台丸まり、やや内湾気味に立つ。	①良好 ②灰白 ③緻密

第3章 K区の遺構と遺物



K116号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石混じる。
- 2 黄褐色 砂質土塊混じる。
- 2' 黄褐色土
- 3 暗褐色土 C軽石・炭化物混る。

Fig.529 K116号住居跡

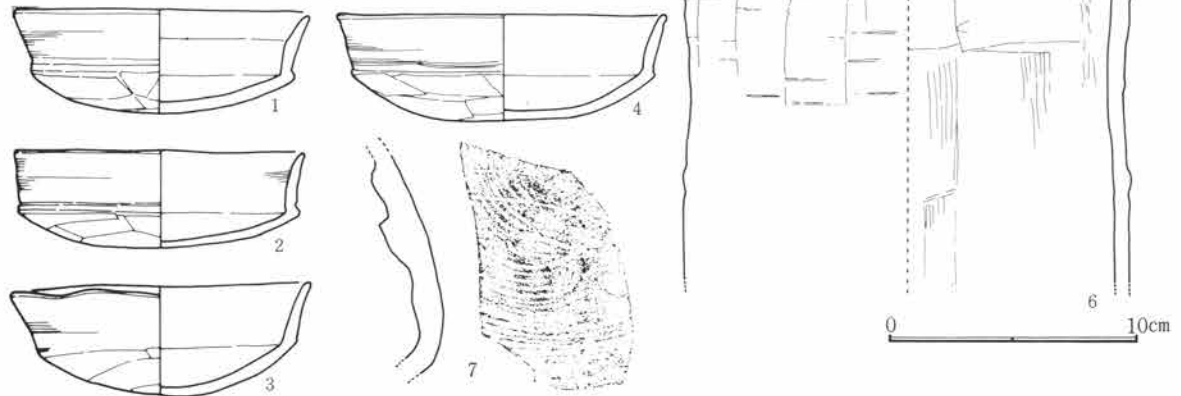


Fig.530 K116号住居跡出土遺物

K116号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
530-1 195-1	土 師 器 杯	完	11.9×-×4.1 受け径10.6 口縁高 2.5	南東部床 面	やや浅く丸底をなす。受け部丸まる。口縁部高く外反気味に立つ。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密 砂少量混る
530-2 195-2	土 師 器 杯	完	11.6×-×3.9 受け径11.3 口縁高 2.5	南東部床 面	底部浅い。受け部凹線巡り鮮明。口縁部高く直立気味で上位は外傾する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③緻 密
530-3 195-3	土 師 器 杯	完	12×-×4.5 口縁高 2.5	南東部床 面	底部やや深く丸い。受け部不鮮明で口縁部は屈して高く、外反気味に立つ。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
530-4 195-4	土 師 器 杯	完	13.2×-×4.2 受け径12.1 口縁高2.3	南東部床 面	やや浅い底部、中心部は平坦をなす。受け部不鮮明で口縁部直線的に外傾。口唇部は丸まる。口縁部強い横撫で。内面撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密 細砂混る
530-5 196-5	土 師 器 鉢	欠	18.7×-×9.3 口縁高 3	東央部床 面	体部深い。底部やや平坦をなす。腰部丸味をもち上半は直線的に外傾し、段をなして口縁部は外反して開く。口唇部は極めて細る。口縁部横撫で、内面撫で。体・底部篋削り。	①やや軟 ②橙 ③ 緻密
530-6 196-6	土 師 器 甕	上半部 1/2	21.7×-×(14.5) 胴径17.8	東壁際床 面	胴部張りなく長胴を呈す。口縁部屈して外傾する。口縁部内外面横撫で。胴部内面横・縦篋撫で。外面縦篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗
530-7 196-7	須 恵 器 瓶	胴部小 片		北西部床 面	外面掻き目。内面蓋状の接合。	①良好 ②灰白 ③ やや密 白色粒混る

K117号住居跡 (Fig. 531・532・PL. 196)

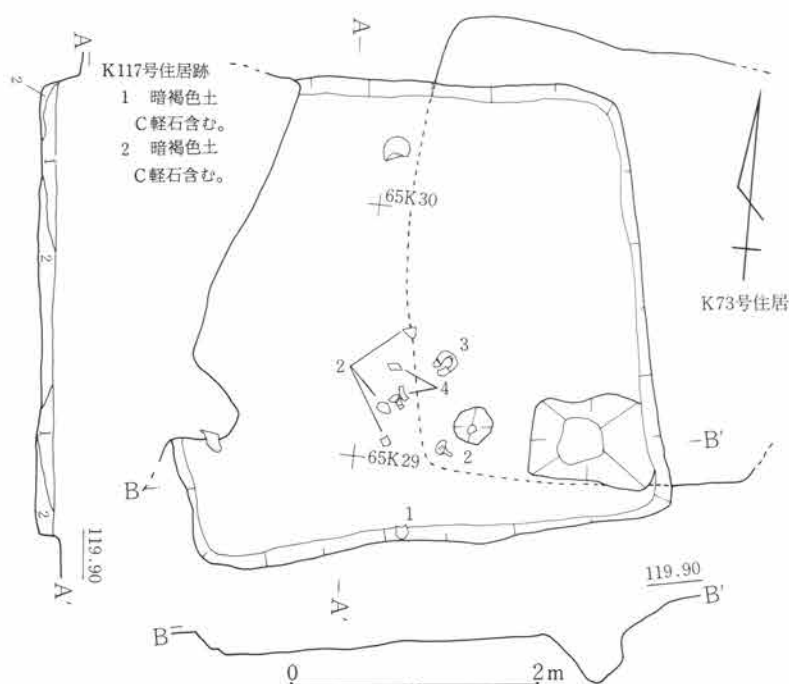


Fig.531 K117号住居跡

K区中央部やや北西部に位置し、63～65K28～30の範囲にある。73号・119号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産であり、西側の一部は119号との重複で消失している。平面形は東壁がやや短く北東部が不正を呈すが、東西・南北長とも約3.8mを測り、東西軸方位はN-76°-Eを示す。壁高は約12cmを測り低い立ち上がりである。床面は緩く凹凸をなし踏み締まりは弱い。南東隅には方形の貯蔵穴と考えられる穴が穿たれ100×70cm・深さ50cmを測る。出土遺物は土師器高杯などが検出されている。

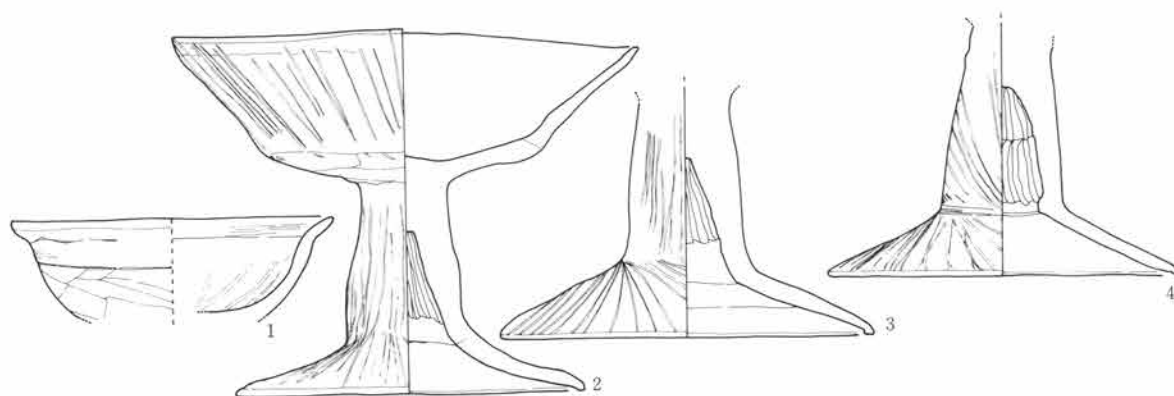


Fig.532 K117号住居跡出土遺物

K117号住居跡出土遺物観察表

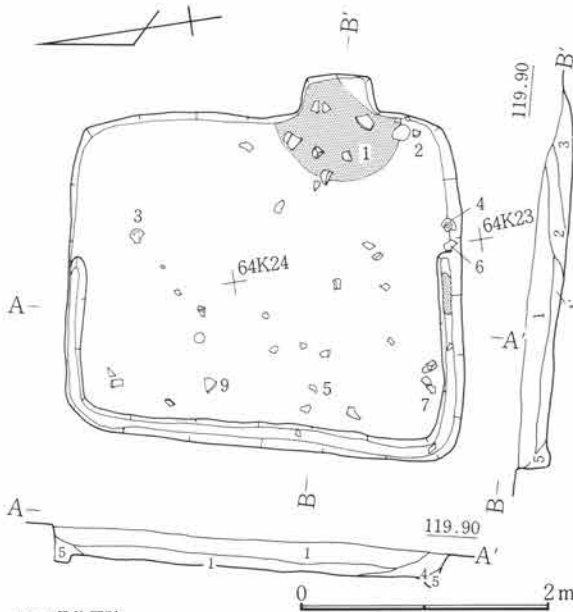
Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
532-1 196-1	土師器 杯	1/2 底部欠損	13×-×(4)	南壁際埋土	体部丸く張り、底部は丸底の様相。口縁部強く外屈して開く。内外口縁部横撫で、内面体部放射状磨き。外面体部篋削り。	①良好 ②暗赤褐 ③やや密
532-2 196-2	土師器 高杯	完	18.8×14×14.5 杯高6 脚基径 3.5	中央部床 面	杯底部水平に広がり丸く屈して体部直線的に大きく外傾。口縁部僅かに内屈。脚部下位で脹らみをもち、裾部大きく開く。端部小さく内屈。杯・脚部縦磨き。内面磨き残るが不鮮明。杯腰部横篋削り。脚内面篋状工具痕顕著。	①良好 ②橙 ③緻密
532-3 196-3	土師器 高杯	脚部	-×15×(10.6) 脚基径3.7	中央部床 面	脚部下方に向かい脹らみ、裾部やや内湾気味に開く。端部屈して接地面平ら。脚部縦・裾部放射状磨き。内面篋状工具痕顕著。	①良好 ②橙 ③やや密 白色粒混る
532-4 196-4	土師器 高杯	脚部	-×14×(10.4) 脚基径3.4	中央部床 面	脚部下方に向かい脹らむ。裾部直線的に大きく開き、端部細く丸まる。脚・裾部放射状磨き。内面2段の篋状工具痕顕著。	①良好 ②橙 ③やや粗 細砂混る

K118号住居跡 (Fig. 533~535・PL. 197)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.18 × 7.77	N— 98° —E	東壁南寄り	—————

K区中央部やや西寄りに位置し、63・64K23・24の範囲にある。122号・135号住居跡と重複しているが、これらより新しい時期の所産である。平面形は南北方向にやや長い方形を呈する。壁高は約20cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、西半部の踏み締まりがやや弱い。西壁から南・北壁の一部にかけて壁下の溝が巡る。幅約12cm・深さ約6cmを測る。南壁下の溝面には122号住居跡に付設されていたと考えられる竈の痕跡が認められていた。竈は東壁の南に寄って付設され、方形に掘り込まれる。袖部・煙道部は検出されていない。燃

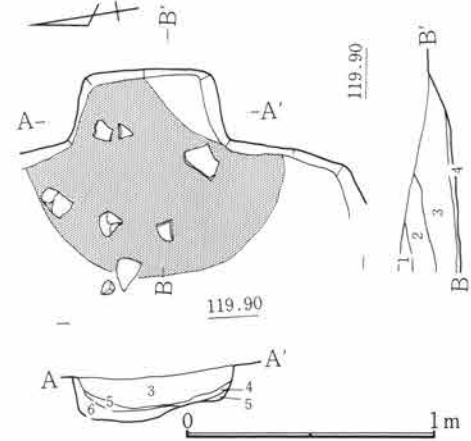
焼部幅約65cm、奥行きは床面に流失した灰層下の火床面からすると約60cmを測る。出土遺物は灰釉陶器ほか



K118号住居跡

- 1 灰褐色土 C軽石・炭化物・焼土粒含む砂層。
- 1' 灰褐色土 C軽石・炭化物・焼土粒含む砂層。
- 2 黄色土塊層 焼土塊含む。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土塊多量含む。
- 4 灰褐色土 1層に似る砂層。
- 5 灰褐色土 4層よりC軽石が少ない砂層。

Fig.533 K118号住居跡



K118号住居跡竈

- 1 灰褐色土 C軽石・炭化物・焼土粒含む砂層。
- 2 黄色土塊層 焼土塊含む。
- 3 灰褐色土 炭化物・焼土塊多量含む。
- 4 黒灰層 上層に炭化物、下層に砂層。
- 5 火床面
- 6 暗褐色砂層地山。

Fig.534 K118号住居跡竈

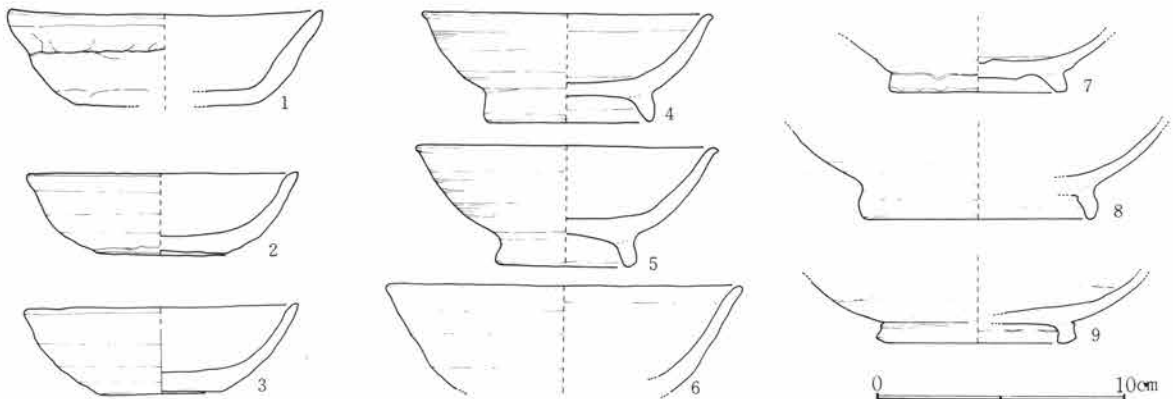


Fig.535 K118号住居跡出土遺物

K 118号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
535-1	土師器 杯	1/4	12.5×7×3.5	竈前床面	脚部にやや丸味をもち、中位でくびれ上半は直線的に外傾して開く。体部巻き上げ痕1条。指頭成形痕顕著。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 細砂混る
535-2 197-2	須恵器 杯	1/4	11×5.3×3.2	南東部床面	体部丸味をもち、口縁部僅かに外反し、口唇部は細り外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 砂混る
535-3 197-3	須恵器 杯	体部1/5 欠損	11×4.9×3.5	北中央床面	体部丸味をもち、口唇部尖る。底径小さい。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②浅黄 ③ やや密
535-4 197-4	土師質 碗	1/5	11.6×6.8×4.3	南壁際床面	体部丸く、口唇部細り外屈する。付高台、肥厚しやや高目作り丁寧。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③や や粗 砂混る
535-5 197-5	土師質 碗	1/5	12×5.6×4.7	西中央床面	体部丸く、口唇部細り外屈する。付高台、内湾気味に立ちやや高目。轆轤成形。回転糸切り痕残る。	①良好 ②赤褐 ③ やや粗 砂混る
535-6 197-6	須恵器 碗	1/4 底 部欠損	14.4×—×(4.2)	南壁際床面	腰部に丸味をもち、口縁部僅かに外反する。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②鈍い橙 ③やや粗
535-7	須恵器 碗	底部1/2	—×7.1×(2.5)	南西部埋土	付高台、轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
535-8 197-8	灰釉陶器 碗	底部1/5	—×9.6×(3.7)	埋土	腰部丸く張る。高台肥厚しやや内湾して立つ。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
535-9 197-9	灰釉陶器 碗	底部1/5	—×8×(2.7)	西中央埋土	腰部に丸味をもつ。高台幅広く角張り、内湾気味に立つ。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 密

K 119号住居跡 (Fig. 536~539・PL. 198・199)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
——	— × 3.8	N— 106° —E	東壁やや南寄り	——

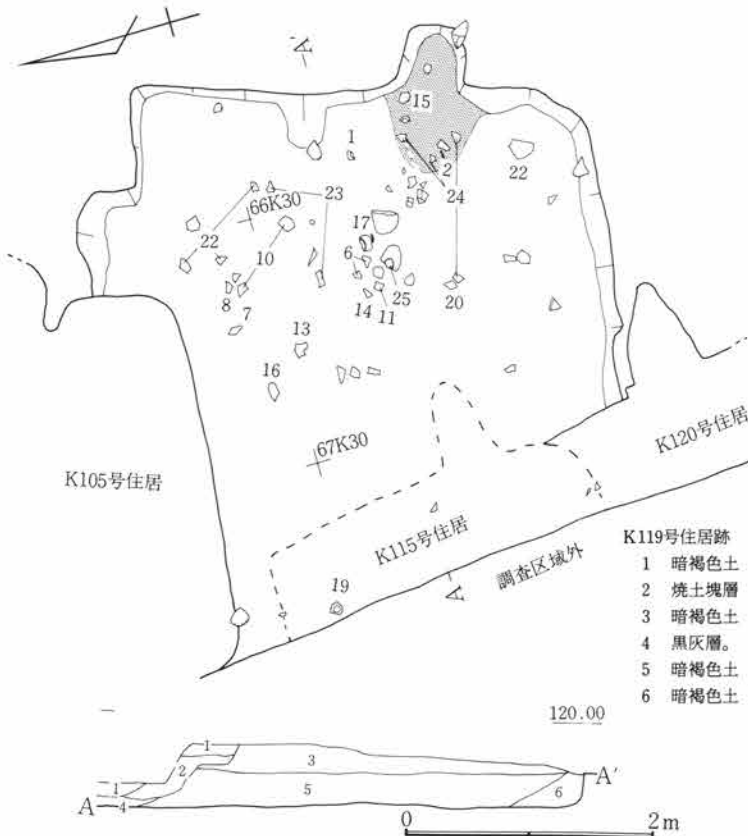
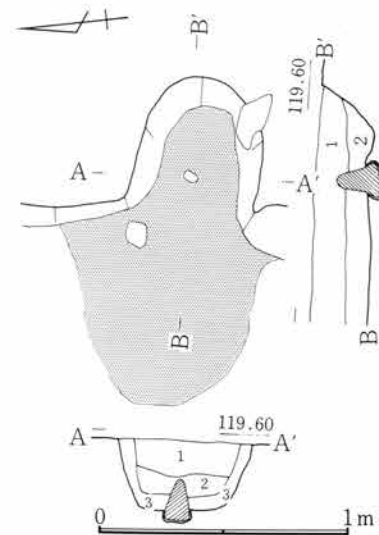


Fig.536 K119号住居跡



- K119号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石含む。
 - 2 焼土塊層
 - 3 暗褐色土 1層に似る。

Fig.537 K119号住居跡竈

- K119号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石含む。
 - 2 焼土塊層
 - 3 暗褐色土 1層に似る。
 - 4 黒灰層。
 - 5 暗褐色土 C軽石少量含む。
 - 6 暗褐色土 焼土・炭化物含む。

K119号住居跡

K区中央部よりやや西寄りに位置し、65～67K28～39の範囲にある。105号・115号・120号・137号住居跡と重複しているが、これらより古い時期の所産である。西側は重複によって消失あるいは調査区域外に延びており全体の様相は不明である。平面形は東西方向がやや長い方形を呈すると考えられる。南北約3.8m、東西は東壁から約4.5mまで確認されている。竈を基軸にする東西軸方位はN-106°-Eを示す。壁高は遺存の良好な箇所約40cmを測る。床面は南東部がやや高まりをなし固く締まり、他の部分は軟弱である。竈は東壁南寄りに付設され燃焼部は方形に近く掘り込まれる。左袖部分と燃焼部右奥壁に凝灰岩の加工材が、また中央部には同質で円柱形の支脚が埋設される。燃焼部幅約50cm・奥行き70cmを測る。出土遺物は多く土師器杯類・砥石・鉄器などが検出されている。

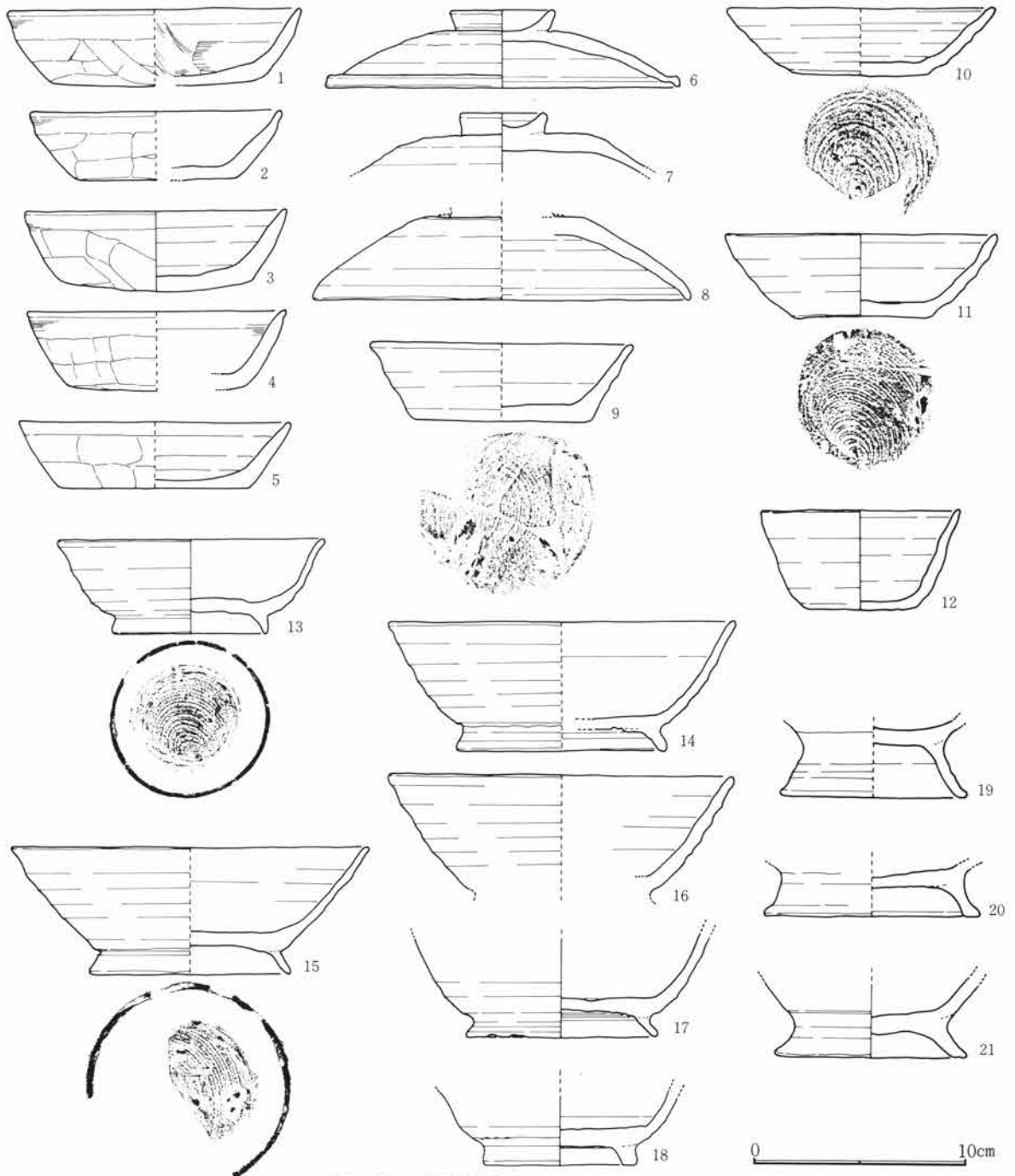


Fig.538 K119号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

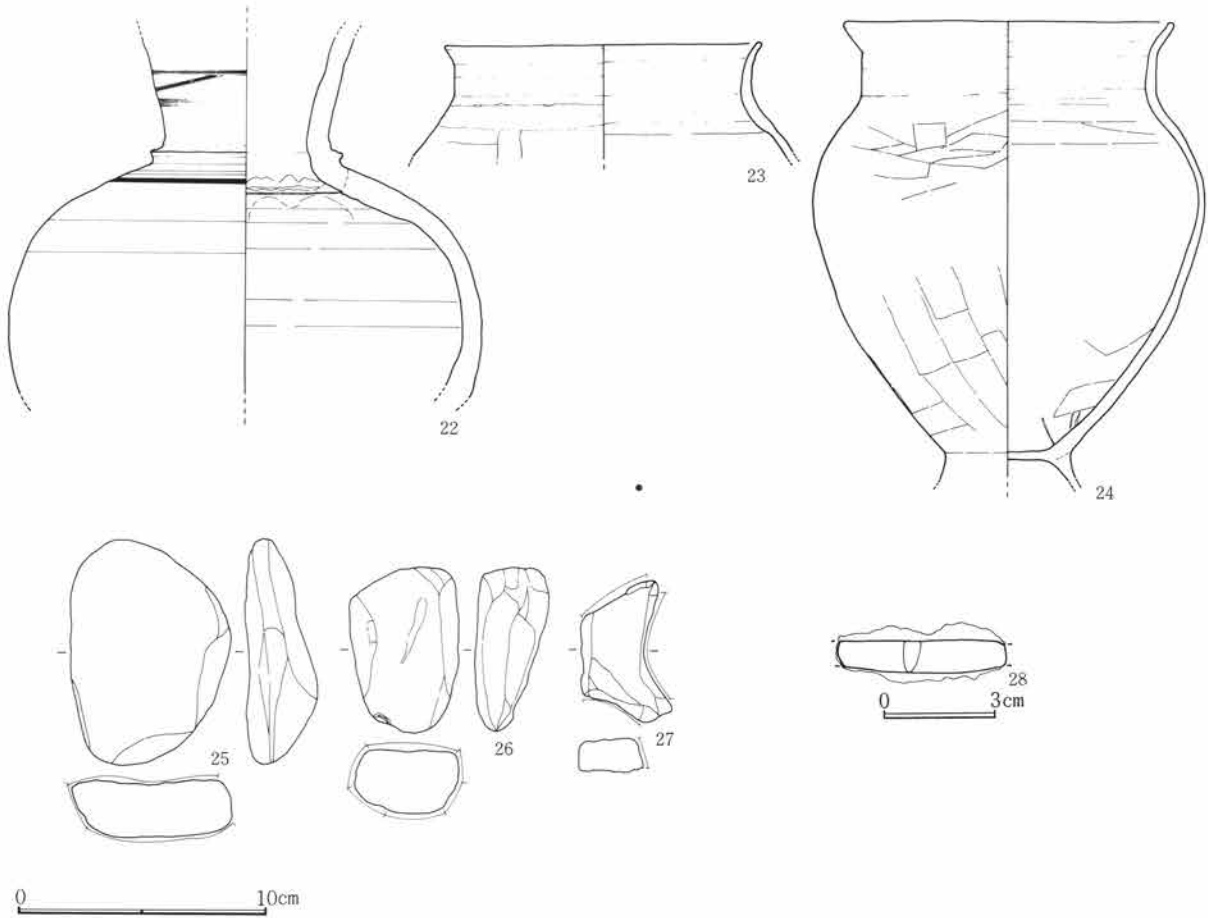


Fig.539 K119号住居跡出土遺物(2)

K119号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
538-1 198-1	土 師 器 杯	1/4	13.8×9×3.5	東中央部埋 土	平底気味の底部から体部は直線的に外傾する。口唇部やや細る。口縁部横撫で。体部内面篋撫で。外面底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
538-2 198-2	土 師 器 杯	1/4	11.9×7.5×3.2	竈前埋土	平底から、体部直線的に外傾し、口縁部はくびれて口唇部丸まる。口縁部横撫で。体部・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
538-3 198-3	土 師 器 杯	1/2	12.4×9×3.8	埋 土	底部やや張り気味。体部直線的に外傾し、口唇部細る。口縁部横撫で。体底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
538-4 198-4	土 師 器 杯	1/4	12.2×8.3×3.6	埋 土	やや張り気味の平底。体部直線的に外傾し、口唇部細り、僅かに外屈する。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
538-5 198-5	土 師 器 杯	1/4	12.6×8.8×3.1	埋 土	平底で体部直線的に外傾しやや浅い。口唇部内湾気味。口縁部幅狭く横撫で、体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
538-6 198-6	須 恵 器 蓋	1/4	16.6×—×3.6 摘径4.9	中央部埋 土	天井部丸く張る。口縁部水平に短く開き、直下に屈する。環状摘み、端部丸い。天井部へ中位は回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密 黒色斑点浮く
538-7 198-7	須 恵 器 蓋	口縁部 欠損	—×—×(2.8) 摘径4.1	北中央部埋 土	天井部平坦をなし、体部直線的に開く。環状摘み、中心部やや突出し、端部丸い。天井部回転篋削り。	①良好 ②褐灰 無 粗 小石多く混る
538-8 198-8	須 恵 器 蓋	摘み欠 損	17.8×—×(4)	北中央部埋 土	天井部平坦をなし、体部直線的に開く。端部丸く緩く内屈気味。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗
538-9 199-9	須 恵 器 杯	体部小 残	12.4×7.8×3.5	埋 土	底径大きく平底。体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
538-10 199-10	須 恵 器 杯	体部1/4 欠損	12.8×6.4×3.1	中央部埋 土	体部やや浅く、直線的で大きく外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②褐灰 ③ 粗 砂混る
538-11 199-11	須 恵 器 杯	体部1/4 欠損	12.8×6.5×3.8	中央部埋 土	体部やや丸味をもち深目。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 やや軟 ② 橙 ③やや密

K 119号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
538-12 199-12	須惠器 杯	1/2	9.4×5×4.7	埋土	腰部丸味をもち、体部深く直線的で緩く外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
538-13 199-13	須惠器 碗	体部1/4 欠損	12.6×7.3×4.4	床下	腰部張り気味。体部上半は外反して開く。付高台、端部細り、内湾気味に立つ。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
538-14 199-14	須惠器 碗	1/2	16.4×10×6	中央部埋土	体部僅かな丸味をもって緩く外傾する。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 白色粒混る
538-15 199-15	須惠器 碗	1/2	16.8×9.5×5.9	竈前埋土	体部直線的で大きく外傾する。付高台、やや外反気味でハの字状に開く。底部やや肥厚。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密 黒色斑点浮く
538-16 199-16	須惠器 碗	1/8 底部 欠損	15.8×—×5.5	西中央部埋土	腰部僅かに丸味をもち、体部は直線的に外傾する。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
538-17 199-17	須惠器 碗	底部1/2	—×8.9×(4.6)	中央部埋土	腰部張り気味。付高台、器肉薄く端部丸い。外反してハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
538-18 199-18	須惠器 碗	底部1/2	—×7.2×(3.5)	埋土	腰部張り強い。付高台、幅広く、やや内湾して立つ。接地面平ら。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
538-19 199-19	土師質 碗	底部1/2	—×8.9×(3.5) 高台高2.5	北西部埋土	付高台、高くハの字状に開き、端部は外方へ屈する。轆轤成形。115号住居跡の所属か?	①良好 ②淡橙 ③やや密
538-20 199-20	須惠器 碗	底部1/2	—×10.2×(2.4)	中央部埋土	付高台、やや高く、ハの字状に開く。端部幅広く、接地面平ら。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密 黒色粒混る
538-21 199-21	須惠器 碗	底部	—×8.8×(3.7)	埋土	腰部張り無し。付高台、高く大きくハの字状に開く。端部接地面僅かな凹線巡る。轆轤成形。	①良好 ②黄灰 ③粗 砂混る
539-22 199-22	須惠器 瓶	頸上・底部 欠損	—×—×(14) 胴径19 頸基径7	北東部埋土	胴部丸く張り球形を呈す。頸基部凸帯巡る。回転撫調整。内面洞・頸部の接合痕顕著。	①良好 ②灰 ③密
539-23 199-23	土師器 甕	口縁部	12.9×—×(4.4)	北東部埋土	最大径は胴部にあるが肩部の張り少ない。口縁部は直立して立ち上がり上半は外反して開く謂わゆるコの字口縁。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや粗
539-24 199-24	土師器 台付甕	台部欠損	13.3×—×(18) 最大径胴上15.7	床下	最大径は胴部上位にあり丸く張り、腰部は細くしまる。口縁部直立した後外屈し内湾気味に開くコの字口縁。口縁部横撫で。胴上位は横～斜、下半は斜篋削り。	①良好 ②暗赤褐 ③やや粗
539-25 199-25	石製品 砥石	完	9×6.5×2.1 76.7g	中央部埋土	多面使用。	角閃石安山岩
539-26 199-26	石製品 砥石		6.5×4.4×2.6 93.5g	埋土	多面使用。	流紋岩(砥沢?)
539-27 199-27	須惠器 転用砥石		5.2×3.5×1.3 20.8g	埋土	多面使用。	①良好 ②灰 ③やや密
539-28 199-28	鉄製品	両端欠損	(4.5)×(0.9)× 0.4	埋土	刃器?	

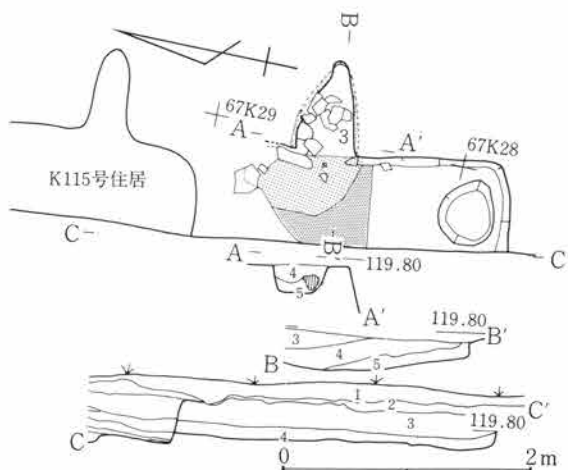


Fig.540 K120号住居跡

K 120号住居跡 (Fig. 540・541・PL. 200)

K区中央部の北西に寄って位置し、66・67K27・28の範囲にある。115号・119号・137号住居跡と重複しており115号より旧く、119号・137号より新しい時期の所産である。西側のほとんどが調査区域外に延び、また北側は115号によって消失してい

K120号住居跡竈

- 3 黒褐色土 C軽石・炭化物含む。
- 4 黒褐色土 C軽石少量、炭化物含む粘性土。
- 5 暗赤褐色土 焼土含む。

K120号住居跡

- 1 暗褐色 B軽石混入、現表土。
- 2 黒褐色土 大粒B軽石。
- 3 黒褐色土 C軽石・炭化物含む。
- 4 黒褐色土 C軽石少量、炭化物含む。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

る。平面形は方形を呈すると考えられ、南北は2.6m、東西は東壁から70cmの範囲まで検出されている。竈を基軸にした東西軸方位はN-80°-Eを示す。壁高は土層観察によれば約54cmを測りかなり深い。床面はやや中央部が窪み踏み締まりは良好な状態で南東部には50×46cm・深さ16cmの楕円形の貯蔵穴が設けられる。竈は東壁に付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれるが、先端部は窄まり煙出し孔と考えられる。袖部は検出されないが、竈前面に天井材と長方形の凝灰岩の加工材が検出されている。燃焼部幅約50cm・奥行き60cm、煙出し孔径約15cmを測る。出土遺物は少なく竈内より大形の甕底部が検出されている。

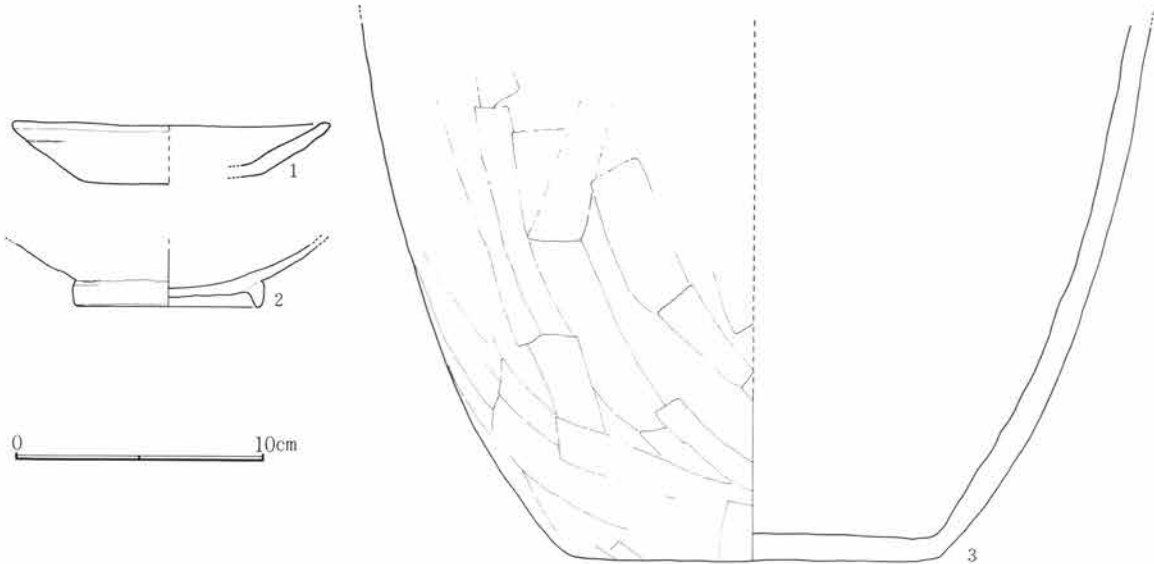


Fig.541 K120号住居跡出土遺物

K 120号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
541-1 200-1	土師質 皿	底部欠損	12.7×7.7×2.3	埋 土	体部は浅く、直線的に大きく外傾して開く。底部平底、不定方向の篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密 砂混る
541-2 200-2	灰釉陶器 椀	底部	—×7.5×2.6	埋 土	見込部凹む。高台肥厚しやや内湾気味に直立する。回転糸切り痕残る。	①良好 ②灰白 ③やや緻密
541-3 200-3	須恵器 甕	下半部	—×15×(21.3)	竈 内	底径大きく、胴部はやや脹らみをもつ。胴部縦篋削り。腰部横篋削り。底部篋削り。	①酸化気味 良好 ②灰白~橙 ③やや密

K 122号住居跡 (Fig. 542~545・PL. 200~203)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.42 × 4.11	N- 101° -E	東壁南寄り	— — — — —

K区中央部やや西に寄って位置し、63~65K22~25の範囲にある。118号・135号住居跡と重複しており118号より旧く、135号より新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが南壁線がやや短く南西部がわずかに歪む形状になる。壁高は約32cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好であるが床下は凹凸が著しく床下土坑と考えられる落ち込みも検出されている。床面は黄褐色粘土塊を混じえる暗褐色土で構成され、部分的に焼土粒を含んでいる。南東部に径60cm程度の円形土坑が検出されているが竈に著し

第3章 K区の遺構と遺物

く接近しており貯蔵穴になるかは不明である。竈は東壁の南寄りに付設されるが118号住居跡との重複によって上面は削られ、かろうじてその範囲が認められる程度である。燃烧部は楕円形を呈し、先端部が窄まり、径15cmの煙出し孔に至る。出土遺物は多量で床下からの検出も多い。灰釉・緑釉陶器・瓦・鉄器などが検出されている。

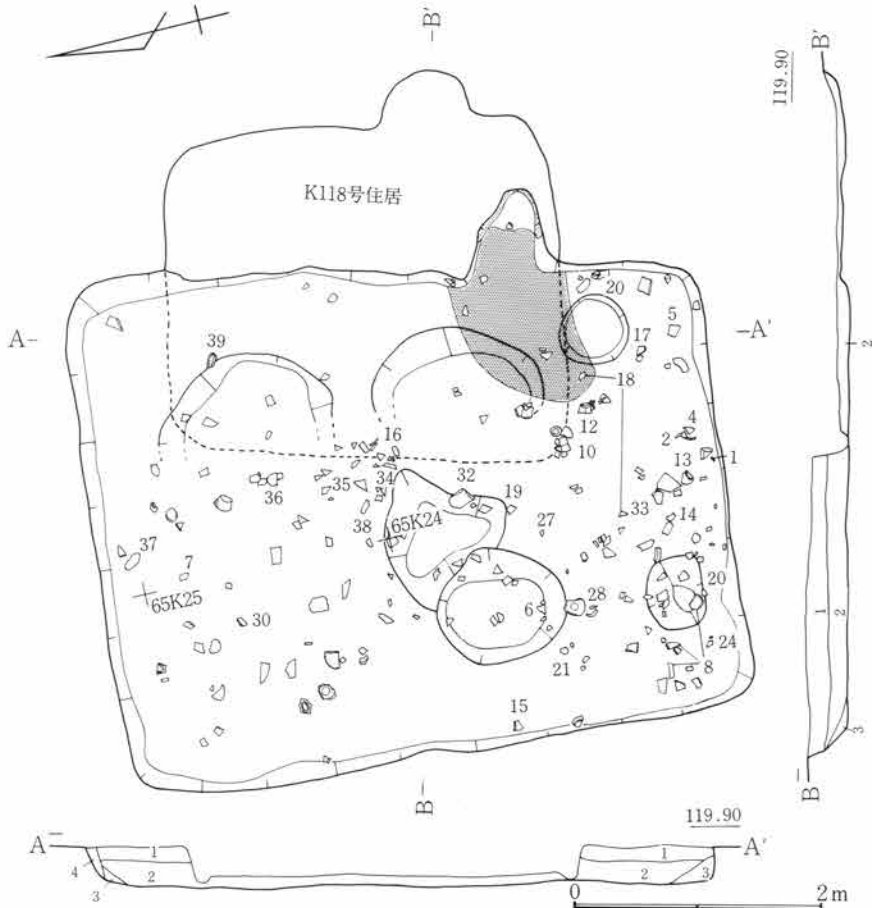


Fig.542 K122号住居跡

K122号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒含む砂層。
- 2 暗褐色土 C軽石少量含む。
- 3 暗褐色土 褐色土塊僅かに含む。
- 4 暗褐色土 褐色砂質土塊含む。

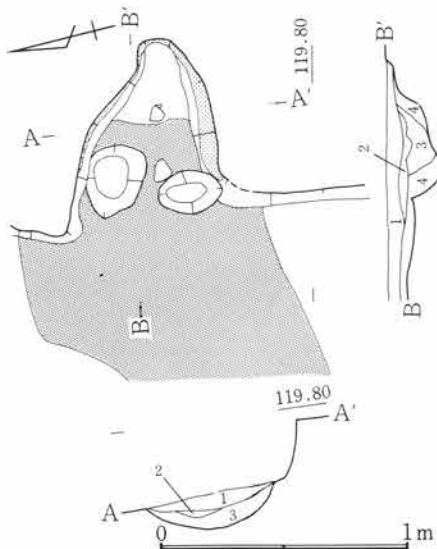


Fig.543 K122号住居跡竈

K122号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石少量、焼土・炭化物多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 3 火床面
- 4 暗褐色土 焼土粒を多く含む。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

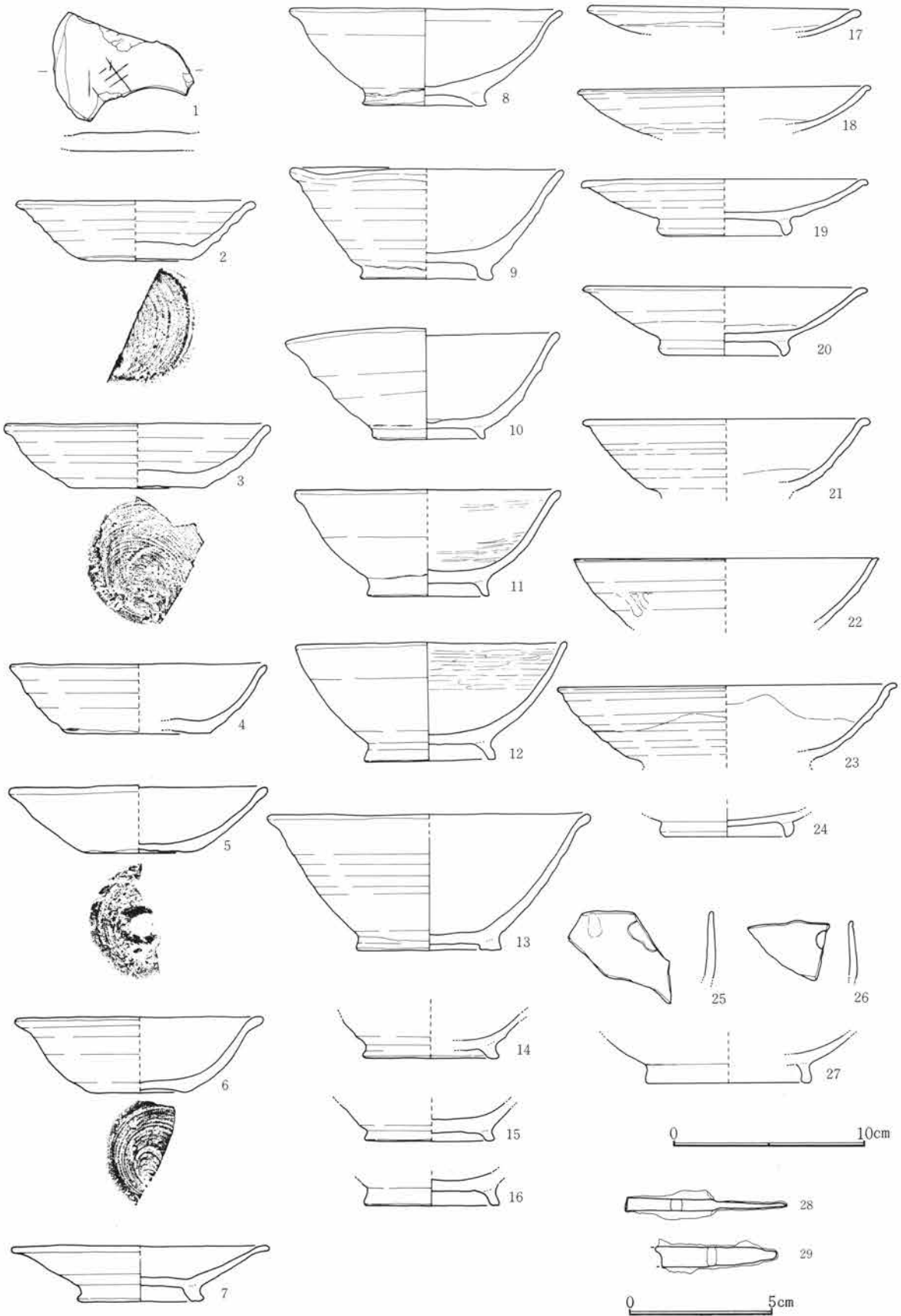


Fig.544 K122号住居跡出土遺物(1)

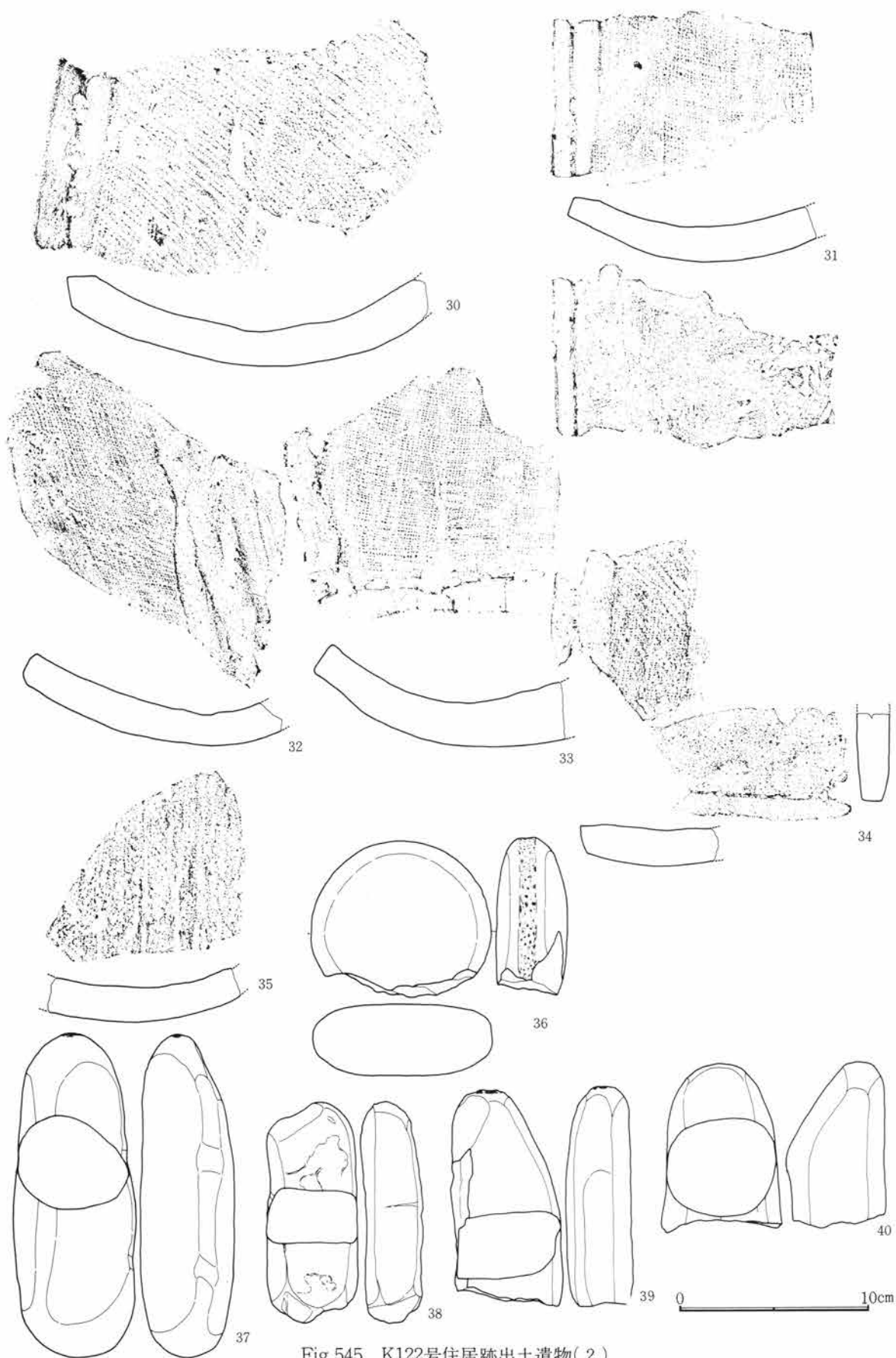


Fig.545 K122号住居跡出土遺物(2)

K122号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
544-1 201-1	土 師 器 杯	小 片		南壁際床 面	器肉の厚い杯底部。見込部に『伴』の篋描き。	①良好	②鈍い褐 ③密
544-2 201-2	須 惠 器 杯	1/3	12.6×5.6×3	南壁際床 面	体部直線的で大きく外傾。口唇部丸まり外屈。底部肥厚する。轆轤成形。体部轆轤痕顕著。回転糸切り。	①良好	②灰 ③密
544-3 201-3	須 惠 器 杯	1/3	14×7×3.4	埋 土	体部やや脹らみをもち、口唇部丸まり外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟	②灰白 ③やや密
544-4 201-4	須 惠 器 杯	1/3	13.6×7.6×3.6	南壁際床 面	体部やや脹らみをもち、口縁部も僅かに外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②灰白 ③ 粗 小石混る
544-5 201-5	須 惠 器 杯	1/3	13.6×6×3.6	南東部床 面	腰部丸味をもち体部は直線的で大きく外傾する。口唇部丸く肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟	②灰黄 ③密
544-6 201-6	須 惠 器 杯	1/3	13×5×4	南西部埋 土	腰部から体部は丸味が強く、口縁部強く外反、口唇部肥厚し丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟	②黄灰 ③やや密
544-7 201-7	須 惠 器 皿	1/3	13.6×6.7×3	北央部床 面	体部の器肉薄く、直線的で大きく開く。口縁部水平に外屈。付高台、幅広くハの字状に開く、下端面段をなす。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟	②灰 ③ 密
544-8 201-8	須 惠 器 椀	体部1/3 欠損	14.4×6.6×5	南西部埋 土	体部丸く脹らみ、口縁部外反して開く。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②灰白 ③ やや密 細砂混る
544-9 201-9	須 惠 器 椀	体部1/3 欠損	14.4×7×5.7	南西部埋 土	体部直線的に開き、口縁部僅かに外反。口唇部丸い。付高台、端部丸く外屈。轆轤成形。	①良好	②暗緑灰 ③粗 砂多く混る
544-10 201-10	須 惠 器 椀	体部1/3 欠損	14.4×6×5.7	南東部床 面	腰部やや脹らむ。口縁部外反気味。口唇部丸い。付高台、低く端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②灰 ③や や密 小石混る
544-11 201-11	土 師 器 椀	体部1/3 欠損	14×6.4×5.4	床面埋土	体部丸く、口縁部外屈気味。口唇部丸い。内面黒色処理、横篋磨き。付高台、直線的でハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密 茶色粒混る
544-12 201-12	土 師 器 椀	完	14.4×7×6	南東部床 面	体部丸く口縁へ至る。口唇部丸い。内面黒色処理。横篋磨き。付高台、端部角張り、内湾気味に立つ。轆轤成形。	①良好	②橙 ③や や密 茶色粒混る
544-13 201-13	須 惠 器 椀	1/3	17×7.6×7.2	南央部床 面	体部にやや脹らみをもち、口縁部外屈する。口唇部丸い。付高台、低く幅広く角張る。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化軟	②鈍い 橙 ③やや密
544-14 201-14	須 惠 器 椀	底部1/3	—×7.2×(2.8)	南央部埋 土	付高台、端部強く外屈。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②灰 ③や や粗 砂混る
544-15 201-15	須 惠 器 椀	底 部	—×6.8×(2)	西壁際埋 土	付高台、低くハの字状に開く。内外面燻し。轆轤成形。	①やや軟	②暗緑灰 ③やや密 細砂混る
544-16 201-16	土 師 質 椀	底 部	—×7.1×(1.7)	中央部床 面	付高台、直線的にハの字状に開き、端部角張る。下端面に凹線巡る。内面黒色処理、見込部螺旋状暗文。轆轤成形。	①良好	②橙 ③や や密
544-17 201-17	灰 釉 陶 器 皿	体部1/3	14.2×—×(1.4)	南東部埋 土	口唇部肥厚し丸く、外屈する。付け掛け施釉。	①良好	②明オリ ー灰 ③緻密
544-18 202-18	灰 釉 陶 器 皿	体部小 片	15.2×—×(2.4)	南東部埋 土	口唇部丸く、強く外屈、刷毛塗り施釉。腰部回転篋削り。	①良好	②灰白 ③ 密
544-19 202-19	灰 釉 陶 器 皿	1/3	14.8×5×3	中央部埋 土	口唇部丸く強く外屈。高台丸味をもち内湾して立つ。腰部回転篋削り。無釉。見込部やや摩滅し墨痕。転用硯か？	①良好	②灰白 ③ 緻密
544-20 202-20	灰 釉 陶 器 皿	体部1/3 欠損	14.7×6.8×3.1	東壁南際 埋土	体部直線的に開き、口唇部緩く外屈する。高台肥厚気味で内湾して立つ。刷毛塗り施釉。	①良好	②灰白 ③ やや粗
544-21 202-21	灰 釉 陶 器 椀	体部小 片	15.0×—×(3.8)	南西部埋 土	腰部丸味をもち、口唇部丸く強く外屈。体部中位まで回転篋削り。刷毛塗り施釉。	①良好	②灰白 ③ 緻密
544-22 202-22	灰 釉 陶 器 椀	体部小 片	15.8×—×(3.5)	埋 土	口唇部尖り短く外屈。	①良好	②灰白 ③ 緻密
544-23 202-23	灰 釉 陶 器 椀	体部小 片	17.6×—×(4)	埋 土	体部丸味をもち、口唇部は強く外反気味に外屈。体部中位まで回転篋削り。付け掛け施釉。	①良好	②明オリ ー灰 ③緻密
544-24 202-24	灰 釉 陶 器 椀	底部1/3	—×7×(1)	南西部埋 土	高台稜不明瞭。端部細り内湾気味に立つ。底部回転篋削り。	①良好	②灰白 ③ 緻密
544-25 202-25	緑 釉 陶 器 輪花椀	口縁部 小片		床 下	内面陰花文。篋磨きを施す。釉調はくすんだ緑、やや銀化。二次被火？	①良好	②灰 ③密
544-26 202-26	緑 釉 陶 器 輪花椀	口縁部 小片		南西部埋 土	内面陰花文。釉調は黄色気味を帯びる緑、光沢あり。	①良好	②橙 ③密
544-27 202-27	緑 釉 陶 器 椀	底部1/3	—×8.6×(2.4)	中央限埋 土	高台内湾気味に直立。底部も施釉。釉調は明るいうす緑。	①良好	②白色 ③ 密
544-28 202-28	鉄 製 品 鉄	身部欠 損	(5.5)×0.4 柄部2.5	埋 土			

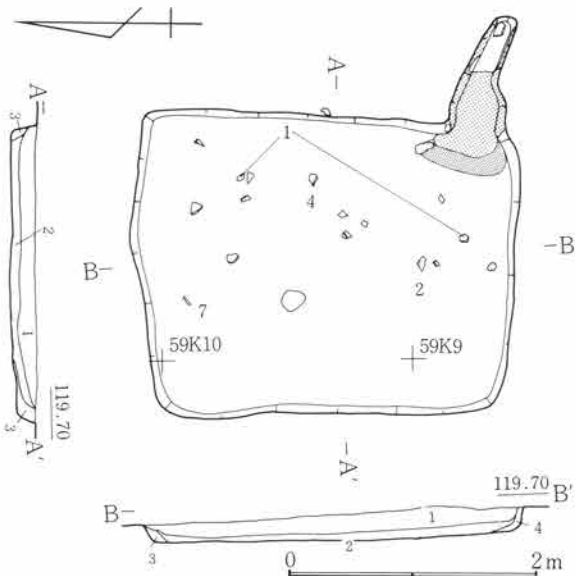
第3章 K区の遺構と遺物

K122号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
544-29 202-29	鉄製品 刀子?	刃部欠 損	(4.2)×0.7×0.3	埋土		
545-30 202-30	瓦 平瓦		厚2	北西部埋 土	凹面布目。側縁篋削り。	①酸化気味 ②橙 ③粗
545-31 202-31	瓦 平瓦		厚1.8	埋土	凹面布目。凸面格子叩き目。	①酸化気味 ②橙 ③やや密
545-32 202-32	瓦 平瓦		厚1.7	中央部埋 土	凹面布目。側縁篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗
545-33 202-33	瓦 平瓦		厚3	南中央部埋 土	凹面布目。側縁篋削り。	①良好 ②灰 ③や やや密
545-34 202-34	瓦 平瓦		厚1.8	中央部床 面	凹面布目。側縁篋削り。	①良好 ②灰 ③粗 小石混る
545-35 202-35	瓦 平瓦		厚1.8	中央部床 面	凹面布目。凸面縄目。	①良好 ②灰 ③や やや密
545-36 203-36	石	一部欠 損	9.5×3.7×— 470g	中央部床 面	円形側面に敲打痕。	石英閃緑岩
545-37 203-37	石	完	15.8×6.4×5 926g	北中央部床 面	長軸端部に敲打痕。	グラノファイヤー
545-38 203-38	石	完	11.4×4.8×3.2 309g	中央部床 面		頁岩
545-39 203-39	石	片端欠 損	(11.2)×5.7×5.4 401g	北東部床 面	長軸端部に敲打痕。	輝石安山岩
545-40 203-40	石	片端欠 損	(8.3)×6.4×5.1 684g	埋土		閃緑岩

K123号住居跡 (Fig. 546~548・PL. 203)

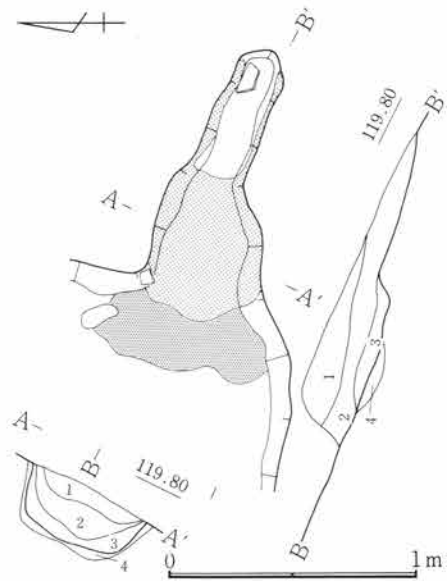
平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.08 × 2.43	N—114°—E	東壁東南隅	—



K123号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石含む。
- 2 暗褐色土 1層よりC軽石少量。
- 3 暗褐色土 砂質。
- 4 黒褐色土

Fig.546 K123号住居跡



K123号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石含む。
- 2 暗褐色土 C軽石少量含む。
- 3 焼土粒・炭化粒混り層
- 4 火床面

Fig.547 K123号住居跡竈

K123号住居跡

K区中央部やや南側に位置し、57～59K8～10の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが南・北壁が歪む形状になる。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりも良好であるが、貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。竈は東・南壁の変換部に付設され、楕円形に掘り込まれた燃烧部から煙道部はわずかに立ち上がり、長く緩い傾斜をもって延びる。煙道部の先端は円形の窪みをもつ。袖部などの施設は検出されていない。燃烧部幅約45cm・奥行き50cm、煙道部長さ55cmを測る。出土遺物は少ないが鉄片が検出されている。

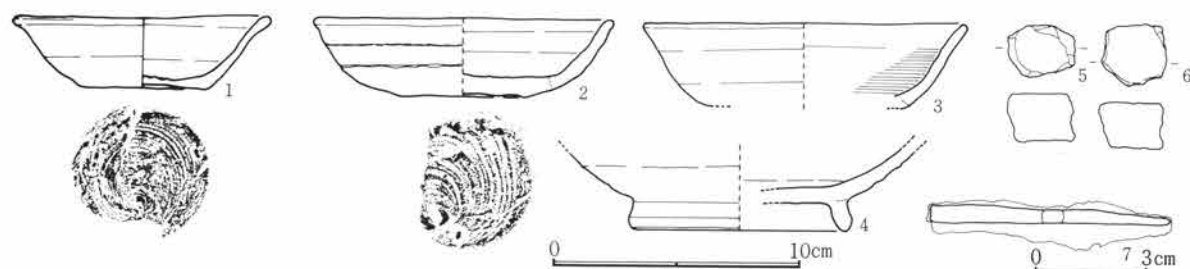


Fig.548 K123号住居跡出土遺物

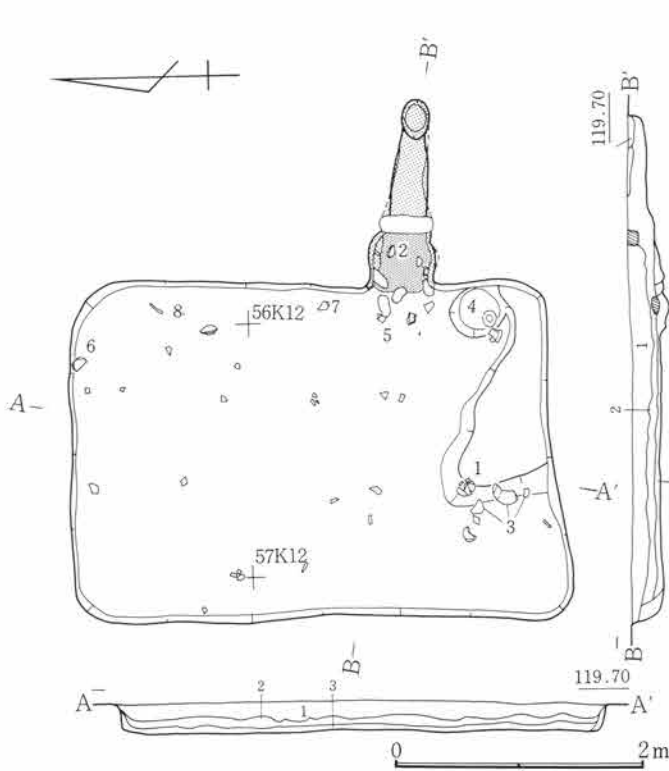
K123号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
548-1 203-1	須惠器 杯	完	10.5×5×3	北東・南 央埋土	体部僅かに丸味をおび、口縁緩く外反。口唇部肥厚して丸まる。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ③やや粗	②灰白
548-2 203-2	須惠器 杯	1/2	12×5×3.1	南央部埋 土	腰部丸味をもつ。口唇部丸まり短く外反。轆轤成形。右回 転糸切り。	①酸化 ③やや粗	②良好 ③鈍 い黄橙
548-3 203-3	須惠器 杯	1/2	13×8×3.3	埋土	腰部に丸味をもつ。体部上半より僅かに外反気味。轆轤成 形。	①良好 ③やや粗	②灰白
548-4 203-4	灰釉陶器 椀	底 部	一×9×(3.4)	東央部床 面	付高台、太く丸味をもちハの字状に開く。脚部回転篋削り。	①良好 ③緻密	②灰白
548-5 203-5	須惠器 加工品		2×2.7×1.8	埋土	側縁打欠き成形。	①良好 ③やや粗	②灰白
548-6 203-6	須惠器		2.5×2.5×1.8	埋土	側縁打欠き成形。	①良好 ③やや粗	②灰白
548-7 203-7	鉄製品	片端欠 損	(6.5)×0.6×0.3	北西部埋 土			

K124号住居跡 (Fig. 549～551・PL. 204)

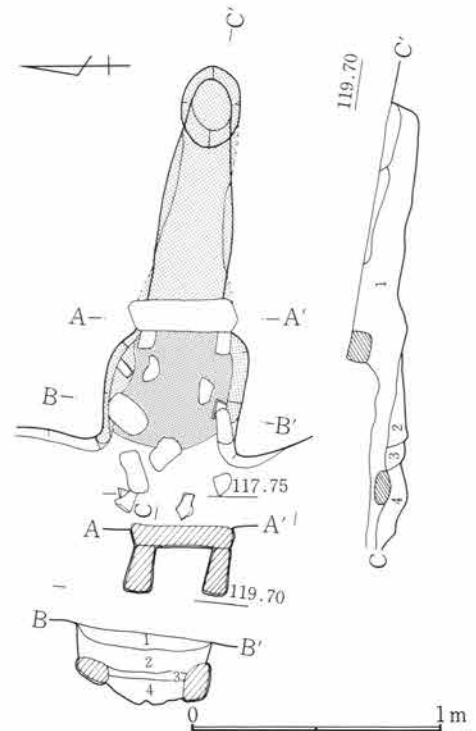
平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.04 × 2.71	N— 91° —E	東壁南寄り	円形 (44.0 × 40.0 × 18.0)

K区中央部に位置し、55～57K10～12の範囲にある。131号・132号・144号・148号・160B号住居跡と重複しているがいずれよりも新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸をもつ整った方形を呈す。壁高は約20cmを測る。床面は南東部に高まりをなすが他は平坦で踏み締まりは良好である。竈は東壁の南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれた燃烧部より段差なく長い煙道部が延び、先端部は煙出し孔が見られる。袖部には構築材と考えられる凝灰岩が散乱しているが、燃烧部奥には左右に同質の加工材を埋設し天井を架した状態で検出されている。燃烧部幅約55cm・奥行き50cm、煙道部長さ1m、煙出し孔径25cmを測る。出土遺物は灰釉陶器・鉄器などが検出されている。



K124号住居跡
1 暗褐色土 C軽石を含む。
2 暗褐色土 C軽石少量含む。
3 暗褐色土 締めあり。

Fig.549 K124号住居跡



K124号住居跡竈
1 暗褐色土 C軽石を含む。
2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
3 暗褐色土 焼土粒を含む。
4 黒灰層 炭化物・焼土粒多く含む。

Fig.550 K124号住居跡竈

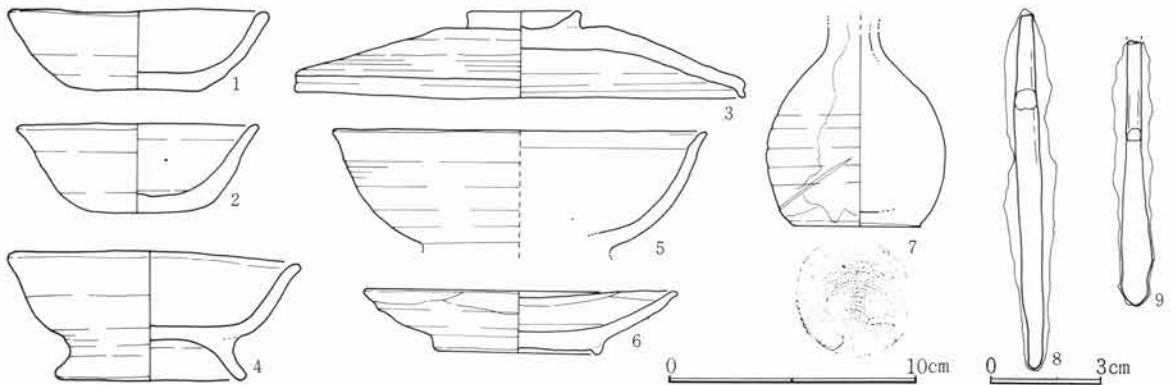


Fig.551 K124号住居跡出土遺物

K124号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
551-1 204-1	須恵器 杯	2/3	10.5×5×3.2	南中央部床 面	体部丸味をもつ。口唇部やや肥厚して丸まる。轆轤成形。 右回転糸切り。	①酸化気味 軟 ② 灰白 ③やや密
551-2 204-2	須恵器 杯	完	9.8×4×3.5	竈内・南 西部床面	丸底気味。腰部丸く、体部上半はやや外反。轆轤成形。右 回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 砂多く混る
551-3 204-3	須恵器 蓋	1/2	18.2×—×3.5 摘径4.5	南西部床 面	天井部は平坦をなし、体部は直線的に開く。口縁部直に折 れて外反する。環状摘み。天井部回転篋削り。内外面に重 ね焼の痕跡が顕著。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 黒色細粒混 る
551-4 204-4	土師質 椀	完	11.8×7.7×5.2 高台高1.5	貯蔵穴内	腰部丸く張る。口縁部外反し、口唇部丸まる。付高台、高 くハの字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②淡黄 ③ やや粗 砂混る

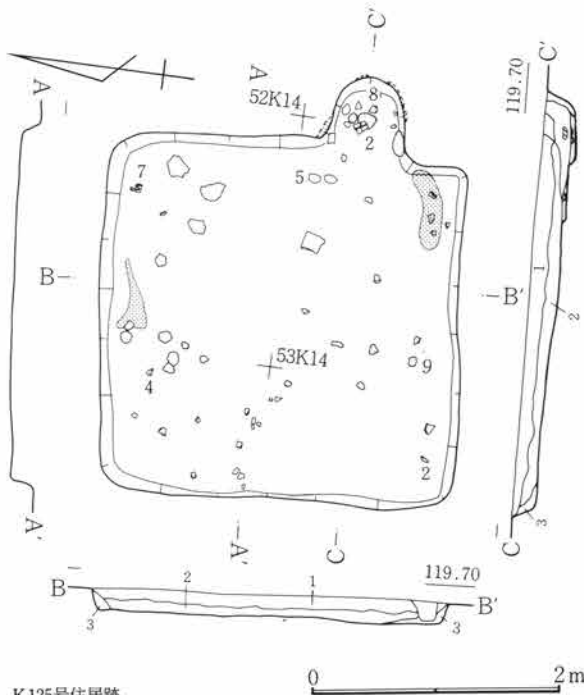
K124号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
551-5 204-5	須恵器 碗	1/2 底部 欠損	15×—×(5)	竈前床面	体部丸く張り、口縁部外傾する。口唇部尖り、内面内斜する。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂混る
551-6 204-6	灰釉陶器 皿	完	12.6×6.7×2.5	北壁東際 床面	体部の丸味少なく、口唇部は細り外へ折れる。高台低い。付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
551-7 204-7	灰釉陶器 瓶	口頸部 欠損	—×5×(7.1)	東壁際床 面	胴部丸く張り下張れ。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
551-8 204-8	鉄製品 角釘	基部欠 損	9.2×0.6×	北東部床 面		
551-9 204-9	鉄製品 角釘	両端欠 損	7.5×0.4×	南央部埋 土		

K125号住居跡 (Fig. 552~554・PL. 205)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.0 × 2.82	N— 88° —E	東壁南寄り	—

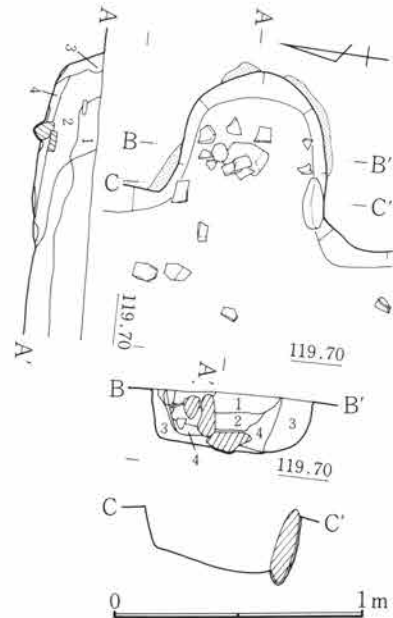
K区中央部やや東側に位置し、51~53K13~14の範囲にある。31号住居跡と重複しているがこれよりも新しい時期の所産である。平面形はほぼ正方形を呈し、壁高は約22cmを測る。床面は平坦をなし踏み締めりも良好であるが貯蔵穴や壁下溝などの諸施設は検出されていない。掘形には床下土坑と考えられる落ち込みが多く検出され黄色粘土塊を混じえる暗褐色土で埋められている。竈は東壁の南に寄って付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれるが、煙道部は検出されていない。袖部は東壁線よりわずかに外側の右袖部に扁平な楕円形川原石を立て埋設している。燃焼部は幅約60cm・奥行き約60cmを測る。出土遺物は散在しており小破片が多い。



K125号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石含む。
- 2 黒褐色土 C軽石・炭化物含む。
- 3 暗褐色土 C軽石含む粘性土。

Fig.552 K125号住居跡



K125号住居跡竈

- 1 黒褐色土 炭化物微量含む。
- 2 黒褐色土 炭化物・焼土粒含む。
- 3 焼土壁
- 4 暗褐色土 焼土粒・粘土粒含む。

Fig.553 K125号住居跡竈

第3章 K区の遺構と遺物

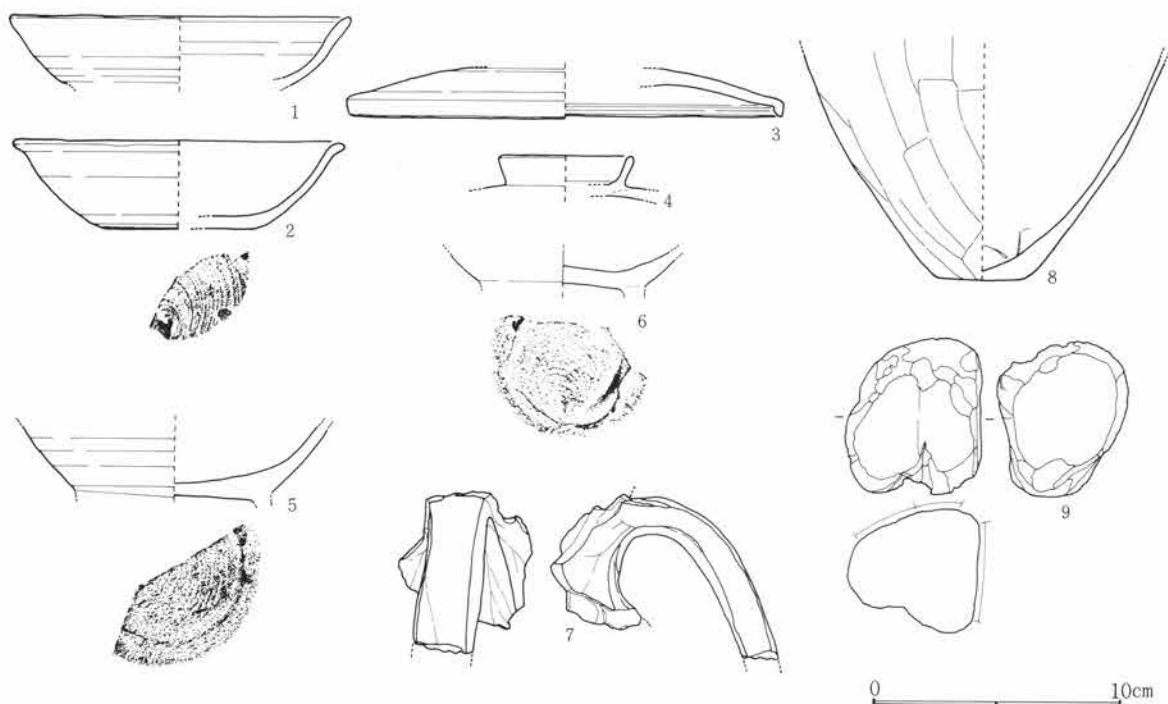


Fig.554 K125号住居跡出土遺物

K 125号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
554-1 205-1	須 杯 器	1/2 底 部欠損	13.7×-×(2.7)	床 下	体部浅く、腰部に丸味をもつ。口縁部緩く外反して開く。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや密
554-2 205-2	須 杯 器	1/2	13.4×6×3.5	竈内・南 西部床面	体部丸味をもつ。口縁部強く外反し、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
554-3 205-3	須 蓋 器	1/2 摘欠損	17.4×-×(2)	埋 土	扁平で器高は低い。体部直線的に開き、口縁部短く直に折れる。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
554-4 205-4	須 蓋? 器	摘1/2	径5.5 高さ1.2	北西部埋 土	薄く直線的で僅かに外傾する。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や密 黒斑粒浮く
554-5 205-5	須 碗 器	底部1/2	-×-×(3)	竈前床面	轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
554-6 205-6	須 碗 器	底 部	-×-×(1.5)	埋 土	付高台欠損。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
554-7 205-7	須 把 手 器		幅2.5 厚1.5	北東部床 面	瓶の把手か? 篋による面取り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
554-8 205-8	土 師 器 甕	底部1/2	-×3.7×(9)	竈 内	底部小さい。胴部縦篋削り。底部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
554-9 205-9	石 製 品 砥 石		6.2×5.5×5.3 182.5g	南東部埋 土	2面使用。	角閃石安山岩

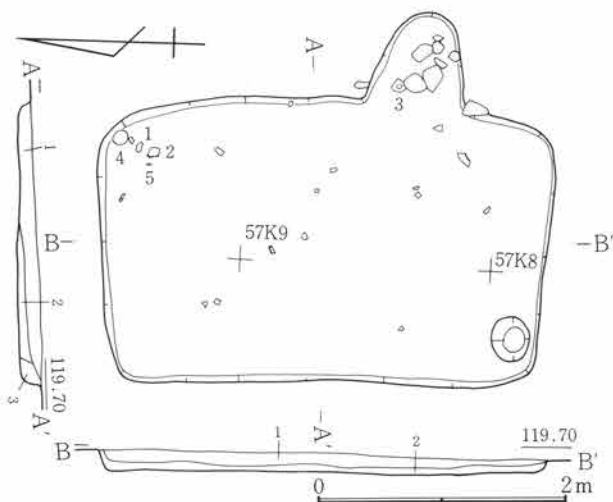
K 126号住居跡 (Fig. 555~557・PL. 206)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.64 × 2.85	N- 93' -E	東壁南寄り	— — — — —

K区中央部やや南側に位置し、56・57K7~9の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、北東部隅に丸味をもちやや歪んだ形状となる。壁高は約14cmを測る。床面は中央部やや南側にわずかな窪みをなすが、とくにその箇所が固く踏み締まる。壁下の溝・貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。南西隅

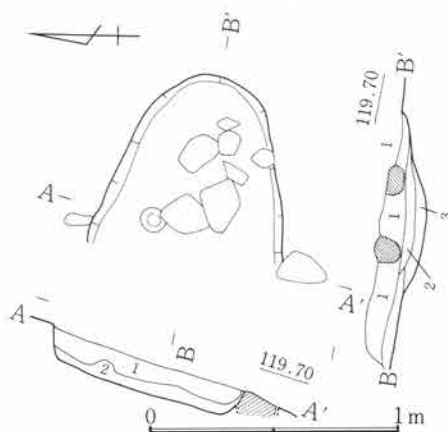
第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

に径30cm・深さ32cm程度の円形の穴が検出されているが当跡に伴うものではない。竈は東壁南寄りに付設され、燃烧部は大きく楕円形に掘り込まれる。東壁線の上に凝灰岩の加工材が埋設され袖部を構成するが削平が深く、痕跡程度である。また燃烧部内には同質の加工材残欠が検出されている。燃烧部幅・奥行き約80cmを測る。出土遺物は少量であるが、鉄器などが検出されている。



K126号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む砂層。
- 2 暗褐色土 C軽石が1層より少ない。
- 3 暗褐色砂質土塊層



K126号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土塊含む。
- 3 安褐色土 炭化物含む。

Fig.556 K126号住居跡竈

Fig.555 K126号住居跡

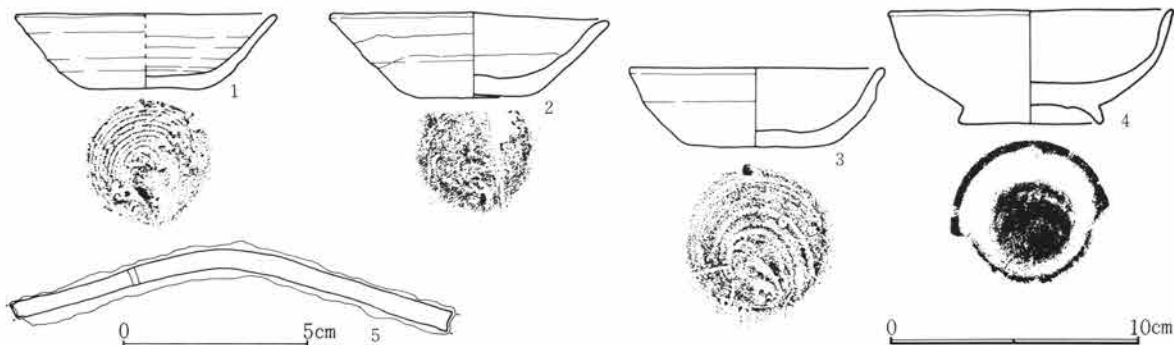


Fig.557 K126号住居跡出土遺物

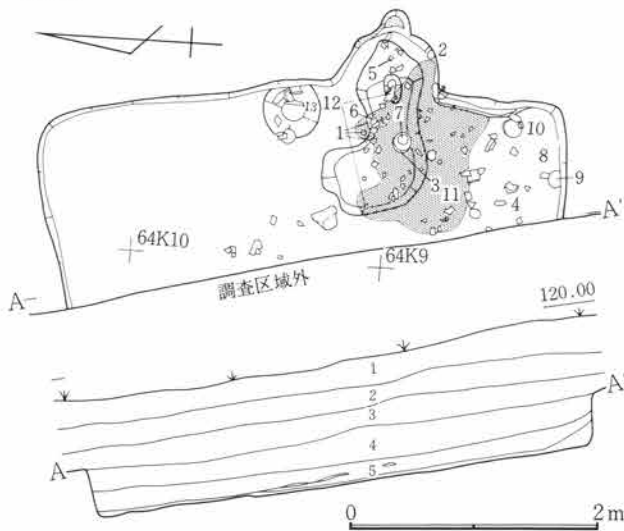
K126号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
557-1 206-1	土師質 杯	1/2	10.5×5×3	北東部埋土	腰部丸く体部直線的に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転系切り。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
557-2 206-2	須恵器? 杯	1/2	11.2×5×3.4	北東部埋土	体部直線的に開き、口唇部丸い。轆轤成形。右回転系切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 細砂混る
557-3 206-3	土師質 杯	完	10.3×5.5×3.1	竈内	体部丸味をもち、口縁部くびれて外反気味。口唇部丸い。轆轤成形。右回転系切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 小石混る
557-4 206-4	土師質 椀	完	11.4×5.8×4	北東壁際埋土	体部丸く張り、口唇部細り外反する。付高台、内湾気味に開き、作り丁寧。轆轤成形。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗 砂多い。
557-5 206-5	鉄製品	両端欠損	(11.8)×0.5×0.2	北東部床面	板状製品	

第3章 K区の遺構と遺物

K127号住居跡 (Fig. 558~561・PL. 207・208)

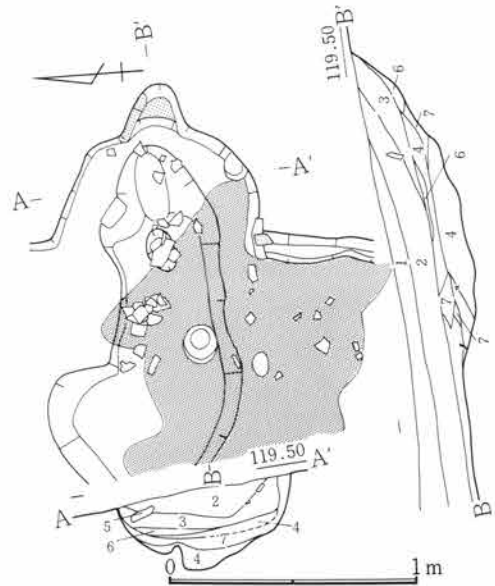
K区中央部やや西側に位置し、63・64K8~10の範囲にある。129号住居跡と重複するがこれよりも新しい時期の所産である。西側のほとんどは調査区域外に延び未検出である。平面形は方形を呈すると考えられ南北長約4.2mを測り、東西は東壁より1.4mの範囲まで確認された。竈を基軸にする東西軸方位はN-87°-Eを示す。壁高は土層観察によれば約40cmを測る。床面は平坦をなすが湿気が多く軟弱であり、掘形には多少凹凸が見られ床面は厚さ4~5cmの黒褐色土を敷きつめたようである。竈は東壁の南寄りに付設され楕円形に掘り込まれた燃焼部から小さく突出する煙出し孔がある。燃焼部幅約80cm、奥行き50cmを測る。煙出し孔は約20cm突出している。出土遺物は竈前面に集中してみられ土師器杯・須恵器皿の他鉄器などが検出されている。



K127号住居跡

- 1 茶褐色土 砂質、耕作土。
- 2 黒褐色土 B軽石主の砂質土。
- 3 暗褐色土 C軽石含む。
- 4 暗褐色土 C軽石・炭化物含む。
- 5 黒褐色土 C軽石を少量、炭化物・焼土粒を含む。

Fig.558 K127号住居跡



K127号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化物含む。
- 2 黒褐色土 C軽石を少量、炭化物・焼土粒含む。
- 3 赤褐色土 粘土を主体とする天井崩落土。
- 4 暗褐色土 灰・焼土を含む。
- 5 焼土塊
- 6 焼土層
- 7 灰層

Fig.559 K127号住居跡竈

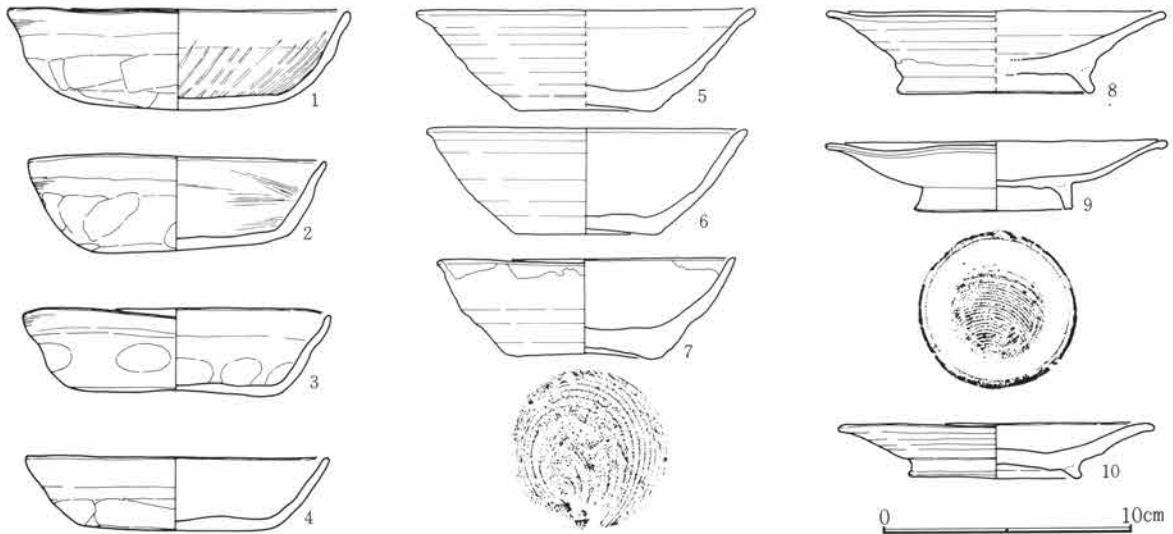


Fig.560 K127号住居跡出土遺物(1)

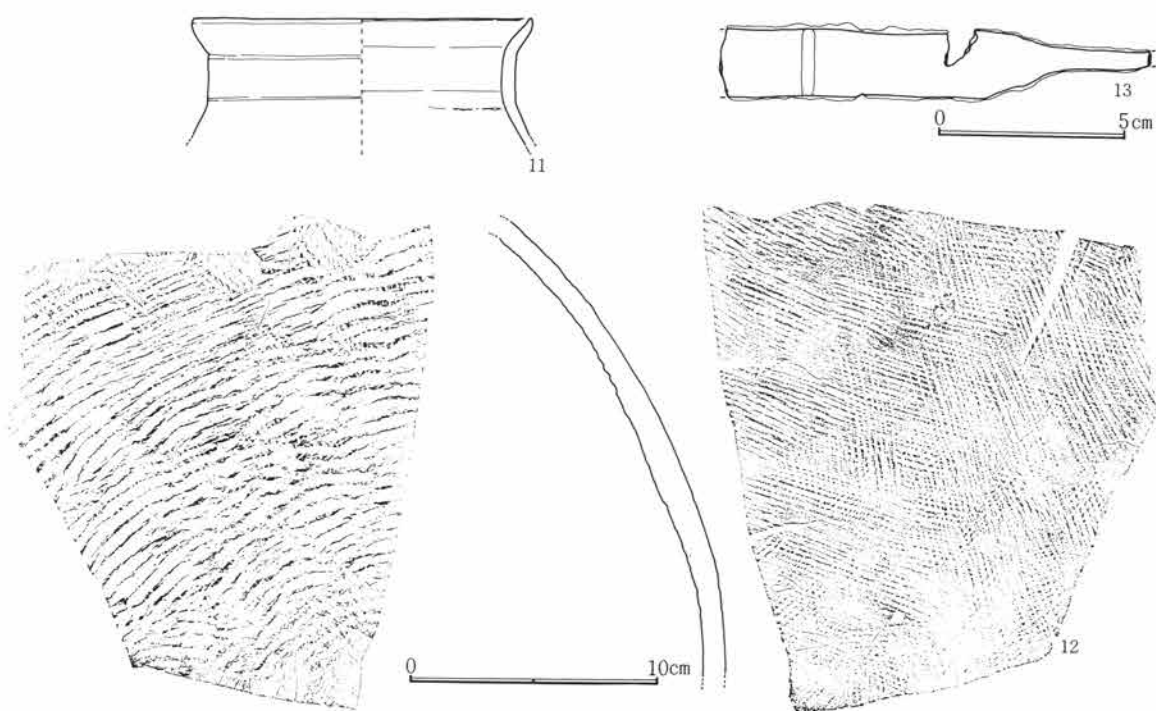


Fig.561 K127号住居跡出土遺物(2)

K 127号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
560-1 207-1	土師器 杯	1/2	13.7×-×4	竈前埋土	底部から体部にかけて丸味をもつ。体部中位で僅かにくびれ、口縁部は内湾気味に外傾する。内面斜行暗文。外面口縁部横撫で、体・底部篋削り。	①良好 ②灰赤 ③やや密
560-2 207-2	土師器 杯	完	12.1×-×3.9	竈内	平底気味の底部から体部直線的に外傾し、くびれて口縁部は内湾気味に外傾。内面・口縁部横撫で。体部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや粗 細砂混る
560-3 207-3	土師器 杯	完	12.3×8.5×3.3	竈前床面	平底気味の底部。体部は中位でくびれ、口縁部は内湾して開く。器肉薄い。口縁部横撫で、体部内外面は指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
560-4 207-4	土師器 杯	1/2	12.1×7.8×2.9	南東部埋土	体部内湾気味に外傾。器肉薄い。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 細砂混る
560-5 207-5	須恵器 杯	1/2	13.6×5.5×5	竈内	体部直線的で大きく外傾し、口縁部僅かに外屈する。口唇部細く丸い。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②灰黄 ③やや密
560-6 207-6	須恵器 杯	体部1/4 欠損	12.9×5.7×4.2	竈前埋土	体部中位でやや脹らみ、口縁部は外反気味。口唇部尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③密
560-7 207-7	須恵器 杯	完	11.9×6.1×4	竈前床面	腰部にくびれをもち、体部上位は内湾する。口唇部尖る。底部肥厚。口縁部内外面に黒色付着物。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 砂混る
560-8 207-8	須恵器 皿	1/4	13.6×7.8×3.3	南東部埋土	体部僅かに外反して開く。付高台、肥厚気味で端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂混る
560-9 208-9	須恵器 皿	1/4	13.7×6.3×2.7	南壁東際埋土	腰部丸く張り、体部は外反気味に開く。口唇部丸まり水平に反る。付高台、断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや粗 小石混る
560-10 208-10	須恵器 皿	完	12.6×6.9×2.2	南東部床面	腰部に稜をなし体部は外反して大きく開く。口唇部丸く水平に反る。付高台、短くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化軟 ②灰褐 ③やや密 砂混る
561-11 208-11	土師器 甕	口縁部 1/4	13.7×-×(5)	竈前埋土	肩部張り少なく、口縁部は直立した後内湾気味に外傾する。コの字口縁。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 砂混る
561-12 208-12	須恵器 甕	胴部片		竈内	内面青海波状のあて目。外面平行叩き。	①良好 ②灰白 ③やや密
561-13 208-13	鉄製品		(11.5) 身幅1.8 柄幅0.6	東壁際埋土	篋状。	

K128号住居跡 (Fig. 562・563・PL. 208・209)

K区中央部やや西よりに位置し、63・64K11～13の範囲にある。西側のほとんどは調査区域外に延び未検出であり、さらに確認がおくれたためかなり削平してしまった。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約3.8mを測り、東西は東壁より1.2mの範囲まで検出した。竈を基軸にする東西軸方位はN-79°-Eを示す。壁高は土層観察によると約26cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱く、南東隅には径40cm・深さ12cmの円形の貯蔵穴と考えられる穴が設けられる。またこれに近く径50cm・深さ16cmの穴が検出されている。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形を呈すが遺存状態は悪い。燃烧部はわずかに窪みをなし、燃烧部幅約60cm・奥行き70cmを測る。出土遺物は貯蔵穴内より須恵器の杯類がまとめて検出された。

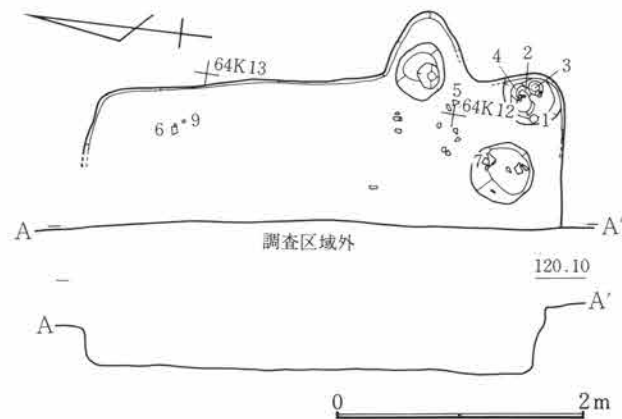


Fig.562 K128号住居跡

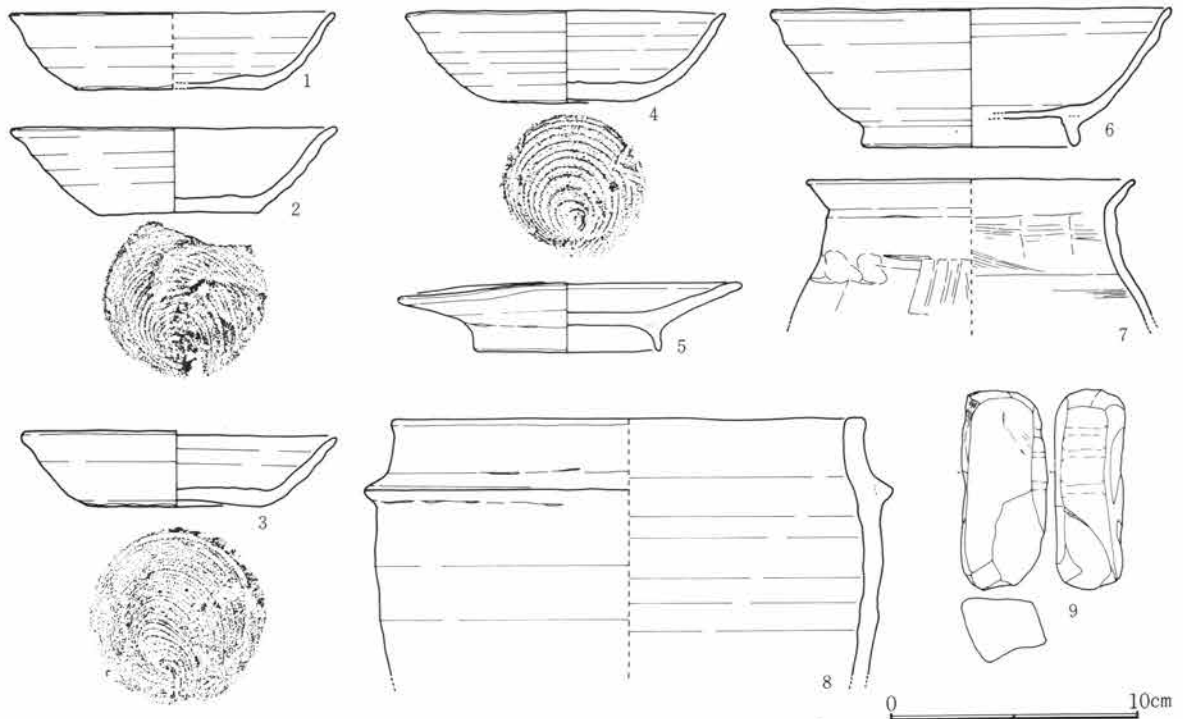


Fig.563 K128号住居跡出土遺物

K 128号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. Na	器 器	種 形	部 位	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
563-1 208-1	須 惠	器 杯	1/4	13.1×7.5×3	貯蔵穴内	体部やや浅く、丸味をもつ。口縁部緩く外反。器肉薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
563-2 208-2	須 惠	器 杯	完	13.1×6.5×3.3	貯蔵穴内	体部中位で僅かに脹らむ。口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。内面黒灰色を呈し燻し焼成か？	①良好 ②白灰 ③やや粗
563-3 208-3	須 惠	器 杯	完	12.6×7×3	貯蔵穴内	体部浅く直線的に外傾。口縁部僅かに外屈。口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②青灰 ③やや密
563-4 209-4	須 惠	器 杯	完	13×5.7×3.7	貯蔵穴内	腰部から体部にかけて丸味をもつ。口唇部尖り、僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②明オリーブ灰 ③やや粗
563-5 209-5	須 惠	器 皿	完	13.8×7.5×2.7	竈前床面	体部直線的に開き口唇部水平に反る。付高台、内湾して立つ。見込部重ね焼成痕、爪状痕。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
563-6 209-6	須 惠	器 椀	1/2	16.2×8.8×5.5	北東部埋土	体部僅かに丸味をもつ。口縁部くびれて外反気味。付高台、ハの字状に開く。器肉薄い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
563-7 209-7	土 師	器 甕	口縁部 1/2	13.2×—×(5.8)	南東土坑内	肩部張り少なく、口縁部直線的に内傾した後上半は外屈するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗 砂混る
563-8 209-8	羽 釜		上半部 1/3	19×—×(10) 鏝径21.2	埋土	胴部張り少なく、鏝は丸味のある三角形。口縁部外反気味に直立し、口唇上端は平ら。口縁部・胴部回転撫で。	①良好 ②灰黄 ③やや密 細砂混る
563-9 209-9	石 製品			7.1×3.5×2.6 90.7g	北東部埋土	多面使用。刃痕あり。	流紋岩(砥沢?)

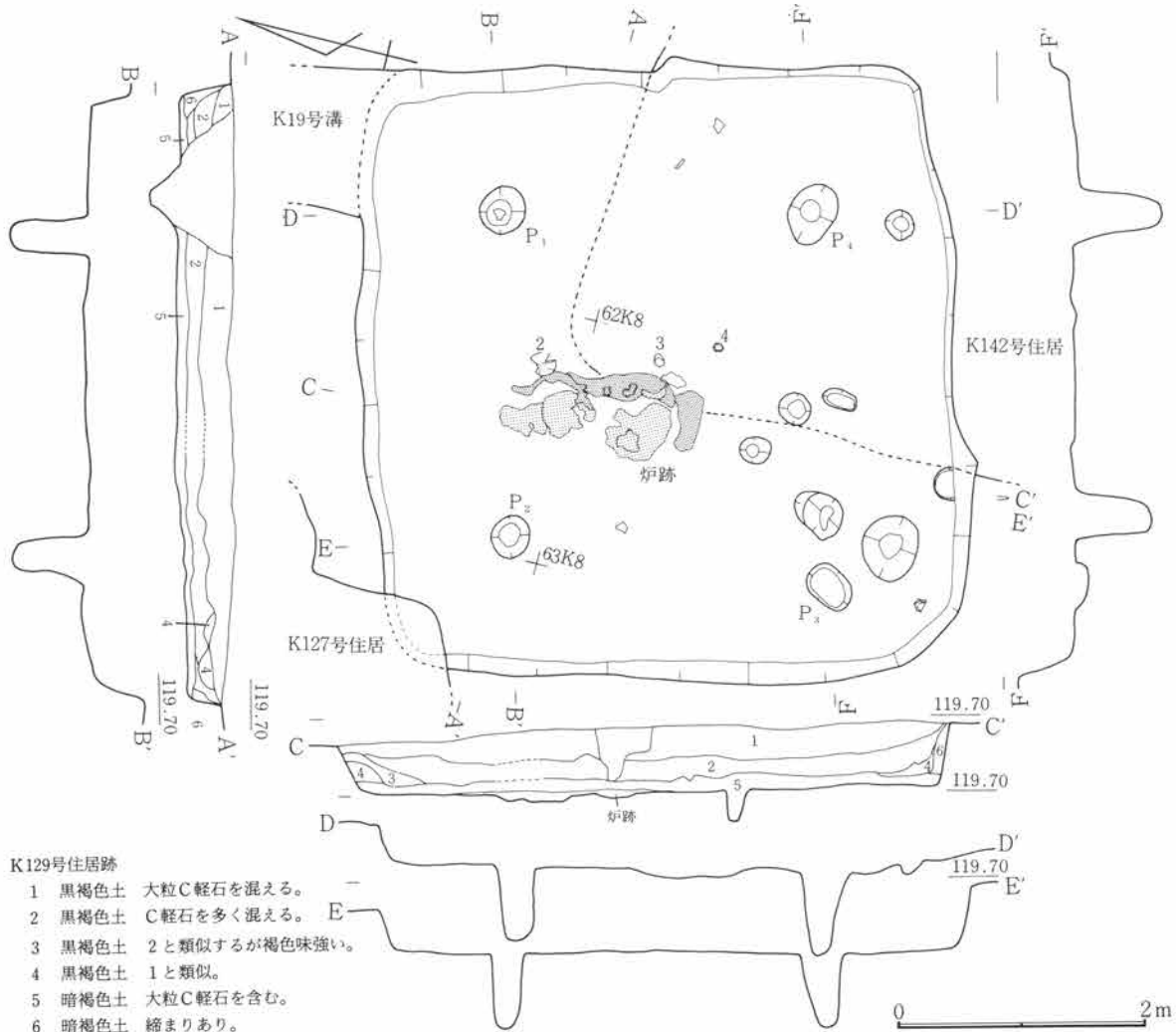


Fig.564 K129号住居跡

第3章 K区の遺構と遺物

K129号住居跡 (Fig. 564・565・PL. 209・210)

K区南部やや西寄りに位置し、60～63K6～8の範囲にある。127号・142号住居跡・19号溝と重複しているが、これらより古い時期の所産である。平面形は一辺約4.9mのほぼ正方形を呈するが、各隅部は若干の丸味を有する。東西軸方位はおよそN-74°-Eを示す。壁高は遺存良好な箇所で約50cmを測る。床面は19号溝の通る東壁沿いがやや軟弱であるが他は総じて固く踏み締まる。支柱穴はP₁～P₄の4箇所に検出されている。P₁は上径36cm・下径20cm・深さ58cm、P₂は上径34cm・下径18cm・深さ60cm、P₃は上径30cm・下径10cm・深さ60cm、P₄は上径50×40cm・下径16cm・深さ70cmを測る。また柱間はP₁・P₂は2.6m、P₂・P₃は2.6m、P₃・P₄は2.4m、P₁・P₄は2.5mをそれぞれ測る。炉跡は地床炉で住居跡中央部からわずかに北西に偏った地点に検出されている。炉跡の東から南にかけてその周囲は粘土混じりの薄い炭化層が分布しており石材などの構築物はない。その周囲は東西40cm・南北80cmである。炉の火床と考えられる部分は接近して南北に2箇所あり、いずれもわずかな窪みをなす程度で固い焼土面をなす。北側と南側の火床は約20cmほど離れ、大きさは30～40cmである。出土遺物は少量で、炉跡の周辺から主に出土している。

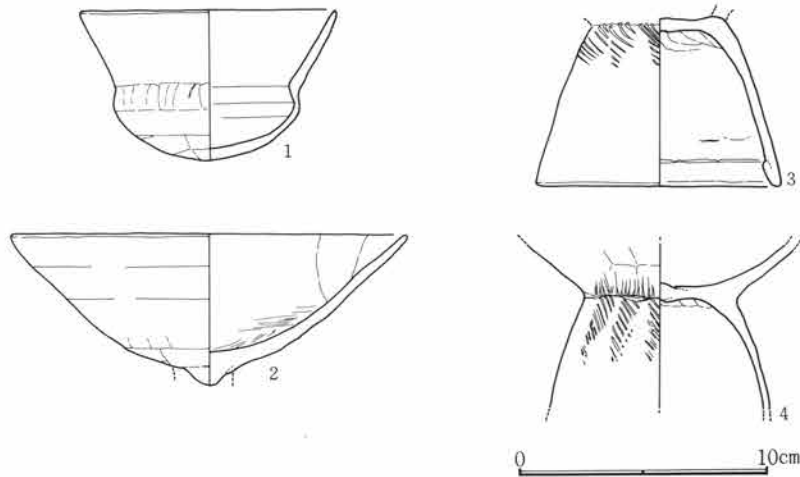


Fig.565 K129号住居跡出土遺物

K129号住居跡出土遺物観察表

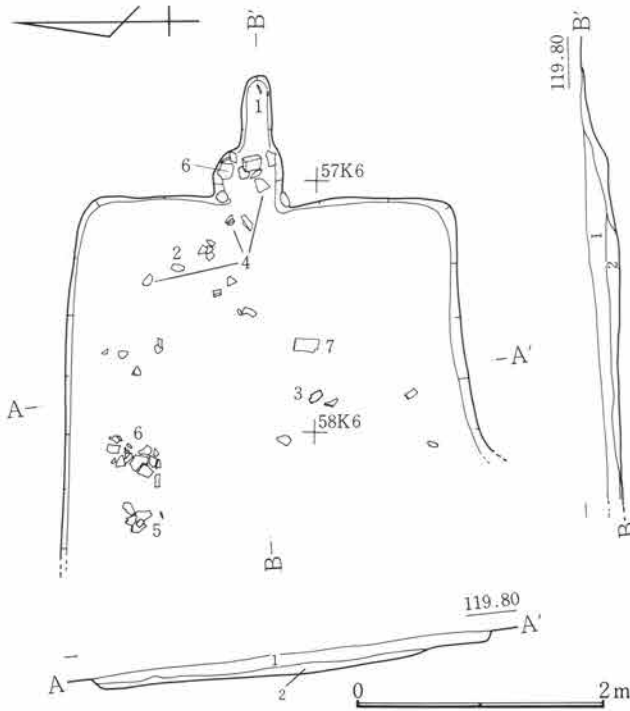
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
565-1 209-1	土師器 埴	完	10.3×-×6 口径高3	埋土	小形丸底埴。体部丸く張り扁平。体部からくびれて、口縁部は直線的に外傾して開く。口唇部尖る。口縁部横撫で、体部上半篋削り。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
565-2 209-2	土師器 高杯	杯部	16×-×(6)	炉際床面	体部直線的に開く。杯部柄状突起。体部横撫で、腰部不定方向の篋削り。	①良好 ②淡黄 ③ やや粗
565-3 210-3	土師器 台付甕	台部	-×9.8×(6.6) 台部上径5.4	炉際床面	台部やや内湾気味に開く。端部内側に折り返し、上位に斜行掻き目。	①良好 ②浅黄 ③ やや粗
565-4 210-4	土師器 台付甕	台部	-×-×6.5 台部上径6.2	炉際床面	腰部丸味をもち、台部は内湾する。腰部縦・台部斜行掻き目。	①良好 ②橙 ③粗 砂多く混る

K130号住居跡 (Fig. 566～569・PL. 210・211)

K区南部に位置し、56～58K5・6の範囲にある。141号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。平面確認で141号住居跡の範囲を深く削平したため検出順位が逆転し、新旧を誤認してしまっ

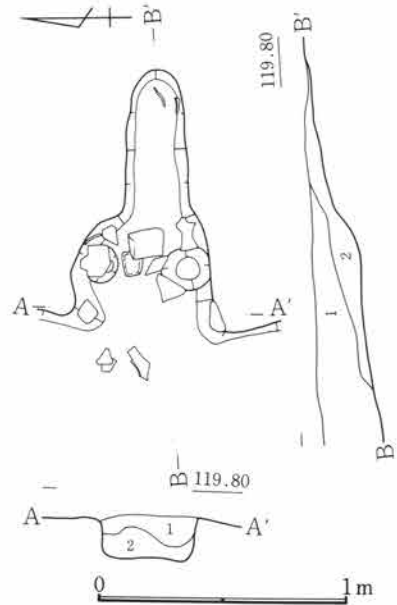
第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

た。このため当跡の西壁部分は消失している。平面形は方形を呈すると考えられ南北長は3.2mを測り、東西は東壁より2.8mの範囲まで確認された。竈を基軸にする東西軸方位はN-90°-Eを示す。壁高は約14cmを測る。円形に掘り込まれた燃烧部から緩い傾斜をもって長い煙道部が延びる。両袖には凝灰岩の加工材が埋設され燃烧部内には天井材と思われる同質の加工材が落ち込んでいる。袖部内法45cm、燃烧部奥行き40cm、煙道部長さ60cmを測る。出土遺物は竈内より羽釜などが検出されている。



K130号住居跡
 1 黒褐色土 細粒白色粒を多く混え堅くしまる。
 2 黒褐色土

Fig.566 K130号住居跡



K130号住居跡竈
 1 黒褐色土 細粒白色粒を多く混え堅くしまる。
 2 黒褐色土 焼土粒を含む。

Fig.567 K130号住居跡竈

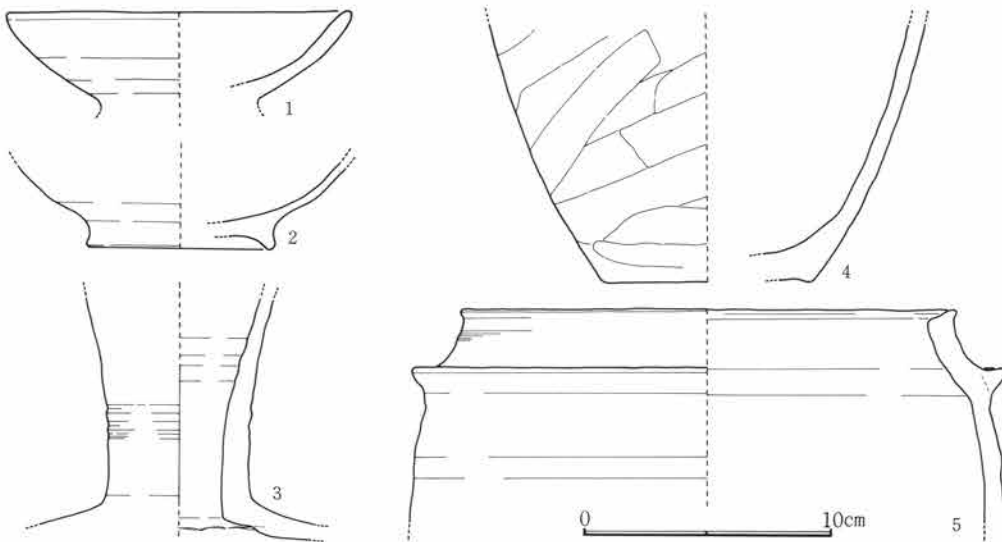


Fig.568 K130号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

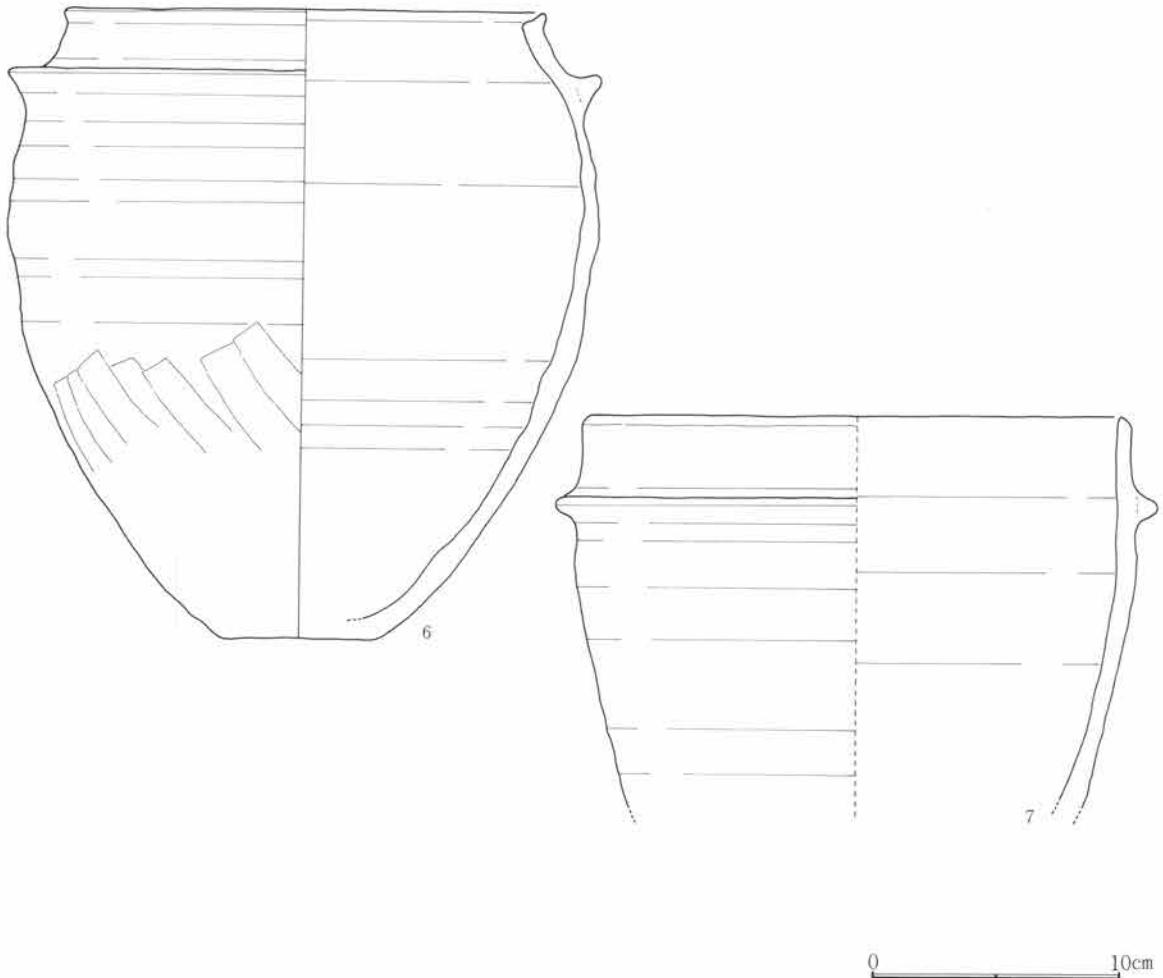


Fig.569 K130号住居跡出土遺物(2)

K 130号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
568-1 210-1	土 師 質 碗	1/4 底 部欠損	13.9×-×(3.7)	竈煙道部	体部丸味をもち内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。	①やや軟 ②鈍い赤 褐 ③密
568-2 210-2	灰 釉 陶 器 碗	底部1/4	-×7.5×(3.5)	北東部埋 土	腰部丸い。底部厚く、台高丸い。	①やや軟 ②灰白 ③緻密
568-3 211-3	須 恵 器 長 頸 壺	頸 部	-×-×(6.5) 頸基部径5.9	中央部床 面	頸基直立し上半はやや外傾して開く。下位に不鮮明な凹線3条巡る。内面戻部接合痕あり。	①良好 ②暗緑灰 ③密 白色細粒混る
568-4 211-4	羽 釜 ?	底部1/3	-×8.4×(10.3)	竈 内	胴部やや脹らむ。胴部斜・腰部横篋削り。	①酸化気味 良好 ②鈍い黄褐 ③粗
568-5 211-5	羽 釜	口縁部 1/3	19.9×-×(8.5) 口径23.6	北西部埋 土	胴部やや張り気味。口縁部外反して内傾する。口唇部外端は外へ突出し上端面は内斜する。口縁・胴部回転撫で。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 細砂混る
569-6 211-6	羽 釜	完	19.2×6.4×2.5 口径23.6 口径23.7	北西部埋 土・竈内	胴部張り気味。口縁部は外反気味で強く内傾する。口唇部外端は突出し、上端面は窪みをもって内斜する。口縁部・胴部上半は回転撫で。胴下半は斜篋削り。	①酸化気味 良好 ②灰黄褐 ③やや粗
569-7 211-7	羽 釜	1/2 下 半欠損	21.4×-×15.6 口径24	中央部埋 土	胴部張り少なく、口縁部直立する。口唇部尖る。鑄丸味あり。口縁・胴部回転撫で。	①良好 ②黒灰 ③ やや粗

K 131号住居跡 (Fig. 570~572・PL. 211)

K区中央部やや南寄りに位置し、55~57K 9~11の範囲にある。124号・148号住居跡と重複しており、124号より旧く、148号より新しい時期の所産である。また、南壁際には中世に属する2号井戸跡が検出されている。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

る。平面形は、東西に長い長方形を呈する
と考えられ、南北長約4mを測る。東西軸
方位はおよそN-80°-Eを示す。壁高は
約14cmを測る。床面は平坦をなすが踏み
締まりは弱く、柱穴などの諸施設は検出
されていない。南西部隅に径70×44cmの
楕円形を呈し炉床が固く焼け締まった炉
跡が検出されている。炉跡の存在などか
ら、古墳時代前半頃の遺構とも考えられ
るが、出土する遺物からは平安期の時期
が与えられるであろう。工房跡の可能性
も考えられるが、積極的な物証はない。
出土遺物は少量の土器類である。

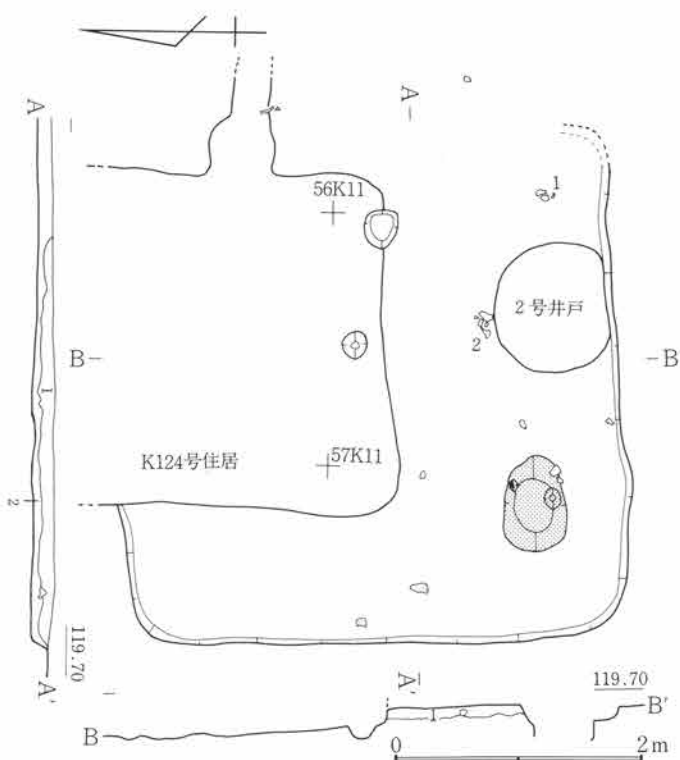


Fig.570 K131号住居跡

K131号住居跡

- 1 暗褐色土 細粒C軽石を含み締まりあり。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。

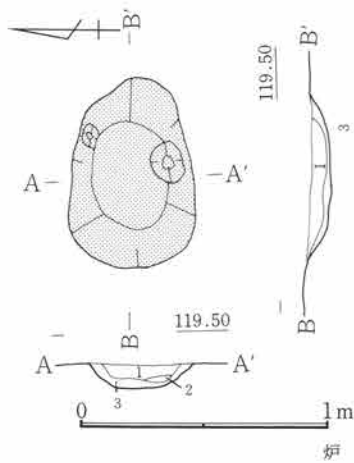


Fig.571 K131号住居跡炉

- 1 暗褐色土 焼土粒混りしまりなし。
- 2 焼土塊
- 3 焼土層

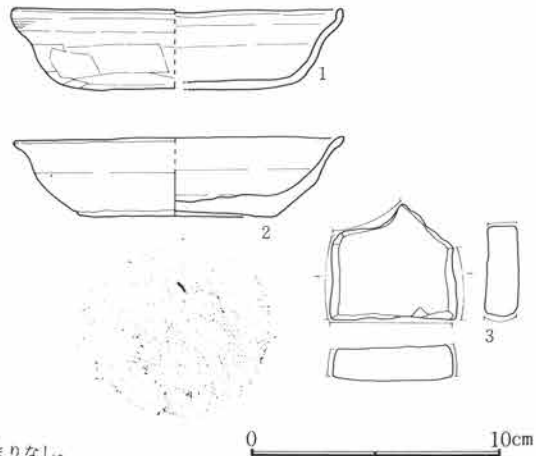


Fig.572 K131号住居跡出土遺物

K 131号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
572-1 211-1	土 師 器 杯	1/3	13.4×9.5×3.2	南部埋土	底部平底気味。胴部は丸味をもち、体部中位でくびれ上半は外反する。口縁部は丸味をなし内湾気味に立つ。器肉薄い。口縁部・内面横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密 砂混る
572-2 211-2	須 恵 器 杯	1/2	13.2×7.9×3.2	南央部埋土	腰部直線的で体部中位が張る。上半は外反して開き、口唇部は器肉が薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 黒色粒混る
572-3 211-3	須 恵 器 転用砥石		4.5×5×1.3 16g	埋 土	4側面使用。壘片。	①良好 ②灰白 ③ やや密

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

検出されている。P₁は上径50×40cm・下径22cm・深さ55cm、P₂は上径50×46cm・下径18cm・深さ58cm、P₃は上径46cm・下径22cm・深さ60cmを測り、柱間はP₁・P₂は3m、P₂・P₃は2.5mを測る。北東隅には径50×60cm・深さ24cmを測る円形の貯蔵穴が設けられている。竈は明確に検出できなかったが、北壁の中央近くに焼土層の分布が認められ、遺物が集中している。なお、この遺物集中地点を中心に小竪穴状に落ち込む部分が認められ、他の遺構と重複している可能性が考えられたが、確認はできなかった。出土遺物は、土器類の他、羽口・砥石の類が多く検出されている。

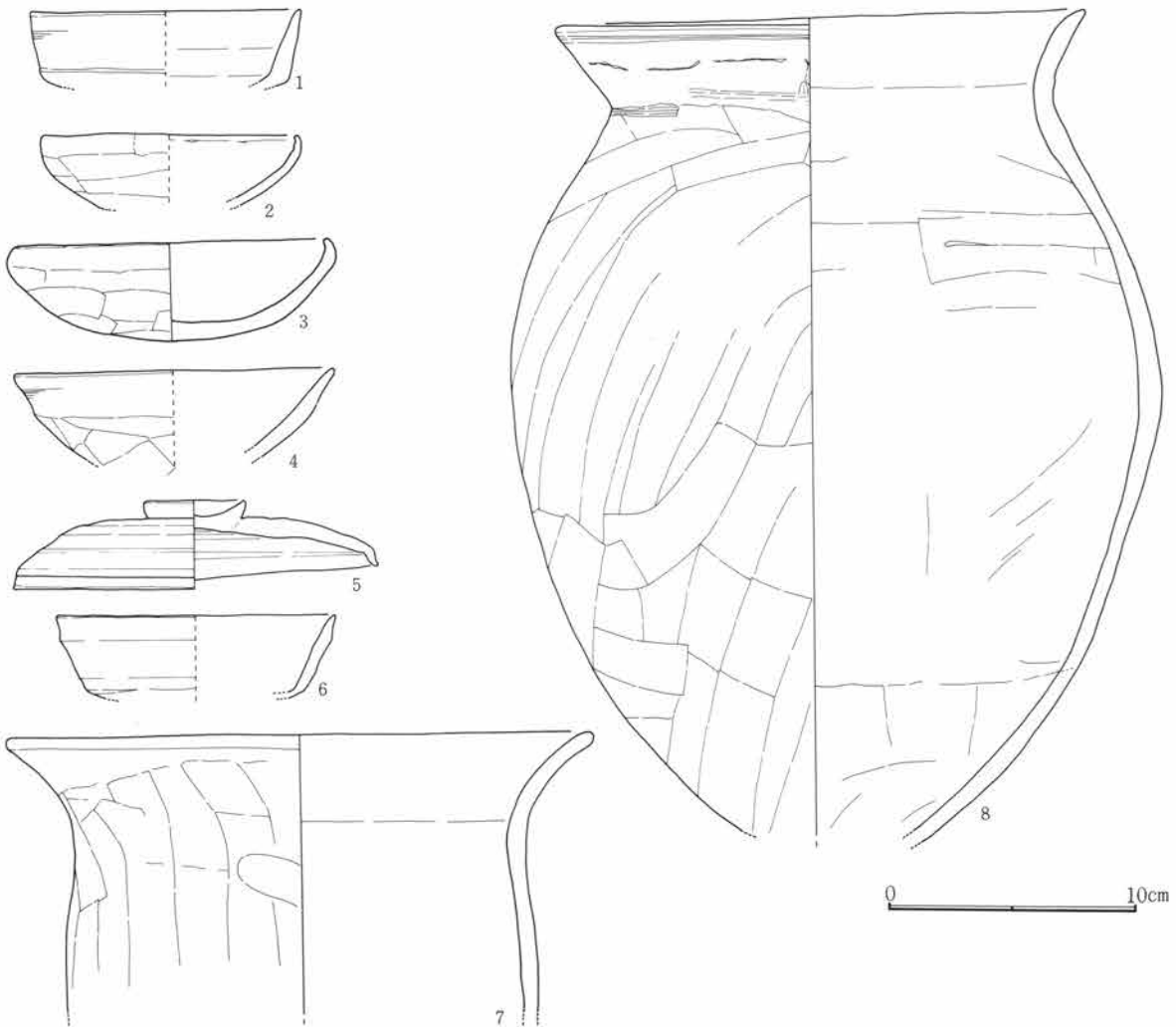


Fig.574 K132号住居跡出土遺物(1)



Fig.575 K132号住居跡出土遺物(2)

K132号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
574-1	土 師 器 杯	1/4 底 部欠損	11×-×(3) 口径高2.5	南中央床 面	浅く扁平な底部から僅かに段をなし、口縁部直線的に外傾する。口唇部細る。口縁部横撫で。底部寛削り。	①軟 ②橙 ③緻密
574-2	土 師 器 杯	1/4 底 部欠損	10.5×-×(3)	埋 土	口縁部内湾し、口唇部は内側へ丸まる。口縁部横撫で。体・底部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや密 砂混る
574-3 212-3	土 師 器 杯	完	13.2×-×3.9	中央部床 面	全体に肥厚。丸底。口縁部内湾し、口唇部は丸く内屈する。口縁部横撫で。体・底部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
574-4 212-4	土 師 器 杯	1/2 底 部欠損	12.8×-×(3.5)	南部埋土	体部丸味なく、口縁部はくびれて外反気味に開く。口唇部横撫で。体部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 小石混る

K132号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
574-5 212-5	須恵器 蓋	完	13.7×—×3.5 口径4	埋土	天井部平坦をなし、体部脹らみ気味。口縁部強く曲り外反して僅かに開く。環状摺、端部断面略三角。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
574-6	須恵器 杯	底 部欠損	10×8.7×(3.2)	北壁際床 面	底部やや脹らみ、体部直線的に外傾。口縁部下で脹らみ、口唇部は尖る。轆轤成形。底部手持ち篋削り。	①良好 ②暗灰黄 ③やや密
574-7 213-7	土師器 甕	口縁部 欠損	13.6×—×(11)	南東部床 面	胴部張りなく長胴を呈す。口縁部外反して大きく開く。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③粗砂多く混る
574-8 213-8	土師器 甕	ほぼ完 底部欠	21.3×—×(32) 胴部径26	中央部床 面	胴部に張りをもち最大径は中位やや上にある。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。肩部横・胴部縦篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
575-9 213-9	土製品 羽口		長11.2 中径3 孔径1.2	中央部床 面	先端部溶解。指頭による凹凸成形。	植物質混る
575-10 213-10	土製品 羽口	基部欠 損	長(10.2) 径1.5 孔径1.7	西央部床 面	先端部溶解。	白色小石・植物質混る
575-11 213-11	土製品 羽口	ほぼ完	長11.2 先径5.5 基底径9.3 孔径2.6	中央部床 面	先端部溶解。縦の強い撫で成形。	小石混る
575-12 213-12	土製品 羽口	基部欠 損	長(7.3)先端径4 孔径2	中央部床 面	先端部溶解角度約40°。	植物質混る
575-13 213-13	土製品 羽口	先端部 欠損	長(8.5) 中径6 孔径2	中央部床 面	先端部溶解。指頭痕成形。	
575-14	土製品 羽口片	基部小 片	長(6)	貯蔵穴内	指頭痕成形。	
575-15	土製品 羽口片	基部小 片	長(7)	西央部床 面	縦の強い撫で。	
575-16 213-16	鉄滓		10.3×7.5×3.8	型土		
575-17 213-17	須恵器 転用砥石		5.7×5.2×1.1 39.2g	埋土	4側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
575-18 213-18	須恵器 転用砥石		7×6×1.3 100.5g	北央部床 面	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰褐 ③やや密
575-19 213-19	須恵器 転用砥石		3.9×4.3×0.8 19.5g	北央部床 面	3側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
575-20 213-20	須恵器 転用砥石		4.5×3.5×1 19.7g	埋土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
575-21 213-21	土製品 転用砥石		4.3×4.7×2 34.8g	中央部床 面	多面使用。羽口片。	
575-22 213-22	石製品 砥石		3×2.8×2.6 13.7g	埋土	1面使用。	角閃石安山岩
575-23 213-23	石製品 砥石		8.5×6.5×4.8 354g	埋土	多面使用。欠損部も使用する。	輝石安山岩(粗粒)

K133号住居跡 (Fig. 576~578・PL. 214)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.69 × 3.48	N—101°—E	東壁やや南寄り	—————

K区南東部に位置し、51~53K 2~4の範囲にある。41号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸を持つ比較的整った方形を呈する。壁高は約24cmを測る。床面は平坦をなし、南半の踏み締まりは良好である。床面精査の結果、数箇所小穴を検出したが、規則性は看取できず、柱穴としては確定できない。P₁は上径22cm・下径24cm・深さ32cm、P₂は上径20cm・下径12cm・深さ30cm、P₃は上径30cm・下径16cm・深さ26cm、P₄は上径42cm・下径24cm・深さ24cm、P₅は上径20cm・下径12cm・深さ30cm、P₆は上径30cm・下径16cm・深さ26cm、P₇は上径32cm・下径20cm・深さ26cmを測る。また、竈前は浅い窪

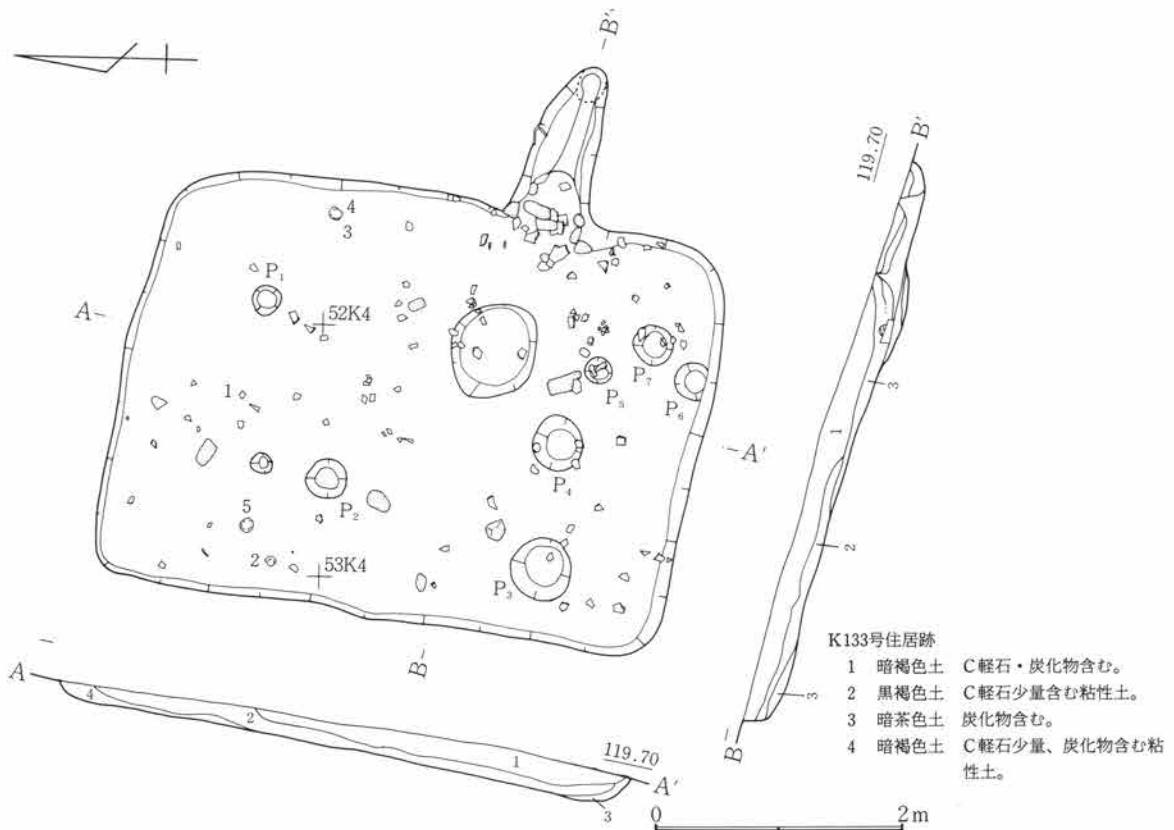


Fig.576 K133号住居跡

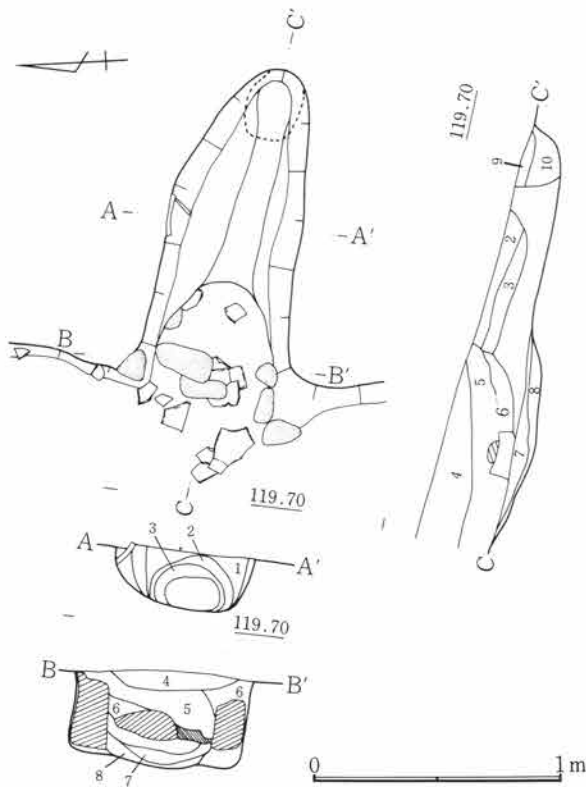


Fig.577 K133号住居跡竈

みをなす。竈は東壁の南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれた燃焼部から煙道部は僅かに立ち上がり、水平に延びる。煙道部は天井部が残り、先端部には煙出し孔があく。両袖部及び側縁には凝灰岩の加工材が埋設され、燃焼部内には天井材が崩壊している。袖部内法48cm、煙道部長さ85cm・煙道孔径27×17cm、煙出し孔径22cmを測る。出土遺物は住居内に散在しており、土師器小杯類が多く、また、竈内には羽釜片などが検出されている。

K133号住居跡竈

- 1 焼土化した黒褐色土
- 2 焼土層
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土 C軽石・炭化物含む。
- 5 暗茶色土 炭化物含む。
- 6 黒茶色土 灰少量含む粘性土。
- 7 焼土層
- 8 灰層
- 9 焼土層
- 10 褐色土 焼土塊含む。

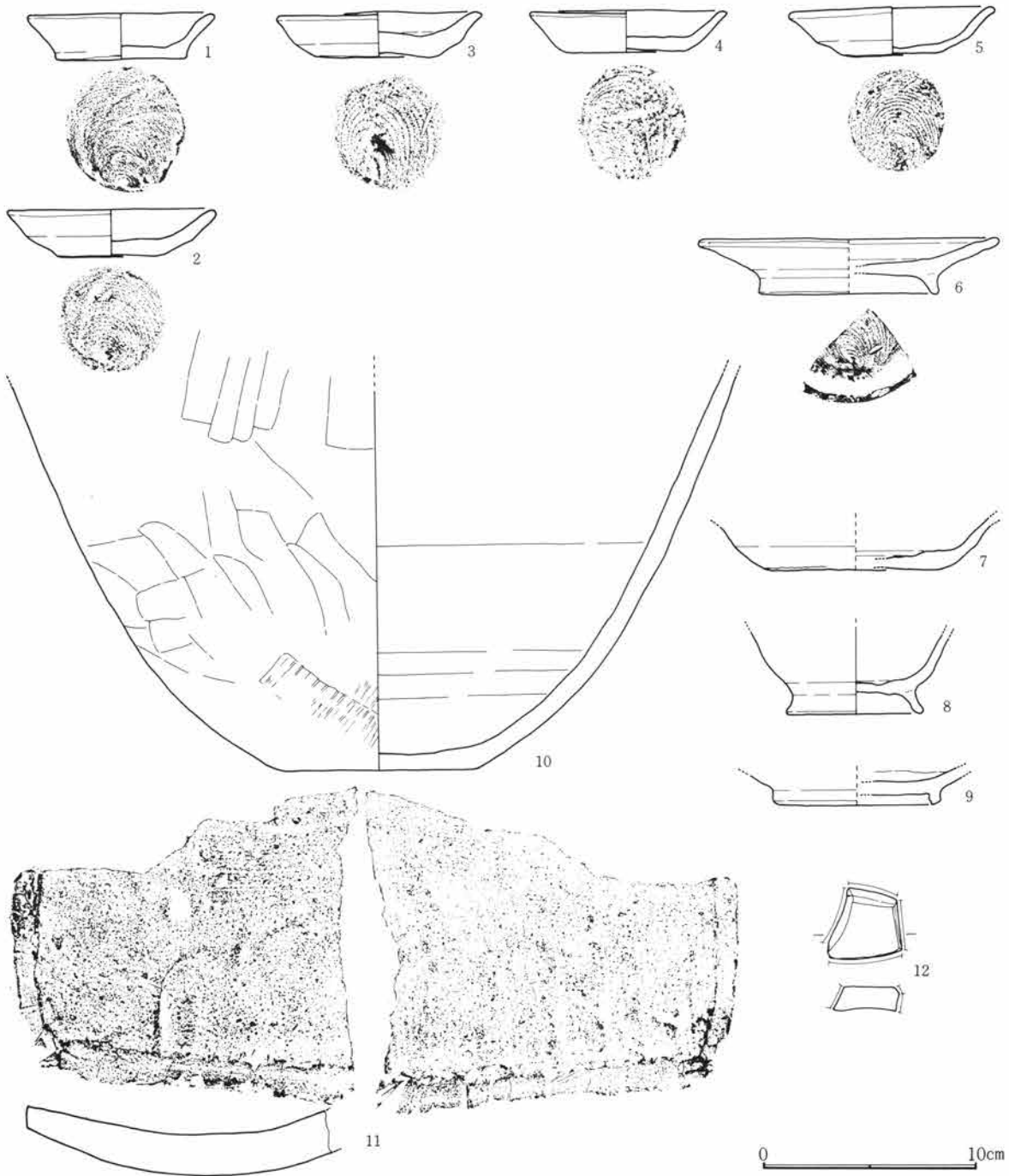


Fig.578 K133号住居跡出土遺物

K 133号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
578-1 214-1	土師質 杯	体部1/2 欠損	8.8×6×21	北中央部床 面	腰部は直に立ち上がり体部は外反気味に開く。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗 白色粒混 る
578-2 214-2	土師質 杯	完	9.8×4.8×2.2	北西部埋 土	腰部大きく外傾し、中位で屈し上半は再び外傾する。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや密 砂混る
578-3 214-3	土師質 杯	完	9.6×5.3×2.1	北東部床 面	体部浅く、全体に肥厚。体部中位を屈し、上半は外反して開き、口唇部細る。見込部凸る。轆轤成形。	①良好 ②淡黄 ③ やや粗 白色粒混る

第3章 K区の遺構と遺物

K 133号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
578-4 214-4	土師質 杯	完	9.3×5.7×2	北東部床 面	体部浅く直線的に開き口唇部細る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
578-5 214-5	土師質 杯	完	9.6×4.5×2.2	北西部埋 土	器肉薄い。体部中位で屈して上半は外反して開く。口唇部丸まり短く外屈。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③ やや密
578-6 214-6	須恵器 皿	1/4	14×8.4×2.5	南東部埋 土	体部直線的で大きく開く。口縁部水平に近くやや内湾気味。口唇部丸い。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や密
578-7 214-7	須恵器 杯	底部1/3	—×8×(2.5)	床 下	腰部丸く、体部は外反を呈す。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
578-8 214-8	須恵器 椀	底部1/2	—×6.4×(4)	竈 内	腰部張る。付高台、やや高くハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①酸化 良好 ②鈍 い黄橙 無やや粗
578-9 214-9	灰釉陶器 皿	底部1/3	—×7.8×(1.7)	床 下	高台直に立ち稜明瞭。内面に凹線巡る。見込部・底部無釉。	①良好 ②浅黄 ③ やや密
578-10 214-10	土師器 壺	下半部	—×9.5×(8.5)	床 下	平底。腰部丸く脹らむ。胴部斜篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③粗 小石混る
578-11 214-11	瓦 平瓦		厚1.8	床 下	凹面篋調整。凸面縄目。	①良好 ②灰 ③や や粗
578-12 214-12	須恵器 転用砥石		3.3×3.4×1.1	埋 土	4側面使用。刃痕あり。蹠片。	①良好 ②灰 ③や や密

K 134号住居跡 (Fig. 579~582・PL. 215・216)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.24 × 3.43	N— 93° —E	東壁やや南寄り	円形 (52.0 × 51.0 × —)

K区南側に位置し、53・54 K 6～8の範囲にある。143号・165号住居跡と重複しているがこれらより新しい時期の所産である。平面形は南北

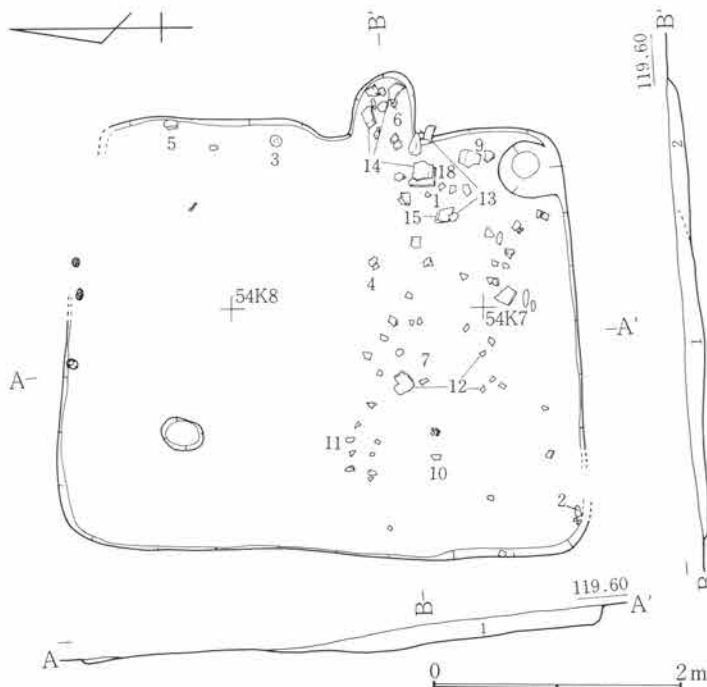


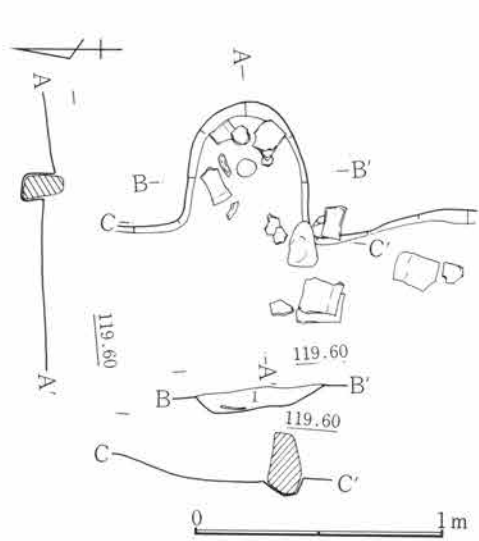
Fig.579 K134号住居跡

に長軸を持つ方形を呈する。壁高は12cmと浅い立ち上がりである。床面は北東部から南西部にかけての北側の範囲が一段低くなり、他の遺構との重複かと思われたが、明確にはできなかった。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。右袖部には凝灰岩の加工材が埋設されている。燃烧部幅56cm・奥行き55cmを測る。出土遺物は南半部に多く散在し、灰釉陶器の他、竈内より土釜片などが検出された。

K134号住居跡

- 1 暗褐色土 土粒粗い砂質土。
- 2 暗褐色土 1と類するが炭化層あり。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物



K134号住居跡竈
1 暗褐色土 焼土粒を含む。

Fig.580 K134号住居跡竈

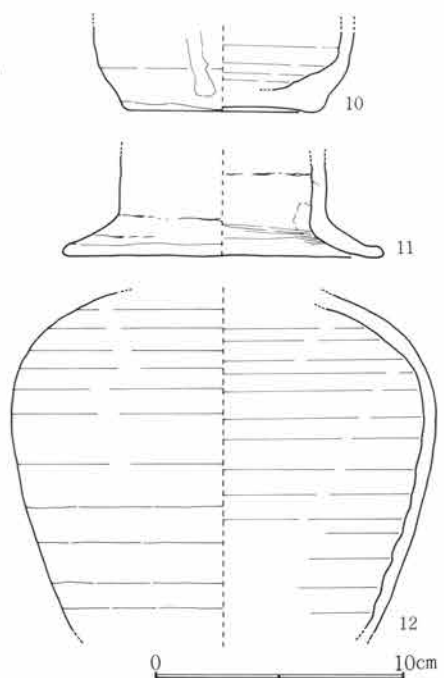
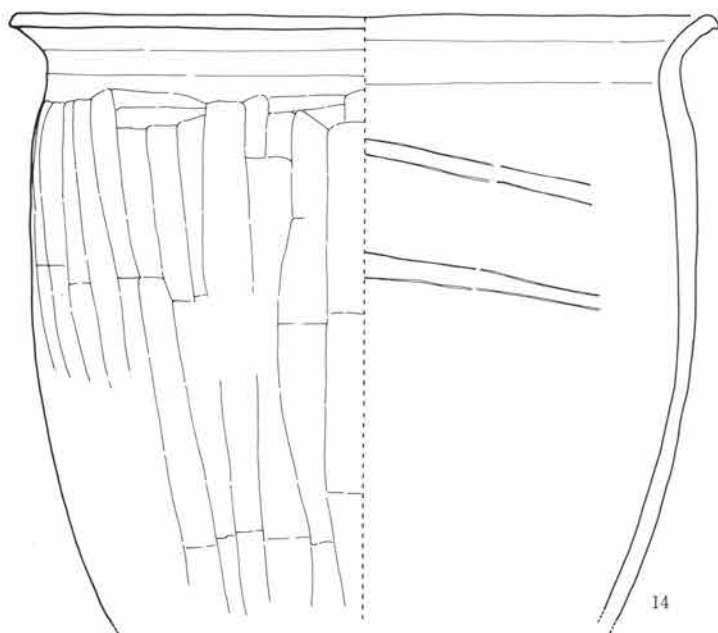
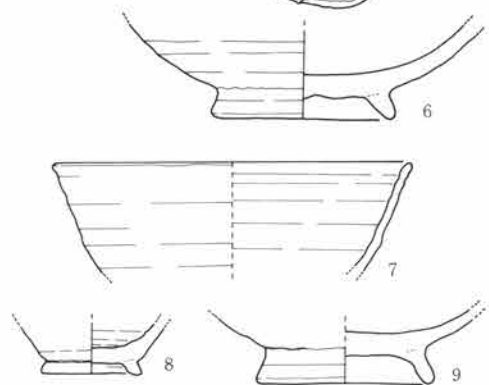
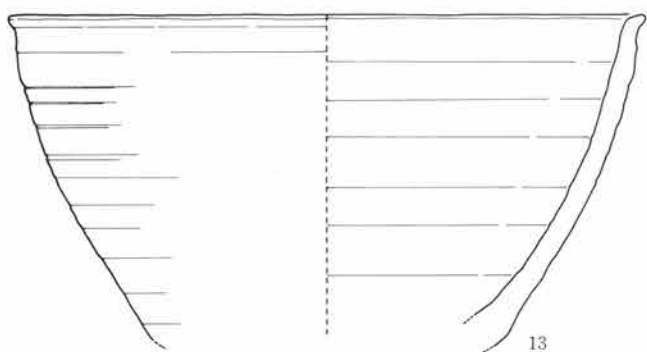
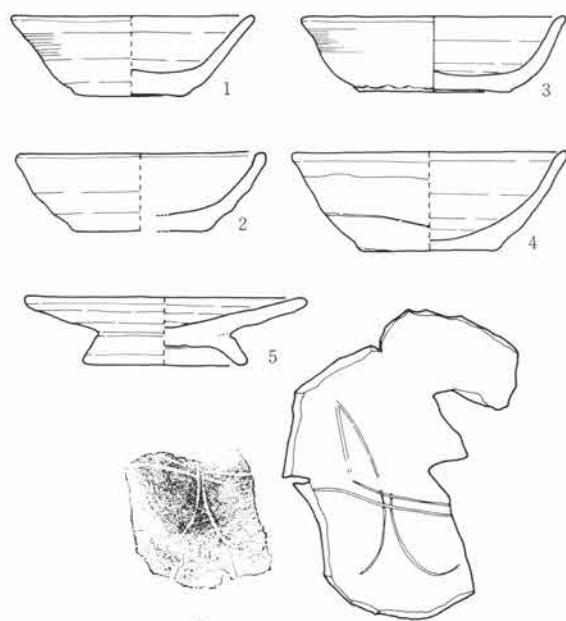


Fig.581 K134号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

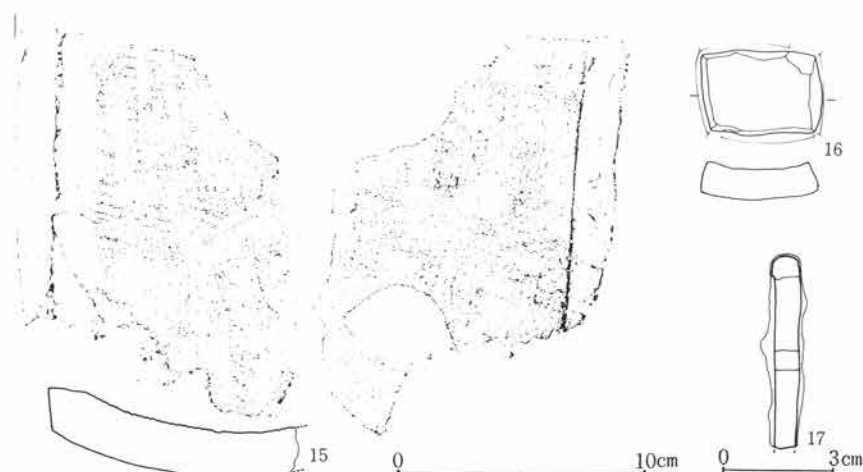


Fig.582 K134号住居跡出土遺物(2)

K134号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
581-1 215-1	土 師 質 杯	1/4	9.8×4.6×3.2	竈前埋土	体部外反気味に開く。口唇部丸い。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②鈍い黄橙 ③やや密 細砂混る
581-2 215-2	土 師 質 杯	1/4	10×5.4×3.1	南西部埋土	体部丸味をもち口唇部丸まり内湾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗
581-3 215-3	須惠器? 杯	完	10.6×6×3	東中央部床面	腰部丸く張り、口唇部は緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂多く混る
581-4 215-4	須惠器 杯	1/4	11×5.6×3.9	中央部床面	体部やや丸味をもち、口唇部丸くやや外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 やや軟 ②暗灰黄 ③やや粗
581-5 215-5	土 師 質 皿	体部1/4 欠損	11.4×6.6×2.7	北東部床面	全体に肥厚。体部ハの字状にて大きく開く。口唇部丸い。付高台、大きくハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや密
581-6 215-6	土 師 器 椀	体部欠損	—×7.4×(4)	竈 内	全体肥厚する。付高台、端部丸くハの字状に開く。内面黒色処理。見込部に篋描きあり。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密
581-7 216-7	灰釉陶器 椀	体部小片	14.3×—×(4.3)	中央部埋土	腰部に丸味をもち、体部は直線的に外傾。	①良好 ②灰白 ③やや粗
581-8 216-8	須惠器 瓶	底部	—×4×(2)	竈前埋土	内面に明瞭な轆轤痕。	①良好 ②灰 ③やや密
581-9 216-9	須惠器 椀	底部	—×7.1×(2.8)	南東部埋土	腰部に丸味をもち、底部肥厚する。付高台、やや高く、肥厚しハの字状に開く。端部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③やや密
581-10 216-10	灰釉陶器 瓶	底部1/4	—×8×(3.3)	南西部埋土	腰部丸味をもつ。底部施釉。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
581-11 216-11	土 師 器 甕?	口縁部1/4	—×12.7×(4)	西中央部床面	胴部張りなく寸胴をなす。口縁部強く外屈し、口唇部は丸い。内面篋撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密 細砂混る
581-12 216-12	灰釉陶器 長頸壺	胴部1/4	—×—×(3.5) 胴部径17	中央部埋土	肩部丸く張り、最大径は胴部上位にあり。内面銀化。胴下半回転篋削り。釉荒れ顕著。	①良好 ②黄灰 ③やや粗
581-13 216-13	須惠器 鉢	体部小片	25.6×—×(13)	竈 際	体部内湾気味に立ち上がり、口唇部は外屈する。腰部肥厚。外面回転篋撫で顕著。	①酸化 良好 ②橙 ③やや密
581-14 216-14	土 師 器 甕	1/4 下半欠損	28.4×—×(23.8) 胴部径26.5	竈内・竈前埋土	胴部張り少なく、口縁部はくの字状に外反。口唇部は細く外へ突出する。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
582-15 216-15	瓦 平瓦		厚1.8	竈前埋土	凹面布目、篋削り。凸面撫で。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
582-16 216-17	須惠器 転用砥石		4.8×3.4×1.2 32.1g	埋 土	4側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密
582-17 216-17	鉄 製 品 釘	先端部欠損	5.2×0.7×0.5 32.1g	埋 土	角釘?	

K135号住居跡 (Fig. 583~585・PL. 217・218)

K区中央部の西寄りに位置し、63~66K22~25の範囲にある。118号・122号住居跡と重複しているがこれらより新しい時期の所産である。また、両者の重複関係は122号の深い掘形によって消失部分が多く、確定できなかった。135号の平面形は方形を呈すると考えられ、東西長約3.8mを測る。竈を基軸にする東西軸はN-103-Eを示す。壁高約20cmを測る。床面は検出部分が少なく、詳細は不明である。南東隅には径80cm・深さ20cmの円形貯蔵穴が設けられる。竈は東壁の南寄りに付設され、楕円形に40cm程突出する。出土遺物は貯蔵穴周辺に多く検出されている。

136号は135号の西側にあり、東側のほとんどは122号によって消失し、西側は調査区域外に延び、検出部分は少ない。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約4.6mを測る。東西軸はおおよそN-120°-E前後と思われる。壁高は約20cmを測り、床の踏み締まりは弱い。北西隅には径1m前後・深さ30cmの円形土坑が検出されている。出土遺物は少ない。

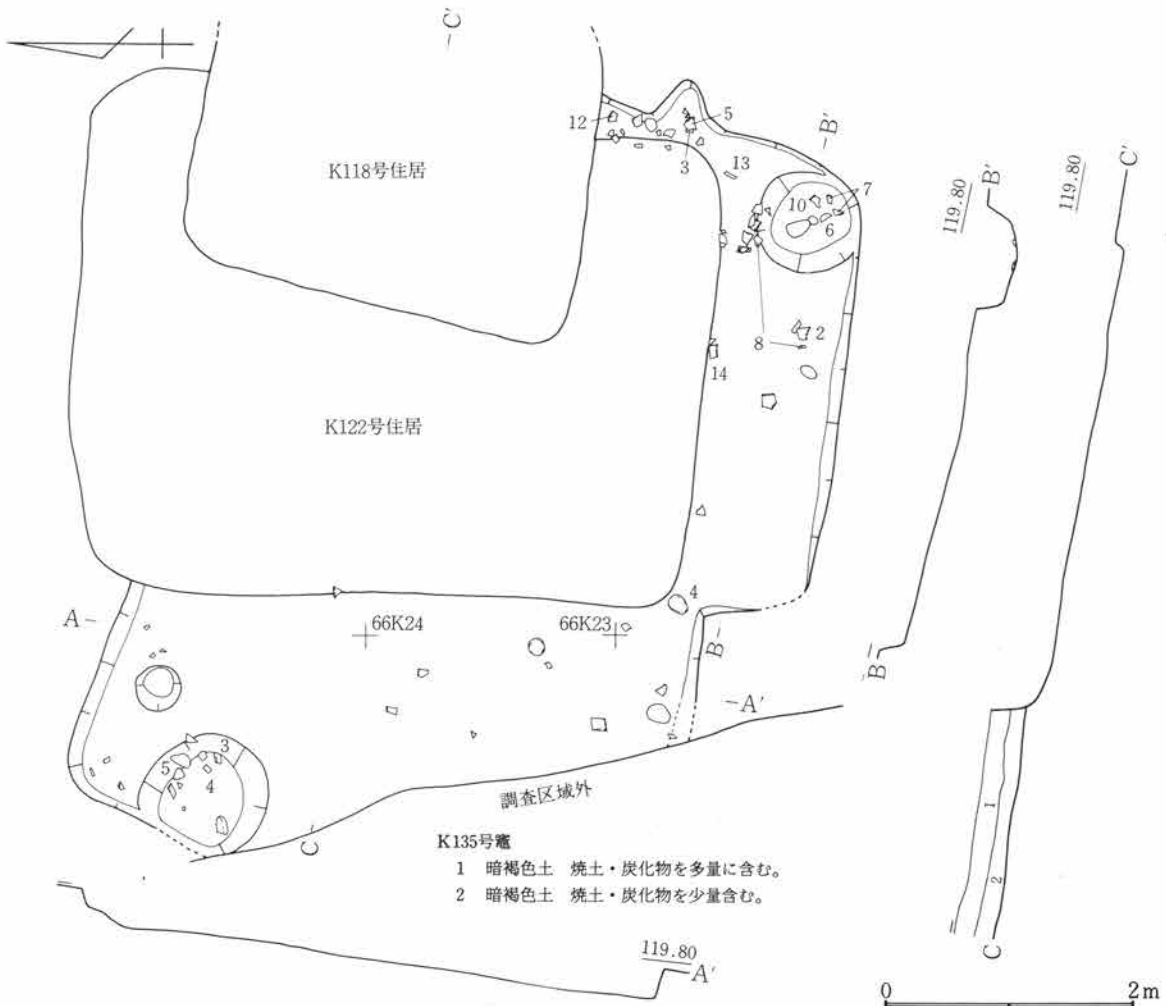


Fig.583 K135号住居跡

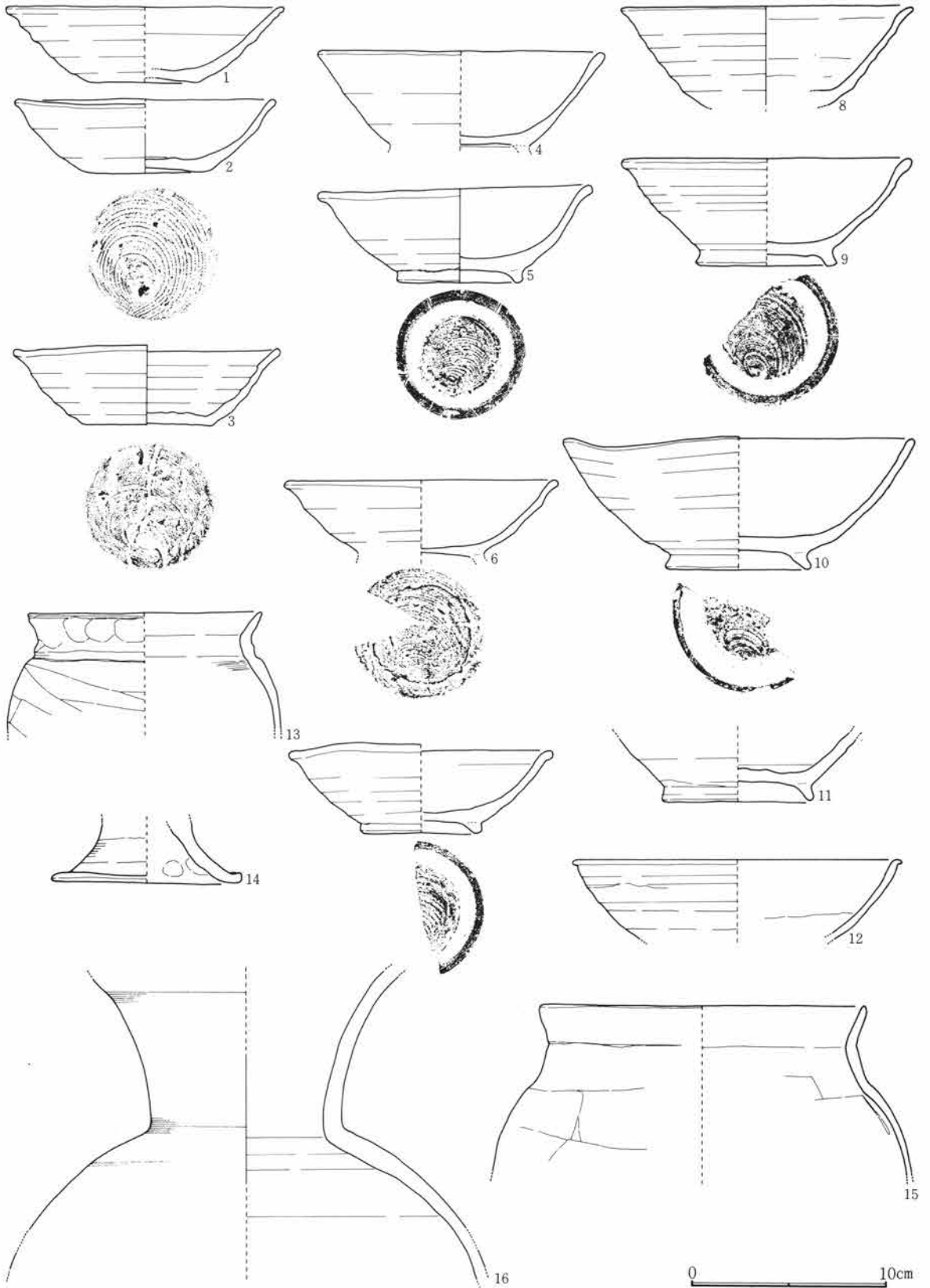


Fig.584 K135号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

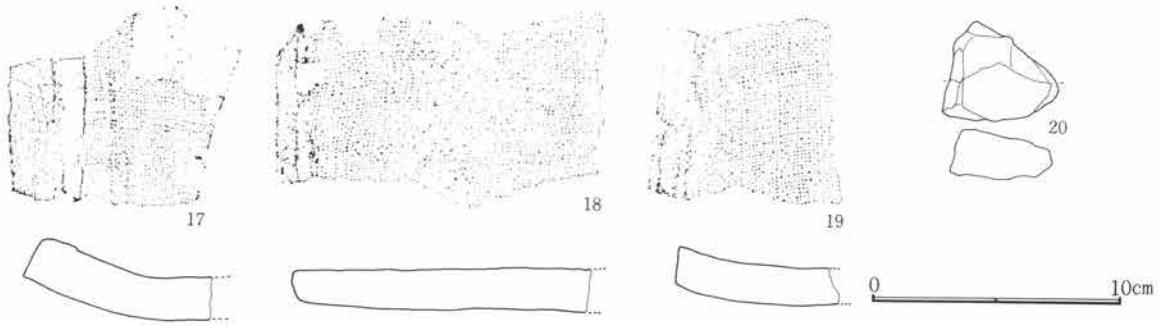


Fig.585 K135号住居跡出土遺物(2)

K 135号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
584-1 218-1	須 惠 器 杯	1/2	14.2×5.5×3.8	埋 土	腰部にやや丸味をもち、体部は直線的で大きく開く。口唇部は細り僅かに外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密 細砂混る
584-2 218-2	須 惠 器 杯	体部欠損	13.4×6.8×3.8	南壁際埋 土	体部中位で張り、口縁部は外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 小石混る
584-3 218-3	須 惠 器 杯	ほぼ完	13.4×6.4×4	南西部床 面	体部やや丸味をもつ。口縁部直線的に外傾し、内面に弱い段をなす。轆轤成形。右回転糸切り。内面燻し状に黒い。	①やや軟 ②浅黄橙 ③やや密
584-4 218-4	須 惠 器 碗	1/2 高台欠損	14.5×-×4.8	竈 内	体部僅かに内湾して開き、口唇部丸く肥厚する。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密 細砂混る
584-5 218-5	須 惠 器 碗	完	14.1×6.4×4.9	南西部埋 土	腰部に丸味をもち、口縁部は強く外反して開く。口唇部丸い。付高台、轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂混る
584-6 218-6	須 惠 器 碗	1/2 高台欠損	14×-×(3.8)	竈 内	体部内湾して大きく開く。口縁部外反し、口唇部丸い。底部薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 軟 鈍い橙 ③やや密
584-7 218-7	須 惠 器 碗	1/2	13.5×6.2×4.6	貯蔵穴内	体部内湾して開き、口唇部丸く外屈する。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 砂混る
584-8 218-8	須 惠 器 碗	1/2 高台欠損	14.8×-×(5)	北西部床 下	体部やや深く直線的に外傾する。口縁部外反して開く。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②鈍い黄橙 ③密
584-9 218-9	須 惠 器 碗	1/2	14.8×7.2×5.4	貯蔵穴内	体部上半に丸味をもち、口唇部は丸く肥厚し外反する。付高台、断面矩形を呈す。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②灰褐 ③やや密 細砂混る
584-10 218-10	須 惠 器 碗	1/2	18×7.4×6.7	貯蔵穴内 南部床面	体部内湾して開く。口唇部丸い。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 黒色粒混る
584-11 218-11	須 惠 器 碗	底部	-×7.7×(3.7)	北西部土 坑内	腰部直線的。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 黒色粒混る
584-12 218-12	灰 釉 陶 器 碗	体部1/2	16.8×-×(4.1)	竈 内	体部丸く、口唇部尖り水平に折れる。体部下位回転篋削り。刷毛塗り施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
584-13 218-13	土 師 器 甕	口縁部1/2	12×-×(6) 胴部径14	北西部土 坑内	胴部脹る。口縁部短く直線的に内傾し、上半は強く外傾するコの字状口縁。口縁部指頭痕。胴部横・斜篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
584-14 218-14	土 師 器 甕	台部1/2	-×9.6×(3)	北西部土 坑内	ハの字状に開き、端部水平気味に反る。横撫で。	①良好 ②赤褐 ③やや粗
584-15 218-15	土 師 器 甕	上半1/2	16.7×-×(8.4) 胴部径21.3	貯蔵穴内	胴部丸く脹る。口縁部直線的に内傾し、中位で屈し外傾するコの字状口縁。口縁部横撫で。胴部上半篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
584-16 218-16	須 惠 器 瓶	頸部	-×-×(15.5) 頸基径10.8	埋 土	胴部強く丸く脹る。頸部外反気味に立ち、上半は強く外反する。	①酸化 やや軟 ②灰褐 ③やや粗
585-17 218-17	平 瓦		厚1.6	竈 際	凹面布目。凸面縄目。	①軟 ②灰 ③やや密
585-18 218-18	平 瓦		厚1.6	竈前床面	凹面布目。側篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
585-19 218-19	平 瓦		厚1.4	南央部埋 土	凹面布目。側篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
585-20 218-20	石 製 品 砥		4×4.5×1.8 19.3g	埋 土	不定形。2面使用。	角閃石安山岩

K137号住居跡 (Fig. 586~589 • PL. 219 • 220)

K区北西寄りに位置し、65~67K27・28の範囲にある。119号・120号住居跡と重複しており、120号より旧く、119号より新しい時期の所産である。調査時に119号との重複関係を誤認して北半部は消失してしまった。また、西側は120号によって消失している。平面形は方形を呈すると思われるが詳細は不明である。南北2.2

m・東西1.8mの範囲を検出した。

竈を基軸にする方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約24cmを測る。床面は竈前面は固く踏み締まる。南東隅には径70×60cm・深さ26cmの円形の貯蔵穴が設けられる。竈は東壁の南寄りに付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖部・煙道部などは検出されなかった。出土遺物は竈周辺や貯蔵穴に集中して検出され、須恵器椀類が多い。

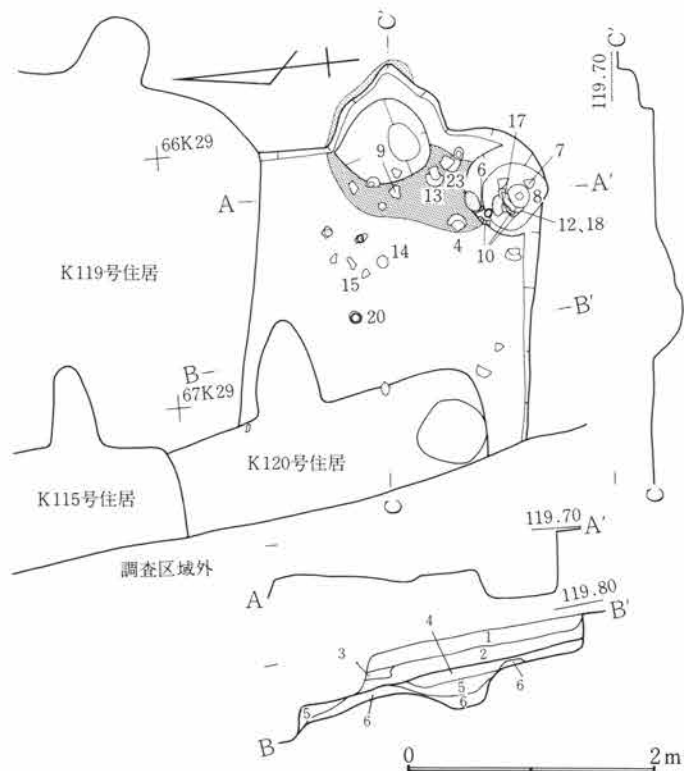


Fig.586 K137号住居跡

K137号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石少量、焼土・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 炭化塊・焼土塊を多量に含む。
- 4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 炭化塊・焼土塊を少量含む。
- 6 暗褐色土 粘性強い。
- 7 灰層
- 8 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 9 褐色土

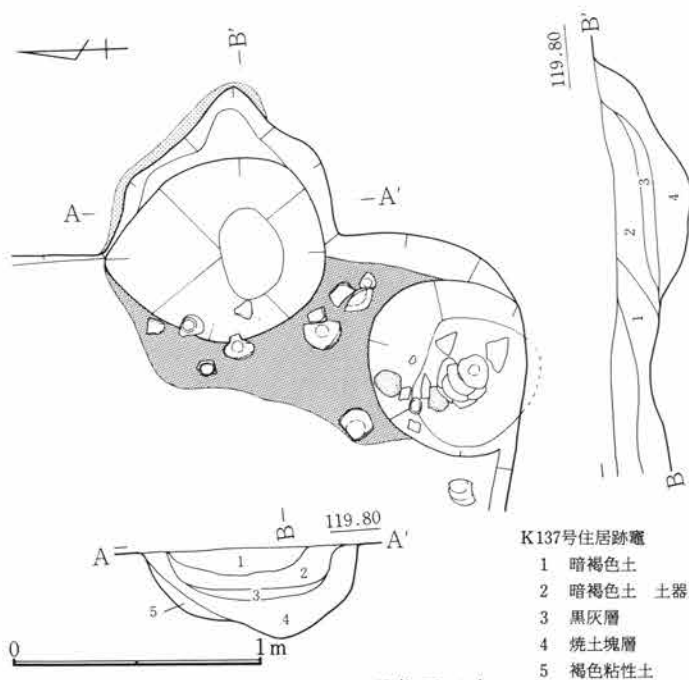


Fig.587 K137号住居跡竈

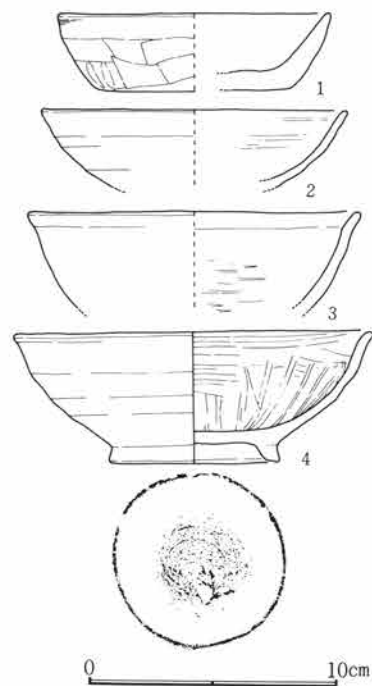


Fig.588 K137号住居跡出土遺物(1)

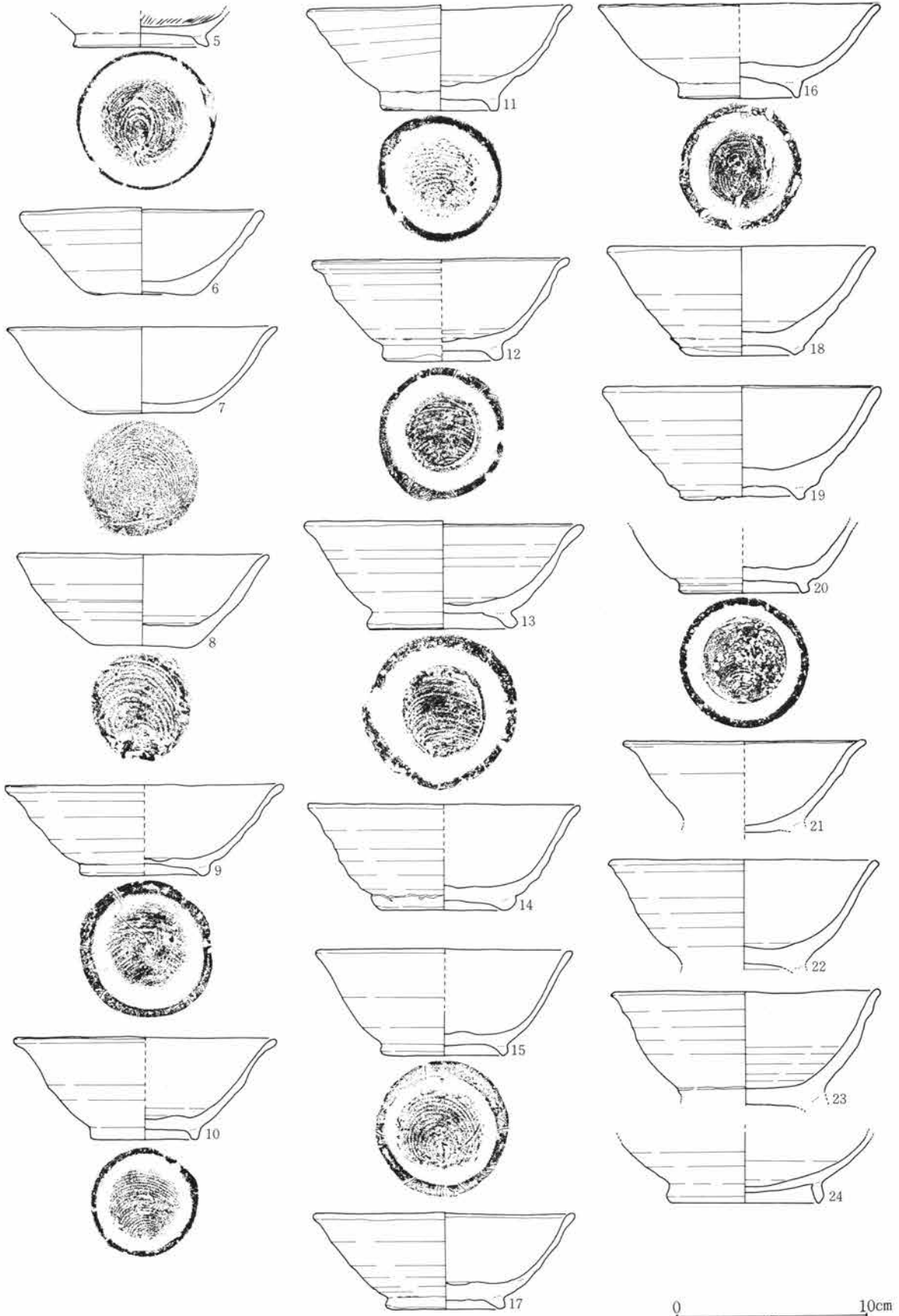


Fig.589 K137号住居跡出土遺物(2)

第3章 K区の遺構と遺物

K 137号住居跡出土遺物観察表

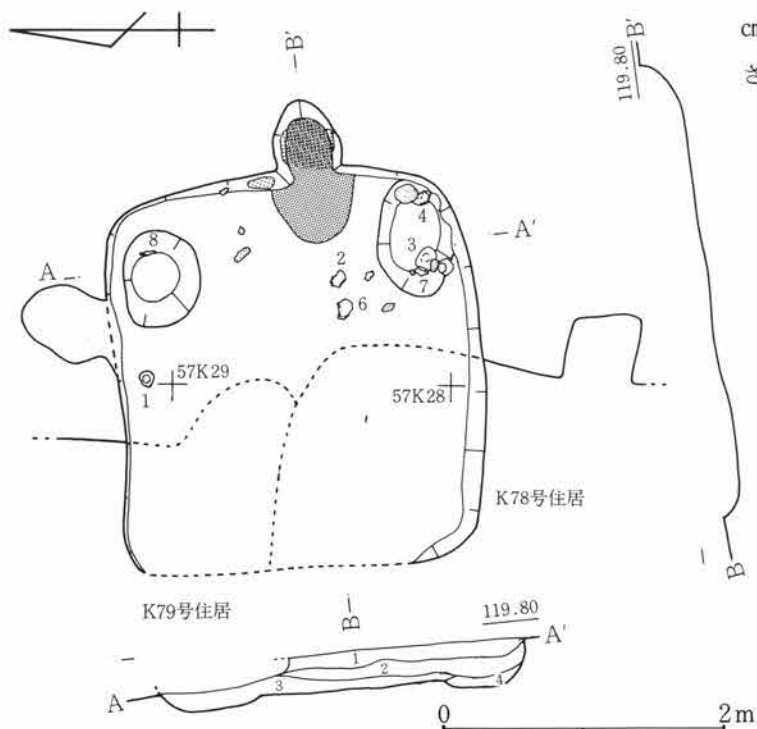
Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
588-1 219-1	土 師 器 杯	1/2	10.8×7.8×3.1	埋 土	平底。体部直線的に開き、口唇部細る。器肉全体に肥厚。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 砂混る
588-2 219-2	土 師 器 碗	体部1/2	12.3×—×(3.2)	埋 土	体部丸く張る。器肉薄い。内面黒色処理、横篋磨き。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 細砂混る
588-3 219-3	土 師 器 碗	体部1/2	13.3×—×(4)	埋 土	体部丸く張り、口縁部折れて外傾する。口唇部丸い。内面黒色処理。横篋磨き。轆轤成形。	①良好 ②鈍い橙 ③密 茶色粒混る
588-4 219-4	土 師 器 碗	1/2	14.4×6.8×5.2	竈前床面	体部やや丸く、口縁部は緩く外反する。付高台、幅広く下端面に段を有する。内面黒色処理、体部上半は横、下半は放射状篋磨き。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密 細砂混る
589-5 219-5	土 師 器 碗	底 部	—×7.1×(1.7)	埋 土	付高台、下端面に段を有する。内面黒色処理、放射状篋磨き。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗 砂混る
589-6 219-6	須 恵 器 杯	1/2	12.8×5.5×4.5	貯蔵穴内	腰部肥厚する。体部直線的に開き、口唇部丸くやや肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 軟 ② 鈍い褐 ③やや密
589-7 219-7	須 恵 器 杯	完	13×5×4.7	貯蔵穴内	体部下半直線的、中位で僅かに屈し上半は外反気味。底部肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸他 軟 ②橙 ③やや密 細砂混る
589-8 219-8	須 恵 器 杯	体部1/2 欠損	14.1×6×4.5	貯蔵穴内	体部丸味をもち、上半は緩く外反する。器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味 軟 ② 灰黄橙 ③やや密
589-9 219-9	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	14.6×6.8×4.7	竈突床面	腰部にやや丸味をもつ。口唇部丸く僅かに肥厚し緩く外反する。付高台、低く丸い。底部極薄。轆轤成形。	①酸化気味 良好 ②鈍い黄橙 ③粗
589-10 219-10	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	13.8×5.6×5.3	貯蔵穴内	体部中位で僅かに張り、上半は外反する。口唇部やや肥厚し丸い。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②鈍い褐 無やや粗 砂混る
589-11 219-11	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	14×6.2×5.5	貯蔵穴内	体部丸味をもち、口縁部僅かに外傾する。口唇部丸い。付高台、作り雑、断面角張る。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②黄灰 ③やや密
589-12 219-12	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	13.5×6.3×5.3	貯蔵穴内	体部やや丸く脹らみ、口縁部緩く外反する。口唇部丸い。付高台、幅広く丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 やや軟 ② 暗赤灰 ③やや密
589-13 220-13	須 恵 器 碗	完	14.7×7.6×5.6	竈前床面	腰部丸味をもって張り、体部上半は外反気味。口唇部丸まり肥厚する。幅広く、内湾気味でハの字状に開間。轆轤成形。回転糸切り、作り雑。	①良好 ②暗灰 ③ 粗 小石混る
589-14 220-14	須 恵 器 碗	体部少 量欠損	14.2×6.6×5.5	中央部床 面	腰部張り、体部上半は緩く外反。付高台、低く幅広い。轆轤成形。作り雑。	①良好 ②暗オリ ブ灰 ③やや密
589-15 220-15	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	15.5×6.7×5.5	中央部床 面	腰部丸く張り口縁部僅かに外傾する。口唇部丸い。付高台、低い。轆轤成形。	①軟 ②灰白 ③や や密
589-16 220-16	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	14.8×6.4×4.9	中央部床 面	腰部丸く張り、体部浅い。口縁部僅かに外反気味。口唇部丸い。付高台、外面は垂直に立つ。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗 砂混る
589-17 220-17	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	13.8×6.2×5	貯蔵穴内	体部丸味をもち、口縁部肥厚し外反する。口唇部丸い。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 軟 ②鈍い 褐 ③密
589-18 220-18	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	14×6.5×5.7	貯蔵穴内	全体に肥厚する。体部直線的で、口縁部僅かに外反。口唇部丸い。付高台、極めて低い。轆轤成形。	①酸化気味 軟 ② 鈍い黄褐 ③やや密
589-19 220-19	須 恵 器 碗	体部1/2 欠損	14.6×6.5×5.9	埋 土	体部張り少なく内湾気味に開く。口唇部丸い。器肉は全体に厚く腰～底部は極めて厚い。付高台、低く角張る。轆轤成形。	①やや軟 ②オリ ブ灰 ③やや密 細 砂混る
589-20 220-20	須 恵 器 碗	底 部	—×6.35×(3.5)	中央部床 面	体部丸味をもつ。付高台、断面四角形。轆轤成形。回転糸切り。内面黒色を呈し燻し焼成か?	①軟 ②灰 ③やや 密 細砂混る
589-21 220-21	須 恵 器 碗	高台欠 損	12.7×—×(4.6)	埋 土	体部直線的で上半は外反して開く。付高台。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②灰白 ③粗
589-22 220-22	須 恵 器 碗	1/2 高 台欠損	14.1×—×(5.7)	埋 土	腰部僅かに脹らみ、体部上半は緩く外反。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 軟 ②鈍い 褐 ③やや密
589-23 220-23	須 恵 器 碗	1/2 高 台欠損	14.0×—×(6)	竈際床面	体部丸味をもつ。口縁部外反気味に開く。付高台。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②鈍い黄橙 ③密
589-24 220-24	灰 釉 陶 器 碗	底 部	—×8.2×(3.5)	埋 土	底部から体部にかけて丸く張る。高台稜明瞭でやや高い。底部回転篋削り。内外面体部上半に施釉。	①良好 ②浅黄 ③ 緻密

K 138号住居跡 (Fig. 590~592・PL. 220・221)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.78 × 2.70	N— 84° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (85.0 × 55.0 × —)

K138号住居跡

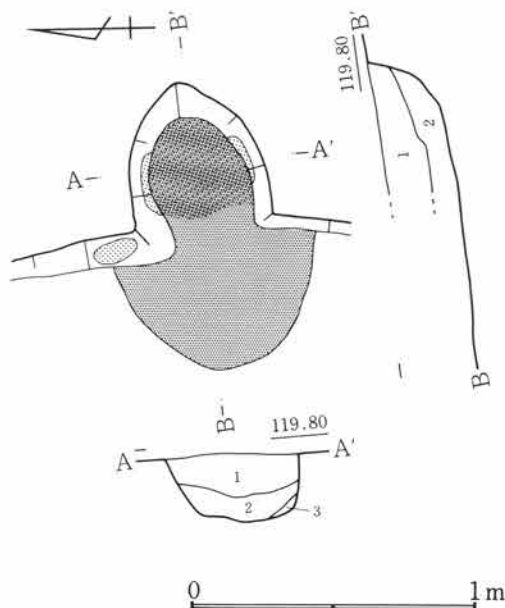
K区中央部やや北寄りに位置し、56・57K28・29の範囲にある。78号・79号・81号・84号住居跡と重複しており、78号・79号より旧く、81号・84号住居跡より新しい時期の所産である。平面形は方形を呈するが、各隅部に丸味を持つ小規模な竪穴住居である。壁高は約32cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが、竈前を除き踏み締まりは弱い。竈は東壁のやや南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれる。燃烧部幅約46cm・奥行き60cmを測る。出土遺物は須恵器杯類などが検出されている。



K138号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む。
- 2 黒褐色土 C軽石少なくやや粘性あり。
- 3 茶褐色土 C軽石少ない粘性土。
- 4 茶褐色土 粘土塊で湿性あり。

Fig.590 K138号住居跡



K138号住居跡竈

- 1 茶褐色土 炭化物多量に含む。
- 2 焼土塊層
- 3 褐灰層

Fig.591 K138号住居跡竈

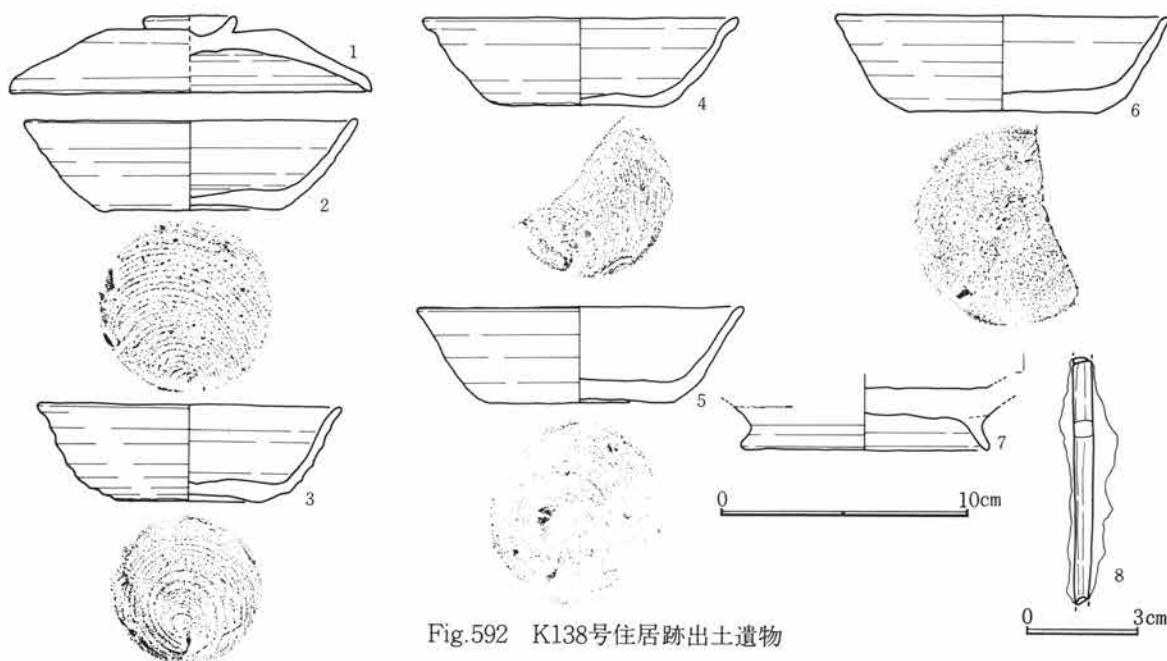


Fig.592 K138号住居跡出土遺物

第3章 K区の遺構と遺物

K138号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
592-1	須 惠 器 蓋	1/4	14.6×-×3 摘径3.7	北東部床 面	天井部平坦をなし、体部直線的に開く。口縁部僅かに内方へ屈す。環状摘、内面大きく凹んだ後中心部凸状をなす。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
592-2 221-2	須 惠 器 杯	1/4	13.9×7×3.5	中央部埋 土	底径大きく、体部やや内湾気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③密 夾雑物あり
592-3 221-3	須 惠 器 杯	1/4	12.3×6×3.8	貯蔵穴内	腰部に丸味をもち体部やや深い。口縁部緩く外反。底部肥厚する。轆轤成形、痕跡明瞭。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 黒色粒混る
592-4 221-4	須 惠 器 杯	1/2	12.6×7×3.5	貯蔵穴内	底径大きく、体部に丸味をもつ。口縁部外反。轆轤成形。	付高台②暗灰黄 ③粗 白色小石混る
592-5 221-5	須 惠 器 杯	3/4	13×7.5×3.8	貯蔵穴内	底径大きく、体部直線的に開く。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや粗
592-6 221-6	須 惠 器 杯	1/2	13.4×7.5×3.7	中央部埋 土	底径大きく、体部深く直線的に開く。底部肥厚。轆轤成形。回転篋削り後底部回転篋削り。	①良好 ②赤灰 ③粗 白色小石混る
592-7 221-7	須 惠 器 底 部		-×10×(2.5)	貯蔵穴内	底部厚く、見込部摩滅痕。付高台、薄くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③粗 夾雑物あり
592-8 221-8	鉄 製 品	両端欠 損	6.5×0.4×	北東部埋 土	角釘?	

K140号住居跡 (Fig. 593~595・PL. 221・222)

K区中央部に位置し、60~62K18~20の範囲にある。南半部は東西走る1号溝によって切られ消失しており、全容は不明である。平面形は方形を呈すると考えられ、東西長3.9mを測り、南北は北壁より約2mの範囲まで確認できた。東西軸方位はN-60°-Eを示す。壁高は約30cmを測る。床面は踏み締まりが弱く、検出状況は不良であった。炉跡などの諸施設は検出されていない。出土遺物は少ないが、壺・甕などの大形品が検出されている。

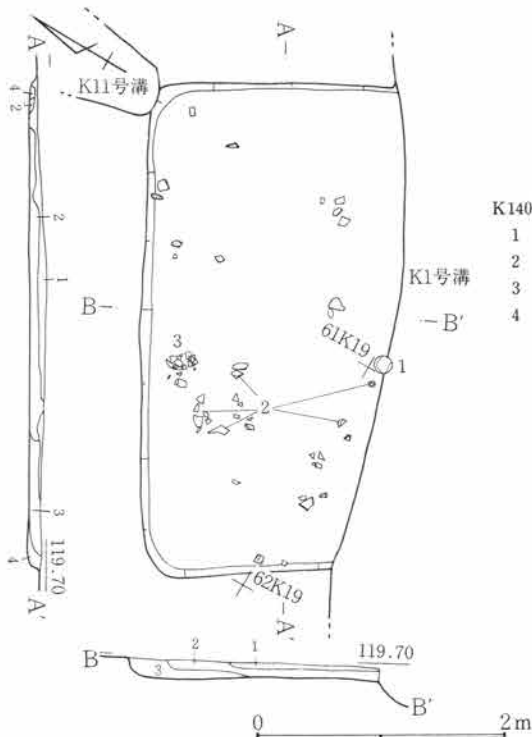


Fig.593 K140号住居跡

K140号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石少量混入。
- 2 暗褐色土 C軽石多量に含む。
- 3 暗褐色土 C軽石多く含む。
- 4 暗褐色土 3層よりC軽石少ない。

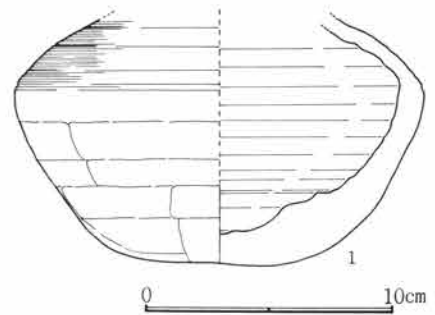


Fig.594 K140号住居跡出土遺物(1)

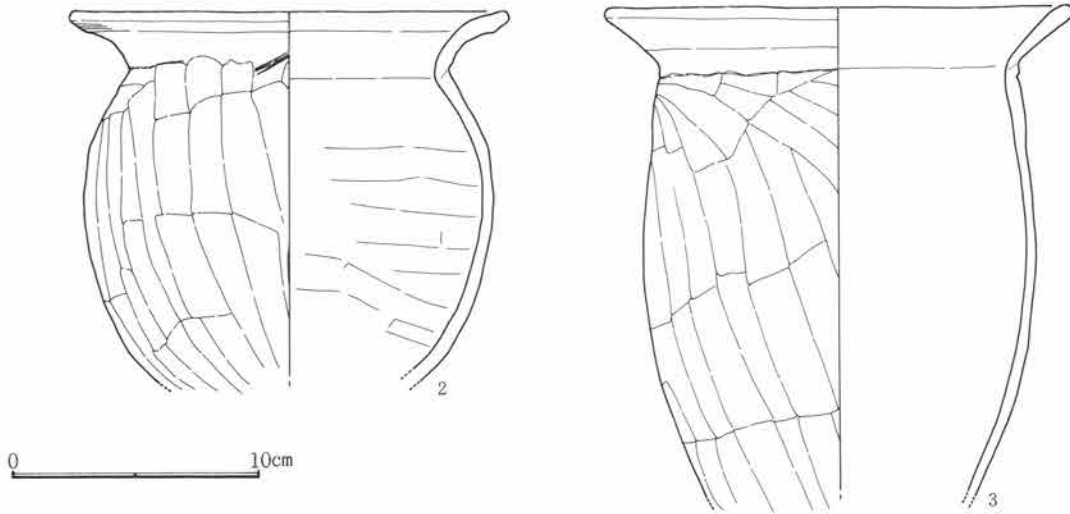


Fig.595 K140号住居跡出土遺物(2)

K140号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
594-1 222-1	須恵器 短頸壺?	1/2 口 縁欠損	—×—×(9.5) 胴部最大径16.4	中央部床 面	胴部上半は強く張り扁平な球胴を呈す。底部丸い。底部から胴部中位にかけて著しく肥厚する。肩部強い回転の櫛状撫で、底部から胴中位まで手持筥削り。	①良好 ②灰 ③やや密 白色粒混り黒色粒浮く
595-2 222-2	土師器 甕	1/2 底 部欠損	17.7×—×(14.5) 胴部径16.5	北中央部床 面	胴部丸く脹らみ球形を呈す。口縁部強く外反し大きく開き端部はやや内湾気味。口縁部横撫で。胴部内面横撫で、外面縦筥削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗
595-3 222-3	土師器 甕	底部欠 損	18.8×—×(19.5) 胴部径15.7	北中央部床 面	胴部中位で僅かに脹らみをもつが、長胴形を呈す。口縁部くの字状に外傾。口唇部丸く肥厚する。口縁部横撫で、胴部上位斜・中〜下位縦筥削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 砂多く混る

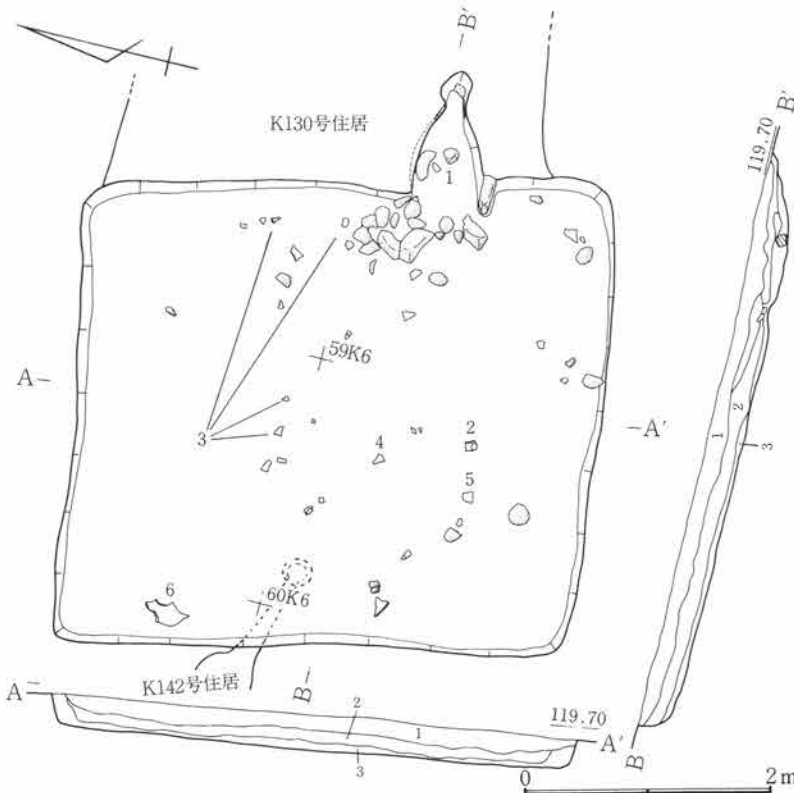


Fig.596 K141号住居跡

K141号住居跡 (Fig. 596~598 · PL. 222 · 223)

K区南部に位置しており、57~60K 4~6の範囲にある。130号・142号住居跡と重複しているが、両者より古い時期の所産である。なお、130号との調査状況については、当跡周辺を深く削平したため130号床下内にあるべき竈を早い段階で確認した。このため新旧を逆転して調査してしまった。平面形は南北軸が若干長い比較的正方形を呈する。壁高は26cm

K141号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 黒褐色土 C軽石を含む。
- 3 黒褐色土 粘性あり。

K141号住居跡

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.50 × 3.77	N- 76° -E	東壁南寄り	—————

を測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。竈

は東壁の南寄りに付設され、細長く楕円形に掘込まれた燃烧部から緩やかに立ち上がり煙出し孔に至る。燃烧部と煙道部の区別は明瞭ではない。右袖部及び燃烧部中央には凝灰岩の加工材が袖材・支脚として埋設され、竈前面にはその他の構築材と思われる同質の加工材が散乱している。燃烧部幅約60cm・奥行きは燃烧部の傾斜具合から約65cm程度と考えられる。煙道部から煙出し孔にかけては短く約40cm、煙出し孔径26cmを測る。出土遺物は少なく散在して検出された。

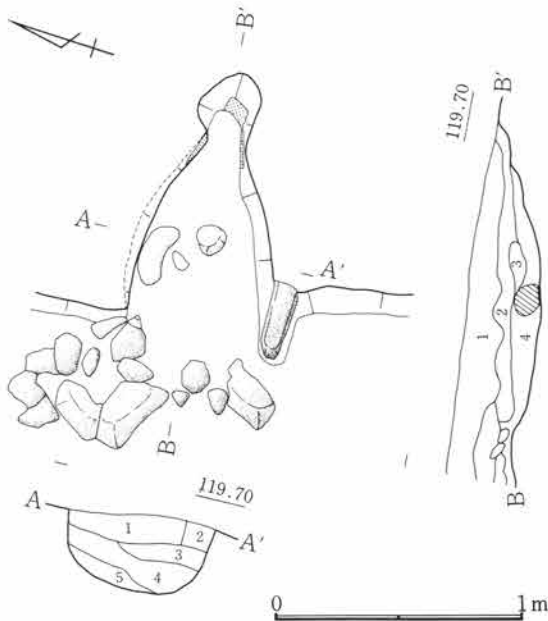


Fig.597 K141号住居跡竈

K141号住居跡竈

- 1 黒褐色土 焼土粒含みしまりが強い。
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒含む。
- 4 焼土塊・灰混り層
- 5 焼土塊層

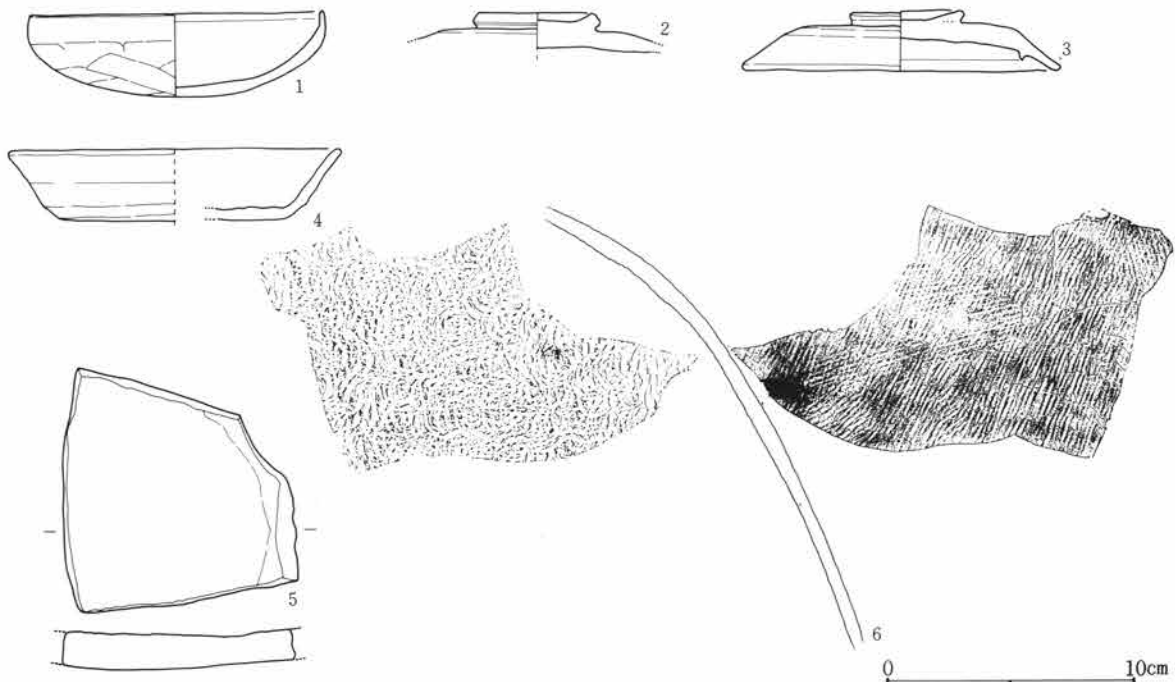


Fig.598 K141号住居跡出土遺物

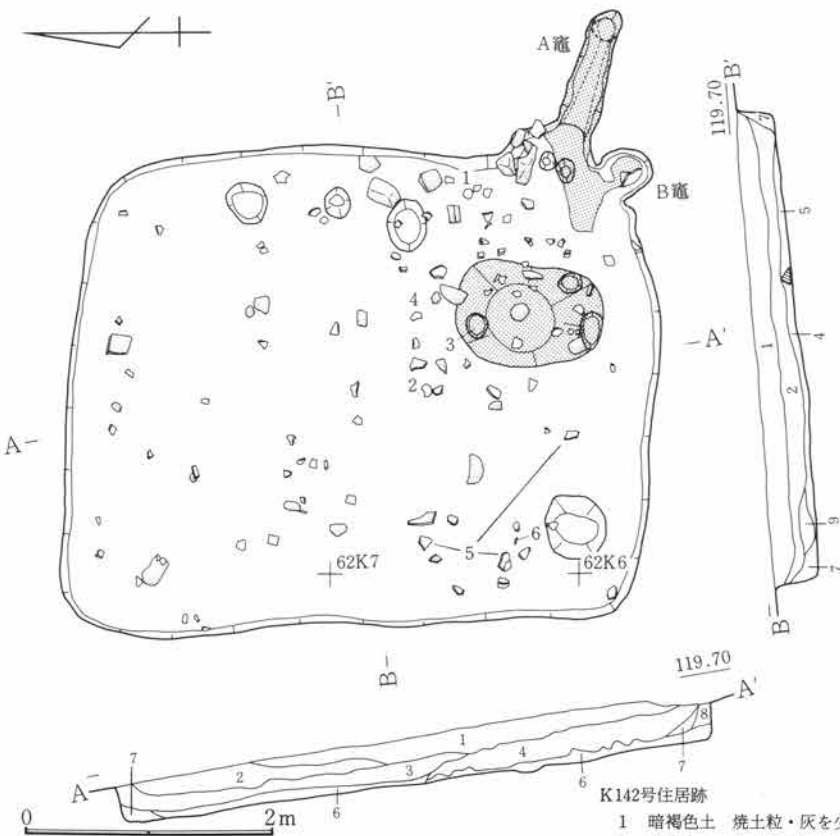
K 141号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
598-1 222-1	土師器 杯	1/2	11.9×3.4	竈内	丸味のある底部。口縁部は細り僅かに内傾して立つ。口縁部横撫で、底部篋削り	①良好 ②鈍い褐色 ③やや粗 細砂混る
598-2 222-2	須恵器 蓋	摘	—×—×1.3 摘径5	南中央部埋土	天井部回転篋削り。環状摘、断面矩形。	①良好 ②灰 ③やや密
598-3 222-3	須恵器 蓋	1/2	12.7×—×3.3 摘径4.5	中央・東中央部埋土	天井部平坦。体部やや細り強く屈して直線的に開く。内面のかえり短く鋭い。口唇部より約1.5cm内側にある。環状摘、端部丸い。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
598-4 223-4	須恵器 杯	1/4	13.4×8.4×3.2	中央部埋土	底径大きく、体部浅く直線的に開く。轆轤成形。腰部回転篋削り。底部回転篋削り後回転篋削り。	①良好 ②暗オリブ灰 ③やや密
598-5	須恵器 転用硯		9.7×9.5×1.3	南中央部床面	壺片転用。内面摩滅顕著。側縁調整痕なし外面平行叩き、内面青海波文。	①良好 ②灰 ③やや密
598-6 223-6	須恵器 壺	破片		北西部埋土	壺胴部片。外面平行叩き目。内面同心円状あて目。	①良好 ②灰 ③やや密

K 142号住居跡 (Fig. 599~601・PL. 223・224)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.82 × 3.82	(A)N-114'-E (B)N-137'-E	(A)東壁南寄り (B)東壁東南隅	—————

K区南部に位置し、59~62K 5~7の範囲にある。129号・141号住居跡と重複しているが、両者より新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸を持ち、全体に北西方向に歪む方形を呈する。壁高は約36cmを測る。床面は平坦をなし、踏み締まりも良好である。竈は南東隅にあり、A・Bの2基が検出されている。双方の竈は極めて接して設け



られている。A竈は楕円形気味に掘り込まれた燃焼部から煙道部は低く立ち上がり長く水平に延び、煙出し孔に至る。左袖部には東壁線上に扁平な凝灰岩の加工材が埋設される。右袖部はB竈との境が明確でない。煙道部は天井が残り、燃焼部付近は径40cm、先端部径は10cmと細くなっている。燃焼部幅40~50cm・奥行き約50cm、煙道部長さ1m、煙

Fig. 599 K142号住居跡

- K142号住居跡
- 1 暗褐色土 焼土粒・灰を少量含む。
 - 2 暗褐色土 1と類するが灰を含まず。
 - 3 暗褐色土 締まりあり。
 - 4 暗褐色土 灰を多く含む。
 - 5 灰褐色土 灰を少量含む。
 - 6 灰褐色土
 - 7 暗褐色土
 - 8 暗褐色土 締まりあり。
 - 9 暗褐色土 焼土粒を含む。

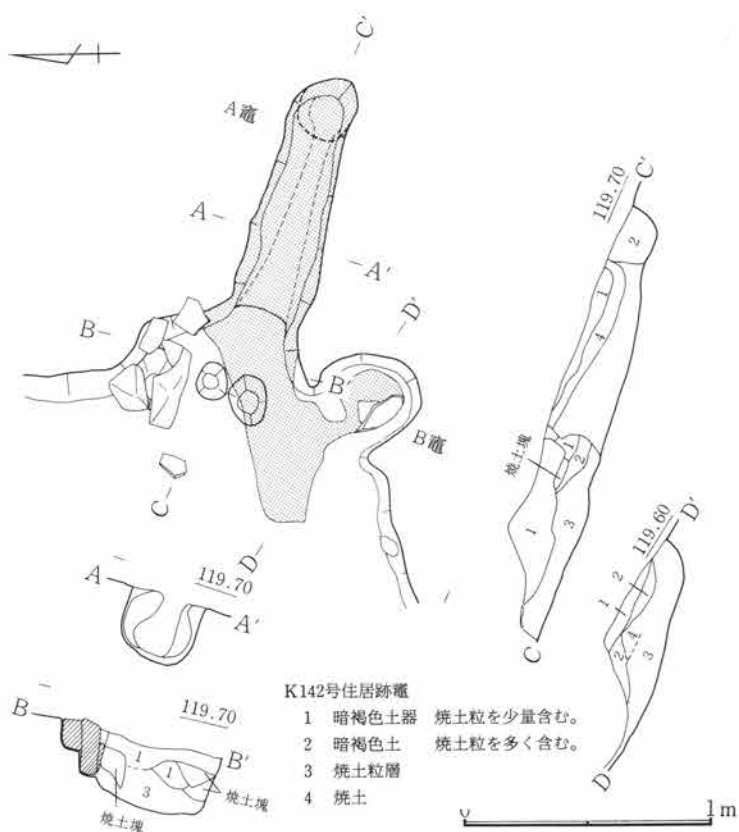


Fig.600 K142号住居跡竈

出し孔径22cmを測る。B竈はA竈の南に接して検出され、径20cmの円形。当初併用しての使用も考えられたが、床面精査の結果、およそ80cm離れた床面下より灰層の堆積した径1.2×0.8mの楕円形の火床面が検出され、燃焼部に相当すると思われる。B竈はA竈に先立つ竈の煙出し孔と考えられ、床下に検出された火床をB竈の燃焼部とすると、煙道部はその東端から煙出し孔まで約1.2mの長さになる。従って、新旧2基の竈から当跡は建て替えあるいはそれに伴う拡張が行われたと考えられる。出土遺物は埋土中に多く、散在して検出された。

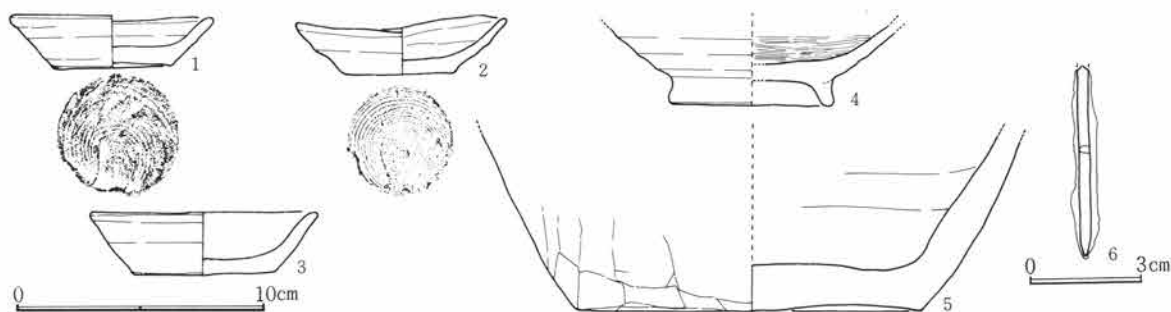


Fig.601 K142号住居跡出土遺物

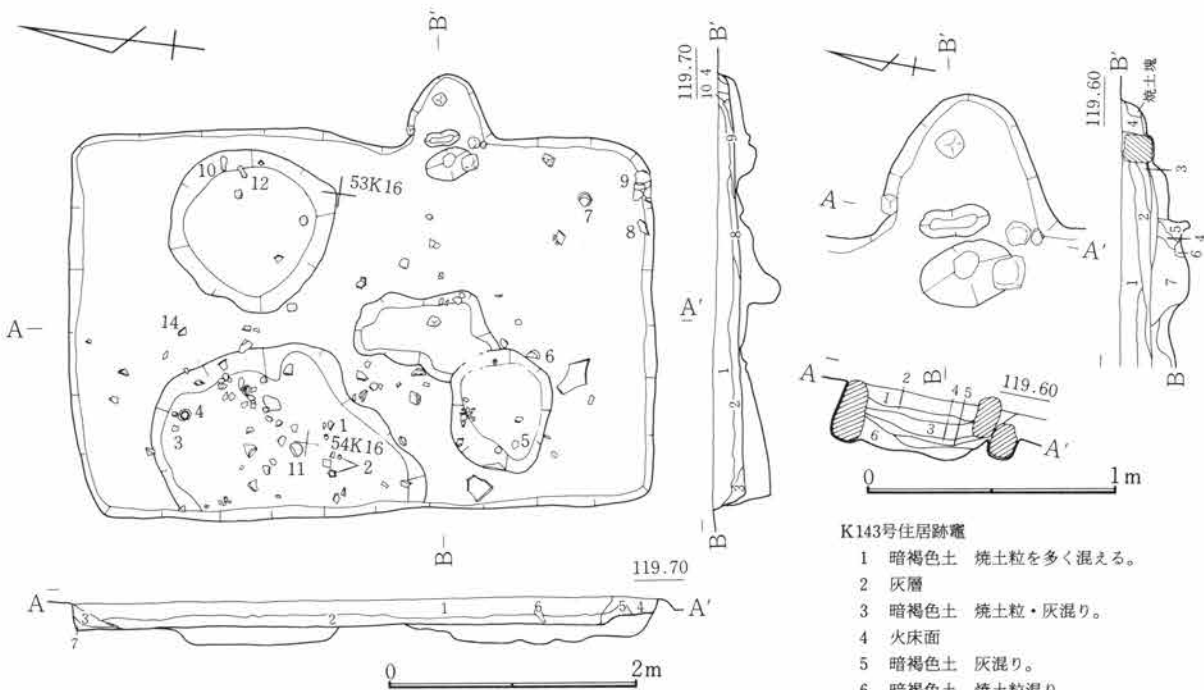
K142号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 形	種 種 形	部 部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他	
601-1 224-1	土 土	師 師	質 質	完 完	8.2×4.8×2.1 8.5×4.5×1.8	竈前床面 中央部床 面	体部直線的に外傾して開く、口唇部丸い。轆轤成形。右回 転糸切り。	①良好 ②暗褐灰 ③密
601-2 224-2	土 土	師 師	質 質	完 完	8.5×4.5×1.8	中央部床 面	体部中位で僅かに屈す。口唇部丸い。体部薄手。轆轤成形。 右回転糸切り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
601-3 224-3	土 土	師 師	質 質	1/2	9.2×5.8×2.5	中央部埋 土	体部上半緩く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗
601-4 224-4	土 土	師 師	器 器	底部1/3 底部1/3	—×6.6×(3.4)	中央部埋 土	内面黒色処理。横篋磨き。付高台、端部丸くハの字状に開 く。轆轤成形。	①良好 ②暗灰黄 ③やや密 白色粒混 る
601-5 224-5	土 土	師 師	器 器	底部 底部	—×1.4×(7)	南西部床 面	平底。腰部縦～横篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③粗 小石混る
601-6 224-6	鉄 鉄	製 製	品 品	基部欠 損	5×0.2	南西部床 面		

K143号住居跡 (Fig. 602~605・PL. 224・225)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	4.71 × 3.06	N— 83° —E	東壁やや南寄り	—— ————

K区中央部に位置し、52~54K14~17の範囲にある。161号竪穴状遺構と重複しているが、これよりも新しい時期の所産と考えられる。平面形は南北に長軸を持つ比較的整った方形を呈する。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。床下はかなり凹凸があり、粘性黄色土塊・焼土粒を混じえる暗褐色土で埋まり床面を形成している。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。両袖部には凝灰岩の加工材が埋設されている。燃烧部幅約70cm・奥行き60cmを測る。出土遺物は散在しており、砥石などが検出された。



K143号住居跡

- | | | | |
|---------|-----------|----------|-------------|
| 1 暗褐色土 | C軽石を多く含む。 | 6 黒褐色土塊層 | 黄色土粒含む。 |
| 2 暗褐色土器 | C軽石を少量含む。 | 7 暗褐色土 | |
| 3 黒褐色土 | | 8 暗褐色土 | 焼土粒・C軽石を含む。 |
| 4 暗褐色土 | C軽石を少量含む。 | 9 灰層 | |
| 5 暗褐色土 | 締まりあり。 | 10 暗褐色土 | 焼土粒・灰を含む。 |

K143号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒を多く混える。
- 2 灰層
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰混り。
- 4 火床面
- 5 暗褐色土 灰混り。
- 6 暗褐色土 焼土粒混り。
- 7 暗褐色土 C軽石含む。

Fig.603 K143号住居跡竈

Fig.602 K143号住居跡

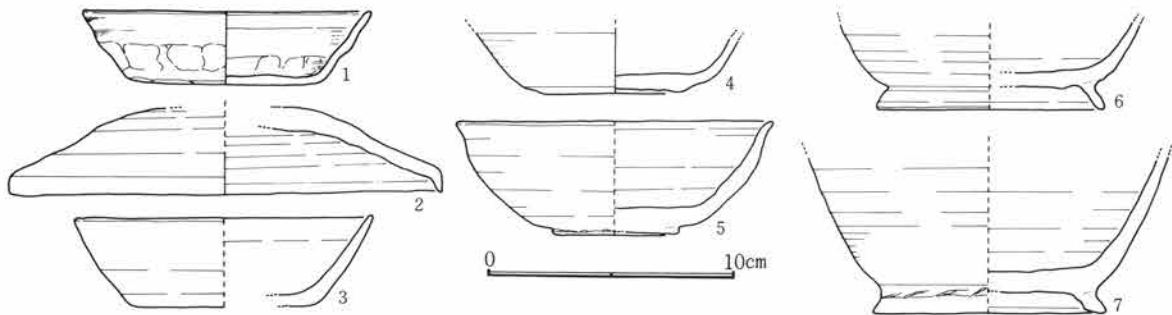


Fig.604 K143号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

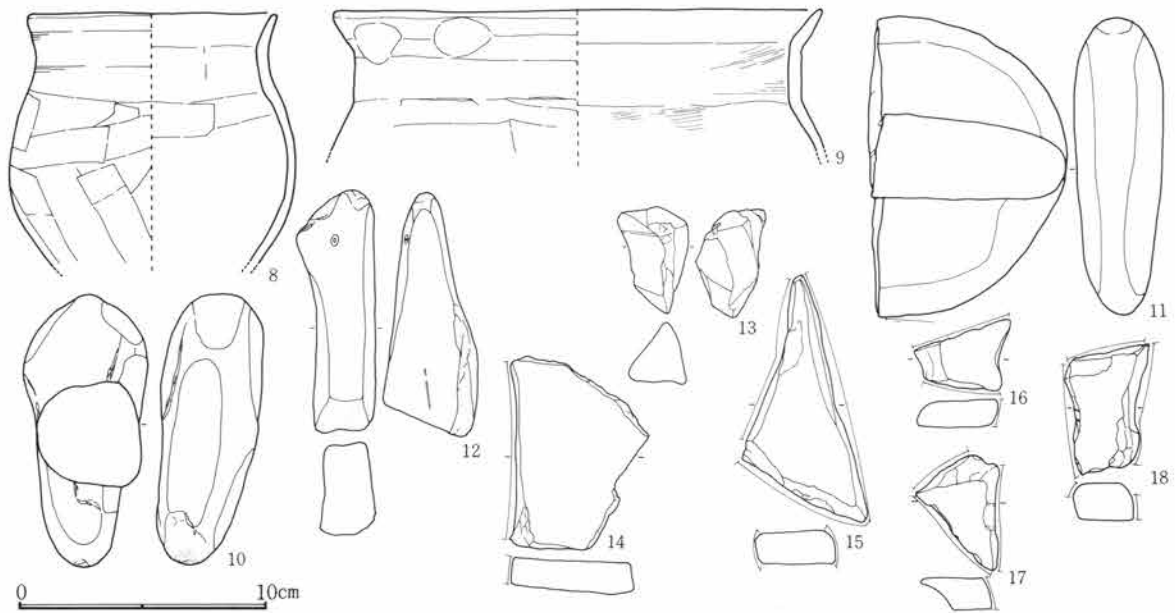


Fig.605 K143号住居跡出土遺物(2)

K 143号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
604-1 225-1	土師器 杯	1/2	11.6×8×2.9	西中央部埋 土	平底。体部浅く直線的に外傾し、中位にくびれをもつ。器肉薄。内外面口縁部横撫で。体部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
604-2 225-2	須恵器 蓋	1/2 摘 欠損	17.4×-×3.5	西中央部床 面	天井部やや丸味をもって張る。体部直線的に開き、口縁部直下に屈する。口唇部尖る。天井部転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密 黒色粒混る
604-3 225-3	須恵器 杯	1/2	12×7×3.5	北西部床 面	体部直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
604-4 225-4	須恵器 杯	底部	-×5.6×(2.6)	北西部床 面	腰部丸く張る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 白色小石混る
604-5 225-5	須恵器 杯	1/2	12.8×5×4.5	南西部埋 土	底径小さく僅かに突出する。腰から体部は丸く張り、口縁部外反し、口唇部細る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
604-6 225-6	須恵器 碗	底部1/2	-×9.2×(3.4)	南中央部床 面	腰部強く張る。付高台、端部丸く細りハの字状に開く。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②黄灰 ③密 白色細粒混る
604-7 225-7	須恵器 碗	1/2 口 縁欠損	-×9.4×(6.2)	南東部床 面	腰部張りなく体部直線的に立ち上がる。付高台、幅広く下端面は外傾し外端に尖る。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 小石混る
605-8 225-8	土師器 甕	1/2 下 半欠損	10×-×(10) 最大径胴部11.5	南壁際埋 土	最大径は胴部中位にあり、丸く張る。口縁部直線的で小さく内傾し、上半は外傾する。口縁部横撫で。胴部内面横撫で、外面上半横、下半は縦篋削り。	①良好 ②明赤褐 ②やや粗 細砂混る
605-9 225-9	土師器 甕	1/2	19.8×-×(5.5)	南東部壁 際埋土	肩部張り少なく、口縁部直立し上半は内湾気味に外屈するコの字口縁。口縁部指頭痕後横撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
605-10 225-10	石		10.8×5×4 270.7g	西中央部床 面	一端部に敲打痕あり。	砂岩
605-11 225-11	石 磨石	一部欠 損	12×8×3.2 479.3g	西中央部床 面	両面磨滅する。	閃緑岩
605-12 225-12	石製品 砥石		9.6×3.7×2.2 102.9g	北東部床 面	一端に未穿孔痕あり。	流紋岩(砥沢)
605-13 225-13	石製品 砥石		4.2×2.8×2.3 9.7g	埋土	多面使用。	角閃石安山岩
605-14 225-14	須恵器 転用砥石		7.5×5.5×1.9 67.0g	北中央部埋 土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
605-15 225-15	須恵器 転用砥石		9.5×5×1.3 54.6g	埋土	3側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
605-16 225-16	須恵器 転用砥石		3.7×2.8×1 13.7g	埋土	3側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
605-17 225-17	須恵器 転用砥石		4.5×3.4×1.2 13.0g	埋土	3側面使用。刃痕あり。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
605-18 225-18	須恵器 転用砥石		5.1×3.4×1.5 27.9g	床下	3側面使用。刃痕あり。甕片。	①良好 ②灰白 ③やや密

K144号住居跡 (Fig. 606~609・PL. 226)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.95 × 2.80	N— 82° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (67.0 × 60.0 × —)

K区中央部やや南寄りに位置し、53~55K10・11の範囲にある。124号・146号住居跡と重複しており、124号より古い時期の所産である。146号との関係は不明である。東壁の一部から北壁にかけて、146号との新旧関係を確認できず消失してしまった。平面形は南北に長軸を持つ方形を呈する。壁高は南西部で12cmを測るが、北東部については痕跡程度である。床面は僅かに起伏がみられ、南西部が若干低くなり、踏み締まりは良好である。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。袖部には凝灰岩の加工材の埋設がみられた。袖部内法約70cm、燃烧部奥行きは火床面の窪みから約80cmを測る。出土遺物は貯蔵穴内及びその周辺から多く検出された。

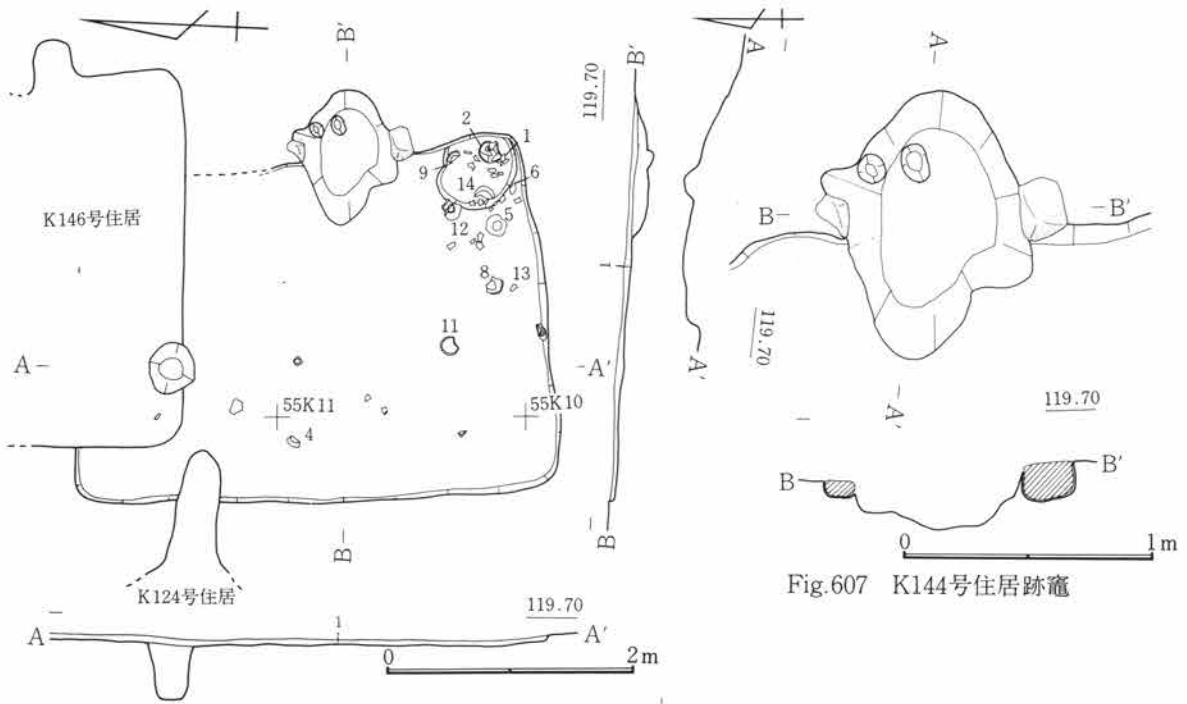


Fig.607 K144号住居跡竈

K144号住居跡
1 暗褐色土 C軽石を若干含み、粘性あり。

Fig.606 K144号住居跡

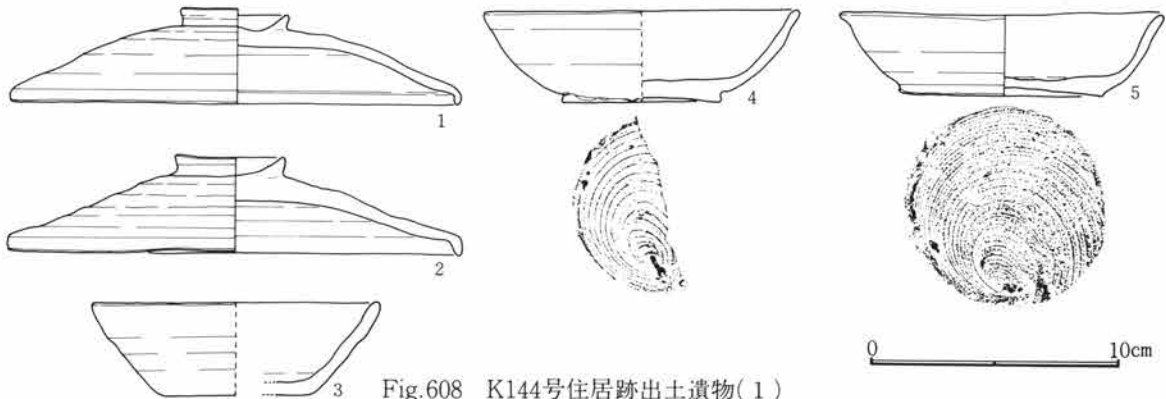


Fig.608 K144号住居跡出土遺物(1)

K144号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
608-1 226-1	須 惠 器 蓋	1/2	18.1×—×3.8 摘径4.4	貯蔵穴内	天井部から体部にかけて丸味をもつ。口縁部は短く直下に折れる。端部丸い、環状摘、断面細三角、中央部やや突出する。天井部回転篋削り。内外面に重ね焼痕あり。	①良好 ②灰白 ③やや粗
608-2 226-2	須 惠 器 蓋	1/2欠損	18.2×—×3.9 摘径4.4	貯蔵穴内	天井部外傾し、僅かに屈して体部直線的に開く。口縁部強く屈する。環状摘、断面三角、中央部やや凹む。天井部回転篋削り。内外面に重ね焼痕あり (外17cm・内8.7cm)	①良好 ②灰白 ③やや密
608-3 226-3	須 惠 器 杯	1/2	11.6×6.2×3.7	埋 土	体部上半で僅かに脹らみ内湾気味。口唇部丸い。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密 黒色粒浮く
608-4 226-4	須 惠 器 杯	1/2	12.8×6.4×3.6	西中央部床 面	底部突出し厚い。体部丸味をもち、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや密
608-5 226-5	須 惠 器 杯	完	12.9×8.1×3.2	貯蔵穴際 床面	腰部くびれて丸味をもつ。口縁部緩く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 黒色粒混る
609-6 226-6	須 惠 器 杯	1/2	13.5×7.8×3.4	貯蔵穴際 床面	腰部ややくびれ、体部緩く脹らむ。口縁部外反気味に開き、口唇部は細り内斜する。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
609-7 226-7	須 惠 器 杯	完	13.2×7.3×3.2	貯蔵穴内	底径大きく腰部に丸味をもつ。体部上半は器肉薄く、緩く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
609-8 226-8	須 惠 器 杯	体部1/2 欠損	14.2×8.5×3.4	南中央部埋 土	底径大きく、体部中位でくびれ、上半は外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②暗灰 ③やや密
609-9 226-9	須 惠 器 杯	体部1/2 欠損	13.5×7.8×3.4	貯蔵穴内	底径大きく、腰部肥厚する。体部中位でやや脹らみ上半は強く外反。体・底部の器肉薄い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 黒色粒混る
609-10 226-10	須 惠 器 杯	体部1/2 欠損	14.4×9.2×3.6	貯蔵穴内	体部直線的に外傾し、口唇部尖る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密 黒色粒混る
609-11 226-11	須 惠 器 皿	1/2	14.6×9×3.2	南中央部床 面	体部直線的で水平に近く開く。付高台、高く僅かに外傾して立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
609-12 226-12	須 惠 器 皿	1/2	13.8×8×3	貯蔵穴際 床面	体部内湾して大きく開く。付高台、高く内湾気味に立つ。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
609-13 226-13	須 惠 器 碗	1/2	14.2×8×4.6	南壁際床 面	腰部強く張り、体部は薄く、直線的に外傾する。付高台、高くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
609-14 226-14	土 師 器 甕	底 部	—×7.8×(7)	埋 土	胴部直線的に開く。平底。胴部縦～斜篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②褐 ③やや粗 砂混る

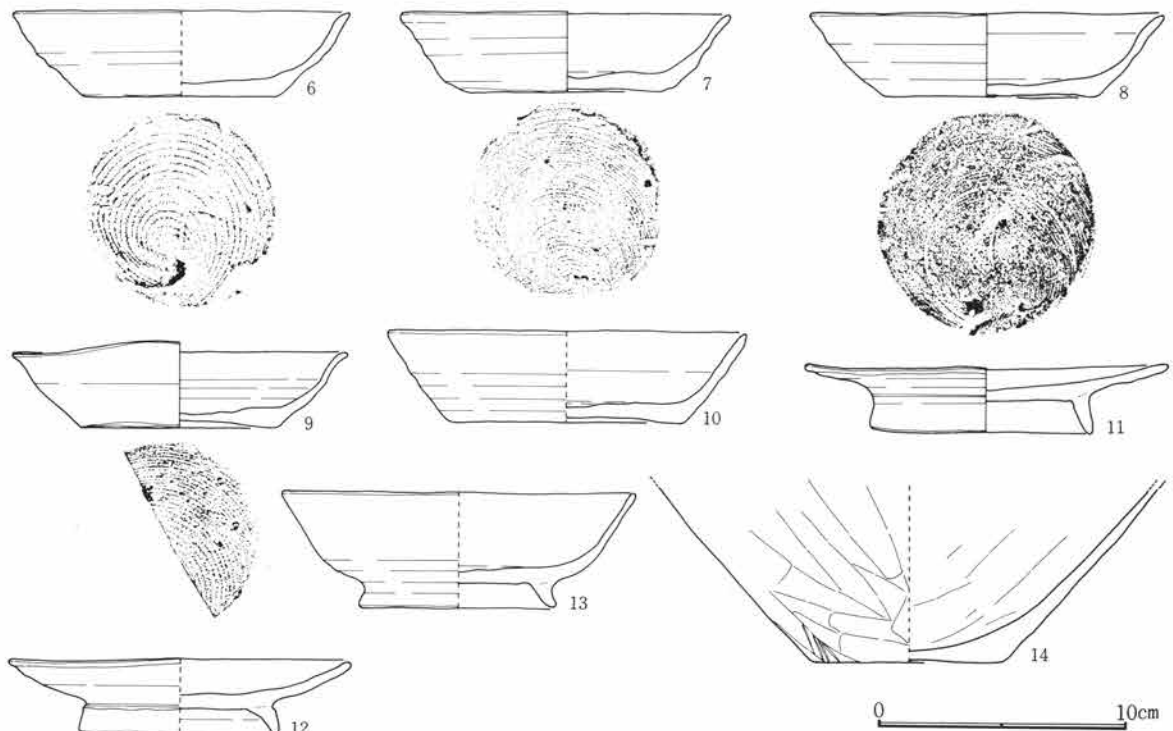


Fig.609 K144号住居跡出土遺物(2)

K145号住居跡 (Fig. 610・611・PL. 227)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.24 × 2.65	N— 85° —E	東壁南寄り	楕円形 (62.0 × 56.0 × —)

K区中央部やや東寄りに位置し、52・53K10～12の範囲にある。147号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。平面形は南北軸が僅かに長い方形を呈する。壁高は遺存の良い南壁で約14cmを測る。床面は平坦をなし、踏み締まりは良好である。竈は東壁の南側に付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。袖部などの構築材及び痕跡は検出されなかった。燃烧部幅約65cm・奥行き85cmを測る。出土遺物は少なく、竈内及び貯蔵穴上面に土師器甕の破片が検出されたのみである。

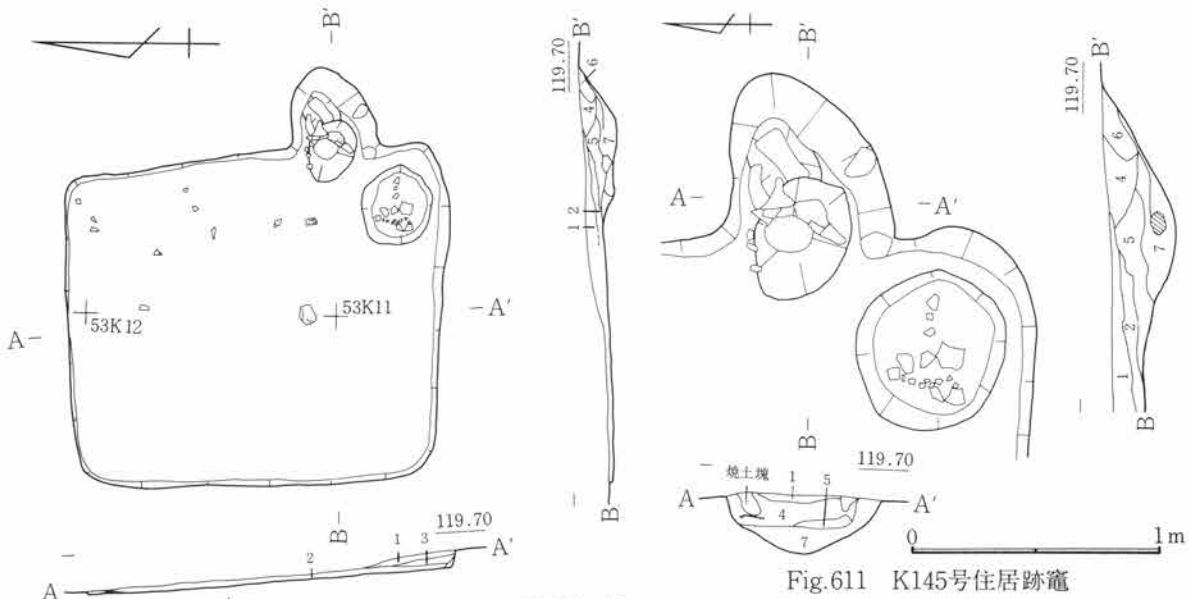


Fig.611 K145号住居跡竈

K145号住居跡・竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多く混える。
- 2 灰層
- 3 焼土粒・灰混り層
- 4 灰層 焼土粒含む。
- 5 灰褐色土 焼土粒含む。
- 6 焼土
- 7 灰・焼土混り層。

Fig.610 K145号住居跡

K146号住居跡 (Fig. 612～614・PL. 227)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.15 × 2.95	N— 88° —E	東壁やや南寄り	—————

K区中央部やや南寄りに位置し、53～55K11・12の範囲にある。132号・144号住居跡と重複しているが、132号より新しい時期の所産である。144号住居跡との重複関係は不明であり、南壁の一部はこのため消失してしまった。平面形は長方形に近い方形を呈する。壁高は約10cmを測り、浅い立ち上がりである。床面は平坦をなし踏み締まりは比較的的良好である。床面中央部には径80cm・深さ50cmの円形土坑が検出されているが、当跡との関係は不明である。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれ、右袖部には凝灰岩の加工材が埋設される。燃烧部幅50cm・奥行き65cmを測る。出土遺物は少量である。

第3章 K区の遺構と遺物

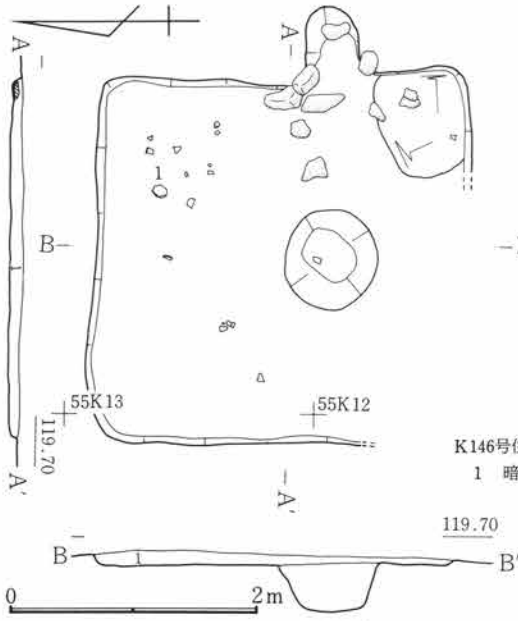


Fig.612 K146号住居跡

K146号住居跡
1 暗褐色土 C軽石を若干含み、粘性あり。

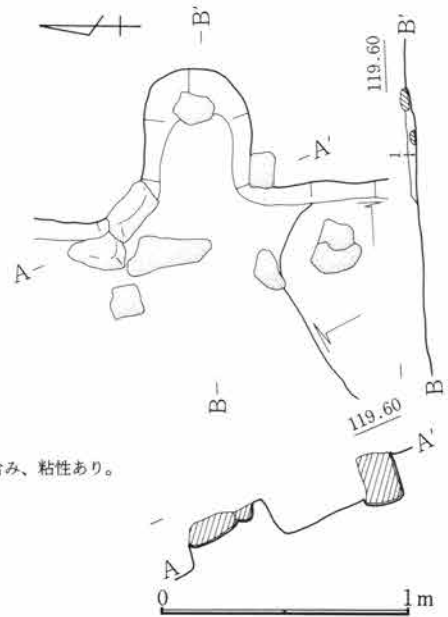


Fig.613 K146号住居跡竈

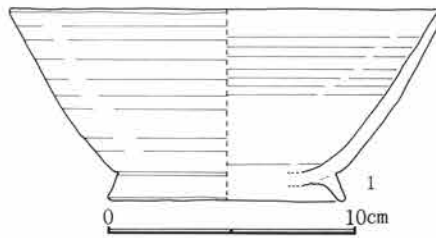


Fig.614 K146号住居跡出土遺物

K 146号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
614-1	須恵器 椀	1/4	17.5×9.5×7.5	北東部埋 土	体部深く直線的に開く。付高台、直線的でハの字状に立つ。 轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗

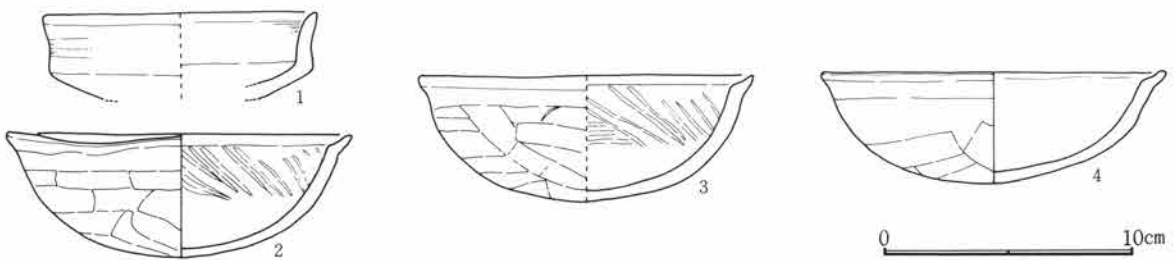
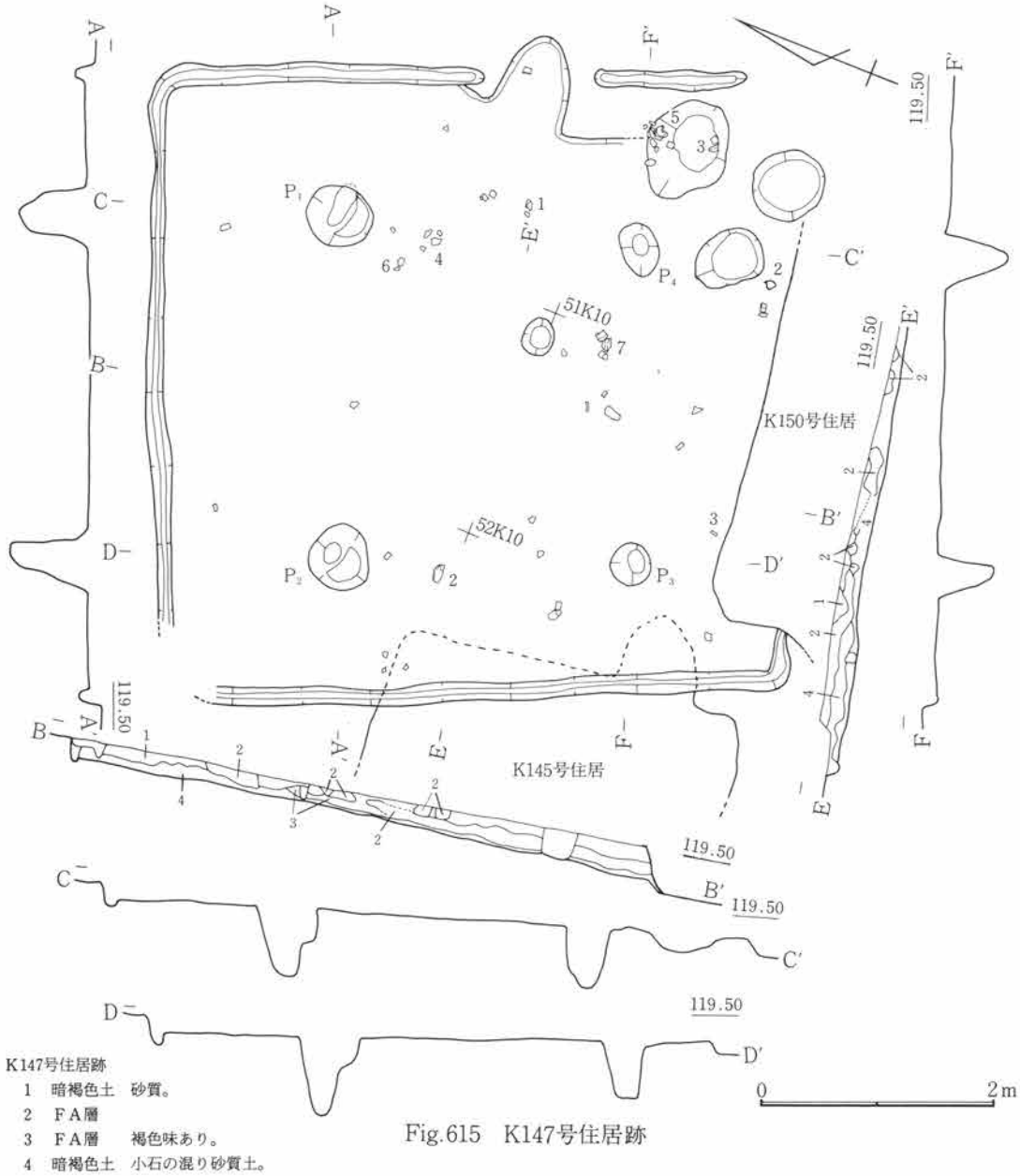
K 147号住居跡 (Fig. 615~617・PL. 228)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.80 × 5.30	N— 72' —E	東壁ほぼ中央	楕円形 (92.0 × 55.0 × —)

K区南部東寄りに位置し、49~52K 8~11の範囲にある。29号・30号・145号・150号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。南壁は150号によって消失している。平面形は整った正方形を呈する大形の住居跡である。壁高は12~16cmを測る。床面は平坦をなし、踏み締まりも良好である。消失した南壁を除き各壁下には幅約10cm・深さ6~10cmの溝が巡る。柱穴はP₁~P₄の4箇所を検出され、P₁は上径56×52cm・下径10cm・深さ60cm、P₂は上径54×50cm・下径14cm・深さ68cm、P₃は上径36×34cm・下径18×14cm・深さ60cm、P₄は上径42×32cm・下径16×12cm・深さ54cmを測る。柱間はP₁・P₂は2.86m、P₂・P₃は2.6m、P₃・P₄は2.7m、P₁・P₄は2.64mを測る。竈は東壁のほぼ中央部に付設されるが、確認のための削平が著し

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

楕円形を示す燃烧部の痕跡程度である。燃烧部幅約60cm・奥行き50cmを測る。袖部は検出できなかった。出土遺物は少なく散在して検出されている。羽口が2点検出されたが、7は通例のものより細く溶解の痕跡がみられず未使用のものであろうか。また、8は器肉が非常に薄い特徴がある。



第3章 K区の遺構と遺物

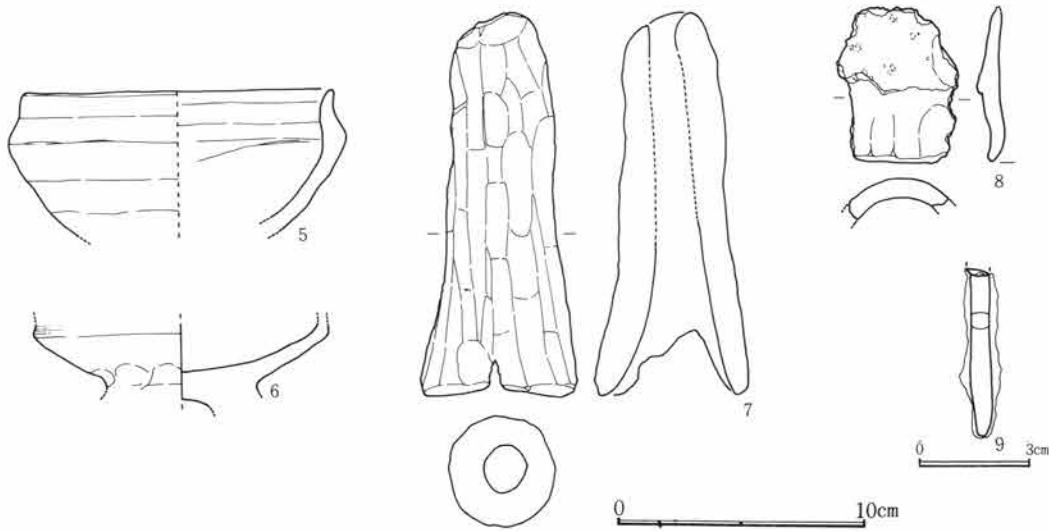


Fig.617 K147号住居跡出土遺物(2)

K 147号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
616-1 228-1	土 師 器 杯	1/2	11×-×(3.5) 口径高2	竈前床面	丸底を呈する底部から丸く不明瞭な稜をなし、口縁部は外反して立ち上がる。器肉は全体に厚く、口唇部は尖る。口縁内外面横撫で。	①やや軟 ②明赤褐 ③密
616-2 228-2	土 師 器 杯	完	13.8×-×4.8	西中央部埋土	丸底。体部半球状を呈す。口縁部強く外屈する。口唇部尖る。内面斜行篋磨き。体・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③密 白色粒混る
616-3 228-3	土 師 器 杯	1/2	13.4×-×5	貯蔵穴内 南西部埋土	丸底。体部半球状を呈す。口縁部強く外屈する。口唇部尖る。内面斜行・横篋磨き。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③密 白色粒混る
616-4 228-4	土 師 器 杯	完	13.8×-×4.4	東中央部床 面	丸底。体部丸く張る。口縁部強く外屈し、口唇部丸まる。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗 茶褐色粒混る
617-5 228-5	土 師 器 杯	1/2 底部 欠損	12.4×-×5.7	貯蔵穴内	体部成形の凹凸著しい。丸く張り、口縁部との変換部は肥厚し外へ強く張る。口縁部外反して直立する。内面強い横撫で。	①良好 ②明褐 ③やや密 赤褐色粒混る
617-6 228-6	土 師 器 高 杯	腰部	-×-×3.2 脚基部径6	東中央部床 面	体部やや丸味をもち内湾気味。口縁部は強く屈し直立を呈す。脚部との変換部に指頭痕あり。口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
617-7 228-7	土 製 品 羽 口 ?	完	長15 先径3.2 孔径1.4	中央部床 面	篋削り。使用痕なし。	
617-8 228-8	土 製 品 籬 羽 口		長6径2.7孔径2	埋 土	赤銅色に溶解。小形品で器肉薄い。	
617-9 228-9	鉄 製 品 角 釘 ?		4.5×0.5	埋 土		

K 148号住居跡 (Fig. 618・619・PL. 229・230)

K区中央部南寄りに位置し、57～60K10～13の範囲にある。124号・131号・160B号住居跡と重複しているが、いずれよりも古い時期の所産である。東壁から南壁にかけての一部は重複のため消失している。平面形は東西・南北とも約6mを測り、整った正方形を呈する。東西軸方位はN-82°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし比較的固く踏み締まる。各壁下には幅約10cm・深さ6～8cmの溝が巡る。柱穴はP₁～P₄の4箇所に検出されている。各柱穴の掘形の規模は、P₁は上径56cm・下径30cm・深さ72cm、P₂は上径56×50cm・下径28cm・深さ74cm、P₃は上径60cm・下径30cm・深さ70cm、P₄は上径60cm・下径30cm・深さ70cmを測る。柱間はP₁・P₂は3.8m、P₂・P₃は3.5m、P₃・P₄は3.7m、P₁・P₄は3.4mである。炉跡は、住居跡の北側で、P₁とP₂を結ぶ線のやや内側に検出されている。灰・焼土の堆積も少なく、かろうじて不整な楕円形に広がる炉跡を確認した。径60cmで僅かに窪んだ程度である。出土遺物は壺・甕類で、散在していた。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

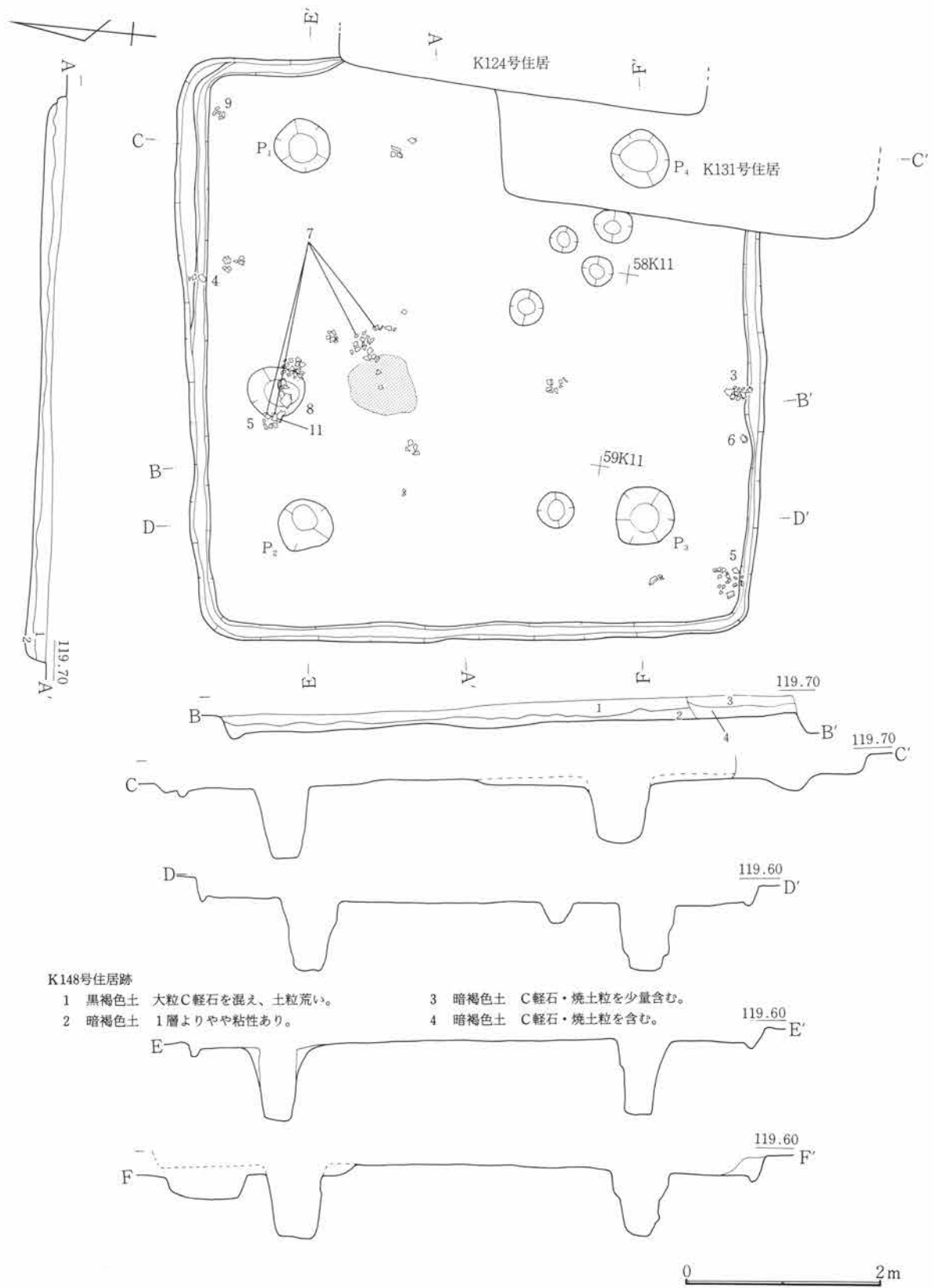


Fig.618 K148号住居跡

第3章 K区の遺構と遺物

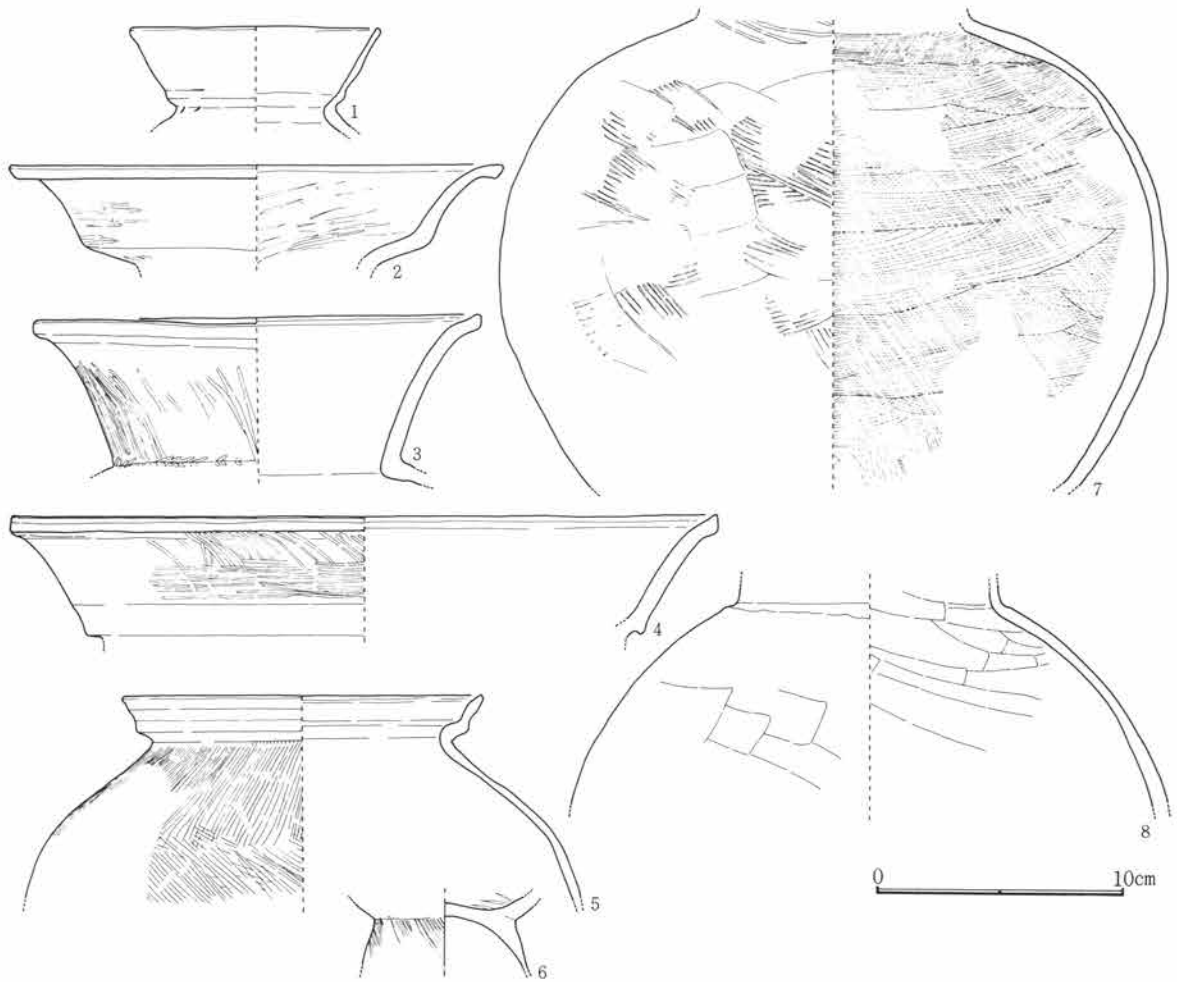


Fig.619 K148号住居跡出土遺物

K 148号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
619-1 229-1	土師器 埴	口縁部 1/4	10×-×(4.2) 頸基径6.4	北中央部床 面	口縁部は肩部からくの字状に屈し直線的に外傾する。口縁基に凸帯状の脹らみが巡る。口縁部内外面横撫で。肩部に篋削りの痕跡あり。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
619-2 229-2	土師器 壺	口縁部 1/4	20×-×(4)	埋土	口縁部下位で水平に近く外傾し段をなし上半は強く外反して大きく開く。口唇部はさらに強く外反し水平になる。端部は角張る。内外面は横・縦篋磨き。	①やや軟 ②橙 ③やや密 砂混る
619-3 229-3	土師器 壺	口頸部 1/2	18×-×(7.7) 頸基径11.5	南壁際埋 土	肩部強く張る様相。口頸部直線的に外傾し、上位で外反する。口唇部は角張り直立する。口頸部縦篋磨き。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
619-4 229-4	土師器 甕	口縁部 1/4	28.4×-×(5)	北壁際床 面	口縁部下位外面で強い段をなし、緩く外反して開く。口唇部は角張り、直立する。口縁部上位縦篋磨き後下位横篋磨き。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗 砂多く混る
619-5 229-5	土師器 甕	上半部 1/2	14.4×-×(9.2) 胴部径22.2	南西部床 面	胴部は大きく張り球形を呈す。口縁部S字口縁。胴部上位右斜行、中位左斜行刷毛目。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 砂混る
619-6 230-6	土師器 台付甕		-×-×(3) 台基径5.6	南壁際埋 土	台部斜行刷毛目。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂多く混る
619-7 230-7	土師器 甕	胴部 1/2	-×-×(18) 胴部径26.8	炉際床面	胴部強く張り球形を呈す。外面斜掻き目後撫で。内面横掻き目。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 細砂混る
619-8 230-8	土師器 壺	胴部 1/2	-×-×(9) 胴部径24	炉際穴上 面	胴部丸く張り球形を呈す。頸部は垂直に立ち上がる様相。外面弱い横篋削り、内面横篋撫で。	①良好 ②浅黄橙 ③やや密

K149号住居跡 (Fig. 620~623・PL. 230)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.18 × 3.07	N— 86° —E	東壁やや南寄り	楕円形 (58.0 × 77.0 × —)

K区南部やや東寄りに位置し、52~54K 6~7の範囲にある。134号・165号・171号住居跡と重複しており、134号より旧く、165号・171号より新しい時期の所産である。平面形は東西にやや長い方形を呈する。壁高は約18cmを測る。床面は西側がやや高まりをなし、東側竈周辺が固く踏み締まる。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は円形に掘り込まれる。東壁線上には袖部の左右に川原石が埋設され、また、奥壁にも左右に川原石が検出され、左側の石は内側に倒れ込んでいたが右と同様に埋設されていたと考えられる。袖部内法50cm、燃烧部奥行60cmを測る。出土遺物は竈周辺及び貯蔵穴内に集中して検出された。

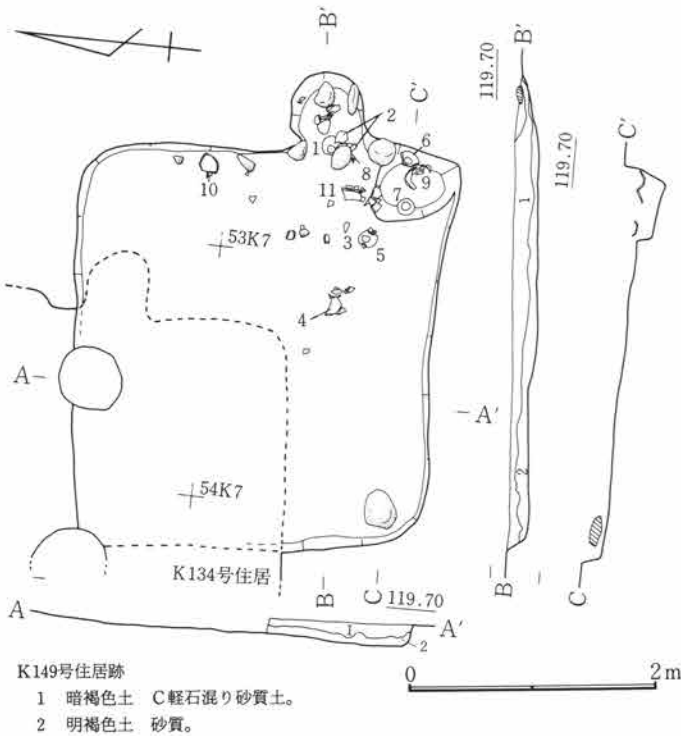


Fig.620 K149号住居跡

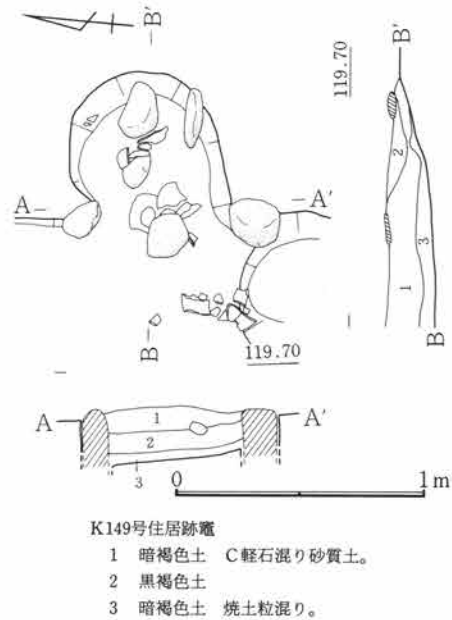


Fig.621 K149号住居跡竈

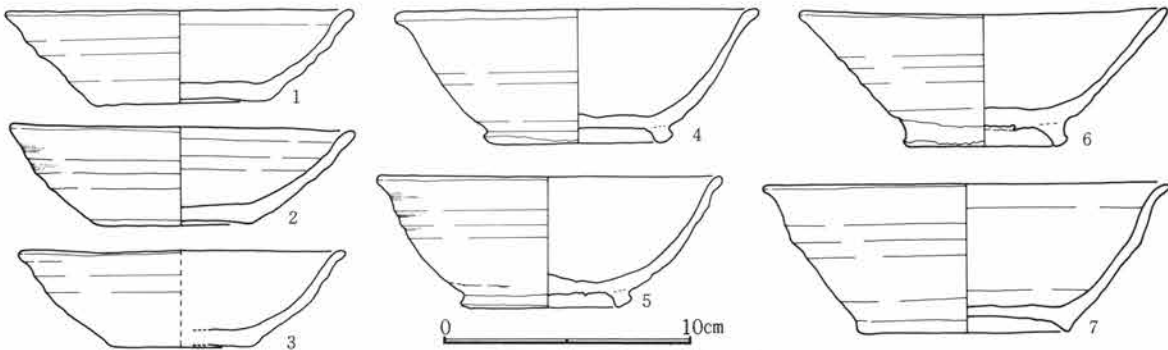


Fig.622 K149号住居跡出土遺物(1)



Fig.623 K149号住居跡出土遺物(2)

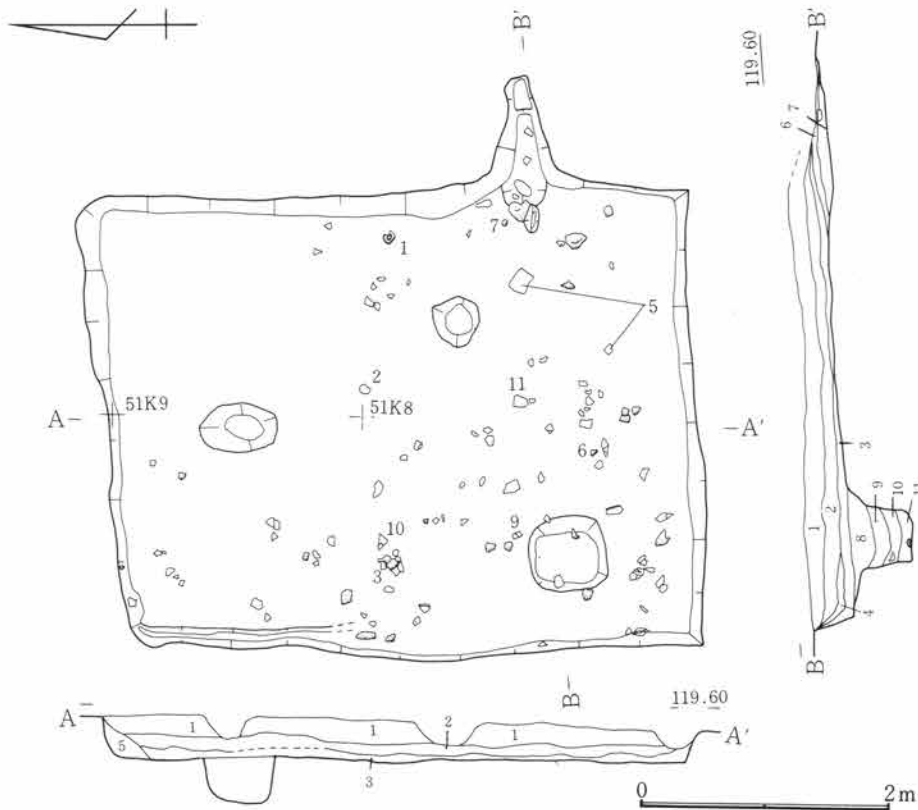
K 149号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
622-1 230-1	須 杯 器	完	14×7×3.7	竈内	体部直線的に開き、口唇部丸く肥厚し外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 白色粒混る
622-2 230-2	須 杯 器	1/2	13.8×6.3×3.9	竈内	体部やや丸味をもち、口唇部丸く緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化 やや軟 ②鈍い黄橙 ③密
622-3 230-3	須 杯 器	1/2	13.2×5.7×3.9	竈前床面	体部中位でやや張る。口唇部丸く外屈する。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密 白色粒混
622-4 230-4	須 椀 器	1/2	14.6×7.5×5.3	中央部貯蔵穴内	腰部丸味をもつ。口唇部丸く肥厚し外反する。付高台、肥厚し丸味をもつ。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 細砂混る
622-5 230-5	須 椀 器	完	13.9×6.9×5.3	南東部床面	腰部から体部に丸味をもち、口唇部丸く外屈気味。付高台、断面矩形を呈す。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗 細砂混る
622-6 230-6	須 椀 器	3/4	14.8×6.5×5.4	貯蔵穴内	体部直線的に開く。付高台、端部捲れ、ハの字状に開く。貼付雑。	①良好 ②オリーブ灰 ③やや粗
622-7 230-7	須 椀 器	体部一部欠損	16.2×8.5×5.9	貯蔵穴内	体部中位でくびれ、口縁部は強く外反する。付高台、低く断面三角。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂混る
623-8 230-8	土 甕 器	上半部 1/2	19.2×-×(12) 胴部径23.8	竈内	胴部上半に最大径をもち、丸く張る。口縁部直線的に内傾した後上半はくの字状に外屈する。口縁部横撫で、胴部横篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②灰褐 ③やや密
623-9 230-9	土 甕 器	上半部 1/2	19.6×-×(14.5) 胴部径21.4	貯蔵穴内	胴部中位に最大径をもち丸く張る。口縁部緩く外反して開く。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②橙 ③密
623-10 230-10	須 甕 器	1/4 口頸欠損	-×6.5×(15.1)	東壁際床面	肩部丸く強く張る。付高台、低く断面丸い。内面篋撫で。	①やや軟 ②オリーブ灰 ③やや粗
623-11 230-11	瓦 丸瓦?		厚2.5	貯蔵穴際床面	凹面布目。側縁篋削り。	①良好 ②灰白 ③粗
623-12 230-12	須 転用砥石 器	13・14と同器片	7×4.3×1.2 41.5g	埋土	3側面および内面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
623-13 230-13	須 転用砥石 器	12・14と同器片	3.8×2.7×1.2 16.2g	埋土	2側面および内面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密
623-14 230-14	須 転用砥石 器	12・13と同器片	4.7×2.6×1.2 23.3g	埋土	4側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③やや密

K150号住居跡 (Fig. 624~626・PL. 231)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
——	5.05 × 3.63	N— 88° —E	東壁南寄り	——

K区南部東寄りに位置し、49~51K 6~8の範囲にある。26号・147号・165号住居跡と重複しているが、いずれよりも新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸を持ち各隅が角張った方形を呈する。壁高は約28cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。南西部には貯蔵穴と考えられる径60×54cm・深さ34cmの方形土坑が穿たれる。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は住居内に位置すると考えられ、長く水平な煙道部が延びる。燃烧部幅約60cm、煙道部長さ80cmを測る。出土遺物は散在する状態で、緑釉陶器片・砥石類・銅製品などが検出されている。



K150号住居跡

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色土 C軽石を混える砂質土。 | 7 暗褐色土 6層と類するが極めて堅い。 |
| 2 暗褐色土 1層よりC軽石が少ない。 | 8 暗褐色土 C軽石を含む、しまり良。 |
| 3 黒褐色土 粘性あり。 | 9 暗褐色土 C軽石を含む。 |
| 4 暗褐色土 粘性あり。 | 10 暗褐色土 堅くしまる粘性土。 |
| 5 暗褐色土 | 11 暗褐色土 堅くしまり粘性あり。 |
| 6 暗褐色土 黄色土塊 (Loam) を含む。 | |

Fig.624 K150号住居跡

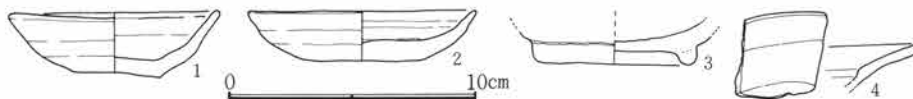


Fig.625 K150号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

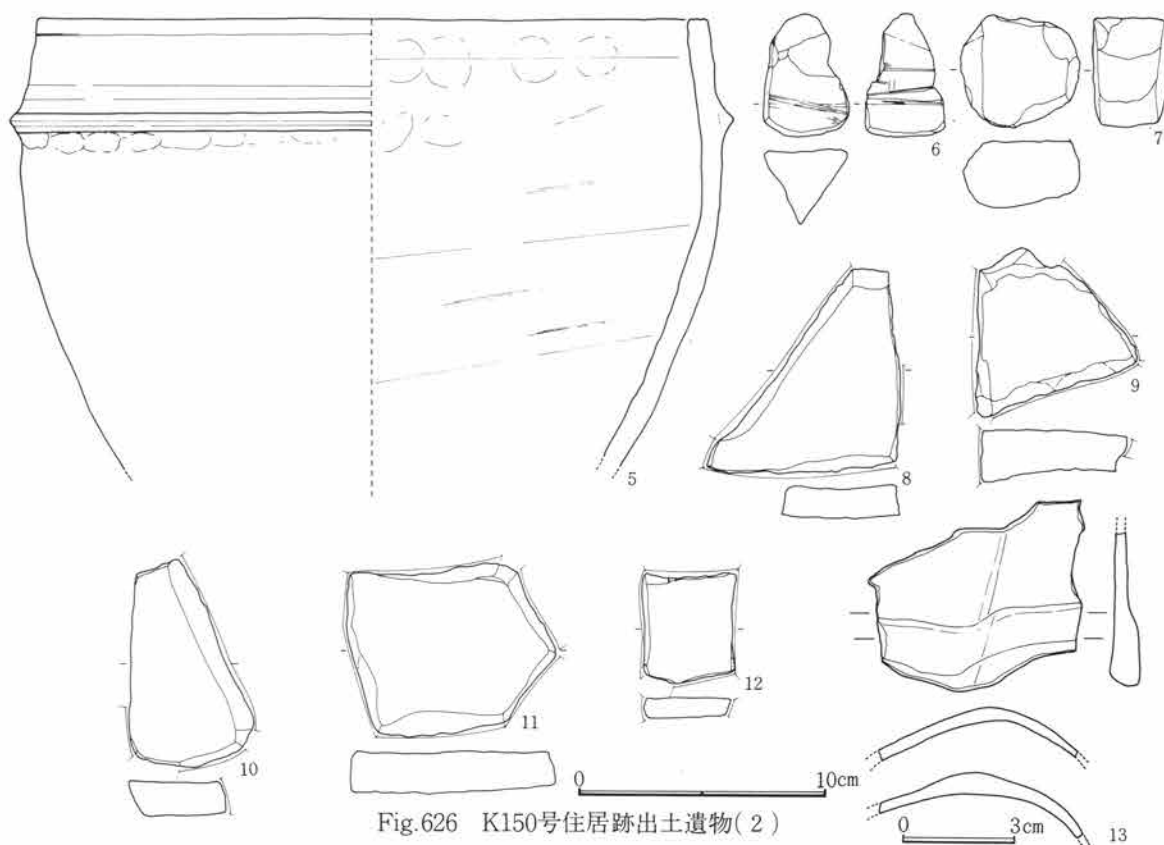


Fig.626 K150号住居跡出土遺物(2)

K 150号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
625-1 231-1	土 師 質 杯	完	8.8×3.8×2.6	東壁際床 面	底径小さく、腰部緩くくびれ、上半は直線的。轆轤成形。 右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③密
625-2	土 師 質 杯	1/2	9.2×4.8×2	中央部埋 土	体部浅い。腰部に丸味をもち上半は外反気味に開く。口唇 部細り、底部肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②暗灰黄 ③やや密 白色粒混
625-3	須 惠 器	底部1/2	—×6.5×(1.8)	西中央部埋 土	付高台、低く端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化 ②褐灰 ③ やや粗 白色粒混る
625-4 231-4	緑 釉 陶 器 段 皿	口縁部 小片		埋 土	内面段をなし、口縁部は外反気味に大きく外傾。釉に光沢 あり。	①良好 ②オリブ 灰 ③やや密
626-5 231-5	羽 釜	上半部 1/3	27×—×(18) 鏝径29口縁高3.5	竈前床面	胴部下半は外傾し、上半は直立する。口縁部高く、直線的 で内傾気味に立つ。口唇部上端面は平坦。鏝低く断面三角。 鏝下及び口縁部指頭痕。内面胴部横回転撫で。	①酸化 良好 ②橙 ③やや粗
626-6 231-6	石 製 品 砥 石		4.9×3.2×2.9 39.7g	南中央部埋 土	多面使用。刃痕顕著。	角閃石安山岩
626-7 231-7	石 製 品 砥 石		4.7×4.5×2.6 74.1g	竈前埋土	多面使用。	角閃石安山岩
626-8 231-8	須 惠 器 転用砥石		8×7.7×1.1 81.3g	床 下	3側面使用。薬片。	①良好 ②赤褐 ③ やや密
626-9 231-9	須 惠 器 転用砥石		6.6×6.4×2 86.9g	南西部床 面	3側面使用。薬片。	①良好 ②灰 ③や や密
626-10 231-10	須 惠 器 転用砥石		8.2×5×1.3 66.3g	西中央部埋 土	3側面使用。薬片。	①良好 ②灰 ③や や粗
626-11 231-11	須 惠 器 転用砥石		8.4×6.7×1.6 131.2g	中央部埋 土	5側面使用。薬片。	①良好 ②灰 ③や や密
626-12 231-12	須 惠 器 転用砥石		4.4×3.7×0.18 23.1g	埋 土	4側面使用。刃痕あり。薬片。	①良好 ②灰 ③や や密
626-13 231-13	銅 製 品 不 明		4.2×5.5×0.4	埋 土	器面の遺存度極めて良好で腐蝕少ない。端部に段をなし肥 厚し緩く波うつ。	

K151号住居跡 (Fig. 627~630・PL. 232)

K区南部西寄りに位置し、62・63K 3・4の範囲にある。155号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。西半部は調査区域外に延び未検出である。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約3.9mを測り、東西は東壁より2.2mの範囲まで検出した。竈を基軸にする東西軸方向はN-82°-Eを示す。壁高は約40cmを測る。床面は平坦をなし、踏み締まりは良好である。東壁から北壁にかけての一部と南壁下には幅6~10cm・深さ6cmの溝が巡る。南東部に径70cm程度の楕円形の浅い落ち込みが検出されたが、貯蔵穴か否かは不明である。竈は東壁の南寄りに付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれる。東壁線上には凝灰岩の加工材が埋設され、袖部を作る。また、燃焼部には円柱形の同質材が埋設され支脚が設けられる。袖部内法約40cm・奥行き60cmを測る。出土遺物は散在して検出され転用砥石などがある。

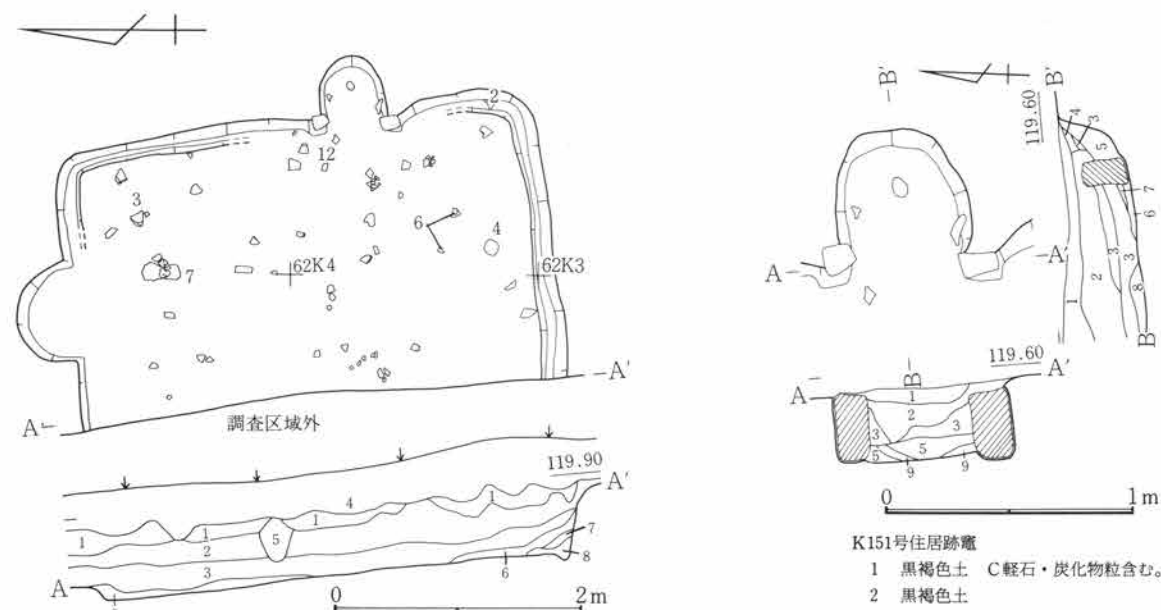


Fig.628 K151号住居跡竈

Fig.627 K151号住居跡

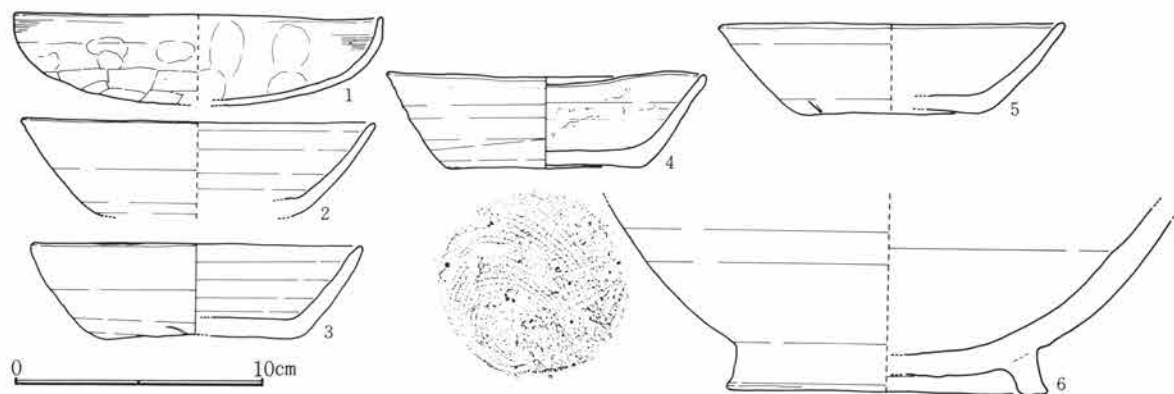


Fig.629 K151号住居跡出土遺物(1)

第3章 K区の遺構と遺物

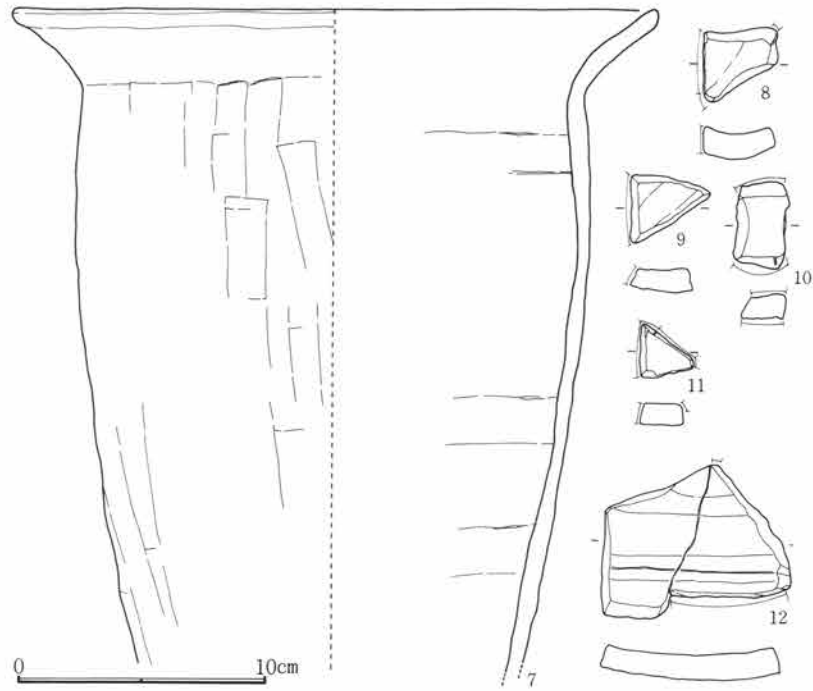


Fig.630 K151号住居跡出土遺物(2)

K 151号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
629-1 232-1	土 師 器 杯	1/4	14.8×—×3.6	南西部床 面	底部丸味をもつが扁平。口縁部直立する。口縁部内外面横撫で。体部指頭痕。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密、白色粒混
629-2 232-2	須 惠 器 杯	1/4	14.2×7.5×3.8	南東壁際 埋土	腰にやや丸味をもち、体部内湾気味に外傾する。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③や や粗 白色細粒混る
629-3 232-3	須 惠 器 杯	1/2	13.3×7.5×3.6	北東部床 面	器内均一でやや厚い。体部直線的に外傾。内面口縁部に重ね焼痕あり。轆轤成形。回転糸切り。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 黒色粒浮く
629-4 232-4	須 惠 器 杯	完	13×7.7×3.6	南中央部床 面	体部直線的に外傾し、口唇部内傾気味。轆轤成形。右回転糸切り。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗 黒色粒混る
629-5 232-5	須 惠 器 杯	1/4	14×7×3.5	埋 土	体部直線的に外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や粗 白色細粒混る
629-6 232-6	灰 釉 陶 器 高台付鉢	底部1/2	—×13×(7.5)	南中央部床 面	底部から体部丸味をもつ。高台は幅広く矩形を呈す。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③緻 密
630-7 232-7	土 師 器 甕	1/4 底 部欠損	26×—×(25.8)	北中央部床 面	胴部張りなく長胴形を呈す。口縁部大きくくの字状に外傾する。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③粗 小石混る
630-8	須 惠 器 転用砥石		3×3×1	埋 土	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や や密
630-9	須 惠 器 転用砥石		3.2×2.7×0.8	埋 土	1側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や や密
630-10	須 惠 器 転用砥石		3.4×2.2×0.9	埋 土	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や や密
630-11	須 惠 器 転用砥石		2.2×2.1×0.8	埋 土	3側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や や密
630-12	須 惠 器 転用砥石		7.6×6.2×1	竈前床面	2側面使用。瓶片。	①良好 ②灰 ③や や密

K155号住居跡 (Fig. 631・PL. 233)

K区南部西寄りに位置し、61・62K 3・4の範囲にある。151号住居跡の床下より検出され、遺存状態はかろうじてその輪郭を看取できる程度である。また、西半部は調査区域外に延びる。平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は小形で南北長約2.6mを測り、東西は東壁より1.1mの範囲まで確認できた。竈を基軸にする東西軸方位はN-80°-Eを示す。床面は平坦をなし、南東隅には貯蔵穴と考えられる浅い楕円形の落ち

込みが検出された。径50cmを測る。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。燃烧部幅70cm・奥行き50cmを測る。出土遺物は検出されない。

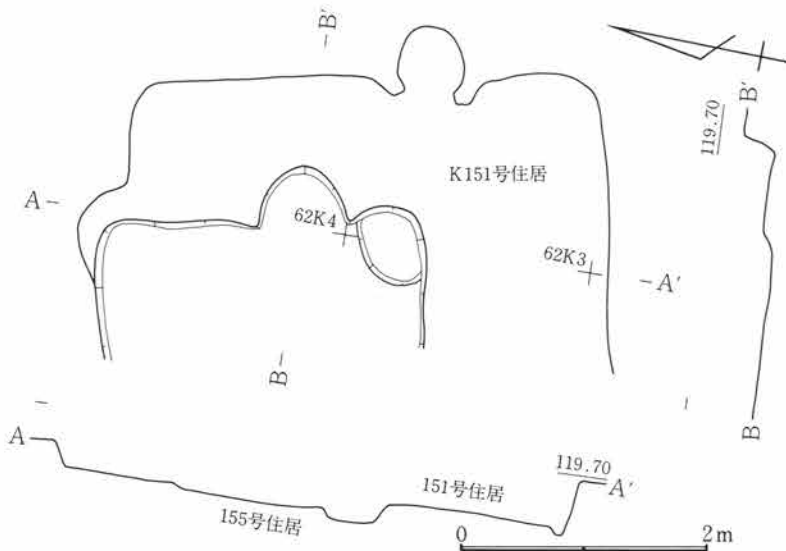


Fig.631 K155号住居跡

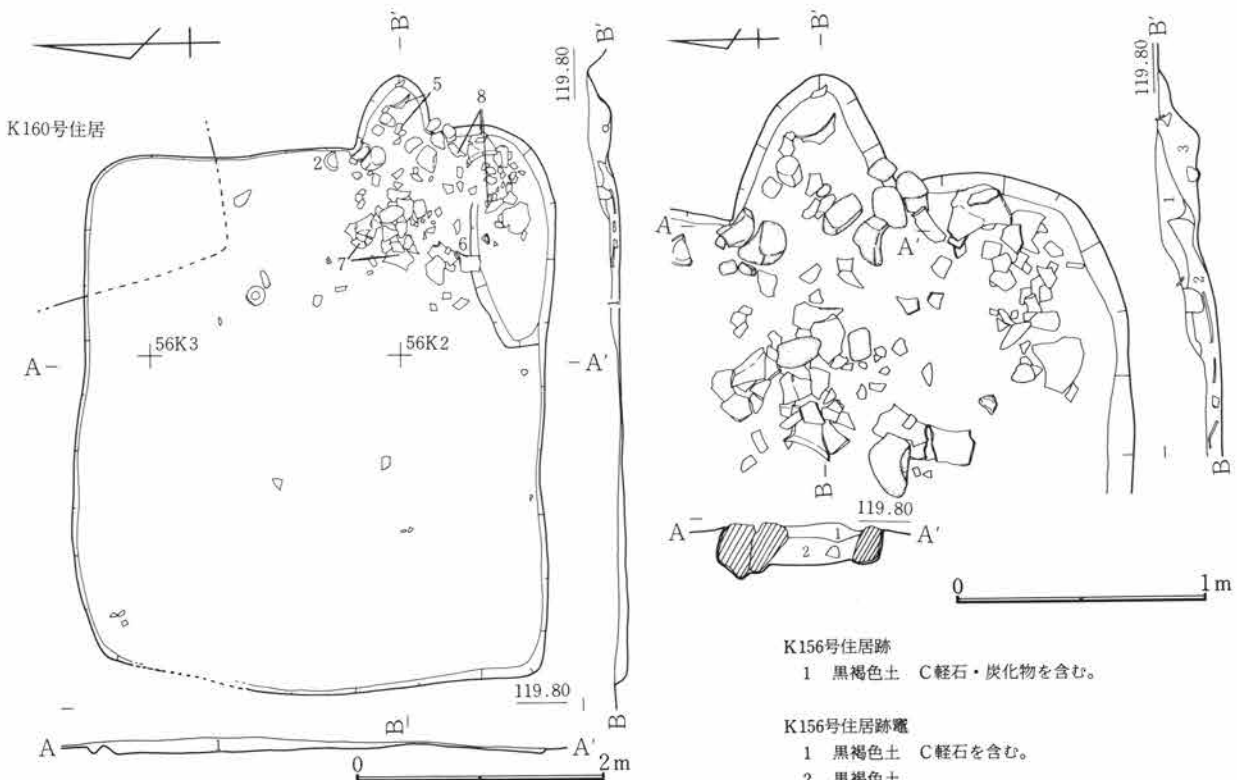


Fig.632 K156号住居跡

K156号住居跡

- 1 黒褐色土 C 軽石・炭化物を含む。

K156号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C 軽石を含む。
- 2 黒褐色土
- 3 褐色土 焼土粒多く含む。

Fig.633 K156号住居跡竈

K156号住居跡 (Fig. 632~635・PL. 233・234)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.20 × 3.81	N- 93° -E	東壁やや南寄り	—————

K区南部に位置し、55~57K 1~3の範囲にある。160A号・172号住居跡と重複しており、これらより新しい時期の所産である。平面形は西壁線がやや歪むが、東西に長軸を持つ方形を呈する。壁高は遺存良好な南西部で約20cmを測る。床面は西半部に細かい凹凸が見られ踏み締まりも弱い。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されていない。竈は東壁の南側に付設され、燃烧部は先細りの楕円形に掘り込まれる。東壁線上両袖部には凝灰岩の加工材が埋設される。袖材間内法約40cm、燃烧部奥行き約70cmを測る。出土遺物は竈全面に集中し、土師器大形甕類が目立つ。

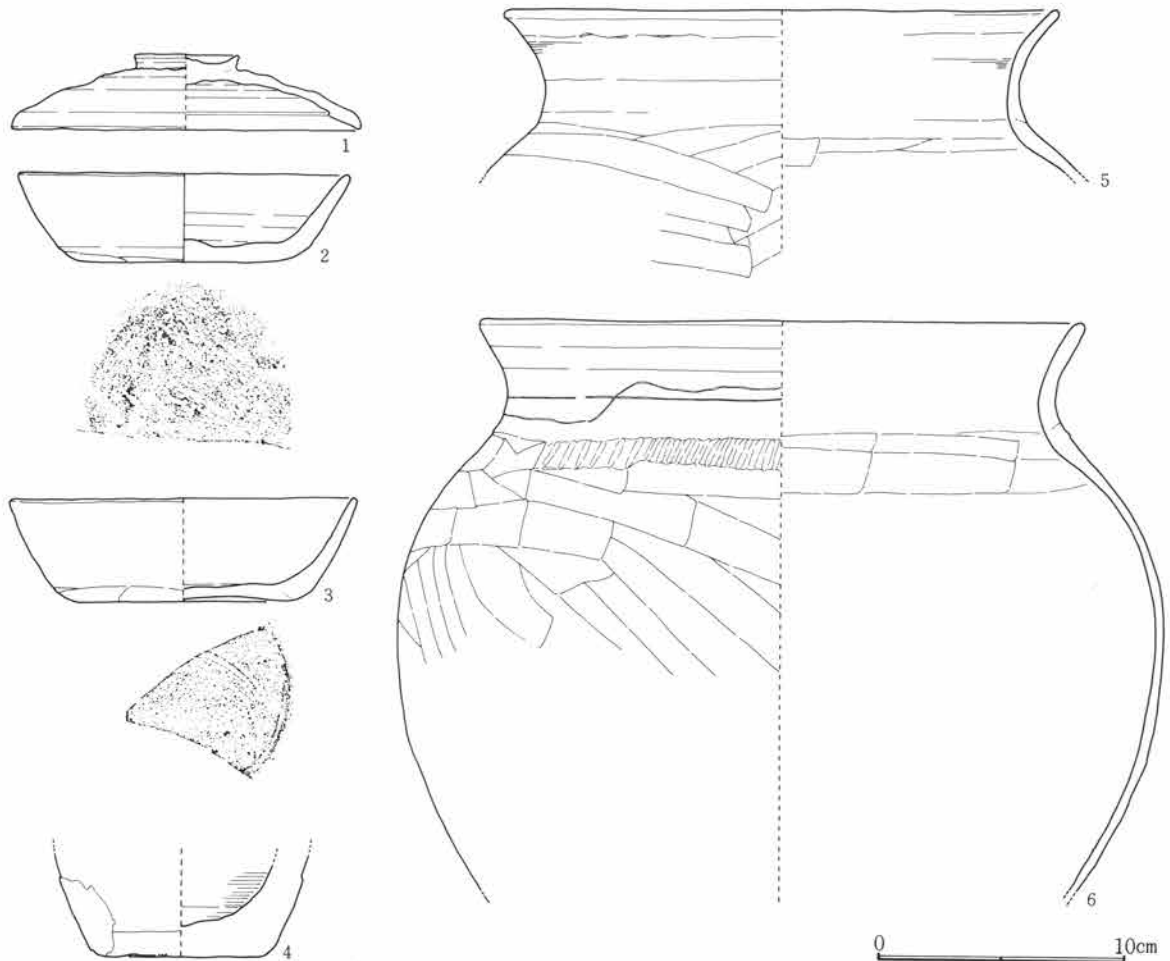


Fig.634 K156号住居跡出土遺物(1)

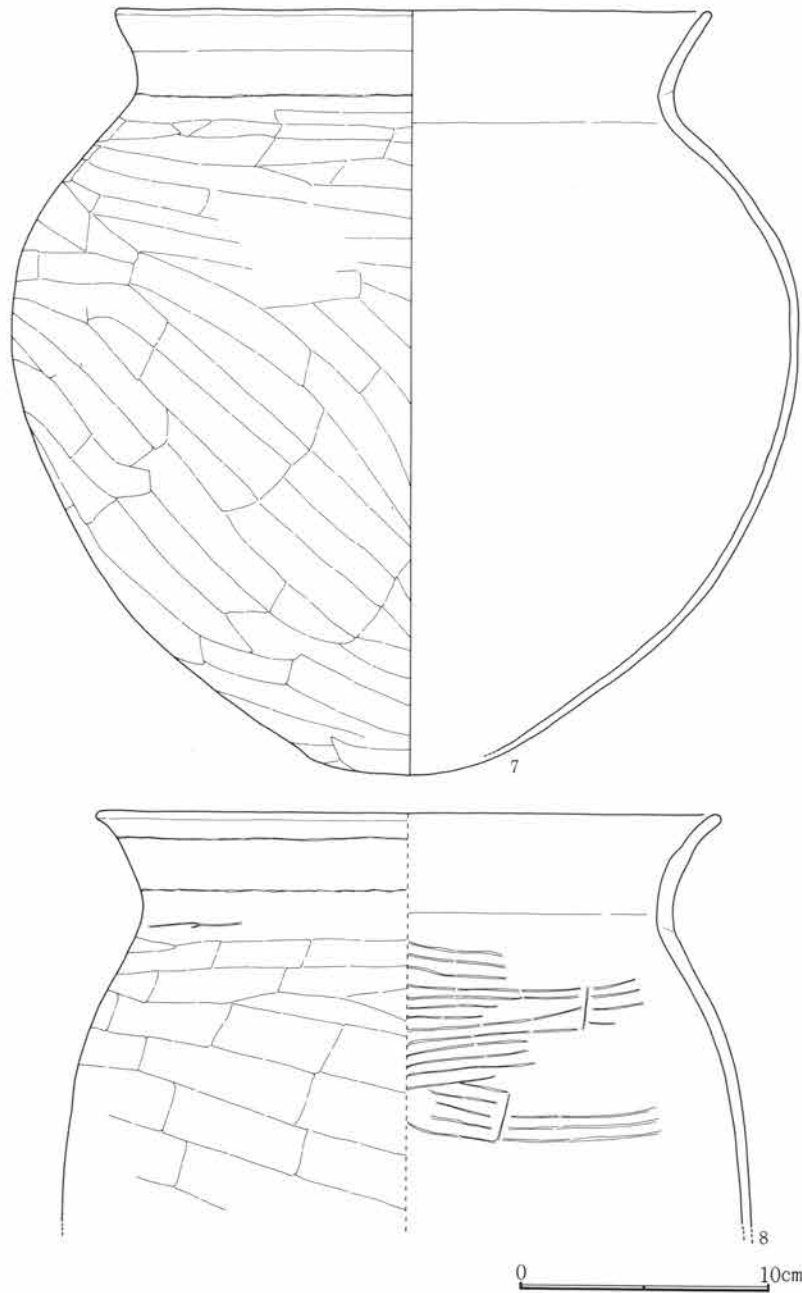


Fig.635 K156号住居跡出土遺物(2)

K156号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
634-1 234-1	須恵器 蓋	1/4	14.1×—×3 摘径4.2	住居外	天井から体部丸味をもつ。口縁部肥厚し、端部より内側1.3cmで短いかえりをもつ。環状橋、端部細り中心部凸状、天井部回転篋削り、体部巻き上げ痕顕著。	①良好 ②灰白 ③やや粗 黒色粒混る
634-2 234-2	須恵器 杯	1/2	13.4×9×3.5	竈際埋土	底径大きく、腰部に丸味をもつ。体部直線的に外傾。轆轤成形。底部から腰部手持篋削り。	①良好 ②灰 ③粗 小石・白色粒混る
634-3 234-3	須恵器 杯	1/2	14×9×4.1	埋土	底径大きく、腰部に丸味をもつ。体部直線的に外傾。轆轤成形。回転米切り?後、腰部手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密 白色細粒混
634-4 234-4	須恵器 瓶	底部1/3	—×6.8×(4)	埋土	丸味のある平底。器肉は厚い。底・体部手持篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密 白色粒混る
634-5 234-5	土師器 甕	口縁部 1/4	22.4×—×(6.5)	竈内	肩部丸く張り、口縁部強く外反して開く。口縁部横撫で。肩部斜篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密 細砂混る

K 156号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
634-6 234-6	土師器 壺	1/2 下半欠損	24.4×-×(22.5) 最大径胴部30.7	竈前床面	最大径は胴部上位にあり強く脹らみ球形を呈す。口縁部外反して開く。口縁部横撫で、肩部横・胴上半は斜篋削り。内面肩部横篋撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
635-7 234-7	土師器 壺	完	24×-×30.3 最大径胴部31.6	竈前床面	底部小さく丸底。最大径は胴部上位にあり、丸く張り球形を呈す。口縁部は直線的でくの字状に外傾して開く。口縁部横撫で。肩部横、上～下位は斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
635-8 234-8	土師器 壺	1/2 下半欠損	25×-×1.6 最大径胴部27.5	竈際埋土	肩部張りなく、やや下脹れの様相。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。肩部横、胴部緩い斜篋削り。内面胴部横篋撫で。	①良好 ②明赤褐 ③やや密

K 157号住居跡 (Fig. 636~638 ・ PL. 235 ・ 236)

K区南部に位置し、59~62K 1・2の範囲にある。158号・169号住居跡と重複しているが、158号より新しく、169号より古い時期の所産である。当跡の竈は169号住居跡の範囲内に含まれるが、169号住居跡の掘形が浅いため遺存したものである。住居跡西側については北・南壁線を追いつき、西壁を検出できなかった。平面形は東西に長軸を持つ方形を呈すると考えられる。南北長約3.6m・東西は東壁より4.4mまで確認できた。竈を基軸にする東西方位はN-86°-Eを示す。壁高は約35cmを測る。床面は平坦をなすが、158号との重複部分は軟弱である。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は楕円形に掘り込まれる。袖部は東壁線上に凝灰岩の加工材が埋設され、袖部間には同質の天井に架したと考えられる長方形の加工材が落ち込んでいる。袖材間内法55cm、燃烧部奥行き85cmを測る。出土遺物は緑釉片・灰釉陶器などが検出されたが埋土中のものも多い。

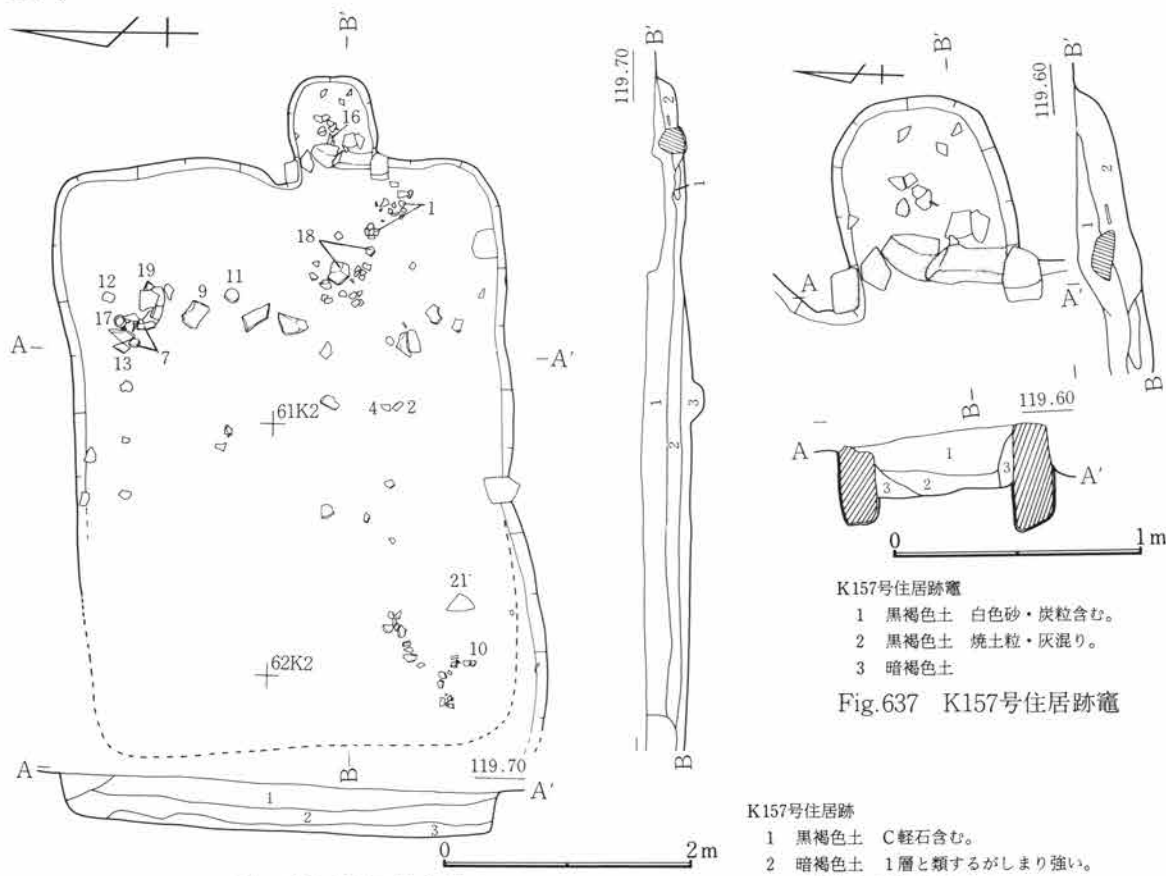


Fig.636 K157号住居跡

K 157号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
638-1 235-1	土 師 器 杯	1/2	12.4×—×3.2	竈前床面	底部扁平で浅い。口縁部細り直立する。口縁部横撫で。底部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや密 砂混る
638-2 235-2	土 師 器 杯	1/4	13.4×—×3.5	南央部床面	底部丸味をもち、やや深い。口縁部内湾気味に内傾する。口縁部横撫で。底部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
638-3 235-3	土 師 器 杯	1/4	14×—×(3)	竈前床面	底部扁平。口縁部内湾気味に内傾する。口唇部細る。口縁部横撫で。底部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
638-4 235-4	須 惠 器 杯	1/2 底部欠損	11.8×—×(3.3)	南央部床面	腰部に丸味をもち、体部直線的に外傾する。口縁部はゆるくくびれる。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
638-5 235-5	須 惠 器 杯	1/3	12.8×6.5×4.1	埋 土	腰部丸味をもち、体部やや深く外反気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
638-6 235-6	須 惠 器 杯	体部1/3欠損	11.8×5.5×4.2	埋 土	体部丸味をもち深い。口唇部細り外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②灰 ③やや粗 砂混る
638-7 235-7	須 惠 器 碗	1/3	14.5×7×5.5	北東部埋土	体部僅かに丸味をもつ。口縁部外反気味。付高台、幅広く断面矩形を呈す。轆轤成形。回転糸切り。	①軟 ②灰白 ③やや密 細砂混る
638-8 235-8	須 惠 器 碗	1/2	14×6.8×5.7	中央部埋土	腰部張りなく、体部直線的に外傾。口唇部細り僅かに外屈する。付高台、端部内湾気味。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗 小石混る
638-9 236-9	須 惠 器 碗	高台欠損	15.6×—×(5.8)	北東部埋土	体部丸く張り、口縁部は外反する。付高台、轆轤成形。右回転糸切り。	①軟 ②灰白 ③密
638-10 236-10	須 惠 器 碗	底部	—×7×(3.2)	南西部埋土	付高台、幅広く断面四角。轆轤成形。	①酸化気味 やや軟 ②灰白 ③やや粗
638-11 236-11	須 惠 器 碗	底部	—×6.4×(2.5)	中央部埋土	付高台、低く断面台形。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 砂混る
638-12 236-12	須 惠 器 碗	底部	—×6×(3)	北東部埋土	付高台、端部尖りハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密 細砂混る
638-13 236-13	須 惠 器 碗	底部	—×7×(2.4)	北東部埋土	付高台、肥厚し端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
638-14 236-14	緑釉陶器 小片	底部小片		埋 土	見込部に陰花文を施す。寛磨きあり。全面に施釉。	①良好 ②オリーブ灰 ③密
638-15	緑釉陶器 皿	小片	12.2×6.4×3	埋 土	体部大きく開き、口唇部は尖り水平に外反。見込部に重ね焼き三叉トチン痕あり。釉調は濃緑色で全面施釉。付高台、下端面は段をなす。回転糸切り痕残す。	①堅緻 ②オリーブ灰 ③密
638-16	土 師 器 甕	1/4 下半欠損	13×—×(0.5) 胴部径15.6	竈 内	胴部丸く張り球形を呈し、最大径は胴部中位にある。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。胴部横削り。	①良好 ②橙 ③やや粗 砂混る
638-17 236-17	須 惠 器 壺	口頸部	14.6×—×(9.8) 頸基径8.5	北東部埋土	肩部丸く強く張る。頸部直線的に外傾し、口縁部は外反する。口唇部尖り、やや内傾して立つ。	①良好 ②灰白 ③やや密
638-18 236-18	灰釉陶器 瓶	口頸部欠損	—×9.5×(16.3) 胴部径17	中央部床面	胴部上半は丸く強く張り、最大径は中位にある。肩部に施釉。高台幅広で下端面は凹状。胴下半回転寛削り。底部に糸切り痕あり。	①良好 ②黒灰 ③やや粗
638-19 236-19	瓦 丸瓦		厚2.3	北東部埋土	凹面布目。側縁寛削り。	①良好 ②黒灰 ③粗
638-20 236-20	瓦 平瓦		厚2.2	埋 土	凹面布目。凸面縄目。	①良好 ②灰 ③粗
638-21 236-21	土 製 品 鞆羽口		長15 先径7.5 基径8.2 孔径2.5	南西部床面	先端部熔解。熔解角度40°	植物質混入
638-22 236-22	須 惠 器 転用砥石		4.7×4.5×1.4 42.4g	埋 土	4側面使用。癭片。	①良好 ②灰白 ③密
638-23 236-23	須 惠 器 転用砥石		3.7×3.7×1 15.8g	埋 土	1側面使用。癭片。	①良好 ②灰白 ③密
638-24 236-24	須 惠 器 転用砥石		5.3×3.4×1 17.1g	埋 土	3側面使用。瓶片。	①良好 ②灰 ③やや密
638-25 236-25	須 惠 器 転用砥石		6.2×5.7×1.2 50.3g	埋 土	4側面使用。癭片。	①良好 ②灰白 ③やや密
638-26 236-26	須 惠 器 転用砥石		4.5×3.3×1.2 22.5g	埋 土	1側面使用。癭片。	①良好 ②灰 ③やや密

第3章 K区の遺構と遺物

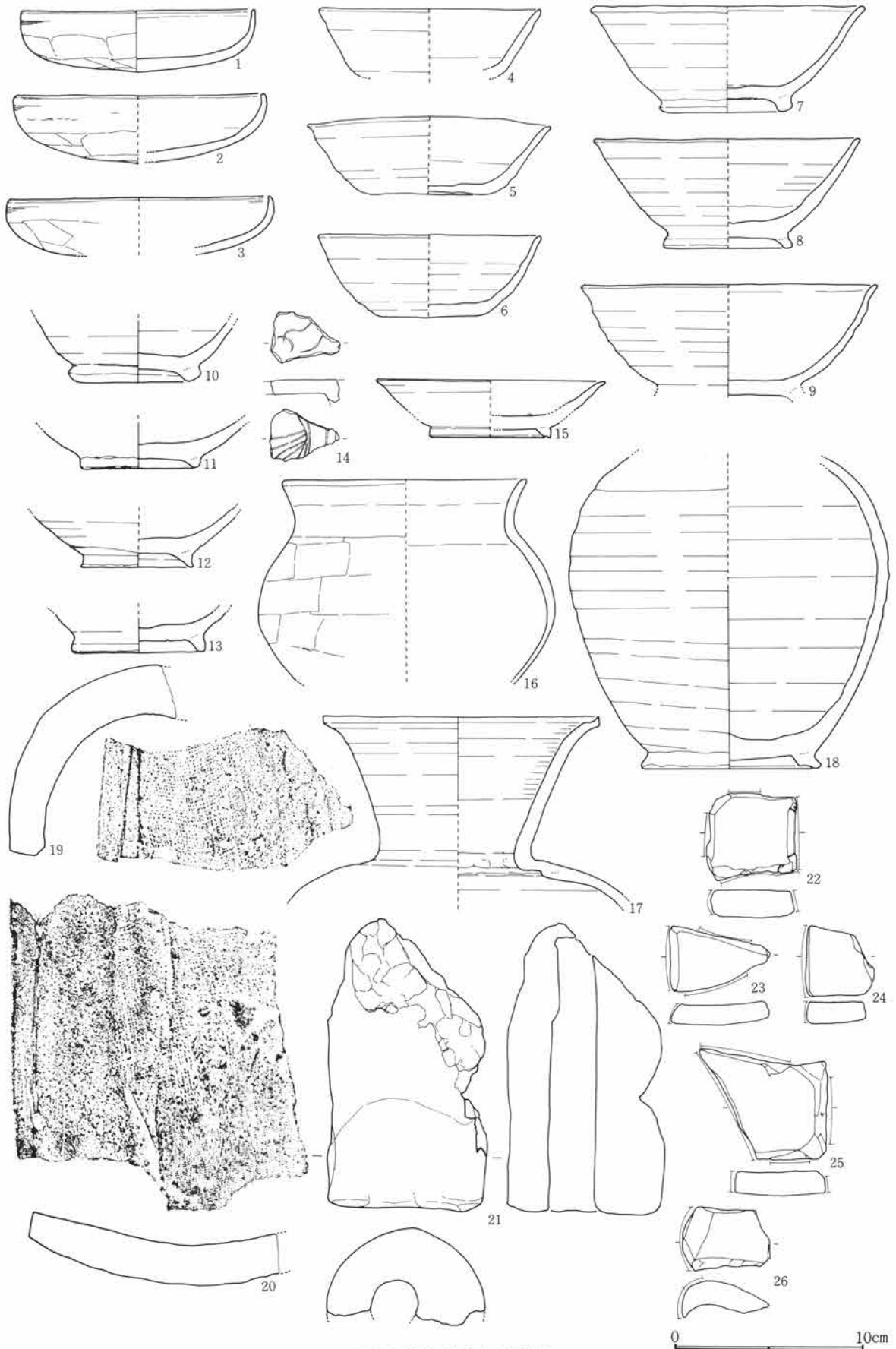


Fig.638 K157号住居跡出土遺物

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

K158号住居跡 (Fig. 639・640・PL. 237)

K区南部に位置し、60～62K 1・2の範囲にある。157号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。西側は調査区域外に延び西壁は検出されていない。平面形は東西に長軸を持つ方形を呈すると考えられる。南北長2.7mを測り、東西は東壁から3.7mまで確認された。東西軸方位はN-87°-Eを示す。壁高は157号住居によって削平を受けているため約12cm浅い。床面は平坦をなし、踏み締まりは良好である。東壁南側を除き壁下には幅約8cm・深さ4～5cmの溝が巡る。なお、南壁の一部は壁下の溝が途切れる。竈や炉跡などの施設は認められなかったが、東壁の溝が途切れる南側に凝灰岩の加工材が検出され、この部分に竈が付設された可能性がある。出土遺物は少なく散在して検出されている。



Fig. 639 K158号住居跡

K158号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を多く混える。
- 2 黒褐色土 やや粘性あり。

分に竈が付設された可能性がある。出土遺物は少なく散在して検出されている。

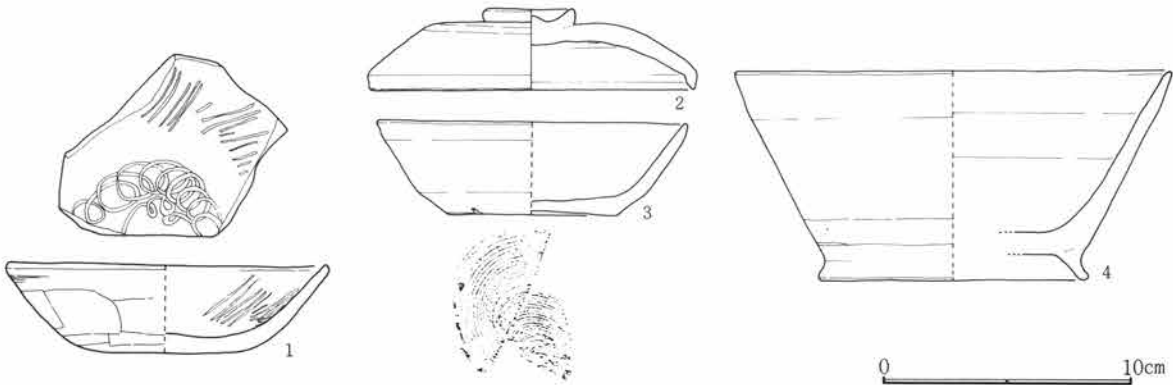


Fig. 640 K158号住居跡出土遺物

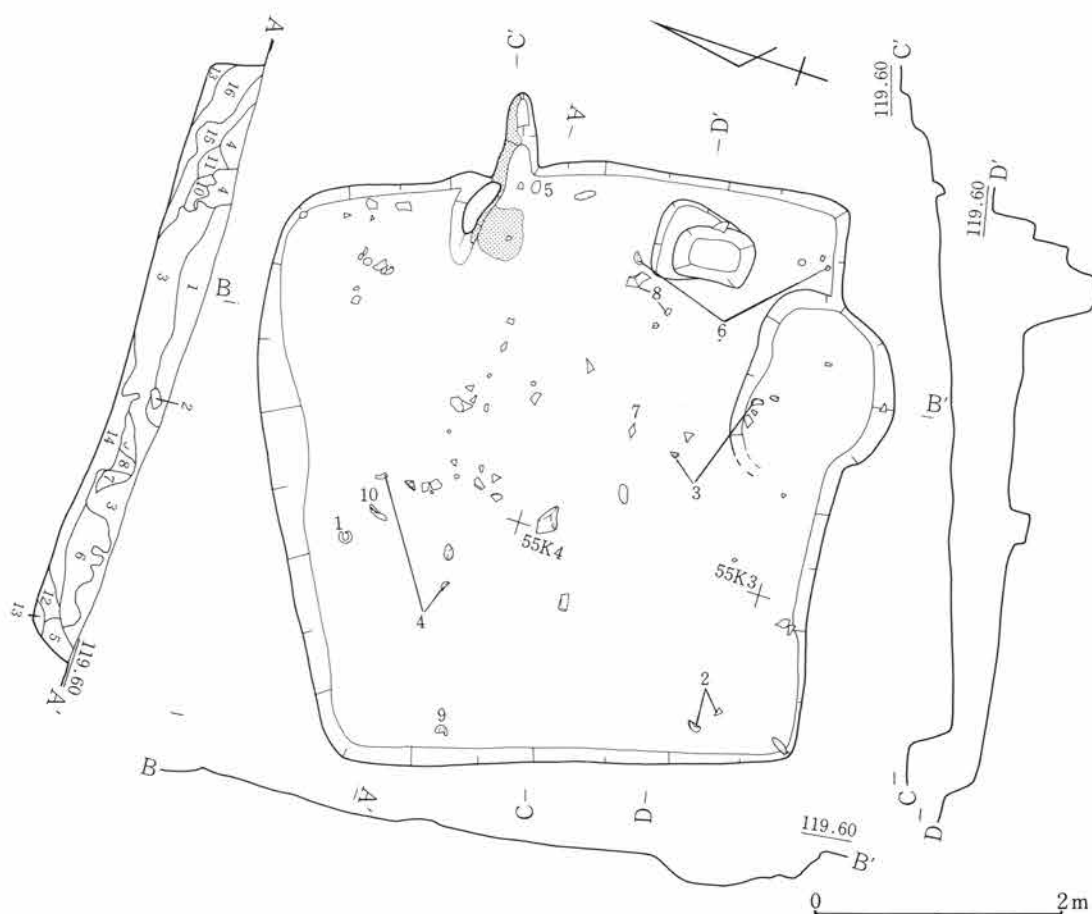
K158号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
640-1 237-1	土師器 杯	1/2	13×8×4	埋土	丸味のある底部から体部は直線的に開く。口唇部細り僅かに内湾気味。口縁部横撫で、体・底部寛削り。内面体部放射状暗文。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
640-2 237-2	須恵器 蓋	完	13.1×-×3.2 摘径3.7	北東部床 面	天井部平坦をなし、体部は丸味をもつ。口縁部は直下に屈し、端部尖る。環状摘、端部断面細三角、中心部凸状に出る。天井部回転寛削り。	①良好 ②灰 ③やや密 黒色粒混る
640-3 237-3	須恵器 杯	1/2	12.5×6.8×3.7	南東部床 面	腰部僅かにくびれ、体部は直線的に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
640-4 237-4	須恵器 碗	1/2	17.4×10.8×9.8	北西部床 面	体部深く直線的に外傾する。付高台、ハの字状に開き端部丸まる。轆轤成形。腰部回転寛削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 黒色粒混る

K160A号住居跡 (Fig. 641・642・PL. 237・238)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.78 × 4.64	N- 72° -E	東壁やや北寄り	—————

K区南部に位置し、53～55K 2～5の範囲にある。156号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。平面形は南壁線に歪みがあり、不整な方形を呈する。壁高は約48cmを測る。床面は緩い高低があり踏み締まりは弱い。竈穴住居の規模や、出土遺物からみた時代的な観点からすると柱穴の存在が予想されたが、検出されていない。竈は東壁の北側に付設され、袖部は住居内に大きく張り出す形態であり、燃烧部は住居内にある。右袖部は確認が遅れ消失してしまった。壁外には燃烧部から段をなし緩い傾斜をもって延びる長い煙道部が作られる。左袖部長45cm、推定袖部内法約60cm、燃烧部奥行き65cm、煙道部長さ約60cmを測る。出土遺物は埋土中が多く土師器杯類などが検出されている。



K160A号住居跡

- 1 灰層 C軽石・暗褐色土を混える。
- 2 FA塊
- 3 暗褐色土 炭・C軽石混り砂質土。
- 4 暗褐色土 炭・C軽石混り砂質土。
- 5 暗褐色土 しまりのない砂質土。

- 6 暗褐色土 大粒のC軽石含む砂質土。
- 7 暗褐色土 堅くしまった砂質土。
- 7' 暗褐色土
- 9 暗褐色土 C軽石含む。
- 10 暗褐色土 堅くしまった砂質土。
- 11 暗褐色土 焼土塊含む砂質土。

- 12 暗褐色土 C軽石含む砂質土。
- 13 暗褐色土 FA塊含む。
- 14 暗褐色土 FA塊含む砂質土。
- 15 暗褐色土 焼土粒含む砂質土。
- 16 褐色土 しまりがある。

Fig.641 K160A号住居跡

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

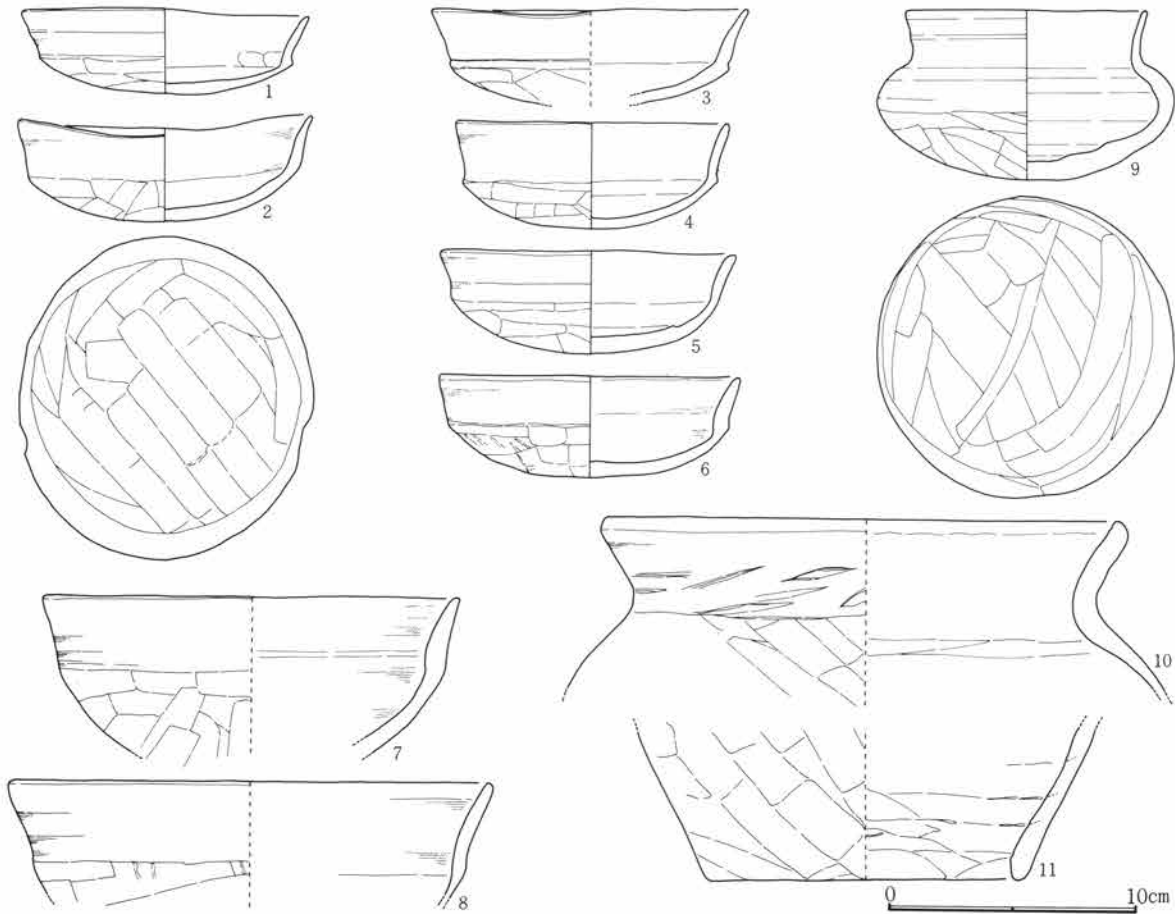


Fig.642 K160 A号住居跡出土遺物

K 160 A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
642-1 237-1	土 師 器 杯	完	11.5×—×3.3 口径高2	北中央部埋 土	底部浅く丸底。受け部断面三角の段をなし、口縁部は外反する。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部寛削り。	①良好 ②橙 ③密
642-2 237-2	土 師 器 杯	完	11.9×—×3.9 口径高2.3	南西部埋 土	底部脹らみのある丸底。受け部丸まり、口縁部直立気味で上半は外傾する。口唇部は細る。口縁部・内面横撫で。底部寛削り。	①良好 ②橙 ③密
642-3 237-3	土 師 器 杯	1/4	12.8×—×(3.8) 口径高2	南中央部埋 土	底部丸味をもつ。受け部丸く段をなし、口縁部外反気味に開く。口縁部・内面横撫で。底部寛削り。	①良好 ②黄橙 ③密
642-4 237-4	土 師 器 杯	1/4	11×—×4.2 口径高2.5	北中央部埋 土	底部深く、丸く張る。受け部僅かに出る。口縁部外傾緩く外反して立つ。口縁部・内面横撫で。底部寛削り。	①良好 ②黄橙 ③密
642-5 237-5	土 師 器 杯	完	12×—×4.2 口径高2	竈内埋土	底部丸く張り、やや深い。受け部稜なく緩く口縁部に至る。口縁部ゆるく外反して開く。口縁部・内面横撫で。底部寛削り。	①良好 ②橙 ③やや密 細砂混る
642-6 237-6	土 師 器 杯	1/4	12.2×—×4 口径高2	貯蔵穴際埋 土	底部丸く、やや深い。受け部で屈し口縁部は肥厚し、外反気味に立つ。口縁部・内面横撫で。底部寛削り。	①良好 ②黄橙 ③密
642-7 238-7	土 師 器 鉢	1/4 底部欠損	16.8×—×(6.2) 口径高3	中央部埋 土	体部丸く張る。口縁部肥厚し外反気味に立つ。口縁部・内面横撫で。体部横・斜寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
642-8 238-8	土 師 器 鉢	1/4 口径部	19.5×—×(4.5) 口径高3		口縁部外反気味に立ち上半はやや内湾する。口縁部・内面横撫で。体部寛削り。	①良好 ②橙 ③密
642-9 238-9	須 恵 器 短頸壺	完	9.6×—×6.7 最大径胴部11.8	北西部床 面	口縁部外反気味に立つ。胴部上位に最大径をもち強く張り扁平。丸底。底部から胴部下半手持寛削り。	①良好 ②灰白 ③密
642-10 238-10	土 師 器 甕	1/4 口径部	21.2×—×(7)	北西部埋 土	肩部丸く張る。口縁部肥厚しくの字状に外傾。口唇部丸く僅かに内湾。肩部斜寛削り。内面肩部寛削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗 小石混る
642-11 238-11	土 師 器 甕	1/4 底部	—×12.5×(6)	埋 土	単孔。胴部直線的に外傾する。胴部斜寛削り。内面は強い横撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗 小石混る

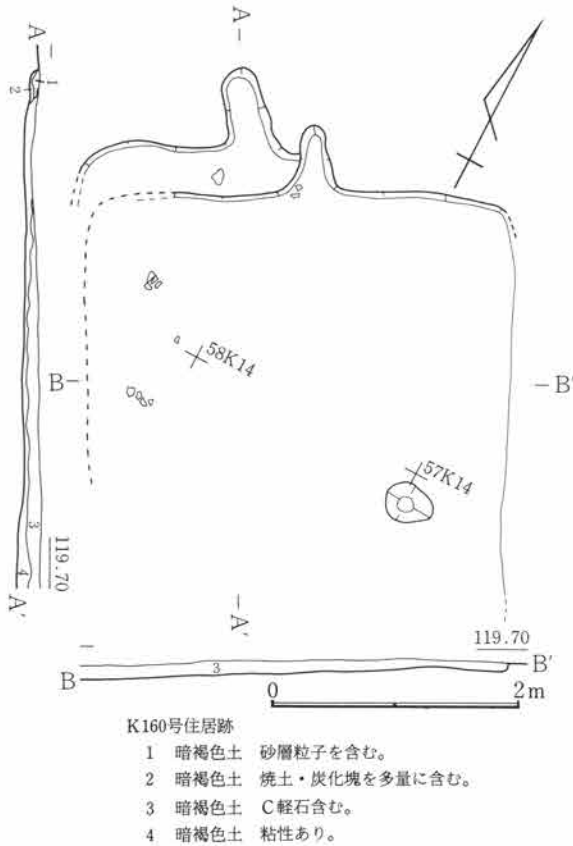


Fig.643 K160B・162号住居跡

K 160B号・162号住居跡 (Fig. 643・PL. 238)

K区中央部に位置し、56～58K13～15の範囲にある。160B号・162号住居跡は重複関係にあり、160号が新しい時期の所産と考えられる。両者とも掘形が浅く、確認は竈周辺に止どまり全体を検出することは出来なかった。また、132号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期と考えられる。東壁線が確認できず重複範囲は不明瞭であるが平面形は方形を呈すると考えられ東西約3.5mを測る。160B号・162号住居跡とも、壁高は浅く痕跡程度である。床面は平坦をなすが、踏み締まりは極めて弱い。竈は北壁に付設されるが、遺存状態は不良で燃烧部などの範囲は特定できなかった。煙道部は壁外に50～60cm突出している。北壁線を基軸にする南北方位はN-29°-Wをしめす。162号住居の煙道部はやや西へ屈曲する。出土遺物は皆無に近く時代判定の根拠はないが、住居跡埋土は粘性のある暗褐色土を主体にしており、古墳時代に属する可能性がある。

K 161号住居跡 (Fig. 644・645・PL. 238・239)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.88 × 3.56	N-78°-E	東壁やや南寄り	—————

K区中央部に位置し、53～55K16～18の範囲にある。当跡は竈・炉跡などの日常生活施設の検出がなく、竪穴住居としての条件を備えていないことから竪穴状遺構とする方が妥当と考えられる。南東部で134号住居跡と重複しており、切り合い関係ではこれよりも古い時期の所産である。平面形は東西方向に長軸を持つ整った方形を呈し、東西3.56m・南北3.88mを測る。東西軸方位はN-78°-Eを示す。壁高は約30cmを測り直角に近く立ち上がる。床面は西半部が段をなし約10cm程度低くなっている。踏み締まりは総じて弱い。東壁に方形土坑が検出されているが当跡に伴うものでない。出土遺物は転用砥石・蛇紋岩製の巡方と考えられる小片が検出されている。

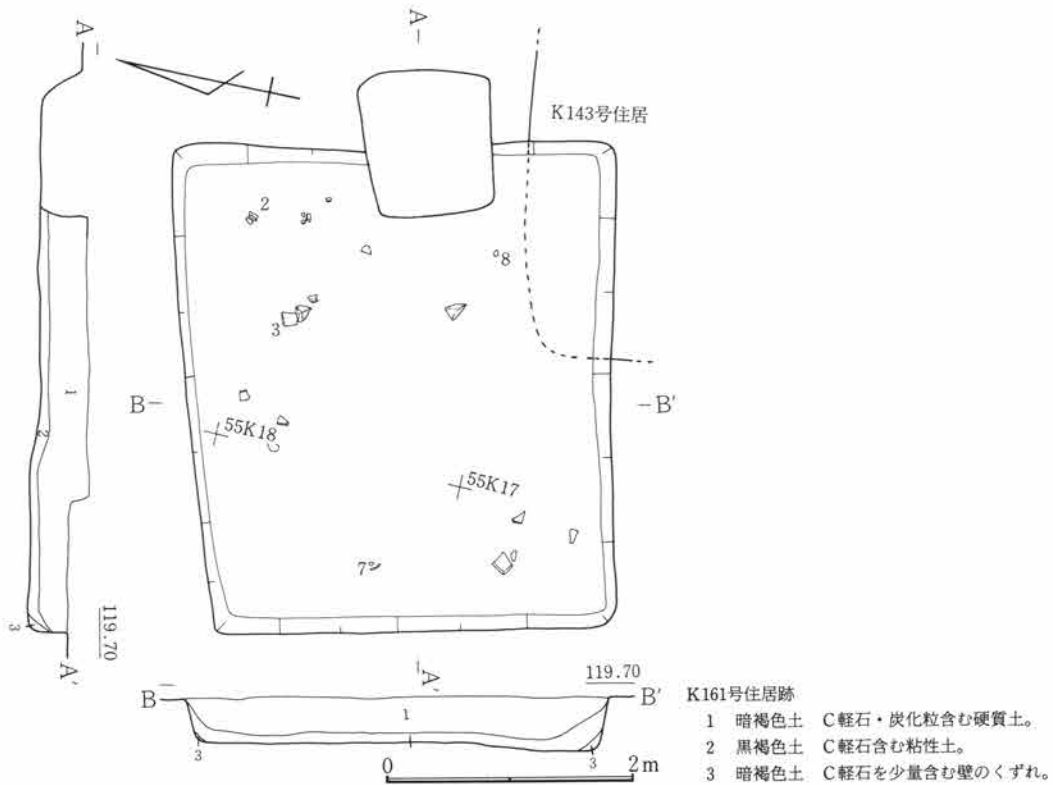


Fig.644 K161号住居跡

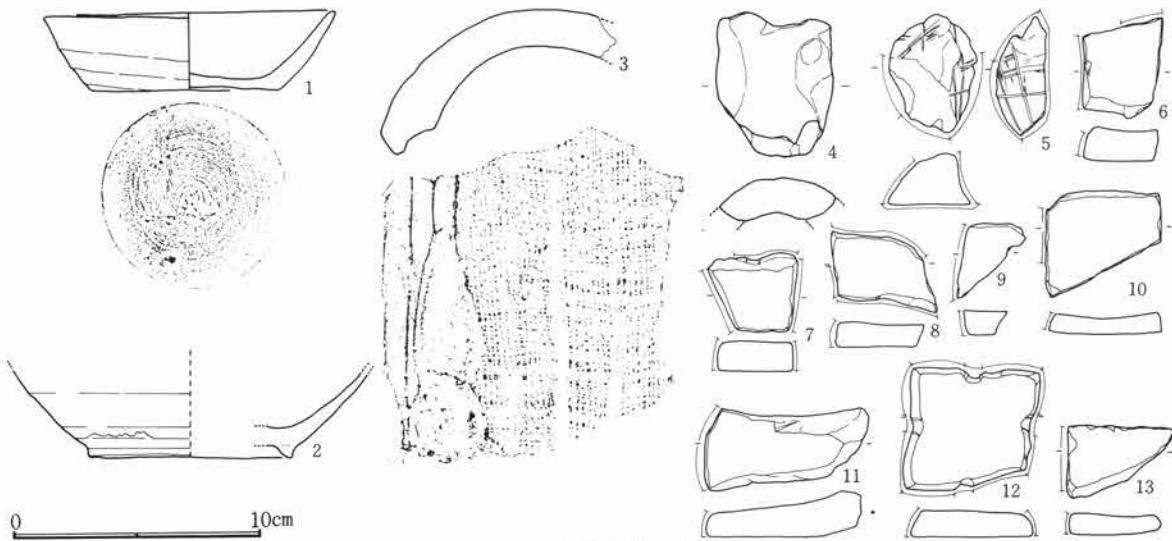


Fig.645 K161号住居跡出土遺物

K161号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
645-1 239-1	須 惠 器 杯	体部× 欠損	11.7×7.5×3.2	東部住居 外	体部直線的に外傾。轆轤成形。回転糸切り後、周縁及び体部中位まで回転篋削り。	①良好	②灰白 ③やや粗
645-2	須 惠 器 椀	底部×	—×8.2×(3.5)	北東部埋 土	体部に丸味。付高台、低く断面略三角。轆轤成形。回転糸切り。	①良好	②灰白 ③やや粗
645-3 239-3	瓦 丸 瓦		厚1.5	北央部埋 土	凹面布目。側縁篋削り。	①良好	②灰白 ③やや密

第3章 K区の遺構と遺物

K 161号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 胎土 ②色調 その他
645-4 239-4	土製品 籬羽口	小片	長(5.7)	埋土	基部に指頭痕顕著。	
645-5 239-5	石製品 砥石		4.7×3.5×2 21.2g	埋土	多面使用。刃痕顕著。	流紋岩(砥沢?)
645-6 239-6	須恵器 転用砥石		4.1×3.1×1.3 23.0g	埋土	2側面使用。礫片。	①良好 ②暗青灰 ③やや密
645-7 239-7	須恵器 転用砥石		3.6×3.1×1.2 18.7g	西央部埋土	3側面使用。礫片。	①良好 ②灰 ③やや密
645-8 239-8	須恵器 転用砥石		4.3×3.3×1 16.5g	南東部埋土	3側面使用。礫片。	①良好 ②暗青灰 ③やや密
645-9 239-9	須恵器 転用砥石		3×2.4×1 6.7g	埋土	1側面使用。礫片	①良好 ②灰 ③やや密
645-10 239-10	須恵器 転用砥石		4.6×4.2×0.8 20.2g	埋土	1側面使用。礫片。	①良好 ②灰 ③やや密
645-11 239-11	須恵器 転用砥石		6.6×3.3×1.6 33.1g	埋土	1側面使用。礫片。	①良好 ②白灰 ③やや密
645-12 239-12	須恵器 転用砥石		5.2×4.9×1.1 38.3g	埋土	4側面使用。礫片。	①良好 ②灰白 ③やや密
645-13 239-13	須恵器 転用砥石		4.2×2.9×0.8 11.7g	埋土	1側面使用。礫片。	①良好 ②黄灰 ③やや密



Fig.646 K165号住居跡

K165号住居跡 (Fig. 646・647・PL. 239)

K区南部やや東寄りに位置し、51～53K 5～8の範囲にある。21号・134号・149号・150号・171号住居跡と重複しているが、いずれよりも古い時期の所産である。東側は重複が著しく消失部分が多いため詳細は不明である。平面形は方形を呈すると考えられるが、西壁北半部が突出し、いわゆる張り出し部を有する形態を持つ。南北長は約5.4mを測り、東西は西壁張り出し部より約5.6mの範囲まで検出した。張り出し部は西壁より約3m程度突出し、幅4mを測る。壁高は約36cmを測り、床面は凹凸があり踏み締まりも弱い。竈などの諸施設は認められなかった。出土遺物は散在して検出された。

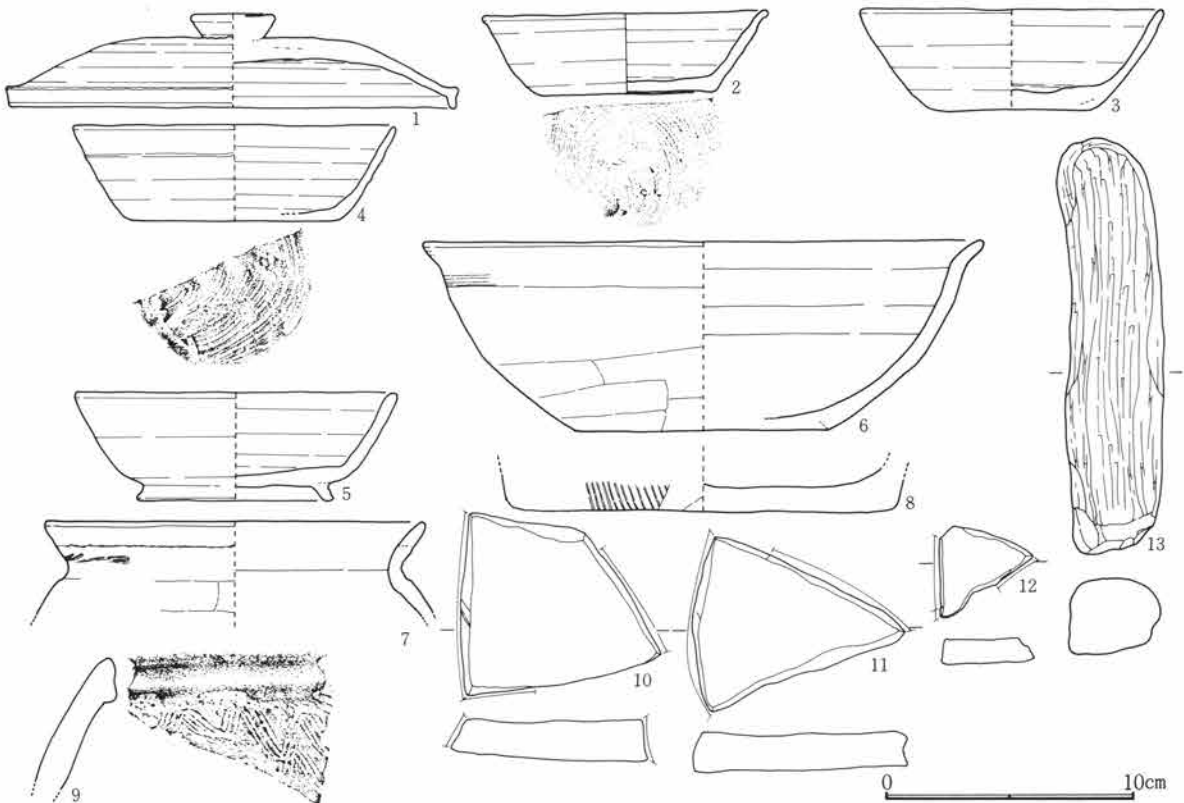


Fig.647 K165号住居跡出土遺物

K165号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
647-1 239-1	須恵器 蓋	1/2	18×-×3.7 摘径3.4	中央部床 面	平坦な天井部から丸味をもって直線的な体部に至る。体部端部は水平に突出し、口縁部は直下に屈する。端部丸い。ボタン状摘。天井部回転篋削り。内面径8cmの重ね焼き痕。	①良好 ②灰 ③やや密
647-2 239-2	須恵器 杯	1/2	11.6×7.1×3.2	南東部床 面	体部直線的に外傾し、口唇部は丸く外屈する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒多く混る
647-3 239-3	須恵器 杯	1/2	12.2×7×4	北西部床 面	体部僅かに丸味をもつ。底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 夾雑物多い
647-4 239-4	須恵器 杯	1/2	13×8.6×3.8	南東部床 面	底径大きく、体部直線的、器肉薄い。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
647-5 239-5	須恵器 椀	1/2	13×8×4.3	南東部床 面	腰部張り、体部浅く直線的に外傾。付高台、ハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗 黒褐色粒混

K 165号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計 測 値 (cm) 口 径 × 底 径 × 器 高	出 土 位 置	器 形 ・ 成 形 及 び 調 整 の 特 徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
647-6 239-6	土師器 鉢	1/8	22.6×10.4×7.5	中央部埋 土	平底。体部丸く張り、口縁部外屈する。口縁部・内面横 撫で。体部下半・底部寛削り。	①良好 ②橙 ③密
647-7 239-7	土師器 甕	口縁部 1/8	15.4×-×(3.5)	北西部床 面	肩部に弱い段をなし、口縁部くの字状に外傾。口縁部 横撫で。肩部横削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密
647-8 239-8	須恵器 甕	底 部	-×15.6×(2)	中央部埋 土	底部板状圧痕。腰部叩き目。見込部撫で。	①良好 ②灰 ③や やや密 白色粒混る
647-9 239-9	須恵器 甕	口縁部 小片		北西部床 面	4組1条の波状文。	①良好 ②灰 ③粗 白色砂多く混る
647-10 239-10	須恵器 転用砥石		8×7.2×1.1 122.4g	西中央部床 面	3側面使用。刃痕あり。甕片。	①良好 ②灰白 ③ やや密
647-11 239-11	須恵器 転用砥石		8.5×7×1.4 81.9g	埋 土	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
647-12 239-12	須恵器 転用砥石		3.6×3.3×0.9 13.2g	北中央部床 面	2側面使用。甕片。	①良好 ②灰 ③や やや粗
647-13 239-13	石		16.3×4×3 350.1g	南中央部床 面	片端部打撃痕あり。	緑泥片岩

K 169号住居跡 (Fig. 648~650・PL. 240)

K区南部に位置し、58・59K0～2の範囲にある。157号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。157号住居跡の竈及び東壁が当跡より掘形が深いために削平が及ばず遺存したものである。平面形は南壁の一部が痕跡が窺える程度であるが、南北にやや長い方形を呈すると考えられ壁高は極めて浅く約5～6cmを測る。床面は緩い起伏があり踏み締めりは軟弱である。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されていない。竈は東壁の南寄りに付設されるが、住居外に突出する部分は煙道部と考えられ、燃焼部にあたる火床は住居内に検出されている。袖部の痕跡は認められず、住居内にみられる大形の川原石は竈構築材の一部と思われる。燃焼部長さ約70cmを測る。出土遺物は少量である。

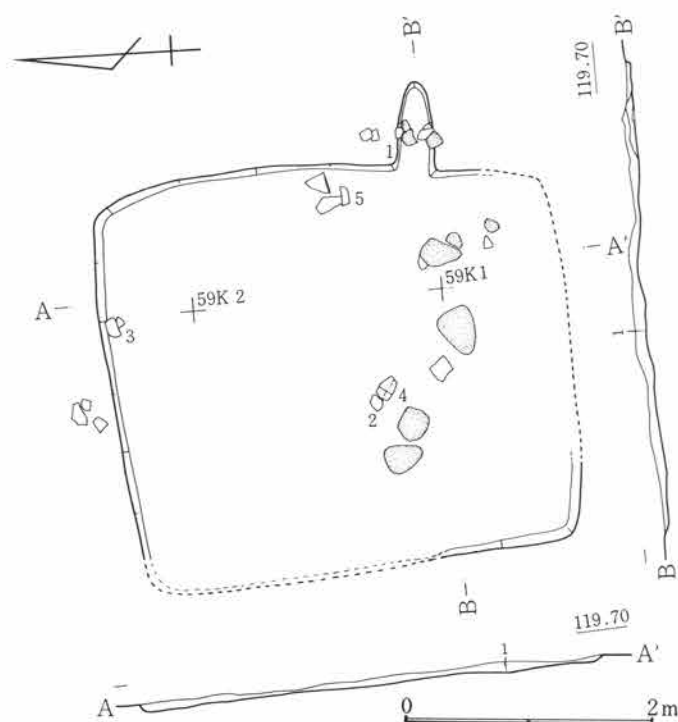
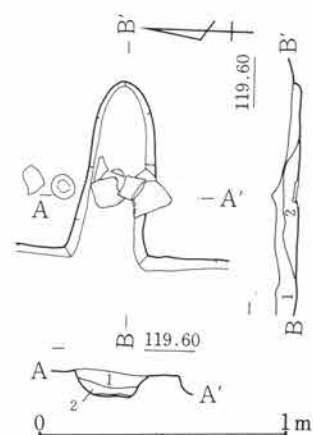


Fig.648 K169号住居跡



K169号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒含む。
- 2 黄褐色土 C軽石含む。

Fig.649 K169号住居跡竈

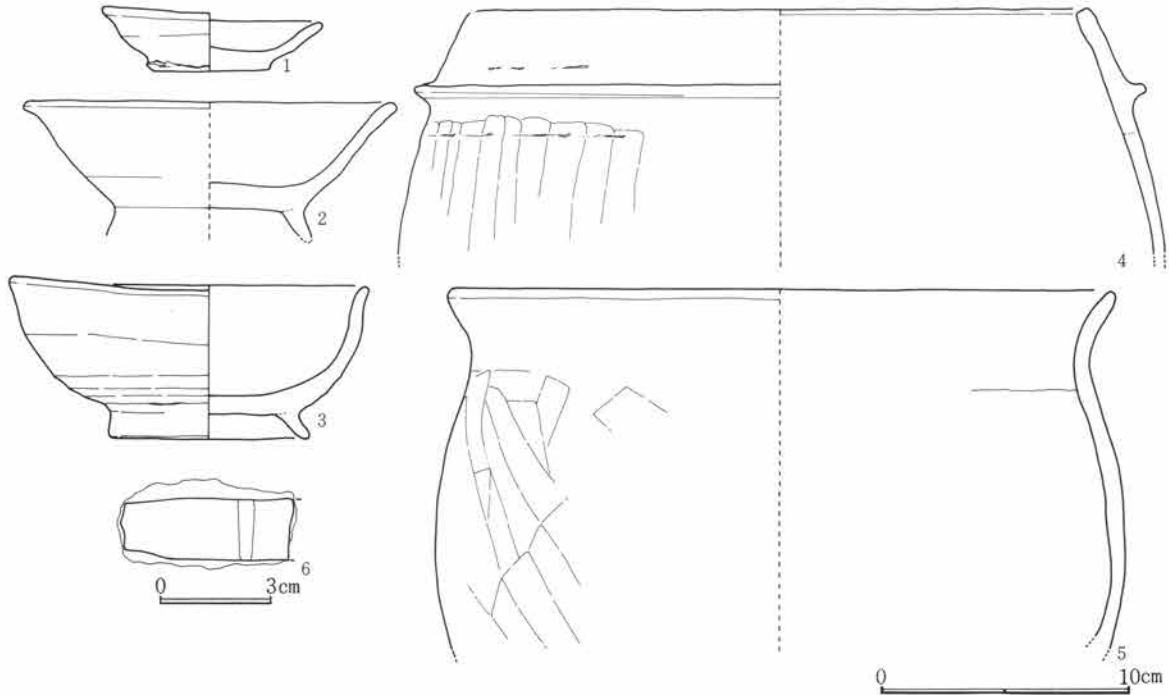


Fig.650 K169号住居跡出土遺物

K 169号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形 状	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
650-1 240-1	土師質 杯	完	8.9×5×2.6	竈煙道部 際	底部厚く高台状を呈す。腰部くびれて体部は外反気味に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗
650-2 240-2	土師質 碗	1/2 高 台欠損	15×-×(5.5)	中央部床 面	腰部僅かに張る。口縁部外屈気味。口唇部丸い。全体に肥厚し、作り丁寧。付高台。轆轤成形。	①良好 ②橙 ③やや粗
650-3 240-3	土師器 碗	1/4	14.4×8.1×6.4	北壁際埋 土	体部丸味強く、口縁部緩く外反する。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。腰部回転篋削り。内面黒色処理。	①良好 ②浅黄橙 ③密
650-4 240-4	羽 蓋	口縁部 小片	34.3×-×(9.7) 口径29.4	中央部床 面	胴部から口縁部丸味をもって内傾する。銜部小さく突出し断面丸い。器肉全体に薄い。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③粗
650-5 240-5	土師器 甕	上半部 1/4	26.8×-×(14.2) 胴部径27.8	東中央埋 土	胴部緩やかに張り、肩部張り少なく、口縁部は緩く外反する。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。最大径胴部。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗
650-6 240-6	鉄製品		4.5×1.6×0.4	埋 土	板状製品。	

K 170号住居跡 (Fig. 651~654 ・ PL. 241)

K区南部に位置し、60・61K 3～5の範囲にある。151号・155号住居跡と重複しており、これらより古い時期の所産である。平面形は方形を呈すると考えられるが、南・北の壁線もその一部を確認したにとどまり、このため詳細は不明である。南北長は5.4mを測る。竈を基軸にする東西軸方位はおよそN-90°-Eを示す。壁高は約26cmを測る。床面は起伏があり踏み締まりは弱い。貯蔵穴などの諸施設は認められなかった。竈は東壁の南寄りに付設され、燃烧部は先細りの楕円形に掘り込まれる。火床及び壁面の焼土化の程度は弱く、僅かに焼土粒の分布が見られたのみである。袖部の痕跡は認められなかった。燃烧部幅約75cm・奥行き約85cmを測る。出土遺物は須恵器大甕・瓦などが検出されている。須恵器大甕は底部から胴部にかけて大きく反り返り焼成時の焼き歪みが顕著であり、容器として本来の機能を果たしたとは思われない。

第3章 K区の遺構と遺物

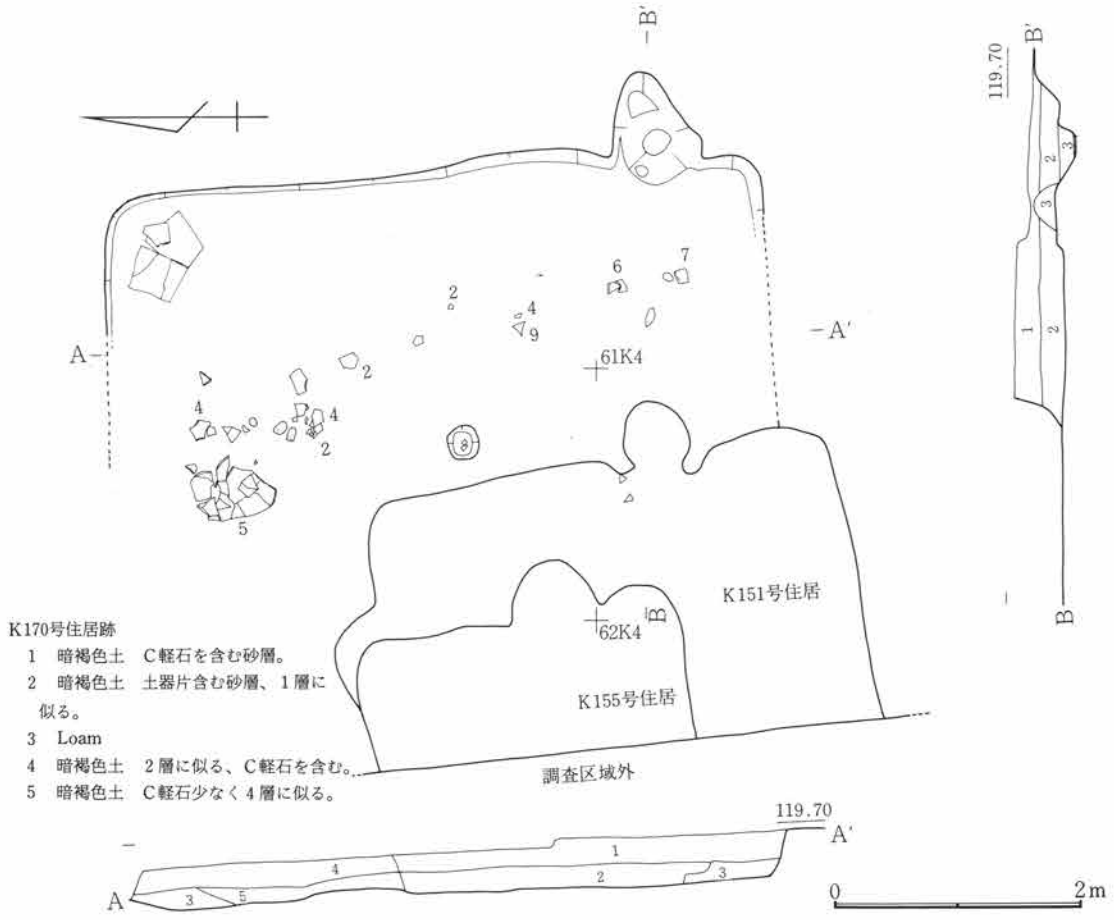


Fig.651 K170号住居跡

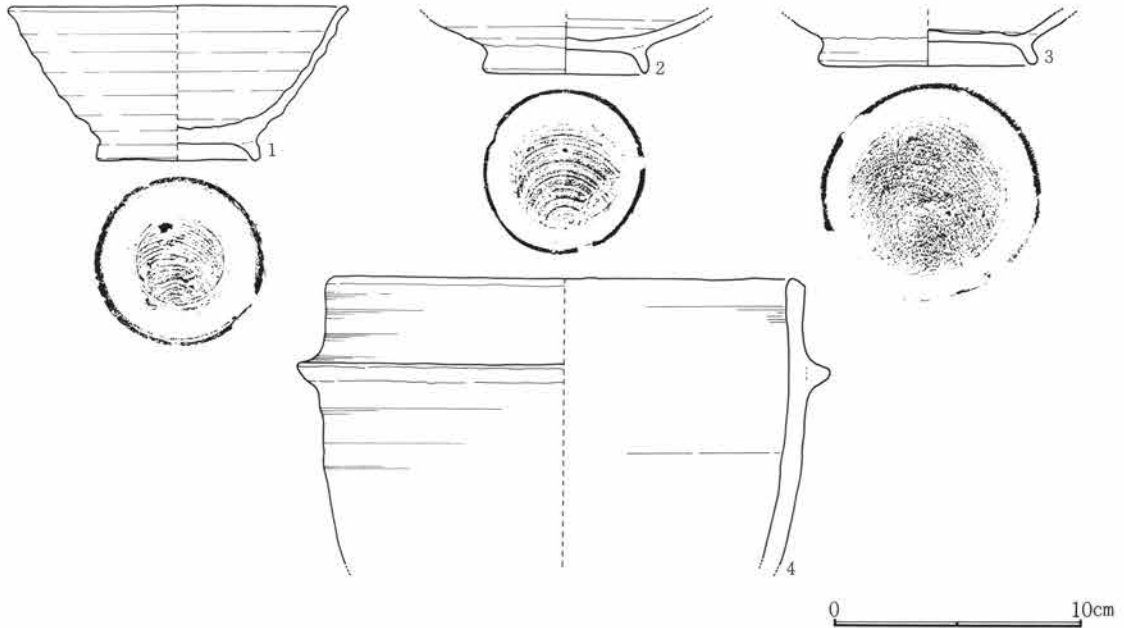


Fig.652 K170号住居跡出土遺物(1)

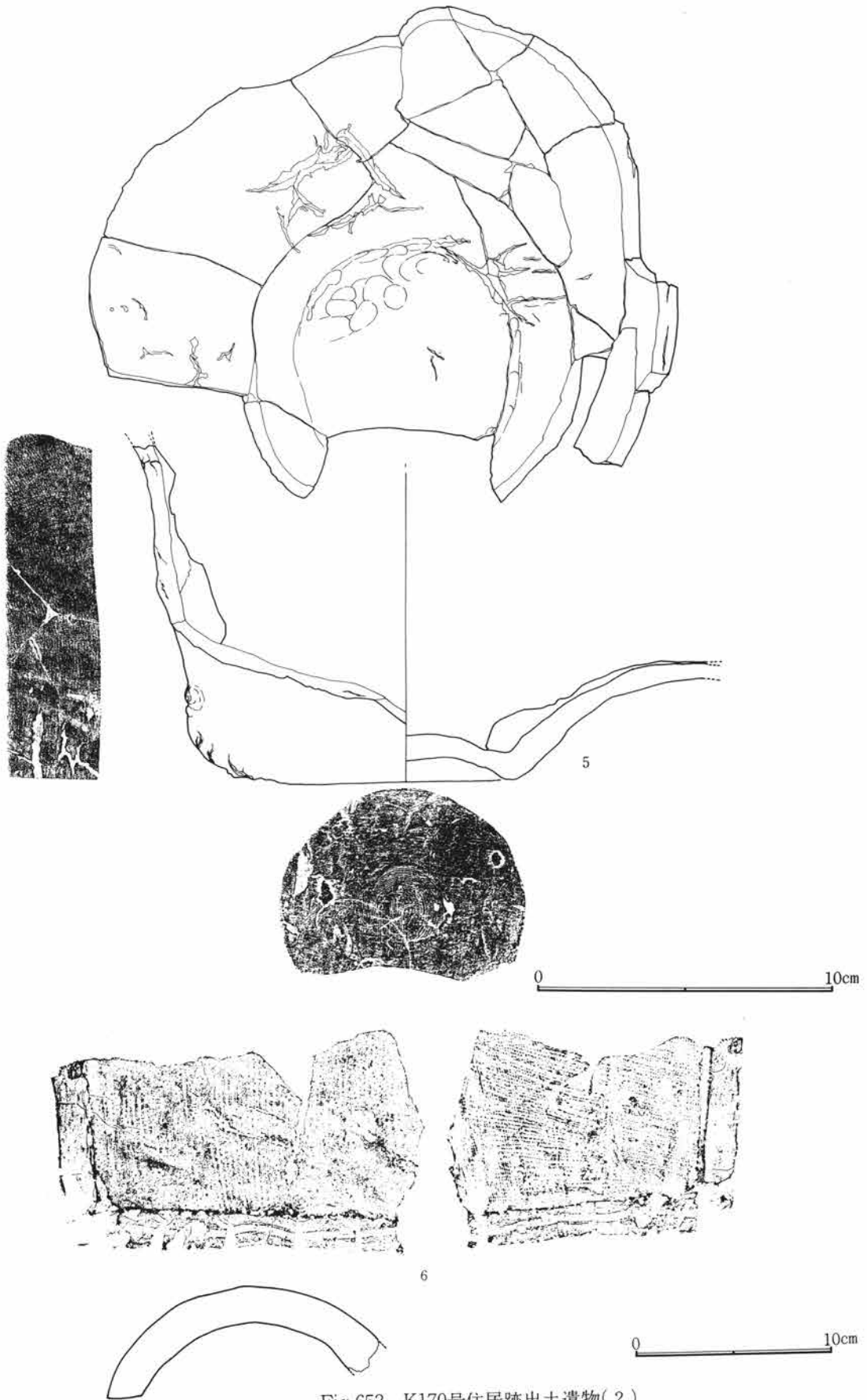


Fig.653 K170号住居跡出土遺物(2)

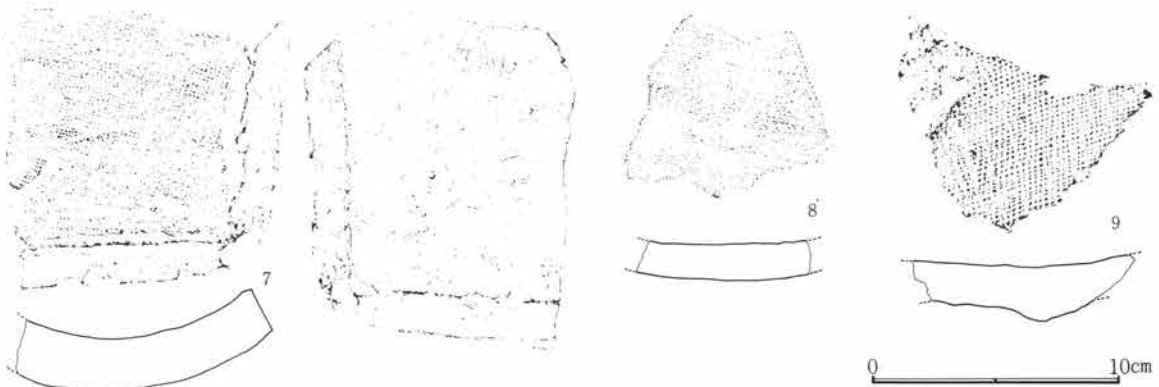


Fig.654 K170号住居跡出土遺物(3)

K170号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
652-1 241-1	須恵器 碗	体部 欠損	13.7×6.6×6.1	埋 土	体部直線的に開き、口縁部緩く外反。付高台、断面矩形を呈し内湾気味に立つ。轆轤成形痕顯著。回転糸切り。	①焼し やや軟 ② 黒灰 ③やや密
652-2 241-2	須恵器 碗	底 部	—×6.6×(2.4)	中央部床 面	付高台。端部細り内湾気味に立つ。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や粗 黒色粒浮く
652-3 241-3	須恵器 碗	底 部	—×8.8×(2)	埋 土	器肉薄い。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
652-4 241-4	羽 釜	上半部 1/2	19×—×(1) 鏝径21.2	中央部埋 土	胴部張り少なく、口縁部直立する。口唇部上端面は外斜する。鏝断面は丸味のある略三角。内外面横撫で。	①焼し 良好 ②黒 灰 ③やや粗 砂混 る
653-5 241-5	須恵器 甕	底 部	—×30×(33)	北東・北 中央部床 面	窯体内での変形が著しく、使用に供したかは疑問。内面撫で、外面平行状叩き目。底部中心に回転糸切り。	①良好 ②黒灰 ③ やや密
653-6 241-6	瓦 丸瓦		厚 1.8	南東部床 面	凹面布目。側縁篋削り。	①酸化 ②褐 ③密
654-7 241-7	瓦 平瓦		厚 2	南東部床 面	凹面布目。側縁篋削り。	①酸化 ②黄褐 ③ 密
654-8 241-8	瓦 平瓦		厚1.5	埋 土	凹面布目。	①良好 ②灰白 ③ 密
654-9 241-9	瓦 平瓦		厚2.1	中央部床 面	凹面布目。	①軟 ②灰 ③密

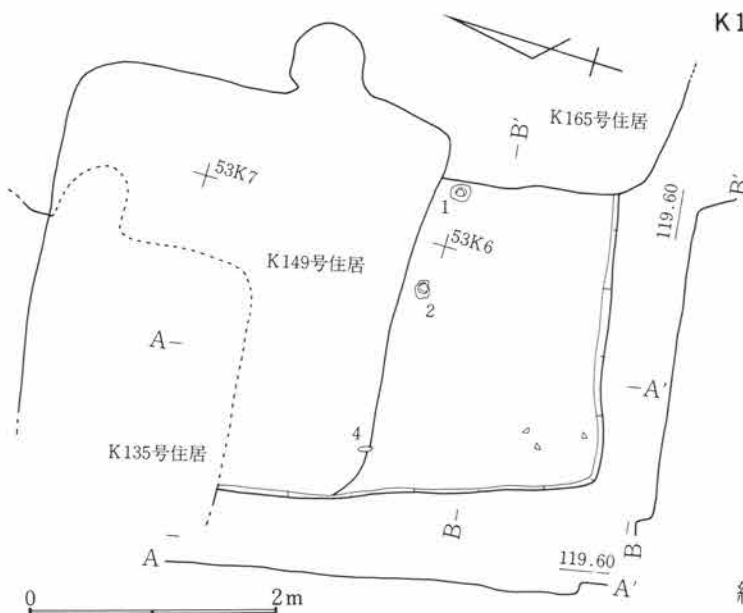


Fig.655 K171号住居跡

K171号住居跡 (Fig. 655・656・PL. 242)

K区南部に位置し、52・53K 5・6の範囲にある。149号・165号住居跡と重複しており、149号より旧く165号より新しい時期の所産であるが、東壁の一部は165号住居跡との重複の確認の遅れから消失している。平面形は方形を呈すると考えられる。南北は南壁から約3m、東西は西壁から2.4mの範囲まで確認できた。東西軸方位はおおよそN-80°-Eを示す。壁高は約10cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。出土遺物は少量である。

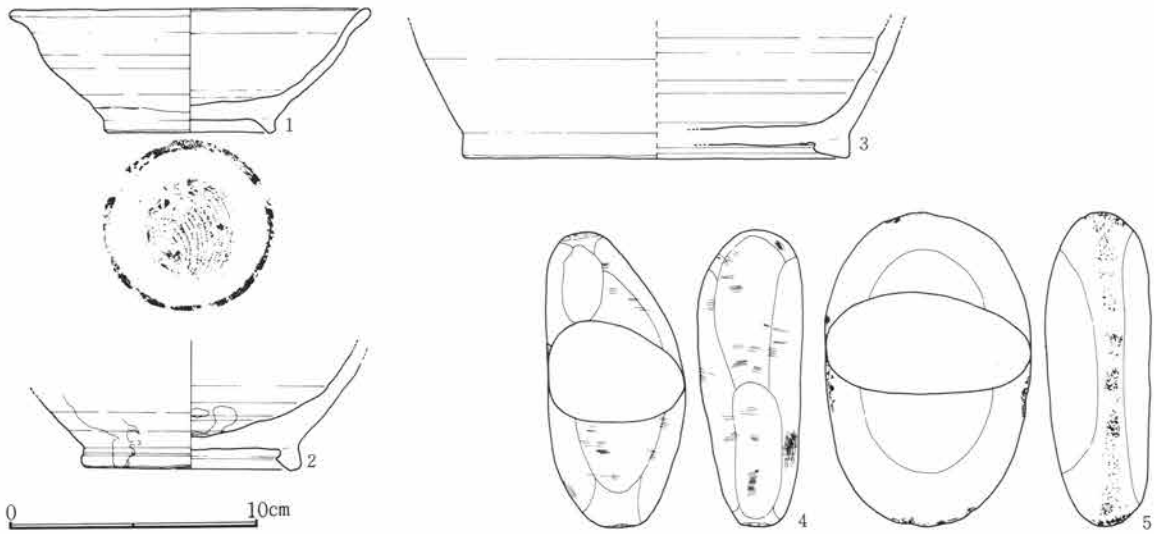


Fig.656 K171号住居跡出土遺物

K 171号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
656-1 242-1	須恵器 碗	体部 欠損	4.5×6.6×4.9	中央部床 面	体部中位でやや脹らみ、口縁は外反気味。口唇部丸く肥厚する。付高台、断面矩形を呈す。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
656-2 242-2	灰釉陶器 壺	底部	—×8.85×—	埋土	腰部に回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
656-3 242-3	灰釉 瓶	底～体	—×15.6×	埋土	高台幅広く、低く畳付け外端部接地。	①良好 ②灰白 ③密
656-4 242-4	石		—×5.6×(5) 40.9g	北中央部床 面	長軸両端に摩滅痕。横方向に刃痕様に傷あり。	輝石安山岩(粗粒)
656-5 242-5	石		12.4×8.2×4.2 68.5g	埋土	側縁に敲打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)

K 172号住居跡 (Fig. 657～660・PL. 242・243)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.72 × 5.60	N— 71° —E	東壁中央	—————

K区南端部で、一部J区にわたって位置し、52～55 J 49～K 2の範囲にある。173号住居跡と重複しており、これよりも古い時期の所産である。平面形は東西南北長とも同規模の方形を呈するが、北壁線の一部が歪む。壁高は約30cmを測る。床面は緩く起伏し、踏み締まりはやや弱い。柱穴はP₁～P₄の4箇所を検出されている。P₁は上径34×32cm・下径16cm・深さ26cm、P₂は上径26cm・下径10cm・深さ28cm、P₃は上面形が方形を呈し30×28cm・下径10cm・深さ30cm、P₄は上径40×32cm・下径14cm・深さ40cmを測る。また、柱間はP₁・P₂は3.1m、P₂・P₃は2.7m、P₃・P₄は3.6m、P₁・P₄は2.5mを測る。竈は東壁の中央部に付設されるが、燃焼部・袖部などは明確にし得なかった。壁外に突出する部分は煙道部と考えられ、床面より直立し緩い傾斜をもって延びる。煙道部長さ1.3mを測る。出土遺物は散在して検出された。

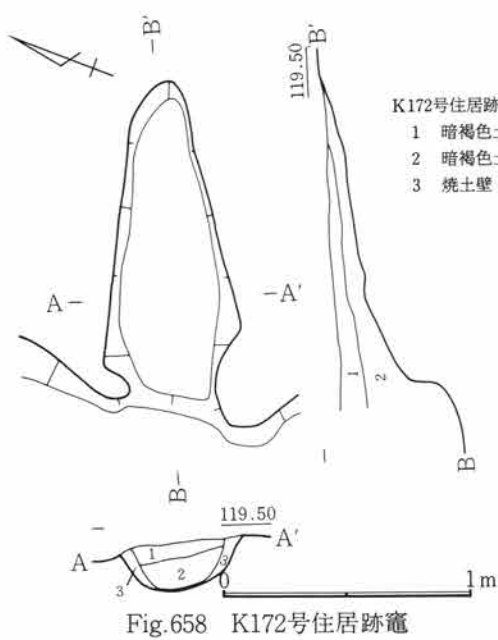
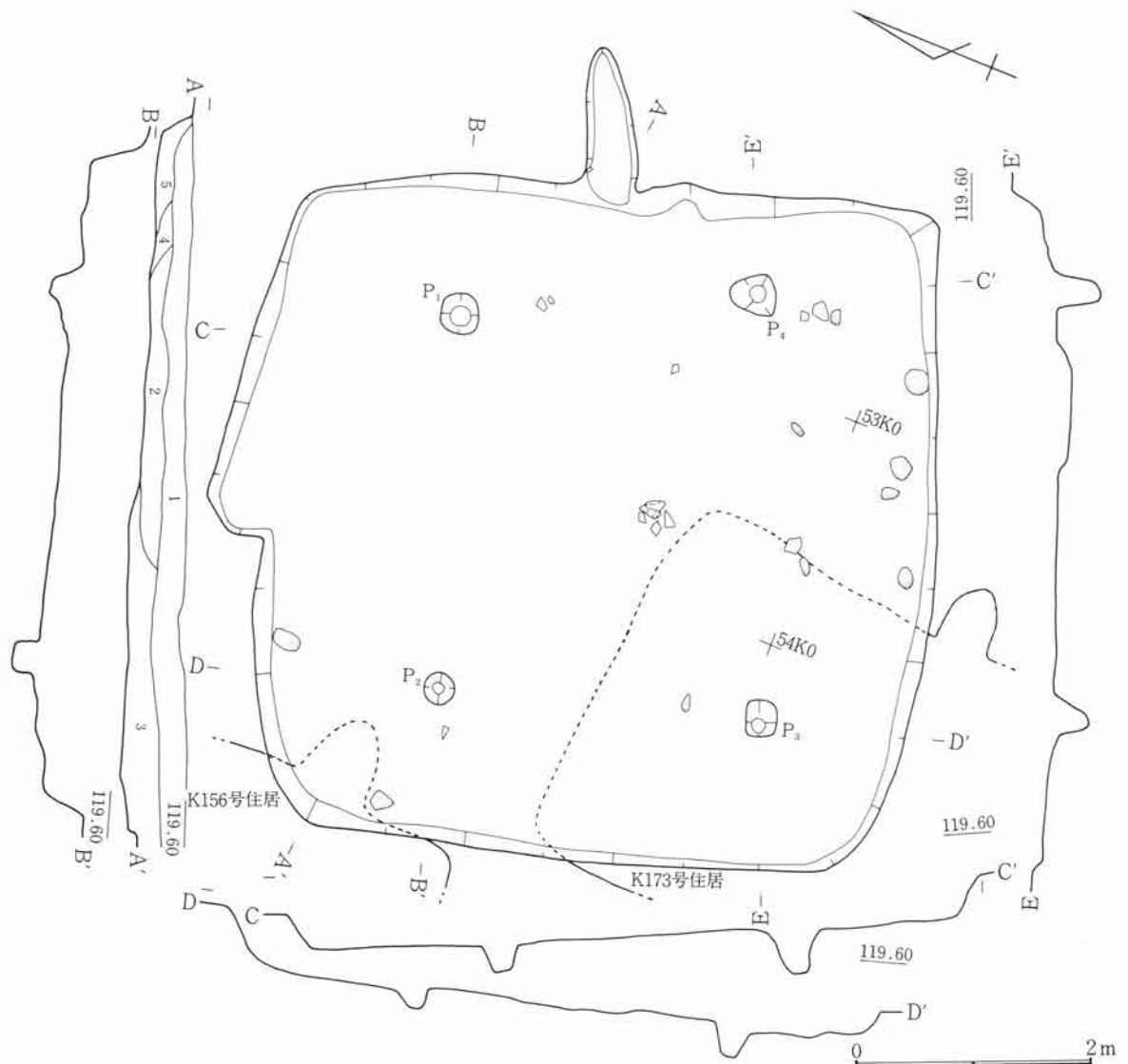


Fig.658 K172号住居跡竈

- K172号住居跡
- | | |
|--|---|
| <p>K172号住居跡竈</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒含む。 2 暗褐色土 焼土含む、弱粘性土。 3 焼土壁 | <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土 黒味をもつ砂層、C軽石を含む。 2 炭化物層 焼土塊土器片含む。 3 暗褐色土 砂層。 4 暗褐色土 焼土・炭化粒多く含む。 5 暗褐色土 4層に似る。 |
|--|---|

Fig.657 K172号住居跡

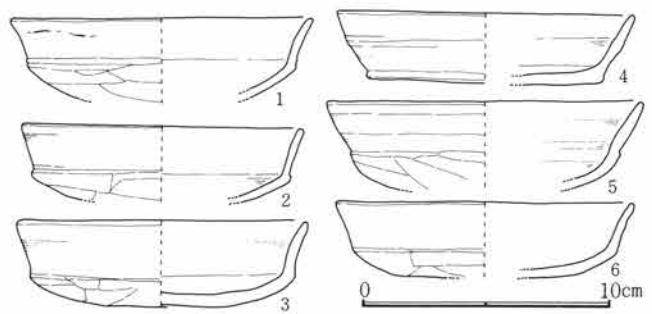


Fig.659 K172号住居跡出土遺物(1)

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

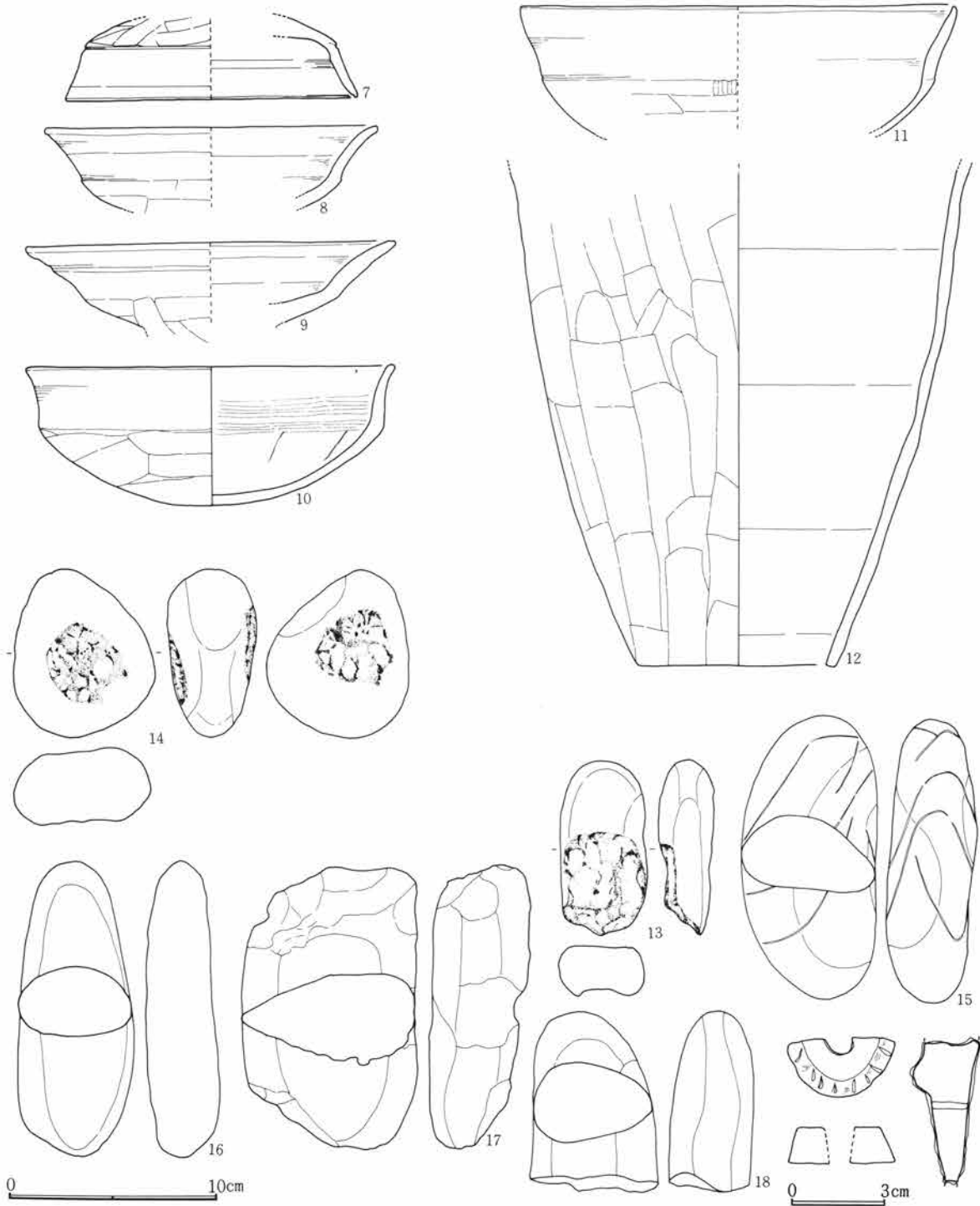


Fig.660 K172号住居跡出土遺物(2)

K172号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
659-1 242-1	土師器 杯	1/3	12.2×-×(3.3) 口径高1.5	埋土	丸底を呈し、受け部緩い2段をなして外反する口縁部に至る。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。器肉は薄い。	①良好 ②橙 ③密
659-2 242-2	土師器 杯	1/4	11.4×-×(3) 口径高1.8	埋土	浅い底部。受け部は丸味をもつ僅かな段をなす。口縁部は直線的に外傾する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。器肉は薄い。	①良好 ②鈍い橙 ③密

第3章 K区の遺構と遺物

K172号住居跡出土遺物観察表

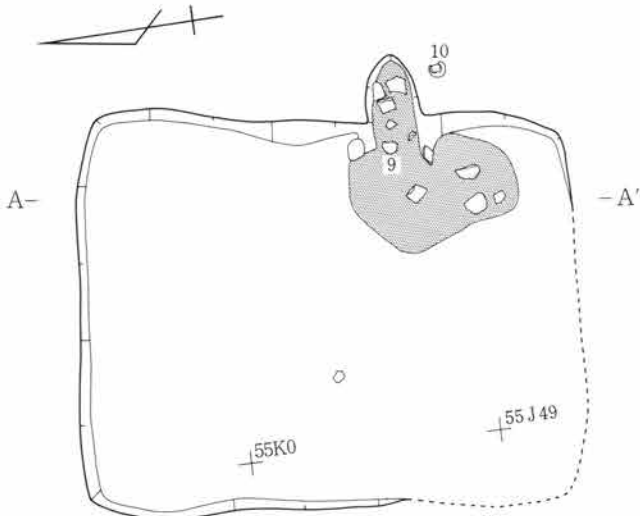
Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
659-3 242-3	土 師 器 杯	1/4	11.7×—×3.5 口縁高2.2	埋 土	平たい底部から僅かに段をなすように屈し外反気味に立ち上がった後、上半は内湾気味。口縁部・内面篋削り。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
659-4 243-4	土 師 器 杯	小 片	12×9.6×2.8 口縁高2.5	埋 土	平底から僅かにくびれ直線的に外傾する口縁部に至る。口縁部中位で僅かに脹らむ。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②にぶい橙 ③やや密 砂混る
659-5 243-5	土 師 器 杯	1/4	12.7×—×3.5 口縁高2	埋 土	腰部が丸く張る丸底気味の底から受け部は僅かに段をなし直線的に外傾する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
659-6 243-6	土 師 器 杯	1/4	12×—×(3) 口縁高2	埋 土	扁平で浅い底部。緩く屈して外反気味の口縁部に至る。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
660-7 243-7	須 恵 器 蓋	1/4	14×—×(3.7) 口縁高2.5	埋 土	天井部丸く脹らみ、口縁部との変換部は篋による凹線を施す。口縁部はやや外反気味に開く。口唇部内面は僅かな段をなす。天井部弱い手持篋削り。口縁部・内面撫で。	①良好 ②灰白 ③ やや密
660-8 243-8	土 師 器 杯	1/4	16×—×(4) 口縁高2.5	埋 土	丸味のある底部から僅かに段をなし、口縁部は大きく外反する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
660-9 243-9	土 師 器 高 杯 ?	小 片	17.7×—×(3.8)	埋 土	腰部直線的に大きく開き、口縁部は外反する。口縁部・内面横撫で、腰部篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③66密 細砂混る
660-10 243-10	土 師 器 鉢	1/2	17.8×—×6.6 口縁高3	埋 土	底部丸く張り、口縁部は直立気味に立ち上がった後外反する。内外口縁部横撫で。内面底部篋削り。外面篋削り。	①良好 鈍い黄橙 ③やや密
660-11	土 師 器 鉢	小 片	21×—×(6) 口縁高3.5	埋 土	底部丸く張り、口縁部は外反した後上半は内湾する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
660-12 243-12	土 師 器 甌	口縁部 欠損	—×9.4×(2.4)	埋 土	単孔、胴部張りなく長胴形を呈す。胴部縦篋削り。	①良好 ②明褐灰 ③やや粗 小石混る
660-13 243-13	石		8.3×4.2×2.7 125.4g	埋 土	片面に打撃痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
660-14 243-14	石		7.9×6.8×4.3 225.5g	埋 土	両平坦面に敲打痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
660-15 243-15	石		13.6×6.5×4.2 509.8g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
660-16 243-16	石		14×5.5×3.2 376.0g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
660-17 243-17	石		13.5×8.2×4.2 683.4g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
660-18 243-18	石	片端欠 損	8.5×6.2×4.0 379.3g	埋 土		輝石安山岩(粗粒)
660-19 243-19	石 製 品 紡 錘 車	1/2	上径2.6 下径3.4 高1.1 孔径0.7~0.9	埋 土	側面に縦方向の条痕と擦痕あり。	滑石
660-20 243-20	鉄 製 品 利 器		4.3×1.7×0.2	埋 土		

K173号住居跡 (Fig. 661~664・PL. 244・245)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	4.11 × 3.20	N— 98° —E	東壁やや南寄り	

K173号住居跡

K区南端部に位置し、南半部はJ区にまたがり、53~55J48~K0の範囲にある。172号・J94号住居跡と重複するが、172号より新しくJ94号より古い時期の所産である。南壁から西壁の一部にかけて消失している。平面形は南北に長軸を持つ方形を呈する。壁高は約30cmを測る。床面にはやや起伏がみられるが踏み締まりは良好である。竈は東壁の南寄りに付設され、燃焼部は幅狭く掘り込まれる。袖部は住居内に張り出し左袖は凝灰岩の加工材を、また右袖は平瓦を用いている。燃焼部内及び竈前には厚く灰層が堆積する。袖部内法約45cm・燃焼部奥行き約88cmを測る。なお、燃焼部と煙道部の区別は不明瞭である。出土遺物は比較的多く瓦の検出も目立つ。



K173号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂層。
- 2 暗褐色土 砂層、1層に似る。
- 3 暗褐色土 粘性土。

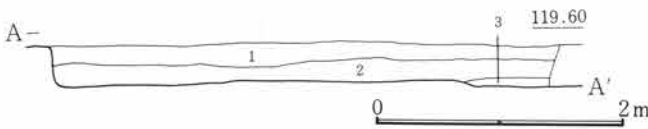
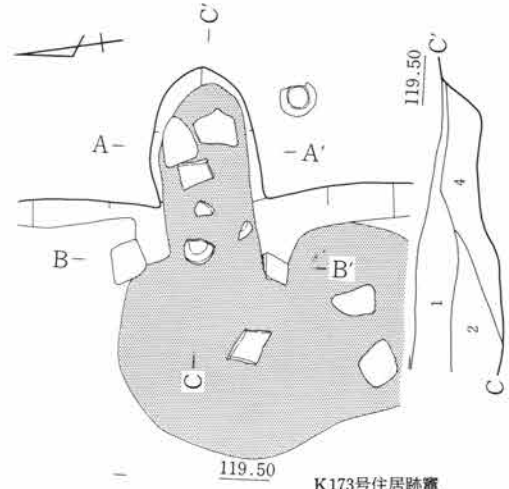


Fig.661 K173号住居跡



K173号住居跡竪

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂層。
- 2 暗褐色土 砂層、1層に似る。
- 4 暗褐色土 焼土・炭化物を多く含む。

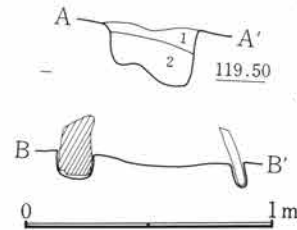


Fig.662 K173号住居跡竪

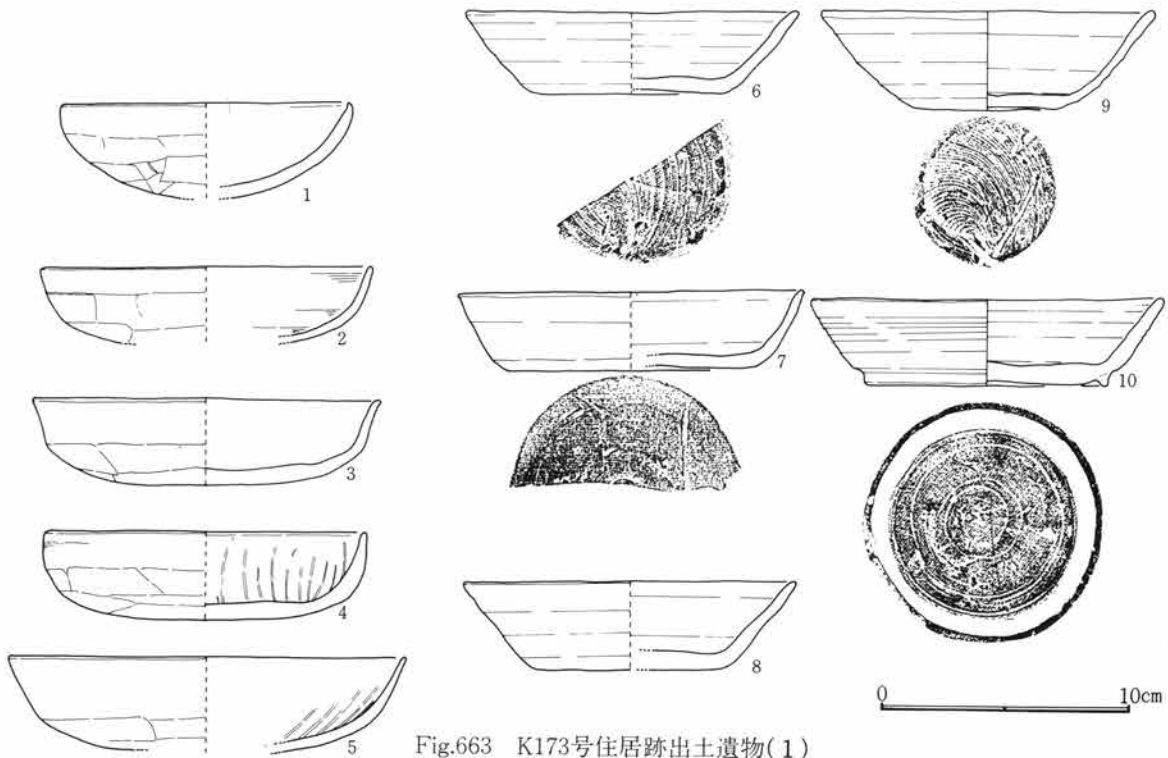


Fig.663 K173号住居跡出土遺物(1)



Fig.664 K173号住居跡出土遺物(2)

K173号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器形	種 種	部 部位	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
663-1 244-1	土師器 杯		部位 残存量	11×-×3.8	埋土	丸く張る底部。口唇部は尖り、僅かに内傾する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ③やや密	②鈍い橙
663-2 244-2	土師器 杯		小片	13.4×-×(3)	埋土	底部浅く、丸い腰部から口縁部は緩く外反する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ③やや密	②橙

K 173号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
663-3	土師器 杯	1/4	14×-×3.4	埋土	扁平な底部から口縁部は緩く外反する。口縁部・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②灰 ③粗 小石 白色粒混る
663-4 244-4	土師器 杯	1/4	13×-×3.5	埋土	平底気味の底部から腰部は丸く、体部は直立する。口唇部細る。内面篋磨き。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
663-5	土師器 杯	1/4	16×-×3.7	埋土	丸底気味の底部から口縁部は緩く外傾して開く。内面放射状篋磨き。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
663-6 244-6	須恵器 杯	1/2	13.4×7.6×3.3	埋土	底部大きく、体部直線的に外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
663-7 244-7	須恵器 杯	1/3	13.8×10×3.2	埋土	底径大きくやや浅い。体部僅かに内湾して開き、口唇部細く丸まり外屈する。轆轤成形。底部・腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や密
663-8 244-8	須恵器 杯	1/4	13.4×7.4×3.5	埋土	体部緩く波うち外傾する。轆轤成形。回転篋削り後回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗 黒色粒混る
663-9 245-9	須恵器 杯	体部1/2 欠損	13.4×5.6×3.9	竈内	底径やや小さく、腰部丸く張りやや外反して開く。口唇部は丸く肥厚する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗 小石混る
663-10 245-10	須恵器 椀		14.1×9.6×3.5	住居外竈 際	体部やや浅く直線的に外傾。口唇部丸い。高台低く断面丸い。底部やや突出する。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や や粗 黒色粒混る
664-11	須恵器 椀	1/2	14.4×7.2×5	埋土	体部丸く張り、口唇部丸まり外屈する。付高台、断面略三角。轆轤成形。体部成形痕顕著。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
664-12 245-12	須恵器 椀	底部1/2	1×8.8×(3.8)	埋土	付高台、肥厚し、内側面段をなす。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や密
664-13	須恵器 鉢	上半部 小片	13.4×-×(4) 肩部径15.7	埋土	肩部強く張り丸味をもつ。上端は窪みをなし、口縁部は短く外反して内傾する。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
664-14 245-14	須恵器 広口短頸壺	口頸部 小片	11.8×-×(5.5) 胴部径17.7	埋土	肩部丸く強く張る。口頸部は直線的で僅かに外傾して立つ。最大径は胴上位にある。	①良好 ②灰 ③や や粗 黒色粒混る
664-15 245-15	土師器 台付甕	上半部 欠損	1×10×(2.4) 台高3 台基径4	埋土	胴部下位窄まり、台部外反気味でハの字状に開く。胴部縦篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密 細砂混る
664-16 245-16	瓦		厚2.1	埋土	凹面布目。横骨痕あり。	①良好 ②褐灰 ③ 粗
664-17 245-17	瓦		厚2.8	埋土	凹面布目。側面篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ 粗
664-18 245-18	瓦		厚3	埋土	凹面布目。凸面に布目痕あり。	①良好 ②黒褐 ③ 粗
664-19 245-19	瓦		厚1.8	埋土	凹面布目。側面篋削り。	①やや軟 ②褐灰 ③粗
664-20 245-20	須恵器 転用砥石		3.9×3.2×1.1 15.9g	埋土	2側面使用。壘片。	①良好 ②灰 ③や や密
664-21 245-21	須恵器 転用砥石		3.6×3.4×1.1 19.0g	埋土	3側面使用。壘片。	①良好 ②黄灰 ③ やや粗
664-22 245-22	須恵器 転用砥石		3×2.7×0.5 4.8g	埋土	2側面使用。杯片。	①良好 ②灰 ③や や密
664-23 245-23	鉄製品 利器?		7×1.5×0.2	埋土		

K 174号住居跡 (Fig. 665~667・PL. 246)

K区南東部に位置し、南半はJ区にまたがる。48~50 J 49~K 1の範囲にある。20号住居跡と重複しておりこれよりも古い時期の所産である。東半部はこのため消失している。平面形は方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。東西は西壁から2.8m、南北は北壁から4.4mの範囲まで検出された。東西軸方位はおよそN-60°-Eを示す。壁高は約30cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締めりは弱い。柱穴・竈などの諸施設は検出されていない。出土遺物は土師器杯類が多く検出されている。

第2節 K区の竪穴住居跡と遺物

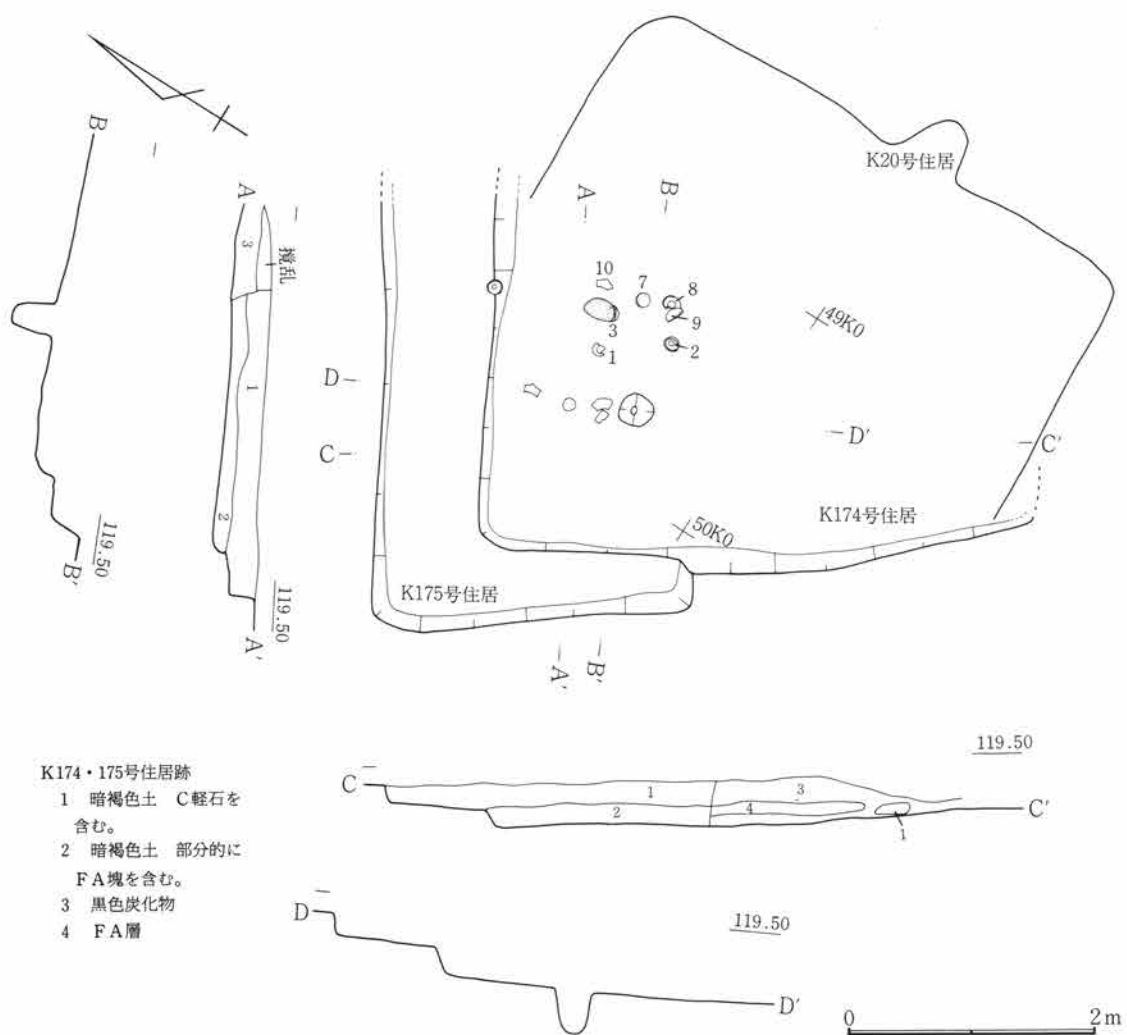


Fig.665 K174・175号住居跡

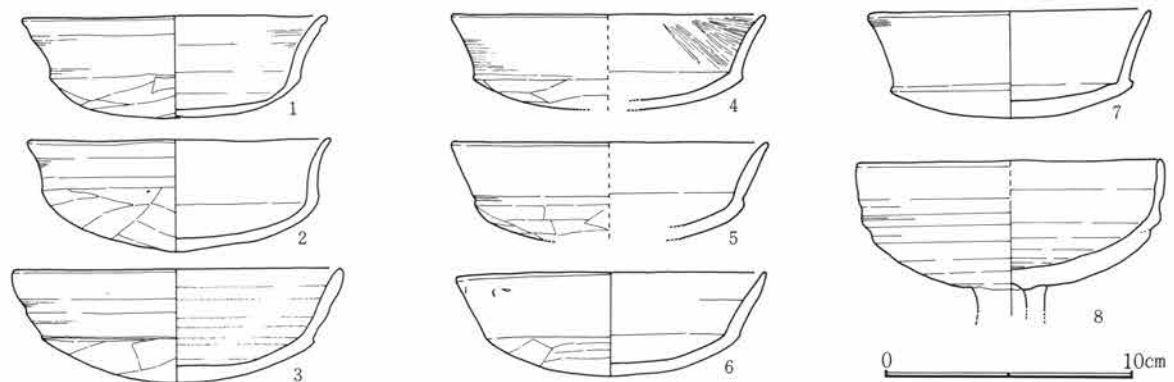


Fig.666 K174号住居跡出土遺物(1)

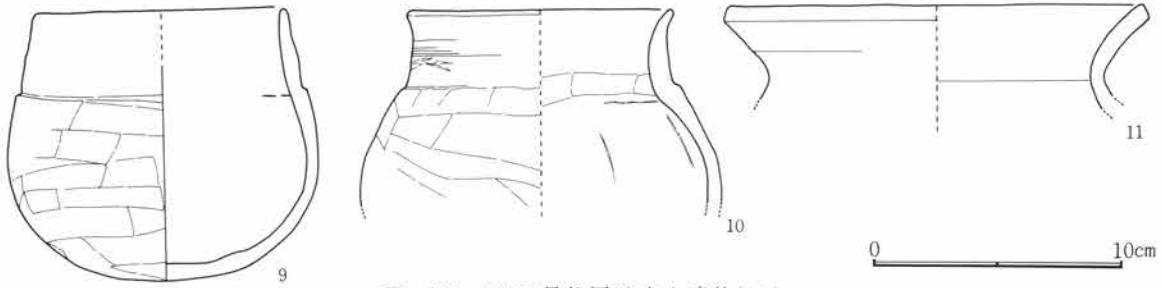


Fig.667 K174号住居跡出土遺物(2)

K 174号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
666-1 246-1	土 師 器 杯	1/2	12.3×-×4 口縁高2.5	北 壁 際	底部丸い。受け部で緩く屈し、口縁部は外反して開く。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
666-2 246-2	土 師 器 杯	完	12.3×-×4.5 口縁高2	北中央部床 面	底部丸く深い。受け部で緩く屈し、口縁部は外反して開く。口唇部細る。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
666-3 246-3	土 師 器 杯	完	13.3×-×4.5 口縁高2.7	北中央部床 面	底部丸く浅い。受け部に僅かな段をなす。やや肥厚する口縁部は内湾気味に開き中位に段をもつ。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗 細砂多い
666-4 246-4	土 師 器 杯	1/2	12.7×-×(3.8) 口縁高2.2	北西部床 面	底部浅く丸味をもつ。受け部で強く屈し、口縁部は外反して開く。内面口縁部斜行篋磨き。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
666-5 246-5	土 師 器 杯	1/2	12.7×-×(3.4) 口縁高2	埋 土	底部丸い。受け部で段をなす。口縁部は直線的に外傾し上半部は外反する。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密 夾雑物混る
666-6 246-6	土 師 器 杯	完	12.4×-×4.1 口縁高2.5	北中央部床 面	底部浅いが丸味強い。受け部で僅かに屈す。口縁部は外反気味、上半は内湾気味に開く。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密 夾雑物混る
666-7 246-7	土 師 器 杯	完	11.4×-×4.2 口縁高3	北中央部床 面	底部浅く扁平。受け部鋭く、稜をなす。口縁部極めて高く外反気味に開く。口縁・内面横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
666-8 246-8	須 恵 器 無蓋高杯	杯部1/2 脚基径3	12.4×-×(5) 脚基径3	北中央部床 面	腰から底部にかけて丸味強く、口縁部は直立する。体部2段の段をなす。脚部3箇所に通しの割付け痕あり。腰部回転篋削り。	①良好 ②褐灰 ③ やや粗 白色細粒混 る
667-9 246-9	土 師 器 鉢	ほぼ完	10.3×-×10.8 最大径12.5	北中央部床 面	丸底、胴部強く張り球形を呈す。肩部に段をなし、口縁部内傾して立つ。最大径は胴中位。口縁部横撫で。胴から底部横篋削り。	①良好 ②橙 ③密 夾雑物混る
667-10 246-10	土 師 器 壺	1/2 下 半欠損	10.3×-×(9.3) 最大径14.5	北中央部床 面	胴部丸く張り、肩部に段をなす。口縁部は内傾して立ち上がり上半は外反する。口唇部丸く細る。口縁部横撫で。内面肩部横篋削り。胴部上位は横・中位は斜篋削り。	①良好 ②橙 ③密
667-11	須 恵 器 壺	口縁部 1/2	16.5×-×(4.2)	埋 土	口縁部大きく外反する。口唇部断面は矩形を呈す。	①やや軟 ②褐灰 ③やや密

K 175号住居跡 (Fig. 665)

174号住居跡の北側にはほぼ東西軸方向を同じくする立ち上がりが検出されている。174号住居跡同様消失部分が多く、詳細はさらに不明である。平面形は方形を呈すると考えられる。東西は西壁より約3.4m、南北は北壁より2.6mの範囲を確認した。柱穴・竈などの施設はみられない。壁高は約20cmを測り、床面の踏み締まりは弱い。出土遺物は無い。

第4章 鍛冶工房跡

第1節 鍛冶工房跡の概要



Fig.668 J区全体図(鍛冶工房跡)

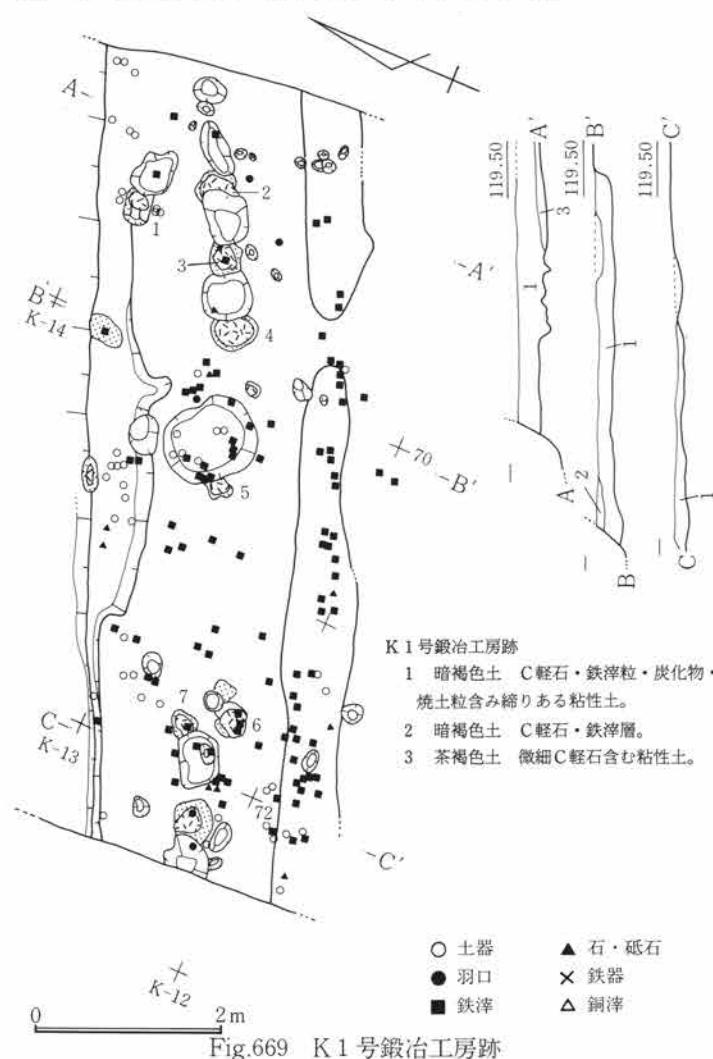
鳥羽遺跡の鍛冶工房はI区で5基、K区で1基の計6基である。この6基の工房はその全てが良好な状態で検出された訳ではなく、むしろ全ての工房について全体像を把握できなかったといえる。工房跡の東西への広がりには捉えられていない。

確認できた範囲で工房跡の形態は、東西方向に長軸をもつ長方形を呈する、竪穴状の遺構と考えられる。最も良好な状態の工房跡で東西長18m以上、南北幅約6mの規模をもっている。内部構造は、長軸に沿った左右の壁際近くに基本的には2列の鍛冶炉が設置されている。鍛冶炉は高熱を受けたと思われる青灰色の硬質化した部分を中心にその範囲は赤色化が著しい。外径は30cm~50cm、深さはわずかに窪む程度である。炉には部分的に硬質部分が切れる個所も認められ羽口が装着されていたと思われるが、装着状態で検出されたものは皆無に近い。また炉の近く鉄床として使用されたと考えられる台石が設置されている。またこの他炉の周辺には木炭層の堆積する部分も見られ、鍛冶作業に使用する燃料を仮置きしたとも考えられる。工房跡内やその周辺から少量の銅滓が採集されており鑄銅作業も行われていた可能性があるが量的には極めて少量で工房跡あるいは炉の特定はできない。工房内には鉄滓など廃棄物は比較的少なく、遺構外、とくにその南側に多く分布がみられた。6基の鍛冶工房跡の変遷・構成については詳しく検討するに至っていないが、およそ2~3期の変遷が窺われる。1期、1号・5号工房跡。2期、2号・3号・4号工房跡。3期、K1号工房跡である。年代的には初現を8世紀前半代に想定しているが、最も新しいと考えられる工房跡K1号工房跡で、8世紀中頃から後半にかかる頃であろう。

第2節 K区鍛冶工房跡・遺構と遺物

K1号工房跡 (Fig.669~670・PL.249・258)

K区西側やや南に位置し、68~72K12~14の範囲にある。工房跡の東・西側は調査区域外に延び全体を検出することはできなかった。工房跡は現状で10基の炉から構成され、うち2基は、北側を東西走る後世の溝によって痕跡をとどめるのみである。また外部構造に関しては不明である。炉は東西方向に連続的配置され、I区検出の工房跡のような炉の重複はみられない。溝によって破壊されているがこの2基と1号炉の位置から本来炉は2列に配される。炉は径30cm程度の硬質青灰色部分を中心に周囲は赤色化している。構築面は暗褐色土をわずかに掘り窪めているが、とくに突き固めたような状況は窺えない。工房跡の検出範囲は東西長約9.4m、南北幅は南・北列の炉幅で1.2~1.5mを測るが工房跡自体の幅は4.



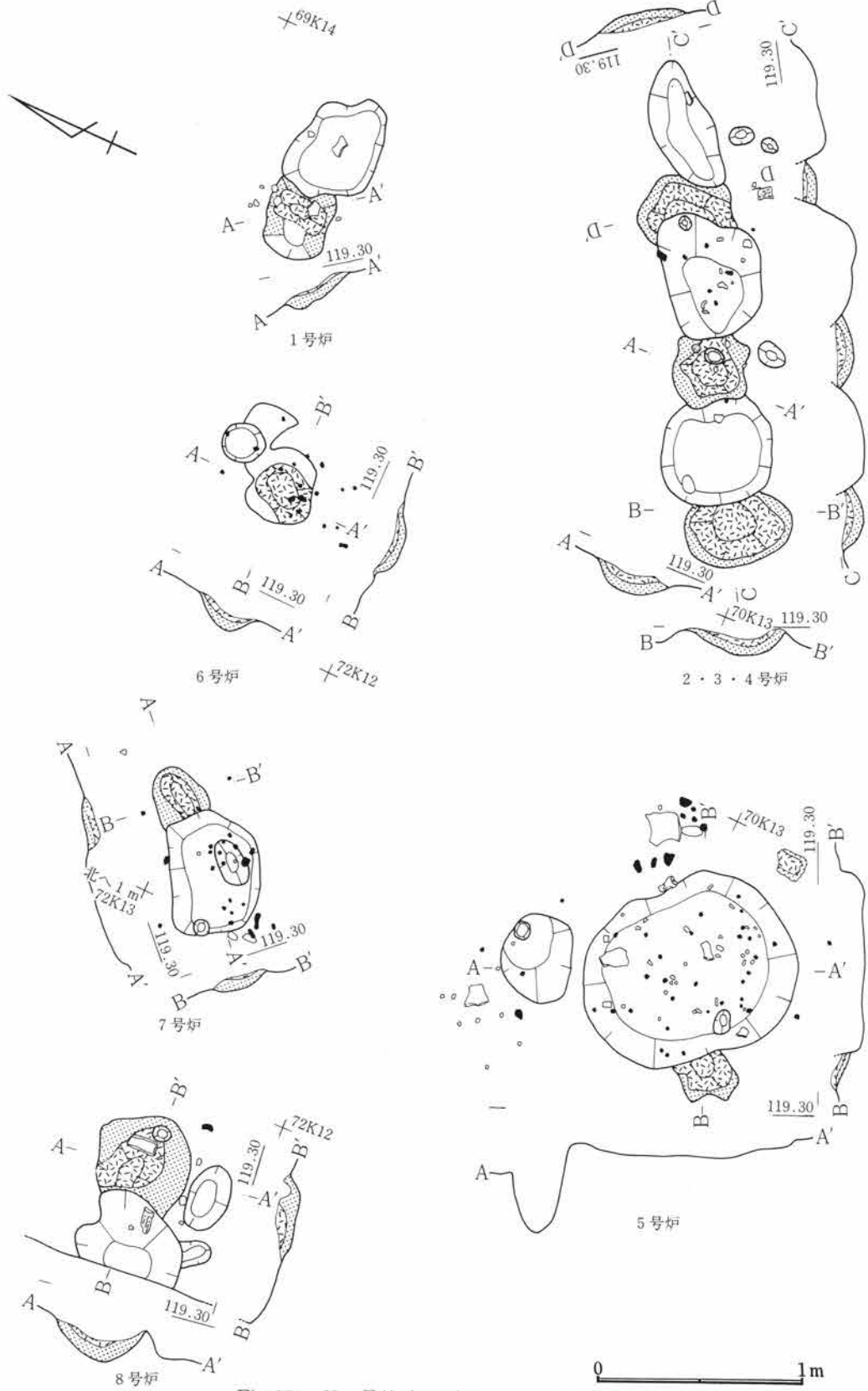


Fig.670 K1号鍛冶工房跡 1~8号炉

5m程度と考えられる。炉列の配置から東西軸方位はおよそN-70-Eを示す。外部施設はI区工房跡のと同様な竪穴状のものが想定される。

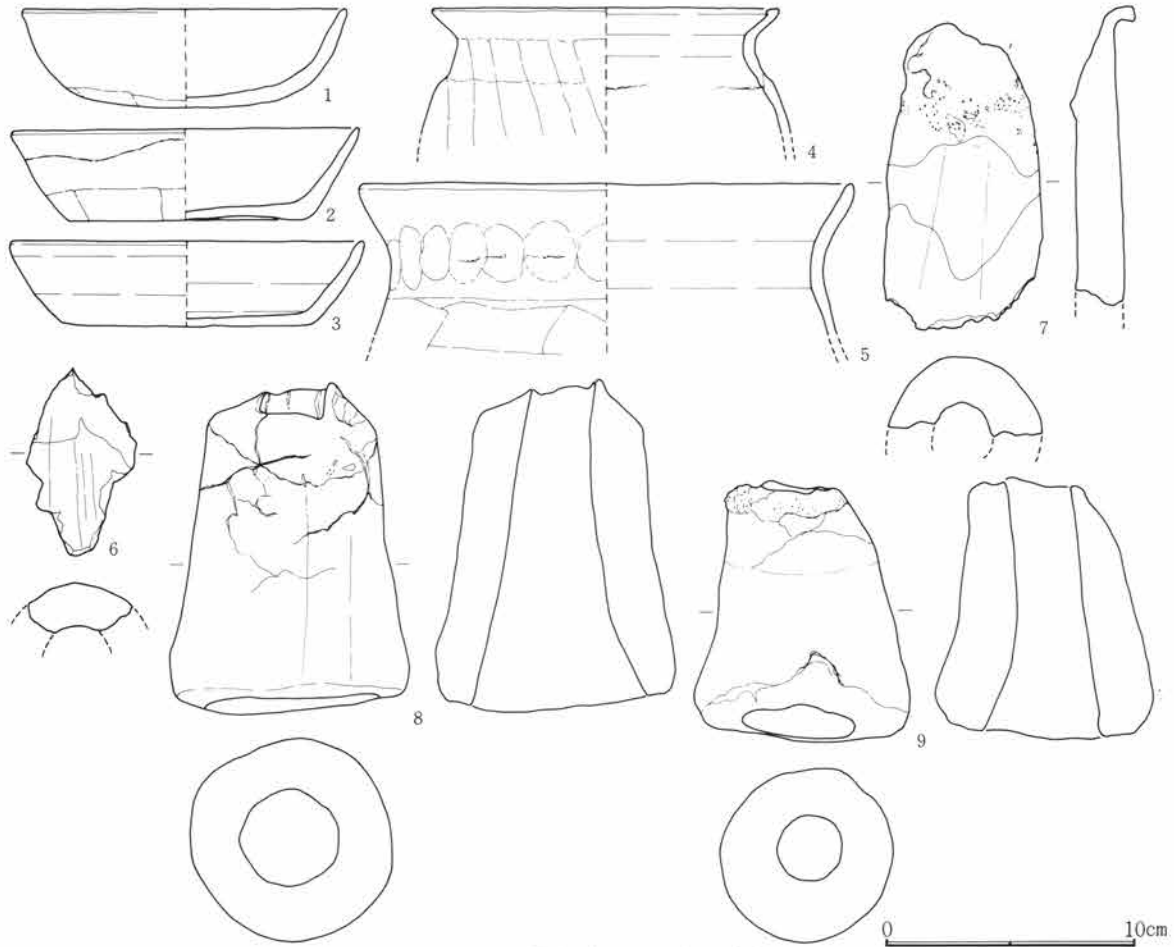


Fig.671 K1号鍛冶工房跡出土遺物

K1号鍛冶工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他		
671-1 258-1	土 師 器 坏	1/8	13×-×3.9		丸味のある底部、口縁部は緩く外反して開く。口縁部横撫で、体部弱い篋削り。底部不定方向篋削り。	①良好	②橙 ③やや密		
671-2 258-2	土 師 器 坏	1/2	14×9.4×3.6		底径大きく体部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。腰部手持篋削り。	①良好	②褐灰 ③やや粗		
671-3 258-3	土 師 器 坏	1/8	14.2×10×3.4		底部やや丸みをもち、体部は内湾気味に外傾する。轆轤成形。回転篋切り後弱い手持篋削り。	①良好	②灰黄 ③やや密		
671-4 258-4	土 師 器 甕	口縁部 1/8	14×-×(5) 胴径14.9		胴部丸味をもって張る。口縁部外傾して開き口唇部は丸まり内屈する。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好	②鈍い橙 ③やや密		
671-5 258-5	土 師 器 甕	口縁部 1/4	19.8×-×(6)		胴部張り少なく口縁部緩く外傾し上半は内湾気味に開く。口縁部指頭後横撫で。胴部横篋削り。	①良好	②鈍い橙 ③やや粗		
Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
671-6 258-6	羽 口 小 片		長(7.5)	外面縦調整	671-8 258-8	羽 口 完		長12.8 径6.8~9.5 孔2.5	先端部ガラス質状に 熔解 外面指頭痕
671-7 258-7	羽 口 基部欠損		長(11.8) 径6 孔2.4	先端部熔解、細る。 外面弱い縦篋調整	671-9 258-9	羽 口 完		長10 径4.5~8.5 孔2.5	先端部熔解。外面指 頭痕

第3節 I区鍛冶工房跡・遺構と遺物

I 1号工房跡 (Fig.672~675・691~693・PL.250・260)

I区南部の東寄りに位置し、39~45 I 15~19の範囲を中心に東西方向に長い形で検出された。工房跡の東側は調査区域外にかかり工房の東限は確認されていない。西側は炉跡の設置間隔から見て、調査範囲の中にもほぼ収まるものと考えられ西限をなすと思われる。なお、当工房跡は同区内に存在する他の工房跡のように竪穴状遺構などの炉跡群を包括するような施設を検出・確認することは出来なかった。炉跡群上面およびその周辺は鉄滓・炉壁などの細片や炭化粒を含む比較的締まりのある暗褐色土層が堆積していた。

検出された炉跡群は南・北の2列に配され東西方向に長く延びている。両列は1~1.8mの距離をもって併設されている。検出現状では炉群の東西限は約12mを測り、その配置からみた東西方向はN-82-Eを示す。炉は総数25基確認されているが重複が著しく、とくに北側列は2~3基の重なりが顕著である。北側列は炉数18基を数え、8つの群にまとまる。この8群は群の間隔を約1.6mに置き、浅い溝状の掘形の中にある。溝状の掘形は小さく蛇行し、深さも一定せず、それほど規則制を見いだすことは出来ない。接近して設けられた炉の掘形によるものと考えられる。南側の炉群は炉数6基で4群になり、その間隔は不均一である。

工房跡は凝灰岩質層を基盤にしており、炉の設置面はこの堅い凝灰岩質層を浅い皿状に掘り窪め、炉床はなんらかの構築土を突き固めていると考えられる。炉床はかなり高熱を受けていると思われ、硬質化した青灰色を呈する。また、この硬質化した炉床を包むように基盤となる凝灰岩質層は被熱し赤色化が著しい。

炉の周辺には多くの Pit が穿たれるが、支柱穴と考えられるものはP₁~P₆である。これらの柱穴は南・北の炉群列の中間にありほぼ一直線に配される。柱穴の規模はおおよそ上径0~0cm・下径0~0cm・深さ0~0cmを測る。柱穴間距離はほぼ均一であり、P₁・P₂は2.1m、P₂・P₃は2.3m、P₃・P₄は2.2m、P₄・P₅は2m、P₅・P₆は2mをそれぞれ測る。このほか北側の炉群列の北縁に沿うような形で幾つかの小穴が検出されており厳密な規則性は見いだせないものの、これらは工房跡の上屋構造に関係する可能性が考えられる。このような小穴は南側の炉群には検出されていない。これには、遺構検出面の微地形が南に向かい僅かながら低くなっており、このため、本来水平に近い基盤面に穿たれた小穴が凝灰岩質層に達しておらず検出時に消失してしまった可能性もある。しかしながら南側の炉群の構築面の高さからして、ここでは当初より存在しなかったと考えたい。工房跡の内部構造に推測的復元を加えれば、北側炉群の北縁小穴列を南側の炉群に反転復元して沿わせた場合、工房跡の南北幅は約3.5m程度と2列の炉群からなり鍛冶の作業空間としては狭きに過ぎると思われる。中央部に配置された支柱穴と北縁に存在する小穴の機能から、工房跡の南側を開放状態にした片流れの屋根構造が想定される。また、工房跡周辺での鍛冶関連遺物の分布状態は工房跡の北側でほとんど検出されていないのに対し、南側に比較的多くの遺物が認められており上述の上屋構造の想定を裏づけるものとなろうか。

工房内には2基の円形および楕円形を呈する土坑が検出されている。径約1m・深さ50cm前後を測る。土坑の埋土中には鉄滓などが少量出土しているが、19号炉跡を破壊しているところから当工房跡に付随する施設ではない。また、南側には1号井戸跡・1号墓跡が存在するが埋土はいずれも浅間B軽石を多量に含む砂質土である。中世以降の所産と考えられ、これも当遺構とはかなりの時間的な隔りがある。

当工房跡は、工房内やその周辺からの出土遺物の量が他の工房跡と比較してもかなり少ない。また鍛冶作業によって生じてくるべき鉄滓・炉壁片類も同様な傾向にある。さらに鉄材の鍛練具の一つである鉄床として使用した台石に関しては全くといって良いほど検出されていない。これらのことは、当工房跡が遺跡内の

他の工房跡に先駆けて鍛冶作業が開始され、新たな工房跡の設営に当たって使用に堪えうる台石などの機材を搬出し、かなり徹底した移転作業が行われた結果とも考えられる。

I 2号工房跡 (Fig.676~679・694・695・PL.253~255・260・261)

I区北東部に位置し、43~48 I 42~48の範囲にある。当工房跡の南には近接して5号工房跡が検出されている。当跡の周辺部には12号・14号・56号住居跡と重複関係にあるが、工房跡の遺構範囲が不明確なためそれぞれの関係を特定できなかつた。しかしながら住居跡の出土遺物や竈の遺存状況からして、当工房跡よりいずれも新しい時期の所産であることが窺える。I 1号工房跡と同様に炉群を包括するような施設を確認・検出できなかったが、炉群の上面及びその周辺域は多量の炭化物を含んだ暗褐色土で覆われ堆積土中には鉍滓・炉壁片・羽口などが多量に包含されていた。

工房跡は39基の鍛冶炉からなり、東西方向に長く南・北2列に併設されているが部分的には中央部にも設置される。南・北の炉群配置からみて東西の長軸方向はN-68°-Eを示す。規模は上屋施設が存在する場合はさらに大きくなると考えられるが南・北の炉群列は約3mの幅に納まる。東西長は両端部に位置する炉跡間で約13mを測る。この東西両端にある炉跡は南・北列のほぼ中央線上にあり、南・北炉群より東・西側に突出した位置にあり工房跡の東西限を示しているようである。炉は2~3基の重複が多く、南列は17基で6群に、また北列は15基4群にまとまる。南・北列の炉群はその間隔を最大で2.5m、最短で約1mを隔てる。中央部には4~5mの間隔をおき4~6基の炉が配される。炉の設置面は粘性のある暗褐色土を、また炉によっては凝灰岩質層を基盤にしている。炉床はわずかに窪み、砂混じりの構築材をもって構成されている。かなりの高熱を受けていると考えられ、堅く青灰色を呈する。

柱穴と考えられるPitは南・北炉群列の中間で東西方向にP₁~P₅が穿たれるが、P₅はやや不規則に配される。P₃は平面が方形を呈しているが他はいずれも円形である。P₁は径24cm・深さ30cm、P₂は径20cm・深さ32cm、P₃は径40cm・深さ36cm、P₄は径25cm・深さ32cm、P₅は径38cm・深さ40cmで、各柱間はP₁・P₂は1.9m、P₂・P₃は2.4m、P₃・P₄は2.4m、P₄・P₅はやや距離があり3.4mを測る。主柱穴の配置形態は1号工房跡に共通するが、当跡には炉群の外縁に小穴などの痕跡は認められなかつた。また遺物の出土状況は工房跡周辺にはそれほど散布は見られず、むしろ工房内に多く存在している傾向にあり、前述した1号工房跡とはやや異なった様相を示している。炉の配置についても、南・北の2列構成の他に中央部に設置されるという違いがある。

出土遺物には砥石・羽口類の他に少量の銅滓が検出されている。また2~4号・10号・11号・13・14号・17号の炉跡には石英閃緑岩製の鉄敷に供したと考えられる大形の台石が埋設されている。

I 3号工房跡 (Fig.680~685・696~699・PL.248・251・255・256・261~263)

I区北西部に位置し、57~65 I 40~45の範囲にある。西側は調査区域外に延び未検出である。また東側は南北走るJ I 1号溝によって消失している。このため、細部にわたる形状は不明部分もあるが、I区で検出された鍛冶工房跡の中では最も遺存が良好で旧態を窺い知ることのできる遺構である。

工房跡の平面形状は東西に長い長方形を呈し、現状では浅い竪穴状の掘形をもつと考えられる。南北幅約6m、東西長約18m(検出部分)を測り、東西長軸方向はN-80°-Eを示す。南・北壁線は直線的で、壁高良好な部分で約20cmを測る。床面はかなりの凹凸をなし、凝灰岩質層を基盤としている箇所が多い。埋土は炭化粒・小塊の鉍滓・炉壁・羽口などを多量に包含する暗褐色土が主体になっていた。

第4章 鍛冶工房跡

鍛冶炉は東西方向に2列をもって配され、南北のそれぞれの壁線より内側に約1.5mの距離がある。南・北の各炉列は重複の著しい炉群を形成し、炉群間はほぼ等間隔に設置されている。炉数は全体で66基確認されているが南列は33基でおよそ7群になり、北列は31基9群にまとまる。その他南・北列の中間帯に1群が存在している。南・北の炉列群は1～2mの空間を保ち、それぞれの炉群も同様な間隔で配置される。鍛冶炉の設置面は東半部では凝灰岩質層を、西半部では強く締めり粘性のある暗褐色土を基盤にしている。炉床はわずかに掘り窪められ、砂混じりの構築材をもって構成されている。いずれの炉も著しく硬質化しており青灰色を呈している。炉の埋土は炭化粒が多量に混じり炭化粒層ともいえる土層で覆われていることが多い。数箇所に炉を形成しない炭化粒を埋土とする窪みが検出されており、鍛冶燃料用の木炭を配置痕跡とも考えられる。

柱穴は確定的なものは検出されていないが、工房跡の西側にP₁・P₂が見られ柱穴の可能性はある。なお東半部にはその痕跡はなかった。P₁は平面形が長方形を呈し、70×30cm・深さ約40cmを測り底面の中心部は円形で約10cmほど低くなる。P₂は平面が楕円形で60×30cm・深さ約60cmを測る。P₁・P₂の柱間は約4.3mである。

出土遺物には少量の銅滓のほか羽口・砥石類・鉍滓小塊などが検出されている。また工房跡内には数個の大形石英閃緑岩の鉄敷用台石が埋設されており、それらの周辺には鉄材の鍛練時に発生したと考えられる微細鉄片が散布していた。

I 4号鍛冶工房跡 (Fig.686～688・700・701・PL.252・256・257・263)

I区東部やや北に寄って位置し、41～48 I 33～37の範囲にある。当工房跡の北側約12mで5号工房跡が、また南側には約30mの距離を隔てて1号工房跡がある。平面形態は東西方向に長軸をもつ隅丸の長方形を呈し浅い竪穴状の外部構造をもつ。東側で緩く立ち上がる様相がみられ東壁の可能性もあるが、炉の位置が接近しすぎているため確定はできない。また、南壁線は検出されなかったが西壁の南端部の状態からおおよその規模は知ることができる。東西長は1.4m以上、南北幅は約5.4mを測る。壁高は低く約20cmで緩く傾斜をもって立ち上がる。東西方向の長軸方位はおおよそN-67°-Eを示す。内部構造はおおよそ21基の炉跡で構成される。炉跡は南・北側列の2列に配されるが、21基のうち重複と考えられる12～14号・16～18号・19、20号・10、11号を除いておおよそ13基が同時作業に共していたと考えられる。北側列は12基のうち7基が、また南側列は6基のうち5基である。また東端にある1号炉は南・北列の中央線上に位置しておりほぼ工房跡の東限に近い可能性がある。各炉の間隔は最も接近しているもので約1m、離れている炉で約2.6mである。また両列の間隔は1～1.4mの間にある。また、北側の炉列は北壁線より約0.6～1.6mの位置にあり、南側の炉列もこれに近いと思われる。鉄床と考えられる台石は2号炉、19・20号炉に接近して埋設されており、6号炉の近くには粉碎状態で台石が検出されており、台石の割れ目には鉄分が充填していた。炉は径30～40cmの硬質化した炉床部分とその周辺の赤色化著しい範囲として確認される。炉は多くの場合木炭を多量に含んだ埋土でおおわれている。炉床は深い炉で約30cmの掘形をもち・焼土粒・炭化粒を含み粘性の暗褐色土を基盤とし、さらに工房跡内外には上屋構造を想定できるような柱穴などの検出はされていない。

I区5号工房跡 (Fig.689・690・702・PL.252・264)

I区東北部に位置し、41～45 I 42～46の範囲にある。東側は調査区域外にかかりI区工房跡の中では最も遺存の度合が悪く、他の遺構と重複による消滅個所もあって6基の炉を検出したにとどまった。外部構造も南壁と考えられる壁線の一部を確認したのみである。南壁線方位はおおよそN-70°-Eを示す。炉は1号炉で

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物

約30cm、2・3・4号炉で約15cmの堀形をもち焼土粒・炭化粒を混える粘性暗褐色土を突き固めて基盤とし、炉床には砂粒を含む構築材を用いてある。1号炉、6号炉の上面には、鉄床に使用したと考えられる台石の破片が廃棄されている。

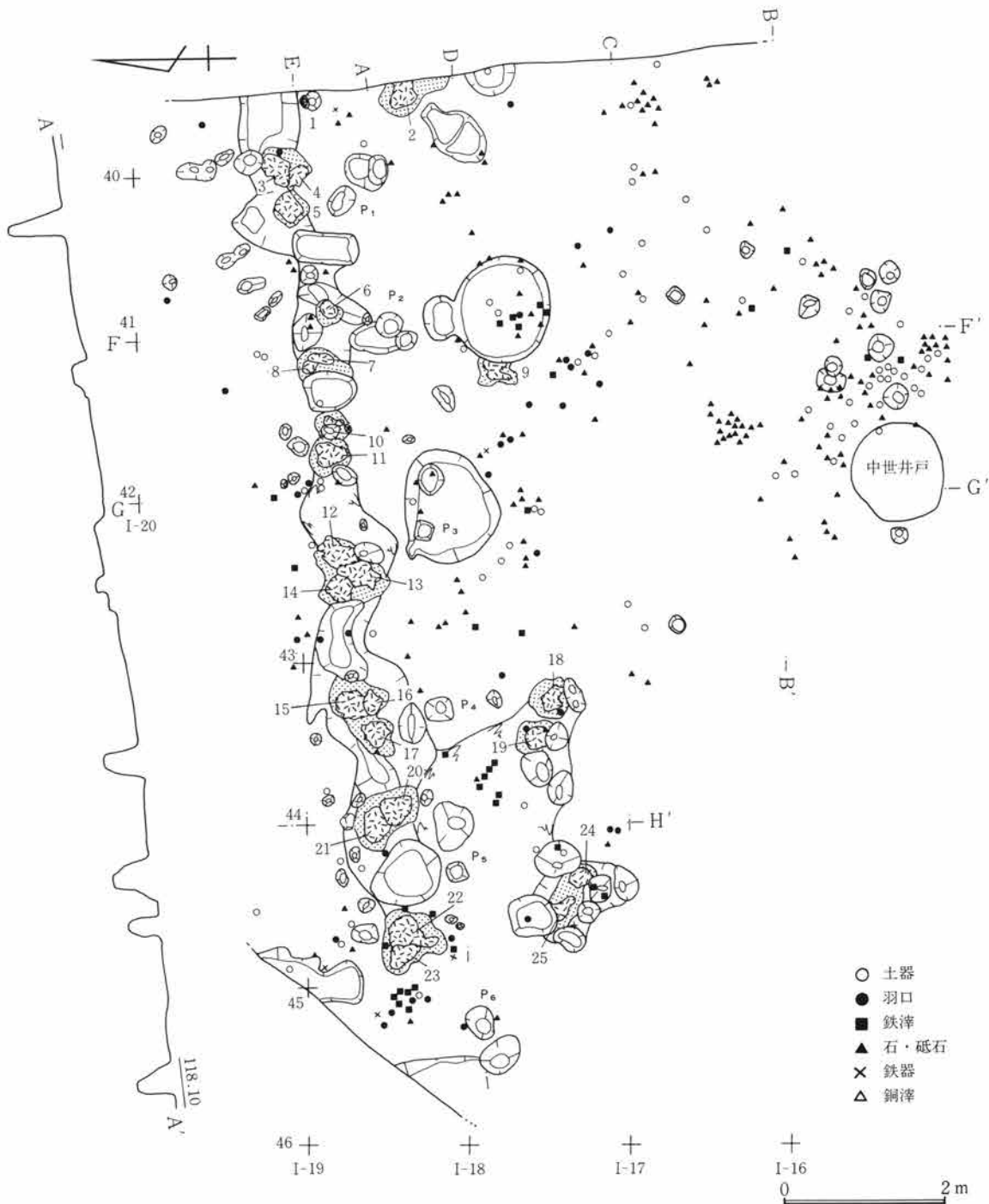


Fig.672 I1号鍛冶工房跡

第4章 鍛冶工房跡

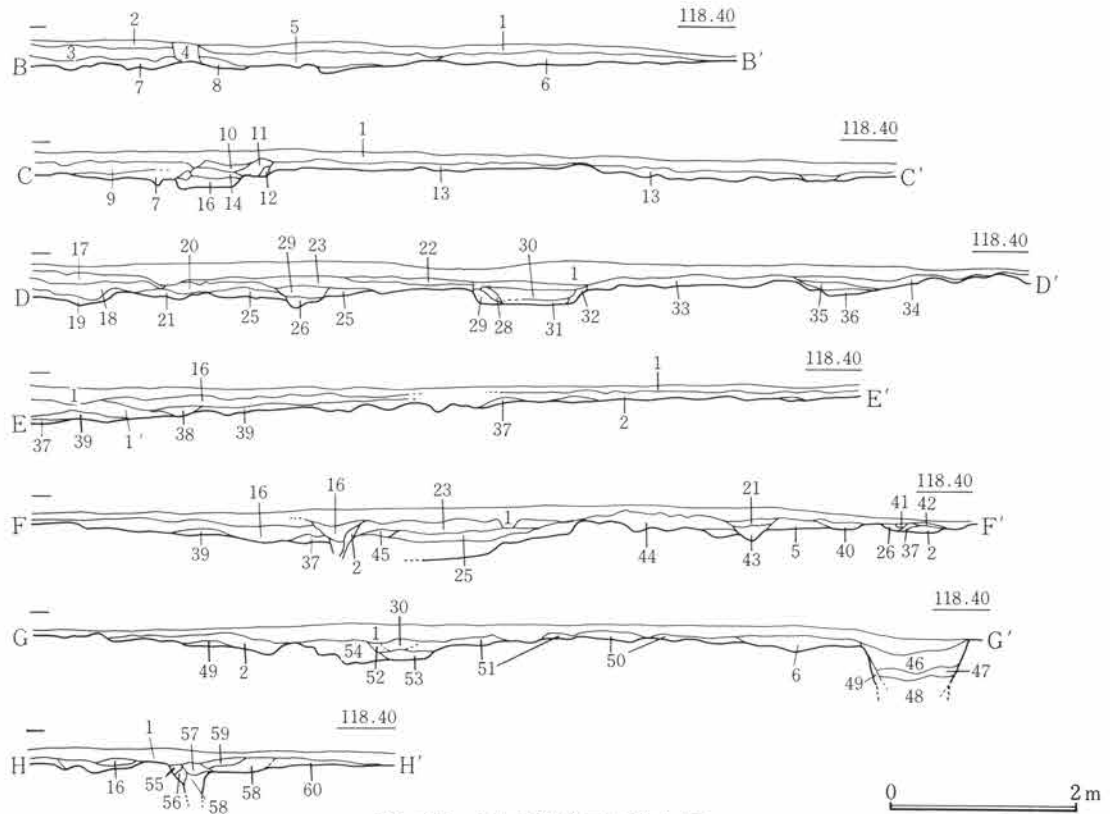


Fig.673 I1号鍛冶工房跡土層

I1号工房跡土層

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色土 C軽石多量・炭化粒・焼土粒含み締りある砂質土。 | 31 暗褐色土 炭化粒・鉄滓含み締りなし。 |
| 2 暗褐色土 C軽石を含み締りあり。 | 32 褐色土 砂質。 |
| 3 暗褐色土 C軽石少量・堅く締りあり。 | 33 暗褐色土 黄色土粒含む粘性土。 |
| 4 暗褐色土 白色細粒を含み締り粘性あり。 | 34 暗褐色土 炭化粒含む。 |
| 5 暗褐色土 C軽石・焼土粒少量含み締りあり。 | 35 暗褐色土 炭化粒・褐色砂質塊含む粘性土。 |
| 6 暗褐色土 大粒C軽石を含み締りあり。 | 36 暗褐色土 黄褐色土塊・炭化粒・焼土粒含む。 |
| 7 暗褐色土 堅く締りあり。 | 37 暗褐色土 締りある粘性土。 |
| 8 暗褐色土 小粒C軽石含む。 | 38 暗褐色土 比較的締りなし。 |
| 9 暗褐色土 大粒C軽石・炭化粒含む。 | 39 暗褐色土 炭化粒・焼土粒多量含む。 |
| 10 暗褐色土 C軽石・砂質明褐色土塊少量含む。 | 40 暗褐色土 白色細粒・黄色土粒含む。 |
| 11 暗褐色土 黄色土粒・C軽石多量含む粘性土。 | 41 赤色土 焼土層。 |
| 12 暗褐色土 C軽石・黄色土粒多量含む締りある粘性土。 | 42 暗褐色土 砂質黄褐色土塊含む。 |
| 13 暗褐色土 黄褐色土粒を含む粘性土。 | 43 暗褐色土 C軽石・焼土粒少量含み締りなし。 |
| 14 暗褐色土 C軽石・砂質明褐色土塊多量含む。 | 44 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む、1層よりC軽石少量。 |
| 15 暗褐色土 砂質明褐色土塊含む締りある粘性土。 | 45 暗褐色土 炭化粒少量含み堅く締った粘性土。 |
| 16 暗褐色土 炭化粒・焼土粒多量含み締りなし。 | 46 暗褐色土 C軽石含み1層に類似する粘性土。 |
| 17 暗褐色土 16より多少粘性土。 | 47 暗褐色土 C軽石少量含む粘性土。 |
| 18 暗褐色土 C軽石少量・炭化粒含む。 | 48 暗褐色土 締りない砂質土。 |
| 19 暗褐色土 炭化粒多量含む。 | 49 暗褐色土 締り強い粘性土。 |
| 20 暗褐色土 C軽石・炭化粒含む。 | 50 暗褐色土 C軽石・黄色土粒多量含み締りあり。 |
| 21 暗褐色土 C軽石含む砂質土。 | 51 暗褐色土 C軽石ほとんど含まず締りあり。 |
| 22 暗褐色土 C軽石多量・焼土粒・炭化粒含み堅く締りあり。 | 52 暗褐色土 砂質明褐色土塊多量含む。 |
| 23 暗褐色土 C軽石多量・砂質明褐色土塊・炭化粒・焼土粒含む。 | 53 暗褐色土 炭化粒・鉄滓含み締りなし、上位に炭化粒混える。 |
| 24 暗褐色土 黄褐色土粒含み締りある粘性土。 | 54 暗褐色土 C軽石・砂質明褐色土粒・塊多量含み締りなし。 |
| 25 暗褐色土 炭化粒・焼土粒多量・C軽石少量含む。 | 55 黄色土 黄色砂質土塊。 |
| 26 暗褐色土 黄色砂質塊含む粘性土。 | 56 暗褐色土 黄色砂質土塊含み締りなし。 |
| 27 暗褐色土 黄褐色土粒含む。 | 57 暗褐色土 黄色砂質土塊・炭化粒・焼土粒含む。 |
| 28 黄褐色土 黄褐色土塊。 | 58 暗褐色土 炭化粒含み締りなし。 |
| 29 暗褐色土 黄褐色土塊含む締りある粘性土。 | 59 暗褐色土 炭化粒・黄色砂質土含む。 |
| 30 暗褐色土 炭化粒含む締りない粘性土。 | 60 暗褐色土 炭化粒含み締りあり。 |

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物

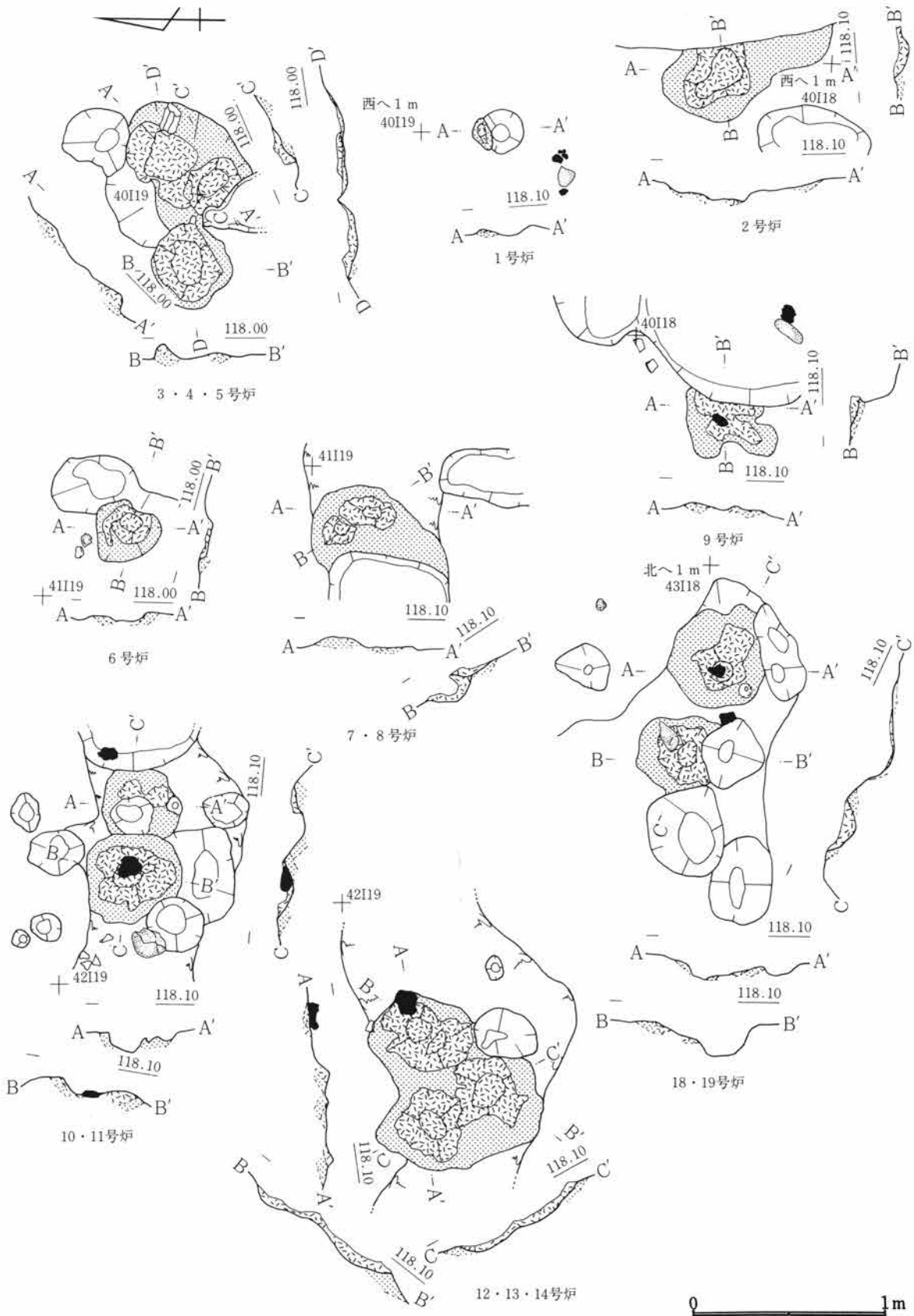


Fig.674 I1号鍛冶工房跡 1~14・18・19号炉

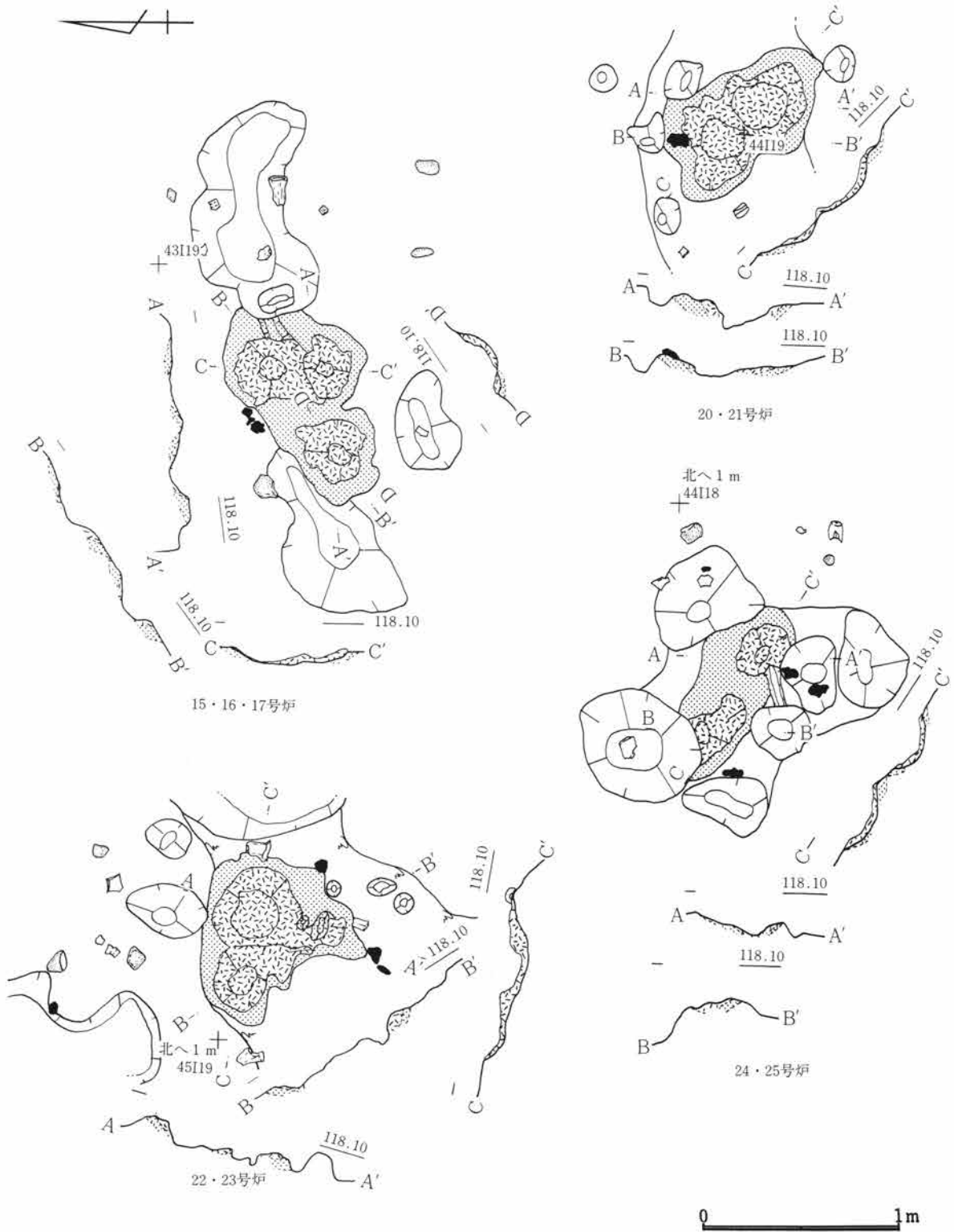


Fig.675 I1号鍛冶工房跡 15~17・21~25号炉

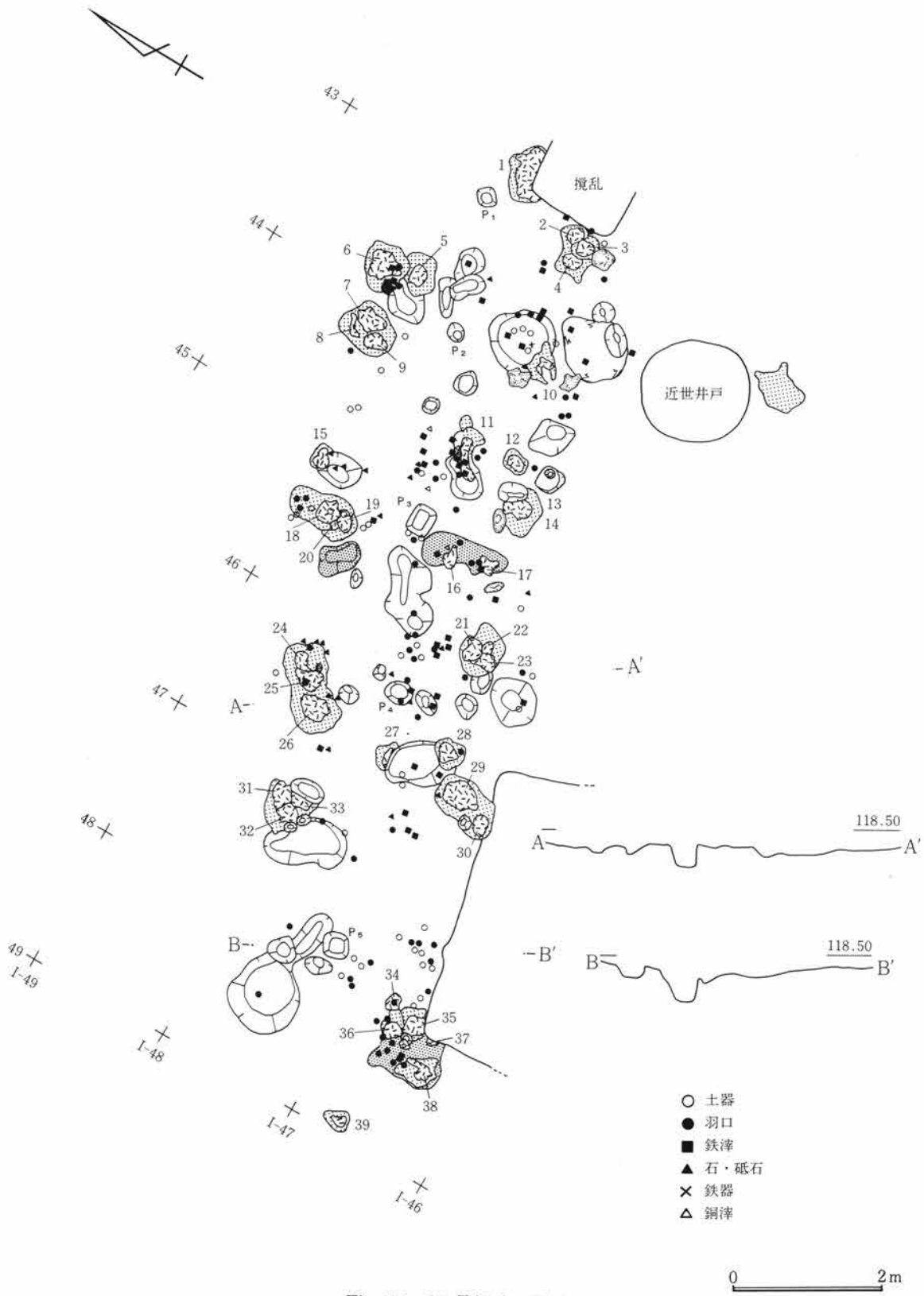


Fig.676 I-2号鍛冶工房跡

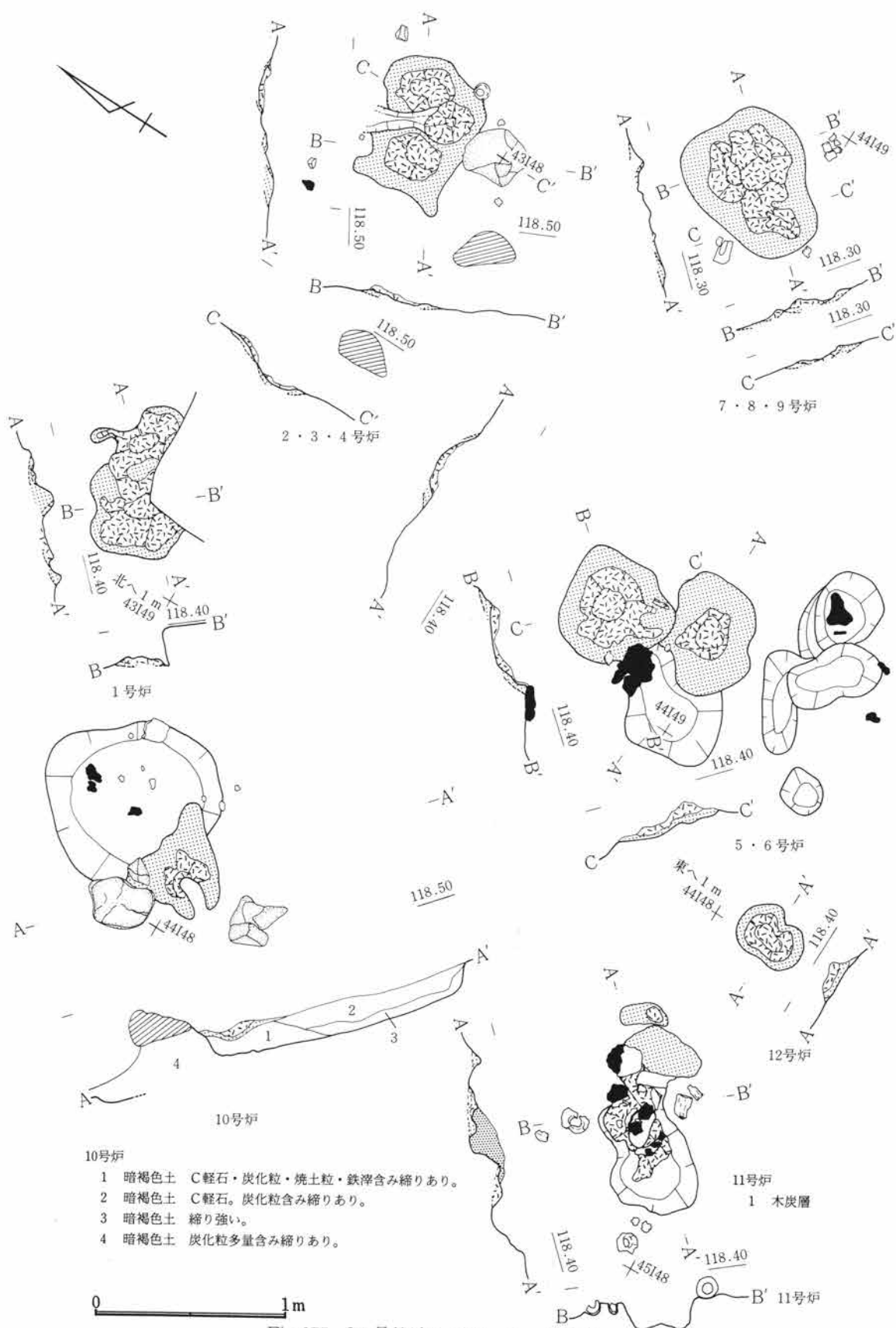


Fig.677 12号鍛冶工房跡 1~12号炉

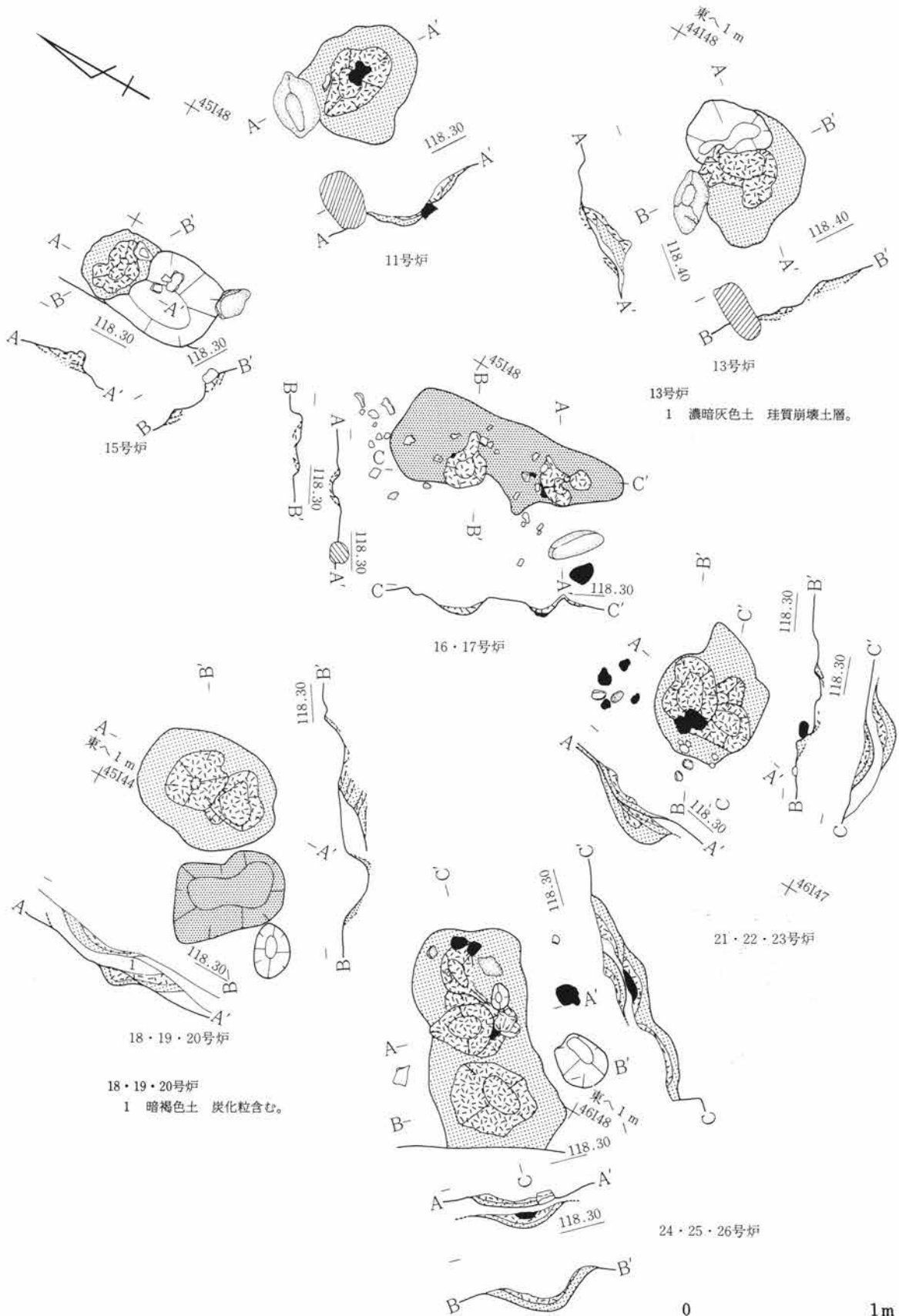


Fig.678 12号鍛冶工房跡 13~26号炉

第4章 鍛冶工房跡

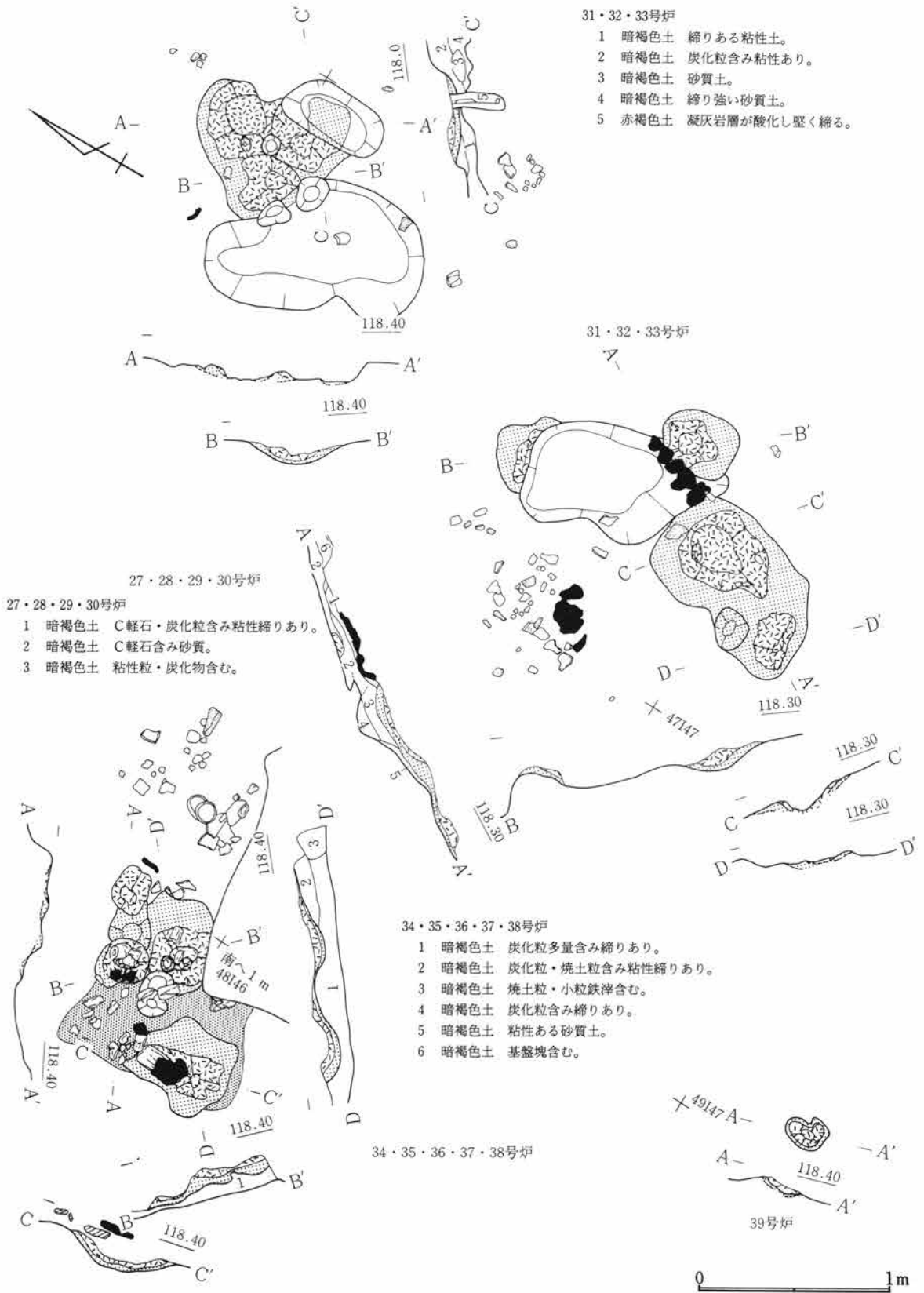


Fig.679 I2号鍛冶工房跡 27~39号炉



Fig.680 13号鍛冶工房跡

第4章 鍛冶工房跡

I 3号鍛冶工房跡土層

- | | | | |
|---------|--------------------|----------|---------------|
| 1 暗褐色土 | B軽石主体の耕作土。 | 11 暗褐色土 | 粘性土。 |
| 2 暗褐色土 | B軽石主体旧耕作土。 | 12 暗褐色土 | C軽石・炭化粒・砂礫含む。 |
| 3 暗褐色土 | B軽石主体・C軽石含む旧耕作土。 | 13 暗褐色土 | 炭化粒含む。 |
| 4 暗褐色土 | C軽石・炭化物含む粘性土。 | 13' 暗褐色土 | 炭化粒含む粘性土。 |
| 5 黒褐色土 | C軽石・炭化物含む粘質土。 | 14 褐色土 | 粘性ある砂質層。 |
| 6 黒褐色土 | 砂岩・粘土含む炭化物・C軽石混える。 | 15 黒褐色土 | 締りない砂質層。 |
| 7 暗褐色土 | 大粒炭化物・C軽石含む。 | 16 褐色土 | 砂層。 |
| 8 黒褐色土 | 大粒炭化物・C軽石含む軟質土。 | 17 褐色土 | 粘性ある砂礫層。 |
| 9 黒褐色土 | 大粒赤色岩滓含む。 | 18 暗褐色土 | 白色塊含む粘性土。 |
| 10 黒褐色土 | 大粒C軽石含む。 | 19 暗褐色土 | 炭化粒・白色塊含む。 |

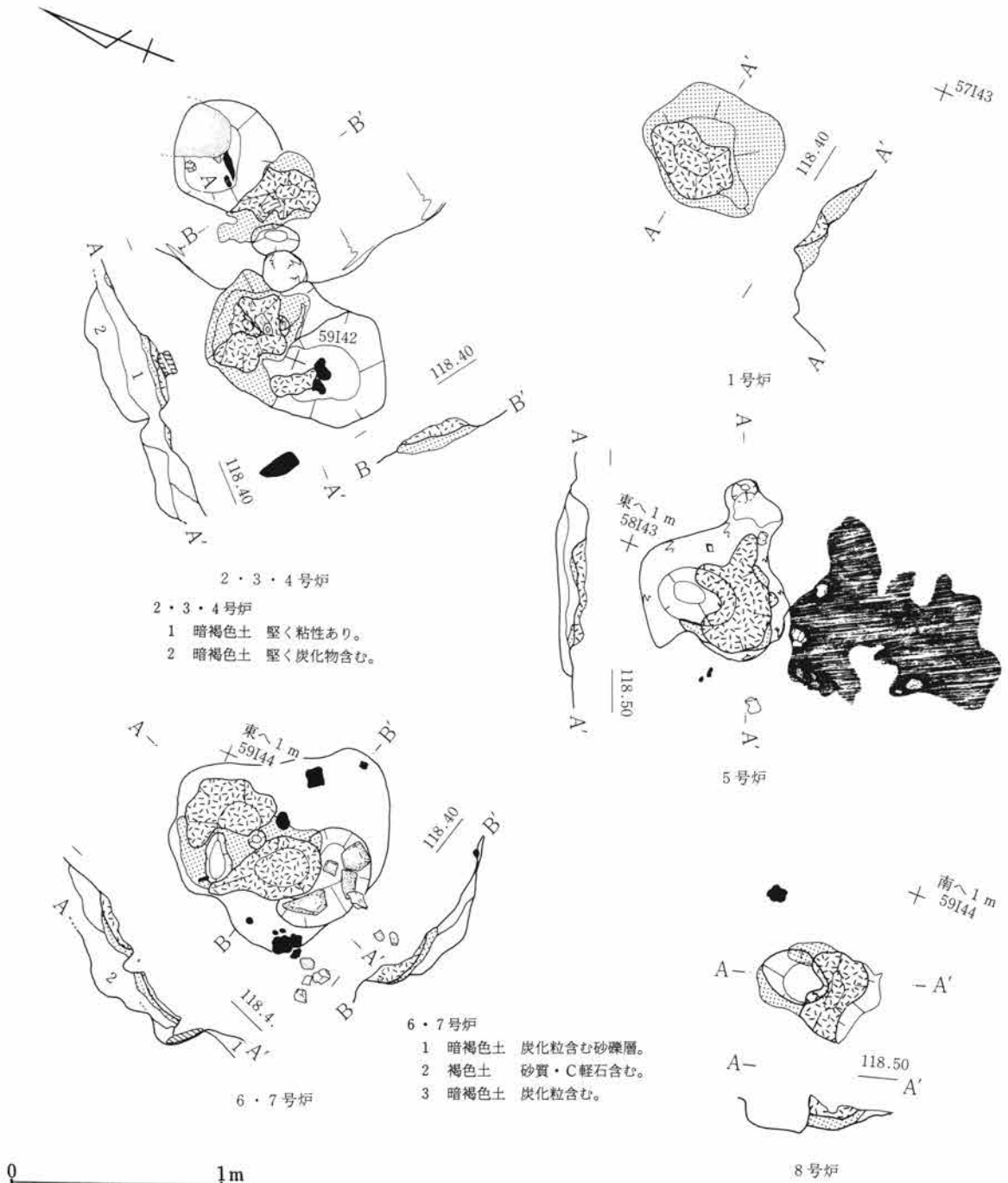


Fig.681 I 3号鍛冶工房跡 1～8号炉

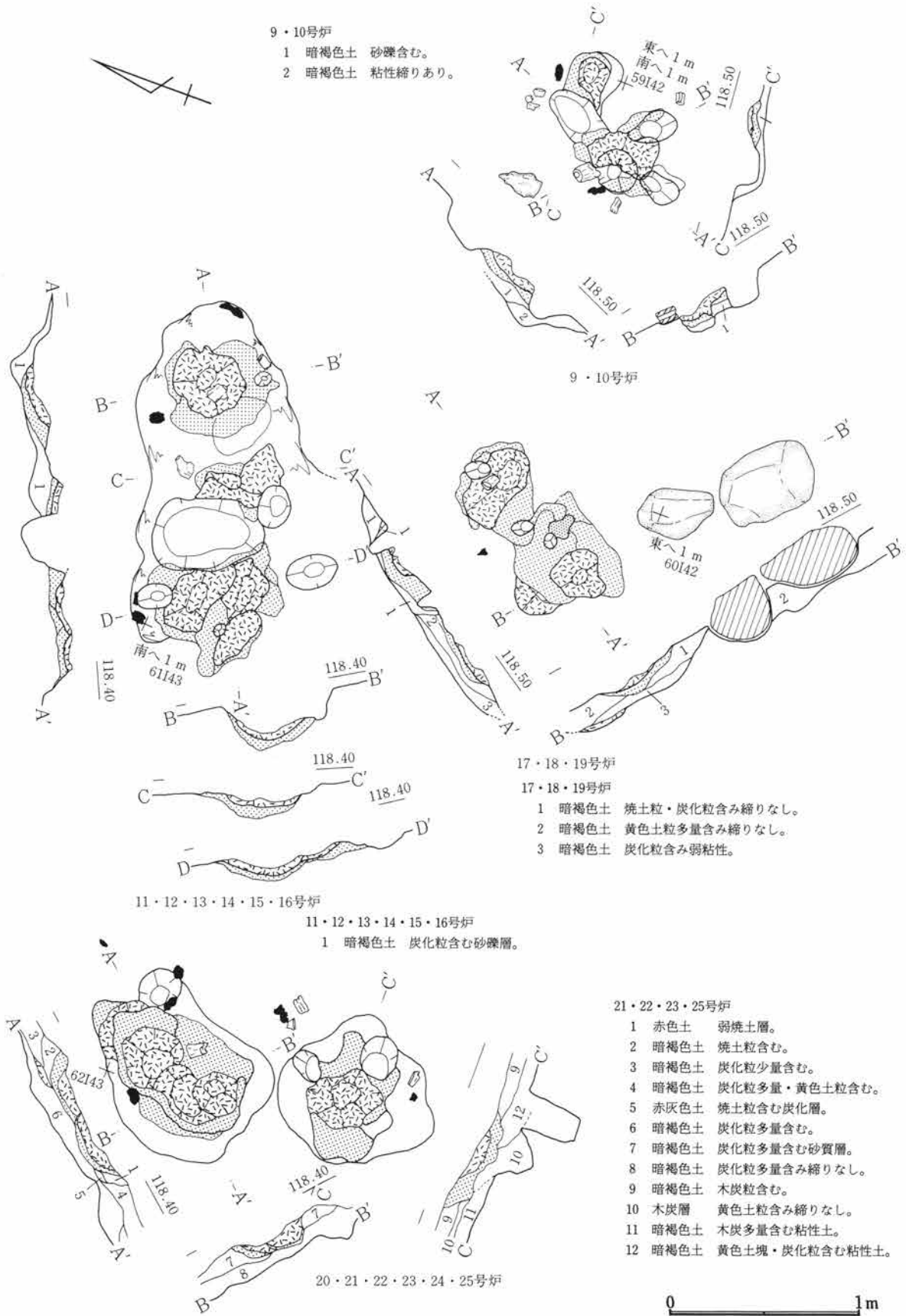


Fig.682 I3号鍛冶工房跡 9～23・25号炉

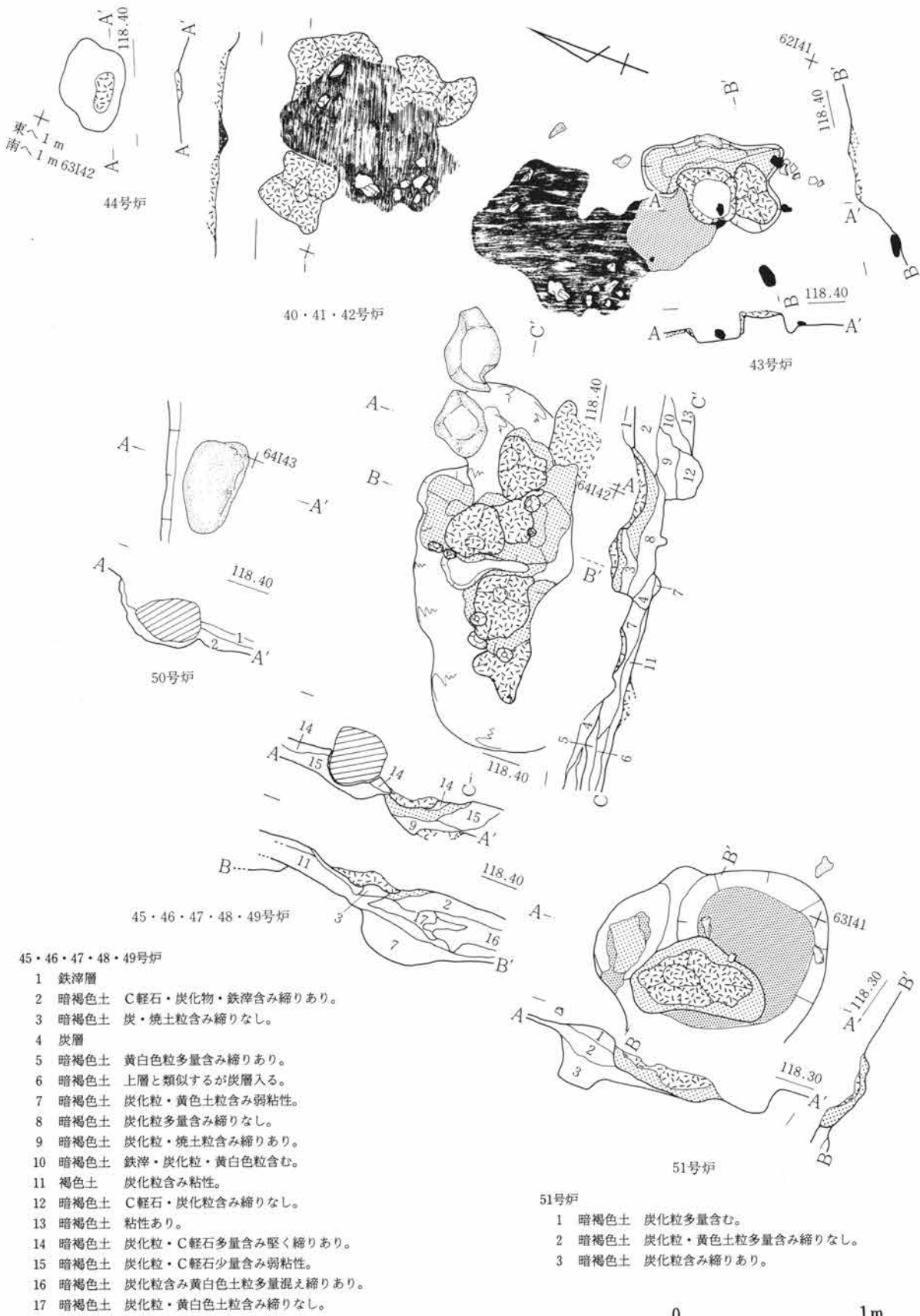


Fig.684 I3号鍛冶工房跡 40~51号炉

第4章 鍛冶工房跡

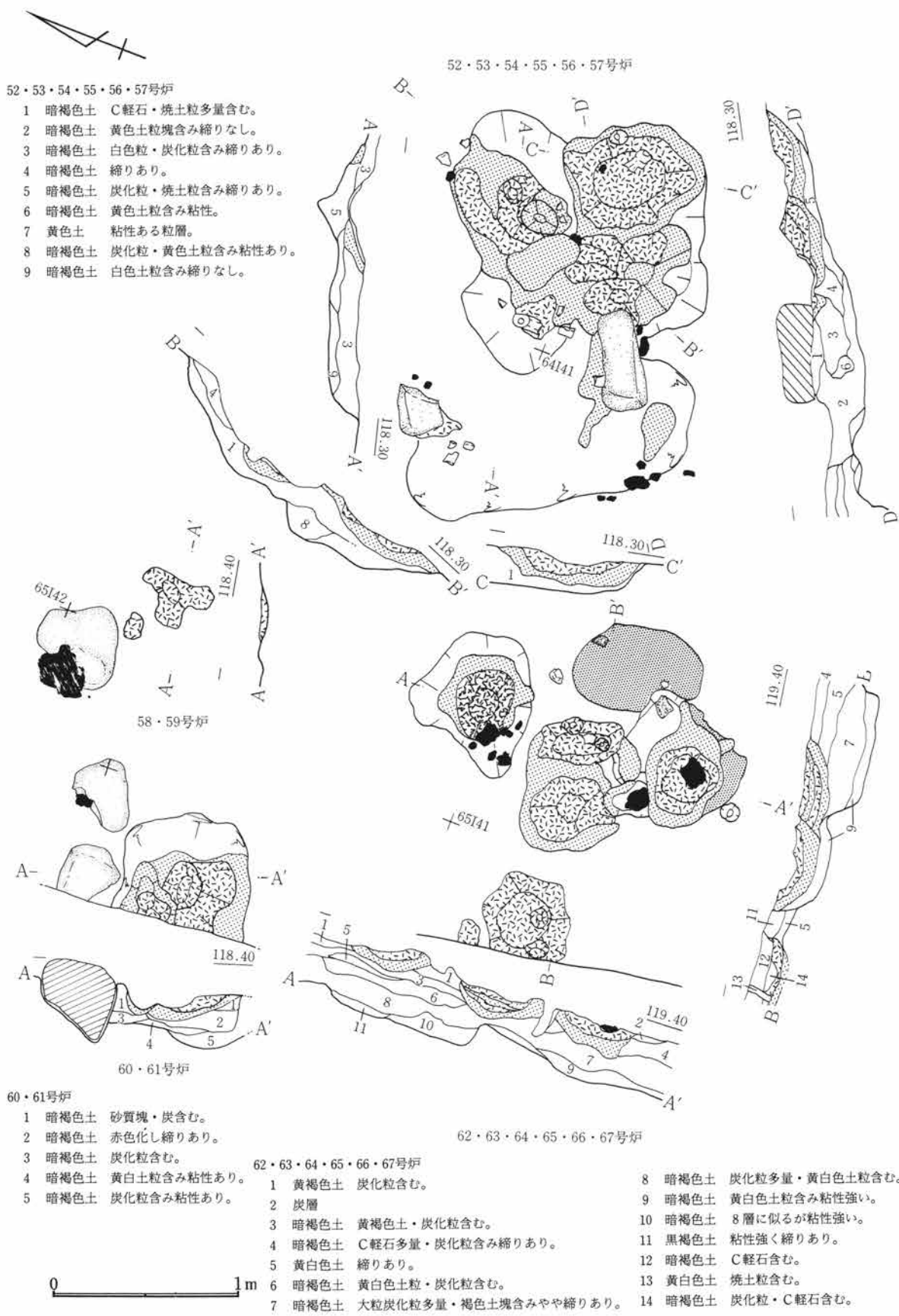


Fig.685 I3号鍛冶工房跡 52~67号炉

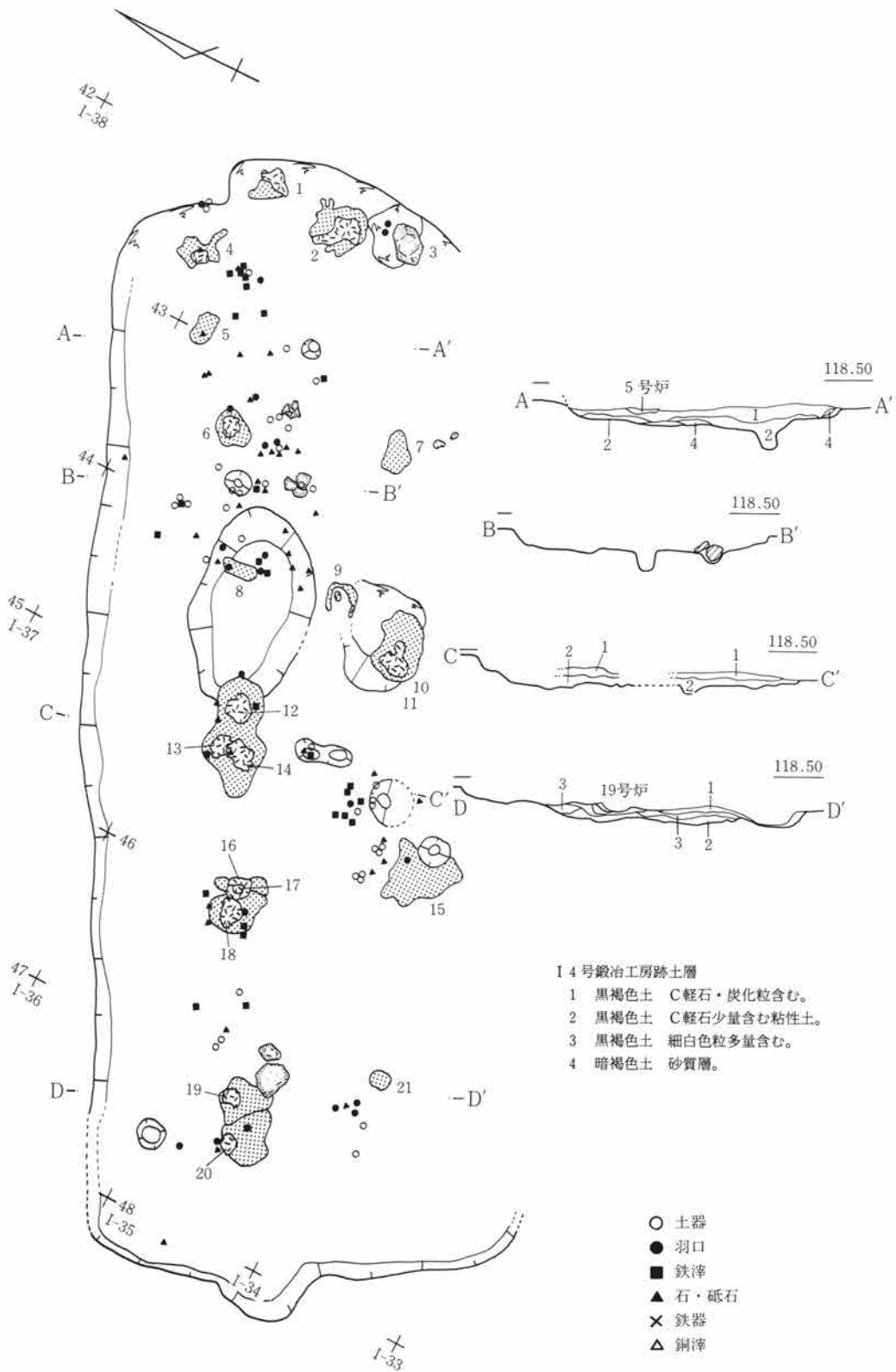
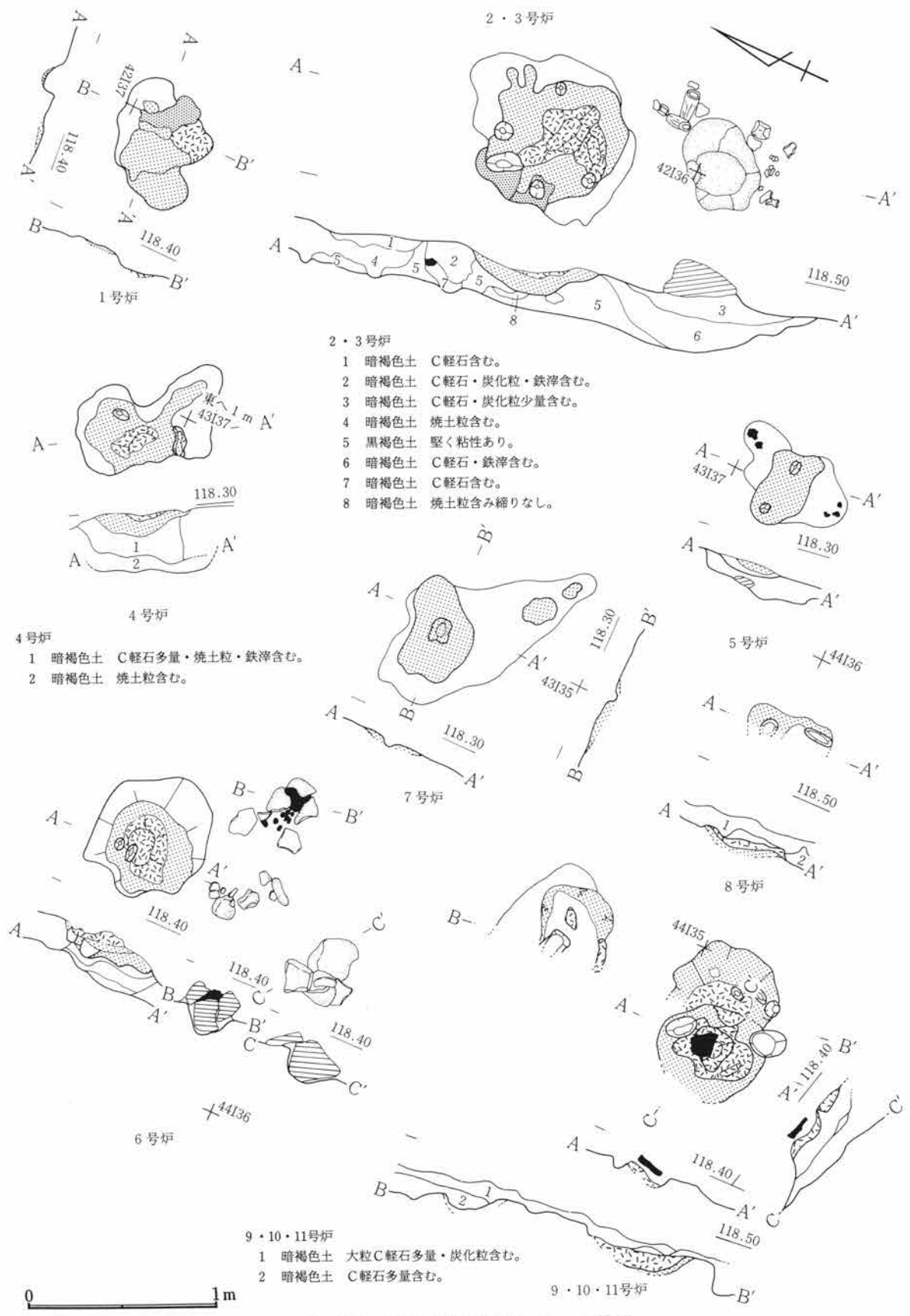


Fig. 686 14号鍛冶工房跡

第4章 鍛冶工房跡



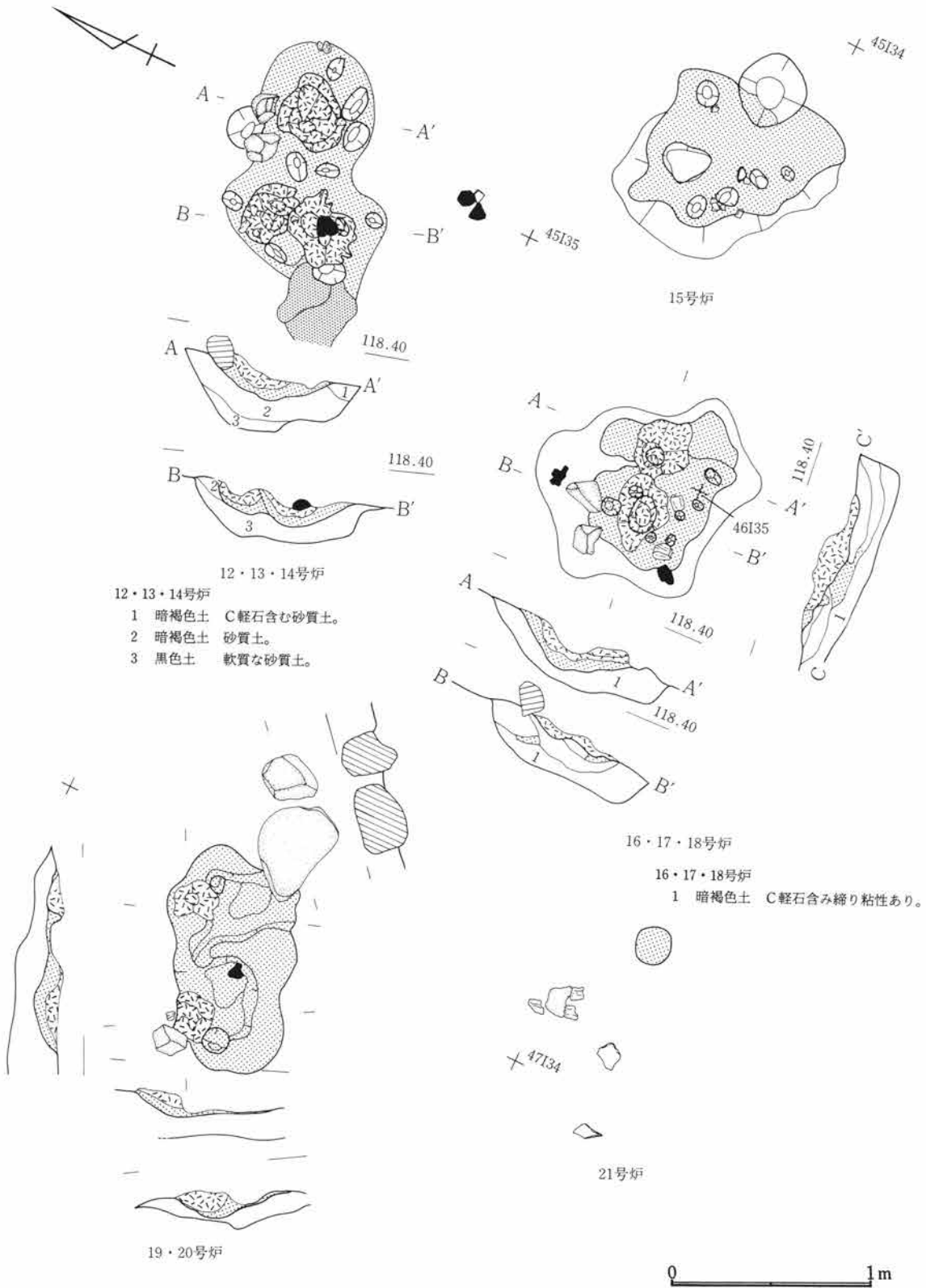


Fig.688 14号鍛冶工房跡 12~21号炉

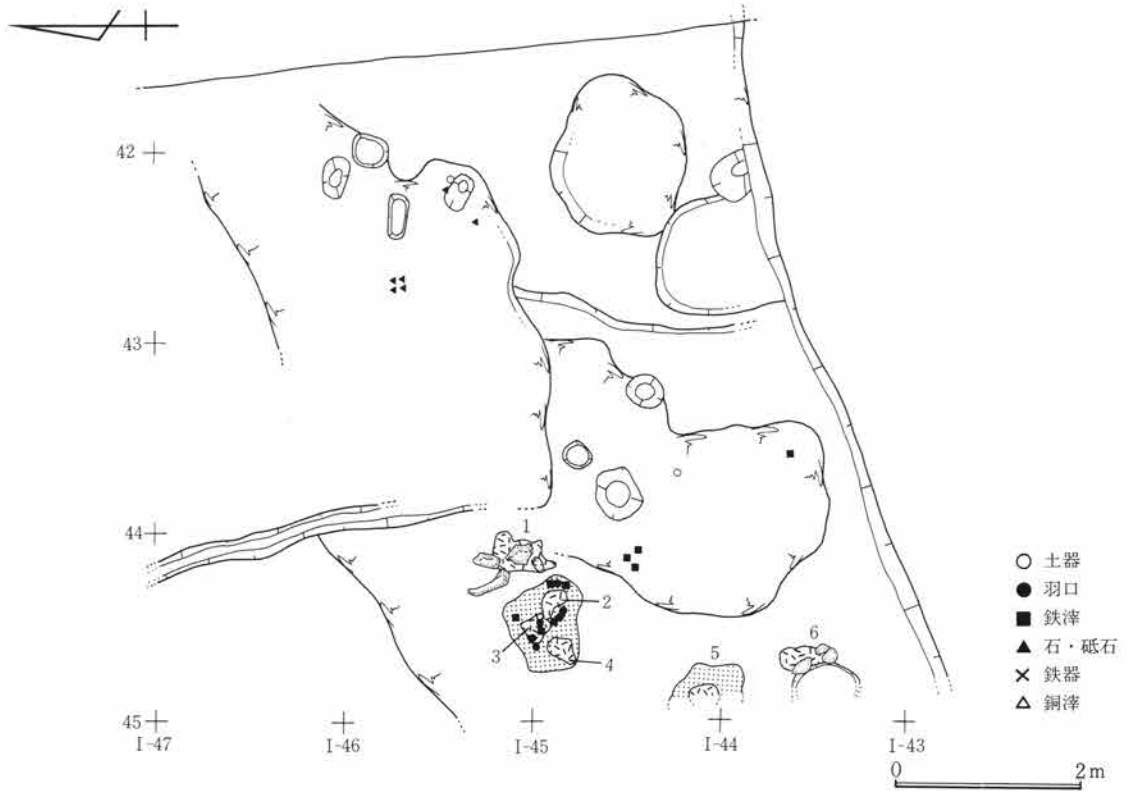


Fig.689 I5号鍛冶工房跡

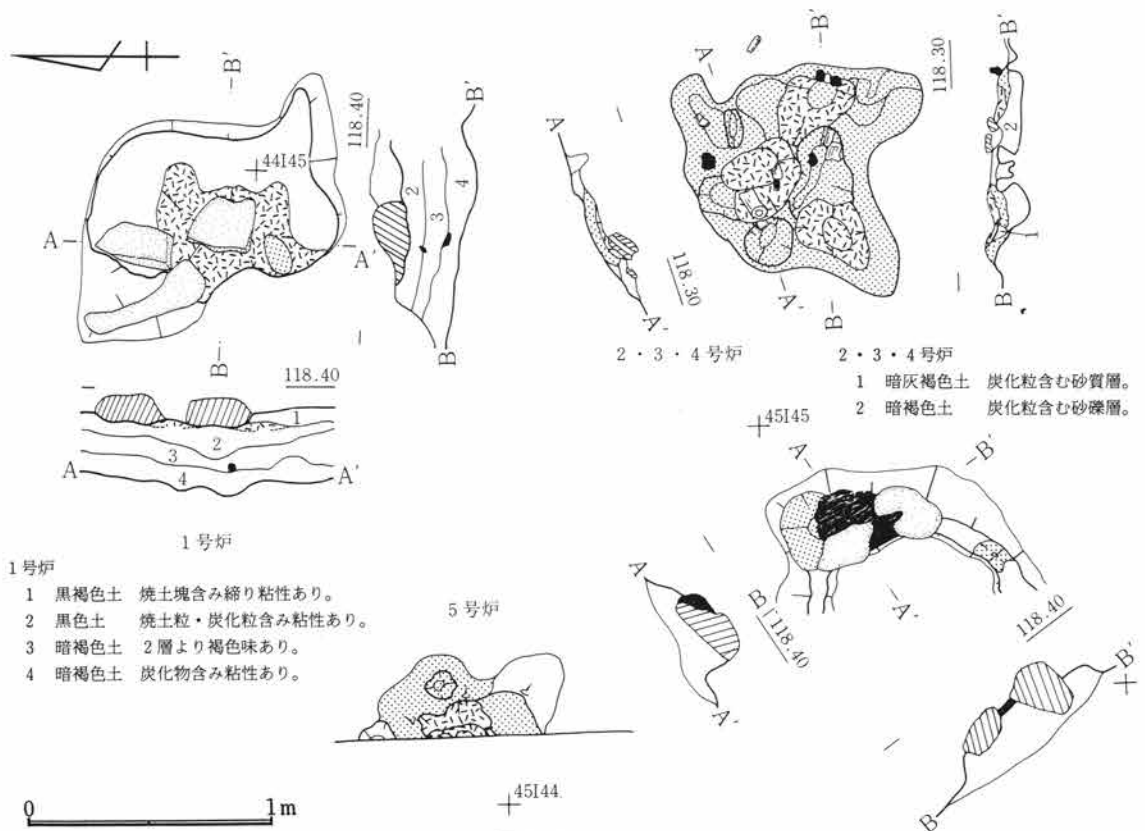


Fig.690 I5号鍛冶工房跡 1～6号炉

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物

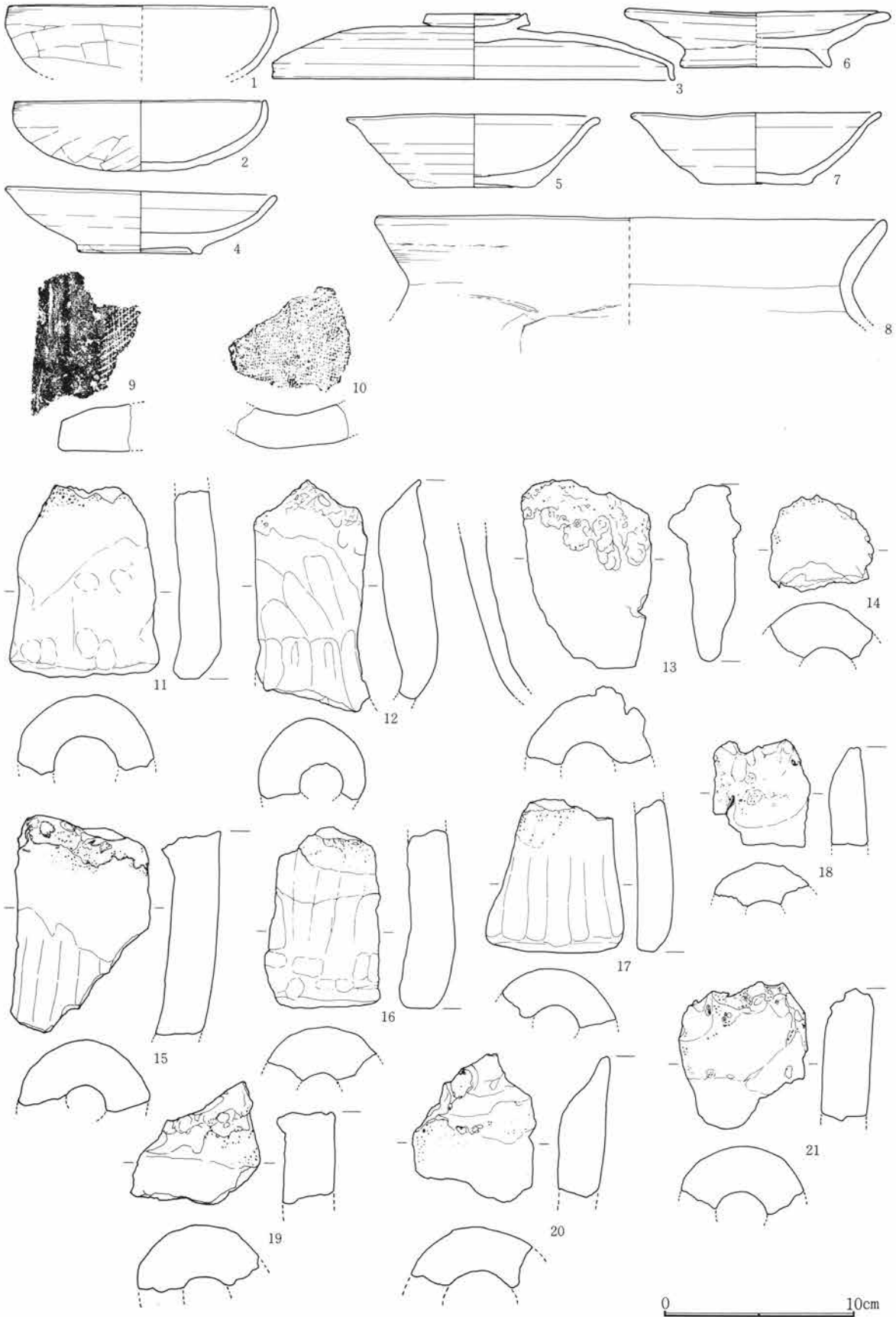


Fig.691 11号工房跡出土遺物(1)

第4章 鍛冶工房跡



Fig.692 I1号工房跡出土遺物(2)

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物



Fig.693 I1号工房跡出土遺物(3)

第4章 鍛冶工房跡

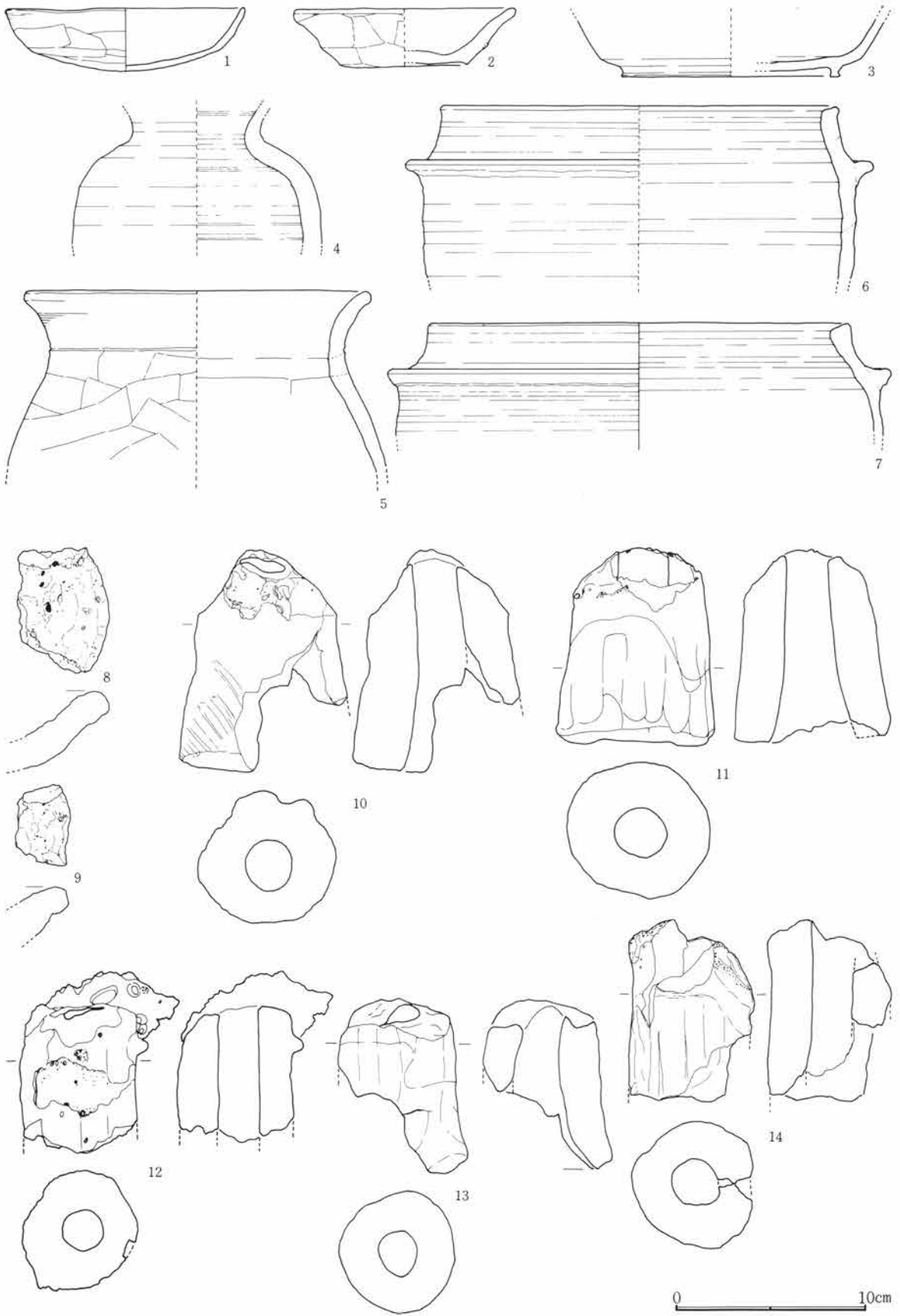


Fig.694 I2号工房跡出土遺物(1)



Fig. 695. I 2号工房跡出土遺物(2)

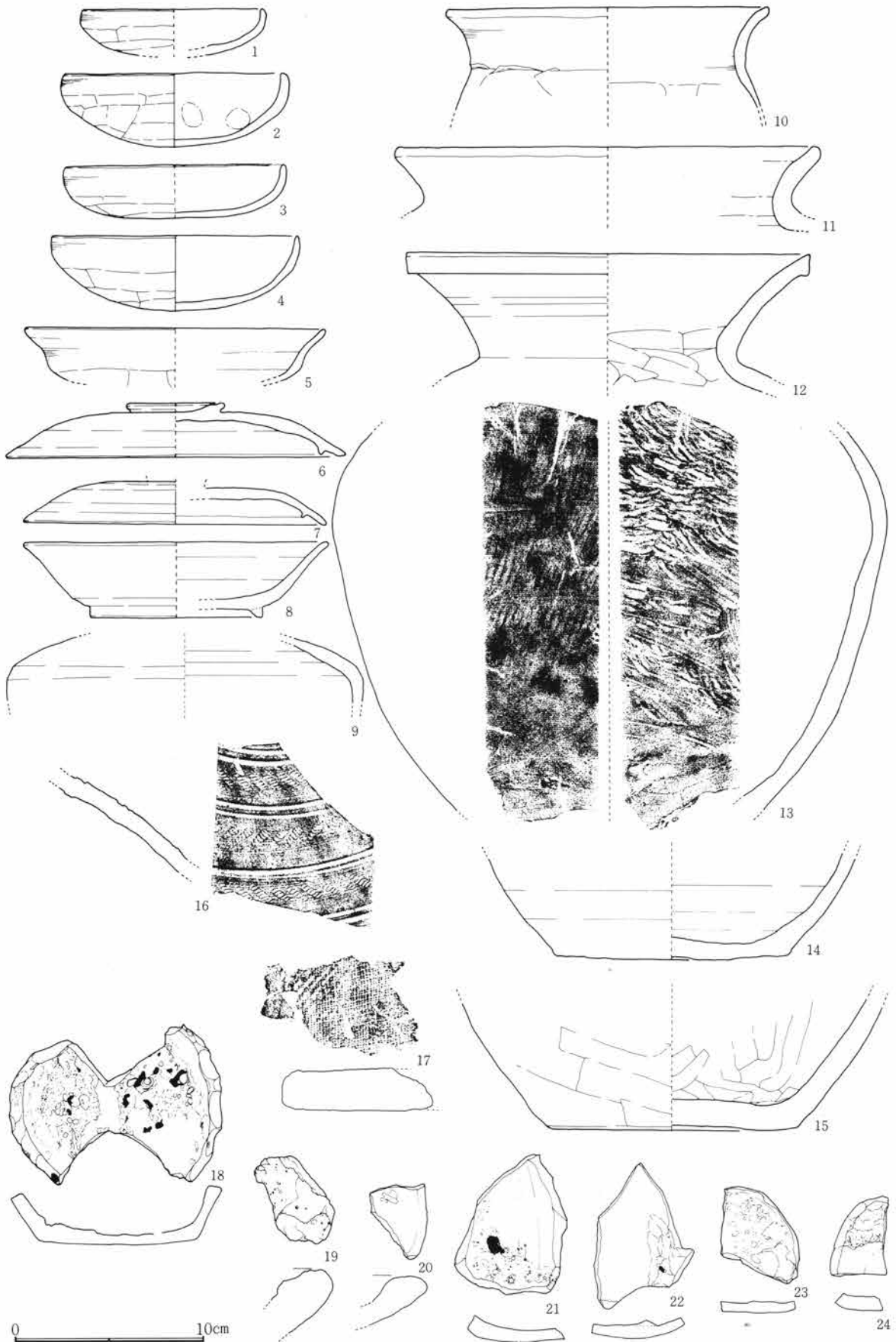


Fig.696 13号工房跡出土遺物(1)

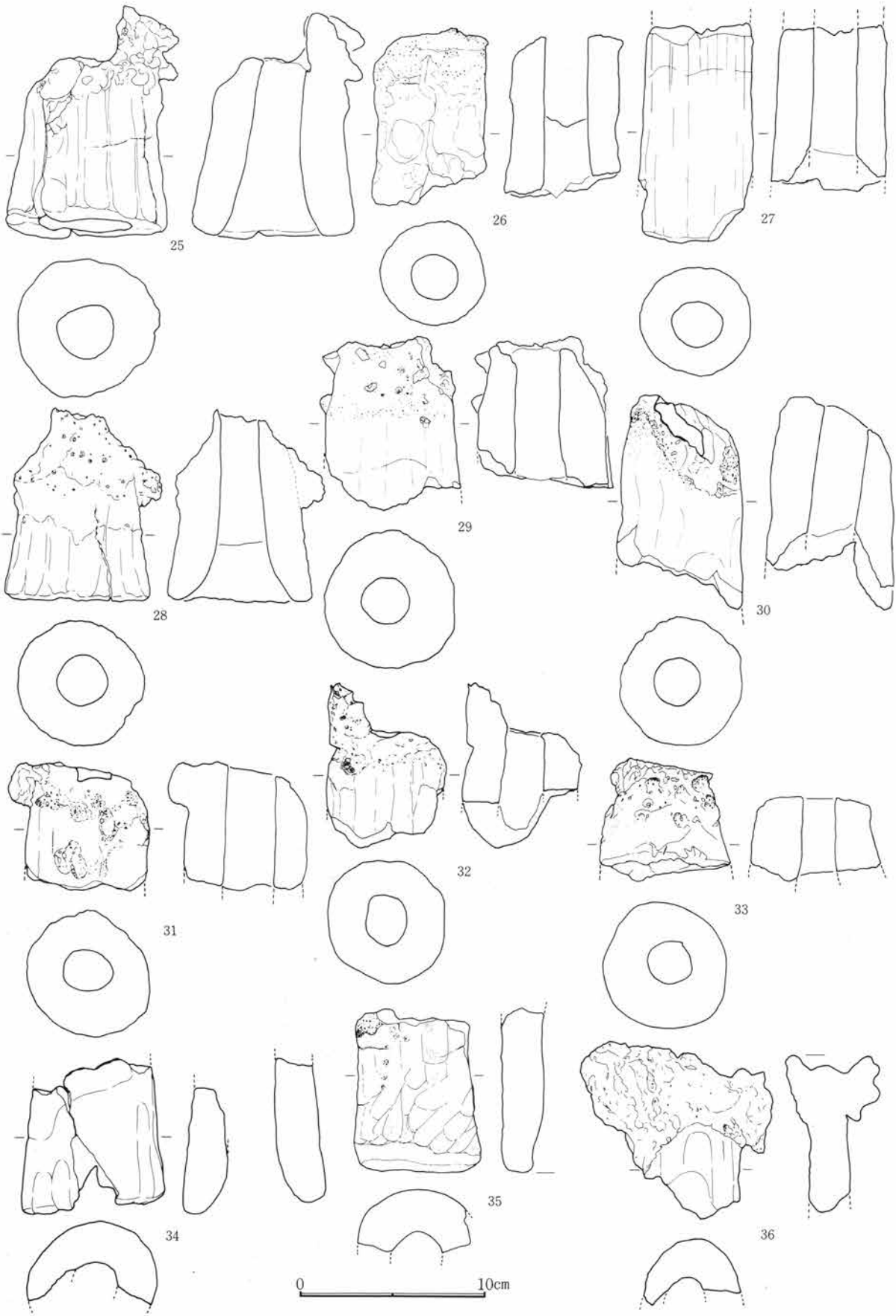


Fig.697 I3号工房跡出土遺物(2)



Fig. 698 I3号工房跡出土遺物(3)



Fig.699 I3号工房跡出土遺物(4)



Fig.700 14号工房跡出土遺物

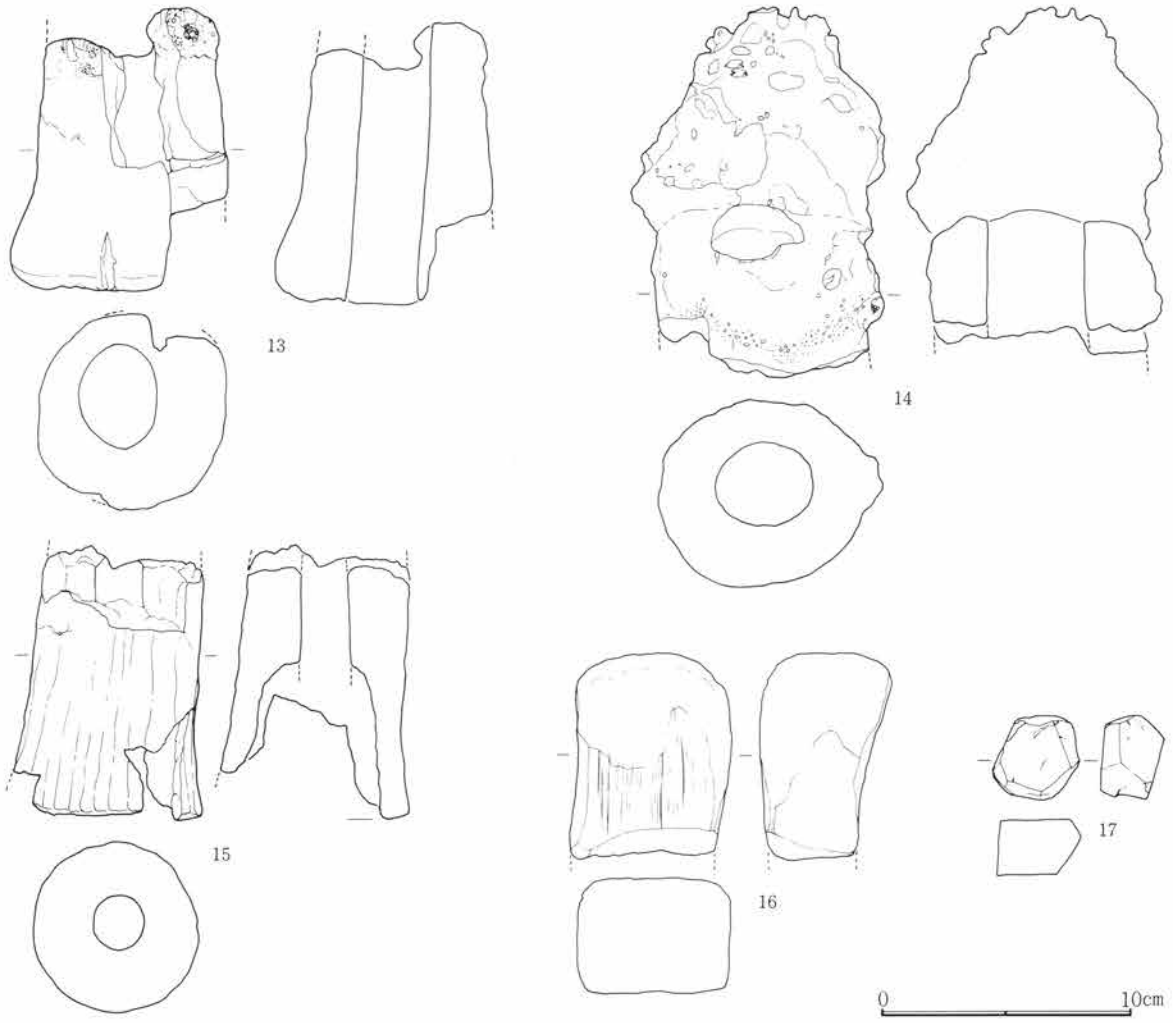


Fig.701 14号工房跡出土遺物(2)

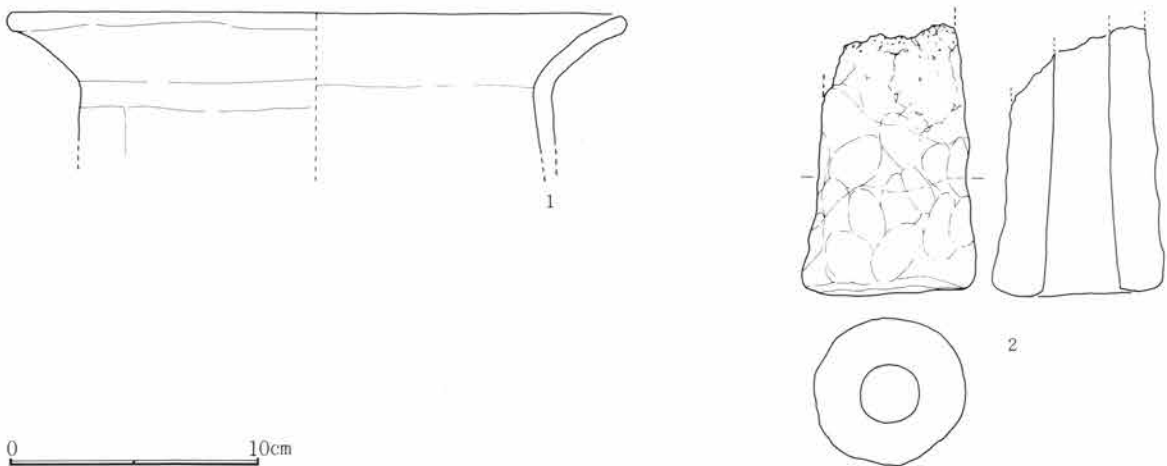
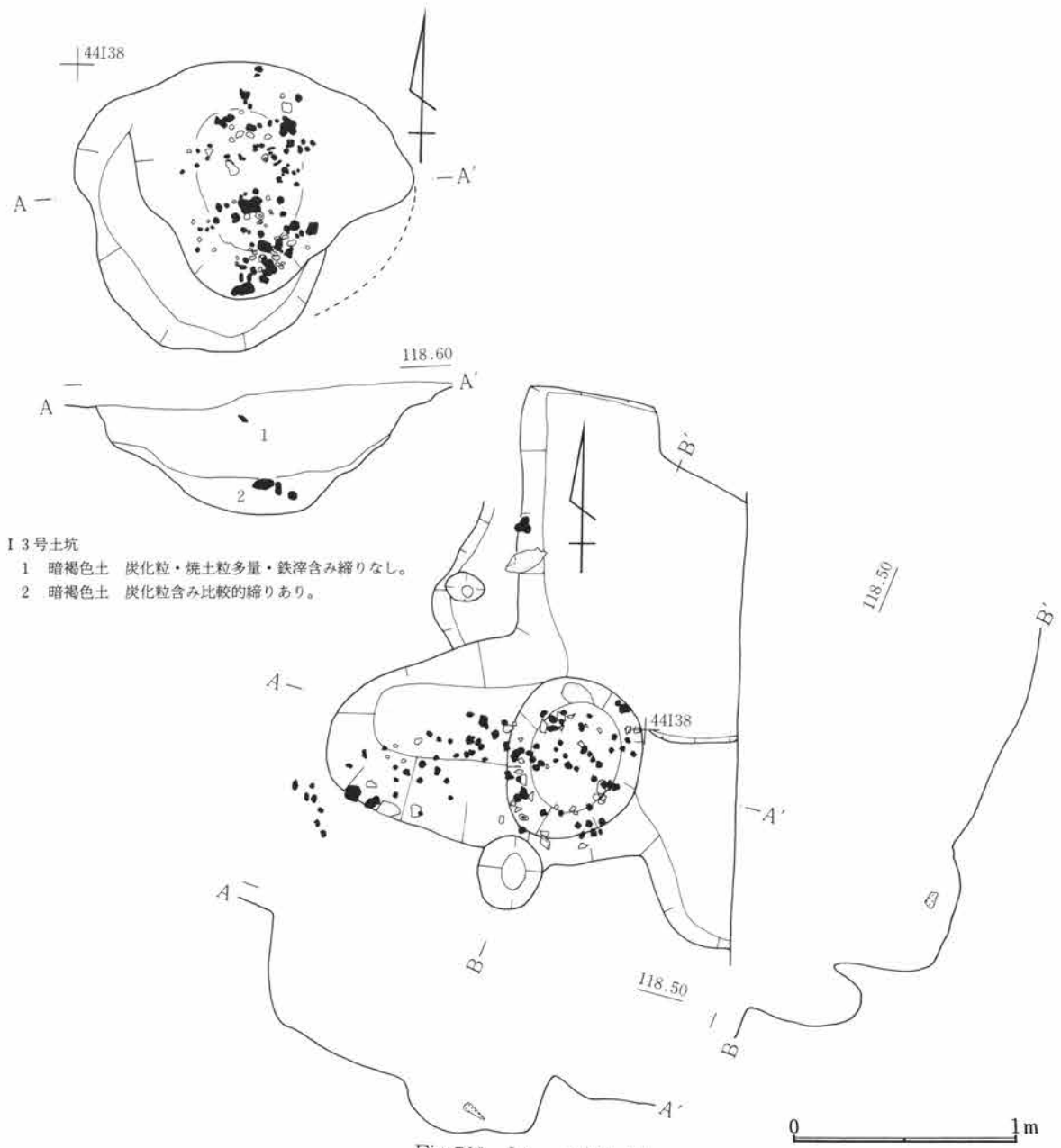


Fig.702 15号工房跡出土遺物



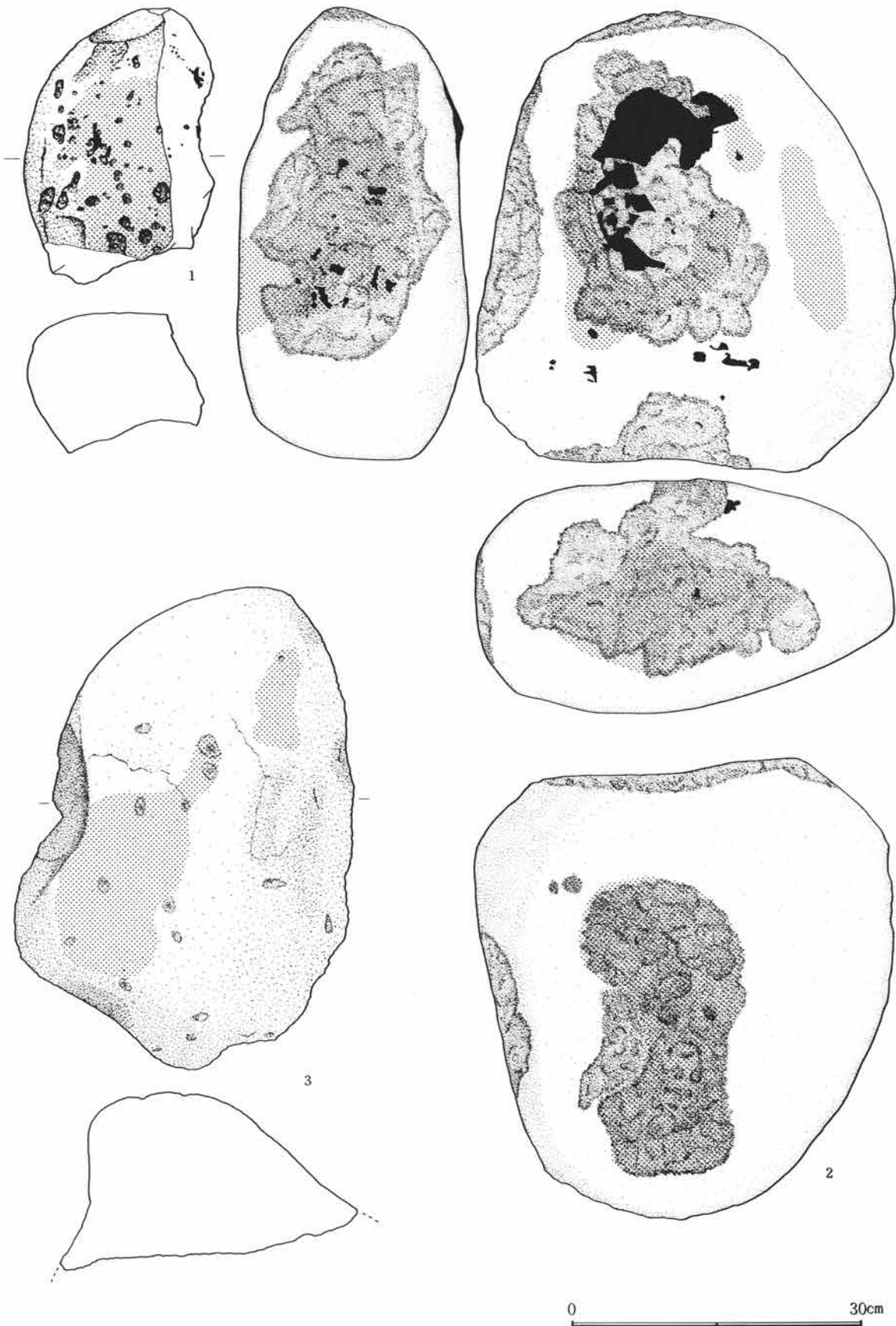


Fig.704 I区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

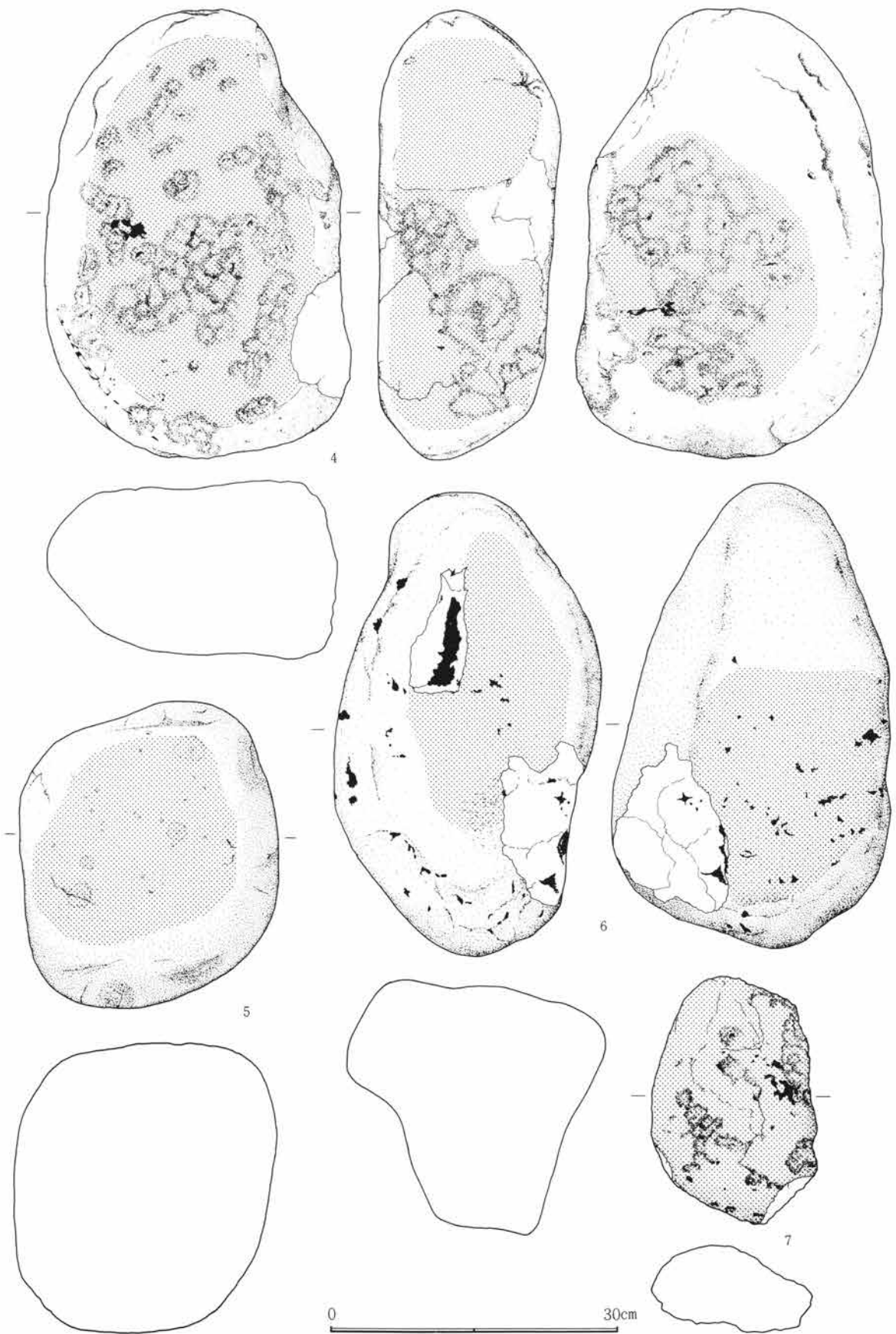


Fig.705 I区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

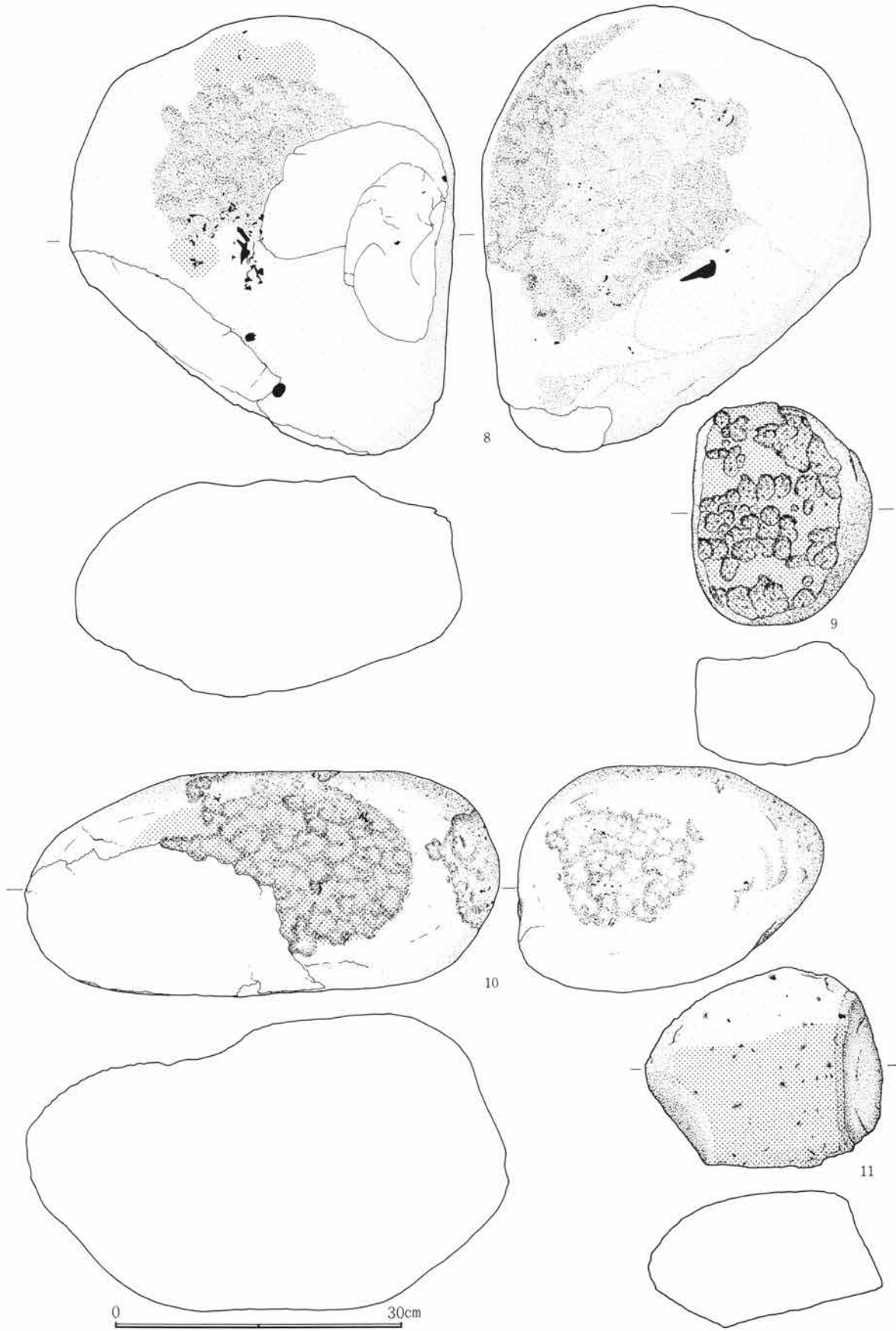


Fig.706 I区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

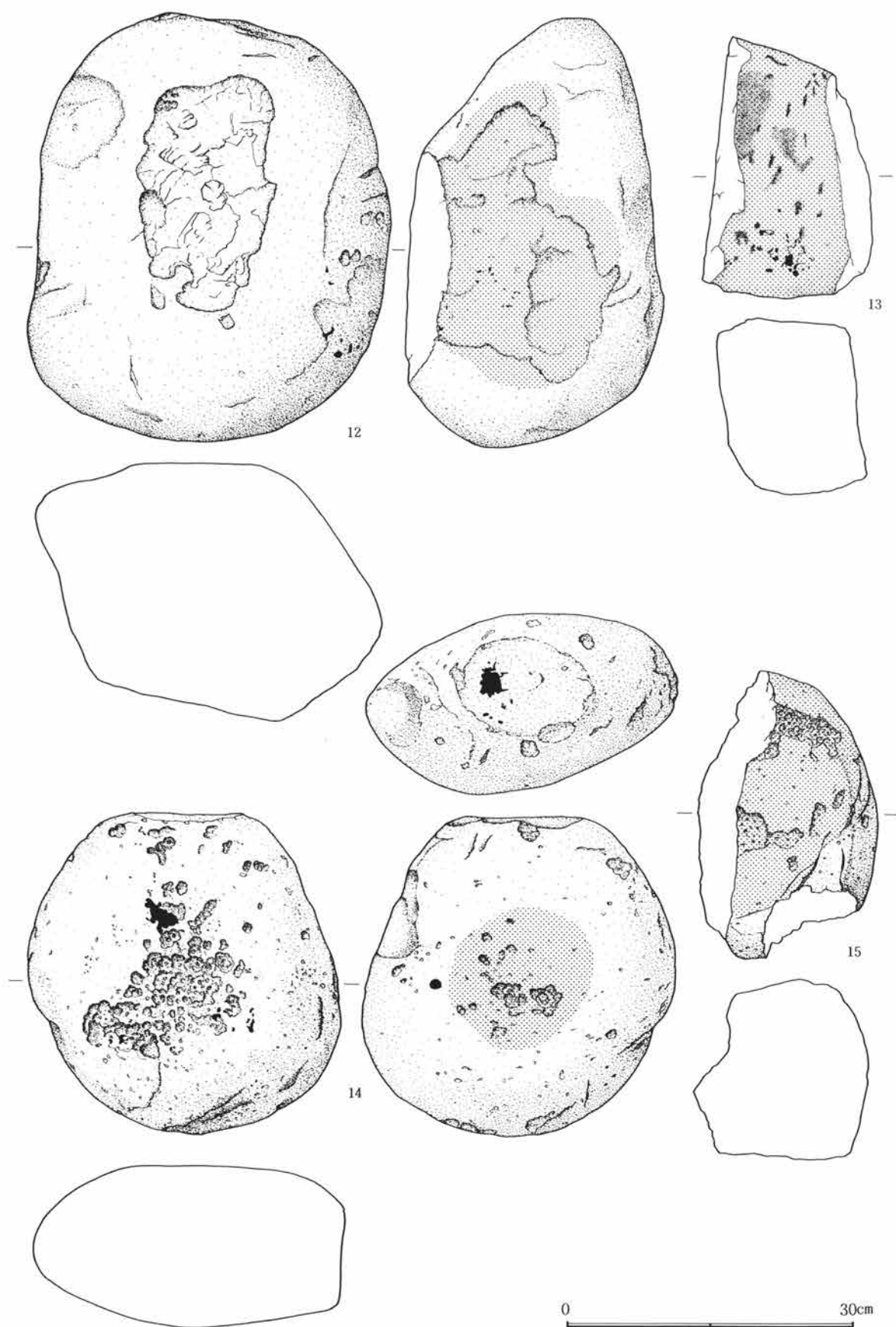


Fig.707 I区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

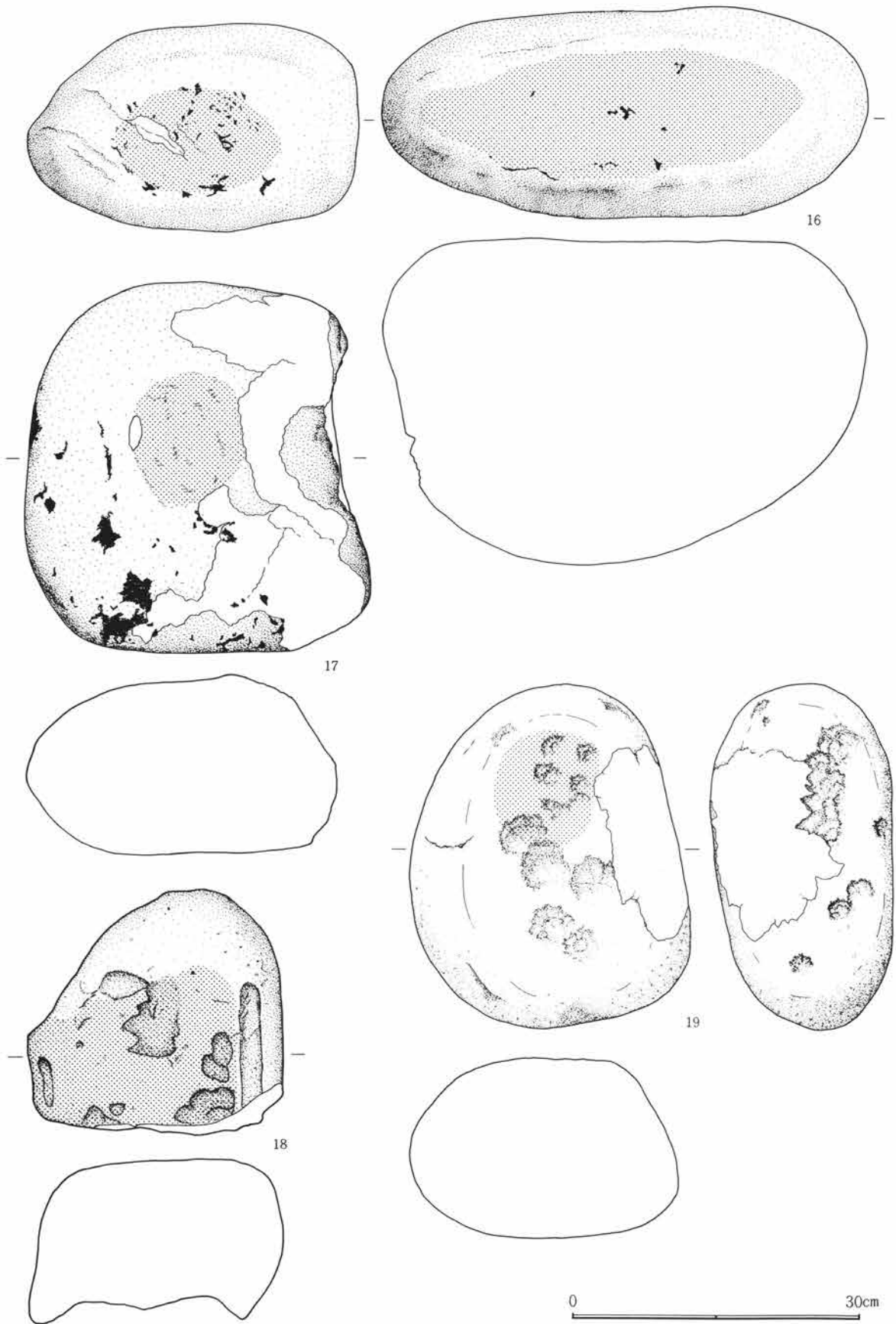


Fig.708 I区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

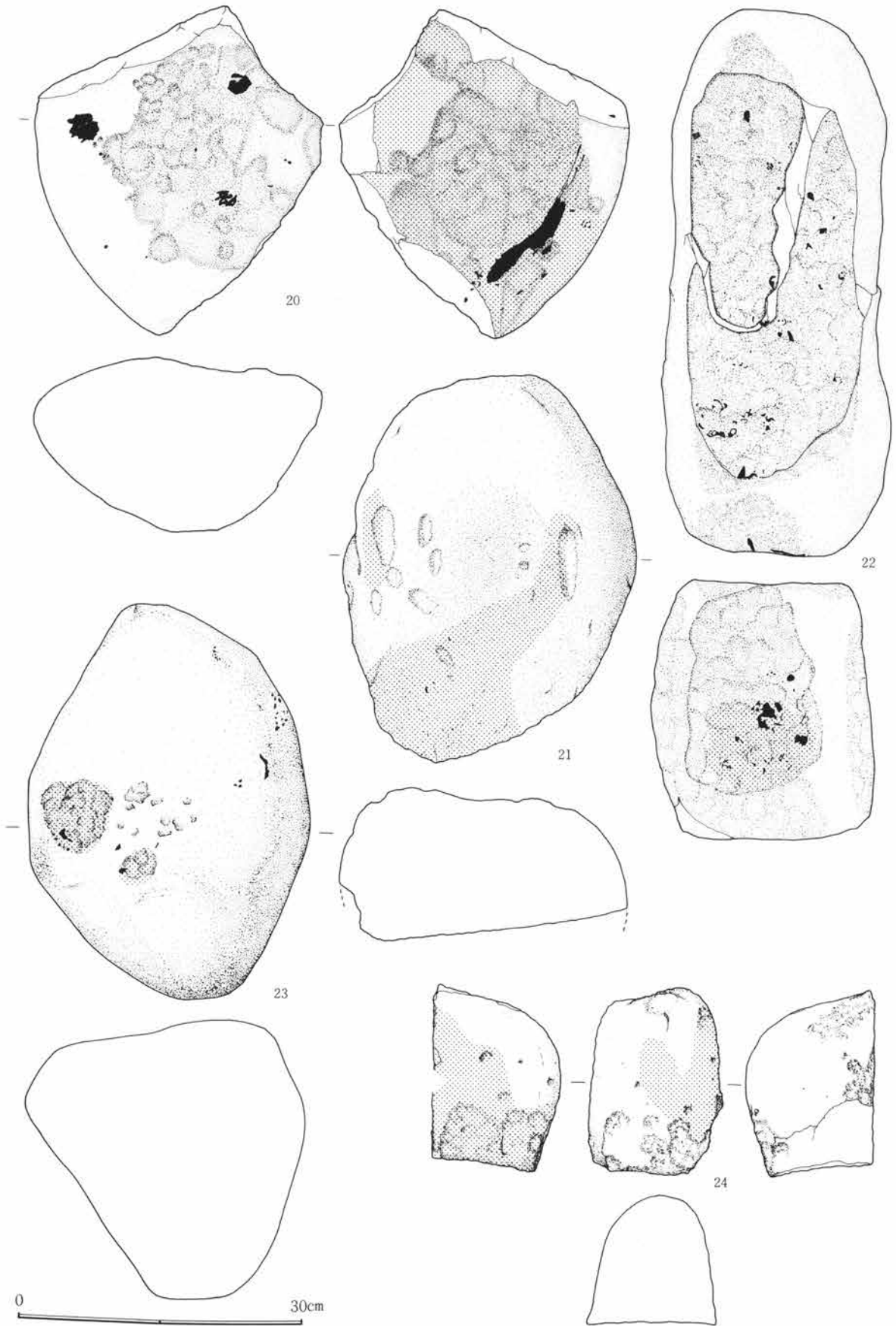


Fig.709 I区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

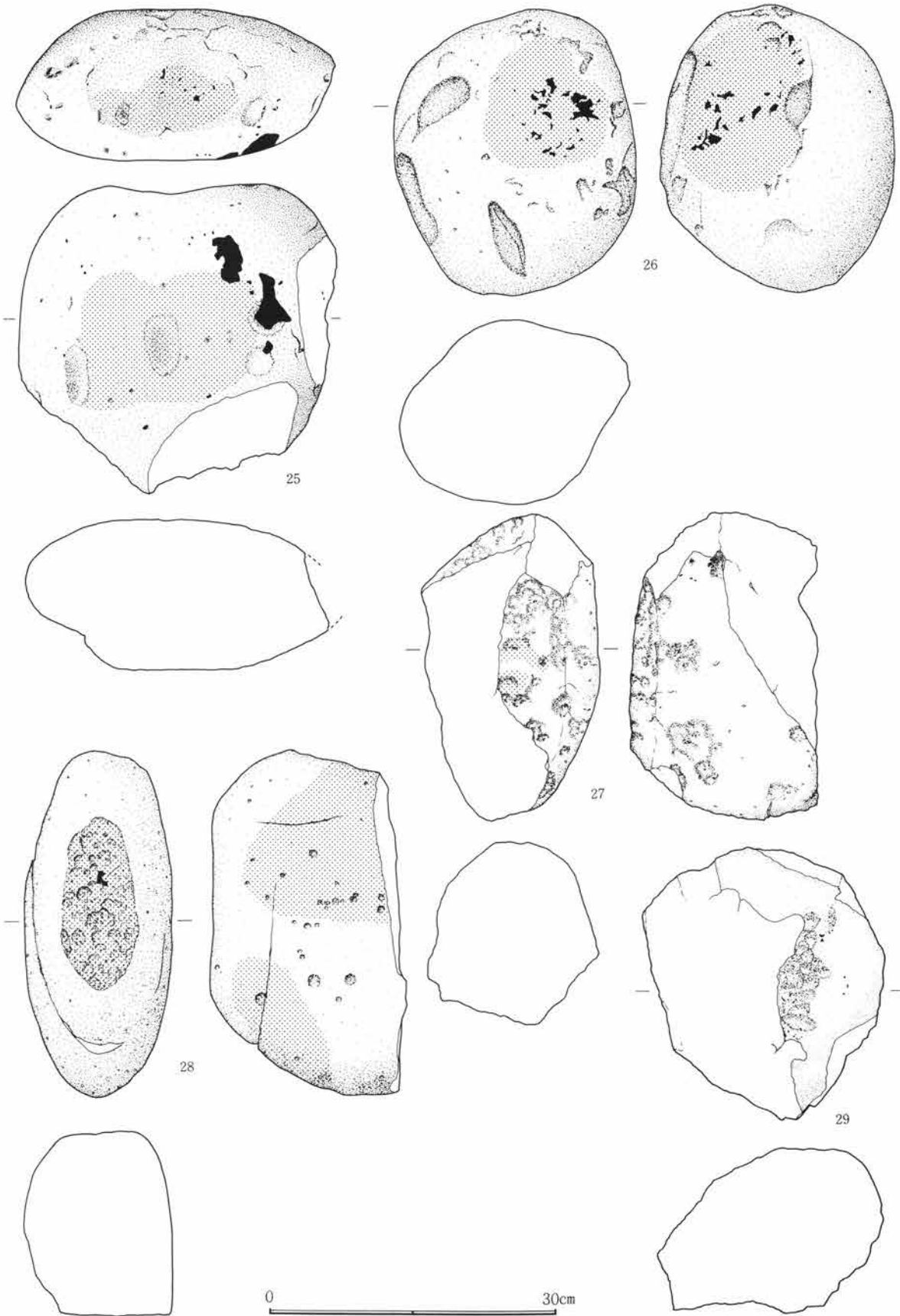


Fig.710 II区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

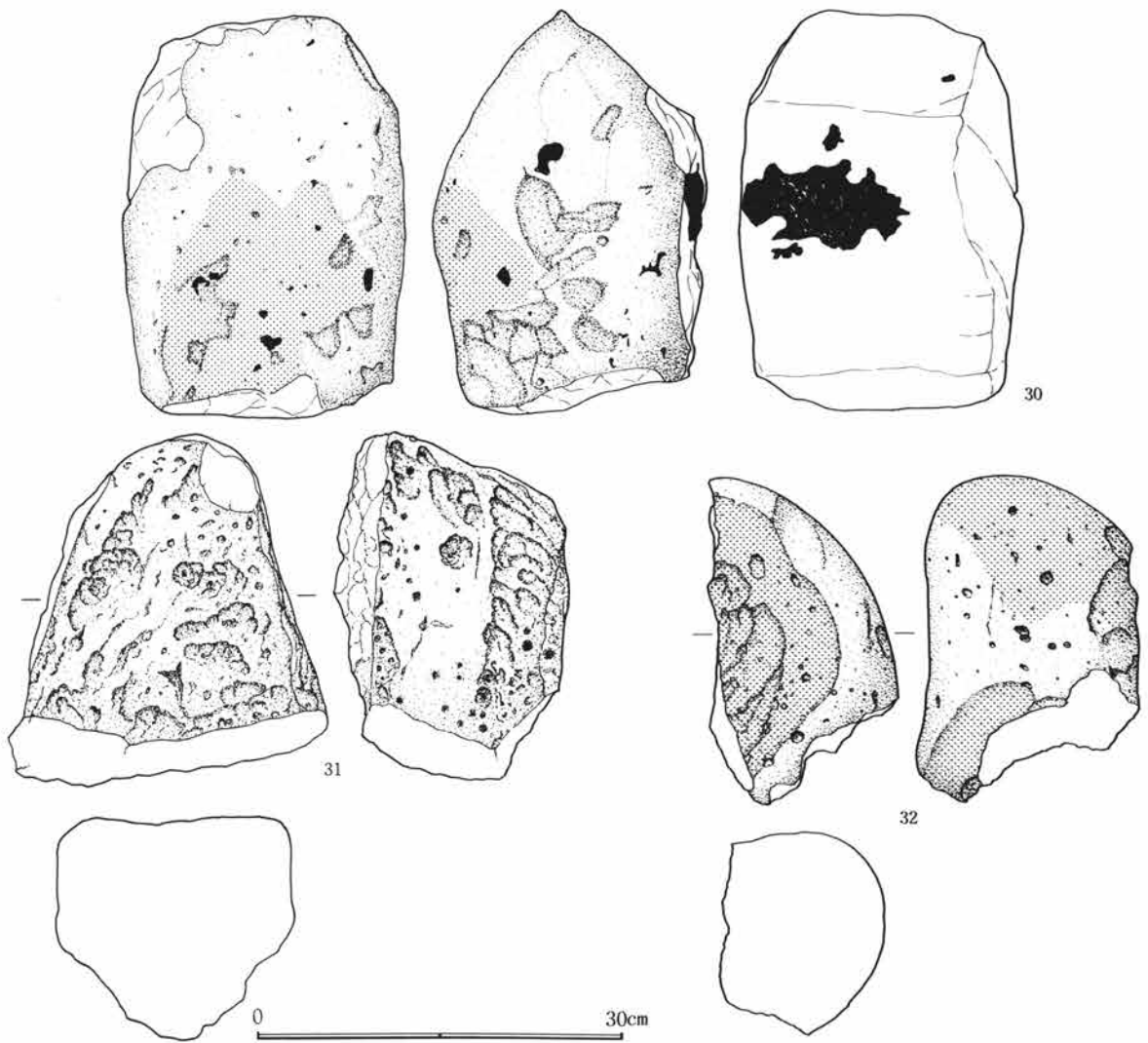


Fig.711 II区鍛冶工房跡出土台石(鉄床)

I 1号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他			
691-1 259-1	土 師 器 坏	1/4	(13.9)×-(3.5)	40 I 16	体部深く、口縁部内傾気味に立つ。口縁部横撫で、体部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密			
691-2 259-2	土 師 器 坏	1/2	13.2×-13.6	40 I 18	体部深く丸味をもつ。口縁部直立、口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③密			
691-3 259-3	須 惠 器 蓋	1/2	21.1×-3.4 摘径3.4	40 I 18	天井部平坦。口縁部直に折れ端部外反気味。環状摘。天井部回転篋削り。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗、黒色粒混る			
691-4 259-4	縁 釉 陶 器 皿	1/4	14.2×6.3×3.4	45 I 23	底部肥厚、体部内湾して開き口縁部内面段をなし外反する。内面篋磨き。底、腰部回転篋削り。釉調鈍い緑。底部無釉	①良好 ②鈍い橙③やや密			
691-5 259-5	須 惠 器 坏	完	13.3×6.3×3.8	41 I 23	底径小さく体部直線的に外傾。口唇部丸く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、良好 ②灰橙 ③やや粗			
691-6 259-6	土 師 器 皿	1/2	13.8×8×3.1	45~48 I B~20	口縁部水平に近く外反、口唇部丸く肥厚する。付高台、八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密、黒色粒混る			
691-7 259-7	須 惠 器 坏	完	13.1×6×3.7	45 I 24	体部僅かに内湾して開き、口唇部は丸く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗、小石混る			
691-8 259-8	土 師 器 壺	口縁部 1/4	27.8×-×(5.5)	40・41 I 12・13	口縁部直線的に外傾、口縁部横撫で。胴部篋削り	①良好 ②橙 ③やや粗、細砂混る			
Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
691-9 259-9	瓦 平瓦	45~48 I 13~20	厚2.3	凹面布目。凸面篋削り側縁篋調整。酸化焼成胎土密。	692-22 259-22	羽 口 先端部小片	61 I 40	長(4.7) 径 - 孔 -	先端部溶解
691-10 259-10	瓦 丸瓦?	42・43 I 12・13	厚2	凹面布目、凸面縄目後撫で。側縁篋調整。胎土やや粗	692-23 259-23	羽 口 先端部小片	41 I 17	長(6.3) 径 - 孔(2.4)	先端部炉壁付着。外面縦篋調整か。
691-11 259-11	羽 口	45 I 17	長(10) 径7.2 孔3.4	先端部欠損。外面指頭調整。内面基部篋削り基部開く	692-24 259-23	羽 口 先端部小片	42 I 18	長(5.5) 径 - 孔 -	先端部溶解物付着
691-12 259-12	羽 口	41 I 17	長(12) 径5.5 孔2.2	先端部溶解。基部器肉薄り。紐作り。基部大きく開く	692-25 259-25	羽 口 先端部小片	41 I 17	長(5) 径 - 孔 -	先端部溶解
691-13 259-13	羽 口	45~48 I 13~20	長10 径6.6 孔2.4	先端部鉄分付着著しい	692-26 259-26	羽口先端 部小片	44 I 17	長(4.5) 径 - 孔(2)	先端部溶解滓付着
691-14 259-14	羽 口	40 I 17	長(5) 径(7) 孔(3)	先端部小片	692-27 259-27	羽 口 先端部小片	42 I 17	長(3.5) 径 - 孔(3.2)	先端部溶解。器内薄い
691-15 259-15	羽 口	39 I 17	長(11.2) 径(7) 孔(2.4)	先端部溶解、基端部欠損、外面縦篋調整か	692-28 260-28	砥 石 角閃石安 山岩		7.7×4.9×4.2 66.3g	多面使用
691-16 259-16	羽 口	41 I 17	長(9.3) 径(7) 孔(2.6)	先端部欠損。基小さく開く。外面縦篋、基部指頭調整	29 692-29 260-	砥 石 角閃石安 山岩		3.5×5.6×3 164.1g	片面及び両端部使用。
691-17 259-17	羽 口	41 I 17	長(8) 径(7) 孔(2.5)	先端部欠損。基部僅かに開く。外面縦篋調整	30 692-30 260-30	砥 石 流 紋 岩 (砥沢?)		4×2.9×2.2 28.8g	多面使用。
691-18 259-18	羽 口 先端部小片	42 I 17	長(5.6) 径一 孔(3.2)	先端部小片、溶解	692-31 260-31	砥 石 角閃石安 山岩		5×3×1.5 19.3g	1面・側縁使用、扁平
691-19 259-19	羽 口 先端部小片	42 I 17	長(6.4) 径(7) 孔(2.7)	先端部溶解著しい	692-32 260-32	砥 石 角閃石安 山岩		3.7×2.9×2.9 24.8g	多面使用。
691-20 259-20	羽 口 先端部小片	43 I 17	長(7.6) 径 - 孔(3.5)	先端部細く尖る溶解著しい	692-33 260-33	砥 石 角閃石安 山岩		45×4.4×3.3 59.7g	多面使用。
691-21 259-21	羽 口 先端部	41 I 17	長(7.5) 径(6.8) 孔(2.7)	先端部溶解。暗赤褐色部分あり。	692-34 260-34	砥 石 角閃石安 山岩		3.9×4.9×1.9 19.6g	多面使用、溝状擦痕あり。扁平

第4章 鍛冶工房跡

1 1号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
692-35 260-35	砥石 流紋岩		3.5×3.6×3.2 61.6g	多面使用。	693-54 260-54	砥石 砂岩?	41 I 18	6.4×4.1×2.8 114.2g	3面使用
692-36 260-36	砥石 角閃石安山岩		6.4×6×2.8 61.4g	多面使用。中央部に 径1cmの穿孔	693-55 260-55	砥石 ?	44 I 17	4.2×2.8×1.2 11.5g	2面使用。
692-37 260-37	砥石 角閃石安山岩		5.3×5×4.5 88.3g	1面使用、スタンプ 型	693-56 260-56	砥石?	41 I 15	2.9×2.9×0.9 8.2g	羽口片か
692-38 260-38	砥石 角閃石安山岩		5×3.3×3.9 32.3g	1面使用。スタンプ 型	693-57 260-57	砥石 角閃石安山岩	41 I 15	5.7×4.2×3.2	多面使用。
692-39 260-39	砥石 角閃石安山岩		4.6×6×3.3 47.3g	多面使用。刃痕顕著	693-58 260-58	砥石 角閃石安山岩	41 I 18	4.8×4.8×4.7 70.0g	多面使用。スタンプ 形溝状擦痕あり。
692-40 260-40	砥石 角閃石安山岩		4.5×4.8×4.5 42.0g	多面使用	693-59 260-59	砥石 角閃石安山岩	41 I 18	4.2×3.4×3.6 26.8g	多面使用。刃痕あり。 スタンプ形
692-41 260-41	砥石 角閃石安山岩		5.7×4.6×4.7 121.8g	多面使用。刃痕あり。	693-60 260-60	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	5.2×3.5×2.7 27.9g	多面使用。幅広い刃 痕顕著。
692-42 260-42	砥石 角閃石安山岩		7.2×5.9×3 68.2g	多面使用。扁平	693-61 260-61	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	5.8×3.6×2.6 28g	1面及び縁辺使用。 細刃痕あり。スタンプ 形
692-43 260-43	砥石 角閃石安山岩		4.7×4×4.6 60.5g	多面使用。溝状擦痕 あり、スタンプ型	693-62 260-62	砥石 角閃石安山岩	41 I 16	6×3.6×2.4 45.3	多面使用
692-44 260-44	砥石 角閃石安山岩		5.8×7×5.3 138.1g	1面及び縁辺使用。 スタンプ型	693-63 260-63	砥石 角閃石安山岩	41 I 16	2.5×2.8×2.5 13.6	3面使用。
692-45 260-45	砥石 角閃石安山岩		5.5×3.5×4.7 76.1g	1面及び縁辺使用。 スタンプ型	693-64 260-64	砥石 角閃石安山岩	41 I 15	4.1×2.7×4.1 21.4g	多面使用。
692-46 260-46	砥石 角閃石安山岩		9.2×6.7×7.3 319.4g	多面使用。刃痕顕著。	693-65 260-65	砥石 角閃石安山岩	41 I 16	3.5×4×2 22.3	2面使用
693-47 260-47	砥石 角閃石安山岩		3.5×3.7×3.1 35.3g	多面使用	693-66 260-66	砥石 角閃石安山岩	41 I 16	5×3.5×2.8 19.6g	多面使用、刃痕顕著
693-48 260-48	砥石 角閃石安山岩		4.3×4.2×3.7 51.7g	多面体、多面使用	693-67 260-67	砥石 角閃石安山岩		55×3.8×2.5 44.5g	多面使用。
693-49 260-49	砥石 角閃石安山岩		4.5×5.1×3.3 53.4g	多面使用。スタンプ 型	693-68 260-68	砥石 角閃石安山岩	41 I 15	3.4×3.3×4 36.9g	多面使用。
693-50 260-50	砥石 角閃石安山岩		4.2×3.1×3.1 25.4g	多面使用。	693-69 260-69	砥石 角閃石安山岩	42 I 19	3×2.8×2.1 10.3g	多面使用
693-51 260-51	砥石 流紋岩 (砥沢?)		3.3×27×1.4 15.5g	多面使用	693-70 260-70	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	4.1×3.3×2.8 22g	多面使用、刃痕あり。
693-52 260-52	砥石 角閃石安山岩	42 I 17	4.6×4.7×4 82.2g	多面使用	693-71 260-71	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	3.3×3.3×2.8 15.9g	多面使用。刃痕あり。
693-53 260-53	砥石 ?	41 I 18	5.1×4.2×4.6 148.1g	多面使用。刃痕顕著。	693-72 260-72	砥石 角閃石安山岩	43 I 18	2.8×2.2×1.8 6.3g	2面使用、刃痕あり。

I 1号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
693-73 260-73	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	3×2.8×2.9 8g	多面使用	693-80 260-80	砥石 角閃石安山岩	41 I 16	2.7×1.8×1.7 6.5g	多面使用。
693-74 260-74	砥石 角閃石安山岩	41 I 15	5×3.5×2.7 28g	多面使用。幅広い刃痕顯著	693-81 260-81	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	3.6×1.7×1.5 7.4g	多面使用
693-75 260-75	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	2.8×2.2×1.7 9.2g	多面使用	693-82 260-82	砥石 角閃石安山岩	41 I 15	3.2×2×1.4 4.3g	多面使用。
693-76 260-76	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	3.8×2.8×2.4 11.8g	多面使用	693-83 260-83	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	4.9×2.3×2.4 11.4g	多面使用。
693-77 260-77	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	3×3.7×2.4 20.4g	多面使用	693-84 260-84	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	3.3×2.8×2.2 9.3g	多面使用。
693-78 260-78	砥石 角閃石安山岩	42 I 17	1.8×1.7×1.2 3g	多面使用。細刃痕あり	693-85 260-85	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	2.6×1.9×1.2 4.3g	多面使用。
693-79 260-79	砥石 角閃石安山岩	42 I 16	2.8×1.5×1.2 5g	多面使用。刃痕あり					

I 2号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他			
694-1 260-1	土師器 坏	1/2	12.5×-×3.3		底部丸く張り気味。口縁部幅広く内湾して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る。			
694-2 260-2	土師器 坏	1/2	11.6×6.6×3	埋土	体部直線的でわずかに外反、口唇部丸く内湾気味。体部指頭後篋削り。底部平底手持篋削り。	①やや軟 ②橙 ③やや粗			
694-3 260-3	土師器 盤	底部1/4	-×4.4(3)		腰部強く張る。付高台、断面矩形、轆轤成形。底部・腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密、白色細粒混る			
694-4 260-4	土師器 瓶	肩部1/2	-×-×(7) 頸径6.7胴13		胴部直線的で長胴を呈す。肩部張り頸部外傾気味。胴部横篋削り。内面に黒色付着物あり。	①良好 ②灰黄褐 ③やや密、白色粒混			
694-5 260-5	土師器 甕	口縁部1/4	18.2×-×(9.5) 胴径19.6		口縁部外反し口唇部丸い。肩部張りなく胴部下腹気味。口縁部横撫で、胴部横・斜篋削り、内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密			
694-6 260-6	羽釜	口縁部1/4	20.6×-×(9) 銜径24.5	埋土	胴部張り少なく銜部断面丸い。口縁部外反気味に内傾。口唇部上面平坦をなし内斜する。口縁部・胴部回転篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗、小石混る			
694-7 260-7	羽釜	口縁部1/4	22×-×(5.5) 銜径26	埋土	銜部上方へ反り断面丸い。口縁部外反し強く内傾、口唇部幅広く平坦をなし内斜。口縁部・胴部回転篋撫で。	①酸化 ②鈍い橙 ③やや粗			
Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
694-8 261-8	坩堝 1/4	59・60・61 炉	厚1.7	見込部に銅滓付着、口縁部溶解し、赤銅色を呈す。	694-13 261-13	羽口 先端部欠損		長(9) 径6 孔2.1	基部開く。外面強い縦撫状調整。基部指頭痕
694-9 261-9	坩堝 小片	59・60・61 炉	厚1.9	口縁部溶解し、赤銅色を呈す。8と同一個体か。	694-14 261-14	羽口 基部欠損	58炉	長(9) 径6.3 孔2.5	先端部溶解、細る。外面強い縦撫で調整
694-10 261-10	羽口	58炉	長11.5 径7~9 孔2.4	先端部細り黒く溶解鉄滓付着。基部篋状調整痕、肥厚3cm	694-15 261-15	羽口 先端部欠損	41 I 33	長(13) 径7~8.7 孔2	基部短かく開く。外面縦撫で。篋状工具痕。
694-11 261-11	羽口		長10.2 径6.7~8.3 孔2.3	先端部溶解。外面縦篋削り。基部やや開く。	694-16 261-16	羽口 先端部欠損		長(10.8) 径6.6 孔3	外面縦撫で調整。
694-12 261-12	羽口 基部欠損		長7.5 径6 孔2.1	先端部溶解し、鉄滓多く付着。	695-17 261-17	羽口 先端部		長(7) 径(8.5) 孔(4)	先端黒色に著しく溶解。

第4章 鍛冶工房跡

Ⅰ 2号工房跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
695-18 261-18	羽 口 先端部小片	58炉	長(6.3)	先端部溶解。細る。	695-26 261-26	砥 石 流紋岩 (砥沢?)		3×3×3.2 54.6g	多面使用。
695-19 261-19	羽 口 先端部欠損	58炉	長(9.5) 径6.2 孔2.5	外面縦筥調整。	695-27 261-27	砥 石 流紋岩 (砥沢?)		4×3.1×3.5 65.2g	多面使用。
695-20 261-20	羽 口 先端部欠損	58炉	長(8.1) 径6.4 孔2.5	外面縦筥調整	695-28 261-28	砥 石 流紋岩		4×3.3×3.2 57.1g	多面使用。刃痕あり
695-21 261-21	羽 口	58炉	長9.9	先端部溶解。外面縦筥調整。	695-29 261-29	砥 石 角閃石安山岩	58炉	8×4.8×3.2 63.6g	1面使用。片面に凹あり。
695-22 261-22	羽 口 先端部		長(6) 径5.5 孔2.3	先端部溶解。	695-30 261-30	台石小片 石英閃緑岩			1端面に敲打及び被熱痕あり
695-23 261-23	羽 口 先端部小片	58炉	長(5) 孔2.2	先端部溶解。	695-31 261-31	砥 石 ひん岩		11.9×6.7×3.6 409.5g	わずかな擦痕あり
695-24 261-24	砥 石		9.6×6×6 250.6g	多面使用。刃痕あり	265-32 261-32	砥 石 ひん岩		(10)×6.8×4.1 (389.2g)	わずかな擦痕あり
695-25 261-25	砥 石 流紋岩 (砥沢?)		(8)×6×3 245.5g	多面使用。刃痕あり 片端に未貫通の孔。					

Ⅰ 3号工房跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
696-1 261-1	土師器 坏	1/4	9.8×-×(2.5)		小型で底部扁平。口縁部短かく内湾する。口縁部横撫で。体部筥削り。	①良好 ②橙 ③やや密
696-2 261-2	土師器 坏	完	11.6×-×3.8		底部深く丸く張る。口縁部肥厚し内湾して立つ。口縁部横撫で、底部筥削り。	①良好 ②橙 ③密
696-3 261-3	土師器 坏	1/2	11.5×-×2.8		扁平。底部平坦。口縁部直立気味。口縁部横撫で。底部筥削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る。
696-4 261-4	土師器 坏	1/4	12.9×-×3.4		深く丸い底部。口縁部内湾気味に直立。口唇部細る。口縁部横撫で。底部筥削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗、砂混る。
696-5 261-5	土師器 盤	1/2	15.6×-×(3)		底部扁平。口縁部くびれて外反して開き、上半は内湾気味口縁部横撫で。底部筥削り。	①良好 ②鈍い黄橙 ③やや粗、細砂混る。
696-6 261-6	須恵器 蓋	1/2	11.8×-×2.8 摘径5.2		天井部扁平。体部直線的に開き口唇部に至る。内面略三角のかえり付く。環状摘、断面丸い。轆轤成形、天井回転筥削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
696-7 261-7	須恵器 蓋	1/2、摘欠損	16×-×(2)		天井部平坦。体部直線的に開く。内面やや上方に小さく鋭いかえり付く。天井部回転筥削り。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③粗小石混る。
696-8 261-8	須恵器 椀	小片	16×9.3×4		体部浅く、外反して大きく開く。付高台。低い、底部・腰部回転筥削り。轆轤成形。	①良好 ②黄灰 ③やや粗
696-9 261-9	須恵器 長頸瓶	肩部	-×-×(3.3) 肩頸18.7		肩部強く張る。胴部回転筥削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
696-10 261-10	土師器 甕	口縁部 1/4	17×-×(5.2)		肩部張り少なく口縁外反して立つ。胴部器肉薄い。口縁部横撫で。胴部横筥削り。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る。
696-11 261-11	土師器 甕	口縁部 1/4	22.2×-×(4.3)		口縁部肥厚し強く外反。口唇部は丸く内湾気味。口縁部横撫で。内面横筥削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る。
696-12 262-12	須恵器 甕	口縁部 1/4	21.2×-×(7.2)		口縁部直線的に外傾し、口唇部直立し端部細い三角。内面筥削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
696-13 262-13	須恵器 甕	胴部小片			胴部平行叩き、横線あり、下位筥削り。内面青海波状あて目。	①良好 ②灰白 ③やや密
696-14 262-14	須恵器 甕	底部 高台欠	-×-×(6.5)		胴部下位回転筥削り。内面不定方向撫で。	①良好 ②灰 ③やや密

I 3号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器 形 ・ 成 形 及 び 調 整 の 特 徴					①焼成 ②色調 ③胎土 その他
696-15 262-15	須 惠 器 壺	底部½	—×13.2×(6.9)		胴部叩き目後斜筥削り。内面強い縦横撫で。					①良好 ②灰白 や や粗
696-16 262-16	須 惠 器 壺	胴部小 片			2条1組の沈線区画内に6~7単位の櫛歯状列点文。					①良好 ②灰 ③密
Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	
696-17 262-17	瓦 平 瓦		厚 2	凹面布目。側縁筥調整。白色粒多く混る	697-34 262-34	羽 □ 先端部欠 損	111~114 炉	長(7.7) 径 7 孔2.5	外面縦筥調整	
696-18 262-18	転用坩堝 須 惠 器 杯	91-94炉	口径11 底径8.2 高2.8	口縁部を細かく平均に欠く。内面に銅滓附着。底部手持筥削り	697-35 262-35	羽 □ 炉	91~138 炉	長8.5 径(6.5) 孔2.7	先端部溶解。外面弱い筥撫で	
696-19 262-19	坩 堝 小 片	41 I 44	厚 2	内面ガラス状に溶解口縁部赤銅色。	697-36 262-36	羽 □ 先 端 部	43 I 44	長(6) 径 5 孔 2	先端部に溶解物附着し孔が閉塞気味	
696-20 262-20	坩 堝 小 片		厚1.2	口縁部赤銅色	698-37 262-37	羽 □ 先端部欠 損	130~131 炉	長(8.6) 孔 3	先端部溶解。基部開く	
696-21 262-21	転用坩堝 須 惠 器 鉢?小片			内面赤銅色溶解物附着。腰部回転筥削り	698-38 262-38	羽 □ 先端部欠 損	119-122 炉	長(8.3) 孔(3)	外面指頭痕	
696-22 262-22	転用坩堝 須 惠 器 杯?小片	91~136 炉		内面銅滓附着。底部やや丸味をもち手持筥削り	698-39 262-39	羽 □ 基 部	91~138 炉	長(8.5)	基部大きく開く。外面指頭痕	
696-23 262-23	転用坩堝 ? 須 惠 器 杯・小片	106炉		内面溶解物附着。底部手持筥削り	698-40 262-40	羽 □ 先 端 部	43 I 44	長(5.5) 径(7) 孔(3.5)	先端部溶解著しく溶解物附着	
696-24 262-24	転用坩堝 ? 須 惠 器 杯・小片	91~138 炉		内面溶解物附着。底部回転筥削り	698-41 262-41	羽 □ 基部欠損	130~131	長(8.5)	先端部溶解。外面縦筥調整	
697-25 262-25	羽 □ 炉	135・136	長9.5 径6.7~8.5 孔2.4	先端部の一端に溶解物附着。外面縦の強い撫で調整	698-42 262-42	羽 □ 先端部欠 損	91~138 炉	長(10.5)	基部ゆるく開く。外面指頭痕	
697-26 262-26	羽 □ 基部欠損	116炉	長 9 径 6 孔2.5	先端部溶解。外面指頭痕	698-43 262-43	羽 □ 先端部欠 損	125~129 炉	長(7.7)	外面筥調整	
697-27 262-27	羽 □ 先端部欠 損	125~129 炉	長(11.5) 径5.7 孔2.3	外面縦の筥調整	698-44 262-44	羽 □ 先 端 部	91~138 炉	長(4) 径(6) 孔12.8	先端部溶解し、大きな溶解炉壁が付着	
697-28 262-28	羽 □ 炉	125~129	長9.8 径 6~7.7 孔2.1	先端部細り著しく溶解。一端に溶解炉壁附着。外面縦筥調整	698-45 262-45	羽 □ 先端部欠 損	119-122 炉	長(8.3) 径(6) 孔(2.2)	外面弱い縦筥調整	
697-29 262-29	羽 □ 基部欠損	133炉	長(9) 径6.8 孔2.5	先端部溶解、一端に溶解物附着	698-46 262-46	羽 □ 基 部	106炉	長(6.5)		
697-30 262-30	羽 □ 基部欠損	104炉	長(11) 径6.5 孔2.5	先端部溶解、外面指頭痕	698-47 262-47	羽 □ 先 端 部	105炉	長(4.2) 径(7) 孔(2.5)	先端部溶解	
697-31 262-31	羽 □ 基部欠損	105炉	長(6.5) 径6.5 孔2.7	先端部溶解。一端に溶解物附着	698-48 262-48	羽 □ 先 端 部		長(5.7)	先端部溶解	
697-32 262-32	羽 □ 基部欠損	91~138 炉	長(6.5) 径6.3 孔2.1	先端部溶解。一端に溶解炉壁及び珪化木附着	698-49 262-49	羽 □ 先 端 部	91~138 炉	長(5.5) 径(5.5) 孔2.2	先端部溶解	
697-33 262-33	羽口基部 欠 損	43 I 44	長(4.4) 径6.7 孔1.8	先端部溶解、一端に溶解物附着	698-50 262-50	羽 □ 先 端 部		長(4.5)	先端部溶解	

第4章 鍛冶工房跡

I 3号工房跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
698-51 262-51	羽口 先端部	43 I 46	長(6) 径(6.3) 孔(2.2)	先端部溶解。外面継 の強い撫で痕。先端 部細る	699-69 263-69	羽口 小片	109炉	長(4.5)	外面指頭痕
698-52 263-52	羽口 先端部	49炉	長(3.5) 径4.7 孔2.3	先端部溶解	699-70 263-70	羽口 小片	111-14 炉	長(4.3)	外面縦筥調整
698-53 263-53	羽口 先端部		長(4) 径6 孔2.5	先端部溶解	699-71 263-71	羽口 基部小片	118炉	長(5.7)	外面指頭痕
698-54 263-54	羽口 基部小片	119・122 炉	長(4)	指頭痕	699-72 263-72	羽口 小片	110-122 炉	長(5)	外面縦筥調整
698-55 263-55	羽口 先端部	109炉	長(4.3)	先端部溶解	699-73 263-73	羽口 小片		長(4.5)	外面縦筥調整
698-56 263-56	羽口 先端部	91-132 炉	長(5.2)	先端部溶解	699-74 263-74	羽口 先端部		長(3)	先端部著しく溶解。 溶解鋳滓付着
698-57 263-57	羽口 先端部		長(4) 径(5.5) 孔(2.3)	先端部溶解	699-75 263-75	羽口 先端部小片	111-114 炉	長(3.5)	先端部溶解
698-58 263-58	羽口 基部小片	91-138 炉	長(5.3)	縦筥調整	699-76 263-76	羽口 先端部小片	91-138 炉	長(4.5)	先端部溶解
698-59 263-59	羽口 先端部小片	91-138	長(4.9)	先端部溶解。器肉極 めて厚く3cm	699-77 263-77	羽口 小片		長(4.5)	外面縦筥調整
698-60 263-60	羽口 基部小片		長(5)	基部まで溶解	699-78 263-78	砥石 角閃石安 山岩	43 I 44	4.1×4×2.6	多面使用。刃痕あり
698-61 263-61	羽口 先端部	105炉	長(4)	先端部溶解	699-79 263-79	転用砥石 須恵器壺 片		4.6×3.4×1.8	3側面使用
698-62 263-62	羽口 基部	93炉	長(4.5)	先端部溶解	699-80 263-80	鉄滓	118炉	4×3.8×3.2 77.3g	重量感あり
699-63 263-63	羽口 先・基部 欠損	111-114 炉	長(9.6) 径6.5 孔2.7	外面縦筥調整	699-81 263-81	銅滓		5.4×3.1×1 28.6g	
699-64 263-64	羽口 基部		長(5.5) 径(7) 孔(2.5)	外面縦筥調整	699-82 263-82	鉄滓	119-122 炉	7×4.5×1.5 47.3g	
699-65 263-65	羽口 小片		長(6.5)	器肉厚112.5cm	699-83 263-83	椀型鋳滓	134炉	11×13.4×4.3 189.3g	重量感あり。上面や や凹み、下面は丸く 脹れる
699-66 263-66	羽口 中位	125-29 炉	長(7.3) 径(6) 孔(2.5)	外面縦筥調整	699-84 263-84	炉底?	109炉	17×10×20	1端面は平滑で皿状 に凹び
699-67 263-67	羽口 小片		長(5.7)	外面指頭痕	699-85 263-85	土製品 羽口装着 部分か?	44 I 44	10.3×10.3×5.3	ドーナツ状土製品。 無焼成。中央部に径 2.8cmの孔
699-68 263-68	羽口 小片	106炉	長15.2	外面縦筥調整					

I 4号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴				①焼成 ②色調 ③胎土 その他
700-1 263-1	須 惠 器 盤	底部小 片	—×12×(1.5)		付高台、断面矩形、底部回転篋削り。轆轤成形				①良好 ②灰 ③密
Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
700-2 263-2	瓦 平 瓦	81~90炉	厚2.1	凹面布目。模骨痕あり。凸面弱い撫で	700-10 263-10	羽 口 先端部小 片	35炉	長(3.7)	先端部溶解
700-3 263-3	埴 塼 瓦	42炉	口径11.3 高5.7	内面に銅滓付着。口縁部赤銅色に溶解	700-11 263-11	羽 口 先端部小 片	87炉	長(4.8)	先端部溶解
700-4 263-4	羽 口	42炉	長14 径6~7.5 孔1.5	先端部溶解。鉄分付着。外面ほりの深い縦調整。基部開く	700-12 263-12	羽 口 中 位	85炉	長(7.5) 孔(2.4)	
700-5 263-5	羽 口	42炉	長13.8 径6~8 孔1.7	先端部溶解。わずかに欠損	701-13 263-13	羽 口 先端部欠 損	81~90炉	長(11) 径(6.5) 孔2.8	先端部溶解。基部器肉厚くやや開く
700-6 263-6	羽 口 基 部	42炉	長(7.2) 孔2.6	外面深い縦調整	701-14 263-14	羽 口 先 端 部	35炉	長(5.5) 径8.5 孔3.8	大型品か、先端部溶解著しく、1端に大きな溶解物付着
700-7 263-7	羽 口	84炉	長13 径5.5~7.5 孔1.7	先端部溶解。外面深い縦調整	701-15 263-15	羽 口 先端部欠 損	81~90炉	長(10.5) 径6.5 孔2	基部わずかに開く。外面弱い縦調整
700-8 263-8	羽 口 先端部わ ずか欠損	43 I 36	長(10.5) 径6.5~8 孔1.9	先端部溶解。外面縦調整	701-16 263-16	砥 石 流 紋 岩 (砥沢?)	81-90炉	8×6.2×4.5 369g	多面使用。刃痕あり
700-9 263-9	羽 口 先 端 部	84炉	長(6.9) 径4.5 孔2.5	先端部溶解。外面縦調整	701-17 263-17	砥 石 流 紋 岩 (砥沢?)	82炉	3.3×3.4×2.2 33.6g	多面使用

I 5号工房跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴				①焼成 ②色調 ③胎土 その他
702-1 264-1	土 師 器 甕	口縁部 1/4	24.5×—×(5.5)		胴部張りなく長胴を司すか。口縁部大きく外傾。口縁部横撫で。胴部縦篋削り				①良好 ②橙 ③やや粗
Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴					
702-2 264-2	羽 口 先端部欠 損	49炉	長(60.5) 径5.5~7 孔2.1	先端部溶解、外面指頭痕					

I区鍛冶工房跡出土台石

Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
704-1 264-1	鉄 敷 石 石英閃緑 岩		27.8×19.4×13.9 9.9kg	欠損品、鉄分付着、1面打撃痕	705-4 264-4	鉄 敷 石 石英閃緑 岩	3号工房 101号炉	45.9×31.5×18.1 40.3kg	3面打撃痕、鉄分付着
704-2 264-2	鉄 敷 石 石英閃緑 岩		46.9×42.5×23.6 66.6kg	4面打撃痕顕著、鉄分付着	705-5 264-5	鉄 敷 石 石英閃緑 岩		31.5×26.7×29.7 36kg	1面使用、側縁部に鉄分付着
704-3 264-3	鉄 敷 石 石英閃緑 岩	4号工房 42号炉	48.8×34.3×17.8 35.6kg	欠損品、2面打撃痕	705-6 265-6	鉄 敷 石 石英閃緑 岩		47.6×27.7×26.6 40.9kg	鉄分付着著しい、打撃痕2面

第4章 鍛冶工房跡

I 区鍛冶工房跡出土台石

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
705-7 265-7	鉄敷石 石英閃緑 岩	196号住	25.3×17.0×8.8 4.3kg	欠損品、鉄分付着、 1面打撃痕	709-20 266-20	鉄敷石 石英閃緑 岩		34.1×29.9×17.7	欠損品、2面打撃痕、 鉄分付着著しい
706-8 265-8	鉄敷石 石英閃緑 岩	4号工房 85号炉	45.5×39.7×21.9 54.4kg	1部欠損、鉄分付着、 2箇所打撃痕	709-21 266-21	鉄敷石 石英閃緑 岩		40.1×30.3×15.9 18.6kg	欠損品、1面使用痕。 側面に鉄分付着
706-9 265-9	鉄敷石 石英閃緑 岩		22.8×18.3×12.6 5.4kg	1面打撃痕、鉄分少 し付着	709-22 266-22	鉄敷石 石英閃緑 岩	3号工房 97号炉	23.8×56.2×26.4 57.8kg	鉄分付着、2箇所打 撃痕
706-10 265-10	鉄敷石 石英閃緑 岩		22.6×49.1×30.1 48.6kg	1部欠損、鉄分付着、 打撃痕2箇所	709-23 266-23	鉄敷石 石英閃緑 岩	4号工房 85号炉		鉄分付着、1面打撃 痕
706-11 265-11	鉄敷石 石英閃緑 岩		20.5×24.1×13.7 8.4kg	欠損品、鉄分付着、 1面使用	709-24 266-24	鉄敷石 石英閃緑 岩		19.4×13.8×13.1 5.3kg	2面欠損品、打撃痕、 3面にあり
707-12 265-12	鉄敷石 石英閃緑 岩	3号工房 157号炉	43.9×37.0×26.2 62.8kg	鉄分付着、2面打撃 痕著しい	710-25 267-25	鉄敷石 石英閃緑 岩		31.4×33.0×15.5 20.8kg	1部欠損、鉄分付着 著しい、打撃痕2箇 所
707-13 265-13	鉄敷石 石英閃緑 岩	60 I 30	26.7×17.5×17.9 11.4kg	欠損品、鉄分付着。 1面打撃痕。	710-26 267-26	鉄敷石 石英閃緑 岩	3号工房 100号炉	29.1×24.8×18.8 19.3kg	鉄分付着、2箇所打 撃痕あり
707-14 266-14	鉄敷石 石英閃緑 岩	2号工房 46号炉	32.5×32.2×16.5 26.5kg	鉄分付着、3面使用 1面は打撃痕著し い。	710-27 267-27	鉄敷石 石英閃緑 岩		31.3×18.3×18.6 12.8kg	欠損品、鉄分付着、 2箇所打撃痕あり
707-15 266-15	鉄敷石 石英閃緑 岩		29.3×18.5×18.2 12.2kg	欠損品、一箇所打撃 痕。	710-28 267-28	鉄敷石 石英閃緑 岩		35.3×15.2×18.8 14.9kg	欠損品、鉄分付着、 2箇所打撃痕あり。
708-16 266-16	鉄敷石 石英閃緑 岩		21.3×50.1×33.1 55.7kg	鉄分付着、2箇所使 用痕。	710-29 267-29	鉄敷石 石英閃緑 岩	60 I 20	27.6×24.8×16.7 12.4kg	欠損品、鉄分付着、 1箇所打撃痕あり。
708-17 266-17	鉄敷石 石英閃緑 岩		38.1×35.7×17.1 37.7kg	鉄分付着、一箇所打 撃痕。	711-30 267-30	鉄敷石 石英閃緑 岩		22.5×32.1×21.9 23.3kg	3箇所打撃痕あり、 鉄分付着著しい。
708-18 266-18	鉄敷石 石英閃緑 岩		25.0×26.4×16.8 16.0kg	欠損品、1箇所打撃 痕。	711-31 267-31	鉄敷石 石英閃緑 岩		28.0×25.6×17.9 14.8kg	欠損品、2箇所打撃 痕あり。
708-19 266-19	鉄敷石 石英閃緑 岩		34.9×29.0×18.2 27.4kg	2箇所打撃痕。	711-32 267-32	鉄敷石 石英閃緑 岩		26.3×15.1×16.4 8.2kg	欠損品、2面打撃痕 あり。

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物

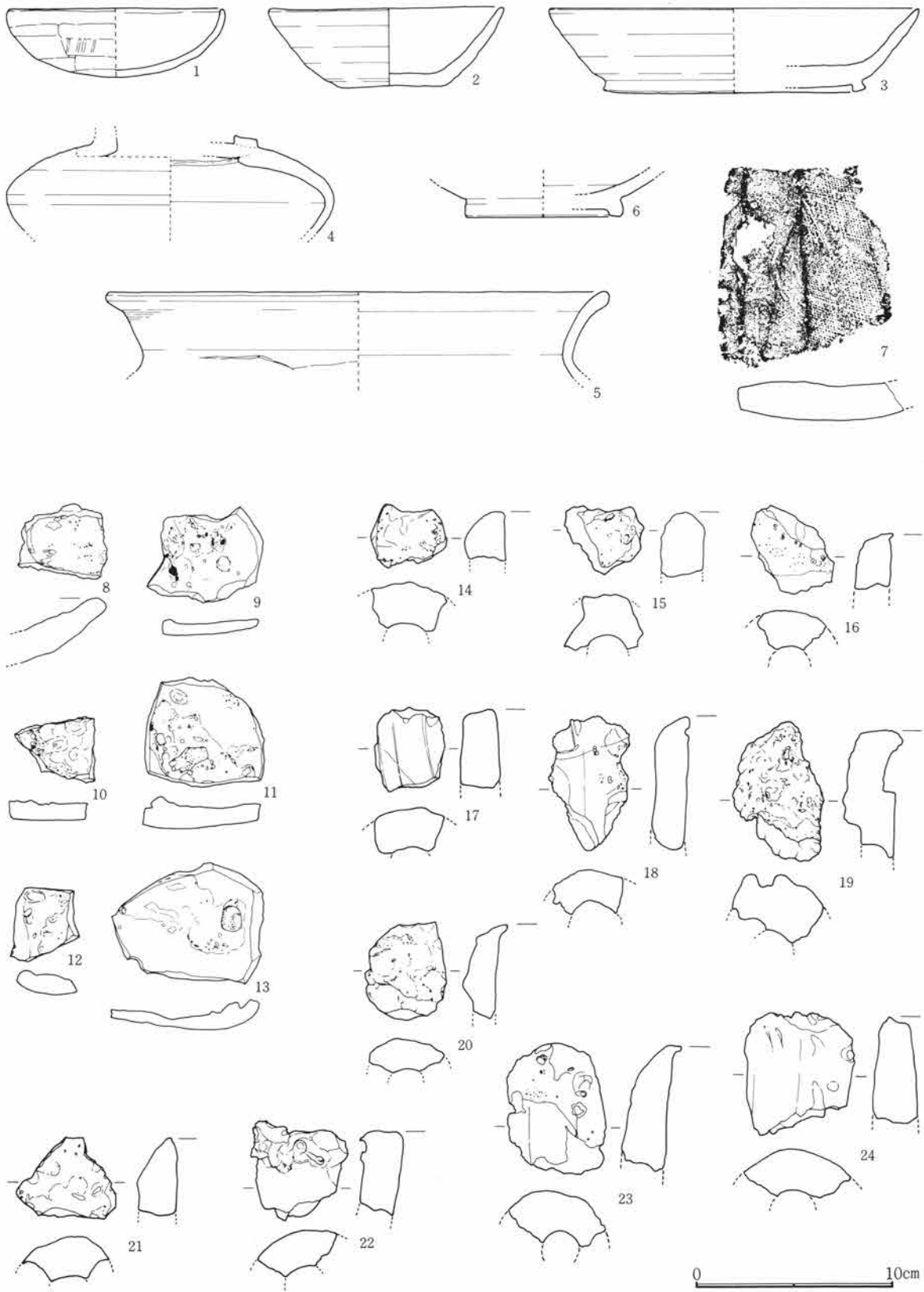


Fig.712 I区A地点出土遺物(1)

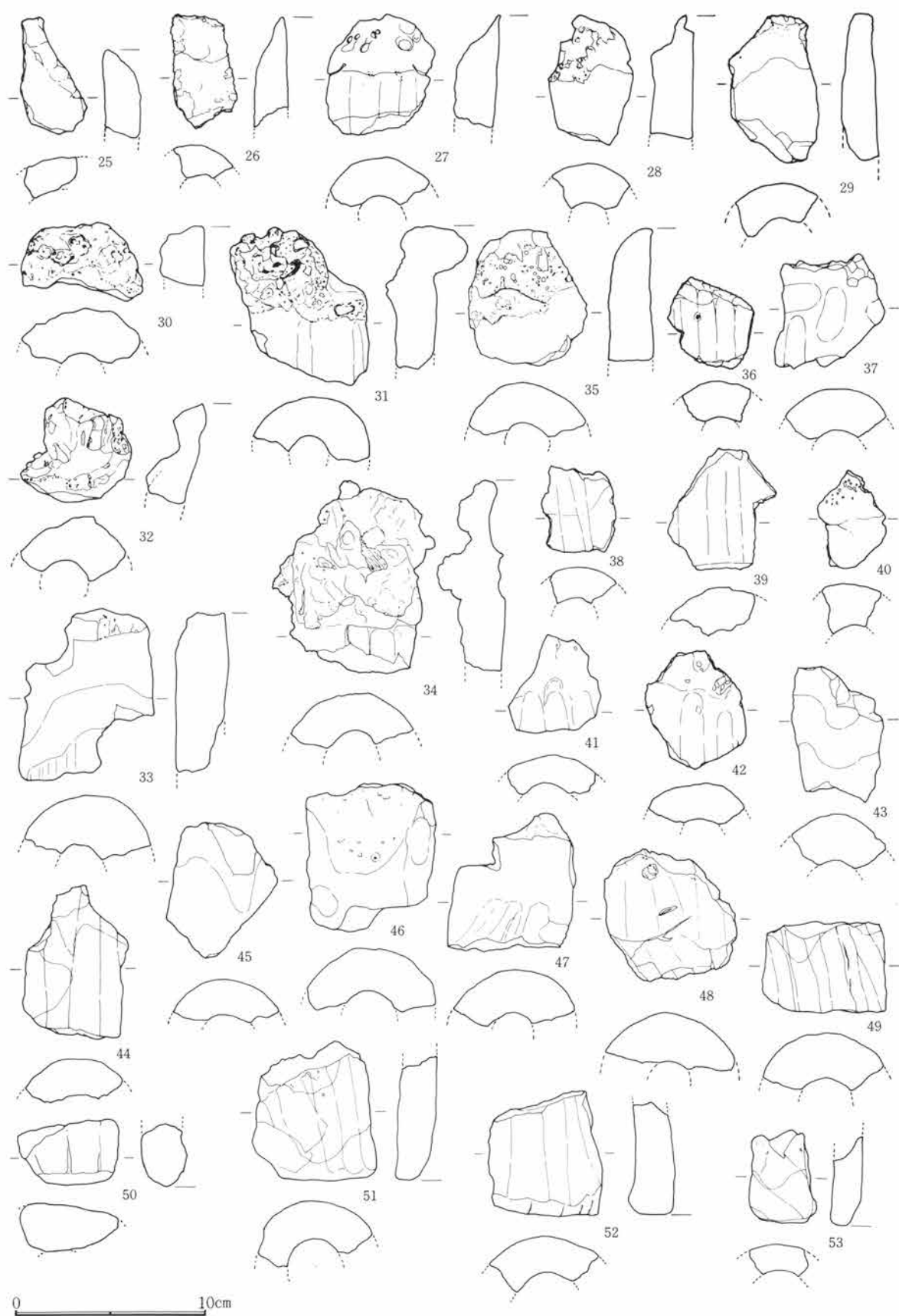


Fig.713 I区A地点出土遺物(2)



Fig.714 I区A地点出土遺物(3)

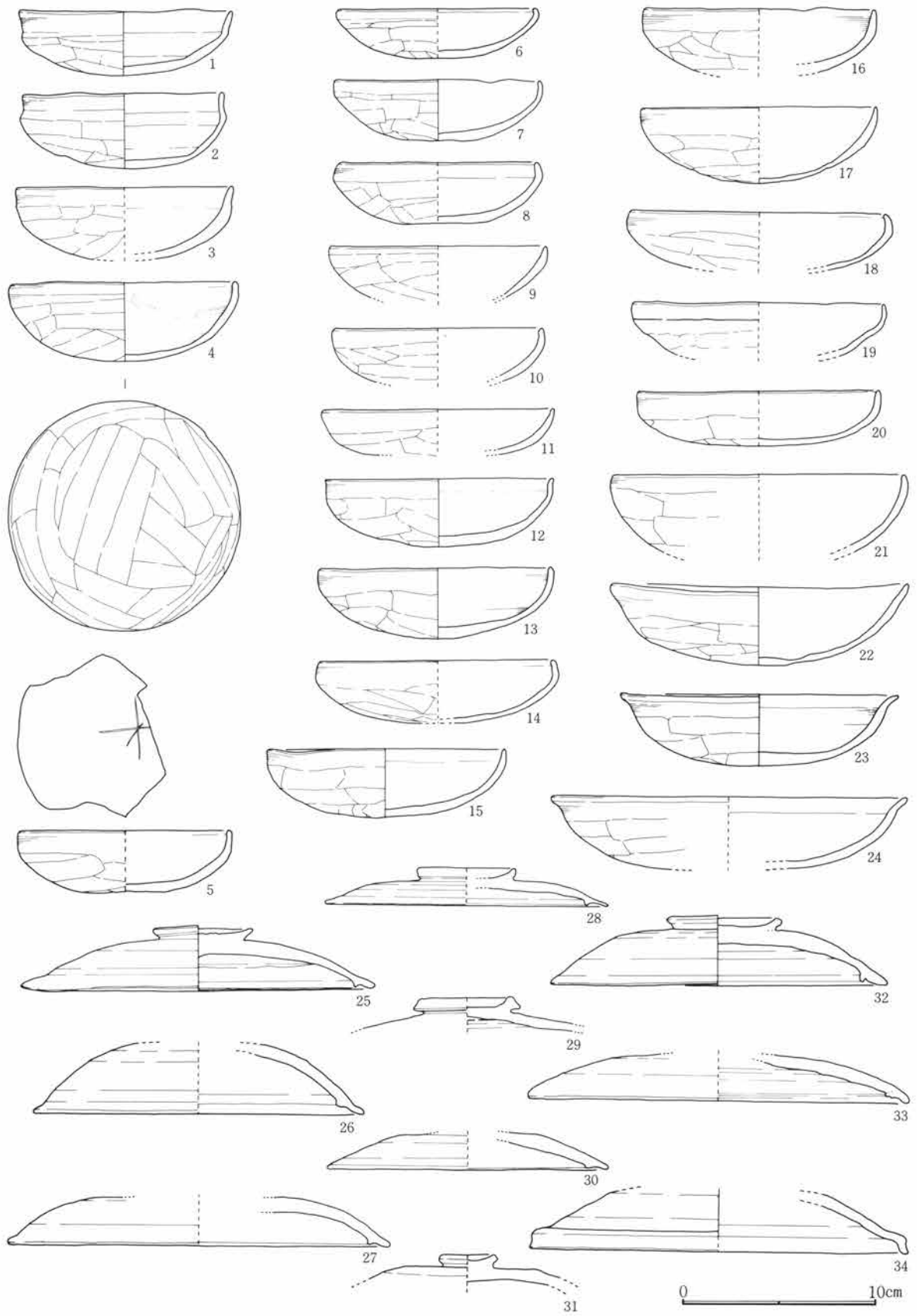


Fig.715 I区B地点出土遺物(1)

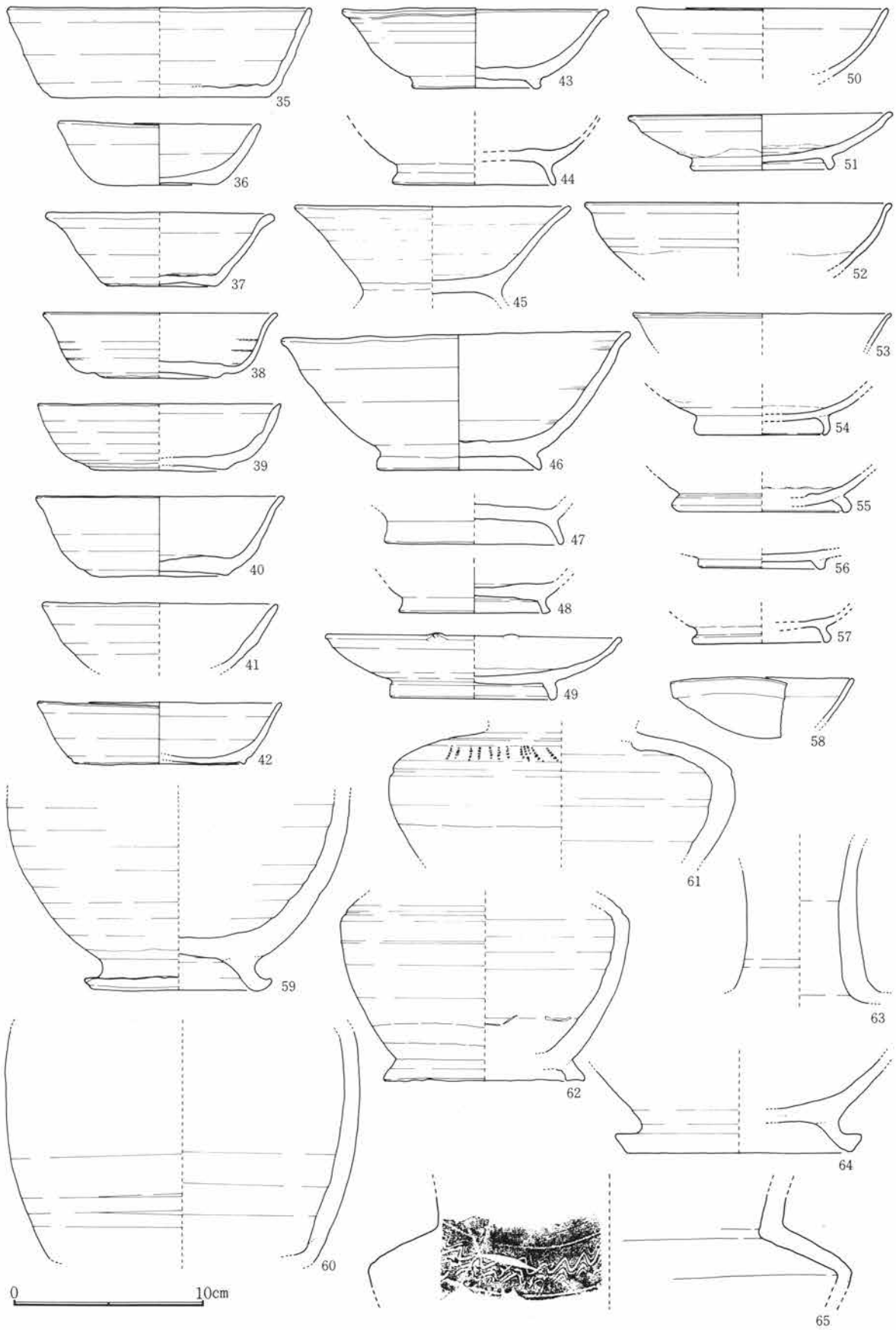


Fig.716 I区B地点出土遺物(2)

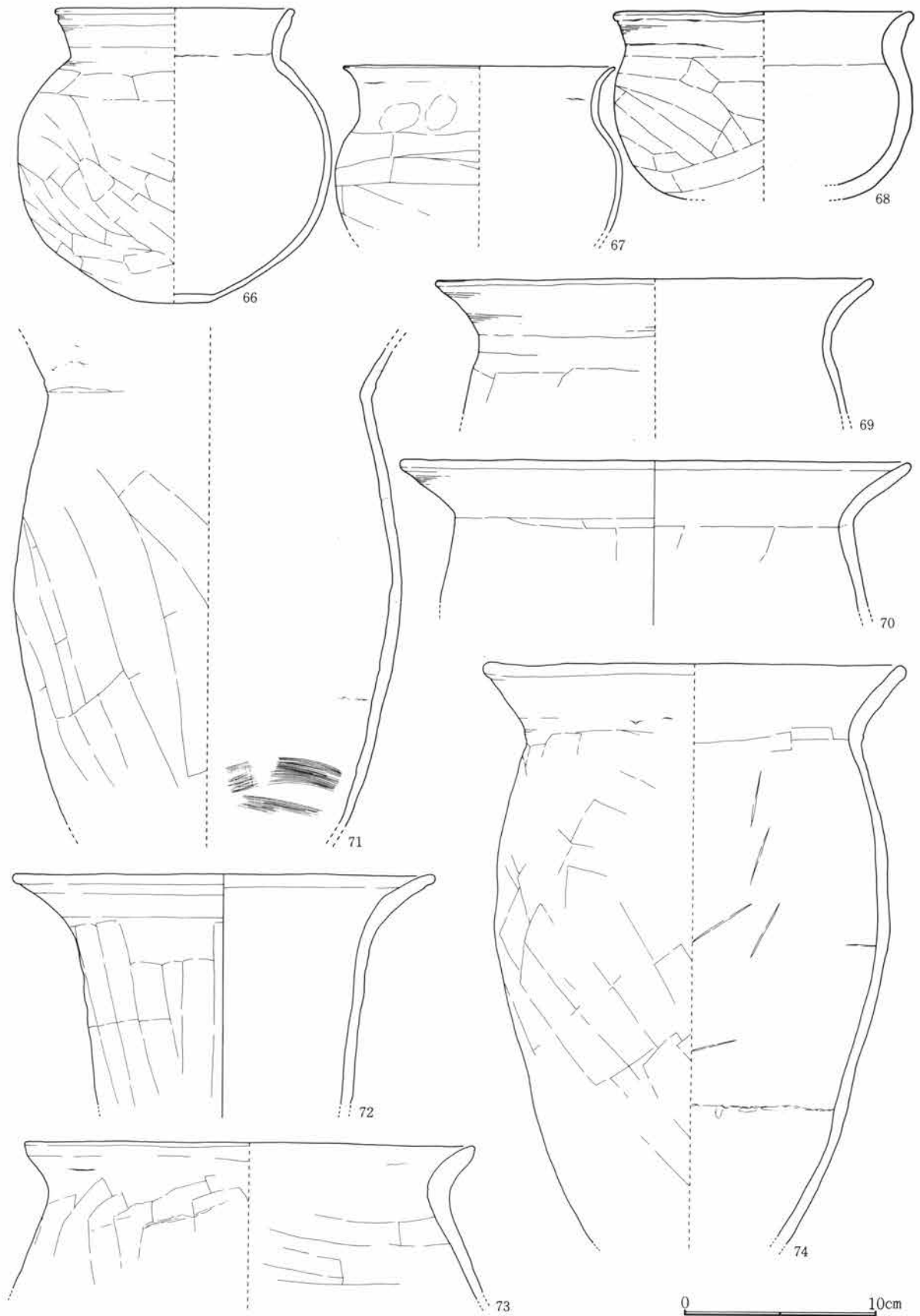


Fig.717 I区B地点出土遺物(3)

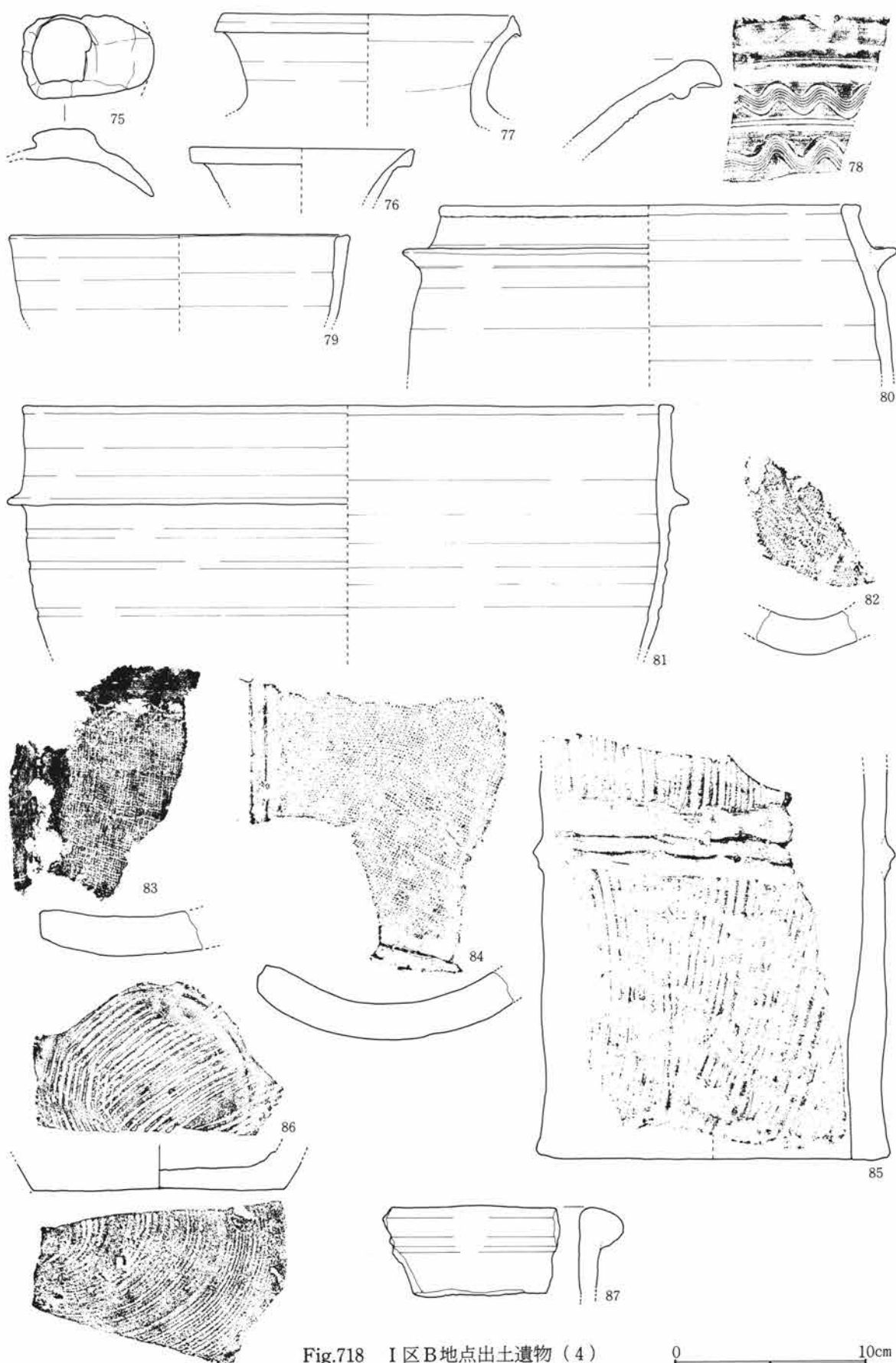


Fig.718 I区B地点出土遺物(4)

0 10cm



Fig.719 I区B地点出土遺物(5)

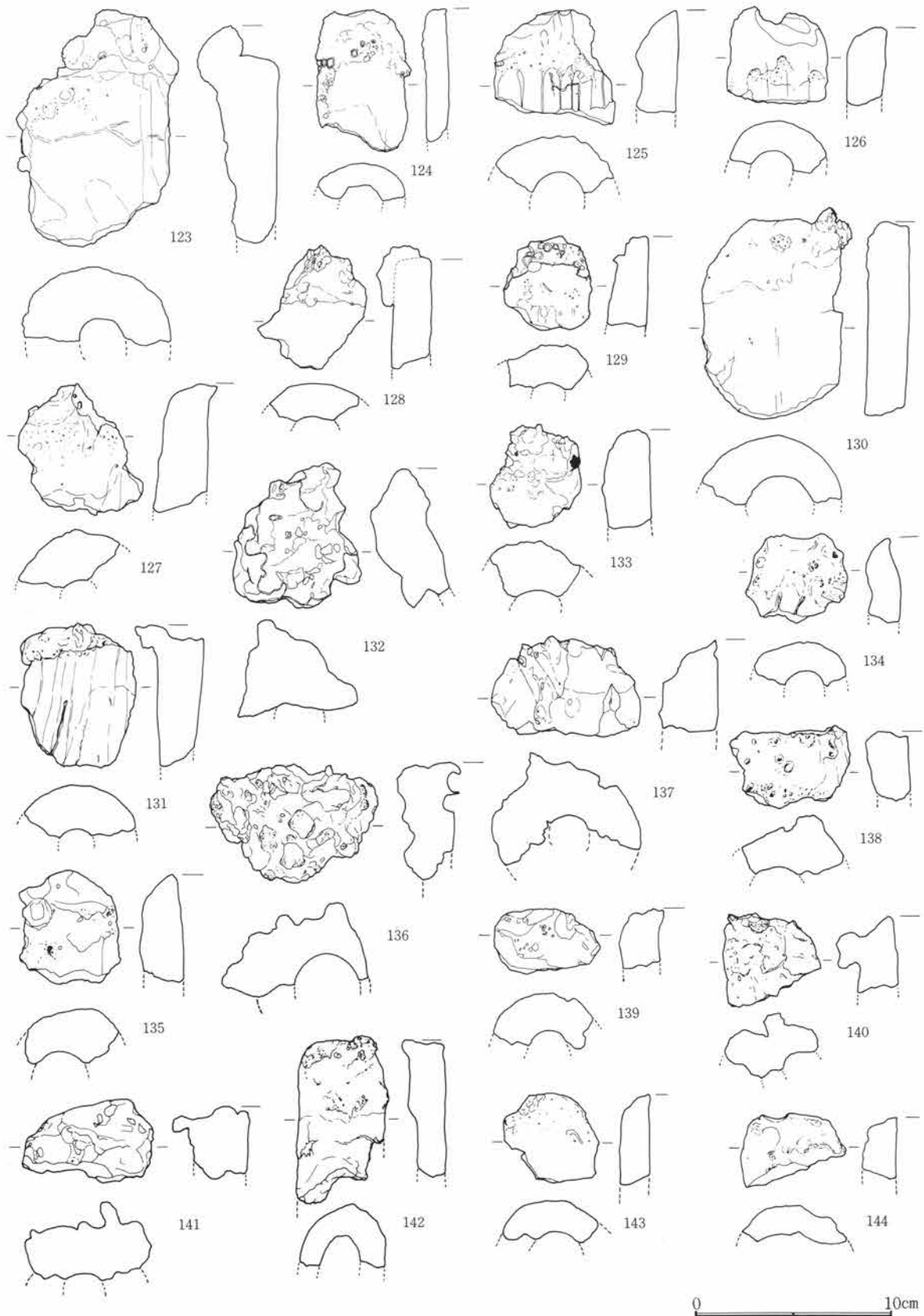


Fig.720 I区B地点出土遺物(6)

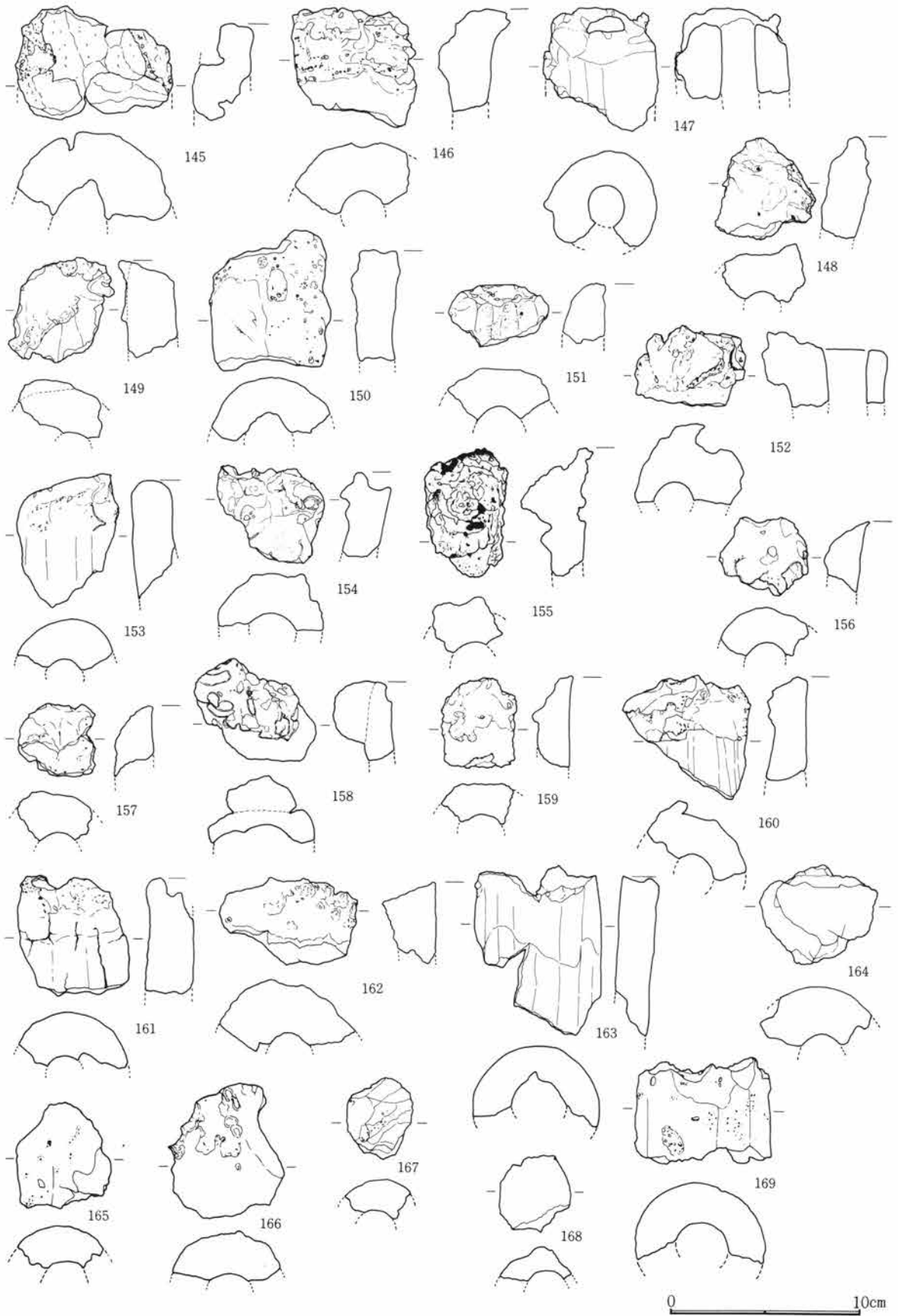


Fig.721 I区B地点出土遺物(7)

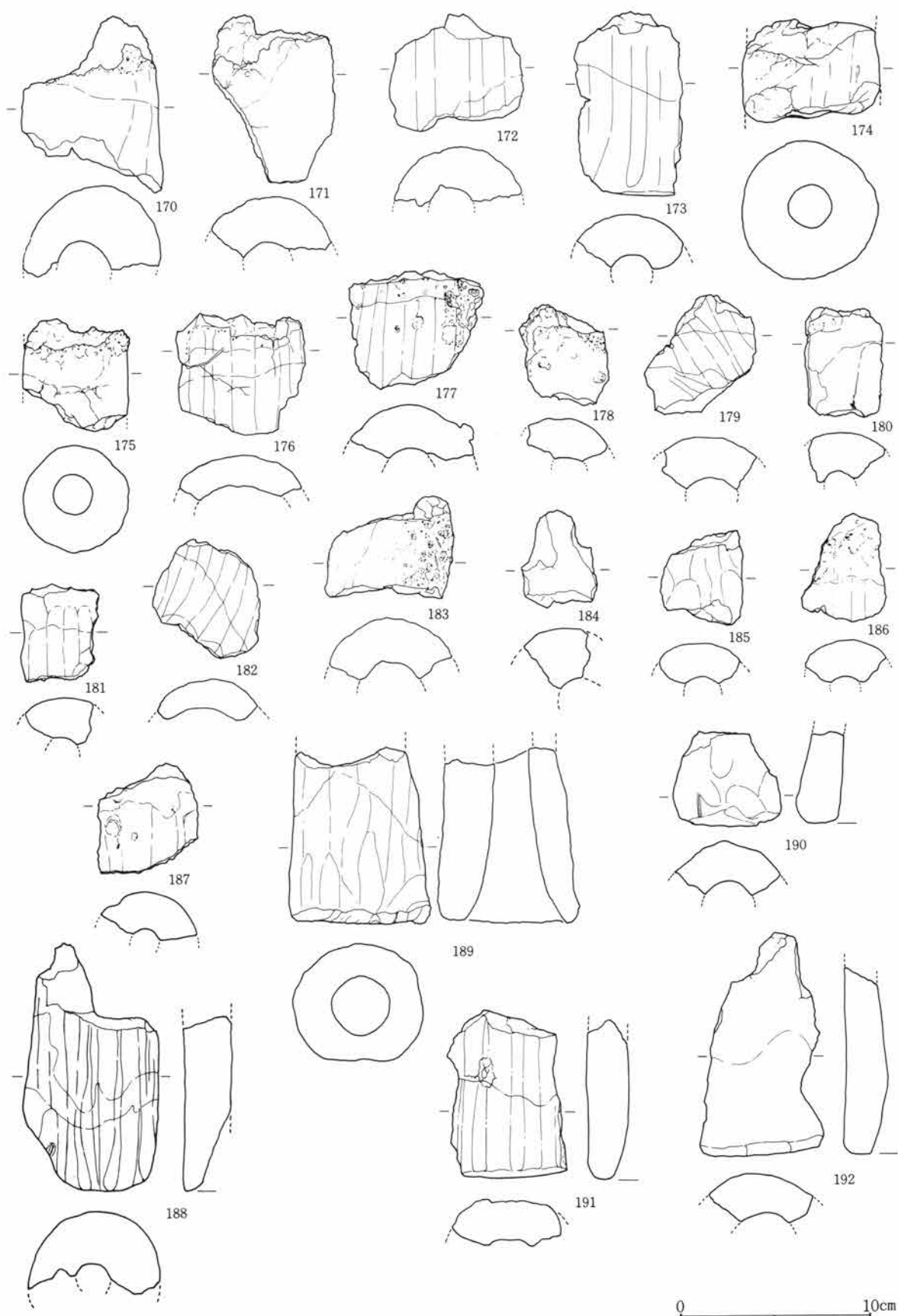


Fig.722 I区B地点出土遺物(8)

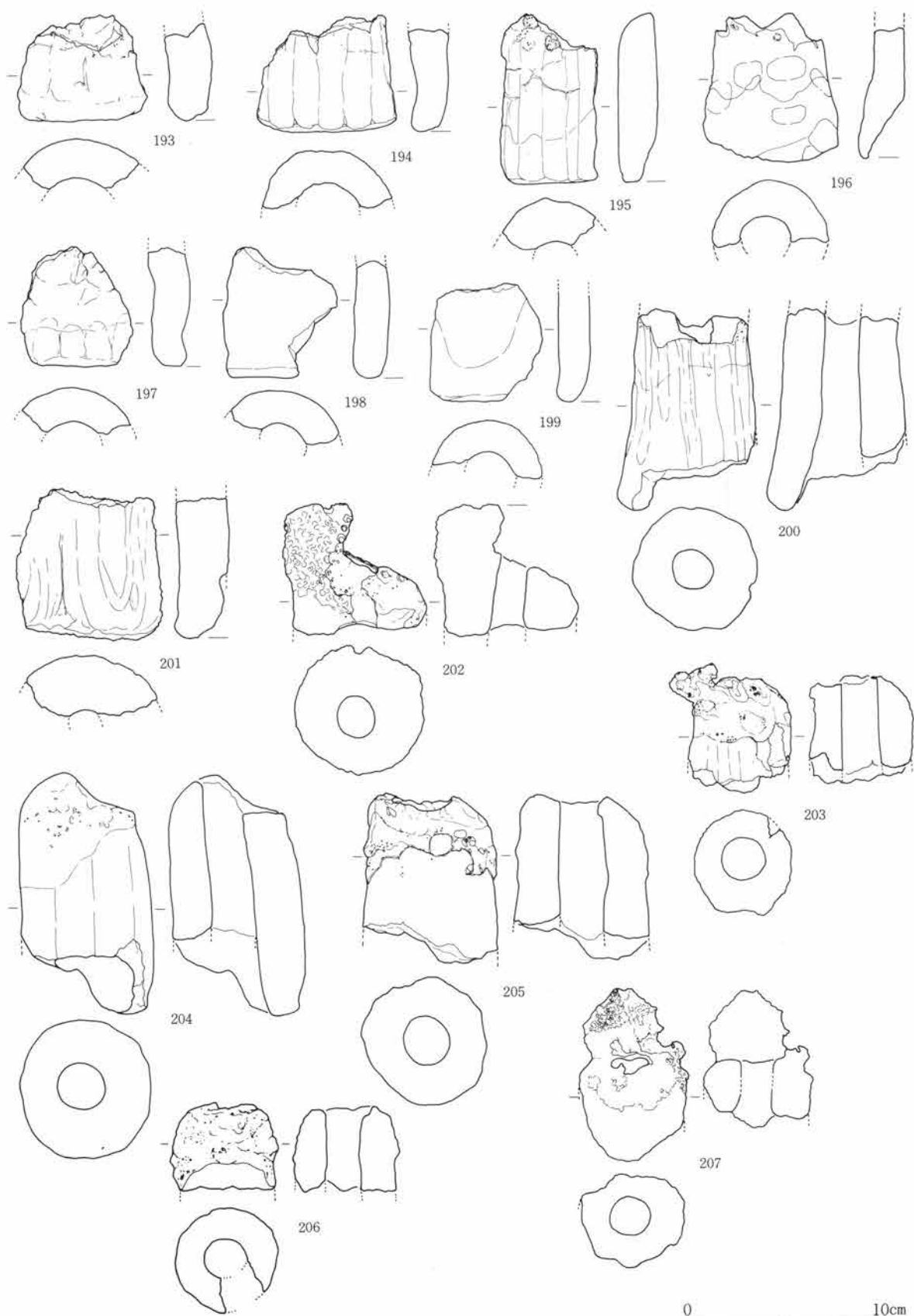


Fig.723 I区B地点出土遺物(9)

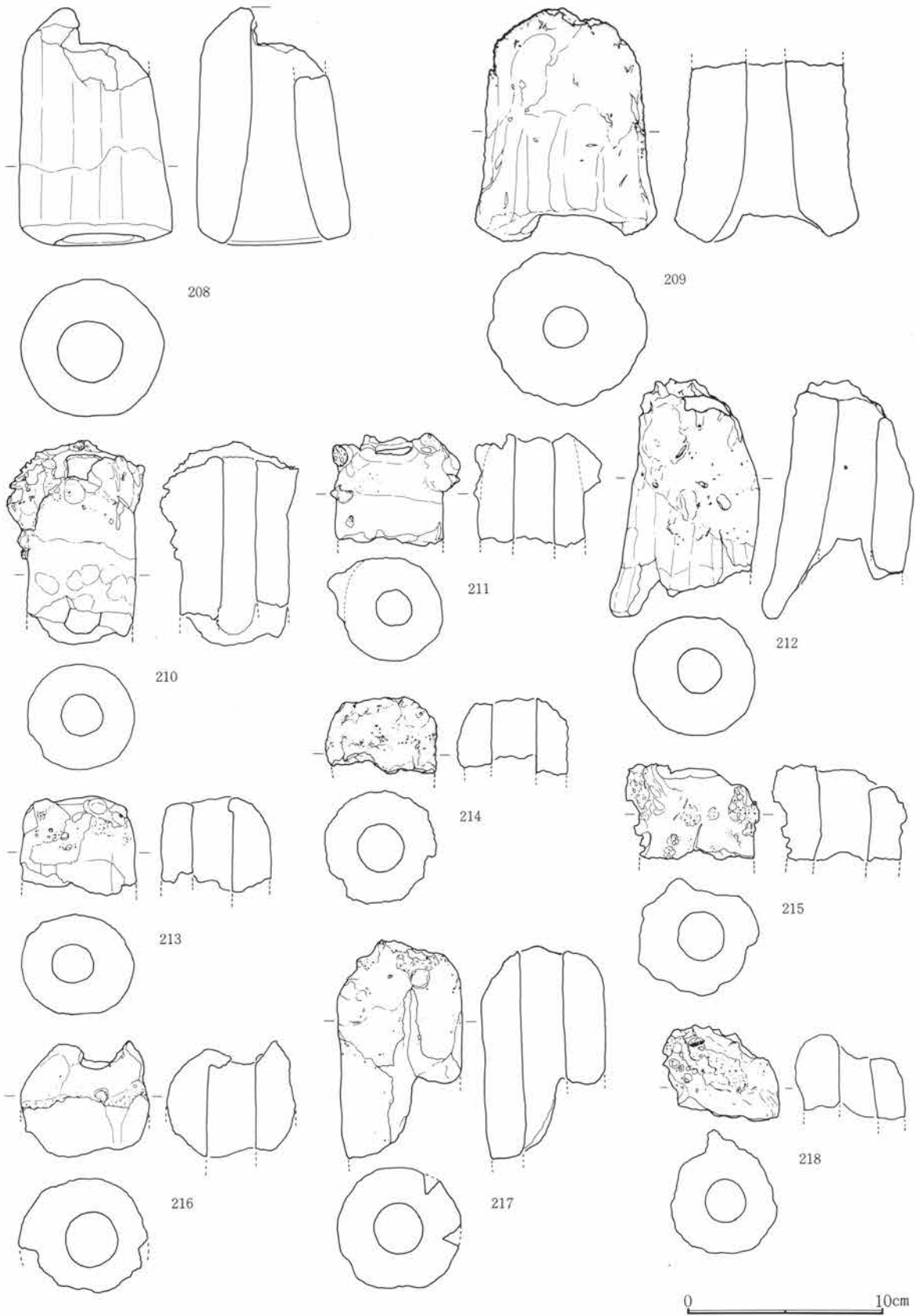


Fig.724 I区B地点出土遺物 (10)

第4章 鍛冶工房跡



Fig.725 I区B地点出土遺物 (11)

I 区工房跡関連 (A 地点) 出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器 形・成 形 及 び 調 整 の 特 徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他			
712-1 268-1	土 師 器 杯	1/3	11×3.4	A 60 I 43	底部丸く、口縁部は直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る			
712-2 268-2	土 師 器 杯	2/3	11.9×5.6×4	A、58・59 I 36・37	全体肥厚気味。体部やや内湾して外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、軟 ②鈍い黄橙 ③やや粗			
712-3 268-3	須 惠 器 盤	1/4	18.7×13.7×4.3	A、58・59 I 36・37	腰部小さく脹り体部上半で僅かに内湾気味に外傾する。付高台、断面矩形。轆轤成形。腰、底部回転篋削り。	①良好 ②青灰 ③やや密、白色細粒混			
712-4 268-4	須 惠 器 平 瓶	上半部 小片		A、61 I 40	口頸部欠損。円形貼付。	①良好 ②灰白 ③やや粗、縞状			
712-5 268-5	土 師 器 壺	口縁部 1/4	25.5×-×(4)	A、58 I 36	口縁部緩く外反して開く。口唇部丸く肥厚。口縁部横撫で。胴部篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗			
712-6 268-6	緑 釉 陶 器 椀	底部小 片	-×8×(2.2)	A、62 I 49	全体に肥厚、高台幅広く端部明瞭に角張る。内面・底部篋磨き。見込部上凹線巡る。全面施釉。釉調淡緑。	①良好 ②灰黄 ③密			
Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器 種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
712-7 268-7	瓦 平 瓦	54 I 44	厚1.8	凹面布目。凸面に弱い格子文あり。凹面縁・側縁は篋調整。	712-22 268-22	羽 口 先端部小 片	61 I 35	長(5)	先端部溶解。
712-8 268-8	埴 塼 小 片	58・59 I 38・39	厚1.6	内面溶解物付着。	7112-23 268-23	羽 口 先端部小 片	61・62 I 34・35	長(6.5)	先端部溶解。
712-9 268-9	転用埴塼 須 惠 器 杯 小片	58・59 I 38・39		内面に銅滴付着。底部丸味をもち回転篋削り。	712-24 268-24	羽 口 先 端 部	58・59 I 34・35	長(6.2)	先端部溶解。二重成形?植物質混る。
712-10 268-10	転用埴塼 須 惠 器 小 片	58・59 I 38・39		内面に銅滴付着。	713-25 268-25	羽 口 先端部小 片	58 I 43	長(6)	先端部溶解。
712-11 268-11	転用埴塼 ?須惠器 小 片	58・59 I 38・39		内面に銅滴付着。	713-26 268-26	羽 口 先端部小 片	62 I 42	長(5.9)	先端部溶解。
712-12 268-12	転用埴塼 ?須惠器 小片	62・63 I 32~35		内面に赤銅色付着物。	713-27 268-27	羽 口 先 端 部	58 I 36	長(6)	先端部細り、ガラス状に溶解。
712-13 268-13	転用埴塼 ?須惠器 杯 底 部	58・59 I 38・39		内面に銅滴付着。底部回転篋削り。	713-28 268-28	羽 口 先 端 部	62・63 I 36・37	長(6.5)	先端部溶解。
712-14 268-14	羽 口 先端部小 片	58・59 I 36・37	長(3.2)	先端部溶解。	713-29 268-29	羽 口 先 端 部	57 I 60	長(7.5) 孔(2.1)	先端部溶解。破損面一部に磨耗痕。
712-15 268-15	羽 口 先端部小 片	58・59 I 42・43	長(3.2) 孔(2.1)	先端部溶解。	713-30 268-30	羽 口 先 端 部	58・59 I 42・43	長(4) 孔(2.5)	先端部溶解。
712-16 268-16	羽 口 先端部小 片	61 I 35	長(4.5) 孔(1.9)	先端部溶解。	713-31 268-31	羽 口 先 端 部	61 I 35	長(5.5) 径6.2 孔2	先端部に溶解物付着。植物質混る。
712-17 268-17	羽 口 先端部小 片	58・59 I 42・43	長(4)	先端部溶解、外面縦篋調整。	713-32 268-32	羽口先端 部	61 I 35	長(3) 孔(2.5)	先端部に溶解物付着。
712-18 268-18	羽 口 先端部小 片	58 I 59 I 42・43	長(6.8) 孔(2.5)	先端部溶解。外面縦篋調整。	713-33 268-33	羽 口 先 端 部	58 I 44	長(8.8) 径(7) 孔(2.4)	先端部溶解。外面縦の細い篋調整。
712-19 268-19	羽 口 先 端 部	58 I 41	長(3.3)	先端部に溶解物付着。	713-34 268-34	羽 口 先 端 部	64 I 38・ 39	長(6.5) 径(7) 孔(2.7)	先端部に大きな溶解物付着。鉄分。
712-20 268-20	羽 口 先端部小 片	61 I 35	長(4.7) 孔(1.8)	先端部溶解。細る。	713-35 268-35	羽 口 先 端 部	60 I 41	長(7) 径(6.5) 孔(2.3)	先端部溶解。
712-21 268-21	羽 口 先端部小 片	58 I 42	長(4)	先端部溶解。	713-36 268-36	羽 口 先端部小 片	60・61 I 34・35	長(4.7) 孔(2)	先端部溶解。

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連 (A 地点) 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
713-37 268-37	羽口 中位小片	63 I 41	長(5.5) 孔(2.5)	外面指頭痕。	714-55 268-55	羽口 基部	58 I 43	長(5.7)	基部横撫で、大きく開く。
713-38 268-38	羽口 先端部小片	58・59 I 42・43	長(4.5)	外面縦篋調整。	714-56 268-56	羽口 中位	61 I 41	長(9.7) 径(6.8) 孔(2.4)	先端部溶解。外面縦調整。
713-39 268-39	羽口 基部小片	58・59 I 42・43	長(6.2)	外面縦篋調整。植物質混る。	714-57 268-57	羽口 先端部	63 I 40	長(7) 径(6.5) 孔2.5	先端部溶解。
713-40 268-40	羽口 先端部小片	63 I 40	長(5)	先端部溶解。	714-58 268-58	羽口 先端部	61 I 35	長(5) 径6 孔(1.9)	先端部溶解。
713-41 268-41	羽口 先端部小片	63 I 42	長(5)	先端部溶解。	714-59 268-59	羽口 先端部	58 I 36	長(8.5) 径7 孔3	先端部ガラス状に溶解。溶解物付着。
713-42 268-42	羽口 先端部小片	63 I 40	長(6)	先端部溶解。植物質混る。	714-60 268-60	羽口 先端部	58 I 36	長(5.5) 径6.5 孔2.5	先端部溶解。
713-43 268-43	羽口 中位	58 I 36	長(7)	外面指頭痕。	714-61 268-61	羽口 先端部	64 I 41	長(5.9) 径6 孔2	先端部溶解。外面強い縦調整。
713-44 268-44	羽口 中位	58 I 36	長(8)	外面縦篋削り。	714-62 268-62	羽口	58・59 I 42・43	長10.5 径6.8 孔2.1	先端部溶解。外面篋調整。
713-45 268-45	羽口 中位	58 I 36	長(7)	外面指頭痕。	714-63 268-63	羽口 先端部欠損	58 I 44	長(10) 径(5.5) 孔2.3	基部大きく開く。外面篋調整。
713-46 268-46	羽口 中位	58・59 I 42・43	長(7.6)	外面指頭痕。	714-64 268-64	羽口 基部欠損	62 I 48	長(9.5) 径6.5 孔1.7	先端部溶解。外面篋調整。
713-47 268-47	羽口 中位	60 I 44	長(7) 孔(2.1)	外面指頭痕。	714-65 268-65	転用砥石 須恵器 甕	58・59 I 36・37	2.3×6.3×1.3	1側面使用。
713-48 268-48	羽口 先端部	59 I 43	長(7) 孔(2.2)	端部欠損。外面縦篋調整。	714-66 268-66	転用砥石 須恵器 甕	59 I 43	6.8×6.6×0.9	内面縁辺使用。外面格子状叩き目。内面青海波文あて目。
713-49 268-49	羽口 中位	58・59 I 36・37	長(4.8)	外面縦篋調整。	714-67 268-67	砥石 砂岩	62 I 36・ 37	2×4×2.3 82.9g	2面使用。
713-50 268-50	羽口 基部小片	58・59 I 42・43	長(3.3)		714-68 268-68	転用砥石 須恵器	62 I 35	3.9×2.2×0.6 8.6g	2側面使用。
713-51 268-51	羽口 基部	58・59 I 36・37	長(7) 径(6.5) 孔(3.8)	外面縦篋調整、指頭痕。	714-69 268-69	砥石 角閃石安 山岩	62 I 36・ 37	6.7×3.8×4.2 70.9g	部分使用。
713-52 268-52	羽口 基部	62 I 36・ 37	長(6.5)	外面縦篋削り。	714-70 268-70	砥石 流紋岩 (砥沢?)	58・59 I 36・37	5×4.3×3.3 70.2g	多面使用。刃痕あり。
713-53 268-53	羽口 基部小片	58・59 I 36・37	長(5)	外面指頭痕。	714-71 268-71	凹石? 角閃石安 山岩	48・56 I 21	10.7×7.7×5.8 243g	両面凹む。
714-54 268-54	羽口 基部小片	63 I 40	長(5.5)	外面指頭痕。					

I区工房跡関連（B地点）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 形 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
715-1 269-1	土師器 杯	完	11.2×-×3.5 口縁高1	B、47 I 46	小形。丸味のある底部。受け部僅かに残り、口縁は直線的で僅かに外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-2 269-2	土師器 杯	完	10.4×-×3.8 口縁高1	B、47 I 46	底部深く丸い。受け部僅かに残り丸味もつ。口縁部外反気味に直立、口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、細砂混る
715-3 269-3	土師器 杯	1/4	11.3×-×3.8	B、46 I 36・37	底部深く丸い。全体に肥厚。口縁部僅かにくびれ外反気味に弱く外傾。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ややや密、小石混る
715-4 269-4	土師器 杯	完	11.9×-×4	B、41 I 33	底部深く丸い。口縁部内湾気味に直立。見込部に焼成後の「*」篋描き。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
715-5 269-5	土師器 杯	1/4	12.5×-×3.1	B、48 I 42	底部小さく平坦をなす。口縁部直立し、口唇部丸く内屈。見込部に焼成後の「*」篋描。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-6 269-6	土師器 杯	1/4	10.4×-×7.5	B、48 I 46	小形で扁平。口縁部短かく端部は強く内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-7 269-7	土師器 杯	完	10.8×-×3.1	B、47 I 46	口縁部短かく内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
715-8 269-8	土師器 杯	1/4	10.4×-×3.1	B、48 I 47	底部小さく平底気味。口縁部短かく強目に内屈する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-9 269-9	土師器 杯	1/4	12.2×-×(2.5)	B、41 I 30	口縁部やや肥厚し短かく直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-10 269-10	土師器 杯	1/4	10.8×-×(1.5)	B42 I 31	口縁部内湾気味に直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
715-11 269-11	土師器 杯	小片	12×-×(2)	B、45 I 35	底部扁平。口縁部内湾気味で緩く外傾する。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
715-12 269-12	土師器 杯	1/4	11.8×-×3.5	B、41 I 33	底部丸く深目。口縁部短かく外反気味に直立し端部は強く外反する。口縁部横撫で。底部篋削り	①良好 ②橙 ③密
715-13 269-13	土師器 杯	完	12×-×3.6	B、41 I 33	底部丸く深目。口縁部内湾気味に直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-14 269-14	土師器 杯	1/4	12.1×-×3.2	B、48 I 43	底部扁平気味。口縁部やや強く内傾する。口唇部丸く内屈する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
715-15 269-15	土師器 杯	1/4	12.3×-×3.5	B、41 I 33	底部丸く、短かい口縁部が直立する。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
715-16 269-16	土師器 杯	1/4	12×-×(3.2)	B、45 I 35	口縁部やや長く直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
715-17 269-17	土師器 杯	1/4	12.2×-×(3.9)	B、45 I 46	底部深く丸い。器肉薄い。口縁部やや肥厚し直立する。口唇部尖る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
715-18 269-18	土師器 杯	小片	13.2×-×(3)	B、43 I 36・37	浅く扁平な底部。口縁部強く内湾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
715-19 270-19	土師器 杯	1/4	13.2×-×(2.5)	B、45 I 35	底部上半指頭痕によるくびれ顕著。口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
715-20 270-20	土師器 杯	1/4	12.5×-×2.8	B、42 I 33	浅く扁平な底部。口縁部直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
715-21 270-21	土師器 鉢?	小片	15×-×(4)	B、41 I 30	底部深く丸い。口縁部短かく内湾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
715-22 270-22	土師器 盤	完	15.3×-×(4.2)	B、44 I 28	底部丸く変化をもち口縁に至る。口縁部中位緩くくびれて僅かに内湾。口縁部横撫で。底部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや粗、砂混る
715-23 270-23	土師器 盤	完	14.3×-×3.7	B、42 I 31	底部扁平。口縁部はくびれて大きく外反して開く。口縁部横撫で。底部篋削り。内面に黒色付着物。	①良好 ②鈍い灰褐 ③やや粗、砂混る
715-24 270-24	土師器 盤	小片	18.3×-×(3.7)	B、47 I 47	やや扁平な底部。短かい口縁部はくびれて外傾する。口縁部横撫で、底部篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや粗、砂混る
715-25 270-25	須恵器 蓋	ほぼ完	18.2×-×3.3 摘径5.2	B、48 I 47	天井部緩い丸味をもち体部に至る。口縁部緩くくびれて内湾気味に開く。内面端部に小さなかえり。環状摘。	①良好 ②灰白 ③やや粗
715-26 270-26	須恵器 蓋	1/4 摘欠損	17×-×(3.6)	B、43 I 26	丸く張る天井部。口縁部外屈して開く。内面に丸く低いかえり。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色粒混る
715-27 270-27	須恵器 蓋	1/4 摘欠損	19.7×-×(2.5)	B、45 I 40	天井部扁平。体部丸く張る。口縁部緩く外屈して開く。内面略三角のかえり。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
715-28 270-28	須恵器 蓋	1/4	14.6×-×1.9 摘径5.1	B、45 I 46	小型で扁平。口縁部細く尖る。内面に略三角の大きなかえり。環状摘。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
715-29 270-29	須恵器 蓋	摘部	-×-×(1.5) 摘径4.8	B、43 I 29	環状摘。断面矩形。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗

Ⅰ区工房跡関連（B地点）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
715-30 270-30	須恵器 蓋	1/2 摘 欠損	14.5×—× (—2)	B、43 I 26	器内肥厚。天井部平坦で。体部は直線的に開き口縁部に至る。口唇部は丸く内面に断面の丸いかえり。天井回転篋削り。	①良好 ②オリーブ 灰 ③やや粗
715-31 270-31	須恵器 蓋	摘～天 井部	—×—×(1.4) 摘径2.7	B、48 I 42	天井部平坦をなす。環状摘、断面矩形。天井部回転篋削り。	①良好 灰白 ③や やや密
715-32 270-32	須恵器 蓋	1/4	17.2×—×3.6 摘径6	B、45 I 46	天井部やや丸く脹らむ。口縁部肥厚。内面丸く細いかえり環状摘、断面矩形。轆轤成形、天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、白色細粒混
715-33 270-33	須恵器 蓋	1/2 摘 欠損	19.6×—×(2.5)	B、42 I 32	扁平な体り。口縁部は内湾し端部丸い。内面のかえりは小さく不明瞭。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
715-34 270-34	須恵器 蓋	1/2 摘 欠損	19.5×—×(3)	B、45 I 29・30	天井部やや丸く張る。口縁部は直に折山、端部は外反気味。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③や やや密
716-35 270-35	土師器 杯	小片	16×11.6×4.7	B、41 I 33	底径大きく、体部は外傾度少なく直線的に立ち上がる。轆轤成形。底・腰部回転篋削り。	①良好 灰 ③やや 密
716-36 270-36	土師器 杯	完	10.6×6×3.4	B、46 I 37	腰部やや丸味をもち、体部内湾気味に外傾する。口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味、良好 ②浅黄橙 ③やや粗
716-37 270-37	土師器 杯	1/2	12×5.7×3.8	B、45 I 48	体部は直線的に外傾し、口唇部丸く肥厚し外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化やや軟 ②鈍 い橙 ③粗、小石混
716-38 270-38	土師器 杯	1/2	12.4×6.2×3.4	B、44 I 26	底部肥厚。腰部丸く張る。体部器肉薄く口縁部は強く外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密、黒色粒混る
716-39 270-39	土師器 杯	1/4	12.8×7×3.5	B、43 I 48	腰部はくびれ、体部下位に丸味をもち。口縁部緩く外反気味に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
716-40 270-40	土師器 杯	1/2	13×7.4×4.2	B、45 I 29・30	底部肥厚し体部下半に丸味をもち。口縁部僅かにくびれて外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 密
716-41 270-41	須恵器 碗	1/2 底 部欠損	12.4×—×(3.5)	B、46 I 36・37	腰部に丸味をもち体部上半は直線的に外傾。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
716-42 270-42	須恵器 碗	1/2	12.8×9×3.3	B、48 I 48	底部外縁張る。腰部に丸味をもち体部上半は外反気味に開く。削り出し高台。轆轤成形。底部右回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
716-43 270-43	須恵器 碗	1/4	14.2×6.9×4.2	B、46 I 26	腰部丸く張り、体部上半は外反気味に大きく開く。口唇部丸まる。付高台、近く端部外反。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密、小石混る
716-44 271-44	須恵器 碗	底部1/2	—×8.6×(2.5)	B、44 I 29	付高台、やや高く人の字状に開く。端部丸い。轆轤成形、回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
716-45 271-45	須恵器 碗	1/2 高 台欠損	14.5×—×(4.7)	B、45 I 48	体部直線的に大きく外傾し、上半はさらに外傾強い。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ 粗
716-46 271-46	須恵器 碗	1/2	20.2×8.6×7.2	B、45 I 26	体部丸味をもち内湾気味に開く。口縁部緩くくびれて外反す。口唇部丸い。付高台、断面略三角。轆轤成形。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗
716-47 271-47	須恵器 碗	底部	—×9.6×(2)	B、44 I 25	付高台やや高く直線的に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や やや密
716-48 271-48	須恵器 碗	底部	—×8×(1.4)	B、45 I 26	付高台、断面矩形。底部回転糸切り後周縁回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ やや粗、小石混る
716-49 271-49	灰釉陶器 皿転用硯	1/2	15.6×8.8×3.3	B、46 I 40	輪花。体部やや丸く内湾して開き、口唇部丸く外反気味。刷毛塗り施釉。高台やや肥高。腰部回転篋削り。内外転用	①良好 ②黄灰 ③ やや密
716-50 271-50	灰釉陶器 皿	1/2	13.8×7.1×2.9	B、48・49 I 28～30	体部内湾気味に開く。口縁部僅かにくびれて外反する。口唇部丸い。高台端部丸い。付け掛け施釉。底部回転篋削り	①良好 ②灰白 ③ やや密
716-51 271-51	灰釉陶器 碗	1/2 底 部欠損	13×—×(3.5)	B、46 I 37	腰部丸味をもち。口唇部丸い。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
716-52 271-52	灰釉陶器 碗	体部小 片	16×—×(3.5)	B、44～46 I 23～28	体部丸味をもち上半でやや張る。口縁部緩く外反。口唇部丸い。刷毛塗り施釉。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③ 密
716-53 271-53	灰釉陶器 碗	口縁部 小片	13.5×—×(1.5)	B、44～46 I 23～28	器肉薄い。口唇部丸く僅かに外屈。	①良好 ②灰白 ③ 密
716-54 271-54	灰釉陶器 碗	底部1/2	—×6.6×(2.2)	B、44～46 I 23～28	腰部丸味強い。高台やや高く強く内湾して立つ。	①良好 ②灰白 ③ 密
716-55 271-55	灰釉陶器 碗	底部1/2	—×8.7×(2)	B、45～49 I 47～50	見込部中央凹む。高台端部丸く、内湾気味で大きく開く。	①良好 ②灰白 ③ やや粗
716-56 271-56	灰釉陶器 皿?	底部1/2	—×6.6×(1)	B、44～46 I 23～28	高台低く断面台形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③ やや粗
716-57 271-57	灰釉陶器 碗	底部1/2	—×6.8×(1.4)	B、48～49 I 28～30	高台端部丸く八の字状に開く。	①良好 ②灰白 ③ 密
716-58 58	緑釉陶器 碗?	小片		B、41 I 32	器肉薄い。口唇部丸く緩く外反。	①良好 ②オリーブ 灰 ③密

I区工房跡関連（B地点）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他			
716-59 271-59	須 惠 器 瓶	下半部 1/3	—×9.8×(9.8) 胴径18	B、49 I 49	丸味強く球胴を呈す。付高台、高く外反して開き端部は外方へ強く撥ねる。胴部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色小石混る			
716-60 271-60	須 惠 器 瓶 ?	胴部 1/4	—×—×(11.5) 胴径18.4	B、45・46 I 29・30	胴部やや張り気味。胴部下半回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗			
716-61 271-61	須 惠 器 長頸瓶	胴部 1/4	—×—×(6.5) 胴径18	B、43 I 49	肩部強く張り6単位の刺突文施す。胴部下半回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗			
716-62 271-62	須 惠 器 瓶	胴部下 半 1/4	—×10.6×(9.5) 胴径15	B、43 I 49	肩部やや張る。付高台幅広く断面矩形。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗			
716-63 271-63	須 惠 器 瓶	頸部 1/3	—×—×(8.5)頸 基部7	B、45 I 41	頸部下半直立し上半は緩く外反する。	①良好 ②灰白 ③やや密			
716-64 271-64	須 惠 器 瓶	底部 1/4	—×11.7×(4.3)	B、41 I 32	付高台、高く外反して開き端部は強く上方へ撥ねる。	①良好 ②暗灰黄 ③やや粗			
716-65 271-65	須 惠 器 壺	肩部小 片	—×—×(5) 肩径25.4	B、41 I 29	肩部くの字状に折れる。頸部直線的に外傾する。肩部凹線区画内に波状櫛描文あり。	①良好 ②暗灰 ③やや密、白色粒混る			
717-66 271-66	土 師 器 甕	1/4	12.4×4.8×15.2 胴径16.3	B、41 I 32	小さな平底、球胴を呈し口縁部は僅かに外反して立つ。口唇部丸い、口縁部横撫で、肩部横・胴部斜篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、細砂混る			
717-67 271-67	土 師 器 甕	上半部 1/4	14.2×—×(8.5) 胴径15	B、43 I 31	胴部丸く張り、口縁部直立し上半は外反して開く。口縁部指頭痕後横撫で。肩部横、胴部斜篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗			
717-68 271-68	土 師 器 甕	1/4 底 部欠損	15.6×—×(9.5) 胴径15.4	B、43 I 26	器肉厚い。胴部扁平で丸く張る。口縁部肥厚し外反して開く。口縁部横撫で。肩部横・胴部斜篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや粗、茶色料混る			
717-69 272-69	土 師 器 甕	口縁部 1/3	22.6×—×(7)	B、41 I 30	肩部張りなく長胴を呈すか。口縁部外反して大きく開き口唇部丸く内湾気味。口縁部横撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る			
717-70 272-70	土 師 器 甕	口縁部 1/2	26.6×—×(7.5)	B、45 I 45	肩部張りなく長胴を呈すか。口縁部直線的に大きくくの字状に開く。口縁部横撫で。肩部横篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや密			
717-71 272-71	土 師 器 甕	胴部 1/3	—×—×(25) 胴径20	B、44 I 44	肩部張りなく中位で僅かに張る長胴をなす。口縁部くの字状に開く。胴部縦篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る			
717-72 272-72	土 師 器 甕	上半部 1/2	22×—×(12)	B、47 I 46	胴部下位へすばまり長胴を呈すか。口縁部緩く外反して大きく開く、口縁部横撫で。胴部縦篋削り。	①良好 ②浅黄橙 ③粗、小石混る			
717-73 272-73	土 師 器 甕	口縁部	23.2×—×(8)	B、44 I 35	胴部丸く張るか。口縁部肥厚し、短かくくの字状に開く。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面横篋撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗			
717-74 272-74	土 師 器 甕	1/4 底 部欠損	22×—×(28) 胴径20.5	B、41 I 27	胴部中位でやや張りをもち長胴を呈す。口縁部くの字状に開く。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。内面篋痕。	①良好 ②橙 ③やや粗			
718-75 272-75	土 師 器 蓋	1/4	8.7×—×3.3 摘径3.3	B、44~46 I 23~28	手捏ぬ。天井部丸く内湾して口縁部に至る。摘大きく不正円形。内面に黒色付着物あり。	①良好 ②橙 ③やや密、細砂混る			
718-76 272-76	須 惠 器 蓋 ?	口縁部 1/4	11.7×—×(3.1)	B、41 I 28	口唇部水平に開き直に立つ。	①良好 ②黄灰 ③やや密			
718-77 272-77	須 惠 器 甕	口縁部 1/3	15.2×—×(5)	B、45・46 I 29・30	口縁部緩く外反して開き口唇部上下端部尖る。	①良好 ②明オリープ灰 ③やや粗			
718-78 272-78	須 惠 器 甕	口縁部 小片		B、44~46 I 23~28	口唇部外反。口唇部下位に凸帯巡り下位に6本単位の波状篋描文2条を施す。	①良好 ②灰 ③やや粗			
718-79 272-79	須 惠 器 鉢	小片	17.6×—×(4.3)	B、45 I 30	口唇部やや肥厚し断面矩形を呈す。	①良好 ②灰白 ③やや密			
718-80 272-80	羽 釜	口縁部 1/4	22×—×(9) 鍔径25.8	B、50 I 39	胴部やや張り気味。鍔上方へ外反する。口縁部内傾し口唇部幅広く断面矩形。上端面水平。口縁部回転篋撫で。	①良好 ②灰白 ③粗			
718-81 272-81	甕 ?	口縁部 1/4	34×—×(13) 鍔径35.6	B、43 I 36	胴部張りなく口縁部は長く直立する。	①良好 ②灰 ③やや粗			
Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
718-82 272-82	瓦 平瓦	43 I 33・ 34	厚1.8	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋削り。	718-85 272-85	円筒埴輪	47 I 46	径18.4 現高(20.3)	籬低く略三角。外面粗い縦刷毛目。内面指頭痕。焼成良好。橙
718-83 272-83	瓦 平瓦	43 I 36	厚2	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋削り。白色粒混る。	718-86 272-86	陶器 播鉢 底部	46 I 37		見込部櫛目。底部回転糸切り。焼成良好。
718-84 272-84	瓦 平瓦	45 I 26	厚1.7	凹面布目。凸面篋撫で。側縁篋削り。酸化焼成。白色焼成。白色小石混。	718-87 272-87	軟質陶器 焙烙 口縁部	45 I 48		口縁部玉縁状に脹らむ。

I 区工房跡関連 (B 地点) 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
719-88 273-88	坩 埚 小 片	45 I 30	厚 1	器肉薄い。内面に銅滓附着。	719-107 273-107	転用坩埚 ?須恵器 杯小片	47 I 47	厚0.5	内面に銅滓附着。
719-89 273-89	坩 埚 小 片	45 I 47	厚1.8	内面に銅滓附着。	719-108 273-108	転用坩埚 ?須恵器 壺小片	42 I 32	厚0.6	内面銅滓附着、部分的に赤銅色を呈す。
719-90 273-90	坩 埚 小 片	47 I 46	厚1.8	内面に銅滴僅かに附着。胎土発泡著しく軽い。	719-109 273-109	転用坩埚 ?須恵器 小片	43 I 47	厚0.6	内面に銅滓附着。
719-91 273-91	坩 埚 小 片	43 I 31	厚2.3	銅滴僅かに附着、口縁部溶解し赤銅色を呈す。	719-110 273-110	転用坩埚 ?須恵器 壺小片	41 I 32	厚0.7	内面赤銅色に溶解。
719-92 273-92	坩 埚 小 片	45 I 46	厚1.7	内面に銅滓附着。	719-111 273-111	転用坩埚 ?須恵器 壺小片	42 I 30	厚0.8	内面に銅滓附着。
719-93 273-93	坩 埚 小 片	44 I 47	厚 2	口縁部溶解し赤銅色を呈す。	719-112 273-112	羽 口 先 端 部	42 I 41	長(6.2) 径(6.2) 孔(2.3)	先端部溶解附着物著しく孔ふさぐ。
719-94 273-94	坩 埚 小 片	48 I 48	厚1.8	口縁部溶解し赤銅色を呈す。	719-113 273-113	羽 口 先 端 部	43 I 44	長(5.6) 径(5.6) 孔(3.6)	先端部溶解顕著。溶解炉附着。
719-95 273-95	転用坩埚 ?須恵器 小片	43 I 49	厚0.6	内面ガラス質状に溶解。部分的に赤銅色を呈す。	719-114 273-114	羽 口 先 端 部 小 片	46 I 47	長(3.5) 径(4.8) 孔(1.9)	先端部溶解顕著。
719-96 273-96	転用坩埚 ?須恵器 小片	42 I 30	厚0.7	内面に銅滓附着。	719-115 273-115	羽 口 先 端 部	44 I 44	長(3.3) 径(5.5) 孔(1.7)	先端部溶解顕著。鉄分附着。
719-97 273-97	転用坩埚 須 恵 器 壺 底 部	47 I 48	厚1.2	内面に銅滓附着。	719-116 273-116	羽 口 先 端 部 小 片	44 I 47	長(4.0)	先端部溶解顕著。
719-98 273-98	転用坩埚 須 恵 器 壺 片	42 I 29	厚1.2	内面に多量の銅滓附着。部分的に赤銅色を呈す。	719-117 273-117	羽 口 先 端 部	43 I 44	長(8.3) 径(4.5) 孔(1.8)	やや細身で器肉薄い。
719-99 273-99	転用坩埚 ?須恵器 壺片	42 I 30	厚0.8	内面に多量の銅滓附着。	719-118 273-118	羽 口 先 端 部 小 片	42・44 I 43・45	長(3.6) 孔(2.7)	先端部溶解。
719-100 273-100	転用坩埚 ?須恵器 壺片	42 I 30	厚1.1	内面に及び割12に銅滓附着。	719-119 273-119	羽 口 先 端 部 小 片	28 I 41	長(3.3) 孔(2.6)	先端部溶解。
719-101 273-101	転用坩埚 ?須恵器 長頸瓶片	42 I 31	厚0.8	内面に銅滓附着。部分的に赤銅色に溶解。	719-120 273-120	羽 口 先 端 部 小 片	46 I 35	長(4.3)	先端部溶解。
719-102 273-102	転用坩埚 ?須恵器 壺片	42 I 30	厚0.9	内面に少量の銅滓附着。	719-121 273-121	羽 口 先 端 部 小 片	42 I 32	長(3.2)	先端部溶解。
719-103 273-103	転用坩埚 ?須恵器 杯小片	41 I 33	厚0.9	内面に銅滓附着。底部回転篋削り。	719-122 273-122	羽 口 先 端 部 小 片	44 I 29	長(6.2)	先端部溶解。
719-104 273-104	転用坩埚 須恵器杯	41 I 33	底径(8)	内面に銅滓附着。底部やや丸味をもち手持篋削り。	720-123 273-123	羽 口 先 端 部	50 I 39	長(9.2) 径(7.5) 孔(2.2)	先端部溶解顕著。
719-105 273-105	転用坩埚 ?須恵器 壺小片	42 I 33	厚 1	内面に銅滓附着。	720-124 273-124	羽 口 先 端 部	44 I 48	長(6.1)	先端部溶解。
719-106 273-106	転用坩埚 須 恵 器 壺 小 片	41 I 33	厚1.5	内面銅滓附着。	720-125 273-125	羽 口 先 端 部	43 I 36	長(5.0)	先端部溶解。外面縦篋調整。

I区工房跡関連（B地点）出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
720-126 273-126	羽口 先端部小片	49 I 43	長(3.5)	先端部溶解。外面縦 篋調整。	721-145 273-145	羽口 先端部	42・43 I 36	長(5.1)	先端部溶解。
720-127 273-127	羽口 先端部	44 I 29	長(6.6)	先端部溶解。	721-146 273-146	羽口 先端部	44 I 29	長(5.2) 孔(2.3)	先端部溶解。
720-128 273-128	羽口 先端部	42 I 44	長(5.5)	先端部溶解。	721-147 273-147	羽口 先端部	45 I 47	長(6.2) 径(5.5) 孔(1.9)	先端部溶解。
720-129 273-129	羽口 先端部小片	42 I 32	長(4.3)	先端部溶解。	721-148 273-148	羽口 先端部小片	44 I 47	長(3.5) 孔(2.1)	先端部溶解。
720-130 273-130	羽口 先端部	45 I 47	長(9.3)	先端部溶解。内面縦 篋調整。	721-149 273-149	羽口 先端部小片	44 I 44	長(5.5)	先端部溶解顯著。
720-131 273-131	羽口 先端部	48 I 46	長(6.4) 孔(2.0)	先端部溶解。	721-150 273-150	羽口 先端部	47 I 47	長(5.5)	先端部溶解。
720-132 273-132	羽口 先端部	44 I 47	長(1.5)	先端部溶解物。	721-151 273-151	羽口 先端部小片	43 I 32	長(3.2)	先端部溶解。
720-133 273-133	羽口 先端部	40 I 24～ 32	長(4.9)	先端部溶解。	721-152 273-152	羽口 先端部	48 I 43	長(3.1) 孔(2.0)	先端部溶解。
720-134 273-134	羽口 先端部	45～49 I 47～50	長(4.5) 孔(2.0)	先端部溶解。	721-153 273-153	羽口 先端部	41 I 33	長(6.9)	先端部溶解。
720-135 273-135	羽口 先端部	42 I 30	長(5.3)	先端部溶解。	721-154 273-154	羽口 先端部小片	44 I 44	長(3.5) 径(5.6) 孔(2.8)	先端部溶解顯著。
720-136 273-136	羽口 先端部	45 I 47	長(3.5) 孔(3.3)	先端部溶解顯著。	721-155 273-155	羽口 先端部小片	44 I 49	長()	先端部溶解。鉄付着。
720-137 273-137	羽口 先端部	44 I 29	長(5.0)	先端部溶解。	721-156 273-156	羽口 先端部小片	44 I 47	長(3.7)	先端部溶解。
720-138 273-138	羽口 先端部	41 I 31	長(3.3) 孔(3.2)	先端部溶解。	721-157 273-157	羽口 先端部小片	41 I 28	長(3.4)	先端部溶解。
720-139 273-139	羽口 先端部小片	45～46 I 29～30	長(3.0)	先端部溶解。	721-158 273-158	羽口 先端部小片	44 I 44	長(3.0)	先端部溶解顯著。
720-140 273-140	羽口 先端部小片		長(4.2)	先端部溶解。	721-159 273-159	羽口 先端部小片	44 I 29	長(4.4)	先端部溶解。
720-141 273-141	羽口 先端部小片		長(4.2)	先端部溶解顯著。	721-160 273-160	羽口 先端部	44 I 29	長(6.0) 孔(2.2)	先端部溶解。外面縦 方向篋調整。
720-142 273-142	羽口 先端部	43 I 33	長(8.0) 径(4.4) 孔(2.0)	先端部溶解。	721-161 273-161	羽口 先端部	42 I 48	長(5.5)	先端部溶解。
720-143 273-143	羽口 先端部小片	42 I 35～ 36	長(4.5)	先端部溶解。	721-162 273-162	羽口 先端部小片	45 I 35	長(4.0)	先端部溶解。
720-144 273-144	羽口 先端部小片	45 I 48	長(3.2)	先端部溶解。	721-163 273-163	羽口 先端部	42 I 41	長(8.1) 径(6.7) 孔(2.9)	先端部溶解。

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連 (B 地点) 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
721-164 273-164	羽 □ 中 位	45・46 I 29・30	長(5.0)		722-183 274-183	羽 □ 中 位	45 I 48	長(5.2)	
721-165 273-165	羽 □ 先端部小 片	43 I 47	長(5.0)	先端部溶解。	722-184 274-184	羽 □ 中 位	50 I 40	長(5.0)	
721-166 273-166	羽 □ 先 端 部	45 I 47	長(4.8)	先端部溶解。	722-185 274-185	羽 □ 中 位	41 I 29・ 30	長(4.4)	
721-167 273-167	羽 □ 先端部小 片	45 I 30	長(4.2)	先端部溶解。	722-186 274-186	羽 □ 先端部小 片	45 I 47	長(5.3)	先端部溶解。
721-168 273-168	羽 □ 先端部小 片	46 I 48	長(3.6)	先端部溶解。	722-187 274-187	羽 □ 中 位	42 I 32	長(5.8)	
721-169 273-169	羽 □ 先 端 部	43 I 47	長(4.0) 径(6.8) 孔(2.8)	先端部溶解。	722-183 274-188	羽 □ 中 位	44 I 29 径(6.9) 孔(1.9)	長(12.9) 径(6.9) 孔(1.9)	外面縦筥調整。
722-170 273-170	羽 □ 先 端 部	48 I 42	長(9.3) 径(7.1) 孔(2.8)	先端部溶解。	722-189 274-189	羽 □ 基 部	43 I 36	長(9.1) 径6.8 孔1.8	指頭痕成形。
722-171 273-171	羽 □ 中 位	44 I 29	長(8.6)		722-190 274-190	羽 □ 基 部	44 I 44	長(4.7)	外面筥調整。
722-172 274-172	羽 □ 先 端 部	45 I 47	長(4.5) 径(6.8) 孔(2.5)	先端部溶解。外面縦 筥調整。	722-191 274-191	羽 □ 先端部欠 損	45 I 36	長(8.2)	外面筥調整。
722-173 274-173	羽 □ 先端部欠 損	41 I 33	長(9.3) 孔(2.1)	外面縦筥調整。	722-192 274-192	羽 □ 先端部欠 損	47 I 47	長(11.2)	外面筥調整。
722-174 274-174	羽 □ 中 位	44 I 40	長(5.2) 径7.0 孔2.2		723-193 274-193	羽 □ 基 部	42・43 I 35	長(5.2)	
722-175 274-175	羽 □ 中 位	43 I 37	長(4.4) 径(5.5) 孔(2.0)	外面縦筥調整。	723-194 274-194	羽 □ 基 部	45 I 47	長(6.0)	外面縦筥指頭成形痕。
722-176 274-176	羽 □ 先 端 部	48 I 47	長(6.0)	先端部溶解。外面縦 筥調整。	723-195 274-195	羽 □ 先端部欠 損	45 I 47	長(8.6)	先端部溶解。外面縦 筥調整。
722-177 274-177	羽 □ 先 端 部	42 I 35	長(5.4)	先端部溶解。外面縦 筥調整。	723-196 274-196	羽 □ 基 部	43 I 44	長(7.6) 径(6.0) 孔(2.5)	外面指頭成形。
722-178 274-178	羽 □ 先 端 部	45 I 47	長(4.5)	先端部溶解。	723-197 274-197	羽 □ 基 部	45 I 46	長(6.1)	外面指頭成形。
722-179 274-179	羽 □ 中 位	42 I 31	長(6.2)	外面斜筥調整。	723-198 274-198	羽 □ 基 部	44 I 44	長(6.6)	
722-180 274-180	羽 □ 中 位	45 I 30	長(5.5)		723-199 274-199	羽 □ 基 部	47 I 46	長(5.8)	
722-181 274-181	羽 □ 中 位	45 I 47	長(4.6)	外面縦筥調整。	723-200 274-200	羽 □ 先端部欠 損	46 I 35	長(10.2) 径(6.4) 孔(1.8)	外面縦筥調整。
722-182 274-182	羽 □ 中 位	45・46 I 29・30	長(6.2)	外面斜筥調整。	723-201 274-201	羽 □ 基 部	44 I 29	長(7.8)	外面縦筥調整。

I区工房跡関連（B地点）出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
723-202 274-202	羽口 先端部	47 I 47	長(4.1) 径6.6 孔2.0	先端部溶解顕著。	725-221 274-221	砥石 角閃石安 山岩	44 I 29	5.3×2.6×3.7 64.9 g	多面使用。
723-203 274-203	羽口 先端部	42 I 44	長(5.5) 径5.0 孔1.8	先端部溶解顕著。	725-222 274-222	砥石 輝石安山 岩	42 I 33	4.4×3.5×2.0 22.2 g	3面使用。刃痕著しい。
723-204 274-204	羽口	47 I 49	長12.2 径6.1~7.0 孔2.0~2.3	先端部溶解。外面縦 覧調整。	725-223 274-223	砥石 流紋岩	44 I 29	4.9×2.7×3.2 39.8 g	3面使用。
723-205 274-205	羽口 基部欠損	42 I 31	長(8.7) 径(6.0~7.0) 孔2.4	先端部溶解。	725-224 274-224	砥石 輝石安山 岩	42 I 33	3.3×3.2×2.3 14.6 g	刃痕あり。
723-206 274-206	羽口 先端部	44 I 29	長(4.5) 径(5.2) 孔(2.2)	先端部溶解。	725-225 274-225	砥石 角閃石安 山岩	45 I 46	3.2×3.2×2.0 10.1 g	1面使用。
723-207 274-207	羽口 先端部	47 I 47	長(3.4) 径(5.2) 孔(2.0)	先端部溶解顕著。	725-226 274-226	砥石 角閃石安 山岩	45・46 I 47~50	4.8×4.0×2.8 46.6 g	1面使用。
724-208 274-208	羽口	47 I 47	長10.5 径6.6~7.8 孔2.1~4.7	先端部溶解。外面縦 覧調整。	725-227 274-227	砥石 角閃石安 山岩	44~46 I 23~28	7.3×7.3×8.2 239.4 g	多面使用。刃痕あり。
724-209 274-209	羽口 先端部欠 損	43 I 44	長(10.3) 径(7.7~9.2) 孔(2.0~5.4)	外面縦覧調整。	725-228 274-228	砥石 角閃石安 山岩	44 I 29	8.5×6.3×5.5 153.7 g	2面使用。
724-210 294-210	羽口 基部欠損	48 I 46	長(9.4) 径(5.5) 孔(1.6~2.0)	先端部溶解。外面指 頭成形。	725-229 274-229	砥石 角閃石安 山岩	42 I 35	8.4×5.6×3.5 104.9 g	多面使用。
724-211 274-211	羽口 先端部	44 I 44	長(5.8) 径(4.3~5.5) 孔(2.0)	先端部溶解顕著。	725-230 274-230	砥石 角閃石安 山岩	44 I 29	7.8×6.5×3.5 139.7 g	多面使用。
724-212 274-212	羽口	48 I 46	長12.0 径(4.3~6.5) 孔(2.0~3.3)	先端部溶解顕著。溶 解広範囲。溶解度 50°。外面縦撫で成形。	725-231 274-231	砥石 角閃石安 山岩	46 I 43	7.1×7.5×1.4 50.9 g	多面使用。扁平。
724-213 274-213	羽口 先端部	42 I 48	長(4.9) 径(4.5~5.6) 孔(2.1)	先端部溶解。	725-232 274-232	転用砥石 須恵器甕 片	40 I 31	5.8×6.6×1.2 37.8 g	3側面使用。
724-214 274-214	羽口 先端部	41 I 31	長(3.8) 径(4.0~5.5) 孔(2.3)	先端部溶解。	725-233 274-233	転用砥石 須恵器甕 片	47 I 33	4.9×4.5×0.8 26 g	1側面使用。
724-215 274-215	羽口 先端部	44 I 44	長(3.5) 径(4.5~5.6) 孔(2.4)	先端部溶解。	725-234 274-234	転用砥石 須恵器甕 片	45・46 I 29・30	5.1×5.7×1.3 37.5 g	3側面使用。
724-216 274-216	羽口 先端部	50 I 40	長(4.5) 径(5.3~6.6) 孔(2.4)	先端部溶解。	725-235 274-235	転用砥石 須恵器甕 片	44 I 42	3.0×3.6×1.1 17.8 g	3側面使用。
724-217 274-217	羽口 基部欠損	47 I 46	長(10.3) 径(3.5~6.2) 孔(3.1)	先端部溶解。	725-236 274-236	転用砥石 須恵器甕 片	44 I 27	1.9×2.4×0.9 8.1 g	4側面使用。
724-218 274-218	羽口 先端部	44 I 29	長(3.0) 径(4.0~5.2) 孔(1.8)	先端部溶解。	725-237 274-237	転用砥石 羽口片	45~50 I 46~50	3.4×3.1×1.8 18.2 g	多面使用。
725-219 274-219	砥石 輝石安山 岩	42 I 39	6.6×6.1×3.1 144.3 g	多面使用。	725-238 274-238	転用砥石 須恵器甕 片	42 I 33	4.0×3.5×0.8 12.5 g	2側面使用。
725-220 274-220	砥石 流紋岩	45・46 I 29・30	6.7×5.5×2.0 91.9 g	多面使用。	725-239 274-239	転用砥石 須恵器甕 片	43 I 36	3.4×4.1×0.8 12.8 g	2側面使用。

第4章 鍛冶工房跡

I区工房跡関連（B地点）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
725-240 274-240	転用砥石 須恵器甕 片	50~52 I 26~28	3.0×3.8×1.3 13.2 g	3 側面使用。	725-244 274-244	石 輝石安山 岩(粗粒)	43 I 28	14.0×4.0×5.5 480.9 g	
725-241 274-241	転用砥石 須恵器椀 片	44~46 I 23~28	3.8×2.9×1.3 10.6 g	割口及下端面使用。 刃痕あり。	725-245 274-245	石 輝石安山 岩(粗粒)	42 I 36	15.6×4.0×4.7 457 g	
725-242 274-242	銅製品	47 I 46	1.6×1.6×0.9 1.8 g	雁首。	725-246 274-246	銅 滓	47 I 46	3.3×2.2×0.9 26.2 g	
725-243 274-243	銅製品	47 I 46	1.9×1.6×1.2 3.3 g	雁首。					

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物

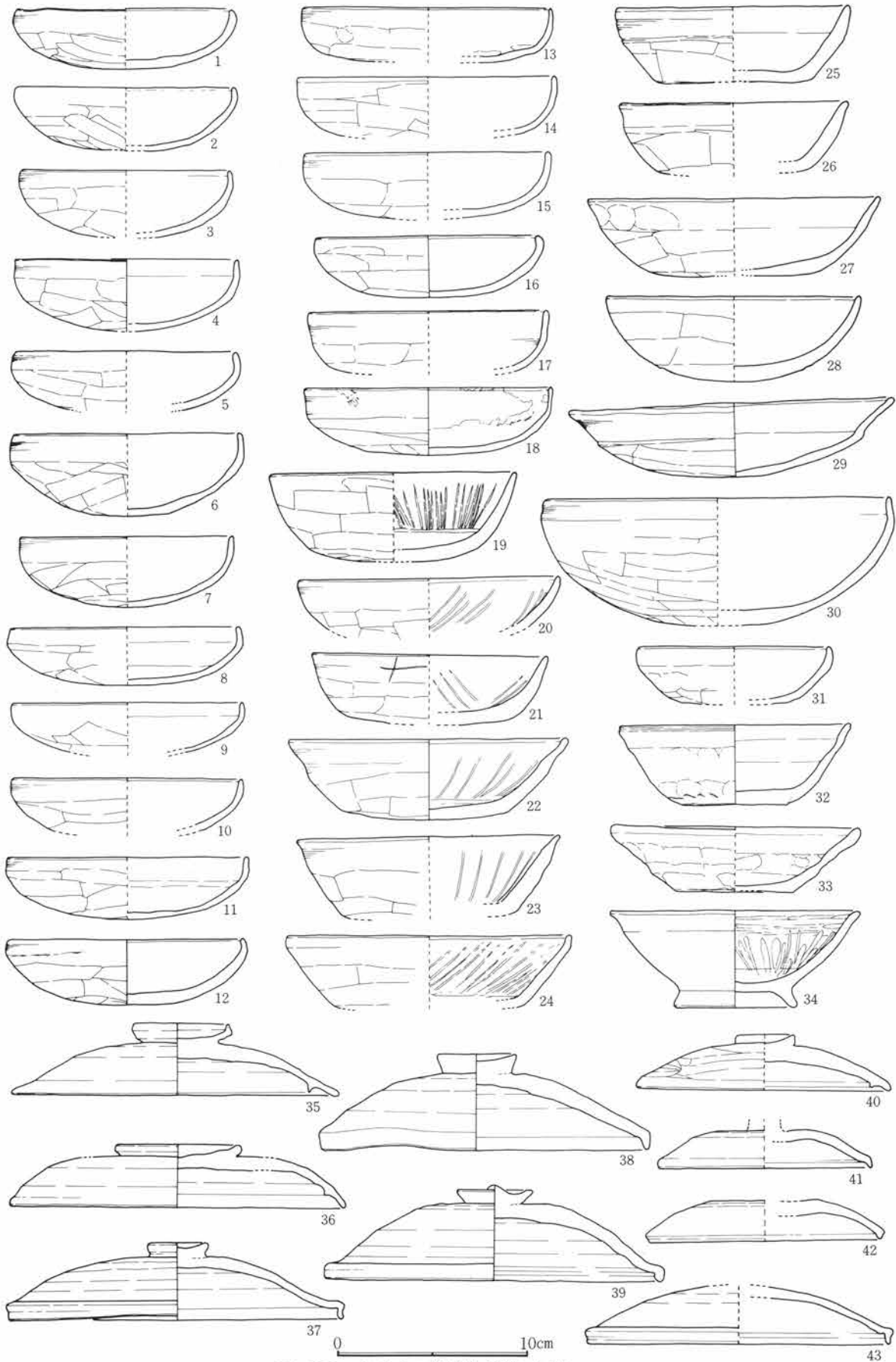


Fig.726 I区その他出土遺物(1)

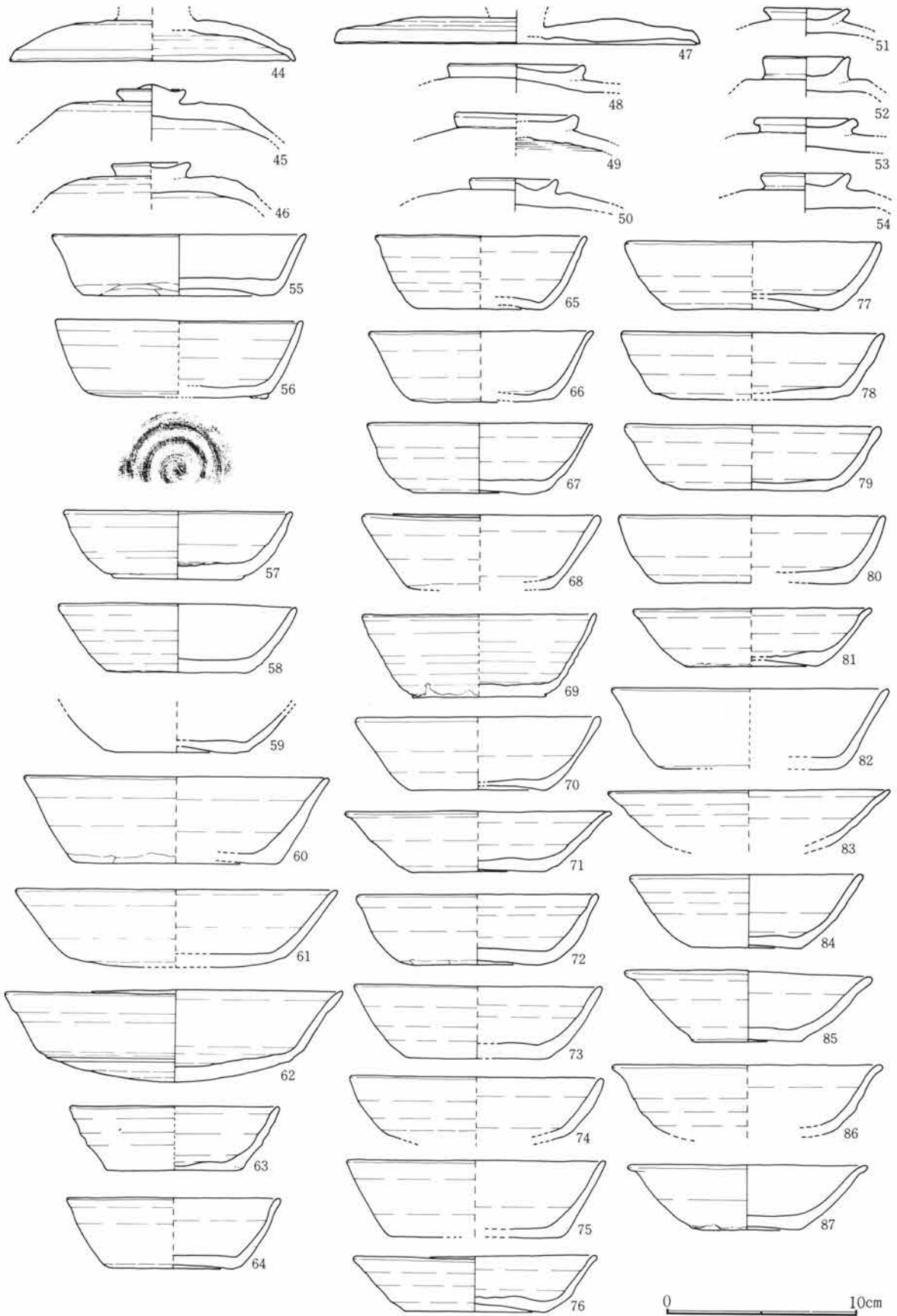


Fig.727 I区その他出土遺物(2)

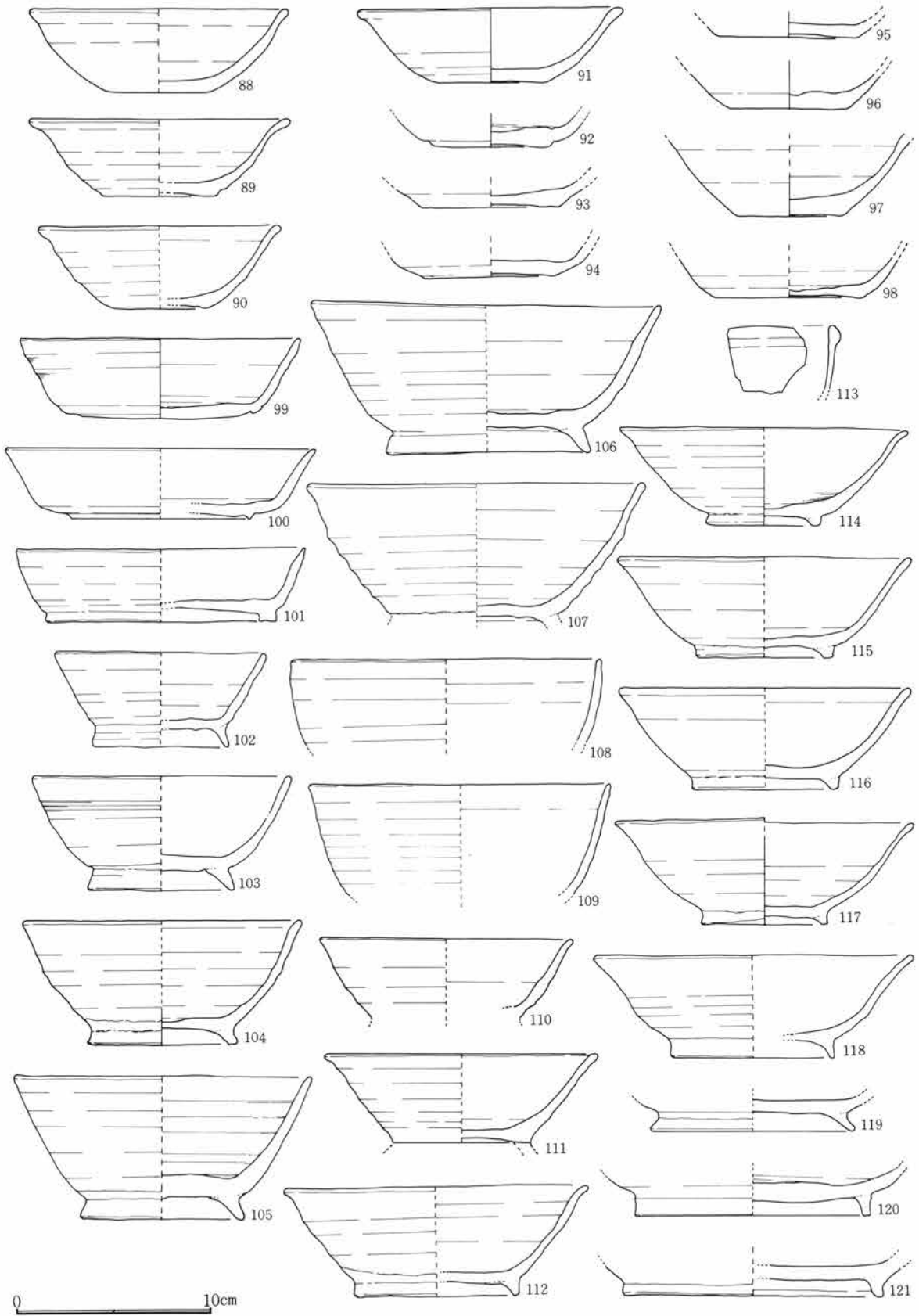


Fig.728 I区その他出土遺物(3)

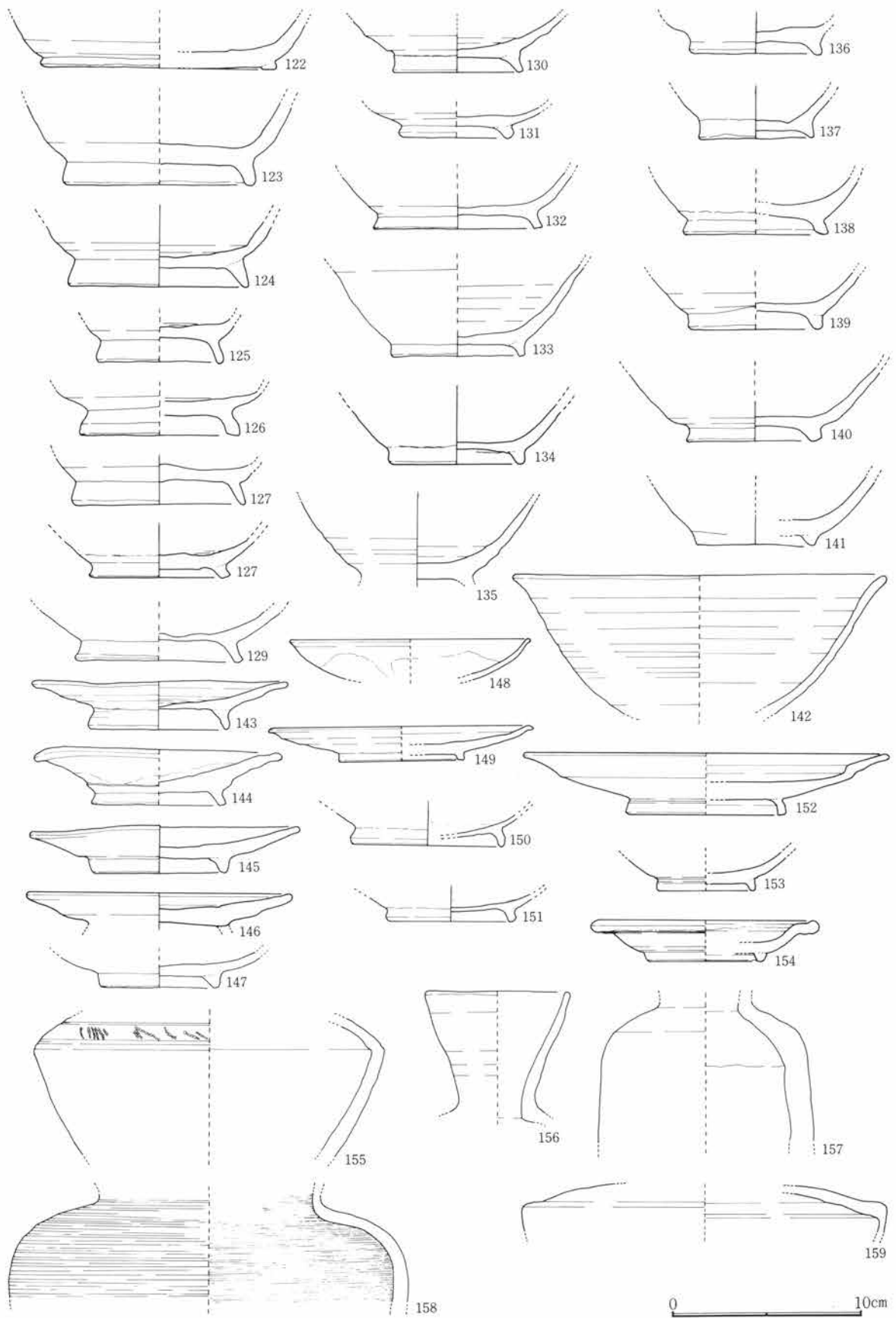


Fig.729 I区その他出土遺物(4)

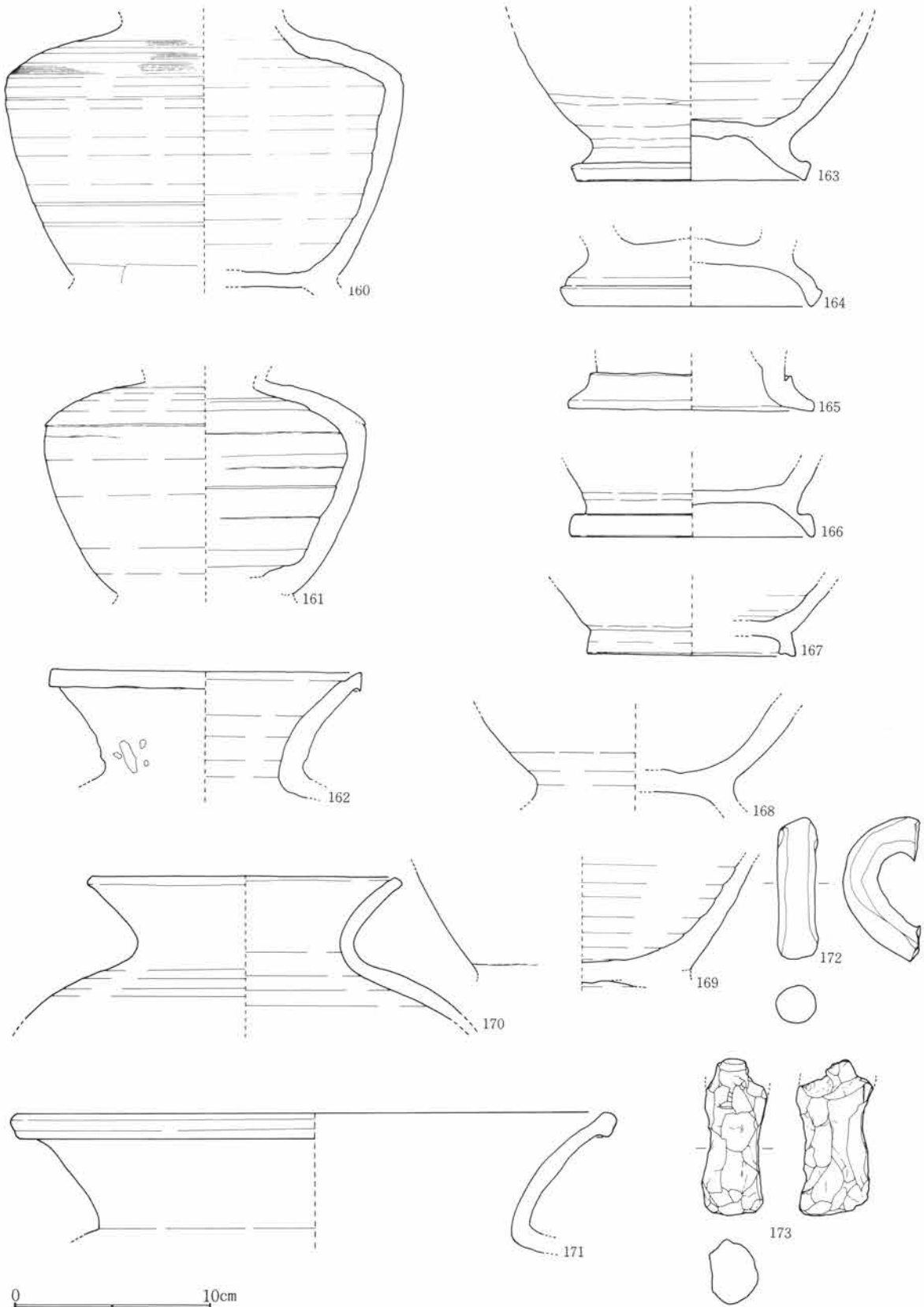


Fig.730 I区その他出土遺物(5)

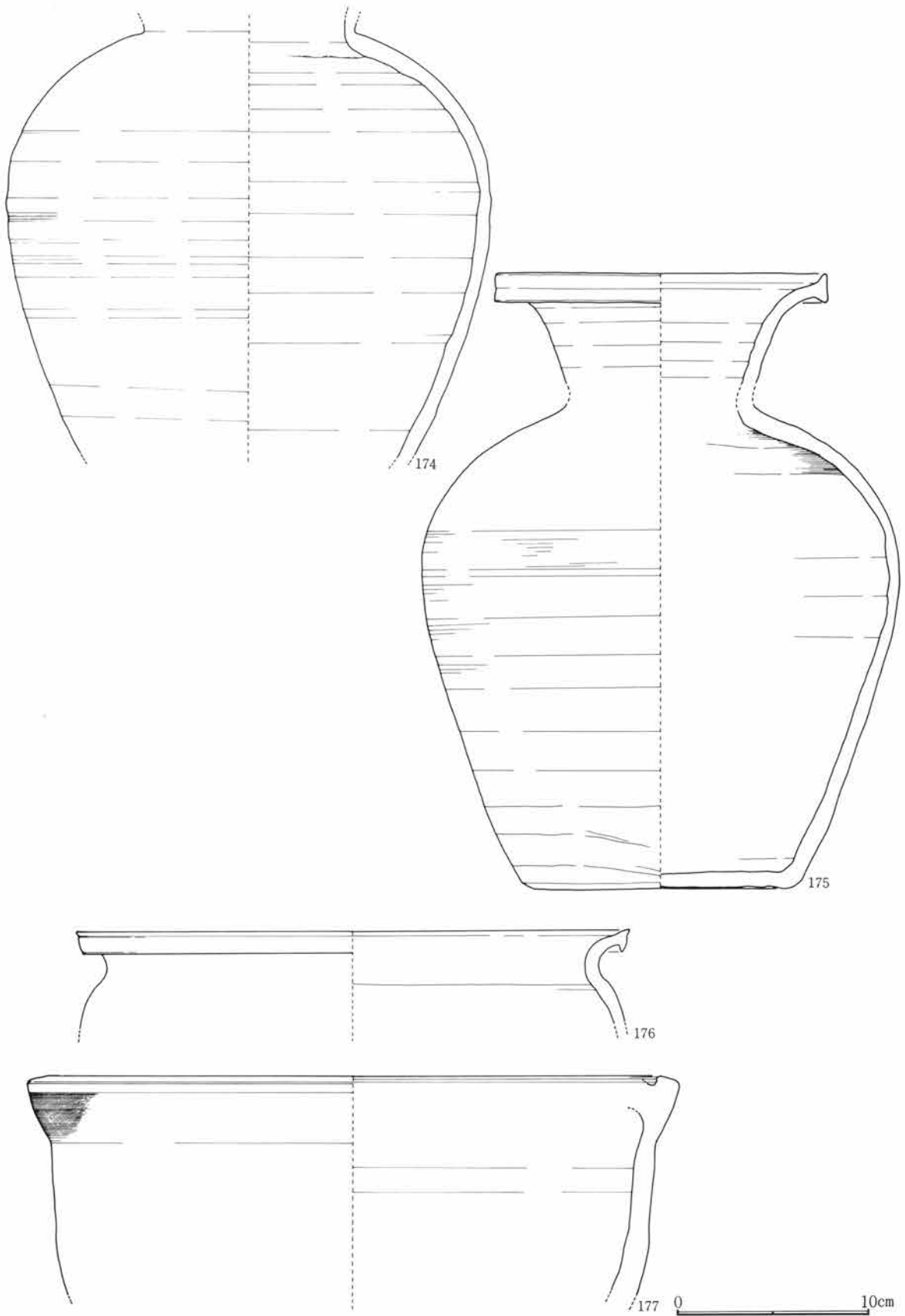


Fig.731 I区その他出土遺物(6)

第3節 I区鍛冶工房跡と遺物

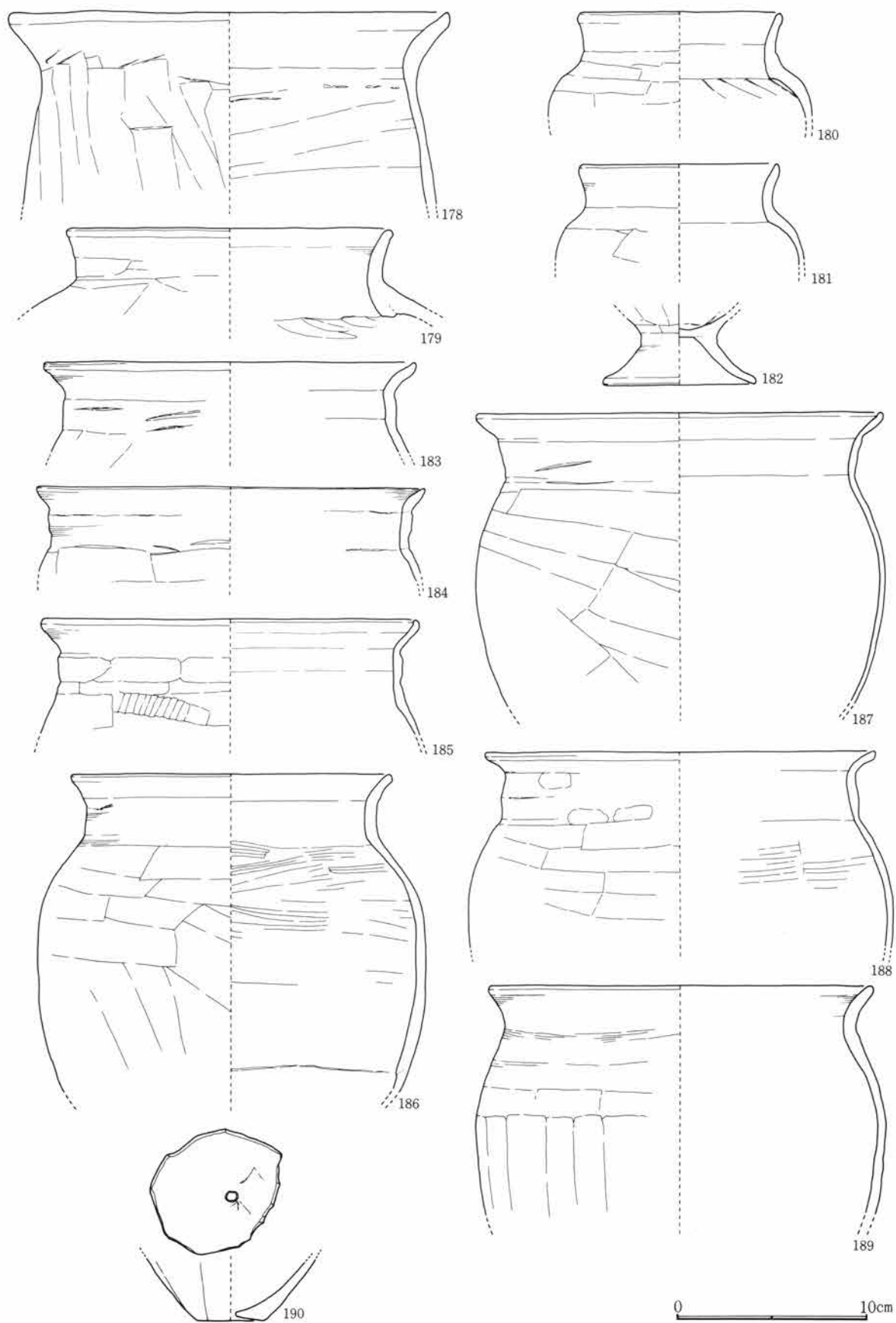


Fig.732 I区その他出土遺物(7)

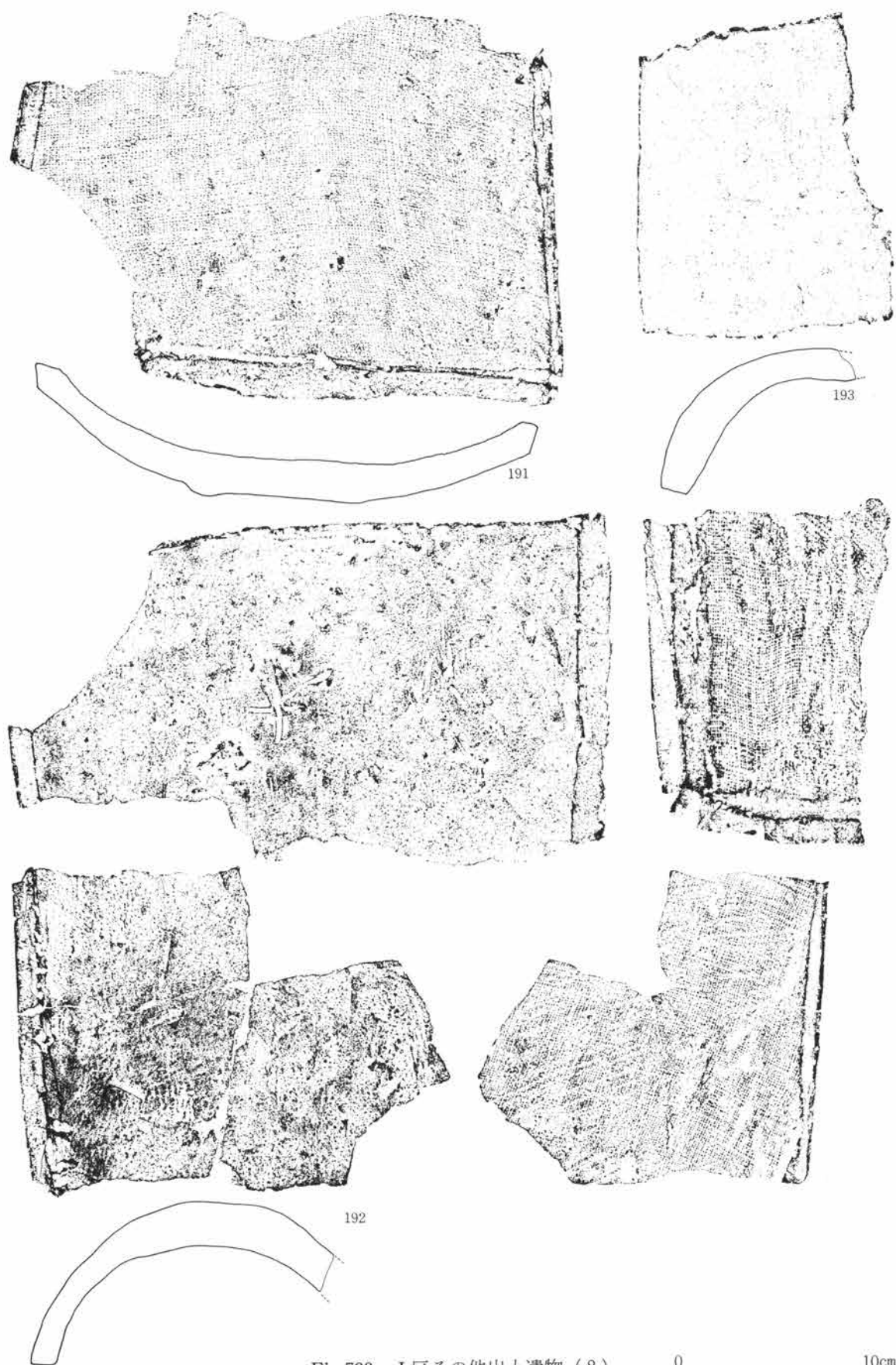


Fig.733 I区その他出土遺物(8)

0 10cm



194



195 . 223



0 10cm

Fig.734 I区その他出土遺物(9)

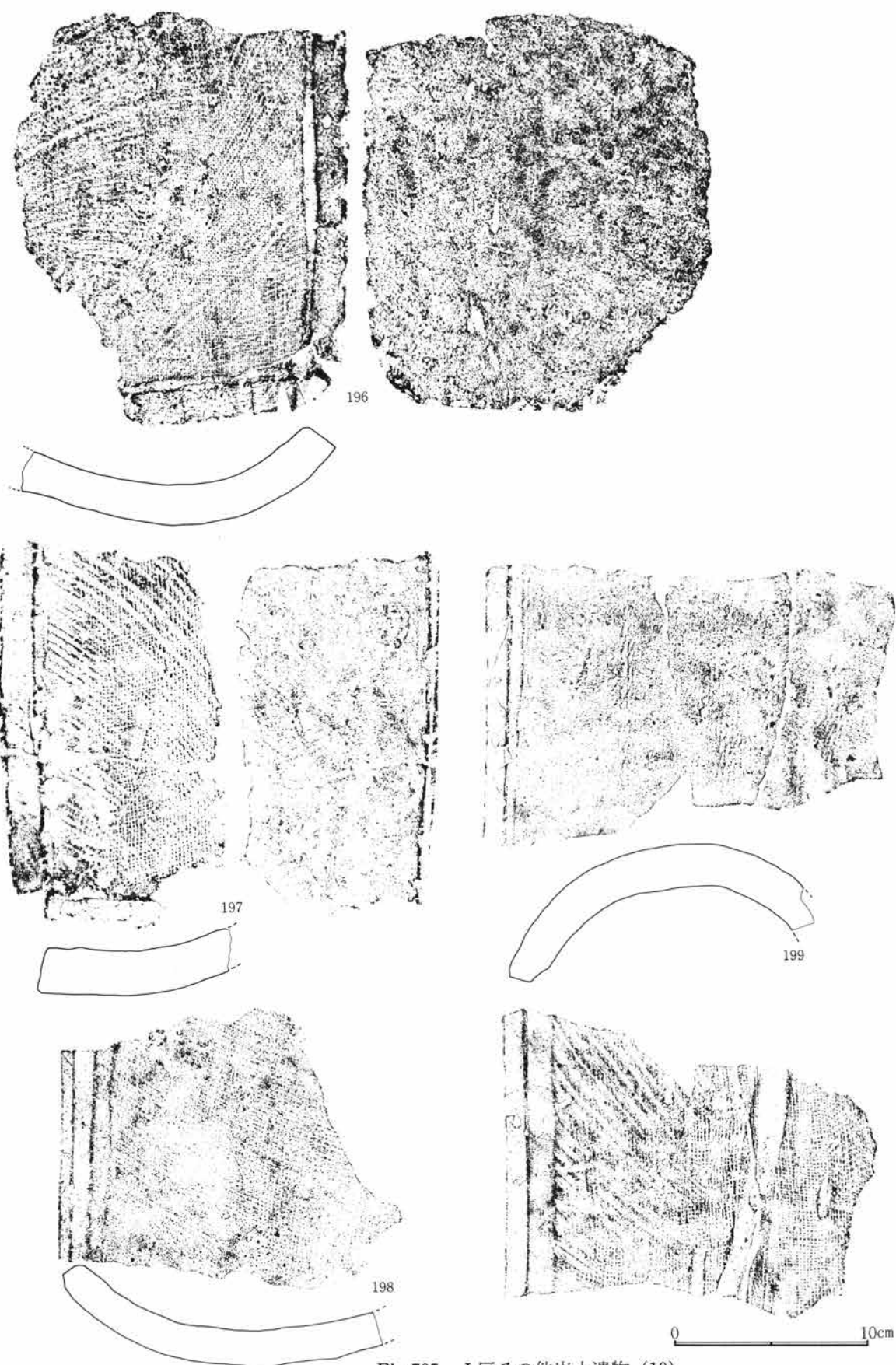


Fig.735 I区その他出土遺物 (10)

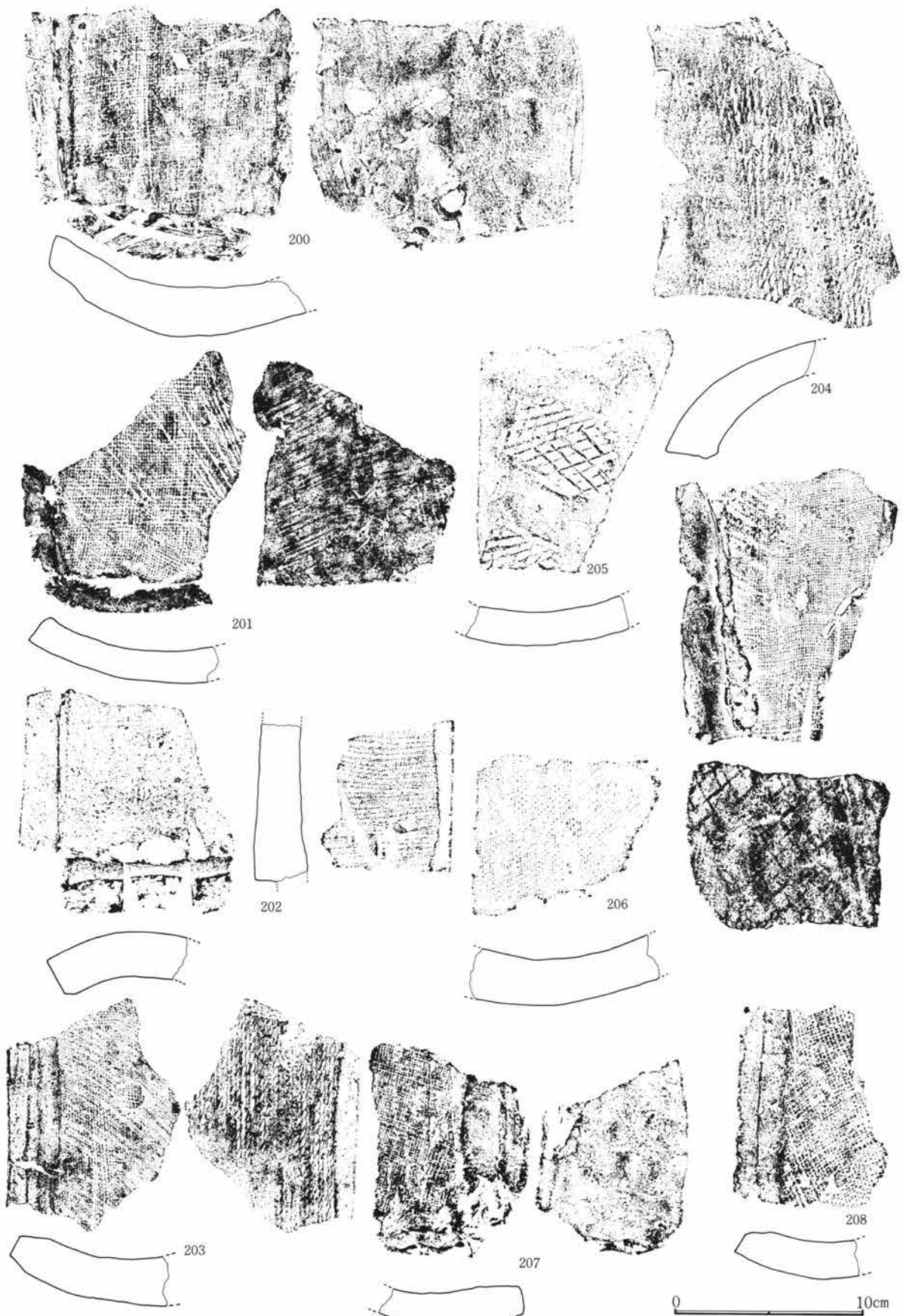


Fig.736 I区その他出土遺物 (11)

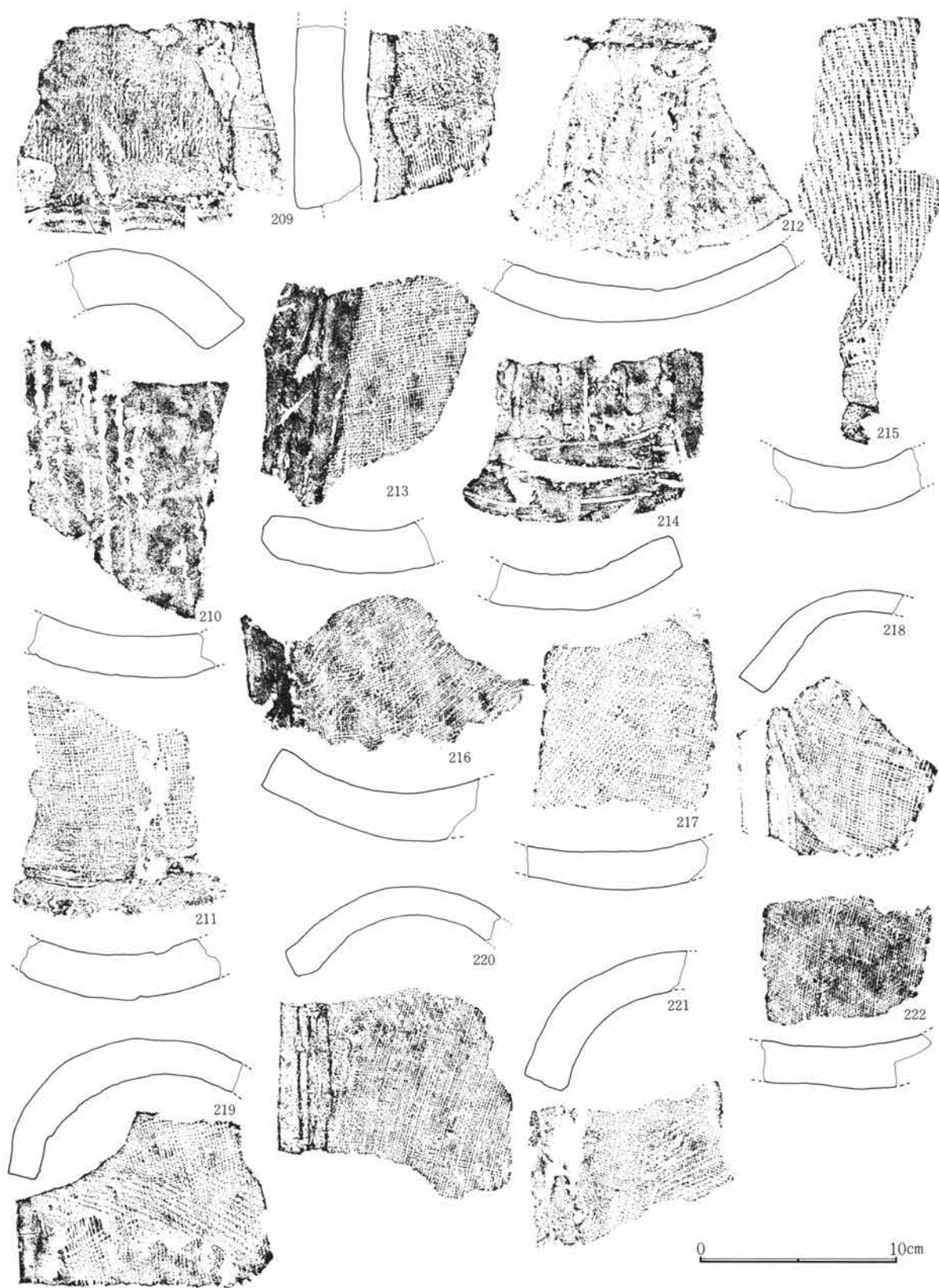


Fig.737 I区その他出土遺物 (12)

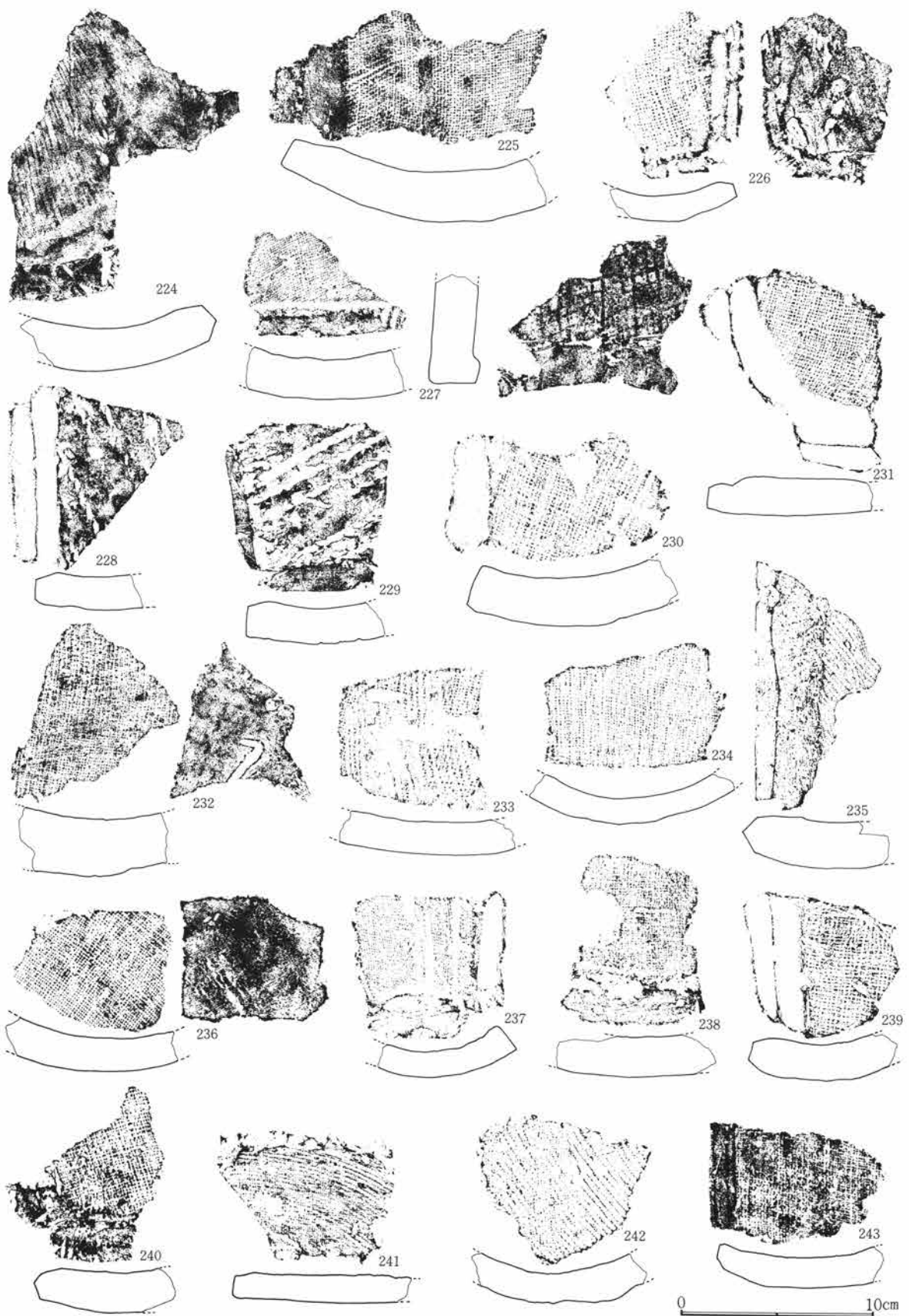


Fig.738 I区その他出土遺物 (13)

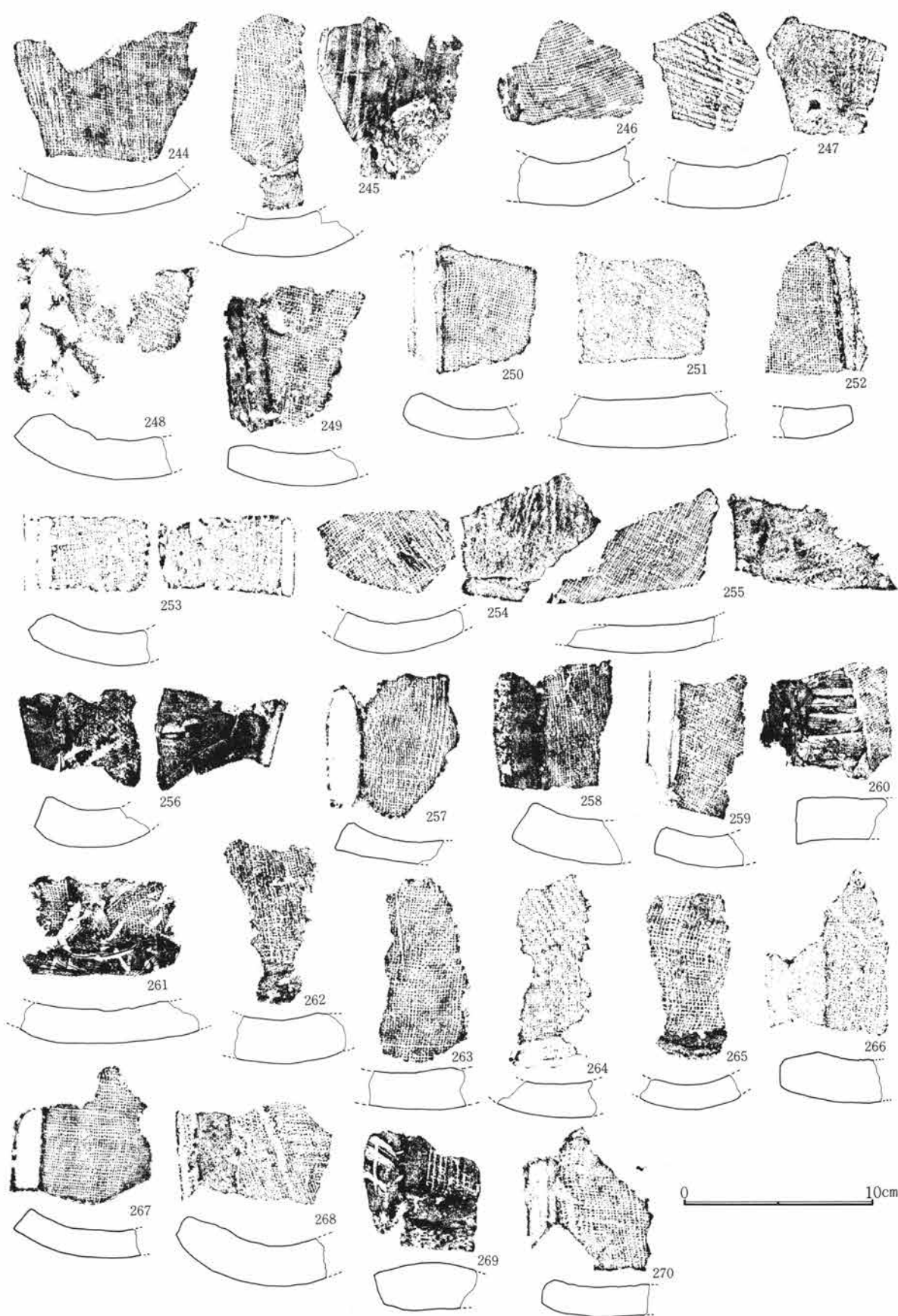


Fig.739 I区その他出土遺物 (14)



Fig.740 I区その他出土遺物 (15)

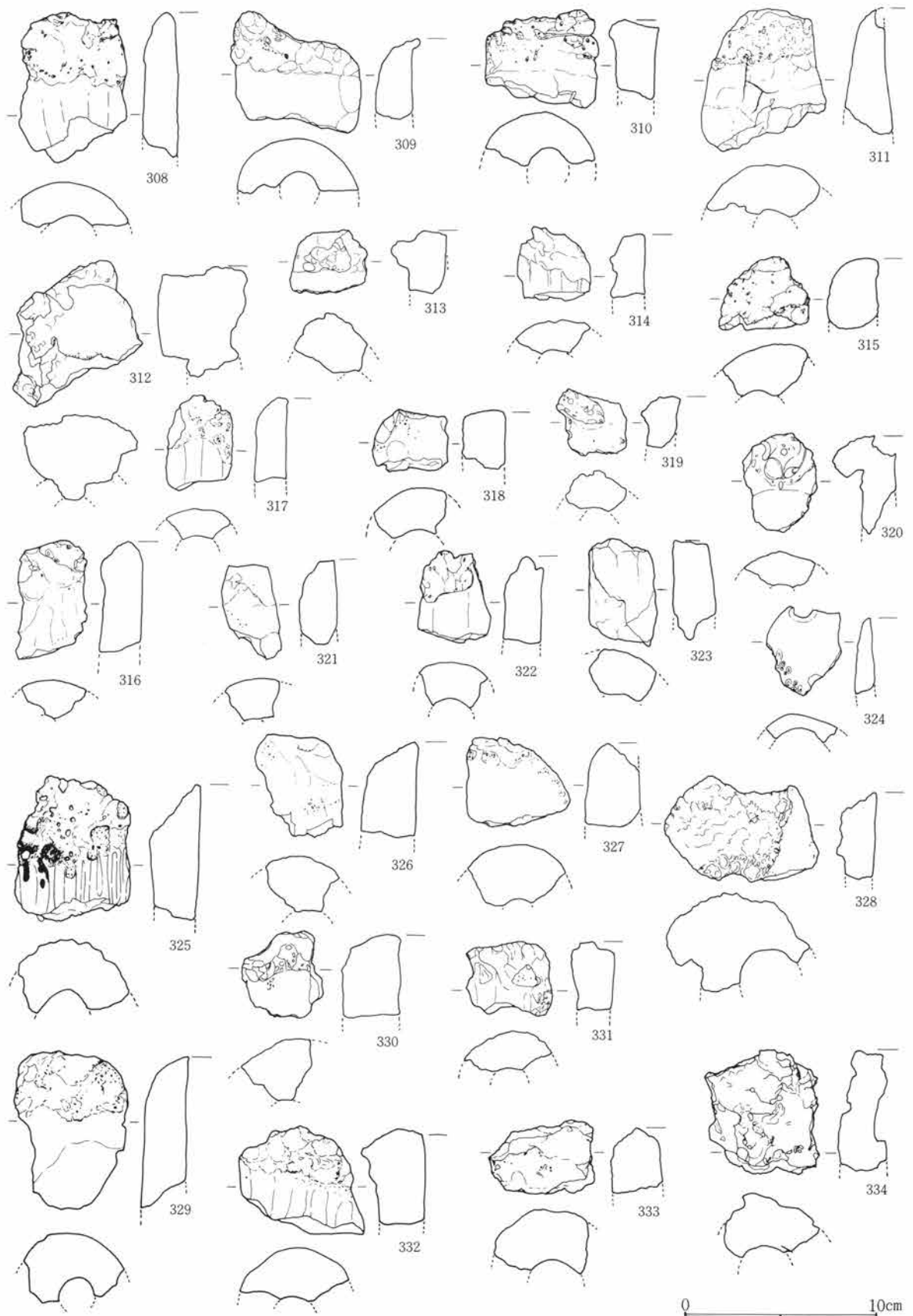


Fig.741 I区その他出土遺物 (16)

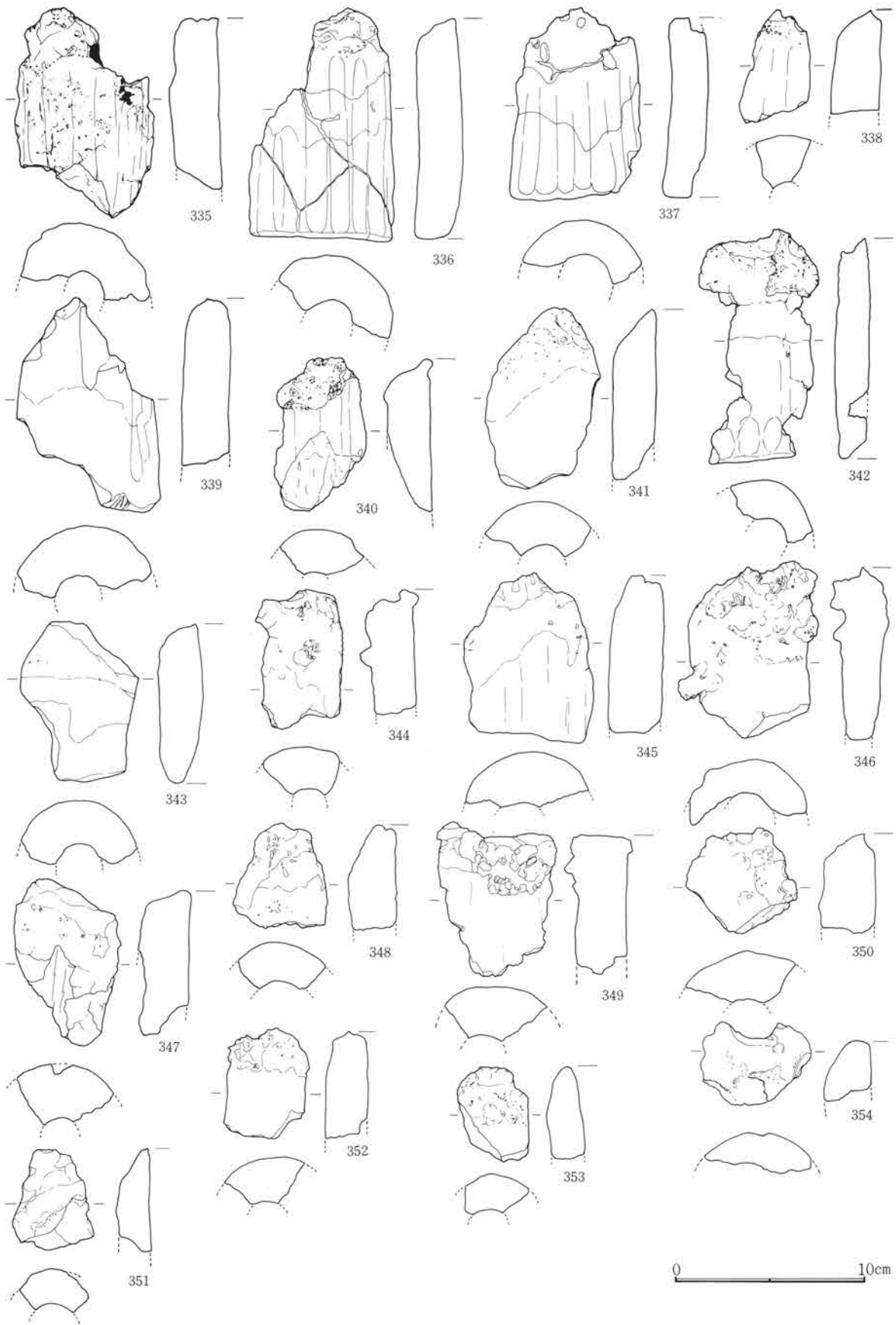


Fig.742 I区その他出土遺物 (17)

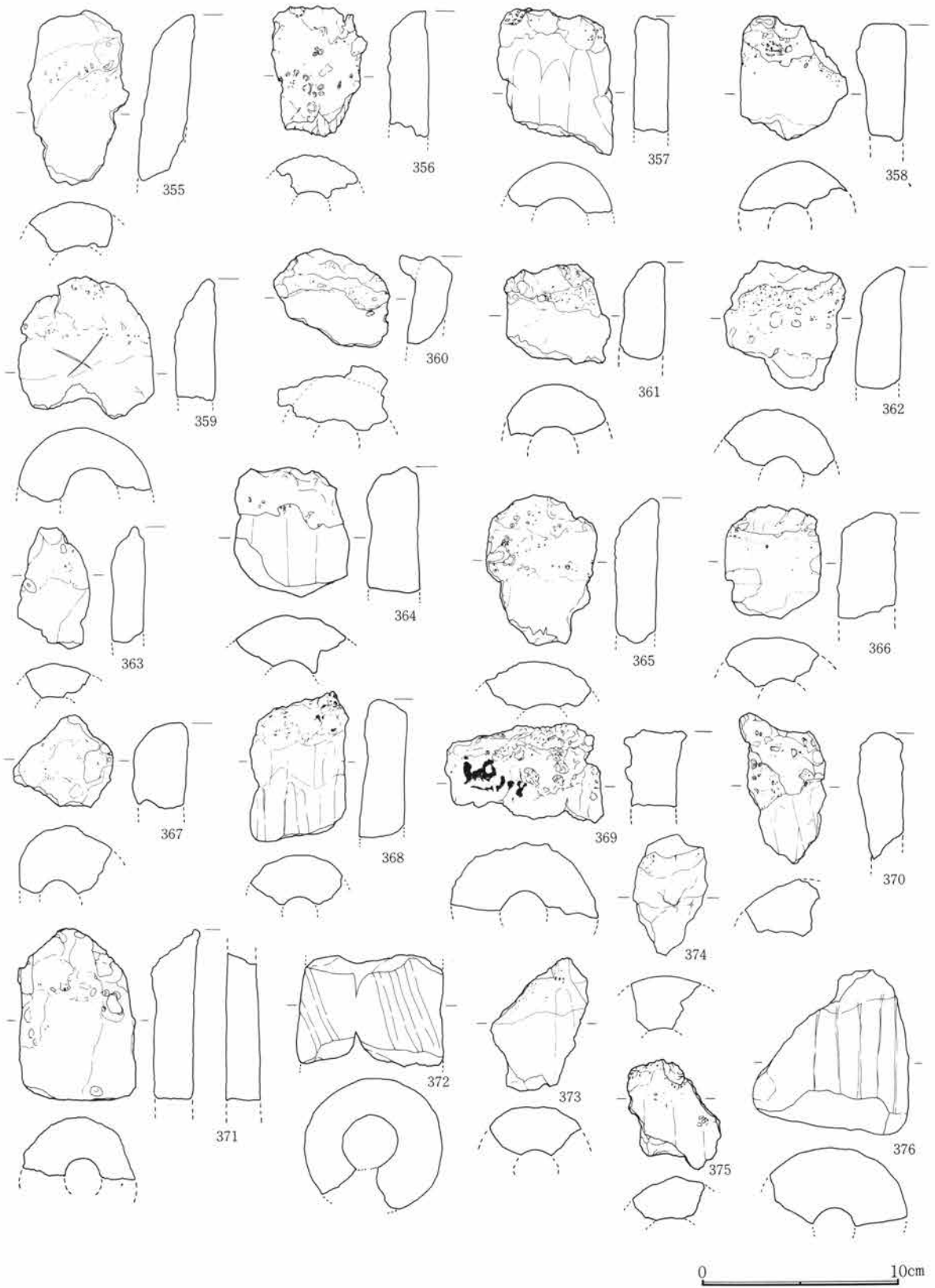


Fig.743 I区その他出土遺物 (18)

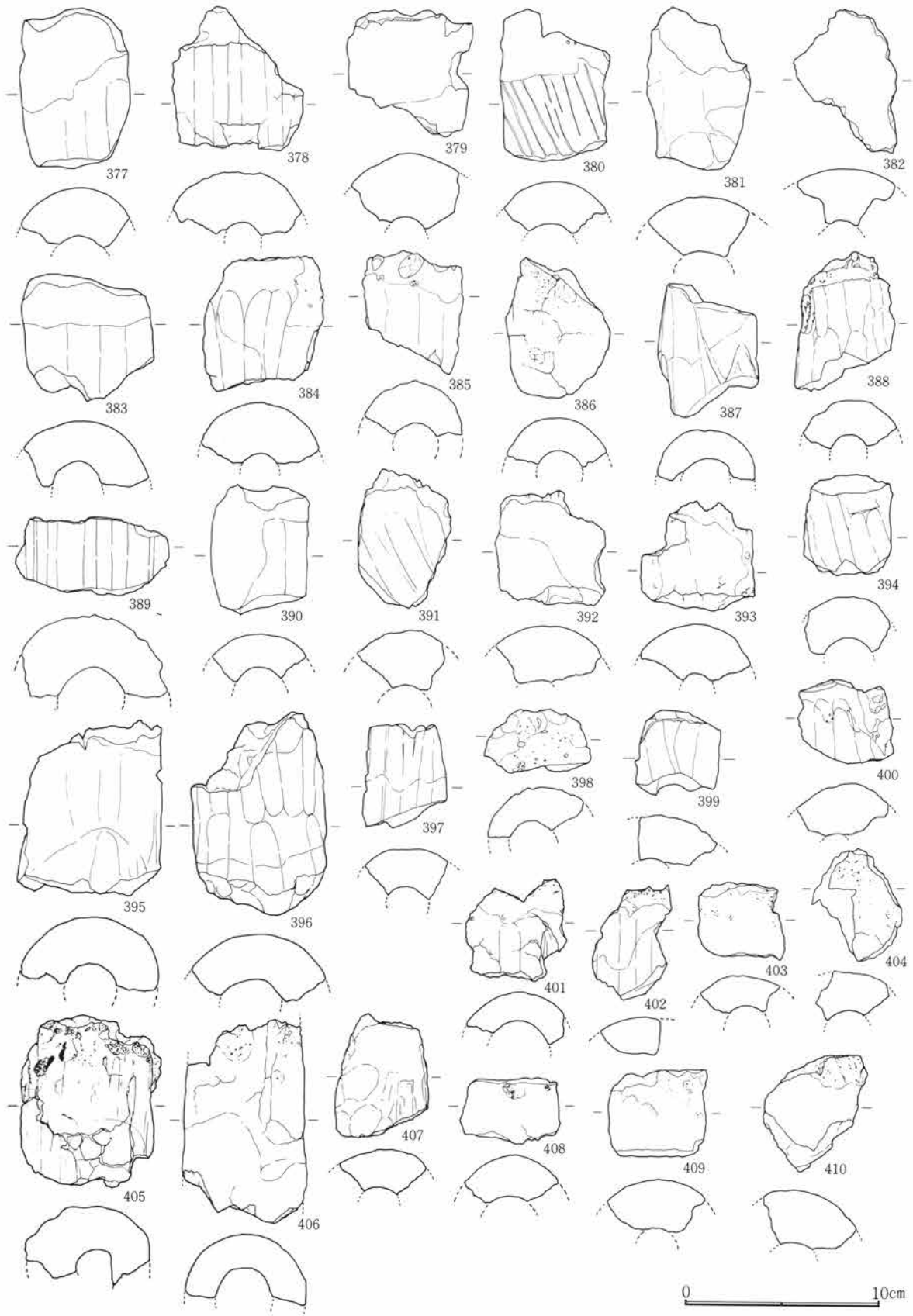


Fig.744 I区その他出土遺物 (19)

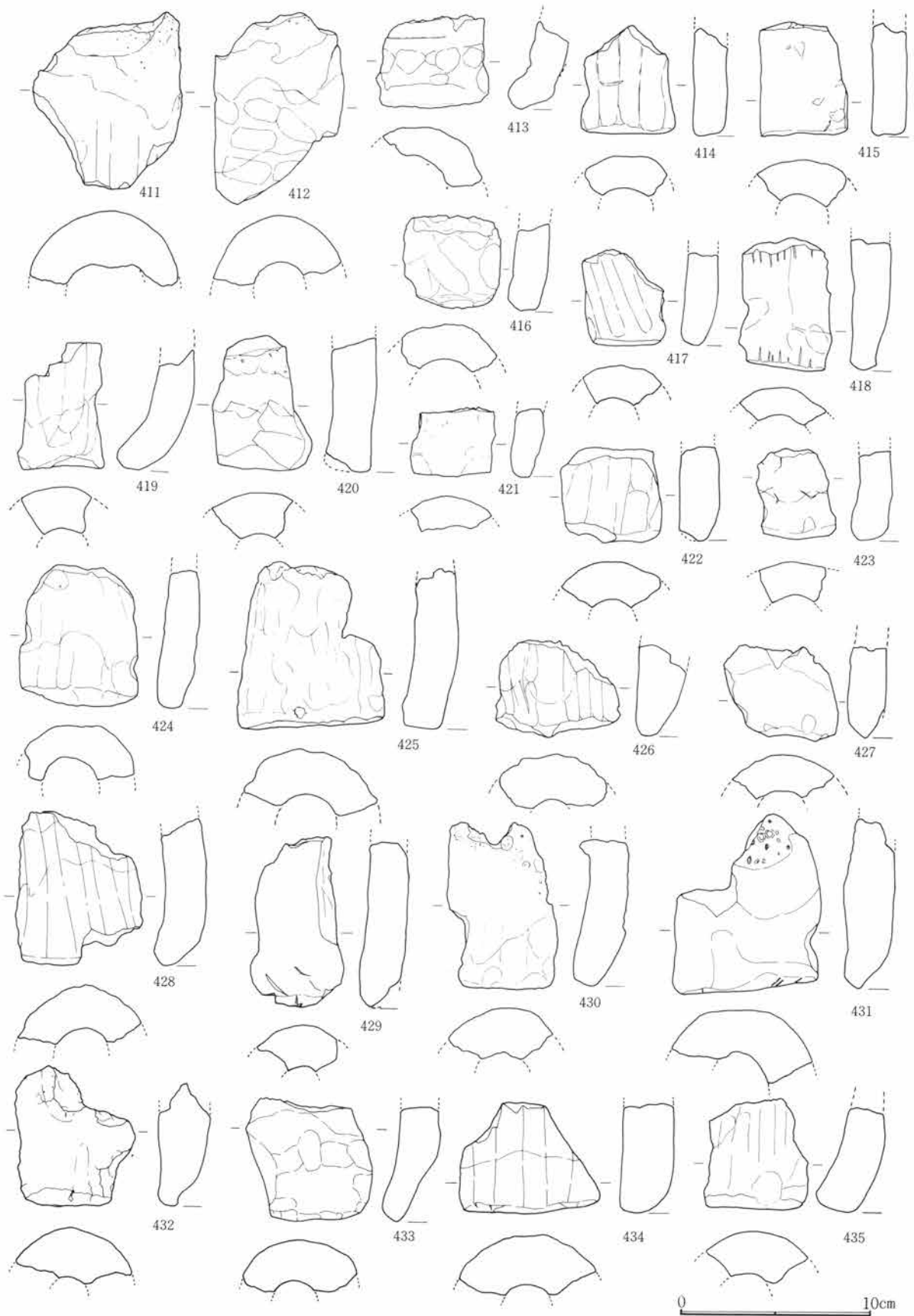


Fig.745 I区その他出土遺物 (20)

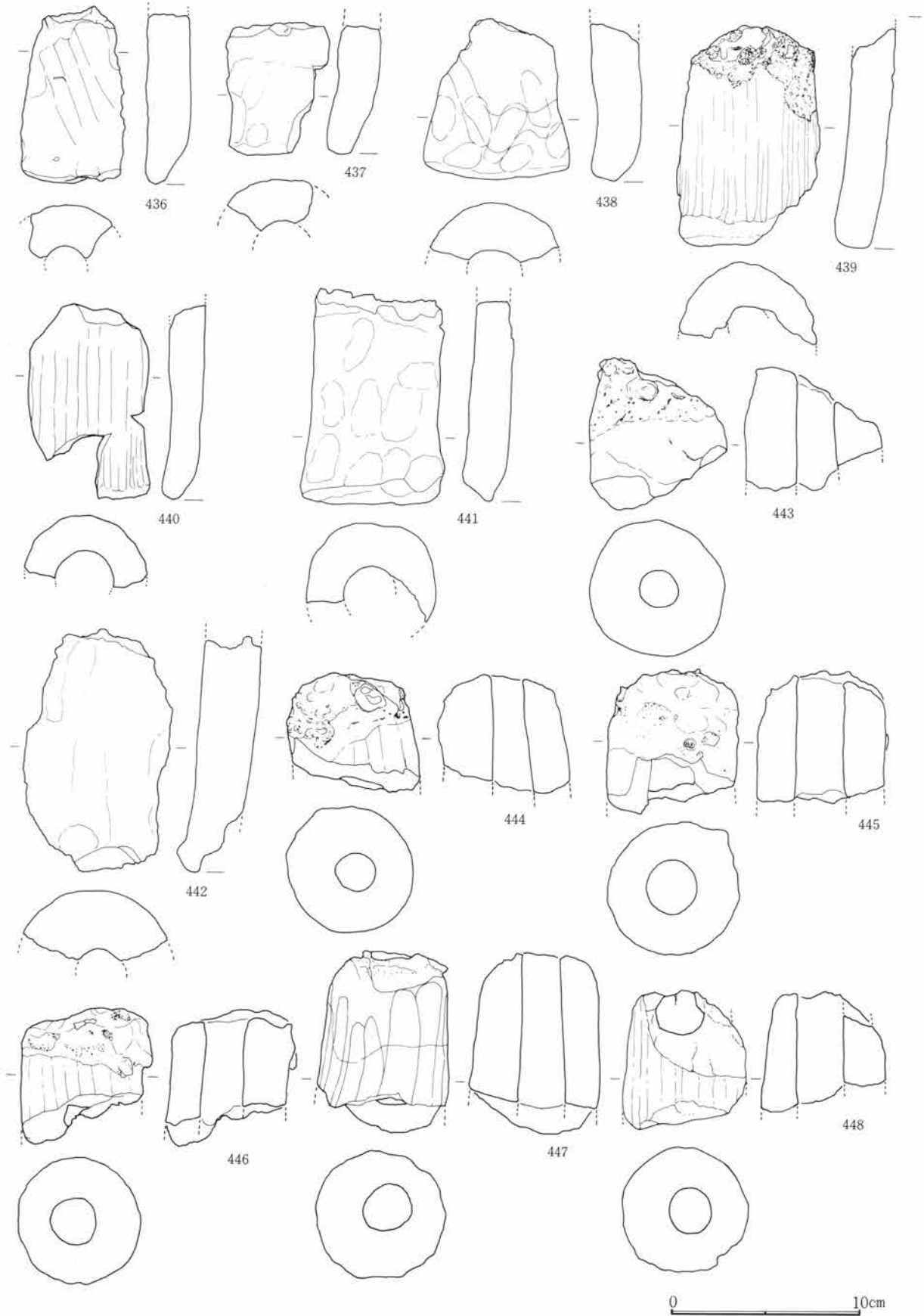


Fig.746 I区その他出土遺物 (21)

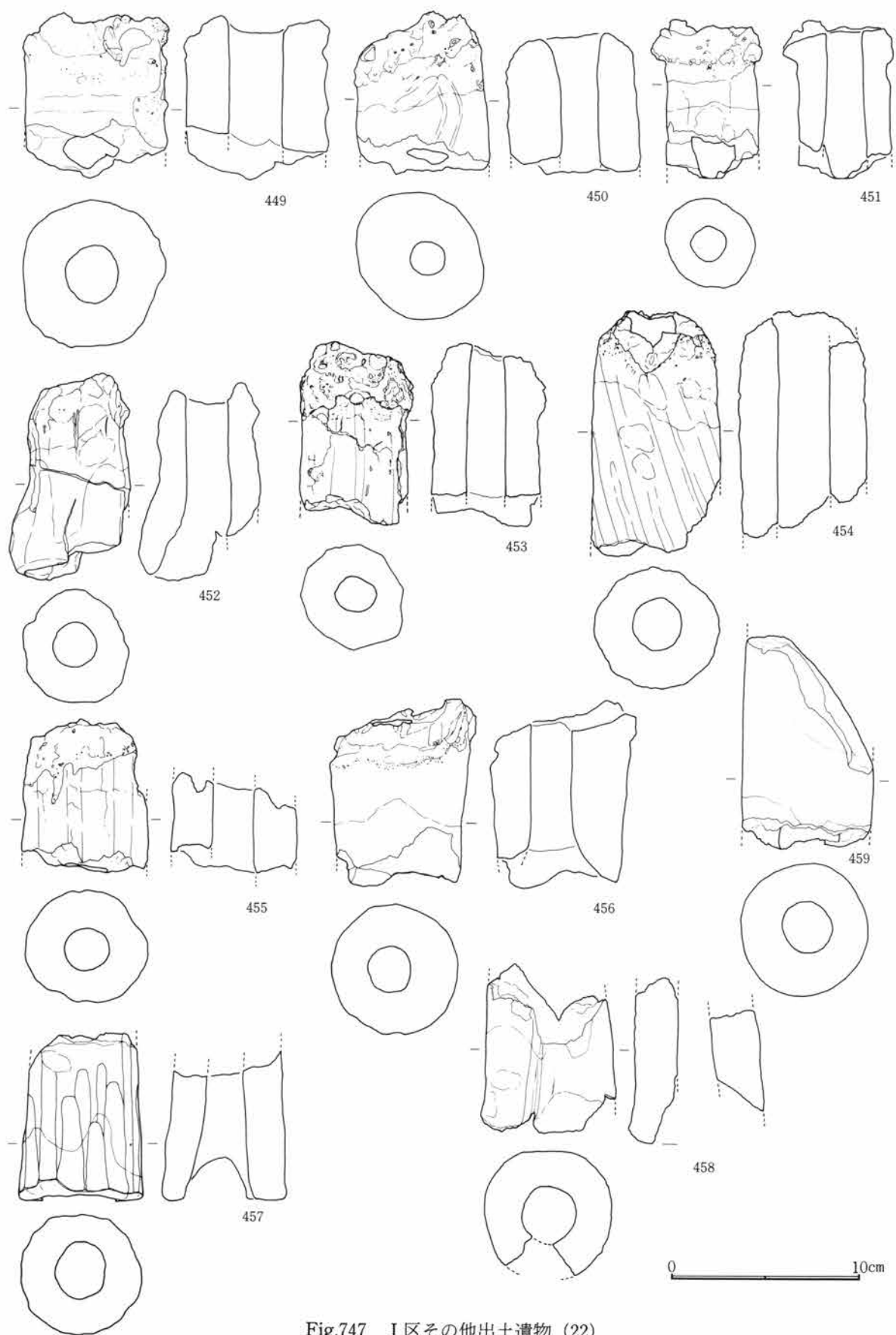


Fig.747 I区その他出土遺物 (22)

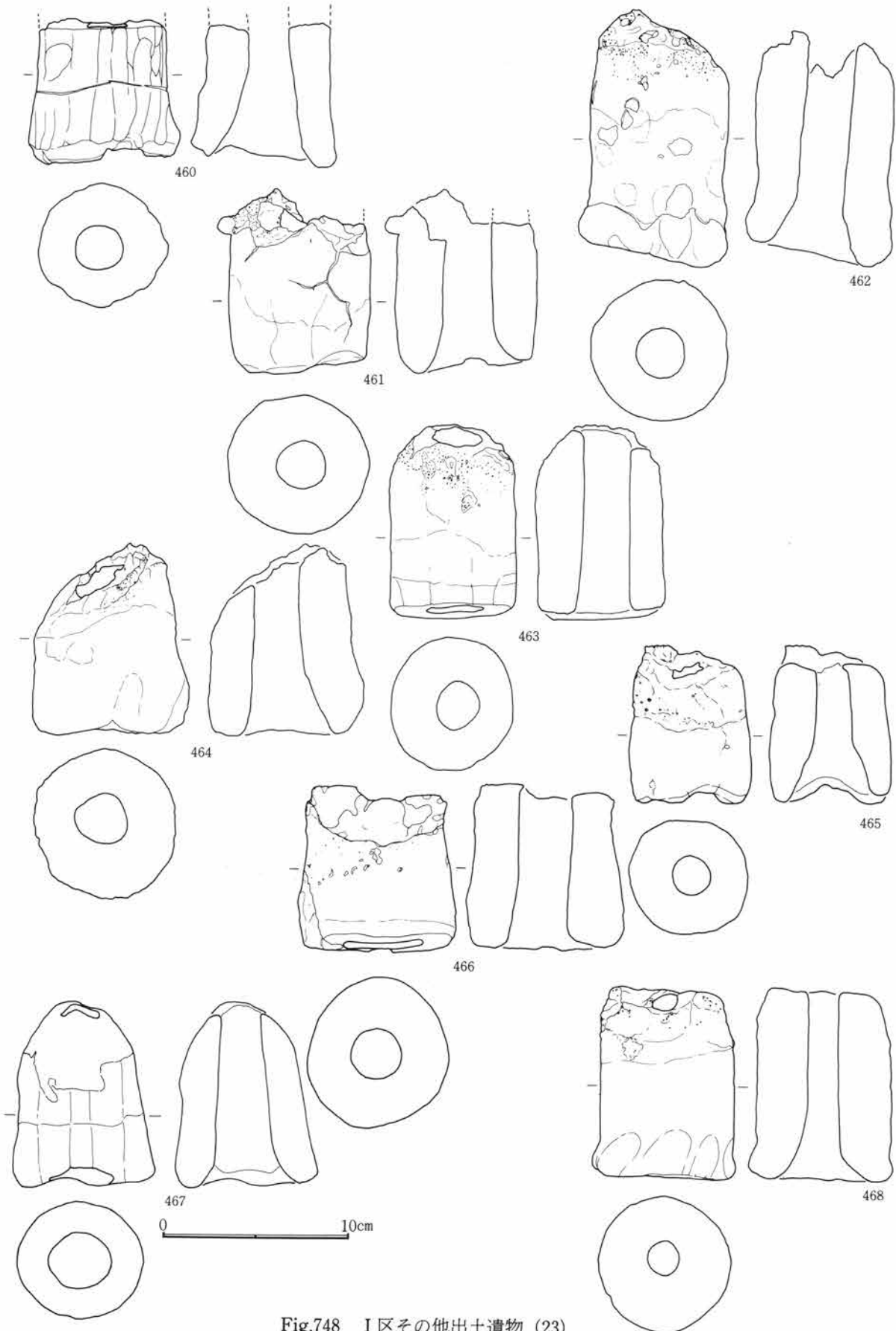


Fig.748 I区その他出土遺物 (23)



Fig.749 I区その他出土遺物 (24)



Fig.750 I区その他出土遺物 (25)

0 10cm



Fig.751 I区その他出土遺物(26)

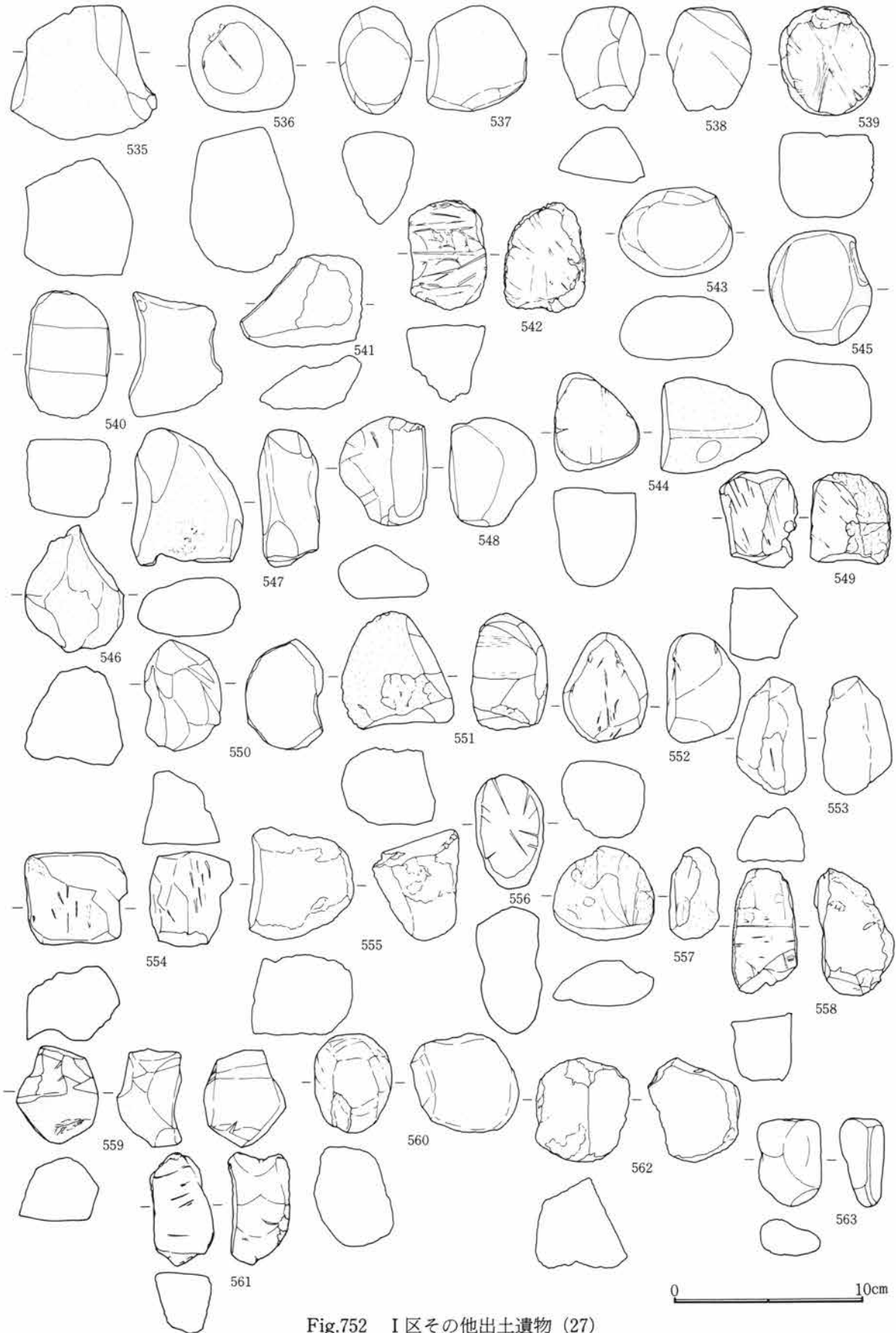


Fig.752 I区その他出土遺物 (27)



Fig.753 I区その他出土遺物 (28)

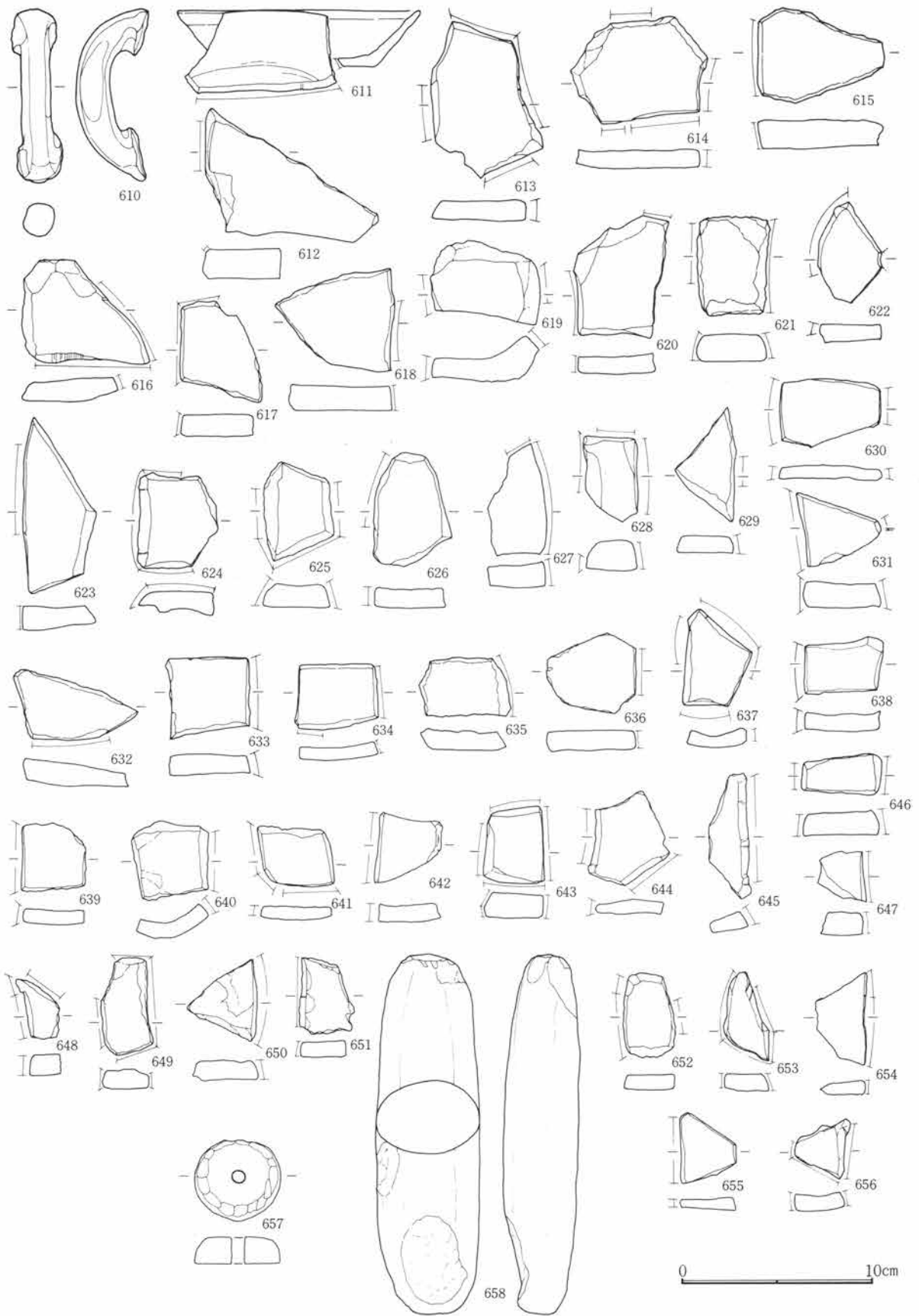


Fig.754 I区その他出土遺物 (29)

第4章 鍛冶工房跡

1 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
726-1 275-1	土師器 杯	1/2	11.3×-×3.1	42 I 18	器肉厚い。底部やや扁平。口縁部内湾する。口縁部横撫で底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
726-2 275-2	土師器 杯	1/4	11.4×-×3.3	61・62 I 34	底部丸味をおび、口縁部は内湾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-3 275-3	土師器 杯	1/2	12×-×3.5	60~13 I 46~50	底部丸くやや深い。口縁部内湾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-4 275-4	土師器 杯	1/2	11.6×-×3.8	42 I 35	底部丸く深い。口縁部外反気味で直立する。口縁部横撫で底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
726-5 275-5	土師器 杯	1/2	11.7×-×(3)	50・51 I 12・13	底部扁平。口縁部内傾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、細砂混る
726-6 275-6	土師器 杯	1/2	12×-×4.3	54 I 20	底部丸く深い。口縁部やや内傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
726-7 275-7	土師器 杯	1/2	11.2×-×3.7	43 I 15	底部丸く深目。口縁部直立し、口唇部僅かに外傾する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
726-8 275-8	土師器 杯	1/4	13.6×-×3	61 I 30	底部浅く扁平。口縁部内傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
726-9 275-9	土師器 杯	1/4	12.2×-×(2.6)	63 I 30・ 31	底部浅く扁平。口縁部内傾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い褐 ③やや粗、細砂混る
726-10 275-10	土師器 杯	1/2	12.2×-×(2.7)	53 I 24	底部やや扁平。口縁部直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②明褐 ③やや密
726-11 275-11	土師器 杯	1/2	13×-×3.1	42~46 I 10	底部やや浅い。口縁部短かく直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
726-12 275-12	土師器 杯	1/4	12.4×-×3.4	53 I 14	器肉厚い。口縁部短かく内屈する。口縁部外面に紐作り痕内面三ヶ所に「×」篋撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密縞状
726-13 275-13	土師器 杯	1/4	13.6×-×2.8	55 I 20	底部扁平で平底気味。口縁部直立し口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
726-14 275-14	土師器 杯	1/2	13.4×-×13.1	60・61 I 24・25	底部扁平。口縁部直立する。口縁部~底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-15 275-15	土師器 杯	1/4	13×-×3	60・61・I 26・27	底部扁平気味。口縁部内湾気味に直立する。口縁部横撫で底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-16 275-16	土師器 杯	1/2	10.8×-×3.1	59 I 32	底部やや扁平。口縁部短かく内屈する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-17 275-17	土師器 杯	1/2	12.3×-×(3.2)	53 I 18	底部やや深く扁平。口縁部やや高く直立する。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗
726-18 275-18	土師器 杯	1/4	13×-×3.5	53 I 24	底部やや深く扁平。口縁部薄く高く直立する。内面に黒色膜状附着あり。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
726-19 275-19	土師器 杯	1/4	12.8×-×4.7	60 I 30	底部から腰部に丸味をもち体部は直線的に外傾する。内面放射状暗文。体部外面横篋削り。底部篋削り後磨き。	①良好 ②鈍い橙 ③密
726-20 275-20	土師器 杯	1/4 底部の欠損	13.8×-×(2.6)	60 I 25	体部深く内湾して開く、内面斜行暗文。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
726-21 275-21	土師器 杯	1/4	13.3×8.5× (3.6)	63 I 26	器肉厚い。平底気味。腰部丸く体部は直線的に外傾。内面斜行暗文。口縁部「+」篋撫。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
726-22 275-22	土師器 杯	完	14.7×8×4.2	60 I 24	底部やや丸味。体部内湾して開く。口縁部外反後口唇部は内湾する。内面放射状暗文。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
726-23 275-23	土師器 杯	小片	13.7×9.2×4.2	56 I 24	肥厚。平底。体部直線的に外傾し、口唇部細り僅かに外反。内面放射状暗文。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
726-24 275-24	土師器 杯	1/4	14.9×9.7×3.8	62 I 22	底部やや丸味。体部外反気味に開き上半でゆるくくびれて口唇部屈して直立。斜行暗文。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
726-25 276-25	土師器 杯	1/4	12.2×8.2×4	55 I 21	肥厚。平底。体部直線的に外傾し、口縁部内傾して立つ。口縁部中・下位に弱い凹線。口縁部篋削り。体部篋削り。	①良好 ②橙 ③密縞状
726-26 276-26	土師器 杯	1/4	12×8×3.5	63 I 20	平底気味。体部やや丸味をもち、口縁部は緩く外反。口縁部横撫で。体部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
726-27 276-27	土師器 杯	1/4	15.1×8.7×4.1	54 I 23	底部やや丸味。体部内湾して丸味をもち口縁部直線的に外傾する。口縁部指頭痕。体部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③密
726-28 276-28	土師器 杯	1/4	13×-×4.4	63 I 28~ 30	全体に肥厚し半円形を呈す。底部篋削り。器面荒れ、成調整不鮮明。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
726-29 276-29	土師器 盤	完	17×-×3.8	63 I 30・ 31	底部丸味をもち扁平。口縁部は強くくびれて外反して開く口唇部丸い内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、小石混る

I区工房跡関連(その他) 出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
726-30 276-30	土師器 鉢	1/2	18×-×6.6	54 I 20	底部丸く張る。口縁部短かく外反気味に内傾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-31 276-31	土師器 杯	1/4	10.2×5.5×3	61 I 20・21	平底気味。口縁部丸く脹らみ内湾する。体部指頭痕。腰底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
726-32 276-32	土師器 杯	1/2	12×5.5×4.1	52 I 24	平底。腰部に丸味。体部上半でくびれ口縁部外反気味。口唇部外面に凹線。体部指頭痕。底部指頭痕。底部篋削り。腰部に接合痕。	①良好 ②橙 ③やや密
726-33 276-33	土師器 杯	1/4	13×6×3.4	42 I 32	平底。体部直線的で大きく外傾。口縁部肥厚くびれて外反し口唇部内湾。体部巻き上成形の凹凸。腰底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密、砂混る
726-34 276-34	土師器 内黒碗	体部1/2 欠損	13×6.4×5	55 I 20	体部内湾気味に開き、口縁部緩く外反。付高台ハの字に開く。内面口縁部横、体部放射状篋磨き。轆轤成形回転糸切。	①良好 ②灰白 ③やや密
726-35 276-35	須恵器 蓋	1/2	17.1×-×3.8 摘径5	60 I 23	天井部丸く張り口縁部僅かに外反。内面かえり尖る。環状摘、内湾して開き上半は屈して内傾。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
726-36 276-36	須恵器 蓋	1/4	17.5×-×3.3 摘径6.5	52・53 I 12・13	天井部平坦。体部内湾して口縁部に至る。口縁部細り、内面に小さなかえり。環状摘、断面丸味。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
726-37 276-37	須恵器 蓋	1/2	17.2×-×4 摘径3.1	61 I 22	天井部丸く、体部外反して開く。口縁部直に折れて外反して立つ。環状摘、際さく断面丸い。轆轤成形。天井回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
726-38 276-38	須恵器 蓋	完	17×-×5 摘径4.1	61 I 22	器肉厚い。体部直線的に開き、口縁部直に折れる。端部略三角。環状摘、断面三角。轆轤成形。天井手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
726-39 276-39	須恵器 蓋	1/2	17.7×-×4.9 摘径4	53・54 I 22~24	体部丸く張り天井平坦。口縁部水平に折れ端部は丸く直に屈す。凝宝珠形摘、天井部回転篋削り。体部と摘胎土相異	①良好 ②暗灰 ③やや粗、白色粒混る
726-40 276-40	須恵器 蓋	1/4	13.2×-×2.8 摘径3.1	62・63 I 32・33	天井部丸味を持ち口縁部は直線的に外傾。かえり丸味をもつ環状摘。体部手持篋削り。内面不定方向の撫で。	①良好 ②灰白 ③密
726-41 276-41	須恵器 蓋	1/4摘欠損	11.2×-×(2)	55 I 21	小形。天井部平坦。体部外反気味に開く。口縁部小さく折れて外傾する。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
726-42 276-42	須恵器 蓋	1/4摘欠損	12×-×(2.1)	63 I 26	天井部平坦。体部内湾して開く。口縁部短かく折れる轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
726-43 276-43	須恵器 蓋	1/4摘欠損	16×-×(3)	61 I 22	天井部丸く張る。体部内湾気味に開き端部短かく水平に屈する。口縁部強く折れ外反して直に下る。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
727-44 276-44	須恵器 蓋	1/4摘欠損	15×-×(2.1)	54~56 I 19~21	扁平。天井部やや平坦をなし体部直線的に固く。口縁部緩く屈して外傾。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-45 276-45	須恵器 蓋	体部欠損	-×-×2.2 摘径3.6	42~58 I 5~10	天井部平坦。肩張る。凝宝珠形摘。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
727-46 276-46	須恵器 蓋	体部欠損	-×-×(2.3) 摘径4.2	53 I 18	天井部平坦をなし、肩部丸く張る。環状摘。轆轤成形。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-47 276-47	須恵器 蓋	摘欠損	19×-×1.4	61 I 20・21	扁平で盤状。器肉厚い。口縁部短かく折れる。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-48 276-48	須恵器 蓋	摘	-×-×(1.4) 摘径7.2	63 I 26	環状摘。大形。断面丸い。	①良好 ②灰 ③やや密
727-49 276-49	須恵器 蓋	摘	-×-×(1.8) 摘径6.5	55 I 19	環状摘。大形。断面略矩形。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-50 276-50	須恵器 蓋	摘	-×-×(1.4) 摘径4.3	61 I 20	環状摘。中央部突出する。断面丸い。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-51 276-51	須恵器 蓋	摘	-×-×(1.3) 摘径4.4	63 I 28~30	環状摘。器肉薄い。	①良好 ②青灰 ③やや粗
727-52 276-52	須恵器 蓋	摘	-×-×(1.8) 摘径4.5	61 I 23	環状摘。丈高い。	①良好 ②灰 ③やや密
727-53 276-53	須恵器 蓋	摘	-×-×(0.8) 摘径5.5	60~63 I 46~50	環状摘。天井部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色粒混る
727-54 276-54	須恵器 蓋	摘	-×-×(1.7) 摘径4.7	45~58 I 13~20	環状摘。断面丸い。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-55 277-55	須恵器 杯	1/2	13.3×10×3.2	42 I 31	底径大。体部浅く外反気味に外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。底部縁辺から腰部手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-56 277-56	須恵器 杯	小片	13×9.5×4	62・63 I 20・21	底径大。体部やや深し直線的に外傾する。轆轤成形。回転篋削り後回転篋削り。底部に重ね焼痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密
727-57 277-57	須恵器 杯	1/2	12×6.8×3.5	60~61 I 28・29	底部肥厚。腰部丸味をもち、口縁部僅かに外反。轆轤成形。右回転糸切り。見込部に「×」篋描。	①良好 ②灰 ③密
727-58 277-58	須恵器 杯	完	12.5×7.3×3.6	53 I 21	体部緩く内湾して外傾。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密

第4章 鍛冶工房跡

Ⅰ区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
727-59 277-59	須 杯 器	底部	16.8×11×4.1	61 I 24	轆轤成形。底部回転篋切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-60 277-60	須 杯 器	小片	16.8×11×4.1	62・63 I 22・23	大形。底径大きく体部直線的に外傾。轆轤成形。腰部手持篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-61 277-61	須 杯 器	1/2	11.7×12.2×4.8	43 I 33	底部やや脹らみ気味。体部直線的で大きく外傾。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや密
727-62 277-62	須 杯 器	1/2	11.2×6.4×3.7	34 I 18	底部丸く強く張り出す。体部直線的に外傾し、口縁部厚味増し外傾、腰部削出し高台状の段。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-63 277-63	須 杯 器	1/4	11.2×6.4×3.7	62 I 24・ 25	体部直線的に外傾。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-64 277-64	須 杯 器	1/4	11.1×6.8×3.7	63 I 25	体部緩く内湾し、口縁部緩く外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-65 277-65	須 杯 器	1/4	11.1×6.8×3.7	59 I 28・ 29	腰部弱い丸味。口縁部僅かにくびれる。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②黄灰 ③やや粗
727-66 277-66	須 杯 器	1/4	11.7×7.9×3.7	63 I 24	体部やや深く、腰部に弱い丸味。口縁部外反気味。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-67 277-67	須 杯 器	3/4	11.8×6×3.7	62 I 27	底部肥厚。体部内湾気味で丸味もつ。口縁部弱く外傾。轆轤成形。右回転糸切り	①良好 ②灰 ③やや粗
727-68 277-68	須 杯 器	1/2	12.2×7.6×3.9	48~51 I 21	体部直線的に外傾する。口縁部肥厚。口唇部丸い。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-69 277-69	須 杯 器	1/2	12.3×7×4.3	62・63 I 26・27	底部肥厚。体部器肉薄い。やや深く直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-70 277-70	須 杯 器	1/4	12.8×7×3.8	61 I 20・ 21	体部内湾気味に外傾する。口縁部肥厚し、口唇部丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-71 277-71	須 杯 器	1/4	14×6.8×3.1	55 I 20	体部大きく外傾して開く。口縁部緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-72 277-72	須 杯 器		11.8×7.2×3.2	62 I 26	腰部やや丸味をもち体部外反ぎみに開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-73 277-73	須 杯 器	1/2	13×7.3×3.7	62 I 22	全体に肥厚、体部内湾して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-74 277-74	須 杯 器	1/4 底部欠損	13.3×11×(3.3)	53・54 I 22~24	体部内湾し丸味をもつ。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-75 277-75	須 杯 器	小片	13.5×8.8×4	55 I 20	底径大。体部直線的に外傾する。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-76 277-76	須 杯 器	3/4	12.7×7.3×3	54 I 20	腰部やや張る。体部上半は直線的。口唇部丸く外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-77 277-77	須 杯 器	1/4	13.4×8.4×3.5	54 I 20	底部中央薄い。腰部丸味をもち、体部は内湾気味。轆轤成形。回転糸切り。底部縁辺から腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-78 277-78	須 杯 器	1/2	13.6×9×3.5	60 I 24	体部やや浅く、直線気味に外傾。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
727-79 278-79	須 杯 器	1/2	14.5×11×5.2	62 I 22	底径大。体部浅く内湾気味。口縁部くびれて僅かに外傾。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰黄 ③やや密
727-80 278-80	須 杯 器	1/2	14×10×3.3	54 I 20	底径大。体部やや浅目。やや内湾気味に立つ。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-81 278-81	須 杯 器	1/2	12.5×7×30	54 I 20	体部浅く丸味をもち口縁部緩く外反する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-82 278-82	須 杯 器	1/2	14.5×9×4.1	63 I 22・ 23	腰部やや丸味をもつ。体部深く直線的に外傾。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗、砂混る
727-83 278-83	須 杯 器	1/4 底部欠損	14.8×11×(2.9)	55 I 21	腰部丸く体部大きく外傾し、口縁部内湾気味に開く。轆轤成形。	②灰白 ③やや粗
727-84 278-84	須 杯 器	完	12.3×6×3.9	62 I 21	腰部丸味をもつ。体部深く緩く外反して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
727-85 278-85	須 杯 器	完	12.9×5.7×3.7	53~55 I 10	体部内湾気味に大きく開き、口縁部外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-86 278-86	須 杯 器	1/4 底部欠損	14.1×11×(3.6)	51 I 26・ 27	腰部丸く張り大きく開き、口縁部外反する。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
727-87 278-87	須 杯 器	3/4	12.5×6×3.3	60 I 24	体部丸味をもち大きく外傾。口縁部外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化気味・軟褐灰 ②密

I 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③色調 ④その他
728-88 278-88	須恵器 杯	1/4	13×5×4.2	60 I 24	腰部から体部丸味強い。口縁部外反して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-89 278-89	須恵器 杯	1/4	14×6×3.7	55 I 21	底部肥厚。体部丸味強く、口縁部大きく外反して開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-90 278-90	須恵器 杯	1/2	12.4×6.8×4.2	45~48 I 13~20	体部丸味をもち深い。口縁部緩く外反する。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、軟 ②灰褐 ③やや密
728-91 278-91	須恵器 杯	1/2	13.6×5.5×4.8	60 I 25	体部丸味をもち大きく外傾。口唇部丸く外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-92 278-92	須恵器 杯	底部1/3	—×6.1×(1.8)	63 I 28~ 30	底部肥厚し、腰部に丸味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好、硬 ②灰白 ③緻密
728-93 278-93	須恵器 杯	底部	—×7×(1.5)	61 I 22・ 23	腰部直線的に外傾。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰黄 ③やや粗
728-94 278-94	須恵器 杯	底部1/3	—×6.8×(1)	63 I 24	底部肥厚。腰部張る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-95 278-95	須恵器 杯	底部	—×7×(1)	63 I 24	轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
728-96 278-96	須恵器 杯	底部	—×5.9×(1.7)	54・55 I 15・16	底部肥厚。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
728-97 278-97	須恵器 杯	口縁部 欠損	—×5.5×(4)	61 I 22	底部肥厚。体部丸く、口縁部外反気味。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
728-98 278-98	須恵器 杯	底部1/4	—×7.5×(2)	60 I 21	腰部丸味。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-99 278-99	須恵器 碗	1/2	14.4×9.2×4.1	60~63 I 46~50	底部高台より突出する。体部直線的に外傾。削り出し高台断面矩形。轆轤成形。底・腰回転篋撫で。	①良好 ②灰白 ③密、黒色大粒混る
728-100 278-100	須恵器 碗	1/4	15.8×9×3.5	54 I 23	腰部張る。体部浅く、外反気味に開く。削り出し高台、低く断面三角。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
728-101 278-101	須恵器 碗	小片	14.7×11.8×3.6	54~56 I 19~21	体部浅く直線的に立ち外傾度小。口唇部尖る。付高台幅広く断面矩形。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
728-102 278-102	須恵器 碗	1/3	108×7×4.8	63 I 28~ 30	体部直線的に外傾。付高台直線的に八の字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
728-103 279-103	須恵器 碗	1/3	13.2×7.5×5.8	61 I 21	体部内湾して開く。付高台、やや高く八の字状に開く。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや密
728-104 279-104	須恵器 碗	体部1/3 欠損	14.2×7.6×6.3	62 I 24	体部中位で緩く丸味をもつ。口縁部僅かに外反する。付高台端部外方へ接ね下端面平ら、轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②暗青灰 ③やや密。白色粒混
728-105 279-105	須恵器 碗	1/3	15.2×8.4×7.3	62・63 I 18~20	体部深く直線的に外傾。付高台やや高く八の字状に開く断面丸い。轆轤成形。底部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
728-106 279-106	須恵器 碗	体部1/3 欠損	18×10.5×7.9	54 I 26	腰部やや張る。体部内湾して開き口縁部は直線的に外傾。付高台、高く肥厚し八の字状に開く。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②黄灰 ③やや粗、黒色粒混る
728-107 279-107	須恵器 碗	小片高 台欠損	17.4×—×(7)	46 I 0	体部内湾気味。口縁部僅かに外反。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗、黒色粒混
728-108 279-108	須恵器 鉢	1/4 下 半欠損	15.9×—×(4.2)	53 I 14	体部内湾し、外傾度小。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
728-109 279-109	須恵器 鉢	1/4 下 半欠損	15.4×—×(5.5)	56 I 21	腰部に丸味をもち、体部直線的で外傾度小。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③やや密
728-110 279-110	須恵器 碗	1/3 底 部欠損	13×—×(3.9)	56 I 21	体部僅かに丸味をもち、口唇部僅かに外傾。轆轤成形。	①良好 ②灰白 ③密
728-111 279-111	須恵器 碗	1/3 高 台欠損	14×—×(4.5)	55・56 I 13・14	体部直線的に大きく開く。口唇部僅かに外傾。付高台。轆轤成形。右回転糸切り	①酸化気味。軟 ②灰白 ③密
728-112 279-112	須恵器 碗	1/3	15.6×8.4×5.6	55 I 21	体部僅かに丸味。口縁部外反する。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
728-113 279-113	白磁 碗	口縁部 小片		62・63 I 28・29	口唇部玉縁。	
728-114 279-114	須恵器 碗	口縁部 小	14.6×5.9×5	55 I 20	体部丸味をもち大きく開き、口縁部外反する。付高台、低く断面丸い。轆轤成形。右回転糸切り。	①酸化、軟 ②鈍い黄橙 ③密
728-115 279-115	須恵器 碗	1/4	15×7×5.1	43 I 29	腰部丸味をもち、口縁部外反気味。口唇部僅かに肥厚し丸まる。佐高台低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-116 279-116	須恵器 碗	1/4	14.8×7.5×5.2	45~58 I 13~20	体部やや丸味をもち、口縁部外反気味。付高台。轆轤成形。	①酸化気味、軟 ②灰白 ③やや粗

第4章 鍛冶工房跡

1 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
728-117 279-117	須惠器 碗	1/2	15.2×6.4×5.4	55 I 20	体部丸味をもち大きく開く。口縁部緩く外反する。付高台低く断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味 ②明オリープ灰 ③やや密
728-118 279-118	須惠器 碗	1/4	16.2×8.5×5.2	55 I 21	腰部僅かに張る。体部緩く外反して大きく開く。付高台八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
728-119 279-119	須惠器 碗	底部1/2	—×10.4×(2)	41 I 38	付高台。短かく直に下り大きく八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。大形品になろうか。	①良好 ②灰白 ③やや密、白色粒混る
728-120 279-120	須惠器 盤 ?	底部1/2	—×12×(2.5)	43 I 5	腰部張る。付高台断面矩形を呈し直立する。轆轤成形。静止糸切り後縁辺回転篋削。	①良好 ②灰 ③密
728-121 279-121	須惠器 盤 ?	底部1/2	—×13.3×(2)	53・54 I 22~24	付高台。	①良好 ②灰 ③やや密
729-122 279-122	須惠器 碗	底部1/2	—×12.4×(2.7)	63 I 30・31	腰部やや張る。付高台低く断面矩形。轆轤成形。回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-123 279-123	須惠器 碗	底部1/2	—×11×(4.3)	63 I 22	付高台、高く内湾気味で小さく開く、肥厚し断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
729-124 279-124	須惠器 碗	底部1/2	—×9.5×(3.5)	56・57 I 11・12	底部より強く内屈して体部に至る。付高台、高く肥厚し直線の八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
729-125 279-125	須惠器 碗	底部	—×6.7×(2.3)	50・51 I 24・25	付高台、やや高く内湾して開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-126 279-126	須惠器 碗	底部1/2	—×8.4×(2.3)	63 I 30・31	腰部極めて薄い。付高台、肥厚し内湾して立つ。轆轤成形。	①良好 ②褐灰 ③やや粗
729-127 279-127	須惠器 碗	底部	—×9.1×(2.5)	48・49 I 12 13SD-1	付高台、やや高く八の字状に開く。断面丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
729-128 279-128	須惠器 碗	底部1/2	—×7.4×12.1	43 I 29	付高台、断面矩形、八の字状に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
729-129 280-129	須惠器 碗	底部1/2	—×8.8×(2.6)	63 I 24・25	付高台、やや高く断面矩形。八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-130 280-130	須惠器 碗	底部1/2	—×6.9×(2.7)	62 I 25	付高台、断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密、細砂混る
729-131 280-131	須惠器 碗	底部1/2	—×5.6×(1.5)	54・55 I 15・16	付高台、低く断面矩形。底部「×」篋削。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②オリープ黒 ③やや密
729-132 280-132	須惠器 碗	底部	—×8.9×12.9		付高台、断面矩形、八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
729-133 280-133	須惠器 碗	底部1/2	—×7×(4.8)	54・55 I 15・16	腰部張りなく体部直線的に外傾。付高台、断面矩形。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
729-134 280-134	須惠器 碗	底部	—×6.6×(3)	63 I 28	付高台、端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①酸化気味、軟 ②暗灰黄 ③やや密
729-135 280-135	須惠器 碗	体部高台欠損	—×—×(4)	63 I 28・30	体部内湾し深目。付高台。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
729-136 280-136	須惠器 碗	底部	—×6.9×(1.6)	55・56 I 13 14SD-1	付高台、低く端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
729-137 280-137	須惠器 碗	底部	—×6×(2.2)	45~58 I 13~20	付高台、低く断面三角。轆轤成形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
729-138 280-138	須惠器 碗	底部1/2	—×7.6×(3)	58・59 I 30~33	付高台、轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
729-139 280-139	須惠器 碗	底部1/2	—×6.8×(3)	63 I 28	付高台、端部丸い。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
729-140 280-140	須惠器 碗	底部1/2	—×7×(3.7)	60 I 25	付高台、低く断面矩形。轆轤成形。回転篋削り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
727-141 280-141	須惠器 碗	底部1/2	—×6.2×(3)	55・56 I 13 14SD-1	体部に丸味をもつ。付高台、低く端部丸い。轆轤成形。	①酸化気味 ②灰黄褐 ③やや密
729-142 280-142	須惠器 碗	体部1/4	19.6×—×(7.2)	45~58 I 13~20	大形品。体部丸く張り口縁部緩く外反する。轆轤成形。	①良好 ②灰 ③やや粗
729-143 280-143	須惠器 皿	完	13.5×7.4×2.5	62 I 24	体部大きく開き中位で肥厚してくびれ、口縁部は水平気味付高台、やや高く八の字状に開く。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密、細砂混る
729-144 280-144	須惠器 皿	1/2	13×7.1×2.9	54~56 I 19~21	全体に肥厚し体部大きく開く。体部上半で膨れ口縁部は水平。付高台断面矩形八の字状。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
729-145 280-145	須惠器 皿	1/4	14.2×7.1×2	55 I 21	腰部に僅かな段をなし体部は直線的に開く。付高台、肥厚し直に下る。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密

I区工房跡関連(その他) 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
729-146 280-146	須恵器 皿	高台欠損	14×—×(1.7)	54 I 19	全体に肥厚し体部水平に開く、見込部に僅かな段をなし段皿か。口唇部丸く内湾。轆轤成形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
729-147 280-147	須恵器 皿	底部	—×6.2×(1.6)	61 I 22	付高台、断面三角。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
729-148 280-148	灰釉陶器 皿	体部小片	12.6×—×(2.1)	62・63 I 28・29	口縁部緩く外反し、口唇部は弱く外屈。付け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-149 280-149	灰釉陶器 皿	1/4	14×6.6×1.8	49~52 I 10	体部直線的に開き、口唇部は尖り強く外屈する。高台低く断面矩形。腰部回転篋削り、内面全面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-150 280-150	灰釉陶器 椀	底部	—×6.6×(1.7)	45~58 I 13~20	器肉薄く、見込部凹む。高台、稜をなし内湾して立つ。内面見込部除き施釉。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③密
729-151 280-151	灰釉陶器 椀	底部1/8	—×8×(1.5)	45~58 I 13~20	器肉薄く、見込部僅かに凹む。高台断面矩形。底部回転篋削り	①良好 ②灰白 ③やや密
729-152 280-152	緑釉陶器 段皿	1/8	19.2×8.4×3.2	55 I 21	底部肥厚。体部中位で段をなし緩く外反して開く。付高台断面矩形内湾する。全面施釉。篋磨き。光沢をもつ。	①良好 ②灰、釉調濃緑 ③密
729-153 280-153	緑釉陶器 椀	底部1/8	—×5.2×(2)	45~58 I 13~20	腰部丸く張る。底部無釉。見込部篋磨き、光沢あり。釉調淡緑色。底部回転篋削り。	①良好 ②鈍い灰黄 ③密
729-154 280-154	灰釉陶器 段皿	1/8	11.9×6.1×2.2	45~58 I 13~20	体部内湾し上半は水平に折れる。口唇部丸く内屈。体部回転篋削り。口縁部内外面施釉。	①良好 ②灰白 ③やや粗
729-155 280-155	須恵器 長頸瓶	肩~頸部 1/8	—×—×(7.5) 肩径18.4	61 I 24	肩部に10個単位の刺穴文が不規則に施される。	①良好 ②灰 ③やや粗
729-156 280-156	須恵器 平瓶?	口頸部 1/8	7.4×—×(6.8) 頸基部径4.1	41 I 36	頸基部は直線的に外傾し上半は内湾して開く。	①良好 ②灰 ③やや粗
729-157 280-157	須恵器 瓶	胸部1/8	—×—×(7.3) 胴径11.3	40 I 33	胸部長く寸胴。肩部下位より縦篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-158 280-158	須恵器 短頸壺	肩部1/2	—×—×(5.7)	61 I 26	肩部強く丸く張る。内外面に細かい筋状調整痕あり。	①良好 ②灰白 ③やや密
729-159 281-159	灰釉陶器 長頸瓶	肩部小片	—×—×(2.5) 肩部19	53・54 I 22~24	肩端部丸く肥厚する。上面はやや脹らむ。	①良好 ②オリーブ灰 ③密
730-160 281-160	須恵器 長頸瓶	口縁・高台欠損	—×—×(13.2) 肩径20	56 I 24	胸部僅かに外傾し強く内屈して肩部に至る。腰部手持篋削り。胴・肩部回転篋削り。	①良好 ②暗灰 ③やや密、白色粒混る
730-161 281-161	須恵器 壺	胸部1/8	—×—×(10.8) 肩径16.2	55 I 24	胸部丸味をもち肩部は張り強く屈する。胴・肩部指合痕。腰部篋削り。胸部回転篋撫で。内面強い篋撫で。	①良好 ②灰 ③やや密
730-162 281-162	須恵器 小片	口縁部小片	15.8×—×(6.3)	54 I 23	口縁部外反気味に開く。口唇部直立し上・下端部尖る。	①良好 ②灰白 ③やや粗
730-163 281-163	須恵器 瓶?	胴下 半 1/2	—×12×(8)	63 I 30・ 31	胸部丸味強い。高台高く強く外反して開く。端部断面矩形。	①良好 ②灰 ③粗小石多く混る
730-164 281-164	須恵器 瓶?	底部 1/8	—×12.1×(3.5)	53 I 22	高台高く内湾する。端部断面矩形。	①良好 ②灰 ③やや粗
730-165 281-165	須恵器 瓶?	底部 1/8	—×12.5×(2.4)	60・61 I 24・25	直に下り外面は鋭く尖り大きく外反して開く。	①良好 ②灰白 ③やや粗
730-166 281-166	須恵器 瓶?	底部 1/4	—×12.2×(3.5)	45~58 I 13~20	腰部直線的に外傾。高台外面段をなし内湾気味に立つ。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
730-167 281-167	須恵器 瓶?	底部1/8	—×10.6×(3.7)	61 I 23	高台やや低く断面矩形。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
730-168 281-168	須恵器 瓶	底部1/8	—×—×(5.2)	60・61 I 30	腰部丸味をもつ。腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③やや粗
730-169 281-169	須恵器 壺?	底部1/2	—×—×(6.4)	62・63 I 20・21	胸部内面回転篋調整。付高台。	①良好 ②灰白 ③やや粗。白色粒混る
730-170 281-170	須恵器 壺	口縁部 1/8	14×—×(7.2)	62・63 I 22・23	最大径は胸部にあり肩部丸く張る。口縁部くの字状に強く外傾。	①良好 ②灰 ③粗
730-171 281-171	須恵器 壺	口縁部小片	30.6×—×(7)	53 I 21	口縁部外反気味に開く。口唇部断面矩形に脹らむ。	①良好 ②灰白 ③粗
730-172 281-172	須恵器 把手		長さ7 径2	60 I 24	篋状工具による面取り。	①酸化気味、良好 ②橙 ③密
730-173 281-173	須恵器 脚		長さ7.8 径2.3×3.2	46 I 10	増脚か。片端ぼぞ状に細る。指頭成形。	①良好 ②灰白 ③やや粗
731-174 281-174	須恵器 壺	胸部1/8	—×—×(22.6) 胴径25	63 I 28~ 30	胴部上半丸く強く張り丸い肩部をなす。胴部上半から下位は回転篋調整。	①良好 ②灰 ③やや密、小石混る

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他			
731-175 281-175	須 惠 器 甕	1/4台欠 損	17.1×(13)× (31.7) 胴径24.7	60 I 24・ 25	胴上半に最大径、肩部丸く張る。頸部直線的に外傾し、上半は強く外反。口唇部上下端は尖り突出。胴部回転寛撫で	①酸化、良好 ②橙 ③やや粗			
731-176 282-176	須 惠 器 甕	口縁部 小片	28.7×—×(4.8)	55 I 20	肩部強く張り、口縁部は短かく強く外反する。口唇部上下端は尖り突出する。	①良好 ②灰 ③密			
731-177 282-177	内 耳	小片	33.7×—× (11.2)	46~58 I 10	体部直線的で僅かに外傾。口唇部断面矩形を呈する。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密			
732-178 282-178	土 師 器 甕	口縁部 1/4	23.1×—×(10)	54 I 20	口縁部肥厚し外反して開き口唇部は直立する。胴部張りなく長胴を呈すか。口縁部横撫で。胴部縦篋削り。内面篋撫	①良好 ②橙 ③や や粗、小石混る			
732-179 282-179	土 師 器 甕	口縁部 1/4	17.2×—×(5.5)	45~58 I 13~20	肩部強く張る。口縁部短かく僅かに外反して立つ。口縁・肩部横篋削り。内面接合痕は指頭により調整。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密、金雲母混			
732-180 282-180	土 師 器 甕	口縁部 1/4	10.7×—×(5.5) 胴径13.8	42~58 I 5~10	肩部強く張る。口縁部短かく内傾し上半は僅かに外反して立つ。口縁部横撫で。胴部横篋削り。内面篋撫で。	①良好 ②橙 ③や や粗			
732-181 282-181	土 師 器 甕	口縁部 1/4	10.5×—×(5.2) 胴径13	42~58 I 5~10	肩部張り、口縁部は緩く外反して直立後上半は内湾気味口縁部横撫で。胴部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や粗			
732-182 282-182	土 師 器 台付甕	台 部	—×8×(3.7)	62 I 24	ハの字状に開く。腰部篋削り。台部横撫で。	①良好 ②鈍い褐 ③やや密			
732-183 282-183	土 師 器 甕	口縁部 1/4	19.5×—×(4.7)	55 I 20	口縁部直立し上半は外屈するコの字口縁、口唇部内湾。口縁部横撫で。胴部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密			
732-184 282-184	土 師 器 甕	口縁部 1/4	20.5×—×(4.5)	45~58 I 13~20	口縁部直立し上半は外屈するコの字口縁。口唇部尖る。口縁部横撫で。胴部篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密、細砂混る			
732-185 282-185	土 師 器 甕	口縁部 1/4	20×—×(6)	62 I 24・ 25	肩部張らない。口縁部直立後上半は外屈するコの字口縁。口唇部内屈する。口縁部横撫で。肩部横篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや密			
732-186 282-186	土 師 器 甕	1/4底 部欠損	16×—×(17) 胴径20.4	54 I 24	胴部上半張り最大径をなす。口縁部直立し上半は外反する凝コの字口縁。口縁部横撫で。胴上半横。下位斜篋削り。	①良好 ②赤褐 ③ やや粗			
732-187 282-187	土 師 器 甕	胴上半 1/4	21.4×—×(15) 胴径21.3	62 I 24	胴部丸く張る。口縁部直線的に弱く外傾し上半は内湾気味に外屈するコの字口縁。口縁部横撫。胴部斜篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密			
732-188 282-188	土 師 器 甕	上半部 1/4	20.4×—× (10.4) 胴径22.2	56 I 21	胴部丸く張る。口縁部直線的に弱く内傾し、上半は外屈するコの字口縁。口縁部横撫で。胴部横篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密			
732-189 282-189	土 師 器 甕	上半部 1/4	20.2×—×(12) 胴径21.4	43 I 27	胴上半張り気味。口縁部緩く外反して開く。口縁部、胴上半横撫で。上~下半縦篋削り。	①良好 ②橙 ③や や密			
732-190 282-190	土 師 器 甕	底 部	—×3.5×(3.2)	45~58 I 13~20	小径の平底。底部に焼成後の穿孔(0.5×0.4)。	①良好 ②橙 ③や や密			
Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
733-191 283-191	瓦 平瓦	63 I 22	厚2.0	凹面布目、凸面篋描文字「大」。側面篋調整。	735-199 283-199	瓦 平瓦	41 I 10	厚2.2	凹面布目、凸面縄目後撫で。側面篋調整。
733-192 283-192	瓦 平瓦	61 I 21	厚2.2	凹面布目、凹面撫で。側面篋調整。	736-200 283-200	瓦 平瓦	42~46 I 10	厚2.6	凹面布目、凸面篋調整。側面、縁篋調整。
733-193 283-193	瓦 平瓦	61 I 21	厚2.2	凹面布目、凸面縄目後撫で。側面篋調整	736-201 283-201	瓦 平瓦	54・55 I 15・16	厚1.7	凹面布目、凸面平行叩き目。
734-194 283-194	瓦 平瓦		厚1.7	凹面布目。凸面撫で調整、篋描文字「男」	736-202 283-202	瓦 軒丸瓦	53~55 I 10	厚2.1~2.7	凹面布目、凸面撫で。有段式。
734-195 283-195	瓦 平瓦	60 I 22	厚2.7	凹面布目、凸面縄目後撫で。側面篋調整223結合。	736-203 283-203	瓦 平瓦	45~58 I 15~20	厚2.5	凹面布目、凸面縄目。
735-196 283-196	瓦 平瓦		厚2.1	凹面布目、凸面撫で調整。側面篋調整。	736-204 283-204	瓦 平瓦	46 I 10	厚2.2~3.0	凹面布目、凸面縄目。
735-197 283-197	瓦 平瓦	53~55 I 10	厚2.2	凹面布目、凸面撫で調整。側面篋調整。	736-205 283-205	瓦 平瓦	53~55 I 10	厚1.7	凸面格子柄叩き目。
735-198 283-198	瓦 平瓦	62 I 21	厚	凹面布目、凸面斜篋撫で。側面篋調整。	736-206 283-206	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚2.4	凹面布目、凸面格子格叩き後撫で。

I区工房跡関連(その他)出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
736-207 284-207	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚2.0	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-226 284-226	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚1.4	凹面布目、側面窺調整。
736-208 284-208	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚1.9	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-227 284-227	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚2.1~2.6	凹面布目、凸面格子、 叩き後撫で。
737-209 284-209	瓦 軒丸瓦	54 I 23	厚2.4~3.4	凹面布目、凸面縄目 後撫で。有段式。	738-228 284-228	瓦 平瓦	45 I 58 I 13~20	厚1.7	凹面布目、凸面縄目。 側面窺調整。
737-210 284-210	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚2.1	凸面荒い縄目。	738-229 284-229	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚1.8	凹面布目、凸面荒い 縄目。
737-211 284-211	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚2.2	凹面布目、側面窺調整。	738-230 284-230	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚2.5	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。
737-212 284-212	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚1.9	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-231 285-231	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚1.9	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。
737-213 284-213	瓦 平瓦	41・42 I 10	厚2.1	凹面布目、側面窺調整。	738-232 285-232	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚2.9	凹面布目。
737-214 284-214	瓦 平瓦	38 I 41	厚2.0	凹凸面窺調整、側面 窺調整。	738-233 285-233	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.6	凹面布目、凸面撫で。
737-215 284-215	瓦 平瓦	61 I 21	厚2.2	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-234 285-234	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.3	凹面布目、凸面撫で。
737-216 284-216	瓦 平瓦	52・53 I 15・16	厚2.5	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-235 735-235	瓦 平瓦	49 I 10	厚2.3	凹面布目、凸面、側 面窺削り調整。
737-217 217	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚1.9	凹面布目、凸面撫で。	738-236 285-236	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚1.8	凹面布目。
737-218 218	瓦 丸瓦	42~58 I 5~10	厚1.5	凹面布目、凸面格子 柄叩き後撫で調整。 側面窺調整。	738-237 285-237	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.3	凹面布目、側面窺調整。
737-219 219	瓦 丸瓦	42~58 I 5~10	厚2.2	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-238 285-238	瓦 平瓦	45~49 I 10	厚2.0	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。
737-220 220	瓦 丸瓦	55 I 18	厚1.4	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。	738-239 285-239	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚1.9	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。
737-221 284-221	瓦 丸瓦	46~58 I 10	厚2.1	凹面布目、凸面縄目 後撫で。側面窺調整。	738-240 285-240	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚2.0	凹面布目、凸面撫で 側面窺調整。
737-222 284-222	瓦 平瓦	55 I 15・ 16	厚2.2	凹面布目、凸面撫で。	738-241 285-241	瓦 平瓦	42~46 I 10	厚1.4	凹面布目、凸面窺調整。
737-223 284-223 195と同じ	瓦 平瓦	61 I 22	厚2.7	凹面布目、凸面縄目 後撫で。側面窺調整 195と結合。	739-242 285-242	瓦 平瓦	45~47 I 10	厚1.9	凹面布目。
738-224 284-224	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚2.2	凹面布目、凸面窺削り 調整。側面窺調整。	738-243 285-243	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚1.6	凹面布目、凸面撫で。 側面窺調整。
738-225 284-225	瓦 平瓦	54・55 I 15・16	厚2.5	凹面布目、側面窺調整。	739-244 285-244	瓦 平瓦	52 I 10	厚1.2	凹面布目、凸面撫で。

第4章 鍛冶工房跡

I区工房跡関連(その他) 出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
739-245 285-245	瓦 平瓦	48~56 I 21	厚2.1	凹面布目、凸面、側面窺調整。	739-264 285-264	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.8	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-246 285-246	瓦 平瓦	54~56 I 19~21	厚2.2	凹面布目、凸面窺調整。	739-265 285-265	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚1.3	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-247 285-247	瓦 平瓦	53~55 I 10	厚2.1	凹面布目、凸面縄目後撫で。	739-266 285-266	瓦 平瓦	46~58 I 15~20	厚2.2	凹面布目、側面窺調整。
739-248 285-249	瓦 平瓦	41~45 I 10	厚2.1	凹面布目、凸面、側面窺調整。	789-267 285-267	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.4	凹面布目、側面窺調整。
739-249 285-249	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.8	凹面布目、凸面、側面窺調整。	739-268 285-268	瓦 平瓦	55・56 I 13・14	厚2.0	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-250 285-250	瓦 平瓦	49~68 I 15~20	厚1.5	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。	739-269 285-269	瓦 平瓦	62・63 I 22・23	厚2.4	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-251 285-251	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚2.5	凹面布目、凸面撫で。	739-279 285-270	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚11.5	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-252 285-252	瓦 平瓦	53~55 I 10	厚1.5	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。	740-271 285-271	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚1.7	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-253 285-253	瓦 平瓦	41~45 I 10	厚1.6	凹面布目、側面窺調整。	740-272 285-272	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚1.8	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。
739-254 285-254	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚1.5	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。	740-273 285-273	瓦 平瓦	52 I 10	厚1.5	凹面布目、側面窺調整。
739-255 285-255	瓦 平瓦	49 I 10	厚1.4	凹面布目、凸面窺調整。	740-274 285-274	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.4	凹面布目、凸面、側面窺調整。
739-256 285-256	瓦 平瓦	45~49 I 10	厚1.9	凹面布目。凸面、側面窺調整。	740-275 285-275	瓦 平瓦	42 I 27	厚2.9	凹面布目、凸面撫で。
739-257 285-257	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.5	凹面布目、側面窺調整。	740-276 285-276	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚1.5	凹面布目、側面窺調整。
739-258 285-258	瓦 平瓦	42~58 I 5~17	厚2.2	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。	740-277 285-277	瓦 平瓦	50 I 21	厚1.8	凹面布目。
739-259 285-259	瓦 平瓦	42~58 I 5~10	厚1.6	凹面布目、側面窺調整。	740-278 285-278	瓦 平瓦		厚1.7	凹面布目、凸面縄目。
739-260 285-260	瓦 平瓦	41~45 I 10	厚2.1	凹面布目。凸面、側面窺調整。	740-279 285-279	瓦 平瓦	45~49 I 10	厚1.8	凹面布目、側面窺調整。
739-261 285-261	瓦 平瓦	46~58 I 10	厚1.8	凹面布目。凸面、側面窺調整。	740-280 285-280	瓦 平瓦	56・57 I 11・12	厚1.3	凹面布目。凸面、側面窺調整。
739-262 285-262	瓦 平瓦	49~52 I 10	厚2.3	凹面布目、凸面撫で。側面窺調整。	740-281 285-281	瓦 平瓦	52 I 10	厚2.1	凹面布目。
739-263 285-263	瓦 平瓦	56・57 I 11・12	厚2.1	凹面布目、凸面撫で。	740-282 285-282	瓦 平瓦	55・56 I 13・14	厚1.9	凹面布目。

I区工房跡関連(その他)出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
740-283 285-283	瓦 平瓦	55・56 I 13・14	厚1.8	凹面布目。	740-302 286-302	転用坩堝 ? 須恵 器甕	63 I 30・ 31	小片	内面に僅かな銅滴付着。
740-284 285-284	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚2.1	凹面布目、側面篋調整。	740-303 286-303	転用坩堝 ? 須恵 器椀小片	60・61 I 26・27	小片	内面に溶解物付着。 外面に赤銅色の溶解物付着。
740-285 285-285	瓦 平瓦	55 I 21	厚2.1	凹面布目、側面篋調整。	740-304 286-304	転用坩堝 ? 須恵 器瓶片	60・61 I 30・31	小片	内外面に薄い溶解物付着。
740-286 285-286	瓦 平瓦	54 I 21	厚1.2	凹面布目、側面篋調整。	740-305 286-305	転用坩堝 ? 須恵 器壺	60・61 I 26・67	小片	内面に銅滴付着。
740-287 285-287	瓦 平瓦	50~54 I 19~21	厚1.4	凹面布目、凸面縄目。	740-306 286-306	転用坩堝 土師器甕 底部	63 I 30・ 31	9×4.5×3	内面全体に多量の銅滓付着。
740-288 285-288	瓦 平瓦	45~58 I 13~20	厚1.7	凹面布目、凸面縄目。	740-307 286-307	椀型鉞滓	52 I 17	9.5×10×3.2 493.2g	鉄分付着。磁器微量。
740-289 286-289	土製品 土錘 1/2	54 I 21	4.2×1.9×1.0		741-308 286-309	羽口 先端部	63 I 24・ 25	長(7.6) 径(6.4) 孔(2.8)	先端部溶解。
740-290 286-290	坩堝 小片	62・63 I 20・21	厚1.8	内面に黒色溶解物付着。	741-309 286-309	羽口 先端部	52・53 I 11・12	長(4.0) 径(6.3) 孔(2.0)	先端部溶解。
740-291 286-291	坩堝 小片		厚2	内面に黒色溶解物付着。	741-310 286-310	羽口 先端部	62・63 I 32・33	長(3.7) 径(6.0) 孔(2.1)	先端部溶解。
740-292 286-292	坩堝 1/6	48・49 I 12・13	厚2	内面に薄い溶解物付着。	741-311 286-311	羽口 先端部	62・63 I 20・21	長(6.5)	先端部溶解。
740-293 286-293	転用坩堝 ? 須恵 器椀	60・61 I 24・25	小片	内面に銅滴付着。削り出し高台。	741-312 286-312	羽口 先端部	62 I 22	長(2.5)	先端部に大きな溶解物及び炉壁付着。
740-294 286-294	転用坩堝 ? 須恵 器壺	59 I 28・ 29	小片	内面に銅滴付着。	741-313 286-313	羽口 先端部小片	60・61 I 24・25	長(3.3)	先端部溶解。
740-295 286-295	転用坩堝 ? 須恵 器壺底部	54~56 I 19~21	小片	内面・割れ口に赤銅色の溶解物付着。	741-314 286-314	羽口 先端部小片	54 I 20	長(3.0)	先端部溶解。
740-296 286-296	転用坩堝 ? 須恵 器瓶片	56 I 24	小片	内面に銅滓付着。	741-315 286-315	羽口 先端部小片	56 I 23	長(3.6)	先端部溶解。
740-297 286-297	転用坩堝 ? 須恵 器杯	48~56 I 21	小片	内面に銅滓付着。底部手持ち篋削り。	741-316 286-316	羽口 先端部	62 I 24	長(5.5)	先端部溶解。
740-298 286-298	転用坩堝 ? 須恵 器	59 I 28・ 29	小片	内面に銅滴付着。	741-317 286-317	羽口 先端部	49~52 I 10	長(4.7)	先端部溶解。
740-299 286-299	転用坩堝 ? 土師 器	62・63 I 32・33	小片	内面に銅滓付着。	741-318 286-318	羽口 先端部小片	62・63 I 20・21	長(3.0) 孔(2.5)	先端部溶解。
740-300 286-300	転用坩堝 ? 須恵 器	62・13 I 26・27	小片	内面に銅滴付着。	741-319 286-319	羽口 先端部	60・61 I 24・25	長(2.6)	先端部溶解。
740-301 286-301	転用坩堝 ? 須恵 器	48~56 I 21	小片	内面に銅滴付着。	741-320 286-320	羽口 先端部		長(4.1)	先端部溶解。

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
741-321 286-321	羽口 先端部	62 I 24・ 25	長(4.2)	先端部溶解。	742-340 286-340	羽口 先端部	60・61 I 30・31	長(6.9)	先端部溶解。外面縦 筥調整。
741-322 286-322	羽口 先端部	62・63 I 32・33	長(4.5) 孔(2.2)	先端部溶解。	742-341 286-341	羽口 先端部	54～56 I 20～22	長(8.8)	先端部溶解。
741-323 286-323	羽口 中位	62・63 I 20・21	長(5.1)		742-342 286-342	羽口	60～63 I 46～50	長(11.5)	先端部溶解。
741-324 286-324	羽口 先端部	60・61 I 30・31	長(3.9)	先端部溶解。	742-343 286-343	羽口	60・61 I 28・29 孔(2.4)	長(8.3) 径(6.4)	先端部溶解。外面指 頭痕。
741-325 286-325	羽口 先端部	48～56 I 21	長(7.0)	先端部溶解。外面縦 の深い筥調整。	742-344 286-344	羽口 先端部	62 I 30・ 31	長(6.7)	先端部溶解。
741-326 286-326	羽口 先端部	62 I 22	長(4.5)	先端部溶解。	742-345 286-345	羽口 先端部	56 I 23	長(8.2)	先端部薄く溶解。
741-327 286-327	羽口 先端部	60・61 I 30・31	長(4.3)	先端部溶解。	742-346 286-346	羽口 先端部	62 I 30・ 31	長(7.0)	先端部溶解顕著。
741-328 286-328	羽口 先端部		長(3.9)	先端部溶解。炉壁付 着。	742-347 286-347	羽口 先端部	55 I 21	長(7.6)	先端部溶解。
741-329 286-329	羽口 先端部	61 I 30	長(7.7) 孔(1.9)	先端部溶解。	742-348 286-348	羽口 先端部	63 I 30・ 31	長(5.2)	先端部溶解。
741-330 286-330	羽口 先端部小 片	63 I 30	長(3.6)	先端部溶解。	742-349 286-349	羽口 先端部	62・63 I 22・23	長(7.2)	先端部溶解。鉄分付 着。植物質混る
741-331 286-331	羽口 先端部小 片	53 I 21	長(3.2)	先端部溶解。	742-350 286-350	羽口 先端部	63 I 30	長(4.9)	先端部溶解。
741-332 286-332	羽口 先端部	62・63 I 18～20	長(5.5) 孔(2.5)	先端部溶解顕著。	742-351 286-351	羽口 先端部	62 I 24・ 25	長(4.7)	先端部溶解。
741-333 286-333	羽口 先端部	63 I 30・ 31	長(3.3)	先端部溶解。	742-352 286-352	羽口 先端部	63 I 28～ 30	長(5.1)	先端部溶解。
741-334 286-334	羽口 先端部	42～58 I 5～10	長(1.5)	先端部溶解顕著。	742-353 286-353	羽口 先端部	49～52 I 10	長(4.8)	先端部薄く溶解。
742-335 286-335	羽口 先端部	45～58 I 13～20	長(10.2)	先端部溶解。外面縦 の強い調整。	742-354 286-354	羽口 先端部	53 I 23	長(3.1)	先端部溶解。
742-336 286-336	羽口 先端部	63 I 30・ 31	長11.5	先端部溶解。外面縦 筥調整。	743-355 286-355	羽口 先端部	63 I 22	長(8.2)	先端部溶解。
742-337 286-337	羽口 先端部欠 損	46～58 I 10	長(8.6)	溶解物付着。外面縦 筥調整。	743-356 286-356	羽口 先端部	62・63 I 26・27	長(6.3)	先端部溶解。
742-338 286-338	羽口 先端部	62・63 I 32・33	長(5.3)	先端部溶解。	743-357 286-357	羽口 先端部	63 I 30・ 31	長(5.8)	先端部溶解。外面縦 筥調整。
742-339 286-339	羽口 先端部	61 I 30	長(11.0) 孔(2.4)	先端部溶解。外面縦 筥調整。	743-358 286-358	羽口 先端部	61・62 I 20・21 孔(2.3)	長(5.7)	先端部溶解。

I区工房跡関連(その他)出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
743-359 286-359	羽口 先端部	62 I 24・ 25	長(6.2) 孔(2.7)	先端部溶解。	744-378 287-378	羽口 中位	62・63 I 26・27	長(7.2)	外面縦篋調整。
743-369 286-369	羽口 先端部	62 I 22	長(4.2)	先端部溶解顕著。	744-379 287-379	羽口 中位	62 I 22	長(6.4)	
743-361 286-361	羽口 先端部	62・63 I 20・21	長(4.8) 孔(2.6)	先端部溶解。気泡多い。	744-380 287-380	羽口 先端部	62 I 30・ 31	長(7.7)	先端部溶解。外面斜篋調整。
743-362 286-362	羽口 先端部	60・61 I 30・31	長(6.1)	先端部溶解。気泡多い。	744-381 287-381	羽口 中位	55 I 20	長(8.2)	外面指頭調整。
743-363 286-363	羽口 先端部	62・63 I 32・33	長(5.2)	先端部溶解。	744-382 287-382	羽口 中位	62 I 22	長(7.2)	
743-364 286-364	羽口 先端部	62・63 I 27・28	長(6.3)	先端部溶解。外面縦調整。	744-383 287-383	羽口 中位	60・61 I 28・29	長(6.2)	外面縦篋調整。
743-365 286-365	羽口 先端部	60・61 I 28・29	長(7.2)	先端部溶解。	744-384 287-384	羽口 中位	68 I 30・ 31	長(6.2)	
743-366 286-366	羽口 先端部	62・63 I 22・23	長(5.0) 孔(2.2)	先端部溶解。	744-385 287-385	羽口 先端部	62・63 I 20・21	長(5.0) 孔(2.3)	先端部溶解。
743-367 286-367	羽口 先端部	60・61 I 22・23	長(4.3)	先端部溶解。	744-386 287-386	羽口 中位	58・59 I 30・33	長(6.0)	
743-368 286-368	羽口 先端部	56・57 I 11・12	長(6.9) 孔(1.9)	先端部溶解。	744-387 287-387	羽口 中位	45~58 I 13~20	長(6.8) 孔(2.8)	外面縦方向指頭成形。
743-369 286-369	羽口 先端部	62・63 I 26・27	長(4.5)	先端部溶解。	744-388 287-388	羽口 先端部	61 I 22・ 23	長(7.0) 孔(1.9)	先端部溶解。外面指頭による縦方向成形。
743-370 286-370	羽口 先端部	62・63 I 22・23	長(6.5)	先端部溶解。	744-389 287-389	羽口 中位	60・61 I 30・31	長(4.0) 孔(3.3)	外面縦方向篋調整。
743-371 286-371	羽口 先端部	55 I 26	長(7.8) 径(4.5~5.3) 孔(1.7)	先端部溶解。	744-390 287-390	羽口 中位	60 I 23	長(6.3)	外面縦方向指頭成形。
743-372 286-372	羽口 中位	56 I 24	長(5.2) 径(7.0) 孔(2.8)	外面斜篋調整。	744-391 287-391	羽口 中位		長(6.9) 孔(2.8)	斜方向の凹状成形。
743-373 286-373	羽口 先端部	53 I 21	長(6.5)	先端部溶解。	744-392 287-392	羽口 中位	58・59 I 30・31	長(5.5)	
743-374 286-374	羽口 中位	60 I 28~ 30	長(6.1)		744-393 287-393	羽口 中位	62・63 I 26・27	長(5.2)	外面指頭による成形。
743-375 287-375	羽口 先端部	66 I 30・ 31	長(4.5)	先端部溶解。	744-394 287-394	羽口 中位	55 I 25	長(5.0)	外面縦方向調整。
743-376 287-376	羽口 先端部	61 I 21	長(7.7) 孔(2.1)	外面縦篋調整。	744-395 287-395	羽口 中位	61 I 30	長(9.0) 径(7.1) 孔(2.7)	外面縦方向調整。孔しぼり目顕著。
744-377 287-377	羽口 中位	62 I 30・ 31	長(8.1)		744-396 287-396	羽口 中位	45~58 I 13~20	長(10.3)	外面縦方向撫で成形。

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
744-397 287-397	羽口 中位	53 I 22	長(4.9) 孔(1.9)	外面縦篋調整。	745-416 287-416	羽口 基部小片	62・63 I 20・21	長(4.8) 孔(3.8)	外面指頭成形。
744-398 287-398	羽口 先端部	52 I 10	長(2.6)	先端部熔解。	745-417 287-417	羽口 基部	60・61 I 30・31	長(5.0)	外面斜方向凹状成形。
744-399 287-399	羽口 先端部小片	62・63 I 20・21	長(4.4)	先端部熔解。	745-418 287-418	羽口 基部	60・61 I 28・29	長(6.9)	外面縦篋調整。基部指頭成形。
744-400 287-400	羽口 先端部小片	54 I 26	長(4.2)	先端部熔解。	745-419 287-419	羽口 基部	61・62 I 31・32	長(6.7) 孔(2.2)	外面縦篋成形。
744-401 287-401	羽口 先端部	63 I 30・ 31	長(5.1)	先端部熔解。	745-420 287-420	羽口 基部	6 3 I 26～30	長(6.9)	外面篋調整。
744-402 287-402	羽口 先端部	62・63 I 31～33	長(5.7)	先端部熔解。外面縦方向撫で調整。	745-421 287-421	羽口 基部	62・63 I 32・33	長(3.6)	
744-403 287-403	羽口 先端部小片	60・61 I 22・23	長(3.7)	先端部熔解。	745-422 287-422	羽口 基部	62 I 24	長(4.7) 孔(2.5)	外面縦方向成形。
744-404 287-404	羽口 先端部小片	62・63 I 32・33	長(5.8) 孔(2.4)	先端部熔解。	745-423 287-423	羽口 基部	6 3 I 28～30	長(4.6)	外面指頭成形。
744-405 287-405	羽口 先端部	45～58 I 13～20	長(8.7) 孔(2.0)	先端部熔解。外面縦方向凹状成形。	745-424 287-424	羽口 基部	62 I 22	長(7.1)	外面縦篋調整。
744-406 287-406	羽口 中位	54 I 26	長(10.3) 孔(2.9)	外面縦方向撫で成形 植物草混る。	745-425 287-425	羽口 基部	45～58 I 13～20	長(8.2)	外面縦方向凹状成形。
744-407 287-407	羽口 基部	61・62 I 34	長(5.8) 孔(2.5)	基部指頭成形。	745-426 287-426	羽口 基部	54 I 20	長(4.7)	外面縦方向凹状篋成形。
744-408 287-408	羽口 中位	62・63 I 20・21	長(3.2) 孔(3.0)		745-427 287-427	羽口 基部	62・63 I 20・21	長(4.7) 孔(2.7)	
744-409 287-409	羽口 中位	60・61 I 24・25	長(4.4)		745-428 287-428	羽口 基部	55 I 20	長(7.6)	外面縦方向凹状篋調整。
744-410 287-410	羽口 中位	63 I 28～ 30	長(6.0)		745-429 287-429	羽口 基部	63 I 26	長(8.5) 孔(2.3)	外面縦方向篋調整。
745-411 287-411	羽口 基部	62・63 I 26・27	長(9.0)	外面縦調整。	745-430 287-430	羽口 基部	62 I 22	長(7.5)	先端部熔解。基部指頭成形。
745-412 287-412	羽口 中位	63 I 28～ 30	長(9.8) 径(6.9) 孔(2.6)	外面指頭成形。	745-431 287-431	羽口 基部	62 I 30・ 31	長(8.6)	先端部熔解。外面縦成形。基部指頭成形
745-413 287-413	羽口 基部	62 I 20	長(4.5)	基部強い指頭成形。					
745-432 287-432	羽口 基部	60・61 I 28・29	長(6.3)						
745-414 287-414	羽口 基部	61 I 22・ 23	長(5.6)	外面縦方向凹状成形。	745-433 287-433	羽口 基部	62・63 I 32・33	長(5.9) 孔(2.3)	外面指おさえあり。
745-415 287-415	羽口 基部	60 I 31	長(5.8)	基部まで熔解物付着。	745-434 287-434	羽口 基部	62・63 I 26・27	長(5.8)	外面縦方向凹状篋成形。

I区工房跡関連(その他)出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
745-435 287-435	羽口 基部	63 I 26	長(5.7)	外面縦撫で。基部指頭成形。	747-454 288-454	羽口 基部欠損	60~63 I 46~50	長(13) 径6.5 孔2.7	先端部熔解。熔解部分均一。外面しほり状斜調整。
746-436 287-436	羽口 基部	55 I 19	長(8.8)	外面斜方向凹状成形。	747-455 288-455	羽口 基部欠損	62・63 I 26・27	長(8) 径6.5 孔2.4	先端部熔解。外面縦篋調整。
746-437 287-437	羽口	63 I 24	長(7.0) 孔(2.0)	先端部薄い熔解。	747-456 288-456	羽口 基部欠損	54 I 20	長(9.5) 径7 孔2.2	先端部熔解。熔解角度約20°。
746-438 287-438	羽口 基部	55 I 20	長(8.3)	外面指頭成形。	747-457 288-457	羽口 先端部欠損	54 I 25	長(9) 径6 孔(1.9)	外面縦篋調整。
746-439 287-439	羽口	39 I 11	長11.6 孔1.8~4.4	先端部熔解。外面凹線状成形痕。植物質混る。	747-458 288-458	羽口 先端部欠損	60・61 I 30・31	長(8.8) 径(6.5) 孔2.1	先端部熔解。外面指頭痕。
746-440 287-440	羽口 先端部欠損	52 I 35	長(10.1) 径(6.5) 孔(3.1)	外面縦方向の凹線状調整痕。	747-459 288-459	羽口 先端・基部欠損	48~56 I 21	長(11) 径7 孔2.6	外面平滑で縦調整痕なし。
745-441 287-441	羽口 先端部欠損	63 I 22	長(10.4) 径(6.8) 孔(2.6)	外面指頭成形。	748-460 288-460	羽口 先端部欠損	61 I 21	長(7.7) 径(6.7)~7.7 孔2.5	外面深い縦調整及び指頭痕。
746-442 287-442	羽口 先端部欠損	63 I 26	長(12.4)	外面指頭成形。	748-461 288-461	羽口 完	54 I 20	長9.8 径7.5 孔2.5	先端部熔解。熔解部分均一。外面弱い篋調整。
746-443 288-443	羽口 先端部	61 I 25	長(8.0) 径(7.1) 孔(2.1)	先端部熔解。傾斜角24°。	748-462 288-462	羽口 完	62 I 22	長12 径7.5 孔2.5	先端部熔解。片端に熔解物付着。外面指頭痕。
746-444 288-444	羽口 先端部	61 I 20・ 21	長(6.2) 径(6.6) 孔(2.0)	先端部熔解。	748-463 288-463	羽口 完	54 I 25	長10.4 径6.7 孔2.5	先端部熔解。熔解角度均一。外面弱い篋調整。
746-445 288-445	羽口 先端部	62 I 26	長(6.8) 径(6.9) 孔(2.7)	先端部熔解。	748-464 288-464	羽口 完	62 I 22	長10.0 径6.0~8.3 孔2.5~4.3	先端部熔解。熔解角度約23°。外面指頭成形。
746-446 288-446	羽口 先端部	62 I 22	長(6.2) 径(6.4) 孔(2.4)	先端部熔解。外面縦篋調整。	748-465 288-465	羽口 完	54 I 20	長7.3 径5.3~6.4 孔1.7~4.7	先端部熔解顕著。熔解角度約23°。外面縦撫で成形。
746-447 288-447	羽口 基部欠損	54 I 26	長(9.4) 径(6.9) 孔(2.5)	先端部熔解。外面縦方向凹状調整痕。	748-466 288-466	羽口 完	52 I 28	長8.8 径7.5~8.5 孔2.4~3.5	先端部熔解。先端傾斜角33°。外面縦方向撫で調整
746-448 288-448	羽口 基部欠損	60 I 23	長(7.1) 径(6.5) 孔(2.2)	先端部熔解。外面縦調整。	748-467 288-467	羽口 完	62 I 25	長9.3 径3.2~7.5 孔2.0~5.0	先端部熔解。熔解角度17°。外面縦方向調整
747-449 288-449	羽口 基部欠損	63 I 23	長(8.5) 径(7.6) 孔(2.8)	先端部熔解顕著。	748-468 288-468	羽口 完	48・49 I 12・13	長9.8 径1.6~4.7	先端部熔解。熔解角度均一。基部外面指頭痕
747-450 288-450	羽口 基部欠損	63 I 28~ 30	長(7.2) 径6.1~7.2 孔1.8	先端部熔解。熔解角度約25°。	749-469 289-469	砥石 砂岩	40 I 7	20.3×11.6×6.2 690.5g	4面使用。置砥石。半欠。中央部砥減り顕著。細る。
747-451 288-451	羽口 基部欠損	54 I 26	長(8) 径4.8 孔1.9	先端部熔解。外面縦篋調整。	749-470 289-470	砥石 輝石安山岩	61 I 22	13.3×9.9×5.5 499.7g	多面使用。置砥石。半欠。中央部砥減り顕著。凹み刃痕あり。
747-452 288-452	羽口	63 I 30・ 31	長10 径5 孔2.3	先端部熔解。熔解角度約30°。外面荒い指頭痕。	749-471 289-471	砥石 流紋岩	62 I 20	7.3×5.0×2.4 113.1g	多面使用。扁平。刃痕あり。
740-453 288-453	羽口 基部欠損	48~56 I 21	長(10) 径5.5 孔2.1	先端部熔解。鉄付付着。熔解部分均一。	749-472 289-472	砥石 輝石安山岩(粗粒)	33 I 42	7.1×11.2×5.8 337.8g	3面使用。置砥石。刃痕あり。

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
749-473 289-473	砥石 ?	60 I 20・ 21	2.8×9.6×6.1 288.5g	2面使用。置砥石。	750-492 289-492	砥石 流紋岩 (砥沢?)	55 I 20	4.5×4.1×2.4 70.3g	多面使用。刃痕あり。
749-474 289-474	砥石 ?	45~58 I 28	6.7×5.3×1.1 60.1g	4側面使用。	750-493 289-493	砥石 角閃石安 山岩	54 I 18	3.5×4.8×2.1 20.4g	多面使用。
749-475 289-475	砥石 ?	54 I 20	16.5×11.2×10. 5 693.6g	1面使用。置砥石。	750-494 289-494	砥石 流紋岩 (砥沢?)	62・63 I 26・27	3.1×3.0×1.4 13.2g	2面使用。
749-476 289-476	砥石 ?	62・63 I 32・33	5.1×4.2×6.3 179g	3面使用。刃痕あり。	750-495 289-495	砥石 流紋岩 (砥沢?)	63 I 30・ 31	3.0×3.2×1.3 15.3g	1面。縁刃使用。
749-477 289-477	砥石 流紋岩	62 I 34	7.8×4.7×2.7 109.7g	2面使用。	750-496 289-496	砥石 流紋岩 (砥沢?)	62・63 I 26・27	3.5×2.0×1.5 14.2g	1面使用。
749-478 289-478	砥石 流紋岩	63 I 28~ 30	8.4×4.5×6.9 252.2g	多面使用。細刃痕あ り。	758-497 289-497	砥石 ?	54 I 21	3.0×1.9×1.6 7.9g	1面使用。
749-479 289-479	砥石 ?	54 I 24	5.8×4.7×3.3 98.5g	多面使用。	750-498 289-498	砥石 角閃石安 山岩	62 I 22	15.9×7.3×6.3 540.9g	多面使用。
749-480 289-480	砥石 ?	55 I 31	3.9×3.4×3.7 41.1g	多面使用。	750-499 289-499	砥石 角閃石安 山岩	63 I 30・ 31	12.2×7.8×4.6 336.2g	4面使用。
749-481 289-481	砥石 流紋岩 (砥沢?)	62・63 I 22・23	5.0×5.8×2.1 66.6g	2面使用。刃痕あり。	750-500 289-500	砥石 角閃石安 山岩	40 I 8	7.1×6.3×6.5 244g	多面使用。
749-482 289-482	砥石 流紋岩 (砥沢?)	62・63 I 22・23	5.0×5.0×2.1 42.5g	2面使用。	750-501 289-501	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	6.7×6.5×7.6 206.3g	多面使用。
749-483 289-483	砥石 ?	62 I 27	3.3×3.2×0.9 12.8g	2側面使用。	750-502 289-502	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	8.2×9.1×4.4 242.6g	多面使用。刃痕あり。
749-484 289-484	砥石 流紋岩 (砥沢?)	62・63 I 20・21	3.7×5.3×2.2 39.9g	多面使用。刃痕あり。	750-503 289-503	砥石 角閃石安 山岩	52 I 24	7.0×6.7×5.0 116.9g	多面使用。
750-485 289-485	砥石 流紋岩 (砥沢?)	30 I 40	6.7×5.7×3.0 117.1g	多縁刃使用。	750-504 289-504	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	3.8×3.6×2.1 19.1g	多面使用。
750-486 289-486	砥石 流紋岩 (砥沢?)	54 I 20	3.4×3.6×3.5 56.8g	多面使用。刃痕あり。	750-505 289-505	砥石 角閃石安 山岩	54 I 21	6.2×6.7×3.8 91.4g	多面使用。
750-487 289-487	砥石 角閃石安 山岩	56 I 24	4.4×3.4×3.5 24.7g	多面使用。刃痕あり。	750-506 289-506	砥石 角閃石安 山岩	63 I 28~ 30	10.5×7.0×4.4 158.4g	2面使用。
750-488 289-488	砥石 ?	56 I 24	3.9×2.6×3.7 30.6g	多面使用。	750-507 289-507	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	8.1×5.4×4.0 138.8g	多面使用。
750-489 289-489	砥石 流紋岩 (砥沢?)	62・63 I 26・27	4.0×4.1×1.4 19.8g	多面使用。	750-508 289-508	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	7.0×6.3×3.9 110.3g	多面使用。刃痕顯著 鉄滓附着。
750-490 289-490	砥石 片 岩	37 I 42	3.4×1.8×1.4 9.2g	2面使用。	750-509 289-509	砥石 角閃石安 山岩	55 I 20	7.1×4.4×5.8 121.4g	3面使用。
750-491 289-491	砥石 ?	62・63 I 26・27	3.4×4.8×1.0 20.7g	側縁使用。扁平。	750-510 289-510	砥石 角閃石安 山岩	54 I 19	6.6×5.5×3.1 78.5g	多面使用。

I区工房跡関連(その他)出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
751-511 289-511	砥石 角閃石安 山岩	56 I 21	7.6×5.8×3.2 185.8g	1面使用。刃痕あり。	751-530 289-530	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	5.3×7.2×3.8 133.2g	多面使用。
751-512 289-512	砥石 角閃石安 山岩	55 I 24	7.8×6.3×3.4 82.7g	多面使用。刃痕あり。	751-531 290-531	砥石 角閃石安 山岩	56 I 24	4.8×4.5×5.0 86.3g	多面使用。刃痕あり。
751-513 289-513	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	8.3×6.4×3.1 107g	多面使用。	751-532 532	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	4.8×6.4×4.0 70.0g	多面使用。
751-514 289-514	砥石 角閃石安 山岩	54 I 23	7.9×5.9×4.9 168.4g	2面使用。	751-533 533	砥石 角閃石安 山岩	54 I 23	6.0×5.0×4.9 84.0g	多面使用。刃痕多い。
751-515 289-515	砥石 角閃石安 山岩	45~58 I 13~20	4.8×5.7×1.8 51.2g	多面使用。	751-534 290-534	砥石 角閃石安 山岩	54-24	4.6×4.9×3.0 45.9g	多面使用。
751-516 289-516	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	6.4×4.6×4.4 58.1g	多面使用。	752-535 290-535	砥石 角閃石安 山岩	54 I 20	7.1×7.7×6.2 214.3g	2面使用。
751-517 289-517	砥石 角閃石安 山岩	63 I 23	6.4×5.1×2.9 61.2g	多面使用。	752-536 290-536	砥石 角閃石安 山岩	55 I 21	5.7×5.5×7.6 200.2g	1面使用。
751-518 289-518	砥石 角閃石安 山岩	32 I 40	9.1×6.9×5.8 210.1g	多面使用。	752-537 290-537	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	5.7×3.9×4.9 78.9g	多面使用。
751-519 289-519	砥石 角閃石安 山岩	59 I 24	4.9×7.7×3.6 130.8g	多面使用。	752-538 290-538	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	5.5×4.4×3.0 35.6g	多面使用。
751-520 289-520	砥石 角閃石安 山岩	54~56 I 20~21	6.7×7.8×5.0 173.8g	多面使用。荒い刃痕 あり。	752-539 290-539	砥石 角閃石安 山岩	52 I 17	5.7×5.1×4.5 120.1g	多面使用。刃痕著し い。
751-521 289-521	砥石 角閃石安 山岩	63 I 28~ 30	6.0×3.7×6.4 82.3g	多面使用。刃痕あり。	752-540 290-540	砥石 角閃石安 山岩	54 I 19 ~21	6.7×4.5×4.1 88.3g	多面使用。刃痕あり。
751-522 289-522	砥石 角閃石安 山岩	54 I 23	7.8×5.8×4.1 104.7g	多面使用。刃痕あり。	752-541 290-541	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	4.8×6.5×2.7 38.5g	多面使用。
751-523 289-523	砥石 角閃石安 山岩	54 I 21	6.0×6.1×4.0 128.1g	1面使用。刃痕あり。	752-542 290-542	砥石 角閃石安 山岩	56 I 24	5.8×4.1×4.1 55.9g	多面使用。刃痕著し い。
751-524 289-524	砥石 角閃石安 山岩	54 I 20	5.7×5.6×5.8 61.1g	2面使用。	752-543 290-543	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	4.7×6.0×3.4 47.3g	多面使用。
751-525 289-525	砥石 角閃石安 山岩	54 I 21	5.8×4.8×3.5 51.7g	多面使用。刃痕あり。	752-544 290-544	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	5.2×4.5×5.2 79.0g	2面使用。
751-526 289-526	砥石 角閃石安 山岩	53 I 22	6.5×4.0×3.2 57.1g	多面使用。刃痕あり。	752-545 290-545	砥石 角閃石安 山岩	54 I 20	6.0×5.4×4.3 91.4g	多面使用。
751-527 289-527	砥石 角閃石安 山岩	53 I 21	5.6×6.2×5.0 130.7g	多面使用。	752-546 290-546	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	6.7×5.3×5.1 57.4g	2面使用。
751-528 289-528	砥石 角閃石安 山岩	54 I 24	4.8×6.3×3.1 86.6g	多面使用。	752-547 290-547	砥石 角閃石安 山岩	54 I 23	7.2×5.9×3.1 103.6g	多面使用。
751-529 289-529	砥石 角閃石安 山岩	31 I 41	7.4×4.0×4.0 86.6g	2面使用。刃痕あり。	752-548 290-548	砥石 角閃石安 山岩	54 I 19	5.7×4.7×2.8 16.5g	多面使用。刃痕あり。

第4章 鍛冶工房跡

Ⅰ区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
752-549 290-549	砥石 角閃石安山岩	54 I 23	5.2×4.2×3.8 58.6 g	多面使用。	753-568 290-568	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	2.9×3.4×2.4 10.6 g	1面使用。
752-550 290-550	砥石 角閃石安山岩	63 I 23	5.9×4.1×3.9 61.0 g	多面使用。	753-569 290-569	砥石 角閃石安山岩	30 I 40	4.1×3.9×2.3 21.8 g	1面使用。
752-551 290-551	砥石 角閃石安山岩	54~56 I 20・21	6.2×6.0×3.9 73.4 g	多面使用。	753-570 290-570	砥石 角閃石安山岩	43 I 15	2.1×3.0×2.0 6.3 g	多面使用。
752-552 290-552	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	5.8×4.5×4.1 67.0 g	多面使用。	753-571 290-571	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	3.8×4.7×3.4 31.5 g	多面使用。刃痕あり。
752-553 290-553	砥石 角閃石安山岩	55 I 21	6.2×3.6×2.8 45.9 g	多面使用。	753-572 290-572	砥石 角閃石安山岩	54 I 23	5.0×4.9×4.2 48.6 g	多面使用。刃痕著しい。
752-554 290-554	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	4.9×5.4×3.9 73.8 g	多面使用。	753-573 290-573	砥石 角閃石安山岩	61 I 20・ 21	4.9×5.2×3.8 58.3 g	多面使用。刃痕著しい。
752-555 290-555	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	6.0×5.6×4.2 104.1 g	多面使用。	753-574 290-574	砥石 角閃石安山岩	62・63 I 20・21	3.0×4.3×2.8 58.7 g	多面使用。刃痕あり。
752-556 290-556	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	6.0×3.7×6.7 99.5 g	多面使用。刃痕あり。	753-575 290-575	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	5.3×4.9×2.9 30.8 g	多面使用。
752-557 290-557	砥石 角閃石安山岩	54 I 23	5.0×5.4×2.5 15.2 g	多面使用。	753-576 290-576	砥石 角閃石安山岩	50 I 24	4.1×4.1×4.3 24.3 g	1面使用。
752-558 290-558	砥石 角閃石安山岩	55 I 20	6.5×3.5×3.5 45.7 g	多面使用。	753-577 290-577	砥石 角閃石安山岩	54 I 23	2.9×3.2×1.7 6.2 g	多面使用。
752-559 290-559	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	5.2×4.3×3.3 39.2 g	多面使用。	753-578 290-578	砥石 角閃石安山岩	54 I 20	3.4×2.1×1.8 3.4 g	多面使用。刃痕あり。
752-560 290-560	砥石 角閃石安山岩	27 I 43	5.2×4.1×5.3 41.4 g	1面使用。	753-579 290-579	砥石 角閃石安山岩	54~56 I 20・21	4.5×4.5×3.5 46.9 g	多面使用。刃痕著しい。
752-561 290-561	砥石 角閃石安山岩	53 I 22	5.9×3.2×3.3 38.6 g	多面使用。	753-580 290-580	砥石 角閃石安山岩	55 I 21	4.1×4.4×3.2 33.1 g	多面使用。刃痕あり。
752-562 290-562	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	5.5×5.0×4.7 82.9 g	多面使用。	753-581 290-581	砥石 角閃石安山岩	56 I 24	4.9×4.1×3.2 27.2 g	多面使用。刃痕あり。
752-563 290-563	砥石 角閃石安山岩	54 I 21	4.6×3.3×1.9 28.5 g	多面使用。	753-582 290-582	砥石 角閃石安山岩	61 I 20・ 21	3.6×4.2×4.8 64.4 g	多面使用。
753-564 290-564	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	5.6×4.9×5.6 81.3 g	多面使用。刃痕あり。	753-583 290-583	砥石 角閃石安山岩	55 I 25	4.5×3.7×3.0 40.0 g	多面使用。
753-565 290-565	砥石 角閃石安山岩	53 I 22	5.1×2.4×6.5 51.8 g	多面使用。刃痕著しい。	753-584 290-584	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	4.2×3.7×3.4 40.0 g	多面使用。
753-566 290-566	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	5.6×4.5×4.0 81.9 g	多面使用。	753-585 290-585	砥石 角閃石安山岩	55 I 20	5.0×2.3×3.0 14.5 g	多面使用。刃痕あり。
753-567 290-567	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	5.3×4.2×4.1 54.7 g	多面使用。刃痕あり。	753-586 290-586	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	4.0×3.2×4.4 18.1 g	多面使用。刃痕あり。

I区工房跡関連(その他)出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
753-587 290-587	砥石 角閃石安山岩	54 I 20	3.4×4.0×3.1 9.6g	多面使用。細い刃痕あり。	753-606 290-606	砥石 角閃石安山岩	55 I 21	2.8×2.9×2.6 8.9g	多面使用。
753-588 290-588	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	3.3×3.3×3.6 19.7g	多面使用。	753-607 290-607	砥石 角閃石安山岩	62・63 I 20・21	2.5×2.2×2.3 8.0g	多面使用。
753-589 290-589	砥石 角閃石安山岩	54 I 23	3.7×4.1×2.9 27.7g	多面使用。刃痕あり。	753-608 290-608	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	3.8×1.7×1.7 7.9g	多面使用。
753-590 290-590	砥石 角閃石安山岩	53 I 22	4.0×4.4×3.9 50.1g	多面使用。	753-609 290-609	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	1.5×3.2×2.6 8.5g	多面使用。
753-591 290-591	砥石 角閃石安山岩	54 I 21	3.4×3.4×3.1 18.9g	多面使用。	754-610 290-610	転用砥石 須恵器把手	45~58 I 13~20	9.0×1.5×1.7 44.0g	1側面使用。
753-592 290-592	砥石 角閃石安山岩	55 I 21	3.8×4.3×2.9 24.1g	多面使用。	754-611 290-611	転用砥石 須恵器杯	54 I 23	12.8×8×2.9 32.6g	体部直線的に外傾。底部回転篋切り。底部欠損部使用。
753-593 290-593	砥石 角閃石安山岩	56 I 24	3.6×3.0×2.5 8.5g	多面使用。	754-612 290-612	転用砥石 須恵器甕片	51 I 11	6.6×9.0×1.6 84.2g	1側面使用。
753-594 290-594	砥石 角閃石安山岩	55 I 21	3.3×3.2×2.2 8.9g	多面使用。	754-613 290-613	転用砥石 須恵器甕片	45~58 I 13~20	8.1×5.9×1.1 53.5g	4側面使用。
753-595 290-595	砥石 角閃石安山岩	54 I 23	4.1×3.2×2.9 21.3g	多面使用。	754-614 290-614	転用砥石 須恵器甕片	60・61 I 24・25	5.7×7.1×1.0 45.7g	3側面使用。
753-596 290-596	砥石 角閃石安山岩	43 I 15	4.5×3.5×2.1 25.5g	多面使用。	754-615 290-615	転用砥石 須恵器甕片	46~58 I	5.0×6.7×1.5 64.5g	1側面使用。
753-597 290-597	砥石 角閃石安山岩	41 I 10	3.2×1.9×1.9 9.1g	1面使用。	754-616 290-616	転用砥石 須恵器甕片	48~56 I 21	5.4×6.7×1.3 44.5g	2側面使用。
753-598 290-598	砥石 角閃石安山岩	63 I 21	3.3×3.8×2.1 17.9g	多面使用。	754-627 290-617	転用砥石 須恵器甕片	41~45 I 10	5.3×4.2×1.1 30.7g	2側面使用。
753-599 290-599	砥石 角閃石安山岩	51 I 24	4.7×3.7×3.2	多面使用。	754-618 290-618	転用砥石 須恵器甕片	45~49 I 10	5.3×6.3×1.4	1側面使用。
753-600 290-600	砥石 角閃石安山岩	54 I 24	4.7×3.9×3.8 35.4g	1面使用。	754-619 290-619	転用砥石 須恵器甕片	60・61 I 30・31	4.6×5.7×1.7 46.2g	2側面使用。
753-601 290-601	砥石 角閃石安山岩	60 I 20・ 21	3.3×4.2×2.4 19.8g	1面使用。	754-620 290-620	転用砥石 須恵器甕片	54 I 21	6.4×4.9×1.0 34.9g	3側面使用。
753-602 290-602	砥石 角閃石安山岩	53・54 I 22・24	5.2×3.4×1.5 17.7g	多面使用。	754-621 290-621	転用砥石 須恵器甕片	46~58 I 10	5.1×3.8×1.4 41.8g	2側面使用。
753-603 290-603	砥石 角閃石安山岩	43 I 15	4.5×4.4×2.8 24.5g	多面使用。刃痕著しい。	754-622 290-622	転用砥石 須恵器底部片	45~58 I 13~20	5.3×3.4×1.0 16.1g	側縁使用。中心穿孔。
753-604 290-604	砥石 角閃石安山岩	55 I 21	4.9×4.0×2.3 44.0g	1面使用。	750-623 290-623	転用砥石 須恵器甕片	45~58 I 13~20	9.2×3.8×1.3 46.5g	1側面使用。
753-605 290-605	砥石 角閃石安山岩	53 I 21	3.8×2.5×2.1 9.6g	多面使用。	754-624 290-624	転用砥石 須恵器蓋片	55・56 I 13・14	5.0×4.2×1.2 24.1g	3側面使用。

第4章 鍛冶工房跡

I 区工房跡関連（その他）出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特徴
754-625 290-625	転用砥石 須恵器壺 片	42~46 I 10	5.2×3.7×1.3 28.7g	3側面使用。	754-642 290-642	転用砥石 須恵器片	53・54 I 22~24	3.7×3.6×0.9 14.3g	1側面使用。
754-626 290-626	転用砥石 須恵器壺 片	48~58 I 10	5.9×4.1×1.0 33.0g	1側面使用。	754-643 290-643	転用砥石 須恵器壺 片	62・63 I 22・23	4.1×3.2×1.3 22.9g	4側面使用。
754-627 290-627	転用砥石 須恵器壺 片	62・63 I 21・22	5.8×3.1×1.3 25.4g	3側面使用。	754-644 290-644	転用砥石 須恵器片	54 I 20	4.9×4.2×0.7 14.7g	2側面使用。
754-628 290-628	転用砥石 須恵器壺 片	55・56 I 13・14	4.4×2.8×1.6	3側面使用。	754-645 290-645	転用砥石 須恵器杯 底部片	54 I 20	6.5×2.1×0.9 13.0g	1側面使用。
754-629 290-629	転用砥石 須恵器壺 片	63 I 30・ 31	6.0×3.2×0.9 18.7g	1側面使用。	754-646 290-646	転用砥石 須恵器片	56・57 I 11	2.1×4.1×1.3 13.1g	2側面使用。
754-630 290-630	転用砥石 須恵器瓶 片	56 I 24	3.5×5.3×0.7 21.7g	2側面使用。	754-647 290-647	転用砥石 須恵器壺 片	54 I 19	2.6×2.4×1.2 7.8g	1側面使用。
754-631 290-631	転用砥石 須恵器壺 片	63 I 24・ 25	3.8×4.3×1.3 21.6g	2側面使用。	754-648 290-648	転用砥石 須恵器壺 片	55 I 21	3.2×1.7×1.1 7.2g	2側面使用。
754-632 290-632	転用砥石 須恵器壺 片	48~56 I 21	3.7×6.5×1.2 29.1g	2側面使用。	754-649 290-649	転用砥石 須恵器片	45 I 10	5.1×2.7×1.0 17.7g	4側面使用。
754-633 290-633	転用砥石 須恵器壺 片	46~58 I 10	4.2×4.4×1.1 31.7g	1側面使用。	754-650 290-650	転用砥石 須恵器壺 片	63 I 30・ 31	4.3×3.7×1.0 10.9g	1側面使用。
754-634 290-634	転用砥石 須恵器片		3.4×4.4×0.7 20.2g	2側面使用。	754-651 290-651	転用砥石 須恵器片	60・61 I 22・23	4.0×2.9×0.8 11.3g	1側面使用。
754-635 290-635	転用砥石 須恵器壺 片	45~58 I 10・11	3.0×4.6×1.1 22.1g	1側面使用。	754-652 290-652	転用砥石 須恵器壺 片	55・56 I 13・14	4.4×2.8×0.8 15.4g	1側面使用。
754-636 290-636	転用砥石 須恵器片	62・63 I 20・21	4.2×4.7×1.1 21.9g	1側面使用。	754-653 290-653	転用砥石 須恵器片	45~58 I 13~20	4.6×2.4×0.9 8.9g	3側面使用。
754-637 290-637	転用砥石 須恵器壺 片	56・57 I 11・12	5.0×3.7×0.8 16.7g	4側面使用。	754-654 290-654	転用砥石 須恵器片	51~56 I 11・12	4.8×2.6×0.7 6.5g	1側面使用。
754-638 290-638	転用砥石 須恵器壺 片	45~58 I 13~20	2.8×4.1×0.9 15.9g	1側面使用。	754-655 290-655	転用砥石 須恵器片	52 I 27	3.7×2.9×0.7 7.2g	1側面使用。
754-639 290-639	転用砥石 須恵器壺 片	60・61 I 30・31	3.6×3.4×0.7 15.5g	1側面使用。	754-656 290-656	転用砥石 須恵器片	62・63 I 20・21	3.1×2.9×0.9 6.6g	3側面使用。
754-610 290-610	転用砥石 須恵器壺 片	60・61 I 30・31	4.1×4.1×0.8 20.5g	1側面使用。	754-657 290-657	石製品紡 錘車流 紋岩?	62 I 24	4.2×4.5×1.4 39.5g	上端側縁面取り状に 細く成形。丸味を持 つ。孔径0.7。
754-641 290-641	転用砥石 須恵器片	55・56 I 13・14	3.0×3.7×0.7 10.7g	3側面使用。	754-658 290-658	石 輝石安山 岩	61 I 22・ 23	18.6×5.5×3.8 636.8g	両端に叩き痕あり。

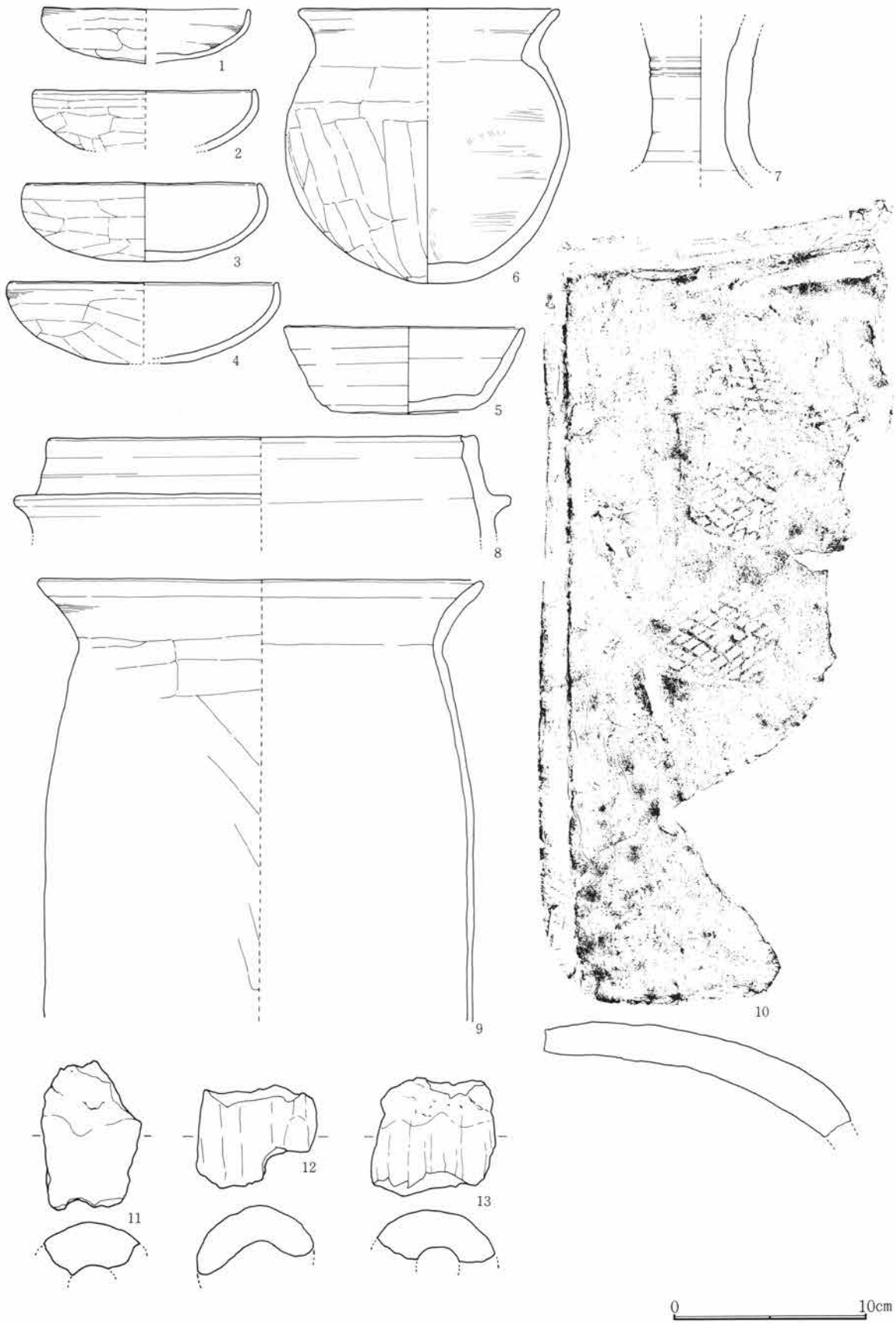


Fig.755 I SX 1 出土遺物 (1)

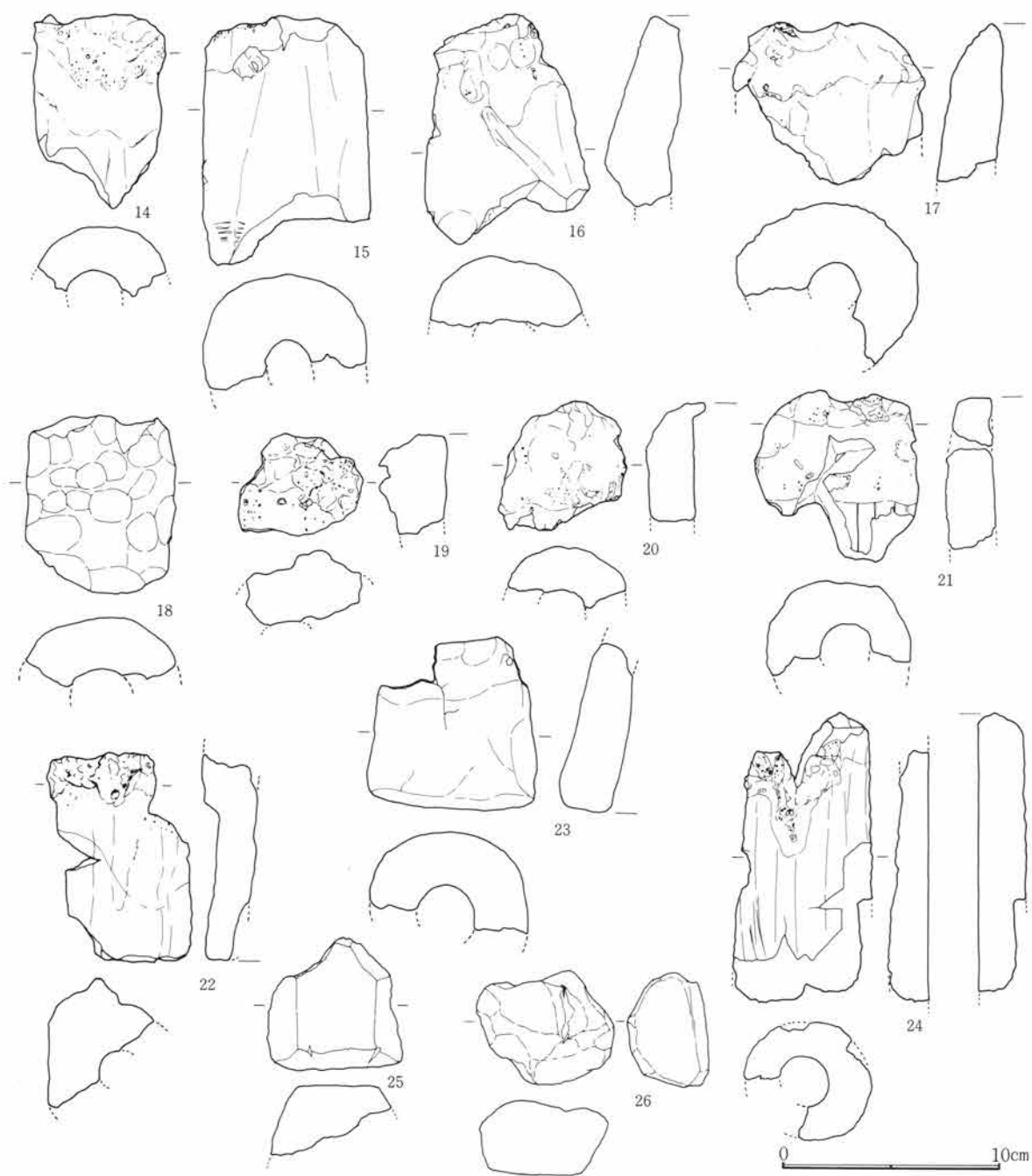


Fig.756 I S X 1 出土遺物 (2)

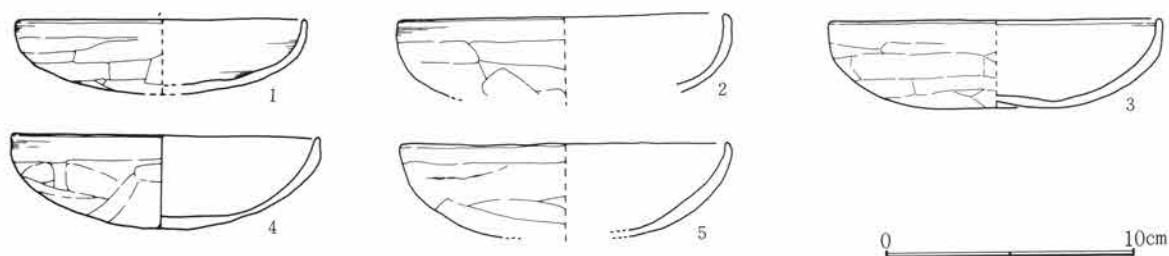


Fig.757 I S X 2 出土遺物 (1)

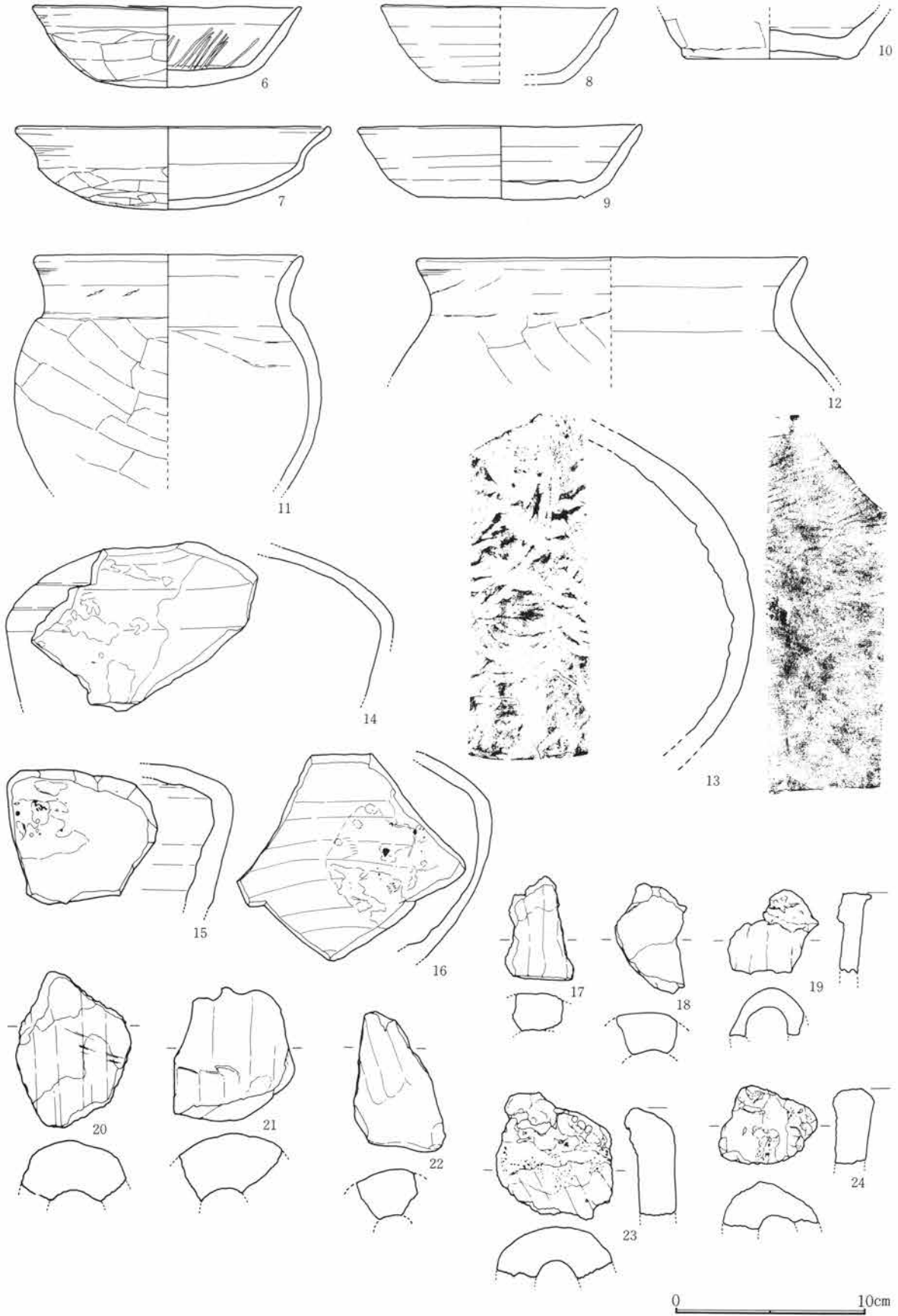


Fig.758 I S X 2 出土遺物 (2)

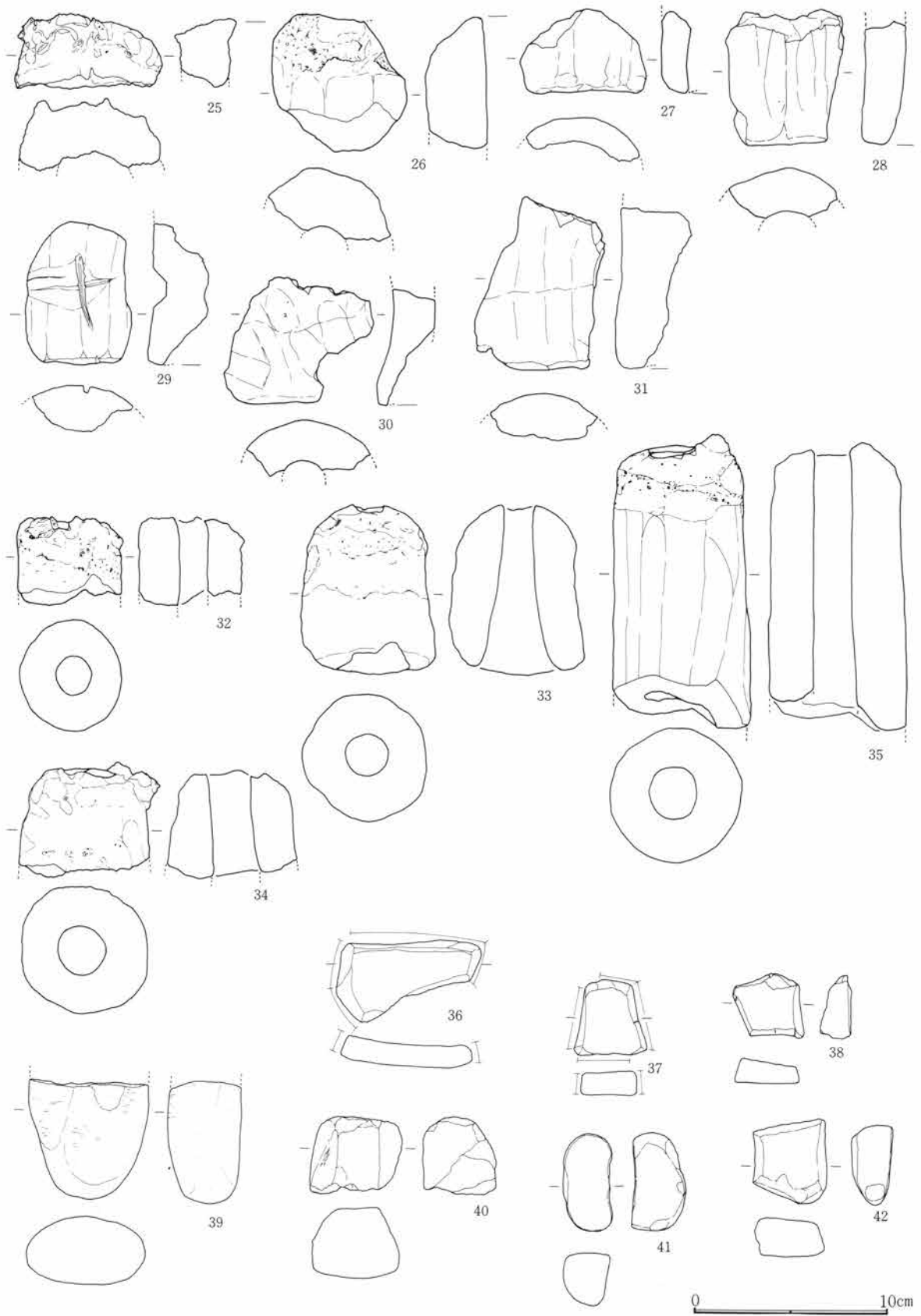


Fig.759 I S X 2 出土遺物 (3)

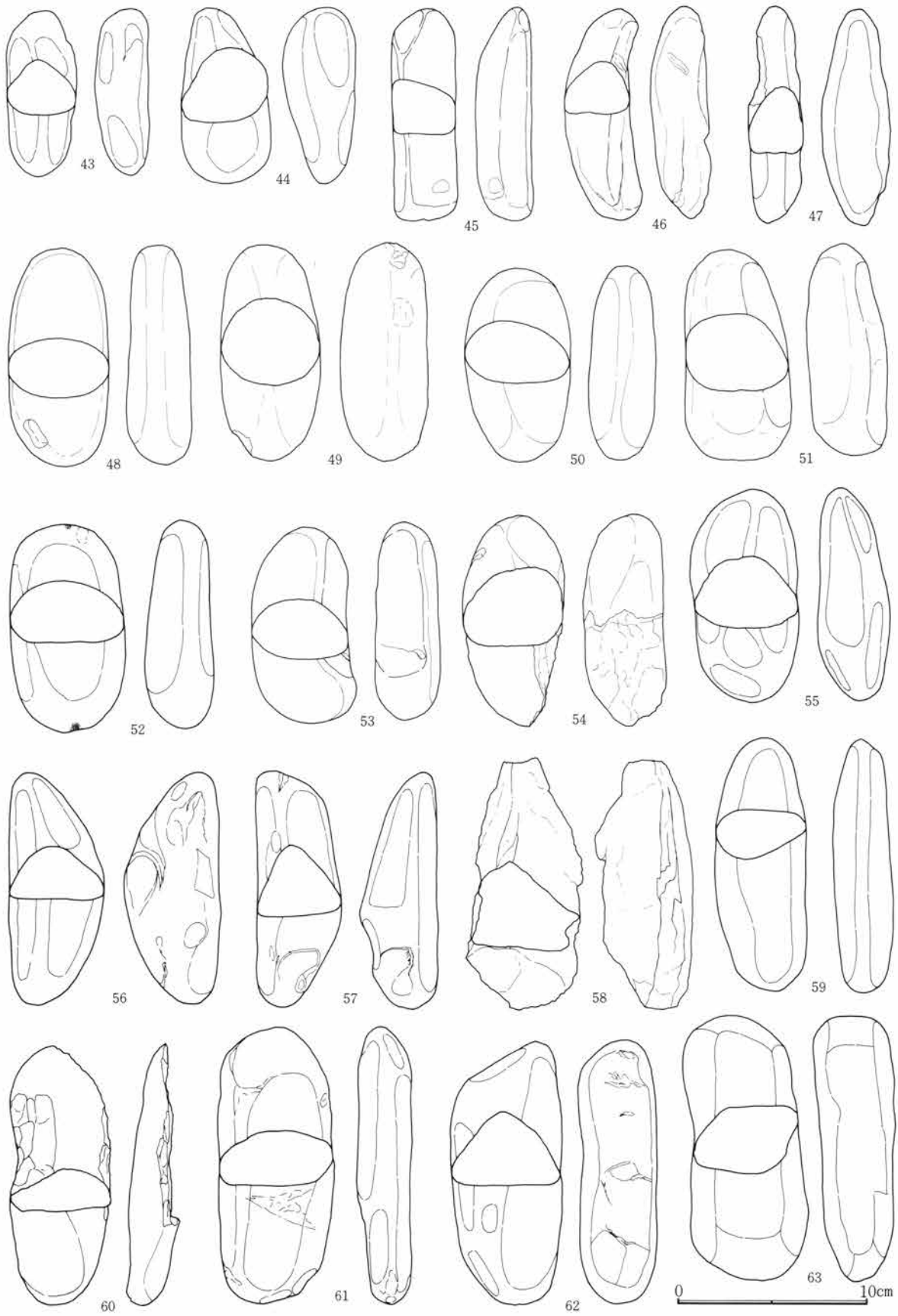


Fig.760 I S X 2 出土遺物 (4)

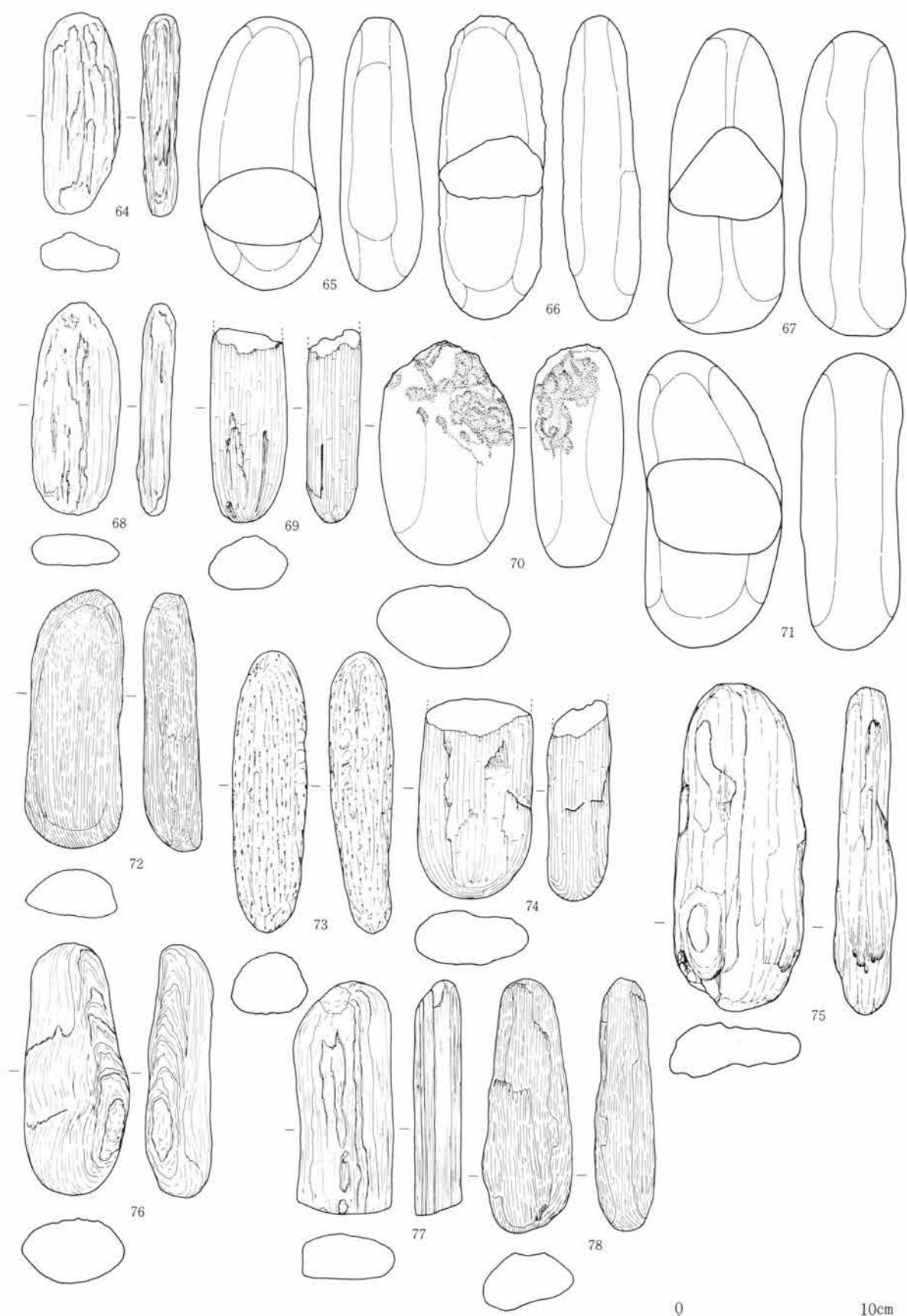


Fig.761 I S X 2 出土遺物 (5)

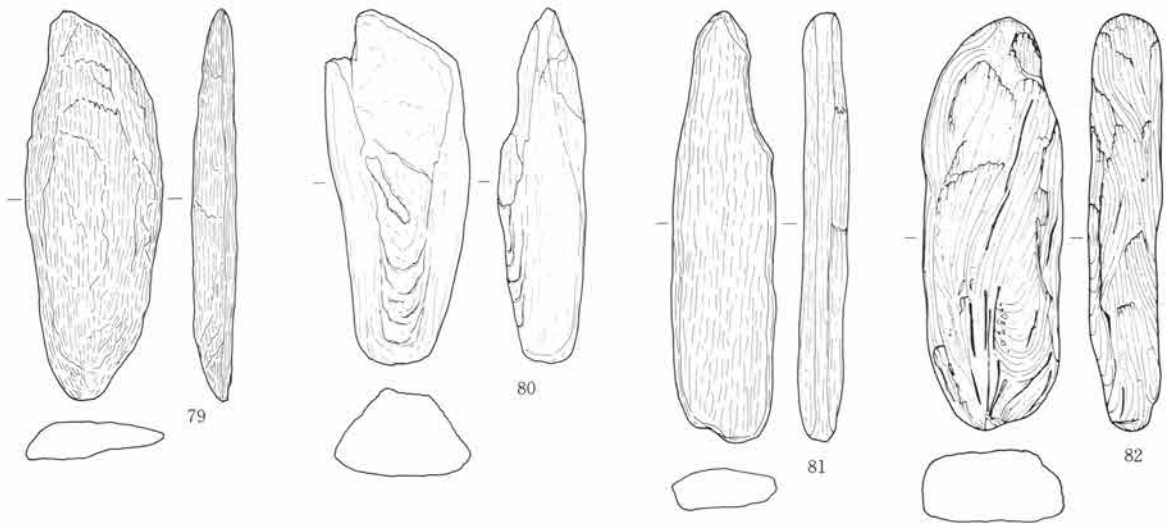


Fig.762 I S X 2 出土遺物 (6)

0 10cm

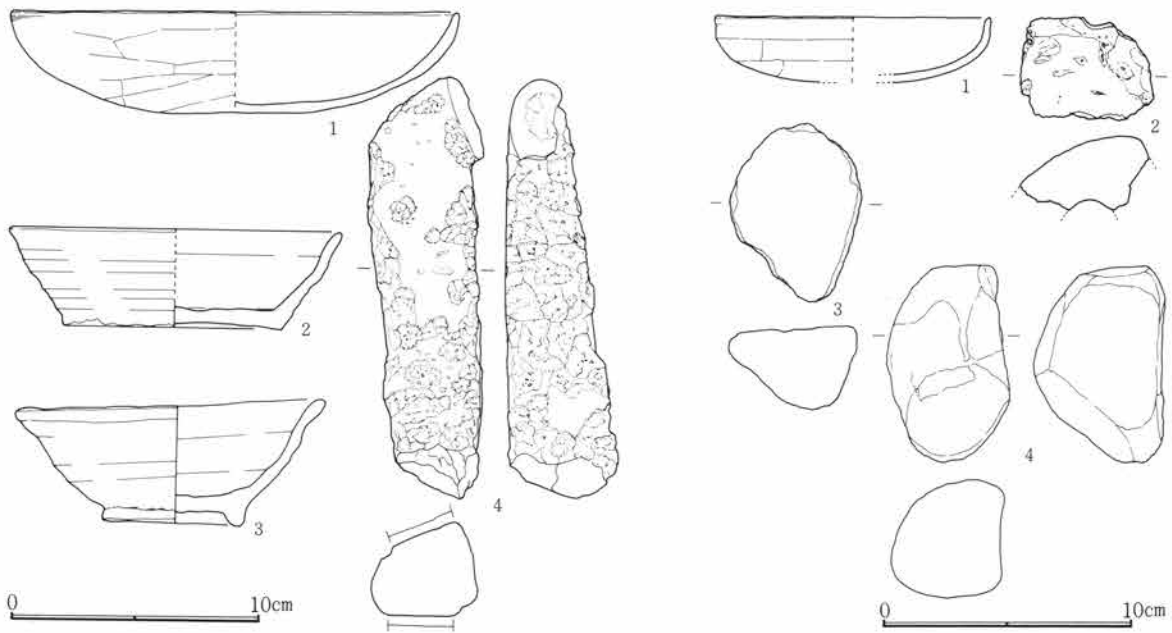


Fig.763 I 3号土坑出土遺物

Fig.764 I 4号土坑出土遺物

I S X 1 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残 存 量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
755-1 291-1	土師器 杯	¼	10.8×-×3		底部扁平をなし浅い。口縁部僅かにくびれ緩く内傾。口縁部横撫で。底部篋削り	①良好 ②橙 ③やや密
755-2 291-2	土師器 杯	½	11.7×-×(3.3)		口縁部内湾して立つ。口縁部横撫で。底部篋削り	①良好 ②橙 ③やや密
755-3 291-3	土師器 杯	¼	12.4×-×4.2		底部丸く深い。口縁部内傾する。口縁部横撫で。底部篋削り	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
755-4 291-4	土師器 杯	¼	13.9×-×2.7		底部丸く深い。口縁部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
755-5 291-5	須恵器 杯	完	12×7.5×4		腰部にやや丸味をもつ。体部直線的に外傾。器肉厚い。轆轤成形。底部回転篋切り	①良好 ②オリーブ灰 ③やや粗、黒粒
755-6 291-6	土師器 甕	上半部 ½欠損	13.8×5×14.4 胴径15		胴部強く張り球形を呈する。口縁部くの字状に強く外傾。底部丸く不安定。口縁部横撫で。胴部上半横、下半縦篋削り	①良好 ②鈍い橙 ③やや密

第4章 鍛冶工房跡

I S X 1 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他			
755-7 291-7	須惠器 瓶	瓶頸部 小片	一×一×(7.5) 頸径6		頸部上半に浅い2条の凹線。	①良好 ②灰 ③やや粗			
755-8 291-8	羽 釜	口縁部 1/4	22.2×一×(4.5) 鏝径25.8		鏝部水平に延び、断面丸く三角。口縁部内傾し、口唇部内面に凹線。口縁部横撫で。胴部回転撫で。	①酸化気味 ②黒灰 ③やや密、白色細粒			
755-9 291-9	土 師 器 甕	1/2 下 半欠損	23.1×一× (22.2) 胴径22.2		胴部張りなく長胴を呈す。口縁部肥厚し外反気味に開く。口縁部横撫で。胴部上半横・下半斜〜縦篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗			
Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
755-10 291-10	瓦 平 瓦		長37.0 厚2.1	凹面布目後撫で。凸面斜格子叩目、側面篋調整。	756-19 291-19	羽 口 先 端 部		長(4.7) 径 孔	先端部溶解。
755-11 291-11	羽 口 中 位		長(7.4) 径 孔(2.6)		756-20 291-20	羽 口 先 端 部		長(5.4) 径 孔(2.5)	先端部溶解。
755-12 291-12	羽 口 端 部		長(4.8) 径 孔(2.3)	外面篋調整。	756-21 291-21	羽 口 先 端 部		長(7.1) 径(6.5) 孔(2.7)	先端部溶解。
755-13 291-13	羽 口 中 位		長(5.8) 径 孔(2.3)	外面凹線状縦成形。	756-22 291-22	羽 口		長(8.8) 径 孔2.0	先端部溶解。炉壁付着。外面縦凹状成形痕。
756-14 291-14	羽 口 中 位		長(8.7) 径 孔(2.5)	薄く溶解。外面縦篋調整。	756-23 291-23	羽 口 先端部欠損		長(7.8) 径(7.2) 孔(2.8~4.4)	薄く溶解。
756-15 291-15	羽 口 中 位		長(11.1) 径(7.4) 孔(2.1)		756-24 291-24	羽 口 基部欠損		長(10.1) 径(6.1) 孔(2.3)	先端部溶解。
756-16 291-16	羽 口 先 端 部		長(10.2) 径 孔	先端部溶解。	756-25 291-25	砥 石		5.9×6.1×3.1 71.4g	3面使用。刃痕あり。
756-17 291-17	羽 口 先 端 部		長(7.3) 径(7.6) 孔(2.2)	先端部溶解。	756-26 291-26	砥 石 角閃石安山岩		5.0×6.0×3.2 90g	多面使用。
756-18 291-18	羽 口 中 位		長(8.0) 径 孔(3.1)	外面指頭成形。					

I S X 2 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
757-1 292-1	土 師 器 杯	1/2	13.1×一×(3)		底部やや扁平。口縁部器内薄く直立気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
757-2 292-2	土 師 器 杯	1/4	13×一×(3)		底部扁平だが深くなるか。口縁部直立。口唇部僅かに内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る
757-3 292-3	土 師 器 杯	1/4	13.4×一×3.5		底部やや上げ底。口縁部直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや密
757-4 292-4	土 師 器 杯	1/2	12.3×一×3.7		体部に丸味をもつ。口縁部肥厚し直立。口唇部細る。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③橙
757-5 292-5	土 師 器 杯	1/4	13.2×一×(3.7)		底部丸く深い。口縁部短かく内湾気味に立つ。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
758-6 292-6	土 師 器 杯	完	14.1×8.2×4.2		底部やや丸く、体部直線的に外傾。口唇部細る。内面放射状暗文。口縁部横撫で。体・底部篋削り。	①良好 ②橙 ③密
758-7 292-7	土 師 器 盤	ほぼ完	16.7×一×4.3		底部丸味をもち扁平。口縁部下くびれ大きく外反。口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗、砂混る
758-8 292-8	須惠器 杯	1/4	12.5×7×4		腰部にやや丸味をもち体部直線的に開く。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密

I S X 2 出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他			
758-9 292-9	須惠器 碗	完	15×8.8×3.9		体部直線的に外傾。全体に肥厚気味。低い削り出し高台。底・腰部回転篋削り。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒多く混る			
758-10 292-10	須惠器 壺	1/4	—×9.3× (2.5)		底部粗い回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗、白色細粒混る			
758-11 292-11	土師器 甕	2/3 底部欠損	14.3×—× (12.3) 胴部径16		胴部丸く張り、口縁部緩く外反する。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②鈍い赤褐 ③やや密			
758-12 292-12	土師器 甕	口縁部1/4	20.6×—×(6.5)		最大径は胴部にあるか。口縁部短かく緩く外反。口縁部横撫で。胴部斜篋削り。	①良好 ②明赤褐 ③やや粗			
758-13 292-13	須惠器 甕	胴部			外面平行叩き目。内面青海波状あて目。				
Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器 種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
758-14 292-14	転用坩堝 ? 須惠器瓶		小片	内面に銅滴付着。	759-30 292-30	羽 口 基 部		長(6.2) 孔(2.3)	外面指頭痕。
758-15 292-15	転用坩堝 ? 須惠器		小片	内面に銅滓付着。	759-31 292-31	羽 口 基 部		長(8.2)	植物質多く混る。
758-16 292-16	転用坩堝 ? 須惠器瓶		小片	内面に銅滓付着。胴部横篋削り。	759-32 292-32	羽 口 先 端 部		長(4.4) 径5.2 孔1.8	先端部溶解。
758-17 292-17	羽 口 基部小片		長(5.3)	縦方向凹状成形痕。	759-33 292-33	羽 口		長(8.5) 径5.0~6.8 孔1.5~4.0	先端部溶解。溶解部分平均に巡る。植物質多く混る。
758-18 292-18	羽 口 中位小片		長(5.7)		759-34 292-34	羽 口 先 端 部		長(5.2) 径(5.0~6.5) 孔(2.1)	先端部溶解。
758-19 292-19	羽 口 先 端 部		長(4.0) 孔(2.1)	溶解部分一部剥落。	759-35 292-35	羽 口 基部欠損		長(14.0) 径(6.0~7.0) 孔(2.1)	先端部の溶解ほぼ平均に巡る。外面縦方向篋削り。
758-20 292-20	羽 口 中 位		長(8.0) 孔(3.0)	外面縦方向凹痕。刃痕あり。	759-36 293-36	転用砥石 須惠器甕片		7.3×4.0×1.0 33.9g	4側面使用。
758-21 292-21	羽 口 中 位		長(7.0) 孔(2.7)	外面縦篋成形。	759-37 293-37	転用砥石 須惠器甕片		3.8×3.7×1.2 21.5g	4面使用。
758-22 292-22	羽 口 基部小片		長(7.0)	外面縦成形痕。植物質混る。	759-38 293-38	砥 石 角閃石安山岩		3.2×3.1×1.2 10.5g	多面使用。刃痕あり。
758-23 292-23	羽 口 先 端 部		長(5.3) 孔(2.0)	先端部溶解。外面斜篋調整。	759-39 293-39	砥 石 石英閃緑岩		6.0×6.1×3.8 201.7g	細い刃痕多い。
758-24 292-24	羽 口 先 端 部		長(3.4) 孔(2.2)	先端部溶解。	759-40 293-40	砥 石 角閃石安山岩		3.9×4.8×3.5 41.8g	多面使用。
759-25 292-25	羽 口 先 端 部		長(3.5)	先端部溶解顕著。	759-41 293-41	砥 石 角閃石安山岩		4.9×2.7×2.3 27.5g	多面使用。
759-26 292-26	羽 口 先 端 部		長(6.5) 孔(2.5)	先端部溶解。	759-42 293-42	砥 石 角閃石安山岩		4.3×3.6×2.0 36.5g	多面使用。
759-27 292-27	羽 口 基 部		長(4.1)	基部指頭痕。	760-43 293-43	石 輝石安山岩(粗粒)		8.6×3.7×2.8 209.6g	
759-28 292-28	羽 口 基 部		長(6.3)	外面縦篋成形。植物質混る。	760-44 293-44	石 輝石安山岩(粗粒)		9.0×4.5×3.7 132.8g	
759-29 292-29	羽 口 基 部		長(7.2)	外面縦篋削り。	760-45 293-45	石 輝石安山岩(粗粒)		10.9×3.3×3.0 206.1g	

第4章 鍛冶工房跡

I S X 2 出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴	Fig. No. PL. No.	器種	出土位置	計測値(cm・g)	特 徴
760-47 293-47	石 輝石安山 岩(粗粒)		11.3×2.9×3.5 130.1g		761-66 293-66	石 緑色片岩		15.7×5.4×4.0 470.2g	
760-48 293-48	石 溶結凝灰 岩		10.4×5.2×3.4 305.5g		761-67 293-67	石 ひん岩		15.7×5.4×4.8 693.3g	
760-49 293-49	石 輝石安山 岩(粗粒)		10.3×4.6×5.2 374.3g		761-68 293-68	石 緑色片岩		11.0×4.5×1.6 135.4g	
760-50 293-50	石 輝石安山 岩(粗粒)		10.1×5.7×3.6 296.8g		761-69 293-69	石 黒色片岩		4.0×10.1×2.7 174.4g	
760-51 293-51	石 輝石安山 岩(粗粒)		11.0×5.6×4.1 392.1g		761-70 293-70	石 石英閃緑 岩		11.6×7.0×4.8 507.4g	
760-52 293-52	石 輝石安山 岩(粗粒)		10.8×6.0×3.7 350.5g		761-71 293-71	石 輝石安山 岩		15.3×7.2×5.0 693.7g	
760-53 293-53	石 ひん岩		10.2×5.5×3.5 280.9g		761-72 293-72	石 雲母石英 片岩		13.4×4.7×3.0 277.4g	
760-54 293-54	石 溶結凝灰 岩		11.0×5.3×4.2 308.7g		761-73 293-73	石 緑色片岩		14.6×3.9×3.4 289.8g	
760-55 293-55	石 珩質変岩		11.1×5.7×3.8 308.2g		761-74 293-74	石 黒色片岩		10.4×6.0×3.3 327.4g	
760-56 293-56	石 輝石安山 岩(粗粒)		12.0×5.0×2.6 202g		761-75 293-75	石 黒色片岩		16.9×6.8×3.1 440.5g	
760-57 293-57	石 黒色頁岩		12.2×4.5×3.7 254.9g		761-76 293-76	石 雲母石英 片岩		13.1×5.5×3.4 338.7g	
760-58 293-58	石 かこう岩		13.1×6.1×5.1 399.2g		761-77 293-77	石 雲母石英 片岩		12.0×5.1×2.5 269.8g	
760-59 293-59	石 輝石安山 岩(粗粒)		13.1×4.7×3.0 234.4g		761-78 293-78	石 黒色片岩		13.1×4.7×3.0 240.2g	
760-60 293-60	石 黒色頁岩		13.4×5.0×2.9 189.8g		762-79 293-79	石 雲母石英 片岩		15.5×5.5×1.7 150.1g	
760-61 293-61	石 輝石安山 岩(粗粒)		14.3×6.1×3.0 417g		762-80 293-80	石 雲母石英 片岩		14.0×5.8×3.5 339.1g	
760-62 293-62	石 溶結凝灰 岩		13.7×5.8×4.1 457.2g		762-81 293-81	石 黒色片岩		17.1×4.1×1.6 173.1g	
760-63 293-63	石 輝石安山 岩(粗粒)		18.8×5.5×4.1 491.8g		762-82 293-82	石 黒色片岩		16.4×5.6×2.9 441.5g	
761-64 293-64	石 黒色片岩		14.0×4.1×2.0 124.6g						

I 3号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他		
763-1 293-1	土師器	鉢	1/4	18×-×4.2		底部丸味をもち扁平。口縁部やや肥厚し、内湾気味に開く。底部篋削り。口唇部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る		
763-2 293-2	須恵器	杯	1/3	13.5×8.3×4		体部中位に強い轆轤目。上半はくびれて緩く外反。轆轤成形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗		
763-3 3	須恵器	椀	完	12.2×5.8×4.5		体部中位でくびれ上半は外反して開く。口唇部丸く肥厚。付高台。作り雑。轆轤成形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗砂多く混る		
Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
763-4 293-4	石 緑色片岩		16.2×4.5×3.7 413.1g	敲打調整痕を有する。					

I 4号土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 器	種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他		
764-1 293-1	土師器	杯	1/4	11.4×-×2.4		底部扁平で浅い。口縁部直立。口縁部横撫で。底部篋削り。	①良好 ②橙 ③やや粗、砂混る		
Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴	Fig. No PL. No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	特 徴
764-2 293-2	羽口 先端部		長(4.0) 孔(2.1)	先端部溶解。	764-4 293-4	砥石 角閃石安 山岩		7.8×4.9×5.2 176.2g	多面使用。
764-3 293-3	砥石 角閃石安 山岩		7.1×5.2×3.2 47.1g	多面使用。					

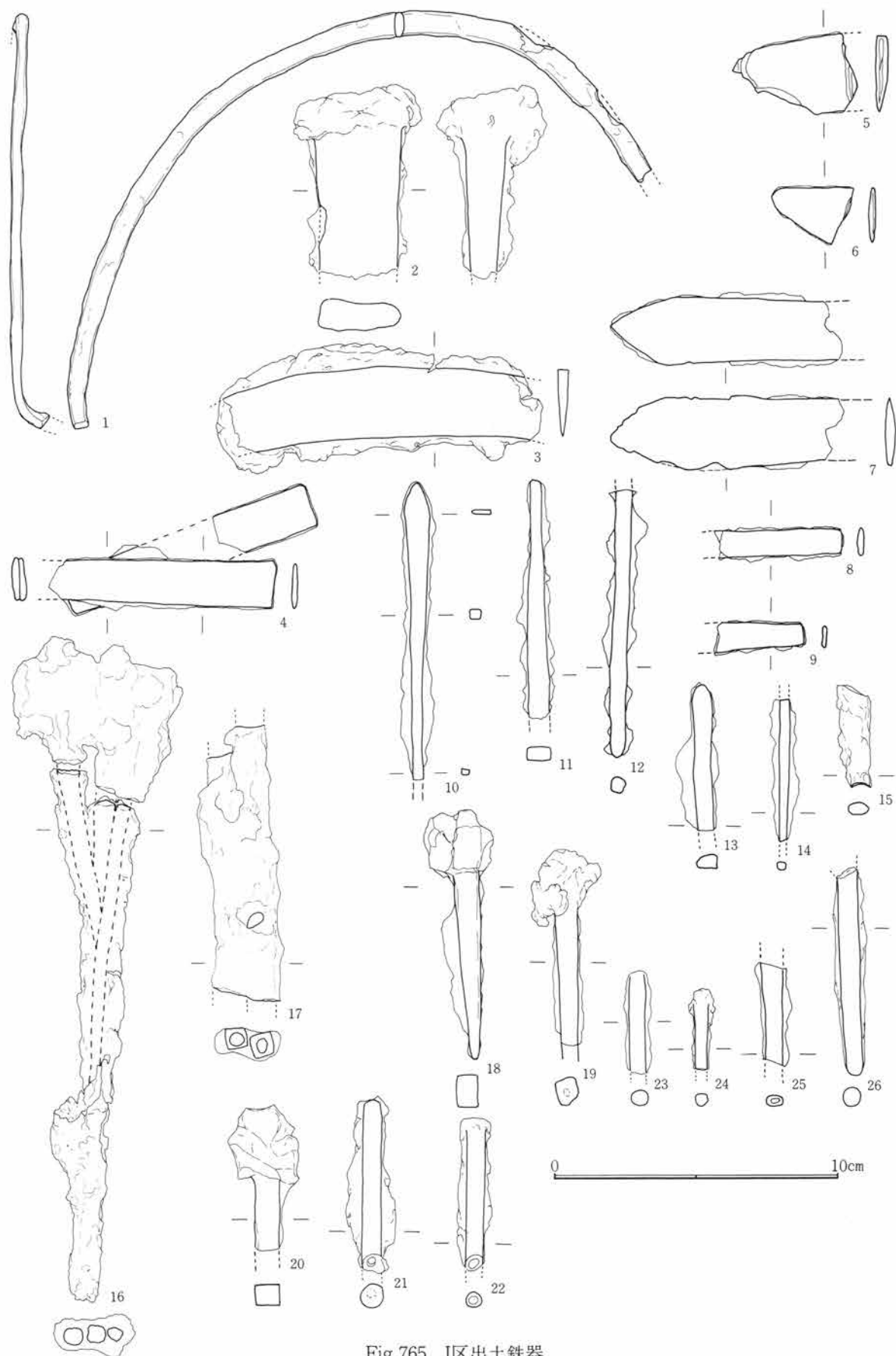


Fig.765 I区出土鉄器

I区出土鉄器観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計測値 (cm) 長さ×巾×厚さ	出土位置	器形・成形及び調整の特徴
1	鉄 鍋 鉋 ?	器 欠損	29.6×0.7×0.3	43 I 22	弓形に弧を描き、端部L字状に折れ曲る。後世の混入品で鍋鉋か。
2	鉄 楔 ?	器 先端部 欠損	6.4×2.8×1.1	62 I 22	頂部が脹らみ、身部は徐々に細まる。楔か。
3	鉄 鎌 ?	器 両端部 欠損	11.2×2.3×0.4		ゆるく弧を描き、片側縁は刃部をなす。鎌か。
4	鉄 器		8.0×1.6×0.2	43 I 19	同形態の板状鉄器が付着。
5	鉄 鎌 ?	器 先端部	4.2×2.7×0.4	50 I 40	利器の先端部か。片側縁は刃部をなす。
6	鉄 鎌 ?	器 先端部	2.8×1.9×0.3	炉35掘形 カジヤ2号	利器の先端部か。片側縁は刃部をなす。
7	鉄 刀 子 ?	器 先端部	8.2×2.4×0.4		両側縁が刃部をなし、両刃の利器か。
8	鉄 刀 子 ?	器 基部	4.3×1.0×0.2	47 I 48	刀子の柄部か。
9	鉄 刀 子 ?	器 基部	3.1×0.8×0.1	47 I 48	刀子の柄部か。
10	鉄 鉄 鏃	器 基部欠 損	10.3	55 I 21	先端部平たく最大幅1cm。基部断面四角。平根型鉄鏃。
11	鉄 鉄 鏃 ?	器 先端部 欠損	8.2×0.8×0.5	42 I 44	鉄鏃の柄部か。
12	鉄 鉄 鏃 ?	器 先端部 欠損	9.2×径1.6	47 I 48	鉄鏃の柄部か。
13	鉄 鉄 鏃 ?	器 先端部	5.0×0.7×0.5	炉125-129	平根型鉄鏃の先端部か。
14	鉄 鉄 鏃 ?	器 基部	4.9×0.35×0.3	53 I 22	鉄鏃柄部か。断面四角。
15	鉄 器		3.5×径2.1	53 I 22	断面楕円形の棒状鉄器。
16	鉄 器		23.1	55 I 21	3本の棒状鉄器が付着。
17	鉄 器		9.5	カジヤ3号	2本の棒状鉄器が付着。
18	鉄 釘 ?	器 ほぼ完	8.5×0.75×1.1	45 I 24	角釘か。
19	鉄 釘 ?	器 先端部 欠損	6.7×径2.8	48 I 43	角釘か。
20	鉄 釘 ?	器 先端部 欠損	5.0×0.9×0.7	33 I 43	角釘か。
21	鉄 釘 ?	器	6.1×径2.51	48 I 42	断面は円形。中心部腐蝕。
22	鉄 釘 ?	器	5.3×径1.72	55 I 21	断面は円形。中心部腐蝕。
23	鉄 釘 ?	器	3.6×径1.72	42 I 46 カジヤ3号	断面は円形。
24	鉄 釘 ?	器	2.8×径1.26	17 I 44	
25	鉄 器		3.7×径1.32	63 I 30・ 31	断面は楕円形。中心部腐蝕。
26	鉄 器		7.2×径2.04	63 I 21	断面は円形。

第5章 成果と課題

上野国府に関する研究は先学諸氏により多くの論考が為されてきたが、その研究範囲は地理学的・地名考証からなる外観的な論究に偏っているのが実状である。近年、前橋市教育委員会等による国府域内や周辺での発掘調査が進み徐々にその実態を明らかにしつつある。しかしながら調査の範囲は点的な側面が否めず、また国府内部に推定されている地域は15世紀前半代の築城といわれる蒼海城による改変や市街化が著しく本格的な調査は不可能に近い。このような状況は上野国府の具体的構造は言うに及ばずその生成・変遷について不明な点を多く残している。

鳥羽遺跡は国府域の西縁まじかにあり、その地勢からして国府との強い関連が想定される遺跡である。6年余りの発掘調査によって検出された遺構は800余軒の竪穴住居跡をはじめ、濠・柵の施設を備えた掘立柱建物跡・大規模な鍛冶工房跡群など遺跡の構成内容は一般的な集落とはかなり異質なものとなっている。この異質性は当遺跡を考える上では重要なキポイントになろう。歴史地理学の視点からは、人間の集住形態を都市と村落に別け、都市と村落の違いは人口の多少、都市の非農村的な性格、特に商業や工業を基盤としていることで区別されている。こうした意味では、竪穴住居跡の濃密さや大規模な鍛冶工房跡群をもつ鳥羽遺跡はまさに都市的性格を備えた遺跡であるといえる。そして都市であるための社会的・歴史的条件には上野国府がその背景に存在することと、その成立・変遷に大きくかかわっていると考え、国府とともに展開した遺跡であり国府を中心として構成された古代の地方都市の一側面を示すことのできる遺跡であると考えている。しかしながら、上述したように現段階における国府に対する説明は律令制支配組織としての実態は言うに及ばず建造物・諸施設などの外観構造すら明確にしえないのが現実であり、国府の内実にはせまるための早急な説明への手段はみいだせていないと考える。国府の実態が不明な現状では当遺跡の位置付けは国府を通しての理解ではなく、むしろ国府説明へのアプローチの役割を負うと考えられる。

ここでは以上のような観点から、鳥羽遺跡出土の土器群からその段階的序列を試み、個々の遺構及び遺構群に対して時間的な位置を与え、遺跡の変遷を歴史的にたどることを今後の目ざすところとする。そして最終的な目的として当遺跡で得られた年代観と、鳥羽遺跡の変遷を以て上野国府の成立と展開を探ろうとするものである。なお段階序列に供した資料は主に竪穴住居跡からの出土資料とし、各段階に列する資料は個別選択を避け出来る限り同一遺構からのものを掲載することに努めた。これは、個別選択によって起こりうる恣意的操作を避けるためである。また、土器群の変遷には遺構の重複関係を考慮しつつ、土器の形態変化や成・調整の技法的な面をその基軸にした。

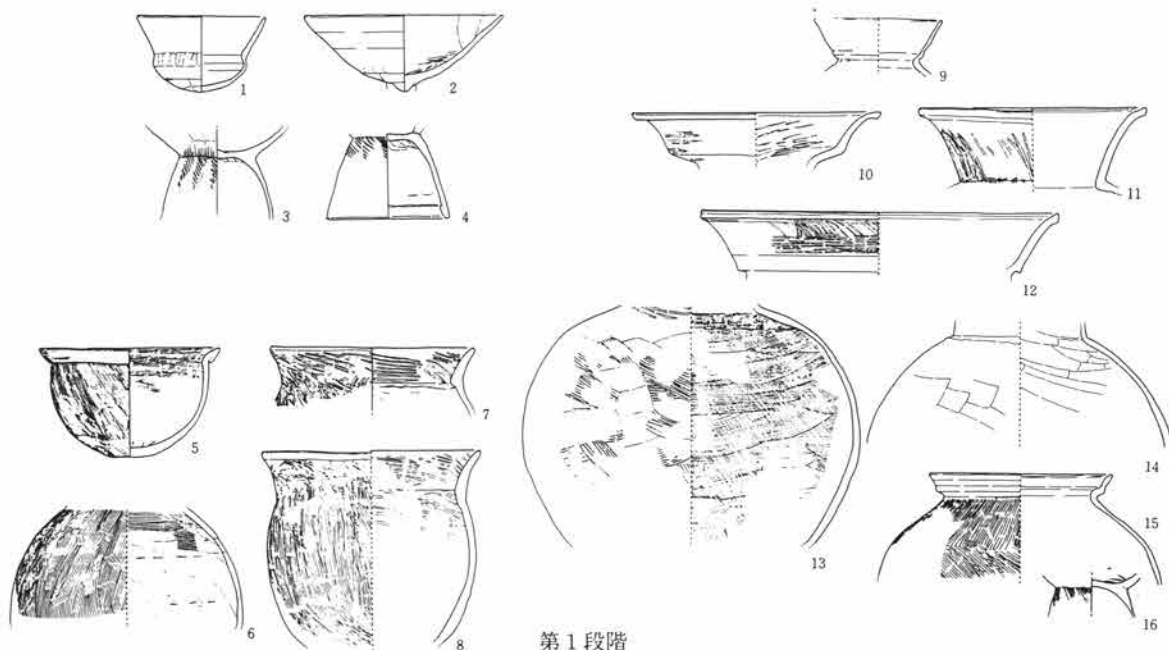
今回試みた段階設定はあくまで試案の域をこえるものではない。今後、より蓋然性の高い序列を目ざすとともにここでは上述の目的のためのあしがかりとしたい。

各段階の土器様相

第1段階

当段階は鳥羽遺跡の形成端緒ともいえる生成期に当たる。器種構成は埴・高杯・鉢・壺・甕などが見られる。埴型土器は体部は扁平で丸底を呈し、口縁部は器高の約2分の1を有しわずかに内湾して開く。体部から底部にかけて篋削りが施される。高杯は杯底部に明瞭な段ないしは屈折を持たず開く形態である。鉢は半円球の体部に小さな平底で、折り返し口縁である。壺は有段口縁と素口縁のものがあり両者とも篋磨きが施

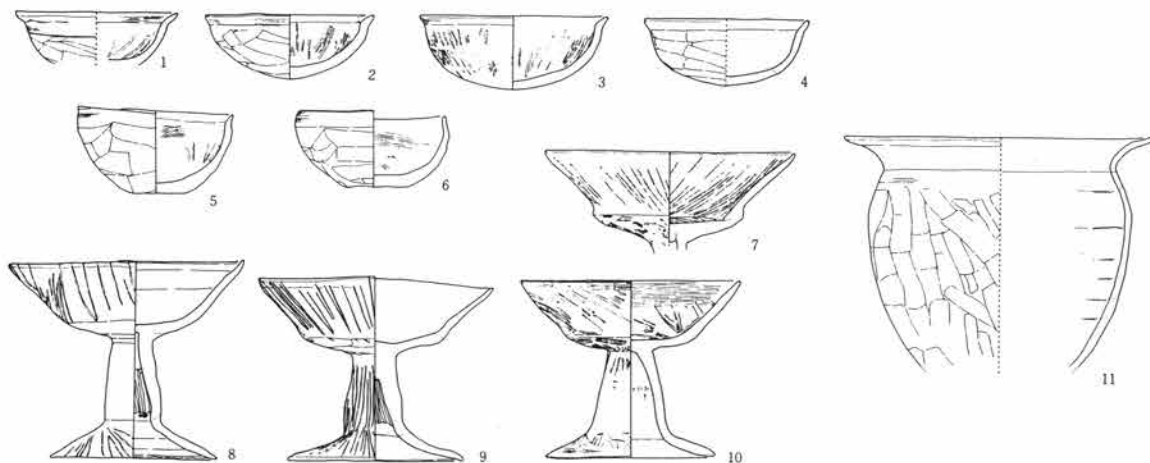
される。胴部は球形化が著しく篋削りがなされるが頸基部には篋磨きが施されるものもある。甕にはS字口縁台付き甕と素口縁の種類がある。前者は胴部にはけ調整されるが、肩部横線が消えまた口縁端部に鋭さが欠けることなどからやや後出的な様相が伺われる。後者は器肉が厚く口縁部から胴部にかけて篋磨きが施される。この期の特徴としては各住居跡の土器組成に若干の相異が存在しており、それが時間的な幅によるものか、あるいはその系統を異にしていることに起因するものか不明である。



第1段階

第2段階

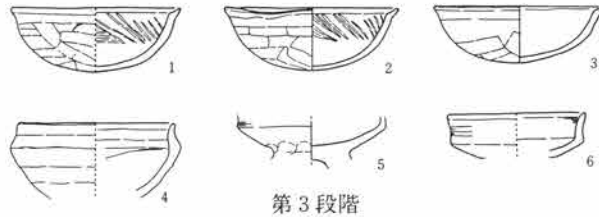
器種の組成などに1段階とはかなりの差があり、序列としては直接にはその系譜を追うことはできず数段階の空白が存在するであろう。杯型土器はいわゆる内斜口縁である。器肉が厚く口縁部は鈍重な感があり、当遺跡出土の内斜口縁としてはいまのところ初源的な形態を示していると考えたい。底部はやや尖りぎみで不安定である。器面調整には、①外面篋削り・内面斜行篋磨き。②内外面斜行篋磨き。③外面篋削り・内面横撫での3種類が存在する。椀は内斜口縁と口縁部が内屈する2形態が見られる。両者とも小さい平底を呈する。高杯は杯部下位に稜をもち大きく外傾し、脚部は僅かに膨らみをもち裾部は「ハ」の字状に開く。坏部・脚部の外面には斜行状の篋磨きが施され、高坏の系譜上では最盛期に近い時期のものと考えられる。



第2段階

第3段階

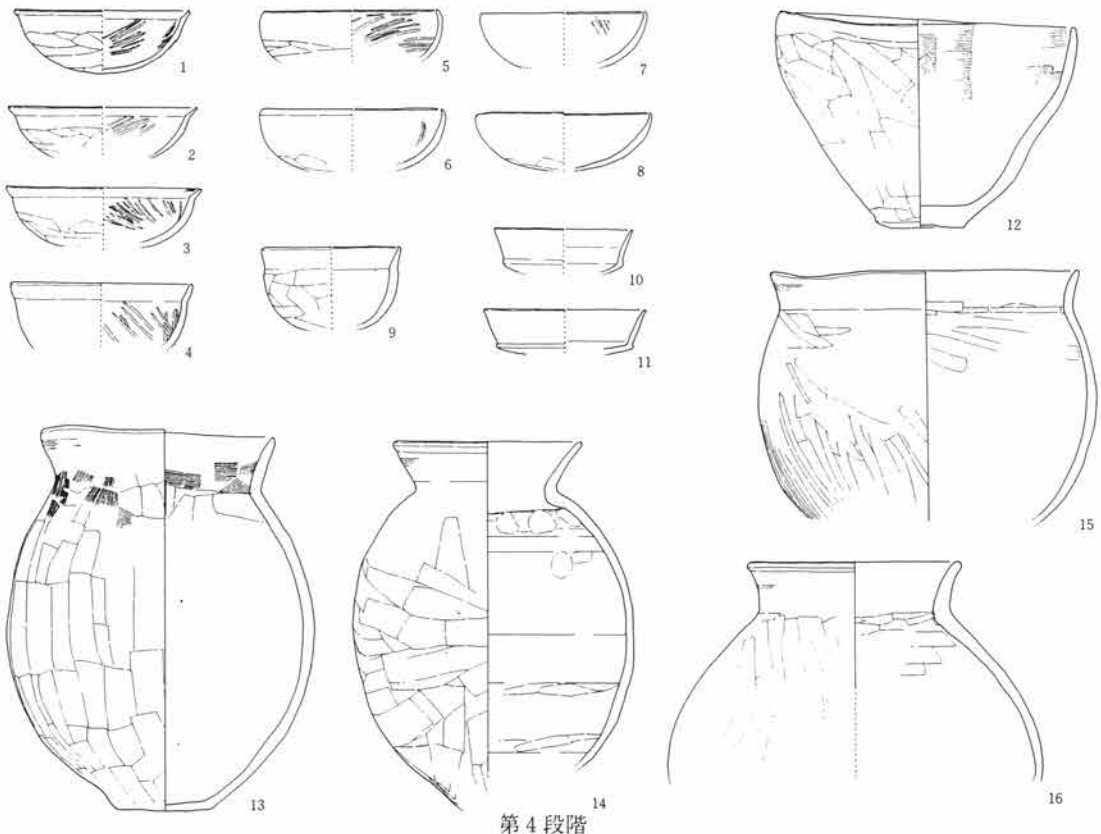
内斜口縁の杯を中心にするため段階設定には多少無理な点があるかもしれない。また新たな器種として須恵器模倣の土師器杯が登場するが資料が小片のため、いわゆる出現期の模倣杯の範疇に属するかは不明とせざるをえない。多少の変化を認めるならば内斜口縁部の杯は2段階のものとは比べて器肉が減じ口唇部に鋭さが見られ、底部の丸みが顕著になる。内面の篋磨きの有無によって2種類に分けられる。高杯は部分的なため詳細は明らかにしがたいが須恵器模倣の土師器杯型に短めの脚部が接合される形態になろう。



第3段階

第4段階

杯類には3期から引き続き内斜口縁・須恵器模倣杯のほか、口縁部が内湾する丸底杯が新たに加わり3形態が見られる。内斜口縁の杯は3期のものからするとさらに器肉の薄さが顕著になる。口唇部はますます先鋭化しており、これらの変化は内斜口縁杯の時間的流れに沿った形態変遷として捉えられよう。またこの種の中には、体部が深く半円球を呈し椀形態に近いものも存在する。模倣杯は緻密な胎土や薄い作り・底部の扁平さは後出的要素があり混入の可能性がある(10・11)。甕類は「く」の字状に外屈する口縁部をもつタイプ、これと同じく「く」の字口縁であるが肩部がすぼまりやや高い口縁をもち壺形態に近いもの、また胴部が球形に張るもの、広口で球形を呈する胴部などの形状から4形態がみられる。器面調整は僅かに刷毛目が残るものもあるが、篋削り技法が主流となっており、やや長胴化の傾向にある。

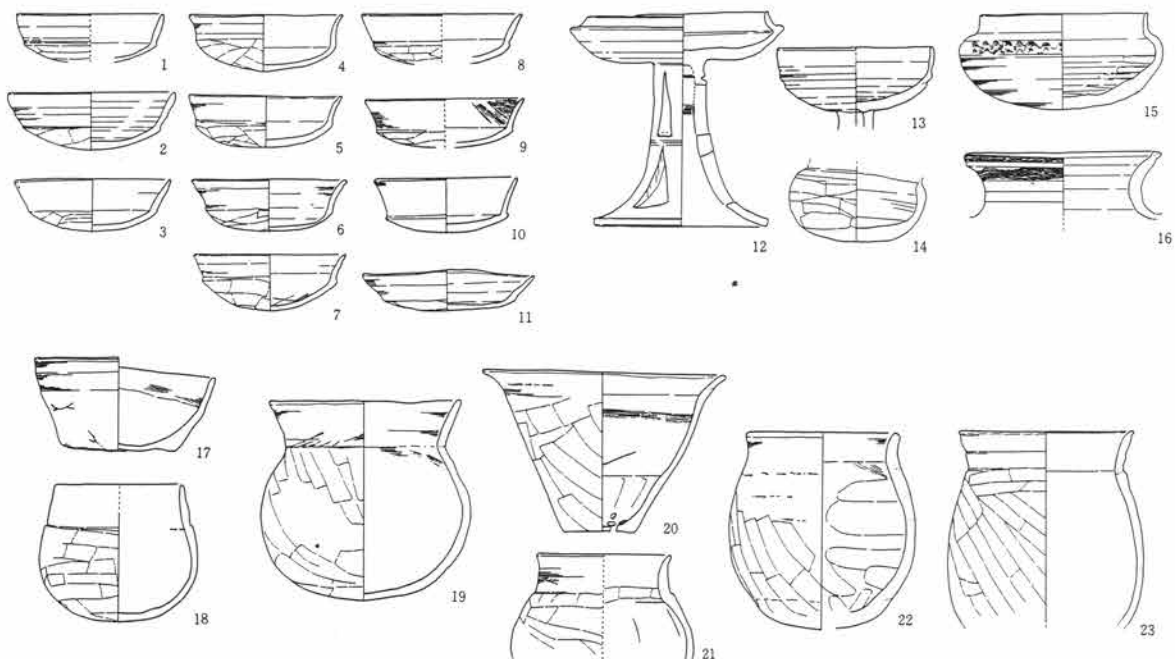


第4段階

第5段階

現在のところ当段階で初めて須恵器の出現をみる。土師器坏は内斜口縁のものが消え総て須恵器の模倣形態をとる。内斜口縁形態を中心とする4段階との間にはかなりの空白があると考えられる。模倣坏は口縁部が外反する形が基調となっており、体部の丸みが強く深いタイプ(4~7)・扁平でやや浅いタイプ(1~3・8~10)・底部からそのまま段をなして口縁部に至り体部を形成しないものなどのタイプがある(11)。土師器にはこのほか、平底の椀型(17)・丸底で口縁部が内傾する鉢型(18)・口縁部が「く」の字状に開く壺型・多孔甕・胴部下膨れの小形甕などが見られる。この小形甕の形態は、一般的に言われるところの甕胴部の膨らみが消える長胴化への形態変遷に沿ったものと捉えられようか(23)。

須恵器は高坏・短頸壺・甕などがある。高坏は有蓋と無蓋の2器種で有蓋高坏は長脚で三角形二段透かしが三方に付く。脚部中位、上下透かしを分ける二条の沈線は形骸化している。また坏底部は回転篋削りが施され、裾部には掻き目痕が観察される。2段3窓の透かしをもつ高坏のなかで、三角形の透かしは長脚2段の高坏の中でも比較的古い様相をもつものと考えられるが、当該資料のように上下2段とも三角形透かしは現在のところ他に類例を見いだすことが出来ず、在地色の強い須恵器形態と考えられる。無蓋高坏は脚部が欠損しているため詳細は不明であるが、坏部には弱い凸線状の段をもち直立ぎみに立ち上がる。底部は回転篋削りがなされる。短頸壺は大小の2種類があり、大形のものは口縁部が直立し肩部には櫛書き波状文が描かれる。小形品は体部が篋削り調整が顕著である。甕は小形品と考えられ、口唇部及び口縁部に櫛描き波状文が施される。

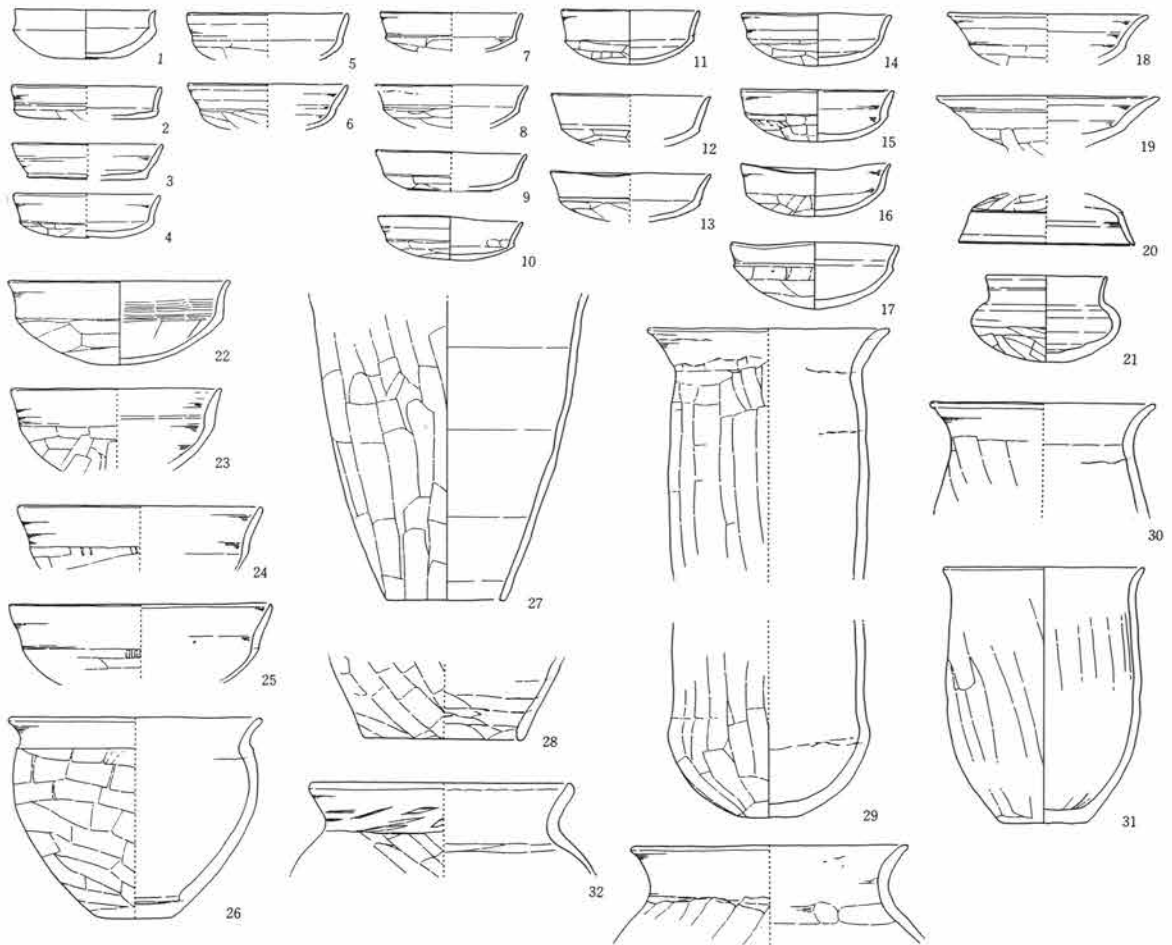


第5段階

第6段階

土師器坏は5段階と同様なタイプ構成であるが、口縁部の薄作り傾向が見られる。また数量的には少なく、当遺跡では一般的な形態とは言えないが口縁部の立ち上がりが低く内傾ぎみのものもある(1)。初現期は確定しえないが模倣坏と類似する形態をもち、口径18~20cmの大形で鉢型の土器が加わる(22~25)。この形態は以後土師器の器種構成の一つとしてかなり後段階まで命脈を保つ。高坏は盛期の2段階にみられるものと比較して坏部は明瞭な変換部をもたず大きく外反して偏平になり、篋による磨き調整は見られない(18・19)。鳥羽遺跡ではこの段階を最後に土師器の高坏は姿を消すようである。甕は既に長胴になりきったタイプが出現するが、5段階にみられた下膨れのものも残存しており、長胴甕の下半部もすぼまりをなさず丸く張りをもち前代の傾向が受け継がれているようである(29)。胴部は口縁の直下から縦方向の篋削りが顕著である。また胴部が球形に張る甕は当段階で定形化すると考えられる(32・33)。甗は長胴化した単孔のものである。

須恵器は坏蓋・小形短頸壺がある。坏蓋は口縁部が大きく外反して立ち上がり、天井部は手持ちによる篋削り調整が施される(20)。口縁部の外反形態をもつ例は、県内窯跡の太田市菅ノ沢窯跡の資料中に特徴的に見られるが、調整技法の点では回転篋削りと手持ち篋削りの相異がある。口縁部と天井部の変換部に見られる沈線は痕跡程度の弱いものでこの坏蓋形態のものとしてはやや後出的であろうか。短頸壺は扁平な体部から口縁部が外反ぎみに立ち上がり、体部下半から底部にかけて手持ちの篋削りがなされる。



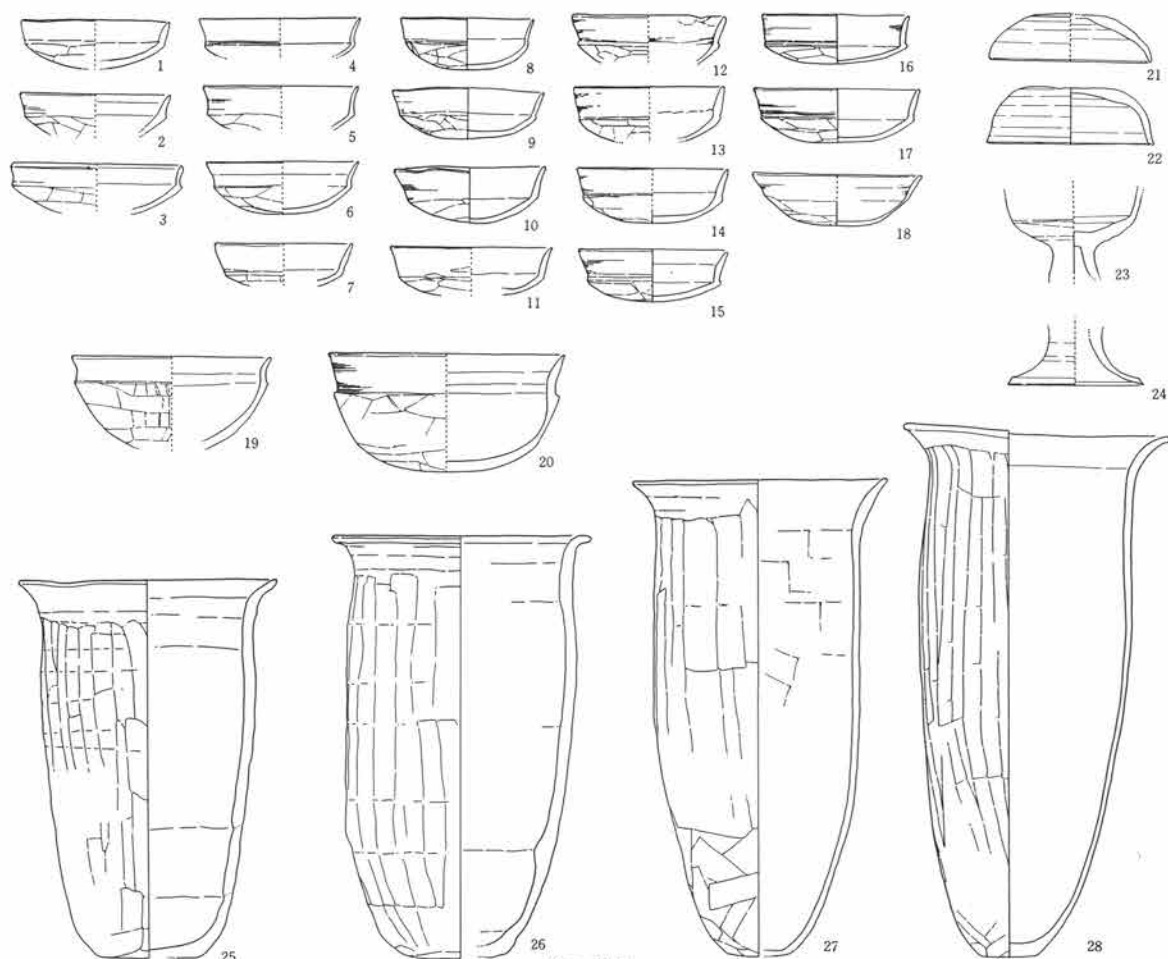
第6段階

33

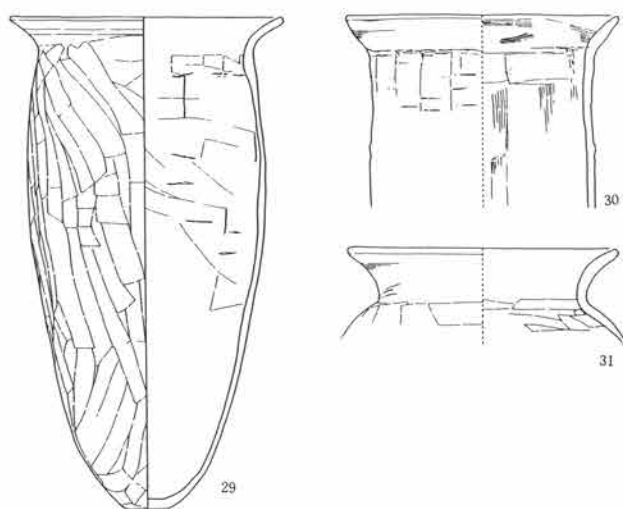
第7段階

前段に引き続き土師器坏は須恵器模倣形態が大勢を占めるが、当段階を境に以後急速な衰退傾向に向かう。この模倣坏の口縁形態に僅かながら変化するものが認められ、外反するものの鋭く矮小化したタイプがみられる(1~3)。次段階以降に見られる口縁部が短く内屈ないしは直立する坏形態の予眺と考えられる。また、底部と口縁部の変換部が鋭さをなくしだれたものが増える。模倣坏と同形態をなす鉢型は法量の大小に若干の差が見られるが、口縁形態は新タイプの坏に類似している。甕類は長胴化が完全に定着し、最も顕著な長胴甕とともに次段階への変遷を示しているタイプも存在する。口縁部は緩やかな弧状なして外し、反砲弾型の胴部で肩にほとんどくびれをもたずに小径の平底をなすもの(27・28)や肩部にくびれがなく底部に至るまで胴径を保ち寸胴で大きな平底をなすものなどがある(25・26)。いずれも削り手の長い縦方向の篋削り調整である。また、胴部上位に僅かながら膨らみをもつタイプも見られ、口縁部は「く」の字に近く強く外反して開く(29)。このタイプは胴部の調整に縦および斜方向の篋削りがなされるが、削り手は短い手法をとり、形態・調整技法とも変化の兆しが看取できる。この胴部に施される篋の削り手の短いものは器肉を薄く仕上げるための新技法として捉えられ、この段階以後甕類の調整技法として定着していく。

須恵器は坏蓋・無蓋高坏がある。坏蓋は2タイプあり、天井部が平坦をなしやや浅い体部のものと、同じく天井部は平坦になるが肩が丸く張り深目の体部で口唇部にわずかに内傾する段をもっている。6段階の坏蓋とは形態が異なり、天井部と口縁部の境にあった稜あるいは沈線が消えて法量的にはやや小形化の傾向がある。天井部はともに回転の篋削り調整が施される。(21・22)



第7段階

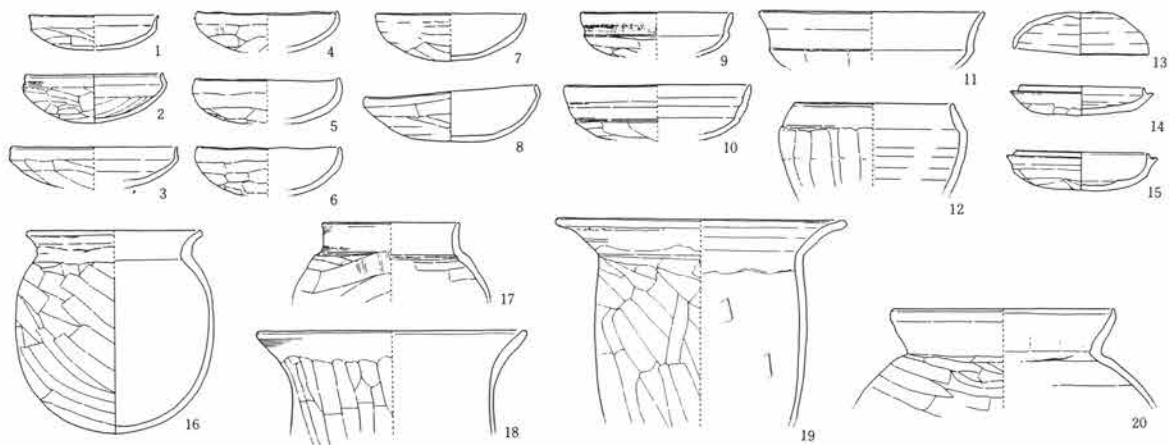


第7段階

第8段階

土師器は前段階まで主流を占めていた典型的な須恵器模倣型が減少し、模倣坯の退化形態と考えられるタイプがこれに変わり（1～3）、さらに体部と口縁部とに変化のない新形態の坯が加わる（4～8）。模倣坯の退化形態と考えられる坯は7段階に見られた口縁部の矮小化がさらに進み、口縁形態は外反・直立・内傾などがある。新形態の坯は丸みのある体部からそのまま内湾して口縁部に至る。口縁部と体部の区別は不明瞭であるが、体部上位の弱い横方向の篲削りと口縁部の横撫でが目安となる。また、この型の坯は総じて器肉が厚い傾向にある。甕は前段階に引き続き長胴化が著しく、口縁部が大きく外反して開くが胴部外面の篲削りは斜めから縦方向の削り手の短いものとなっている。

須恵器は蓋坯で蓋、坯身である。蓋は天井部に丸みをもち形態的には前段と類似するが、法量は小さくとくに口径は10cm前後となる。技法は天井部の回転篲削り調整が簡略され回転篲切り未調整となる。坯身は蓋と同様に小形化が著しく、法量は蓋とほぼ一致する。口縁部の立ち上がりは低く形骸化しており器高が低く扁平である。底部の調整は手持ち篲削りが施されるが、この手法は第6段階の須恵器蓋にもみられ県内でも地域的な特色となっている。古墳時代を通しての形態をもつこの種の坯・蓋はこの段階をもって姿を消すようである。

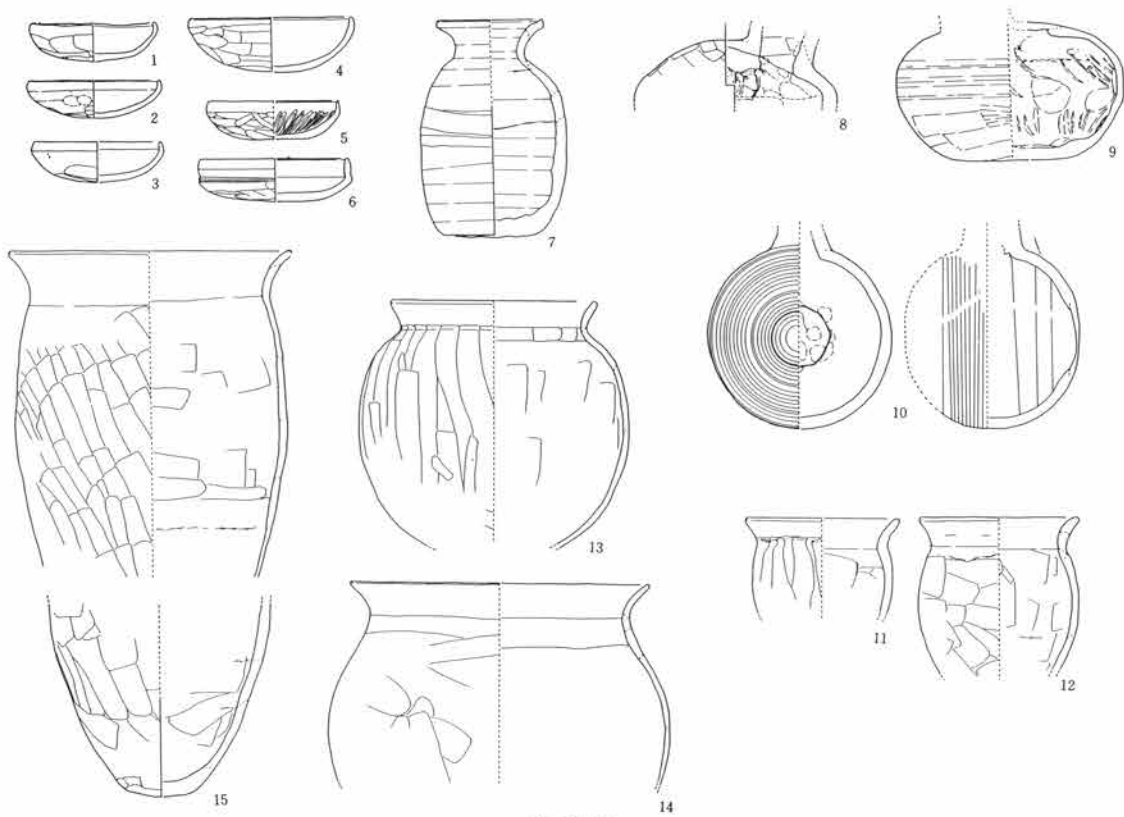


第8段階

第9段階

土師器坏は口縁部に顕著な屈曲をもつものは消え、前段階に出現した体部から丸みをもって内湾して口縁部に至るタイプ（1～3）が主流となり以後この種の形態が土師器坏の基本的なものとなる。また前段階の厚みのあるタイプとは系統を異にすると考えられる。この段階では口径10cm前後の小形品が多い。甕は長胴の傾向は顕著であるが、胴部上半部に膨らみを持ち胴径が全体に大きくなり、短胴化の兆しが見られる。このほか甕類には胴部に最大径があり球形に丸く張る法量の異なるものもある。

須恵器は瓶類がみられ、フラスコ型・平瓶などである。平瓶は体部全体に丸みを持ち体部下半には篋削りが施される。体部上面には把手またはボタン状の貼付などはない。



第9段階

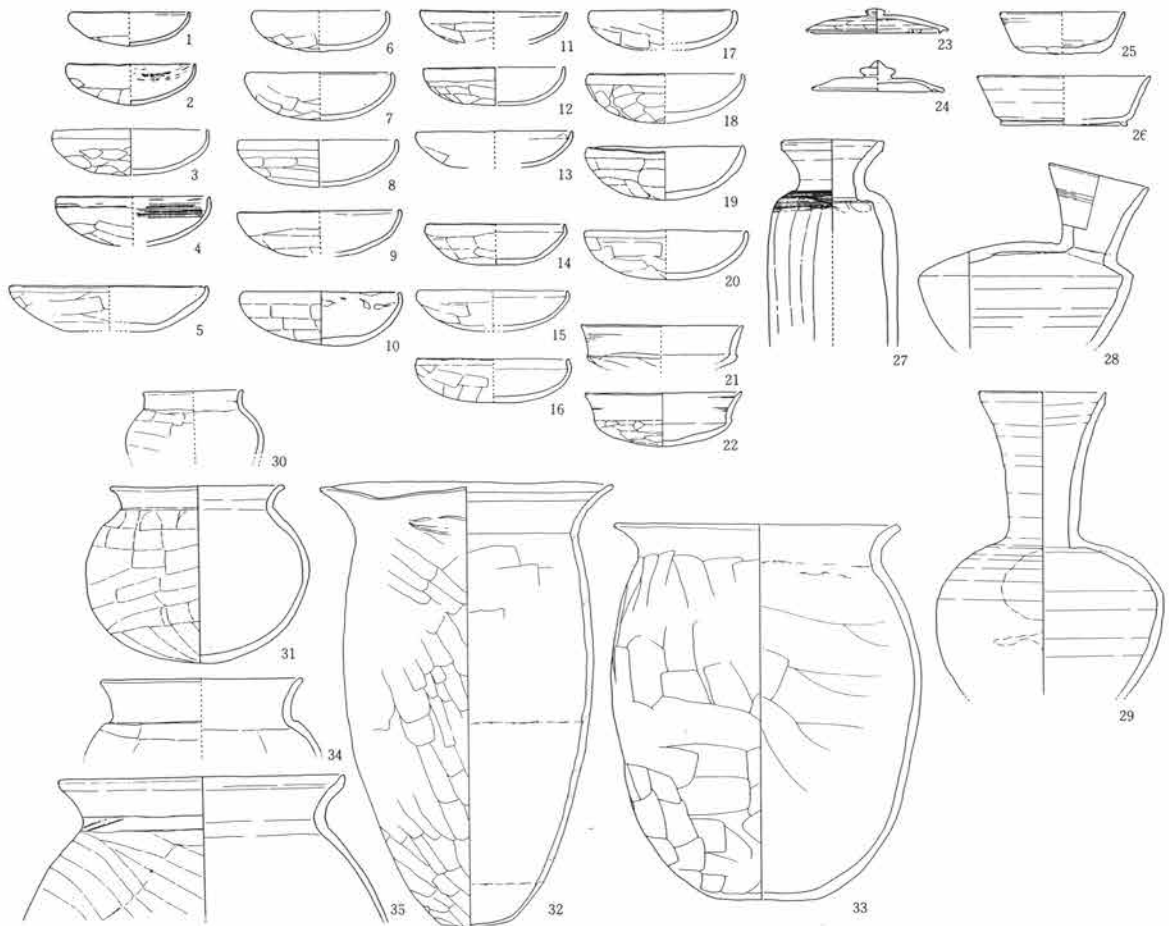
第10段階

土師器坏は前段階と同様な口縁部が内湾する形態とともに、細部では直立するものもあり、大・中・小の法量分化が見られる。しかし、器肉の厚いタイプにはこの法量分化の様相はまだまだ顕著には現れていない。甕は胴部全体の膨らみが増し、それとともに短胴化の傾向がますます進行している。胴部外面の篋削りは斜めから縦方向でその削り手は短い。甕類にはこのほか最大径が胴部にあり底部が大きくすばまらない形態のものや胴部が球形になる大・中・小のものがある。

須恵器は坏蓋の蓋・坏身、椀、平瓶、瓶、長頸瓶などがみられる。この段階では古墳時代の器種構成がすでに払拭されている。前段階では蓋坏などの資料を示すことが出来なかったが、ここで見る限り須恵器の器種変化は前段階で達成されているものと考えられ、そのことは9段階の土師器坏類の形態が後世へ続くものとしてとらえられることにも示されている。蓋坏は古墳時代末期以来の小形化が続いているが、蓋には内面

第5章 成果と課題

に“かえり”が付き、呈示する序列ではいわゆる蓋坏形態の逆転したものである。また蓋の天井部には宝珠形あるいは乳頭状に近い“つまみ”が貼付されるが、器形をはじめ“かえり”・“つまみ”の形状から蓋・坏の逆転現象直後のものとは考えられずそれより1～2段階程度後出する時期のものであろう(23・24)。坏もまた口径10cmと小形であるが、平底で体部が直線的に立ち上がり坏身として確立した形態を持つものである(25)。成形は巻き上げ・水引きで厚い底部は手持ちの篋削りが施される。またこの段階には坏に高台の付く器種が出現する(26)。底径が大きく、断面矩形のハの字状に開く低い高台が付く。底部は回転の篋削り調整が施され、体部は直線的に立ち上がる。平瓶は前段階に見られる体部の丸みが消え、上半部に強いくの字状の屈曲をなして角をもつ形態に変化する。比較的小形で細身の長胴をなす瓶は肩部に掻き目調整を施し、胴部外面は縦方向の削り手の長い篋調整がなされる(27)。全県的な範囲では現在のところ顕著な存在ではないが、当遺跡周辺では幾つかの類例が知られ所属時期についても当段階を前後する頃に集中する傾向がある。



第10段階

第11段階

土師器坏は口縁部が直立、内湾するものがあり前段階から形態的には継続するものであるが、口径10cm程度の小形品は少なく、器高がやや浅くなり大形化の傾向にある。また大・中・小の法量分化は存在している。8段階以来続いている厚手の坏は当段階に至り12～16.5cmの間で法量に変化が生じているが、前述の坏類のように器高に変化はなく深く丸みのある底部である(20～24)。古墳時代からの模倣坏はこの段階まで少数ながら存続しているがこれ以後姿を消すようである。土師器坏には新たな器種が加わる。一つは器肉が厚く平底ぎみの底部から深い体部が直線的に立ち上がり、内面に螺旋あるいは放射状または両者の組み合わせた暗文篋磨きを施す一群である(25)。緻密な胎土や器形・調整から従来の坏類にはみられない要素が多く、畿内の律令的土師器の影響が伺われる種類である。県内に於いては一般的な集落遺跡からの出土はその絶対量が少なく、官衙跡ないしはそれに準じた遺跡において多く検出されているようである。今一つは口縁部が大きく外反する須恵器模倣坏形態に類似した口径17cm前後の大形品である。甕類は長胴形と球胴形があり、長胴甕は胴部の膨らみが前段階より上半部に持つようになる。

須恵器は蓋・坏・盤型坏・高台付きの椀・瓶・甕などがある。当遺跡においては器種内容が最も充実した構成を示し、前段階と比較しても須恵器の絶対量は飛躍的な増加現象にあり、県内における須恵器生産体制の再編制が行われた段階と想定できる。その背景には須恵器に対する社会的な需要とその対象が変化、急増したことが考えられるが、土師器対須恵器の相対的な割合は土師器を凌駕するまでには至っていない。蓋は口径11～20cmの大・中・小の大きさがあり内面には明瞭な“かえり”が付く。“つまみ”は中央部がくぼむいわゆる“環状つまみ”で県内では極めて一般的な形状であり、群馬県における須恵器蓋の一大特徴でもある。初現は今すこしさかのぼると考えられるが当段階が盛期と考えられる。坏は底径が大きく体部はやや外反するタイプもあり、口径11～13cmで前段に比べやや大形の傾向が窺われる。底部は厚く、調整は回転篋切り後手持ちの篋削りを基調にし、回転の篋削りもわずかながら存在している。盤型坏は口径15～19cmで底部調整は回転の篋切り後手持ち篋削りか回転篋削りが施され、底部に厚みが目立ち、丸底ぎみのものが多い(48～54)。高台付き坏は当段階で盛行する。器高が低く体部は直線的に立ち上がるものが多いが、大きく外傾するタイプも見られる。高台の形状には付け高台(57・58)と削り出し高台(55・56・59～63)の2種類が併存しているが、削り出し高台のものは客体的な存在ではなく量的には付け高台のものと2分するといってもよく県内に多く特徴的なタイプであるが次段階からは急速に減少する。このほか、口径19cm前後の体部の深いいわゆる椀型の出現が考えられる(64・65)。瓶は前段階と同形であるが外面・内面の調整は粗い篋削り・指撫でが施される(66)。甕は中形程度の大きさで、口唇部あるいは口唇部下端の整形が端正で鋭く尖る。外面腰部には格子文・平行文の叩き痕がわずかに残るが、内面の当目痕はきれいに撫で消されている。

第12段階

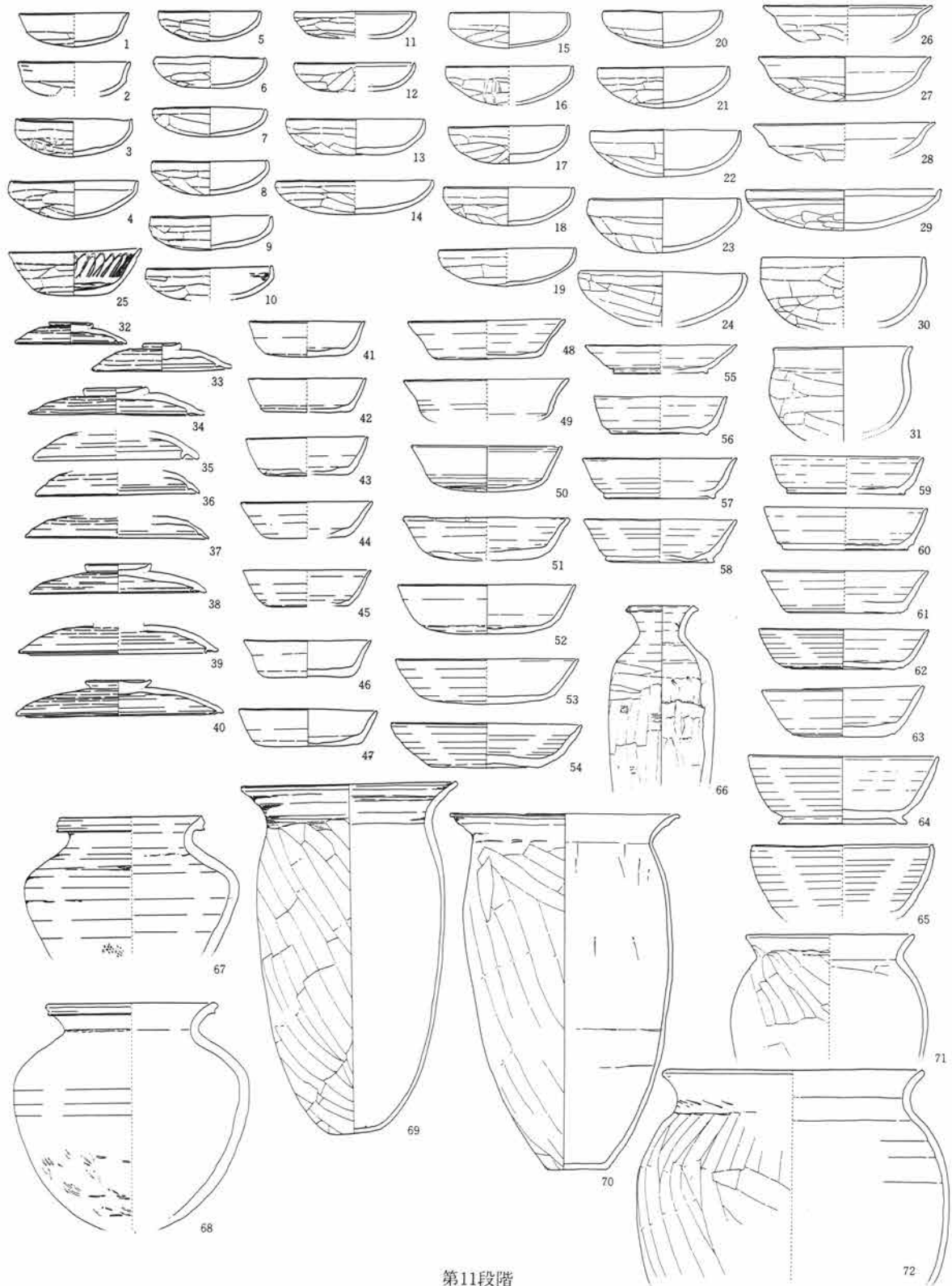
当段階の竪穴住居跡を中心に資料の抽出を試みたがそこからの出土遺物量は極めて少なく特筆すべき現象と言える。多量の遺物群が投棄と思われる状態で検出されたH1号掘立柱建物跡との関係が注目され、集落の在り方に何等かの変動が起こったとも考えられる。器種の基本的な組み合わせは前段階に対して急激な変化は認められないが、土師器と須恵器の割合はほぼ拮抗する段階とすることができる。

土師器坏はおおよそ2タイプがあり、比較的薄手で口縁部が内湾ぎみに直立するもので、大・小の別があり底部の丸みが弱くなり扁平な形状を呈する(1～3・7～9)。他は口唇部下方で厚く膨らみ先端部が尖るものである(4～6)。また口縁部が外反する大型の坏は前段階に比べ口縁部の外反の度が弱い(10～12)。

第5章 成果と課題

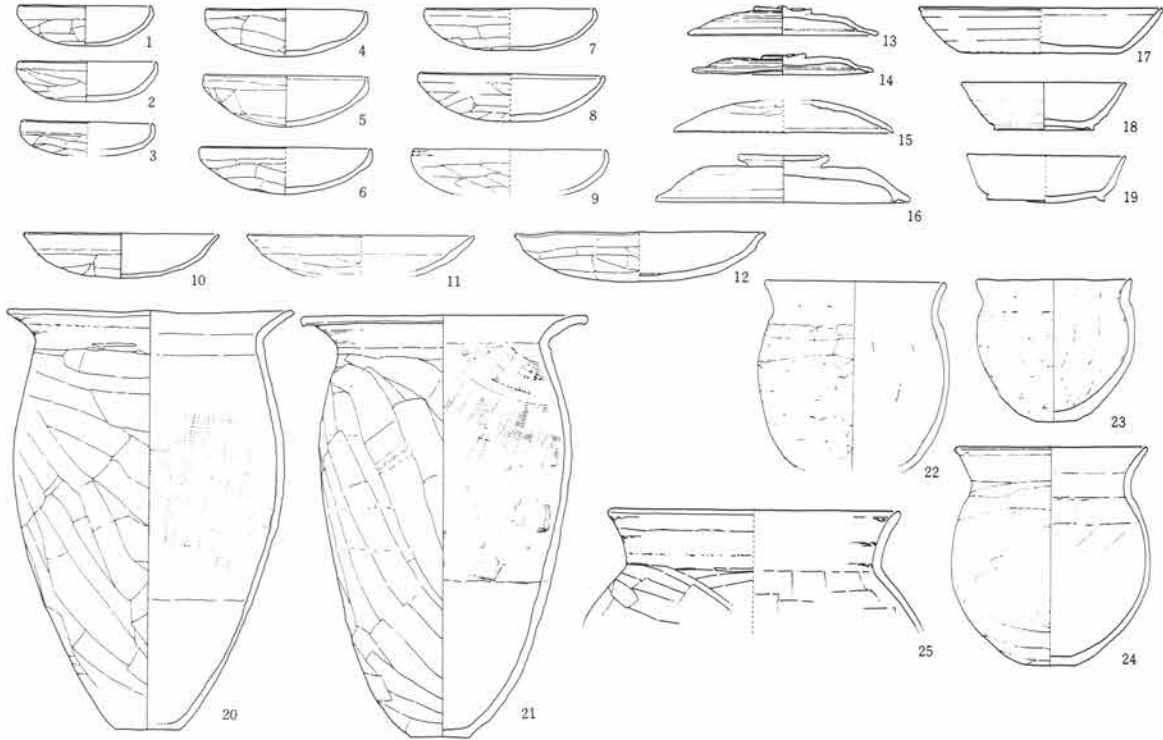
甕は短胴化が始まり胴部全体の膨らみから、とくに上半部に張りを持つようになる。その他胴部が丸くはる小形、最大径を胴部にもつ球胴の大形甕などがある。

須恵器蓋は前段階に引き続き内面に“かえり”のあるものが主体をなすが“かえり”そのものは鋭さを失い形骸化の様子が窺われ、“かえり”の消失したのもこのころから出現すると考えられる。坏類は口径13cm



第11段階

前後のものが多く、底部の調整は手持ち篋削り技法のものが少なく回転篋切り後回転篋削りが基調となる。高台付き坏は前段階に比べ減少しておりこれにかわり椀型が大勢を占め、以後主流的存在となるようである。また高台はほとんど付け高台である。



第12段階

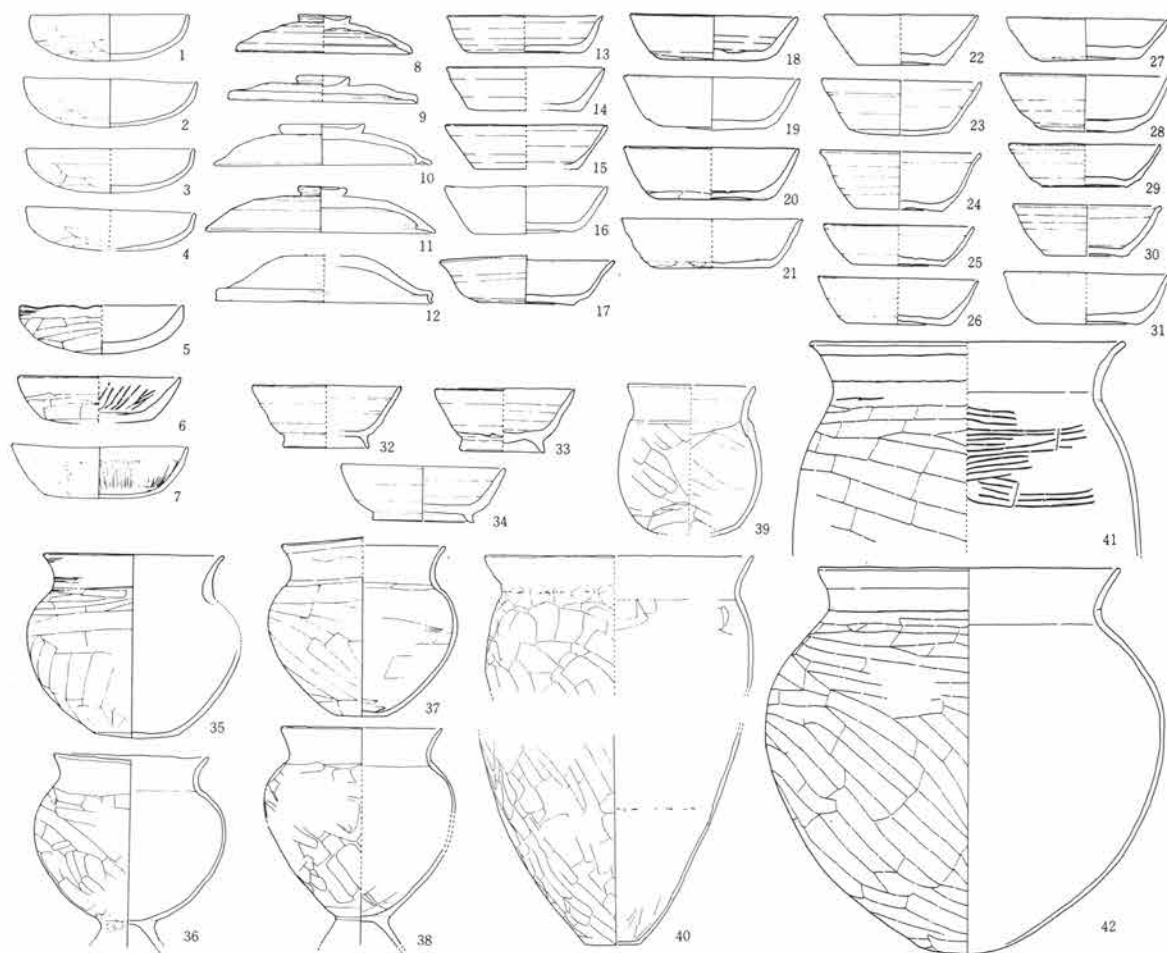
第13段階

土師器坏は口縁部が内湾ぎみに直立していた形状が若干変化して外傾してくる。また内面に暗文を施す平底タイプの坏は螺旋暗文と放射状暗文の組み合わせだったものが減少し、体部に放射状暗文が単独でなされることが多くなる。甕は短胴化が一段と進み、胴部の張りは前段階よりさらに上位に移動して肩を形成するような形状になり、口縁部の外反は弱まり胴部の最大径が口縁部と同じかやや大きくなっている。また器肉が顕著な薄手になるのが特徴である。球胴形を呈する大形の甕はこの段階をもってほぼ姿を消すと考えられ、胴部の膨らみは強いがやや長いものに変化していくようである。小形甕は胴部の丸みが強くより球形に近くなる。この球胴の小形甕に脚の付く、台付き甕（36・37）がみられこの段階が出現期と考えられる。土師器特に坏類は減少傾向にあり、須恵器との相対的な量はこの段階で従的存在になる。

須恵器蓋は“かえり”の付く形態が残る最終段階と考えられ、以後“かえり”のないものに替わる。坏は底径の大きな平底から体部は直線的に立ち上がり、口径13～14cmの器高の低いタイプが基本で、このほか体部の深いものが加わる。底部の切り離しや調整技法については、回転糸切り技法の初現期であり最もバラエティのある段階で、諸技法の混在する状態が当段階の特徴でもある。切り離しについては回転篋切りが主体であり、回転糸切りは僅かである。調整方法の割合は、回転篋切り後回転篋削り・回転篋切り無調整が多く、回転糸切り後周辺回転篋削り・回転糸切り無調整が少ない。この割合は段階的に変化・逆転する傾向にあるが、篋を用いる技法は糸きり出現後もかなりの間その命脈を保ち、群馬県における須恵器製作の伝統的技法として捉えられよう。また篋と糸の長い共存関係は須恵器製作集団の多元的存在が想定され、製作新技術の導入や伝統の維持にそれぞれに特有の対処が行われていたことを示しているのではないだろうか。さら

第5章 成果と課題

に糸切り技法によるものは再調整が施される例は極めて希であり、回転糸切り技法を導入した製作集団ではかなり急激な技術革新をやりとげ、さらにスムーズに技法の習得がなされると考えられる。椀は大・小の器種が存在していたと思われるが大形のは資料呈示できなかつた。小形品は口径12~13cmで体部のやや深いものと浅いものがある。技法的には回転篋切りと回転糸切りの両者が見られる。



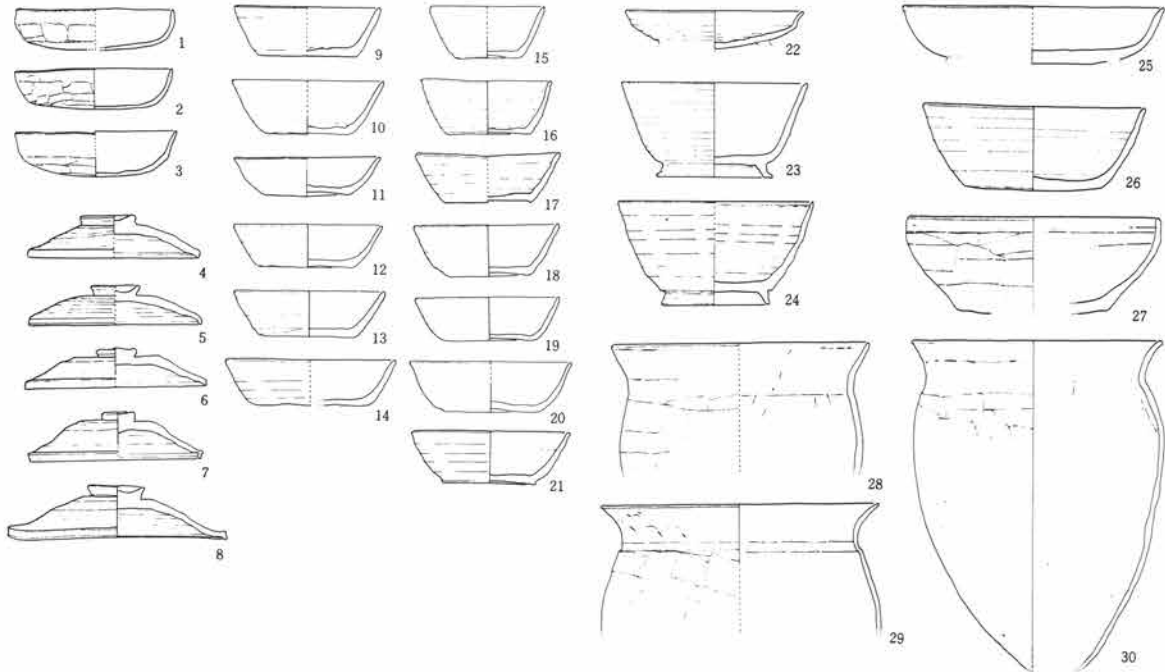
第13段階

第14段階

土師器坏は底部を意識させるように体部下半に緩い屈折を形成し体部は丸みをもつものの僅かに外傾する。器肉は薄くなる傾向にある。鉢は丸底から平底へと変化している。甕は形態的には前段とそれほどの変化は見られないがやや小形化の傾向にある。前段階まで見られた球胴形の大形甕は消え胴部に膨らみあるもの(29)が一般化してくる。

須恵器蓋は口縁端部の形状にバラエティが見られるが、前段階まで残存していた内面に“かえり”蓋は完全に払拭されている。“つまみ”は扁平な擬宝珠形もあるが大半は環状である。坏類は体部の深い小形品が加わり、分量・形態などにはかなりバラエティがあり須恵器生産あるいは須恵器そのものに対するある種の規制が緩められたものと考えられる。全体としては口径12cm前後のやや小形化の傾向にある。底部の切り離し技法は回転篋切りと回転糸切りの両者が存在するがこの現象は同一の遺構で混在している。また切り離し後

の再調整は施されなくなっている。椀は深く直線的に立ち上がる体部をなし、高台は底部のやや内側にあり腰の張った形状をなす。このほか盤に高台をもつもの(25)、口縁部が強く屈して外反する高台付きの皿などの器種も見られる。



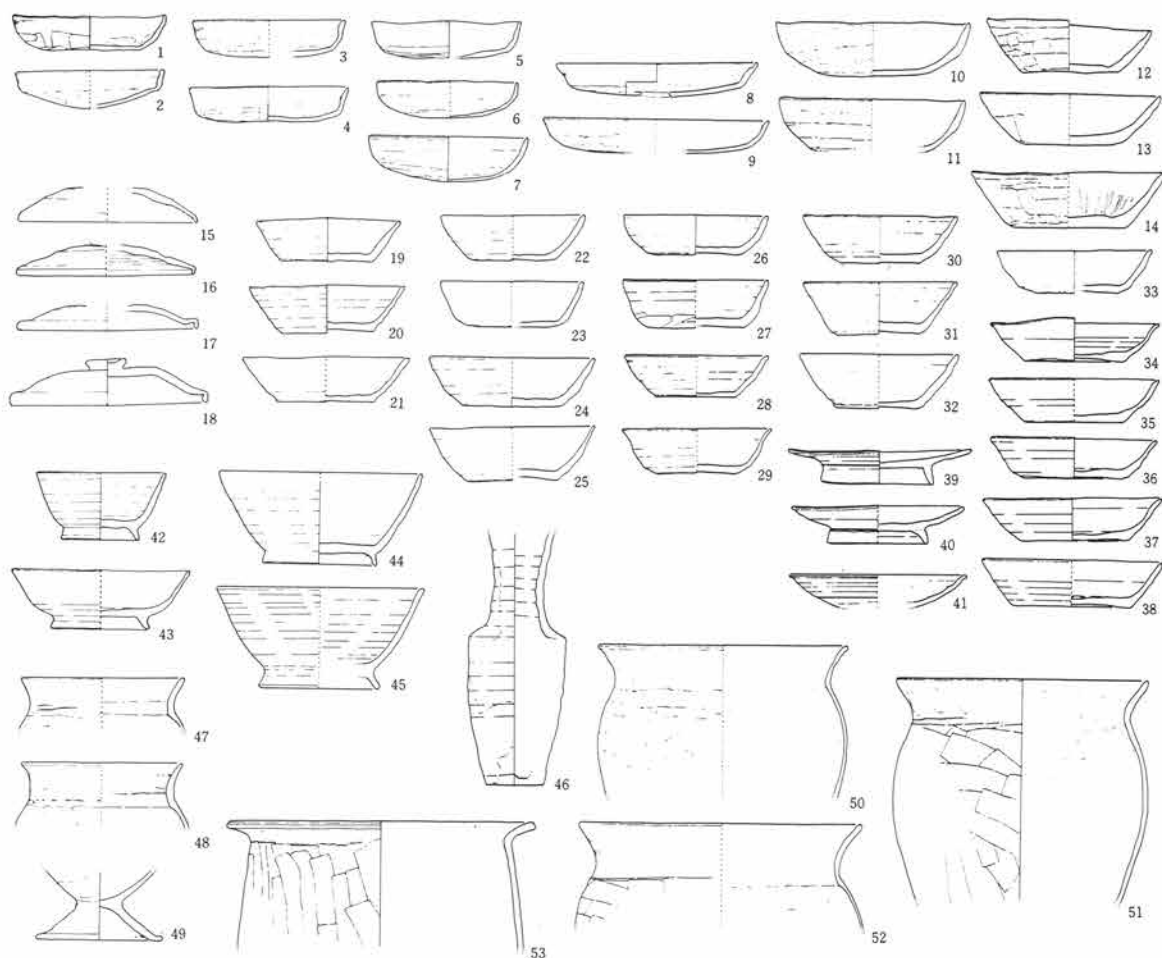
第14段階

第15段階

土師器坏は体部の丸みが消え直線的になり、完全な平底化しており底部と体部の区別が明確になる。口唇部に変化が生じ、小さく外反する。内外面に指頭による成型痕を残すもの(3)も見られるようになる。口縁部が外反して開く大形の坏も(8・9)平底化が著しく、口唇部の形状など坏と同じように変化している。その他土師器坏類には器肉が厚く特に口縁部の肥厚したもの、平底で体部が直線的に開き放射状の篋磨きを施すタイプを含むものなどがある。甕類には前段階とほとんど変化が認められないが口縁部の外反の度合いが弱くなっている。

須恵器坏は法量的には前段階とそれほど差はなく推移しており、底部の切り離しは回転の篋切りと糸切りの混在状況がつづくものの数量的には逆転している。また、当段階より回転糸切り無調整のものだけを出土する住居が現れる(34~38)。口径14cm前後・底径7~8cm、器高が3~3.5cmと低く扁平な形状を呈する。また口縁部は緩く外反して開く。椀には大小の器種があり大形のは前段に比べ高台が底部の外縁に巡り、高台から直接体部が延びる。皿は14段階の口縁部が屈折するタイプとは異なった形態が出現する。ほとんど体部をなさず水平ぎみに開くものと、わずかに深みのあるものがあり、いずれも高い堅牢な高台が付く。当遺跡ではこの段階より灰釉陶器の伴出が見られる。

第5章 成果と課題

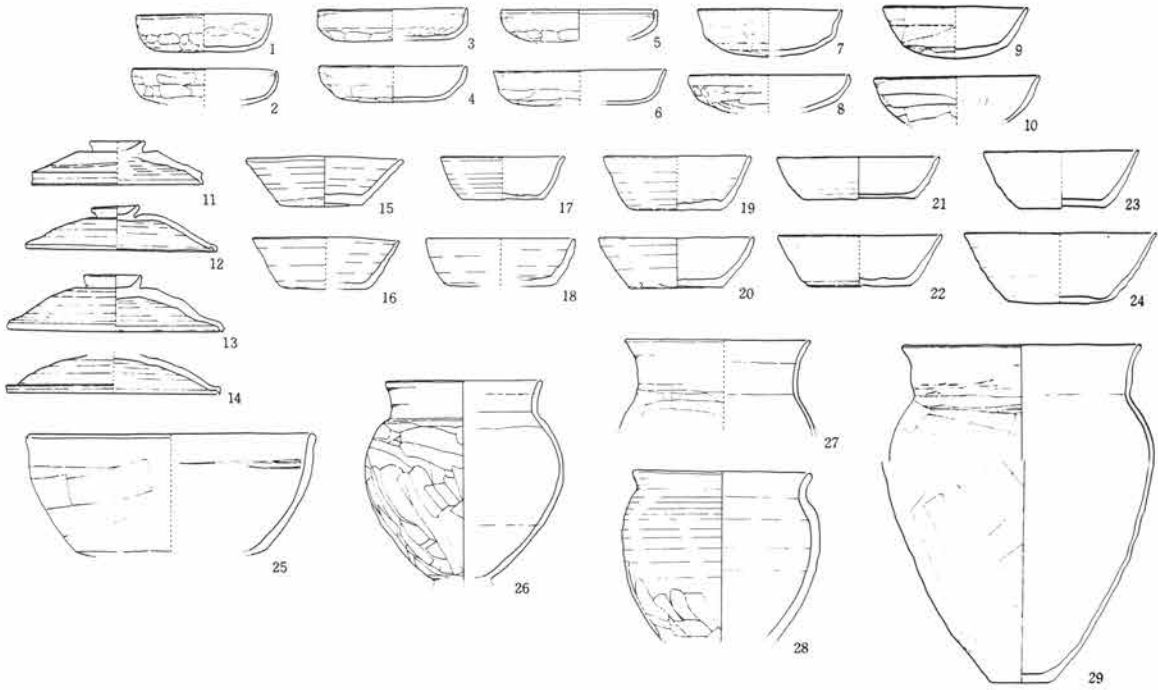


第15段階

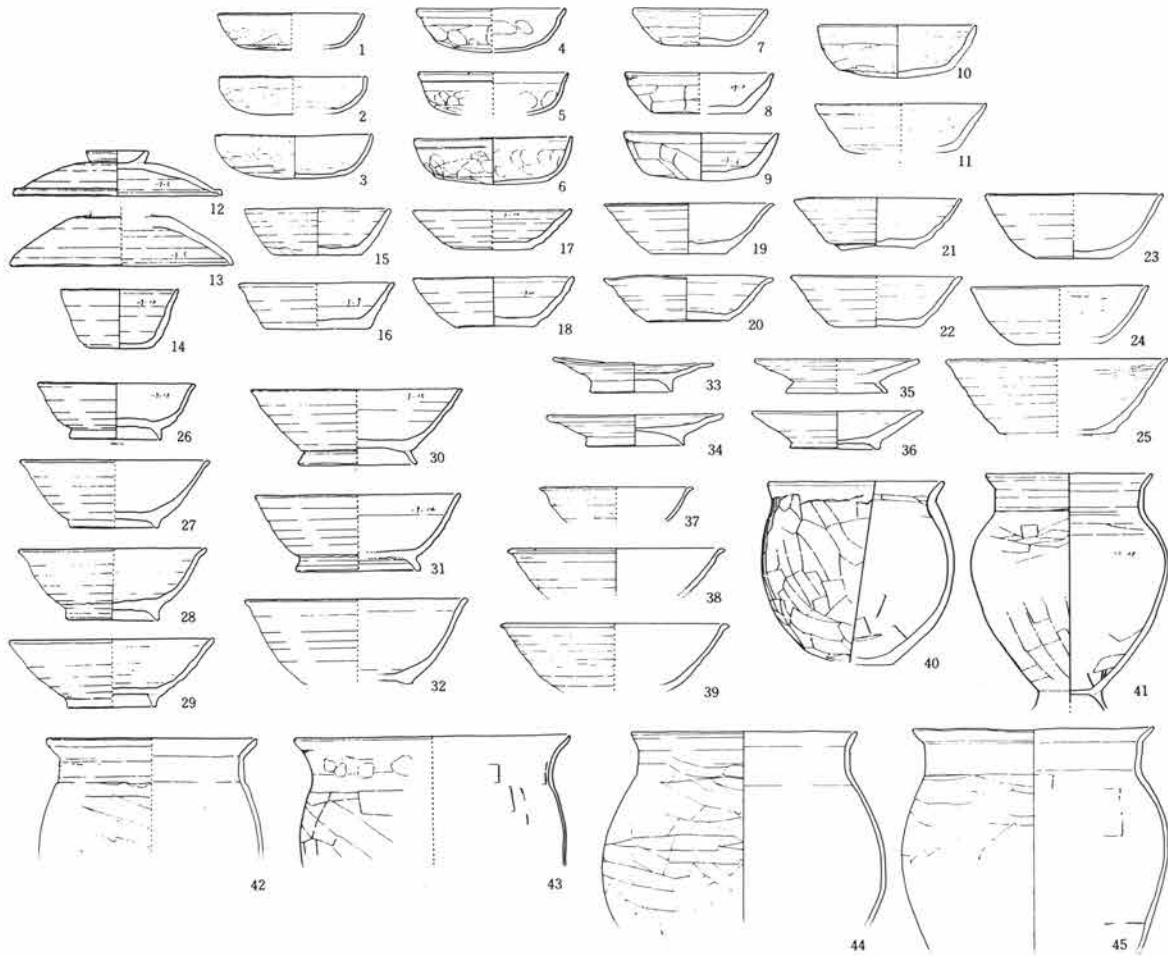
第16段階

土師器坏は平底・偏平で内外面に指頭痕を残すものが多くなる。また体部が深く腰部に丸みをもち口縁部が薄く外方へつまみ出されるものもある。甕は口縁部が高くなり直立気味に立ち上がり先端部は僅かに外傾する。次段階以降顕在化するいわゆる「コ」の字口縁甕の端緒的形態になると考えられる。この甕の口縁部の変化は台付きの小形甕にもみられ直立気味の口縁部の先端部は緩く外傾する。この段階に新たに出現する器種に器肉の厚い小形の甕(28)があるが、口縁部から胴部中位にかけて轆轤調整と思われる回転の撫で痕跡が顕著で胴部下半は篋削りが施される。これは酸化焰焼成であるがかなり堅緻な焼き締まりで、須恵器の範疇に入るものかとも考えられる。

須恵器は相対的に資料が乏しく遺構数も薄い段階である。坏は形態としては15段階とそれほどの変化は見られない。底部回転篋切りによる切り離し技法が検出される最終段階と考えられ、回転糸切りのものとの共伴は量的にはわずかであり、生産面では既に糸切り技法が一般的なものとして定着していると思われる。資料呈示は出来なかったが前段階でみられた口縁部が外反し、器高の低いタイプ(15段階34・38)が僅かに法量を小さくして当段階の大勢を占めていることが想定される。



第16段階



第17段階

第5章 成果と課題

第17段階

土師器坯は腰部に丸みをもちやや深い。体部にはほとんどの場合指頭による整形痕が明瞭に残される。体部および口縁部は緩く外傾して開くものや直立するもの(1~3)、外傾して口縁部がつまみ出され外反気味に内湾するもの(4~6)などがある。甕は典型的な「コ」の字口縁として完成の段階であり口縁部は高く直立して立ち上がり、上半部は明瞭に外傾する。台付きの小形甕は胴部がやや長くなるが口縁部の形態は上述の甕とまったく同様な形態をとる。

須恵器蓋は当段階をもって消滅するようである。坏類は回転糸切り無調整に限られる。形態は体部が直線的に開く古いタイプのもの(15・16)にかわって、口縁部が緩く外反するタイプが主体を占める(19~22)。後者は15段階のものに比べ口径に対して底径がやや小さくなっている。椀は口径12~18cmの大・中・小の器種がみられるが、全体に器高が低くなっており体部に丸みをもち、口縁部がゆるく外反して開くタイプが出てくる(27・28)。皿は口縁部が水平に折れるもの、体部が直線的なもの、やや深いものなどがあるが、高台は断面略三角形になり雑な作りになっている。灰釉陶器は椀型がともなっており口唇部が鋭く折れるタイプである。

第18段階

土師器坯は明瞭な平底をなし体部が直線的で口縁端部が尖り、直立ないしは内傾するタイプ(1~4)と前段の口縁部がつまみ出されて外反ぎみに内湾するタイプのより平底化の進んだものがある(4・5)。いずれも体部の指頭痕が著しい。甕は器肉の極めて厚いものがあり、「コ」の字形態の弱いものや(33)、直立気味のもの(35)、短く「く」の字状に外傾するもの(36)などがあり明らかに「コ」の字口縁の退化段階にあり、胴部上半の膨らみが弱くなる。小形台付き甕も器肉の厚みや口縁部の形状変化は軌を一にしている。

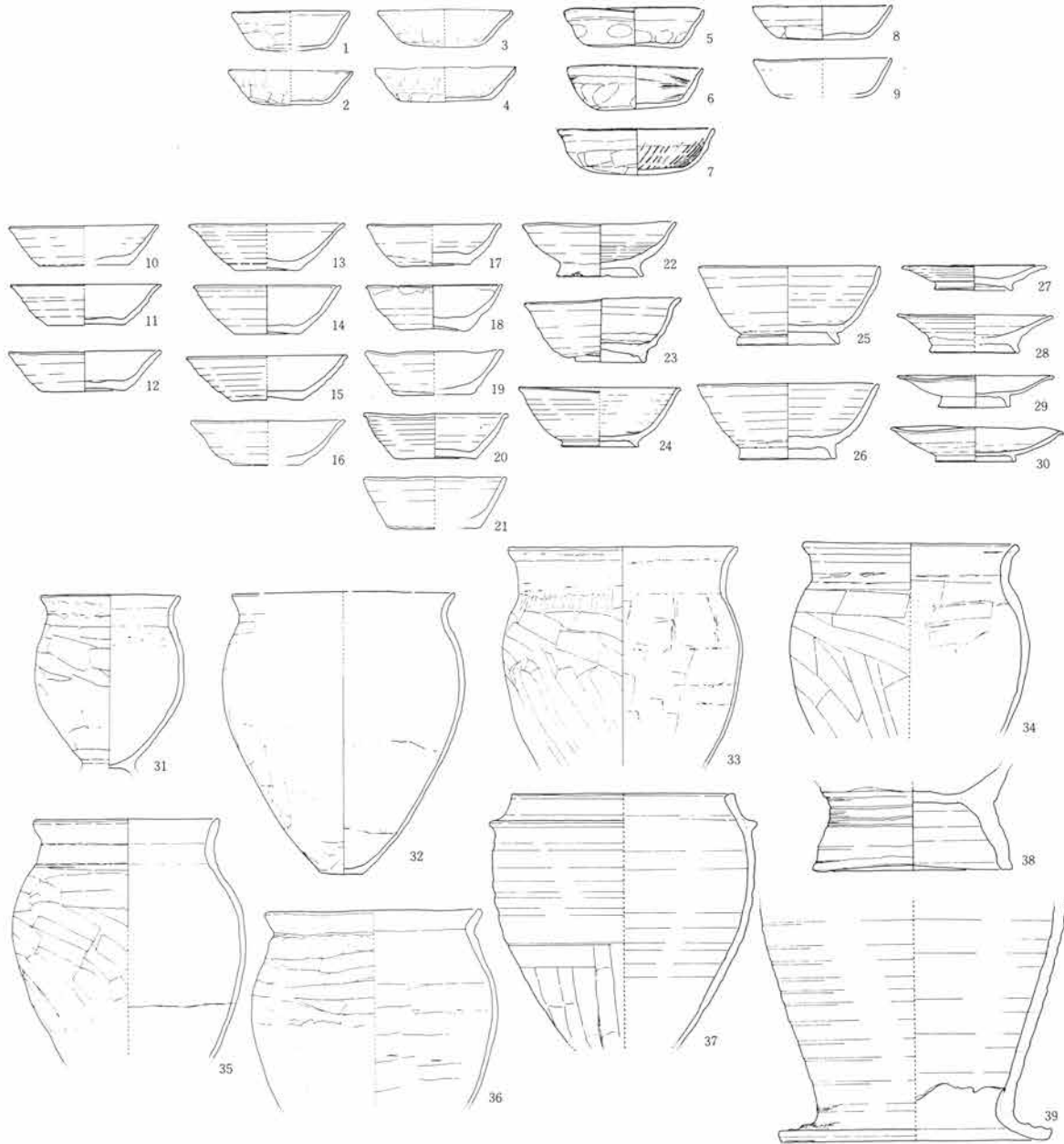
須恵器蓋はこの段階では消滅しているようである。坏・椀はそれほどの変化は認められないが、焼成の甘いやや軟質気味のものが見られる。坏類はやや小形化の傾向にあり、椀類も小形品が増えてくる。皿は高台が低く粗雑な作りになっている。灰釉陶器は皿が見られ、口唇部の形状は前段の椀と同じく鋭く折れる。このほか羽釜・甗・大形器種の台部などがあり、特に羽釜はこの段階が初現と考えられる。

第19段階

土師器坯は形態的には前段階と同様であるが、前段階のものに比べ作り全体に粗雑化の傾向がある。また底部の調整技法が著しく異なっており、従来底部の調整は篋削りを基調にしているが、この段階では底部に放射状の細かい筋痕が残され篋による調整は認められない(2~5)。これは当段階の前後には存在が認められず、技法の系譜からは現状でたどることができない。また絶対量の貧弱さも去ることながら、検出される遺構がかなり限定される傾向が窺われる。甕・小形台付き甕は「コ」の字状口縁が消失して弱い「く」の字状になり、厚手で胴部に張りの少ない形状になる。前段階で出現した羽釜は煮沸器として土師器甕に変わり主体を占めている。

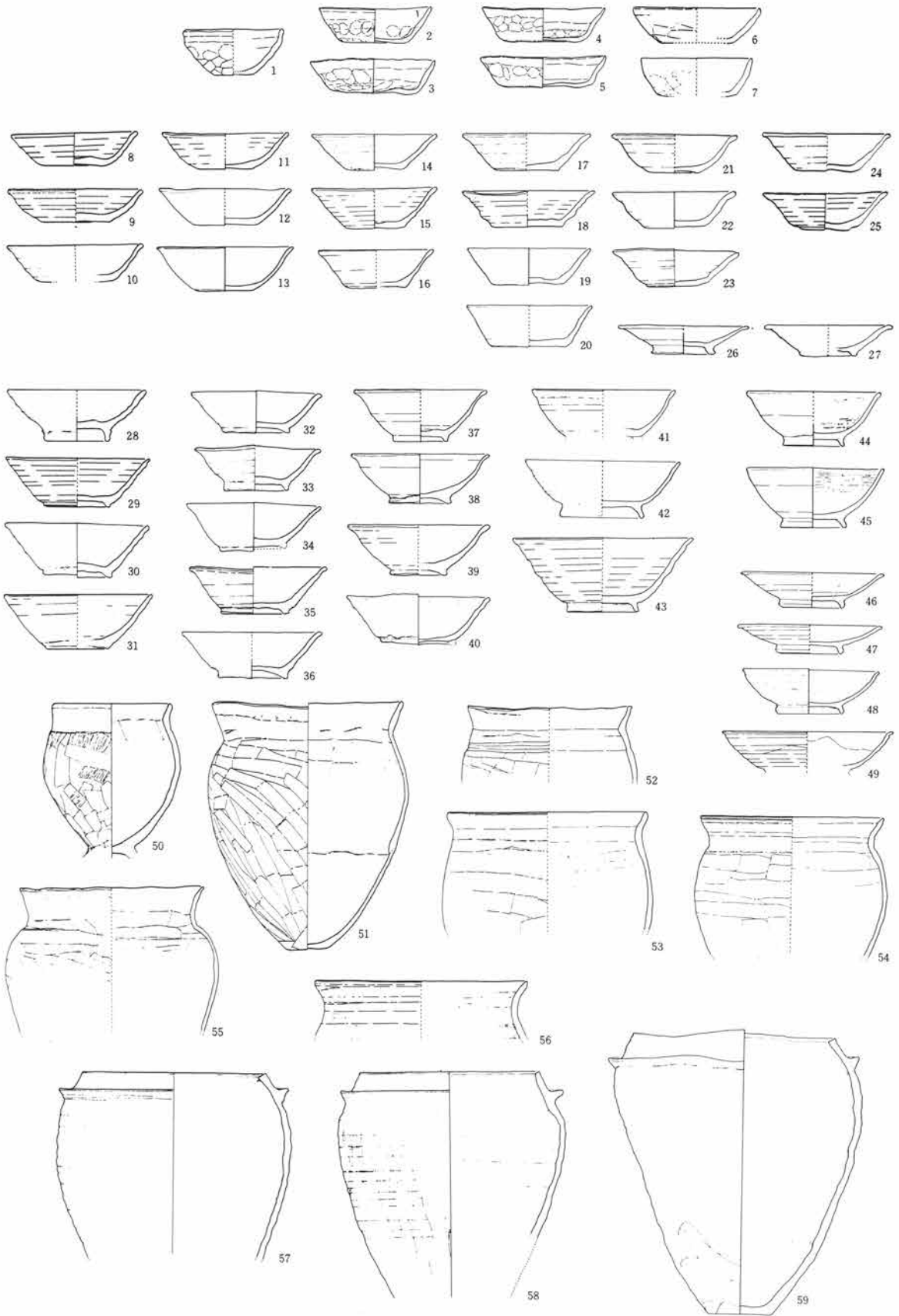
須恵器坏・椀類に酸化焰による焼成の甘いものの割合が多くなり、作りや胎土の粗雑化が著しい。坏は前段の体部が直線的に開くタイプとともに、腰部が丸く張り口唇部が肥厚して丸まり強く外反する形態(21~25)が新たに出現し、ともに底部の小径化が進んでいる。椀は小形化しており口径13.5~15cmの間に入る法量のものが大勢を占める。高台は低く、体部の作りと同様に貼付はかなり粗雑である。体部の形態は坏類と同じく直線的なタイプと、腰部に丸みをもち口縁部が外反するタイプがある。皿はやや体部が深くな

り酸化焰気味の焼成である。灰釉陶器には皿・大小の碗などがある。当段階より内面黒色処理および横位の篋磨きが施された碗が見られる。外面は橙色を呈し酸化焰焼成であり胎土は緻密で体部は緩く内湾して開き高台の貼付とも丁寧な作りである。



第18段階

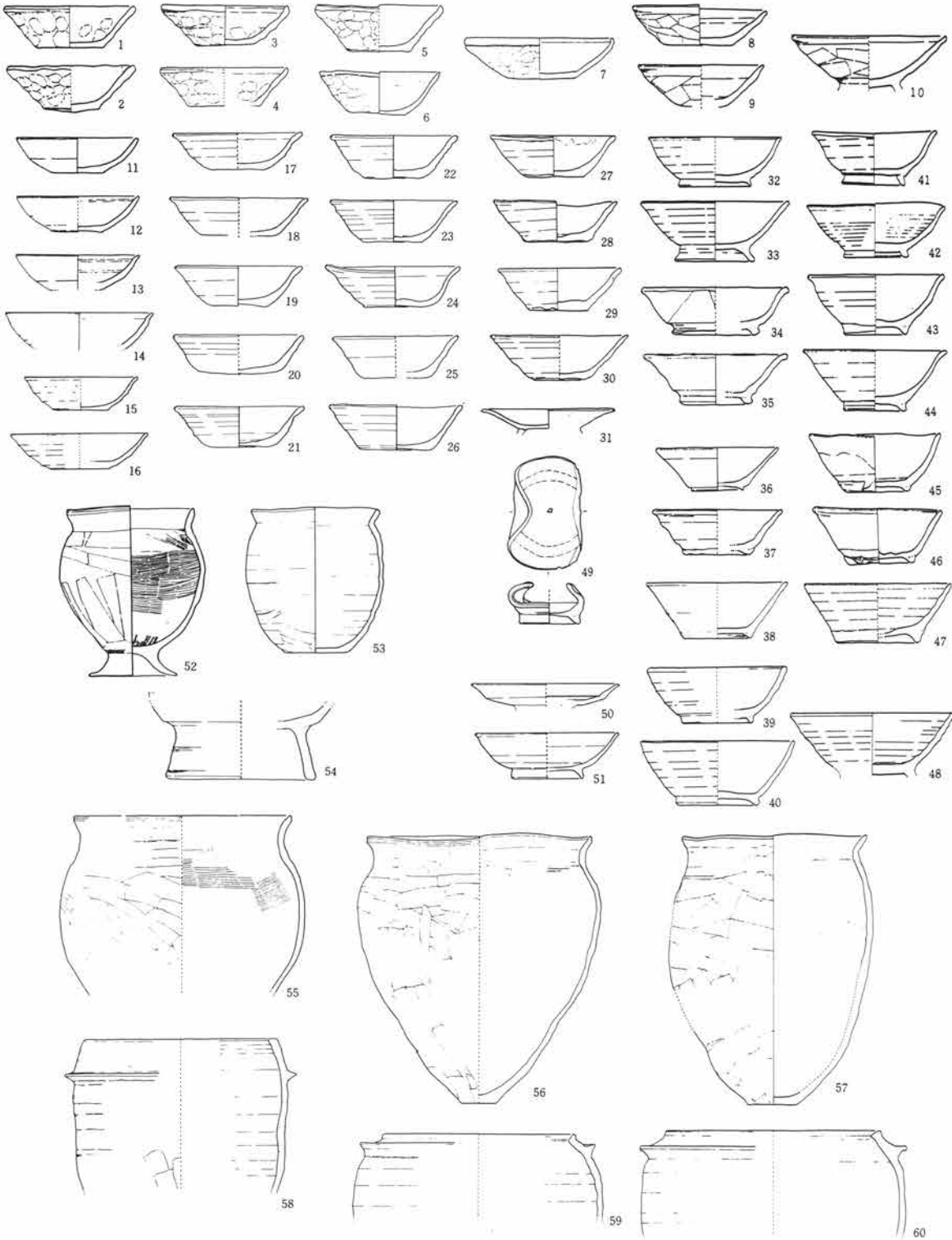
第5章 成果と課題



第19段階

第20段階

当段階以降土師器坏の出土する住居はますます限定され一遺構からの集中に出土する傾向が強まり、一般的な什器類とは異なった機能も考えられる。底部は篋削りがなされ明瞭な平底である。体部は深く直線的に開き、口唇部が細まって直立するタイプや浅くやや大振りのももある。器肉はかなり厚く、体部内外面に



第20段階

第5章 成果と課題

は顕著な指頭痕を残すもの（1～7）と、篋削りされる一群（8～10）があり、篋削りが施されるものには高台の付く椀型も存在する。形態としては18段階の（1～4）からの系統がうかがわれる。甕は胴部が丸く張るもの（55）、肩部が強く張るもの（56）、胴部の張りの少ないもの（57）などが存在するがいずれも器肉が厚く極めて短胴である。出土する割合は羽釜と比べかなり少なく、煮沸器としては補助的な位置にあると考えられる。小形甕には台付きと胴部下位が篋削りされ、酸化焰焼成であるが堅緻で轆轤に因る成・調整されたと考えられる器種がある。

須恵器坏は前段からつづく還元焰・酸化焰焼成が混在する2タイプ（17～24）・（25～30）のほか、底径が5cm前後と小さく体部が緩く内湾して立ち上がるタイプ（11～13）があり、酸化焰焼成、底部回転糸切りで胎土・作り共丁寧である。椀は作り、胎土の粗雑化が顕著であるが足高高台の端緒形態を思わせる酸化焰焼成気味の作りの丁寧な椀（33）が見られる。この段階より杯・椀類に器種認定の困難なものが出現する。作りのよさ・胎土の均一化・酸化焰焼成など従来の須恵器の変遷上では捉えきれない要素もっているがここではとりあえず須恵器の類として記述した。その他須恵器耳皿・緑釉陶器の皿・椀などがある。

第21段階

土師器坏は体部に指頭痕・篋削りを施す両者が見られるが、巻き上げの接合痕を残し簡略化されており、このため体部の直線は崩れている。甕は上半に轆轤痕を明瞭に残し、下半は篋削りを施す。口径が広がりやや器高が低くなり広口形態で前段より大形化している。

須恵器坏は前段階の3タイプがあり全体に小形化の傾向にある。器高が低く体部が丸く内湾するタイプ（5～9）は器肉が厚くなっている。椀類は従来から続く胎土・作り共粗雑で体部に丸みを持ち口縁部が外反するタイプ（36～39）や直線的なもの（40～42）が少数になり、轆轤使用酸化焰焼成の足高高台の椀が出現する。胎土は砂粒の混入が多く緻密ではないが均質である。体部の形状の違いや法量に大・中・小の別があり小形品は体部に丸みがあり口縁部が外反し（27・28）、大形品は直線的に開いているものが多い（33・34）。このほか腰部が丸く張り口縁部が直立ないしは外傾気味のタイプ（24～26）は小形品で胎土がきめ細かく、作りが丁寧である。羽釜は煮沸器として主体を占めている。甕は単孔の大形品で羽釜の底部が大きく開く形状で鏝部から上の口縁部が高く直立する（51～53）。

第22段階

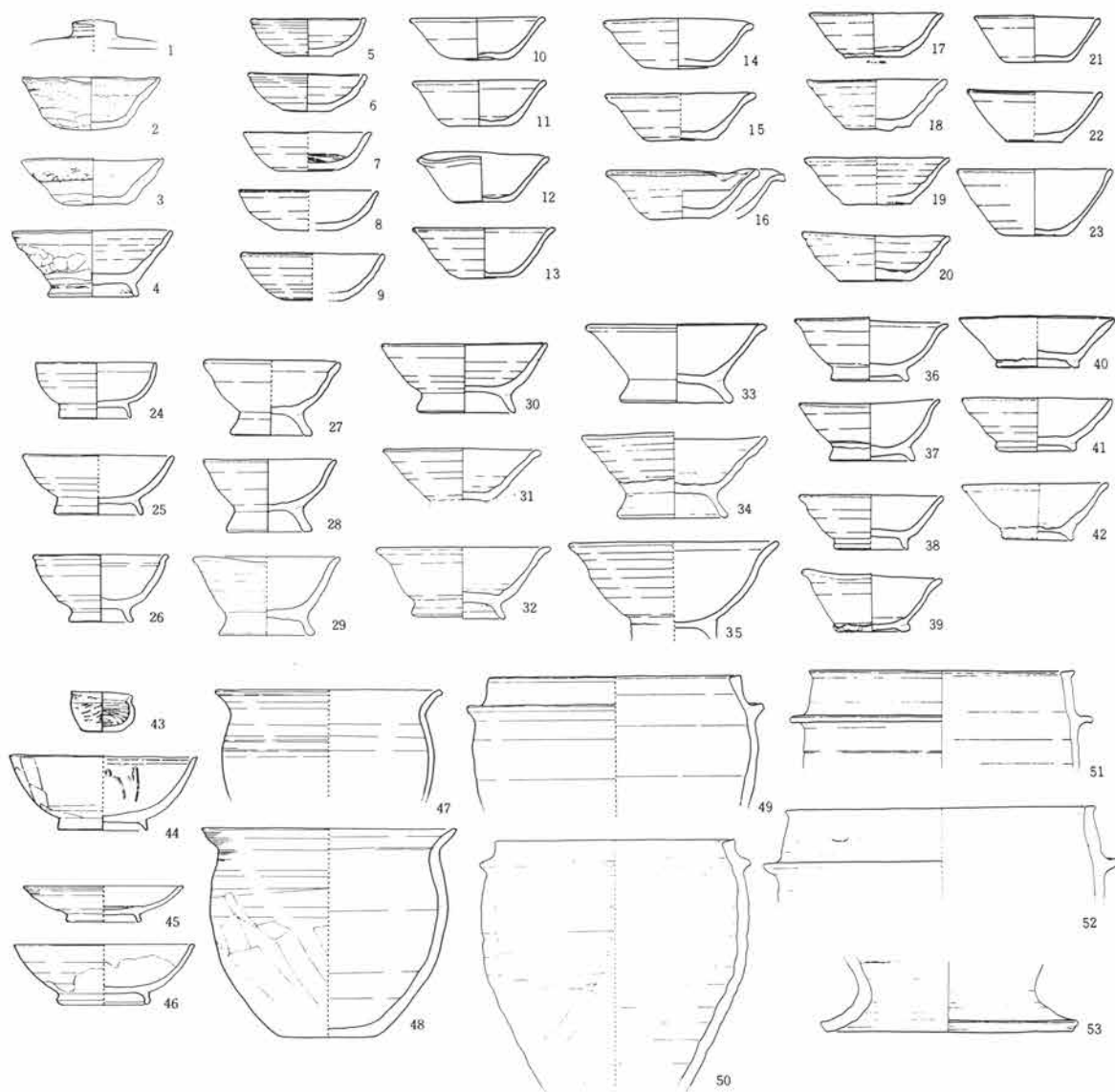
土師器坏は出土遺構の限定傾向は顕著であり、長い間命脈を保ってきた手捏ね技法を基調とする土師器は当段階をもって消滅する。体部には著しい指頭痕と2巻3段の紐作りの接合痕が残され器肉の厚い粗い作りが目立つが内面は比較的丁寧な撫でが施される。底部は一定方向の篋削りがなされる（1～12）。甕は器肉の厚いいわゆる土釜と言われるもの（84）が見られるが量的には少ない。このほか胴部上半を轆轤による回転調整されたと考えられる甕類がある（81～83）。

須恵器坏はさらに小形化の傾向が強まり器高も低くなる。また還元焰焼成の製品が比較的多く体部が直線的に開くタイプが減少し、ほとんど酸化焰焼成のものに統一されている。椀類は作りが丁寧で腰部が丸く張る形態が増える（43～52）。足高高台は典型的な段階には入り高台の高さは最も発達する段階であり、体部に丸みを持ち口縁部が外反するものが多い（58～60）。皿は高い高台をもち皿部の口径が小さい形状のものが見られる（67）。羽釜は鏝部の直下から篋削りが成されるものがある（85・86）。その他内面黒色処理および篋磨きの施される作りの丁寧な椀類がある（68～70）。また灰釉陶器の量が特に多く、皿・椀類がある。

第23段階

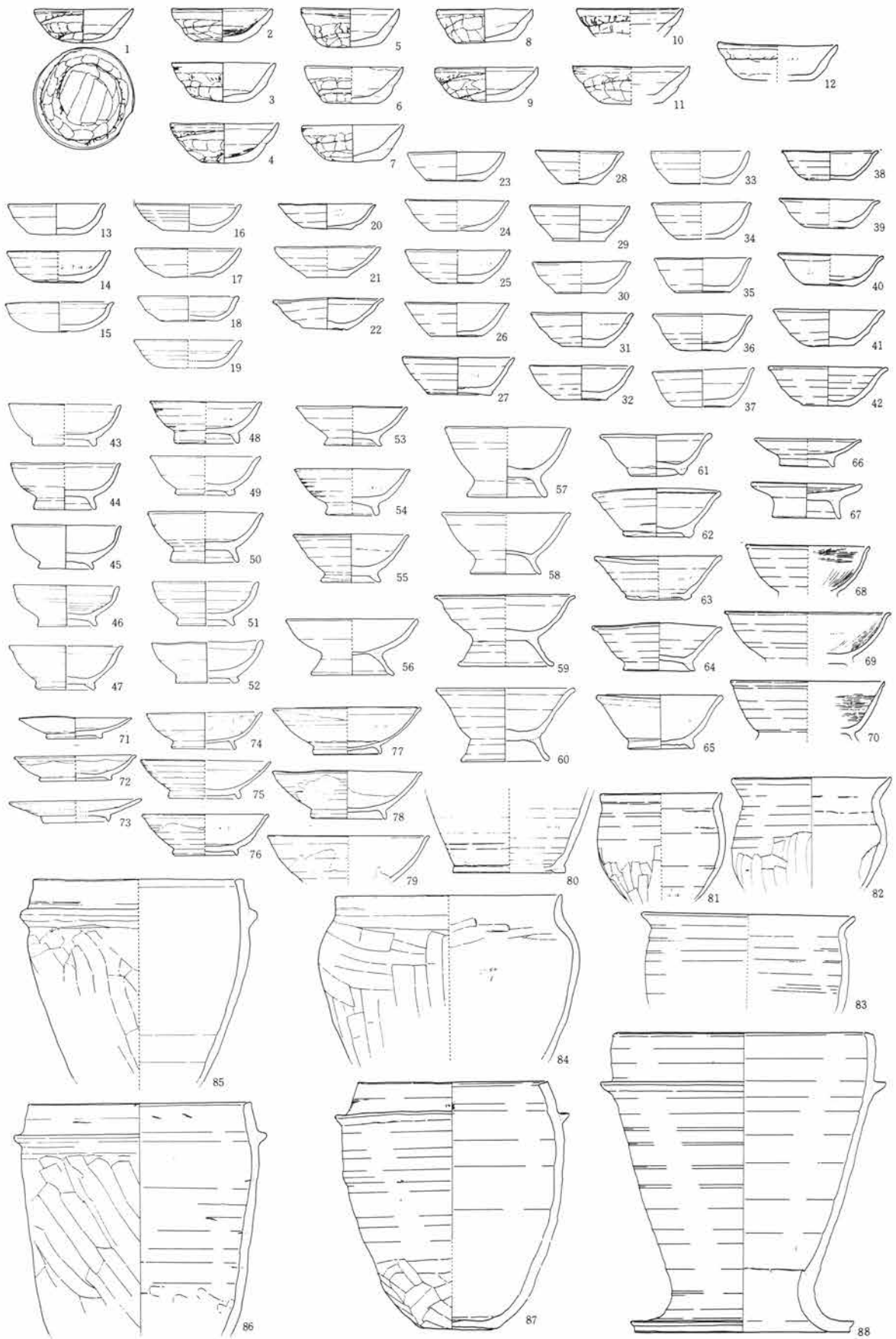
当段階では、て捏くね手法を基調にした土師器坏類は消滅する。土師器とすることの出来る器種には土釜が存在しており胴部には顕著な縦篋削りが施されるが、口縁端部の鋭い作りからは轆轤などの使用も窺われる。

須恵器坏類はかわらけあるいは中世皿型土器などと呼ばれるものの端緒的な段階であろうか。口径10cm前後・器高3cm程度のの小形品が多くなり、小形化・偏平化は一段と進んでいる。また体部がやや深く腰部にくびれをなし底部が厚い雑な作りの一群もある。椀は相対的に少数になるが、とくに足高高台の減少段階になると思われ、腰部が丸く張るタイプがやや優勢を占めており、前段ではみられなかった大・中・小の法量の分化が認められる。皿は高台の有無の2タイプ(16・17)がある。羽釜は口径15cm前後の小形品もあり、大形のものでは鏝部の突出が弱く断面形も丸みを帯びる。灰釉陶器は腰部が丸く張り口唇部を丸くおさめた厚手の椀や広口瓶などがある。

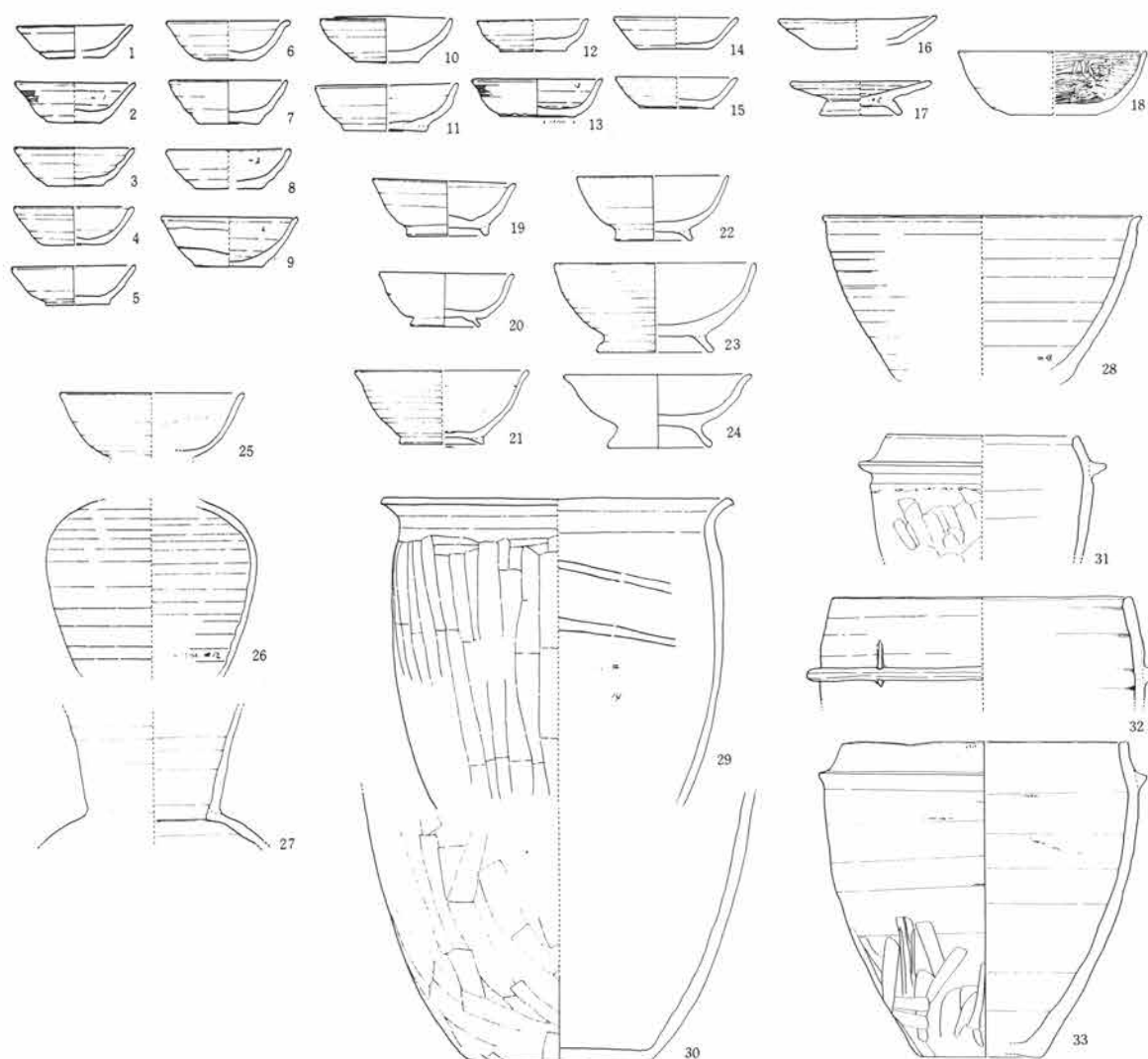


第21段階

第5章 成果と課題



第22段階

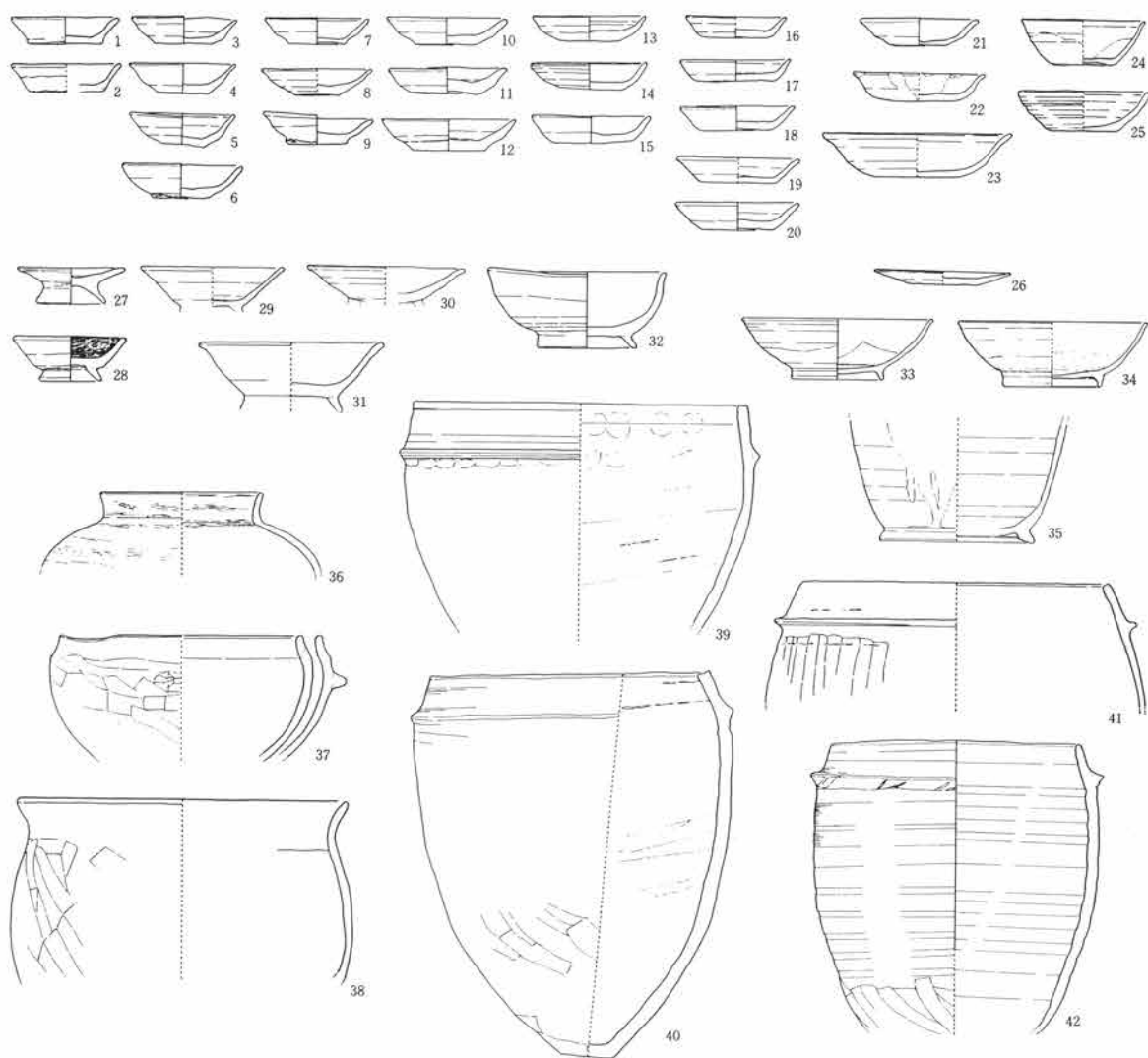


第23段階

第24段階

須恵器坏は前段階よりさらに小形化が著しいが口径・器高などの違いから3種類程度に分類される。口径9cm・器高2.5cmの小形を中心にする深めのタイプ(19)、口径10~11cm・器高2.5cmで器肉が厚くやや大形のタイプ(10・15)、口径8~10cm・器高1.5~2cmで偏平な形状をなすタイプ(16・20)がある。このほか量的には主体を占めるものではないが、腰部に丸みをもち口縁部が外反して開き大・中・小に法量分化した一群(21・23)がある。椀は足高高台はほとんど消滅し、その形骸化したものと考えられる体部が直線的に開くもの(29・31)が残存する程度である。皿は足高高台を思わせるもの(27)と、無高台のもの(26)があるが前者は皿部の矮小化が著しく後者も器高1cmたらずの極めて浅いものになっている。煮沸器は把手付き鍋型・土釜・羽釜などがある。羽釜は口径の大形化と鋳部の変化が著しく、とくに鋳は本来の機能を失うほどの矮小化・形骸化の傾向が認められる。

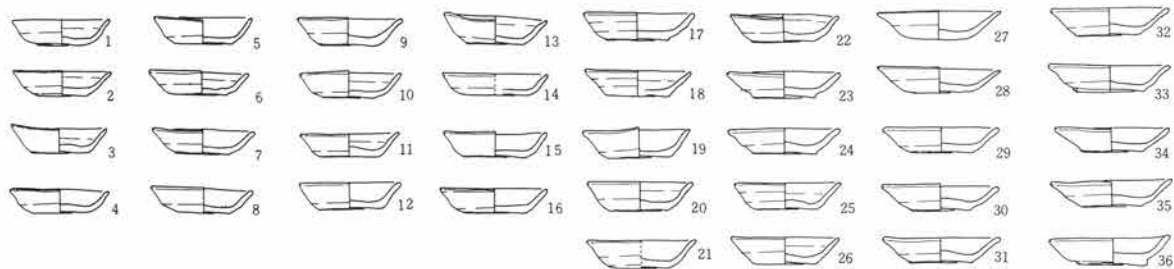
第5章 成果と課題



第24段階

第25段階

現在のところ鳥羽遺跡における土器序列の最終段階に当たる。しかし、掲げた資料は竪穴状の遺構からの一括資料であり、他の器種との組み合わせがなく出土状況などから他の諸段階とは同列には扱えない面もある。器種はいわゆるかわらけ状の坏で、形態的には幾つかに分類はされると考えられるが同時期におけるバラエティとしてとらえられる。酸化焰焼成の堅い焼き締めである。口径8～10cm・器高は総て2cm以内におさまり、法量とくに器高に関しては前段階と比較してかなり統一されている傾向にある。



第25段階

年代について

近年の県内で刊行される歴史時代、とくに奈良・平安時代を対象とした報文の多くには土器編年序列が示されている。これらの編年案のうちには幾つかの年代基準が設けられ年代が付与されているが、平城京をはじめとする畿内地方に比べ絶対年代を知りうる木簡などの資料に乏しく、古銭などのかなり限定された資料でその基準が得られている。このような基準資料の少なさは、該当年代によっては飛鳥・藤原京の畿内須恵器編年の援用や、近県の窯跡を中心とした出土遺物との対比などの方法も用いられているのが現状である。近県との遺物対比では、とくに埼玉県資料との類似が多く取り上げられる。比較的明瞭な年代観が示され、関東地方の歴史時代における土器編年にとって中心的役割を果たしている前内出窯や、武蔵国分寺塔再建のために開窯ないしは再建瓦を供給したとされる八坂前窯・新久窯などの出土須恵器との共通点を見いだし年代観の拠り所とする例が多々見受けられる。しかしこれらの資料を実見した限りでは、形態・技法などの点で県内資料との間にはかなりの相異が認められるようである。また類似する資料があったとしても多くを見いだすことは出来ないと考えられる。実物対比ではなく、図版上での類似点の認識でよとする場合には多大な危険性を覚悟しなければならない。

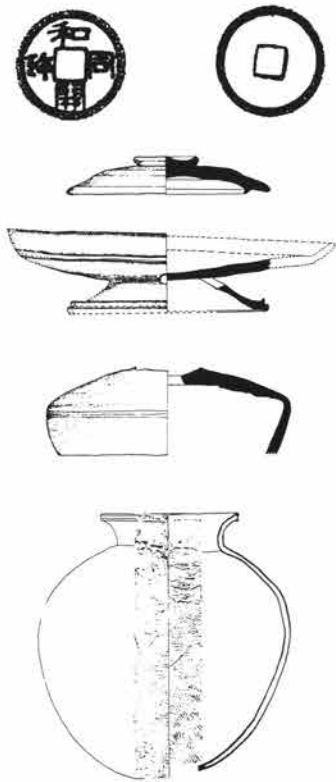
県内の多くがそうであるように、当遺跡でも出土土器に対し直接に年代を示す資料は得られず、僅か皇朝十二銭の一つ延喜通宝(初鑄902)と思われる古銭がK2号住居跡から検出されているのみである。一般に古銭の取り扱いについては、初鑄年次から流通・伝世など様々な要素が考えられ、とくに年代を示す他の資料との供伴あるいは前後関係が捕らえられない場合、古銭の単独出土からはその初鑄年つまり土器などの上限を決める資料としてのみ効力を持つという限定条件がある。

ここでは上記の制約を考慮しつつ、基本的には出来る限り県内で得られ、比較的好条件を備えた古銭などの資料を用いて幾つかの序列段階に対し年代の想定を試みたい。ここに掲げた年代を想定するための参考資料は既に多くの研究者によって取り上げられており、新発見のものではない。先人の焼き直しの面はご容赦願いたい。

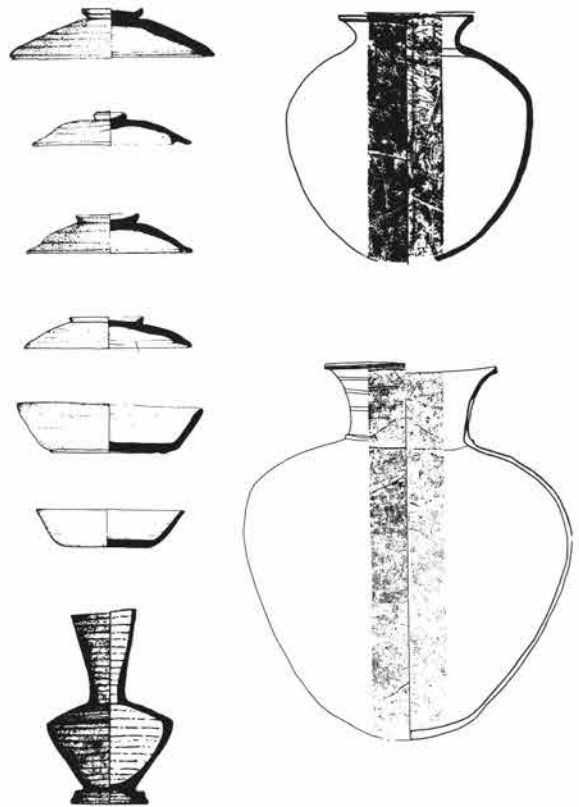
1 高崎市引間2号墳出土遺物₁

1号墳・2号墳の2基の古墳が調査され、墳丘は削平によって消滅し主体部である横穴式石室もかなりの破壊を受けている。2号古墳の玄室中央より和同開珎が検出され、前庭部からは須恵器の蓋・脚付盤・長頸瓶・甕などの土器群が出土している。蓋は口径15.2cm、器高3cmで内面には口縁端部よりやや突出する明瞭なかえりが付く。摘みは県下に特徴的な環状摘みで端部断面は矩形を呈する。脚付盤は口径26cm、器高6cmの大形品で脚部は大きく開き、端部には著しい段をもつ。脚基部には円形の透かしが穿たれる。

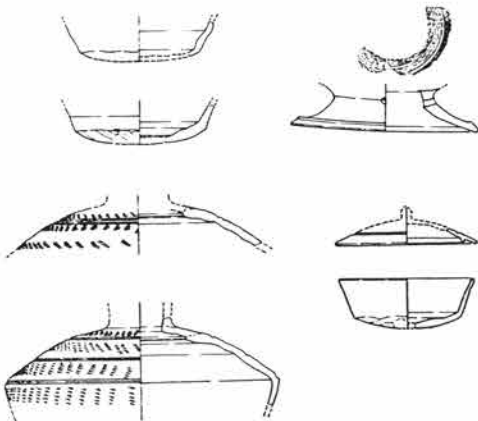
この脚付き盤と同型と考えられる資料には安中市秋間古窯跡群からの採集品₂、あるいは北群馬郡吉岡村大久保A遺跡I区60号住居跡出土遺物の中に見られる₃。秋間古窯跡の採取品は脚部であるが、引間2号墳のものと同様、円形の透かしが穿たれ脚端部の形状も酷似している。この脚付き盤と同時の採集品の中には須恵器杯・蓋などが得られている。杯は体部の深い小形品で、底部は手持ちの篋削り調整が施される。蓋は内面にかえりの付く小形品で天井部には乳頭形ないしは疑宝珠形の摘みをもつと考えられる。また大久保A遺跡の脚付き盤は引間2号古墳、秋間古窯跡のものと比較した場合脚部の開きが弱く、端部の作りは顕著さを失い、透かしも欠如している。このことは大久保A遺跡の脚付き盤は引間・秋間の両資料よりやや時代が下る傾向を示していると考えられる。しかし供伴する遺物の組み合わせは底部手持ち篋削りの須恵器小形杯・疑宝珠形摘みのかえり付き小形蓋などであり、秋間古窯跡のものに近似する要素が強い。



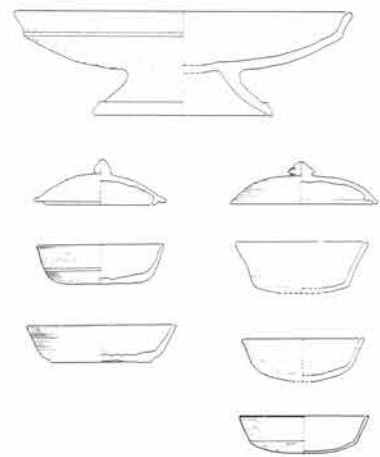
高崎市引間2号墳



高崎市引間1号墳



安中市秋間古窯跡群採集資料



大久保A遺跡I区60号住居跡

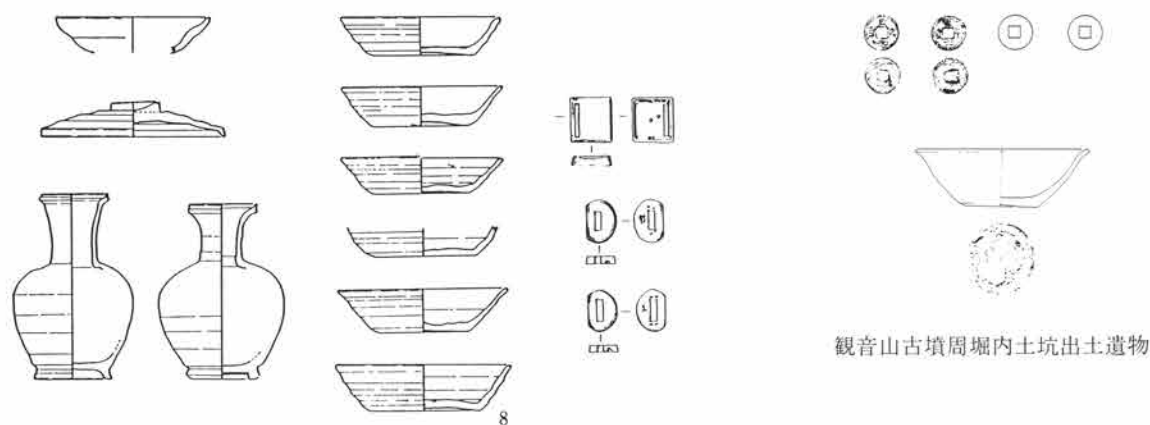
これらの事例からすれば引間2号古墳の脚付き盤と蓋の組み合わせには形態的に齟齬が生じることになり両者には時間的な隔りがあることになるが、横穴式石室古墳への追葬に拠るものと理解すれば首肯できる。追葬を含めた古墳への埋葬は東国においては一般的に8世紀代に及ぶものもあると考えられており、追葬が行われたとしても和同開珎の示す年代と矛盾するものではない。

脚付き盤と蓋に対しての和同開珎の帰属についてはいずれと共伴するか明らかにしがたいが、秋間古窯跡・大久保A遺跡にみられる組み合わせ例から和同開珎の初鑄年次の708年を定点として、三者同時埋納としても、脚付き盤には下限を、また環状摘みの蓋にはその上限の年代が想定される。ところで、引間1号古墳からは、2号古墳出土の蓋に類似する蓋のほか、削り出し高台の椀や口径11.3cmの須恵器杯が出土しており、708年を上限とする時期の組み合わせを示していると考えられる。鳥羽遺跡第11段階の土器群の一部にはこれらの組成を含んでおり、当該段階には8世紀第1四半期を中心とした年代を与えることができる。

2 松井田町愛宕山遺跡出土遺物⁴

愛宕山遺跡は推定東山道経路上、古代駅屋の坂本駅と野尻駅のほぼ中間的位置にあたとされる。遺跡は国道18号バイパス建設に伴う事前調査によるもので、6軒の竪穴住居跡が確認されている。ここに取り上げる4号住居跡は火災を被ったと考えられる遺構である。出土遺物は豊富で土師器・須恵器などの土器類のほか鋸・鑿・槍鉋・鎌・紡錘車をはじめとする鉄製品・万年通宝・銅製巡方・石製丸軋など多種多様にわたり、県内の年代決定の資料として重要視されている一群である。土器類の年代に関しては通常、万年通宝の初鑄年代(760)を基準にしながらも万年通宝の初鑄年代からはかなり隔たった年代、8世紀末から9世紀初頭の年代が考えられている⁵。しかしこの年代設定の方法については純粋に貨幣の初鑄年代と土器類の対比から導き出されたものとは思われず、むしろある時間幅を持って設定された編年序列から逆に付与されたと考えられる面がある。愛宕山遺跡4号住居跡の出土遺物の中で年代推定の資料はこの万年通宝のほか、銅・石製の帯飾りがある。銚帯は慶雲4年(707)にその着装が定められ、延暦15年(796)に石製に変わったとされる⁶。このことから愛宕山遺跡4号住居跡の出土遺物は、上限の年代を知りうる銅製巡方・万年通宝・石製丸軋の資料のうち、最も新しい年代を示す石製丸軋の上限年代796年を与えられる⁷。

4号住居跡の須恵器杯は口径12.9~13.5cm、底径8.3~6.6cm、器高3~3.6cmの間の計測値をもち、底径が大きく体部は直線的に外傾する形態である。底部の切り離し技法は回転糸切りの無調整である。鳥羽遺跡では第15段階の土器群がこれに類似する。愛宕山遺跡4号住居跡から得られた年代から796年を上限とし9世紀第1四半期を中心とした年代を想定する⁸。この段階では底部切り離し技法には回転篋切りの杯が混在し技法的には古い様相が見られる。底部篋切りの技法は後の段階まで残り、切り離し技法での序列分離は現状では出来ない⁹。



愛宕山遺跡4号住居跡出土遺物

観音山古墳周堀内土坑出土遺物

第5章 成果と課題

3 高崎市観音山古墳周堀内土坑出土遺物¹⁰

観音山古墳の北辺外堀外縁に検出された4号墓からは貞寛永宝(870年初鑄)、寛平大宝(890年初鑄)の外2枚の銅銭と須恵器椀型土器・鉄器が出土している。須恵器椀は口径13.8cmで高台が欠落しており、焼成は甘く酸化気味である。体部は緩く張り、口縁部は緩やかに大きく外反して開く。底分離には右回転の糸きりが残り、器厚は均一で薄手の作りである。この土器には貞寛永宝・寛平大宝のうち寛平大宝の初鑄年代である、890年を上限とする年代が考えられる。観音山古墳4号墓出土の須恵器に類似する形態を持つものに鳥羽遺跡第19段階の土器群の中に見られ、これに890年を上限とし10世紀の前半代の年代を与える。

4 前橋市鳥羽遺跡SK-332土坑出土遺物¹¹

浅間山噴出物B軽石との関係から年代想定されている。SK332土坑は径約1mの円形台状部を幅約1m、深さ約40cm~50cmの溝を円形に巡らす遺構である。遺物は皿形土器5点で溝内底面から出土している。遺物の出土状況や依存状況から混入品とは考えられない。浅間山B軽石の降下年代については『中右記』・『古史伝』等の文献から天仁元年・弘安四年など諸説はあるが史料上は天仁元年説が、また考古学上も12世紀初頭もしくは天仁元年説がおおかたの採用するところとなっている¹²。

遺構に堆積するB軽石層は赤灰色のアッシュを含めたユニットととして検出されており、極めて純堆積に近い状況であったとされている。またこのB軽石層は溝底面より上位15~20cm、また円形の台状部でもわずかな間層をおいての堆積であり、視覚的にも遺構がその形状をしている段階と考えられる。

B軽石降下までの堆積層(15~20cm)の時間幅をいかに考えるかが大きなポイントになるが、遺構の立地・規模などを考慮した場合、遺構構築から降下までの期間は極めて短いとすることができる。よって浅間山B軽石の降下年代を天仁元年(1108)を定点に、SK332土坑の皿形土器は1108年に近接する年代観、12世紀第1四半期が考えられる。

SK-332土坑の皿形土器は見込み部がわずかに高まり底部は回転糸切りで上底状にくぼむ。法量は口径8cm、器高1.5cm以下の齋一性が認められる。今回の段階序列にはこの資料に対比できるものはないが、県内における古代末期の皿形土器法量の変遷では口径・器高の小型化としてとらえられている¹³。これによれば鳥羽第25段階の遺物群は鳥羽SK-332土坑出土遺物をややさかのぼる11世紀第4四半期を中心にした年代観が想定される。



鳥羽遺跡SK-332土坑出土遺物

註

1. 引間遺跡 高崎市文化財調査報告書第5集 1979 高崎市教育委員会
2. 大江正行 秋間古窯跡巡検資料
3. 大久保A遺跡II区 1986 吉岡村教育委員会
4. 群馬県史 資料編2 原始・古代2 弥生・土師 1986 群馬県史編纂委員会
5. 註4・中沢悟「清里・陣場遺跡」1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団など
6. 伊藤玄三末期古墳の年代について 1968 古代学14巻3、4合併号
7. 銅製巡方と石製丸柄の同時存在は両者の交換時期である延暦15年(796)に極めて近い年代が考えられる。
8. 大同2年(807)から弘仁元年(810)の4年間は雑石帯が禁じられか帯に戻されたが、銅製巡方の上限年代を弘仁元年としても9世紀第1四半期とする年代想定にそれほど矛盾はないと考える。
9. 底部切り離しおよび再調整技法について
土師器・須恵器のいずれに拘わらず、その形態変遷とともに成調整技法の問題は編年作業の序列組み立てには欠くことの出来ない要素の一つである。器形はその時代の要請によって大きく左右するいわゆる流行的側面とともにその時の成・調整技術の水準にも大きく規制されるであろう。ある器の形態はその器が日常的に使用され大きな需要に応えるべく大量生産を必要とされる器種であればあるほど形態に及ぼす諸技法の在り方が影響をもってくる。
ここで編年作業には器形の変化とともに成・調整の技法とともに須恵器類の底部にかかわる切り離しとその後に行われる再調整を含めた点にも注意を払うように努めた。しかし8世紀中葉以降9世紀前半代にかけて底部切り離しと再調整の技法の現れかたにかなり複雑な様相が見られる。切り離しと再調整との組み合わせから一律には論じたいが、一般的には篋状工具の使用から糸による切り離しへ変化すると考えられている。しかし当該期の土器群の中にはこれらの技法による資料が混在しておりその状況は単なる過渡期的な現象とは考えられない面もある。それは異なる技法をもつ土器群の共伴が顕著であり、さらによりその共伴関係が長く続くと言っているところがある。この現象がいかなる理由によって起こるのか考えてみたい。
群馬県における歴史時代、とくにその初期に属する土器群に於いては、古墳時代から続く篋状工具による成・整形が基本的なものである。切り離しの技法は明らかにしがたいものの底部にかなりの厚みを持つところから切り離しとするよりは巻き上げ成形と考える一群は再調整ではおおよそ手持ち篋削りから回転篋削りへと変化がたどれる。その後回転篋削り技法へと変化するがこれは回転の篋削りによる再調整を伴いやがては無調整の段階へと進む。
一方県内における回転糸切り技法による切り離しについては、その初現については明らかではないが最も古い時期の例としては藤岡市堀ノ内遺跡GH5号住居跡出土の杯型土器に見られる。この資料は体部が輪積により成型され回転の糸切りによって切り離されている。本遺跡は6世紀の第4四半期の年代を与えられている。以後この技法は一般的なものとして定着したとは考えられず、かなりの時間的な隔たりをおいて8世紀前半代に至りようやく資料に接することができる。尾島町小角田前遺跡の87号住居跡出土の須恵器杯型土器である。一見すると6世紀代の蓋と見まがう形態をもち、底部と口縁部の変換点部にわずかな段を有し口縁部は外傾する。底部の技法は中心に回転の糸切り痕のこり、周辺は回転篋削りによる再調整が施され杯の形態としては8世紀の初頭に類似形態を見ることができるとは、共伴する遺物からは8世紀第1四半期の後半から第2四半期中心の年代が考えられる。鳥羽遺跡の土器段階序列によれば、底部回転糸切り技法が出現するのは第13段階にあたる頃と考えられ、小角田前遺跡の資料は回転糸切り技法の一般化直前のものとする事ができる。
10. 史跡観音山古墳 保存修理事業報告書 1981 群馬県教育委員会
11. 大江正行「SK332について」『鳥羽遺跡』No.9 1980 群馬県教育委員会鳥羽事務所
12. 綿貫綾子「浅間山噴出のB軽石降下年代について」『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第21号 1986 神奈川考古同人会にくわしい
13. 『有馬条里遺跡一沖田地区』第2分冊 平安時代 群馬県渋川市教育委員会 1983

土器群の序列設定に終始してしまっただけ集落構成に論を及ぼすことが出来なかつたが、作業を通じての問題点や今後の課題を述べて本項の終わりとした。

各段階に供した資料の抽出は堅穴住居跡を基本にしたため資料の多少によってある程度の集落変遷を伺うことができた。

1. 上野国府との関係について

居住空間としての鳥羽遺跡は古墳時代前半に端を発するが、大規模な集落跡としての構成は8世紀第1四半期に比定される第11段階にある。この段階の直前と考えられる8～10段階に比べ住居件数の増加が著しく、濠・柵をもつ掘立柱建物跡・鍛冶工房跡群など特異な遺構とともに構成される。また住居出土の土器群須恵器が普遍的にみられることなど多くの面で画期が認められる。この遺構構成や土器様相に現れた画期の社会的背景には国府の存在が考えられ、時期的には地方律令体制の中核としての国府政治確立を契機とした、あるいは律令の構造・体制を整えた建物の建造のための人工的集落とも考えられる。人工的集落としての可能性は鳥羽遺跡に現れる次段階の一時的な集落縮小現象に示されている。また須恵器生産については器種構成

や量の豊富さ・需要層の変化拡大から大きな転機として捉えられよう。

2. 国分寺建立に対する須恵器生産の意義について

従来国分僧寺・尼寺の造営に拘わる窯業生産、多量に必要とした瓦生産に関連して、土器生産にも画期や転機を求める傾向が強かったように思われる。これには国分寺に関連する史・資料が得られ、ひいては土器の年代観に決定的な影響力持つことにあるからであろう。しかし造瓦そのものは殆ど純粋な意味で国分寺に供給されるものであろうし、国分寺に関連して生産される土器もまた同様な状況にあると思われる。土器に対する年代決定の重要性は言うまでもないが、当該期の土器様相全般に画期を求めることは出来ないのではないだろうか。鳥羽遺跡においては10段階以降9世紀第1四半期に想定される15段階まで器種構成や量的な面でも国分寺造営についてはそれほど意義は看取できない。あるいは回転糸切り技法などの技術変化にその意義を見ることが出来るようである。

ここに述べた現象は鳥羽遺跡に限ったものであり、他地域との比較・検討は今後の課題である。

3. 器種分類について

今回の段階序列に用いた土器群に対して用いた名称は基本的には土師器・須恵器とした。両者の概念規定については確たる概念をもちあわせておらず、一般的以上のものはない。土師器は手捏ね技法を成・調整の基本にするものに用い、須恵器にはろくろなどによって連続的回転を利用して成・調整されたものとした。焼成・色調に関しては、古代前半期では識別が容易なものの後半期の土器群にはいずれとも決めかねるものが多く土師器・須恵器の区別が困難であり、両者に2大別した最大の理由であった。しかし本文事実記載中の遺物観察では混乱するような表現があった。観察表中“土師質”とある器種は須恵器に分類した後の混乱の現れである。

今日では古代後半期の一群の土器に対して「土師系土器」・「土師質土器」・「ロクロ土師器」などさまざまな名称が付されている。この名称の多様さと、名称と実体資料との対比には地域色もあり、関東の一地域である群馬県内では統一的な認識の段階には至っていないと思われる。

県内における当該期の土器群に対しては、『清里・陣場遺跡』 「土師質土器について」中沢 悟 1981年によって、「土師質土器」の名称が提唱された¹。これ以後多くの報文や論功にこの名称が用いられてきた。しかし、「土師質土器」についての概念規定は明瞭になされているものの、生産跡の未発見、実体との対比などいまだ不明な部分が多く残されている。土師質土器として分類された杯・椀類には一部の器種を除き須恵器からの系統を指摘する意見もある²。

ところで、土師質土器の概念規定については、①ロクロ②窯体構造③焼成④色調などの項目によって土師器、須恵器に対する比較から設定されている。①②は須恵器、③④は両者の中間的存在として位置づけ、広い意味で土師質土器は須恵器の範疇に入るとしている。そして土師質土器と須恵器の相違は、前者の概念規定に見合う資料は県内の窯跡群中には見られず、須恵器とは異なる窯体構造、立地、焼成方法、工人集団のあり方の違いを示しているとする。しかし土師質土器の窯体構造と立地が須恵器窯と相違するという点については県内窯跡の調査例が極めて少ないという現状からすれば窯跡群中に存在する可能性があり、土師質土器生産跡の未発見は須恵器窯と差がないゆえとも考えられる。

いずれにしても、概念規定のいかに拘わらずいかなる器種名を付すべきか躊躇する資料が多く存在しており、段階設定の記述では上述したような土師器・須恵器の名称を用いらざるを得なかったのが実情である。設定した段階では第20段階から以降の土器群にあり椀類は須恵器からの形態変遷上に位置付けられるが、杯類に関しては現状では形態の断絶と胎土の緻密さ、成・調整の丁寧さは何等かの変化を認めざるを得ない。

しかし杯型土器に対してのみ異系統が出現することも考えにくく、杯類の変化の過程を示す資料の可能性も考えられる。

最後に本項を記述するに当たっては、大江正行・木津博明・坂口 一・桜岡正信・友廣哲也の諸氏から有益な助言・指導を賜った。記して感謝致します。真意をくみとれず理解不足や曲解したことも多々あるかと思われるが項を改めて論及するつもりである。これにかえてお許し願いたい。(綿貫)

段階序列に用いた資料

- 第1段階 K74号住居跡 11~14・K129号住居跡 1~4・K148号住居跡 5~10.15.16
 第2段階 K92号住居跡 2~8.10.11・K117号住居跡 1.9
 第3段階 K147号住居跡 1~6
 第4段階 K19号住居跡 1~16
 第5段階 K107号住居跡 1.5.7.11.12.14.17.19.20.22.23・K174号住居跡 2.4~6.8~10.18.21
 第6段階 K81号住居跡 1.2.5.29.30・K84号住居跡 12.17.26.30.33・K160号住居跡 10.11.13~16.23.24.28.32・K172号住居跡 3.4.6~9.18~20.22.25.27
 第8段階 H56号住居跡 1.4.13.25~27・K59号住居跡 2.3.5.7.11.19.21~24・K65号住居跡 6.8.9.12.18.28.29.31・K68号住居跡 14・K116号住居跡 10.15~17.20.30
 第8段階 I15号住居跡 7.8.13.16・I88号住居跡 4~6.9~12.14.17.20・K37号住居跡 1~3.15.18.19
 第9段階 J42号住居跡 7.10.12.15・J93号住居跡 1~6.8.9.11.13~15
 第10段階 I13号住居跡 19.21.28.34・J10号住居跡 32・J61住居跡 3.5~8.12.15~18.20.25.29.30.33・K60号住居跡 1.2.4.9.11.13.14.24・K104号住居跡 27.31.35・K164号住居跡 10.23.26
 第11段階 H19号住居跡 25.33.46.58.64・H45号住居跡 31.52.55~57.65・H47号住居跡 30.34.38.45.59.60・I10B号住居跡 1.48.51・I18号住居跡 43.66・I28号住居跡 8.19.23.32.39.42.67.72・I43号住居跡 3.4.7.9.62・I57号住居跡 47.49.70・I59号住居跡 22.26.27・I60号住居跡 28.61・I69号住居跡 2.5.10.16.17.20.21.36.37・I90号住居跡 6.11.12.14.18.24.40.41.44.68.69・I101号住居跡 13.15.53.54.71・I105号住居跡 35.63・J90号住居跡 29.50
 第12段階 H22号住居跡 10.13.14・H46号住居跡 17.24・H54号住居跡 5.9.11.15.16.19~23.25・I6号住居跡 1~4.6~8.12・I12A号住居跡 18
 第13段階 H6号住居跡 16.19・I51号住居跡 1~4.7.10.27.31・I92号住居跡 9.11.12.21.22.26.32・J3号住居跡 23~25.28~30.34.36.38~40・K43号住居跡 5.6.13~15.17.33.35.37・K156号住居跡 8.18.20.41.42
 第14段階 G49号住居跡 1~9.11.14.17.21.24.27.29・I61号住居跡 10.12.13.15.16.18.20.22.23.25.26・I91号住居跡 28.30
 第15段階 G20号住居跡 2~11.17~20.22.23.25.26.28~31.33.44.45.48~51.53・G57号住居跡 1.16.27.41.42.46.47・G62号住居跡 12~15.21.24.32.52・K144号住居跡 34~40.43
 第16段階 G42号住居跡 7.8.12.14.16.19.21~24・G54号住居跡 2.3.5.9~11.13.17.20・G68号住居跡 1.15.18.26~29・I46号住居跡 4.6.25
 第17段階 G52号住居跡 1~3.10.21・I42号住居跡 15.35・I52号住居跡 7.11.19.20.22~25.27~29.32~34.36~39.42.44.45・K91号住居跡 4~6.40.43・K119号住居跡 8.9.12~14.16~18.26.30.31.41
 第18段階 G2号住居跡 11.15.24.30.32・G6号住居跡 2~4・G41号住居跡 10.35・G58号住居跡 31・H1号住居跡 1.9.12.21.36・K78号住居跡 22.23.34.37~39・K127号住居跡 5~8.13.14.18.27~29
 第19段階 G9号住居跡 7.10.12.14.19.20.22.27.28.30.32.34.36.40.42.48.50.57~59・G76号住居跡 16.17.23.24.33.35.52.55・H5号住居跡 31.43.53.54.56・H36号住居跡 1~6.8.11.15.18.25.29.39.51・H45号住居跡 41・K122号住居跡 9.21.26.38.44~47.49・K137号住居跡 13.37
 第20段階 G4号住居跡 16.27.32.39.48.53.55・G13号住居跡 6.7.14.15.38.42.59.60・G21号住居跡 1~5.12.13.19.33.40.41.58・G96号住居跡 29.56.57・K10号住居跡 28.30.36.44.45.47.50~52.54・K63号住居跡 9.10.17.18.21~23.31.34.35.37.43.46.49・K67号住居跡 25・K99号住居跡 8.11.20.24.26
 第21段階 G63号住居跡 2.4・G65号住居跡 16.31.32.51・H2号住居跡 22・H23号住居跡 3.18.29.42.50.52.52・H27号住居跡 34・K2号住居跡 1.5~9.14.15.19.20.24~28.30.38.40.41.43~48・K73号住居跡 10~13.17.18.21.23.23.35~37.39.49
 第22段階 I68号住居跡 23.24.26.30.35.39.58.64.71.78.79.82.83.86~88・J79号住居跡 16.37.51.60・J90号住居跡 18・J96号住居跡 15.19.33.43.46.47.49.52.73~75・K4号住居跡 20.27.38.40.42.81.85・K80号住居跡 6.21.29.56.62.72.84・K93号住居跡 1~5.7~9.11.17.22.31.32.34.36.41.44.50.53.55.57.59.61.66~68.70・K111号住居跡 10.28.63.65.69.77.80・K118号住居跡 12.14.25.48.54・K120号住居跡 13.45
 第23段階 J40号住居跡 12.15.20.24・J63号住居跡 5.14.33・J67号住居跡 4.10.11.18.21.23.25.27.31.32・J78号住居跡 3.6.7.19.22・K120号住居跡 16.30・K134号住居跡 2.8.9.13.17.26.28.29・K179号住居跡 1
 第24段階 K20号住居跡 6.27.33・K21号住居跡 26.42・K23号住居跡 7.40・K24号住居跡 8.22.37・K28号住居跡 3.4.30.35・K52号住居跡 24・K62号住居跡 15.36・K64号住居跡 17.19.20.23.25.29.34・K109号住居跡 2.12.14.16.28・K133号住居跡 1.10.11.18.21・K150号住居跡 5.13.39・K169号住居跡 9.31.32.38.41
 第25段階 K50号住居跡 1~36

1. 清里・陣場遺跡 1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

2. 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24 1986

第6章 化学分析

1. 鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位体比

東京国立文化財研究所 馬淵久夫

I、はじめに

鉛同位体比法は青銅器など、鉛を含む遺物の原料産地を推定するための手法として、近年クロズアップされて来た¹⁻²⁾。

鉛は質量の異なる4種の同位体^{204Pb}、^{206Pb}、^{207Pb}、^{208Pb}から成り、それらの混合比(同位体比)は鉛鉱床の生成年代と鉱床の性格によって異なるので、産地の指標になり得る。筆者は弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器にこの手法を応用し、各時代の青銅原料に関する知見を得ている³⁻⁷⁾。今回、群馬県埋蔵文化財調査事業団の依頼により鳥羽遺跡出土の青銅器6点を測定したのでその結果を報告する。

II、測定の対象になった資料

1 八稜鏡	L 1号住居跡出土。
2 鏡片	G 38号住居跡出土。
3 銅鈴	I 55号住居跡出土。
4 銅鏡	I 103号住居跡出土。
5 不明銅器	K 50号住居跡出土。
6 銅滓	I 区鍛冶工房跡出土。

III、実験法

本法は殆ど非破壊法と言って差し支えない。出土青銅器に必ず生じている錆を微量(約1ミリグラム)採取すれば良く、外観を損なうことはない。弥生時代および古墳時代の青銅器は多くの場合数パーセントの鉛を含んでおり、錆にもそれに近い鉛が含まれているので、1ミリグラムの錆には数十マイクログラムの鉛が存在する。今回の資料は、測定例の少ない奈良時代から平安時代にかけての銅製品なので、鉛量については若干の危惧があったが、化学分離の結果すべての資料について十分な量が得られ、測定可能であった。

錆試料の化学分離によって得られた鉛のうち約1マイクログラムを取って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で鉛同位体比を測定した。

IV、結果

各資料の測定値は表1のようになった。

No. 資料名	²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb	²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb
1 八稜鏡	18.404	0.8478	2.0942
2 鏡片	18.824	0.8331	2.0559
3 銅鈴	18.408	0.8471	2.0929
4 銅鏡	20.582	0.7774	1.9272

1. 鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位体比

5 不明銅器	18.467	0.8464	2.0898
6 銅 滓	18.368	0.8483	2.0946
測定誤差	±0.010	±0.0003	±0.0007

表1 鉛同位体比測定結果

V、考察

鉛同位体比によって現在までに確かめられている、本邦出土青銅器の原料産地の概要は次の通りである（詳細は参考文献2を参照されたい）。

- a、弥生遺跡出土青銅器は、舶載品も日本製のものも、最初は朝鮮系原料で途中から華北産原料になる。
- b、古墳出土青銅器は、舶載品も日本製のものも、華中から華南にかけての原料が大部分を占める。但し古墳時代初期のものには弥生時代の鉛が検出されることもある。
- c、古墳時代後期の銅製品には時折弥生時代のものとは異なる朝鮮系原料（慶尚北道タイプ）が検出されることがある。
- d、日本産原料は7世紀頃から出現する。

さて今回の測定結果を見ると、上記aとbに相当する資料はなく、cまたはdに含まれるものだけであるその模様を図示したのが図1と図2である。はじめに述べたように鉛には4種類の同位体があるので、3種の独立な同位体比が求められる。従って、すべての数値を2次元で図示するには2種類の図が必要である。筆者は東アジアの鉛を区別する最も有効な図示法として、図1と図2のようなプロットを提案し、それぞれA式図、B式図と呼んでいる。（参考文献4、8）。これらの図を見て、例えば、両方とも日本の鉛の範囲に入れば、その資料は日本原産と考えてよい。

両図には表1の資料番号を付けておいたが、No.1、3、5、6が日本の鉛、No.2、4が朝鮮半島産“慶尚北道タイプ”であることは一目瞭然である。ここに“慶尚北道タイプ”と名付けたのは、文献8に報告した韓国慶尚北道の諸鉱山の鉛鉱石が、図1、図2に示した点線上に分布するからで、東アジアの他の地域では見られない特異なものである。

以上のように、測定した6資料は日本産原料4資料と朝鮮半島産原料2資料に大別されることがわかったが、さらに次の2点につきコメントを加えておきたい。

(1) I区出土資料

I区には鍛冶工房跡が見つかっており（参考文献9）、そこで何を製作したかに興味をもたれるが、その銅滓は日本産原料であり、No.4の銅錠とNo.2の銅鏡片は除外できる。

(2) 日本産鉛の国内での産地

日本産鉛を含むことがわかったNo.1、3、5、6は、すべて近い値を示している。この程度の変動は同一鉱山内でもあり得るので、細かく1資料ごとに産地を考えるのは無意味である。現在までに測定した鉛鉱石から見ると、これらの資料のような鉛同位体比を示すものは中国地方に多いが、関東・東北地方にも皆無ではない。

さらに、関西地方以西で出土する奈良・平安時代の銅製品（例えば皇朝十二銭）の鉛同位体比の多くが、今回のNo.1、3、5、6に類似するという事実がある。両者が同じ産地かどうかは、将来多数のデータが集積した時点で判断すべきである。

第6章 化学分析

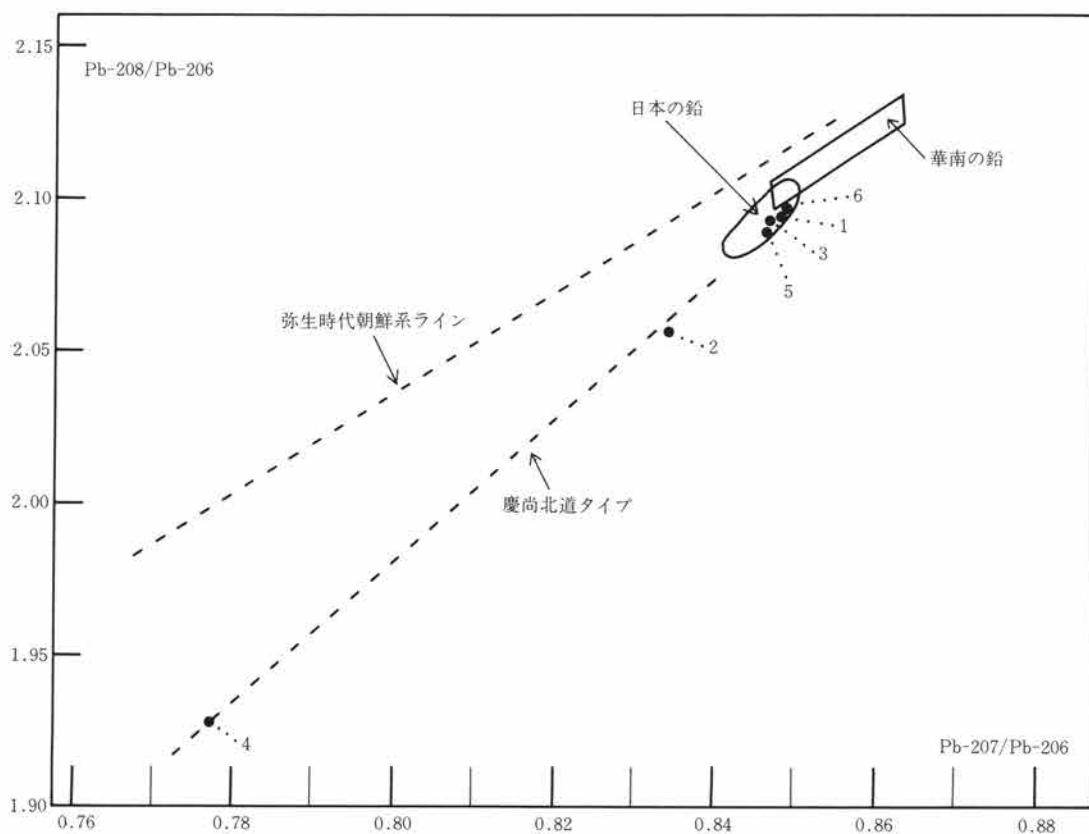


図1 鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位体比分布図(A式図)

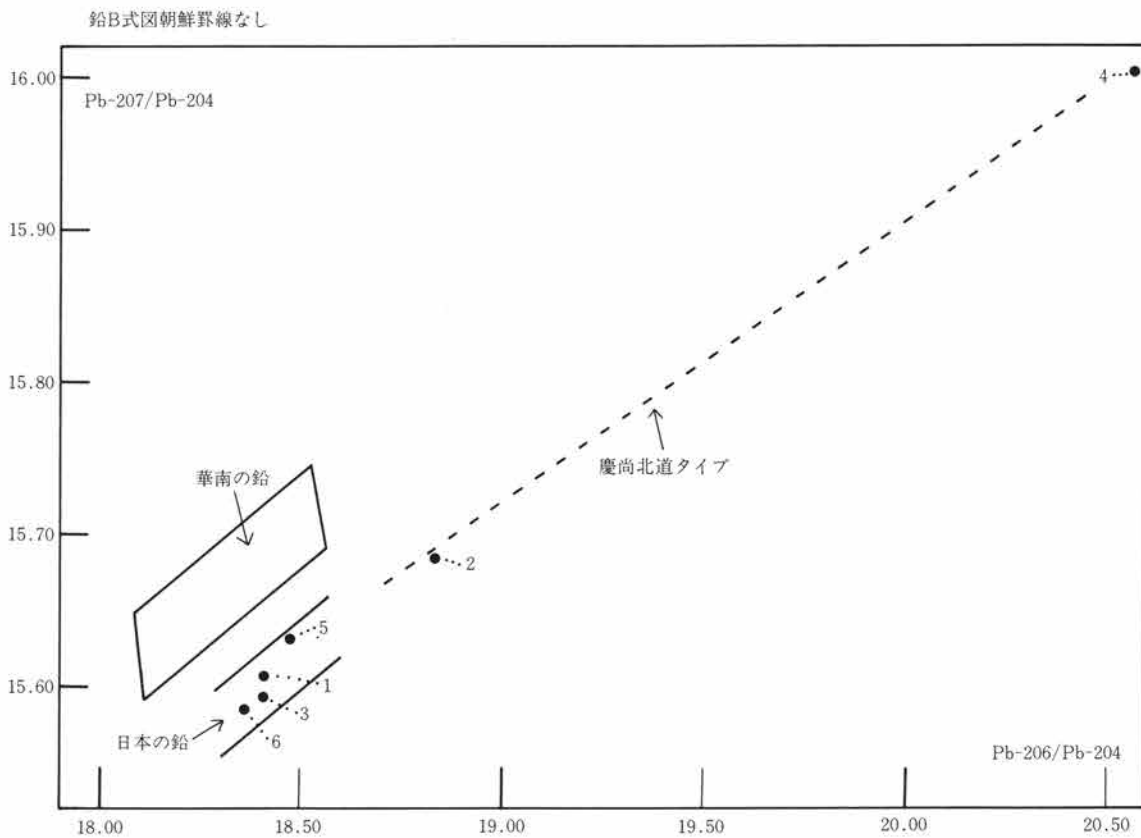


図2 鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位体比分布図(B式図)

参考文献

- 1、馬淵久夫、富永健編：「考古学のための化学10章」東京大学出版会、1981
- 2、馬淵久夫、富永健編：「続考古学のための化学10章」東京大学出版会、1986
- 3、馬淵久夫、平尾良光：「鉛同位体比による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370号、1982
- 4、馬淵久夫、平尾良光：「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68巻1号、1982
- 5、馬淵久夫、平尾良光ほか：「古代東アジア銅貨の鉛同位体比」『考古学と自然科学』15号、1982
- 6、馬淵久夫、平尾良光：「鉛同位体比による漢式鏡の研究(2)」『MUSEUM』38号、1983
- 7、馬淵久夫、江本義理ほか：「鉛同位体比による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定」『古代文化財の科学』28号、1983
- 8、馬淵久夫、平尾良光：「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73巻2号、1987
- 9、『鳥羽遺跡』G、H、I区(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団、1986

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鑄銅関連遺物の金属学的調査

大澤 正己

概要

鳥羽遺跡の奈良・平安時代に属する3群の工房跡出土遺物と中世土坑出土滓を調査して次の事が明らかになった。

〈1〉鉄滓：砂鉄系鉄素材の鍛冶作業で排出された精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）と、鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）が存在する。調査に供した鉄滓形状は鍛冶炉の炉底に堆積した椀形滓の破片が多い。

〈2〉小鉄塊：精錬鍛冶に用いた原料鉄と想定される。小鉄塊中の炭素含有量は、場所による偏析が認められるが、平均的には共析鋼（C：0.77%）レベルであり、工具や刃物用素材に適した鋼である。

〈3〉鉄器半製品：タガネ状態を呈している。炭素含有量（C）は、亜共析鋼系の0.47%を含有し、前述した小鉄塊レベルの原料鉄を精錬鍛冶し、鉄器製作にまわされた関連製品とみて矛盾はない。刃先側の炭化物はパーライト（Pearlite）が均一分散し、結晶粒は局部に粗粒と微細粒の二者が混在するが、斉粒で熱処理技術も高度である。また、鉄中の非金属介在物（鉄の製錬過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物）はチタン（Ti）を多く含有し、製鉄原料に砂鉄が装入されていた事が裏付けられる。

〈4〉鑄銅：ルツボ破片には、ガラス質鉱物が付着する。この中に銅（Cu）粒が残留し、これに微量の錫（Sn）と鉛（Pb）が含有される。また、銅滴（粒）と鉄滓が接合した塊が検出された。銅滴（粒）は金属銅が残留し、これに微量の錫（Sn）と鉛（Pb）、硫黄（S）が含有される。2種の鑄銅遺物から鉛（Pb）入り青銅品の鑄込み作業が想定される。青銅に鉛（Pb）を添加する目的は、青銅の流動性を高めて精密鑄造を配慮している。

銅滴（粒）に接合した鉄滓は、精錬鍛冶滓を呈する鉱物組成（ヴスタイト： $\text{FeO} + \text{ウルボスピネル}$ （ $\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）+フェアライト： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）のものであった。両者の接合理由は不明である。

〈5〉銅滓：中世土坑出土品である。ガラス質（黒曜石状）主体成分で、燐（P）を固溶した金属鉄粒が含有される。銅滓は製錬滓に分類されて、鉄粒の含有から黄銅鉱（ CuFeS_2 ）を原料とし、還元吹き（Reducing Smelting）が推定される。該滓が製錬滓か溶解滓か検討が必要である。後者の可能性が大きいと考えられる。

以上の結果より、鳥羽遺跡の奈良・平安時代の工房跡では、鉄素材の成分調整の精錬鍛冶と、鉄器製作の鍛錬鍛冶の2工程の鍛冶作業と、鑄銅作業が並列で行なわれたと推定される。工房跡は4群で鍛冶炉139基を設置した規模からみて、律令体制下の国衙工房の可能性が大きい。

また、中世には当遺跡内において鑄銅作業が行なわれた事が予測される。

1、いきさつ

鳥羽遺跡は、群馬県前橋市鳥羽町から群馬郡群馬町大字塚田にかけて所在する。この遺跡は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により関越自動車道新潟線地域鳥羽遺跡として調査された。鍛冶工房群が主に検出されたI区は群馬町字稻荷台に位置する。I区調査区画内には、奈良・平安時代に属する4群139基にのぼる火窟（鍛冶炉）と共に、関連遺物が大量に検出された。また、地区は異なるが中世に比定される遺構からは、鑄銅関連遺物が多量に出土する。今回は、奈良・平安時代に比定される遺物を穴沢義功氏が選別し、そのうちの1、2、3号工房跡の性格づけを検討するに相応しい遺物をピックアップして、金属学的調査に供した。なお、

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鑄銅関連遺物の金属学的調査

中世の鑄銅関係遺物の本格的調査は別途計画される予定である。

2、調査方法

2-1、供試材

供試材を Table 1 に示す。1号工房跡は鉄滓3点と小鉄塊1点、2号工房跡は鉄器半製品、鉄滓、ルツボ付着物、銅滴（銅粒）の各1点、3号工房跡は鉄滓3点と小鉄塊1点、D区中世土坑出土のガラス質銅滓の計13点である。

Table 1 鳥羽遺跡供試材の履歴及び調査項目

—前橋市所在—

符 号	試 料	出 土 位 置		供試材の大きさ		調 査 項 目				
		工房No	区 ・ 層 位	サイズ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	化学組成	X線回折	EPMA	断面硬度
J-861A	鉄 滓	1号	KK16 I 区 40 I 22	85×45×15	100	○	○	○		
B	〃	〃	〃 〃 41 I -37 スラグ-10	95×78×25	385	○	○			
C	〃	〃	〃 〃 42 I 22	35×35×25	58	○	○			
D	小鉄塊	〃	〃 〃 41 I -37 スラグ-13	30×18×13	15	○	◎			
J-862A	鉄器半製品	2号	〃 〃 43 I -49 No16	50×30×15 20×7	55	○	◎		○	○
B	鉄 滓	〃	〃 〃 46 I -7 No40	75×60×30	122	○	○	○		
C	ルツボ付着物	〃	〃 〃 46 I -47 No21	ルツボ破片 95×65×27	105	○	—		○	
D	銅粒・鉄滓付着	〃	〃 〃 46 I -47 No35	15×8×7	3	○	—		○	○
J-863A	鉄 滓	3号	〃 〃 スラグ-10	55×55×45	285	○	○	○		
B	〃	〃	〃 〃 42 I -43A	40×30×8	20	○	○			
C	〃(ガラス質)	〃	〃 〃 43 I -44M	80×60×25	106	○	○			
D	小鉄塊	〃	〃 〃 44 I -44A	30×20×15	20	○	◎		○	○
J-864A	ガラス質銅滓	3号南 土 坑	〃 〃	50×45×30	45	○	○	○	○	

◎：金属鉄と酸化物2種別途分析

2-2、調査項目

(1)、肉眼観察

(2)、顕微鏡組織

各供試材は水道水で十分に洗滌して乾燥後、二分割して片方の中核部を検鏡試料とした。残余半分は分析用試料とする。検鏡試料はベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000を使って荒研磨し、最後はダイヤモンド仕上げを行なっている。

(3)、粉末X線回折 (X-ray Diffractometer)

X線回折とは「単結晶、または粉末試料にX線を照射すると、それぞれ固有のX線が回折する現象」をいう。X線回折分析法とは、この回折角と回折強度から物質を固定する方法である。この分析法の基本は状態

第6章 化学分析

分析であり、物質中の構成元素をもとめるのではなく、あくまでも形態とその量を知ることである。試料調整は分析用に粉碎したサンプルを、更にメノウ乳鉢で細粒化(325メッシュの篩を通る程度)している。鉱物組成の同定には、ASTMカードと比較する方法をとった。ASTMカードは、ASTM・X-ray Powder Data File と呼ばれ ASTM (American Society for Testing Materials) から発行される⁽¹⁾。

(4)、EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得る方法である。これが最近ではCMA(Computer Aided X-ray Micro Analyzer以下CMAと略記)という新しい総合状態分析装置が開発された。原理はEPMAと同じであるが、標準試料とX線強度との対比から元素定量値を得ることができるコンピューター内蔵の新鋭器機である。本稿では、J-862A鉄滓半製品鉄中の非金属介在物、J-862Cルツボ付着鉱物の銅粒とガラス質滓、J-862Dの銅滴(銅粒)・鉄滓接着物の金属銅、J-864A銅滓中の鉄粒とガラス質部分等の定量分析を行なっている。

(5)、ピッカース断面硬度

金属鉄の組織同定の目的でピッカース断面硬度計(Micro Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面琢磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもってその荷重を除いた商を硬度値としている。

(6)、化学組成

供試材の分析は次の方法をとっている。

重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄(FeO)、二酸化珪素(SiO₂)。

赤外吸収法……炭素(C)、硫黄(S)。

原子吸光法……全鉄分(Total Fe)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、バナジウム(V)、銅(Cu)。

中和滴定法……五酸化燐(P₂O₅)。

3、調査結果

(1) 1号工房跡出土品の調査

① J-861A鉄滓：鍛錬鍛冶滓(小鍛冶滓)

肉眼観察：表皮は淡小豆色を呈し、木炭痕と気泡を露出するが比較的なめらかな肌を有している。裏面は扁平で灰褐色を有し、わずかに炉材粘土を付着して反応痕を残す。破面は黒色で気泡なく緻密質である。また、旧破面は茶褐色の鉄錆を発する部分が見受けられた。該品は鍛冶炉の炉底に堆積生成した椀形鍛冶滓の中核部の破片である。

顕微鏡組織：Photo. 1に示す。白色粒状で樹枝晶状に晶出した少量のヴスタイト(Wüstite: FeO)と、灰色長柱状および盤状結晶のフェアライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂)、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。組織は、鉄分の比較的少ない鍛錬鍛冶滓である。

粉末X線回折：Table. 2およびFig. 1に示す。主要鉱物は、フェアライト(Fayalite: Fe₂SiO₄)であり、他にホンガウイト(Hongguitite: TiO₂)が少量同定された。試料内の偏析からが検鏡組織で認められたヴスタイトは未検出である。

化学組成：Table. 3に示す。鍛錬鍛冶滓としては鉄分の少ない部類に属する。全鉄分(Total Fe)は40.7%

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査

と少なく、このうち、酸化第1鉄 (FeO) が48.0%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) が4.04%の割合で、残留金属鉄の錆も少ない。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO) は45.73%と高目であり、このうち酸化カルシウム (CaO) が5.18%と高目が特徴的である。次に砂鉄系原料を表示する二酸化チタン (TiO₂) は0.55%、バナジウム (V) 0.012%と低目で鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) の構成成分を表わす。また、他の随伴微量元素も全般的に低目で、酸化マンガン (MnO) は0.12%、酸化クロム (Cr₂O₃) 0.01%、硫黄 (S) 0.017%、五酸化燐 (P₂O₅) 0.24%、銅 (Ca) は0.009%であった。

以上の構成成分は、鉄器製作時に赤熱化した鉄素材と、鍛冶炉の内貼りに使用した粘土との反応生成物の鍛錬鍛冶滓に分類できる。

② J-861B鉄滓：精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓)

肉眼観察：表皮は茶褐色を呈し、全体はなめらかな肌で、局所に気泡を露出した椀形鍛冶滓の完形品である。裏面は表皮と同色で木炭痕と滴下状凹凸の反応痕を有する。また、赤黒色の鉄錆を滲出している。破面は黒赤色に一部干渉色を混じり、小気泡を全面に発するが光沢色調を有し、比重は大きい。

顕微鏡組織：Photo. 1の2段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite: FeO) と、淡灰色多角形のマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄)、それに灰色盤状結晶のフェアライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。組織から精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) に分類される。

化学組成：Table. 3に示す。全鉄分 (Total Fe) は45.5%含有され、そのうちの酸化第1鉄 (FeO) が42.2%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) が18.15%で金属鉄の錆分がやや高目となる。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO) は33.11%含有され、やはり酸化カルシウム (CaO) が5.90%と高目である。次に二酸化チタン (TiO₂) は4.42%、バナジウム (V) 0.23%と高く、砂鉄製錬にもとづく鉄素材の鍛冶滓と判る。他の随伴微量元素もJ-861A鉄滓 (鍛錬鍛冶滓) に比べると高目で、酸化マンガン (MnO) 0.31%、酸化クロム (Cr₂O₃) 0.02%、五酸化燐 (P₂O₅) 0.39%である。なお、硫黄 (S) 0.004%、銅 (Cu) 0.006%らは低目であった。

該滓は、製錬後のまだ不純物を多く含んだ鉄塊を鍛冶炉で再加熱し、精鍛した際に排出された鍛冶滓で精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) に分類される。

③ J-861C鉄滓、鍛錬鍛冶滓 (含鉄鉄滓)

肉眼観察：表裏ともに茶褐色で粗鬆さはなく、一部に木炭痕を残すのみの平坦な小塊である。破面は中核部に黒赤色の金属鉄を残留する個所が認められ、その周辺には黒色地に小気泡を有する通常鍛冶滓が存在する。強磁性で比重は大きい。

Table. 2 鳥羽遺跡出土鉄滓、銅滓の粉末X線回折

符号	試料	鉱物組成								
		Fayalite	Hongguite	Wüstite	Chlorospinel	Magnetite	Goethite	Alpha Quartz	Alpha Cristobalite	Alpha Iron
示性式		Fe ₂ SiO ₄	TiO ₂	FeO	Mg(AlFe) ₂ O ₄	Fe ₃ O ₄	α-FeO(OH)	SiO ₂	SiO ₂	α-Fe
ASTMカードNo		20-1139	29-1361	6-615	21-540	19-629	3-249	5-490	11-695	6-0696
J-861A	鍛錬鍛冶滓	◎	○							
J-862B	〃	◎		◎	○					
J-863A	精錬鍛冶滓	○		◎		◎	○			
-864A	銅 滓							◎	○	○

強◎>○>○弱

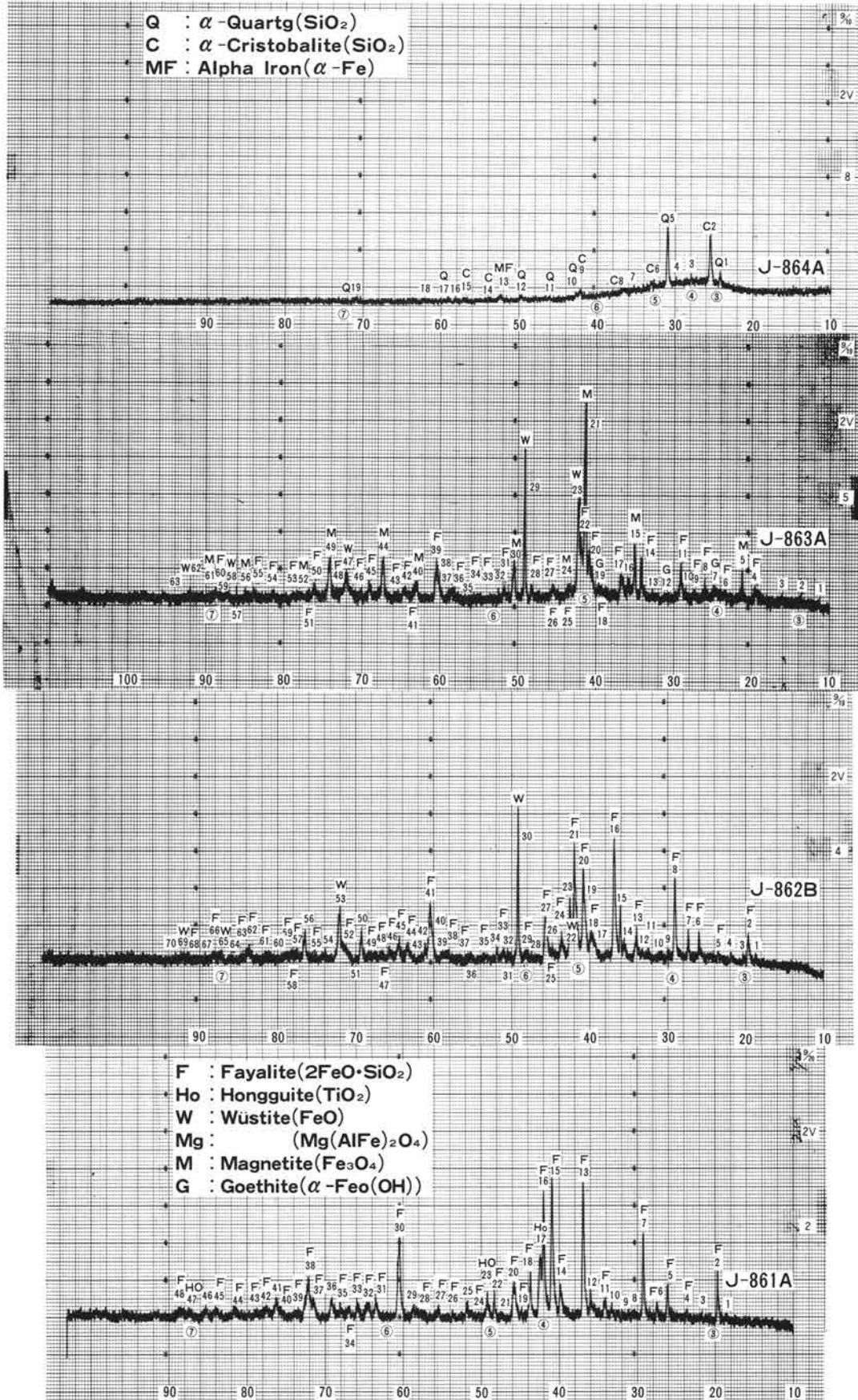


図1 鳥羽遺跡出土鉄滓・銅滓の粉末・X線回折プロフィール(Target:Co.2K) $\oplus 5\text{V}$

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査

顕微鏡組織：Photo. 1 の 3 段目に鉄滓組織①を、また、4 段目の左右に金属鉄の組織②③を示す。まず、鉄滓の鉱物組成は、淡灰色長柱状と点状微細結晶のフェアライト (Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) と、基地の暗褐色ガラス質スラグ、それに微小ヴスタイトから構成される。次に金属鉄の炭化物組織は、左側に示すように、パーライト (Pearlite) が少量析出している。黒色組織のパーライトは、フェライト (Ferrite： α 鉄＝純鉄) とセメントイト (Cementite： Fe_3C) が交互に重なり合って構成された層状組織である。このパーライトの量から鉄中の炭素量が推定できる。該材は、0.05%前後の低炭素鋼に分類できる。右側の組織④は、結晶粒を示す。基地がフェライトであり、黒い細い線はフェライトの粒界を表わす。また、フェライト地中の淡灰色の小さい粒子は非金属介在物であり、黒色斑点部は酸化を受けた穴である。

この鉄滓は、金属鉄を残留させた鍛錬鍛冶滓に分類できる。

化学組成：Table. 3 に示す。この分析値は残留金属鉄を取り除いた鉄滓部分のみの結果である。前述した J—861A 鉄滓に近似した成分構成になっている。全鉄分 (Total Fe) は40.3%で、鉄酸化物を含有する事から酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) が22.83%と高目となり、その分だけ酸化第 1 鉄 (FeO) が減少して31.3%である。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は43.58%あり、この成分内でも、やはり酸化カルシウム (CaO) が5.51%と高値を示している。また、二酸化チタン (TiO_2) 0.96%、バナジウム (V) 0.038%である。随伴微量元素は酸化マンガン (MnO) 0.11%、酸化クロム (Cr_2O_3) 0.01%、五酸化リン (P_2O_5) 0.21%、硫黄 (S) は高目の0.054%であり、同じく銅 (Cu) が0.042%と高目である。銅 (Cu) は鉄中に固溶される元素であることから、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 中に含有されたのが検出されたのであろうか。銅 (Cu) と二酸化チタン (TiO_2) の量から考えて含銅磁鉄鉱系の素材が加わっている疑いのもたれる気がかりな数値である。

④ J—861D 小鉄塊

肉眼観察：表裏ともに赤褐色を呈し、肌は鉄錆からくるざらつきをもつ小鉄塊である。なお表面側には大きい亀裂が走り、そこから鉄錆を滲ませて金属鉄の残留を予測させる。磁性も強かった。

顕微鏡組織：Photo. 2 の 1、2 段目 (④⑤⑥⑦) に示す。非金属介在物は④に示すように酸化物系のものが極く微量検出された。炭化物は、⑤⑥に示すように偏析したパーライトが認められる。組織⑤はフェライト基地中に少量のパーライトが存在し、炭素 (C) 量としては、0.2%レベルである。組織⑥は全面がパーライトに埋められて共析鋼となり、推定炭素量は0.7%程度となる。次に⑦は結晶粒を示す。粒は不均一で齊粒になりきっていない。

ビッカース断面硬度：Photo. 5 に示す。パーライト析出の少ない低炭素個所では、材質は硬く硬度値は133、炭素含有量の高い共析鋼部分では硬度値は上昇して161を示す。

化学組成：小鉄塊は外周部は酸化を受けて金属鉄は中核部に残存する。両者を別々に分析した。酸化鉄部分は Table. 3 に、また金属鉄部分は Table. 4 に示す。

まず酸化鉄部分について述べる。全鉄分 (Total Fe) は54.15%あり、その大半は酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) で65.91%、酸化第 1 鉄 (FeO) は10.35%である。また造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) 系は少なく14.29%である。該品は酸化鉄部分で土壌による二次汚染を受けていて炭素 (C) 1.11%、硫黄 (S) 0.083%、五酸化リン (P_2O_5) 0.30%と高目傾向にある。しかし、他の随伴微量元素は鉄滓成分に比べると低減されて二酸化チタン (TiO_2) 0.14%、バナジウム (V) 0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.03%、酸化クロム (Cr_2O_3) 0.007%、銅 (Cu) 0.013%であった。

これに対して金属鉄の方は Table. 4 に示すように全鉄分 (Total Fe) は85.7%の試料での分析結果である。炭素量 (C) は偏析があるものの平均値として0.86%で共析鋼レベルである。小鉄塊は鉄製品に比べると造

第6章 化学分析

滓成分系はやはり高目で珪素 (Si) 0.83%、カルシウム (Ca) 0.046%、マグネシウム (Mg) 0.015%である。しかし他の不純物成分は低目であり、マンガン (Mn) 0.004%、銅 (Cu) 0.013%、チタン (Ti) 0.005%、バナジウム (V) 0.005%、クロム (Cr)、モリブデン (Mo) は Nil である。特徴的には硫黄 (S) 0.122%、ニッケル (Ni) 0.067%、コバルト (Co) 0.036%はやや高目で、この成分割合は産地同定の手がかりになりうるものと考えられる。

当小鉄塊は、精錬鍛冶炉 (大鍛冶炉) で木炭と交互に積み上げ、強風加熱して赤熱化後鍛打を繰返し成分調整を行なって鉄素材の原料となるものである。

(2) 2号工房跡出土品の調査

⑤ J-862A 鉄器半製品

肉眼観察：全長50mm、幅20~30mm、厚み基部15mm、刃部3mmを計るタガネ状鉄器の半製品である。表裏ともに赤褐色の鉄錆に覆われ、局部に亀裂を走らせている。磁性は強く金属鉄の残留が予測される。

顕微鏡組織：Photo. 2の4、5段目 (⑧⑨⑩) に示す。⑧は研磨のまま腐食 (Etching) なしでの鉄中における非金属介在物である。暗黒色ガラス質スラグ中には淡灰色微小結晶が認められる。介在物組成同定は EPMA 調査で述べる。

⑨は400倍で撮影した炭化物組織である。基地の白色部はフェライト、黒色部がパーライトである。パーライトの析出量から鉄中炭素 (C) 量を推定すると0.35%前後となる。⑩は結晶粒組織を示す。微細粒で一部にやや粗大粒が混在するが、いずれも齊粒となっていて、熱間反復鍛造後焼なまし (徐冷) が施されている。

EPMA 調査：Table. 5-①と Photo. 6 に示す。鉄中に含有された非金属介在物の組成調査の目的でコンピュータプログラムによる高速定性分析を行った。分析個所は Photo. 6 の BE (組成像) に示す5の個所で、淡灰色結晶と暗黒色ガラス質スラグの両方が分析区域内に入る様に設定した。検出元素は、ナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg)、アルミ (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、銅 (Cu) らである。

これら検出元素の分布状態を特性X線像で示したのが Photo. 6 である。白色輝点の集中する個所が分析元素の存在を表わす。介在物全体はガラス質成分から構成されるので珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、カリウム (K) らが検出される。また、ガラス質スラグ中には淡灰色結晶が晶出していて、これからは鉄 (Fe) とチタン (Ti) の共存が確認できる。製鉄原料が砂鉄系であると推定できる。

この非金属介在物を定量分析している。Photo. 6 の下方の表に示すように、3は淡灰色結晶の中央部に電子線をスポット状に当てた時の分析結果である。酸化第1鉄 (FeO) が60.689%、二酸化チタン (TiO₂) が19.673%であり、他に造滓成分系の二酸化珪素 (SiO₂) 12.661%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) 4.762%、酸化カルシウム (CaO) 3.059%、酸化マグネシウム (MgO) 1.657%らが加わっているが、鉄 (Fe) -チタン (TiO₂) 系化合物が主要鉱物である。ウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO · TiO₂) であろう。

介在物基地の暗黒色ガラス質スラグの4は、二酸化珪素 (SiO₂) 33.824%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) 7.065%、酸化カルシウム (CaO) 4.837%、酸化カリウム (K₂O) 2.029%で、これに酸化第1鉄 (FeO) が42.125%加わっている。ガラス質スラグも砂鉄系であるので二酸化チタン (TiO₂) が2.994%含有されている。

淡灰色結晶と暗黒色ガラス質スラグ部両方が共存する5の分析個所では、3と4の定量値の平均的な傾向を示しており、二酸化チタン (TiO₂) は5.655%、酸化第1鉄 (FeO) が39.447%含有される。

以上のように、当分析結果の定量値は、今後の鉄製品中非金属介在物の同定の指針に役立つものとする

次第である。

ビッカース断面硬度：結果を Photo. 5 に示す。結晶粒が粗大化している個所は軟質で硬度値は164、微細粒個所は硬質化して203となっている。

化学組成：Table. 3 に酸化鉄部分に分析結果を示す。全鉄分 (TotalFe) は55.10%で、そのうちの大部分は酸化第2鉄 (Fe_2O_3) に変じて68.73%、残りは酸化第1鉄 (FeO) の9.05%である。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は11.67%含有される。炭素 (C) 量は酸化物で汚染されている為2.0%と高目であるが、他の随伴微量元素らは少ない。前述したJ-861D小鉄塊に比べるとその差は明瞭である。ただし銅 (Cu) だけは0.074%と高目になっている。

次に金属鉄は Table. 4 に示すように、炭素 (C) 量は顕微鏡組織のパーライト量で推定したものと大差なく0.47%であり、他の不純物もいたって少なく清浄な鋼となっている。非金属介在物に二酸化チタン (TiO_2) が強く検出されていたが、化学組成としてのチタン (Ti) は0.005%、バナジウム (V) Nil でこの分析値だけでは砂鉄系との判断はつけ難い結果になっている。この様に鉄製品は、化学分析のデータのみからは製鉄原料の推定は難しく検鏡や非金属介在物の同定結果の総合判断が望ましい事を示唆している。

以上の如く鉄器半製品は、砂鉄系素材の清浄な鋼を用い、焼なましのゆきとどいた鍛造で製造工程も十分に管理されていた事が確認された。

⑥ J-862B鉄滓：鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）

肉眼観察：表皮は淡黒色に小豆色を混じ、なめらかな肌に包まれているが、その皮膜が大半剥落し、小気泡が露出して粗鬆さが現われている。また木炭痕を残す。裏面は表皮と同色で滴下状凹凸と多くの木炭痕を残す。破面は黒色コークス状の多孔質であるが比重は大きい。椀形滓であるが周辺部の端部を欠損している。

顕微鏡組織：Photo. 1 の5段目に示す。鉱物組成は大きく成長した淡灰色短柱状結晶のフェアライト (Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) と白色粒状のヴスタイト (Wüstite： FeO)、これに暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓特有の晶癖を示す。

粉末X線回折：Table. 2 とFig. 1 に示す。主要鉱物はフェアライト (Fe_2SiO_4) とヴスタイト (Wüstite： FeO) であり、顕微鏡組織観察での検出鉱物と同じである。

化学組成：Table. 3 に示す。構成成分は1号工房跡出土のJ-861A鍛錬鍛冶滓に近似したものである。両者は同一成分系鉄素材を使ったと推定される。

⑦ J-862Cルツボ付着鉱物

肉眼観察：ルツボは直径約13cmの浅底手づくねで、肉厚の粗製土器である。口縁部は厚手に造られて27mm、底部近くで15mmを計測する。胎土は灰色粘土に砂粒を多く含む。器体内面は全面に黒色ガラス状溶解物が付着し、ピット状の窪みには赤銅色を呈する個所もあり、また緑青も数ヶ所に発生している。口唇部は特に高温にさらされて溶着鉱物がガラス化し、胎土内面に溶け込んで多孔質で灰茶色に変色しているのが認められる。調査試料は口唇部から採取した。

顕微鏡組織：Photo. 3 の1段目に示す。白色粒状部は銅 (Cu) である。顕微鏡下では白色ではなくて赤銅色で観察される。

EPMA 調査：Table. 5-(2)にコンピュータープログラムによる高速定性分析結果を示す。分析視野はPhoto. 7のSE (2次電子像) の個所である。検出元素はナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg)、アルミ (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、銅 (Cu) らである。これらの各元素の分布状態は Photo. 7 の特性X線像に示す。銅 (Cu) は粒状で存在し、他元素は基地

第6章 化学分析

のガラス質部分に分散する。鉄 (Fe) がガラス質部分に溶解されているのは注目される。

次に銅粒とガラス質部分の定量分析結果をみている。Photo. 7 の表に示すように銅粒 5、6、7 はそれぞれ銅 (Cu) 97% 以上を含み、他に 5 は鉛 (Pb) 0.628%、6 は硫黄 (S) 0.010%、7 は錫 (Sn) 0.011% を含有する。硫黄 (S) は黄銅鉱 (CuFeS_2) からの脈石生成成分が残留し、鉛 (Pb)、錫 (Sn) は湯流れをはかる添加合金元素と考えられる。ルツボは鑄銅作業に使用されたと推定される。

⑧ J-862B 銅粒・鉄滓付着物

肉眼観察：緑青をふいた 8 mm 程度の銅粒と、ほぼ同サイズ赤褐色の鉄滓が付着した試料である。一見緑青から銅細工の破損品とも思われたが、鉄滓に銅粒が後から溶着したものと推定される。

顕微鏡組織：Photo. 3 の 2、3 段目 (⑪⑫⑬) に示す。⑪は鉄滓の組織写真である。鉱物組成は淡灰色多角形状のウルボスピネル ($\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) と、白色粒状結晶のヴスタイト ($\text{Wüstite} : \text{FeO}$)、それに灰色木ざり状のフェアライト ($\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) らで構成される。チタン (Ti) 濃度の高い精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) の晶癖を示す。

⑫⑬は銅粒側の組織である。金属銅が残存し、白色偏片状異物が点在する。

EPMA 調査：鉄滓側の分析結果を Table. 5-3 と、Photo. 8 に示す。Table. 5-3 は、コンピュータープログラムによる高速定性分析結果である。検出元素は、マグネシウム (Mg)、アルミ (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) らである。鉄滓は、鉱物組成にウルボスピネルが認められたように、チタン (Ti) と鉄 (Fe) の Count が高く、前者 2104、後者 4403 と検出された。また、他は造滓成分系の元素で、これにマンガン (Mn) が加わっており、J-861B 鉄滓の化学成分として酸化マンガン (MnO) が 0.31% を含有する様に同系であることを示している。これら定性分析で検出された各元素の分布状態を特性 X 線像で示したのが Photo. 8 である。ウルボスピネル結晶には、鉄 (Fe)、チタン (Ti) に白色輝点が集中し、フェアライトには鉄 (Fe)、珪素 (Si)、また造滓成分のガラス質には、珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、カリウム (K) らに白色輝点が重なって、それら元素の存在が確認できる。

次に銅粒は Table. 5-4 と、Photo. 9 に分析結果を示す。高速定性分析結果が示すように、銅粒から検出される元素は、銅 (Cu)、砒素 (As)、鉛 (Pb) である。溶銅中に鉛 (Pb)、砒素 (As) を添加して湯流れをたかめ、鑄造作業の安定化をはかったものと推定される。Photo. 9 に特性 X 線像と定量分析結果を示す。SE (2 次電子像) の 1~4 に示す箇所が定量分析箇所である。1 が白色偏片状箇所、2 は偏片状部端部の黄味を帯びた箇所、3、4 は銅 (Cu) の基地箇所である。定量分析結果が示すように不純物が少なく純度の高い銅で 90~97% が銅 (Cu) である。鉛 (Pb) は 1~4 に隔たりなく含有されて 4% 台が検出される。白色偏片状は微量の錫 (Sn) と硫黄 (S) が含有される。硫化錫 (SnS) が形成されていたのであろうか、錫 (Sn) 0.043%、硫黄 (S) 0.061% とあまりにも微量であり、化合物としての同定判定にも苦しむ量である。

銅中の鉛 (Pb)、砒素 (As) は偏析なく固溶しており、銅合金の湯流れは良くて鑄造作業は容易だったと考えられる。前述した J-862C ルツボ溶着鉱物と成分的につながりがあるものと推定される。

ビッカース断面硬度：Photo. 5 に銅粒の硬度測定結果を示す。不純物が少なく純銅に近いもので、硬度値としては 39.6 と、きわめて軟質である。低炭素銅の 140 に対して約 $\frac{1}{3}$ の硬さであった。

(3) 3号工房跡出土品の調査

⑨ J-863A 鉄滓：精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓)

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査

肉眼観察：表裏ともに青灰色地に赤褐色の鉄錆を発生した鉄滓の中核部である。気泡を露出するが比重は大きい。木炭痕も一部に残存する。破面は黒色で緻密質。椀形鍛冶滓の周辺部が剥離した中央部と考えられる。

顕微鏡組織：Photo. 3の4段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite : FeO) と淡灰色多角形のマグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄)、灰色盤状結晶のフェアライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂)、それに基地の暗黒色ガラス質スラグらによって構成されている。精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) の晶癖である。

粉末X線回折：Table. 2とFig. 1に示す。主要鉱物はヴスタイト (Wüstite : FeO)、マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄)、フェアライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂)らであり、他に少量のゲーサイト (Goethite : α-FeO (OH)) を含む。この結果は肉眼観察及び顕微鏡組織と矛盾しない。

化学組成：Table. 3に示す。成分構成は、前述した1号工房跡出土品のJ-861B鉄滓の精錬鍛冶滓にほぼ近似するもので同類と考えられる。

⑩ J-863B鉄滓：精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓)

肉眼観察：表皮は小豆色を呈し、肌は比較的なめらかさを有し薄手の鉄滓である。裏面は黒色で局部的に赤褐色の鉄錆を発生する。破面は黒色で小さい気泡を散在させる。

顕微鏡組織：Photo. 3の5段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite : FeO)、淡灰色多角形のマグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄)、灰色木ずれ状のフェアライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂) らから構成される。なお一部に金属鉄 (Metallic Fe) の残留も認められる。精錬鍛冶滓に分類される。

化学組成：Table. 3に示す。これも前述したJ-863A鉄滓に準じた成分構成である。

⑪ J-863C鉄滓：精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓)

肉眼観察：表皮は黒色胎状を呈するガラス質鉄滓である。裏面は滴下状凹凸の反応痕に木炭痕を残し、一部砂粒含みの粘土を附着する。ガラス質椀形滓の一種で、かなり高温での生成物と考えられる。

顕微鏡組織：Photo. 4の1段目に示す。鉱物組成は少量の白色多角形のマグネタイト (Magnetite : 2Fe₃O₄) それに灰色木ずれ状のフェアライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。提示組織外は、非晶質のガラス質スラグが大半である。精錬鍛冶滓に分類される。

化学組成：Table. 3に示す。ガラス質鉄滓であるので鉄分は少なく、全鉄分 (Total Fe) は5.25%、そのうち酸化第1鉄 (FeO) が3.66%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) は3.44%の割合である。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO) が主成分であるので、その含有量は大きく90.56%である。二酸化チタン (TiO₂) はガラス質鉄滓であるので低く、0.91%、バナジウム (V) は0.018%である。他の随伴微量元素は、他の精錬鍛冶滓と同傾向であった。

⑫ J-863B小鉄塊

肉眼観察：鉄錆の赤褐色に包まれた小鉄塊で、亀裂を走らせ、その隙間より赤黒色の錆を滲み出させて金属鉄の残留を予測させる。

顕微鏡組織：Photo. 4の3、4段目 (⑭⑮⑯⑰) に示す。⑭は金属鉄の酸化を受けた錆部分である。⑮はピクラル腐食 (ピクリン酸ソーダの腐食液で約10秒間浸漬している) で現われた炭化物組織である。結晶粒界に極く微量の紐状セメントイト (Cementite : Fe₃C) が析出する。この炭化物から小鉄塊中の炭素量を推定すると0.01%以下で、純鉄に近い極低碳素鋼に分類される。⑯は研磨のままで腐食をしないで認められる非金属介在物である。組成分析は後述する。⑰は結晶粒を示す。全体に白い地はフェライト (Ferrite) である。黒い細い線はフェライト粒界を表わす。フェライト結晶粒は大小のものが混在している。全体的には不純物の少ない小鉄塊である。

第6章 化学分析

EPMA 調査：鉄中の非金属介在物の分析結果を Table. 5—(5)と Photo.10に示す。高速定性分析から非金属介在物の含有元素としてアルミ (Al)、珪素 (Si)、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、鉄 (Fe)、コバルト (Co)、銅 (Cu) らが検出される。これら各元素の分布状態を Photo.10の特性X線像で示す。非金属介在物中の暗黒色ガラス質部分からは珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K) に白色輝点が集中して元素の存在を明らかにする。白色粒状はヴスタイト (Wüstite : FeO) であり、鉄 (Fe) に白色輝点が集中する。なお銅 (Cu)、コバルト (Co)、硫黄 (S) は、非金属介在物中のみでなく、鉄素地全体に固溶されているのが特性X線像から認められる。

次にこれら非金属介在物の定量値について述べる。分析値は Photo.10の特性X線像の下の表に示すように、1の暗黒色ガラス質部分は造滓成分が多く、二酸化珪素 (SiO₂) 31.485%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) 3.3%、酸化カルシウム (CaO) 9.064%、酸化カリウム (K₂O) 2.974%である。残り半分は酸化第1鉄 (FeO) の49.483%が含有される。これに対して2の白色粒状部は酸化第1鉄 (FeO) が10.1%でヴスタイト (Wüstite : FeO) であることを証明する。なおこのヴスタイト結晶には二酸化チタン (TiO₂) 1.005%と酸化ジルコニウム (ZrO₂) を微量の0.032%を含むことにより製鉄原料は砂鉄系であることが判る。

ビッカース断面硬度：Photo. 5 に示す。結晶粒の大きい個所で140、小さい方で156である。また酸化鉄の個所は396であった。

化学組成：酸化鉄の部分の分析結果を Table. 3 に示す。炭素 (C) 量は、高炭素鋼レベルの1.04%を含有する。これは顕微鏡組織の炭化物量から推定した0.01%以下とは大きな隔りがある。酸化鉄部分なので、二次汚染を受けており、かつ偏析もあるのであろう。酸化鉄の分析結果の扱いは注意を要する。全鉄分 (Total Fe) は50.7%に対して酸化第1鉄 (FeO) は11.50%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) は酸化物なので高目の59.70%である。他の随伴微量元素らは、1号工房跡出土品の小鉄塊酸化物 J—861D に近似した値である。

次に金属鉄部分の分析結果を Table. 4 に示す。炭素 (C) 含有量は0.68%、珪素 (Si) 6.35%と両者は多いが他成分はおしなべて低目で純度のよい鋼種である。チタン (Ti) が0.022%、バナジウム (V) 0.020%は砂鉄系の原料と予測される。銅 (Cu) 0.012%、クロム (Cr) Nil、ニッケル (Ni) 0.022%、コバルト (Co) 0.03%、モリブデン (Mo) Nil らの数値は、酸化鉄の分析値同様 J—861D 小鉄塊、J—862鉄器半製品と大差ない成分系である。同一産地と推定される。

(4) D区土坑出土品の調査

⑬ J—864A ガラス質銅滓

肉眼観察：表皮は黒色地に小豆色を混じた流出状ガラス質滓である。裏面は灰色小波状の反応痕を残し、これに微細砂粒を含有した粘土を付着する。破面は2～3mmの気泡を散在し、その間に白色微細粉末を含有する。ガラス質鉄滓とは異質の滓である。

顕微鏡組織：Photo. 4 の5段目に示す。淡灰色の非晶質ガラス質地に白色粒状金属を点在させる、黒色球状部は気泡である。

粉末X線回折：Table. 2 と、Fig. 1 に示す。主要鉱物はアルファークォーツ (α -Quartz : SiO₂)、アルファークリスタバライト (α -Cristobalite : SiO₂) と微量の金属鉄 (Alpha Iron : α -Fe) が同定された。

EPMA 調査：Photo.11のSE (2次電子像) に撮影した粒状金属と基地のガラス質部の2箇所をコンピュータープログラムによって高速定性分析を行った。Table. 5—(6)に粒状金属部の分析結果を示す。検出元素は鉄 (Fe)、燐 (P)、珪素 (Si) である。粒状金属は鉄 (Fe) である。

Table 3 群馬県出土鉄滓・酸化鉄（錆部）・銅滓・砂鉄の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	区分	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化シリコン (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	遺滓成分		註	
																			Total Fe	Total Fe		
J-861A	鳥羽	KK161区 40I-22	鍛錬鍛冶滓	40.7	48.0	4.04	27.5	11.15	5.18	1.90	0.12	0.55	0.01	0.017	0.24	0.04	0.012	0.009	45.73	1.124	0.014	1
B	〃	〃	精錬鍛冶滓	45.5	42.2	18.15	17.70	6.84	5.90	2.67	0.31	4.42	0.02	0.004	0.39	0.19	0.23	0.006	33.11	0.728	0.097	〃
C	〃	〃	鍛錬鍛冶滓	40.3	31.3	22.83	26.4	10.01	5.51	1.66	0.11	0.96	0.01	0.054	0.21	0.19	0.038	0.042	43.58	1.081	0.024	〃
D	〃	〃	鉄酸化物	54.15	10.35	65.91	10.22	2.83	0.64	0.60	0.03	0.14	0.007	0.083	0.38	1.11	0.010	0.013	14.29	0.264	0.003	〃
J-862A	〃	2号	鉄酸化物	55.10	9.05	68.73	8.62	2.46	0.36	0.23	0.02	0.11	Nil	0.030	0.12	2.00	0.005	0.074	11.67	0.212	0.002	〃
B	〃	〃	鍛錬鍛冶滓	41.3	46.1	7.82	27.00	9.45	5.90	1.82	0.09	0.43	Nil	0.012	0.16	0.06	0.017	Nil	44.17	1.069	0.010	〃
J-863A	〃	3号	精錬鍛冶滓	45.2	42.0	17.95	17.12	9.82	4.34	2.67	0.28	4.17	0.02	0.016	0.31	0.33	0.28	0.008	33.95	0.751	0.092	〃
B	〃	〃	〃	42.6	46.1	9.64	20.68	8.73	7.36	0.66	0.40	5.42	0.02	0.035	0.31	0.13	0.30	Nil	37.43	0.879	0.127	〃
C	〃	〃	精錬鍛冶滓	5.25	3.66	3.44	60.2	18.71	9.01	2.64	0.10	0.91	Nil	0.003	0.16	0.06	0.018	Nil	90.56	17.250	0.173	〃
D	〃	〃	鉄酸化物	50.70	11.50	59.70	16.04	3.25	0.56	0.48	0.07	0.31	Nil	0.080	0.22	1.04	0.024	0.008	20.33	0.401	0.006	〃
J-864A	〃	3号 土坑	銅製錬滓	5.50	5.96	1.24	63.4	17.76	6.88	2.09	0.11	0.90	Nil	0.011	0.12	0.50	0.18	Nil	90.13	16.387	0.164	〃
A 2	有馬条里	グリット出土No.268	精錬鍛冶滓	46.5	41.5	20.33	15.96	5.48	3.19	1.99	0.38	4.20	0.020	0.040	0.41	0.14	0.34	Nil	26.62	0.592	0.090	2
A 3	〃	D-10G 西群表採	〃	46.0	53.9	5.88	22.90	5.86	4.87	0.99	0.15	1.40	0.012	0.020	0.44	0.05	0.14	Nil	34.62	0.753	0.030	〃
A 4	〃	HH-26HST-1号製鉄跡	砂鉄製錬滓	52.0	47.1	22.05	10.40	3.59	1.46	2.32	0.61	5.07	0.012	0.031	0.56	0.20	0.23	Nil	17.77	0.342	0.098	〃
A 5	〃	〃	〃	39.0	47.4	3.06	21.08	9.54	6.63	3.32	0.55	6.10	Nil	0.031	0.39	0.06	0.22	Nil	40.57	1.040	0.156	〃
A 6	〃	〃	〃	41.5	48.0	5.99	16.62	8.96	6.13	2.65	0.58	5.13	0.007	0.028	0.51	0.06	0.30	Nil	34.36	0.828	0.124	〃
A 7	〃	HST-2号製鉄跡	〃	32.0	40.2	1.03	24.24	13.45	6.63	3.32	0.61	8.67	0.023	0.030	0.47	0.18	0.33	Nil	47.64	1.489	0.271	〃
A 8	〃	〃	〃	45.0	48.4	10.52	14.54	10.45	3.19	2.49	0.52	8.09	0.023	0.027	0.45	0.24	0.34	Nil	30.67	0.682	0.180	〃
A 9	〃	HST-3号製鉄跡	〃	36.5	43.3	4.03	20.20	11.75	4.17	3.15	0.78	10.93	0.019	0.042	0.35	0.13	0.31	Nil	39.27	1.076	0.300	〃
A 10	〃	〃	〃	49.0	55.5	8.41	10.68	8.57	4.70	2.49	0.58	8.26	Nil	0.059	0.39	0.04	0.26	Nil	26.44	0.540	0.169	〃
A 11	〃	〃	〃	43.5	42.0	15.48	13.24	9.69	2.32	3.81	2.45	9.76	0.018	0.038	0.37	0.16	0.30	Nil	29.06	0.668	0.224	〃
A 12	〃	HK-1号鍛冶跡	精錬鍛冶滓	41.8	45.4	9.23	19.06	9.56	4.65	2.57	1.74	6.67	0.020	0.035	0.38	0.15	0.24	Nil	35.84	0.857	0.160	〃
V-901	空	第1鍛冶跡	鍛錬鍛冶滓	39.86	37.65	14.87	28.0	8.1	2.2	1.6	0.1	0.7	0.04	0.01	0.1	—	0.03	0.011	39.90	1.001	0.018	3
KANAI	金井	製鉄炉出土	砂鉄製錬滓	39.4	41.1	10.5	21.9	3.4	3.1	6.0	0.62	6.3	0.041	0.058	0.51	0.022	0.39	0.004	34.40	0.873	0.160	4
A	〃	製鉄炉前庭部	砂	56.48	28.64	48.93	4.9	4.2	0.77	1.4	0.50	4.0	0.016	0.028	0.41	0.93	0.36	0.225	—	—	—	〃
B	吾妻川	現地採取	砂	51.66	24.45	46.70	9.0	3.8	0.82	2.9	0.54	5.3	0.037	0.027	0.24	0.074	0.37	0.038	—	—	—	〃
C	砂居沢	〃	〃	54.73	28.02	47.11	8.2	3.9	0.82	3.0	0.51	4.8	0.027	0.024	0.31	0.049	0.35	0.012	—	—	—	〃

Table.3 註

- 1、大澤正己「鳥羽遺跡出土鍛冶・鑄銅関連遺物の金属学的調査」『鳥羽遺跡』I・J・K区助群馬県埋蔵文化財事業団1988
- 2、大澤正己「有馬条里遺跡出土鉄塊及び磁滓（製錬滓）・精錬鍛冶形滓の調査」『有馬条里遺跡』(浜川市発掘調査報告書第7集) 1983
- 3、井上唯雄他「製鉄遺構（小鍛冶遺構）」『空沢遺跡』(浜川市発掘調査報告書III) 浜川市教育委員会1987
当報告書発行後鉄滓を入手した為未発表、前掲書2に分析結果の1部を発表
- 4、大澤正己「製鉄原料（砂鉄・木炭・粘土）と鉄滓の科学的分析および結果の考察」『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』(浜川市文化財発掘調査報告1) 浜川市教育委員会 1975

Table 4 小鉄塊、鉄製品の化学組成

符 号	遺 跡 名	県 別	試 料	出 土 遺 構	推 定 年 代	原料分類	化 学 成 分 (%)																
							C	S i	M n	P	S	C u	T i	V	C r	N i	C o	M o	S n	C a	A l	M g	T o t a l F e
J-861D	鳥 羽	群 馬	小 鉄 塊	1号工房跡	8~9 C	砂鉄系	0.86	0.83	0.004	—	0.122	0.013	0.005	0.005	Niil	0.067	0.036	Niil	0.005	0.046	—	0.015	85.7
J-862A	〃	〃	鉄半製品	2号工房跡	〃	砂鉄系	0.47	0.005	0.004	0.016	0.003	0.008	0.005	Niil	0.023	0.023	Niil	0.006	0.006	0.005	0.003	0.080	99.2
J-863D	〃	〃	小 鉄 塊	3号工房跡	〃	砂鉄系	0.68	6.35	0.028	—	0.084	0.012	0.022	0.020	Niil	0.022	0.030	Niil	0.007	0.094	—	0.080	67.0
S08	東 山	II	富 山	1号炭窯	8 C	砂鉄系	0.30	7.16	0.67	0.26	0.080	0.004	9.75	0.80	0.19	0.006	0.018	0.007	0.007	1.26	5.58	2.23	—
S10	〃	〃	〃	住居跡(鍛冶工房)	8 C	〃	0.08	0.10	0.005	0.24	0.018	0.009	0.058	0.010	0.005	0.023	0.052	0.005	Niil	0.005	2.85	0.010	—
S19	上野赤坂A	〃	〃	製鉄炉(堅炉)	平安後期	〃	1.46	0.03	0.005	0.13	0.018	0.007	0.016	0.007	0.005	0.014	0.038	0.007	Niil	0.001	2.46	0.006	—
10	寺 尾	熊 本	〃	〃	8 C末~9 C	〃	0.28	2.26	0.023	0.047	0.008	Niil	0.071	Niil	0.013	0.010	0.037	Niil	Niil	0.013	0.11	—	3
2 C-92	大賀茂金山	静 岡	〃	Bトレンヂ 鉄造埋蔵上部	平安後期	〃	0.57	1.13	0.036	0.021	0.082	0.004	1.05	0.21	0.08	0.009	0.018	Trace	0.004	—	0.49	—	4
4	西 浦	北 崎 玉	〃	K 2 22	11C前半	〃	0.75	1.79	0.007	0.202	0.172	0.020	0.059	0.007	Niil	0.026	0.035	0.003	Niil	0.42	0.23	0.036	—
Z-822	押 入	西 岡 山	〃	〃	6 C末	鉱石系	0.92	0.07	0.025	0.013	0.015	Niil	Niil	Niil	Niil	0.020	0.044	Niil	Niil	Niil	0.23	0.023	—
6	西 浦	北 崎 玉	〃	K 3 雑	11C前半	砂鉄系	1.20	0.89	0.031	0.078	0.213	0.008	0.45	0.055	Niil	0.009	0.024	0.003	Niil	0.61	0.240	0.156	—
4 A-6	真 木	山 新 潟	〃	鉱滓散在地内	奈良末~平安初期	〃	1.55	<0.001	Trace	0.038	0.013	0.106	0.025	0.005	0.007	0.025	0.042	0.004	0.013	0.009	0.010	0.002	—
31	大 山	崎 玉	〃	D 区	9 C後半	〃	2.0	0.18	0.08	0.155	0.120	0.011	0.85	0.108	0.01	Trace	Trace	0.003	—	—	—	—	—
ARIMA	有 馬 桑 里	群 馬	〃	HH-7住No18	平安	〃	3.04	0.09	0.005	0.43	0.17	0.011	Niil	0.004	Niil	0.018	0.053	Niil	Niil	0.032	0.009	—	9
59	公 津	原 千 葉	〃	300掘立柱建物跡	奈良末~平安	〃	3.50	0.042	0.090	0.072	0.046	0.015	0.001	0.01	0.004	—	—	—	—	0.007	0.005	0.006	91.8
35	御 幸 畑	〃	〃	17号B製錬址	8 C	〃	4.28	1.195	0.033	0.043	0.058	0.009	0.156	0.09	0.02	—	—	—	—	0.093	0.259	0.061	79.4
G-863	産工会館用地	福 井	鉄 片	不 明	不明	鈹石系?	—	0.22	0.46	—	—	0.016	0.011	Niil	Niil	0.022	0.012	Niil	0.009	0.104	—	0.010	76.0
P-836	緑 山	岡 山	小 鉄 塊	製鉄炉	7 C前半	砂鉄系	0.99	0.005	Niil	0.014	0.014	0.023	0.017	Niil	Niil	—	—	—	—	Niil	0.005	0.002	—
2 C-823	柏 原	福 岡	〃	古墳供献	6 C後半	〃	0.36	4.96	0.27	0.045	0.093	Niil	5.38	0.040	0.32	0.013	0.010	Niil	Niil	0.70	2.45	0.56	48.10
FB15A	北 原	福 島	〃	鍛冶工房	9 C前半	〃	0.49	10.29	0.28	0.105	0.218	0.005	0.068	Niil	0.036	0.017	0.016	Niil	Niil	2.35	3.45	1.72	35.00
K-855	古 橋	滋 賀	〃	製鉄炉	6 C末~7 C初頭	鈹石系	0.84	0.05	0.01	0.011	0.021	0.013	0.003	Niil	Niil	0.006	0.058	—	—	0.025	0.015	Niil	98.9
K-856	〃	〃	〃	〃	〃	〃	0.36	3.40	0.16	0.025	0.142	0.005	0.17	0.011	Niil	Niil	0.030	—	—	0.33	1.65	0.38	61.7
U-852	佐 比 内	岩 手	小 鉄 塊	近世高炉	幕末~明治	鈹石系	4.47	0.41	0.12	0.064	0.032	0.10	0.007	0.005	0.005	0.013	0.016	Niil	Niil	0.045	0.007	Niil	94.6
I-861	西 久 保	熊 本	椀形薄中鉄	集 落	10C	砂鉄系?	0.88	0.02	0.003	0.010	0.070	0.006	0.004	Niil	Niil	0.025	0.025	0.051	0.004	0.049	0.044	0.011	98.7
H-864C	一ノ坪	佐 賀	小 鉄 塊	竪 穴	12~13C	砂鉄系	4.03	0.03	0.002	0.055	0.087	0.070	0.003	Niil	Niil	0.020	0.025	Niil	0.007	0.003	0.035	Niil	95.4
NAKA6	和良比中山	千 葉	鉄 製品	2号工房跡	5 C前半	鈹石系	0.86	1.99	0.02	0.077	0.112	0.010	0.25	0.008	0.006	0.040	0.013	Niil	Niil	0.22	1.40	0.13	59.6
D-864	内 越 矢 橋	〃	鉄 製品	25号住居跡	古墳後期	〃	0.85	0.01	0.010	0.034	0.004	0.25	0.004	Niil	Niil	0.060	0.030	Niil	0.007	0.013	0.018	0.004	98.7
W-863	上 野 新 高 島	小 鉄 塊	鉄 製品	S K 21	9 C後半頃	砂鉄系	1.30	0.43	0.025	0.15	0.086	0.008	0.51	0.038	0.009	0.027	0.031	0.008	0.005	0.004	0.083	0.045	92.5
KGZ-8	金子坂	福 島	小 鉄 塊	II b	平安時代	砂鉄系	2.61	1.03	0.012	0.084	0.084	0.011	0.50	0.009	0.011	0.024	0.062	Niil	Niil	0.010	0.038	0.023	—
O-863	長 野	A	福 岡	VII区包含層1層	古墳時代?	〃	0.25	9.53	0.047	0.073	0.038	0.012	0.11	Niil	Niil	0.010	0.013	Niil	Niil	0.96	1.98	0.26	48.8
O-865	〃	〃	〃	1号大溝1層西側	〃	〃	0.50	10.19	0.022	0.067	0.133	0.34	0.086	Niil	Niil	0.015	0.010	0.003	0.007	0.19	1.89	0.14	39.5
OKI-1	伊 原	沖 繩	小 鉄 塊	表 土	13~15C	鈹石系	0.93	0.49	0.031	0.046	0.018	0.006	0.012	0.020	0.012	0.016	0.016	Niil	Niil	0.13	0.21	0.064	—

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鑄銅関連遺物の金属学的調査

Table. 4 註

- 1、大澤正己「鳥羽遺跡出土鍛冶・鑄銅関連遺物の金属学的調査」『鳥羽遺跡』I・J・K区跡群馬県埋蔵文化財調査事業団1988
- 2、大澤正己「太閤山ランド建設に伴う遺跡調査の製鉄関連遺物の分析調査」
『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)』富山県教育委員会1983、3
- 3、大澤正己「曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査」『曲野遺跡』I（熊本県文化財調査報告書）第61集 熊本県教育委員会1983
- 4、大澤正己「大賀茂金山遺跡出土の鉄滓・鉄塊の分析調査」『大賀茂金山遺跡』下田市教育委員会1980
- 5、佐藤忠雄「大寄B遺跡・西浦北遺跡」埼玉県大里郡岡部町教育委員会1979
上記の報告は概報であり当分析結果は記載されていない、本報告にて発表予定
- 6、大澤正己「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第14集）津山市教育委員会1983
- 7、大澤正己「真木山遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」（補遺）『真木山製鉄遺跡』（豊津町文化財報告2）新潟県豊津町教育委員会1981
- 8、大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物の分析調査」『大山』（埼玉県遺跡発掘調査報告 第23集）埼玉県教育委員会1971
- 9、大澤正己「有馬条里遺跡出土鉄塊及び鉄滓（製錬滓）・精錬鍛冶碗形滓の調査」『有馬条里遺跡』（茨川市発掘調査報告書）1983
- 10、大澤正己「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分析結果」『研究紀要』7千葉県文化財センター1982
- 11、大澤正己「福井県金津町採取古代製鉄関連遺物の金属学的調査」金津町教育委員会提出原稿1986、10、2
- 12、大澤正己「綾部緑山遺跡出土の鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『緑山遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第19集）津山市教育委員会1986
- 13、大澤正己「福岡市所在柏原古墳群出土の鉄滓と小鉄塊の金属学的調査」『柏原古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第125集）福岡市教育委員会1986
- 14、大澤正己「北原遺跡出土の鉄滓・小鉄塊・羽口先端溶着スラグの金属学的調査」『北原遺跡』国道113号線バイパス遺跡調査報告I 福島県文化財調査報告書第166集 福島県教育委員会 福島県文化財センター1986
- 15、大澤正己「古橋遺跡出土の鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『古橋遺跡』滋賀県教育委員会提出原稿1985、8、15
- 16、遠野市教育委員会『佐比内鉄鉱山』1984、1985、10、20現地に表面採取した小鉄塊の分析結果、未発表
- 17、鹿本郡鹿本町所在遺跡、熊本県教育委員会 野田拓治氏調査1985、3
当サンプルは鳥栖市教育委員会 石橋新次氏経由で入手、未発表
- 18、石橋新次編『鳥栖市団地営園場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』（鳥栖市文化財調査報告書 第24集）1985 報告書発行後に試料入手、未発表
- 19、大澤正己「和良比中山遺跡鍛冶工房跡製鉄関係遺物の金属学的調査」『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』〈中山遺跡〉（財団法人印幡都市文化財センター発掘調査報告書第11集）財団法人印幡都市文化財センター1987
- 20、大澤正己「上座矢橋遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」〈千葉県佐倉市第2ユーカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書〉『上座矢橋遺跡』（財団法人印幡都市文化財センター発掘調査報告書第4集）山万株式会社、財団法人印幡都市文化財センター1986
- 21、大澤正己「出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物及び内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『出雲崎町番場遺跡』（国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書第48集）新潟県教育委員会1987
- 22、大澤正己「金子坂遺跡製鉄関連遺物の金属学的調査」『金子坂遺跡』—古代製鉄遺跡の調査—福島県相馬郡新地町教育委員会1987
- 23、大澤正己「長野A遺跡出土鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『長野A遺跡3』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第55集）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1987
- 24、沖縄県教育委員会大城慧氏よりの提供試料 近日中報告予定

基地のガラス質部分は、Table. 5 一(7)に示すように造滓成分系の元素である珪素 (Si)、アルミ (Al)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na)、カリウム (K) で、これにチタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) が加わる。

粒状金属の鉄 (Fe) と、基地ガラス質部の元素分布状態を特性X線像で示したのが Photo.11である。白色輝点の集中が元素存在の証明となる。粒状金属には鉄 (Fe) と燐 (P) が検出される。ガラス質部分からは珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、カリウム (K)、ナトリウム (Na) が強度高く検出され、これに微量のチタン (Ti) が加わっている。

又、鉄粒とガラス質部分の定量分析結果を Photo.11の表に示している。鉄粒 (1) は鉄 (Fe) を95.877%含有し、燐 (P) が1.44%である。ガラス質部分 (2) は、二酸化珪素 (SiO₂) 56.4%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) 18.49%、酸化カルシウム (CaO) 6.158%、酸化マグネシウム (MgO) 2.928%、酸化ナトリウム (Na₂O) 2.144%と合計86%を占め、他に酸化第1鉄 (FeO) を9.1%が加わっている。

化学組成：Table. 3 に示す。銅滓ではあるが銅分はなく、ガラス質成分主体に微量鉄分を含有した鉱物である。全鉄分 (Total Fe) が5.50%で、このうち酸化第1鉄 (FeO) 5.96%と酸化第2鉄 (FeO₃) 1.24%の割合で

第5章 成果と課題

ある。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO) は90.13%で、このなかの酸化カルシウム (CaO) が高く6.88%を占めて前述した鉄滓と大差ない数値である。また二酸化チタン (TiO₂) は0.90%、バナジウム (V) 0.018%を含有する。他の随伴微量元素らも J-863C ガラス質鉄滓と大きな隔りが無い。銅 (Cu) は Nil である。該滓は銅粒の残留がなく、銅 (Cu) が検出されない訳である。

補足

なおガラス質スラグ中に鉄粒が検出される滓は次の遺跡でも確認されている。大阪府南河内郡美原町下黒山所在の太井遺跡である。鉛入銅片とガラス質銅滓は共伴し、銅生産工程の真吹作業の荒銅溶解時の排出滓と推定している。推定年代は平安時代である。

大澤正己「太井 (その1、その3) および観音寺遺跡出土銅溶解滓と銅片の金属学的調査」 S62.12.20 大阪文化財センターへの提出原稿。

```

POS. NO.      3
HOLDER NO.   J-862A
X(MM)        40.000
Y(MM)        40.000
Z(MM)        11.000
COMMENT(8 CHARACTER)
IC,R.:SAMEJ
J-862A
READY(PAGE) 7

POS. NO.      3
COMMENT       : J-862A
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 4.990E-08 (A)
STAGE POS.   : X 40000 Y 40000 Z 11000
11-JUN-86

CH(1) TAP      CH(2) FET      CH(3) LIF
EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)
Y -1  6.45  153 *****
SR-1  6.84  168 *****
W -m  6.98  140 *****
● SI-k  7.13  7194 *****
RB-1  7.32  116 *****
○ AL-k  8.34  1396 *****
BR-1  8.37  230 *****
AS-1  9.67  39 *****
○ MG-k  9.89  233 *****
BE-1  10.44  29 *****
BA-1  11.25  20 *****
○ HA-k  11.91  53 *****
F -k  18.32  4 *****

● TI-k  2.75  1049 *****
BA-1  2.78  27 *****
○ CA-k  3.26  1076 *****
SB-1  3.44  26 *****
SM-1  3.60  26 *****
○ K -k  3.74  221 *****
CD-1  3.96  8 *****
CL-k  4.73  29 *****
S -k  5.37  7 *****
HO-1  5.41  4 *****
HB-1  5.72  2 *****
ZR-1  6.07  8 *****
F -k  6.16  10 *****

FB-1  1.18  54 *****
PT-1  1.31  50 *****
IR-1  1.35  57 *****
ZN-k  1.44  49 *****
○ CU-k  1.54  138 *****
NI-k  1.66  29 *****
CO-k  1.79  30 *****
● FE-k  1.94  4448 *****
○ MN-k  2.10  74 *****
CR-k  2.29  11 *****
V -k  2.50  19 *****
CE-1  2.56  7 *****
LA-1  2.67  7 *****

RESULTS:
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
HA HO AL SI K CA TI MN FE CU ←検出元素
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CL LA

```

(白色結晶及び暗黒色ガラス質スラグの両方に、面状分析を行なうと検出された元素は上記の通りである。白色結晶は鉄(Fe-K)、チタン(Ti-K)が含有されていてチタン-鉄化合物(例えばウルボスピネル:Ulvospinel:2FeO・TiO₂)の存在が想定される。製鉄原料は砂鉄である。)

Table. 5-(1) J-862A 鉄器半製品中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

```

POS. NO.      3
HOLDER NO.   J-862C
X(MM)        40.000
Y(MM)        40.000
Z(MM)        11.000
COMMENT(8 CHARACTER)
IC,R.:SAMEJ
J-862C
READY(PAGE) 7

POS. NO.      3
COMMENT       : J-862C
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS.   : X 40000 Y 40000 Z 11000
11-JUN-86

CH(1) TAP      CH(2) FET      CH(3) LIF
EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)
Y -1  6.45  149 *****
SR-1  6.84  167 *****
W -m  6.98  150 *****
● SI-k  7.13  11346 *****
RB-1  7.32  106 *****
○ AL-k  8.34  2723 *****
BR-1  8.37  1028 *****
AS-1  9.67  39 *****
○ MG-k  9.89  211 *****
BE-1  10.44  22 *****
BA-1  11.25  22 *****
○ HA-k  11.91  58 *****
F -k  18.32  3 *****

○ TI-k  2.75  128 *****
BA-1  2.78  60 *****
○ CA-k  3.26  245 *****
SB-1  3.44  42 *****
SM-1  3.60  27 *****
○ K -k  3.74  228 *****
CD-1  3.96  10 *****
CL-k  4.73  8 *****
S -k  5.37  8 *****
HO-1  5.41  7 *****
HB-1  5.72  7 *****
ZR-1  6.07  8 *****
F -k  6.16  9 *****

FB-1  1.18  54 *****
PT-1  1.31  50 *****
IR-1  1.35  45 *****
ZN-k  1.44  48 *****
● CU-k  1.54  3457 *****
NI-k  1.66  40 *****
CO-k  1.79  28 *****
○ FE-k  1.94  623 *****
○ MN-k  2.10  17 *****
CR-k  2.29  10 *****
V -k  2.50  8 *****
CE-1  2.56  8 *****
LA-1  2.67  6 *****

RESULTS:
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
HA HO AL SI K CA TI MN FE CU ←検出元素
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CL LA

```

(Photo. 7のSE(2次電子像)に示す視野を分析した。検出元素は上記の通りである。粒状金属は銅(Cu)である。基底はガラス質成分であるが、これから鉄(Fe)も共存して検出されているのは注目される。)

Table. 5-(2)、J-862C ルツボ溶着鉱物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・铸銅関連遺物の金属学的調査

POS. NO. 1
 COMMENT : J-862D1
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT : 4.990E-08 (A)
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
 12-JUN-86

CH(1) TAP				CH(2) FET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	156	*****	TI-k	2.75	2104	*****	PE-1	1.18	54	*****
SR-1	6.86	150	*****	BA-1	2.78	68	*****	PT-1	1.31	56	*****
W -m	6.98	127	*****	CA-k	3.36	798	*****	IR-1	1.35	47	*****
SI-k	7.13	3612	*****	SR-1	3.44	39	*****	ZN-k	1.44	40	*****
RE-1	7.32	93	*****	SN-1	3.60	30	*****	CU-k	1.54	45	*****
AL-k	8.34	1492	*****	OK -k	3.74	219	*****	NI-k	1.66	28	*****
BR-1	8.37	604	*****	CD-1	3.96	13	*****	CO-k	1.79	34	*****
AS-1	9.67	32	*****	CL-k	4.73	10	*****	FE-k	1.94	4403	*****
HG-k	9.89	506	*****	S -k	5.37	9	*****	MN-k	2.10	46	*****
GE-1	10.44	29	*****	MO-1	5.41	7	*****	CR-k	2.29	12	*****
GA-1	11.29	20	*****	NR-1	5.72	7	*****	V -k	2.50	11	*****
NA-k	11.91	30	*****	ZR-1	6.07	3	*****	U -k	2.56	53	*****
F -k	18.32	5	*****	P -k	6.16	6	*****	CE-1	2.56	4	*****
								LA-1	2.67	3	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 HB AL SI K CA TI MN FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

(鉄滓中の結晶は、チタン濃度の高いもので砂鉄系の製鉄原料が想定される。検出元素は上記の如く、ガラス質成分の珪素(Si) Count 3612, アルミ(Al)Count 1492, マグネシウム(Mg)Count 506, カルシウム(Ca)Count 792, カリウム(K)Count 219である。前述の如く鉄(Fe)はCount 4403, チタン(Ti)Count 2104, 全体にマンガン(Mn)Count 46が散在する。)

Table. 5-(3) J-862D 鋼粒・鉄滓付着物の鉄滓側のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果。

POS. NO. HOLDER NO. X(MM) Y(MM) Z(MM) COMMENT(S CHARACTER)
 CO:ENDJ : 1 40.000 40.000 11.000 J-862D2
 12-JUN-86
 READY(PAGE) ?

POS. NO. 2

COMMENT : J-862D2
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
 12-JUN-86

CH(1) TAP				CH(2) FET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	241	*****	TI-k	2.75	101	*****	PE-1	1.18	138	*****
SR-1	6.86	188	*****	BA-1	2.78	109	*****	PT-1	1.31	83	*****
W -m	6.98	178	*****	CA-k	3.36	53	*****	IR-1	1.35	78	*****
SI-k	7.13	174	*****	SR-1	3.44	51	*****	ZN-k	1.44	85	*****
RE-1	7.32	128	*****	SN-1	3.60	50	*****	CU-k	1.54	11607	*****
AL-k	8.34	93	*****	K -k	3.74	42	*****	NI-k	1.66	55	*****
BR-1	8.37	67	*****	CD-1	3.96	17	*****	CO-k	1.79	44	*****
AS-1	9.67	89	*****	CL-k	4.73	24	*****	FE-k	1.94	35	*****
HG-k	9.89	35	*****	S -k	5.37	9	*****	MN-k	2.10	22	*****
GE-1	10.44	26	*****	MO-1	5.41	19	*****	DR-k	2.29	19	*****
GA-1	11.29	26	*****	NR-1	5.72	9	*****	V -k	2.50	11	*****
NA-k	11.91	24	*****	ZR-1	6.07	8	*****	CE-1	2.56	12	*****
F -k	18.32	6	*****	P -k	6.16	14	*****	LA-1	2.67	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 CU AS PB ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 HL P CL NB BA

(鋼粒は純銅に近いもので、Cu-KのCountは11607、他に微量の鉛(Pb)Count 138、それに砒素(As)Count 89が検出された。鉛(Pb)、砒素(As)は、溶銅の湯流れを良くするために添加された可能性をもつ。)

Table. 5-(4) J-862D 鋼粒・鉄滓付着物の鋼粒側のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果。

POS. NO. HOLDER NO. X(MM) Y(MM) Z(MM) COMMENT(S CHARACTER)
 CO:ENDJ : 1 40.000 40.000 11.000 J-863D
 11-JUN-86
 READY(PAGE) ?

POS. NO. 4

COMMENT : J-863D
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
 11-JUN-86

CH(1) TAP				CH(2) FET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	191	*****	TI-k	2.75	127	*****	PE-1	1.18	63	*****
SR-1	6.86	183	*****	BA-1	2.78	68	*****	PT-1	1.31	67	*****
W -m	6.98	160	*****	CA-k	3.36	1080	*****	IR-1	1.35	54	*****
SI-k	7.13	5045	*****	SR-1	3.44	57	*****	ZN-k	1.44	49	*****
RE-1	7.32	113	*****	SN-1	3.60	28	*****	CU-k	1.54	58	*****
AL-k	8.34	482	*****	OK -k	3.74	291	*****	NI-k	1.66	30	*****
BR-1	8.37	195	*****	CD-1	3.96	13	*****	CO-k	1.79	50	*****
AS-1	9.67	45	*****	CL-k	4.73	12	*****	FE-k	1.94	7447	*****
HG-k	9.89	41	*****	OS -k	5.37	21	*****	MN-k	2.10	13	*****
GE-1	10.44	24	*****	MO-1	5.41	9	*****	CR-k	2.29	10	*****
GA-1	11.29	24	*****	NR-1	5.72	6	*****	V -k	2.50	6	*****
NA-k	11.91	31	*****	ZR-1	6.07	4	*****	CE-1	2.56	6	*****
F -k	18.32	6	*****	P -k	6.16	13	*****	LA-1	2.67	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 AL SI S K CA TI FE CU ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 AS SB PT

(非金属介在物は、ガラス質の非晶質部分とウスタイト(Wustite:FeO)で構成されたものの分析を行なった。チタン(Ti)の検出から砂鉄系の原料と推定できる。原料成分の特徴として、コバルト(Co)、硫黄(S)、銅(Cu)を微量含有することである。)

Table. 5-(5) J-863D 小鉄塊中の非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果。

第6章 化学分析

```

POS. NO.   HOLDER NO.   X(MM)   Y(MM)   Z(MM)   COMMENT(R CHARACTER)
          [O:END]
          :1,         40.000  40.000  11.000  J-B64A
READY(PAGE) ?

POS. NO.   4

COMMENT    : J-B64A
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
15-H0V-R6

CH(1) TAP          CH(2) PET          CH(3) LIF
EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)
Y -1  6.45  217 *****
SR-1  6.86  172 *****
W -m  6.98  157 *****
SI-k  7.13  182 *****
RB-1  7.32  125 *****
AL-k  8.34  76 *****
BR-1  8.37  65 *****
AS-1  9.67  49 *****
MG-k  9.89  38 *****
GE-1  10.44  32 *****
GA-1  11.29  28 *****
NA-k  11.91  21 *****
F -k  18.32  13 *****

TI-k  2.75  92 *****
BA-1  2.78  87 *****
CA-k  3.36  66 *****
SB-1  3.44  44 *****
SN-1  3.60  29 *****
K -1  3.74  35 *****
CD-1  3.96  12 *****
CL-k  4.73  6 *****
S -k  5.37  6 *****
HO-1  5.41  8 *****
NB-1  5.72  7 *****
ZR-1  6.07  4 *****
P -k  6.16  147 *****

PB-1  1.18  89 *****
PT-1  1.31  79 *****
IR-1  1.35  82 *****
ZN-k  1.44  73 *****
CU-k  1.54  59 *****
NI-k  1.66  58 *****
CO-k  1.79  65 *****
FE-k  1.94  9449 *****
MN-k  2.10  22 *****
CR-k  2.29  11 *****
V -k  2.50  7 *****
CE-1  2.56  7 *****
LA-1  2.67  8 *****
    
```

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESFT
SI P FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CO SP

(Photo. 11のSE(2次電子像)に示した視野での分析結果である。球状金属は、鉄(Fe)でこれに微量の燐(P)と珪素(Si)が加わる。)銅滓中に鉄粒が検出される例は時々ありうる。

Table. 5-(6) J-864A 銅滓中の鉄粒のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

```

POS. NO.   HOLDER NO.   X(MM)   Y(MM)   Z(MM)   COMMENT(R CHARACTER)
          [O:END]
          :1,         40.000  40.000  11.000  J-B64A
READY(PAGE) ?

POS. NO.   6

COMMENT    : J-B64A
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 4.991E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
15-H0V-R6

CH(1) TAP          CH(2) PET          CH(3) LIF
EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)  EL  WL  COUNT  INTENSITY(LOG)
Y -1  6.45  96 *****
SR-1  6.86  166 *****
W -m  6.98  220 *****
SI-k  7.13  22322 *****
RB-1  7.32  96 *****
AL-k  8.34  7349 *****
BR-1  8.37  327 *****
AS-1  9.67  40 *****
MG-k  9.89  935 *****
GE-1  10.44  26 *****
GA-1  11.29  14 *****
NA-k  11.91  66 *****
F -k  18.32  4 *****

OTI-k  2.75  170 *****
BA-1  2.78  44 *****
OCA-k  3.36  999 *****
SB-1  3.44  34 *****
SN-1  3.60  16 *****
OK -k  3.74  291 *****
CD-1  3.96  5 *****
CL-k  4.73  7 *****
S -k  5.37  1 *****
HO-1  5.41  2 *****
NB-1  5.72  2 *****
ZR-1  6.07  1 *****
P -k  6.16  3 *****

PB-1  1.18  31 *****
PT-1  1.31  31 *****
IR-1  1.35  31 *****
ZN-k  1.44  27 *****
CU-k  1.54  27 *****
NI-k  1.66  19 *****
CO-k  1.79  17 *****
FE-k  1.94  509 *****
OMN-k  2.10  20 *****
CR-k  2.29  5 *****
V -k  2.50  3 *****
CE-1  2.56  5 *****
LA-1  2.67  3 *****
    
```

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESFT
NA MG AL SI K CA TI MN FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CL MO

(検出元素は上記の如くガラス質成分のNa,Mg,Al,Si,K,Ca,らであり、これにTi,Mn,Feが加わる。)

Table. 5-(7) J-864A 銅滓中の基地ガラス質部分のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

4、まとめ

鳥羽遺跡の奈良・平安時代に属する3群(1、2、3号工房跡)の工房跡出土遺物を調査して次の事が明らかになった。要約結果をTable. 6に記載する。

<1> 1号工房跡出土の鍛冶関連遺物

1号工房跡は、鉄器製作のための素材成分調整の精錬鍛冶(大鍛冶)及び鍛造加工を行なった工房跡に想定される。精錬鍛冶に供された小鉄塊は、過共析鋼(C:0.77%以上)レベルで、砂鉄系原料から還元されたものである。これら小鉄塊らは成分調整のため再加熱され、鉄素材として精錬鍛冶(大鍛冶)された際に鍛冶炉の炉底に堆積した椀形状鉄滓が生成されている。該品は鉱物組成にヴスタイト(Wüstite: FeO)、フェアライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂)、マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)らを共存させ、化学組成として全鉄分(Total Fe)45%台、二酸化チタン(TiO₂)4.42%、バナジウム(V)0.23%を含有する。

また、鉄器鍛造時点で鉄素材を加熱し、赤熱鉄素材と炉材粘土が反応して生成された鍛錬鍛冶滓(小鍛冶滓)も確認できた。この種の鉄滓の鉱物組成は、フェアライト+ヴスタイト、これにガラス質を含むものから

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査

Table. 6 調査結果の要約

符号	試料	工房No	分類	検鏡及び硬度			化学組成%						備考
				鉱物組成	Metall	ピッカース断面硬度	Total Fe	CaO	TiO ₂	V	Cu	C	
J-861A	鉄滓	1号跡	鍛錬鍛冶滓	F+W+Ga	—	—	40.7	5.18	0.55	0.012	0.009	0.04	梔形滓の中核部
B	〃	〃	精錬鍛冶滓	W+M+F	—	—	45.5	5.90	4.42	0.23	0.006	0.19	梔形滓
C	〃	〃	鍛錬鍛冶滓 (金属鉄含む)	F+Ga	パーライト 軟鋼クラス	—	40.3	5.51	0.96	0.038	0.042	0.19	鍛冶滓の一部に 軟鋼を含有する
D	小鉄塊	〃	硬鋼 ～過共析鋼	—	パーライト	低C: 133 高C: 161	54.15 85.7	0.64 0.046	0.14 0.005	0.010 0.005	0.013 0.013	1.11 0.86	鉄塊中に炭素含有 量の偏析が認められる
J-862A	鉄器半製品	2号跡	亜共析鋼	非金属介在物 砂鉄系	パーライト	粗粒: 164 粗粒: 203	55.10 99.2	0.36 0.006	0.11 0.005	0.005 Nil	0.074 0.008	2.00 0.47	タガネ状半製品 仕上げ熱処理が やられていない
B	鉄滓	〃	鍛錬鍛冶滓	W+F	—	—	41.3	5.90	0.43	0.017	Nil	0.06	周縁部を欠いた 梔形滓
C	ルツボ付着物	〃	銅滓	ガラス質	Cu+Pb +Su+S	—	—	—	S 0.010	Sn 0.011	97	Pb 0.6	肉厚の大型ルツボ (13cm径) 付着 鉱物
D	銅粒・鉄滓付着	〃	銅粒・鉄滓 付着物	鉄滓: U+W	Cu+Pb +Sn+S	銅粒39.6	—	—	—	—	96	Pb 4	鉄滓に溶銅が接 合したと考えら れる
J-863A	鉄滓	3号跡	精錬鍛冶滓	W+M	—	—	45.2	4.34	4.17	0.28	0.008	0.33	梔形滓の中核部
B	〃	〃	〃	〃	—	—	42.6	7.36	5.42	0.30	Nil	0.13	高温で流動した 鍛冶滓
C	〃(ガラス質)	〃	精錬鍛冶滓	F+M	—	—	5.25	9.01	0.91	0.018	Nil	0.06	炉壁近くで高温 で溶融した鉄滓
D	小鉄塊	〃	極軟鋼	非金属介在物 低Ti系	セメント 極低炭素鋼	錆部: 396 M. Fe: 140 〃: 156	50.7 67.0	0.56 0.094	0.31 0.022	0.024 0.020	0.008 0.012	1.04 0.68	炭素含有量の偏 析の大きい鉄塊
J-864A	ガラス質銅滓	3号南 土壇	銅滓	ガラス質	鉄粒	—	5.50	6.88	0.90	0.018	Nil	0.50	ガラス質銅滓、 銅分を含有しない

小鉄塊、鉄器半製品の棟は上段が酸化物、下段が金属として分析した結果である。

構成される。化学組成は全鉄分 (Total Fe) 40%台、二酸化チタン (TiO₂) 1%以下、バナジウム (V) 0.012~0.038%である。鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) には金属鉄 (Metallic Fe) が残留しており、軟鋼 (C: 0.19%以下) クラスの炭素 (C) 含有量であった。

〈2〉 2号工房跡出土の鍛冶関連遺物と鋳銅遺物

鍛冶関連遺物：タガネ状鉄器半製品と鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) の調査を行なった。鉄器半製品は、0.47%炭素 (C) を含有する亜共析鋼レベルで、結晶粒が粗密混在し、やや過熱気味の焼なましが行われている。鉄中の非金属介在物はチタン (Ti) 分を含有することから砂鉄系原料の裏付けがとれた。また、随伴微量元素からみて、1、3号工房出土の小鉄塊らと同一成分系で産地も同じと想定される。

鉄滓の鉱物組成はヴスタイト (Wüstite: FeO) + フェアライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂) で構成され、化学組成は全鉄分 (Total Fe) 41.3%、二酸化チタン (TiO₂) 0.43%、バナジウム (V) 0.017%を含有する。鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) の晶癖と成分構成をよく表わしている。

鋳銅遺物：直径約13cm程度の浅底手ずくねによる厚手土器で、内面に溶着した緑青ぶきのガラス質鉱物は銅滓であった。ガラス質鉱物中には、金属銅粒が残存し、銅 (Cu) は97%、これに微量の鉛 (Pb)、錫 (Sn)、硫黄 (S) らが検出された。鉛入り青鉛品の鋳銅が想定される。

次に鉄滓に銅滴が接着した塊が検出されている。この銅滴は、銅 (Cu) を96%、鉛 (Pb) 4%を含有する合金であった。溶銅中への鉛 (Pb) 添加は、鋳造過程での湯流れを配慮した合金化と考えられる。ルツボ溶着銅滓と鉄滓接着銅滴は、両者は同系成分で有機的なつながりをもつものと推定される。また両者の銅鉱は、黄

第6章 化学分析

銅鈹 (CuFeS₂) で、還元吹き (Reducing Smelting) による産物と考えられる。

一方、鉄滓接着銅滴の鉄滓は、精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) で、鈹物組成にチタン濃度の高いウルボスピネル (Ulvospinel: 2FeO・TiO₂) + ヴスタイト (Wüstite: FeO) + フェアライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂) で構成される。

〈3〉 3号工房跡出土の鍛冶関連遺物

3号工房跡からも小鉄塊と精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) が出土した。当工房跡においても1号工房跡と同様の鍛冶作業がなされたものと推定される。

〈4〉 1、2、3号工房跡出土の小鉄塊、鉄器半製品、鉄滓 (精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓) らは、いずれも同一産地からの供給品と推定される。これらの産地同定が今後の検討課題となってくる。なお、鳥羽遺跡出土鉄滓中の酸化カルシウム (CaO) が5~9%と高値を示し、高値由来が注目される。今回の調査試料に入っていないが、当遺跡ではチップ状に破碎された珪化木が多量に出土すると指摘されている。酸化カルシウム (CaO) と珪化木との関係が如何なるものか追求の必要があろう。なお Table. 3 に示した群馬県所在遺跡のうち、有馬条里遺跡、空沢遺跡における鉄滓 (鍛冶滓) の酸化カルシウム (CaO) 含有量が、2.2~4%台と、やはり高目であり、この地域的特質が何に原因するのか、みきわめが必要となってくる。

〈5〉 鉄器製造と鋳銅作業

古代、中世、近世にかけての遺跡で、製錬、鍛冶と鋳銅作業が並列で実施されたところは多い。筆者が調査した事例を Table. 7 に示す。古代においては、律令体制下の統括のもとに両作業は行なわれている。鳥羽

Table. 7 鉄滓と銅滓、銅粒、ルツボ共伴の出土例

番号	遺跡名	出 土 地		推 定 年 代	製鉄・鍛冶と鋳銅・銅製錬の組合せ
		県 別	所 在 地		
1	鳥 羽	群 馬	群馬郡群馬町大字稻荷台	奈良・平安	銅滓溶着ルツボ、銅粒接着鉄滓と椀形鍛冶滓
2	台 耕 地	埼 玉	大里郡花園村大字黒田	平安時代 (国分期)	製錬鍛冶と共に印章鋳型銅粒出土
3	谷 津	千 葉	千葉市花輪町346	平安時代	鍛冶滓と印章鋳型銅粒出土
4	一 ツ 橋	東 京	千代田区東神田1丁目12番地	近 世	椀形鍛冶滓とルツボ
5	紀州屋敷	〃	千代田区	〃	多量の椀形鍛冶滓と小型ルツボ、銅インゴット、銅ナマコ
6	三 貫 地	福 島	相馬郡新地町駒ヶ嶺原口	奈良平安時代	鉄滓とルツボ
7	金屋ノ浜	石 川	鳳至郡穴水町	17 C	鍛冶滓と青銅溶解ルツボ
8	曲 り 田	福 岡	糸島郡二丈町大字石崎	奈良時代後半 (8 C 後葉)	鍛冶滓と銅鋳造溶解滓
9	太 宰 府	〃	太宰府市	平安時代	〃
10	徳 力	〃	北九州市小倉南区徳力	平安時代	鍛冶滓と銅製錬滓
11	今 町 梅 坂	佐 賀	鳥栖市今町梅坂	古墳時代	羽口破片とルツボ
12	今 福	長 崎	南高来郡北有馬町今福	中世?	鍛冶滓と大小ルツボ鋳銅作業
13	上 加 世 田	鹿児島	加世田市上加世田	中世 (室町後期)	製鉄一貫作業 (製錬、鍛冶) と鋳銅作業 (土器付着飛末銅)
14	尚古集成館	〃	鹿児島市吉野町	近世 (幕末)	高炉滓と反射炉滓 (鉄と銅か)

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査

Table. 7 註

- 1、大澤正己「鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査」『鳥羽遺跡』I・J・K区(叻群馬県埋蔵文化財調査事業団1988)
- 2、大澤正己「台耕地遺跡出土の鋳銅・製鉄関係遺物の金属学的調査」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書XI X』〈台耕地II〉(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1984
- 3、大澤正己「谷津遺跡出土の製鉄鋳銅関連遺物の分析調査」『谷津遺跡』千葉市教育委員会1984
- 4、大澤正己「鉄滓・ルツボ・羽口等の科学的分析及び結果の考察」『江戸』(都立一橋高校地点発掘調査報告)都立一橋高校内遺跡調査団1985
- 5、大澤正己「紀尾町遺跡出土金属加工関連遺物の科学的調査」『紀尾町遺跡調査報告書』紀尾町遺跡調査会1988
- 6、大澤正己「三貫地遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『国道113号バイパス遺跡調査報告III』(福島県文化財調査報告書第179集)福島県教育委員会・(叻福島県文化センター1987. 3)
- 7、穴水町教育委員会調査、報告書準備中
- 8、大澤正己「石崎曲り田遺跡出土の鉄塊・鉄滓・銅滓の金属学的調査」『石崎曲り田遺跡』II福岡県教育委員会1984
- 9、未発表試料S54, 12, 13森田勉氏より提供を受けた試料6 AYT-A. GM50 79, 12, 04
- 10、大澤正己「徳力遺跡第2地点出土の銅製錬滓・鉄滓の金属学的調査」『徳力遺跡第2地点』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第30集)北九州市教育文化事業団、埋蔵文化財調査室1984、椀形鍛冶滓状のものが出土しているが銅滓の可能性があるので検討を要する。
- 11、大澤正己「今町梅坂遺跡出土金工関連遺物及び梅坂古墳群出土遺物の金属学的調査」『今町梅坂遺跡』(鳥栖市文化財調査報告書第32集)鳥栖市教育委員会1988
- 12、大澤正己「今福遺跡における製鉄関連遺物の金属学的調査」『今福遺跡III』(長崎県文化財調査報告書第84集)長崎県教育委員会1986、ルツボ溶着鉱物に鉄粒が認められたので、鉄滓物と報告したが銅ルツボであるので訂正する。
- 13、大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制遺物と鋳銅遺物の金属学的調査」『上加世田遺跡1』(加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3))鹿児島県加世田市教育委員会1985
- 14、大澤正己「苦辛城出土滓の調査」『苦辛城跡』(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書27)鹿児島県教育委員会1983

遺跡で製造された鉄器と鋳銅品の品種の検討や、向先らも今後に残された研究課題になってくる。

〈6〉小鉄塊、鉄器半製品の化学組成


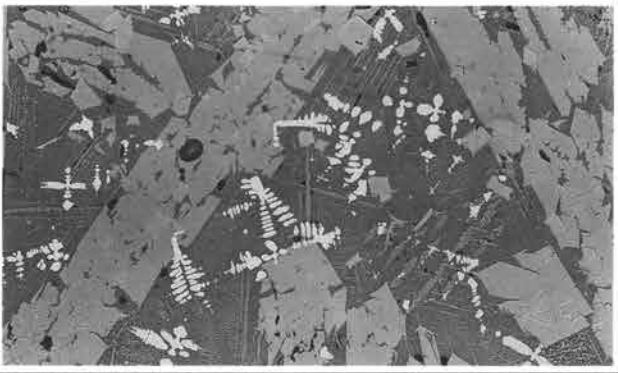

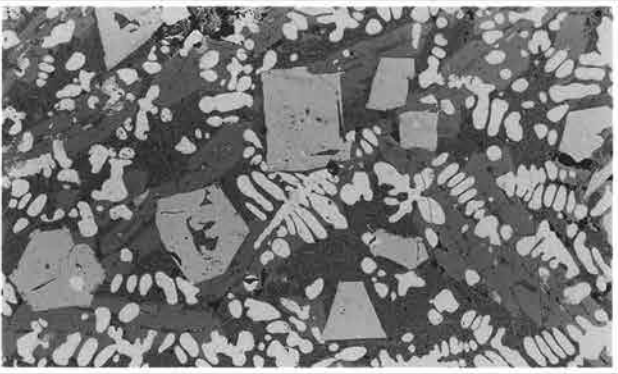

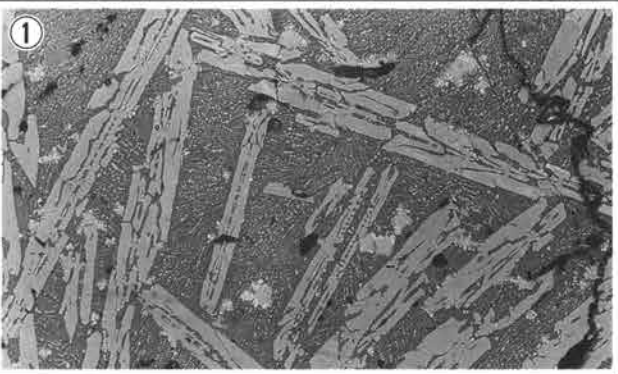


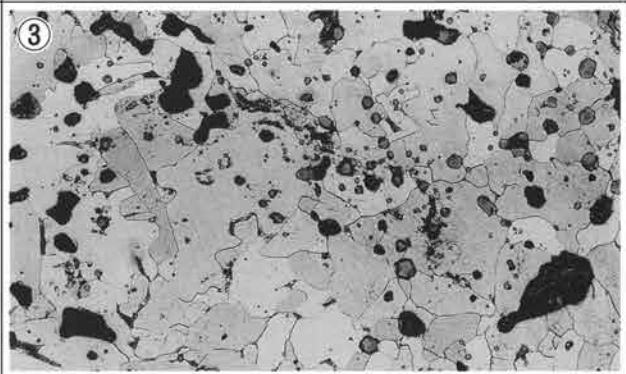

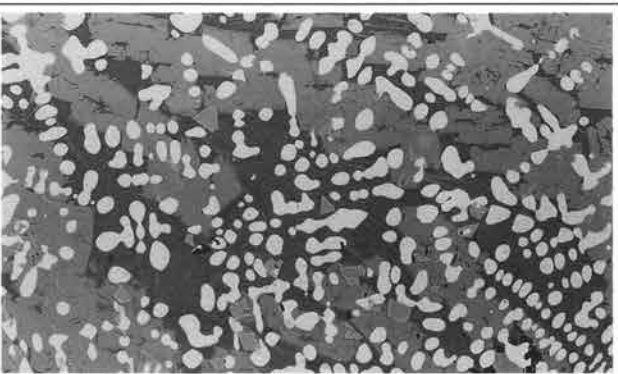
Table. 4 には、列島内の製鉄関連遺跡(製錬、鍛冶、鉄塊選別場)内から出土した小鉄塊、鉄器半製品らの化学組成を示している。古墳時代から古代にかけてを中心に、その製造履歴の比較的明瞭なものを記載した。(沖縄伊原遺跡のみはグスク時代: 13~15C)。製鉄原料は砂鉄が多いが鉱石系も含まれている。両者の分類は、二酸化チタン(TiO_2)やバナジウム(V)、銅(Cu)の含有量から推定するが、これだけでは確実な区別は出来ない。出土遺跡の性格、鉄滓との関係及び鉄中非金属介在物からの判別が必須である。この場合の介在物は、勿論チタン検出も重要なポイントであるが、砂鉄系でも硫化物系介在物からはチタン(Ti)分は検出されない事もある。介在物の組成との関係からの検討も必要となってくる。

〈7〉D区土坑出土銅滓

該滓は中世に属するもので後報の調査対象遺跡となるものである。今回は予備調査であった。銅滓はガラス質鉱物に鉄粒を残留するもので、銅(Cu)分をほとんど含有していない。化学組成もガラス質鉄滓に近似するもので、その選別には注意を要する成分系である。

註

- ① 鎌田 仁『最近の鉄鋼状態分析』アグネ社1979

<p>(1) J-861A 鳥羽遺跡 (1号工房 KK16 I区) (40I-22,22出土) 鍛錬鍛治滓 ×100 外観写真 1/3</p>						
<p>(2) J-861B 鳥羽遺跡 (1号工房 KK16 I区) (41I-37,スラグ-10) 精錬鍛治滓 ×100 外観写真 1/3</p>						
<p>(3) J-861C 鳥羽遺跡 (1号工房 KK16 I区) (42I-22出土) 鍛錬鍛治滓 (金属鉄含む) 外観写真 1/3</p>	 <table border="1" data-bbox="480 1106 763 1256"> <tbody> <tr> <td data-bbox="480 1182 622 1256">炭化物組織 ×400</td> <td data-bbox="623 1106 763 1180">鉄滓組織 ×100</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 1182 622 1256"></td> <td data-bbox="623 1182 763 1256">結晶粒組織 ×100</td> </tr> </tbody> </table>	炭化物組織 ×400	鉄滓組織 ×100		結晶粒組織 ×100	
炭化物組織 ×400	鉄滓組織 ×100					
	結晶粒組織 ×100					
						
<p>(4) J-862B 鳥羽遺跡 (2号工房 KK16 I区) (46I-7 No40出土) 鍛錬鍛治滓 ×100 外観写真 1/3</p>						

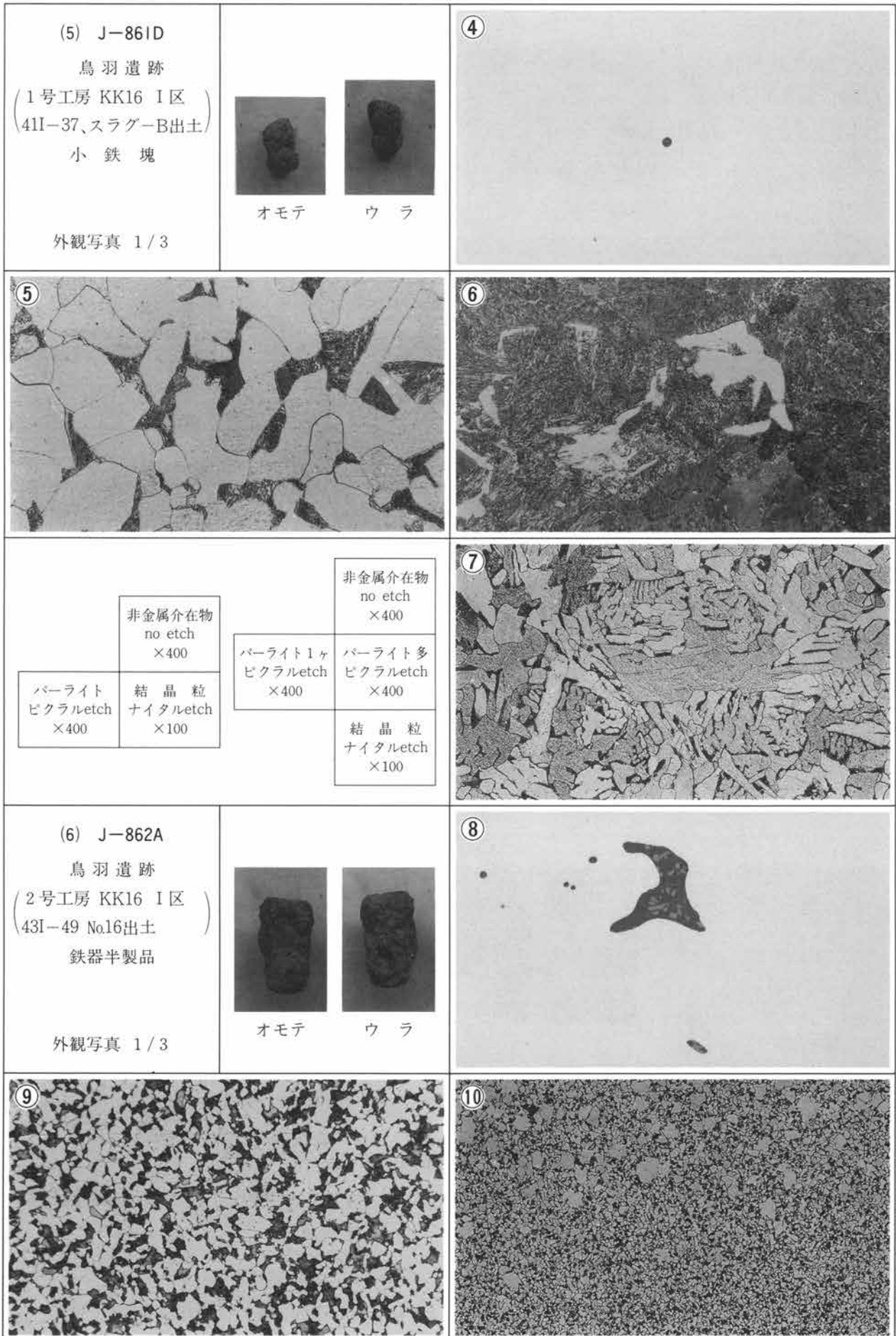

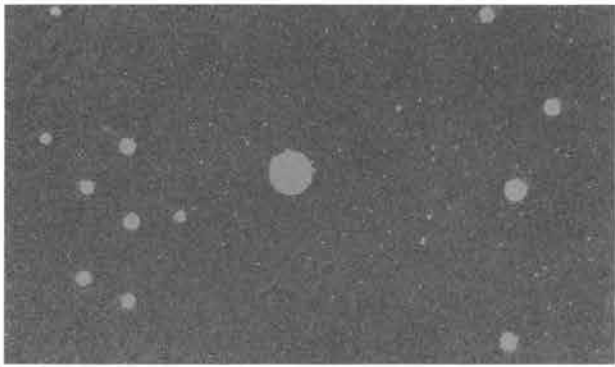
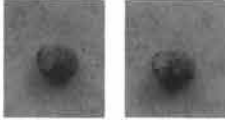
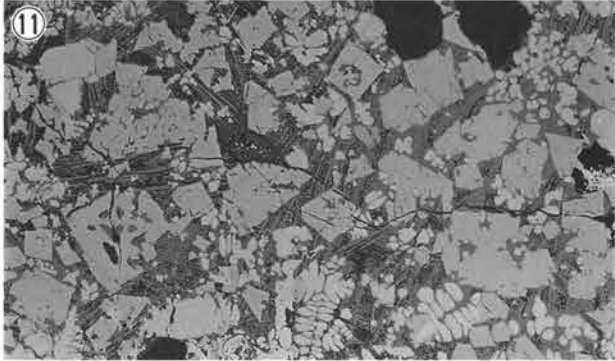
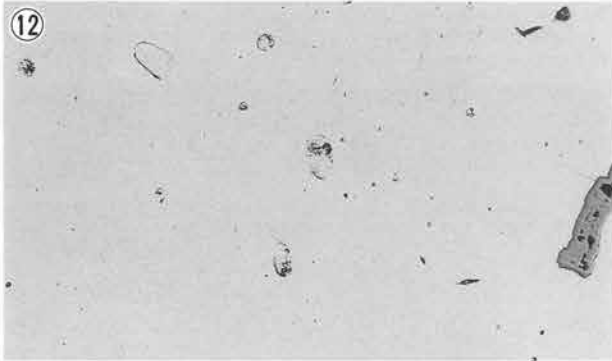


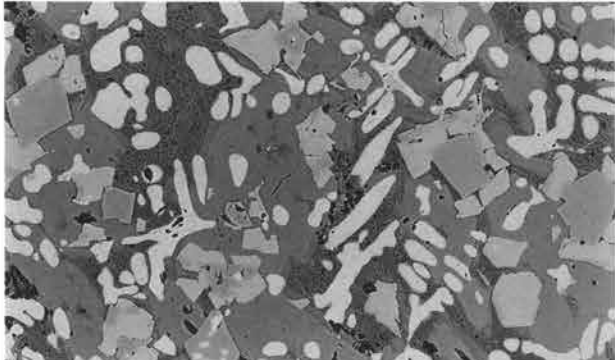

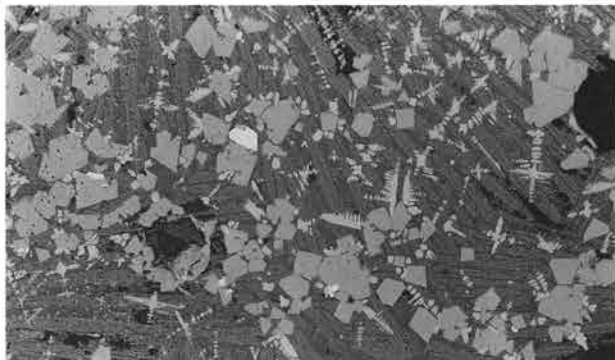


Photo.2 金属鉄の顕微鏡組織

<p>(7) J-862C 鳥羽遺跡 (2号工房 KK16 I区) (46I-47 No21出土) ルツボ付着銅滓 ×400</p> <p>外観写真 1/3</p>						
<p>(8) J-862D 鳥羽遺跡 (2号工房 KK16 I区) (46I-47 No35出土) 銅粒・鉄滓付着</p> <p>外観写真 1/3</p>	 <table border="1" data-bbox="483 730 768 887"> <tr> <td></td> <td>鉄滓組織 ×100</td> </tr> <tr> <td>銅粒組織 ×100</td> <td>銅粒組織 ×400</td> </tr> </table>		鉄滓組織 ×100	銅粒組織 ×100	銅粒組織 ×400	<p>⑪</p> 
	鉄滓組織 ×100					
銅粒組織 ×100	銅粒組織 ×400					
<p>⑫</p> 	<p>⑬</p> 					
<p>(9) J-863A 鳥羽遺跡 (3号工房 KK16 I区) (スラグ-10出土) 精錬鍛治滓 ×100</p> <p>外観写真 1/3</p>						
<p>(10) J-863B 鳥羽遺跡 (3号工房 KK16 I区) (42I-43A出土) 精錬鍛治滓 ×100</p> <p>外観写真 1/3</p>						

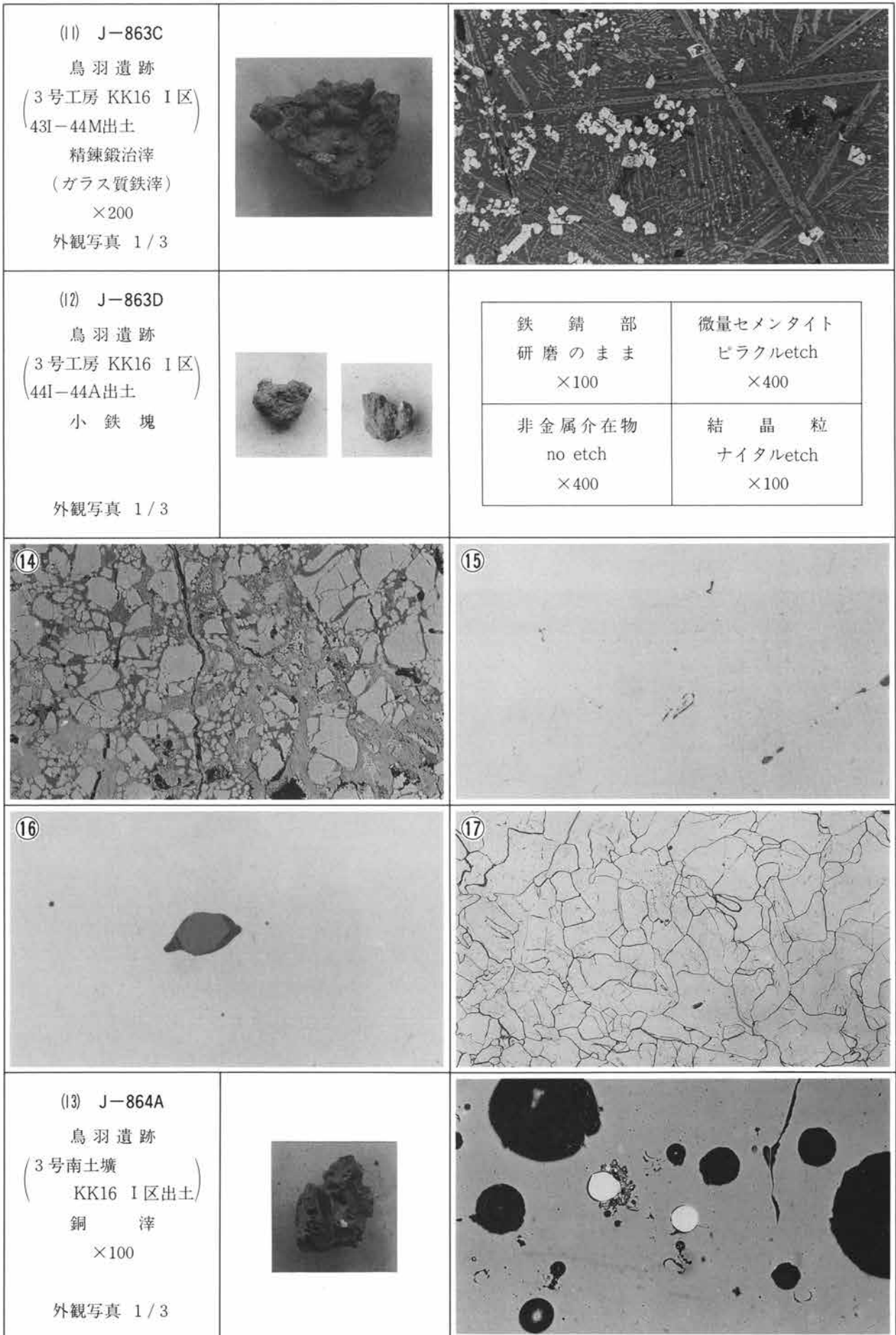


Photo.4 鉄滓・小鉄塊・銅滓の顕微鏡組織

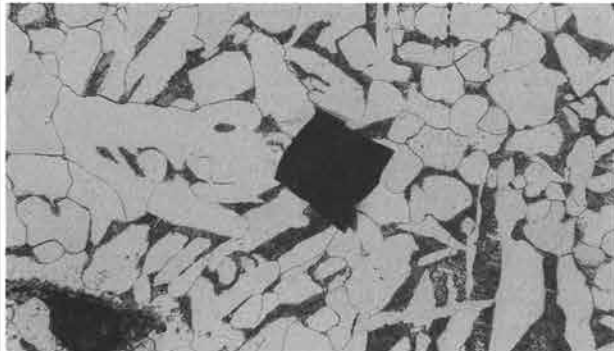
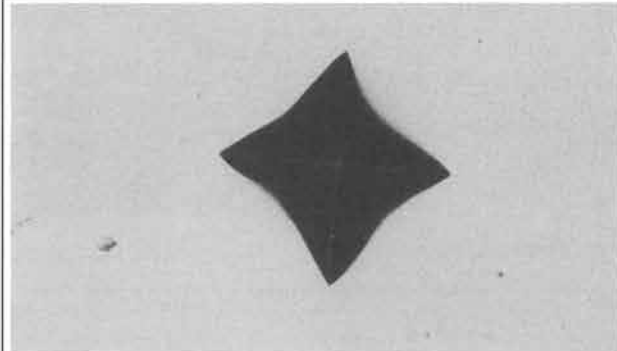

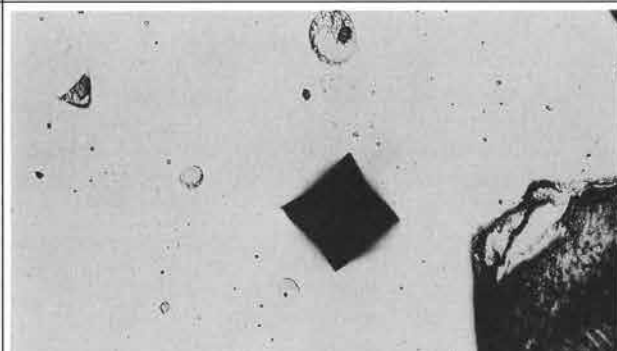
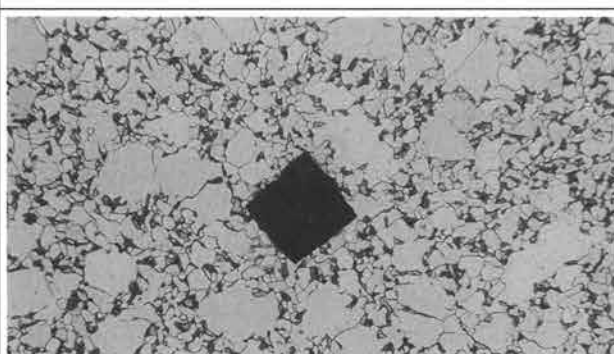
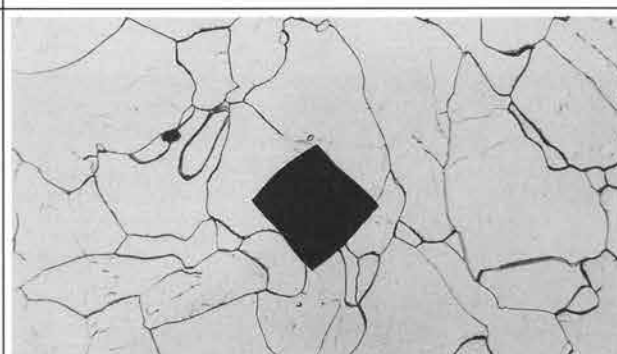
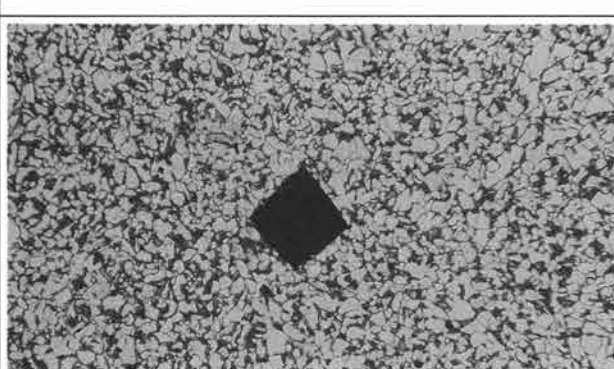
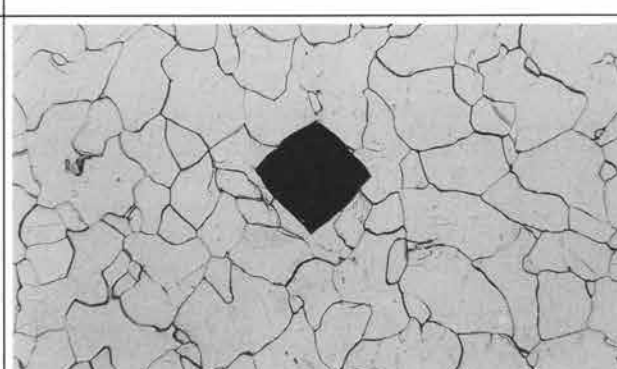
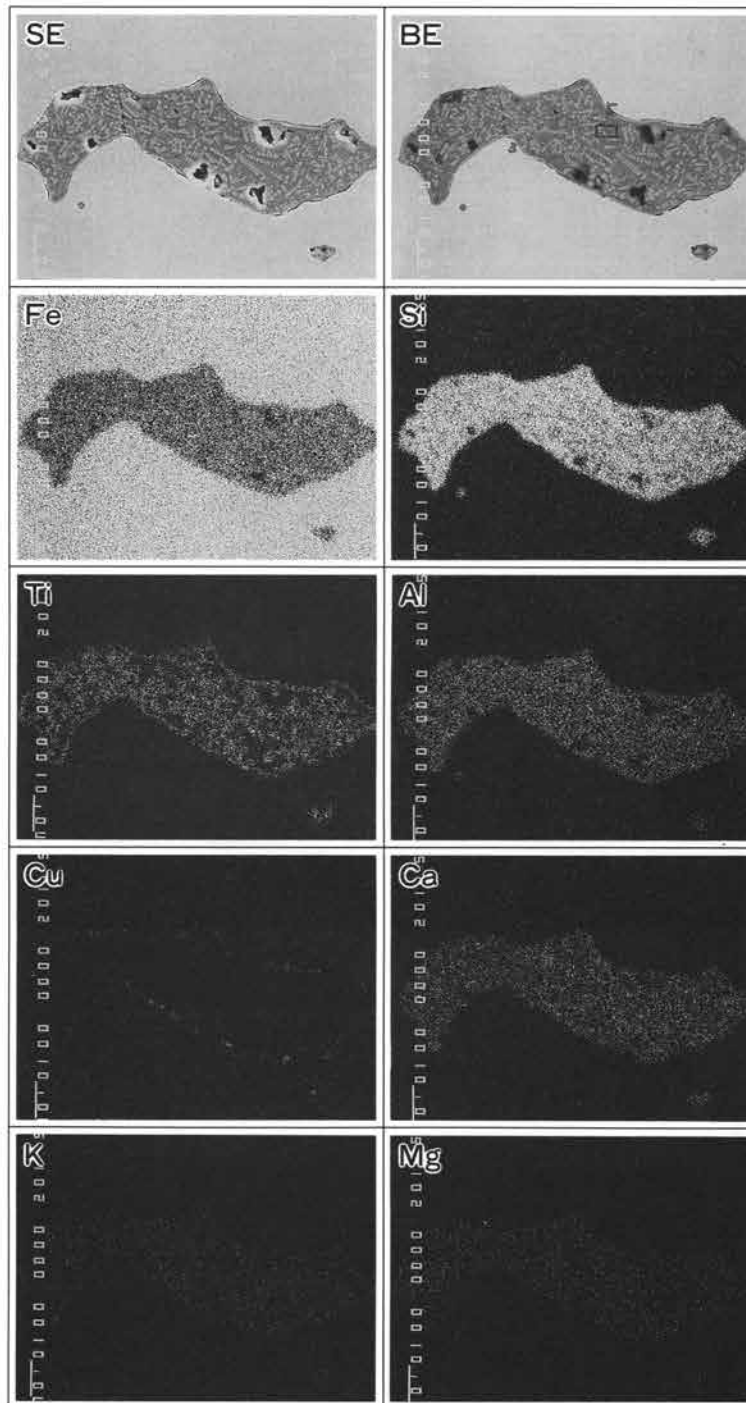
J-861D 小鉄塊、炭化物少ない個所 Hv=133	J-862D 銅粒 Hv=396
	
J-861D 小鉄塊、炭化物多い個所 Hv=161	J-863D 小鉄塊、錆部 Hv=396
	
J-862A 鉄器半製品、結晶粒大きい個所 Hv=164	J-863D 結晶粒大きい個所 Hv=140
	
J-862A 鉄器半製品、結晶粒小さい個所 Hv=203	J-863D 結晶粒小さい個所 Hv=156
	

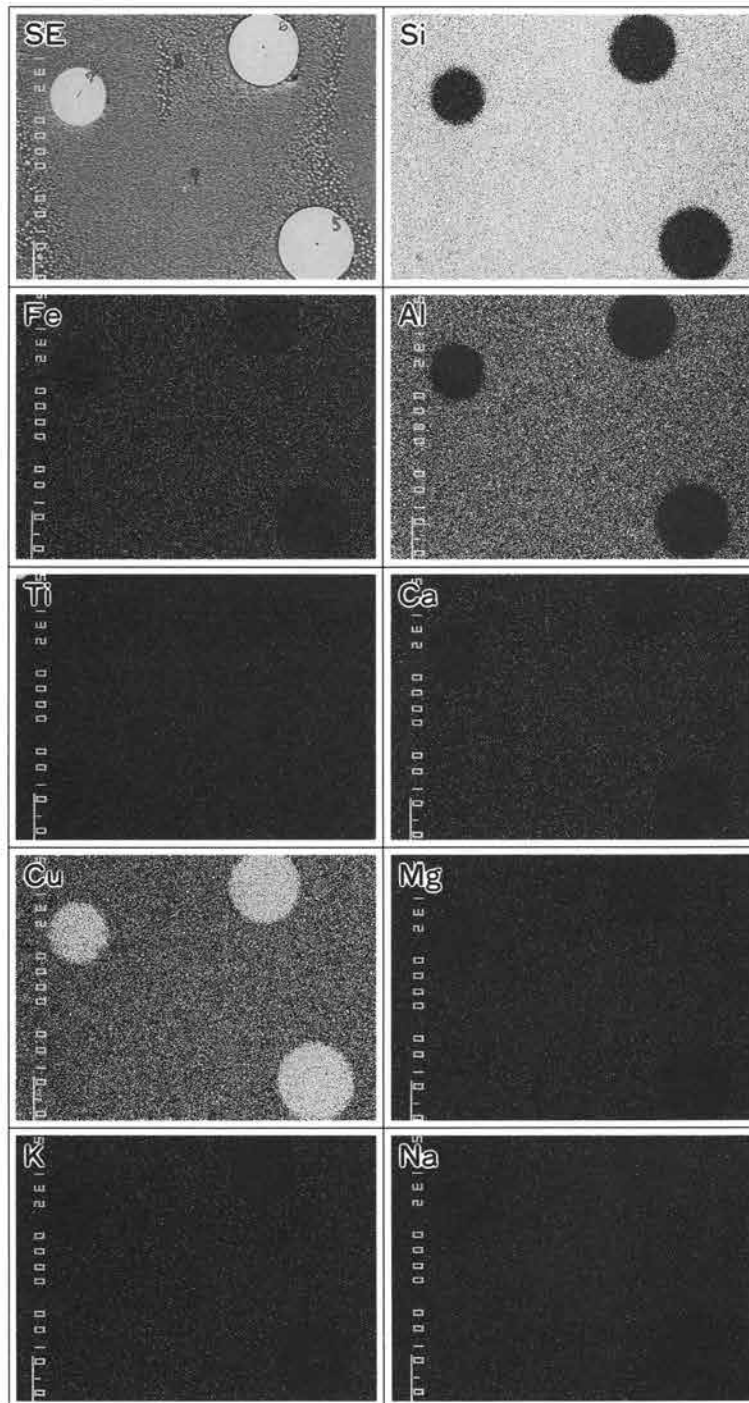
Photo.5 金属鉄、銅のビッカース断面硬度圧痕(荷重：500g)×200

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・铸銅関連遺物の金属学的調査



	SiO ₂	MnO	S	Al ₂ O ₃	FeO	CaO	MgO	Na ₂ O	F	ZrO ₂	TiO ₂	K ₂ O	Cr ₂ O ₃	CeO ₂	La ₂ O ₃	TOTAL
3	12,661	0,977	0,000	4,762	60,869	3,059	1,657	0,055	0,000	0,519	19,673	0,586	0,000	0,000	0,000	104,818
4	33,824	1,295	0,000	7,065	42,125	4,837	1,939	0,821	0,094	0,463	2,994	2,029	0,009	0,000	0,155	97,609
5	31,324	0,957	0,000	7,779	39,447	6,423	1,892	0,624	0,159	0,269	5,655	1,325	0,042	0,000	0,406	96,234

Photo.6 J-862A鉄器半製品中非金属介在物の特性X線像(×580)と定量分析値



	S	SN	CU	PB	TOTAL
5	0.000	0.000	97,702	0.628	98,330
6	0.010	0.000	97,458	0.000	97,468
7	0.000	0.011	98,898	0.000	98,909

5・6・7：粒状金属：銅

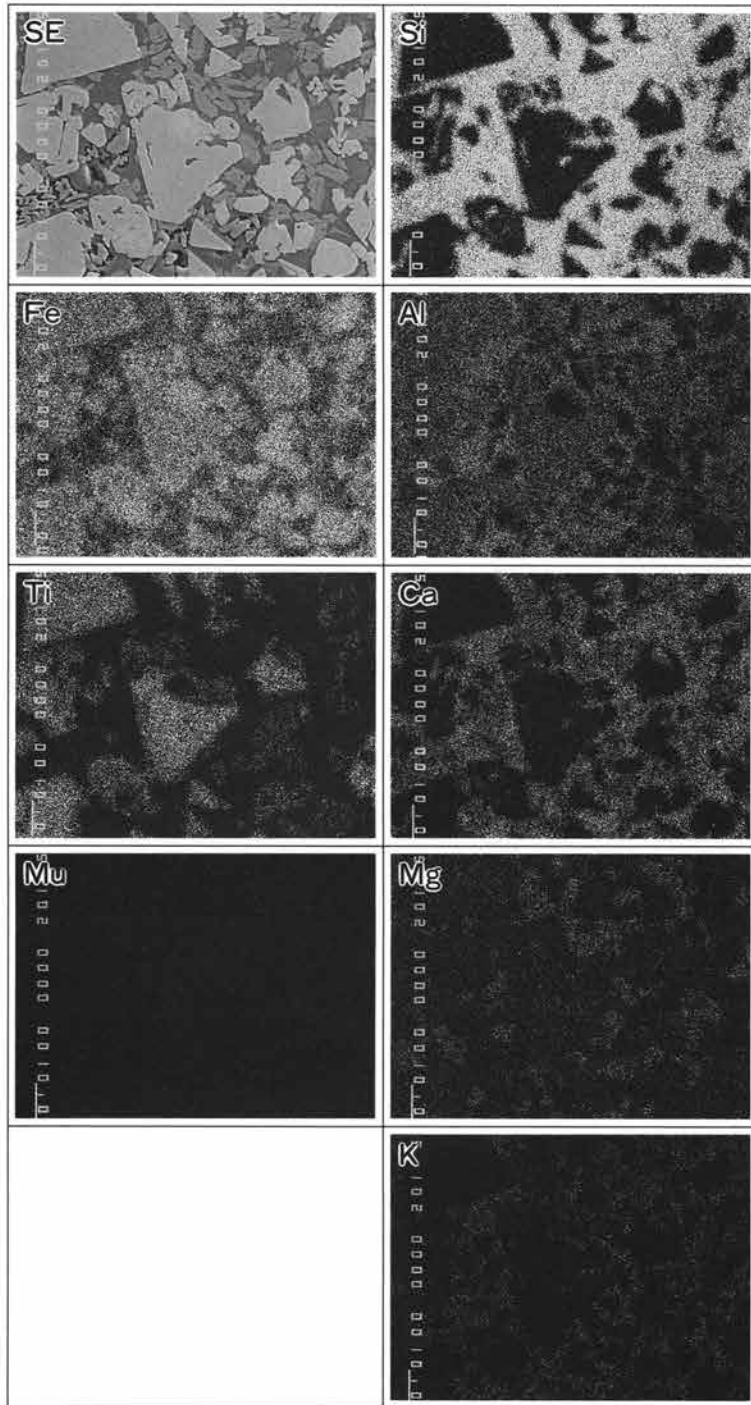
8：ガラス質スラグ部分

9： ”

	SiO ₂	CAO	FeO	F	Al ₂ O ₃	K ₂ O	MNO	MGO	S	TiO ₂	MA ₂ O	ZRO ₂	CR ₂ O ₃	TOTAL
8	61,582	2,820	11,110	0.450	15,276	2,093	0.401	1,642	0.081	0.629	0.983	0.000	0.105	96,982
9	58,465	2,525	12,941	0.548	14,752	2,245	0.055	1,602	0.162	0.570	1,996	0.000	0.000	95,631

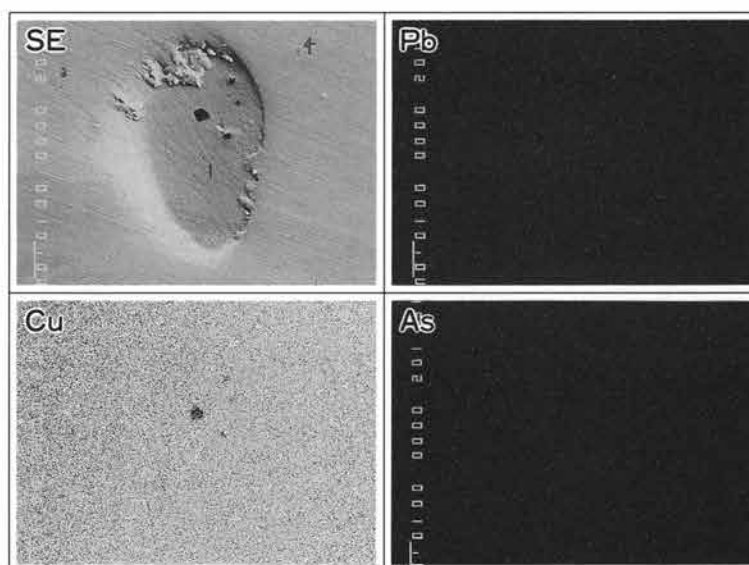
Photo.7 J-862Cルツボ溶着鉱物の特性X線像(×750)と定量分析値

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・铸銅関連遺物の金属学的調査



J-862D1
無光沢部

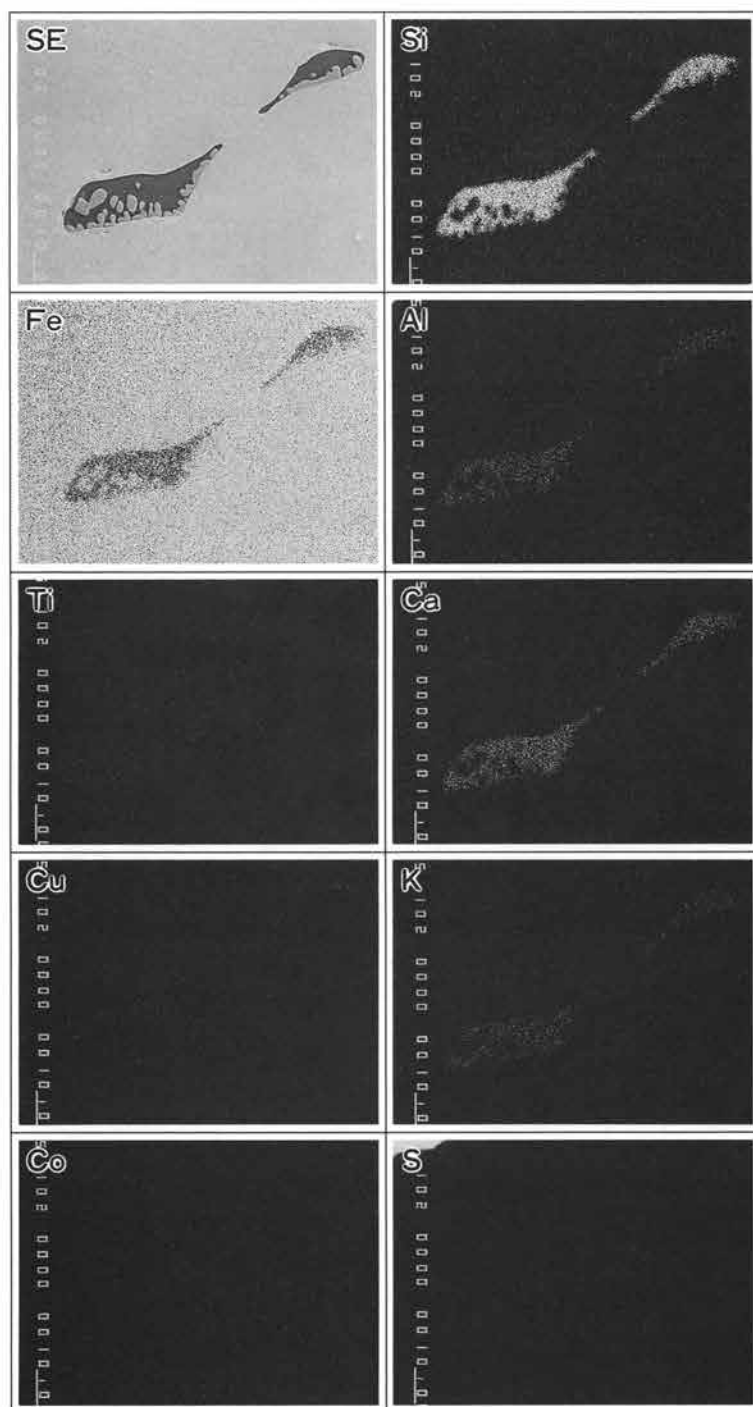
Photo.8 銅粒・鉄滓付着物の鉄滓側特性×線像(×580)



	S	SN	CU	FB	TOTAL
1	0.061	0.043	90,972	4,921	95,997
2	0.000	0.000	92,281	4,165	96,445
3	0.000	0.000	96,716	4,290	101,006
4	0.010	0.000	97,218	3,844	101,071

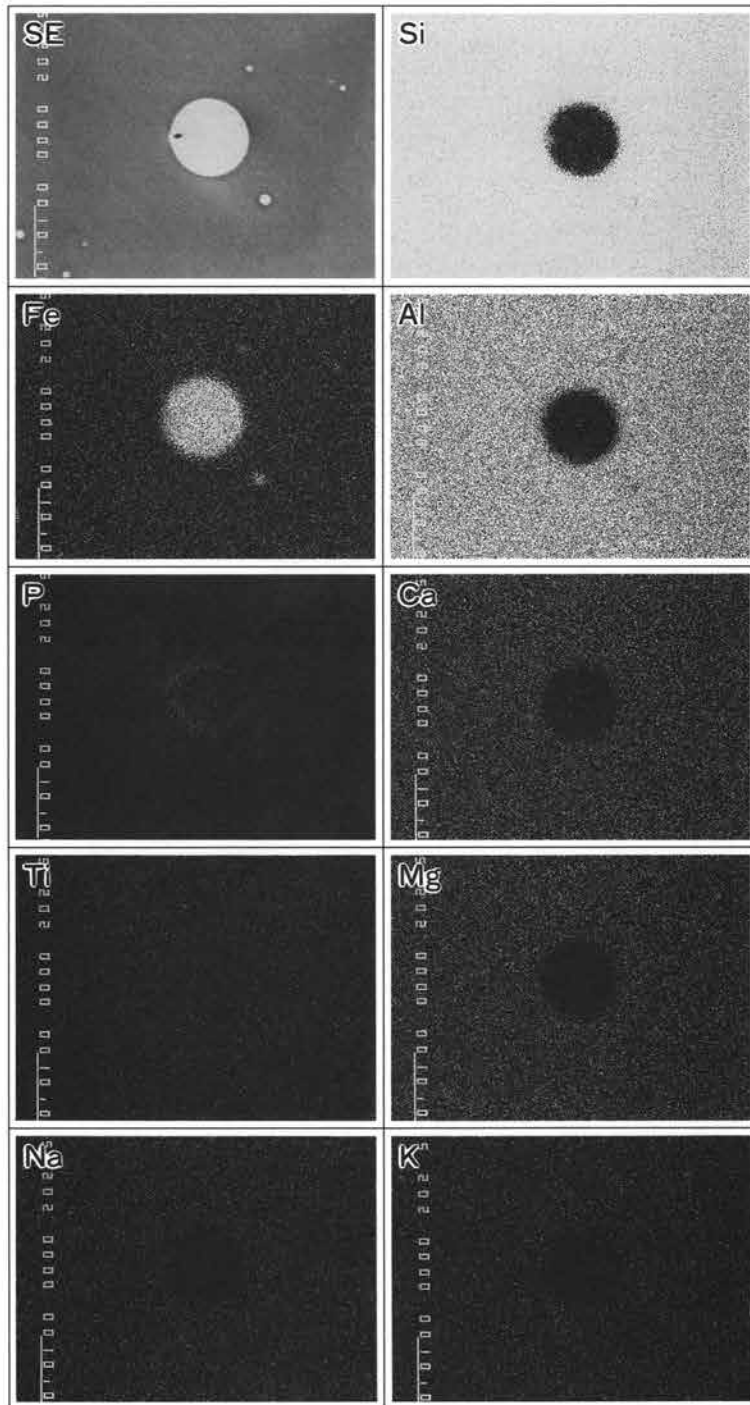
Photo.9 J-862D銅粒・鉄滓附着物の銅粒特性X線像(×580)と定量分析値

2. 鳥羽遺跡出土鍛冶・鑄銅関連遺物の金属学的調査



	SiO ₂	MnO	S	Al ₂ O ₃	FeO	CaO	MgO	Na ₂ O	F	ZrO ₂	TiO ₂	K ₂ O	Cr ₂ O ₃	CeO ₂	LaO ₃	TOTAL
1	31,485	0.082	0.256	3,300	49,483	9,064	0.104	0.544	0.000	0.083	0.118	2,974	0.093	0.000	0.116	98,002
2	0.280	0.000	0.013	0.151	101,366	0.116	0.000	0.000	0.038	0.032	1,005	0.032	0.063	0.000	0.045	103,125

Photo.10 J-863D小鉄塊中非金属介在物の特性X線像(×580)と定量分析値



	SI	TI	S	P	NI	FE	MN	CR	C	TOTAL
1	0.035	0.028	0.000	1.440	0.176	95,877	0.000	0.017	11,219	108,791

	SiO ₂	CAO	FeO	F	AL ₂ O ₃	K ₂ O	MNO	MGO	S	TIO ₂	NA ₂ O	ZRO ₂	CR ₂ O ₃	TOTAL
2	56,401	6,158	9,103	0.000	18,490	2,219	0.156	2,928	0.016	0.950	2,144	0.215	0.085	98,866

1：鉄粒の分析 2：基地ガラス質の分析

Photo.11 J-864A銅滓の特性X線像(×695)と定量分析結果

鳥羽遺跡

I・J・K区

《本文編》

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第21集—

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

編集／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

鳥羽遺跡I・J・K区 正誤表

(財)群馬埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
P3	18~20行目	治	→ 治
P5	1行目	70・71 J 43~45	→ 69・70 J 42~44
P5	7行目	69・71 J 43・44	→ 68~70 J 42~44
P8	1行目	68~70 J 47~49	→ 68~71 J 46~48
P12	1行目	45~47 J 30~32	→ 46~49 J 29~32
P18	1行目	45~47 J 24~27	→ 45~47 J 24~26
P20	1行目	45~47 J 21・22	→ 44~46 J 21・22
P21	1行目	47・48 J 36~38	→ 46・47 J 35~37
P49	1行目	48・49 J 46~48	→ 47・48 J 46・47
P50	1行目	47~49 J 44・45	→ 46~48 J 43・44
P50	6行目	46・47 J 44・45	→ 45・46 J 42~44
P52	1行目	49・50 J 20・21	→ 48・49 J 19・20
P53	1行目	46~48 J 1・2	→ 45~47 J 1・2
P72	1行目	44・46 I 49~J I	→ 43~45 I 49~J I
P89	1行目	48・49 J 26~28	→ 47・48 J 26~28
P103	1行目	51・52 J 30・31	→ 51~53 J 30・31
P194	1行目	46~49 K 9~11	→ 46~48 K 9~11
P198	1行目	49・50 K 9・10	→ 48・49 K 9・11
P209	1行目	46・47 K 0~1	→ 46・47 J 49~K 1
P216	2行目	48・49 K 7・8	→ 48・49 K 6~8
P218	1行目	73・74 K 35・36	→ 73・74 K 35~37
P293	1行目	63~65 K 34~36	→ 65~67 K 34~36
P297	1行目	62~64 K 32~34	→ 66~68 K 37・38
P385	1行目	62・63 K 3・4	→ 61・62 K 3・4
P403	Fig653	5のスケール10cm	→ 5のスケール30cm
P414	Fig668	J区全体図	→ I区全体図
P418	7行目	上径0~0cm・下径0~0cm・深さ0~0cm → 上径20~40cm・下径10~18cm・深さ40~70cm	
P427	Fig678	11号炉	→ 14号炉
P428	Fig679	土層註 27・28・29・30号炉 → 34・35・36・37・38号炉 34・35・36・37・38号炉 → 27・28・29・30号炉	

タック紙の正誤表は323頁の下段に貼り込んで下さい。

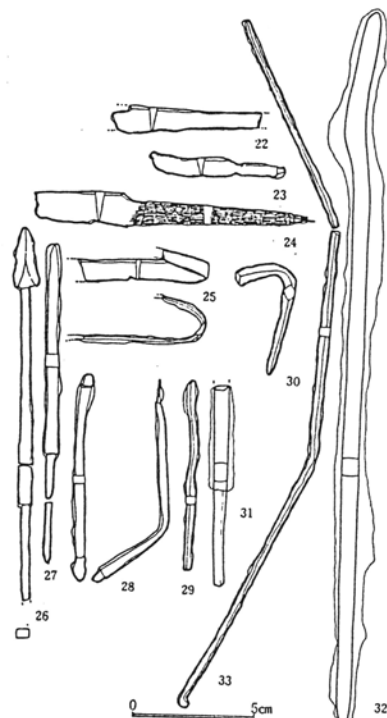


Fig.339 K36号住居跡出土遺物(2)

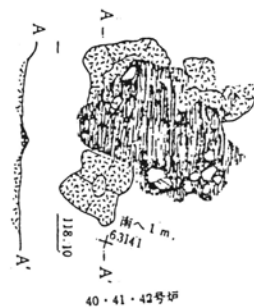


Fig.684 13号鍛冶工房跡

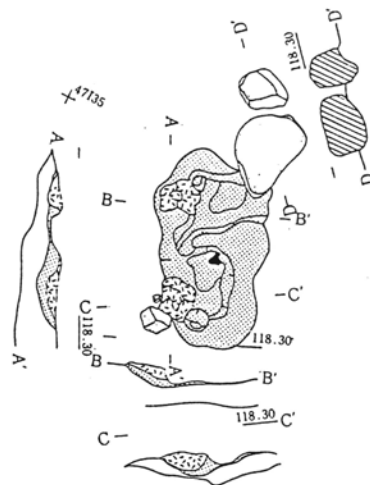


Fig.688 14号鍛冶工房跡